
妄想戦記

QOL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妄想戦記

【Nコード】

N5855I

【作者名】

QOL

【あらすじ】

テンプレという荒波にのみ込まれ、転生を経験した主人公。

しかし転生先はリリカルな魔法がある戦争真っ最中の世界だった。

死なない様にかんばっていたら何時の間にか原作へ……。

あれよあれよという間に違う世界にまで……。

主人公の闘いは続く。

この作品は作者の妄想で成り立っており、オリ設定があります。
2 一応完結、次回に続く。

「だ〜あつあ？（あ〜うんとアレだ……なんで赤ん坊になってんだ？）」「（前書
正直ネタデス。厳しいつつこみが来ると（作品を）削除する事があ
ります。

読む場合は、まあこんなもありだろうという心で読んでください。
なお、作者は二次創作は初です。

妄想戦記第1話

「だ〜あつあ？）あ〜うんとアレだ……なんで赤ん坊になってんだ？」

う〜ん……どうも頭がはつきりしねえ……。

目が覚めたら知らない天井が……ってエヴァじゃね〜し！

まあいい……とりあえず、昨夜の事を順をおって思い出してみようか

バイトが終わって、誰もいない家に帰って……飯作ろうとしたら材料が無くて……

そうだ……めんどくさくなってコンビニに行ったんだっけ……？

それで、そうだ……車が突っ込んできて……

……突っ込んできた車に潰されて……

……目の前真っ暗になって……

……まあいいか……

俺死んだんだ……

そうか……

あっ……

「え！あついあおえ！（つて！軽いな俺！）」

あぶねえあぶねえ、危うく夢の世界に旅立つところだったぜ。
しかし、どうなってんだろうね？アレですか？

二次創作でお馴染みのアレですか？“憑依”ですか？いやこの場合
“転生”か？

うん納得！

えっ？なんで納得してんのかって？

だって死んじまったのは事実だし（つーか轢かれた時の記憶残って
やがんの…ブルっ）

後ろ向きに考えてもしょうがないし、折角の第二の人生楽しまな
きや損だしね！

それに正直、前の世界に希望があった訳でもないしね。

有り得ない位の不況、大学卒じゃないとはぶられるこの時代。
バイトですら受かるかわからないなんて国としてどうなのよ？

まあソレはもう関係ないし、とりあえず現状は静観のままだな。
慌てたところでどうにかなるモンじゃ無いし、かと言って弾けすぎ
るのも考えもんだわさ。

適当にこのニューワールドで生きていけるよう頑張るさね。

ーッ！
というわけで、俺の第二の人生が始まった。目一杯遊ぶぞ

ヤァー皆元気か？アレから2年たったぜ。

……ってそこ！早いつていうな！別にガキの生活のこと書いても面白くないだろうが！

まあ1歳になる前に普通に喋り始めたら、両親に驚かれたけど逆にうちの子は天才だとか言っただけ喜んでくれた程度さキリ。

でも同時に少しだけ寂しそうな目をしていたのを見てからちょっと自粛している。

あ、そうそう、俺の名前だけど前世は高辺正憲って名前だったけど、

この世界の俺はフェンって名前前で姓はリーダーだそうな。
随分と外国人の名前っぽくて、なんとなく違和感を覚えている。
まあしばらくすればその違和感も消えるだろう。俺の外見も外国人
だしな。
兎に角、これから先は心機一転新しい名前であるフェンとして頑張
る事にしたからよろしくだぜ。

でだ、現在の俺は2歳、まあ今日の誕生日になってからだが
…判ったことがある。

とりあえず、ここは俺がいた日本じゃない上、地球でもないらしい。
何でかって？

だってさ、魔法があるんだもの　　って石投げないで！
嘘じゃないから！クスリもやって無いって！！

俺もさあ！まさかって思ったんですよ？最初はただ単に外国だと思
ってたんだもん！。

でも両親明らかに日本語で喋ってるんだよね。
流星におかしいと思って、動けるようになった時に色々家んな動き
回ったんだよ。

そしたら…俺あ見つつけちゃったのさ…“デバイス”ってヤ

ッをさ。

そう、アレだデバイス。

白い魔王だとかが魔砲ぶっ放してた時の武器であり、相棒でもあるデバイスだ。

まあ、それとは違うストレージデバイスっていうヤツだけど、それでも驚いた。

いや転生したこの俺が言うのもおかしいけどよ？マジかよ、アニメの世界かよ…と。

テンプレ乙ですッ！！

その言葉が脳裏を駆け巡ったね。

転生っていうジャンルを体験をした今の身だと、何があっても驚けないけど…。

母上に笑顔で魔法見せてって言ったら、張りきって極太砲撃魔法ブチかましてくれた

その所為で……お、おもらしをしたけど……その程度さ。

ま、まあその話は置いとくとして、正直ちょっと嬉しかったりする。だってさ！魔法だぜ！魔法！このデバイス、家にあるってことは両親のдарろう？

つまりは両親、少なくとも片方は魔導師だってことだ！

目の前に覚えたい事を教えてくれる凄い師匠が居るなら跳び

付くでしょッ！！？

そう言う訳で、一年後の3歳になった誕生日の日。

俺は両親に魔法を習いたいので教えてくださいと土下座して頼み込んでいた。

……考えてみると3歳児の土下座ってシユールだな。

この世界に土下座っていう文化があるかも解らないのに良くヤツたもんだ…と、話がずれたな。

結果はまあ、割とあっさりとOKされた。

……というか立って歩けるようになった段階ですでに教える気満々だったそうだな。

が……。
そう言う訳で、母親の方に教えてもらえる事になったんだ

考えておいて気が付くべきだったね。

何で家にデバイスが転がっていたのか。

つまりはさ？ウチの両親 軍属なんだよね。

かなりの力を持つ高官だから、自宅においてもデバイスの所持を許可されてるってヤツ？

この場合の力って言うのは軍内部における権力と魔法の力の両方ね？

まあ崩した言い方をすれば、教え方が鬼も逃げる軍隊形式なんです

よ。

簡単にイメージできるのは海兵隊式だろうね。

例えば、ある日の訓練だと

『お前は何だッ!?!』

『自分はクソ虫でありますッ!』

『お前はそれでも脳みそ詰まってるのか?全く聞こえんぞッ!この女顔がッ!?!』

『自分はクソ虫でありますッ!?!この世で最も劣った存在でありますッ!?!』

『いいや違ッッ!?!』

『!?!?!?!?!』

『お前は魔法のマの字も知らないクソ虫にも劣るクソ以下の存在だッ!?!言ってみろ。』

『イ、イエッサー、自分は』

『サーをつける馬鹿モンがッ!大体私はママだッ!』

『サー・イエス・ママッ!自分はこの世でもっとも劣ったクソ以下

のクス野郎でありますッ！生きる資格も無いでありますッ！サーッ
！！』

『よろしい、では訓練という名の地獄へのご招待だ……………出来るだけ死ぬなよ？後処理が面倒だからな？』

『サ、サー・イエス・マムッ！！！』

……………

……………

……………

とかね・・・ホントに何処の海兵隊の人ですかアナタ。っーか本当に魔導師か？

見た目物凄い美人の母上が、物凄い鬼つて感じの剣幕で俺の事貶すんだぜ？

正直心にクルね アレは…………。

いや、普段はかなりおっとりとした良いお母さんですよ？美人だし。ただまあ、訓練の時だけスイッチが入っちゃうだけで。

お陰で徹底的に心根まで鍛えてもらったけどね。泣けなくなるくらい。

あ、俺の容姿だけど、この世界では珍しい黒髪黒眼でやや背が小さいオトコノコです。

両親ともかなりの美形なお陰かは知らないけど、中性的を通り過ぎた女の子の様な顔してます。

親戚が酒の席で面白半分に女装させたら洒落にならなかつたくらいで ええ、黒歴史です。

でも、俺にとってはコンプレックスなコレを両親は気にいつている見たい。

イヤ女装はなんとか阻止させましたよ？でも髪形だけはダメだった。今現在、長いサラサラストレートな黒髪である俺は・・・所謂ポニテにされている。

女の子ツポイのはイヤという俺と、そう言つのも良い っていう両親との妥協の末の結果だ。

まあその話は置いておいて…っーか流してくれ…。

後、他にもこんな訓練があった

『 まあこんな感じだ…身体強化の重要性は理解したな？』

『 イエスマムツ！』

『 それじゃあ今から実地訓練だツ！！私が撃つ魔力弾、身体強化の魔法だけで逃げ切つて見せるツ！』

虚空に浮かぶ数百もの魔力スフィア。

『 え…！？チヨツ…！』

『 さあ踊れ……パーティクル・ダンサーズ…！』

『メ、メディー！ツク！！！！』

危うく死にかけました。おまけにこの日から必要な事以外話さなくなつた。

いや話せなくなつたが正しいかな？
下手な事言つとアノ回避訓練と同じモノが1セット追加だつたし…。
お陰で超人的な反射神経と勘の眼を会得できたけどね！！

序でに鉄面皮と無口もな。

ちなみに母上は、空戦が出来て、近接攻撃も遠距離も砲撃も回復も結界e t c。

もう兎に角何でもござれなオールラウンダーで基本戦術としては、超が付くほど高速高機動で空を翔け周り、音速を超えているのにも拘らず、砲撃をぶつ放すというモノスゲエことが出来るお人です。

ああ、今でも目をつむれば ヒアッ！く、来るなあ！！空が、
空が落ちてくるううう！！！！

落ち付け俺大丈夫、取り乱したら死ぬ。だから落ち付け。ふう。

すまん、取り乱した。どうにもトラウマになった訓練も多々あるモンでな？

たまにこうなる事もあるけど許してほしい。

厨二病とか言わないでくれッ！アレはマジで洒落にならなかったんだッ！！！！

まあとりあえず話題を変えよう 他にも100kmマラソンとかやらされた事があってよ？

え？3歳時にはムリ？ところがどっこい、そこが魔導師の訓練が通常と違うところだ。

このマラソン、肉体強化の魔法を使っても良いんだよ。

ただし使ったら最後、ゴールにたどり着くまで終わらせてもらえないけどね。

簡単に言えば、マルチタスクという思考分割術と魔法制御とかの併用訓練な訳だ。

おまけに走り続けている間は身体強化を使い続けているモンだから魔力がどんどん消費されて魔力最大値の増加にも役立つと言うおまけ付き。

何とまあ効率のいい、てつきり瞑想とかやるんだらうとか思ってた数カ月前の自分を呪いたい。

こんな事やってたお陰で身体能力はウナギ登りだった。オリ主補正万歳。

ちなみに父は軍属とはいっても技研…。

まあデバイスの整備班とかにいた所謂メカニックやデバイスマイスターと呼ばれる職種の人で、母上みたいな肉体的な無茶はしなかったけど、精神的な無茶はやらされた。

つかさ、ウチの家には何故か工房がある。それもデバイスとかを作る工房がな。

その工房は父上が集中したい時に使うラボの様な小さなものだが、趣味に走った物がたくさん置いてある工房であった。

でもな父上、ガキにデバイスの調整の仕方や改造、はたまた一から造るやり方まで教えるってどうよ？

デバイスってのは結構微妙なバランスで成り立っているもんだからさ？

手作業だと部品一つ動かすのにも恐ろしく精神使うのよ？

まあ最初に初歩くらい出来るかって言われて、ついムキになって組み上げた俺が悪いんだけどさ。

難易度的にはちょっと難しめの、ブロックパズルみたいな感じだったからついな。

部分的にピンセットを使わないとか色々制限があったけど、パズルは嫌いでは無い為楽しかった。

つかレゴ代わりに遊んでた様な気もするぜ。

んでソレを見た父上が徐々にハードルを上げて行ったのだ。

そして気が付けば、何時の間にか上記みたいな事になっていったってワケ。

一つ出来るたびにものすごく褒められたけどさ……自重くらいして

よ父上。

俺一応3歳児ですぜ？

まあこの精神をすり減らす作業のお陰で強靱な忍耐力も身につけられたから良しとする。

魔力と精神は密接に絡み合っているから、こつこつ訓練も効果的らしいしね。

しかし軍隊形式って言うのは恐ろしい、子供に対してもまったく手加減が無い。

死にかけては回復魔法の無限ループだったもんなあ……お陰でもう弾幕くらいじゃ怖くも無いぜ。

何度地面の味を知った事か…何度鉄の味を感じた事か…正直魔法無かったら死んでんじゃね？

今の生活は半端無くキツイ………けどそれ以上に楽しい。

前の世界では未知の分野だった魔法が学べるのだ、これに心踊らない男子が居ようか？

絶対におるまいっ！！断言できるッ！！っかそう思わんとやっっていけんからなッ！！

「フェンちゃん、御飯よ〜！」

「サーイエスマム！」

「もう、今はプライベートなのよ？だから普通にしなさい」

「了k………わかった」

「うん、それでいいわ」

母上が呼んでるな、デバイスの設計図造りはこれ位にしておこう…。

ん？今の人誰かって？ 母上ですけど何か？

訓練の時はもう鬼軍曹って感じだけど、プライベートだと普通の母親だからなあ

あの変わり身はスゲエだろ？もうなんか仮面かぶってるとかのレベルじゃ無いんだぜ？

本当に人格が複数あるんじゃないかって疑った位だよ。

「フエンちゃん！！」

「今……行く」

さて、あんまし待たせるのもマズイからな。そろそろ行きますか。そう言えば今度の週末はサバイバル訓練か……生き残れるように全力を尽くそう。

そう思いつつ、色んな意味で素敵な我が家族の元へと行く俺であった。

「だうあうあ？（あううんとアレだ……なんで赤ん坊になってんだ？）」「（後書
なんとなく作った、後悔は……まあ無くは無い。
更新は不定期。

「え

マジかよ。」

妄想戦記

やあ皆久しぶり！みんなのアイドル、フェンくんだよ！キラッ
・・・ゴメン、調子に乗りすぎた。だから生温かい目でこつち
を見ないでエ！！！！

ハアハア、OK、COOLに行こう……うん落ち着いた。

さて地獄の行軍サイバル付き君は未来を勝ち取れるか編をク
リアした俺。

3歳児なのに凄くねエ？とか思ってたリ、両親の遺伝子に感謝感謝
と魔法覚える時とかの習得のしやすさを感謝していたりしていた。

いや冗談抜きで、あのサイバル訓練の内容はマジで凄すぎた。
まさかねえ、母上に言われて騙されたと思い、芋虫食ってみたらプ
ディングの味だもんなあ。

現地でそういう知識叩きこまれた後、実地って事でそのまま3週間
森の中に放置された。

一応サーチャーで見張られてはいたけど、それでも野生の獣がいる

森の中でのサバイバルってマジで辛い。

下手にご飯も集められないだぜ？集めたら匂いで肉食系の奴ら集まってくるしよお。

おまけにタンパク質を確保するのがつらかった。
今じゃトカゲとか蛇が食い物でネズミが御馳走にしか見えん。

おまけにさ、人の居ないジャングルに居た所為で、ますます鉄面皮に拍車がかかった。

この間久しぶりに幼稚園言った時なんかさ、俺から変な迫力が出るのか、会う子会う子が皆泣いちゃったんだよ？

かと言って怖がらない様に気配を消したら、誰も俺が居たことに気がつかなくなっただし。

正直、コレで良いのか？俺大丈夫だよなあ？

まあもう遅いがな、ココまで来ちゃってるし…。

とりあえず、そう言った暗い話はやめて話題を変える事にしよう。

さて、そう言う訳で皆さんにご報告何だが、どうもこの世界俺の思ってた世界と違ってみたい。ココ最近になってから気が付いたんだが、魔導師が居る世界にしては、管理局とかがテレビに出てこない。それに新聞とか見ても時空管理局なんて単語が見つからない。

俺アてつきりりカルなのはの管理世界のどれかだとばかり思ってたんだが、どうやら管理外世界の一つだった様だ。まあ魔法の方は原作の奴と似ているのや同じなのが多いからな、何らかのつながりはあるんだとは思っぜ？

ただし、デバイスもバリアジャケットもあるにはある。

だが、デバイスとかの形状が、銃やら剣やらの兵器、所謂質量兵器という奴が多い。

原作によれば管理局では質量兵器をことごとく嫌っており、所持は勿論ご法度だ。

そんなものをデバイスのモチーフにするのは、ごく一部モノ好きくらしいの筈。

しかし、この世界にあるデバイスのほとんどがクロスミラージユを無骨にしたような拳銃タイプばっか。

でもさ、その理由はすぐに解ったんだ。俺が今いる国の名前教えてやろうか？

俺が居る国の名前：ソレは U・S・N・ニューコンチネント合衆国 だ。

ゲーム、FRONT MISSIONの世界に登場する巨大合衆国である。

正し、アメリカだとかアフリカだとか日本だとかの様な地球の国家は一切ない。

対立相手もO・C・U・オシアナ共同連合とか言う名前だったりするけどね。

まあこれらのお陰で、俺は現在リリカルだけでは無く、そのリリカルな魔法が混ざったフロントミッションの世界に居ると言う訳ワカメな状態な訳だ。

しかしフロミネえ？道理でデバイスが武器関連多い訳だよ。

未だにこの世界U・S・N・とO・C・U・がケンカしてるからな

あ。

今のところ休戦中らしいけど、不安感は抜けないようで……。

そうになると結局最後は武器に頼りなくなるのが心情つてもんだよな。この世界においてデバイスが武器の形なもの、そう言った理由なのかもしれないなあ。

ちなみに俺の訓練用に渡された量産型ストレージも待機時の姿はデリンジャーだったぜ。

まあ世界情勢はこのくらいにしておいて、俺の近況報告と参りますか。

現状の俺の強さだがまず魔力量が非常に多い。瞬間的に発揮できる魔力量も中々だ。

すでに3歳にして魔力量だけならば、普通の大人のソレを超えてるのだからその凄さが解るだろう。

ビバチート万歳。

いや〜正直転生してからこんなに順調でいいのかな？えへえへ。

そんな事を適当に思っていたら、やっぱりありました問題が。

それが判ったのは魔法の練習の時。

母に教えてもらったクロスファイアシュートという魔力の誘導弾を使った日の事。

『

以上だ、概略は理解したな？』

『イエスマム』

『よろしい座学はココまでだ。実践してみる？』

『了解……………クロスファイア シュート』

バシユッ！

『よし、使えるな？次は誘導を試してみる？』

『了解……………クロスファイア シュート』

バシユッ！

『……………おい、私は誘導してみると言ったのだが？まあ新しくやる魔法だから仕方ないか。』

出来たには出来ただけど、形成した魔力弾が真っ直ぐにしか飛ばない。

バシユッ！

『違っツ！誘導だ！魔力弾を誘導させる！！』

バシユッ！

『おちよくっているのか貴様……………』

バシユッ！

『おい！いい加減に……………おかしい、確かに遠隔操作の方は出来ている、なのに何故だ？』

『……………解りません』

最初は始めてだからだと思ってたけど、何度やってもいくら思考しても真っ直ぐに飛ぶだけ…。

これじゃただの弾丸と変わらない。

つまり俺は魔力弾の遠隔誘導にリソースを割り振れない体質なのだ！

後で詳しく調べたが、今まで基礎の魔法の時には問題なかった。

なのに、誘導系は一定のレベルを超えるとダメらしい。

だから、折角の高魔力による誘導弾も宝の持ち腐れ。制御できて野球の変化球くらいなんだから普通に無誘導のフォトンバレット撃つたほうが、余計な手間がない分燃費がいい。

『お前は……誘導系は素質がゼロだな。というか体質では仕方が無い、諦める』

『……………了解』

なので、誘導系は諦めた。悔しい…俺はファンネルも出来ないのか？
そして極め付けは、母上に憧れ、空飛ぶ魔法を教えてもらった時のこと

『そう、慎重に魔力を操作しろ。下手に魔力配分を間違
うとひっくり返るぞ？』

『了解 フワッ！』

『 良いッ上手いぞッ！！』

重力制御は普通に出来た。
しばらくしてから、いざ飛んでやろうと訓練用バリヤジャケットを展開して大空に飛び出した。

『おお、上手いな。よし、フェン戻って来い』

『……………ッ！?!?』

『なに?! まがる事が出来ない?! 取り合えず止まれッ!!』

結果は、飛べました。但し真っ直ぐに…ただひたすら真っ直ぐになっ…
つか馬鹿正直に正面にしか飛ぶことが出来なかったのには啞然と
しただぜ。

空戦魔導師の強さはその運動性にあると俺は見ている。
敵の攻撃をかわし、三次元の動きで翻弄し、魔砲を叩きつける。
まあつまりは、ハイマニューバは必須スキルなのだ。

なのに俺の場合、ただ真っ直ぐに突っ込むだけだ。
スピードこそ速いが、攻撃を避けられないなら意味がない。
闇雲に突っ込むのは早死にのモトだぜ? 特攻じゃないんだからさ。

『ちゃんと制御が出来るようになるまで、空を飛ぶのは禁止だな…
…特訓メニュー増やさないと……………』

『…………… (ガタガタガタ) 』

そういうわけで、飛べない訳じゃ無いけど陸戦に進むしか無くなっ
た……………鬱だぜ。

おまけに、恐らく本気で血反吐だす特訓メニュー付きになる訓練も追加された。

アレ？これって訓練で死ぬっていう死亡フラグ？

べ、別にいいさ…基本的な魔法ならちゃんと使えるしな！

べ、べつに負け惜しみなんかじゃないんだからね！ほんとなんだからね！

自分でやっておいて吐き気が来た。すまん。

まあこんな事ばかりじゃなくて、普通にうれしいこともあった。

何と俺希少技能、つまりはレアスキル持ちでしたッ！

ご都合主義万歳いい！！神さまありがとオオオ！これで少しは死ななくなるぜ！

まあこれにも致命的な問題があったりするんだけどね。

ちなみに、何故レアスキルがあるのか解ったのか？

理由は簡単、母上との訓練の成果というか、所為か。

まあアレですよ、訓練では基本非殺傷設定の模擬魔力弾を使う（と言っても痛みはある）のだが、その日は何を考えたか『今日は殺傷設定だ。死にたくなかったら避ける』と言ってくれまして…。ええ、殺傷設定です。前の世界基準で言うなら実弾で撃たれるようなもんです……訓練でな？

そらーもう、こちらら必死だったよ？

だって普段の母上の攻撃ですら容赦無しで急所狙われるんだぜ？

絶対にこのヒトならヤルッて確信があったね。

後で聞いた話じゃ、殺傷設定でやることで実戦の臨場感を出そうとしたそうなの。

だが、あえて言おう母上、俺精神は大人でも肉体は一応幼児ですよ？

でまあ、戦々恐々とした感じで訓練は始まった。

だけど正直、本当に気が狂うかと思ったな。

始まった途端至近距離で魔力弾が通過した。だけどその時、頬から鈍い痛みを感じたのだ。

そしてすぐに頬に垂れる様なヌルってした感覚・・・何なのかは解るよね？

気が付けば頬には一筋の傷、深くも無いし魔法使えば直るだろうけど、痛みは本物。

たった数センチ、たった一つの怪我……。

でもそれだけで、俺を本気で回避に専念させるのは十分過ぎるほどの脅しだった。

だが俺がいきなりの事態に硬直していても、お構いなしに母上は攻撃を行ってきた。

それをある時は回避し、ダメな時はラウンドシールドに角度を付けて魔力弾を逸らすことで抵抗した。

しかし当然のことながらアレだ？俺途中で集中力の限界に来ちゃって一瞬だけ意識が跳びかけた。

時間にしたら0.1秒にも満たない時間だったけど、迫りくる魔力弾がどうあがいても回避不能な位置に来るのには十分過ぎる隙だった。

魔力弾の射線は俺の顔面に直撃コース。

俺の拙い防御魔法程度では紙をかざしたくらいしか防げ無いから意味がない。
殺傷設定だから顔なんてドドリアさんもビックリな感じで弾け飛ぶに違い無い。

ホントはそれほどじゃ無いらしいけどさ。マジ絶叫したよ。迫りくる死の恐怖でさ。

前世では平和世代の日本人、そりゃあゲームでは撃つ撃たれるなんてシチュはあるぜ？

つつても日常の中に、誰かに撃たれるなんて経験を現実にしたことは無いんだぜ？

避ける事も出来ず、混乱した頭では魔法制御なんて出来ない。

俺は迫りくる恐怖に叫び声をあげながら、何を考えたか両腕で魔力弾を受けとめようとしたのだ。

イヤホント冷静に考えたらバカなことだと思っよ？

相手は現役の魔導師、対して俺はちよつと前世の記憶を受けついでお陰で成長が早い幼児。

そんな俺が現役が放つ殺傷設定の魔力弾なぞに耐えきれぬ筈も無いのだ。

精々よくて肘が残れば良い方だと思っよ？ 威力的にさ。

でもその時、奇跡は起きたね。

魔力弾が俺の腕に当たった瞬間、腕を切り裂きながらもその魔力は俺の腕に吸い込まれていった。

感じたのは物凄い充足感と両腕に入る激痛、気絶しそうになるくら

いの神経系の痛みだった。
つーかそのまま痛みの所為でブレーカーが落ちて気絶した。
目が覚めたのは2週間もたったベッドの上だったよ。

目が覚めた時、ベッドの横にいた母上が突如として泣きだした事には驚いたけどね。

そらもう泣かれました、もう訓練は止めようかって言われるくらいでもさ、ココまでやっておいて今更宙ぶらりんってのもいやだから続けるようには頼んだ。
それが良かったのかは知らないけどな。

まあそんな訳で、俺は訓練で覚醒しレアスキル持ちであると、病院で診断された。

その名も『リサイクル』。
空間中にある魔力素子や魔法使った後の霧散した筈の魔力残照を吸収。
それを何と自分のモノとして活用できるってヤツだ。

理論上魔力が充満している空間なら、魔力切れが起こる事もないという。

魔導師にとっては有り難いスキルであると言っても過言ではない。
おまけに吸収とかの副産物としてSクラスの魔力収束が可能。

医師からの説明に、うわっチートと思ったけど、その実問題が多かった。

まず吸収できる魔力だが、魔法の場合だと大なり小なり関係無しに半分しか吸収できない。

おまけにレアスキルで吸収した魔力を、自身の魔力に変換する無意識下の作業。

その制御が余りに繊細な為、無意識の内に神経系にかなりの負担をかける事になる。

ソレで生じる痛みは、前世でトラックに潰されたアレ並みかな？

いままでの訓練で痛みになれた俺じゃ無かったら、確実にシヨック死してたかも知れないくらいだった。

一応使用すれば徐々に身体が慣れて行くので気絶しない程度に痛みは治まるらしい。

だけど痛いのはイヤでおじやるッ！マジ勘弁やっちゅーのッ！痛いのは訓練で沢山だ！！

っ！か、転生でチート能力くれるんなら普通に使えるヤツにしてくれよッ！！

中途半端に痛みが来ると戦闘に集中出来ないじゃないかッ！！

このスキルのお陰で俺は常人が考えられない程の長い時間、単独戦闘が可能になった。

だが……あんまし良く無い。強くなる事に反対はしない。

でもスキルの内容を知った母上によって訓練の中身が増えちまってよ？

レアスキルに馴れる為だとか言って、痛みを我慢しながら魔力吸収を行ったり。

弱くても常時発動しているから、マジでぶっ倒れるまで魔法使わせ

続けられたり…… e t c。

そんなこんなあって、更に一年たった。

四歳になって、更に魔法に磨きがかかったよ。無口にも……。最近は何に出さなくても、両親が乏しい俺の表情を読んでくれるのであまりしゃべらなくていい。

返事は首を縦に振るか、横に振るか…お陰で最近会話してない…。まあ、それが原因で関係が崩れることは無くて、コレが普通って認識されてるから、家族との関係は良好だ。

今は母上から中距離の戦い方を伝授してもらっている。とりあえずまじキツイ…でも楽しい！
母上も教えるのが楽しくなったのか、最近手を抜かなくなってきたから、俺のレベルはどんどん上がってる。

実質いまだ冷戦状態にあるこの世界、おまけに国名が国名だ。いつ戦争が始まるか解ったモンじゃ無い。
最初こそ魔法覚えられるぜヤツフウウツ！…って感じだったが、もしもの時の為にも力を付けといて悪い事は無いね。

主に俺が生き残る為にわなッ！

あ、今日は感覚遮断室で精神鍛錬訓練だ。
急がないとまた特別訓練が入っちまうぜ。
それじゃあ皆さま、また生きていたら合いましょう。

「専用…づん、いい響きだ」(前書き)

説明文多し

「専用…うん、いい響きだ」

転生か？第3話

いやあ、人間のみなさん、こんにちは
なんて鬼太郎の真似
かいッ（ビシッ）

さて冗談は置いておいて、母上から言いつけられた地獄の訓練メニューを消化していたある日の事。

俺はその日、珍しく父上から呼び出しを受けていた。

はて？俺なんかしたかね？褒められることも叱られることもしてはいなかった筈なんだが？

まあ考えてもいたしかたない為、言われた通りに父の居る工房に行く、予想を斜め上に行くような展開が俺を待っていた。ソレは

曰く、そろそろ自分の専用デバイスが欲しいんじゃないかと？

当然俺は即答したね『凄く…欲しいです』ってな？

ああ、話し方がアレなのは訓練のやり過ぎと人と接する機会が少な

かった所為だから気にするな。

でだ、この時は当然俺専用デバイスを造ってくれるのかと思つてた……のだが。

「基本となるフレームは組んでおいたよ。

拡張性だけはすさまじく高いから、己が思い描くデバイスを造り上げてみなさい。」

何故か自分の手で組み上げると、何か判らないけど大きな骨格やら部品みたいなモノ渡された。

えーと父上、コレなんですか？

「まあアレだ、色々機能つけてやるうかと思つたんだが、色々湧きすぎてな？

お前に合いそうなヤツが解らなくて、とりあえず着けられるだけ付けたらそこまでデカくなってしまったんだよ。」

……出来れば普通に完成された高性能のデバイスが欲しかったのですが？

「うんそのままでも十分高性能だよ。でもほらそう言つて自分で決めたいと思わないか？」

まあ解らなくもないんですけど……コレって丸投げって言わない？

「そうとも言う、じゃあ後は頑張つてね。ココの工房好きに使つていいから」

そう言うのと逃げるかの様にスツと工房を後にする父上、逃げたなあ

りゃ。

まあいたしかたない、とりあえず訓練用のデリンジャーなんか物足りないと思っただころだ。

こうなれば俺の好きな様に改造させてもらいまっせ？さて部品は何があるかな？

こうして自分のデバイスを自分自身で組み上げる事となった。

.....

.....

.....

さて、ある意味丸投げされてから2週間が経過した。

母上に体がなまらない程度の訓練にして貰って時間を造り、空いた時間を寝食を忘れるくらいにデバイス造りに当てた。

その結果、俺専用デバイスは漸く形が出来て来たのだ。

作業台に置かれているのは大きな鎧の様な代物。どちらかと言えば強化外骨格の様にも見える。

普通はデバイスと言えば杖とかそついったのなのだが、これはそう言つのは運用方法がまるで違つ。

これは俺が今の自分のスタイルに合わせた結果なのだ。

当初は空を高機動で動き回れるのをコンセプトに、高速飛行をメインに据えようと考えていた。

しかし、考えてみたら今の段階では真っ直ぐにしか飛べない俺が高速飛行用モジュールをデバイスに組み込んだところでたかが知れている。

別に最初はそれでもいいかと思っただが、どうにも世界情勢が怪しい状況になりつつある今。

上手く操れないデバイスを持っていてもしょうがないと思い、拡張性を残してある程度オミットした。

代わりに足周りに特殊なローラーと魔力モーターで駆動するローラーダッシュという機能を搭載した。

……まあ中身はマツハキャリバーみたいなもんだけどね。

さて、こう言う訳で高速飛行型は諦めた訳だが、ならば逆に重装甲にするのはどうだろうと思っただのである。だがバリアジャケットとの防御力は基本的に魔力次第な為、それならいっそのこと鎧にしてみましたという考えが浮かんだ。

俺は装甲素材として魔力による疑似物質とカーボンの複合素材を使用し、バリアジャケットの強度を上げる事に成功する。更に、装甲表面に薄いシールドを絶えず張る事で耐物理、耐魔法において鉄壁の防御力を誇る。その所為でバリアジャケットを維持する為の消費魔力がバカみたいに増えたが、元々レアスキルで魔力だけはみながっている俺には関係無し。

まあココまで術式変えちゃうと、もはやバリアジャケットと呼べ

ないから、バリアアーマーって呼称にした……相変わらず安直だな俺。

一応もしもの事を考えて、魔力バッテリーを改造した箱型マガジン魔力チェンバーと呼ばれる半カートリッジシステムを搭載した装置を組み込んだ。コイツは大型のバッテリーの中に魔力をプールさせておき、必要に応じてカートリッジの様に必要分の魔力を爆発させて使う事が出来る代物だ。

まあ試作段階のものであるが、強度だけは高いから壊れる心配も低いのが取り柄かな？

でだ、鎧にしておまおうとは思ってたけど、普通に鎧にしてしまうのはどこか面白く無い。どうせなら強そうな……ロボットみたいな感じにしても良いんじゃないかなあと思っちゃった。

そして色々候補がある中で選んだのは、汎用人型兵器ヴァンツァーの中の一機。
生前最後にやったフロントミッション5に登場するヴィーザフをモデルに造り上げた。
なんでヴァンツァー？それはこの世界がフロミ成分も混じってたからさ。

フロミなのに一機もヴァンツァーが居ないのはおかしいッ！って事でつい乗りで造っちゃった。
若気の至りって奴さ、後悔はしてないけどなッ！

もつこのデバイスは普通のデバイスじゃ無い、祈祷型ともストレンジとも違うそれは、あえて言うなら強化装甲型デバイス。今の俺

が組み込めるだけの技術を組み込みつつも、これからも拡張…成長の余地がある俺専用のデバイスだ。

いやあしかしまたココまでごつくなるとは、自重って大事だね。

試作状態で装着してみたけど、大きさ4歳児のヴァンツァーじゃん。

あと、そろそろ兵装モジュール用のストレージデバイスも考えておかないと……。

それらを統括できる程のAIも搭載せにやらんしなあ。

そうだッ！どうせAI乗っけるんなら、喋れる機能は付けておこっ
ッ！

それだけで夢が膨らむぜいッ！！さてさて、それが出来るパーツは
どこじゃいなあ〜

父上殿の新作部品から際物まで、この工房には何でも有るから楽だ
ね。

でも考えてみたら、実戦であんまし際物ばっか使ってたりなん
かしたら、

整備する負担が増えるなあ〜コリヤ。

……………市販の部品で流用できそうな所は流用しとかないと。

ガチャガチャと部品の山をかき分けながら、俺はそんな事を考えて
いた。

制御系については、所謂インテリジェントデバイスと呼ばれるモ
ノと同じように、AIに統括させる事にする。術式制御についても
同様だ、この方式なら戦闘中にリソース配分に余裕が出来る。

基本術者は魔力タンクとなってしまうけど、どうせ使う術式なんて
二つ三つくらいなだからな。

増やし過ぎたら制御が難しくなるだけじゃわい。

戦闘に使わない奴は自分自身が覚えれば良いだけの話だしね。

まあ一応演算装置はかなり強力なモノに交換して、メモリの方も大容量にしておこう。

強度を増す為にブラックボックス化させてと……後は適当に経験積ませれば色々と楽になるだろうね。

「お……ナノマシン……発見」

父上の作業台の引き出し探ってたら『試作XA-205FO』とラベリングされたナノマシンが出て来た。

えと取扱説明書は……あた、コレか。

「……………す」

なんじゃこのナノマシン……でも便利そうだな。

父上から“工房にあるモノ”はすべて使っていいっていう言質は貰ってるから使っても良いんだろうけど……。

ん？どんなナノマシンかって？まあ基本的に普通の簡易修理用魔導ナノマシンと変わらんよ。

ただ“簡易”じゃなくて文字通り“修理用”ナノマシンってなだけ……え？どこが凄いかって？

んーそうだな、普通のデバイスについている簡易修理ナノマシンは、応急修理しかできないんだ。

もちろん1〜2週間くらい時間かければ修復可能だけど、戦闘中は

無理でしょ？大魔力でも無いと。

この試作型魔導ナノマシンは多大な魔力を消費する代わりに、戦闘中でも瞬時にデバイスの修理修復が可能になる……らしい。カタログスペックがあてになるならそう言う事になる。

一応自己増殖出来るし、魔力で出来た疑似物質製だから壊れる事も無いらしい。

まあ使ってみれば解るっしょ？軍の試作品らしいけど、まあ幾つか同じヤツあるみたいだし一つくらいええやん。

っー訳で使わせてもらうでっー

こうしてオイラは自分専用のデバイスを自重とか無しで造り上げていく事になる。

おまけに使用されている部品のほとんどは、ブラックボックスを除けば最高級品といえども一般に販売されている部品が多く流用され、例え壊れても部品の手に入るところならば修理が可能になる様にした。

もともと、修理用の魔導ナノマシンが父上の作業台で手に入れた軍の試作品である。

その為殆どメンテナンスフリーですんだりするのだが……さもあらん。

正直、やりすぎだった。てへ

「専用…うん、いい響きだ」（後書き）

*僕が考えた最強つてのをイメージしつつ、己の好きなロボを+つて感じ。正直、厨二やね、うん。

でも、物語には厨二病成分は少しは無いと面白く無いと思うんだ。
なので書いた、後悔は…無い
（多分）

「やり過ぎ(じゃ無い!?)」

転生か？第4話

やあみんな元気かい？僕はフェン、ピッチピチの5歳児だよ！
ごめん、自重するからそんな可愛そうな子供見る目で見ないでください。マジにへこみます……。

さて、何の因果かこの世界に來ちまった俺。

最近ではもっぱら新しく相棒となったヴィズに新しい魔法プログラ
ムするかたわら、

新機能を取り付けたり、追加兵装のストレージ作ってます。

後は、母上と行く地獄の模擬戦をヴィズと一緒に励んでました。

あ、ちなみにヴィズって云うのは俺が作り上げたデバイス、
ヴィーザフのAIの事ね？

言い辛いから略称にしたんだ。何？安直？いいんだよ俺が言いやす
ければさ。

ソレと現在の俺の魔導師ランク何だけど……気が付けば既に陸戦A
AA+でマジチートです！

魔力量ならSSランク超えてるってどうよ？レアスキルも付いてる
しね。

空戦ができなくて誘導制御型魔法が全然出来ないけど、それ以外な
ら母上に迫る勢いだぜ!!

いまだ勝てないけど……ハア。

……

……

……

さて、今日母上に有無を言わず連れてこられたのは、母上の部隊の訓練している施設だ。

門で母上が何か許可証の様なモノを見せて一発で入る事が出来た。

一応突っ込むけどココ軍事施設だよな？なんで家族とは言えボディチャックしないの？

危機管理に問題無く無い？まあ面倒臭くなくていいけどさ。

まあそんなことがあったが、今は母上の後について施設内を移動している。

なんせ始めて来たところだからな。金魚のフンをしないと迷子になっちゃうしね。

そんなこんなでPXに連れてこられたんだが

「敬礼ッ！」

ザッ！

母上がPXに入った事に気が付いた隊員の一人が号令をかけた途端屈強の男たちが一糸乱れぬ動作で一斉に敬礼を行った。

は、迫力がすげえ。驚いて心臓が飛び出るかと思ったぜ……顔には出ないけどな。

「楽にしろ、今日の私は非番だ。いちいち敬礼は必要ない」

ホッ

おお、いきなり安堵の空気がッ！？

っーかどんだけ恐れられてんだウチの母上は？

その後はまあやや緊張している様だったが、
隊員たちも各々食事に戻ったりゲームに興じたりしている。

そんな中恐らく母上の副官と思われる人が、
俺の方にちらちら視線を向けながら母上と何か話している。

俺？目立たないように母上の後ろで黙って突っ立てたよ？

だってこんなところで目立ちたくないしね。

まあそう言う訳で置物の如く立っていただけの筈……だったんだが

『フェンちゃん 準備良い？』

「……………問題無し……です」

何故か気が付けば、模擬戦用ホログラム環境シミュレーションターにいます。

まあアレだ、本編のストライカーズに出て来た模擬戦用のアレのちよい荒いヤツみたいな感じ？

実体が無いから別モンだけどね…しかし母上も酔狂な人だな。

見学だけかと思ってたんだが、母上フェンちゃんががんばってね！

…とか言って素敵な笑みを浮かべながら、いきなり模擬戦に参加さ

せやがった。

あの時副官と話していたのはコレの為だったらしい。

しかも部隊のみなさん対俺……………幾らなんでも戦力違いすぎないか？いやマジでビビったよ？

だって相手は現職の魔導師さん、しかも一番手は見た目叩き上げの鬼軍曹って感じのおっさんだぜ？

対する俺は最近やっとこさデバイスを扱えるようになったペーパーの幼児です。勝てる訳ねえ。

ほら相手も戸惑ってる……………ってあれ？何でデバイス向けて臨戦態勢？

【リーダー隊長には逆らえませんが！ガンホーの精神です！！嬢ちゃん覚悟してくれ】……………だって？

だ・か・ら！お前はどこの海兵隊だ！！大体俺は男だ！！女顔だけど男なんだッ！！

「…：ヴィズ」

『Yes、マスター…：セットアップ』

とりあえず俺もデバイスを起動して装甲を展開、シミュレーター室に白いヴァンツァーが顕現した。

「レールブラスター……………フォックス2」

『ファイア』

で、手加減する余裕もないから（怖かったんだよう）手に持ったヴィズを至近距離で乱射した。

ちなみにヴィズには基本兵装としてアルアッソーという名のマシンガン型の兵装が取り付けてある。

コレには新しくつけた魔力チェンバーのカートリッジ機能により、俺の魔力を薬室内で圧縮して高圧魔力弾を形成。その魔力弾に更に処理を施して障壁を突破できるように、多重弾殻弾が使えるように術式を組むことに成功したのだ。

更に俺は魔力弾の誘導が出来ない為、だったら弾の初速を高められるだけ高めればいいんじゃない？と考えた。基本はフォトンバレットだが術式プログラムをやや変更し初速を高められるだけ高めたのである。

だが、希望よか遅かったので、薬室内で魔力を爆発させ装薬にし、さらにバレル部分に電位差を発生させ磁場の相互作用を作り出す事で、レールガン化させることに成功したのだ……ある意味すごくね？

まあ何故かその際に、魔力弾は電気抵抗である程度プラズマ化するため属性変換もついたのは予想外だった。しかもだ、初速が毎秒5km位になって、照準もヘルメット内のHUDに表示されるから、余程の事がない限りはずさない。

更に、この間やっと試作品から正式なモノとして完成した、箱型マガジン魔力チェンバーMTS-40。それに魔力をあらかじめチャージしておくことで、すぐに発射+連射可能。

威力も一発当たりB+からA-あたりの弾を連射すつから……うん、普通は耐えられないし弾足が早いから避けられない。

白い悪魔さんに効くかはしらんが……。

ちなみに母上には避けられたよ？

何でも銃口を見れば予測できるとか……ホントに人間かあんだ？

さて話を戻そう

俺はヴィズを使い、始めての他人との模擬線で緊張したのか、つい連射しちまったんだけど……。

至近距離だったから、俺の相手をした魔導師のラウンドシールドを貫通して、おっちゃんをノックダウンさせちゃった。

始まって1分もたってない…非殺傷設定じゃなかったら相手ミンチだぞ？くわばらくわばら…

でもさすがに鍛えてるだけあって、おっちゃんはすぐに気がついた。だけど、母上から後で特別訓練入れてやるって言われて青ざめた。つかマジ泣きしてた。

まあアノ特別訓練は人生観変わるモンなあ、なんかご愁傷様。

そんでこれで終わりかと思った……だがソレは甘かった。

母上、今度は部隊全員vs俺…とか言って、俺が無口なのをいい事に了承も取らずいきなり始めちまいやがったのだ！

目もと真っ暗で『負けたら特別訓練……』とブツブツ言ってる筋骨隆々の男たち…

ソレらが迫ってくるんだぜ？ありや恐怖以外の何物でもないよ。

仕方ないからヴィズの機能“ローラーダッシュ”で連中から一気に後退。

距離を引き離してから、俺が作った兵装デバイスの一つM82A1を起動させた。

尚この名前、わかる人にはわかると思うのだが…。
実はこれ俺の世界に実在する対物狙撃銃のバレットM82をモデルにしている。

なんかさ、小さい子供がおっきい獲物持つてる絵って映えない？

口径は本物と同じ12.7mm、こだわりってやつだね！

ちなみに魔力カートリッジ装弾数はダブルカーラムでちよっとお得な14+1発。(本物は10+1発)

ヴィズと同じく魔力弾を使用し、口径がデカイ分高威力でちよっとした砲撃並み。

一般のバリアジャケット位なら掠っただけでも破壊可能なのだ！

その分燃費が悪いけど…なんせ一発当たりの魔力消費がヴィズの2.5発分に相当するかんね…。

何かに当たると、あたり巻き込んで爆発するけど、長期戦に向かないのが悩みかな。

「M82A1起動…：術式はレールブラスター」

『了解』

んでこのM82A1片手に連中から十分距離をとったところで、追っかけてきた連中に目掛けて

「フォックス3」

『ファイア』

逆に近づいてきてバインドで捕まえようとしてくるヤツがいたし。

「貫けッ！ストライクブレードッ！！」

子供相手に本気で魔力斬撃を繰り出してきたヤツも居た……おまけに連携してくんの。

正直、大人げねえええ！と思ったけど、何とか全員ノしたところで模擬戦は終わった。

とりあえず、今回で学んだのは近距離の武装が無いときツイって事。

何度か懐に入り込まれた時は本気で焦った。

ヴィズが張るプロテクションが、幾重にも重ねられている多層構造障壁だったから、相手の魔力刃防げたけど、只のプロテクションとかだつたら普通に抜かれてたと思う。

8層ある障壁の内、第3層にまで魔力刃が届いたからな…さすがは現役つてとこか。

銃だと剣の斬撃は防げないし…此方としても近接戦の対抗手段として近距離兵装の追加を考えさせられるいい機会だった。

「お疲れ様フェンちゃん、でも驚いたわ。まさかウチの部隊に勝ちちゃうなんて…」

「ギリギリ…だったし…手加減されてたから…」

流石に母上もここまで出来るとは思ってなかったのか驚い

てた。

せいぜい、二三人倒す程度だと思ったんだろう、予想を裏切ってるいね。

「そうねえ、でも私手加減する様には命令して無かったんだけど

あとで全員特別訓練ね」

「「「「N、Nooooo.....!!!!!!」」」」

で、5歳児に倒された部隊の人たちは、全員特訓と言う名の地獄に旅立つて行った。

……BGMはドナドナだ。

そして、俺はこの日からちよくちよくこの人たちの所に行くことになった。

実戦積んでる人の動きは参考になるしね。

かくして俺は母上の部隊のマスコットになるのであります。

「これで……いいのかな？」

『私はマスターについてきます。』

ありがとよ……ヴィズ。

「うそ…だろ…」

転生か？第5話

やあ皆元気かいみんな？俺は今、平穩は長続きしないことを噛み締めてるよ…

アレから2年たって、俺が7歳になったとき、アレだ…ついに戦争がおこったんだ…。

俺がいるU、S、Nから海を挟んだ位置にあるO、C、Uが、海の真ん中にある島の所有権を巡って勃発したらしくて、相手の国が国境を越えて、こっちの街をいくつか占領したらしい。

電撃戦だったらしく戦線は膠着状態に陥り、両国とも現在本国からの援軍の準備を進めているんだそうで。

うん、コレ聞いた時点で俺は思ったね。フロント・ミッションだ！って

だって島の名前がもろハフマン島だぜ？ヴァンツァー出てこないだけで状況ほぼ同じだし、

俺のデバイスの名前からして何らかの意図を感じるのは気のせいかな？ちなみにこの戦争の名前は第一次ハフマン紛争なんだそうで…やっぱりな。

でだみんな：俺の両親軍属だって覚えてるか？

ハイそうです。お察しの通り軍の上級士官である我が両親は、先月から前線へと赴任していききました。

つまり我が家族は、戦争の所為で離ればなれとなつたつて訳だ。

前世で良くテレビとかで、紛争地帯の実況とか見てたから、今回もその程度でしかないだろうって高括つてた。

でもあれだね：家族が戦争に行つてしまつてのは、ココまで不安なモノなんだな。

母上の部隊の連中も、前線に行つちまつたそうだし、あの濃いメンツが見れないのも寂しい。

まあ父上はともかく、母上が落とされるところは想像がつかないけど……でも心配だ。

主に俺の命がなッ！！なんでかつて？決まつてるだろう？俺も戦線に送られる可能性があるからだよッ！冗談抜きでなッ！！

最近、風の噂で軍の高官の子供たちが、次々と軍学校へ突っ込まれていると聞いた。

良くも悪くも、この世界も魔法第一主義が蔓延していたりする……まあ解るだろ？

要するに資質のある子供は、年齢を問わず戦争させる為に教育を施されて前線に送られる可能性があるって訳ッ！

おまけに軍の高官の子供たちならば、プロパガンダにもなるんだからな。一石二鳥つてわけだ。

そして最近、俺の家の近辺において、不審な人物の反応をヴィズの高感度センサーが探知したりした。ヴィズには父上の部屋にあったかなり高精度なセンサーを搭載したから探知出来たけど…

普通のデバイスなら探知できないくらいの隠ぺいの上手さだった。

ちなみにフリーの魔導師でココまで隠ぺいできる人はそうはいない。それに俺にフリーの魔導師が目を付ける理由も無い……。

故に導かれる答えは

軍の人間

と、言う訳だ。

うん、間違いなく俺狙われているね。

これはヤバい事になるかもしれないっていう嫌な予感がしたから、あいた時間は全て自主訓練にあてた。というか十中八苦、俺は多分軍にしょっ引かれるだろうから、かなり鬼気迫るくらいのレベルでやった。

魔力の成長度合いはまだまだ延びるはずだけど、手っ取り早く最大値を上げる為に、気絶するギリギリまで魔力行使した。

魔力を多く含むと言われる食物を食い、逆に吞まず食わずで、真っ暗な洞窟をさまよった。

正直、数撃ちや当たる方式で本当に上がるか微妙だったが、洞窟での臨死体感で結構最大値は増えた。

やっぱ死を擬似的に体感するだけでも違うのだろう…死に対する恐

れが薄くなり、精神の揺らぎが少なくなる。
生き残る為だと自分に言い聞かせココまでやったけど……ホント今
まで良く発狂しなかったな。

下手すら廃人だったのになあ……まあ死にたくは無かったから仕方な
いんだけどさ……発狂してた方が良かったか？

精神患者認定されれば表向き戦場に放り込まれることも……いや案
外捨て駒にされたりして……。
それは洒落にならんのか……。

まあ他にも訓練では、魔力制御を上げる為に魔力ス
フィアを造れるだけ造ったりした。

少しは進歩があったらしく、今んとこ10機前後を身体の周りに浮
かべて置くの事が出来る様にはなった。

まあ固定砲台でしかないんだけどな……でもそれを地雷みたいに遠隔
で設置とか出来るようになったし、ソレの起動も遠距離で出来る。
遠隔誘導こそ出来ないけど、それなりに面白い事は出来そうだ

でもなあ、使ってみて見たかったな……ファンル。

後は……そうだな……ヴィズの強化も行ったな。新しいデバイスも何個
か作り、出来が良いのはヴィズに組み込んだりしたんだ。

それと格納領域を増設したり、ヴィズ用の箱型マガジン魔力チェン
バーも量産し、その他スペア部品も幾つか作り上げた。

ヴィズの人格AIにも戦略シミュレーションが組めるよう、システ
ムを構築し直したし、新しく魔法も登録した。

どれだけ怖がりなんだと思うかも知れないけど、殺傷設定の魔法つ

てのは冗談抜きで人間を消し飛ばせるからな。
用意しておく事に越したことは無いって……うん。

後、驚いた事があった。

実はこの戦争に時空管理局が参戦しているらしい。
つーか居たのね管理局……。

母上の部隊が前線に出る前に、母上の副官さんから聞いた話何だが……
何でも以前から次元犯罪者を追ってこの世界にまで来ていたらしい。

で、近年その犯罪組織が相手の国に潜んで軍の研究に協力している
ことがわかったらしく、
それを捕らえる為にこっちに協力を申し出た……らしい。

人伝に聞いた事だったから正確なところは分らんが、多分概ねあつ
てる。

あいつら正義感の塊みたいな連中だからな。敵の敵は味方ってか？

まあ、きつといい人材がいたらスカウトする気とかもあるんだろう
けどな。

……あいつ等色んな世界に手を出してるから、万年人手不足のハズ
だし。

しっかし管理局ねえ、この世界が管理外世界の筈なのにデバイス
があったのはそう言う訳か。

次元犯罪者がデバイスや魔法のノウハウを広めたのね……でそれに対
抗する為に管理局も来た。

でもまあアチラさんとしても、火種は欲しく無いんだろう。表向き
活動してないのは……。

まあこの世界火種だらけだしね。

そう言えば、今は原作の前なんだろうか？後なんだろうか？
デバイスや魔法の感じから、原作よか未来だとは考えられねエ。
かと言ってSSとかにあった古代ベルカ時代という訳でもないし。
うくん…解らん。

こういった場合原作に介入したくないと言ってても介入させられるっ
て言うのが定石だし、介入しようとしても空回りするのもデフォだ
よなあ。

ならば、俺が出来る事はただ一つッ！！
任せてみよう。
流れに身を

え？何かしろ？嫌だぜそんなん。面倒臭い。まあ二度目の人生楽し
む為には手段は選ばないけどね。

どうせ遅かれ早かれ、戦争に巻き込まれる事は目に見えているし、
巻き込まれなかったならソレで良い。

とりあえず生きれば良いのだ。幸いなことに母上から生きる為の
技術は全て習得させてもらったしな。

とりあえず覚悟だけは決めておこう…いろいろと。

.....

数週間後、ヴィズの強化もひと段落させ、取り合えず魔法の訓練に
精を出していたその日。

ピンポン

『マスター…“例”のお客さんです』

「ん…解った」

『ちなみに“何時も来ていたヒト”でもあるみたいですよ?』

「そうか…」

ついに、運命の時間が動き出す……なんてな。

ガチャ…

「どちら様…ですか?」

「こんにちは、ココはリーダー夫妻の家で良いかな?」

「はい、そうですが…アナタは…?」

「あ、紹介が遅れたね?USN軍人事部所属のエリカ・タスト少尉です。よろしくね?」

「はい…どうも」

玄関に立っていたのは…人懐こそうな笑みを浮かべ、いかにも子供が好きですと言う仮面をかぶった女性…。

彼女は俺を見ながら、自称USN軍の人事部に所属するエリカ少尉だと言ってきた。

だが俺は知っている。この一カ月程、この近辺を嗅ぎ廻っていたのは彼女であると言う事を…。

なんせヴィズがとらえた魔力パターンと完璧に一致するから……少し位隠せよ。

「……で、御用件は?」

「うーん、とりあえず家に入れて貰っても良いかな?ココじゃ喋れない事だし」

「知らない人は…家には上げられないのです……が?」

「でもねえ?ここじゃ話せないのよ」

まるで駄々っ子をあやすかのような口ぶり……うあ、ウゼー。
それにこのままじゃ話が進まんなあ……しゃーない。

「ふう……とりあえず……客間にどうぞ……両親は前線に居るので留守ですが……」

「ええ、ありがとう」

勝手知ったる家の如く、普通に客間に向かうエリカ少尉。
うっん幾らなんでも図々しいだろソレ、まさか素なのか？

カチヤ

「とりあえず……お茶をどうぞ……」

「あら、気が効くのね？ありがとう」

ホントはブブ潰け出したいんだけどなッ！この世界じゃ通じないだろうけど……。

しばらくお互いに無言が続いた後、俺はとりあえず要件を聞く事にする。

まあ……大体予想はついてるんだけどな。

「……で、本題は何です」

「あら、いい茶葉……ん？あ、そうそう要件ね？じゃあハイこれ」

彼女はそう言うと、まるで回覧板を渡すかのような手軽さで、書類を渡してきた。

中身は

「 非常徴兵令…特別召集令状…ですか？」

「 ええそうよ？君は国の為に闘う魔導師に選ばれたのよ？」

「 選ばれた…ね」

ふーん、そう…そうやってジワジワと自分からやるよう仕向ける訳なんだ…悪どいねえ。

「 そう言う事、まあ2〜3日くらい経った後に出せばいいからね？
良く考え「いいえ…今書きますよ？」……あら、どうして？」

「 どうせ、この特別召集令状…拒否権は無いでしょ？この間から…
監視してたエリカさん」

「 ふうん、バレていたの？」

「 解らいいか…というか…ワザとやっているでしょ？」

この書類は普通の召集令状とは違う……特別製の召集令状だ。

コレが出たら最後、こちらに拒否権なんてモノは存在せず、もし拒否しても強制的に連れて行くだけの癖に…この狸が。

俺がその旨を説明すると、途端に彼女の表情が子供好きから軍人のモノへと変化していく。

ふーん、さっきのはやっぱり演技か……てことは、こっちが素だな？

「 ワザと…ね。ところでアナタはいつ頃から気が付いていたの？監視
視されていたのを？」

「 一カ月前…ですかね？まさか監視していた本人が来るとは…こ
ちらとしても予想外でしたが…」

「 随分と鋭いのね？」

「 親に…仕込まれましたから…」

正確にはヴィズの高感度センサーのお陰だな。

「ふふ、探知能力も優秀、魔力も高い…あとは駆け引きを覚えればそれなりに優秀な士官になれるわね。合格よ？」

「合格…？」

「ええ合格、そこまで鋭い子なんて今までそうはいなかった。私がそう報告するからアナタは短期教育プログラムを終えたら尉官待遇で赴任出来る」

わーお、流石魔法世界。魔法第一主義万歳様々だね。

つまりコレはテストの一環だった訳か、監視していた存在を見抜ければ、特に優秀な個体として評価し、余計な手間を省く。

確かに…これは随分と効率のいい事で

「それじゃあ、早速行きましょうか？フェン・リーダー君？」

「はあ…お早いですね…」

「戦線は緊迫している。こんなことで本来は時間をつぶせないのよ。それに解っているなら準備も終わっているんでしょ？」

わお、鋭いこつて…というか監視してたから気付いてたんだろ？

「アイマム、10分ください」

「8分お願い」

「厳しい事…で」

荷物を取りに二階へあがる…ふう、とうとう来ちゃった。

両親が両親だし、俺の魔導師ランクもデータで持っているだろうか避けられない事かと思ってたけど……。

あーーーーー死にたくねえよー。

『マスター』

「ん？何？」

『何故そこまで抵抗も無しに従っているのですか？』

「ん、そうね……逆らっても意味が無い……からかな？」

なんせ命令してるのが国家だからな、一個人が逆らえるわけがない。

『マスターは常日頃死にたくないとか戦争は嫌とおっしゃっていたじゃないですか？嫌なら逃げれば良いのでは？』

「そうしたいのも……山々なんだけど……ね」

泡良く逃げたとしても、この国にいる以上絶対に捕まるし、海外に
なんて逃げるルートなんて戦争が始まった段階でアウトだ。

それに国家の意志に背いたなんて判断されたら、この国の暗い部
分に連れてかれる可能性もあるしね。

それも事故死に見せかけて……とかさ。

「流石に……そう言うのは遠慮したい」

それならば、普通に国に従順なフリをして、戦線に行った方がずつ
とマシだ。

戦いなら、これまでの経験で何とかなる可能性はある。

だが、もし国家に背いたとかで暗殺やらに処されるとしたら、俺に
ソレを防ぐ手立てなんて無い。

『しかし……戦争に行けば……』

「うん……確実に相手を……殺す事になる……だろうね」

覚悟はしている……訳が無い。俺は元は平和な国日本生まれ
れだぞ？人を殺す覚悟なんて……ムリだ。

だがそれでもやらなきゃならん……生き残る為ならな。

「それに……断ると両親に迷惑がかかる……とっくに逃げ場なんて無い……」

『……私はデバイスです。ですので上手い言葉が出てきません……でも、幾らなんでもコレは……』

「言うな……ヴィズ」

『……了解』

ヴィズはそう言うのと黙りこんでしまった　随分と優しい子に育つてくれたようだな。

ふふ、しかし戦争か……戦争なんて対岸の火事位にしか思って無かったのに……な。

まさか自分がそれに行く事になるなんて夢にも思わなかったぜ。

しかも転生したりリカルな魔法がある世界でなんてな……笑っちまうぜ。

精々死なないように……敵は倒すしかない……か。

厄介な世界に転生しちゃったなあ……魔法使えると浮かれてた前の自分を叱りたいぜ。

俺はやるせない思いのまま、準備はしていた荷物を手に取り、そのまま我が家を後にした。

まさか、もう二度とこの家に戻れなくなるなんて……このときの俺は知るよしも無かった。

「貴様の口から垂れる言葉の最初と最後にサーをつけるー」

転生か？第5 / 5話

いようみんな元気か？俺は今

「どうしたクソ虫どもがッ！自分よりもはるかに小さなガキに負けやがってッ！！それでも兵士かッ！！！」

「「「「サー！申し訳ありませんでした！サー！」「「「「」

「全員もう10周追加だッ！あと声が小さいぞこのなんじゃく者どもめッ！ジジイのフ　クの方がまだ声がでかいぞッ！」

「「「「サーイエッサーッ！！」「「「「」

フリーダム基地軍学校にて鬼軍曹からシバかれているよ。

まあ最も母上程じゃ無いから物足りない位なんだがな。

「走れえッ！！そして声をあげて歌えッ！！！」

「「「「」

「……………この走りながらエロ歌を歌うって言うのは、軍隊でのセオリーなんだろうか？」

正直、子供の教育にはすこぶる悪いよなあ。

俺よか10歳は年上の連中が、軍隊の過酷な洗礼を受けているのを横目に、俺は自主トレとして魔力強化をしていた。

まったく、面倒臭い……。

.....

.....

.....

「リーダー訓練兵」

「ハッ　　なんででしょうか？」

いつものように他の訓練生が走り終わるまで、マルチタスクを用いて魔法で浮かびながら瞑想をしていると、教官の一人が話しかけてきた。

「どうだ？訓練は退屈か？」

そう問いかけるのはワイズ教官……この軍学校での最古参の教官の一人だ。

フルネームはジョナサン・ワイズマンと言い、卒業した訓練兵たちからはその真摯な姿勢と真面目な教導から“親父さん”と親しまれている

「……問題ありません。」

「そうか……」

問題が無い訳じゃない……だが、俺はどっちにしろ逃げられないのだから、鍛えられるだけ鍛えておかないといけないのだ。

この世界に来て7年と少し……どっちにしろ、まだ死ぬのには早すぎる。

「貴様は夜中に自主訓練を行っているそうだな？」

「……いけないでしょうか？」

「いや、俺にも経験がある」

そう言うと彼は自嘲気味にクククと笑った。

そして再び沈黙…… BGMには訓練兵たちの歌が流れている。

「貴様は……」

「ハッ……」

「貴様は…何故そこまで頑張る？」

「……質問の意味が…理解しかねます」

俺がココに聞いた理由、知らない訳は無いだろう。

「質問の仕方が悪かったな……まあアレだ？貴様の自主訓練はだ。我々からしたら少し度が過ぎている。……ある意味異常だと言っても良い」

「そうですね」

「その事を踏まえてだ。なぜ貴様はそこまで頑張る？自分自身を苛める？もしかとは思いが……」

「……別に自傷行為という訳ではないので…安心して下さい。そうですね……自主訓練にあえて理由をつけるならば……」

「ならば？」

「生き残る…為です」

いや真面目な話、本当にそれが理由なんですワイズ教官。

正直ね、マジで死にたくないんすよ…俺は。

「後は…臭い話ですが、家族を守りたい…その為の力が欲しい…それだけです」

「いや、いい心がけだと俺は思う。」

「そう…ですか」

「ああ」

「……………」

再び流れる沈黙

き、気まずい（汗）

「最後に同じ事を聞くようだが、生き残りたいんだな？死にたくは無いらんだな？」

「??はい…そうですが？」

「その為なら、どこまでもヤル覚悟もあるんだな？」

「はい」

んと、教官は何が言いたいんだ？

「そうか…まあ俺が聞きたかったのはそれだけだ。訓練に戻ると良い」

「ハッ 失礼します」

ザッ

立ち去るワイズ教官を敬礼をして見送り、俺は訓練に戻った。

……………

……………

……………

数日後

俺は訓練の途中、いきなり呼び出しを受けた。はて？特に問題がある行動はしていなかった筈だが？

その事を不思議に思いながら、教官待機室の扉をノックした。

「誰だ？」

「フェン・リーダー訓練兵…です」

「ん、入れ。」

「……失礼します」

部屋に入ると、ワイズ教官を含め複数の教官達が部屋にいた。

「どうかアンタら、他の訓練兵の訓練は？」

「短答直入で言う、貴様は他の訓練兵との訓練から離れ我々が行う特別訓練に参加させる。なお、拒否権は無い。」

え？ 死亡フラグ？

「質問が…有ります」

「許可しよう」

「自分は何か…失態を犯しましたでしょうか？」

なるべく怒られないように、言われた事は全部平均よりも高めにクリアしたのですが？

何故こないじめの様な事になるんですか？嫌マジで…。

「逆だ。貴様は訓練で失態を犯した事がない…むしろ優秀な訓練兵だ。」

「でしたら…」

「だが…優秀すぎる。正直貴様の実力はとくに訓練兵のソレを逸脱している。このままでは他の訓練兵たちの士気に影響が出る…い

や既に出始めている」

あーそう言えばココ最近なんか視線感じてたのはその所為か？いきなり闇打ちに会いそうになったのもソレか…ってヤバいじゃんッ！！

ん？闇打ちされて大丈夫だったのかって？大丈夫だったよ？じゃなかったらココにいないモン。

俺母上の訓練のタマモノなのか敵意とか殺気とかが解るようになってさ？お陰で相手が仕掛けてきた時も何とか撃退できたんだ。

とりあえず襲ってきたバカはMPミリタリーポリスに引き取ってもらったけどね…ポロポロにして。

閑話休題。

「まあそう言う訳だから諦める？」

「……………イエッサー」

別に良いけどね、年齢が年齢だから友達とかなんて出来なかったし……………言つてて哀しいなコレ。

「話は以上だ。下がっていいぞ」

「ハッ！ 失礼しました。」

カツと靴が鳴るくらいの敬礼をして、俺は教官待機室を出た。

カツカツカツ……………

一人寂しく廊下を歩く音を聞きながら自重する俺、はは…ホントお笑いモンだ…。

まさか、やり過ぎて余計に目をつけられる羽目になるとはなあ。

でもさ…そうやって訓練にでも打ち込んで無いと、不安で押しつぶされそうだったからな。

「ちょっといいか？リーダー」

「…ワイズ教官」

「敬礼はいい」

「…了解」

突然声をかけられ後ろを向くと、親父さんが立っていた。

一応施設内なので敬礼は欠かさない……のが普通なんだが、このヒトはそう言うのを嫌う様で。

「とりあえず、コイツを返しておくぞ？」

「え？あ…」

思わず驚いて変な声が出ちまったい。

なんせ手渡されたのは

『マスター！お久しぶりです！』

「ヴィズッ！」

ココに来る時に、訓練兵には早いと言われ持っついていかれた、ヴィズだったのだから。

「どうして…」

「なに、どうせ貴様はココを出たら尉官として着任させられるんだ。尉官は他の訓練兵と違って自分専用のデバイスを持つ事が許可されるからな？予定を繰り上げたにすぎん」

「しかし…」

「それにだ。俺達からのワン・タワー・マンの訓練を受ける事になるだろう？普通のじゃあ実力を発揮する前に落とされる。」

そう言えばこのヒト、今は実戦を退いて教官職してるとはいえ、若いころは歩く災害とか呼ばれてた人だっけ？他の教官もなんか二つ名付きだった様な……ヤバいかも知らない。

「まあこちらの楽しみを増やしただけにすぎんから貴様は気にしなくていい。」

「……………（啞然）」

「ん　もう時間か？それじゃ俺は訓練に戻るからな？貴様の特別訓練は明日からだか……」

ワイズ教官は俺に視線を向けると、ワザとニヤリとした悪戯を企むかの様な笑みを浮かべ。

「覚悟しておくことだな？リーダー訓練兵？」

「ッ！　　サーイエツサーッ！！！！」

プレッシャーと不安を煽ってきた……教官、アナタ意外とSなんですネ？

教官は言う事は言ったという表情を浮かべると、そのまま廊下の角を曲がり見えなくなつた。

「……………（はあ〜）」

『溜息なんて幸せが逃げちゃいますよ？』

「ほっとけ……」

何だか余計めんどくさい事が起こりそうな予感がして溜息をつく俺。あーもう、優等生ですまそうと思っただけなのになあ。

夜中の鍛錬だつて、母上から言われてたのを欠かさずやってただけだし……。

あ、でも……いままで母上の訓練を基準で考えてたけど……
アレって結構常人には異常なレベルだつたり？

『今更何言ってるんですか？』

「……地の文に突っ込むな」

あはは、やっぱりそうだよなあ〜コイツはづつかりだ。

ちきしょう。

「フルボッコ？そんなの生ぬるいッ！！まずは地獄を見てこい！」

転生か？第5 / 6話

フリーダム基地 第4訓練場

『熱源接近、接敵まで20秒』

「チッ…アルアツソー展開…術式レールブラスター準備」

『了解、アルアツソーモード ！ッ 敵の反応ロストッ！』

「あわてるな…必ず痕跡がある…ソレをさがせ…」

『了解』

廃ビルの中に入ったか？イヤ以前は地下鉄の構内に隠れていたな……
しかし“アノ人”が同じ事をするとは考えられない。
下じゃ無いなら……まさかッ！？

『上空魔力弾接近ッ！自動障壁展開』

ズガガガンンッ

「くッ！…レールブラスター！フォックス2」

射撃地点と思われる所を狙い、魔法を放つが

『反応ロスト 敵未だ顕在』

「広い空間まで…後退する…策敵レベル4で起動」

『了k ッ！…デイレイバイン드의反応多数！…トラップも検知

！そんな一体どうやって?!』

「無駄口を叩くなヴィズ…なるべくトラップの少ないルートを検索」
「り、了解　　ルートをHUD上に表示します」

姿が見えない相手に翻弄される…畜生、忌々しい。

『後方警戒！障壁展開ッ！！』

ズガガガッ！！

「…ぐう！」

クソッ！敵は一人な筈なのに何でこうもいろんな方向から攻撃が来るんだよッ！！

「はあ…はあ…」

『マスター、バイタルに異常が見られ…右から魔力弾ッ！』

「またか…くッ！」

『障壁展開効率60%に低下　　これ以上は危険と判断します』

ええい…コレが実戦経験者とそうでない者の違いってヤツなのかッ！？

魔力量も技量も攻撃も防御も速さも全て優っている筈なのに！！

「姿がみえない…厄介だな…」

『魔力隠ぺいも完璧ですね。あちらが攻撃してこないと位置の特定も出来ませんし…』

「さすがは…ワイズ教官か…」

経験というのがいかに大事なのがホント良く解る…しかも容赦がない。

ヴィズの高感度センサーすら騙す隠ぺい能力といい、どうやっているのか不明な全方位からの同時攻撃といい、伊達に教官では無いっ

て事か。

『今度は左に魔力反応!』

「毎回…やられるかッ!」

俺は周りにあるトラップに注意を払いつつ、なるべくトラップが無い所を走る。

そう“無い所”を…そして

ブン

「デイレイ…バインドだと?」

『バインドブレイク開始!ブレイクまで10秒』

巧妙に隠された“罠”に捕まった。クソッ!逃げ道に罠を置くのは常識じゃないかッ!

「そこまで、貴様は“戦死”だ。リーダー訓練兵」

「……イエッサー」

首筋に充てられる小さな魔力刃、ナイフ程度の魔力刃だが、人を殺すのに大きい刃物は必要ない。

幾ら小さな魔力刃でも、それなりの出力と首周りの関節部分を狙われたら、俺のバリアアーマーも貫通する事だろう…その結果はデッドだ。

それに今まで姿が全く見えなかった教官が姿を自ら見せた時点で、俺の敗北は決定した訳だしな。

「今日の模擬戦はココまでだ。貴様はセンサーに頼り過ぎだ。もっと全体を見て流れを掴まんと死ぬぞ？ 気配の一つくらい察知できるようになれ」

「…了解」

無茶言つなよ…大体アンタ気配消してるじゃないか…どうやって察知するんだ？

まあ考えてもしようがないだろうけど…。

「何が悪かったのかをレポートにして明日までに提出しておけ、シヤワー浴びたら今度は座学だ」

「了解」

「では解散」

こうして俺の負けた模擬戦の数が二桁を超えた。ちくせう。

S i d e ジョナサン・ワイズマン

今日も教え子を扱き、模擬戦の報告書を自室でまとめる作業を行う。俺は教えるのは生き残る為の技術…そして効率の良い殺し方だ。決して褒められる仕事ではあるまい、言いかえれば人殺しを教育しているのだからな。

だが、前線にてその若い命が少しでも長く生きられる様に、扱き罵倒し慢心を砕いてやる…

そうして一人前の兵士を作り上げるのが、俺の仕事…そう思っていた。

特例として設けられた短期魔導師育成プログラム…ソレを受けるのはたった一人。

これまた特例で配属された特殊訓練兵フェン・ラーダー…若干7歳の子供だ。

……いくら特例でもコレは無いんじゃないだろうか？正直最初は上の正気を疑った。

まあもつとも、ラーダーの実力を見てソレは無くなったがな。

はつきり言えば、異常…この言葉が似合う…いやバケモノの方が正確か。

俺が思っている事では無いが、彼の同期の訓練兵や教官達の一部がそう呼んでいたの聞いた。

もちろんそんな輩にはお灸を据えておいたがな…蔭口はみつともない。

だが一方で、彼らがそう口にするのも解ると言つのが本音だ。

戦い続けて30年前、線を退いて10年、かれこれ40年も軍に居た俺だが、あんな教え子は初めてだ。

確かに7歳児に軍の魔導師訓練をさせる酔狂な輩はそうはいないだろうが…まあソレはともかくとしてだ…。

俺達USN軍の魔導師は通常の魔導師とは訓練の密度、質、量、全てが通常のソレを上回る。

当然、訓練について来れず、脱落するモノ達も存在する…

だがラーダーは脱落どころか、他の訓練兵を大きく引き離す成績を訓練で修めている。

兎に角成長が早いのだリーダーは。

初めてやる訓練ですらソツなくこなし、その次からは必ず今までの成績を塗り替える。

他の訓練兵が寝静まった夜中に自主練習をいれ、更なる高みを目指す。

だが 正直に言おう……まだ早すぎる、早すぎる筈なんだ。

魔導師の子供は早熟であると言える。

親がそうであるし、マルチタスクなどの並列処理を覚えた子供は、様々な思考を同時に処理できるようになる為、心の成長が早い。

だがそうだとしても、リーダーのそれは幾らなんでも早い……だから異常なのだ。

まるで大人が子供の皮をかぶっているかの様な錯覚すら覚える。

そして何より、俺達を困惑させるのは、どんなに苦しい訓練ですら顔色一つ。

表情をまったく崩さないと言う事だ。

何か精神的なショックがきっかけで、無表情になる子供は職業柄見たことがある。

しかしリーダーのソレは、そう言ったのでは無く……。

自ら望んでそう言ったと言う、所謂兵士のソレに近い。

何故彼はそこまで自分をいじめるのか？

正直俺には理解が出

来ない。

まるで怯えるかの様に訓練に打ち込む様は、悲しみすらおぼえるくらいだ。

だが、残念なことにこれらの事を俺達教官職に就く者は、上へと報告しなければならぬ。

そしてその所為で……彼は特例の短期魔導師育成プログラムと称した、実験に放り込まれることとなった。

現在、前線は膠着状態を維持している。

世論は戦争賛成派が大多数ではあるものの、時間が長引けば当然ながら、

敗戦ムードが高まる事による反対派の運動が活発になる。

別にそれは良い、こちらとしても大事な教え子たちが戦争で散るのは勘弁してほしいのだから……。

だが問題はだ、それに応じた過激派がテロを行ったりした時だ。

上層部としては短期決戦が望ましい、なので使える戦力はドンドン前線へと送り込みたいのが、心情なのだろう。

勿論、人の道を踏み外したとしても……だ。

リーダーが唯一このプログラムを受けているのはそう言う訳だ。

このプログラムは正直、彼の為に造られた訓練なのだ。

魔法の才能さえあれば、どんな年齢の子供でも戦場において活躍が出来ると言つ事を証明する……。

それがこのプログラムの裏側である。

今までは最低でも15歳を超えていない子供は前線には送らず、後

方勤務が殆どであった。

だが、恐らくリーダーはいきなり前線へと配属される事が、すでに決定している。

たとえ死んだとしても、一般にはすぐにはバレない訳だし戦争のドサクサという事で処理できる。

逆に功績をあげれば、それは軍の功績となる訳だ……おまけとして少年魔導師部隊というモノが作られるのだが…。

人の死を数値で見えなくなった上層部連中には、そういった事は関係ないのだろう。

彼は優秀だ。

経験さえ積みめば、すぐに俺を追い越せる程の逸材だ。

こんな大人の事情で起こったくだらない戦争で散って良い命ではない。

だからこそ、俺は今まで経験した全ての技術を、リーダーに教え込む。

血反吐を吐こうが、泣き言を言おうがやらせる…と言っても普通に付いてきてるのが…まあいい。

とにかくだ、俺に出来ることは、あいつが死なない様に、教えられる全てを教えると言う事に他ならない。

例えその結果、あいつの心に大きな傷を作る事になろうとも…死なせはせん。

俺が出来る事は殺し方を教える事……ただそれだけなのだから。

Sideフェン

死ぬ…マジで死ぬ…なんなんじゃこの短期魔導師育成プログラムってちゆうのは？

実戦形式の模擬戦に次ぐ模擬戦、ワイズ教官以外の教官は倒したけど、それでもきついぞコン畜生。

座学に居たっては………戦略ってなんですか？美味しいんですか？

俺7歳だぜ？お前ら人の皮を被った鬼かいな？幾らなんでも苛めすぎやと思うで？

それでも自主トレを欠かさない俺は…もう手遅れなのかな？まあいいけど…。

しかし今日の模擬戦もワイズ教官には勝てなかったなあ。

“見えなければ、どうという事はない”を実戦で見せてくれたもんなあ…え？字が違う？いや違わないよ？

なんせ姿が見えないタネは、ミラージュハイドとかいう光学迷彩魔法。

それと自身の魔力操作の上手さだもんなあ。

ミラージュハイドで姿隠して、そこら辺じゅうに設置型術式を同じくミラージュハイドで隠して回るっていう単純なもんだし。

まあイメージできない人は、そこら辺じゅうに見えない地雷が設置された様なもんだと思ってくれ。

しかし、タネさえ解れば単純なもんだけど、魔道師からしたら相当厄介な人だよ。

相当の熟練者か魔力探知に長けた魔導師じゃないと、見破れないレベルの隠匿魔法だぜ？
俺も段々感覚を掴んで、徐々に察知出来る様になったけど、初見の奴ならムリだ。

というか、設置式術式+隠匿魔法はヤバいコンボだろ…見ただけじゃ探知出来ねえし。
辺りに魔力素子が充満していたら、幾ら魔力探知に長けた魔導師でも、発見しづらいしな。
ようやく発見したかと思ったら、気が付いたらあの世だなんて笑えネエ…マジで。

俺は夕飯がわりのレーションをほう張りながら、そんな事が出来る教官の事思い溜息をついた。
で、夜の訓練の為に次の教官の所へと足を運んだ。
ああ、さっきのとは違う意味で疲れる訓練か…鬱だぜ。

……
……
……

「お、来ましたねフェン君」
「はい…ソフィア教官」
「ふふ〜ん まえも言いましたが教官は要りませんよ？」
「いえ…一応規則ですから…」

フレンドリーな態度で接してくる。教官団の中でも珍しく、唯一の女性の教官である彼女。

ニコニコと笑みを絶やさない彼女は……正直苦手である。

「では、いつも通りまずは運動をしましょうか？」

「はい」

そう言ってゴム製のナイフを2本投げ渡してくる……とは言うモノの実質山刀なみの大きさだが……。

そう、彼女は珍しく近接攻撃が主体の魔導師なのだ。

ナイフを受け取った瞬間、途端に構えを取る。この運動に合図などは無く、いきなり始まる為だ。

身体強化魔法で身体を強化し、間合いを計って、懐に入り込む為に距離を詰める。

というか身体強化以外使ってはいけないのが暗黙のルールだ。

俺は横一線にナイフを振るう、だがソフィア教官が一步下がった事で、そのナイフは相手に触れることなく虚しく空を切った。

俺は攻撃の手を緩めず、返し刃でもう一度薙ぎ払うかのように斬る……当るかと思った瞬間、彼女が視界から消えた。

「!?」

「下です」

下を見ればしゃがみこんだ彼女が居た。そして俺の首にはゴム製のナイフ……ちっ！死亡だな。

「大ぶりはNGです」

シュッ！

無駄のない動作で繰り出されたナイフは、まるで生き物のように、俺の胴体を切りつける。

反撃のため袈裟切りを返したが、あっさりと避けられさっき斬られた場所と同じところを切りつけられた。

「アツッ……」

「ほら無駄が多いですよ？」

ゴムがこすれて熱くなりつい声を出してしまう。

今度は太ももにナイフが当てられた、コレも動けなくなると言う意味で1死亡だ。

「例え必殺にならなくても……」

ススッ

「浅からろうが何度も斬りつければいいのです」

テンションが上がってきたのか、手首足首同時に斬られた……つか見えねえよ。

「特に手足は動きを制限させるのに有効です。」

確かに人間ってのは手足怪我すると、かなり動きが制限されるモンな。

そんな事を考えつつ、2本のナイフで連続して斬りかかる。

「そう、軽くても当れば良い……当たらない刃物は怖く無い」

「ッ」

そう言いつつも未だに一太刀も当たらない教官に、俺は左のナイフを投げつけた。

「はずれ、今のタイミングは悪くはないけど必殺じゃない…必殺と
いうのは…」

ソフィア教官はいきなり体制を崩して、視界から掻き消えるかの様
に動く。

重心が一気に下がった事で、腰の入った一撃が

「地面をはうように…」

ボツ！

「入れるのです」

俺の鳩尾よりかちよつとした…胃袋か肝臓辺りに当たった。

イテエ…。

「ケホツ…」

「予想だにしない動きで相手を止めるのも、ナイフの奥義の一つで
す」

そういうと彼女はどこか八虫類を思わせる笑みを浮かべる……ぐう、
やっぱり苦手だ。

「はい、じゃあいつものように死んでしまったフェン君は、PXで
私にデザートを奢る事。良いですね？」

「…アイマム」

はあ、コレだモンなあ…物凄く強いけど、どこかカラつとした態度。
まあコレが意外と人気があるそう…奢らされる俺はたまったモノ
ではないが…。

絶対いつか俺が勝って奢らせてやるモンなッ！！

永遠にムリ

な気がしてきた。

「さて、今日も動きの確認をした後、組み手やりますよ。さっきみたいに手加減はしませんからね」

「了解」

というか、さっきですら手加減されてるんだもんなあ。

ソフィア教官の魔導師資質…彼女自体の総合魔導師ランクはC+…正直一般兵よりも低い。

使える魔法も高密度だけど小さな魔力刃が造れる程度……だけど彼女は室内戦闘においては無敵を誇る。

少ない魔力で“どうすれば相手を制する事が出来るのか”を極めた完成系がこのヒトであると言ってもいい。

魔法第一主義が蔓延しているこの世界で、一時期少佐にまで上り詰めた実力を持っているのだ。

「…か勝てねえよ…ホント容赦しないし…姉御肌だし。」

まあココまで来るのに、血反吐を吐くと言つのも生易しく見える程の訓練と経験を積んでいるのだ。

「…。幾らチート性能を持つ俺でも、このヒトに勝つには時間が掛かる…。」

「…というか、もしかしたら近接戦闘では勝てないかもしれない。」

「…つかUSN軍内でも、近接戦闘のみで一对一なら、彼女に勝てる人間はいないと思う。」

「…そもそもどうして俺が彼女から近接戦闘を教わっているのか？」

ソレは俺も魔力刃を使った近接戦闘の魔法を持っていた所為だ。

ココに来る直前に造って入れた術式なんだけど、ソレをワイズ教官に見られて……。

気が付いたら彼女との近接戦闘訓練がプログラムに組み込まれてたって訳。

まあ近接戦闘用魔法持っていても、肝心の使い手が扱えませんかじゃ話にならないモンなあ。

魔力刃とはいえ刃物は刃物、こうして昔ながらの近接戦闘訓練や組み手の方が、身体がなじみやすいのだ。

なんか着々と最強魔導戦士育成計画が進んでいる様な気がするけど…… 気にしたら負けだよな

まあ心技体全てが強くなれば戦場で死ぬ確率は減る事だろうから反対はしないけどね。

とりあえず。

「死なないよう……頑張らな……」

『マスター？』

「ん、何でも……無い」

何としても生き残らなければ……うん。

「Amenってか？」

転生か？第5 / 7話

優秀すぎたがために、特別にやらされる羽目となった短期魔導師育成プログラム。

命令を受け、このプログラムを開始して2カ月が経過した。

最初の数日は鍛えた身体があっただとはいえ、訓練が終わるとぶっ倒れていたが、それにも慣れた。

人間は慣れの生き物だと言うけど……ココまで行くともう常識超えてるなあと思いき知らされる。

今ではこの基地における二凶……ワイズ教官とソフィア教官を相手に出来る程になっていた。

とは言うものの、実質相手に“できる”ってだけで必ずしも“勝てる”訳じゃない。

現在、短期魔導師育成プログラムにおける、俺の模擬戦の勝率は6割がいいところだ。

他の教官達もそれぞれ見習うべきところがあるのだが、この二人が断トツでヤバイ。

何せこの二人が組んだ時など、俺の勝率は一気に2割：いや1割以下にまで低下するくらいだ。

ソフィア教官は近接戦のプロ、そしてワイズ教官は全体を見て指揮も出来るオールラウンダー。

前者がフロント、後者がバックの陣形を取るのだが、それがすごくぶる凶悪だった。

最初の頃の模擬戦では、まずソフィア教官が、俺の動きを封じるために接近してこようとすする。

勿論、彼女の近接戦の強さは知っている為、俺は近づかせまいと弾幕を張ろうとした。

これが1対1ならば、力押しのもので勝てる…だが、バックのワイズ教官がそれをさせない。

かなりの制御力をもったシューターで、オールレンジアタックを仕掛けてくるのだ。

当然こつちもシールドを張るんだけど、魔力弾がシールドに触れた瞬間閃光が走り視界を遮った。

どうやら、ソフィアに閃光弾のようになる様な術式が組まれていたらしい。

それ自体に威力は無く、只視界を奪うだけなのだが、所見では見切れない為身体が硬直してしまう。

そしてその隙に、ソフィア教官が懐に入り込まれてしまうパターンが多い。

まあ簡単に言えば、俺は降参せざるを得ない状況に追い込まれるって訳。

しかもだ、この二人前衛と後衛で役割が決まっている様に見える、

実は決まっていないのだ。

時折前衛後衛を入れ替えては、こちらを攪乱し罠にはめ、こちらの自信を完膚無きまでに叩き潰す。

もう本当にどんだけえ〜ってくらい強い。

お互いが役割を持つている事を理解したうえで、戦場の状況に応じて臨機応変に対応する。

おまけにどちらも『脅威は実力を持って排除せよ』『見敵必殺』を地で行く人達なのだ。

それなのに冷静：お陰で俺はとことん容赦もなく、模擬戦の中で叩き潰されたよ。

座学において戦術や戦略についても習ってはいた…。

だがソレを読んで覚えるのと、身を持って体感するのでは訳が違う。

この二人との模擬戦は、俺にいか固定概念を覆す事、戦術戦略が大事なのかを教えてくれた。

基本母上の戦法は“考えるよりも先に力で叩き潰せ”だったから、まだ慣れない所もあるけどね。

さて

『多重シールド展開』
「いや…回避を優先」
『了解』

短かったけど辛かった、短期魔導師育成プログラムも…もうすぐ終わる。
なぜならば

『 1ロスト、策敵中』
「 1の殲滅を優先する…」
『了解、レールブラスター・フルオートファイア』

今日が最後の訓練、卒業審査なのだからッ！！

【30分前】

「最終総合訓練…ですか？」
「ああ、そのとおりだ」
「フェン君は優秀でしたからね。予定よりも早くプログラムを消化

しちゃったのです」

「という訳で、予定を繰り上げて、今日は貴様の卒業審査を兼ねた最終総合訓練をすることとなった！！」

ドーンってな感じで俺にそう告げるワイズ教官とソフィア教官。というか、すでにその前の模擬戦でぼろぼろなんですけど俺？

「ソレはハンデって奴です。だって2人合わせても、今のフェン君の魔力量には届かないですから」

「ま、そう言う事だ。何普段通り戦い、我々を下せばいい。実に簡単な事だろう？」

「そう…ですね」

いやまあ確かにそうだけど…。

「ちなみに負けたら、超濃縮還元訓練“もう…川を渡りたい…編”を更に2カ月追加です」

「おまけに卒業は無し、その分戦場に出られなくなる上、下手すると実験部隊行きだ」

「あ、ちなみに実験部隊のモルモットにされるって事だからね？当然拒否権は無いよ？」

「…へあ…」

……………俺に死ねと？鬼かアンタら？

「ちなみに、ルールも簡単だ。相手を気絶させるか降参を口に言わせればいい」

「時間制限もないですよ？自分の力を精いっぱい発揮すればいいですから」

でも2対1って酷く無いすか？

そんな俺の眩きはお構いなしに2人は少し距離を取る。

「じゃあまあ……」

「さっそく……」

「へ？」

えと、何故にデバイスを起動してるんすか……？

「「最終総合訓練……開始！！」」

「ヴィズ！ローラーダッシュ！！」

そして俺はローラーダッシュで、一気にこの二人から距離を取った……というか逃げた。

【更に40分経過】

『あ、反応がありました』

「無視しろ……ヴィスはセンサーを全て…… 1のトラップ発見に向けるんだ」

『了解』

俺は訓練開始と同時に、目の前の2人には目もくれず、ひたすら逃げ隠れると言う戦法を取った。

万全の状態なら、多重シールドを展開し、鉄壁の防御を持ってして、弾幕を張り続けるのだが、今回はそうもいかない。

俺は事前にやった模擬戦の所為で、まだ魔力が回復しきっていないか

ったのだ。

なのでこうして逃げ回る事で、俺のレアスキル“リサイクル”により、魔力の回復を図った。
でもソレは

『ッ！！発見されました！反応は 1』

「ちい…しつこい…！」

「ほらほら逃げなよミーシャ（こぐま）ちゃん じゃないと大怪我しちゃうよ？」

とても甘い考えであった。

そう、逃げても逃げても、 1（ワイズ教官）と 1（ソフィア教官）は追いかけてくる。

なので逃げる為に無駄に魔法を使わされる所為で、回復する魔力量より消費が上回ってしまうのだ。

「ちい！M82A1起動！」

『起動します』

俺は迫ってくる 1に、圧縮魔力の弾丸を浴びせるが、そんなものどこ吹く風に避けられてしまう。

まるで柳：風に吹かれて、そのまま揺れる柳の枝の様だ。

「ん〜フッフ、ソレでおわりですかぁ？」

「く…：ワイズ…！」

『多重シールド展開…！』

ガキキンッ…！！

しかも、どうにも戦闘に興奮してしまっただらしい…。

彼女から放たれる、普段の彼女からは想像できない狂った覇気が俺の動きを制限する。

『バースト!!!』

「　　ッ!!!」

ドド　　ンッ!!!

俺はバリアバーストで　1を吹き飛ばし、その場から逃れる。アレくらいでは倒せない…あの教官なら絶対に

「ああ、ビックリしました…いいですねえ　」

そう言って起き上がるからだ。

とにかく俺は本能で、この場から離れたい一心だった。

　1から放たれる狂った殺気…コレが戦場の殺気なんだと思う。数か月前の俺なら、精神が耐えきれず壊れていたかも知れない程、強烈だ。

「　　フォックス2」

『レールブラスター・フルオートファイア』

逃げながらも後ろ向きに攻撃するモノの、　1はすぐさま近くのビルの中に逃げ込んでしまう。

もうすでにこんな感じの攻防が3〜4度近く続いてたりする。

流石に　1との同時攻撃には焦った。

未だ飛べないけど跳ぶ事は出来たので、それを使って逃げたくらいだ。

中々倒す事が出来ないのいい加減、ストレスも強くなる。

「ちくしょう」

思わず出たそのつぶやきは、徐々に暗くなってきた訓練場に解けて消えた。

【そして2時間経過】

流石是最凶の2人…前線を退いていたとしても、このくらいなら戦闘継続可能か…。
普通の魔導師だったらすでに根を上げている筈だもんな。

完全に当りは真っ暗になり、視覚での警戒は困難になってくる。
故に恐らくは魔力探知などを使って来るハズだ。

「サーチャーに反応あり…2人ともいます。向うはまだ気付いていません」

「そのまま監視を続行…動きを見せたら知らせて…」

俺は訓練場にいくつもある廃ビルの中の一室に隠れていた。

幾度となく痛手を貰ったワイズ教官の得意技であるミラージュハイ
ド…

更に魔力隠蔽も用いて探索されないようにしながら、反撃の機会を
うかがっていた。

俺とて今まで伊達に殺されかけ…訓練で気絶してたわけじゃない。
相手の得意な術式を盗んだりして、自身を強化したりした。

まあ最もワイズ教官はわざとコピーするように仕向けてた節があったけどね。

自分の弟子みたいに思われてるんだらうなあ俺。

『 1、 1、移動開始、どうやら気付かれたようです』

「…離脱する。ビルのマップをHUD上に表示」

兎に角この場から離れないと、2人一緒に来たって事はそろそろ本気で落すつもりに違いない。

コリヤ気合を入れないとまずいぜ…全く負けても地獄だし勝っても最前線行きの地獄か…。
本当着いてねえ…鬱だ。

マップに表示されるルートをたどり、階段を上がりつつそんな風に思った。

『 どうやらビルの中に侵入されたようです。こちらに向かって来ます』

「逃走ルートは…?」

『 この廃ビルは第六世代型の高層ビルです。窓が無い為、出入り口は下か屋上のどちらかしかありません』

なら仕方ない…上に逃げますか。

どこぞの白い悪魔みたいに砲撃で穴開けられたら楽だらうけど…
そんな事したらビルが倒壊しちまうからな!!

身体強化を行いつつ、何とか屋上にまで来れたので、屋上へ出るドアを見つげ外に出る。

俺は飛行魔法を応用した跳躍で、隣のビルにでも乗り移ろうとした。

瞬間

ゾク…

「！！！？？」

首筋がチクリとした…コレは殺気か？！

そう思ったが早いか、とつさに横に飛び去ると俺がいた所にスフィアが命中し霧散する。

あぶねえ…避けてなかったら間違いなく首に当って気絶してたぞ。

「相変わらず…隠れるのが上手ですね…ワイズ教官」

「……ふっ、昔からかくれんぼには自信があつたからな」

そう言つて、何も無いところから滲み出るかの様にその場に現れるワイズ教官。

下から上がってきたソフィア教官も、追い付いたようだ。

「まさか…こんな古典的な方法で来るとは…」

「古典的だろうがなんだろうが、使えるモノは使うのは当たり前だろうが？」

「確かに…」

「ねえおしゃべりも良いんですけど…そろそろ始めませんか？」

「そうだな。展開！」

その途端辺り50mくらいが結界に包まれた！これは…強装結界！？

「さあコレでもう逃げられまい…」

「いい加減追いかけるのも空きました。さあ戦いましょう？」

「……わかりました」

ふう、俺こつ見えてもまだ年齢一桁なんだけどなあ…。
何が悲しゆうて、こんな戦争してる世界に来なアカンのや…全く。
とりあえずヴィズを、アルアツソーモードからキーンセイバーに切り替える。

対峙している2人も俺が構えたのを見て、自分のデバイスを構えた

「いれ…」

「尋常に…」

「勝負…！」

こつして2対1の不利な戦いが始まった。

「切り刻みます！クロックダガー…！」

『Yes / Boss Deep knife・full power…！』

ソフィアさんの持つ、ナイフの形をしたストレージデバイスから男性のように低い声が聞こえた。

そして、高濃度に圧縮された魔力刃が展開される。

リーチこそ短いのだが、その圧縮された魔力刃は、プロテクション程度なら簡単に斬り裂いてしまえる。

彼女が考えだし、作ったオリジナルの魔法であり、デバイスのソースをかなり食っている。

だがそのお陰で、例えばAAランクのシールドでも斬る事が出来るのだから、どれだけ凄いのかわかるだろう。

「キーンセイバー…」
『キーンセイバー』

俺も負けじと双剣になったヴィズから魔力刃を展開して構える。同時に身体に魔力を巡らし、身体機能の強化を図る。

なんせまだ身体はガキだからな。流石に強化無しだと大人には敵わんのですよ。

そして、コレで何度目かは解らない、ソフィア教官との剣劇が始まる。

素早く着きだされた左手の突きを、右手のヴィズの剣の腹で受けとめ、カウンターを返す。

だが、それが掠める事は無く、彼女からの右の拳が迫ってくるのが解る。

本当なら避けるのだが、別方向からヴィズ教官の放った魔法が迫って来ているのでココは

「多重プロテクション」
『多重プロテクション』

全て受けとめる事にした。

「ふふ、うれしいです。今までならココでキーンしていたのに」

「成長つていうのは早いもんだな」

「お二人に…扱われましたから…ね」

ギリギリと軋む障壁を維持しながら、マルチタスクによる会話。

これも幾度となく訓練してきた光景だ。

「お二人って…他にも教官はいただろう？」

「戦闘方面では…お二人に敵う教官は…いませんでしたよ？」

「うれしいことを言ってくれますねフェン君は。まあ事実ですが」

そういつて今度は距離をとり、突進するかの如く迫る。

俺はバインドをしようとするが、先にワイズ教官に使われそうになったので、とりあえず逃げた。

「おいおい、事実って…まあそうだな」

「実質前線を退いた方ばかりでしたからね…仕方ないかと…」

「いや、それでも一般の魔導師以上の力はあるんだ。ソレを下せるフェンの方が異常だ」

「ですね」

迫るフォトンバレットをハリアーマーBAの防御力に任せてワザと受ける。

ちょっと驚いた隙に、こちらもマルチタスクで構築したフォトンバレットを放った。

……………ソフィア教官の方に。

「うわっ！あぶないですね！まあ避けますが」

「ほう、そっちを先に倒そうとするか？じゃ俺はチェインバインドを…」

「させませんって…アルアツソーモード」

『レールブラスター・フルオートファイア！！』

瞬時に変形したヴィズの銃口から、マズルフラッシュが出て辺りを照らす。

ワイズ教官はシールドを幾重にも重ね、更に角度を受ける事でソレらをしのいだ。

ちなみにソフィア教官は、ワイズ教官の後ろに退避済みだったりす

る。

「ぐお、相変わらず凄い威力だ…動けやしない」

「まだまだ…ですッ！」

『M82A1 mode release!』

空いている左手に兵装デバイスM82A1が展開、内部で魔力が充填圧縮されていく…そして。

「フオツクス3」

『炸裂弾発射!!!』

「ドウオアアああ!!!」

五発の砲声…至近距離での爆発の暴風が、ワイズ教官を貫いた。

そしてその爆煙を切り裂いて、鋭く俺に斬りつけようとしているソフィア教官。

実はこのヒト、さっきワイズ教官のジャケット掴んで、砲撃の盾にしてみました。

その所為でワイズ教官逃げられずボロボロに…なんてひどい人なんだろうか。

自分が避けられないからって他人を盾にするなんて…コレも戦場の習いか？（違います）

「はあああ!!!」

「くう…!!」

振られた斬撃をキンセイバーで受けとめる。

そのままでは連撃が来るのが解っているので、身体強化をMaximumにして相手をはじいた!!

弾き飛ばされた勢いで空中にてたたらを踏むソフィア教官。

だが彼女は着地すると、同時に突進…そのまま俺を斬り捨てた

「チエツク」

「なッ!？」

かに見えた。だが思惑は外れ、彼女は俺をすり抜けてしまう。

そして彼女の後ろに立った俺が、首にキーンセイバーを当てていた。

「降参…してください」

「……………はふう、仕方ないですね」

彼女は手からデバイスを放し、両手を頭にやった。

俺は彼女にバインドをかけておく、一応念の為。

「でもまさか…幻影だったなんて、驚きました」

「未熟ですがね…」

何種明かしをすれば簡単なモノだ。

斬られる直前に幻影魔法で造り出した自分と入れ替えたのだから。

「おまけにワイズ教官のミラージュハイドと魔力隠蔽の複合技まで使えるとは凄いですねフェン君」

「苦労させられましたからね…このコンボに…で、降参ですか？」

「あら？私はもうフェン君に捕らわれているのですが？」

いやまあそんなんですがね？

「あなたの口から…降参とは聞いていない…」

「……………ふふ、良く気が付きましたね？解りました“降参”です
「ありがとうございます」

こうして俺はバインドを解いた。

何せ勝利条件は気絶させるか、相手が降参を口にしないとダメなん
ですからね。

彼女はバインドで縛られた個所をさすりながら、未だ気絶していた
ワイズ教官の元に近寄った。

「さてと…いい加減起きてくださいワイズ教官」

「……………」 気絶中

「……………てい」

ドゴンッ！！

「ぐアッ！！ ……ん？なんだ？どうなってた？ぐう……なんか色
んなところが痛い…特に顔」

うわぁヒデエよソフィア教官…思いつきり顔蹴ってた。

「しっかりしてください。もう最終総合訓練は終わりましたよ？」

「おおっ、そうでしたか？という事は…」

「ええ、フェン君に捕まってしまい降参と口にしてしまいました」

ははは、と笑う教官達…その笑みにどれだけの感情が含まれている
のだろうか。

とりあえず、両教官がシャンとして立ったので、俺もそれに習う。

「フェン・リーダー訓練兵」

「ハッ！」

軍人が出す独特の気に当てられ、俺も敬礼で返す。

「最終総合訓練の結果を伝える……………おめでとう、合格だ」

「ハッ！ありがとうございます」

「一九　の現時刻を持ってして、貴様は短期魔導師育成プログラムを終了した」

「なので、今この時刻を持ってして、あなたは中尉となりました」

「故に今後、貴官は我々の上官になります。今までの訓練ご苦労様でした」

ザッと一系乱れぬ動作で敬礼をするふたり…。

「ありがとうございます」

俺もそれに答え敬礼で返した。

「……………と、まあ表向きはこれでいいとしてだね」

「一応今からフェン君は上官になるんだけど、書類上は明日からなんです」

「なので、今の内に色々とお話して、媚でも売ろうかと思っっています！」

そう言っつて悪戯っ子の様な顔のお二人さん…

おいおい、せつかくシリアスだったのに、ココで落すなよ…。

まあ、堅苦しいのは苦手だから助かったし嫌な気分でも無いけどね。2人がワザとこうやって、緊張とかほぐしてくれて、しかも労ってくれているのが解るからだ

「ワイズ教官…その心は？」

「優秀な教え子に、年金を優遇して貰う事があります！！なんてな？」

「私はそんなことしませんよ？でもその代わり今度ケーキでも奢って下さいです」

「ソフィア教官…俺…そんなに使えるお金は…無いのですが？」

俺尉官になったとしても未成年だからなあ…。

この世界なら最低8歳からなら、通帳自由に出来るけど、俺まだ一年程たん無いしね。

「大丈夫！将来奢ってくればいいのです！食べ放題で！」

「一応言っておくが、コイツの食べっぷりは半端無いぞ？」

「はは…知ってます…PXで良く奢られましたから」

この後、一時間は談笑し、今まで話せなかった事を話した。

とても楽しい時間だった…何せ苦しかったからな訓練。

そして、夜も遅かった為、それぞれの宿舎へと足を向けたのであった。

こうして、俺はUSN軍の魔法部隊の兵士となった。

そして、最終総合訓練が終了してから三日後に、俺は前線近くの基地へと配属される事となった。

教官達は次の日から皆俺に敬語で話すようになった。

階級が俺の方が上なのだから、コレは仕方ない…けどちょっとさみしい。

だが、ココで培った技術は必ず生き残る為に使う事が出来るだろう。
故に、俺はこの先でもずっと、この教官達…特にソフィア教官と
おやっさん事ワイズ教官には頭が上がらないだろう。

今まで

本当にありがとうございました!!!

「この香りこそ戦場よーってか？」

転生か？第6話

S i d e ジェニス少尉

セスル基地、司令部

第7機動魔導師部隊で、万年少尉で副官をしている俺こと、ジェニス・クローバーはその日、司令部に呼び出された。良く乱闘騒ぎを起こすウチの部隊のしりぬぐいで、呼ばれることは多々ある。

だが今回は別に何かしでかした訳じゃあない。

以前の部隊長様が怪我で退役した（乱闘に巻き込まれ）ため、ウチの部隊は肥え溜めになっていたんだが、今回、本国から新しい隊長さまが来られるからだ。

「喜べ、ジェニス少尉…貴様のところの隊長が決まった。」

司令官室に入った途端、ウチの古だぬきな司令官殿は皮肉たっぷりな視線と共に、
そう言つて、やや投げやりに俺に書類を投げてよこしてきた。
普段の狸ぶりが感じられない司令官の様子に、首をかしげながらもその書類に目を通したんだが…。

「これは何かの冗談ですか？」

俺は書類を見て啞然とした。

俺の反応を予測していたのか、全く表情を変えず（と言つても眉間を押さえているが）

司令官は冷酷な言葉を発してくれた。

「残念ながら現実だ少尉：来週着任してくる。

少なくとも士官学校出のボンボンでは無い事は確かだ。」

「くツ！上の連中は何考えてんだ！」

書類に写されている人物：それは7〜8歳くらいの子供が写っていた。
た。

「司令、命令の撤回は…」

「無理だな。すでに撤回要求を送ったのだが、返ってきたのは撤回要求の撤回状だったよ」

司令官も苦笑する…この常に冷静沈着で、歴戦の古だぬきがこつも表情を変えるなんて…。

この命令書が、司令官が柄にもなく茶目っ気を出して作ったジョー

クではない事は理解した。

「ちなみにこれは決定事項だ。反論は許されん…くれぐれも壊すなよ？」

「ちっ…了解」

まだ、熊が上官になったって方が可愛げがあるぜ。

「まっ…あいつの話がホントなら、案外拾いモノかも知れんがな。」

司令が最後に何か言っていたみたいだが聞き取れなかった。

しかし、ガキが隊長だなんて此方の精神衛生上はかなり悪い…。

とりあえず、壊れなくらいにビビらせてとっとと配置換えを希望するようにしむけるか…うん。

戦場に行って壊れるよりかは幾分かマシだろう

………

………

………

1 週間経過

先週と同じく司令官室に呼び出された俺は、依然と同じく司令の目の前に立っていた。

そして今日…新たな隊長が着任されるらしい…しかも7歳のガキが

ブルルルル　　ガチャ
「私だ」

そんなこと考えてたら司令官室の電話が鳴った。
司令官が応答し電話を切るといささか憐れんだ視線を此方を向けてくる。

「少尉、今お前たちの上官が到着した。ここに来るそうだから部隊のところまではお前が案内してやれ。」

おいおい…もう来たのかよ…俺に子供のお守りをさせる気かよ…勘弁してくれ…。

しばらくすると、後の戸が開いた。軽い足音、それが俺の横で停止する。

「…フェン・ラーダー中尉…着任しました。」

こいつの顔を見て俺は驚いた…感情が見えない…一体どんな経験をすればこんな顔ができるんだ？

「うむ、確認した。ようこそ中尉…死臭漂う戦場へ、そこにいるジエニス少尉が先任だ。」

部隊のところまで彼に案内してもらえ、以上だ。」
「…了解しました。」

感情の無い声で答えた中尉はこっちの方を向いた。

「では、此方に…」

そのことにつなぎ、中尉は俺について部屋をでた。

廊下を歩く間、中尉は一言も言葉を発することも無く俺のあとを歩いてきた。

これから一体どうなるんだろうか？

S i d e F u e n

ははは超〜こえ〜！俺、副官のジェニスさんに案内された隊舎に向かったんだけどさ？

着任早々、いきなり紹介をやらされたと思ったら筋骨隆々なおっさんが反発されちまった。

こええ〜！なにあの腕？なに食ったらあんな象の首もへし折れます的な腕になんの？

流石に上官に手はださねえみたいだが舐められてんなア〜俺。

まア〜こんなガキに指揮されるなんて癪だよな……俺ならゴメンだ。

でもなあ、俺だって伊達に（転生して）生きてねえ〜ぜ！

中身は大人だから相手をイビルやり方だってめっちゃくちゃ詳しいぜ！

さあアノ訓練の時の言葉（暴言）を思い出せ…ワイズ教官…俺に…力をツ…！！

願いが聞き届けられたのか思いのほか上手くいった。

慣熟訓練を終え、この隊の性格も把握した…後は始めての任務だ。
まあ初日にいきなり敵さんに遭遇するなんていうのは、
そうそう起こらないとおもってから気楽にいくべ。

……一応保険として、毎回敵さんの偵察部隊が来るルートは外し
ておくかな。
ぜってえ死にたくないし。

……

……

……

1週間後、エリアB・廃棄都市

そうそう敵なんて出無い
ありました。

そう思っていた時期が、僕にも

『(ヤード軍曹の分隊が12km先にアンノウン反応を確認)』
『(衛星リンク照会……………出た、恐らく敵の偵察部隊です。どう
しましょうか…隊長?)』
「……………殲滅命令が来たよ。さっそく仕事だお前ら…さっさと倒す
ぞ)」

つか、着任して1週間しか経って無いのに、いきなりの実戦かよ。
来る時に見た奴さん達の偵察ルートからは、大きく外れた地区なの
に…。
なんでまた俺が来た時に限って、こんなとこに来るかな？

「(敵の規模は?)」
『(偵察部隊ですから、5〜6人程度の筈です。ヤード軍曹の報告
では7人とやや多めですが…)』
「(ヤードの分隊はそのまま監視を続行、他の分隊も展開急げ)」
『『『(了解)』』』』

ふう、一応指示は出せたな…一応ちゃんとした軍人さん達だ。
上官の命令にはちゃんと従ってくれる。

内心で何を思っているのかは解らないが……………止めよう無駄
な思考は命取りになる。

『（敵、警戒ライン突破、こちらには気付いてはいません）』
「（了解、他の連中の準備が整うまで待機せよ）」

ちなみに今回の哨戒任務で俺は隊を3つに分けて、哨戒を行っていた。

1番目は俺と副官であるジェニス少尉の居るA分隊だ。

2番目は先ほど俺をバカにしていたケイン曹長率いるB分隊。

そして、最後についさつき敵の偵察部隊を見つけてくれたのが、ヤード軍曹率いるC分隊って訳だ。

エリヤBはなかなか広がったから、隊を分けて哨戒任務にあたってたんだが……

まさかワザと警戒ルートからはずれた事が裏目に出るなんて……鬱だ。

『（配置完了）』

「（ん…了解…封時結界・強装結界同時展開…敵を閉じ込めろ）」

『（了解）』

3か所を基点とした強大・広大な結界が、敵の部隊を包み込む。退路を塞ぐと同時に、味方への通信を妨害するための措置だ。

このクラスの結界を解除する為には、SSランクの砲撃でも無いと突破は難しい。

……レアスキル持ちならば話は別だけどね。

「（結界魔導師は結界を維持、残りの連中は結界内に入り敵部隊を殲滅するぞ！）」

『『『（了解ッ！）』』』

たった7人の偵察部隊相手に20名近く投入させるのはいささかア
レな気もする。
だが、もしも敵さんが偵察部隊などでは無く、かく乱を目的とした
少数先鋭部隊だった場合の措置だ。

この世界の魔導師のランクは一つ上がるだけで、その下のランクの
魔導師5人分くらいだな。

ウチの部隊の書類に記載された平均魔導師ランクはAAランク…。

もし敵さんが平均AAA以上なら、マジで全滅の可能性があったり

……怖。

そんな事を考えつつ、俺も封時結界の中に突入した。

結界に入りこむと、待ち伏せでもしていたのか、B分隊の突入した
辺りから火の手が上がる。

『アクセル・シュートッ!』

カッ ドドド ンッ!!

『(効果確認 敵は散開した模様、各員注意を)』

故意なのか無作為なのか……

恐らく後者だとは思いますが、B分隊からの反撃を受けた7人がそれぞ
れバラバラに逃げ始めた。

コレはどういう事だろうか?自分の力に自信があるのだとでも言う

のだろうか？
だがどっちにしても

「 殲滅する事に…変りない」

「…隊長？」

「…何でも無い…各員周辺を警戒」

例え今回…初めて人を殺める事になろうとも…な。

作戦開始から20分経過。

ふむ、どうやら敵さん達の魔導師ランクは高くは無いな。既に数人倒す事が出来たし。

だがそれを補ってあまりある程、経験を積んでいるベテラン部隊だったようだ。

何人が倒したんだが、冷静に逃げ回って、こちらの策敵魔法を上手い事かわしている。

今の所こちらに損害は無いが時間が経てば経つほどこっちが不利か
……………。
どうしよう、まさかココまでしぶといとは思わなかったぜ。

「ヴィズ…反応は？」

『有りません』

ヴィズの高感度センサーにも掛からない…か。正直お手上げだな。

ココは廃棄された都市だからなあ。遮蔽物はギョウサンある訳で…。

『(B分隊接敵！奇襲されました！)』

いきなりかよッ！！

「(後退しつつ敵の強さを見る…体制を立て直せ)」

『(了解ッ！　ッ速い！こちらB分隊ッ！敵2人がA分隊の方に向かったッ！迎撃を！)』

しかもコツチにキターー！！！！！！！

「全員聞いたな？距離が600になったら攻撃する！射撃魔法準備！」

通信を聞いたA分隊の面々はそれぞれデバイスを立ち上げ、攻撃魔法陣を展開する。

俺もヴィズを構え、アルアツソーと呼んでいる銃に、魔力チェンバ―M T S - 40の魔力を充填していく。

そして射撃魔法の術式を走らせ、いつでも撃てるよう準備した。

『距離2000…1800つち、速い…1600』

ドンドン近づいてくる敵さん。

ヴィズのHUD上に表示されているリーダー表示には光点が二つ。こちらに向かっているのが確認できた。

『距離1400…1200…1000…』

まだか…まだなのか？物凄く落ち付かないぜ…。

『800…600』

「発射しろッ！！」

俺達が撃った魔力弾は弾幕となり、向かって来る敵に迫ったが、その全てが回避された。

それどころか、敵のうち一人はあろうことが俺に狙いを絞って突撃してきた！！

「死ねえええー！！！！！！」

「ぐうッ！」

『キーンセイバー』

俺の魔力光と同じ白い魔力の刃が双剣状に変形したヴィズから伸び、敵の魔力刃を受けとめた。

受けとめた刃を弾いて、返し刃で斬りかかろうと思った。

だが、あろうことが再度突進され、鏝迫り合いとなってしまうた。

その所為で相手の顔がよく見える…若い、俺よか3歳ほど上の10歳くらいだろうか？

恐らくOCUでもこっちと同じ理由で子共が前線に送られているんだろう…辛いな。

俺の思考の一部がややずれた為、俺の押す力が少し減る。

必死に相手の魔力刃を押し返す為に、俺は余計な事を考えていた思考を中断させた。

目の前の相手からは、膨大な殺気が放たれており、どうやらUSNをかなり敵視している様だ。

援護して欲しいんだが、罅迫り合いの所為で俺が敵に近すぎる。
フレンドリーファイアを警戒してか、味方は援護射撃も出せない。

「USNのクソ野郎どもがあー!!」
「……………」

くそっ! どうする? なるべくなら殺したくない…………… って何バカ考
えてんだ俺は?

「うらあああ!」
「ぐ…う…ああ」

ココは……………ココは、戦場だぞ!? 殺さなきゃ殺されるんだッ!!

「……………ああ」
「クソッ! 喰らいやがれッ! エンドストライク!」

ガチャンという音、目の前の敵兵の腕に装着されたパイルバンカー
から魔力で出来た杭が現れた。
かなりの魔力が収束している…当れば幾ら重装甲のヴィズでも、貫
通させられる可能性が高い。

当る…イコール…死だ。

「あああ……はあああ！！！！」

俺はその瞬間、魔力刃を引いた。

「な！？」

体勢が崩れる敵兵……俺は覚悟を決めて力の限り。

「ヤッ！」

ズシャ……

「あ、あ？……おふッ！（ビチャ）」

魔力刃を……振り抜いた。

俺の振った魔力刃は、敵さんのわき腹を切裂いた。

帰り血が俺の身体に降りかかり、俺の身体を赤く染め上げる。

初めて人を斬った……初めて人を自分の意志で……傷つけた。

思っていたよりもあっさりと人の身体は斬れた……斬れてしまった。

その感触は腕から離れようとしなない。

怖いとか恐ろしいとかよりも　　気持ち悪い。

クソ…胃の中身…戻しそうだ。

「ッ…敵一人を撃破、各員引き続き戦闘を続行しろ」
「ッッッ、了解」

相手はあっさりと倒れ伏し、俺の足もとに血の海を作って倒れている。

ほんの一瞬の攻防…だがそれだけだ。俺が人の命を奪った…初めての瞬間…。

解ってはいた…魔法の力は人を簡単に殺せるって事…。
だけど…だけどこんな…：ちくしょうッ！
俺は頭を振り、意識を戦闘に向ける。

そうでもしなきゃ…耐えられん。

「（各員…殲滅を急げ！）」
『『『（了解）』』』

フルフェイス型のマスクが付いていてくれて助かった。

今、きつと俺の顔…：見れたもんじゃないだろうから…：畜生。

無事作戦は終了した。敵は全滅、こちらは無傷。戦果としては上々だ。

だが作戦を指揮した中尉はいま此処にはいない。

基地に帰るまで全く顔色も変えず自然体でいた中尉は、現在部屋で休んでいる。

それもそうだ、聞くところによると実戦は今日が初めて…。

つまり初めて人を殺したのだから…歳は7歳なんだがな。

優秀な軍人が隊長になったと軍人として喜ぶべきであり…

あんな子供が優秀な軍人になってしまったと人として哀しむべきだと思う。

で、俺はあの後、一応報告の為に中尉の部屋に向かった。

一応副官である以上、今回の件の報告書作成はしなけりゃいけないしな。

正直、今あの小さな隊長の元に向かうのは、あんまし気乗りがしないがコレもお仕事なのよね。

………そう思っただけで部屋の前までいくと、吐いている音が漏れて聞こえてきた。

『つうう…あぁあ…』

そして次は嗚咽の声…部屋に戻って緊張が解けた所為か…思えばよ

く今まで持ったもんだ。

その精神力は感嘆にあたいする…部下を不安がらせないよう、自身はいつも通りを貫いたんだろう。

だが中尉はまだ7歳なんだ…心に傷を追っても不思議じゃねえ。

『あああ…ヒク…ああ…』

時折聞こえる声はなんとも弱弱しい。そこで俺は気が付いた。

俺たちはナンちゅうもんを、あの小さな背中に背負わせちまったんだらうか？

『ごめんなさい…ごめんなさい…ごめんなさい』

今日みた中尉の姿は尊敬に値する。

的確に指示を出し、作戦地域から帰還する時の殿もやっていた。

だが、今の姿はどうだ？

恐怖に怯え、ひたすらに許しを乞う…年相応の小さな子供の姿じゃないか…。

やってはいけない事をして、後悔して泣き崩れている子供の姿じゃないか…。

『…ゆるして…くだ…さ…い』

もう、あの隊長の心は壊れかけ…いや、壊れてしまったのだらう…。人を殺してしまった人間は、必ず心が精神のどこかが壊れてしまう。

俺は報告書の件は後回しにする事にして、中尉の部屋から離れた。こつ言つた時は下手に声をかけない方が良い。

それは時間こそが最高の薬だと、俺は経験上理解しているからだ。もつとも完治はしないし、これから先一生付き合わなきゃならんだろうが…。

それに俺達がどうこつ言おうが、すでにフェン中尉は隊長なのだ。この決定は覆されることは無い…功績も出してしまったしな。

だが、だからこそ…だからこそだ。

せめてあの小さな隊長の背中を守ってやろうと、この時俺は心に誓つた。

せめてコレ以上、俺達大人の都合で壊れてしまわない様に…。

「まさか…こいつらがねえ。」

「まさか…こいつらがねえ」

妄想戦記

やあ、みんな！毎度お馴染みフエンくんだ！

あの初めて人を殺めた初任務から、既に1ヶ月がたったぜい！

流石に人を殺したのは辛かったなあ…。

あの時は部屋に戻った瞬間に、トイレに直行してリバースしちゃったからな。

ヴィズが励ましてくれなかったらPTSDになってたかも知んない…色んな意味で危なかったぜい。

別に人殺しに慣れたい訳じゃないが…こんなご時世だしね。

あん時も後で捕虜にすればよかったかと思ったけど、相手も殺す気で来ていたからなあ…。

初めての实战で手加減とかなんて出来るほど、俺は強く無いしね。

まあ暗い話は置いておこう

あの後もすぐに任務が入って、

俺たちは出撃していった。

最初は小隊の連中ともギクシャクしてたんだが、俺が率先して任務を遂行して段々と打ち解けた。意外なことにジエニス少尉がよく俺のサポートをするようになったんだ。なんでだろ？

特に何か言った訳でも無いのだが……はて？

で、俺はいま部屋にて書類整理に追われてる。隊長つてのは事務作業も給料のうちだからな。

ウチのところは優秀な連中が多いのか、他のところに比べたら少ないほづらしいが……多い。

「はあ、7歳児にやらせる量じゃないな……」

『マスター、お気を確かに……』

「まあまあそう腐らずに中尉、俺たちも手伝いますから。」

「そうそう」

「……と言いつつ、ソファアでくつろいでる奴等に言われたくは無いな……」

何でだか知らんが、俺の部屋はいつの間にか小隊連中がたむろするところになっちまった。

まあ、よく書類整理を手伝って貰えるから、それなりに助かっているけどな。

ぶるるる……

さて、みんなで黙々と書類整理をしていると、備え付けの内線が鳴った。

「……はい、こちらフォン」

『中尉、司令部からの連絡で司令に呼ばれています。至急、司令部に向かってください』

「了解した。」

ガチャ！

「司令が何の用ですかねえ？」

聞えていたのかジェニス少尉が質問してきた。

「さあな、厄介ごとじゃなきゃいいが…」

この俺の呟きは、後にいろんな意味であたることになった。

とりあえず司令室に行くとするか…

司令室

こんにちは

「だれだ？」

「レッドクリフ隊、隊長…ラーダー中尉です。」

「入れ。」

中に入る俺、早いところ書類を整理したい為、本題を聞くことにした。

「それで…なにかあったのですか？」

「なに、大した事じゃない。上からの命令が届いてな？この辺に次元犯罪者が逃げ込んだらしい」

「はあ…次元犯罪者ですか？ソレは管理局の管轄では？」

「そう。あいつ等の管轄だ。だがどうにも捕まえられ無かったらしい。」

「だが、何とか捕縛したい管理局連中が、USN軍上層部に泣きついた。」

司令は皮肉交じりに笑いながらそう言うと、俺に書類の入ったファイルを手渡した。

「…それで？」

「それで…だ。管理局の連中と合同で次元犯罪者を捕まえる。」

「そのために、君の部隊にお鉢が回った」というわけだ」

「了解…我が隊は管理局の応援に向かいます」

「応援と言ってもアレだ？正直わが軍はこの件についてはあまり好意的では無い。」

「まあ舐められない様に気をつけてくれ」

「了解」

アッサリと引き受け、俺は敬礼をすると司令の部屋を出た……しかし、管理局ねえ？

まあ連中ウチの国に技術協力もしてるから、軍も協力せざるをえないんだろっとなあ…。

しかも、二日後に現地にて合流…あつそのまえに書類かたづけなきや…鬱だ。

二日後、合流地点

合流地点にて執務官と武装局員達をまつ。
今回は新しく入れたデバイスの兵装システムのテストも兼ねている。
ふふふ、今度のはすげえぞ〜相手が敵だから思いつきり可動テスト
するぞお〜。

「……くくくく」

『マスター……』

ん？どうした？

『顔に出ています。皆さん引いてますよ？』

顔に出たか？そーいや俺の周りに人がいない…みんな離れたところ
で怯えた顔してるし…

「た、隊長…今度は何作つたんですか？」

「………知りたいか？」

「っ！やめときます！」

ありやりや、更にどん引きさせちまった。

こないだ実験したとき隊舎吹き飛ばしそうになったアレが原因かな？
直前でキャンセル出来たから、全壊させなかったけど、流石に肝を
つぶしちまったみたいだな。

俺がそんなコト考えていると、時間丁度に転送魔法陣が展開されて、管理局の連中が転送されてきた。

挨拶でもしとくか。とりあえず近くのヤツに話しかける。

「…代表の方は？」

と、その時、連中の後ろから代表と思われるヤツが出てきた。

「次元航行艦イリス所属、ジェノン・トールラス執務官だ。そちらの将校さんはどちらにいるかな？」

へー、アレが管理局の執務官かあ…うん、かなり強いね、あの執務官。

やっぱりエリートなんだろうなあ…だって全然隙が見当たらないんだもん。

「陸軍第7機動魔導師部隊“レッドクリフ”隊長フェン・リーダー中尉だ。

今回は宜しく頼む…ウチの連中はつぶしが利くので使ってくれ」

「へ？ あ、ああこちらこそ！」

おーおー、目見開いて驚いてるわ。まさか7歳児が隊長で社交辞令を言うなんて思わんだろう。

トールラス執務官以外の局員も啞然としてやがる。ウチの連中は笑ってやがる……うん、後でメよ！

とりあえず挨拶は済ませたから次は

「では早速…敵の情報を確認したい…後、敬語は結構だ…背筋がかゆくなる」

うん、相変わらず感情がこもらんなあ、俺の声。顔も見事な無表情。

「…解った…では其方のデバイスに送る」

執務官の持つ、管理局標準装備型ストレージデバイスからデータが届く、えーと何々？

犯人は複数で廃棄された基地に潜伏。しかも質量兵器搭載の無人兵器を、基地周辺に展開。

かなり大量に…確認できたのだけで雄に500機はある…というか、どうやって集めたんだろう？

それと無人機の搭載火器は、機関砲とミサイル位なもんで魔法対応装備は確認できず…か。

どうやら旧式ばっかみたいだな…でも密集してやがる…で、中々近づけないと…。

あー確かに管理局には荷が思いわ。こいつらには非殺傷設定ちゅう括りがあるしね。

俺は多層式の多重プロテクションがあるから平気だけど、普通の魔導師なら辛いわ。

で、肝心の主犯のお名前はっつ

『モーガン・ベルナルド』

っつておいおいマジでか！？

ちよい待ちちよい待ち！フロミ成分のある世界だつて解つてたけど…いや待て早合点はいけない。

同姓同名の別人の可能性もある。出来れば別人でいてくれ頼むから。

あっ！この後どうするか聞かないと。

「情報は確認した…そちら側の作戦は？」

「連中の方が敵の数が多い、だから別働隊を用いて陽動をかけ敵を引き離し、

その隙に機動力のある空戦魔導師が基地内部に侵入、犯罪者を確保する」

「隊長、どうしますか？」

「……」

うーむ、どうでしょうか？こちらとしては、派手に殲滅戦仕掛けても良いんだが…。

とりあえずジェノン執務官に視線を送る…あつ目逸らしやがった。感じ悪いな。

管理局としては犯罪者だとしても無傷で捕らえたいだろうから、ここは顔を立ってやるか…。

新式兵装デバイスのテストもしたいしな。

「執務官…一つ提案があるのだが？」

「何でしょうか？リーダー隊長？」

俺はジェノン執務官に、なるべく周りにも聞こえるよう響く声で話しかけた。

「何シンプルな作戦だ…俺が無人兵器郡に呐喊して殲滅し道を開く」
「な！？」

俺の言葉に目を見開くジェノン執務官。だが俺は気にせず言葉を紡ぐ。

「道ができたなら突入して連中を捕らえて欲しいのだが…できるか？」

「なつ単騎でやるのか?!無茶だ!敵が多すぎるッ!

せめて何人かで陽動をして相手の戦力を分散させないと…」

ふーむ、やはり反対されたか…俺としては密集されてる今の方が楽なんだけどなア…。

ポンポン

ん、誰だ?肩を叩いたの…って何だジェニスか。

「大丈夫ですよ。こんなのウチの隊長にしか出来ないので。ねえ隊長?」

ジェニス…それは聞きようによっては、任務マル投げに聞えるのだが…?

「しかし…」

「…大丈夫だ。この程度の敵ならストレス発散にしかならない…」
「…!」

うわっ!そんなに驚かんでもいいだろ?別にほんとなんだからさあ…。

「それに俺にはこいつがいる…ヴィズ」

『Yes、マスター、セットアップ』

俺は管理局の連中の前で装甲型バリヤジャケット…バリヤアーマー通称BAを展開

させて纏う。

このヴィズの姿を、もう見慣れているウチの連中は別に驚かないでも、管理局の連中はどうと……驚いてる驚いてる！ドッキリ成功って感じ？

「…俺のデバイスは強襲制圧と突破力に特化している。」

「まあ見ていてくださいよ。ウチの隊長、最近書類仕事でストレス溜まってるんで…」

こら！ジェニス！まるでそれじゃ俺がバトルジャンキーみたいじゃないか！

ほら見る…執務官引いてんじゃん。

5分後

すこし揉めたが最終的に俺の案で行くことになった為、部隊のコールサインをきめる。

俺たちの部隊はそのままのレッドクリフ、管理局はブルーレインと呼ぶことにした。

そして、作戦がはじまる

と、その前に。

「…少尉」

「はい、」

「後でおぼえてる？」

「…!!?」

S i d e ジェノン・トールス

僕たちは次元犯罪者を捕まえるために、この国の軍と協力して作戦を行うことになった。

ついでにこの国の有能な魔導師がいたら、勧誘もして来いと提督から言われてる。

で、合流地点に来たわけだが……何で目の前に子供がいる？

こちらの代表者を捜しているみたいだが…伝令役か？

とりあえず、この部隊の隊長に合おうと思いいこの子に話しかけてみた。

「次元航行艦イリス所属、ジェノン・トールラス執務官だ。そちらの将校さんはどちらにいるかな？」

すると、周りの連中の顔が妙に硬くなった。なんだ？

そのことに戸惑っていると、そいつらの視線は目の前の子供に集中している。まさか…

「陸軍第7機動魔導師部隊“レッドクリフ”隊長フェン・リーダー中尉だ。

今回は宜しく頼む…ウチの連中はつぶしが利くので使ってくれ」

流石に驚いた…管理局も人手不足で就職に年齢制限がほぼ無い。

しかし、目の前の子供がこの屈強な魔導師たちのトップに君臨しており、

あまつさえ、子供が出すとは思えない程の気迫を放っていることに心底驚いた。

「へ？　　あ、ああこちらこそ！」

思わずそう声をだして答えた僕は悪くは無いと思う…連れて来た武

装局員達も啞然としている。

そして目の前の彼の目はジッと僕たちを見つめてきた。恐ろしく澄んだ瞳…まるで、心の奥まで見られているような感覚に陥る。

その後のことは余り覚えてない。

だが、気が付けば、どのように攻めるかの作戦を練っているところだったので、急いで話に参加した。

彼が提案したのは、彼が単騎で攻め込み殲滅させるというもので、正直余りにも無謀に思えた。

たった一人で次元犯罪者の持つ戦力を相手取るだなんて、質の悪いジョークだと思ったくらいだ。

しかし、それを提案した彼の目は真剣そのもの。

つまりは、本気であるの中に、一人で飛び込むと言うのだ。

だが、法の番人である執務官としては享受しにくい。

彼の部下は止めないのかと思い、彼の後にいた副官らしき男の方に視線を送る。

だが、全く驚いていないどころか平然としていた。

他の連中も同様だ。彼らはこの小さい隊長なら出来ると確信している。

副官は彼の肩に手を乗せ、僕を説得してくるほどだ。

それでも了承しかねる僕に、彼は自分のバリヤジャケットを見せてくれた。

全身を機械的なフォームの装甲に覆われたその姿は、あえて言うな

らロボットのように見える。

彼いわく強襲制圧に特化したデバイスだそうだ。

長いことミッドにいたせいなのかもしれないが、少なくとも僕はあんなデバイスは知らない。

結局最後は僕が折れて、彼の作戦で行くことになった。

彼には一体どれほどの力があるのか知りたくなったのも理由だ。

何時でも援護できるようにはしておいたから、心配ない。

そして全員が配置についたとき作戦は始まった。

「モーガンが居るって事はグレンもいるのかな？」

「モーガンが居るってことはグレンもいるのかな？」

妄想戦記

や！みんな愉快的な転生者のフェンだよ！今回のミッションは敵の殲滅。

しかも相手は無人兵器・・・つまりは機械だから、全然心が痛まねえ〜ゼツ！！

という訳で、俺は嬉々としてローラーダッシュを使い、所定のポイントに移動していた。

「（こちらレッドクリフ1…作戦地域に入る）」

「（…ブルーレイン1了解）」

「（レッドクリフ2了解……隊長、存分にストレス発散をしてください）」

「（…ふっ了解した。）」

予定のポイントに到着し、俺はヴィズの新たな機能を起動させる。

「…いくぞヴィズ、“フォーム・ランチャー”バレル展開」

『Yes、“フォーム・ランチャー”マジックレール・バレル展開』

俺はヴィズを砲撃に特化したフォームへと変える…魔力の粒子が長大の砲身を形作る。
格納領域にしまったおいた砲身を再構成して銃型のヴィズと合体させたのだ。
それによって巨大な砲身が、俺の肩のジョイント部分へと接続され、異様な迫力を放っている。

これは一体何かというと、ヴィズに取り付けた兵装デバイス換装システムと言えればいいか？

ヴィズは戦況に応じて、瞬時に各兵装部分を切り替えることで、各戦況に対応出来る。

まあ、ぶっちゃけ、フロントミッシンのセットアップシステムのパクリなんだけどね？

現在ヴィズには5つの兵装を、試験的にフォームという名前で暫定的に登録してあるのだ。

まあ、試験的なヤツだから、将来的にはオミットする可能性が高いけどね。

1つ目はフォーム・アサルト

普段はこのフォームがデフォで、一番バランスに優れていて中距離戦で力を発揮する。

またバックパックのリペアは、治癒魔法に魔力を上乗せで消費する事で、強力な治癒を可能にした。

また、消費魔力を増やしたことで、副次効果として破損したバリアアーミーの回復すら行える。

更には例え腕が取れても、吹き飛んだ腕が残っていれば回復が出来る様に術式を組み込んだ。

問題は治癒魔法があまりに緻密すぎる魔力操作の為、戦闘中はあまり容易には起動出来ない事。

戦闘の合間合間に細々と起動させるか、戦闘中はヴィズに操作を任せるしかない。

そして、ヴィズに任せると、ぶつちやけ普通の治癒と変わらない。

・・・何の為に背中のにせてんだか。

2つ目はフォルム・ストライカー

アサルトと基本は変わらないが、名前の通り近距離戦に特化したフォルムである。

普段はアルアツソーモードで、マシンガンの形をしているヴィズを、銃型から双剣に変更する。

魔力刃を展開する魔法キーンセイバーを使い、近接戦闘ではかなりの力を発揮できる。

また、バリアアーマーに回す魔力を少し上乗せする事で、防御力のUPにもつながっていたりする。

問題は使う機会があまりない事。

正直、フォルムアサルトで、キーンセイバー使った方が楽である。

なので近日中に、このフォルムは消失予定。変更するヒマがあればだけど・・・。

3つ目はフォルム・ガンナー

読んで字の如く、遠距離戦に特化したフォルムである。

兵装デバイスとして組み込んだM82A1をメインアームにして戦う。(単独で起動させるのも可能)

そしてこれも近日、時間が取れ次第消失予定。
もともとフォルムアサルトが、デフォルト使用だった為、M82A
1がそのまま使える。
その所為で、一々フォルムを変更するという、面倒くさい事をする
必要が無くなってしまった。
そして、その事に気が付いたのはごく最近な為、時間が取れなくて
変更が出来ないと言う罫。

4つ目はフォルム・アサルト？

基本はアサルトと変わらないのだが、背中のリペアパックを外した。
その代わり、フライアーフィンの魔法を取り込んで作ったジェット
パックに切り替えてある。
ジヨットパックをブースターとして稼働させることで、直線での高
速移動が更に速くなった。

なにせ、直線の加速はわずか数秒でトップに入り、最大スピードは
空中において音速を軽く超える。
問題は、相変わらず細かい機動は取れない事であり、一撃離脱：も
しくは強襲使用である。

そして今回新しく入れた兵装が、5つ目のフォルム・ラ
ンチャー

広範囲攻撃魔法「ガルヴァドス」と収束砲撃魔法「グロム」を使う
完全な超長距離・殲滅戦特化型。
ガルヴァドスは両肩に形成した魔力スフィアから射出され広範囲を

殲滅出来る。

グロムの方は格納しておいたバズーカ型の砲身に、ヴィスを合体させた事で高威力の砲撃が可能だ。
ちなみに、そのバズーカの形状のイメージは所謂ビームバズーカである・・・バズは漢の夢。

問題としては、このフォルムチェンジは全部尋常じゃない程魔力を消費する事であろう。

何せ、戦闘中にバリヤジャケットの強度とかの仕様を、無理やり変更するようなモノなのだ。
だが高魔力量、高魔力精製能力、レアスキルの三拍子がそろった俺なら問題なく使用できる。

まあ、これも暫定的に造ったモンだし？正直一々フォルム変えながら戦うの面倒だしなあ。

おそらくフォルムアサルトで扱えるから、やっぱり変えるかも知れん　と、思考がずれたな。

「グロム、スタンバイ」

『術式展開、チャージ終了まであと5秒』

砲身に環状魔法陣が展開され魔力が収束・圧縮されていき、魔力圧力が高まっていく。

その間に俺は、砲身を敵のいる方角にむけ、サーチャーで敵のおおよその位置を割り出す。

そして敵を示す光点がメット内のHUDに表示された…距離は…およそ3km、いけるかな？

「ターゲットスプラッシュ… ガルヴァードス起動」
『Yes』

休むことなくお次は肩に乗っているロケットランチャ
I型スファイア、ガルヴァードスを起動する。

「… レッドクリフ1、フォックス5」

『フルオート・ファイア』

こちらは圧縮魔力弾が、予め装填されているので、特に何かするこ
とも無くそのまま発射する。

カカカカカカカッ！

高濃度に圧縮された魔力弾が、肩に浮かべたスファイアから連続で発
射される。

重力に反応出来る様、半分物質化した高魔力弾頭は、放物線を描き
敵の頭上へと落下していった。

ドドドドドドドドーンッ！！！！

着弾と同時に魔力弾の外殻が崩壊、ソレと共に莫大なエネルギーが
爆発の術式として発動。

一瞬にして辺りに高濃度の魔力が伴ったエネルギーが解放され、一
面火の海と化した。

広範囲に降りそそいだ為、連鎖的に敵を巻き込んで、かなりの敵を
殲滅した事がわかる。

うーん、しかしコレも燃費が悪い、それに誘導が出来ないから初撃
にしか使えん。

高速戦闘用に、弾速をもつと速くしたヤツも作るかな？いや拡散掃射型も捨てがたい。

むしろ、地雷みたいに設置できるようにするか？ミラージユハイド付きで・・・逝けるなソレは。

『残敵を計測……残り約150』

とりあえず敵の数は当初の500から150近くまで数を減らせる事に成功つと……。

さてと……一丁踊りに行きますかね！

「フォーム・アサルト？起動……エリアサーチ実行、HUDに生き残りを表示」

『Yes、マスター』

メット内のHUDに生き残った無人機が光点で表示される。

とりあえず一番近いやつはと……11時の方向、距離2km先つてとこか。

「砲身格納」

『格納します。ジェットパック作動！！』

俺はかなり大きなロングバレルの砲身を持つバズーカを、格納領域に戻し身軽になる。

ついでにジェットパックを展開、余剰魔力で現れた光の翼をともない敵に真っ直ぐに突撃した。

ちなみに飛んではない、ローラーダッシュの加速装置としてジェットパックを使様している。

スピードはやや落ちるが、その代わりにかなり高機動な動きが可能になるからだ。

そして、突撃を開始してから数分で、敵さんの生き残りを視認した。

『残存部隊確認、飛行型5機、人型10機、大型1』

「ターゲットエンゲージ…交戦する…レッドクリフ1、フォックス²」

『ファイア』

バラバラララ ツ!!!

ヴィズから放たれる超高速の魔力弾が敵を蜂の巣に変えていく…
く〜！快感！

脚部のローラーが唸り、舞うような機動で敵の攻撃を避けながらヴィズを撃ちまくる。

撃つ毎に、HUDの魔力弾の推定残弾表示が一瞬で十桁位消えていくが気にしない。

『大型無人機接近、注意を』

と…デカ物が来たみたいだな。

「ターゲットインサイト…レールブラスターフォックス2」

『ファイア』

バラバラララ ガガガガガンッ！！

『高出力光波シールドを確認、命中弾ゼロ』

どうやら防御に特化した奴みたいだな？アンヌキワンカルドAMFとは違うみたい。

。 だけど、かなり分厚い対魔法用のシールドでも持っているようだ

「M82A1…起動、フォックス3」

「ファイア」

ドガギン

「敵に損傷なし」

こっちの魔力弾が貫通しない。

弾を一箇所に集中させれば、簡単に貫通できるけど、弾がもつたいねえな。

「敵増援部隊接近、数およそ30機。ミサイルの発射を確認、着弾まで後140秒」

攻撃が効かない事に少し驚いて、俺の一瞬動きが止まった隙を突いて弾幕を張り始めた。

ふうむ中々の状況判断だ。優秀なAI積んでんのか？戦術データリソクも早いしな。

どうやら奴さん、こちらが近づけないようにするつもりみたいだが・・・甘いな！！

「ヴィズ、フォルム・ストライカー、近接攻撃魔法術式キーンセイバー起動」

「フォルム・ストライカー、キーンセイバー起動、魔力刃展開します」

双剣型に変化したヴィズを握り締め、キーンセイバーを起動すると白い魔力刃が形成される。

魔力刃形成を確認後、俺はジェットパックをふかし、大型機の懐に

跳び込んだ。

敵増援の支援砲撃に多少被弾したが、俺の多層プロテクションを打ち抜ける程の攻撃は無い…。

「…はあああ！！」

ガンツ！　パキンツ！！

キーンセイバーの出力を物理破壊に設定して、高出力モードでシールドに突っ込んだ。

過負荷を受けてガラスの割れる様な音と共に、敵無人機にシールドは崩壊する。

予想外の出来事に、無人機のAIが一瞬のデレイをおこした際に、ヴィズを真横に構えた俺は、スピードはそのままにすれ違い様に大型機をぶった切った！

俺は別に斬鉄なんて業を持ってるわけじゃない。これは只の高い魔力に任せた力押しである。

それでも母上と…母上の部隊の連中との模擬戦、それにこれまでの戦いの中で編み出したモンだ！

戦いくで使える剣なは…戦場いくで覚えた剣なだけよ！！

バァーーンツ！！！！！！

「ターゲットスプラッシュ……」
「熱量増大を探知、追加砲撃来ます。」

迫ってくる敵の砲撃をジグザグで避けつつも接近、ウイズを振り被り…斬る。

振り下ろして終りじゃない。
勢いを円を描くように操作し、スピードを落とさないで次の敵へ向かう。

たった一回のすれ違い様に10機の光点が消える。まさに敵がいなくなるまで続くロンド。

ソフィア教官との模擬戦で編み出した戦闘機動…その名も“限界機動・戦神楽”

味方には勝利を…敵には死を運ぶ戦場の神楽を踊り続け、HUD内の光点はどんどん消えていく。
返り血の如く飛び散ったオイルが、BAの白い装甲を違つ色に染め上げていった。

「敵増援部隊の発進を確認、数およそ100機、二手に別れ包囲する模様、敵射程距離まであと200秒」

い。
「おやおや、まだ残ってたか…そうでなきゃ面白くない。」

「敵基地の砲台が稼働した模様、超長距離砲撃来ます。」
「砲撃回避後、右手の敵部隊に呐喊、撃破する…・食い放題だ」
「Yes、マスター、全部平らげてやりましょう。残すなんてもっ

『たいたい』

実に心強い言葉だなヴィズよ？そして俺は敵に向かって翔ける。
超長距離砲撃の何発かが、多層障壁を貫いたがバリアーマーに阻
まれて俺自身には損傷なし。

行ける！！

「機械風情が…！」

そして、作戦開始から10分後

「お前で…最後だッ！！」

俺は全ての光点を撃破した。

「（…こちらレッドクリフ1、敵勢力の殲滅を終了した。後は頼む。
）」

「（ブルーレイン1了解）」

念話で連絡を入れる。待機していた管理局の連中が基地内部に突入
して行った。

ふむ、なかなか訓練された動きだな。隊員間の連携における隙が殆
ど無いぜ

「（レッドクリフ2了解…ところで隊長どうでした？遊んだ感じは
？）」

「（…ばれていたか。）」

「（ええ、何時もより時間かかってましたから）」

「（…ストレスの発散にはなった）」

「（そいつは良かったですねえ）」

「（とりあえず、まだ作戦中だ。おしゃべりは後にするぞ…通信終了）」

「（了解!）」

とりあえず不足の事態が起こっても良いように、レアスキルで魔力回復に努めますかねえ」。

ちなみに俺のレアスキルのリサイクルの取り得は、このすさまじく速い魔力回復にある。

闇の書みたいに一瞬で回復とまではいかないが、それでも格段に速い。

常時起動してる為（強弱は出来るがON、OFFができない）戦闘中も回復して長時間の行動が可能なのだ!

コレも母上に強制的に鍛えられたタマモノ・・・便利だよねえ、神経系が異常に疲れるんだけどな。

さて、そろそろ制圧が終わるかなと思っていると、突然爆発音が聞えた。

「っ！報告」

「は！モーガンを捕まえようとしたところ自爆した模様です。怪我人多数ですが死傷者は無しです。」

自爆しただと！？まさか複数のモーガン・ベルナルドがいるとか言わないよな？名前が名前だし・・・。

とりあえず、主犯死亡ではあるが負傷者を収容し、この作戦は終了した。

そして基地に戻った俺を待っていたのは、書類の山だった・・・
うだよ終わらなかつたんだよ！
とりあえず逃げようとしているジエニスを捕まえ、また黙々と作業
をすることになった俺であった。

あー鬱だ・・・。

「哀しいけれど、いつか戦争なのよね。」（前書き）

*長いです。

「哀しいけど…これって戦争なのよね。」

「哀しいけど…これって戦争なのよね。」

妄想戦記 第12話

今俺は、セスル基地のブリーフィングルームにいる。

どうやら上の連中が大規模な反攻作戦をおこすらしい。

で、俺たちレッドクリフ隊以外にもこの基地にいる様々な部隊全員が集められているってわけだ。

でも書類整理の真っ最中の俺にとっては、気晴らしになる救いの手に見えたよ。

だってよ？こないだなんて書類の雪崩に埋まったんだぜ？

毎日全部片付けてなのに、次の日には同じ量の書類がまた積んである。

時間がループしてんじゃないかって思いたくなった。「冗談ぬきで…」。

「中尉、どんな作戦なんでしょうね？」

ジェニスが作戦について聞いてきた。無論俺も知らない。

「・・・さあな、案外集団で休暇を取らせてもらえるかも知れんぞ？」

「それなら大歓迎なんですが…中尉、此処最近きな臭い噂があるの、ご存知ですか？」

うわさ？最近部屋に籠りっぱなしで人と話して無いから知らんぞ？

「うわさ？」

「はい、哨戒任務に行った連中から聞いたんですけどね。敵が新兵器を投入しているらしいんです。何でもシルエットは人型で、機械と言つより生物だとか…」

生物…生物兵器かな？いやだよタイラント的な何かが来たら。

「興味深いな…その哨戒任務に行った連中はナニを見たんだ？」

「分りません。交戦する前に相手が逃げたらしいです。レコーダーを回してなかったので、

公式な記録に残っていないため、上の奴らは錯覚だろうと言つ事にしてるらしいです。」

ふむ、確かに見かけただけじゃ証拠にはならんな…

だが火の無いところに煙は起たないしな…なにかあるのかもしれない。

どんな作戦を行うのか聞いていない為、

こういつた憶測も交え部隊の連中と喋っていると、

ブリーフィングルームにコーウェン准将が入ってきた。

どうやらブリーフィングが始まるらしい。

「諸君、楽にしてくれ。」

敬礼を解き、イスに座る俺らを見て、司令は言葉をつづけた。

「諸君も知つての通り、本日未明、合衆国軍第24軍中央司令部により反攻作戦『ヴァイエイト』が発令された。」

ヴォンという音と共に背後の大型ディスプレイが起動する。

「フリーダム市奪還を目的とする合衆国軍の大規模反攻作戦だ。なお、当作戦は天候等に左右されず決行される。諸君はその反攻作戦に先立ち、ある基地の制圧作戦を行ってもらう。この作戦は『インビジブル』呼称する…では概略を説明する。」

准将がそういうと背後の大型パネルに映像が映し出された。

映し出されたのは何かの施設のCGイメージによる概略図…感じからしてかなりの規模だ。

「本作戦の第一目的はニューヘルバと呼ばれているこの基地の無力化、

第二目的が可能な限りの敵施設破壊及び敵情報の収集である。」

周りから息を飲む音が聞えた　　まあ理由はわかる。

反攻作戦については知っていたが、まさか別の作戦をこの時期にやるとは思わなかったからな。

「ニューヘルバは元々は我が軍の基地であつたが、先の敵の侵攻作戦により放棄され、それを敵が占拠し利用している。またこの基地は位置的には今後の戦略的に大変重要になるものが保管されている。」

画面が切り替わり、基地の断面図が描かれた映像に変わる。こいつは…

「…見て分る通り、ニューヘルバは魔導師が戦場に登場する以前からある基地の1つであり、元々対空陣地を兼ねた高射砲郡が設置されていた。だが魔導師の登場により高射砲で高速で飛来する魔導師を捕らえる事はまず不可能だった為、後に解体され基地内に保管されることとなる。しかし、情報部の情報収集の結果、この高射砲郡を再度地上に設置しようとしている事が衛星からの情報により確認されたのだ。この高射砲の射程圏内には我が軍の侵攻ルートが7割が含まれており、陸戦魔導師が多い我が軍にとっては、のど元に突き付けられた死神の鎌である訳だ。」

確かに…空戦魔導師に砲撃を当てる事は困難だろう。だが地を張って進むしかない陸戦魔導師には、まさに死神の鎌だ。

このクラスの質量兵器を防げるのは、俺を含めて一部の将校クラスの人間だけだ。

一般兵クラスの魔導師に防げるもんじゃない。

魔導師の質の向上により、数のアドバンテージが無くなったなんて言うヤツがいるけど、戦いはやっぱり数だよ！兄貴！

人がいなきゃ戦えないし、陣地の占領も出来ない。

大体、補給線を確保できる人数がいなきゃ戦争なんてできませんよ。

「この脅威を取り除く事により、フリーダム市に向かうルートと近隣三都市における防衛ラインの戦略的安定を更に強固なものとするのだ。では次に作戦の概要を説明する。」

作戦の第一段階は、第1空戦砲撃魔導師部隊と第4陸戦砲撃魔導師部隊を中心とした混成部隊による超長距離砲撃が行われる。超長距離からの砲撃による指揮系統の攪乱が目的だ。

また同時に囮として、第3機甲魔導師部隊を基地近辺20kmにまで侵攻、敵の迎撃が開始されると共に、第5陸戦砲撃魔導師部隊の支援砲撃魔法による遠距離飽和攻撃を開始。

敵の二次迎撃の確認を合図に、『サイクロプス』は撤退戦に切り替え、以後敵をその場に釘付けにする。」

なるほど…高射砲台が完成する前に、此方から攻撃を仕掛ける事により、敵の注意を引き付ける。

基地の駐留部隊を迎撃にまわさせ、一見すると膠着状態になったと錯覚させるわけか…

しかし、結構大掛かりな作戦だ。この基地の防衛部隊の第2機甲魔導師部隊を残してほとんどが出撃なんてかなりの作戦だ。

「ここで作戦は第2段階へと移行する。第6強襲魔導師部隊を第3機甲魔導師部隊とは違うアプローチからニューヘルバ基地へ侵攻させる。」

それにより敵基地施設の防衛網及びリーダー施設等を破壊し更なる混乱を発生させる。

続いて、突入部隊として第7機動魔導師部隊が、地下に設置された物資搬入用リニアラインに突入、中央集積場からメインシャフトに続くルートを進み、その際敵との交戦はほぼ無視し、メインシャフト内に突入する。」

パネルに表示されるメインシャフト…かなり広いみたいだな…

「第7機動魔導師部隊レッドクリフがメインシャフトに到達したのを確認後、作戦は第3段階に移行する。第6強襲魔導師部隊グリムは第3機甲魔導師部隊サイクロンと合流、敵に対し面制圧攻撃を行ってもらう。

その動きに呼応する形で、第7機動魔導師部隊の諸君はメインシャフトから通じている基地中枢部に突入、基地最深部の反応炉を破壊し爆発物をセット、離脱してもらう。第7機動魔導師部隊の脱出をもって作戦完了とする。

なお作戦決行は一週間後、これよりセスル基地はコンディションイエローを発令する。任務に全力をもって当たれ、私からは以上だ。」

こいつは厄介な作戦だな。

第7機動魔導師部隊…つまりは俺たちの事だが…

俺たちがどれだけ早く基地中枢に突入できるかがこの作戦の鍵だ。

時間がかかれば、その分友軍に被害が出る。

戦線が維持できなくなれば、外の残存兵力がなだれ込んでこちらもボン…！か。

しかし、敵さんの大部分をおびき出すとはいえ、一部隊だけで内部制圧とは…

上の連中もひでえ作戦考えやがる。

まあ、今更命令には逆らえん。今の内にできる事をやって置くしかないな…

はあ、また書類が増えそうだ…。

1 週間後、野営基地

「：今回の作戦で：我がレッドクリフ隊は突入部隊として、敵の懐に飛び込むことになる。」

ここは野営基地、作戦決行まであと一時間ほどだ。

我が部隊の任務は他の連中の陽動が成功するまで待機している。

「先に簡単に説明したが、確認の為もう一度小隊編成を確認する。俺と副官のジェニス少尉を含めた飛行魔法が使える九人はA分隊とする。そして先行する形で、メインシャフトへと向かう。」

コールサインはレッドクリフ1〜9とする」

「了解！」

メインシャフトは垂直の縦穴だ。最低限飛行魔法が使えないと突破に時間がかかる。

俺も飛ぶのは苦手だが、穴を降りるくらいはできる。

「次に、ケイン曹長を中心としたB分隊は俺たちが食い残した残敵を掃討しながら退路を確保して貰う。コールサインはレッドクリフ10〜20とする。」

「了解！」

こいつらが一番辛いかも知れない、何せ動きが限定される屋内だ。敵がわんさかいる基地内で退路を維持し続けるのは、至難の業だ。

「そして最後に、ヤード軍曹を中心としたC分隊は基地内にて、爆薬設置及び情報収集を行ってもらう。もし占領に失敗した場合は、我々が脱出に成功後に即座に爆薬を起動、基地を爆破する。」

コールサインはレッドクリフ21〜32とする。
「了解！」

こいつらはいわゆる工作隊みたいな感じだ。

情報が得られればよし、そうでなかったら徹底的に破壊してもらおう。

「以上だ。なにか知りたい事はあるか？」

「……」

「……無いようだな……これより突入ポイントに向けて進軍する。各小队はデバイスを起動、通信はチャンネル4にて行え、地獄の釜に突っ込むぞ。」

「Sir, Yes, Sir!!!!」

さあ、殺し合いの時間だ！生き残る為の闘いだ！！綺麗事などクソ喰らえ！！

くだらない倫理観など犬に食わせてしまえ！！！！

立ち塞がる奴は死神だろうが何だろうが殲滅あるのみ！！！！

始めよう、死に魅入られた者同士の宴を！！狂宴を！！！！

なんて事言えたらカッコ良いだろうけど、正直洒落にならない気がしたので自重した。

ヘルシング的な言いまわしは結構好きだけど……俺まだあそこまで狂って無いもんねえ……。

一応、まだ“人間”の範疇のハズだよ……うん。

……

……

作戦開始より30分経過

「ターゲット、エンゲージ！！フォックス2！フォックス2！」
「ヴァルキリー1から各隊員へ、デバイスが焼きつくまで撃ち続ける！敵を火達磨にしてやれ！」
「了解」
「HQから各部隊へ、敵基地から熱源感知、無人迎撃機部隊と推測！数およそ60！」
「サイクロプス1から全隊、食い放題だ！食い尽くすぞ！」
「了解！」
「B小隊遅れるな！前衛魔導師のクソ度胸…ココで見せてみる！！」
「サイクロプス9！ブレイク！ブレイク！」
「す、すげえ数だ…」
「サイクロプス5！余所見をす…ザザ…」
「い、イヤダツ！死にたく…」
「なんとおおお！！」
「HQ！デカ物が出た！フレリアに支援砲撃要請！」
「こちらHQ、了解。つなぎの無人機隊が到着するまで持たせる」
「ターゲットインレンジ！フォックス3！」
「敵熱量増大！敵砲撃来ます！」
「ギヤアア…ブツ」
「クソツ！8と13が食われた！！支援はまだか！」
「フレリア支援砲撃開始！着弾…今！」
「敵無人迎撃部隊の6割撃破、残り17機、此方の無人機隊と戦闘

に入った」

『敵基地内部魔力反応増大！敵迎撃魔導師隊確認！数は20…30？！尚も増員されてます！』

『くそ！サイクロプス1から全小隊へ敵を引き付けるぞ！Fラインまで後退する！』

『敵砲撃魔法きます！結界を！』

『HQよりグリムへ、第2段階に移行！！』

『グリム隊了解、突撃開始します！』

グリムが動いた！

「全員聞いたな？俺たちも行くぞ。」

「ミラージュハイド起動、通信封鎖、レッドクリフ隊！出撃！」

リニアライン、中央集積場

俺は部下8人を引き連れて先行し…何とか中央集積場にたどり着いた。

今回、俺の速度についてこれるように、こいつ等には俺のローラーダッシュの簡易版と呼べる

Rギアというストレージを渡してある。形はぶっちゃけマツハキヤリバーそのものだけだな。

「レッドクリフ1からHQへ、基地内部、中央集積場に到達…通信

封鎖解除、誘導頼む。」

『HQ了解。レッドクリフ1、その先Bゲート付近に敵迎撃機集結を感知、数は60、交戦はなるべく避ける。』

「レッドクリフ1了解。聞いたなお前ら…遅れるなよ？」

「了解！」

俺はローラーダッシュを駆使し、通路の壁を駆け巡る。重力制御魔法を使えば壁走りも簡単だ。

「ターゲットエンゲージ！」

「レッドクリフ1、フォックス2！」

目の前を塞ぐ無人機に向かってヴィズを掃射しながら突貫する。

「撃破確認は後まわしでいい…かまわず突撃しろ！」

「了解！」

中央集積場は規模がデカイ為、無人機の溜まり場になっているらしく、うじゃうじゃ大量にいる。

だが、同士討ちを避けるために、基地内であまり火器の発砲ができないらしい。

格闘戦を行いたくても所詮は無人機…防御魔法を持っている魔導師相手では分が悪いだろう。

誤射を避ける為のAIの思考ルーチンが仇となったな。

「レッドクリフ3、ストレートキャノン！」

「レッドクリフ9、ストレートキャノン…！」

「レッドクリフ4！ストレートツ！キャノンツ…！」

三乗の魔力砲が敵の屍を増やしていく…通路が狭いので被弾しやす

いが、それは敵も同じだ。

俺たちは、通れるだけの道を明けるとそのまま突っ込んでいく。後方から轟音が聞えてきた。どうやらB分隊も奮戦中みたいだな。

『300m先メインシャフト…隔壁が降りていきます！』

「ちっ！お前らそこで止まれ！ヴィズ、グロム起動、シークエンス・キャンセル」

『了解』

「フオックス4」

隔壁が降り切る前に、俺は発射シークエンスをキャンセルしたグロムを発射した。

普段のより3割程威力が低下しているが、何とか物理破壊でも隔壁をぶち破る強さはある。

放たれた魔力の極光により、目の前の隔壁が音を立てて吹き飛んだ。

「ぐう… A分隊続け」

「了解」

シークエンス・キャンセルは、リンカーコアと身体に負担がかかるが、今は休む訳にもいかない。

俺たちは任務を遂行する為、そのままメインシャフトに突入し、下に向かって飛び降りた。

しかしなあ、自由落下の方が早いとはいえ、この感じは気持ちが悪
い…。

飛ぶじゃなくて落ちるだから余計にさ…胃袋がよ？上に浮き上がる
感じがするんだぜ。

まあそれは置いておいて、俺はヘッドクォーターに通信を入れた。

一応予定ではこれで作戦は第三段階…基地破壊の為のフェイズへと

移行する筈だ。

「レッドクリフ1からHQへ…メインシャフト内への侵入に成功した。」

『HQ了解 全部隊に通達！作戦は第3段階に移行する。』

その通信を終えた直後。

『下方より敵反応多数！魔導師です！』

「やっぱり、待ち伏せしてやがったか！隊長！！」

「アローフォーメーション。」

メインシャフトに侵入した俺達を倒す為に、敵さんも増員を送ってきたようだ。

俺はヴィズの防御魔法の出力を上げ、俺を先等にして他の連中が続く様にした。

こうすればそう簡単には流れ弾で死ぬことは無いだろう…多分。

「ヴィズ、多層プロテクション5層前面集中展開！」

『Yes、マスター、プロテクション集中展開』

序でに複数の障壁を展開したので、目の前に分厚い魔力の障壁が出来る上がる。

通常の魔導師にこの障壁を破ることは難しい…出来るやつは白い悪魔さん位だと思いたいウン。

『敵防衛線突破、中枢区画まで後130秒…』

「隊長、あと少しですな。」

「レッドクリフ…作戦中だ…気を抜くな…」

「りょうか…ドシューッ！！…うぎゃー！」

「！！ なんだ?!」

いきなりレッドクリフ7がビームで撃ち落とされただ?!?

「魔力反応は無かったぞ?!」

『魔力ではありません。アレは光学兵器です。』

何! 敵さんそんなものまで持ち出したのか!

「全員散開!! 回避運動を取れ! もたもたしていると食われるぞ!!」

『前方に駆動音探知、センチリーガンが設置されています。ビーム型も多数確認!』

「ちっ、各員臨機応変に対処せよ! 障壁を常時展開しないと落されるぞ!

お前らの糞度胸ここで見せてみる!! レッドクリフ1フォックス2! フォックス3!」

アルアツソーモードのヴィズとM82A1から多重弾核弾が放たれ、センチリーガンを打ち抜いていく。

自由落下中なので、他の連中は逃げ回るばかり…俺だけが何とか攻撃している状態だ。

正直、基地内部にココまで過剰な装備を入れておくんてな…敵さんもようやるぜホント。

そんなこんなで、センチリーガンを壊せるだけ壊していると、通信を求める音が聞こえた。

『（此方レッドクリフ21、聞えますか隊長!）』

ヤードから通信? なんだこの忙しい時に!!

「（なんだ！悪いが今手が離せんのだが！…そこッ！！）」

俺を狙ってたセンチリーガンを撃ち落す。あぶねえ。

「（おっと…手短に話せ…くっ！）」

「（この基地の情報端末からメインAIにアクセス、八割を掌握しました！）」

現在データコピーを行っています。そのデータの中に気になるものが…」

「（なにが入ってた？敵司令の秘蔵コレクションでも入ってたか？）」

「（その方が何倍もマシですよ隊長。この基地、生体兵器やデバイスを埋め込んだサイボーグ等の人体実験もしていたようです…わが軍の捕虜を使って…）」

なっ！何処のスカリエッティだよ！！

「（捕虜がいるのか？）」

「（分りません。ただデータには中枢部に搬入としか書かれていませんから…）」

「（一応搜索しろ…もし生きてるヤツがいたらソイツが証拠になる…条約違反だからな。こっつりと絞れるぞ。）」

「（了解）」

全く…戦争のドサクサで何やってんだか…

その後も落下を続けながら、何とか中枢部への侵入に成功した。

.....

.....

.....

ニューヘルバ基地最深部、反応炉区画

「A分隊集合、損害報告」

「レッドクリフ4、7が殺られました。それと5、8が負傷、戦闘は難しいです。」

「……反応炉破壊には俺とレッドクリフ2で行く……6と9は5と8を連れて後退しろ。」

「了解」

なんとか全員で中枢部へたどり着いたモノの予想外に敵が残っていた所為で何人かやられた。

魔導師は優先で倒したから、残りが殆ど無人機だから良いけど、後続がきたら少々不味いかもな。

とりあえず後退していく部下を見つめながら、唯一この後俺と行動を共にする副官へ指示を出す。

「ジェニス、ここからは無闇に砲撃魔法等は使えん。前衛は俺がやるから射撃魔法で援護を……」

「了解、背中には任せてください。」

ヴィズの箱型マガジン魔力チェンバーを予備に切り替え、フォームをストライカーへ変える。

ここからは、俺とジエニスの二人だけで進む事になる。
正直心細いが仕方ない…地上で頑張ってくれている味方が崩れる前に破壊しないとな。

「行くぞジエニス…目指すは反応炉だ」
「Yes, Sir!」

流石に反応炉を落とされたくは無いらしく、敵の質が上にいた奴らとは一線を架していた。

だがこちらにも時間がない為、力押しで俺が防御力にモノを言わせ
て突っ込んで攪乱。

撃ち漏らした敵をジエニスが射撃魔法で息の根を止めるというコン
ビネーションで進む。

何とかココを防衛していたと思われる、最後の魔導師を殺したとこ
ろで、また通信が入った。

『（此方レッドクリフ21、…ザザ…隊長聞えますか？）』
「（ややノイズが入るが聞えるぞ…どうした？）」
『（先ほどB分隊が中枢部に突入したのですが、捕虜だったものを
発見しました。）』

だったもの…か。

「（…皆殺しか？）」
『（正確には実験台にされたようです。何かに引き裂かれたような
死に方でした。）』

エグイねえ…幾ら戦争でもやっていいことくらいあるだろうが…全
く救い難いぜ。

「（…遺品を回収してやれ…あと研究区画と思われる場所はデータをコピーし終えたら、
念入りに…徹底的に爆破しろ！隊長であるこの俺が許す）」
『了解、あと捕虜を引き裂いたと思われる実験体ですが移送データによると、
どうやら反応炉の防衛にあてられたようです。用心を…』
そう言ってヤードは通信を切った。

反応炉、隔壁前

俺は反応炉の手前の隔壁前に来ている。
なんかね…エライ分厚い隔壁なんですよ。そんで俺の本能が告げてるんです。

あけちゃだめ……………って…ぶるっ。

と、とにかく不吉な何かを扉の向こうから感じるんです。
できる事なら回れ右して帰りたいのですが任務だし、それに

『マスター！やりました！隔壁の制御の把握に成功しました！…！』

この子がね…張り切ってくれたんですよ…はあ。

「…隔壁、解放。」

『了解』

ゴゴゴゴゴゴゴゴッッッッ！……………ガゴンー！

あー、開いたね…。

扉を開けるとそこは……………反応炉でした。うんほかに何も無い。

「…レッドクリフ2、制御室で反応炉を緊急停止させる…その後爆発物をセットして撤退する。」

「了解」

ゾワ…

「！！」

「わっ！ちよつと！隊長！」

俺はジェニスを押し倒した…。

その直後、俺らが居た位置を何かが抉りとった…てか重金属製の床なのに！！。

「いてて、隊長…俺にそんな趣味は…」

「馬鹿言っでないで後を見ろ！ジェニス！」

全くなんでこんな所に配置するんだよ…ラスボスかつての！

まるで水死体みたいで継ぎ接ぎだらけな肌、異常発達した右腕、光りを反射しない濁った瞳。

ソレと体中に埋め込まれ盛り上がっている機械類…間違いねえ、こいつが報告にあった

「『実験体』か…クソ」

ソイツは白く濁った目で、こっちを見続けている…見えてるのは分らないが、恐らく元は人間だ。機械を埋め込んで自由を奪い…次元世界の生物と融合させたり…人間がすることじゃないな。コリヤ原作のスカさんのほうがまだ可愛くみえるぜ…少なくともこんなのは作って無かったし。

「た、隊長…」

ややビビった声を出すジェニス…まあ気持ちは解る。俺も素面であつたら失禁しちまうくらいのインパクトだ。まあとりあえず指示を出さなくては…。

「俺が仕掛ける…お前は制御室に行け…」

「…しかし…」

「お前に…アレの相手ができるか？」

「く…了解…」

こうして会話しても実験体からは目を逸らさない。奴さんもこちらを伺うかの様に微動だにしない。生き残るには…やはり倒すしかないみたいだな。

「ヴイズ…」

『了解、キーンセイバーを殺傷設定から物理破壊に移行』

俺は剣を構え直し、相手を見据え……一気に相手の領域に踏み込んだ。

「……………はっ…！」

ガン！

初撃は簡単に防がれて金属に弾かれたかのような…ありえない音がした。

【 ……！！！】

どうやら今ので怒らせちゃまったみたいだな…

【 ……！！！】

実験体は右手の爪を大きく振り被り…

ヴォン

音速を超える速さで振り下ろした。

「ちいっ！」

『ローラーダッシュ』

脚部のモーターが唸り、敵さんの爪が掠りはしたものの回避する事に成功。

ふいー、あぶねエーヴィズが機転利かせてくれなかったら、この物語が終わっちゃうところだったぜ。

しかし、あの爪は脅威だな…全体の動きはソレほどじゃないけど、右腕だけ妙に早いぜ。

「シユート」

『フォトンバレット・シユート！』

射撃魔法を一発…あくまで布石でしかない ヴォン！
な、何！？

「ぐはっ！」
『マスター！』

くそが…腕が伸びやがった。おまけに肩に…爪、刺しやがって…
げほっ…アバラも…折れた…かな…うっ。

「ゲホッ！」
ビチャ！

あー…口の中切った時とはまた違う鉄の味が…。

「やろっ…」
『マスター動かないで！』

おいおい…うごかねえと潰されるぞありや。

【……………】

なんだ…なんで、こっちを見てくる…？

【ゴロジテ…】

いま“殺して”って聞こえた 空耳か？

【……………】

「ちい！」

多重プロテクションを展開した俺を、そのまま伸ばした腕を使い吹き飛ばした。

多層式のプロテクションごと吹き飛ばすなんて…なんてパワーだ…

「ヒュ…ゲボツ！」

『マスターこれ以上は！』

【ゴ　ロジ　テ　ロジ　テ…】

間違いない…殺してって…言ってる。

被害者の人格も移植してんのかも…胸糞が悪い…。

「ヴィ…ズ…キ、キーン…セ…バー…CS」

『しかし…』

「はや…く」

『了解、キーンセイバーCSモード』

二振りの剣だったヴィズが合わさり、1つの大剣に変わる。

キーンセイバー・クライシス・スキュア・モード…通称K / C / S。己の魔力を更に乗せさせ、極限まで収束させた魔力刃は触れたものを粒子にまで還元させる。

俺は意志の力で痛みをこらえ、剣を構えた…伊達に母上からの訓練を受けていた訳じゃない。

「いく…ぞ…」

『…チェンバー・ロード』

ガシン！ という音と共に箱型マガジンからカートリッジで言うところの3発分がロードされる。

「くらえ……」

『デイメンジョン・グレイブ!』

カートリッジ三発分を消費させ、膨れ上がった大剣を実験体に振り下ろす。

爪でガードしようとしたのか、実験体は右手を挙げるが

ジュ……

魔力刃に触れる直前に、右腕がグズグズになって崩壊、消滅した。

「はあああ……!!」

遮るものが無くなった光の刃はそのまま実験体の身体の半分を照らす。

そして実験体を粒子にまで変換させながら……白い機神の剣が

ザンツ……

無慈悲に……そして静かに振り下ろされた。

いや彼らにとってはこれが慈悲なのかもしれない……。

声も挙げる事無く絶命した実験体だったが、剣で斬られるその一瞬。その顔は眠りにつく事が出来るかの様に……とても穏やかだったからだ。

「ぐ……」

『マスター！？』

そして、俺も限界に来てしまったようだ…目が霞む…ぜ。
と、とにかく応急処置を…。

「ヴィズ…リペア…」

『しかし、魔力負担が…』

「チェンバーを使え…急いでくれ…目が霞ん…で…」

『は、はい！リペアパック起動、応急システム展開！チェンバー内の貯蓄魔力を消費します』

リペアにより傷が一応はふさがっていく。

それによって大分楽にはなったものの、気を抜けば意識が飛んでしまいそうだ。

「中尉！」

「…ジエニス…反応炉は？」

「停止させました。爆発物のセットも完了…あとは離脱するだけです」

「よし…时限装置…起動…ここから…離脱する。」

正直息も切れ切れ、限界まで消耗してしまった身体は言う事を上手く聞いてくれない。

立ち上がるうとしたが、景色がふらついてしまい立てない…これは血を流しすぎたかな？

「だめだな…立てない…ジエニス…俺にかまわ…」

「かまわず逃げろっていう命令は無いですよ隊長。よいショット。」

いきなり抱きかかえられた…しかも…お姫様抱っこ…！せ、せめて…

「おんぶ…位…してくれ…はずい」
「時間が無いため却下します。(H.Q. レッドクリフ1負傷、至急後送の準備を頼む)」
「クソ…あとは…たの…んだ」

ここで俺の意識は一旦途切れた…。

「うぐ…ココ…は？」

『あ、マスター気が付きましたか？ココは味方の野戦病院です。作戦は成功しました』

「ヴィズ…か」

俺が次に目覚めたのは、敵さんの基地からほど近い、味方の野営基地の野戦病院だった。

「アノ後どうなった？」

『あ、ハイ説明させて貰いますね？まずは

』

ヴィズからアノ後なにが起きたのかを聞いた。

あの後、副官のジェニスが指揮をとり、爆発物のタイマーをセットして脱出。

地下に造られた反応炉の爆発と、基地内部に仕掛けられた爆薬によって基地は内部から破壊された。これによって、もはや基地として機能する事は出来無いだろうとの事。

「ふむ…そうか」

『なんとか生き残れましたね…いやはやマスターが気絶した時はどうしたモノかと…』

「なあヴィズ…」

『はい？何でしょうか？』

「今回…何人哨戒任務に行った？」

『……………6名です』

「そう…か」

俺たちの部隊の損失は、ABCある分隊あわせて6名が哨戒任務に旅立ったらしい。

犠牲が出る事は覚悟していたが、やっぱり実際に出るところたえるな。

「辛い…な」

『辛くても…任務ですから…』

「ふふ、確かに…あまりにこういう事が多すぎて…もはや泣く事も出来ない」

『マスター』

昔は映画でも泣けるほどの純情だったのにな…人間ってのは物事に慣れる。

もう部下が死んだくらいじゃ涙も出やしない…人が本当に死んだっていうのに…。

「はあ…止めておこう…ヴィズ、後何か報告はあるか？」

『あ、ハイ…失った人員の補充が来週にもあるそうです。詳しくはジェニスさんに聞いてください』

「そうか…ヴィズ、俺は…後どれくらい寝られるか？」

『ざっと3時間くらいでしょう』

「2時間後に…おこしてくれ」

『解りましたマスター…おやすみなさい』

今だけは…何も考えたくない…そう思い再びベッドの中に入り泥のように眠りを貪った。

そして一週間後、俺たちは新しい兵員を補充され、新たな任務にかされる運びとなった。

それが兵隊、それが軍人、その事が頭で分つていても、心が受け止めるには時間がかかる。

そのため、この作戦からしばらくの間…俺の心が晴れることは無かった。

「兵士も人間…一日くらい休みもあるさ」

「兵士も人間…一日くらい休みもあるさ」

妄想戦記

セスル基地・隊長室

カタカタカタカタ……

ええっと、確かこの任務の時は第3機^{サイクロプス}甲魔導師部隊と一緒にたから掛かった経費は……折半でいいか　　っておいおい、その後の祝勝会の経費の書類が廻ってやがる？

これは事務の仕事だろうか…ったく。

カタカタカタカタ……

ん？新規装備品の概算目録か、どれどれ？・・・誰だコレ書いたヤツ？何でチョコバーが必需品の欄に記載されてやが…ん？

【長時間の任務中における効率的なカロリーの摂取法方として、携帯が安易なチョコバーは簡易食料として最適であり】

・・・むしろココまで書いた奴の顔がみたいな。

およ？やあ皆さんお久しぶりおはようコンニチワこんばんは。

今日は久しぶりに任務も無く、お外は晴れ渡って良い天気でピクニック日和だ。おまけに我が隊は働きぶりを認められ、一日だけではあるモノの特別休暇が認められたのだ！

カタカタカタ……

・・・そして俺は書類作業に追われている。うん、実に休日らしいね……。

「なんか…違う！」

『マスター、手と頭を休めないで』

「……………アイマム」

カタカタカタカタ……

え？俺がなにしてるかって？見ればわかるでしょ？

事務作業ですよ事務作業。大事な事なので二回言った。

ココ最近外で出張る仕事が多かったからさあ、書類たまっちゃってさ？

お陰で休日潰して作業中って訳よ　　っとデバイス整備関連の

資料はどこだっけ？

「検索魔法…アタラクシア…起動っと」

目の前に空間ディスプレイが投影される…えーと、あった！コレコレ。

結構こういった資料って数があるから、魔法でも使わんとやってらんねえや。

「はあ…デバイスショップめぐり…したかったなあ」

『マルチタスクに割いている思考リソースを、此方に回せば午後にはいけますよ？』

そう言われ、ジツと山（書類の）見る、休日よ……ってな。

はぁー、エベレストとは言わないが、富士山クラスは無いだらうマジで…。

「秘書官でも居ればなあ……」

『この人手不足に、一介の部隊長に秘書官をつける余裕なんて軍には無いでしょう。それよりも手を動かす！』

「うう……デバイスが厳しい……」

隊長職なんて……ていの良い事務員じゃ無いかあッ！！

と、心の中で叫んだ俺だった。

頑張った甲斐あって、何とかお昼（と言ってもすでに1時を回っている）には半分仕事を終えた俺。頑張った……マジで頑張ったんだぜ俺。マルチタスクと思考制御タイプライターに感謝だよホント。

あ、思考制御タイプライターっていうのは、その名の通り頭で考えた文章をタイプする機械の事だ。マルチタスクと併用する事で、通常の十数倍の速度で事務事後とが出来る優れモノなのである！

ただ難点として、頭の中で考えた事が全部文章にされちゃうからかなりの集中力があるけど……その弱点を補って余りあるほどの便利ツールなのだ！お値段は大特価の300US\$です！

・・・大分精神的に来てるなあ。早いとこ終わらせて外に行つて気分転換でもしよう。

で、ぶつくさ言いながら書類をドンドン消化した俺だけだけど・・・途中で気が付いた。

「これ・・・他の部署の書類が紛れ込んでないか？」

どう考えても、俺がやるべき書類はコレの3分の1なのだ。

でも、ココにあるのはその三倍・・・残り3分の2は一体・・・??

『あ、コレ第6強襲魔導師部隊のデバイス修理の請求書ですね？』

「はぁッ?!」

ちよっ！そんなの経費では落とせないし！というか俺じゃなくて事務の仕事だつてソレ!!

『こっちは第4陸戦砲撃魔導師部隊のですね。これはどうやら事務の人が間違えたつぽいですが』

「……………事務の方に行くぞ・・・流石にコレはおかしい」

どうなっただよ！こちとら休日返上して仕事してるんだぞ？
なのに、書類の半分以上が、本来事務がやるべき筈の書類だなんて
！以前からおかしいとは思っていたが、コレはあんまりだ！
そう思った俺は、基地にある事務課に向かう事にした。

〈セスル基地・事務課〉

事務課：ソレは軍内の庶務を一手に引き受けている部署の総称である。

魔導師というのはとにかく色々書類が多い。

消耗品であるデバイスの発注

新魔法の登録

飛行魔法使用の哨戒任務

その他色々

こついつた雑務を一手に引き受けて、俺達魔導師の戦争活動をサポートしているのが彼らなのだ。

人員は攻撃魔法が使えない人間ばかりだが、その事務処理能力は魔法を併用する事で群を抜く。

善なんだが……。

「おい……しっかりしろ……」

「へんじがない、ただのしかばねのようだ」

死屍累々というか……死体の山？

「い、いきてるよお……」

「お、生存者発見」

死体の山（だから死んでないって）から這い出て来た、事務課所属のまだ若い兵隊君。
何が何でこうなったのか、とりあえず理由を聞き出す事にしますか。

……

……

……

「はぁ？ワーカーホリック？」

「ええ、そうなんです」

なんだそりゃと思い、詳しい話を聞くと、大体こんな感じらしい。

事務課仕事する

普段でも手一杯

戦争始まり仕事増える

頑張つて仕事した
カーホリックに

仕事減らない

事務課長の大尉がワー

事務員にそれが伝染
る。

頑張り過ぎで全員ダウン

現在に至

本当はもうチョイ複雑ながら、ざっと簡単にすると大体こんなもんなんだそうなの。

あーえと、なんて言うか…。

「自業自得…じゃないかソレ」

『ですね。というか止める人いなかったのでしょうか？』

普通はそうなる前に、病院に行くなり有給取るなりするもんだがなあ？

特に事務課の人間は俺達と違って、職務規定に有給を取れる権利が盛り込まれている筈だし。

「さ、最初は…ドリンク剤のんで頑張ったのですが…一人倒れ二人倒れ…最後は俺だけに」

なんかもう啞然とするしかない状況だねコレ。サービス残業なんてチャチなもんじゃねえや。

しばらくすると、最後の生存者（！？）だった彼も、安らかな眠りに落ちた（死んだわけじゃないよ？）。
仕方ないので、とりあえず彼らは俺が通報して人を呼び、医療室へ直行する事になった。

全く、少しは自分の身体の事も考える

「
って…どうして俺のところに書類が来たか…聞いて無
い」

『事態が事態でしたから忘れてましたね』

まあ、後で聞いた話なんだが、彼らは以前から少しでも仕事を減らそうとしていたらしい。

で、事務処理が早い部隊長の順に、あまり重要ではない書類を紛れ込ませていたんだそうな。

しかもそれに気が付かず、おまけに早い人には優先的に紛れ込ませていたんだそうで……。

つまり、俺が頑張って仕事減らそうと頑張った行為が裏目に出ていたって事なのか？

……はあ、でもアノ人達の現状見てたら、文句の一つも出ないわ。

とりあえず、遊びに行こう……うん、それがいい。

何だかウチの基地の酷い現状に溜息をつきながら、俺は基地内の散歩に出る事にした。

なんかもうね、一連のアレで外に出かける気力もうせちまったよ。

しかし、あれだね。

訓練学校を卒業してから1カ月ちょいしか経って無いのに、随分と慣れたね……この生活にさ。本当は少々マズイんだが、人殺しに関するの抵抗感が、殆ど無くなっちゃったよ。

一応戦争協定には捕虜の扱いも載ってるんだが……いかせん戦争中は金がない。だから非殺傷設定なんて使うバカはいないんだわ。

え、解らん？簡単に言えば……そうだな……“生かすよか、殺した方が早い”ってもんでさ？協定じゃ捕虜の扱いつてあるんだが、ぶっちゃけ捕虜とる余裕なんてない。だから、戦争状態なんだしK I A

(戦闘中死亡者)とかにした方が都合が良いんだわ。

それに魔法弾一つで人は死ぬ・・・現在の魔導師がいる戦場に
いる生身の人間の命なんてさ？魔導師の力をもってすれば紙クズ、
いや糸くずみたいなモンなんだよ。

後、相手も魔導師だから、気を抜けないってのもある。気絶した
かと思っていたら、実は気絶した振りで、隙突かれて殲滅魔法で一
部隊全滅。そういった風に全滅した事例が、過去に幾度となくあっ
たんだそうだ。

故に現代における魔法戦は“見敵必殺”・・・見つけ次第即排
除が基本戦術となっている。

コレが銃とか使っている戦争なら、そう言ったことしなくても済
むんだけど・・・。

魔導師は一人でも爆弾みたいなモノだから仕方ないちゃ仕方ない
んだよねコレが。

しかしまあ…実質、魔力刃で斬り殺すなんて事は少なく、大抵
砲撃魔法や狙撃魔法で殲滅しちゃうから、あんまし人殺しの実感わ
かないんだ、ほんの1カ月ちょいは胃の中身戻してたのにな。

人間ってのは状況に“慣れちまう”んだよなあ・・・適応とでも
言うんだらうかね？

なんにしてもアレだ？・・・改めて魔法ってのは恐ろしい技術だ
よなあ。

ソレを扱う魔導師も含めて、もはや“兵器”だけ。扱うヤツ次第で
世界も簡単に終わらせられるよ。

でもまあ・・・多分この世界も、もうすぐ終わりだろうなあ。

次元航行技術は秘匿研究されているらしいけど、こんな血まみれの世界の住人を外に出そうだななんて、時空管理局が黙っていねえだろつよ。

恐らく戦争が終わっても30年くらいは、次元世界間の渡航だなんて夢のまた夢だろうな。

はあ、原作の世界に行ってはみたかったけど、俺の死ぬ世界は恐らく“ココ”だ。

何の因果か転生して兵士になっちまった…ま、コレも運命ってやつだろう。

ココで転生系に良くありそうな俺tueeee!!!系のオリ主だったら

『運命?そんなもん努力しない負け犬のセリフだろ?』とか

『どんな事態になっても俺は諦めない!絶対なのはに会っんだああ!』とか

『フツ、こんなこともあるつかと、次元転送用魔法を習得しておいた』とか

『ハア・・ハア・・フェイトたん』

とか何とか云いそうだけどさ。あ、最後のは無しで…。

ぶつちやけ、俺チート性能持つてるけど、どう考えてもこの箱庭から出る事は敵わないと思うぜ?なんでかって言うと、どんなに強い力があっても、ソレは所詮一個人の力でしか無い。

俺達は幾らチートでも、神さまって訳じゃ無い。飯も食うし休息もいる。あ、ジョブが神さまだって言うヤツのは除外な？話が進まなくなっちまうからよ。

まあ話を戻すが、俺達は人間、それこそ24時間以上、数万を超える魔導師と戦闘出来るなら話は別だけど、そんな力はいにく流石に持ってはいない。

あるのは、あくまでも遺伝的：もしくは先天的に優れた魔導師資質でしか無いんだ。

そんな俺達が努力しても数の暴力に敵う訳がない。死ぬ気ならまた違うだろうが、俺は正直巻き込まれない限り死にたくは無い。逃げられるなら逃げるし、倒せるのなら倒す主義だ。・つと話がまたそれだな、失敬。

ま、ともかくだ。・人生には、努力しようが、諦めないだろうが、こんな事もあるとかと！と、準備しようが関係無しに、出来ない事。・・越えられない壁は存在するって事なのさ。

コレはあくまでも俺個人が考えた事だろうから、真実は実は全く違うのかもしれない。

それこそ俺が今言ったことの反対が真実なのかもしれない。

だが、現状においては

俺が言った事が真実だ。

この状況が変わるにはそれこそ・・・奇跡でも起こらないとだめだろうなあ。

「そんなご都合主義…あつたら良いんだがなあ…」

『マスター？』

「ん…何でも無い…」

俺達は、この“箱庭の世界”からは逃れられない・・・か。

あかん、どう考えても厨二病臭いやん！俺も働き過ぎで思考がヤバいわあゝ。

こういう時は、自主訓練にでも励んで汗かいて、嫌な事は忘れる事にしようウン。

そう思い、俺は訓練場へと向かった。

魔導師が使う訓練場は、この基地内には主に二カ所存在する。

一つ目は、出力リミッターをデバイスに設けた上で、障壁内に囲まれた部屋を使う屋内型。

二つ目は、出力リミッター無しで、思う存分動き回り訓練が出来る屋外型だ。

どちらにも一長一短が存在し、一概にどちらが良いとはいえないが、基本的に思いつきリヤル時。

俺達魔導師は屋外型を選択する…まあ勿論許可がいるんだけどね。

必要書類はすでに出しておいたから、問題は無い
あの事
務課が稼働すればだけどな。

話を戻すが、屋外では出力リミッター無しで出来るというメリッ
トがあるモノの、代償もある。

ソレは実際に怪我をしてしまうという事だ。

まあバーチャルじゃないんだから、当然魔法は痛いし、飛行魔法
が途切れて落下すれば怪我也する。

ある意味現実を肌で感じられるから、勘を鈍らせない為には最適
だけど、怪我は痛いぜ。

そういう意味だと屋内型の方が安心してできるし、ホログラム投
影の敵も出るから、戦術的バリエーションは豊富だ。だけど、やっ
ぱり思いっきりやるのなら、外に限るんだなあコレが！

「やっ…」

俺は訓練場に置いてある、とある機械の電源を入れる。

この機械は一人用の訓練の時に使うモノの一つで、クレー射撃の
ようにディスクを射出する機能が付けられている。とりあえず射出
するディスクは300枚にセット、射出間隔は一番短めにセットし
訓練を開始した。

.....

ガシユンという音と共に、一度に3〜4枚のディスクが射出される。
アルアツソーモードで展開したヴィズから放たれる魔力弾が、それらを撃ち落としていった。

一つ、二つ、三つ・・・最後の四つ目は、連射して跡形もなく粉碎する。

続いて機動させたのはM82A1、大型対物狙撃銃の姿をしている兵装デバイスの一つだ。

M82A1を構え、先ほどと同じようにディスクを射出するが、先ほどとは違う方向に向かっている。

スコープからの映像がヘルメットの中のHUDに投影され、すさまじい速さのディスクを捕えた。

そして、ドシンと肩に来るような衝撃と共に放たれた魔力弾は、ディスクを粉々に粉碎していた。

ソレを繰り返す、何度も何度も・・・一心不乱に、無我の境地で・・・。

こうして射撃を続けている内に、ディスクが無くなってしまい、そこで射撃は終了した。

仕方ないので、こんどは別の訓練をしようと思ったその時、訓練場

に誰かが来た気配を感じた。

「あれ？隊長、今日は休みじゃなかったんですかい？」

「ソレはこちらのセリフだ！外に行ったのでは無かったのか？ケイン曹長」

そこに居たのは、俺がこの隊に来た当初、一番最初に反抗心を示したケイン曹長だった。

「つか相変わらず良いガタイしてるぜえ……残念ながら俺はウホでは無いけどな！」

ちなみにこの人、最初の出会いがアレだっただけで、中身は結構良い人でした。

言葉づかいがチト悪いが、普通に会話してもかなり博識で常識人だし、アメちゃんくれるし。

「……べ、べつに御菓子につられてる訳じゃないぞ？本当だぞ！？」

「いやまあ……最初はそうだったんですがね？」

ケイン曹長は苦笑いを浮かべている、どうしたんやろか？

「なんかこう……落ちつかねえっていいですかね？シャバじゃ休めねえんですよ」

「しつかり休むのも、兵士の仕事だと思うが？」

「ジョーダン、休めねえところで休めだなんて。俺はとんちはきらいですよ?。」

「くく、違うない」

ソレもそうだな、俺達みたいな人間なら特にな。

「なら、俺の訓練に付き合わんか?」

「いえ、自分はまだ死にたくないの、回れ右をしたい所存でありまーす!」

「不許可だ。なに模擬戦じゃ無いから安心しろ」

「ソレを先に言っただけ欲しかったぜ、隊長さんよお?」

刹那睨みあう俺達、そうしてお互い苦笑する。

「まあアレだ?魔導計測機と魔力霧散化装置の制御をしてほしいんだ・・・一人じゃ無理だし」

「アイサー隊長、付き合いますぜ?」

そして、別のエリアに移動する。

俺の休日は結局訓練と事務で消えたけど、まあコレもタマには良いか。

「まあ、いつかはこうなると思ってたさ…前編」

「まあ、いつかはこうなると思ってたさ…前編」

妄想戦記

戦場に偶然ってのはつきものだ。

大軍を前に奮闘して偶然にも生き残れる事もあるし、その逆もしかり。いくら気を付けていても、一度戦闘に入れば無事でいられる保証は無い。

そしてその日は、いつものように警戒ラインを突破した敵さんの迎撃任務の筈だった。

これまで何度もあったし、正直1日に4度のペースもあった。だからある意味、俺達もソレらの対応に慣れていた。

油断とかは無い、只どうやれば上手く相手が倒せるかに慣れただけ。そう、丸でお決まりのパターンがあるみたいな感じ……。
だけど

「嘘だ…うそだろう…」

俺達は忘れていた

「傷は…浅いんだろう！…おいッ！」

戦場に置いて

「逝くな！…おい！ふざけるな！…目を開ける！」

絶対に…お決まりのパターンなんてものは…存在しないって事を…。

『敵が警戒ラインを突破、第七魔導師部隊に出動要請』

「お、定期便の連中か？」

「全く懲りないねえ」

「こつちが殺そうとしても死なないから、かなり腕がいい連中なのは解るんだけど…」

「毎回誰か怪我すると逃げるモンな？」

「所詮腰ぬけなのさ。OCUの連中なんてさ？」

部隊の連中がそんな事を言っている。

まあ解らなくもないかな？連中すぐ逃げちゃうしさ。

正直、きちんと戦えやッ！って言いたい連中が出るのも予想できる。俺は嫌だけどね。このまま、あまり戦う事も無く終戦になってほしい。

「お前らッ！無駄口叩いてないで準備しろ！」

「「「イエツサー！ジェニス少尉殿！」「」」
「そういうのは良いからジャケット付ける！スクランブルなんだぞ
？一応……」

「おい、副官のあんたがそんなんでどうすんだよー？
とりあえず、今日も今日とて追い返す事になるだろうなあとか思い
ながら基地を出た俺達だった。」

……

……

……

「各分隊、報告を……」

『こちらA分隊、敵の姿発見できず』

『こちらB分隊、同じく敵の姿発見できず』

『C分隊も同じです』

「……どういふ事なんでしょうか？敵の姿が影も形も無いなんて」

さて、俺にも解らん。

ただ言える事は、“いつもとは違う”ってことだ。

「何かあるかも知れん……各員に注意を「な、何だッ！？」」
「アレは敵の強装結界かッ！」

しくじった。どうやら罠にかけられたらしい。
この辺一帯を覆い隠すくらいの規模の結界が、俺達の部隊ごと閉じ
込めてしまった。

「チツ各員散開ッ！一カ所に固待つてると、バラバラにされるぞッ！」
「結界魔導師は強装結界の解析を急げ！それ以外は結界魔導師の援護だ！」

俺の指示と、それを補佐するジェニスの指示が飛び、俺達は急いでこの場からの離脱を開始する。
結界さえ突破すれば、最悪一人でも転移魔法を使わせて基地に戻せば援軍が呼べる。
だが、そうは問屋が下さなかつたらしい。

ドゴオオオオンッ！
「な……」

見れば巨大な爆発が起こり、白煙を上げていた。
しかし問題はそこでは無かった……。

「C分隊……通信途絶……」
「何い?!」
『バイタルデータ……受信できません』

ヤード達とはすぐに連絡が取れる様に、回線は常時繋げてあった。
それが途絶したと言う事は……。

「敵は……高ランク魔導師……」
「もしくはそれに準ずるスキルの持ち主……か。ヤード……」

まさか一撃でC分隊が倒されるだなんて……いた仕方ない。

「結界魔導師は魔力隠蔽をしつつ後退、俺はこれより陽動を仕掛け

る」

「では隊長、自分も…」

「ジェニスは残って指揮を取れ…どうも嫌な予感がする」

「しかしッ！……いえ解りました」

A分隊の面々が後退していくのを確認し、俺は陽動を行う為、敵のところへと向かう。

しかし、連中は自信でもあるのか、はたまたジャミングが出来る奴がいないのか？

先ほどから、全然探知妨害をしていない、レーダーに丸映りだ。

「……出来ないのか…もしくは罠…か？」

だとしても、陽動をかける以上、俺は連中に近づかないといけない。
ハリファーマー
BAや防御魔法の強度を上げておくことにするか。

とりあえず、死なない程度に頑張らねえと…皆で一緒に帰りたいから。

Side 三人称

「クソが…どうなってやがるッ！」

フェンが移動を開始したところ、C分隊の唯一の生き残りが、逃げ回りながらそう呟いていた。

いきなりの奇襲によって、小隊は崩壊し、唯一生き残ったのは自分だけ。

しかも運の悪い事に、先の攻撃でデバイスが損傷し、バイタルデー

夕の送信が出来なくなった。
辺りはジャミングされていて通信もできない。

お陰で自分が無事だという事を仲間に伝えられないと言う、絶望的状況。

だが彼は、一人になったものの、諦めずに仲間の元に戻ろうと必死だった。

「大体なんなんだアレは…」

そんな中、彼は駆け続けながら呟いていた。

敵からの殲滅攻撃を受けた際、彼は見ていたのだ。

こちらを攻撃してきた敵の…その異常性を…。

「なんでタイムラグ無しで、魔法使えるんだよ!!」

そう、魔法と言うモノは発動までに必ずタイムラグが発生する。

それは魔力を込める時間だったり、詠唱している最中の時間だったりと色々だ。

デバイスによつて大幅に短縮されては居るが、それらのタイムラグはいまだに存在するのである。

「まるで、手を動かすみたいに、自然に発動させるなんて…」

魔法と己は一心同体とでも言うのだろうか？

そんな技術をOCUの野郎どもは何時開発したのか？

そんな事を考えるヒマも無く、彼はひたすら逃げようとしていた…
…だが。

ドス

「ひゅ…が…」

仲間の元にたどりつく前に、彼の胸から光輝く魔力刃が生えていた。心臓からやや外れた位置、一瞬で命を狩り取られることなく、彼は死にたくても死ねない。

焼かれるかの様な痛み、苦しみ、もうろうとした意識の中で、彼がいだいたのは絶望。

最初こそ手足を動かし抵抗していたが、ソレも段々弱くなり、ピクンと痙攣するだけになった。

ソレは、男が絶命したことを悟ると、ゴミを払うかの如く死体を投げ捨てる。

「ククク…ククククッ」

ソレは晒う、いとも簡単に魔導師を殺せることに歓喜しているかの如く。

己の手に付着した血を舐め取り、ソレはひたすら晒っていた。

その目には何も映っていない、焦点の定まらないソレは、次の獲物を探しに戦場を走る。

その顔は、苦痛と快楽が入り混じったかのような色で染まり、傍から見れば狂気に映るだろう。

だが何よりおかしく映るのは、それは見た目にはデバイスを所持していないかった。

確かにデバイスを用いずに闘う魔導師は存在する。

だが、ソレはともわずかであり、特にこの戦時下に置いてソレを

行うバカはいない。

だれしもが生存率を上げる為に、デバイスを所持しているのは当たり前だからだ。

だが、それはデバイスらしきものは所持していない。

かわりに耳の後ろに何か光る板のようなモノが付いているだけである。

それは一通り走ったかと思っただ途端、脚を止める。

“みつけた”

近くに新たな魔力を感知したソレは、ニヤアと口角を歪ませる。そして新たななる獲物に向かって瓦礫の中を駆けて行った。

ちょうどその頃、フェンは敵部隊と感知した反応に向かっている最中であつた。

もうそろそろ、目視で確認できるはずなのだが、どうにもおかしい。普通なら感じる筈の、人の気配を感じないのである。

気配遮断に優れた人間は、確かにいない事は無い。

だが、こちらとも気配は消しているし、何より集団で気配を全て消す事は難しい。
しかも、魔力が微弱に漏れ出して感知されているのに、気配を消すと言っチグハグさ。

「……………まさか」

とある予想が頭をよぎったフェンは、隠れていた遮蔽物から跳び出した。

ソレは普通なら敵に見つかってしまふ行為である。

しかし、敵からは何のアクションも無かった。

何故なら

「くッやられた！」

敵がいると踏んでいた場所には、何かの機械が転がっている。
恐らくは魔導機械で、微弱な魔力を発生させる機械なのだろう。

「レッドクリフーから各隊へ！聞こえるか？」

『（ザ…ザザ…）』

『ダメです。ジャミングフィールドの力が強すぎて、ココからでは
念話は届きません』

「ダメか…」

コレは明らかな罠である。

罠かと思っただが、ソレらしきモノは感知出来ない。

まさか罠である自分が罠にハマるとは滑稽だ。

「クソ…対人警戒レベル5で移動す」ズガアァン！！ 何だ?!」
閉じられた世界である結界内で、遠くの方から破碎音が響き渡る。
辺りを見渡せば、煙が上がっている場所が見て取れた。だがソコは

『レッドクリフ隊のバイタルデータが、ドンドン消失していきます
!?!』

「なッ…」

ヴィズが悲鳴の様に声を荒げ、HUD上に部隊員のバイタルデータ
が投影された。

特別な信号を使っているソレは、余程の事が無い限り途切れる事が
無い。

そして、その事がHUDの故障などでは無く、次々と隊員の命が消
えていると言う証しであった。

「くそ、B分隊か…急ぐぞ、ヴィズ!」

『ローラーダッシュとジェットパック展開!』

俺は襲われている隊員たちの元に急行する為、ジェットパックを起
動する。

魔導エンジンに組み込まれたターボファンから蒼い火が上がり、一
気に加速した。

来た道に戻り、B分隊の元へ着くまで後数十秒もかからないところ
まで来た時。

『B分隊…バイタルデータ消失…全滅しました』

Sideフェン

『B分隊：バイタルデータ消失：全滅しました』

「なん…だと…」

バカな！ケイン曹長だぞ？！

あの腕っ節だけなら副長にすら勝つあの曹長が死んだだって！？

『動物的物の反応を感知、ココからの離脱を推奨します』

「だ、だが…」

『バイタルを送ってくるデバイスが破壊されたんです！人間が無事だとは思えません』

「……解った…… A分隊と合流すr」

ズクン！

「……………」

バツ！

頭上からの殺気に身体が勝手に反応し、回避行動を取った。

その途端、俺が今の今まで立っていた場所に、銀色に光る何かが落下し、砂埃が辺りに舞う。

今だ舞う砂埃を見て、俺の中の危険を訴える警鐘が鳴りやまない。

「…くっ！」
ビュッ！

そして跳び出してきた鈍い銀色のナニカ。
ソレは展開した多重プロテクションに阻まれて、辺りに落下する。
俺に向かって投擲されたのは、ナイフだった。

「チッ！フォックス2！」
『レールブラスター』

砂埃が収まらない中、俺はナイフが投げられた所に魔法を撃つ。
手応えは当然……無い。

「ッ！後退するぞ！」
『了解！』

更なる悪寒、お返しとばかりに飛来する魔力弾を避けながら、一気に後退した。
射出された紺色の魔力弾は、誘導性は無かったが、まるでショットガンの如く、効果範囲が広い。
着弾した際に爆発していた事から、至近距離で喰らえばかなりヤバい…というかエグイだろう。

「（ヴィズ、設置術式スタンバイ。コイツは危険すぎる）」
『（了解）』

そして、ようやく砂埃が晴れて、相手の全体が見えるようになる。

（？…デバイスを持っていない？そんな馬鹿な。アレだけの魔法を
あんなに早く…）

砂埃が晴れた所、クレーターの真ん中に居たのは、一人の男。
帽子付きのOCU軍純正デザインのバリヤジャケットを纏っている
が……

(コイツ…階級章が無い…)

考えられるのは特殊部隊か…はたまたこの世界の裏か…。
どっちにしろ、俺はこいつを倒さなければならぬ。

「返り血…C分隊のか…」

『敵討ちも兼ねますか?』

それが出来たらどれだけ良いか…。

コイツのバリヤジャケットに飛び散っている、尋常じゃ無い程のアカイもの。

C分隊の全員、至近距離で魔力刃にやられたのか…クツ。

しかもバリヤジャケットなのに、返り血が落ちていない。

つい先ほどやり合ってたって所か?なのに全然疲れた顔してねえぞコイツ。

「くかかか…」

…おまけに正気じゃないみたいだな。厄介すぎる。

正気だったなら、まだ付け居る隙はある。だが、死に対する恐怖が無い奴ほど、怖いもんはねえ。

杖を向けられようが、魔法を撃たれようが構わず、死兵になるタイプだなコレは…。

「コイツから生き残れば…良いんだけど…」
「くくくく…」

おまけに、感知出来る魔力量はSランククラス。
簡易測定だから正確には解らないけど、感覚からすれば大体ソレ位か。

「とりあえず…実力を持って排除する！」
「…!!かかかカッ!!」

得体のしれない魔導師と対峙する俺。
男は晒いながら、何故かこちらに手を向けて来た。
その途端、敵魔導師の周辺に数百を超えるであろうスフィアが瞬時に形成された。

「なッ?!」
ドガガガガッ!!
…ウグア!!
『シールド展開効率63%に低下!』

何だこの出鱈目な詠唱の速さは!?!明らかにデバイスなしの魔導師のレベルじゃネエぞ?
簡単な魔法ならともかく、さっきのは誘導弾、しかもかなりのスフィアの数だった。
まさかそれを同時展開したあげくに操りやがっただと?…デバイス使っても普通は無理だぜ。

一つの威力はそれほどじゃない。だけど数が尋常じゃ無いから、あまりの負荷に術式が持たん。
緊急展開タイプのプロテクションシールドでは、数回受けただけで

破られる。

俺はそう判断し、キーンセイバーを即座に展開して斬りかかった…
だが。

ガギンツ！！

相手も同じく魔力刃を展開、此方の斬撃は防がれる。

しかしそれじゃあ…甘いッ！

「ハッ！」

「！！？」

もう一本あるキーンセイバーが、塞がっている胴へとせまる。

鋭い一閃、しかし手ごたえは無かった。

「ぐるるる」

「どんな反射神経…してる？」

身のこなしがまるで獣じみている。

斬り付ける直前に、いきなり後方へと一気にジャンプしやがった。

掠らせた程度で、ほんの少し血が滲んでいる程度だ。

「がああああ！！！！」

響き渡る咆哮、獲物と認識された俺目掛けて刃を構え突進。

設置術式を強引に食いちぎり、放つ弾幕をモノともせず喰らいつ
こうとする。

「チィッ！」

『術式1番2番3番、強制解除！5 / 6 / 7番作動前に魔力干渉で

機能不全！作動しません！」

「術式は破棄する！チツ、コイツを…喰らつとけ！！」

バラバラバラ ……！！

アルアツソーモードのヴィズから放たれる火線が、目の前の敵に襲い掛かる！

だが俺の体質上、誘導が出来ない為、どうしても火力が直線となってしまう。

その所為で、射線を見切られてしまい、殆ど当たらない。

「ガアアアア！！！」

ドガツ！！

恐ろしい速さで接近され、防御魔法を使う暇も無く、一撃をくらってしまった。

左肩への衝撃、吹き飛ぶ装甲、貫通はしなかったものの、この感覚

……

「脱臼したか…クソ！」

「アアアアア！！！」

味方がいる状況ならば、ハメ込めるが今の状況では無理だ。

そんな隙を与えてくれる程の精神…というか理性が相手には残って無さそうだな。

幾ら治癒魔法でも、脱臼した状態で使えば、癒着したよりもひどい事になる。

「ク…ソ…たれがああ！！！」

『M82A1起動！』

片腕で、ガシヤンと魔力が充填された兵装デバイスを向ける。
だが

「がああああ!!」

バキン!

「折られた…だと、だが!」

ライフルタイプのM82A1は接近戦では使えない。

敵はそれを両手で持ち、力でへし折ってしまった…だが、ソレはあくまで布石。

「デバイス無しは…お前だけじゃ無い!」

手に一発だけ、ガルヴァドスの術式を展開させる。

ソレを至近距離にいる目の前のアイツに、殴りつけながら喰らわせてやった!!

敵の両手がふさがっているという、一瞬の隙をついた攻撃。

異常な反射神経をもつ敵も、さすがに対応しきれなかった様だ。

バガンツ!!

「ギヤアアアツ!!!」

魔力で強化した拳が、敵の顔にまるで吸い込まれるかの如く放たれた。

(っ!痺れが…!)

だが、固い装甲を持っているとはいえ、こっちも無傷で済むはずが無い。

脱臼こそしなかったが、残った方の腕も魔法発動の際の衝撃で痺れている。
これはマズイぞ…と、一瞬思考を逸らしてしまったのがいけなかった。

「くくく…“アクセル”」

「ぐがっ!」

敵は今まで使ってこなかった高速術式を突如起動。
いきなりで対処のしようがない俺は、そのままタックルまがいの攻撃を喰らってしまう。

比重が軽い俺の身体は、そのまま背後の廃墟に叩きつけられ、そのまま壁を突き抜けていた。
おまけに運の悪い事にぶつかった衝撃で、建物に止めを刺したのかそのまま崩れてしまった。
そして、俺は崩れて来たその瓦礫の下に生き埋めとなり、意識を失った。

「まあ、いつかはこうなると思ってたさ…後篇」

「まあ、いつかはこうなると思ってたさ…後篇」

妄想戦記

あらすじ

- ・ 敵部隊接近中でスクランブル。
- ・ 敵の罠にハマリ、結界に閉じ込められた。
- ・ 何時もの様に、部隊を分けたのが仇となり、各個撃破される。
- ・ 囿となる為に単騎前に出たが、敵を捕捉できずC分隊が餌食に…。
- ・ 謎の敵と交戦、戦闘中に瓦礫に埋まる。 今ココ。

とくん…とくん…

頭がぼーっとする。

とくん・・・とくん・・・

なにが、おこったんだっけ？

とくん・・・とくん・・・

ああ、そう　　敵に攻撃を受けて。

とくんとくん和くん・・・

瓦礫に埋まった。ってことはコレは夢か？

とくん和くん和くん和くん・・・!!

くそ、他の連中が戦っているのに、俺だけ寝てらんねえだろうが！

とくんとくんどクンドクン！！

起きろ、俺！有給休暇はまだ先だッ！！！！

ドグン！！

「ハッ?!」

か、身体が動かない?! ってそう言えばあいつの攻撃喰らって瓦礫の下敷きになっただんだっけ？
くそ、道理で目の前の映像が、コンクリートな訳だよ！B Aが壊れなくて良かったぜ。

「（ヴィズ!!!）」

『（マスター！気が付かれましたか！？よかった・・・）』

ヴィズが安堵の声を出しているけど、そんなところじゃ無い！

「（ヴィズ・・・俺はどれだけ眠ってた？）」

『（およそ10秒ほどです。先ほどの敵は現在交戦中）』

「（交戦中？・・・一体だれと、まさか）」

『（・・・交戦しているのはA分隊。ジェニス少尉が指揮をとっています）』

なん・・・だと・・・？

「（くっ・・・俺も出る・・・あいつらだけじゃ・・・ぐっ！）」

『（その前に治癒魔法をかけてください！肋骨が折れて内臓を圧迫してるんですよ？）』

「（そのようだ・・・な。今の痛みで・・・少し冷静になれた）」

俺は自分に治癒魔法をかける。その場しのぎの応急処置。だが、しないよかまし。

「（まったたく、ココまでされたのなら・・・アレには是非とも多重弾核弾をプレゼントしないと・・・）」

『（同感です）』

さあ、第2戦の始まりだ。

俺は多重プロテクションを展開。

そして

「シールド・・・バースト!!！」

バツガアアアンン！！！！！！！！！！

第一層目のプロテクションを爆破、瓦礫を吹き飛ばした。

「（ジェニス・・・ガルヴァドスを使う。退避しろ）」

そして、ガルヴァドスを起動し、敵さんに弾幕の雨を降らせてやった。

Sideジェニス

しくじった。

まず、脳裏に浮かんだ言葉はソレだ。

「レッドクリフ4が奴に喰われました！」

「チッ、7をそっちに回せ！弾幕を張ってヤツを寄せ付けるな！！！」

この強装結界を抜けるには、結界を崩さなければならぬ。

その為に、先ほどから結界魔導師が頑張っては居る。

だがまだ時間が掛かる。

「速い！速すぎる！！！」

「泣きごとと言ってねえで撃ちまくれ！当らなくても寄せ付けなければ良いんだ！！！」

既に部隊の8割が戦死、コレはもう事実上の全滅と言っていいだろう。

どうやら俺達は、あの小さな隊長にまた重荷を背負わせちまうようだ。

「こつちへ来る・・・ヒッ！」

「気を抜くんじゃ グシヤッ」

「クソが！また一人魔力弾にやられた！！」

A分隊もすでに戦力は半分になりつつある。

俺を含めて、陸戦魔導師が後2人、空戦出来るのが1人、結界が1人。

唯一の救いは、敵は弾幕を張れば近寄ろうとしない事だろうか？

「・・・だがこのままじゃ、ジリ貧か」

「・・・隊長はどこに行った？まさか逃げたのか？」

「・・・それが出来る人間だったら」

まだマシ・・・そう言い終わる前に、俺は防御魔法を発動させた。

ギユオオオオツ！！！！

「グッ！重たい・・・」

それは閃光、敵の放った砲撃魔法だった。

「デバイスも無しにこの速度、バケモンだ・・・な！！」

防御魔法の壁はドンドンひび割れて行く。

一体どんな仕組みで、コレ程の威力を引き出しているんだろうか？

そんな事を考えさせてくれる余裕も、与えてもらえそうにない。

「ッ！砲撃が途切れたら、弾幕急げ！」

「りよ、了解！！」

こっちはストレージデバイスだから、タイムラグは少ない。

だが、敵さんはデバイスも無しに・・・“手をかざした”だけで魔法をつかう。

敵は一人、数の上じゃこっちが圧倒的有利だ。

バキ・・・バキ・・・

(くそう、俺は防御魔法は不得意なんだぞ！！)

心の中でそう叫ぶ。

背後では仲間の結界魔導師が、結界に少しだけ穴をあけて、救援要請を出していた。

だが問題は、救援が来るまで俺達が生き残っていられるか・・・かな？

「隊長・・・」

今はこの場に居ない、あの小さな隊長の事を思う。

あの隊長なら死ぬはずはない・・・とは思っ。

女の子の様な顔をして、それでいて凶悪な戦闘能力とサバイバル能力の持ち主だ。

滅多な事じゃ死なないだろう。デバイスも秀逸だしな。

だが、その時

「(ジエニ・・・)」

(隊長?!生きていたのか!!)

ノイズが入っているが、確かに通信から隊長の声が聞こえた。

だが

「(ガ・・・ヴアドス・・・使)」

この言葉が聞こえた瞬間、あたまからサーっと血の気が引いて行くのがわかった。

ガルヴアドス、それはリーダー隊長がもつ広域殲滅魔法の一つ。

「おい!“ガルヴアドス”だ!隊長が“ガルヴアドス”を使うぞ!」

俺のその言葉だけで、生き残りの連中も、顔色が真っ青に変わった。そしてその後の行動は速かった。敵さんの砲撃が止んだ瞬間。

先ほどまで救援通信を送っていた結界魔導師が、全力で結界を張った。

そして

ズガガガガがガガガガガガガガガガガッ！！！！！！
!

敵の周辺が、爆炎と業火に包まれた。

・・・俺達も巻き込んで。

S i d eフエン

ガルヴアドスを射出すると同時に、俺はジェットパックを用いて一気にA分隊の元へと跳んだ。

放物線を描きながら、射出したガルヴアドスと一緒に落ちて落ちて行く。

若干俺よりも先に、ガルヴアドスが敵を巻き込みつつ着弾し、辺り一帯は火の海に包まれた。

味方も巻きこんでいたが、彼らはこういった事に慣れてい
ききちんと結界を張っているのも確認しているので、大丈夫だ。

「策敵」

『魔力残照が多くて、センサーがまだ効きません。キャンセル
ベル最大』

そこらにある障害物等は一掃され、開けた大地が広がっている。
だが、俺にはまだ敵を“殺った”とは思えなかった。

「…ッ!!」
ガギン!

とっさに、左腕にデフォで装備されているW・シールドを構えた途端、走る衝撃。

「くっ!」

『左腕部、盾使用不能』

見れば敵があつた魔力刃を振り抜いたところだつた。
そして壊れる俺の盾。

盾が壊れたのは仕方が無い、元々碌な機能をつけていない只の飾りの盾だ。

精々左手の防御がやや上がった程度の防御力しかない。

だがそれでも

「・・・砕け散れッ!!」

『ファイア!』

至近距離での隙を作りだす程度の役目は出来た様だ。

「!!!??」

ゴガガガガガ!!!

まさか敵も右手に持つアルアツソーからでは無く、突如胸の前に出現したスフィアから攻撃されるとは、思わなかった事だろう。

しかも放たれる弾はさっきの一発だけとは違い、全弾発射のガルヴアドスのモノだ。

「ぐぎやあああああ!!!」

連鎖爆発するその威力は、普通の魔力弾の比じゃ無い。
ミラージュハイドで術式を隠しておいてよかった。

「教官の技・・・覚えておいてよかった・・・ぐっ」
『損傷度B・・・無茶しましたね』

しかし、こつちも無事って訳じゃ無い。
至近距離でガルヴアドスを起動させたのだ。
当然こちらにも爆風を受ける事になる。

「バリアーマーBAで・・・よかった」
『そうでないと、今頃跡形もありませんよ』

完璧自爆技だわコレ。防御力が高いから出来る芸当だな。
あーもう節々が痛い。

「・・・ぐぐぐ」
「まだ・・・生きてるのか」

しぶとすぎる。

殺傷設定のガルヴアドスを至近距離で喰らわせたのにも関わらずだ。

「げひゃひゃひゃひゃ!!!」
「・・・ッ・・・」

だが、無傷って訳でも無い。

敵は俺と違い、通常のバリアジャケットよりも薄いヤツしか身に付

けていないのだ。

右腕は根元から吹き飛び、左手もひじから先が無い。それどころか、わき腹が大きく抉れ、腸の一部がはみ出しかけている。

出血もかなり酷く、放っておいても自滅する事だろう。

だが、この時はコイツを殺さなければならないと、俺の本能が警鐘を鳴らしていた。

どう見ても死に体、風が吹いただけで消えてしまいそうな命の火。コレ以上の攻撃は必要無さそうに見える。

「ひゃひ ごぼ ・ ・ げひゃ」

「・・・晒ってる？」

『！！？オートプロテクション！！』

突然ヴィズが俺を囲むかのように、障壁を展開させていた。そして衝撃が襲う。見れば足元から複数の杭が伸びている。ソレらは全て人間を貫くのにちょうどいい大きさで、しかも全て殺傷設定だった。

「けけ・・・」

ヴォン

そして、血液で水たまりが出来ているにも関わらず、目の前の敵は魔力刃を作り上げる。

先が無くなった、左腕の肘から・・・。

「・・・痛覚を外したのか・・・いや、コレは」

意図的に外された・・・恐らく以前の『実験体』とおなじ。
魔導師の兵器化・・・やっぱり、まだ続いてたんだ。

「うぶ・・・まだまだ」

一応言語は言えるが、現状認識は出来ない。
爆発で折れてしまった脚を引き摺り、目の前の標的（俺）に対して
攻撃しようとしている。

どう考えても失敗作・・・いや、この場合死兵として考えれば、こ
れ程の兵はいない。

何せ、コイツの所為で、俺の部隊は全滅だ。

「・・・ハッ！」

ヒュン

魔力刃が振られるが、ソレはどう考えても先ほどよりもずっと遅い。
身体の損傷がひどく、もう殆ど動かせない様だ。

流れ出る血を止めないので、既に顔は青を通り過ぎて白くなり始め
ている。

「ひひ・・・」

ヒュン

俺は出される、もはや斬撃とも呼べない攻撃を避け続ける。

本当なら、止めを刺してやればいい・・・。

部下を殺された・・・だがココは戦場・・・私怨をはさむなんて・・・。

「・・・アルアツソーモード」

『・・・了解』

俺はマシンガン形態になったヴィズを敵に向ける。

バシュン・・・ドサ。

一発の魔力弾を、心臓に撃ちこんだ。
とたん、糸が切れたマリオネットのように崩れ落ちる。
たった一人で、俺の部隊を壊滅させてくれた男の骸が、静かに転がった。

「・・・あつけない」
『マスター・・・』

たった一人・・・コイツ一人に俺の部隊は全滅させられたって言うのか？
目の前であつけなく死んで転がっているこの男に？

「・・・ッ!!」

思わず目の前の死体に手を振り上げそうになる。
それをなけなしの理性と自制心で抑え込む。

こんな・・・こんな。

「・・・はは」

『・・・マスター？』

「アレだけ部下が死んだんだ・・・哀しいんだよ」

おかしいよなあ・・・一粒くらい、涙を流してくれよ。俺は人間・・・
だろ？

『マスター、生き残りを集めて離脱しなくては・・・』

「わかっている・・・」

徐々に強装結界も解除されつつある。

大本の基点は、やはりコイツが動かしていた様だ。

上の方から解除されていつてるから、もうしばらくすれば全解除されるだろう。

238

「・・・ジエニス達、反応ある？」

『一応、生きてます』

「そう・・・何人生きてる？」

『全員で四人です』

「よかった」

よかった・・・俺一人残されなくて・・・。

俺はガルヴアドスの所為で、付近に埋まってしまった部下達を掘り起こした。

皆ちよつと疲れてはいるが、あの敵を相手にしたのに、擦り傷程度

とは運が良い。

「・・・はあ、隊長？ガルヴァドス使う際は、周りのことをよく見て使ってくださいよ」

「ああ、ええと・・・すまん」

「すまんじゃありません！お陰でこっちは生き埋めだったんですよ！」

生き残り連中は首を揃えて縦に振る。

いやだつて

「・・・あ、あのタイミングが・・・ちょうどよかった」

「ほう？それで私たちこと吹き飛ばしたと？」

「あつ・・・ごめんなさい」

うう、確かに俺が悪かったような気がするから、強く言えん。

「そ、そんなことより、ココから離脱する」

「ええ、何時敵さんの増援が来るか解りませんからね。お前ら、撤収だ！」

「」「了解」「」

皆声を出す。仲間が死んだけど、ココでそれを悔やむ事は出来ない。悔やむだけなら後で出来る。今すべきことは生きて帰る事だから・・・。

俺達は仲間の遺体の回収は後回しにして、この場から去ろうとした。

だが

「!!! 隊長!!!」

「え?!」

グシヤ

なにがおきた

「「ふ、副長!!!」」

「あ、あの野郎!!!まだ生きてやがった!!!ええい死ね!!!」

貫かれた・・・ジエニスが？誰に？

「クソ！俺は治癒魔法が使えない！」

「俺もだ・・・隊長!!!」

あの敵に？俺が止めを刺し忘れたから？

「隊長！すまん！」

バシッ！

「!？」

なんだ？ほほがいたい・・・？

「隊長！ 안타しか治癒魔法使えねんだよ！しっかりしてくれ！」

「！！すまない！ヴィズ、リペアパック展開！リペア起動！」

ええい、少しばかり放心していたようだ。

くそ、傷が深い・・・。

『リペアパック展開！治癒魔法作動開始！！』

傷は・・・なんてこつた寄りにもよって心臓の近く。

幸い心臓は外れてるけど・・・ココには

「リンカーコアが・・・」

『ぐ、脳波がどんどんフラットに・・・治癒が追いつかない』

くそ、リンカーコアも傷つけてる可能性が高いぞ！

おまけに今の治癒魔法だけじゃ回復が追いつかない！・・・だった
ら。

「MTS - 40内の残存を全て使え・・・」

『ですがソレではマスターの身体に』

「いいから！・・・使っんだ」

『・・・了解』

ガシャンという音と共に、残った魔力が全てリペアに回される。

「……ッ！」

途端全身に負荷が掛かる。

まるで大きな岩に乗られているかのような、ジワジワとした苦しみ。戦闘で酷使されていた俺のリンカーコアが悲鳴を上げている。

「隊長！くそ、俺たちじゃ何もできねえ」

「あいつに止め刺した所為で、もう魔力は空っぽだ」

周りの連中が見守る中、俺は負傷してしまったジェニスの傷を癒し続ける。

5分以上かけ傷を塞ごうとしたが、ヤツの魔力残照の影響か傷の直り方が遅い。

「嘘だ…うそだ…！」

俺は呼びかける。

「傷は…浅いんだろう！…おいッ！」

もうこれ以上、死なせたくない。

「逝くな!…おい!ふざけるな!…目を開ける!命令だ!」
「隊長揺さぶっちゃダメです!!副長が死んじまいます!!」

ましてや、目の前で助けられるのに…コレ以上死なれてたまるか!!

「目を開ける!ジェニス!!」

「…聞こえてますよ。全くおちおち寝てもいられない」

俺は神に祈った事は無いが、この時ばかりは祈ってもいい。顔をしかめているジェニスを見て、俺はそうおもった。

「オウノウ、髭だるまか・・・」

妄想戦記

やあみんな、相変わらずしぶとく汚く生き残っている転生者フェンだよ。

何気にあの部隊全滅した戦いから数カ月が経過しました。

戦線が緊迫しているお陰なのか、部隊を全滅させた俺にはお咎めは無かった。

あるとすれば今までの戦闘での功績が剥奪された位である。

そして部隊が再編するまで待機と名目上相成った。

その為空いた時間を訓練や事務にいそしんだ訳だが…主に事務関係に殺されかけた。

他にも、何気に顔見知りが増えたりして、俺なりにこの生活を続けていた。

だが、俺の中には小さいながらも、とある感情が燻っていた。

それは・・・憤り。

信頼出来た部下の殆どが、OCUだと思われる敵兵に皆殺されてしまった。

しかも自分が殺し切れなかった所為で、あわや優秀な副長まで失うところだったのだ。

己の未熟さと馬鹿さを呪いたい気持ちでもあったのか、最近更に表情が硬くなってしまった。

何とも馬鹿らしい話だ。自分は今だ未熟であると思うが、人間の心まで失いそうである。

このままでは社会復帰も難しい事になってしまふ事であろう。純粋な戦闘マシーンになりそうで怖い・・・実はこれは陰謀じゃ無いのか？

「・・・ハア」

全く持つて馬鹿らしい・・・そして、そんなチンケな事を考えられる自分が恨めしい。

任務が無いと余計な事を考えてしまふ自分にイライラする。

「あーもう・・・やってられん」

『マスター、訓練の時間です』

鬱だろつがなんだろうが、軍の規定により兵士は一定以上の訓練をする事が義務とされている。

当然俺もそれが習慣化しているので、重い足取りで部屋から出ようとした。

だが

コンコン

「？」

誰だろうか？今現在俺のところに来る人間はいない筈だ。

大体俺、部隊再編までは緊急事態にでもならない限り、名目上部屋

で謹慎みたいなモンだし。
まあ立っけていてもしょうがない為、とりあえず扉の鍵を解除した。

.....

.....

.....

.....

そして俺は今、何故か知らんが髭のおっさんと二人つきりである。

あ、ウホっでは無いので安心してくれ・・・そうでなかったら逃げてるわい。

「君が最年少の隊長とリーダー中尉かね？」

「“元”・・・ですがね」

現在は隊長職では無いのだ。

なので今の俺は隊長室じゃなくて普通の士官室に住んでいたりする。

「・・・で、あなたは？」

「おおっと、こちら名乗らないとフェアじゃないな。俺はヘクタ
ー・レイノルズとある部隊のしがない部隊長をやっている。ちなみ

に階級は少佐だ」

「失礼いたしました」

俺は慌てて敬礼を取る。

この髭親父は何かフランクな態度だが、一応こっちの方が階級が下である。

対外的にもきちんと敬礼をしなくてはならないのである。

「・・・敬礼はしなくていい。俺は固ツ苦しいのは嫌いだからな」

「ですが・・・」

「なら俺の前では普通にしている。命令だ」

「わかりました・・・で、ご用件は？」

「順応が早いなオイ」

だってそう言う命令だし、命令なら仕方ないじゃ無いツスか？
しかし、ヘクター？・・・どっかで聞いたような？

「ま、要件はな？・・・お前の部隊が全滅したことに付いてだ」

その言葉に、思わず身体がビクンと反応してしまう。

あのことは、軍の中でもごくわずかな人間しか知らない筈だ。

敵魔導師の亡きからも回収されたとは聞いたが、詳しい話は俺も知らない。

「・・・その件は既に裁断が下されており、自分にはソレを喋る権限はありません」

なので俺はこう返すしかない。でも何故軍の中でも内々で処理された事を知っている？

「ふん、大方上の連中に口止めされているってどこか」

「……………」

「まあこの件は俺の管轄でもある。上の連中もそう文句はいえんから安心して話せ」

この件が管轄？上の連中が文句言えない？

あれ？そう言えばヘクター…………あ！！

「………… “バーゲスト”」

「なんだ、俺の部隊の事をしてっていたのなら話は早い。ま、そう言う事だから知っている事を全て述べて貰おうか？」

バーゲスト、俺の元いた世界のゲームフロントミッション5に登場する部隊の名前。

『ソコム直轄、特殊機甲分遣隊、通称バーゲスト』がゲームでの名称だ

ちなみにこの部隊が出来るのはもうチヨイあとの筈なんだが、この世界では既に存在している。

この世界では『中央情報部直轄、特殊魔導師分遣隊、通称バーゲスト』となっている。

最初軍の資料にバーゲストの文字を見た時、嫌幾らなんでもまだ早いだろ？

とか突っ込み入れた事をよく覚えている。

そうかあ、なんか見た事あるかと思ったら…………ヒゲダルマの人か。てことは、最初から俺が誰とか事件の事全部知ってたな？この髭狸。

「事件についてはお前が出した意見陳述書しか目を通しとらんぞ？」

「…………声に出してましたか？」

「いや、顔見れば解る」

「……スゲエなバーゲスト。俺鉄面皮で通ってるのに。しかしまあ、とりあえずだ。」

「はあ、あんまり思い出したくは……無いんですがね」
「すまん」

素直に起きた事を全部話すことにした。

このおっさん敵に回したら流石にヤバいからなあ。

「コレが起こった事の全てです」

「ふむ、たった一人の魔導師による惨殺。しかもデバイス無しか・
・同じだな」

あの時の事を全て話した俺。

トラウマってワケじゃないが、あんまし思い出したい事じゃないの
思い出すのは苦だな。

「同じ?」

「……まあ、あの“ラプター”を親に持つ貴様になら話しても良
いか」

あのラプター?もしかして母上の事かな?

「貴様が交戦した相手。アレはOCUの連中じゃ無い」

「……成程」

「驚かんのか?」

「いえまあ、うすうすは感じてましたし・・・」

どう考えても正規軍じゃない上、無理やり見かけだけOCUだったもんなあ。

大体バリヤジャケットの設定は簡単に変えられるから、見た目の変化は重要じゃ無いし。

それよりも

「このご時世・・・デバイスを使っていないヤツは見ませんから・・・」

「ソレも含めて、とある話しをしてやろう」

髭狸から話されたのは、所謂国家機密、しかも暗い部分に近いところの話だった。

この世界にデバイスおよび魔法関連技術が持ち込まれて幾年。

各国はデバイスの開発に余念が無く、戦争も相まって技術的進歩は恐ろしい程だった。

そんな中、更なるデバイスの運用法として考えられたのが、術者とデバイスとの直結。

タイムラグを無くせるという画期的な方法

「我々はこうよんでいる。 “ S型デバイス” と」

「 S型デバイス？」

それこそ、人間工学、生物学、医学、魔法技術の粋を集めて考えられたデバイスである。

通常のデバイスともっとも事なる点、ソレは脳と直結する事により、デバイスそのモノをもう一つの魔法専用の補助脳にしてしまふとい

うもの。

人間自体がデバイスとなると言っても良いだろう。

魔法を使うという行為自体が手足を動かすと同じである為、タイムラグが無いのだ。

おまけにデバイスのセンサー類もダイレクトで術者にフィードバック出来る為、

近々遠距離接戦に置いてても、通常の魔導師のソレをはるかに上回る能力を有する事になった。

ある意味でベルカ式のユニゾン型デバイスとはコンセプトこそ似ているかもしれないが、

全く別の技術と観点によって生み出された新デバイスであると言っても良い。

外見的にもデバイスは保持している様には見えないのも特徴である。

何せ人間の脳自体、デバイスなのだから他に余計なモノを持つ必要が無い。

そして、簡単外科手術によって、少しでも魔力持ちの人間なら誰にでも扱えるようになる。

自分の思った通りに魔法を扱えるのだ。最初から歴戦の魔導師を手に入れる様なものである。

おまけにセンサーのフィードバックの影響からか、本人自体の視覚・聴覚などの感覚器も、

S型を使えば使うほど、鋭敏になっていくという。

何という・・・フロミ成分。

というかデバイスを使っていなかったじゃなくて、本人がデバイスだったのか。

「だがその分、我々には問題もある」

「我々？問題？」

「そう、我々だ。生体デバイスと化す以上、常にデバイスを起動し続けるという事になる」

ヘクターは己の頭を指しながらそう言った。

見れば彼の頭にも、銀色に光る小さなプレートの様なものが付いている。

「常にセンサーからもたらされる膨大な情報を処理する事になる。ようは脳を酷使するんだよ」

そう、それこそこのS型デバイスの最大の弱点。

長期的な面で見した場合の魔導師への負荷量の高さだ。

「他にも無理やりリンカーコアから魔力を引き出したりする。これも負担がデカイ」

通常待機状態でのデバイスの魔力消費量は、通常魔導師が普段垂れ流しにしている余剰魔力とそう変わらない為、戦闘状態で無い限り魔力に置ける負担はそれほど高くは無い。しかし、それ以外の肉体と精神の面に置いての負担量は、常人のソレをはるかに超えるらしいのだ。

「考えても見る？鋭敏になった感覚の所為で、寝ていてもネズミの足音すら感じ取れるくらいなんだぞ？」

「それはまた・・・」

とてもじゃないが気になって眠れないだろうな。

「だがその程度ならまだいい。センサーを切れば良いし、最悪薬に頼るって手もある」

「問題はもつと別だと?」

「その通りだ。S型には向き不向きがあるらしく、時に精神障害、記憶喪失を引き起して行く。我々にとつて、普段の日記は日々失われゆく己を保つモノとなる事もしばしばだ。まあ症状にはピンキリだから、俺の場合はそれほど酷くは無い」

対象者への心身の安全を考慮しないデバイス。

ある意味人道から外れた“兵器”と言えるものである。

何せそれ程高い魔力持ちで無くても、対人戦スキルを高めた人間なら即戦力になれるのだから。

「お前も見ただろう? 敵の異常性を・・・」

「・・・」

まるで支離滅裂、と言つか狂っていた。

いや、だが・・・

「レイノルズ少佐、質問があります」

「何だ? 言ってみる」

「・・・あの敵は、狂っていたと思われませんが、何故ソレで軍事行動が取れるのでしょうか?」

「ソレは正解であつて正確では無いな」

「というと?」

「アレは軍事行動を取るんじゃない。取らされるんだ。脳に入れられたデバイスによつてな」

予想していた事ではあつたが、実際聞くと胸糞が悪いなんてもんじ

やない。

つまり、あの敵は最初から人形であつたという事なのだ。

「デバイス自体が脳と直結しているからな。理論上デバイスを介して人間を操る事も可能な訳だ」

「・・・かなりの軍事協約違反・・・ですね」

「もつとも、こちらでもおんなじ研究がされていた。一概にどっちが悪いとは言えんがな」

「?・・・少佐もその?」

「ああ、その時の生き残りだ・・・さて、そろそろ俺は行かなきゃならん」

部屋の時計を見れば、長針が一回りするくらいに時間が経過していた。

レイノルズ少佐とはそのまま一言一言喋り、部屋を出て行った。

「はあ・・・」

『マスター先ほどの話は・・・』

「グイズ、さっきの話は記録容量から削除しておけ。完璧に機密情報だアレ」

どう考えてもヤバいなんてもんじゃない。

へタすると、あの敵とまた戦わされるとかされるぞ。

『了解しました。ところで、どう思われます?』

「・・・半分ウソ、半分ホント。フィフティフィフティ・・・だ」

恐らくエサを巻いて、大きな魚釣りをしようって腹だろつさ。

このタイミングで話しかけるといふ事は、俺に敵討ち的な何かを促そうとしたんだろう。

俺のバック・・と言うか親は軍上層部に食い込む人物だし、人脈を作っておくにも悪くない。

「まったく・・・本当に狸だ」

あいにくだが、部下が死んだ事は確かに哀しし悔しいが、俺は仇討する程の度胸は無い。

この戦争が終わるまでは・・・と言うか今すぐにも隠居したいくらいだからな。

「少なくとも・・・俺はアレの話には・・・乗らない」

『・・・記録削除します』

ああ、もっと平和で平穩に暮らしたかった。

生き残る為に必要だと思って力をつけて見たが、結局災いしか来ないんだよな。

過ぎた力は身を滅ぼすっていうけど、力がある時点で身を滅ぼしてよ。

「・・・もしかして、モーガン生きてんのか？」

『マスター？』

「・・・今のも削除しておけ。今日は・・・やっぱり寝る」

最悪だ。全く持って最悪だ。と言うか転生しての特典が強すぎるからなのか？

ああ、この世界だとOCU側だろうけど、縁側とお茶が欲しいよお。

ストレスで胃袋がマツハでピンチだよ。

恐らくフラグ来てるけど、ぜっていいイベントはおこさねえからな。

「平穩が欲しい」

『同意します』

俺は痛む胃袋と共に、今日はかなり早めに床に付いたのであった。

・ある日の通信回線ログ

『ようラプター、久しいな？』

『レイノルズ、私をその名で呼ぶな』

『誰だかわかればそれでいいじゃないか？まあそれはさて置き面白い情報があるんだが聞くか？』

『それは私にとって利益が出る話か？それとも損失か？』

『さて、そこら辺はお前が判断する事で……こっちの量分じゃ無いな』

『……まあいい、聞かせてみる面白い情報ってヤツをな』

『お前さんの子供が軍に居る』

『・・・・・・・・・・あー、レイノルズ。ジョークもほどほどにしていてくれると嬉しんだが？』

『俺はジョークは言うがウソは言わんぞ？気になるんなら確認して見れば良い。それじゃあな』

『お、おい！レイノルズ！！・・・切られた。 とりあえず確認してみましよう・・・。』

この数日後、USN軍の人事をつかさどる部署に所属する人間が、何人か消え去った。

行方不明となり、軍当局も搜索したが何の手がかりも見つからず、OCUのスパイの仕業かと思われた。だが数日後、行方不明者たちにはあっさりが見つかった。しかし全員心神喪失状態であり、運よくも意識があつた一人は“弾幕が・・・空が落ちて・・・”と言って、そのまま意識を落し、現在も意識不明である。

全員極度の精神的なストレスにさらされたとの診断結果であつたが、結局全員口を聞けぬ状態にあり、当事者以外何が起こつたのか解らないまま、戦争中で操作が出来ず、この件は迷宮入りとなつたのであつた。

「連中には幻術をかけて、心神を喪失してもらったよ」

「そう、ありがとうアナタ」

「何、僕たちの可愛いフェンの為じゃないか」

「そうね。さて、勤務地の変更をしなくちゃね」

「ああ、あの子の顔も久々に見たいからね」

こうして、フェンの預かり知らぬところで、10歳以下の少年兵たちによる魔導師部隊を作るプロジェクトが、潰されることとなった。その事を前線に居る彼は未だ知らない。

「オウノウ、髭だるまか・・・」(後書き)

はっは！ヒゲダルマ出してやったぜ！！

ただ単にS型デバイスと絡ませたかっただけだから一回限りの登場
だけどな！

それではノシ

「ちょっと、両親自重してくれ」

「ちょっと、両親自重してくれ」

ヤア皆、激戦をくぐり抜けて来た歴戦の俺でも、今ちょっと拙い
というかなりヤバい状況だ……何でかって？

それは……

「フエンちゃん 逃げないと死ぬわよ？」
「……(ひいひい!!!)」

親にバレたんだよ！軍隊に入った事！！！！

実は既に軍に入ってから結構経ってんだけど、両親には話してなかったんだよね。

何気に俺活躍してたせいか、流れた噂が両親の耳にクリーンヒットしたらしい。

でもって、たまたま同じ作戦を行うことになって基地に猛禽と化した母上がいらつしゃったと…

「久しぶりに全力で行くわよ パーティクルダンサーズ！！」

ああ、視界いつぱいの魔法陣・・・もう、逃げられない・・・ハハハ、短い人生だったなあ。

それは何時もの朝だった。

朝起きてすぐ呼び出しがあり、司令官室に行ったんだが、その時から何故か背筋を撫でられるかのような感覚だった。

でも、特に何も変わらないのでそのまま司令官室に入ったんだ。

司令はいつもは、表情を変えたりはしていなかった。ただ、その日だけは違った

「リーダー中尉、ご両親が面会だそうだ」

と、いかにも笑いをこらえていると言った感じで、基地司令はそんな事を言ってくれた。

そして気が付けば部屋の扉が閉まる音・・・立っている両親の姿。途端本能的な恐怖を感じた俺は、身体が勝手に動き基地司令室の窓を突き破って逃亡した。

セツトアップしながら窓を蹴り破ったから、怪我とかはしていない。当然の事ながら、母上が追っかけて来た上、問答無用で魔法をぶっ放し始めた。

一応軍基地では、非常時以外での私用による魔法の発動を禁止している。

しかし、母上は事前に訓練の目的で許可を取っていた為、ふつうに使ってきたのである。

そんで逃げ回りつつも、ものすごく怒られました。演習場にて…。何が起こったかって言うとデバイス起動させて、魔力弾を撃って叱るってどうよ？

アンタはこの白い魔王さんですか？会話「攻撃ですか？死なないためにこっちもヴィズを起動させるしかないじゃん！！

そして、スーパーフルボッコタイムが始まりました。

こつちが悪いことは分かってるから手が出せない。

「フルバスターカノン展開」

「！！多重プロテクション全力展開！！急げ！！」

母上は杖から三つのバレルを展開。三条の光線が迫ってくる。
ああ、時が見える…じゃなくてヤバイ！死んでしまう！！

「カッティング・ブラスト」

「あわわわ…！！」

杖を振るえば、そこから20数個はあるうかと思えるほどの魔力刃が空を乱舞する…。

誰か、誰か助けてー！メ、メ、メデイイイクツ！

「よく耐えたわね？でも、いい加減止めよ」

「ちよっ！？」

「生と死の狭間より出でよ…フライング・ダッチマン！

！」

そして母上の奥義、無機物召喚最大級、召喚されし亡霊船が通過する。

ゴインー！

そして船に跳ねられる俺
えたんだお

この時、本当に流れ星がみ

気が付くと己の部屋に居た俺。

ああ、夢か・・・と思いたかったが、普通に両親が立っていたので夢ではない事が解った。

そして言葉による尋問訓練もとい・・・お説教がスタートし、俺の精神はドンドンすり減らされた。

消耗しきった感じの俺を見て、母上のお説教は終わったのである。

「 軍は続けても良いけど、危ないことはしないように！」
「?・・・軍は危ないところなんじゃ」「フェン・・・ちゃん？」
「ハイ！アブナイコトハシマセン。ガンホーノセイシンデス！サー
！」

物凄いいお仕置き（魔法有り）を何とか切り抜けた俺は、正座をさせられ両親に怒られた。

ちなみに父は言いたいこと全部母上に言われちまって、今は口を閉じてこつちを見ている。

でもさ・・・逆に見られているだけってのもつらいモノがあるよな？
無言の圧力ってヤツ？怒り顔じゃないのが余計にこうなんて言うか・・・堪えるんだ。

そして、お叱りタイムはもう終わりって事で、久しぶりの家族の団らんタイムになった。

俺はここまで来るのに何があったかを順を追って説明していった。

とくにお世話になったワイズ教官やソフィア教官と、どんな訓練をしたかの話もした。

意外な事にウチの両親と教官達は知り合いだった。

何でも母上も昔お世話になったんだそうな。

・・・ワイズ教官っていくつなんだろう？

久しぶりに両親と水入らずの雑談をしていく。

やっぱりね、精神が身体に引き摺られているのか。

両親と居ると安心できるんですよ。

しかし、その後、あまり話したくない話題を、両親は繰り出してきたのであった。

「ところで、なんでフェンちゃんは軍にはいったの？」

えっと、それさっき言いましたよ？軍の人から勧誘を受けたって。

俺がその旨を言うと

「違うわ…貴方が何故傷付いてまでここにいいのか？ってこと。」

あーごまかしは効かない雰囲気だな…仕方ねえ、本当の事を話すか…

「…俺が軍に入ったのは、他の子供を守るため（ソレと保身の為）」

「でもそれは大人がやること…」

「（フルフル）俺が軍に入らないと他の子供がこの役をする筈…」

その言葉に母上は言いかけた言葉を飲み込んだ。

「しかも俺よりも魔導師ランクが低い子供が…彼らでは、まだ人を殺すことに耐えられない…」

「でもフェンちゃんも…」

「そう、普通は耐えられない…」

実際血反吐を吐いたからね…言葉のあやじゃなくて文字通り血を吐いたからな。

死にかけて…死にかけて…何度壊れるかと思つたものか…。

「でも母さん言った。強い力を持つものが、弱いものを守ることは当然だつて」

今でもその言葉は、俺の心に刻み込まれている。

絶対に忘れることは無いだろう…戦争怖いけど。

「その思いがあつたから…俺は耐えられた」

「……………」

あながち嘘じゃ無い…英雄願望こそないけど、何クソオ！って感じで耐えていたからな。

兎に角、自分と自分の周りの人の為に精いっぱいだったヨ。

「力がある俺でもここは辛い…それにもう俺は戻れない。この手で…もういっぱい殺したから、

でも他の子供たちの心と平安が守れるなら…俺は耐えられる。殺した人たちの事も忘れない。

それが俺の背負う罰だから…」

これが俺の今の気持ち。

あの時、俺が行かなかつたら他の誰かが犠牲になっていた事だろう
……。
中身が大人の俺でも吐くほどヤバかつたんだ…こんなと子供が耐えられる訳無い。

元の世界じゃ一般人だったんだがなあ…使い古された言い回しだと俺の両手は血塗れだ。

もう人を殺している以上、俺は一線を越えてしまっているし、今更戻るなんて贅沢言わない。

そんなのは、俺が死んでから地獄で懺悔すればいいだけの事何だからな。

なんじゃかんじゃでここまで来ちまつたんだから、今更逃げないさ。

こうなつたら意地でも終戦まで意地汚く生にしがみついてやるんだもんね！

じゃなかつたら何のためにこの世界に転生したんだかわかりやしないんだからな！

「だから逃げない…立ち止まらない…終わるのは…後悔は死んでからでいい…」

ここまで話したら両親が俺の前に立ち、黙って俺を見つめている。スツと両親の腕が上がっていく…叩かれるかな…と思いきや構えた。だが、俺は叩かれることは無く…俺は両親に

「「……………ギョ」」
「?!」

両親に…抱しめられていた…。

「もう泣かなくても大丈夫…不甲斐ない親でゴメンね？」
「……………ッ……………」

いつの間にか泣いていたらしい…うつろたえる俺を両親は再度抱きしめてくる。

肌に伝わる両親の温もりは、俺が小さかったころから全然変わっていない。

それが何だが無性に懐かしくて、そして悲しかった…

約束を破り、この両親に心配をけてた俺が、こんなにも愛されてもいいのだろうか？

そう思うと涙があふれ止まらなかった

「…ごめん……」

その言葉を述べた俺は、両親に抱きついてひたすら泣き続けた。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

恥も外聞もなく、“フェン・ラーダー”個人として…この両親の子供として泣いた。

だって状況が状況だったとはいえ、選んだのは俺だから…。

周りがそうだからと逃げたのは俺だから…。

涙を出し尽した俺は眠ってしまい、そのまま気が付くまで両親に抱きしめられていたそうなの。

こうして両親と再会した俺は、何故か両親と一緒に作戦に出されることが多くなった。

噂ではウチの母上が、俺と一緒に作戦に出る事を上伸（脅し）したという。

……昔から思っていたけど、ウチの母上ってどんだけえく？まさか母上、OHANASIが出来るのでは？……勝てるわけがねえ。

さて、両親との再開と言うなんかフラグ的なイベントがあった。だけど、俺の日常は変わらず、暇な時はいつも書類整理に追われている。

そこら辺どうなのよ？と両親に尋ねたところ、二人ともちゃんとこういった事は終わらせていらっしやるんだそうで…。

私たちにも出来るんだから、貴方も出来るわよ。とは母上の言である。

とりあえず何回目だったかは忘れたが俺はこう言っておこう。

俺はまだ年齢一桁の子供やっちゅうねんツ！！

まあそれは置いておくとしようか、ウン。問題はだ。戦争終わりました。

現代の戦争は電撃戦だっけって言うけど、まさかこれほど速く終わるとは。。。

なんでも停戦協定を結んだダケらしいので、結局ハフマン島は半分に分けられたままだそうだ。
でも戦争が終わったことには変わりはない。

戦争が終わったことに、喜びをあらわにする市民達の騒ぎが、基地にまで聞こえた程だ。

……流石に魔法乱射で花火代わりにするのは、どうかとも思うが。

まあみんな喜んでいたって事でしょう。俺も柄にもなく笑顔になれたからね。

とにかく、そんなこんなで戦争も終わったし、ようやく軍から抜けられる。

……とは、問屋が下さなかった。どうやら俺はまた頑張り過ぎたらしい。

以前の失態で軍歴こそ剥奪されてはいるものの、任務達成率はかなり高かった俺。

どうやら軍はそれを失う事が嫌だったらしい。
気が付かない内に俺は、母上の部隊に配属される運びになっていたんだそう。

ちなみにその事を知ったのは終戦3日後。両親からそう話された。ようやく帰れると安堵していた矢先の話だったので相当驚いた。

まあ大方、別の部隊に回される所を、今度はなんとか自分の手元に

引き寄せたつてとこか。
相変わらず母上はすさまじい。GMグレイザーの称号がふさわしいんじゃないか？

そんな訳で俺は今だ軍にいななければならないらしい。

最も戦争中では無い為、活動的には各紛争地帯でのPKFが主な任務になるそうだ。

前線真つ只中にいるよりかは遥かに安全である。

そして何よりも楽になったのは、もう俺に指揮権は無いのである。

故に戦闘だけに集中出来るのだ。これ程楽な事は無い。

母上の部隊だから、俺との連携は慣れてるし、慣熟訓練も必要ないだろう。

序でに何故かジャニスも俺と一緒に母上の部隊に入ることになったらしい。

彼も了承しているらしいので、なんだか今までと変わらんと感じる感じである。

問題は彼が母上の扱きに堪えることが出来るのかと言うところであるが、まあ大丈夫だろう。

こうして俺は、新たなる道へと進むことになった。

「ようこそ、特殊機甲強襲魔導師連隊、ストライクワイヴァーンズへ……ってか？」

今度は空母が駐屯地かい？……船酔いしなければ良いけど。

「死ぬのはイヤ… だけど死なせるのはもつとイヤ」

「死ぬのはイヤ… だけど死なせるのはもつとイヤ」

妄想戦記

さて、心機一転、今回新たな任務を受けた俺達。

両親の部隊と俺は、とある研究施設をジャックした敵部隊の制圧任務に来ていた。

この施設は、時空管理局の技術協力の下、所謂次元航行エネルギーを研究していた所らしい。

故に下手に破壊すると周辺を巻き込んで消えてしまう可能性もあるその為、俺を含めて母上父上…ソレと部隊の数人の少数鮮鋭で制圧する運びとなったのだ。

ちなみにその施設の出資者はサカタインダストリイである・・・陰謀臭え。

こんな所で戦闘なんて、ある意味正気の沙汰じゃないと思ったんだけど…

母上の部隊の人間はもう調教が進んでいて、イエスカハイしか言わなかったし。

俺も信頼されてるのか、俺と殆ど俺専属の副官ジェニス以外は待機

する運びとなった。

部隊の運営として、こんな事でいいのだろうかと母上を問い詰めたところだけど…

まあウチの母上だから……うん、仕方ないよね。

それに魔導師の軍隊は、普通の軍よか個人の融通も聞くからさ……多分問題無い。
突っ込みどころ満載だけど…突っ込んだらそこで試合終了だよ（何が?!）

兎に角、色々気にしないで任務にあたる事にした。

しかし、この時は思わなかった。

この任務両親との、最初で最後の初任務となるなんて……。

施設内最奥

「…この奥が最重要区画か……ヴィズ?」

『そうです。いまハッキングして扉を開きます。』

プシュー という音と共に、エアロックがはずれ気密の高い部屋に入った。

「（こちらレッドクリフ、重要区画へと侵入した。指示を乞う）」
「（ラプターマム了解、敵性反応が多数ある。まずはソレらを殲滅せよ）」

「(レッドクリフ了解)」

通信を切る。ちなみに俺のコールサインが変わらないのは、俺がそう頼んだからである。

引き摺るつもりは無いけれど、前の連中のことを忘れたくないとい。。。

まあ案外あっさりとOKされた。流石母上、大抵のことは何でもできるんだね。

「.....」

『敵性反応、接近中』

途端、背後の扉が閉まりロックされ、遠くで隔壁が閉まる音も聞えた。

多分トラップの1つなんだろう、序でにわらわらと無人機の団体さんが現れた。

俺以外の小隊のメンバーは、それぞれ重要なところを制圧しに行ってる為、ここには俺1人だ。

1人でこの狭い空間でやるのは、少々骨が折れるが・・・問題はねえ！

「ヴイズ」

『了解、キーンセイバー展開・・・いけます。』

「さて、それじゃあ・・・舞い踊ろうぞ・・・?」

俺は敵の集団の中に突っ込んだ。

前列の無人機の一機に狙いを定め、兵装を破壊してからキーンセイ

バーを突き刺す。

破壊したのは兵装部分だけなので、機関部は破壊して無いから爆発は起こらない。

そのままローラーダッシュの馬力任せ、無人機を盾にして呐喊する。

AIのプロトコル上、誤射は避けられるように設定されている為。敵は攻撃を停止してしまう。

だがすぐに命令が書き代わり、此方への攻撃が再開されるが、この一瞬があれば問題無い。

「ガルヴァドス！」

次々発射される魔力弾達。凶悪な威力のソレらは爆発という牙で無人機達を蹂躪していく。

部屋が狭い為、爆発の威力は恐ろしく集中するのだが、俺の防御力を揺るがすほどでは無い。

次の部屋では大型無人機械2体が待ち構えていた。そいつらは俺を見た瞬間、肩の大型のキャノン砲を俺目掛けて発射した。

だが、こんな狭い場所で大砲を扱えるわけがない。

「多重プロテクション」

多層構造シールドに阻まれて、砲弾はあらぬ方向へと飛んで行ってしまった。

次弾が装填される前に、出力を上げたキンセイバーで撫で斬りにして撃破した。

どれも強力な機械達だが所詮は無人機、対処法さえ覚えていれば楽

なモノである。

その後も事務的に敵を薙ぎ払って行き、全ての敵を破壊したところで念話が入った。

「(ラプターママから各チームへ!)」

「母さん?・・・(こちらレッドクリフ・・・)」

「(捕虜にした奴の情報で、この次元航行エネルギーを暴走させたらしい!全員直ちに離脱準備!)」

最悪だ。俺の現在位置が特に最悪だ。

ここ施設の一番奥だぞ?ココに到達するのにどれだけかかったと思っただ。

「(・・・暴走が起ると、どうなる?)」

「(研究所の資料によると、周辺30kmが虚数空間に消える!)」

「(！止める方法は?)」

「(残念ながら・・・無い。だが最重要区画を越えた先にある、次元航行エネルギー機関の制御室にある端末から直接制御を行えば、周辺へのエネルギー拡散は抑えられるらしい。だが、その代わり施設自体は虚数空間に飲み込まれ、操作した人間は助からない)」

ここら辺は・・・確か来る時に近くに町を見かけたな・・・

それに多分、俺の場合今から避難しても間に合わないか・・・。

俺は少し考えたが、どうにもこの考えが頭から離れない。

ふふ、自己犠牲は無かったんだがな。俺も変わったか。

「(レッドクリフからラプターママへ、秘匿通信の使用許可を…)」
「(こちらラプターママ、許可する)」

許可が出たので、俺はラプターママ事母上に、直接秘匿通信を開く。

「(…母さん、聞えてる?)」

「(どうしたのフェンちゃん、早く脱出しないと間に合わなくなるわよ)」

「(今ちようど、制御室にいる。…直接制御の仕方を転送してほしい)」

「(だめっ!フェンちゃん逃げなさい!制御室には別の人を回すから…!!)」

悲鳴をあげるかの如く、声を荒げる母上。

「(多分、間に合わない。それに制御室への通路は異常事態を感知して、隔壁が全部降りてる)」

この場所に来るまでに大分騒いだからな。

センサーが感知して、隔壁の殆どが降りてしまっている。

時間をかければハッキングで出られるが、カづくじゃ俺ではまだ無理だ。

「(此方からの脱出も到底間に合いそうに無い…)」

「(だけど…とにかく貴方は脱出しなさい!)」

「(ムリ…もう時間が無い)」

「(貴方を失いたくは無いの…お願いだから)」

泣きそうな母の声、普段の強い母上はどこに行ったんだか。

だけど、どうあっても逃げるわけにはいかねえんだ。
どちらにしろ逃げる時間も無いしな。

「（この近くには町がある。誰かが直接制御しないと……ソレが出来るのは俺だけ……）」

俺がそう言うと母上は黙ってしまった。

「（……ごめんなさい）」

たった数秒の沈黙だったけど……俺には恐ろしく長く感じた。

「（母さん哀しまないで、こういうのは覚悟はしてたから……とにかく早くデータを……）」

「（……判ったわ）」

転生して7年と半分、長いようで短かったな……つと
ヴィズにデータが届いた。

手順に沿って操作し外周部の加速リング内のエネルギー流を操作、
方向を炉心中心に集約させる。

緊急事態の為、エネルギーを別空間に流すヴォイドフィールドが展
開されている。

炉心に集まった次元航行用エネルギーは、自身のエネルギーを圧縮
されながら縮退。

最終的には落ちついていくらしい。

だが当然ながら、制御室はヴォイドフィールドの内側、エネルギー
の圧縮で何が起きるのやら。

さて、後は臨海を越える瞬間にボタンを押すだけ……まだちよっ

と時間があるな。

「(母上、聞える？父上も・・・)」

俺はつないだままの秘匿通信を入れる。

既にエネルギーの奔流が流れこみ始めているから、まともな通信は今の内にしかできない。

まあ、簡単に言えば・・・最後のお別れってヤツかな。

「(・・・聞えている)」

「(ここにいるぞ)」

若干、軍人モードが入っている母上と、こんなときでも変わらない父上。

これが最後だなんて、急展開過ぎるなあとか思いながら通信を続ける。

「(多分、臨界に入ったらもう話が出来なくなるから・・・今のうちと言っとくね・・・)」

俺は思いっきり息を吸って、ゆっくりと吐く。

そして今まで言いたかった事を、この場で言う事にした。

「(・・・ありがとう。そして好きだよ？お父さん、お母さん)」

「(・・・っ・・・)」

息をのむ音がした。だがソレは見えない。既に通信の画像は砂嵐状態だからだ。

なんとかヴィズの機能のお陰で、声だけは聞こえているが、時間は殆ど無いらしい。

「(二人ともまだ若いんだから、もう一人子供を作りなよ・・・俺は妹が欲しい・・・よ)」

「(ああ！任せとけ！お前と同じく可愛い妹を作るとも！)」

「(うん、後二人とも・・・ムリはしないでよ？俺も最後までがんばるから・・・)」

「(うん・・・うん・・・)」

「(それじゃあね二人とも・・・元気で)」

そう言うと俺は、一方的に二人への念話をカットした。

限界だ。これ以上二人と話したら・・・耐えられなくなっちゃう・・・。

「・・・っ！・・・」

湧きおこる生への渴望、まだ死にたくは無いと何かが叫ぶ。

だがもう遅いのさ。既に臨界が始まった。

・・・まだ通信回線は生きているな？

「(ジエニス少尉、いる?)」

「(・・・はい)」

どうやら、もう俺が逃げられない事を知っているらしいな。

話しが廻るの早く無いか？
まあ母上の部隊だしなあ。

「(こんな子供の下で・・・大変だったでしょう?)」

「(いいえ・・・いいえ!)」

「(でも、もうすぐ解放だ。俺の部屋に何故か酒があるから部隊の連中と分けていい)」

なんか停戦祝いのお酒だったらしいんだけど、ちよるまかしておいたんだ。

「（それと・・・今まで付いて来てくれて・・・ありがとう）」

「（中尉は・・・）」

「（・・・うん）」

「（中尉は俺がいままであった中で、最高の軍人でした）」

「（・・・うん）」

「（だからさよならは言いません！無事に戻ってきてくださる事を祈っています）」

「（ありがとう・・・最後まで足掻いて・・・みる）」

「（どうか・・・ご無事で　ザ　ザ　ザ）」

ついに通信回線もつながらなくなった。ヴォイドフィールドが機能し始めたらしい。

そろそろ時間みたいだな・・・。

「ねえ・・・ヴィズ」

『なんででしょうか？』

「不甲斐ない主人で・・・ごめんね」

『・・・謝らないください。貴方は私にとって最高のマスターです。あなた以外にマスターは要らない』

「うん・・・グスッ・・・ありがとう」

どこか冷静な部分が、強く出ているお陰で取り乱す事は無い。
訓練で身に付けた事に感謝だな。

ゴゴゴゴゴゴ

さあ、言いたいことは言った。あとは野となれ山となれだ！

『次元航行エネルギー、臨海突破まであと10、9、8、7

』

「6

「5

「4

「3

「2

「1

「制御弁・・・開放！」

ブーーン

あれ？何もおこらない？ スゴゴゴゴゴ！！！！

な訳ないか…

『炉心が融解を始めましたね・・・この区画が飲み込まれるまであと10秒』

うん、的確な解説ありがとうよ、ヴィズ。

「時間みたいだな。皆・・・俺、先行ってるよ」

目の前では巨大な光球となった炉心が、徐々にエネルギーを増しながら広がっていく。

次の瞬間、まるで風船がはじけるかの如く、膨大な量の次元航行エネルギーが放たれた。

俺はそのエネルギーの奔流にのみ込まれる。

「ぐぐぐ……う、ああ……」

そして身体の中をグチャグチャに引つ掻き廻される感覚と共に意識を失い。

その流れに身を任せたのであった。

「死ぬのはイヤ…だけど死なせるのはもっとイヤ」(後書き)

*・・・まだ続くよ。

「みんなは奇跡って奴を信じるかい？」

「みんなは奇跡って奴を信じるかい？」

妄想戦記

S i d e 三 人 称

次元航行エネルギー炉の暴走に巻き込まれたフェンは、その膨大なエネルギーに飲み込まれ、そのままヴォイドフィールドの作用によって、異空間に流されてしまっていた。

異空間にエネルギーを分散させる作用を持つヴォイドフィールドであつたが、今回の暴走は設定値を大幅に上回っており、様々な異空間へと大量のエネルギーを分散させた。そのエネルギーの奔流の内、幾つかが虚数空間へとつながっていたのだが、どうやらフェンは其方には流されなかつた様である。

しかし、流された場所はどうやら普通の場所とは違うようであつた。

うぐぐ、どうやら気絶していた様だ。何だかミキサーにでもかけられちまった感じた。

辺にくらくらするし吐き気も酷い。乗り物酔いを酷くしたらこんなのか？

気が付いたは良いが、どうやら次元航行エネルギーの直撃を受けたらしい俺。

身体の中がどうなったかなんて想像も付きやしない。

非常用応急パックが作動しているから、麻薬で痛みを抑えてはいるがそれが切れたらどうなるか。

しかも、バリアーマー B A（以下 B A）は展開されているが、

ヴィズがシステムダウン起してウンともスンとも反応が無い。

お陰でヘルメット内のディスプレイに映像が映らなくて、今外がどうなっているのかすら解らん。

しかし、こうして生きているって事は……なんとか防ぐことは出来たのかな？

でも、俺が B A 着てるのは……周りに人がいないか何かか。

B A を解除するのは得策じゃ無いな、せめてヴィズが復旧してからじゃないと。

仕方ないから、ヴィズのシステム復旧を急いで行っ。

幸いヴィズの思考回路の安全弁が降りただけみただけだから、すぐに立ち上がる事だろう。

やや頭がぼーっとするが、何度もヴィズのメンテナンスをしてきた

から、問題無く出来る。

『・・・安全弁閉鎖解除、バックアップ回路起動、自動修復バツクグラウンドで展開』

「おはようヴィズ」

『おはようございます。マスター』

「とりあえず・・・ディスプレイをONにしてほしい」

『了解、外部カメラの復旧を急ぎます』

なんとかヴィズの復旧が出来た。

危ない危ない、ヴィズが復旧してくれないと生命維持装置にも影響が出るからな。

サブシステムだけじゃ長くは持たないし・・・。

『カメラ修復完了。映像投影します』

ブン

「・・・・・・・・・・・・・・・・なんてこつたい」

ディスプレイの映像には、信じられない光景が映し出されていた。

「ヴィズ・・・現在の状況から考えられる現在位置は？」

『詳しい事はセンサーが復旧してませんので解りませんが』

ディスプレイに映し出されていたのは、蒼い星。

『どこかの惑星の・・・軌道上じゃないかと・・・』
「・・・・・・・・だよな」

どう見ても地球型惑星です。本当にどうも（ry

いやいや、マジでテンパっております。何がどうしてこうなった？

「GPSは？」

『反応があるにはあるんですが、我々の世界の物より数世代古いものですよ』

「と言う事は・・・別の次元世界か？」

『恐らくですが、次元航行エネルギーの奔流に巻き込まれて、ヴオイドシールドの作用で違う次元に弾き飛ばされたのでは？』

「・・・現状じゃ、それが有力か」

いやね、自分のBAを完全密閉型にしておいて助かったよ。

サブシステムで展開し続ける機能が無かったら、今頃死んでたわ。

「どうしよう？」

『修復用ナノマシンで修復したいのですが、空間中の魔力素子が足りません』

まあ殆ど宇宙空間だしなあ。宇宙空間では空間中の魔力素子の量が著しく減退するらしい。

お陰でこっちの世界でも、宇宙開発は衛星を打ち上げる程度で留まってるだけな。

そういえば20カ年計画で軌道エレベーターの開発計画も上がってたけど・・・閑話休題。

『それと既に重力に捕まった様です。落下軌道を取り始めています』

しばらくは浮かんでいられるだろうけど、何もしなければ燃え尽きるか。

・・・仕方が無い。

「降下しよう・・・」

『生き残った機能だと、姿勢制御くらいしかできませんが？』

「多重プロテクションは？」

『シールドですか？・・・なんとか使用可能です』

よし、ならその設定を少し変えて、耐熱盾にして大気圏に突入しよう。

「軌道計算、任せた」

『了解しました』

シールド耐魔砲設定、最高3000度近くまで耐えられる・・・等。これくらいあれば、大気圏再突入の摩擦熱も角度次第だが余裕だろう。

問題は突入角が少しでもズレると、大気層に弾かれてしまう事だ。

『軌道計算終了、一応用心の為、耐熱ジェルを展開します』

「了解した」

ヘルメット内のHUD上に突入角が表示される。

俺は自分の予想進路とこの突入角を調整すれば良いって訳だ。

しかし、ほぼ生身で大気圏再突入とか・・・俺はチーフか？

『針路そのまま・・・ピッチ3度修正してください。OKです』

「さて・・・どこに落ちようか？」

いよいよ突入が始まるので、俺はその事に集中する事にした。

既に大気との摩擦熱により、多重プロテクションの周りにプラズマの渦が巻き起こっている。

耐えきれず剥離するシールドの一部が、キラキラ光りながら後方へとかつ飛んでいった。

『大気摩擦発生、周辺温度1500度以上、多重プロテクションの許容範囲内』

周りの景色は、ある意味幻想的な光景何だが、それを楽しむ余裕はちよつとない。

何せこの身は生身、軽過ぎるのか姿勢制御を絶えずふかさないとすぐコースを外れてしまう。

と言いか目の前は真っ赤を通り過ぎて金色なのだ。後方カメラが無かつたら何も見えん。

『もう少しで対流圏を抜けます』

思ったよりもあっさりと、大気圏に入ることが出来た。

ノイズが入っていた視界も段々クリアになっていく、電離層も超えたいらしい。

辺りには積乱雲が見えており、まだかなりの高さだが、綺麗な星空が見えている。

さて、そろそろ飛行用魔法で滑空を始めないとまずいんだが……。

『ダメです。パツクの復旧間に合いません。こちらが修復を終えるよりも早く激突します』

Ou、クソが……大気中に入れば大気魔力素子で修復が行えるかと思つてたけど。

まあどちらにしろ、上じゃ修復できなかったから仕方ないか。

「耐衝撃吸収ジェルと・・・シールドを使えば耐えられるか？」

『計算中・・・73%と言ったところです。ちよつと突入スピ
ドが速すぎでした』

「・・・少しでも減速しよう」

ふう取り乱さないのは良いが、どうにも冷静になり過ぎる。

少しくらい慌てた方がよかったのだろうか？まあ、パニックで何も
できないよか良いか。

『着地点確認、エアブレーキ最大、フルブレーキON！』

以前基地侵入時に自由落下で使った術式を展開。

ソレと使えないがジェットパックも展開し、エアブレーキのかわり
として扱う。

身体がガクンガクンと揺さぶられるが、地面に叩きつけられてバラ
バラされるのは勘弁だ。

『ダメです。減速が足りない！』

「シールドバースト！！」

シールドを爆破し、その爆風で更に減速する事に成功する。

だが、これでもまだ足りない。ドンドン地面が近づいてくる！

「なら、ガルヴァドス・・・近接爆破！」

『危険です。装甲が耐えられるか』

「バラバラには成りたくないだろう！」

今度はより爆発力の強いガルヴァドスを近接爆破で起爆する。

シールドバーストよりもずっと強い衝撃。麻酔して無かつたら意識が飛んでた事だろう。だが、お陰で大分速度が落ちた。

『対ショック!!』

「ぐ!」

もう目と鼻の先に大地が見えて来た。

俺は着地の衝撃を抑える為、四肢を固定する。

そして。

ズガンッ!ガッ、ガッ、ガッガガッ!ドコンッ!!!!!!

視界が二転三転して天地が逆天する様を嫌ってほど見せられて、どうにかストップ出来たようだ。

回され過ぎて視界が安定しないが、どうやら着地出来たらしい。あゝ頭が痛い。

衝撃吸収ジェルのお陰で、それ程ダメージは無いみたいだな。

『策敵起動・・・周囲に敵性反応感知できず』

「警戒続行、この場を移動する」

流石に隕石の如く落下した訳だし、この場に居るのはまずい。

降りる時に町の灯リッポイのが見えたから、恐らく人は居ると思うからな。

GPSもあつた事だし、軍隊くらいいるだろう。見つかるのは不味い。

そう言う訳で、俺はすぐさまこの場から撤退を開始した。

散策は安全になってからにしよう、とりあえず森の中へ……。

ここでふと、この場を離れながら後ろの着地地点を見て、俺はこう思った。

「……ツングースか？」

「?どうかしましたかマスター」

「いや、何でも無い」

シールドバーストとガルヴァドスの爆風は結構凄かったようだ。木が放射状に広がって倒れている着地地点を見て、俺はそう呟いた後。

目の前に広がる暗い森の中へと入っていった。

着地地点から大分離れたところまで来た。

だがココに来て、脳内麻薬とか医療用麻薬のお陰で忘れていた痛みがぶり返してきた。

「……ぐう、イツツツ……」

くそ、麻薬がかなり薄れて、切れて来たみたいだ。

身体全身が割れそうだ……身体全身？

『マスター、バイタルが不安定です。どこか怪我したのですか!』

「……簡易診断、実行。コレはただの痛みじゃ……無い」

『了解、簡易診断スタート』

ヴィズが俺の身体の中を走査する。

出来れば何ともなければ良いんだけど……。

『内臓器、チエック。異常無し』

『筋組織及び骨格、チエック。右足首及び肋骨骨折、各所にヒビ、
治癒可能』

『脳組織、神経組織、チエック。過負荷状態、危険域、最低2時間
の休息が必要と判断』

『網膜組織に若干の欠乏を感知、視力に影響なし』

『血中のヘモグロビン量が大幅に上昇、血中酸素濃度も上昇、原因
不明』

『簡易検査終了。検査結果、骨折による痛み』

やはり簡易だと検査しても解らないか……。

骨折なら何度もやってる。だけどコレは骨折の痛みじゃ無い。

アレは焼けつくように痛いんだ。

「うつつ!!」

『マスター!?!』

ダメだ、本格的に麻酔が切れた。

ものすごく、イタイ。

「ヴィズ、対人警戒レベル4で起動……ぐ、カモフラージュも展
開」

『了解』

「ちょ、ちょっと……しばらく休む……それ……じゃ」

落ちる前に治癒魔法をかけておけばよかった。
そう思いつつ、俺の意識は闇に落ちて行った。

どれほどの時間が経ったのか解らないが、徐々に俺の意識が覚醒してきた。

朦朧とした頭でも痛みは変わらなく襲い掛かってくるようだ。

とりあえずリペアを実行、痛みはひいていくが不快感や異和感が取れない。

病院にでも行つて精密検査を受けたいところだな。

しかし、いざ落ち着いてくると何と云うか

「暇だ」

『奇遇ですねマスター、私もです。しりとりでもしましょうか？』

「別にいい、お前辞書内蔵してるから・・・俺勝てない」

非常に暇となる。動きたいところだが、まだデバイスの修復が完了していない。

おまけに大気圏再突入は負担だったのか、身体がだるい。

それだけじゃない気もするが、ココでは調べようがない為考えるのはやめた。

『ではお笑いでも見ますか？私のライブラリーの中にあるので閲覧できますよ？』

「…そんなデータ入れたっけ？」

『いいえ、私の趣味です。』

「そうか…」

自分のデバイスがお笑い好きということを知った。

.....

.....

.....

1時間経過

『スター！マスター！！』

「・・・どうした？」

『マスター大丈夫ですか？どこかお加減が悪いのですか？』

「・・・大丈夫だ」

ウソ、全然大丈夫とちがわい、風邪引いた時よりも酷いめまいがする。

案外あのエネルギーの所為で、身体の中滅茶苦茶にされてたりして？リンカーコアが大丈夫かどうか不安だなあ。

「グイズ、エリアサーチ実行、人里を探して」

とりあえずコレ以上、山ん中居てもしやーない。

この世界に人はいるのは解っているが、どれほどの文明なのか解らないからな。

適当に探ってみて、これからどうしようか決めよう。

もし管理局の管理世界だったら、俺の軍のID見せればどこの世界かなんてすぐにわかる。

そしてら、すぐに戻る事だろうさ。というか医者ほしいよお。

『了解・・・サーチ終了、この星から見て西側、距離13kmの地点に反応有り』

「そこに向かう。ルートを探って、あとローラーダッシュはサイントで・・・」

『了解』

俺は重たい身体を起し、ナイトビジョンに頼りながらくらくらい森の中を進んでいった。

ルートはHUD上に表示されているので、迷う事は無い。

今更ながら、多機能で高性能に仕上げた自分のデバイスに感謝する。

アレから結構時間が経った。

直線距離で13kmでも、陸上を進む以上、やはりそれなりに時間が掛かる。

俺が空を飛べたら良いんだが、現在絶不調の俺が飛ぶのはちょっとお勧めできない。

と言うか、空まだ飛べないしな。

『あの渓谷を越えれば、後少しです』

「・・・・・・了解」

俺の沈黙の長さを見てもらえれば、今どれだけ体長が悪いのか理解して貰えるだろう。

いやさ本当は格納領域に収納してあるサバイバルキットの中に、医薬品はありますか？

だけど、痛み止めくらいしか無くて・・・おまけにソレは麻薬なんだよ。

使い過ぎて廃人になるのは勘弁だからな。そこら辺日本人だなあ俺。

『！警告！強力な魔力反応を探知！動的センサーにも反応あり！』

「・・・ミラージユハイド実行」

『ミラージユハイド起動、展開率99%』

一瞬にして俺の姿は消えて、辺りの風景と同化する。

これってマジで光学迷彩みたいだよなあとか考えつつも策敵を急ぐ。

『反応は2、ウチ一つは魔導師だと思われませう』

「・・・方向は？」

『現在位置からおよそ3時の方です』

俺はヘルメットのズーム機能で、その方角をUPしてみた。

ディスプレイに映し出されたのは・・・。

「・・・新型の・・・魔導兵器か？」

グネグネとした黒い塊がうごめき、意思を持っているかの如く動いている。

しかし、襲われているのは・・・。

「あれは・・・民間人か？」

『いえ、あの魔導師の服から察するに、彼はスクライアです。デー

「タと一致しました」

「そう言えばスクライアも、USN・OCU関係無く、表向きNGO
って事で活動していたな。」

「活動内容は遺跡の保護と発掘、その実中身は異世界人なんだからあ
る意味凄い。」

「PKFがうっさいから、スクライア連中に攻撃したりすると厳罰も
のだったっけ。」

「ソレはさて置き、今日の前で、見た目シヨタな子が、あの得体のし
れない黒い塊に襲われている。」

「恐らく攻撃系は扱えないタイプの魔導師なのだろう。先ほどから逃
げているばかりである。」

「？」

「おかしい……この光景。はて、何か忘れてしている様な？」

「マスター？」

「あのままでと、不味いよね？」

「確実にあのアンノウンに殺されます」

「俺はUSNの軍人だ。目の前で民間人が襲われているのを放置は出
来ない。」

「そしてスクライアの人間も表向きは民間人である。」

「……ヴィズ、これは軍規定の適応だと……思っただけど？」

『危機に陥った民間人の救命は、迅速かつ無償で行われる
で
すね?』

「……だよな。じゃあ行きますか」

『了解、アルアツソーを実体化しますか?』

「……M82A1で頼む」

まだあの黒い塊の得体が知れない。そこに突っ込むのは、馬鹿のすることだろう。

ここは一つ、様子見をしてからにしようか。いや、遠距離からの狙撃にしよう。

スクライアも魔導師だ、上手くすれば逃げられるはずだ。

俺はそう思い、ミラージュハイドを解かずにゆっくりと彼らに近づいていった。

「みんなは奇跡って奴を信じるかい？」（後書き）

*ヒヤッハー！妄想が止まらねえ〜！だけどストックも無い内に上げちまったあ！だからしばらく打ち止めじゃあ！

「血は鉄の味やねん」

「血は鉄の味やねん」

妄想戦記

へエイツ！ボーイミーツ・アンド・ガール！お元気ですか！？
私は正直自分のうかつさに吐き気がきそうデース

「冗談はさて置き、現状を説明しようと思う。」

現時刻からおよそ1時間40分前、人里に向かおうと思ったたちヴィズを使い人里を検索して貰った。
反応があつた為、その反応があつた場所に向かって移動していたのが、ほんの数分前である。

現在、俺の前には黒っぽいスライムのような生き物が、シヨタツ子を追いかけてまわしている。

第三者の視点から見ると、かなりカオスでシュールな光景である。

いやね？人里に後少しでつくって思っていたら、かなりの魔力反応

がすぐ近くで出たんですよ。

今一応姿は見られない様にミラージュハイド起動して姿隠したんだけど……

【助けて！】

何か念話で「（たすけて）」って広域発信してるのが聞こえてくるんですよ。

一応無事に終わる事は解っていて見捨てる事も出来たんですが

「グイズ、M82A1を待機状態に」

『了解……助けるのですか？』

「……まだしばらく様子見、やばかったら助ける」

俺はUSNの軍人な訳でして……民間人を見殺しには出来んです。はい。

『標的、前方の魔導師に攻撃を開始、救出する事を提案します』

「まだだ……まだ様子見だ」

『了解、監視を続行します』

俺は物影から望遠で様子を伺っていた。

『……しかし、あのアンノウン。一体どんな仕組みなんでしょうね？』

「私語はやめる・・・まあ恐らく純粹な魔力で構成されている魔道生物か・・・」

スクライアの少年が逃げているあの場所から、ココまではおよそ2 km。

ヴィズの補助で俺の精密射撃が十分に行える距離である。

それだけの距離がありながらかなり濃い魔力を感じることが出来るのだから相当なものだろう。

「つかキモいなアレ・・・ウニヨウニヨして血のように紅い眼・・・おまけに吼えてやがる。」

生物魔導兵器とかを知らんヤツが見たら、確実にバケモノと叫ぶ事だろうに違いないぜ。

つと、少年が立ち止まった。狙撃のチャンスだ。

「ヴィズ、精密射撃準備」

『了解ハートショット、エイム』

標準を合わせる為にM82A1を肩に構え、付属のスコープから送られてくる映像を展開。

狙撃出来る体勢で、あのアンノウンに標準を合わせた。

だが、スクライアの少年も、何か対抗するつもりのようなのだ。

ここで助けるのは簡単だ。だが、もしアレがスクライアの持ち物であつた場合。

つまり何かしらの遺跡から出土したモノが暴走したモノだった場合、緊急事態とはいえ破壊何ぞしたら、USN軍が訴えられてしまう。

勿論誰しも命の方が大事だろうから、本当にヤバかったら容赦なく撃つのだが……。

スクライアがアレに対応出来るのなら、救命行為に意味は無くなってしまう。

全く面倒臭いものである。無償で助けると規定にありながら状況によつては助けにならないとは。

『スクライア、術式を展開しています。封印術式です』

思念体に向けて手をかざしている。その手には赤い何か……何かの触媒だろうか？

しかし、なにやらブツブツ言っただかと思つたら、術式を展開してたのか。

術式の自力展開なんて久々に見るから忘れてたぜ。

「ジュエルシード封印！」

あー駄目だなありや……術式の構成、強度もいいけど根本的に魔力が足りない。

あのアンノウンの持つ凶悪な魔力は、あの程度じゃ抑えられんぞ。ほらみる、封印に失敗した反動で両者吹き飛ばされてやがる。

グルルルル…

どうやら怒らせただけらしい

まだいるよ？

しかもどうやら魔力切れを起して倒れてしまった少年を狙ってるし。そろそろ助けよう。流石にコレ以上、待ったは出来ん。仮にアレが出土品だったとして壊れたとしても、俺を訴えてくれるなよ？

裁判なんて面倒臭いんだからさ……。

「グイズ、弾種術式選択……暴徒鎮圧弾……」

『了解……暴徒鎮圧弾術式装填完了、いけます』

「レッドクリフ1、フォックス3」

魔力弾をアンノウンめがけて発射した。

撃ち出された魔力弾は術式が展開され、大きな障壁を伴ったが弾がアンノウンへと激突。

アンノウンはそのことに驚いたのか、鳴きながら後退していった。

『ハートショット、ヒット。敵、離脱していきます』

「周囲の警戒を続行」

この暴徒鎮圧弾は俺が作ったオリジナルで、ラウンドシールドを組んである術式プログラム。

そいつをちょいっといじくり、魔力弾から発生できるように俺が組み直したものだ。

発射された魔力弾は、当たる直前にシールドを展開。

スピードを落としながらも、相手に衝撃だけを叩きつける。相手を吹き飛ばすには最適だ。

ただ殺傷設定だとトラックに轢かれたカエルみたいになっちゃっただけだな！

まあそれはさて置き。

「ヴィズ・・・リペアパックは？」

『修復完了しています』

とりあえず何かあった時のことを考えて、すぐに治癒が行えるように準備し、

俺は倒れてしまったスクライアの少年の元に向かった。

.....

.....

.....

渓谷を越えて先ほどまでアンノウンの残留魔力が多過ぎて感知出来な

「スクライアは・・・どこだ？」

肝心の要救護者の姿は見えず？あれ？なして？

「ヴィズ・・・」

『ダメです。先ほどのアンノウンの残留魔力が多過ぎて感知出来ないみたいです』

まあ全部の機能が修復終えている訳でもないからなあ。

「スクライアについて・・・データバンクに何か乗って無いか？」

『検索中……緊急時に周囲に合わせてカモフラージュ魔法が展開されるとあります』

と、言う事は俺がここに来るまでに、魔法で隠れたのか。

そうなるなら残留魔力でセンサーが使えないコッチとしてはお手上げじゃないか。

「出来るだけ探そう。もしかしたら怪我をしているかもしれない。」

ココまでしたのに、後になって死んでましたとかなんて夢見が悪過ぎる。

仕方が無いので、助けた手前スクライアの少年を探す事にした。

しばらくして、スクライアの少年を見つけ出す事が出来た。

どうやら怪我を負っていたらしく、現在意識は無い。

そして緊急処置のカモフラージュが作動しており、その姿は

「何と言う小動物……」

『オコジヨに似てますね』

何とも愛らしい姿へと変化していた。

思わずモフリたくなってしまった俺に罪は無いだろう。うん。

「・・・ヴィズ、どうだ？」

『元々衰弱していた所に過剰に魔力を使った所為でしょう。今は眠っています』

簡易診断であるが、目立った命に別条がありそうな怪我は無いようだ。

『それ以外は軽い打撲程度です。治療しますか？』

「いや、いい…そこまでしてやる義理は無い」

命に別条が無いなら、コレ以上助ける必要も無い。

と言うか、俺はやっぱり調子が悪いらしい。気分が悪くて治癒魔法使う気力が出無い。

「しかし、この小動物・・・」

どこかで見たことがあるような・・・？

『マスター』

「ん・・・何？」

人里へ抜けるルートを進んでいると、ヴィズが声をかけてきた。

『あのまま、彼を放置してよかったのでしょうか？』

「なんで？」

『いえ、あの思念体がまだうつっていたら、気絶している彼は危ないのでは？』

それは無いだろう、原作でも気絶してから高町なのは発見されるまでは無傷だった訳だし……。

今の文で解るだろうが、思い出してしまった。この世界は原作の世界であると……。

その為、思わず錯乱して、あの場から逃げてしまったのである。

スクライア君置き去りにしたけど、原作に沿えば大丈夫だろう。

そう、イレギュラーでも無い限り……。

「……ああ」

『？マスター？』

「ちっ……戻るぞ」

そうだった。うっかりしていた。すでにイレギュラーは起こりかけていたんだっけ？

ぐう、思い出したとはいえ、原作はどうだった？

もうかなり記憶が薄れてるから最初の部分が思い出せん。

だが、それでも原作では冒頭であのアンノウンは逃げて行った筈だ。それなのに俺が追い返さなかったら、彼が喰われていた可能性もある。

もし、あのアンノウンがまた戻ってきたら？

下手すると彼がココで舞台から降りてしまいかも知れない……ソレはやバイ。

彼は脇役ではあるが、この物語におけるキーパーソン。消えてはならない存在だ。

もしもの事も考えられる……主人公に発見されないとかになったら目も当てられん。

そうなったら場合、もう予測どこの話じゃ無い。最悪な展開である。最悪、管理局が来る中盤まで隠れていて、管理局が来たら接触しようと思っていた。だけど、そうなった場合、とりあえず彼だけは生きて貰わんと困る。

ああもう、こんな事になるんやったら、こっちの方に来るんや無かった。

気が付いちまった以上見過ごせネえんだよ・・・たく。

まあいい・・・とりあえずこの物語の主人公、なのはとの邂逅を見させてもらうことにしよう。

ソレ位の役得があっただって良いだろう。転生者の特権ってヤツだ。ついでに彼を預ける動物病院へと案内してもらおうかな。

だって、ここら辺土地勘無いんだもん。

.....

.....

.....

5時間後

「きたか...」

ようやく人の気配がしたため、目をあける。

どうやらあの後気が付いたスクライア君は、自力で人里に行こうとしたらしい。

まあ途中で力尽きて、人里近くの林で再度眠ってしまったけどね。

全く、不用心にも程がある。別に小動物を食べるのはアンノウンだけでは無いと言うのに。

野犬や猫、猛禽類は珍しいがガラス等も危ないんだぞ？
ソレを見張るコツチの身にもなって欲しいものである。

まあソレは置いていて、とりあえず草陰から覗いてみると

ああ、いるいる。金髪の子、その隣のおしとやかそうな紫の髪の子。そして・・・スクライア君を抱き上げてる栗色の頭の子が、高町なのは…か。

どうにもその他二人の名前が思い出せないが、原作シーンの再現と言ったところか・・・。

しかし高町さん・・・うん、かなりの潜在魔力だ。

俺よりかはひくいけど、総合値なら俺より高いだろうなあ・・・。
俺なんて空戦適性Cだし・・・でも陸戦ならSS+だもんね！
総合でAA+だけどね。

『・・・スター、マスター』

「ん？」

『皆さん、行ってしまいましたよ？』

どうやら考え込んでいる内に、彼女等は行ってしまったようだ。

まあコレでスクライア君も安全だろう。一応肩の荷が降りたな。
あゝそれにしても気分悪い。悪過ぎて眠気も来ないのはヤバいんじ
やないだろうか？

「……トレースは？」

『ばつちりしてあります。というか凄いですね？あの栗色の髪の子
そりゃね、なんせこの世界の主人公様ですからね。』

母上と戦わせたらどうなるんだろう？……世界が一つ消える気が
する。

『……総合ランクなら鍛えればきっとマスターより上ですね』
「……俺もそう思う」

とりあえず、この藪の中から出ますか。ガサゴソってな。

人気のない道を選びつつ、やっとこさ人里に降り立った俺。

「街か……」

『魔法技術を使っていない文明の街に来るなんて久しぶりですね』
「そう……だな」

元日本人の俺にとっては、この町並みはある意味懐かしい風景でも
ある。

長い事外国で暮らした後に日本に来たら、こんな感じなんだろうなあ。

「さて・・・行かない・・・」

ちなみに俺の格好は、B Aを解除し軍服の上着を取った状態だ。

ウチの軍服は中がYシャツだから、上着取るとYシャツと黒いパンツという組み合わせになる。

これなら街中に出ても怪しまれまい！

ホントは気分悪くてB A展開し続けるのも辛いだけなんだが、まあそれは良いだろう。

「スクライア君は・・・もついいとして」

トレースはしてあるから、街見て回るか・・・しばらくお世話になる事だし。

そう言う訳で、俺はしばらく御厄介になるであろう海鳴市を眺めつつ、辺りを搜索する事にした。

とりあえず衣食住の確保が最優先であろう。一応サバイバルは仕込まれているから最悪山に行く。

デパートの試食コーナーは貴重なタンパク源になりそうだ。

あれから観光がてら、かなり歩き回っているのだが、やっぱり歩きだとかかなり広いんだコレが。
・・・一応何故か覚えている私立聖祥大付属小学校と翠屋も見つけた。

けど、やっぱりアニメだから移動描写も少なかったんだ。
7歳児の足で歩き回るには広いすぎるぜ！

キユクウ…

(腹減った・・・なあ)

さて、今は夕飯時なんだが・・・俺は相変わらず気配を消して隠れながら動いている。

なぜか？こんな時間にうるついでたら、ポリに補導されるのだ！見た目7歳児だからな！

この世界に俺の戸籍はおるか国籍も無い、捕まったらなんて言い訳すればいいんだか・・・。

しかも金が無いから飯も買えん。だから商店街とかの料理屋からの匂いはかなりの拷問だ！

まあどちらにしても、7歳児の俺が一人で飯屋に入ったら間違いなく補導だけだな！

.....

.....

.....

まあそんな訳で、いたたまれない気分の俺は住宅街を歩いていた。なんとか商店街に漂う、あの露骨に美味しそうな匂いからは脱した・・・だが。

(ああ…この家は肉じゃが…この家はカレーか…懐かしい)

俺の転生先では無かった家庭料理の香りが、前世の記憶を揺さぶり余計に食いたい気分になんか…。

まあソレは精神力で抑えるから良いとして、これからマジでどうしよう？

このままだと浮浪者と変わらん。

本編終了まで、サバイバルするのもできるが、流石に耐えられるかなあ。体長悪いのに。

最終手段としては、ジュエルシードを探し、それをフェイトあたりに渡して、

ご飯をもらってのもある。

だが、いきなり攻撃されて奪われる可能性も捨て切れない……。つーか、うまい事入りこめても、プレシヤさんに目をつけられかねん。

前世のSSの様には上手い事かないモンだなあ。

「……………うぐ!?!」

『マスター?どうしました?』

不味い、気分の悪さがぶり返してきた。

やっぱり落ち着いたからって、歩きまわるもんじゃないな。

ああ、何かこみあげてくる感覚、コレはあれか吐くのか?

「うほ・・・」

・・・吐くには吐いたが、出たのは血であった。や、ヤバいなコレ。

量は少ないし、もう出る感じはしないモノの、まさか吐血するとは次元航行エネルギーはどうやらかなりのダメージを与えてくれた様だ。

『マ、マスター!?!』

「・・・近くに水が出る公園は無いか？」

少しと言っても流石に手に収まりきるもんじゃないから、顔が血塗れになってしまった。

それに服にも少量・・・嫌だなあ血は洗濯しても落ちないのに・・・

吐血した癖に案外冷静な自分に驚きつつ、ヴィズにナビして貰い、近くの公園に向かった。

人が少ない時間帯であったから、特に血をつけた姿を見られることは無く公園に付いた。

とりあえず顔を洗い、服に付いた血を水で洗ったが、そこだけ変色してしまった。

裸じゃ不味いので仕方なく着ては居るモノの、やはりコレは目立ってしまう。

活動する時はB Aを来てミラージュハイドのまま行動する方が良いかと考えていると。

「……づぐう!!」

これ以上無いほどの気持ち悪さ、身体の中を引っ掻き廻されたあの感じ。

治癒魔法をウィズがかけてくれるが雀の涙程度しか効かないなんて辛すぎる。

流石に立っていらなくなり、俺は近くのベンチに持たれかかり、そのまま倒れてしまった。

しばらくしてなんとか立とうとしたが、意識がもろろつとする上、頭がくらくらする。

持ち合わせの医薬品は、ファーストエイドキット程度しか無いし後は麻薬だ。

こんな状態で麻薬何ぞ使ったら、気分は良くなるが意識が飛びそうな気がする。

もっとも既に飛びかけていた俺にはあまり関係の無いことであったが。

「……あ、あのう。大丈夫ですか？」

どうやらよっぽど目立っていたらしい。

誰かが話しかけてくれている様であったが、俺は其方を見る力も返事を返す力も無い。

手を振って返事はしたものの、もう動きたくナイ。

「大丈夫って、顔面蒼白やない……じゃなくて、じゃないですか」

なんか俺に話しかけてくる人の喋り方がおかしい気がするが関係ない。

とりあえず、そつとしておいてほしい。今は眠りたいんだ。

そう思ったのも束の間

「・・・ゲホツ！ゲホ・・・ゴブ」

「へ？え、あ！？血、血い吐いてるう！？キユ、救急車！！」

最悪のタイミングで吐血してしまった。

相手のソプラノボイスが慌てているのが解る。
だが病院は不味い。

「び、病院は・・・やめて・・・」

「せ、せやかて、君血い吐いて！」

「お願い・・・」

現在の俺は保険証も無ければ、この世界において身分を証明するモノが無い。

下手すら密入国扱いであるし、どうなるのか予想もつかない。

「お・・・願い」

「・・・わ、わかったから、もう喋らんとき。仕方ないから私の家に連れてくで？」

「・・・コクン」

病院に連れて行かれるよかました。

もうかなり判断力が鈍っていた俺はその声に返事を返してしまう。

「なら立てる・・・訳ないなあ。仕方ない、膝の上に乗れ！」

俺はグイッと引っ張られる感覚と共に、何かの上に乗せられた。だがすでに意識が落ちかけていた俺。

移動する振動を感じながら、そのまま意識が落ちてしまったのであった。

「突撃！となりの八神家！・・・マジで？」

「突撃！となりの八神家！・・・マジで？」

妄想戦記

side 三人称

公園でフェンを拾った少女は、彼を自らの膝に乗せて家へと急いでいた。

いきなり目の前で吐血したこの少年を介抱する為である。図書館からの帰りに、まさかこんなことになるなんて人生は解らんなあと思う。

既に最初に吐血した血は、服に滲みこみ乾き切っていた。

いきなり吐血したことに驚いて、当初は救急車を呼ぼうとした彼女だった。

だが、彼が必死になってやめたと頼んで来た為、そのまま連れてきたのである。

「すぐに横にならせてあげるから、勘忍な？」

彼女はそう言うと、自らの膝の上に乗っている少年を見る。

流れる様な黒髪だったが、肌の色は顔色が悪いことを差し引いても日本人のソレでは無い。

恐らくだが外国人、もしくはハーフと言われる人間であると、彼女

は考えていた。

「うう・・・ああ」

寒いのだろうか？身体を小刻みに震わせるファン。

少女は車いすというハンデを持っていたが、それでも目の前で苦しんでいる人を放ってはおけない。

自分の家に付いた少女は、急いで震えるファンをベッドの上に寝かせ、手なれた感じで布団をかけて上げた。

医者では無い彼女には、それだけしか出来なかったのである。

「せめて顔だけでも拭いたらんと、気持ち悪いやろ」

彼女はそう思ったつと、布巾を取り家の奥へと戻っていった。

綺麗な布巾を見つけ、ぬるま湯を滲みこませた後、ファンの元に戻る。

部屋の扉を開けた彼女が見たのは

「父上・・・母上・・・ダメ・・・いやあつ！」

悪夢でも見ているのか、虚空に必死に手を伸ばしながらうなされる少年だった。

「ワイ・・・ズ教・・・官、ソフィ・・・ア・・・官　　行か・・・ないで」

知り合いの名前だろうか？上げられた手はまるで届かぬ何かを掴もうとしているかのよう。

「ジエ・・・ニス・・・お前も・・・なのか　　！」

熱にうなされるフェンを見て、彼はかなり辛い経験をしたのではないかと少女は思った。

一体どんな悪夢なのだろうか？ココまでうなされるのは、余程のことを受けたに違いない。

とりあえず、熱を出した所為で出た汗をぬぐって上げることにした。

「嫌・・・一人・・・嫌！」

「大丈夫や！私がそばに居たる！何処にも行かへんから安心しや！」

うなされて、今にも泣きそうな少年の手を思わず取った少女は、そう横たわる少年に言った。

夢の内容から考えて、恐らく彼もまた一人ぼっちなのだろう。

自分自身も、家族の居ない寂しさは知っている。

一人ぼっちの苦しみは、言葉なんかじゃ言い表せない事も知っている。

「あうう・・・」

「大丈夫や、大丈夫」

自分に出来る事は、手をつなぐことくらいであったが、それでも少年の顔は少しだけ安らかになった気がした。

だが、次の瞬間

「いやだああああっ！！！！！」

少年はそう叫び声をあげ、驚いた少女は手を放す

「な、なんやのん・・・これ？」

少女が驚く中、彼の掲げた腕の先から、何かの言語と模様が描かれた光の線が浮かび。

フェンが寝る部屋には、所謂魔法陣と言うものが顕現したのであった。

『うわっ！マスターいきなり何で魔法を「ブレスレット」が喋つとるう！？」ハッしまった！』

そして、休眠モードだったヴィーザフも、突然の魔力行使に驚いて念話を発してしまふ。

その念話の対象がリンカーコアを持っていれば解る様になっていたのが悪かった。

少女の名前は八神はやて、ある意味極大のリンカーコアの持ち主だったのだから。

こうしてフェンの預かり知らぬところで、またまた運命の邂逅が為されようとしていた。

S i d e o u t

S i d e フ ェ ン

アレ？ココはどこだろうか？俺は一体　　って母上？

何故ここに母上が・・・というか何故デバイスを構えているのですか？

え？情けない息子を特訓？そ、そんな無茶な！

「父上・・・！母上を止め　　！！ダメ、そんな魔法・・・さばけない！！！」

ムリ！ムリです！召喚魔法フライングダッチマンを受けとめる特訓なんて！

受けとめる前に潰されます！マジでやめて！！

「いやああッ！！！」

ああ、また特訓で死にかけ　　って、あれ？場面が変わった？
ここはフリーダム基地の演習場？なんでまた・・・。

「あ・・・ワイズ教官、ソフィア教官」

後ろを見ると、ワイズ教官とソフィア教官が立っていた。

あれ？その手に持っている見覚えのあるカード・・・俺の給与カード！！
ちよっ！なんでソフィア教官が持って　　え？ケーキ食べ放題＋
買い物！？

「や、やめてください！全部無くなります！行かないで！！」

なんで笑顔で俺の給料使おうとしてるんすか！！俺の吐血と汗と涙の結晶が！！

　　ってちよっ！ジエニスも何で・・・え？ご相伴にあずかる？ふざけんな！

「ジエニス！お前もなのかつ！！」

ブルータス、お前もか！！全く皆何考えて　　え？身体が動かない？バインドされた？

ちよっ！父上母上も何時の間に来たの？！しかも俺の給与カード使うの！？

「い、嫌だ・・・ひ、一人だけ奢らされるなんて・・・嫌」

しかも、俺だけケーキ食べられないとか

「あうう・・・え、母上何？」

女々しいことを言うな？バインドくらいすぐに破壊して見せる？

いやいや、だって何故だか全然はずれない　　！！
ヒツ母上！！もう口答えしません！！だから砲撃だけは！！砲撃だ
けはアアアア！！！！！！

「い、いやだああああっ！！！！」

思わず防御魔法を展開したのは、所謂条件反射である。
すりこまれた結果なのだから、いた仕方ない事だ。

しかし、コレが後々大変面倒臭い事態に発展しようとは夢
の中の俺は思わなかった。

「カハアツ！！　　・・・夢？」

あ、悪夢だった・・・思いつく限り最悪の悪夢だ。
砲撃がトラウマにならなければいいんだけど・・・もう手遅れかな
あ？

「・・・？　　ここは、何処？」

ふと気が付けば、どこかの屋内と言っか家の中。
しかもベットに寝かされている？

「あ、目が覚めたん？」

『マスター、大丈夫でしたか？随分とうなされてましたが
うっん、微妙・・・』

』

頭がまだフラフラすりゅ・・・じゃなくてするんだ。

「でも食欲が出て来た」

「ほなら、大丈夫やな。おかゆ作って来たるわ」

「あ・・・ありがとう」

「ええつて、ほなゆっくり寝ててな？フェン君？」

「はいはい」

俺は言われた通り、ポフンとベットのの上に寝つ転がった。

ああ、なんかいい気持だなあ。

・・・・・・おいマテ！

ガバツと起き上がった時に、まだ気持ち悪さが出たが関係ない！

「な、なななな！！」

「フ？フがどうしたんや？」

「な、何で・・・俺の名前　！あとヴィズ！？」

『ご、ごめんなさいマスター、うっかり喋っちゃいました』

「驚いたわあ、まさか異世界人やったなんてな？」
「ヴィズラー!!!」

OK、まずはタイムマシンの入口を探そうじゃないか。
全てはそれからだと思うよ？あきらめなくても、時間切れなら試合終了さ。

大丈夫・・・だよな？

後になって思ったが、この時俺の鉄面皮は大分崩れてたんだろうなあ。

.....

.....

.....

「それじゃ、お互い自己紹介からにしようか？」
「そう・・・ですね」

あの後、ちよいと混乱してしまっただが、何とか復活。
序でお腹がキュクウ〜となっでしまい、一気に冷静になる事が出来た。俺の身体G」。

・・・お粥は疲れた胃には大変美味しゅうございました。

「私の名前は八神はやてっていうんよ。しがない美少女や！」
「自分で自分のことを美少女・・・なんでやねん」

思わず突っ込みいれちまった。後悔はしてないがな。

「お、ちゃんと突っ込み返せるとは・・・なかなかやるやん」

「ええと、その・・・ノリで」

「ノリは大事やで？ノリを支配する者が世界を制すんや！」

「ふ、深い・・・」

なかなか面白い女の子だな。八神さん・・・八神？

「??？」

「どうしたん？急に首かしげたりなんかして」

「ううん・・・何でもない」

はて？何かまた思い出しそうな気がするんだが・・・アレ？
まあいいやそれよりも先にこちらもあいさつしてまお

「えと・・・初めまして、US・・・じゃなくてフェン・リーダー
と言います」

つつついUSN軍所属　とか言いそうになって言い換えた。
この世界じゃUSN軍って言っても意味無いだろうからね。

「ええと、フェン・リーダー君やな？フェン君って呼んでも良い？」

「良いですよ。八神さん」

「私の事も“はやて”でいいで？さん付けもいらんよ？」

「ん、解りました。いや解った、はやて」

「ソレで良しや。さてと・・・それじゃ色々喋って貰おうか」

「・・・はあ、了解。で、何が聞きたい？」

「そやなあ、とりあえず出身の国から！それとどうやってこの世界
に来たん？」

「ちよっと長くなるけども、いい？」

「うん、かまへんよ」
「それじゃ・・・俺は」

どうせもう誤魔化しが効かないのなら、すっきり喋っちゃった方が楽だろう。

この位の女の子が、異世界がどうたらと大人に言ったところで、空想だと思われるのが落ちだし。

・・・原作世界だから、信じる人間がいる可能性も無いわけでもないしな。

俺は彼女に語る。己が歩んできた7年間の道筋を。

たったの7年、されどその7年は俺を変えるにはあまりにも長い時間だった事。

USNと言う国に生まれ、魔導師と呼ばれる所謂魔法使いの両親のもとで育った事。

だが、生まれた世界は平和とは程遠い、常に戦争という爆弾を抱えた世界であった事。

そこからはダイジェストだ。

流石に過激な描写は控えたが、聞かれた事は殆ど答えてやった。

戦争のある世界、魔法使い同士の戦争、消えて行く命、変えられた命。

共に頑張り、共に笑い、共に泣いた部下たち、そして戦闘で命を落した俺の部下たち。

そして最後に・・・俺が経験した。エネルギー炉心の緊急エネルギー制御の事。

恐らくソレが原因で、この世界に飛ばされた所まで、全て話してし

まった。

コレを信ずるか否かは彼女の自由である。

魔法を知らないこの世界で吹聴されても俺は痛くもなんともない。精々俺が頭の病院に連れて行かれる程度の事であろう。

そうされたなら、逃げだしてサバイバルでもすればいい。体調が心配であるが、痛みどめの麻薬はまだ持っている。血を吐いたところで、治療方陣をあらかじめ作っておけば死ぬことは無い。

まあ結果的には簡単に信じて貰えた、何故かって？

俺気絶してた時に、うなされて魔法使ったんだってOTL。

うん、それなら信じちゃうね。目の前で不思議現象を垣間見たんだから。

まあ、そんなこんなで、はやてとはすぐに打ち解けて行く事が出来たのは幸いだった。

魔法の事に関しても、他の人には秘密にしてくれると約束してくれた。

最も 「こんな面白い事、そう簡単に他の人間に教えたらつまらんやろ」 との事。

うん、俺は運が良い。こんな人間に巡り合えたんだからな。

「ところでな？フェン君」

「はいはい、何？」

「私も・・・魔法とか使えんかなあ？」

やっぱりね。子供なら誰しも懂れる事だし、聞かれるとは思った。

「どうだろう、念話が聞こえたならリンカーコアがあるって事だし・
・・」

「それなら!」
「でも・・・まず検査を受けないとダメ。先天的に魔力を使うと不
味い人間も稀にいる」

コレ結構切実な話である。原作において、主人公高町なのははいき
なり魔法を使っていた。

だが、初心者は本来ならまずベテランの魔法使いや使い魔が付き添
う必要がある。

初心者故に魔力の扱い方が下手で、暴走させる可能性もあつたりす
るからだ。

ソレ以前に体質的に魔力行使が出来ないタイプの人間も存在する。
時に必要以上に大きなリンカーコアには、身体機能を補う機能を持
っている事がある。

そう言った場合、余剰魔力があればいいのだが、リンカーコアに生
体機能を依存していた場合。

魔法を使おうとすれば、生体機能に異常を発生させる原因になる事
もあり得るのである。

下手すれば廃人、最悪生命を落す可能性も無いわけではないのだ。

俺がいたUSNでは、そういった可能性もあるので、魔導師になり
たい子供は検査を受ける事が、

法律によって義務づけられていた。まあ魔導師登録みたいなもので
ある。

俺も両親に頼んだ後、近くの病院で検査して貰って、大丈夫だと太鼓判を押されたからな。

なので、専門的に調べる機材が無い今、いきなり魔法を扱う事は正直お勧めできない。

その旨を説明したので、はやてには何とか理解はして貰えた。

一応フォローとしてリンカーコアは感じるから、きつと使えると思っよとは言っておいた。

管理局でも来てくれれば、色々と検査出来るんだけどねえ。

まあ、原作の話が進まないし、どちらにしても管理局は来ないだろうけど。

しかし、何だろう？さっきから感じるこの感じ？また何かを忘れてる様な？

ぐう、何かきつかけがあれば思い出せそうなんだけどなあ

原作に車いすの少女なんていたかなあ？第一期ではいなかったよな。
..な。

「.....ツ.....」

「ど、どうしたんや？！なんや顔が青いんやけど？まだ体調悪いんか？」

い、いや、ソレもあるんだけどね？思い出しちゃったんですよ..。

この子は八神はやて・・・第二期の主人公じゃん。
OK、何と言つて都合主義、もはや原作崩壊のレベルじゃ無いな。

SSでテンプレだったよ、こういう展開。何で今の今まで思い出せなかったかな俺？

どちらにしても、もう遅い、魔法の事全部喋ってしまった。

あはは、下手すると守護騎士に俺もねらわれるのかあく死んで舞うわい！

「うう・・・」

「やっぱりまだ具合悪かったんやな？とりあえず寝とき、気い使わせ
て悪かったわ」

「め・・・面目無い」

「具合悪いのはしゃー無いやん。それに血を吐いた子がココまで回
復した方が驚きや」

そう言えば何で俺こんなに体調悪いんだろう？

やっぱり次元航行エネルギーの直撃が原因か・・・あと俺のレアス
キル。

次元航行エネルギーは何気に魔力と似てるからなあ。

リサイクルで吸い取っちゃったのかもしれない。

だとしたらだ。普通に吸引しただけで痛かったのに、よく無事だっ
たな俺。

下手すれば水風船みたく破裂してもおかしく無かったんじゃないか？

・・・想像したら背筋が凍りそうになつたぜ。

「なんやフェン君、ホンマに青くなつとるで？」

『今更ながら、自分の置かれている状況に驚いてるんじゃないでしょうか』

「そうなんかー、アンタも大変やね？」

『いえいえ、私はマスターの従者みたいなものですから？文句なんて言いませんよ』

「グイズはえらいわー、ナデナデしちやる」

『わーい！撫でられちゃいました！』

そしてそこ！何で持ち主に報告無しに仲良くなつてんの！

ああもう、頭が痛いよう・・・別な意味で吐血しそうだ。

その後、とりあえずどうにかなるとポジティブに考える事にした俺。とりあえずはやてとの雑談にいそしんでいたんだが、彼女はフツと何かを思い出したらしい。

部屋から出て行ったかと思うと、手に新聞を持って帰って来た。

「そう言えば、今朝の新聞に面白い記事が出とったで？何でも海鳴市使くの山に隕石が落ちたんやと。しかもツングースカ大爆発みたいにあって、今テレビでワイド張ってるんや」

ま、マジで？俺の着地後そんな大事になつてたのか！？

朝刊を見れば、どう見てもツングースカ大爆発の写真に見える、放射状に倒れた木。

今もやつてるやると、はやてがテレビをつけると、見覚えがあるクレーター・・・。

ま、間違いないみたい。

「なんや？フエン君達も知ってたん？」

『まあ知ってるも何も当事者ですし・・・』

「・・・あれ、俺達の着陸後」

「マジで?!じゃ実はフエン君宇宙人やったんかい!？」

「地球人と違うつて意味じゃ・・・あながちウソじゃ無いかも知んない」

それならグネグネのタコが本体?とか聞かれたから、

ソレどこのクトウルフ?と答えておいた。

しかし、どうしよう?このまんまだと大事件にかなり巻き込まれそうな予感がする。

だけど、どちらにしても今の俺は上手く動けそうにないや。まずは傷を癒さんとな。

まあ、闇の書事件はまだ先だろうし、介入しなければ話の筋は変わらんだろう。

シグナムさんあたりに剣の稽古でも付けてもらえないだろうか？

ソレが出来たら面白いだろうなあとか思いつつ、はやてとの雑談を楽しむことにした。

.....
.....

『（だれか…助け…ください…）』

ん？念話？

アアアアアア！……！忘れてたああ！

！！！！！！

そうだったあー！今までのごたごたで忘れてたぜ！

スクライア君放置したまんまだったああ！！ど、どうしよう！？

身体は・・・限界機動・戦神楽いくなかくんはムリそうだな。

だけど、前みたいに狙撃ならなんとか、いけるか？

嫌しかし、こんな身体で外に出歩くなんて言ったら、はやてに止められそうだなあ。

と、とりあえずヴィズに頼んで、トレース先にサーチャー撃ち上げておこう。

上空から監視衛星の如く監視しておいてあげよう。ソレしかできないけどな。

もしダメだったとしても、不甲斐ない俺を許してほしい。スクライアの少年よ。

そう言う訳で、とりあえず出歩けそうにない俺は、顛末だけでも見届けようと思い、

サーチャーを現場に向けて撃ち上げさせてもらった。

打ち上げじゃないのがミソである。俺は誘導コントロールできないからな。

精々浮かべて置く程度しかできないんだから、サーチャーも街頭力メラと変わらん。

そう言った訳で、俺はサーチャーを撃ち上げたのであった。

「なになに？なにしてるん？」

そして、ソレをはやてに見つけた為、サーチャーの映像を彼女にも見られる事になった。

もう、どうにでもなっちまえ！ココまで来たなら知らんわい！
体調が悪い所為か精神も不安定だったらしく、若干投げやりな俺だった。

「突撃！となりの八神家！・・・マジで？」（後書き）

*にははは！原作キャラと遭遇！もう止められないぜい！
早く次の電波受信しなとなあ。ソレでは失礼！

「厄介ことは忘れたころにやってくる」

「厄介ことは忘れたころにやってくる」

妄想戦記

「うわっ、えっぐいわ〜、何あのグネグネ？触手か？触手なんか！？」

「いや落ちつけ、断じてあ〜ん？な感じにはならないから・・・」
『気色悪さでは、甲乙付けにくいですよねえ〜？』

「ほんまや、あんなんと対峙する人の方が可哀そうやと思う」

「実は・・・アレと対決するのは、はやてと同年代の女の子なんだ」

「うそん？ほんま？」

「ほんまほんま・・・」

アンノウンが診療所の庭の木にぶつかった。

衝撃で飛ばされたフレットを少女がキャッチした。

アンノウンは木にぶつかった衝撃で動けない。

【なになに！？一体何？！】

「誰やこの娘？こんな危なっかしいところにおるなんてアカンやろ？」

「いいの、この子が主人公だから」

「そうなん？この娘が将来、ハイライト消した眼で砲撃をぶちかます魔王になつてまうん？」

「俺の記憶が正しければね」

『ココだけ見れば、そうは見えない普通の女の子ですけどね』

【きて…くれたの？】

【ふえ？しゃ、喋った！！】

「うわっ！フレットが喋りおった！」

「可愛いけど、何だかなあって思う」

『リアルで見ると、案外シニールですよね』

映像は切り替わり、アンノウンから逃げる彼らを上空から映し出す。もう3〜4個サーチャー上げて置くかな？

ヴィズに頼み、罰方向からのカメラ・・・じゃなくてサーチャーを設置する。

【うんとそのう、何がなんだかよくわかんないけど、いったいなんなの？なにがおきてるの？】

【君には資質がある…お願い僕に少しだけちからをかして…】

「いやいや、おいおい。素質があるからってソレは無いつて…」
「ぶつつけ本番は、本当はダメなんやる？」

「一応ね。魔力の扱いは繊細なんだぞ…。素人が実戦中に出来るもんじゃない」

『でも、成功しちゃうんですよね？マスターの話が本当なら』

【資質？】

【僕は、ある探し物のために、ここではない世界から来ました。でも、僕1人のちからでは思いを遂げられないかも知れない…だから…迷惑なのは判ってはいるんですが資質をもった人に協力してほしい…】

ぴよんと地に下りるフェレット。

【お礼はします必ずします！僕の持っているちからを、あなたに使って欲しいんです。僕のちからを…魔法のちからを…】

【まほう？】

「なんか、フェレットが頭下げるところってシユールやな」

「右に同意」

『左に同意』

<ゴアアア…> ドド シッ…！

【お礼は必ずしますから…】

【お、お礼とかそんな場合じゃないでしょ？】
<グオオオ！>

【ど、どうすればいいの？】

【これを】

「何アレ？宝石なんか？」

「アレもデバイス、かなりの高性能機」

『ミッドチルダ式インテリジェントデバイスですね。あいつ等は頭が固いんですよ？』

「え？マジで？人格有るん？」

『だって私もデバイスですよ？』

「あ、そやった。あまりにフランクやから忘れとったわ」

「忘れるもん・・・か？そう言うのって・・・」

【あたたかい…】

【それを手に、目を閉じて…心をすませて…僕の言ったとおりに繰り返して…】

「コレで魔砲の世界にこんにちはやな」

『そして大いなる霸王伝説が！』

「愛で空が落ちてきそつや」

「グイズ・・・何故ネタが解る？」

そんなプログラム搭載した覚えは無いんだが……。

【いい？いくよー！】

【うんー！】

「お？呪文の詠唱か？魔法少女ならお約束やな！ピーリカピリララとか」

「生憎だけど、もっとゴツイよ？」

「……マジ？」

「マジ、意味の無い言葉は羅列しない」

「可愛くないやん」

「質実剛健が一番。……まあ若干厨二病臭いけど……」

「目がオツドアイな件」

『邪気眼と申したか……』

【我…使命をうけし者なり…】

【我…使命をうけし者なり…】

【契約のもと、その力を解き放て】

【えと、契約のもとそのちからを解き放て】

(ドクン)

【風は天に…星はそらに…】

【風は天に…星はそらに…】

(ドクン)

【そして、不屈の心は…】

【そして、不屈の心は…】

【この胸に！】

【この手に魔法を…レイジング・ハート！Set up…！】

『Stand by, ready, set up…！』

ゴオオオ

！……！！

『げえっ！今のでサーチャー1〜3番が吹き飛んだ！4番に切り替え！』

「なんて言う魔力・・・潜在値だと低いかと思っただが、発動したらコレかい」

「ピンク色がキレイやなあ」

で、この後はレイ八さんとバリヤジャケットの設定だけか…。

アニメだと変身シーン見えただけど、やっぱり光が強くて見えな…ゴ、ゴホン！！

いかんいかん、余計なことまで考えてしまった。反省反省。

「あ、グネグネが飛んだ！」

『より高く、より遠くへ・・・』

「せやけど落ちた」

『世界の壁は厚かった』

「二人とも、ノリノリだね」

『「なんかウマが合うんや（です）」』

さいですか。しかしこの二人仲が良いなあ。

もしかして、夜天の書の主選ばれるだけあってデバイスの扱いは得意なのか？

【うわっ!?!?】

【今度はなにい〜?!】

アンノウンが彼らの目の前に落っこちた。おお、驚いてる驚いてる。まあアレだけ目と鼻の先に落下したなら、誰でも腰抜かしそうになるけど。

【封印すべきは忌まわしき器、ジュエルシード！】

【ジュエルシード！封印！】

<Sealing Mode・Set up!>

光の帯がジュエルシードに絡み付いていく！

<Stand by・Ready.>

【リリカルまじかる、ジュエルシードシリアルXXI…封印！！】

<Sealing>

そして気が付けば、最初の物語の終盤となっていた。

「しかし、フェン君は前世持ちやったんやなあ」

「もつとも、もう人格もなにもかも変わっちゃって、以前の自分と全然違うけどね」

『でも道理でマスターの成長が異様に早い訳が解りました』

「前世持ちと前科持ちって似てへん？」

「俺が犯罪者になった」

いやはや、もうなんて言えばいいかね。全部話しました。

文字通り全部ね？前世持ちの記憶ありと言つところまでさ？

いい加減腹に溜め続けるのにも疲れたから、もうぶっちゃけちゃった方が楽。

「でも本当に言った通りになったんやなあ」

「もつとも・俺がここに居る時点で話しが変わりそうだ」

ウソだって言われそうだから、事前に起こる出来事を話してサーチャーの映像見せた。

しかし上手い事冒頭部分を思い出せてよかったぜ。

「で、介入するん？」

「・・・まだ身体が癒えてません。動く気持ち悪いです」

『また吐血しそうな感じですか？』

「今のところは・・・最悪、痛み止めが有るけどね」

『ダメですよ？使い過ぎると廃人になっちゃいます』

「どんな薬やねん。麻薬か？麻薬なんか？」

『「・・・」』

「・・・え？ホンマに麻薬？」

軍用ですから・・・と言ったら変な目で見られた。

ヤク中じゃないですってば！

「ちなみに・・・さっき思い出したけど・・・はやても主人公だった」

「ええ！？ついに私も魔法少女になってまうん！？」

『そしてご近所の事件を解決する為に奔走するんですね？』

「地味に辛い仕事だな」

「うっわ、一気にテンションが下がるわソレ」

セイギノミカタって、結局のところ便利屋だよな。

そんな事話したら、夢が無いって言われた。仕方ないじゃん中身大人なんだもん。

「……ロリババア？まて、俺は男だからシヨタジジイのほうгадаしいぞ？」

はて、なんか会話がおかしい気がするけど気の所為か？

「ところでな？最後の方に出て来たあの宝石みたいなヤツなんなん？」

「アレが事件の発端の原因」

『恐らく時空管理局の言葉を借りるなら“ロストロギア”と呼ばれるものでしょう』

「ろすとろぎあ？」

「所謂古代の超文明の遺産、ピンキリだけど、どれもかなり強力」

「ああ、成程。ブルーウォーターみたいなもんなんや」

『形が似ているのがビックリですよね』

どっちも不思議な力があるって意味じゃそっくりだよな。

ところで何でヴィズはそう言ったネタを知っている？

『先ほどからこの世界のネットワークにアクセスさせてもらってます』

「……道理でか」

なるほろ、ソレならネタを覚えるのも仕方が無いって訳だ。

「……知らない内に、自分のデバイスがこの世界の電波に汚染されてたOTL。」

『【ツングースカ】俺、落ちて来た【大爆発】ってスレ立てたらダメでしょうか？』

「あかん、ソコは【俺】うほっ！良い惑星【宇宙人】とかの方が面

「白いんちゃつ?」

ダメだコイツら・・・早く何とかしないと・・・。

.....

.....

.....

「まあ色々気になるとこやけど、私に家族が増えるって話しはホンマか?」

「断言はできない。闇の書がこの家にあるなら・・・多分」

「それってこの本か?開けられへんこの何時の間にかあった本」

「・・・ビンゴだはやて、これで家族が後4人増えます」

「一気に我が家のエンゲル係数が跳ね上がる予感」

『しかし、食費はケチらないのが、八神家クオリティ』

「料理は節約料理だけだな」

はて?何だか俺もおかしいぞ?普通にネタに乗せられている様な?どうもエネルギーを浴びてから、感情の操作がおかしい。性格も変わった?

表情は相変わらず出し辛いけど、それでも前よかましか・・・。

「ちなみに、原作やと何時頃やったん?」

「そう・・・だな・・・確かはやての誕生日の時だったと思う」

「今が春やから、もう少し先って訳や?」

まあいいか、どうせしばらく軍に戻れそうもないし、休暇だ休暇。有給だけは馬鹿みたく溜まってたから、消費するいい機会や。

『どんな人達なんですか？』

「たしか・・・騎士を自称してたと思う」

「自称騎士とか言っと、なんか偉い貧相な感じや」

「ちなみに構成は女性三人に男一人」

『紅一点ならぬ黒一点の編成ですか？』

何故全部女性タイプにしなかつたんだろう？

「あ、その本もロストロギアだから、管理局には気をつけた方が良
いかも」

「管理局ってなんや？」

『様々な世界に赴き、犯罪者を取り締まる警察機構の様なものです』

「それに裁判所と軍隊を付け加えた集団・・・ってどこか」

上層部がかなりの決定権を持ちそうなスタイルだよなあ。

『管理局の仕事にはロストロギアの保管管理も有るみたいですから
ね』

「へたすると取り上げられてしまっつて訳や？」

「そう言う事・・・まあそれにも原因がある」

闇の書は確か、長年様々な人間の手に渡り、悪質なプログラム改偏
をされてしまったロストロギアだったっけ？ソレの所為でプログラ
ムにバグが生じているとか・・・。

「そう言う訳で、色々とこれまでに悪さしてるのさ」

「具体的には？」

「世界の崩壊、持ち主の破滅、その他もろもろ」

「でも、このコの所為とちゃうやろ？」

「悪質なバグの所為だったと思う。しかも転生機能が付いているから、管理局側も破壊するか封印するかの二つしか対策が取れないんだって……」

「そんなん可愛そ過ぎるやろ？このコ所為とちゃうんに……」
仕方ないよ。それまでの主がそう言った人達だったんだもん。

「でも……原作だとちゃんとバグは壊されて、おおむねハッピーエンドだった」

「そうなんや、よかつたあ」

「確かバグを顕現させて皆でフルボッコしてた」

「……力づくかい」

そうです、思いつきり力技でぶっ壊してました。

「だから、心配しなくても余程のイレギュラーが無い限り、心配は無いかも」

「そか、まあまだ時間がある事やし、対策はもつと後で考えた方がええやろ？」

「その方が賢明」

「しかし未来知識って言うのも、案外当てにならないのやな」

「既に俺が居る段階で狂ってやも」

『案外、マスター含めた全員でフルボッコとかヤリそうですよね』

「……」

ひ、否定できない。

「とりあえず夕飯にするけど、何か食べたいもんとかあるフェン君？」

「……うん、しばらくは重たいモノはムリッポイ……です」

「あゝ、確かにまだ無理っぽそうやなあ」

うう、気持ち悪いよあ。リンカーコアもまるで熱持ってるみたいな感じ。

神経系もフラフラだし、歩く程度は出来るけどコレは2〜3日はまともに動けねえなあ。

この状態で外に居るのは危険かも知れない・・・ダメもとで頼んでみるか。

「はやて、お願いがある・・・しばらくこの家において欲しい」

「置いてほしいも何も、直るまでいてくれてかまへんよ？」

「ありがたい、身体が直ったら家事とかを手伝おう・・・」

「世界最年少の家政婦の誕生やな」

『男の人なら家政婦じゃなくてヘルパーさんでしょうか？』

「いや、この顔なら家政婦さんや」

『あー成程』

「いや・・・そこは否定してよ」

今更ながら、己が女顔だと言われた。

そ、そんなに女の子っぽいかな？

・・・なんだか胃が痛くなってきた。

「うう」

「ほらほら、体長悪いんならまだ寝とき」

「ありがとう・・・」

『ああ、マスター・・・おいたわしや』

だから、どこでそんな言葉覚えた？

とりあえず寝床と飯は確保出来たな。ありがとうえ。

あう、気分悪いよ。

「どうせ家には私以外おらへんのや。好きに使ってくれて構わへんで」

「そいつは・・・どうも」

「まあ、直ったら家政婦さんでもしてくれればええわ」

「了解した」

そう言えば、無口が少し直ってるみたいだ。

久々に普通に会話した気がする。・・・良いなコレ。懐かしいや。とりあえず・・・今後の事は・・・その時に考えよ・・・。グー。

「・・・寝たか？」

『寝ましたね』

「写真、準備できとるか？」

『高画質ハイビジョンで準備完了です』

「今の内にこの無防備な寝顔を撮って、後で見せびらかしたろ」

『面白い事になりそうです！オラなんかワクワクしてきたぞ』

「いつちよやってみっか」

次に起きた時、ちょっと悪乗りしていた悪ガキ2匹を懲らしめた。全く、人の寝顔を撮って何が楽しいんだか・・・。

「ある日、森の中、熊さんに、出会った」

「ある日、森の中で、熊さんに、出会った」

妄想戦記

やあみんな、早いとこ時空管理局が来ないか待ち遠しいフェン君だよ。

ほんと早くこんなかな？とりあえず元の世界の皆と連絡が取りたいかな。

あの事件がどうなったのか、結末だけでも聞きたいぜ。いやホント。さて、八神はやてとの邂逅と、全てを暴露してから一週間が経過した。

何とか普通に動けるようになった俺は、今も八神家に御厄介になっている。

時折気分の悪さは出るけど、動く分には問題無いみたいだった。

まあ、目の色素が落ちて鮮やかな赤、所謂緋色の目になっちゃったのには驚いたけどね。

お陰でかなり目立つから、普段は目元を帽子で隠しております。

黒髪で白肌で赤い目、はやてから吸血鬼かと言われてちよっと凹んだのは内緒。

さて俺は現在、病院に行った家主はやての帰り待ちの筈なのだが

「なんで・・・ジュエルシールドが追っかけてくるの・・・？」
『何故でしょう？魔力の隠蔽はしてあるのですが・・・』

現在山ん中を絶賛逃走中でございます！

何でかは知らないが、現住生物に憑り付いたジュエルシールドに追われてます。

ちなみに元は多分熊だである。ただし赤カブトみたいにデカイけど・・・。
そうこうしてるうちに、追いつかれてた・・・爪、デカイなあ・・・。

『プロテクション』

ドン！

「くっ！」

振り上げられた爪は防護壁にて遮られた為、威力は減った。
ただどウエイトって大事だよね・・・爪は防げたけど吹き飛ばされたよ。

何と言う無理ゲー。なんで、こんなことになったかつて？

えーと、実はジュエルシールド集めようと思って・・・はい、

嘘です。

本当はただ単に巻き込まただけでございます。大体一時間くらい前だろうか？

俺はリハビリがてら、はやてを病院に送り届けた後、暇だから散歩をしていた。

その時ヴィズがすぐ近くの山で微弱だけどジュエルシードの反応を感知したのだ。

微弱だろうから、恐らくまだ覚醒してないんだろうと思った俺。

ほつとくのも忍びないし、はやてが検査終わるのまでかなり時間があつた。

放置して何か起こっても困るから、見に行ってみたんだよ

でも俺が着いた時すでに活性化してて、たまたま近くに居た熊を取り込んだ。

その光景は、魔力の触手捕らわれた熊が飲み込まれてアツ　　つて感じ。

どこことなくバイオハザードっぽい感じだった。決してクソミソでは無い。

まあそこまでは良い、只飲み込んだだけなら俺は回れ右をすれば済んだ訳だしね。

問題はだ、融合されちゃった熊公と偶然目が合っちゃったんだよね。お互いに固まること約数秒、そして次の瞬間熊公が襲い掛かってきやがった。

原因は不明、恐らく俺が持つ高ランク魔導師の魔力の所為では無いかと思われる。

でも何で月の輪熊が、体長10m近い巨体になってるんさ？

片目だし、背中の毛が頭から腰にかけて紅いし・・・アレってやつ

ぱり赤兜？

ネタが古すぎて解る人いるのかなあ？

『マスター、一応安全の為にセットアップを…』

ちなみに俺はまだセットアップをしていない。

俺はまだリハビリ中で、あまり魔法運用はしなくなかったのだ。

ソレ以前に付けるヒマ無しかったし、いままでよく逃げ回れたと思う。

思うんだが、こんなバケモン倒すには銀色の毛並みの熊犬と数千匹の犬の群れがいるぜ。

「セットアップ…」

『了解』

セットアップした俺は、とりあえずチェーンバインドを放ってみる・
・が。

<バオオオオ！！！> ぶちぶちぶちっ！！！！

うん簡単に引き千切られた。というかもっと頑張ろうよバインド。

「逃げさせて…くれないみたい」

『みたいです』

融合熊の奴、隙があつたら飛び掛ろうと身構えてやがる。

まだ直つたばかりで、アレだけど・・・あーもースパルタなりハ
ビリ！

「ヴィズ、アルアツソーモード、弾種・多重弾殻セット！」

「アルアツソーモード、多重弾殻装填！レールブラスター・スタン
バイ！」

今回周りには人間がない為、いつもの多重弾核弾を使ってみる。
今のところ、術式展開・魔力等に問題は・・・

「・・・うぐうっ！」

「マスター！？」

な、なんだ？必要以上に魔力が・・・流れ込む？！
ダメ、制御が・・・不味い！キャンセル！

「術式キャンセルしました」

「ふう、ふう・・・」

<グルルルル>

慌てて多重弾核弾形成術式をキャンセルする。

多重弾核弾は威力こそ高いが、その形成には慎重に行わなければな
らない。

ヘタすると霧散するだけじゃなくて、込めた魔力量次第では爆発し
てしまうからだ。

そして、今回不意に流れ込んでしまった魔力量は、爆発霧散する位
の量。

あまりに急激に魔力が入り過ぎた為、術式制御が追い付かなかった

どうしちまったんだ？俺の身体・・・クソ、慣れるまで射撃系は不味いか。

しかしそうだった、目の前の融合態からどうやって逃げる？

いや、待てよ？プロテクションは上手くいった。

アレは簡単な術式な分、上乗せする魔力のキャパはかなり高めだったよな？

キャパシティがあれば大丈夫なのか？なら俺の持つ術式の中で上限が高いのは・・・。

グロム・・・はダメ、威力が高過ぎる。今の状態で撃つと辺りがどうなるか。

ガルヴァドスも同じ理由でアウト、山を焦土に変えたいなら別だけど・・・。

キャパが多めの、他の似たような攻撃用術式は・・・有った。

「キーンセイバー起動」

『リンカーコアが不安定ですが・・・』

「いい、ちよつとした実験だ」

俺の予想が正しければ、問題は無い筈。

『・・・キーンセイバー』

「うづく・・・」

少しばかり消耗が激しいが、どうやら大丈夫な様だ。
しかし山刀程度の大きさしかなかったのに、野太刀みたく長くなっ
ちまったな。

余剰魔力が多過ぎる。早いとこ身体が安定してくれればいいんだけ
ど。

「・・・行くぞ熊公、堪え切れればいいな？」

<バオオオオオオツツツ！！！！>

律儀に待つてくれてありがとうよ熊公。

お礼になるべく痛くしない様に、一瞬で片付けてやる！

俺は飛行術式を利用して、後方に飛び去り熊公から距離を取る。

慌てて追っかけてこようとする熊公を見据え、術式制御に思考リソ
ースを多く振り分けた。

キーンセイバーの魔力刃が、徐々に輝きを増して行く。魔力密度が
上がっているのだ。

「・・・かき消えろ、デイメンジョン・グレイブ！」

本来ならキーンセイバーCSモードにて、チャンバー内の魔力を使
わないと出来ない技。

分子結合すら破壊できる程に、高圧縮した魔力刃を振り下ろすデイ
メンジョン・グレイブ。

その工程を踏むことなく、俺はその魔法を発動させた。

「ぐがつ！・・・ハアハア」

『バイタルが異常数値を示しています。治療魔法使用します』

「雀の涙でも・・・しないよかましか」

熊公はなんとか殲滅出来たっぽい。

断末魔すら上げるヒマもなく、切り裂いてやったからな。しかし、反動が酷いなコレ。慣れるまで苦勞するな。

少しすると、魔力結合が緩み始めたのか、熊公の身体が変化していく。

大きかった体長は普通の大きさへと戻りつつあった。後に残ったのは眠りこける熊と、小さな宝石の様なものだけ。

「・・・どうしてくれようか？」

『放置すると、また元に戻りますよ？』

ですよねー。はあ、これなら反応放置しておけばよかったかな？

「ヴィズ・・・封印術式は持っていたっけ？」

『・・・恐らく必要かと思い、前の映像から封印術式をトレースしておきました』

さすがは俺のデバイスだ。

「じゃあ・・・封印して」

『全てトレース出来た訳ではありませんので、簡易封印になります
が・・・』

簡易封印、簡単に言えばある程度活性化を抑えられるが、暴走までは抑えきれない封印。

要は時間稼ぎにしかならない封印ってワケか・・・。

「構わん。放置して活性化されるよかマシ」

『・・・封印、実行します』

アルアツソーの銃口を、ジュエルシードに向ける。術式が起動され、銃口の先に封印術式が展開された。

底から伸びた光が、ジュエルシードを包みこみ、封印を施して行く。

そのまま簡易封印を施したジュエルシードを、そのままヴィズの格納領域に収納した。

フェイトかなのはか・・・どちらかにあつたら渡しちまおう。

絶対余計な事しか招かねえしなコレ。

『うう、なんて魔力量・・・格納領域が魔力プールになりそうです』

「俺魔力切れ無しのチート誕生の予感」

『吸い過ぎで吐血の運命ですね？解ります』

ダメだ、なんかネタに走ってしまう。

相当神経か何かネジくれたな。次元航行エネルギーマジでパネエ。

しかし、ヴィズがネットを見始めて一週間余り。

ネタに走れるデバイスが誕生するなんて思わなかったぜ。

まあ、前世のノリがいけるから、俺としてはありがたいんだけどな。徐々に感情も戻ってきてるみたいだし、案外精神のりハビリにも良いかも知んない。

「帰る・・・前にお客さんだな」

『ですね。多重プロテクション展開』

プロテクションを展開した瞬間。

バチチチ　　ッ！

魔力刃が飛来し、障壁に激突する。かなりの威力があるらしい。電気系統、そしていきなりの奇襲攻撃。気殺は下手みたいだったけど……。

おおよそ予想は付いているが、俺は魔力刃が飛んできた方を見た。

そこにいたのは、赤毛の犬で現在人型の使い魔アルフとその主人。本編の主人公の一人、金髪と紅い目が特徴のフェイト・テストアロツサが立っていた。

……考えて見たら、俺も今は紅い目してるんだよなあ。

S i d e フェイト

管理外世界、ココにジュエルシードがある。母さんの望みをかなえるモノが。

私は母さんに言われ、ジュエルシードを探していた。

たくさん集めることができれば、母さんはきっとほめてくれる。

リニスが居た頃のように、きっと笑顔になれる。

そのことを胸に、私はジュエルシードを探していた。

「なかなか見つからないね」

「あれだけ小さいとね。活性化しないと探し出すのは難しいさ」

私の使い魔であるアルフが鼻をスンスン鳴らしながらそう言った。

「でも大丈夫さ！私たちが本気になれば簡単だよ簡単！」
「そうだと良いんだけど」

そうだ、まだ始まったばかりなんだ。
ダメだ、弱気になっちゃ。

「沢山見つけてあのいけ好かない女の高飛車な鼻をへし折ってやる
うねー！」

「う、うんそうだね…」

アルフ、私に使えてくれる使い魔。私にはとてもやさしいんだけど。
。。。

どうも母さんのことが気に入らないみたい。確かに母さんは玉に怖い。

でも私としては、二人とも仲良くしてほしいと思うんだけどな。

「ん？この反応！」

「・・・いくよアルフ！」

「うんー！」

山の方に、ジュエルシードの反応を見つけた私たちはそこに向かう。
おおよそに位置を絞りみ、更にくわしい位置を探るために意識を絞る
・・・こつちだ。

「！　アルフ！止まって！」

「え！？」

ジュエルシードの反応が急激に弱まった。
突如移動を止めた私を驚いた顔で見つめるアルフ。

「魔力反応だ。多分魔導師の・・・」

「な、もしかしてジュエルシードを探索している輩が他にも!？」

「わからない。だけど、やる事は一つだよ」

ジュエルシードを探索し、持ち帰るのが私の仕事。

手に持ったデバイス、バルディッシュに力をこめる。

バルディッシュもそれにこたえてくれているのか、コアを光らせた。

「視えた。バルディッシュ」

< Arc Saber >

私は静かに近づき、遠距離からの奇襲を行う。

姿を見せず気絶させて、相手からジュエルシードを奪う。

こうすれば何されたか解らないし、追いかけても来れない。

・・・追剥みたいで少し嫌だけど、目的の為だから目をつぶる。

バチチチ ツ!

しかし、放った魔力刃は、相手の防御魔法で防がれた。

此方の接近に気がついていたら?一筋縄じゃない相手なのかも。

「(アルフ、サポートお願い)」

「(解った)」

次の攻撃に向けて、バルディッシュを構える。

相手は何故か動こうとしない。何故?

「……この世界では、出会いがしらの魔法が……あいさつなのか？」

「……」

相手の問いに無言で返す。 ごめんなさい。

ただど話しても理解なんてして貰えないと思うから。
だから……。

「ジュエルシードは、何処にやった？」

私はそう問いかける。素直に話してもらえないとは思わない。
敵対行動を取った以上、私は目の前の人の敵なのだから。

「……コレの事か？」

しかしあっけないほど簡単に答えられてしまった。

魔導師はそう言うと、己の手に小さな石を浮かべている。
不完全な封印が施されているが、ソレはまさしくジュエルシードだった。

「申し訳ないけど、ジュエルシードは頂いていきます」

奇襲は失敗、仕方が無いから力づくで奪うしかない。

私は戦う為に、バルディッシュを相手に向けた。

「……落ち着いて欲しいのだが、とりあえずコレ「行きます！」
っ!？」

何かを言おうとしていたみたいだけど、私には関係ない。

優先事項は、ジュエルシールドの奪取、それ以外は考えない。

私が飛びこむタイミングに合わせて、アルフはバインドを展開してくれる。

ソレを避けようとする相手の行く先に、私はサイズフォームを展開させて飛びこんだ。

「ハアッ！」

「くっ！」

私の放った斬撃は相手の持つ魔力刃に防がれてしまう。

ただソコは読んでいる。一瞬出来た隙についてアルフが掴みかかった。

「な、何を!？」

「速いところ眠っちまいな！」

アルフが放つ魔力を乗せた打撃攻撃を、最小限の動きでかわして行く魔導師。

思っていたよりもずっと強い。なら今の内に倒して置いた方が得策。

「(アルフ、大きいのを使う。タイミング合わせて!)」

「(あいよ!コイツには悪いけど、眠って貰おう!)」

相手の気がアルフに向いている隙に、私は術式を構築する。

タイミングを合わせ、相手が体勢を崩した瞬間を狙う。

「……今だ！」

「撃ち抜け、轟雷」

「……おい、ちよっと」

「サンダースマッシュャー！」

アルフが素早く飛び去り、そしてすぐに雷撃を伴った砲撃が魔導師に向かった。

大きな轟音と砂煙、衝撃波を起し、砲撃は命中する。これで

「・・・で、何時まで我慢すれば、話を聞いてくれる？」

「!?!」

「そんな！フエイトの砲撃の直撃を食らったんじゃ!?!」

「生憎と、砲撃魔法を受ける事には慣れてるモンでな？」

本気だった。殺したくは無かったから非殺傷設定だったけど、手は抜いていない。

しかし、相手はソレの直撃を受けておきながら、無傷でそこに立っている。

ソレどころか、さっきよりも魔力が増しているのは一体何故？

「・・・話を聞いてくれないと言っのなら」

「・・・ツ・・・」

「聞いてくれるように・・・するだけだ」

『ミラージュハイド起動』

次の瞬間、目の前の魔導師は書き消えた。

「このレアスキルが無かったら即死だったよ」

「このレアスキルが無かったら即死だったよ」

妄想戦記

森の中にて、ジュエルシードを探している少女と出会ったあゝ。
・・・そして攻撃を受けた。話をする暇も無く。
いやね、そうなるのは予想してましたよ？ けどどさあ

「撃ち抜け、轟雷」

「・・・おい、ちよつと」

「サンダースマツシャー！」

砲撃を喰らわせてくる事は無いんじゃないの？

しかもコンビネーション組んで避けられなくしてからとか・・・。

「(チイツ！ 治癒術式準備！ それとミラージュハイドスタンバイ)」

『(了解)』

避けられないと思い、しかたなく対母上用砲撃魔法対策を実行する。
何、することは至極簡単だ。避けられないなら受ければ良い。

レアスキルで受けとめ、吸い取った魔力で瞬時に回復させる荒技である。

恐らくシールド貫通だろうから、シールドを貫通した瞬間が狙いだ。

そして、迫りくる砲撃に対し手をかざした所で、ふとマルチタスクの中にこんな考えが浮かんだ。

・・・俺今体調がヤバかったんじゃない？

レアスキルのリサイクルで魔力を吸収出来るけど、その代わり負担が・・・。

・・・\ (^o^) / ・・・オワタ。

次の瞬間、俺は雷撃の渦に包まれた。

・・・？おろ？俺・・・生きてる？

あ、あれ？吸収、出来たのか？でも痛みが発生していない？でも魔力の充足感はあるし・・・？？ワケが解らん？？

どうやら無傷であるようだ。今までなら有り得ない事である。

しかも、微妙に体調が良い・・・コレは本格的に俺の身体に本格的

に何か起きたな。

俺が自分が無傷で有る事に驚愕しているのと同時に、相手側もうろたえていた。

しかしなあ、俺はただこのジュエルシードなんかしたかっただけなのになあ。

なんで奇襲されたあげくに、止めてな感じで砲撃撃たれないといけないんだ？

大体さっきの闘いだって、本気で逃げようと思ったら逃げられたぞ？
なんだか理不尽な事が続いて、いかりが湧いて来たんだが・・・。

「・・・で、何時まで我慢すれば、話を聞いてくれる？」

「!？」

少しばかりイライラとした感情になっちゃったけど、仕方ないだろう。

相手側ははまだ狼狽中、隙だらけも良い所。

もうめんどくさいから、力づくで渡しても良いかな？

「そんな！フェイトの砲撃の直撃を食らったんじゃ!？」

「生憎と、砲撃魔法を受ける事には慣れている」

「・・・いや、マジです。そんな驚愕の眼で見られても仕方ないんですけど？」

「・・・話を聞いてくれないと言っのなら」

「・・・ッ・・・」

俺は持っているジュエルシードを早くなんとかしたい。

だけど相手は話しも聞いてくれない上、逃げたら追って来る事間違いない無し。

俺だけなら良いけど、今住んでる所にははやても住んでいるしな。となると、方法はただ一つ。“脅威は実力を持って排除せよ”しか無い。

「聞いてくれるように・・・するだけだ」

『ミラージュハイド起動』

「消えた!？」

「光学迷彩魔法!？アルフ!気をつけて」

今更遅い、俺は既に意識を戦闘にシフトさせている。

こういうのは相手が発動させる前に仕留めるのだ、未熟者め。では、目の前で見ていただけの少女にお仕置きと参りますか。

俺は足音を立てないよう、ほんの少し浮き上がる。

飛ぶ事は苦手だが飛べない訳でない。最近はゆっくりなら操作出来るのだ。

やっている事はワイズ教官の得意技、俺もよく食らった隠れ蓑の術。

キョロキョロ見回して、その場から動かないと言うのはいただけない。

こういった場合は、すぐさま防御態勢に移行しつつ、後退するのが正しい。

そして辺り一面に弾幕を張って、隠れたヤツをいぶり出すのだ。

ぐうう!大声で注意したい!なんだその戦い方は!FNG以下じゃねえか!

所詮は一般の魔導師と、軍事訓練を受けた者との違いと言う事か・

。

「・・・動くな」

「・・・ッ!・・・」

「フェイト!この卑怯者!フェイトを離せ!」

俺は魔力刃をフェイトの首に当て、姿をあらわにした。
俺を射殺すかの如く睨んでくる犬の人。

「卑怯者・・・奇襲は卑怯とは言わないと?」

「あ、あれは作戦だから良いんだ!」

「ならコレも戦術だ。問題無い」

「あぐう・・・」

理屈上そう言う事になるからな。

「武装を解除しろ、その犬耳は腕を頭の上上げてさがれ」

「ッチ、解ったよ。・・・フェイトを少しでも傷つけたら噛み殺してやる」

「歯が折れるから止めておけ」

彼女はそう言うと、頭の上に手を挙げて下がった。

「君もデバイスを解除してくれ・・・待機状態でいい」

「くッ!・・・解りました」

フェイトはバルディッシュを待機状態に戻した。

「・・・ふう、これで話しを聞いてもらえる」

俺もそう言いつつ、魔力刃を下す。勿論、刃は消してはいないしBも解除しない。

ただ解放したフェイトから数歩後ろに離れたただけだ。

「率直に言う、俺は敵では無い。コレはあくまで正当防衛である。奇襲した目的は何だ？」

「……………」

「黙秘か……まあ大体予想はしている。コレだろうか？」

俺は格納領域にしまっていたジュエルシードを取り出す。

二人の視線が一気にそれに向くのが解る……解りやす過ぎるだろう。

「やはりか……おい使い魔……」

「な、なんだい？」

おうおう警戒心むき出しだわ。まあ関係無いがね。

「ホレ、受け取れ」

「へ？あ、ちよっ!？」

俺が放り投げたジュエルシードを受け取ったアルフは、目を白黒させていた。

まあそりゃねえ、襲い掛かった相手がいきなり目的の物を渡してきたら驚くか。

「それじゃ、俺はこれで……」

「ちよっ!ちよっと待っておくれよ!」

「……………なんだ?待ち人がいるんだが?」

あと10分足らずで、病院言っているはやての診療が終わるんだが？だから早く迎えに行きたい訳ですよ。面倒臭いのもあるしな。

「貴方は何故、ジュエルシードを・・・」

「何故と言われてもな・・・君は？」

「フェイト、フェイト・テストロツサ」

「それではテストロツサ嬢。理由は簡単、ソレは俺には必要ないモノだから、以上。」

「だけど・・・」

「加えて言うなら・・・それを持っていたら君は俺を襲う。違うか？」

「・・・」

俺がそう言つと、黙り込むフェイト。

まあ原作だとかなり切羽詰まっていたから、答えは当然YESだろう？

「要らないもので襲われるのはまっぴら、ではどうすればいい？・・・それが答え」

「・・・あ、あなたは管理局」

「时空管理局と関係があるか？答えはNO。俺は次元漂流者。事故でこの世界に来た」

まさかこんな所でジュエルシードに襲われたあげく、原作キャラに会うなんて予想外だ。

俺は管理局が来るまで、八神家にお世話になるうとは思っている。だから、あんまり積極的にこの事件にかかわりたいとは思っていない。

それよりも、今の俺の身体は一体どうなっているのかが知りたい。

それが解らない内は、あんまり堂々と動きたくは無いだ。
幾らなんでも後遺症とかあったら嫌だしね。

「そう言う訳で、味方じゃないが敵じゃ無い・・・OK?」

「・・・解った。それなら警告する」

「もうジュエルシードには近づくな・・・言われなくてもそうさせ
てもらおう」

そちらはそちらで頑張ってください。

しばらくすれば主人公さんも登場するし、管理局が来る。

俺と戦い合う必要も無くなるだろうし、すぐに忘れるだろう。

「勿論、否応が無く巻き込まれたら・・・抵抗はする位は許してほ
しいんだが?」

「・・・」

「・・・それでは・・・失礼する」

主人公の一人に無言で睨まれ続けてる俺。

く、悔しい!けど感じ(r y・・・んなワケない。

生憎俺は変態と言う名の紳士じゃないからな。至ってノーマルだ。

なんとなく背中に感じる睨みが痛くて泣きそうだけど、気の所為さ。
そう言う訳でこの場からそそくさと退散しようとする俺だった。

あ、言い忘れるところだった。

「あと、俺は現在フリーランスだ。報酬くれれば手伝う事もやぶさ
かじゃ無い」

八神家に居るとはいえ、養われるだけと言うのはちょっと俺の吟持
が許さない。

しかし、この身体は魔導師というスキルがあるだけの魔導師。稼ぐならこういった手段しか無いと思うのだ。

USN軍はバイト禁止だけど・・・異世界だからバレねえだろうさ。どちらにしろ、この世界に居る間は有給扱いにさせてもらう。

「いきなり信用は出来ないと思う、だから俺もBAを解除しよう」

俺は目の前でBAを解除する。そしてヴィズを待機状態にしてしま
う。

これで俺は丸腰で、相手は攻撃可能って訳だ。

・・・殺されはしないだろう。ウン。

「・・・・・・・・」

そして件のお二人は、ただただ呆然としていた。

まあ話の展開に付いていけないんだろうなあ。

「一応の連絡先を渡しておこう。金さえくれれば何でもやる」

まあこう言うておくのは所謂ポーズってヤツだ。

この頃のフェイトは恐らく他の人間に心を開いていない。

だから絶対、俺に依頼が来る事は無い。

つまり敵では無いと言う事を印象付けるっただけのポーズなのだ。

これでもしまた事件に巻き込まれていたとしても、いきなり攻撃される事は無いと思う。

保険の様なものであると考えると考えたらええいいのだ。

なんだか巻き込まれたくないとか言っている事と矛盾しそうだけど、

こっちは最悪逃げればいいからな。八神家で生活してればそう簡単には巻き込まれんだろう。

1か月程度で終わる事件なんだから、そんな気追う必要もないしな。

「では・・・本当にこれで・・・」

俺は最後にそう言って返事を聞かず立ち去った。

言いたいことだけ言って、返事は聞いていない！って感じだな。

ふははは、どうだこの完璧な作戦は！さて、はやてを迎えにいくかね。

病院に戻り、はやてを迎えに行く俺。

なんじゃかんじゃで、彼女のお世話が様になって来たなあ。

んで、待合室に行くと

「遅い！待ったで！」

「ゴメン」

若干遅れた事に立腹のはやてさんが、待っておられました。

急いんだけど5分だけ遅れちまったんだ。

「まあええわ。ほな帰ろうか？」

「はいはい」

まあなんとか許しを得たので、そのまま車いすを押して病院を後にする。

「なあなあ、今日何で遅れたん？」

「実は、原作キャラさんに襲われて・・・」

すでに殆どバラしている彼女に、遅れた事情を説明した。

「大丈夫やったん？身体まだ本調子とちやうやる？」

「なんかなかった。どうやら大分身体の中が変化してる事も解ったし・・・」

『（魔法を完璧に吸い取れるようになってたんですよ）』

「うわ、なんて言うチートやソレ？魔導師には天敵やん」

「案外弱点も多いと思う。近距離攻撃は流石に吸いとれないし」

吸い取る前に切り裂かれます。

「しかし、副作用が出ないのが・・・怖い」

『（以前は、吸い取るごとに神経系にダメージが来てましたしね）』

「でも負担が無くなったって事やる？良い事やん」

いやいや、本当に手遅れだったりすると、痛みとか感じないんだよ？

「もしそうだったら・・・どうしよう？」

「そんな時は、寝たきり生活やな。私が面倒見たるわ」

『（マスターが紐になった件）』

「誰が紐じゃ・・・若いツバメもいや」

だから、お前はどこでそんな知識・・・ネットか。

しまいにや腐らんだろうなお前？人格は女性人格だからそう言うのは御免だぞ？

.....

「ただいまあ」

「・・・ただいま」

『ただいまあ』

三者三様でただいまを言う。

はい、八神家に戻ってまいりました。

「それじゃ、手を洗って休憩しよ？」

「あいよ・・・洗面台に行けばいいか？」

「お願いするわ」

一応有る程度体調は戻っているので、身体強化位出来る様になった。なので最近では家の中で移動する時ははやてを抱えて動く事が多い。車いすで移動するよりも早い事もあるのである。

手を洗った彼女を居間のソファに座らせる。

そう言えば朝布団を干した事を思い出したので、布団を取りこみに行った。

「おおっ、ふわふわや」

「お陽様の香り・・・ってヤツ」

『いいなあ、私もそう言った感覚器が欲しいです』

そしてまだ暖かい布団にダイブする俺ら。

お陽様に欲したての布団ってどうしてこんなに気持ちいいんだろうな？

「そう言えば……はやての体調は？」

「うーん、相変わらず良くも悪くもなつて無いらしいんよ」

『まあ原因が原因ですから、普通の医学では無理でしょう』

闇の書のバグが原因だもんねえ。

「バグつちゆうんやつたら、パソコンみたくウィルスバスター効かへんかな？」

「……その発想は無かつたわ」

『最終的に物理的なバスターを撃ちこまれるのでは？』

トリプルバスターだったけ？あれ、ブレイカーだったけ？

「では……ウィルスバスターを入れて見ようか？」

「だめや、取り込み口があらへん」

「こうなったら覚悟を決めて……」

『何故か書が震えている件』

「怖がつとるやん。やめたりや」

「……あれ？俺悪者？」

今日も八神家は平和です。

「速いとこ騎士たち出てこようへんかなあ？」

「……難産なのでは？」

『ラマーズ法を覚えさせないといけませんね』

「アレって吸って吸って吐いてやつけ？」

「噂では……全部吸うらしい」

「マジでか？知らんかった」

『ググれば解るのでは？』

ググったらはやての方が正しかった。
くそ、噂は当てにならないモンだなあ。

「さてと、布団をしまわないと・・・」

「え、もう少し使わせてほしいわ」

「だめ・・・続きはベッドで」

「言葉だけ聞くとエロいな」

『布団と結婚したんですね解ります』

こうして今日も、グダグダと一日が終わったのであった。

「このレアスキルが無かったら即死だったよ」（後書き）

*ふはは、電波の所為でなんかブレイクしてるわ。

そしてまたストック無いので、しばらく不定期になると思います。
ではまた。

「燃やし尽せ！ってデカッ！？」

「燃やし尽せ！ってデカッ！？」

もうそうせんき

フエイトとあってから3日後、相変わらず俺はのんびりしてた。別に見回っている訳でもないのに、事件に巻き込まれないからだ。お陰で何時ものように、趣味のデバイスパーツの組み立てを行っていた。

「えーと、リソースはこの程度でいいから、ここら辺はダイレクトに……」

「フエン君？居間で何してるん？」

「兵装デバイスの改造」

「どうでも良いやけど、部品がかなり繰り広げられて邪魔やから早く片付けてな」

「……あーい」

うう、デバイス開発は俺唯一の趣味なのに……。仕方ないので、グロム用バズの改造は後回しにした。新型は既に開発済みだから、改造は後でやろう。

「そうや、フエン君ちよつと買い物行つて来てくれへん？」

「塩が足りないと申したか……？」

「ソレTV版だけや……」

『弹幕が薄いぞお〜！』

そしてネタに走る俺ら、とりあえずそこそこで打ち止めにしておい
て財布を預かる。

へたするとループしてみたみたいにネタを繰り広げようとするからな俺
達。

買い物メモも渡されて、俺はお使いに出たのであった。

.....

.....

.....

やって来たのは商店街、休日と言う事もあり、それなりににぎわっ
ていた。

スーパーも品ぞろえが良いが、やはりお得に買うには商店街の方が
便利だ。

かぼちゃを叩きながら、どれが身が詰まっているのか確認する。

.....音だけじゃ解んないけど、なんとなく重い音がしたから
これにしよ。

かぼちゃはいい、皮こそ固いのだが、ほぼすべて食べる事が出来る
しお菓子にもなる。

おまけに栄養もたっぷりだ。ビバ！カボチャ！早く煮物で食いた
いです。

残念、正確には樹齢5分です。

目の前では巨大な樹が根を降ろし、今尚生長しているところだった。つーか、動きが活発で触手みてえーでちょーキモいな。

「なあヴィズ、気の所為だと思いたいんだが・・・」

「（ハイ、何でしょうか？）」

「ジュジュジュジュジュ」

「あの木、こっちに近づいて無いか？」

「（成長を続けながら根っこを伸ばしてますね）」

「ジュジュジュジュジュ」

「あれも、ジュエルシードか？」

「（反応からすると・・・覚えてないんですか）」

「生憎、まだ思い出して無い」

こんな事件あったか？ あったな。

大分記憶が薄れてるけど、確か人間が不完全に願った所為で叶えられたんだっけ？

いや願いがネジくれて叶えられたのか？

「マスター、9時の方向、距離600mのビルの上に魔力反応！パ

ターン解析、高町なのはと思われませす』

「やっときたか」

どうやら主人公さんのご登場である。

どうしよう？このまま逃げた方がいいかな？

「どうでも良いんだが、このままだと巻き込まれるよな？」

『（商店街ごと破壊する可能性が80パーセントでしょうか）』

そいつは不味い、八神家の食卓に並ぶ食材の殆どはこの商店街の食材だぞ。

美味しい食事には、美味しい食材が欠かせない……手伝ってやるか。

美味しい飯の為ならばと俺は即決する。人間が戦う理由何ぞそんなもんだ。

それに人を撃つ訳じゃないから、ある意味とても気楽だしな。

「……まあ序でに言うと、既に囲まれて逃げられないと言つのもある」

『誰に言ってるんですか？マスターついに天界との交信を習得しましたか』

「とりあえず電波じゃない」

とりあえず、物陰に移動して格納領域に買い物かごを収納しセットアップ。

BAに姿を変える。コレで主人公に見られても安心だ。

「……兵装デバイスのテストもするか」

『主人公が間に合えばいいんですけどね……グリーンノ起動します』

新型兵装デバイスは、オートマチックショットガン型のジリーノである。

大幅に増した魔力に対応し、術式の強度とキャパを上げたら拡散弾になった。

ソレを更に強力がつ大量に発射出来る様にした兵装である。

レールブラスターのように魔力弾のローレンツ力加速は出来ない。かわりに面の攻撃力がかなり向上した魔法を発射できるのだ。

ドアの万能マスターキーにもなるショットガンの完成と言う訳である。

欠点は本物のショットガン同様、やや射程が短い事。

拡散するもんだか魔力の結合もゆるくて、届いて200m。

本物よかかなり長いけど、有効射程に入れるなら70m前後まで近づく必要がある。

スラッグか散弾かで距離も変わるけど、今回は散弾で行こう。

「さて、草刈りと行きますか・・・」

『封時結界、起動します』

暴走したジュエルシードが変化した樹木を結界の中に包み込む。

これで、主人公たちも別の魔導師が来ている事に気付くだろうが関係ない。

放っておいて、怪我人が出るよかずっとマシである。

俺はビルの上に跳び上がると、屋根伝いに樹木へと迫っていく。

魔力に反応したのか、枝か根っこだか解らんのが、集団で迫って来た。

「ジリーノ！」
ダン！ダン！ダン！

三発の銃声、発射した散弾は枝を粉みじんに変えた。
どうやら有効であるようだ。

しかし回復力が高いのか、すぐに再生してしまうのが厄介か。

「チッ」

俺は舌打ちしつつ、目の間に迫った枝に飛び乗り、更に散弾を撃ちこんでいく。

効いてはいるが、やはり大本を叩かないと意味がなさそうである。

「主人公に発破かけにいくか」

『俺ごと撃てツてヤツですね？』

「死んで舞うやろ」

こんな時でもネタ脳は健在でした。

Sideなのは

レイジングハートを起動させた私は、周りの光景を改めてみて驚いた。

「酷い・・・」

「多分人間が発動させちゃったんだ。強い思いを持った者が願いを込めて発動させた時、ジュエルシードが一番強い力を発揮するから・・・」

ユーノ君がそう言ったとき、私はあのことを思い出した。

(やっぱり・・・あのときの子がもってたんだ・・・私、気付いてた筈なのに)

私があの時、なんとかしてれば・・・

(こんなことになる前に・・・止められたかも知れないのに)

「なのは・・・」

たっただいっかいの失敗・・・。

だけど、はじめて魔法使いになってからの失敗がこんなことになっちゃった。

でも落ち込んでいる暇はないの・・・いまはあれをとめなきゃ！

その思いにレイジングハートも反応してくれたのか、コアから光を発してくる。

ありがとう・・・レイジングハート、力をかして。

「ユーノ君…こういう時はどうしたらいいの？」

「え、あ？」

「ユーノくん!!」

「あ、うん。封印するには接近しないとだめだ。まずは元となっている部分を見つけないと…」

でもこんなに広い範囲に広がっちゃうと、どうやって捜したらいいか・・・」

ユーノ君がそこまで話した瞬間、世界の色が変わった。

そしてなにかを押し込めようとしているかのような感覚。

「な、なんなのこれ？」

「こ、これは封時結界！？別の魔導師がいる！？」

驚いた声を出すユーノ君、私たち以外にも魔導師がここに来ている。いきなり起きた事態に困惑していると、すぐ近くから大きな音が響いて来た。

「な、何アレ？」

「た、多分・・・魔導師だともう」

若干自信なさげな声を出すユーノ君。

それそうだと思う・・・SFに出て来そうなロボットさんが戦っているみたいに見えるんだもん。

私自身、ちよつと空いた口がふさがらない感じ？

「味方・・・なのかな？」

「わからない。だけど少なくとも敵じゃないとおもうよ」

見れば全く無駄の無い動きで、迫りくる枝と言う枝を回避している。手に持った杖じゃ無い何かと多分剣を片手に、時に撃ち、時に切り刻む動きに隙が無い。

私は戦闘に関しては素人だけど、それでもかなり凄い人なのはココからでもわかる。

・・・若干背が低いけど、そんな事は関係ない。

「ユーノ君！私たちも！」

「うん！なのは！」

私たちも頑張らないと！

Sideフェン

予想外に成長が早いあの樹は既に、かなりの地域を飲み込み始めていた。

このままだと結界を越えて、はやてが住んでる家にまで届きそうである。

それだけは絶対に避けなければ・・・夕飯が食べられなくなってしまふ。

しばらく戦っていると主人公たちがアクションを起した。

ワイドエリヤサーチの反応を確認、恐らく次のフェイズで砲撃&mp;封印処置だ。

ソレをしたのを見届けたら、結界をといて逃げさせてもらおう事しよう。

「・・・時間は・・・稼いだな」

「枝の大部分が此方に集中していますからね」

そう、何でかは知らないが、大々的に破壊して回った所為か枝が集結中なのである。

まるで大きな触手のようにうごめく枝達が此方に大挙して向かって来ているのだ。

アレが触手ならヒギイじゃスマネえだろうなあ。プチっの方が正しい。

「　　っておい！」

「ド、ドリル来たあ！天元突破する気ですかこの野郎！木の癖にい

『！』

集まった触・・・もとい枝が絡み合わさったかと思っただら、ドリルになりました。

その姿は大きくてとてもクリーミー・・・

こんなドリルを相手にする私は、きっと特別な存在だと思いました。

「ッ！？ジリーノ！」

ドンドンドンドンドン

8発撃ち込んでなんとか破壊成功。

だけど触・・・もとい枝はすでに別の形態に・・・！？

「・・・それなんてラフレシア」

『うっとおしいゴミを掃除するつもりですか?!』

ものすごい数の細い枝が目の前で揺れています。

バグが出ないだけまだいいけど、コレ全部倒すの？

『な、なんとおおお!!』

「くう！」

流石に質量のある残像は出来ないけど、戦神楽使ってなんとか避ける。

序でに迫る枝達に散弾を撃ちこむのも忘れない。

置き土産はようやく再度使える様になったガルヴァードだ。

「全弾持つてけえ〜！」

『ガルヴァードス・イグニッション!』

ズガガガガガンッ!!!!!!

時間差で仕掛けたガルヴァドス達を一斉に爆破する！
枝と言う枝が吹き飛んでいくその姿はまさに

『汚ねえ花火だぜ』

「……だから何時ネタを覚えた？」

だった。

ただどすぐ再生……無限ループか？

「何と言う無理ゲー、これは除草剤を使わねば……」

『このサイズに効く除草剤ってどん位の大きさなんでしょうね？』

グロムはまだバズの方が改造中だから、使用できないしなあ。
使えるのはガルヴァドスまでと来たもんだ。

キーンセイバーを斬艦刀の如でかく出来ないかしら？

『そして魔力刃がチェンソーの如く回転するんですね？』

「俺がジエ ソンになる予感」

『12日の木曜日はワクワクして寝れないジエイたん』

「なんか……可愛いな」

ちよつと想像したら萌えたじゃねえか。

こんな馬鹿な話している間も、ビュンビュン飛んでくる枝。
ソレを紙一重でかわしている俺、なんか反射神経とかも上がってんな。

母上張りの人外になりつつあるな。……もう人間じゃないのか？

「絶望した……もはや人外になっている自分に絶望した」

『え・・・今更』

「今何か言った？」

『いいえ、別に』

まったく、妖怪人間じゃあるまいし。

早く人間になりたいってか？

『高魔力反応確認！

砲撃魔法です！』

「やっど・・・か」

見れば砲撃が頭上を通過し、樹木本体を貫いたところだった。

そして封印、なんていう力技なんだろう。

考えて見たらこれが彼女の砲撃一筋人生のスタートなんだよなあ。

「魔王誕生の瞬間か・・・」

『すこし・・・頭冷やそうか？

と母上殿の声で再生』

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
い
い」

トラウマ入っちゃったじゃねえか。

「ずっと、こんなことしている場合じゃない」

『買い物途中でしたね。早く帰らないと怒られます』

「いい訳のビデオは？」

『ばっちり回してあります』

よし、後はこの封時結界を解除して

「あ、あのう」

「ドキン」

解除する前に、話しかけられた。

現在位置はビルの屋上、こんな所にいる俺に話しかけられる人間なんて一人しかいない。

俺はギギギと音がでそうな感じで、声のした後ろを見てみた。するとそこには

「え、えと、手伝ってくれてありがとうございます」
「・・・・・・・・」

ぺこりと頭を下げる魔法少女と、警戒して此方を見ているフェレットがいた。

・・・・・・・・・・・・・・・・逃げ遅れた。

「た、大した事じゃ・・・ない」

「え、だけど」

「たまたま居たから・・・被害を防いだけ・・・」

ヘルメットの中で冷や汗ダラダラだったりする俺。

頼む、誰か助けてください。

『（ここは記憶を失ええッ！と砲撃を・・・・・・・・）』

「（洒落にならんから止めい）」

とりあえず通りすがりを装って、この場から逃れたい俺だった。

「貴方は次元漂流者の魔導師ですね？」

「ふえ？じげんひょうりゅうーしゃってなに？」

フレットオオオお！このまま帰らせるよ！！いや帰らせて下さい！お願い！

だけど、どう見ても逃がさないって目してるよなあ。

「そうだが、何か？」

「なんで戦ったんですか？危険なことなのは解っていたでしょう？」

あゝ、アレか？もしかしてコイツも俺がジュエルシード狙ってるって勘違いしてるのか？

「……買い物の帰りだな」

「……は？」

「困まれて、戦わないと逃げられなかった……それだけ」

啞然としているフレット君、ぽかんと口をあけている姿はどこか滑稽だ。

「帰ってもいいか？」

「え、いや、その……ご協力感謝します」

俺はもう用はないので帰ろうとした。

「あの！あいさつ送れたけど、わたしはなのは、高町なのはって言います。」

「ぼ、僕はユーノ・スクライア。」

律儀に自己紹介か、いい子たちだねえ。

一応返しておくか……。

「フェン、フェン・ラーダー。それが名前」

「よろしくね？リーダー」「フェン」「っと、フェンさん！」

・・・魔王にさん付けされた。

「言い忘れたが、一応俺の方が年下。俺七歳」

「え、ええ！？」「」

二人の驚く顔を尻目に、俺はこの場から逃げる様に立ち去ったのであった。

悪戯成功だ。クク・・・。

「恐れ知らずは俺の事」

「恐れ知らずは俺の事」

もすおつせんき

やあみんな元気？体は子供、魂は大人のフェンくんだよ！
今俺は、はやての車椅子を押している。買い物がてら散歩しようと誘ったからだ。

「で、フェン君の行きたいとこつてまだなん？」

「もうすぐ・・・ついた。」

「おお〜ここかいな？」

はやてを連れて俺が来たのは・・・駅前のお喫茶店“翠屋”
高町なのはの父、高町士郎さんのお店でスイ〜ツ系が美味しいと評判のお店である。

恐れ知らずにも俺はこの店に来ていたりする。
だって・・・シュークリーム食べて見たかつたんだもん。
前世SSだと大抵美味いって評判だったし・・・。

カランコロン

「綺麗なお店やなあ……」

「……いいセンスだ」

『（ソレなんてスニーカー？）』

「（ヴィズ自重）」

店内は相変わらず常連客でいっぱいだったが、カウンターが丁度空いてたので、そこに座った。

「いらつしゃいませ〜！あら、かわいいお客さんね？翠屋は始めて？」

「はい、そうです」

「初めて……」

カウンター越しに話しかけてくれたのは、高町なのはの母、高町桃子さんだ。

「つかホントに子持ちか？えらい若くて美人さんなんだが……」

ぎゅうう……

「はやて」

「なんや？」

「何故つねる？」

「不穏な空気を感じたんや」

『（はやてさんが嫉妬マスクを手に入れました）』

ついでに言つと奥の方からも軽い殺気を感じるのだが？

俺いまだ無表情がデフォなのに何故解る？高町だからか？

「あらあら、仲がいいのね？姉妹？」

「あ、ちやうんですけど、でも似たようなもんやな多分。な、フェン君？」

「そだね」

うん、たしかに一緒に住んでるし姉妹みたいな・・・姉妹？

「俺・・・男」

「あら、ごめんなさい？余りにも可愛いからてっきり女の子かと思っっちゃったわ」

はやてが吹きそうになってやがる。

「ぶくく・・・フェン君ほんまよく間違われるんやな」

「むー」

「なんかその表情いいわね。ねえ女装してみる気無い？」

おい、なんちゆう事言ってるんすか桃子さん。

ほら店内の人たちも引いて　　無いね。むしろ期待の目で見てる。

リアルでOTLしそうなんだが・・・。

「似合っくんちやうフェン君？」

はやて！追いうちかけんな！

あと余計なこと言わないで！今、桃子さんの目がキュピーンって光ったから！

「(ブンブンブンブン)」

「嫌なの？残念ねえ、ところで何にします？」

ふー危ねえ・・・危うく男の尊厳が潰えるところだった。

「うまいぞー」

「どこの味王や？・・・やだホンマにウマイ」

そんなこんなで、今はやてと翠屋のシュークリームを頬張っております。

うん、カリカリの適度に塩味の利いたパイ生地。

カスタードクリームが合わさって、口の中いっぱいハーモニーが…

「うまい・・・」

「ほんまやねえ」

『(あー、うらやますい)』

なごんどります。

.....
.....

.....

「美味しかったなあ」

「ホントホント、また行こう」

『（うう、いいなあ〜）』

なのは達が帰ってくる前に、翠屋を後にした俺達。

けけけ、また行ったら！シュークリームマジウメえからな！

「・・・ん？」

「なんやどうしたん？」

翠屋からの帰り道、俺は背後にある気配を感じた。

それは家から出た時から付いて来てる・・・にゃんこだった。

「いや、今又コの気配を感じた・・・」

「モフモフする気なんか？」

ギ、ギク・・・。

「はやて・・・さっき忘れ物したみたい。取りに戻るから先帰って」

「忘れ物・・・ねえ？うん、分かったわ。はよ行って戻つといで」

「了解だ」

こつ見えて俺は動物大好きだ。特に猫は大好物・・・じゃなくて大好きなんだ！

そう言う訳で俺は物陰に入り、驚かさないう様に気配を消して猫に近づいていく。

久しぶりのにゃんこなので、気合が入って実戦使用の気殺だけどい

つか。

S i d e リーゼロツテ

私がお父様から頼まれたのは闇の書の主“八神はやて”の監視。それと彼女に人が近づかないようにすることだった。闇の書の主といっても、その実小学三年生の少女である。

最終的には封印しなければならぬ存在。だけど、見ている分には健気な少女でしか無く。どこか罪悪感を持って、監視にあたっていた。

そんなある日の事、彼女は一人の子供を家に運び込んだ。どうやら病気だったらしく、ソレ以来しばらく彼女に家にいたのだが、
気が付けば居ついてしまっていた。

しかも居ついたのは何と魔導師だったらしい。すぐさまお父様にその事を報告、とりあえずしばらくは監視を続行という事になった。

仕方ないので、言われた通り今日も監視をしていたのだが

(何処に行った?)

とある喫茶店からの帰り、突如として子供の姿が消えてしまったのである。

監視対象故、私は消えた子供を探していた。

何故八神家に居ついたのか？理由も解らぬ人間だ。警戒するに越したことは無い。

（はぁ全く、手間かけさせないでほしいわ）

本当にその通りだ。この姿の間は食事も満足に取れないと言つのに・

。。。
お父様からの魔力供給があるので死にはしないが、お腹は減る。

しかもココは商店街、ああ、すぐその定食やから焼き魚の匂いが・

ジュル・・・ハッ！いけないいけない！思わず意識が飛びかけたわ。

ここで私が立ち止まったのいけなかった。

「ぼんそわ〜る」

（！！！？？）

突然視界が高くなる。いいえ抱きあげられた！？気配を感じ無かったわよ！？

見ればあの監視していた子供に抱きかかえられている。

ま、まさか監視がばれていたの！？

「う〜ん、やつぱり猫さんだぁ」

（え？へ、ちょっと何するの！？）

ちよつと何断りなく触ってるのよ！つて喉周りは・・・。

抵抗するも空しく、ひたすら撫でられ、触られて

なに？このブライントタッチ・・・

触るようでくすぐるようで、ソレでいて撫でるだけなんて。

だめ！私の目的を思い出しなさいリ・ゼロツテ！こんなことで負け
ちゃ・・・。

「まだまだ行くよ？撫でナデナデ
（はづつ！?）」

不味い、コイツ・・・撫でるの・・・ものすごく上手い・・・。

くう！気安く触るんじや アツ！耳の裏あ・・・。

もう・・・だ、だめえ・・・。

S i d e o u t

「むふー、又コ分補給完了」

『うわあ〜ビクンビクンいつてる。どんだけえ〜』

猫さんから又コ成分を補充したので、精神の安定がかなり得られた。
ああ、猫は良いよ。自然界が生み出した安らぎの極みだよ。

『流石にムツゴロウさん張りのナデナデはきつかったのでは?』
「大丈夫、大抵これをやると、自らねだるようになる」

まさに神の手なんだよ。一度やったら動物は病みつきなんだ。犬で為したらもう服従のポーズ取ったまま寝ちゃったかんね。最終的に嬉ションしちゃうくらいだったからな。

『人間にも効きそうですね・・・』

「・・・もうやらないけどな」

『やった事有るんですか!? え、一体どこの誰と!? ねえマスター
!!!』

おとこのこには、ひみつのひとつやふたつくらいあるんだお。しかし、幼稚園で一緒だったかなめくん元気かなあ?

「? はて、この又コも見た事が・・・気の所為だな」

そんなホイホイ原作キャラと合うなんて有りえねえだろうさ。さて、又コ分補充したし、家に帰ろうかね。

『猫さん放置ですか?』

「・・・連れてくか」

流石に路上に放置して、犬とかに襲われたら可哀そ過ぎる。気が付くまでだっこしてあげるかなあ。

この後、家に付く少し前に気がついた猫は、フラフラになりながらも町に消えて行った。

強く生きるよ猫、都会の生活は大変だからな。

俺は去りゆく猫を見ながら、そう思ったのであった。

「ただいまあ」

「お帰りなさい。ご飯にする？お米にする？それともラ・イ・ス？」
『全部米やん』

帰って来たたんコレかい。

「で、冗談抜きで夕ご飯どないする？」

「ふむ、それじゃ俺カレー作る」

「カレールーは？」

「この間買っておいた」

「グツジヨブや」

お互いにサムズアップを決める。いいよねカレー美味しいし。

「ちなみに聞くけど、カレーになにか特別な具を入れたりするの？」

「へ？何でそんな事聞くん？」

「いや、何かこだわりがあつて、カレーにはちくわを入れるとかそんなの？」

「いや、ウチのは至って普通のカレーや。精々隠し味にチョコを加える程度や」

「ウチの場合はカレーにはコーヒートケチャップ&ソースだった」

「ああ、ケチャップもええなあ。あの入れた後に出来る酸味とつまみがなんとも・・・」

きゅく〜

「・・・腹減ったあ」

「そう言う訳で早く作ってくれる事を、私は所望するで」

「よし、任せる。ちよっとインドまで行って来る」

『本場の味を再現ですか？』

うん、自分で言っと思って。無理や。

「そう言えば、日本のカレーは日本人の口に合わせて調整された日本食らしいよ？」

「え？そうなん」

「何でもカレールー自体、日本人の発明らしいから」

ラーメンと似たような話である。

最初のラーメンはスープが家畜の骨ベースで、薬味も何も入って無い臭いラーメンだった。

ソレを日本人の人が改良させて、醤油ラーメンが出来たんだそう。なお豚骨ラーメンは、スープ作りの失敗によってできたと言う説があるらしい。

「どこまで本当なのか解らない。それが豆知識」

「この場合無駄知識とちゃうん？」

そうとも言う、とジャガイモの皮をむきながら答えた。

『豆知識と聞くと、ガツテンと言いたくなる件』

「ウチはガツテンよりかはへえ〜ボタンやな」

「ベストハウス123・・・」

豆知識の番組って、結構おもしろいよね！

あまりにも無駄過ぎるけど・・・。

「さて、あとは煮込むだけ」

「あれ？炒めたりせえへんの？」

「・・・早く食べたいだろう？」
「アイ解った」

若干味は落ちるが、具材を全部ブチ込んだ方が早い。
あとは煮込み終わるまで30分程度かかる位だ。

出来あがったのでいざ食べようと思ったら、はやてが部屋の奥に行
ってしまった。

何しに行ったのかと思いきや、闇の書を持ってきていた。

曰く、この子の中に皆おるんやろ？やったら食卓に困ってあげな
だそつだ。

成程、一理ある。

そう言う訳で、食卓には二人分の皿と本が乗っている。

カレー美味しかったです。

「OK・何がどうしてこうなった？」

「OK、何がどうしてこうなった？」

妄想戦記

「準備はいいか？」

「・・・ええ、いけます」

俺は何故か河原みたいな所に居る。

そして、どういう訳か木刀を握り、目の前の相手と仕合するらしい。
・・・死合いになりそうで怖いです。

「いくぞー！」

「・・・こい」

お互いにお互いの射程圏に一気に入る。

仕合とはいえ、その実内容は急所攻撃有りの実戦仕様。
下手すら死ぬ・・・だがそれが堪らなく楽しいのだ。

上段の首狙いの切り払い、だがソレはフェイク。

真の狙いは反対の手に持った木刀での胴体への一撃と読んだ。

純粹な力では到底受けきれない為、首の切りつけをギリギリ当らな

い位置でかわす。

そのまま来るであろう胴体への攻撃を、急激な体勢移動で技と体勢を崩す事で回避。

顔面への蹴り、回避可能、反撃、腕か足への切りつけ、成功。

そのまま数合打ち合い、力負けしそうな俺は手がしびれて来た。

「・・・やるなリーダー君」

「・・・正直、勝てる気がしないです。恭也さん」

そしてお互いの名前を呼ぶ。

相手の名前は高町恭也、緑川光ヴォイスの素敵な低音が心地いいなのはの兄である。

何がどうしてこうなったか？それは少し前に遡る。

俺はその日、休日なのを利用し、木刀を片手に山の中の開けた所に来ていた。

何をしに来たのかと言うと、あり大抵の言い方をすれば剣の修業だ。双剣を扱う戦闘スタイルも取っているので、身体に動きを慣れさせる事も必要なのだ。

「さて、やるか」

何時も使っているキンセイバーの長さに合わせた木刀を構え振う。決まった型がある訳ではない。有るのは今まで培ったいかに相手を下すかの技能のみ。

様は確実に殺すスタイルと言うヤツだ。

「ハッ！」
ヒュンヒュンヒュン

正眼に構えたり、木刀を逆手にしてみたり、変幻自在に動かす。基本は軽い斬りつけの中に必殺、ソフィア教官の教えである。手数を多くし、ダメージを蓄積させ、必殺で止めを刺す。

「ハッ！ハッ！　　フウー」

次は息を整えつつ目をつぶる。

思い描くのは、ソフィア教官の動き。

相手の思いもよらない自由気ままな剣筋。

「ハッ」
ヒュン

しかし皮肉なモノである。殺し合いなんて嫌いだっただ。

なのに、気が付けばソレの訓練をしないと落ち着かない時がある。身体が習慣づけられてしまっているのである。

「セリアッ！」
シャッシユ

そんな事思いながら、教官の動きを思い出す。

俺みたく片手間の固い動きでは無く、もっと自然な動き。

獲物をとらえようと飛びかかる蛇のごときなめらかな流れ。

「　　フッ」
シユッ

もつとだ、もつと。ソフィア教官はもつと早かった。動きに無駄がなかった。軽い一撃を必殺に出来た。

「ハッ！」

シュシュシュツ

手首への切りつけ、太ももへの切りつけ、本命はわき腹。ちっ、ダメだ。まだソフィア教官の“陰”に勝てない。

「っ！」

ヒュ、ヴォーン！

イメージの中の“影”は動き続ける。

今隙を取られて首を切られた。俺一死亡。

相手の足を切ろうとして足を払われ転倒した。一死亡。

サイドステップ中に撃剣の如く飛んできたナイフに肝臓を刺された。一死亡。

カウンターで一瞬にして手首を折られた拳銃、手足を切り取られた。一死亡。

突如視界から教官が消え、次の瞬間背後から心臓を一突きにされた。一死亡。

ガードをした筈が、ガードごと蹴り飛ばされて腹へナイフの一撃。

一死亡。

絡み付いたと思ったら、脇腹を切り裂かれていた。一死亡。

顔への一閃によって目をつぶされ、視えない所を……。一死亡。

その後も、俺はソフィア教官の手によって殺され続ける。何度も、何度も。

イメージの中とはいえ、これで何度目か解らないくらいの死亡回数。

今だ勝てないその力、器用貧乏な俺と違い極地にたどりついた者の力。

本物とは数段劣る筈のイメージの中ですら、俺はいまだ教官には勝てない。

恐怖が刷り込まれているとかそういう訳ではない。純粹に単体戦力としての格が違い過ぎるのである。

「フツフツフツ　　はあ〜」

玉のように吹き出る汗をぬぐい、これで何度目かになる深呼吸。

息を整えたら、またイメージと対戦するのである。

身体に叩きこまれた相手の機動は、簡単に幻影シャドウを見せてくれるのだ。

もっともその幻影シャドウは、確実に俺を殺す幻影シャドウばかりなのだけでも……。

ワイズ教官然り、ソフィア教官然り、母上然り……とこんな感じだ。

魔法で身体強化をしない純粹な技量でこれである。
己の力量もたかが知れると言つものだ。

魔法の打ち合いが無い純粹な力では、俺はこんなにも弱いのである。

「ハツ・・・ハツ・・・」

そして幻影シャドウとの殺し合いを開始してから1時間後。

そろそろ、ソフィア教官に殺される回数が3ケタに届きそうな位に達した。

勝てないのは解っているが、こつも勝てないと何だかいい気分じゃ無い。

イメージなんだから一撃有効打が入ってもいいと思うんだ。

俺がそんな事考え、ふと辺りに気を巡らした途端

「　　！！誰ッ！！」

恐らく大分自分の世界に入っていた所為だろう。

抜かった。剣の修練にかまけて周囲の警戒を怠った。

この世界はおおむね平和ではあるが、周囲警戒を怠るなんて馬鹿じゃないだろうか。

くそ、今日はヴィズを持って来ていない・・・府抜けたか俺も・・・。

「・・・誰だ？」

視線を感じたのは、すぐ近くの竹林から……。この気殺、タダものじゃ無い。コレだけでもワイズ教官に並ぶ位だ。

俺が問いかけると、少しばかり気配がにじみ出てくる。

……敵意はないと言う事なのか？

「驚いたな。まさか君みたいなお子供に気配を悟られるとは思わなかった」

「……(マジ?)」

そこに現れたのは、高町なのはさんのお兄さんだったんだお。いや、何でアンタこんなところに居るのさ？

「……何か御用ですか？」

「いや、たまたま近くを通りかかったら何かを振う音が聞こえてな？ 見に来ただけだ」

あー言いたくは無いんだが、ここそれなりに山奥なんだが？

「たまたま？」

「ああ、たまたまだ」

……ホント、一体何し来てたんだらうか？

「正確には、修業場に向かう途中だったんだが……」

「俺の姿が見えたから見に来た……と？」

修業場ねえ？まあこの辺は人目に付きにくいから？
ある意味じゃ最適なのかも知れないな。

「ああ、一体どこでそこまで鍛え上げたのが気になってね」

戦場です……なんて言えるわけがねえわなあ。

というか高町兄は、こんな気殺なんて出来る人間だったけ？

あかん全然思い出せない。

「どうだろう？肩慣らしに1勝負してみないかい？」

「1勝負……ですか？」

ふむ、あまりにも唐突なお誘いだが……このヒトはかなり強いな。
流石に幻影相手シャドウだと限界があるし、ちょうど良いかも知れない。
若干バトルジャンキーっぽい思考だが、今はそんな気分だから仕方
がないな。

「場所はどうします？」

「このちかくの河原でどうだい？」

「了解、行きましょう。俺の名前はリーダーです。お兄さんは？」

「俺か？俺は高町恭也、恭也でいい」

なんて言うか、戦う者同士の勘ってヤツかな？

なんだかこのヒトとは、かなりいい勝負が出来そうな気がするんだ。
恭也さんもそれを感じ取ったのかもしれない。

こうして俺は河原に行き、冒頭へとつながると言う訳である

「ハッ！セイッ！」
「遅い！」

同じ2刀流、されどあちらの方が体格が良くて獲物は小太刀型木刀。今までの教官と母上からの扱きと、戦場での経験が無かったら立つてはいられないだろう。

それ程までに、相手の攻撃は鋭くて重く、そしてとにかく速い。

「ヤアッ！（くう、体格差が辛い）」
「グッ！やるなッ！」

放った剣は全て逸らすか避けられる。

掠ることはあっても、決して急所などの致命的な部分には当てさせない。

また、時たま蹴りも入るのが恐ろしい 実戦仕様の武術なのかもな。

ナイフ使いとは全然ちがう太刀筋、刀を扱う人間の動作。計算された殺人術、古来からの戦法、成程本当に強者だ彼は……。ならば、俺も少しばかり“本気”を出してみよう……。

魔法と言う技術を入れた、俺の本気と言うものを

「……戦」

「ッ！（なんだ？テンポが変わった？）」

「 神楽ッ！」

戦神楽始動、マルチタスクON、身体強化使用開始。
現状における最優先事項、目の前の敵の行動不能。
剣閃接近、回避を優先。カウンターは無し。
相手の動作から推測される予想動作。

全てのギアをONにして、俺は彼の強者と対峙する。
血が滾る・・・ただ闘うという行為こそが、もっとも愛おしい。
刹那に繰り広げられる剣劇が・・・何よりも楽しい！

「・・・成程、スイッチを切り替えたか」
「もう、体力が無くなるまで・・・止められません」
「大いに結構、さあ・・・闘いを楽しもう」
「 はいッ！」

そして俺は、目の前の強敵の元に向かって突っ込んだ

「ハアアアッ！」
「アアアアッ！」

突き、突き、袈裟切りからの踵落とし。
対するあちらは薙ぎ払いの後の連続切り。
木刀が掠った服がちぎれて飛んでいくが、気にせず合し続ける。

「そこッ！」
「くっ左からなら・・・」

左右から来る斬撃を、体格差を利用して避ける。
そのままの体勢で、脇腹へのクリーンヒットを狙うが木刀にて止め

られた。

次に来るのは・・・下からッ！

ガン

「ビンゴ」

「チッ」

顎に当てようとしていたのだろうか？

甘い、その程度の攻撃なら、母上から何100回も叩き込まれた。お返しに逆袈裟切りと刺突のコンボを繰り出しておく。

ガガン

「なっ」

「あたらない！」

当たらないなら、当たるようにするまでッ！

「テイッ！」

「な！？」

撃剣、剣を投げつける。投擲された木刀と共に走る。

真っ直ぐ進む木刀を恭也さんは叩き落すが、俺の位置は既に変更されている。

もう片方の木刀にて、左肩を狙った一撃を放った。

「舐めるなあ！」

「ガッ！」

チィッ、思いつきり叩き返されたか。

木刀を持つ手が震えるくらい力の力、少し痛いはまだいける。

次は・・・上！

「ッ！」

「これも防ぐか！」

視認困難な速さの唐竹割りだが、俺の頭上から振り下ろされた。

既に相手は俺が7歳児って事忘れてやがる。見た目でわかるだろう
にな。

まあ、今はそう言う扱いされるのは気分的に嫌だからちよっどいい。

「くっく、しかし本当に強いな君は？」

「互角以上で勝負してる貴方に言われたくない だが楽しい」

そう言いつつ、俺はさらに連撃を繰り出して行く。

恭也さんは若干笑いながら、それを受けとめ流して行った。

「まるで獣の動きだな。型みたいなものは無いんだろう？」

「良く解りますね？・・・だが戦える事にかわりない」

「その通りだ」

嗚呼・・・楽しい。急所すれすれの斬撃も、刺突も、打撃も・・・。
必殺だった攻撃も回避され、ベストのタイミングの斬撃も崩される。
全てが生を感じさせてくれる。これ程気持ちいい事があるっか？

魔導師であり軍人であり、戦うモノとしての血が騒ぎまくりだ。

アドレナリンが止まらねえ、最高にハイってやつだ。

俺はこの後しばらくの間、彼との狂宴に酔いしれたのであった。

「あいたたたた・・・」

「全く、一体何をしてきたんやら・・・はいシッブ」

「ひゃっ！冷たい！」

「ソレ位我慢しーや」

「あうう・・・」

そして、狂宴に酔いしれた結果がこれだよッ！

「帰って来たと思ったたら服も何もかもボロボロになつとるなんて何したんや？」

「ただ単に、凄い人と手合わせした。アタタ」

良いとこまで行ったんだけど、流石にB Aもデバイス補助も無しに動き続けるのは骨が折れる。

結局スタミナ切れで俺の負け。おまけにすさまじい筋肉痛のおまけつきと来たもんだ。

しかし、いきなり恭也さんの姿が消えた時にはものすごく驚いたわ。アレで気殺されてたら、俺今頃病院送りだぞ？怖や怖や。

「ここまでボロボロにされるなんて・・・マスターアジアでも出たんかい？」

「いや、あの人がいたら、俺もつとボロボロだと思う」

『MSを素手で倒せる人間とは戦いたくないですよね』

見よ、東方は紅く燃えているうっつてか？

「しかしフェン君もあれやなー、せつかく体調が直ったかと思った」
「ら」

『今度は筋肉痛とか、ある意味怪我のオンパレードですよね』

「むう」

ぐうの音も出ないとはこの事か？

コレでも鍛えてはいたんだが、やはり人外クラスだったんだな恭也さん。

限界ギリギリの動きを連続でやり続ければ、筋肉痛も起こるってモんだ。

しかし良く一人で山から帰って来れたな俺。

「あ〜っ〜」

「あ〜っ〜？」

「あ〜っ〜」

「あ〜っ〜あ〜っ〜」

「「あ〜っ〜」

なんかあ〜っで全部通じそうな感じ。

『オットセイが2匹いる・・・』

「海獣と申したか？」

「マナティとジユゴンで似てへん？」

「尻尾以外はそっくり」

『どつちがどつちでしたっけ？』

アレ？尻尾が丸い方がジユゴンだっけ？それともマナティ？

「ここはググレと言わざるをえない」

「ヤフれでも可」

『みんな大好きグーグル先生とヤフー先生ですね？解ります』

ボロボロになりつつも、何故かネタは健在。

おかしいな？前半はかなりシリアス行つてたんだけど・・・。
と、若干メメタアな事考えつつも、夕飯を所望する。

「ボロボロやから、タンパク質がほしいやろう？」

「ほしいほしい」

「じゃ作つたるわ。・・・冷ややつこを」

「畑の肉と申したか？」

冷ややつこはシヨウガとネギ乗せて醤油、王道が好きです。

「ウソやウソ、本当は麻婆豆腐を作ろうと思つている」

「泰山印ですか？」

『不良神父参戦のよかん』

「その前に常人には食べへんやん」

・・・時々、はやてのボキヤブラーはどんだけあるんだらうと思つた。

「私のネタは108式まであるで？」

「煩惱の数だけネタがある」

『そして斬劇を飛ばすんですね？』

「それ何処の煩惱砲？」

ゾロは魔法使いなんじゃ無いだろうか？

そんなこんなで出来たのは普通の麻婆豆腐でした。
当然美味しく頂きました。美味しかったです。

「OK・何がどうしてこうなった？」（後書き）

*きよ、恭也さんの口調が全然わからん（汗）
ちよっと変かもしんねえけど見逃してください。

「俺の人生巻き込まれタイプ」

「俺の人生巻き込まれタイプ」

妄想戦記？

さて連休が終わって数日が経ち、外はまた忙しい生活が始まっている今日この頃。

ある意味ニート全開な俺は何しているのかと言うと……。

「全く、こんな夜更けに……」

『お米買い忘れたマスターが悪いです』

「……俺の扱い酷くない？」

『そうですね？』

スーパーに行く為に夜の町を歩いております。

夕方になると商店街って閉まるの速く無い？

お陰でちよつと遠めのスーパーに行かなきゃなんないだZEE？

「早く行こう。嫌な予感がする」

『え？何か事件でも起こるんですか？』

「……解らない。だが嫌な予感が取れないんだ」

くうー、こんな時の為に前世の記憶を書いた本でも作っておけば！

あの世界から出られないと思ってたから、全然そんなもん作んなかったんだよなあ。

お陰で記憶は穴だらけ、時たま思い出せるけど大抵事が起こって巻き込まれてからだ。

・・・よく生きてるよな俺。

「しかし、ホント人が多いな」

『近くには繁華街がありますからね。アフターファイブは飲み会で』

「そして必ず一人は素面で、後片付けをさせられるという罠」

『吐しゃ物の世話は勘弁でしょうね』

「・・・止めよう、話が気持ち悪い」

『・・・ですね』

話題を変えよう。

「しかし、何とかグロム用バスの改造が終わってよかった」

『強度を上げる為にバイパスであんなものを増設するとは思わなかったです』

「まあどう頑張っても・・・砲身の強度はココじゃ上げられん」

専用のデバイス工房でも無いと無理だね。

「余剰分をガルヴアドスで逃せば良いんだからな」

『その代わり、総合的威力が極悪になりましたね』

「名前をつけるなら・・・グロム・フルバーストか」

『登録します』

え？咄嗟に浮かんだ名前なのに・・・まあいいか。
しかしアレだな、酔っぱらいとか居るのに夜の町を7歳児が闊歩するのモ

『（警告、この先75m先の曲がり角、補導員です）』
「（このあたりのマップから、ルート検索、ナビしてくれ）」
『（最悪ミラージュハイド使いますか？）』
「（その方が良いでしょう）」

敵は何も魔導師だけでは無いのだよ。

なんかそんなフレーズが頭に浮かんだけど無視する。

ふっふ、ジャングルとかで鍛えた気殺とスニーキング技術で乗り切つてくれるわ！

・・・偉く才能の無駄遣いのような気がしてきた。

「なっ!?!」

『封時結界!?!まさか!』

気が付けば眼に映るモノが揺らいでいき、アレだけいた人ごみが消え去っていた。

どうやら俺は結界内に閉じ込められたようである。

「・・・いやな予感はコレだったか」

『帰りが遅くなりそうですね』

見れば空中に白と黒の二つの陰。

二人の主人公が空中戦を繰り広げようとしている所であった。

「……素面じゃ不味いな。ヴィズ？」

「はい、“早く静かに”ですね？」

解ってるじゃないか。

『魔力隠蔽したまま、BAを装着します』

「BA装着と同時にミラーージュハイド起動、そして移動しよう」

俺の身体を普段とは違いやや遅めにBAが装着されていく。

魔力隠蔽をしたままのバリアジャケット装着。

緊急事態時のサバイバル訓練の一環でやって以来だな。

『装着完了、ミラーージュハイド起

「！！ 多重シールド展開！！」

流れ弾が危うく当たる所だった。

コリヤ早いとはなれないと危険だな。

幸いまだ気がつかれていないし、この先で隠れていようかな？

というか、お米を買いに来ただけなのに、何で巻き込まれてるんだらうか？

『オリ主クオリティ』

「黙れ」

断じてこんな面倒臭い事に巻き込まれたいとは思って無いぞ？

そ、そりゃ少し位見てみたいと思ったけど……。

ほ、ほんのちょっとだけなんだから！勘違いしないでよね！

『ツンデレ自重』
「じゅめん」

うっ、緊張感にかけてしまう。

俺が思考の海に入っている間に場面は変わっていた。
街の中心でジュエルシードが放つ光が柱となっていた。相変わらず
デケエ魔力。

上を見れば互いにデバイスをジュエルシードに向けている主人公二
人。

二人のデバイスから光が放たれ、ジュエルシードは光を失いただ空
中に漂っていた。

フェイトはなのはに・・・アルフはユーノにそれぞれ向かって行く
・・・。

なのはは何とか自分の思いを伝えようと話しかける。
だが、フェイトは有無を言わさず襲い掛かって行った。

そして金色と桜色の光りが激突し・・・空を違う色に染めていく・・・

お互い間合いを取り、牽制しあい戦っている。以前と比べると段違
いだ。

と言うか本当に高魔力持ちなんだなあとしみじみ思う。
戦争中はもつと汚い色の魔力閃光でしか、空が照らされなかったか
らな。

こんな華やかな戦闘風景は久しぶりに見るわい。

「話し合うだけじゃ、言葉を交わし合うだけじゃ何も変わらないっていうけど・・・伝える事ができるのもきつとあるよ！」

「・・・」

「私は、ユーノ君のお手伝いでジュエルシードを集めているけど、ジュエルシードの力で街の人や大切な人が傷付くのが嫌だから、だから私は自分の意志でジュエルシードを集める事に決めたの」

「・・・」

「これが・・・私の理由！」

「わ、私は・・・」

なのはの真っ直ぐな想いに戸惑うフェイト…。

「フェイト、応えなくていい!!」

「!!」

「優しい人の達の所でヌクヌクと甘ったれて過ごして来た奴に何も教えなくていい!!」

「え・・・」

アルフの言葉に我に返るフェイトだった。
まあ解らなくはないかな？

俺も戦場知らんヤツに戦争がどうたら言われたくないのはあるし。

『しかし、本当綺麗な闘いですね』

「ああ、何より血生臭く無いのが良い」

生命のやり取りが入る戦闘ほど血生臭いもんは無い。

必死のあの子たちには悪いが、この戦闘は模範的戦闘のお遊戯にか見えんな。

俺の知っている人達なら、例えば死角から巨大岩塊を飛ばしてくる事もある。

殺傷力の無い閃光手投げ弾で目くらまししてから、首を掻く切る人もいた。

無機物召喚最大級で、難破船を俺にぶつけて来た親も居たっけ？

・・・良くアノ人達と模擬戦して生きてた俺。

若干自分の暮らしていた世界が、あまりに違い過ぎる現実にOTLしてた俺。

だが、そんな事している内でも時間は進む訳で

ガキン！

ジュエルシードを取ろうとして、同時に杖をぶつけた途端。

一時的な魔力波動が発生、それに伴う魔力の奔流が辺りを蹂躞する。

「あはは、なんか気分が良くなってきた」

『純粹な魔力ですもんねえ』

そして俺のレアスキルは、その能力を余すことなく使い。魔力を吸収し始めているらしく今の所気分が良い。

まだ俺の魔力タンクには余裕があるからな。

まあコレがキャパを越えた途端、一気に吐血する運命が待っているけど。

レアスキルの吸収レベルは最低限に落しているけど吸収率を0には出来ないし……。

適当に魔法使って、魔力の消費をしないと不味いかも知らない。

思えばこの時、早い所逃げてればよかった。

そうすれば、この後の光景を見る事も無かったのだ。

「……」

目に飛び込んできたのはバルディッシュを待機状態に戻したフェイト。

既に己のデバイスは限界、術式が使えないくらい深いダメージを受けている。

何をするのかと思った途端、彼女は1人ジュエルシード向かって翔け

「な!？」

『あんな高魔力の塊を掴んだ!？下手すると死にますよ!！』

よりも依って素手でまだ安定しないジュエルシードを掴んだのだ。ジュエルシードは刺激により発光、魔力を噴出し始めた。

抑え込もうとしている彼女の手からは血が噴出している。

「フエイト！」

「止まれ、止まれ……」

アルフが叫ぶ声を無視し、デバイスの補助なしの強引な封印を行う彼女。

だが彼女の力量では、まだあのレベルの魔力を押さえつける事は出来ない。

顔を苦痛に歪め、細い腕から血が流れてもまだ掴み続けている。

「チツ！」

俺は気が付くと物陰から飛び出し、フエイトすぐ近くに走った。

なんでそんな事したのかは解らない。フェミニストを気取った訳でもない。

だけど、目の前で怪我人を見捨てられるほど俺の心は死んじやいなかったらしい。

バカな事をまたしようって言うのか俺は……まあ俺だしなあ。

ここで見捨てる位なら、俺はこの場にはおらん。

それこそ、俺のいた次元世界で任務してただろうさ。

炉心事故を止めず、何千人の死者を出した人間と蔑まれながらな。

とりあえず噴き出す魔力を吸収して押さえながら彼女の元へ

「きみ・・・は？」

まあいきなり俺が出てきたら驚くわなあ。

「・・・俺がある程度引き受ける。後は解るな？」

口では散々死にたくないと言っていた俺。

だけど、人間の心は時たま思いもかけない行動をさせる事がある。こうして事件に介入し、気まぐれに彼女を助けようとするのもだ。

「グイズ、治癒頼んだ」

『・・・了解』

呆れた口調で返してくるデバイス。迷惑をかけてすまねえな。

俺は目の前で怪我する人間を無視できる腐った人間にはなりたくは無い。

もつとも、すでに人外の領域だけどね・・・鬱だ。

ガコン

『リペアパックに変更完了』

背中のパックがリペアパックに交換されたのを確認した。

そして、俺は己のもつ力・・・レアスキルの吸収レベルを最大値に。

「ウグウ・・・あああああああつあああ！！！！！！！！」

耐えがたい激痛、ココ最近忘れていた魔力吸収の際の神経系の痛み。

骨髓に溶けた鉛を流し込まれ、そのままシェイクされるかの様な激痛が襲い掛かる。
気絶は出来ない、身体が慣れ過ぎている所為で気絶という防御機構が働かないのだ。

「リペア 起動！！グロム展開！」

『了解！』

悲鳴をあげる細胞を治癒魔法で強引に直して行くが激痛は消えない。現れたグロム用バスを頭上に向けて構え、蓄えきれない余剰魔力を放出した。

しかし足りない、ヘルメットが漏れ出た魔力波によって破壊され素顔が晒されてしまう。

だがそんな事は痛みの前では些細な事、ここで意識が飛べばマジで死ぬ。

原作では良くあの程度で済んだと思う。

既に吸収しきれない余剰分で俺の毛細血管も弾けている。

「これは・・・早まった・・・かね？」

『回復追い付きません！最低限生命維持レベルだけキープに切り替えます！』

怪我しては治癒魔法で強引に直して行くのだからすこぶる身体に悪い。

おまけにフェイトの方にまで治癒を回しているので、俺の身体の治癒が足りない。

既にもうおなじみとなった吐血の味が口いっぱいに広がって来ている。

多分食いしばった口から、血がドンドン流れ出てるだろうなあ。
かなりスプラッタな光景だろうと思い、内心ゲンナリしつつ吸収を
続ける。

そのお陰でなのか、魔力の噴出は先ほどの半分に抑えられていた。

「は・・・やく・・・」

「ロストロギア、ジュエルシードシリアル??、封印!」

フェイトによって封印されていくジュエルシード。

どうやら終わったらしいので、俺はようやく膝を突く事ができた。

「ハア、ハア・・・ごぼ」

あ、やべ。また吐血しちまったい。

見れば主人公の内なのはさん辺りは青い顔してます。

まあこんな量の血を見るなんて、小学生じゃ有り得ないだろうしな。

しかし、痛みが無い・・・応急パックでまた麻薬かあ。

道理であんかふわふわすると思っただぜい。

「な、なんでアンタ・・・」

俺と同じく膝をついているフェイトを抱えているアルフがそう問うてきた。

「米を・・・買いに来た」

「は?」

「そしたら巻き込まれた・・・それだけ、怪我している人間放って

置ける程・・・」

『マスター！今喋っちゃダメです！肺の血管がまだ！』

「人間・・・出来てない・・・うぷ」

ビチャビチャ

あー不味い、これは不味い。スゲエ綺麗な色の血だわさ。
経験上、この程度の吐血じゃまだ死なないのは解っている。
だけど見た目がかなり派手な吐血だから

「ふう・・・」

「な、なのは！なのはが倒れたああ！！」

小学生の女の子にはキツイ光景だよなあ。

何でフェイトは青い顔する程度で大丈夫なんだろうか？

ああ、そうか。既に気絶してらっしゃるのですね？

「す、すさまじく・・・カオス」

『原因はマスターですから喋らないでください！治癒出来てないんです！』

とは言われるが、脳内麻薬の出まくりで思考がグチャグチャ何であります！

もう魔力は腹いっぱいのごさるう！次はお浸しを所望する！

・・・ネタも微みよんだな

そして気が付けばアルフがいねえ！

あの野郎、とつと逃げやがった！まあ正しい判断だけだな。

「あー、出来ればいいん・・・うぷ・・・だが」

俺は目の前フェレットに話しかける。

「な、何か？」

「俺もう限界だから・・・倒れたら人気のない公園にでも放り投げ
といて欲しい」

結局引つ掻き廻しただけで、状況をカオスにしただけかあ。
そう思いつつ、俺は意識を飛ばすのであった。

そして次に気がついた時

くわ！

「知らない天井だ！」

『力いっぱい言う事じゃ無い件』

見知らぬ家の中で寝かされている俺だった。
ここどこですか〜！！

「あ、気がついた？」

「・・・ふえ？」

見ればすぐ横にフェレットが・・・。

「・・・どうやら俺は寝ぼけているらしい」

二度寝だ。こういつた時は二度寝に限る。

「いや、残念だけど起きてるよ」

「俺は夢の世界に逃げます」

『でも夢なら覚めなければならぬ。戦わなきゃ現実と!』

おK、落ちつこう。まずは素数を数えるんだ。ってコレ都市伝説〜!

「ええと、ここ、何処?」

「なのはの家だよ。君が倒れたから僕が転送させてもらったよ」

「・・・近くの公園に捨て置けと申した筈だが?」

「そっちが怪我人を放っておけない様に、僕たちも人間が出来てないのさ」

むう、自分で言った理論で返されてしまった。

何たること　待て待てココは何処だつて言った?

「ええと、ここ、何処?」

「さつきも言っただけなのはの家だよ。ちなみに彼女は学校さ」

「・・・ヴィズ、俺の命運はコレで最後なようだ」

『マスターの事は一生胸に秘めて生きて行きます』

「え、何でこんなに絶望ムード満点なのさ!」

だって人外戦闘民族高町父兄の居らっしゃる魔窟ですぜ?

娘が男連れ込んだとか・・・最悪じゃないか。

「やかましい、放置してくれって言われておいて何故連れてくる」

「いやだって血だらけの君を放置なんて出来ないし、なのはも賛成してくれまし」

「……君、人がいって言われるでしょ？」
「……うん」

OK、とりあえずすることは一つだな。

「電話を貸してくれ、まずはソレからだ」

まずはウチの家主に連絡を入れなくてはなるまいて。

そして、連絡したらメツチャ怒られた事を書いておく。
しかも帰りに米買って来いとお達しだ。
なんか扱い酷くねエ？

『自業自得です』

「……返す言葉もございません」

終われ！

「やべえ、やっちゃったあゝ皆ごめんねえゝ」

「やべえ、やっちゃったあゝ皆ごめんねえゝ」

妄想戦記

さて、気が付けば見知らぬ家にいたと言う怪奇現象を経験した俺。
・・・正確には魔王に拉致られました。これって誘拐だよね？

「ええとはじめまして じゃないか、ええと、その」

「久しぶり、と言った方が正しいだろうな」

「・・・うん、そうだね。フェン君お久しぶり」

「とりあえず拉致られた事について説明を要求していいか？」

「いや！拉致なんてしてないよ！？」

「・・・冗談だ」

だから間に受けるなよ？簡単なジョークだろうが。
現在、家に帰宅した高町なのはと対談中です。
内心冷や汗ダラダラだったりしてるけどね。

「一応、スクライア君から事情は聞いた」

「・・・あの、僕ユーノって言うんだけど？」

不満そうな声を漏らすフェレット事スクライアもといユーノ君。
いや名前は知ってるんだけどさ……。

「いや、いきなりファーストネームもどうかと思ったんだが……」
「ああ、そう言う事。ユーノって呼び捨てでいいよ？代わりにフェ
ンってよんでも？」

「構わない。まあそんな事はどうでも良い事だ」

俺は背筋をただし、彼らの対面上に立つ。

そして、そのまま頭を下げた。

「どうやら君達に助けられたらしい。ありがとう」

「え！そんな頭をあげてよフェン君！」

「そつだよ。そんなに畏まられても……」

「一応放置でも良かったのだが、それでも介抱された事には変わら
ない」

「　　　　　にやはは、なんか嬉しいかな」

「礼には礼を、義には義を、不義には鉄槌を……親にはそう教え
られている」

そこら辺は厳しい人たちだったからな。

「ところで君は昨日何故あの場に？しかも突然現れて彼女を手伝っ
た？何故？」

「ユ、ユーノ君……」

「以前も突然現れて、手伝うだけして消えた。君の目的は何？」

……コリヤ完璧疑われてるなあ。

まあロストロギア関連の事件だから疑心暗鬼とまでは行かなくても
部外者は警戒する。

その判断は実に理にかなっているし、それに何より正しい判断だ。

「一応、同じ質問をあいづらにも聞かれて答えたんだが」

「……」

「信じてもらえないかもしれないが、米を買いに来てたんだ」
「……はい？」

「居候先の米が切れてな？俺は夜の町に買い出しに出された。魔導師だから心配ないだろうと……何だかパシリにされたようで若干戸惑ったが、気殺を用い補導員に捕まることなく、スーパーに向けて歩いていた所、突如として封時結界が展開。設定がどうだったのかは知らないが、何故か俺達も結界内に放り込まれた。こちらとしては困惑していたのだが、突如頭上で戦闘が勃発。流れ弾などに巻き込まれてはたまらないと思い。防護服を展開し光学迷彩魔法を用いることで、君たちの目を逃れようと考えた。しかし、隠れようと向かった先で突如ロストログアジュエルシードが暴走を開始、見れば何時の間にか戦場を移していた君達が、無作為な刺激を与えた所為での暴走が起こったとその場からの視覚情報に手判断。どうすべきか判断を見ていた所、君達と戦っていたテストアツサ嬢が無謀行為に走った。一応まだ人の心は持ち合わせていると自負している俺は、見て見ぬふりが出来ず、いたしかたなく姿を現し俺のレアスキルによる負担軽減を敢行。結果は見ての通り過剰魔力による負荷により吐血、君達に介抱されて現在に至る。ここまでで何か質問は？」

昨日の出来事をダイジェストでお送りいたしました。

「ええと、話からすると買い物行く途中で巻き込まれたと？」

「ああ、正直迷惑だったんだが、巻き込まれた手前仕方がなかった」
「……あれ？話し終わってた？はれ？」

未来の魔王様、何故か頭から煙が出てます。
ココまでで難しい言葉なんて出て来たか？

「まあそう言う訳で、この間の事件も今回の事件も俺は巻き込まれた側だ」

『むしろ何でこんなに巻き込まれるのか教えて欲しい位です。もしかしてマスター呪われてるんじゃないんですか？』

「失礼な。ソレは暗にお祓いしてこいつて事か？」

「そんな非科学的な・・・」

「いや、オカルト的な力は案外馬鹿に出来ないぞ？」

何度か死にかけて綺麗な花畑とか殺風景な河原とかを結構見ている。そうすると何故か魔力の成長が著しかったりするのだ。

伊達に婆さんや渡し守のおっさんと仲良くなった訳じゃ無いぞ？

「何度か死んだはずの祖母に合った事もある」

『死と魔力の関係についての本とか有りますよ？まあ眉唾ものが多いですけど』

「え、そんな本有るんだ？」

『電子書籍としてデータ内に保存してありますけど 後で見ます？』

「・・・お願いします」

「お前何時の間に」

『マスターが事務作業している時にですかね？資料を探す合間にコツコツと』

コイツ、俺に内緒でそんな事をしていたのか？
なんかヴィズのポケが出たお陰で、一気にふいんきがグダグダになった。

「ところでフェン君はユーノ君と同じ、次元漂流者なんだよね？」

「ああ、その通りだ」

「どんな世界から来たの？」

ふむ、どんな世界・・・か。

「どうもしない。至って普通の世界だったよ」

「そうなんだ」

「その昔きた次元犯罪者の所為で魔法技術が各国で研究開発され、それによつて常に冷戦状態の上に、いつ爆発するか解らない地雷があるみたいな世界だった。あ、あとスクライアもいた」

「ぜ、全然普通じゃないよソレ！？どんな力オス?!」

そうか？

「何言っている？この世界も似たようなもんじゃないか」

「ふえ、そうなの？」

「・・・まあ小学生が知っている事柄では無いな」

「むう、それってバカにしてない？」

「いいや、平和で実にいいことだと思つ」

『スクランブルのかからない世界って良いですよねえ』

うんうん、昼夜問わず何時警報が鳴るのかビクビクしてたかね。死んだ部下にも不眠症に悩まされていたヤツが何人かいたっけな。

「ん？スクランブルってなに？」

「軍用語で緊急事態発生とかそういう類の意味だ。まあこの話はもう良いだろう？」

「うん、そうだね。所でフェン君はこれからどうするの？」

「とりあえず帰る。家主に米を買って帰らんと後が怖い」

『電話越しでかなり怒ってましたよね』
「・・・言つなよ」

若干ズーンと気分が落ち込みかけたのだが、その時ふと勉強机に目が行った。

「アレはなのはのデバイスか？」

「え？うん、そうだよ！レイジングハートって言うの・・・今ちよつと壊れちゃってるけど」

「見ても良いか？純正ミッド式デバイスを見るのは初めてだから」

「うん、良いよ」

ふむ、どれどれ？成程、外装部分の破損個所が大きい以外は特に問題無し。

強力な魔力波の固有振動により外装ユニット部分が共鳴作用を起して壊れただけか。

これなら特に何かする必要もなく、明日くらいには元に戻っているだろう。

「・・・ん、ありがとう。良いデバイスだ」

「ありがとう」

『む、浮気しちゃダメですよマスター！』

お、ヴィズのヤツ一人前に嫉妬しちゃって。

「安心しろ。これから先も、お前以外の喋るデバイスは持たん」

というか俺の体質上、普通のデバイスだと長く持たないと思う。無理が効くと言う意味じゃ、頑丈な事この上ないからお前。

「あはは、君達も仲良いね」

「何せコイツは俺の手製、ワンオフ機だからな。愛着もわく」

『丹精込めて一から全部組んでもらったんです』

しかしなあ、試作ナノマシンのお陰でメンテナンスフリーなんだよなあ。

手製にしては故障なんて一度も起してないからやる事がないんだ。

「ところで、そろそろ帰りたいのだが？」

「アレ、フェン君帰るの？」

「もう夕方だしな。・・・いい加減この家の人間から隠れているのも辛い」

「うん、体調はもう平気？」

「アレくらい日常茶飯事だったからな。吐血には慣れている」

「フェン、君って一体どんな人生送ってたのさ・・・」

どんな？血生臭い戦場で殺し合いの毎日だったよ？

まあそんなこと言う必要が無いから言わないけどな。

「後アレだ、袖触れ合うのも何かの縁」

『何かあつたら無償で手伝いしますよ？』

確かもうそろそろ管理局が来る筈。俺の居た世界がどうなったのか知りたいしな。

次元間通信が使えたらよかったんだが、生憎その機能はヴィズには入れて無いし。

勿論はやての事は管理局連中には黙ってるけど・・・。

「わかった、何かあつたら連絡さしてもらおうよ」

「ああ、解った。それじゃな」

「うんバイバイ」

そう言つて俺は帰る事にした・・・窓から。

仕方ないじゃん、玄関から出たらここの家の人に気付かれちゃうもん。

・・・なんだろう？この間男みたいな気分。

翌日

「はやてはやて」

「なんや？そんなハトがショットガン喰らつたような顔して」

「生憎そんな顔してないし、そんな事態になつてたらハトが跡形もない」

『鶏挽肉一丁！』

「・・・グロいな」

「グロいわ」

まあジョークはさて置き。

「ちよつと管理局の人に会つて、俺の世界の話聞いてくる」

「管理局つてアレやる？闇の書狙つとるんやる？大丈夫なんか？」

「大丈夫、俺はなにもいわない。だつて俺管理局の人間と違つし」

『こんな所で話が変わつたら、修正も何も無いですからね』

これまで養つてくれた恩もあるからな。

「いざとなれば、管理局と敵対しても、はやてを守るから大丈夫」

「うわ！なんか告られたみたいやわ！」

『冗談抜きで私たちは味方ですから大丈夫です。ねえマスター？』

「ああ」

「……なんか真顔そこまで断言されると照れるわあ」

はは、気にいった人間の味方になる事に理由は居るのかね？

まあアレだ？特に何かしなくても、最終的に闇の書のバグを破壊すれば問題無し。

いざとなれば母上も連れてくるさ。きっと無双乱舞してくれるに違いない。

「まあソレでどん位かかりそうなんや？」

「多分確認するのに数日家開ける」

「解ったわ。まあ……気をつけてな？」

「大丈夫、俺連絡取れたらすぐに有給取るからしばらくこの世界に居るよ」

「ホンマか！？ なんかすまんなあ」

「いいよ。はやてと居ると楽しいし」

『そして紐生活を続ける訳ですか？』

「……お前はだあってろ」

どうしてこう落そうとするかなお前は？

「そう言う訳だけど、すぐに戻る」

「了解や、自分の世界が解ったらお祝いやな」

「本当？ソレは楽しみだ」

この時は、まだ帰れる場所があると、俺は思っていたんだ。

.....
.....

俺はなのはから連絡を受け取り、ジュエルシードの反応があった海
辺の公園へと急いだ。

そこに来たと同時にジュエルシードが活性化した光の柱が現れる。
そしてその光は一本の木の中に入っていく

「（ギョオオオオー!!）」

木の化け物と化した。

「何だろうな？ココの木は動き回りたいのか？」

『潮風嫌いなんじゃないですか？ホラ海から離れていく』

「ふ、ふたりとも、真面目にやろうよ！」

失礼なユーノ君、俺達は至って真面目ですよ？

まあそつだな・・・。

「俺にやらせる・・・封印処置を準備しといて・・・」

「え？でも」

「砲撃はお前の専売特許じゃ無い所を見せてやる」

『実を言うと、砲撃魔法のテストも兼ねているんですけどね』

「余計なことは言わんでよろしい」

『アイタ！な、殴ったね！父さんにも打たれ・・・？この場合マス
ターはどういう位置？』

「まあ制作者だから父と言われても仕方がない」

『おとうさんにぶたれたあ、DVDだ』

「Dがひとつ余計だとおもうぞ？」

「？ ええと、結局どうなったの？」

「・・・フェン達がやるってさ」

「え！ダメだよ私がやる！」

なのはが少し渋ったが、折れない俺に渋々ながら頷いてくれた。
いやはやグリグリは効くなあ。

「あうゝひどいの」

「まあそこで見ておけ・・・っとその前に」

『魔力反応感知、パターン解析、テスタロツサ嬢襲来』

「いや襲来ってお前・・・」

見れば見慣れた黒い影、フェイト達のご登場である。

「お前たちのケンカだから手前でケリ付けて来い」

「わかったの・・・ムリしないでね？」

「無理のウチにも入らん」

そう言つて彼女たちを下がらせる。

さて、久々の砲撃魔法だけど大丈夫かな？

「ヴィズ、グロム・フルバースト準備、バレル展開」

『了解』

ガコン、ジャギン

格納領域に仕舞われていた砲身をアルアツソーと接続させる。

魔力が流れ込み、術式が機能し始めた事により、砲口から余剰魔力が粒子状に漏れていた。

ふむ、まだ術式の構成が甘かったかな？もう少し閉めないと無駄が出てしまう。

『余剰分をガルヴアドス回路に回します』

流れ込む量が増えてしまった魔力に対応した環状魔法陣が砲身の横に展開。

マジックレールバレルとして、8つの魔法陣が現れる。

それぞれの方陣に魔力が充填されていき、発射準備は整った。

「粒子にかえれ・・・フォックス4」

『グロム・フルバースト！シユート！』

カカカカカカカ！ギョオオオオツ！！！！

改造したバズからまず大量のガルヴアドスの弾幕が放たれる。

一つ辺り十発の弾が、計8つ有るレールバレルから加速された状態で射出されたのだ。

ソレを追う様に砲撃魔法グロムが放たれ、あたりを白い光で染め上げる。

レールバレルにて加速された質量を伴う魔力弾が標的へと着弾。

外殻を破壊され術式が作動し、着弾点を業火が覆い尽くして行く。

そこに止めと言わんばかりのシールド貫通も付加された砲撃が通過した。

今回の砲撃は相手が人間とか生物ではない為、物理破壊設定での砲撃である。

多少魔力を得た程度の術式すら扱えない魔法生物程度が防げる威力では無い。

というか防がれたらリアルで凹んでしまう。

ズズーン

『目標の殲滅を確認、砲身冷却を開始』

しかし、どうやら懸念していた事は起こらなかった様である。とりあえずしばらくバズは冷却中で使えそうに無いから別の兵装にしておくか。

「M82A1起動、ジリーノも待機状態で格納領域から展開」

冷却機をフル稼働させて水蒸気を噴き出しているバズ。

うゝむ、まだ術式が不完全だ。余剰魔力が分散して熱量に返還されてやがる。

ちゃんと指向性を持たせネエとダメだなコリヤ。

「呆気ない・・・封印はどうした？」

「「えあ、う、うん！」」

呆気にとられていた主人公のお二人。

同じようにデバイスを構え

「「封印!!!」」

同時に封印を施した。封印されたジュエルシールドは、空中に漂っている。

そのジュエルシールドを挟み、フェイトとなのはが向かい合っている。一方俺は地面におりて二人を見守った。

「ジュエルシールドには衝撃を与えない方がいいみたいだね。」

「うん、こないだみたくなったら、レイジングハートもフェイトちゃんのバルディッシュも可哀想だしね」

「でも・・・譲らないから」

フェイトはバルディッシュを戦斧の形に変える。

「私は：フェイトちゃん達とお話がしたいだけなんだけど・・・」

なのはも臨戦態勢に移行した。俺とかは見てるだけなんだけどな。彼女たちの闘いが今にも始まりそうなその時。

『マスター、転送魔法の反応です！』

「どこからだ！」

『転送ポイント特定・・・なのはさん達の目の前です！』

見れば蒼い色の転送方陣が現れたところだった。その事に思わず体が反応する。

昔取った杵柄ではないが、抜撃ちの如く肩に担いでいたM82A1を構えた俺は

『パターンは、時空管理局』

「へっ？」

ドゥーン！

「『あっ』」

ヴィズの報告より先に反射的に撃っちゃった

「そこまでガッ！」

「「!?!」」

黒いバリヤジャケットを纏った人物が現れた途端撃ち落とされると言う事態。

少女たちはいきなりの事態で動きを止めてしまう。

そして何とも言えない沈黙がこの場を支配する。ヤベ、アレって絶対アレだよな？

「僕は時空管理局の……クロノ・ハラウン執務官だ。此処での戦闘は危険すぎる」

どうやら意識を保ったらしい。

流石は執務官、突然の攻撃でも耐えられるなんてタフだね！

「二人とも一旦デバイスを下げてもらおう。後その魔導師もだ！
!?!」

でも痛かったようで涙目になっていらっしやる……いやマジすまん。

転送魔法なんぞ許可なしにやって来るヤツは大抵敵だったからつい教官との模擬戦でもそう教えられてたから思わずやっちゃまった。

『(マスター、貴方は時々本当にバカですね……重要なストーリー位思い出してください)』

「(うぐ……面目無い)」

そしてこの場ではフェイトとなのはと俺と第三者のクロノ君との睨みあいが続く。

非常にカオスな空間が出来てしまった。何と言うポカをしてしまったのだらう。

どうしよう？USNが訴えられちゃったら・・・俺の所為かな？

『言うまでも無く・・・ですね』

「(やばい・・・よね)」

『(ココは電荷の砲塔・・・じゃなくて伝家の宝刀である土下座をするべきかと)』

「(・・・あとでやる)」

睨みあいが続く、すると突然上から魔力弾が降りそそいだ。

アルフが放ったモノだろう。

クロノは障壁で防ぎ、何故か流れ弾が来た俺も同じようにして防いだ。

「フェイト！逃げるよ！」

アルフは数撃ちや当たる方式でどんどん魔力弾をはなっている。

俺は障壁を張ることで、ほかの連中は間合いを取ることと退避した。つかアルフ・・・少し位制御してくれ・・・流れ弾が地味に当たってる。

土煙がようやく晴れると、フェイト達の姿は消えていた。

恐らく転移して行ったのであろう。そうセンサーに反応があった。それよりも問題は

「さてと、俺はどうすればいい？」

「まずはデバイスの機能を停止、そしてバリヤジャケットを解除しろ」

「了解した」

気が付けばバインドをされ拘束されている俺。

まあ不可抗力だったとはいえ、ついフレンドリーファイアしちゃったから仕方ないと言える。

既に何人かの転送反応があると言う事は、周辺に潜んでいる様だしな。

「か、彼は僕達の協力者です！」

「ほどいてあげてください！」

ユ一ノ君となのはさんがクロノ君に詰め寄ってら。

なんか協力したのは実質今日だけだったのに、なんだが申し訳ない気分になってくる。

「二人とも、いい」

「「だけど！」」

「元はと言えば俺が間違えて撃つたんだ。文句は言えん」

「「・・・」」

う、ごめんな二人とも。

そんなこんなで俺はデバイスを待機状態に戻しBAを解除。

なのはと共にクロノに連れられ、アースラに向かうことになった。

「壊れてた心」

「壊れてた心」

妄想戦記

「申し訳なかった」

「・・・もういいから、だから土下座だったか？それを止める」

「いや、本当に申し訳なかった」

「だからもういいって」

「こんなに謝っているのに・・・」

「いやだから・・・」

「もうこうなったら・・・腹を切るしか・・・」

「フェ、フェン君！？切腹はダメだよ！！」

「だから僕はもう気にして無いから！いい加減にしないと怒るぞ！」

「その言葉が聞きたかった」

『ブラック ヤック乙、そしてこの状況と関係無し』

「・・・つかれる」

ようみんな元気か？なんとか誤解を解く事が出来たフェン君だよ。とにかくアースラに着いた途端、土下座の嵐を繰り出して押しとおしました。

いやはや、クロノ君がすなおな人で良かったなあ。

さて俺達は今、PT事件の参考人として事情を説明中なのだが。

例のごとく、次元航行艦アースラの中でリンディ艦長に会っている。なんていうか、マジで若い。何で？不老不死の薬でも飲んでるんと違うん？

『（なんかとてもじゃないですけど・・・一児の母とは思えませんね）』

「（しかも、その子供はクロノ君と来たもんだ）」

『（人間と言う生き物は、時折本当に不思議ですね）』
「（いや、アレと同類にされても・・・）」

彼女は原作とかでもかなり不思議な人だったなあ。

確か十年たっても姿変わらないんじゃないんじやなかったっけ？

やはり魔法使いには不思議な人間が多いんだろうか？

「とりあえず貴方達の自己紹介をしてほしいのだけど？」

思考の海に沈んでいた所為で話が進んでいた。

どうやら自己紹介をするらしい。

なのは、ユーノと続き、次は俺。

「USN軍、特殊機甲強襲魔導師連隊、ストライクワイヴァーンズ所属」

「「え!？」」

「フェン・リーダー中尉であります。この度は誤射とはいえご子息を・・・」

「いいえ、ソレは良いんですが・・・」

いやよか無いだろう？ククロノを見るとちよつと微妙な表情している。

「いま、USN所属って言いました？」

「？ はい、そうですが・・・何か？」

「・・・確認の為、IDと照会させてもらっても？」

「・・・まあ構いません。元の世界に戻りたい訳ですし」

俺は軍のIDを提示すると、すぐに確認が取れた様だ。

しかし、何故か艦長殿の顔色がおかしい。

なんだこの信じられないモノを見るかの様な表情は？

「・・・確認しました。驚いたわ・・・まさか“幼き英雄”がココに居るなんて」

「・・・艦長、いまなんて？」

おいおい、俺は確かに軍人だけど、そんな英雄と言われる様な事はしてネエぞ？

「詳しく説明します。だけどその前に高町さん達は、ちよつと席をはずしてもらえないかしら？」

「プライベートな会話になると言う事もある。話の間は食堂に案内しよう」

「わかりました。フェン君、後でね？」

彼女たちが手を振って来たので、それに応えた後。

ユ一ノ君となのはが出て行ったので本題に入る。

「艦長。自分は確かにUSN所属ですが、当時自分の戦歴は剥奪され、その後もそれ程の活躍はしていませんが？ましてや英雄と呼ば

れる様な事は何一つしていません」

「そう、貴方の認識だとそうなのかも知れないわ。何せ30年も前の話だもの」

30年前？おいおい、俺が巻き込まれたのはほんの数カ月前だぞ？冗談でも行つていい事と悪い事つてのがあるだろう？

「……冗談がきつすぎます。幾らなんでも」

「ウソでは無いわ。此方のデータでは確かに30年前、モーガン・ベルナルドと言う犯罪者を逮捕する際に、USN軍に協力要請をした事がある。その時の執務官の名前が確か」

「次元航行艦イリス所属、ジェノン・トールラス執務官でした」
「……ええ、正解よ」

おいおい、ちょっと待ってくれ、確かに当時管理局の連中の情報なんて来なかったが30年前？

ならば俺はどうして“ここ”に居る！？30年前なら俺は既におっさんだろうが！

「確かそれから数カ月後の新聞には、貴方の情報が出ているみたいね」

「なんて書いてあるのですか？」

「テロリストたちの起そうとした環境破壊を伴う自爆テロを未然に防いで死亡した幼き英雄」

「……」

「こちらの報告では、当時の管理局が技術提供した次元航路エネルギー炉の暴走を、単身制御室に残って緊急制御を行い。そのまま消滅したとあるわ」

俺はあまりの事態に二の句も言えない。

その後もリンディ艦長は俺の経歴を述べている。全ておおよそあっている。若干違う部分もあるが美談に変更されている程度だ。

「……これまでの話から察すると、自分は次元間移動だけで無く」

「時空も超えた可能性もあるわね」

「SFじゃ有るまいし……そんなバカな話が……」

「あなたにとってSFなら良かったのでしょうか、状況とデータが合っているなら事実よ」

頭がこんがらがって来た。

するとアレか？俺は次元航行エネルギー炉の暴走を食い止めた英雄になって、

しかも本人はそのエネルギーで次元どこるか時空も超えちゃったと？

あまりにも突拍子が無い話しすぎて気持ちが悪い。

リアルで浦島太郎を経験していると言う事になるじゃねえか。

ウソと言う可能性は……無いな。管理局が俺にウソついてもメリットが無い。

「……艦長」

「何かしら？」

「自分でも整理がつけられません。ですので、過去の友人や親族と連絡を取りたいのですが？」

30年程度なら、まだ何人が生き残っていてもおかしくは無いだろう。

そう思って艦長に提案したんだが、何故か思案顔になっている。

まるで何かを教える事を渋って

まさか。

「リーダー中尉、落ちついて聞いて欲しいのだけど・・・」

まてまて、そんな何憐れむかのような目をしてるんだよ

「貴方の居た管理外世界、いいえ“元”管理外世界は」

やめる・・・そんなお通夜見たいな表情で何言うつもりだ！冗談は

「 28年前、世界から消滅したわ」

「・・・うそだ」

「事実よ。各地に造られた次元航行機関の同時暴走、報告ではグレムニルというテロ組織が」

「うそだっ!」

俺は立ち上がり、艦長の言葉を遮る形で叫び声をあげていた。

俺の故郷が消滅？バカ言わないでくれ！

母上とかがいたんだぞ？！

ワイズ教官やソフィア教官もいたあの世界がだぞ!？

「……うそだ……」
「残酷かも知れない。だけど事実なのよ」
「……ッ!……」

キツと睨みつけたい衝動に駆られたが、彼女の表情を見て確信した。

今までの話は 全て事実

「……すみませんが、少しだけ……すこしだけ一人にさせて下さい」
「……解りました。この部屋ならしばらく誰も来ないと思えます」
「……感謝します」
「執務官、行きますよ」
「……了解しました」

彼らが部屋を出た。

「
ツ~~~~~!!!!」
「ガンガンガンッ!!」
『マスター!壁を殴りつけちゃっ!?!血が出てます!?!』

何故だ?何故なんだ?どうして?最初は楽しかった!

魔法を覚えられると言う未知の道が楽しかった！

そして魔法を覚えた！戦争に巻き込まれた！

だけど楽しかった！信頼出来る部下もいた！

最後の最後だって！絶対に戻るって約束した・・・約束したんだ。

なんで、なんで

「どうして・・・こういう時位・・・泣けないんだ」

哀しくて・・・悲しくて・・・寂しくて・・・寒くて・・・。
胸が・・・心が・・・張り裂けそうだっていうのに・・・。

「なんで・・・俺の目からは・・・一粒の涙すら流れない!!」

ゴガンツ！

『頭はダメですマスター！幾らなんでもそれは!!』

「煩い！」

ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう・・・。

訓練で感情を表に出せなくなっただけ・・・。

痛みもあるんだぞ？笑う事も出来るんだぞ？感情があるんだぞ!？

それなのに

「悲しいのに・・・泣けない・・・ツ~~~~!!!!」

炉心事件に巻き込まれてから感情がおかしかった！
辺に喋れるようになった。ジョークも言える様になった！
だけど、だけどその代償がこれか？コレなのか！？

「幾らなんでも 糞が」

『マスター……』

「グイズ、少しだけ、静かにしていてくれ……喋るな」
『……解りました』

くそ、クソクソクソクソクソ 糞が、糞野郎が！

俺の糞野郎が！家族が消えていたんだぞ？
最後までいてくれた部下も死んでしまっていたんだぞ？

「……流れてくれよ……頼むよ」

俺は……心はまだ“人間”なんだろう？ こ

こ……ろ？

「？ あははは……そうかあ……」

そう言えば、炉心の時も“泣きかけ”はしてたけど 泣いて
いない。

「もう俺は、俺の心は……もう」

とつくに……壊れていたんだ？ それこそ瞬間魔力吸収が出
来るバケモノ。

「体は人間 でも心が壊れて……人間じゃなかったら……」

ソレは何？」

ただの バケモノか・・・チクシヨウ。

「いや、違う・・・俺の心が壊れたのは」

初めての实战、そこで人を殺した。

「　　そうかあ、その時から、俺はもう“壊れてかけて”いたんだ」

肉体は精神に、少なからず影響を与える。

炉心事件によって俺の身体には変化が起きていた。

それが　　それが精神にまで影響を与えていたとしたら？

「壊れてかけていた心に　　追い討ちをかけちゃった」

俺の判断が、俺の心を殺してきたのか・・・。

「泣けない筈だ　　皆ゴメン、俺・・・心が死んでたみたいだ」

『・・・マスター』

「ゴメンよ・・・父さん、母さん、みんな・・・ゴメンなさい・・・
ああ」

涙の流れ無い嗚咽が室内に響く。

感情を表すことは、今までだって得意じゃ無かった。

この身体になってから、訓練を受けてからはなおさらだった。

だけど、悲しい時は泣けていた。

今だから解る。人を殺してからの俺は本当に壊れていたんだ。これはきつと神さまのくれた罰なんだろう。

転生者として、何でもできると高くくっつけていた俺に対する。

だけど

この罰はあまりにも

重い。

「最後に泣いたのは

何時だ？」

最後に俺が泣いたのは　　そうだ、両親に軍に入った事がばれた日。

しこたま叱られて・・・両親に抱きしめられて、泣いた。

そうか、俺はあの親のまえだと子供に戻っていた。

家族と言う存在が、俺の心を直してくれていたのか。なら

「もう、ヴィズ以外家族がない、父さんと母さんがいない今の俺は　　どうすれば？」

『マスター・・・ごめんなさい』

これから先どうなるかなんて解らない。

だけど、願わくば・・・願っても良いのならば。

「ああ・・・また、泣けるようになりたい」

人間だもの、心は壊れてたけど、俺はまだ人間なんだもの。
そして視界が暗くなっていった。

S i d e リンディ

「フェン君！フェン君！」

なのはちゃんが必死にフェン君に呼びかけている。
茶室に戻るとフェン・ライダーは意識を失っていた。
すぐさま私はモニターで部下に指示を出していた。

「誰か、事件の参考人の少年が倒れたわ。医務室に運んであげて」
『了解です』

すぐに彼は局員の手で医務室に運ばれていった。
なのはちゃんもフェン君が心配だったのか、医務室と一緒について
くれた。優しい子ね。

フェン君は元いた世界では軍属の身だった。

元、USN陸軍第7機動魔導師部隊“レッドクリフ”隊長フェン・
ライダー中尉。

それがこの子の肩書き・・・

データを見て、7歳で1部隊の隊長を務まる筈無い。
優秀だがきつと政府がつくったプロパガンダ用の部隊だと思った。

しかし後になってデータを調査してみると、当時のフェン君の部隊の任務達成率、勝率、負傷者の数の低さ、全てがダントツで上位にあった。

そして既にも実戦である子は人を殺めていた。更に調べた情報だと、管理局との共同作戦の後に行われた作戦、ニューヘルバ基地攻略作戦では、突入部隊として敵基地最深部反応炉区画まで突入し目標を破壊、重症をおったものの、見事に作戦を成功させていた。

つまり、彼はわずか7歳にして戦場を駆け抜けた存在。

お飾りの部隊ならひとたまりも無い場所で戦い続けていた子供だった。

モニター越しだったとはいえ、当時のデバイスに記録された映像には、少女と見間違えるばかりの黒い長髪をした彼、フェン君がしっかりと記憶されていた。

こんな小さい子が極普通に部隊に指示を飛ばし大の大人がそれに従う。

その姿は第三者から見ればかなりシニールではあったが、それと同時に凄い事だった。

記録では廃棄された基地に立てこもった犯人。

それとその基地に配備されていた500機以上の無人兵器達を、フェン君はたった1人で20分もしない内に殲滅してしまった。

しかし、彼は今意識を失っている。

自分の世界、故郷がかなり昔・・・ざつと30年前には消えていた

という事実。

それはあまりにも彼にとっては重かったのだろう。

意識を失った彼は・・・どう見ても7歳の子供だった。

私は彼に謝らなくてはならない。

幾らなんでも配慮が無さ過ぎたと思い、私は部屋を後にした。

S i d e フ ェ ン

アースラ、医務室

「ここは？」

どうやら何時の間にか気を失っていたらしいな。

「フェン君！気が付いた?!」

「大丈夫かい？フェン」

『マスター……』

声がしたので隣に顔を向ける。

そこにはヴェイズを手を持ったのはと人型になったユーノが心配そうに俺を見ていた。

「大丈夫・・・ちょっと疲れてただけ・・・」

彼らは心配そうな顔をしたが、俺が大丈夫の一点張りだったので、そのままお大事にと言って医務室を出て行った。

しばらくして医務室にきたリンディ艦長に謝られた。
曰く配慮が足りなかったらしい。

ご厄介になっている家に帰りたいと申し出たところ、アッサリOK
してくれた。

俺は思っていたよりも早くはやての元に戻るのだった。
重たい胸の内を抱えたまま。

八神家

「ただいま・・・」

「おかえりフォン君って、どないしたん？」

俺はなるべくいつもと変わらない表情をしていたつもりだったが、
だが、どうやらよほどひどい顔なのだろう。

彼女は俺の微妙な精神の差異に気付いてしまった。

「・・・なにが？」

「なんかすごく悲しい顔してる」

鋭いな、子だぬきよ。

「なんか今失礼なこと考えへんかった？」

「（フルフル）」

「ま、冗談はさておき・・・何があつたんや？」

「別になんでもない」

「なあ？ほんま大丈夫なん？今にも泣きそうやで自分」

泣ける事が出来たのなら どれだけ良かったか。

「はは、どうやら俺は泣けないらしい」

「は？」

いきなりの俺の言葉に目を丸くするはやて。

「実はな？」

「

俺は管理局で確認した情報を、全て彼女に喋っていた。故郷が、家族が、友人が、全部消えてしまっていたと

「浦島太郎みたいだろ？」

「・・・」

「はやて？ うわっ」

いきなりはやてが俺の腕を引っ張る。

突然だったので、俺はそのまま彼女の膝の上におさまった。

「泣けないなんて事あらへん」

「だけど、泣けないんだよ。目から涙はこぼれない」

本当に、何で泣けないんだろうな？

壊れているにしてもコレは無いだろう？

「涙は顔からだけ流すもんと違うやろ！」

「・・・なあはやて、俺はさあ 戦争で人を殺している」

「ッ

」

そう言っただけはやてからだだがピクンと揺れた。

「それこそ沢山、襲い掛かる敵は全部殺した　だからさ、思ったんだ」

「・・・なにがや？」

「泣けないのはさ？罰なんじゃないかってさ」

「・・・」

「人を殺したヤツが、一丁前に感情を表すなんて許さないって罰」

壊れたコツペリアは動かさず感情も無い。

世界が世界だったとはいえ、人を殺めた俺に

「もう、誰かの為に泣く事も許されないんじゃないかってさ？」

「・・・歯あ食いしばり」

突然膝から下され、そのまま回れ右をされる。
そして

バチン

「泣くのがゆるされへん？そんなん誰がきめてん？」

どうやら叩かれたらしい

「泣いちゃダメだって、いつ誰が決めたって言うんや！？」

全然力が伴っていない、平手打ちだった

「ソレを決めたのは周りやない！他ならぬフェン君自身やる！」

その通りだと思う。感情を封じ込めたのはほかならぬ俺自身。

彼女はそこまで言ったあと俺を引き寄せ・・・抱しめた。

「もう泣いても良いんや。いままで苦労した分くらい泣いたって誰も文句は言わへん」

「・・・」

だめだ、俺ももう何が何だかわからないよ。

混乱していく頭と感情、悲しいのか何なのかわからない。

「我慢することない・・・うちら家族やろ？」

「え？」

「少なくとも、私はそうおもっとるで？」

俺はただの居候じゃ・・・。

「せやから家族の前でくらないたっていいんや」

「俺・・・家族なの？居候だし・・・人を傷つけた事も」

「そんなん・・・昔のはなしやろ？今は違うやん」

はやての言葉や理論は、とても暴論だった。

今は今なんだから関係ないと、そう言ってくれている。

「それにいフェン君言ってくれたやん。私の事守ってくれるって？」

「言ったけど・・・」

「でもな、私かてそう思うんよ？フェン君の事守ってあげたいってな？」

「・・・」

「そしたらフェン君が困って帰って来た。なら私がなんとかしてあげるしかないやん？」

だけど、だからって泣けるわけが

・・・フー

「あれ？なに・・・これ？」

「なんや・・・ちゃんと泣けるやん。よかったなフェン君」

何故だろう？俺の頬に流れるコレは？

おかしいな？泣けなかつたんじゃないのか？

「俺、まだ上手い事・・・整理できない」

「そんなすぐ理解できるもんやない。ゆっくりでもええんや。私は待つで？」

家族がいないと

ああ、そう言う事が。

「いいのかな？俺、はやての家族でも・・・」

「当たり前的事、聞く必要なんてあらへん」

そうか・・・いつからだろう？気が付けばこの家に帰ると言う様になったのは？

気が付けば、この家は俺の故郷となっていたんだ。

彼女とも、何時の間にか家族だったんだな。

「・・・ありがとう、はやて」

その時の俺は、一筋の涙を流して笑っていた。

嬉しかった。本当に嬉しかったんだ。

彼女が優しさをくれた。

この時俺は心を・・・ほんの少しだけ取り戻せたんじゃないかと思う。

「ありがとう・・・本当にありがとう」

「うんうん大丈夫や」

俺は故郷と家族、友人を全て失った。

だけど、新たな友人や家族を得ていたのだ。きっと俺は寂しかったんだろうなあ。

「はやて」

「なんや？」

「よろしく頼む」

「任しとき」

その事を思い出させてくれた彼女に感謝を・・・。
そして願わくば、今度はこの居場所が無くなりませんように。

俺はそう心の内に思ったのであった。

「壊れた心」(後書き)

はやてに見せ場を・・・。

「え？ちよっ！また死にかけるんスか！？」

「え？ちよっ！また死にかけるんスか！？」

妄想戦記

さて、まだ正直揺れているが、ある程度落ち着いた俺。落ち着いて考えて見れば随分と恥ずかしい内容だよなあ。まあ慰めてもらったと考えれば良いんだが

「ココは・・・どこだ？」

とりあえず俺は問いたい。

この360度真っ暗な視界は一体何なんだ？

「ヴィズ、おい・・・あら？」

おかしいな？普段は風呂と寝るとき以外は大抵つけっぱなしにしているんだが？

というか、よく考えてみたら体の感覚が微妙に変だぞ？

「どうなってるの？」

原因が解らん。アレか？何時の間にか気絶してコレは夢とか？

「落ちつけ、まだ慌てる様な時間じゃ無い・・・」

ふむ・・・。

「エリヤサーチ・・・術式が動かない？」

おK、普通の事態じゃ無い。というか魔力が霧散していくのはどう
言う事やねん。

流石にまだAMFが出るには早いだろうが。というか

「もしか・・・闇の書か？」

なんか空間が揺れた様な？

「うおっ！？引っ張られっ!?!」

途端俺はどこかに飛ばされたような感覚に陥った。

おかしいよな？感覚がおかしい空間だったのにそうかんじるなんて？
というかドンドン力が抜けて行くような？はて？なんだっけこの感
覚？

.....

.....

.....

「.....おろっ..」

『ああ、マスター。ようやく目が覚めたようですね』

見れば何時もの八神家リビングのソファの上で眠っていたらしい。
何か合った訳もなく普段通りの部屋……？

「……おれはいつねむった？」

『はやてさんとお話して夕飯食べた後、よっぽど緊張してらしたのか、その緊張が切れた所為かすぐにココで眠ってしまわれました。既にはやてさんは就寝しています』

寝ぼけた頭を上げて見れば、時計は0時を回っている。

そしてふとテーブルの方を見れば……。

「やみの書」

『昨日からココにおいて有りました。マスターどうかしたのですか？』

なんか昨日よかテカリと言うかお肌？まあ表面が新しくなっている
ような？

……コイツまさか

「このヤロウ！勝手におれの魔力吸ってたな！！」

『マ、マスターどうかしたんですか！？』

「吸うなら一言くらい言ええ！　　というかなぜ吸える！？」

って、コイツはまだ喋れないんだっただな。

「機能維持の為だとはいえ、俺からも魔力を吸うなんてな？おい？」

『え？そんなのデータには……』

「コイツはお前よか情報収集能力云々はうえだぞ？お前を誤魔化す

「くらい朝飯前だ」

『ええ！？そんな！！』

まあ俺はほぼ魔力切れは起こらないし、吸収するならちよつどいいのかも。

しかし、寝ぼけた頭ながら、なんか腹が立ってきた。

なんか釈然としねえな・・・そつや。

「さて、今まで勝手に持って言った分。返してもらおうか？」

この時の俺は本当に寝ぼけていたらしく、微妙に論点がズレていた事に気付いていなかった。

何をしたのかと言うと、レアスキルを全開にして

「さあ、返せすぐ返せ今すぐ返せ」

『ちよつマスター？なに希小技能全開にしてるんですか？』

「返せ返せ返せ」

『嫌ああ！マスターがおかしい！！』

何故か闇の書を掴み、中から魔力を引っ張り出そうとしていた。

「むふふふふ、あるある無数の魔力、俺のはどこじゃ？」

『ちよつとマスター！目を覚ましてください！まだ寝ぼけてますよ？！』

ヴィズがなにか叫んでいたが、この時の俺の頭に会ったのは取られたなら取り返せの言葉のみ。

というか何で魔力に固執してんだろうか解らないんだがな。

「コレか？ココにあるコレか？」

『ああ・・・マスターのキャラが崩壊している・・・』

そうこうしている内に、俺は何かの手の手ごたえを感じる。
なんか必死に掴んで離さないって感じがするが関係ねえ！

「フイイイイツシュッ！！！」

掛け声一本、闇の書から引きづり出した。

「・・・」

『だれ？』

人間一人。

ありゃ？アンでだ？

だがそんな疑問よりも早く

「いぼあっ！！」

『ってマスターアアアッ！！？？』

何故か吐血しました。何コレ？俺の持ちネタは吐血と違っぞ
コラ！

ズズズ

ありゃ？なんか余計なモン吸いだして吸収してるみたい？

闇の書から伸びる光が俺とつながって？何・・・これ・・・？

「・・・暴走している防衛プログラムから分離した？そんな有り得ない！？」

その時ふと、お隣で呆然としていた人物から声がする。

おい、今アンタなんて言った？防衛プログラム？

「（ちよつと今喋れないので失礼、アンタもしかして？）」

「・・・闇の書の意志・・・管制人格だ。何故私はココにいる？私に何をした！」

『ちよつとおおおお！マスターあああ！！血も止まらない上に何吸収してるんですか！！』

「（ごめん、俺にも解んない・・・）」

口からダラダラ血液流してます。と言うかヤベえ、ココリピングなのに・・・。

とりあえずフローリングだから良いけど、滲みこむと取れそうにないな。

「（もしかして俺、魔力と一緒にプログラムまで吸いだした？）」

「・・・奇跡だ。だが何故？」

「（いやソコ、自分の世界に入らないでください・・・状況を教えてくれ）」

ともかく口から血流れ出てが止まらん。

乾燥圧縮輸血パックは一応1セット有るけど・・・こんなに出して足りるだろうか？

『イアヤアアア！！血が止まらない！直しても直しても何か暴走し

てて壊れるうう!!」

「(はは、ひっしだな?)」

『何でマスターそんなに落ち着いてるんですかああ!』

「(いや、もうなんて言うかあまりのカオスに混乱中なんだ)」

有りなのか?有りなのかこういうの?幾らなんでも原作ブレイクし過ぎだろオオオ!!

ヴォルケンリッターより前に、ラインアインを出しちゃってどうすんだよ!

しかし超展開を越えて、もはや蝶展開、もつと愛を込めて・・・っ
て感じだな。

というか俺マジで死にそうな・・・ああ、ヤベえ。

「(ちよつと暗くなってきた)」

『ひいひい!!マスター意識落とす前にMTS-40の貯蓄魔力の使用許可くださいいい!!』

「(ああ、いいよ? 許可・・・する・・・頼むぞ?)」

『使用許可確認!リペア緊急作動!生命維持システム展開!ええ

この』

そして最後にヴィズに笑いかけ、俺はまた意識が飛んだ。

Side三人称

『ええい魂畜生オオオ!!回復追いつかなああああいいいいいつ

!!』

意識が落ちる直前、フェンからの貯蓄魔力の使用許可をもらったヴイズであったが、あまりにも肉体の崩壊が速すぎて、回復が追い付かなくなって来ていた。

幾ら高性能デバイスでも、元々ヴイズは戦闘用であり、治癒は本来専門外なのだ。

『バイタルがドンドン低下中！脳波もドンドン反応が低下中！？』

既にフェンの肉体は最低限の機能を残し停止していた。

今フェンが生きているのは、ヴイズが貯蓄魔力を強引に使い治癒を敢行していたからだ。

『この際BJ先生でも誰でも良いから助けてえええ！！』

しかし、このままでは貯蓄魔力は切れてしまう。

そうなったら己の主人は死んでしまう事であろう。

だが、このデバイスは諦めようとしなかった。

『 私は、私はあきらめません！！』

「……………っ！……………」

その時、その声を聞いた管制人格が反応する。

何を言っている？傍から見ればすでに主の生命は消えかけているではないか？

そう思い管制人格はデバイスの方を振り向いた。

『 あなたはまだ生きると願っていた！アレだけ悲しんでも自らの口で死にたいとは願わなかった！』

「……………」

ただのデバイスの筈のヴィズ、必死で治癒をかけ続けるそのデバイスは叫ぶ。

『あなたはどんな状況でも諦めなかった！私だって諦めません！』

そして、ただのデバイスは自分で出来る事を必死に模索している。その間のも主の命はドンドン消えて行くと言うのに、諦めようとしていない。

その姿を見て、管制人格は何故そこまで？と疑問に感じていた。

『一番損傷度が高いのは・・・心臓、いやリンカーコア付近の臓器、ならば』

デバイスは自分で術式を組みかえることが出来る。勿論ソレは持っている術式の範疇でしか無い。

『術式変更、手足は後、臓器の回復、いやさ維持を』

それでも一般よりはるかに高性能なAIをもつヴィズは持ち前の機能を全て使う。

そして、治癒術式を瞬時に変更し、今の状況に最適化させていった。

「・・・なぜだ？」

『あん、この！動脈の癖に破れんな！ なんですっ！？いま忙しいんですか？！』

管制人格は目の前で繰り広げられている光景を見て。

何故か口を開きそう呟いていた。

ソレを聞いたデバイスに怒鳴り返されてビクツと震えた。

「何故、そんなに必死になれる？」

『あゝあゝ？んなこと決まっているでしょうが！失いたくないからです！』

「しかし、苦しみが増すだけでは無いのか？」

見ればフェンの顔は苦渋で占められており、かなりの苦しみが伴っているのが解る。

「この少年は知っている。我が主はやての友人であるリーダー殿だろっ？」

『肺動脈は魔力でバイパスさせれば・・・ええそうですよ！序でに私もね！』

「このまま、苦しませずに逝かせた方がいいのではないのか？」

どう見ても助かる可能性は低そうだ。

それならばいつそ、死なせてあげた方が

「その方が苦しみから『バカですか貴方？』 なんだと？」

そのデバイスは言葉を続ける。

『楽に逝かせた方が良い？いつ誰がそんな事言いましたか！？チツ！心室細動か！』

「しかしそのままでは」

見ればフェンは痙攣を始めていた。顔もチアノーゼを起して真っ青である。

その時電氣的ショックで徐細動をしたのかフェンの身体が跳ね上が

った。

『マスターは私に笑ったまま気絶しました！治癒魔法で使う魔力の使用許可も貰った！』

「だが、お前の主人は苦しんでいる」

二度三度跳ねた辺りで止まる。どうやら心臓はまた動きだしたらしい。

しかし今のでかなりの魔力を消費してしまった。

『そんな事解ってます！ですがね！私のマスターは今まで一度だって諦めた事は無い！』

叫びながらもヴィズは治癒を止めない。

『どうしようもない事態に巻き込まれた事もあった！絶対に死ぬと思う事態になった事もあった！』

既に死んでいてもおかしくないフェンを、ヴィズは見捨てようとはしない。

『だけどその中でマスターは自分の出来る事は最後まで為した！』

治癒に使う魔力が増える。

魔力補充用の吸収機構を利用してフェンの中にある余剰魔力を吸いだした。

これでコレ以上の崩壊が起きる可能性は低い。

『私は、私はこのマスターに作られたデバイスです！いわば子の様

なもの！親が諦めていないのにその子供が諦めてどうするんですか
ッ！そんな事したら私は
』

震える声で・・・失う事に怯えるかのようにデバイスは語る。

『私はマスターに、我が主人たるフェン・ライダーに顔向けが出来
なくなる』

しかし、そろそろ限界の様だ。貯蓄魔力はもうほぼ0に近い。
先ほど吸いだした余剰魔力を治癒に当てる。

『だから 諦め・・・ません！ええい魔力が足りない！』
「・・・・・・・・」

管制人格である闇の書の意味、別の時間軸ではリインフォースと呼ばれた彼女。

彼女は目の前のデバイスの言葉が、己の胸に突き刺さるのを感じていた。

最後まであきらめない。それが時にどれだけ難しい事か

「本当に・・・失いたくないのだな？」

『ええ、ええ！当たり前・・・前・・・ですっ！こうなったら私を構成する疑似物質を・・・』

「そうか ならば手を貸そう」

『へっ？』

途端、容量一杯でオーバーフロウ寸前だったリソースへの負荷値が下がって行く。

ソレどころか、つきかけた筈の魔力がまた戻って来た事に、ヴィズは驚いた。

『あなた・・・』

「闇の書の殆どのシステムが使えない私ではこれが限界だ。今の内に」

『わ、解りました！ 感謝します・・・』

「構わない・・・すこし希望が出ただけだから・・・」

『??? とにかく治療を続けます』

そして、彼女の助けにより一時的に機能が上がった事によって、ヴィズはフェンを奇跡的に治癒する事に成功する。

『ああ、良かったあ・・・マジブスター!!!』

「・・・なんとかなったか」

涙を流す機能等無い筈のヴィズは、何故か泣きながら良かったと叫んだ。

管制人格の彼女は彼らを見て、もう随分と昔に忘れてしまっていた事を思い出した

諦めないという事、そんな簡単な事 されど行う事は難しいそれを。

『あきらめなくて良かったあ。ええと管制さんですか？手伝ってくださって感謝します』

「いいや、いい。こちらも随分と昔に諦めた事を思い出せた」

『それでも、私は貴方に感謝します。ありがとうございませす』

「・・・諦めなければ、出来る事もあるんだな」

あきらめなくて良かったと、デバイスたちは思ったのであった。

『あと、出来ればなのですが・・・』

「何だ？」

『掃除するの手伝ってくれませんか？』

「・・・」

見ればフローリングが血だらけで、惨殺現場みたくなってしまうている。

これは不味い、色々和不味すぎる 朝からスプラッタは主には

きつ過ぎるだろう。

「了解した。やり方を教えてくれ」

『解りました。では 』

こうして一人と一機はリビングを掃除していく。

そして明け方近くにようやく掃除が終わらせる事が出来たのである。だが一息ついた所で起きて来たはやてに見つかった。

一応管制人格の彼女はヴィズと共にはやてに事情を説明する。

だが肝心な何が何でこうなったのか説明したくても、いきなり引つ張り出された彼女には説明できず、

張本人であるもう一人は意識を失ったまま目を覚ましそうに無い。

その為詳しい事は、フェンが目を覚ますのを待つと言う事になった。

「しかし、この子が管制人格ねえ？」

『マスターの言ってた事がまた当たりましたね？』

「せやなあ。当の本人が目覚めたら尋問や」

「い、いや尋問はきつ過ぎるのでは？」

「何いうとるん？こんな心配かけさせた子は少々痛い目みんとあかんよ？」

『とりあえず説教の3時間くらいは覚悟して貰いましょう』

まだ名前が無い管制人格の彼女は思った。やっぱり眠らせてあげた方がよかったのでは？

と、デバイスと一緒に黒い笑みを浮かべている主を見てそう再度そう思ったのであった。

この後、彼女は管制人格じゃ呼びずらいと、はやてに言われ名前をつけられた。

色々候補があつたが結局名前はリインフォースに決まった。

「ほなりイン、これからよろしくな？」

「ええ、主はやて」

『マスター早く起きないかなあ・・・』

こうして新たな家族が、八神家に加わったのであった。

この後、リインははやてとお風呂に入っているのだが・・・多くは語るまい。

そしてフェンはこの日から約3日後に目を覚ました。

意識を何とか取り戻したものの、また吸収の反動で動けないフェン。布団に括りつけられた状態で、リインフォースの説明をした後、彼は説教フルコースを受けさせられて白く燃え尽きる。

「ああ、母さん？え何？その河はまだ渡るな？でも小舟に乗っちゃったよ？」

『ちよつマスター！その河はダメですよ！カロンさんに引きかえさせて貰って！！』

とりあえず、しばらく協力出来そうに無いと、なのはに連絡を入れるヴィズだった。

「信じれば空だって飛べるさあ」

「信じれば空だって飛べるさあ」

妄想戦記

やあみんな…前回取り返しがつかないくらい物語を変えたフェンだよ。

実はあの後、1日間ほど倒れておりました。

いや、炉心の暴走したエネルギー吸い取った時よりかはマシなんですがね？

それでも治癒が行き届かなかった手足を回復させるのが大変で大変で。

ただ不思議だったのは、体内で吸収した魔力が安定した瞬間一気に直ったって事か。

それはもうビデオの巻きなおしの如く、腕の調子が戻って行くもんだから俺自身驚愕。

そういえば闇の書のバグ部分ごとプログラム吸い取ってんだよな俺……。

何故か融合して安定しているらしいんだけど……俺人外率を更に

更新させたか？

「もう、驚きが驚きを越えたな」

『身体組織の組成自体は人間と大差ないんですけどねえ？』

「・・・これは下手に精密検査受けられないな」

幾らなんでも異常があり過ぎる。

すこし為しとばかりに、近くにあったカッターを指に当て

「どれ・・・ヤツ」

『・・・完治、擦り傷程度なら数秒もかからない』

「オート回復機能が付いたか・・・」

切りつけて見たが、モノの数秒もしない内に傷が塞がってしまった。リジエネレーション能力を手に入れたと考えればいいのだろうか？

『でもその代わり魔力が若干減っていますね』

「一体何が起こったって言うんだ・・・」

「・・・すまん」「うおっ!?!?」

いきなり謝られて驚いて後ろを見れば、何故か申し訳なさそうなりインがいる。

い、いつの間にココに来たんだろう？気配を感じなかったぞオイ!?!?

「リインか・・・驚かせるなよ」

『心臓止まるかと思いました』

「？ ヴィズには心臓が取り付けてあるのか？フェン」

「いやつけちゃいない。多分言葉の比喻ってヤツ」

『ま、まあそれはさて置き 何故謝るのですか？』

どうやら心当たりがあるっぽい。正直こちらは色々あり過ぎて混乱している。

一体俺の身体はどうなっちまったんだらうな？

「・・・結論から言えば、あの時フェンは私からシステムを殆ど吸いだしていた」

「マジか？」

「本当だ。いきなり魔力を吸い取られ、此方の防御プログラムが対応しようとしたら、ソレのコアごと強引に全部引っ張り出されてしまった。私はおまけみたいなモノだ」

「・・・とりあえず言っただけか？今の俺は一体何者だ？いや何だ？」

「俺は・・・人間か？」

「精密に調べなければ解らないが、恐らく既に肉体は守護騎士の様な状態だろう」

「魔法生命体と同じということなのか？」

「生きながらにしてな。信じられない事だが・・・」

『名実ともに人外化しましたね』

もうorzしても良いんだらうか？

「ま、まあ安心しろ！見た目は変わらんし、生体機能もある。何よりの寿命も長いぞ？」

『その代わりエターナルシヨタで決定ですね？』

「・・・」

ち、ちくしょう！なんだかどうでもちくしょう！！

あれか？アレなのか？ヴィータみたいにストライカーズの時も・・・

この姿？

「・・・もう成長できないって事か？」

「いや、一応まだ生物だからある程度の成長は見込める。だがしばらくしたら・・・すまん」

「・・・リインの所為じゃ無い」

全部俺が寝ぼけてやった事だから自業自得なんだがな。待てよ？てことは俺余程の事が無いと死なないのか？

「まさか防御プログラムのコアまで吸い取られるとは思わなかった」

「じゃあ、この回復能力は？」

「無限再生機構がちょうどいい形で融合したのだろう」

「・・・バグなのには？」

「既に完全に肉体と融合しているからもう取れないぞ？」

「・・・こういう時はアレだ。ご都合主義万歳と叫べばいいのか？まあもうなんて言うか元々肉体における人間の枠は超えていた気がする。」

今更な気もしないでもない・・・少し凹むけど。

「だけど、普通こういう事は起こるのか？」

「だから奇跡だ。どう言った因子が絡んでいるのか知らないが普通は有り得ない」

「・・・」

昔、有り得ないなんて事は有り得ないとか言っている人が出てる漫画があっただけど・・・。

「有り得ない事は・・・有り得ないよな？」

「ああ、有り得ないな」

我ながら、魔力運用に長けたチートな体でマジで良かったと思う。リイン曰く普通のヤツなら死ぬか、10年は動けないらしい・・・よく生きてたな俺。生き汚さだけならゴキブリクラスかよ。

死にたくは無かったが、人間の範疇で死ぬる身体でいたかったかな。俺の希少技能から考えたら、ほとんど吸血鬼・・・いや魔力を吸うから吸魔鬼か？

とにかく魔法生物の出来あがりか・・・皮肉が効いた人生じゃねえか。

まさかニューヘルバ基地の“実験体”みたく、人外化するなんて波乱に満ち過ぎてるぜ。

「ちなみに・・・完全に魔法生命体と化すのはどのくらいかかる？」

「短くて数カ月、長ければもって10年行けばいいところだろう」

「そう・・・か・・・」

下手に管理局とかに調べられたら、研究所送りにされそうだな。

あゝあ、コレで管理局とかで執務官とかする道は断たれちまったな。

やれるとするなら囑託か傭兵か・・・魔法を捨てるか・・・か。前者はともかく・・・後者は無理かな。

「人生・・・忤ならんもんだなあ」

「そうだな」

まあ幸いなことに、俺が吸着紙みたいに闇の書の悪い部分全部持つ

ていったらしい。
だからリインはもう健全な状態なんだそう。はやてへの侵食も止まってるらしいな。

俺には浸食来ないのかと聞いてみた。

そしたら元々リンカーコアが正常に機能していたら大丈夫なんだそうです。

つまり俺は浸食が来ても、精々疲れを感じる程度なんだって。

ソレ以前にプログラムは既に崩壊しているらしいから浸食も何も無いらしいが。

「ま、はやてに信頼の出来る家族がふえたと考えればいいさ」

「ん？私の事呼んだ？」

彼女の話題を出した途端、ちょうどいいタイミングで彼女がやって来た。

「ああ、ちょうどいい。俺の寝こんだ理由も含めて説明会でもどうだ？」

「ならお茶とかがほしい」

「・・・入れてこよう」

とりあえずお茶を入れに行く俺。

まあ喉乾いてたから良いんですけどね。

「とまあこういう訳だ。どうやら俺の進化は止まらないらしい」

「すさまじいやん。もうフェン君ならぬスーパーフェン君やな」

『2とか3になるんですね？わかり・・・』

「ボツシュートされるんや」

『そつちですか！？』

おいこら、幾ら他人ごとでも真面目にやれ。

リインを見る、ネタが理解できなくて首をかしげてんじゃねえか。

「まあとにかく、はやての不具合は全部引き継いだ」

「そんな・・・大丈夫なん？もしフェン君も歩けなくなったりとかは」

「リインによればその心配は無いそうだ。なあリイン」

「ええ、その通りです主。彼が吸い取ったプログラムはもはやほとんど機能していません」

「・・・そうか、よかったなあフェン君？」

「何言っている？良かったのははやてだぞ？しばらくすれば歩けるようになる」

「ほんまか！？」

「ウソついてどうする？」

『歩けるようになったら、みんなでお散歩行きたいですね』

うんうん、俺もそう思うぞ？

ズウ・・・はあ、お茶がウマイ。

「しかしフェン君が魔法生命体化するとは思わなかったわ」

「リイン曰く守護騎士と同じ様な状態だそうだ」

「すまん・・・何か不都合があれば私に言えば良い。魔法生命体への調整は慣れている」

「・・・出来ればそう言う事態にならなければいいんだが」

「そこら辺は諦めてくれと言うしかないな」

あまりに現実感が無さ過ぎて、正直悩もうにも悩めないな。
お陰で平然としていられる訳だが、何だかなあ？

.....

.....

.....

「猫さん、俺いま人外らしいんだ」

「ナァ〜」

そう俺はこの間出会って愛でた猫さんに話しかけていた。

最近いえの玄関付近からチラチラ覗き込むようにしてたから呼んで上げたのだ。

今では撫でられるがままになっている。ウンやっぱり猫はいい。

「なんか俺にはレアスキルがあつてさ？それが変なモン吸っちゃつたらしい」

「ナァ〜？」

「うん、そう変なモン。それが俺の中で安定しちゃったんだって」

「ナァ〜！」

「あ、ごめん・・・手が止まってた」

「ゴロゴロゴロゴロ」

あ〜やっぱり猫さんは癒されるなあ。

耳の後ろから首を通り背筋を撫でてやり、そのまま返す手で顎も撫でる。

すると実に気持ちよさそうな表情をするのだこの子は。

『・・・マスター、そろそろ』

「ん？・・・もつか？ゴメン猫さん。俺行かなきゃ」

膝の上に乗せている猫さんを降ろす。

そう言えば、管理局の方に呼ばれているんだっけ？

「しばらく来れないみたい。一週間くらいね」

「！！ ナア〜・・・」

「そんな悲しそうな声出さなくても、すぐ戻ってくるよ」

「ナアッ！」

「そうそう、美猫さん何だから元気な方がいいよ？それじゃあね」

「ニヤッ！」

猫さんと別れ、俺はアースラへの指定された転送ポイントへと向かうのであった。

「（管制へ、此方レッドクリフ1、高感度センサーにおける反応探知できず）」

『（こちらアースラ了解、次はポイント3-12に向かってください。データ送ります）』

「（・・・データ受信、すぐにポイントに向かう。通信終わり）」

アースラに久々に戻った俺を待っていたのは、人手不足であえぐ局員たちだった。

次元航行艦は長期任務を目的とした大型艦であり、人も多めに乗っ
てはいる。

しかし、流石に都市一つに散らばった、直径約3〜4cmの物を見

つけるには足りない。

なので、高感度センサーを搭載している俺とヴィズはさっそく捜査にかりだされた。

現地協力者つて事にされたが、謝礼出ますかと聞いたら変な顔されてしまった。

はて？変な事聞いたかな俺？

「（しかし、飛べるようになるとわな・・・）」

現在俺はミラージュハイドを展開して山間部を飛行しているのである。

そう飛行である。大事な事なので2度言った。

俺もついに飛行魔法が行えるようになりました！

というかアプローチを変えてみたのである

今まではジェット機のように連続で術式を展開し続けていた。

しかし魔力が強過ぎる所為か、どうしても直線しか飛行出来なかったのである。

ユーノ君に相談した所、それなら少しずつこまめに噴射してはどうだろうかと言われた。

要は多段ジャンプのように、術式で浮かびながら必要な時だけ噴射する形に変えたのである。

そしたら何と言う事でしょう。俺は空を飛ぶ事が出来る様になったのである。

もう俺は空を飛べなくて出来なくて、半ば諦めてはいた。

だけど、案外違う方法でいけるモノだと感心する。

まあ、絶えず術式を出したり消したりしている様なもので、
レアスキルで人外の魔力回復と持久力を持つ俺だから出来るらしい。
クロノ君が呆れて俺を見ていたから、間違いは無いと思う。

「（ヴィズ、コースはコツチでいいのか？）」

「（HUDに表示しました通り、方角はあっています）」

「（なら、指定空域まで飛ばすか？）」

「（飛行術式連続稼働ですね？了解、ジェットパック臨界モード！）」

」

直線だけなら普通の魔導師よりも早い俺。

とりあえず早いところ調べに行きたいので、前面にシールドを展開し
四肢を固定。

そのまま一気に魔力をジェットパック内の術式に流し込んだ！

ドオオオン！！

「（・・・今音速超えました）」

「（速度落とそう・・・下に被害が出る）」

「（了解）」

下が山岳部で助かった。ちょっと吹かし過ぎたようだ。調子に乗る
のいくないね。

とりあえず音速ギリギリに速度を落とし、指定空域まで飛行する。

しかし、コレが空戦魔導師の視界か・・・。

スピードを出せば、後方にぶっ飛んでいく雲。

成程、病みつきになる訳だ。コレは楽しい。

「（ヴィズ、指定空域までの到着予想時間は？）」

『(このままの速度ならおよそ3分でしょうか?)』

ふむ、それならゆっくり行くかな　　ん?

「(ヴィズ、あそこ・・・)」

『(このパターンは　　テストロッサ嬢ですね)』

減速の最中、ふと見れば俺達より低高度を飛行中のテストロッサ嬢が見えた。

つておい！昼間っから何の視覚防御対策もせず飛んでるのか!?

「(バカだなあ、認識障害はレーダー云々は防げるけど)」

『(アクティブステルスじゃないですから、光学機器には丸見えなんですけどね)』

俺達がなんでミラーージュハイド展開していると思ってる?

他の局員連中なんて、そう言うの使えないからサーチャーで代用してるって言うのに。

「(と言うかなんて言うか)」

『(犬と少女が飛ぶ姿って、偉くシユールな光景ですよね)』

アルフって大きいから目立ちそうだよなあ。

「(・・・なあヴィズ?アルフにまたがったら見栄えがすると思わないか?)」

『(奇遇ですねマスター、今私の中での　　け姫が浮かびましたよ)』

『

なんか良いなあ、ああいった使い魔さんってさ？
大きな獣と使い魔契約してモフモフしてたいですハイ。

「（とりあえず先急ぐか）」

『（ですね、私たちの目的は探索であって戦闘ではありません）』

戦闘指示があるならともかく、俺に出された指示にはそういったのは含まれて無い。

別に報告義務がある訳でもないから、とったと行っちまおう。
そう思っていたんだが

「（あ、気付かれた。なんで？）」

『（考えてみたら防音してませんね私たち）』

だって飛行する音が防音魔法の許容範囲をとくに越えてるんだもん。

多少の音はごまかせても、高速で飛翔する物体には焼け石に水だ。
……気付かれる訳だ。

『（テストロッサ嬢、射撃魔法準備確認！）』

「（げ、ミラージュハイド解除、装甲シールド展開！）」

見れば彼女の周りにフォトンスフィアが展開されている。
アレは恐らくフォトランサー、誘導性能は無い射撃魔法だ。
多分威嚇のつもりなんだろうなあ。

『ミラージュハイド解除！射撃魔法発射されました！数8発』
「多重プロテクション展開！」

そして防衛魔法を使った途端、全弾俺達に着弾した。

いやさ避けられれば良かったんだけど、生憎まだ空を飛ぶ事には慣れてないんだよね。

吸収しても良いんだけど、今現在容量ギリまであるから要らないしさ。

おまけにミラージュハイド使用中は、装甲上のシールド魔法解除しているからさ？

迷彩魔法中は極端にBAの防御力が落ちてしまっただよね。

それでも普通のBと同程度あるけど一応用心の為にミラージュハイドは解除する。

さて、ちよいと魔力煙が上がっちゃって視界が悪いけど、お次が来るだろうなと身構える。

俺ならこの隙に弾幕を張って撃ち落とすからな。

しかし

「……………」

はて？何故か次弾が飛んでこないのだから？
見れば明らかに狼狽していらっしやる様子。

「どうしたんだ？」

『さあ？トラブルでしょうかね？』

何故かもう攻撃してくる気は無さそうみたいだが……。

「（おい、戦うのか違うのかはつきりしてほしいんだが？）」

『（もつとも今回は戦えと言われても逃げますがね）』

「（……………ちょっとだけ話したいんだけど、いいかな？）」

なんと、あちらから話がしたいだど？

「（今回はジュエルシールド持っていないから攻撃はよしてくれ、もう撃たれるのは勘弁）」

「（あ、ゴメンなさい）」

とりあえず下に降りる事にした。山の中にある開けたところに俺達は降り立つ。

だが、まだ着地が上手く行かなくて思いっきりこけた。恥ずかしいなオイ。

「……」

「そ、そんな目で見るな」

『本格的に飛んだのは、3年以上前何ですから仕方ないじゃないですか！』

若干変な目で見られたような気がしたのでそう言った。とりあえず身体に着いた土を払いつつ立ち上がる。

「さて」

カチャカチャ、ガシユー

俺はヘルメットを外し、彼女たちの前で素顔をさらす。

まあ以前ヘルメットが破損してたから、俺の顔は見られてるからな。今更隠した所でしょうがない。話をすると言うのだから顔は出しておかないと。

「武装は待機状態、素顔も晒したんだから攻撃はするなよ？」

流石にビリビリは勘弁です。
電気変換された魔力の場合吸収できるか解んないしな。

「えと……その、ごめんなさい」

「……?」

「ソレと、この間はありがとうございました」

「? 何故に??」

何故フェイトに感謝されるんだ?俺なんかしてたか?

「俺なんかしたか?」

「あのお礼をまだ言つて無かったから……」

『話がかみ合つてませんね』

「あー簡単に言つと、ジユエルシードの封印の時にアンタ倒れただろ?その時フェイトは殆ど怪我しなかったからさ?その時のお礼を言いたかつたつてだけさ」

「成程、補足感謝する」

アルフの捕捉のお陰でようやく言葉の意味が解つた。
成程、以前倒れた事に関するお礼を謝罪だったのね。

「気にするな。余計な御世話だったかも知れないが見過ごせなかつただけだ」

「……アンタ、お人よしとか言われなかい?」

「そのモノ言いからすると、見過ごした方がよかつたのか」

「い、いや!フェイトを助けてくれた事には正直に感謝しているよ!」

『まあ、お人よしなのはマスターの根つこの気質ですからね』

やかましいぞヴィズ。

「まあ、怪我は無くても良かったな」

「ところで、君は何故ここに？」

「この時期魔導師が飛ぶ理由なんぞ一つだろうか？」

「・・・ジュエルシード」

おいおい、そこで身構えんなよ？

「あんな、一つ間違えば災害を起す代物が今住んでいる世界にあるんだぞ？」

『探せる力があるんだから、とりあえず封印しようとするのはダメな事ですか？』

「・・・ごめんなさい」

そういつて杖を構えるのをやめる。全く根が良い子過ぎるぞお前達。俺がもしトラップを張っていたらどうすんだ？

今この時秘匿通信で管理局で連絡を取っていたらどうする？

まあそんな事はしないんだがな。

「でもアンタは、今は管理局側なんだろう？」

「言っておくが、協力関係なだけで管理局の人間じゃ無いぞ？」

『探すなら海戦術があつた方が便利ですからね』

「大体、もし管理局側だったら今頃執務官が飛んできている」

『誤字にあらす飛んでくるでしょうね。魔導師だけに』

今のは寒かったぞヴィズ。

「まあアレだ？今の俺はただの探索係だ」

『まさか人手不足だからって外回りに駆り出されるとは思いませんでしたね』

「それじゃあ、また敵同士だね」

「さて、ソレはお前さん達が決める事であり、俺はどちらでも構わ
ん」

『攻撃して来るのであれば、こちらは武力行使をしても殲滅させ
ていただきます』

いや殲滅は無いつて、精々正当防衛しかしないよ。

この世界で人殺すつもりは毛頭ないしな。

「言ってくれるじゃないか？上等だよ！行こうフェイト！」

「うん・・・それじゃ、次は容赦しない」

「了解した。早いとこ行け、ヴィズの調子が悪くて連絡が出来ない
のは今の内だからな」

「・・・さよなら」

彼女はそう最後に言うと、アルフと共に遠くの空に飛んで行ってし
まった。

どうやらこの先で探すのは止めた様だな。

「こちらも探索開始だな」

『ですね』

今は彼女を攻撃なんてしない。なにせ恐らく黒幕である彼女の母親・

・・・

名前が思い出せないが、その人物の居場所を知るのは彼女だけなの
だ。

管理局もそれを承知で泳がせているんだろうなあ。大人つて腹黒い
な。

俺もミラージュハイドを展開し、ジェットパックの推進力によって
その場から飛び去った。

「信じれば空だって飛べるさあ」(後書き)

*コレでストックも切れた。妄想も尽きた。次まで少し開くだろうなあ。

しかし良く良く考えたなこのトンでも展開。流石は妄想W

「自然災害が起せる程度の能力」

「自然災害が起こせる程度の能力」

妄想戦記

「羊羹と緑茶の組み合わせは最高だとおもいませんか艦長？」

「うん？ズズ・・にがしい」

「そうですか？俺としては苦みの中に甘味が」

「お砂糖を入れないとダメね」

『おお、瞬く間に茶柱ならぬ砂糖柱が立っていく！』

「・・・のめるんですかい？」

「あら、美味しいわよ？」

「さようぞ」

「・・・なんでこんなにまったりしてるの？」

あまりのリラックスぶりに困惑状態なのはさん。

いや、だってねえ？

「休める時にきちんと休息を取る。コレ兵士の基本ね」

「だ、だけど何か出来る事が！」

『現在私たちは休憩時間が割り当てられています。コレは当然の権利です』

「必死なのは解る。だが、休む時に休まず必要な時に力が使えなければそれに意味は無い」

今一体どういう状態なのか説明いたしますとですね？

探索を終えた俺は2時間の休憩時間を貰ったので、食堂を使わせて貰おうと思った訳だ。

そしたら偶々同じく帰って来ていたなのは& a m p ;ユーノ君と一緒にになった。

ついでだから食堂で何か軽くつまもうぜという話となり、食堂に向かった訳だが、

なのはさんはまだ疲れて無いとか又カシヤがったから強制連行した。そしたらその食堂にて、リンディ艦長もいたので雑談を入れて和んでいるという状況だ。

「どうなの？ジュエルシードの集まり具合は？」

「さつき、やっと三つ目を集めたところなの」

「だけどコレ以上は陸地には無いかもしれないんだ」

「てことは・・・残りは海か？」

海鳴市はその名の通り、海に面した町である。

広域に広がったジュエルシードが海に落ちていても不思議は無い。むしろ原作じゃそうだったしな。

「そう言えば、エイミイもそう言っていたわね」

「じゃあ確定だな。残りは海にあるだろう」

あの人、結構人使い荒いんだよなあ。

協力体制はしているが、限界まで酷使してきやがるぜ。

「あ、そろそろ戻らないと・・・それじゃ皆、ゆっくり休んでいいからね」

「了解艦長」

「ばいばいリンディさん」

皆で食堂を出て行くリンディさんを見送った。

ああ、しかし今度は海の中かよ・・・。

「はあ、俺今度は潜水夫の真似ごとか・・・」

『海底2万海里もビツクリな深海旅行へとご案内』

「そしてお宝つんだ沈没船を見つけるですね。解ります」

「・・・なんか楽しそう」

「ユ、ユーノ君?!」

ほほう流石はスクライア、冒険心がうずいたか？

「まあこの近辺じゃ沈没船は見つからんだろう」

『精々巡視船に追い詰められて沈没した密輸船位でしょうかね』

「え？そんなのあるの?」

「この間ニユースで出てたぞ?」

亡国がまた領海侵犯して、どさくさで密輸船も来てましたってニユース。

何じゃかんじゃで政治的問題に発展し、またもや面倒臭い事になっているんだとか。

「まあそんな事は関係ないがな」

「問題は海にあるジュエルシードをどうやって探すかなの」

「一つ簡単な方法はある、魔力を散布して活性化させれば見つけれらる」

『広範囲に自然災害が発生するでしょうけどね』

「ええ！？そんなのダメだよ！」

いやコレあくまで簡単な方法だからね？

「それが嫌なら地道に探すしかないだろうな」

「うん、頑張る！」

「だがその前に、なのはさんは一回休め、休憩殆ど入れて無いだろう？」

「そうだよなのは、今まで全然休憩入れて無いじゃないか。少し休もうよ」

「うううでも」

渋る魔王、相変わらず頑固なのね。

「休まないなら、無理やり寝かしつけても良いんだぞ？USN仕込みでな？」

『チヨークスリーパーかけて絞め落とすアレですね？解ります』

「意識が飛ぶから快適な目覚めをご提供できるぞ？」

「え、遠慮しておくの」

「というか、一歩間違ったら大変なことになるじゃないかソレ」

「大丈夫、慣れている。ヤル方もヤラれる方もな・・・」

なんか思いたしたら鬱になりそうだ・・・。

俺の発言に若干皆ひいているの横目に、羊羹を口に含む。

「うむ、ウマイ・・・そう言えばこういったお菓子は、小さい頃は食べた記憶が無いな」

「え？そうなの？」

「うむ、何せ主食が蛇でネズミはごちそう、おやつはバッタだった」

「「……うわあ」「

おいおい、そんな目で見るんじゃないよ。

殆ど訓練ずくしの毎日で、おやつは喰った事あんまりないんだよ。

「……言っておくが今のはサバイバル演習の時の話だ」

「「ああ、なんだ」「

「通常だと飯は普通だった、おやつは軍用レーション渡された」

何か在庫がかなりあったから貰って来たとか何とか。

もう絶対フルーツ味はいらねえ……油が凝固してて……おえ。

「？ねえねえ、れーしょんってなに？」

「うーんと、たしか携帯食料のことじゃなかったっけ？」

「戦闘糧食ともいう。火を通さずそのまま食べるように最初から調理されている」

「へえ、そうなんだ」

「だけど味はあくまで二次、栄養価だけ追及してあるから美味しいのは稀」

『ある意味ギャンブルフードですよ。当たりとの差が激し過ぎる』

ステーキ風味は割と行けたっけな。スナック菓子みたいな味だったし。

「お陰で全然好き嫌いが無くなった」

「え？そうなの？」

「まずいレーションに比べたら、普通の食事はごちそうに見える」

『ソレ以前にサバイバルも経験してますからねマスターは』

うんうん、考えてみたらスゲエよなあ。普通に虫とか食べてたし。

ネズミがごちそうに見えるとか普通じゃないだろう？

「凄い経験してるんだねフェンは」

「？スクライアのユーノならソレ位あるかとおもっていたが？」

「ううん、僕たちはアウトドア程度までだよ。流石にそこまでサバイバルな状況は無いや」

ふーん、まあ当時俺の世界にいたスクライア達も、普通に考古学者みたいだったもんな。

案外彼らの生活の質はかなり上なのかも知れない。

「ところでお前らはどうなんだ？小さい頃はどんな感じだった？」

「うーん、僕はスクライアに貰われた後は、ずっと遺跡探索とかの毎日だったかな」

『リアルインディジョーズですね？解ります』

「インディジョーズ？」

なんと、この映画を知らないとは かなり名作だぞ？

後で見せてやらねばなるまいて。

「私は・・・そうだなあ。お父さんが事故で大怪我して、みんな忙しいから一人でいる事が多かったかな」

・・・このブレイカー（破壊者）め、話が一気に重たくなりやがったじゃねえか。

あれ？でもなのは幼少期ってそんなに暗いバックボーンがあったんだっけ？

全然思い出せねえんだが？

「だから、一人ぼっちは結構平気だよ」

「なのは」

『なのはさん・・・』

「・・・そういえば、俺も小さいころは孤独だったな」

思い出す思い出す。サバイバルから帰った後幼稚園に行ったら子供が全員が泣いた。

ソレ以来距離置かれてたっけなあ・・・まあ寂しいっっちゃ寂しかったな。

集団ではぶられるのって結構キツイもんがあるんだよなあ。

「なにか威圧感でも出ていたのか、会う子会う子が皆泣きだしてな・

・・・」

『そう言えばマスターに幼馴染も同年代の友達もいませんでしたね？』

「・・・まあな。会うたびに泣かれたら友達も出来んさ」

仕方無いからデバイス作りに没頭して、自力で改造や製造も出来るようになったけどな！

まあ身体は7歳だからなあ、考えてみたらスゲー悪環境。

「まあ、今は寂しくは無いけどな」

『ユーノさんやなのはさんとも、知り合いになれましたしね』

「え？知り合いじゃないよ」

うわ、なんか面と向かってそう言われるとキツイもんが・・・。

「もう友達だよ」

「そうだね。フェンとはもう友達だ」

「・・・そうか」

あらら、そう来るか。
しかしなんて言うか、テンプレだけど嬉しいモンだな。

『あゝ！マスター照れてますね？』

「やかましい」

『あた！また叩きましたね！？うう訴えてやる！』

デバイスが何処に何を訴えるつもりじゃい！

というかデバイスに訴えられた魔導師とかシユールすぎる。

この後も適当に会話して、休憩していたんだが・・・。

ビーツ！ビーツ！

「アラート、何かあったな」

「ユーノ君！フェン君」

「うんブリッジに急ごう！」

「了解だ」

考えて見ると俺達みたいなお子供が良くブリッジとかに行けるよなあ。
そんな事考えながら、走るお二人の姿を追いかけて行った。

なのはは素の身体能力がそれ程高く無かったので、俺の方が先にブリッジに着いていた。

そしてブリッジのモニターには、六つの竜巻が写ってました。

「全く呆れた無茶をする子達だわ！」

うん艦長、俺もそれは思った。ありゃ物凄く身体に負担がくるぜ。

具体的に言っているとインフルエンザ起してる時に猛勉強した位か？

「無謀ですね。間違いなく自滅する……」

クロノ君はつきり言うなア。

まあアレだけの広範囲に魔力を行きわたらせたなら魔力切れでいずれ
そうなるな。

そこら辺は同意見だわ。

「お？ようやく来たな……大丈夫か？」

「はあ、はあ、ちょ、ちよつとまって……」

「フネのなか……広過ぎ……」

その時、ブリッジの扉が開きなのはと、息も絶え絶えのユーノが入
ってきた。

なんかリアルに大丈夫か？息切れが半端無く苦しそうなんだが？

「あ、あの私をあそこに転送してください。フェイトちゃんを止め
ないと」

「その必要はない」

「え？」

「あれだけの魔力を打ち込んだんだ、放っておいても勝手に自滅す
る。そこでジュエルシード共々、彼女を捕獲すれば良い。」

クロノの余りに非常な言葉になのはは言葉を失っている。

うんうん確かに正しい……けど少し位オブラートに包んでやれよ。
大人だろウクロノ君。

画面の向こうには、大量の魔力を失い荒れ狂う暴風に吹き飛ばされ、
それでもなお竜巻に挑む無謀な少女が写っている。

「私たちは常に最善の選択をしないとイケないわ」

リンディ艦長は真剣なまなざしでそう言う。

「残酷に見えるかも知れないけど、これが現実……」

彼女は腕を組み険しい表情で画面を見上げ、なのはには視線を向けずにいた。

俺は、一歩前に出ると艦長の方を向いた。

「艦長、転送の許可をください」

「え？」

「君は正気か？」

「フェン君、なにを？」

俺がそう言うと、周りが唾然とした視線を向けてくる。

「今はあの程度で済んでいますけど、コレ以上ジュエルシードを暴走させたら……」

俺は画面に指をさしながら言う。

「海鳴市にも被害が及ぶ、一般住民に被害が及ぶ事は防がねばなりません」

「しかし……」

「無茶なのは分かっている。しかし時間はもう無い」

まだ覚えたての飛行魔法だから不安ではあるが、町に被害を出す訳にもいかんだろう。

それにあの場所にいる“民間人”の少女もな。

「職員を危険に晒したくないなら俺だけでも転送を」

「無理だ。いくらなんでも許可できかねる。何より非効率だ」

クロノが俺を止めようとした。

まあベターな結果が最善だって事なんだろうが、俺はその前に最善を尽くす主義だ。

「執務官、俺は元USNの軍人だ」

俺の言ってる意味が分からないのか、みんな黙っている。

「軍人が任務を遂行させるには、出来ること出来ないことを見極めることが出来るかが鍵だ…」

今回、あの状況を見てまだ対処可能と判断した」

「だが危険だ！」

「危険は百も承知。だがあの子は一般人の魔導師だ。一般人を守るのは軍人の務めでもある」

軍人モードの俺は凜とした声で言葉を紡ぐ。

「リンディ提督」

「なんですか？フェン君」

「管理局は、一般人を見捨てるような組織なのですか？」

俺の言った言葉に沈黙するブリッジの面々。

そんな中リンディ提督だけ口を開いた。

「仕方ないわね。貴方達を現場に転送します。ただ優劣からいって

第一にジュエルシードの確保、第二がフェイト・テスタロッサの保護、もしくは説得を行ってください。」

そう言うと、ほんの少しだけ笑みを浮かべる彼女。

「これでいいかしらフェン君？」

「感謝します。行くぞなのはさん、ユーノ」

「は、はい！」

それだけを聞いた俺は、時間が惜しいとブリッジから走りさった。まあおおよそあの場で俺がそう言う事は解ってたんだろうなあ。

俺の場合よっぽどの事が無い限り死なないだろうしな。

とりあえず、被害が広がる前に自然災害を食い止めに行きますか。

現場に着くと俺は念話を使い、フェイト達に呼びかけた。

「（お二人さん、聞える？）」

「（君は?!）」

「（な、お前何しに来た!？）」

何しに来たとは手厳しいな。

噛みついてこようとしたアルフをいなしつつ念話を続ける。

「（詳しい説明は省くがジュエルシードが暴走を始めてる。止めないと幾ら洋上でも拙いことになる。一時休戦って事で手伝って、隙を見てジュエルシードかっぱらってくれてもいい）」

「（おいおい！かっぱらってっ）」

「（とりあえず今は封印が先。町に到達したら一般人に迷惑をかけるしまう）」

優先事項はジュエルシードの封印処置、戦闘では無いのだ。

まあ取れるもんなら取ってみなっただけか？

「（わかった。どうするの？）」

「（たつまきを消す）」

そうやって俺は全員の前に出た。

「全員、出来れば一番強力な障壁をはってくれ。ヴィズ、術式ツイングロム」

『了解、ツイングロム、スタンバイ』

俺の両肩に砲門が現れる、あの後さらに改良したグロムの発展型、それがツイングロム。

人外化したからか更に魔力が増えたからな。応急的じゃ足りなかった。

なので予備パーツ使って単純に砲身を増やしてみました。

まあ簡単に言えば、両肩に二つのグロム用バスを乗せられる様になっただけなんだがな。

これよりさらに上位には、ガルヴァドスを併用したツイングロム・フルバーストもある。

それはさて置き、展開した砲身を竜巻が渦巻いている方に向ける俺。二つの砲門内を環状魔法陣が幾重にも渦巻き、かなりの魔力が収束していった。

『MTS - 40からも魔力充填完了、いけます』

「ツイングロム、フォックス4」

俺の両肩の砲門から、思いつきり魔力がチャージされた白い極光が放たれた。

もともとバカみたいに威力のあったグロムを二つ並列に使うのである。

おまけにアインのお陰で術式に会った無駄を省くことが出来た。

ズズズズズ

以前とは明らかに威力が違う砲撃魔法が、六つの竜巻を飲み込みんでゆく。

そして最後に海面に着弾、衝撃波と共に竜巻全てを消し去った。

「……よし、今の内」

「……」

やりすぎちまったかな？しかしデカイ奴使つと消耗がすごいねえ。

MTS - 40使ったって言うのに、かなり持っていかれた。

……後で誰かから吸い取らせて貰おうかな。

「……おい、封印」

「う、ウン」

「ワ、分かった」

二人は俺に言われるままに、空中に浮かぶジュエルシードに視線を落とす。

そして互いに視線を向ける。

「半分こ…でいい？」

なのはがそうテストロッサ嬢に問う。

彼女はそう問われると頷きでもって返した。

「「封印」」

こうしてここにあるジュエルシードは全て封印されたのであった。

さてと あれ？この後まだ何かあった様な？なんだったっけ？

記憶が錆びついてやがる所為か思い出せないぜ。

とりあえず俺も封印地点にむかうおうとした その瞬間。

『マスター！転移と魔力反応、次元跳躍攻撃来ます！』

「ッ！二人ともはなれる！」

天空からの雷の一撃がなのはとフェイトの間に落ちた。

二人はかるうじて避けていたのだが

『再度魔力量増大を確認、落下位置はテストロッサ嬢』

今度は紫の魔力の雷がフェイトに向けて落下するらしい。

「くそ、多重シールド展開、ジェットパック出力最大！」

俺は落ちてくる雷とフェイトとの間に割り込んだ。

『シールド展開間に合いません！』

「くそ……」

ドウオオオン！！バリン！

「あああああ！！！！」

シールドは間に合わず、雷がそのまま直撃、俺のアーマーの一部が乖離した。

流石に威力S+の砲撃は装甲シールドだけで防ぐことは出来ない。魔力は吸収したが、衝撃で弾き飛ばされ海上へと落下していく。

「……フェン（君）！！！！」

「（俺はいい、ジュエルシールド回収を優先しろ）」

攻撃をもろに浴びた所為で、部分的に壊れたのか身体を動かす事が出来ない。

そのまま俺は眼下に広がる海に落下し、暗い海の中に沈んでいった。

「（いやはや、真っ暗だなあ）」

『（一応大陸棚ですから、深海にまでは降り無いでしょう）』

「（・・・海流で流されなきやいいんだが）」

見ればかなり沈んだらしく、着底したが辺りは真っ暗。

仕方なしにライト代わりに光るスフィアを作って出した所

「・・・リュウグウノツカイ？」

『地震でも起きる前触れでしょうか？』

目の前を悠然と泳ぐ大きなお魚さんと対面しました。

あゝあ、水族館みたいに一杯入ればまだ面白かったんだがな。

暗いから遠くまで見れないし、何よりつまらん。

「念話もジュエルシードの残留魔力の所為かつながらんな」

『せめて無事の報告くらいしたいですね』

この後、ヴィズの修復ナノマシンで機能が回復した俺が浮かび上がった時。

辺りには誰もおらず、位置的にはかなり離れてしまったらしかった。なんかおいてきぼりを喰らったみたいで、少しばかり寂しかったです。

そして無事アースラに回収されたのであったが、待っていたのは艦長からのお説教でした。

なんか自分の命も大事にしる云々の話が多かった気がする。

とりあえずひたすら土下座をすることで許して貰えた。

医務室で検査を受けさせられそうになったが、ひたすら拒みなんとか回避。

まったく人外の身体は楽じゃないですなコリヤ。

「はあ貧乏くじだったなあ」

『きんぐボンビーがついてる件』

「桃鉄と申したか？」

いや貧乏神とかついてたらマジで洒落にならないから。それだけは勘弁してほしいと思ったのであった。

「長い話した」

「長い話した」

妄想戦記

「ただいまあ」

「あ、フェン君おかえり」

「おかえり」

久しぶりに八神家に帰ってまいりました。
なんかこの間俺が雷喰らった時にアースラも攻撃喰らったらしい。
なので修理が終わるまで探索が出来ないので休みを貰ったのだ。

「おろ？リインの服が・・・」

「ふっふっくん、私がチヨイスしたんや。どうや」

「すげえ似合う。いいセンスだ」

『流石デザイナーはやて、センスが良いです』

どうやら俺がいない間にリインフォースの服を買いそろえたようだ。
褒められた事が嬉しかったのかテレテレと照れている。

『しかし、彼女はスタイルが良いですから何でも似合いますね』

「ほんまや、おまけにいいモノも持つてるのがええなあ」

「はやて、目線」

「おっと、つい癖で」

おっぱい魔人の称号は、この世界のはやてにも確実に受け継がれて
いる様です。

リインは少し怯えた表情ではやてから離れた。

「ま、玄関で話してるのもアレやし、リビングにでも行こか？」

「ならお茶いれるか。後、煎餅」

「それなら私が用意しよう」

『お、何時の間にかリインがお手伝い出来る様になってる!』

「じゃあ頼む」

「任された」

ふむ、俺がいない間にだいぶ慣れたようだ。

最初は興味があるモノを恐る恐る遠目から見てただけだったのにな。
今じゃ普通に煎餅片手にテレビつけてワイドショー見てやがる。

・・・順応し早過ぎじゃね？

「しかし、そう言えば・・・守護騎士たちはどうしようか？」

「ああ、そう言えば四人いるんやっけ？」

『騎士たちがいましたねそう言えば』

「・・・忘れてた」

「「え？」」

「・・・ジョーダンです」

なん・・・だと・・・？

『り、リインが冗談を言った!？』

「成長したんだなリイン」

「なんやか最初に比べたら随分と人間味がましたんやなあ」

「・・・てへ」

これまた可愛くテレテレと頬を染めるリイン。

知らん人にコレが闇の書の管制人格ですって言っても通じないだろうなあ。

「で、守護騎士たちは、はやての誕生日に出てくるの？」

「恐らくはな」

『きつと驚く事でしょうね。あなたが居る所を見たら』

「色々と説明しなければならぬだろう」

誕生日まであと一カ月もあるな。

お、てことは・・・。

「リイン、騎士たちのデータって解るか？」

「ああ、だが何故だ？」

「今の内に服を買っておいてやろう」

「あ、ええなソレ！」

『確かに一度に大勢の服を買いに行くのは大変ですしね』

「だろう？スリーサイズが解るなら買いに行けるだろ」

とりあえず、俺とかが暇になった時に買いモノにいこうと言っ話をした。

そして、まったりとした時間を過ごす。

「ああ、平和だなあ」

「その通りだな」

「なんかこうやって特に話さんと一緒にいるだけでもええもんやな

あ

「「賛成」」

春のぽかぽか陽気がとても眠気を誘います。

「ところでリイン。次元転移系の術式とか解る？」

「ああ、解る」

「後で教えて、どら焼きあげるからさ」

帰ってくる時に購入しておいたどら焼きをちらつかせてみる。どら焼きが揺れるたびに視線が右往左往しているのが解った。

「・・・いいぞ」

「他にも色々教えてくれたら、どら焼き増量キャンペーン」

「何が知りたい？伊達に蒐集していた訳では無いぞ」

凄く透き通った声で了承して貰えました。

よし、コレでまた魔法を増やせるぜ。

「まあそれは後でいいけど・・・ふあ」

「眠たいわ」

マジで眠たいので、みんなでお昼寝する事にしました。

そう言う訳で掛け布団と枕を用意してレッツお昼寝となりましたと
な。

S i d e ????

最近ロツテの様子がおかしい。八神家の監視の仕事を進んで引き受けている。

以前は面倒臭がってやりたがらなかったというのに・・・最近では妙に笑みを見せる様になった。

そして、監視が出来ないと落ち着かないみたいにならわしている。一体何があったのだろうか？見た所洗脳の類はされてはいない。だけど、ともうれしそうに監視に出て行くその姿は異常なのよ。

「それじゃ、今日も監視に行つてきます」

「・・・ええ、行つてらっしゃい」

今日も今日とて鼻歌でも歌いそうなくらいやたらと機嫌がいいわ。一体どういう事なのか調べなくてはならない。

お父様の計画に何かあつてはならないのだから・・・。

「さて・・・」

そう言う訳で、私は彼女を尾行する事にした。

彼女と同じく目立たぬよう猫に姿を変えて追跡する。

しかし尾行されているのに気がつかないなんて・・・何時もなら気が付くのに。

「やっぱりおかしいわ」

そんな事を考えつつも尾行を続行する。

セーフハウスを出てから、公園を跨ぎ商店街を抜けて行く間は特に問題無し。

住宅街に差し掛かったから、やはり問題は八神家・・・。

私は彼女に気がつかれる事無く、静かに尾行を続ける。
住宅街に入りと彼女はまるでスキップをしているかのように足取りが軽い。

猫の姿なのにとてもうれしそうなのが伝わってくるほどだ。

「~~~~」

鼻歌まで歌っちゃって・・・通りすがりの人が振り返ってるわよ？
何注目集めてるのよ。猫に姿を変えている意味が無いじゃ無い。
しかしそんな事はお構いなしに進んでいくロツテ。

気が付けばもう八神家の前まで来ていた。

普段ならば魔法を使うか、塀の上によじ登り中の様子をうかがうか
する。

しかし、最近あの魔導師が住みついたので前者の方法は使えない。
なので必然的に遠くからうかがう方法を取るのだが・・・。

「・・・なんで普通に庭に入っていくの？」

勝手知ったる何とやらみたいな感じにスツと自然に庭に入っていく
ロツテ。

あまりに自然すぎて呆然としてみると、塀の陰に入って姿を見失っ
た。

慌てて私も追いかけて、八神家の庭に入ってしまった。

（何処に行ったのかしら？）

庭と言っても普通の家にあるとても小さな庭。

隠れられる場所なんて無い筈なのに、見ただけでは見つける事が出

来ない。

家の下に潜ったのかしらと、通風口を除きに行こうとしたその時

「猫さん探した・・・見つけたよ」

「!?!?!?!」

いきなり誰かに抱きかかえられた!?!?そんな気配を感じないなんて!?!?

「全く、遊ぶのは良いけど・・・その前に毛づくろいしないかね」

「(は?何を言って・・・)」

どうやら別の誰かに間違えられているらしい。

身体ごと抱きかかえられているので見る事が出来ない。

一体どこのどいつよ!?!?この!?!?こうなったら

「フーツ!(放しなさい!引っ掻くわよ!噛むわよ!)」

思いつきり威嚇する。つくづく猫の姿なのが悔やまれる。

魔法を使えたらすぐさま叩きのめしてやるのに・・・。

だが、計画の事がある以上、変身を解く事が出来ない!

「ふー!フシャー!?!」

威嚇を続ける。しかし、相手は威嚇に動じないどころか

「^レ機嫌斜めか。ならコレでどうだ」

コリコリ、ナデナデ

「ニヤツ!?!(へワツ!?!?)」

すつごく慣れた手つきで撫でられた。

「あれ？ちよつと毛並みが違う？・・・そんな訳無いか。ヨシヨシ」
「フニヤ・・・（喉と首の後ろ、ソレと耳まで・・・）」

なに・・・これ・・・？はっ！まさか接触による精神汚染？！
だとしたらすぐに抜けださなきゃ

！

「ナー！」 ジタバタ

「こーら、暴れないの、毛づくろい出来ないでしょ？」

「ニヤウン?!」

優しく頭を撫でられた。しかも片方の手では既にブラシがスタンバイされている。

私が撫でられた時に出来た隙を狙い、ブラシが私にかけられた

「さっさと・・・」

「ニヤッ！ニヤ・・・」

シャー、シャー ブラシかける音。

ああ、自分でするのはまた違う毛づくろいの感覚。

ブラッシングだけじゃなくて、適度にマッサージまで・・・。

「あらあら、そんなに気持ちいい？」

「ナー・・・」

気持ちが良い・・・適度な力加減、掌の温もり。

こんなの・・・こんなの

「次は反対側ねー」
「にう〜・・・」

逆らえられるわけがない。

あまりの気持ちよさに、私は身を任せてしまっ。

見れば毛づくろいをしてくれているのは、監視対象の少年。
でも、そんな事よりも

「ふに〜（気持ち・・・いい）」

「寝てもいいよ。その間にやっておくから」

そんな、眠たくなるけど勿体無い。

春の暖かさと、この気持ちよさを感じられなくなっちゃっ。

だけど、もう眠くなっちゃった　　はあう。

うっん、本当は監視対象に接触するのは不味いんだけど・・・。

「やっぱり良い毛並みだ。きっと良いとこのお嬢さんかもな・・・」

・・・少しくらい、この気持ちよさを楽しんでも良いわよね？

「どうかな、いたくない？」

「なー・・・（問題無し〜）」

何だかもうどうでもよくなって、この気持ちよさに身を任せている
と

「ナアー！・・・にゃんツ！？（もう何で探しに・・・アリア！？）」

「・・・ナアオン？（ロツテ？）」

「ん？同じ猫さんがもう一匹？」

家の陰から、ロツテがやって来て、私の姿を見て目を丸くしていた。

「（ちょっと！何でいるの！）」

「（貴方の態度がおかしかったからつけさせて貰ったの）」

「（そんな！？）」

「（まさかこんな所で骨抜きに）」

「はい、今度は喉もね」

「ニア〜」

思わず反応する私。

「（……………）」

そして流れる沈黙。どうやら私も手遅れらしい。

「はい、お疲れさん。こんどはそっちの猫さん、ブラッシングやる
？」

「ニヤッ！」

彼のその言葉に威勢良く反応するロツテ。

そして私を押しつけるかのようにしてわりこんでくる。

「（ちょっとロツテ！押さないでよー！）」

「（早く退いてアリア、次私！）」

「はいはい、とりあいしないの。良い子だから」

「「ふ、ふにー」」

この後もしばらく撫でられ、そのまま寝入ってしまった私たち。

なんか問題有りそうだけど・・・まあいいわ。

Side out

「あら？2匹とも寝ちゃった」

『可愛い寝顔ですね？』

昼寝から起きて庭に出たら猫さんが来ていた。

しかも双子だったらしく2匹も！コレは撫で無いわけにはいかない

撫でたり遊んだりブラッシングしてあげたりしてあげた。

ああ、いいなあ猫欲しい。

「フエン、おやつだそうだ」

「ああ、解ったリイン」

「おや？その猫達・・・」

「どうかしたか？」

「・・・いや、随分と幸せそうにしているな？何をしたんだ？」

「何って、撫でてあげただけだよ」

『・・・ナデポ』

「違っって」

とりあえず猫さん達を起せないのをおやつは後にした。

さて、平和な一時はすぐに過ぎ去るものである。

「おうおう、スゲー綺麗なバトルだな」

『非殺傷ですからね。幾らハデでも血が飛ばない所が良いです』

「アンタたちどうい生活してたんだい？」

『「戦争のある世界出身ですが何か？」』

「いや、うん、解った」

現在臨海公園にて、フェイトとなのはの本気の勝負が行われています。

俺達は観客と言つか介添え人？まあ見届ける為にココに居る。

「しかし、フェイトも本気を出すと凄いな」

「・・・まあね。だけど怪我也癒えていないだろうに無理して」

『ソレであの動きですか？と言つか怪我？』

「あの鬼ババアにお仕置きされた怪我さ！あいつはフェイトを鞭で叩きやがった！」

『うわあ、痛いですねそれは』

お隣にいるアルフは犬歯をむき出しにして怒りをあらわにしている。ちなみにこのヒトは、そのプレシアの横暴に耐えかねて抗議したらしい。

そしたら危うく殺されかけたので、そのまま命からがら転移したんだそう。

「はあ、それにしても凄いアクロバティックな空戦」

『あそこまで綺麗に動けると曲芸飛行の領域ですね』

フェイトは高速移動を行ってバルディッシュで切りかかりたりしている。

なのはもシューターでけん制し、寄せ付けない様距離を取って戦っていた。

どちらもこれまで培ってきた技術をぶつけあっているのである。

「俺も弾幕は張れるんだが・・・」

『綺麗に誘導してますね彼女。マスターも練習してみたらどうですか？』

「体質でムリだ」

「体質って、そんな体質有るのかい？」

お、杖で鏢競り合い発生・・・杖でも鏢競り合いって言うんだろっか？

「小さい頃からな。幾らやっても魔力弾を誘導出来なかった」

『原因は不明なんですが、設置術式とかの起動は出きるんですよ』

「ふーん、変わってるねえ」

「俺もそう思う、誘導さえ出来れば術式マイクロミサイルが使えるのに」

『マクロス張りの誘導弾幕ですね？解ります』

「?????」

どうやら今のは解らなかつたらしいな。

まあアルフがジャパニメーション知っていたらソレはソレで驚くんだけだ。

「とりあえず、準備しておくかな」

「あんた何かするつもりかい？」

「あいつ等の邪魔はしないから睨むな」

『むしろ今の闘いが終わってからの為ですからね』

「どういう事だい？」

俺はジェットパックを使い浮かび上がりながら説明する。
くそ、まだ制御が安定しないな。もっとマルチタスクで練習しとかないと。

「どうせプレシアも見ているだろう。もしもココでフェイトが負けたらどうすると思う？」

「あー！」

「まあそう言う事、せつかく二人が本気を出しあう勝負に水を差すのは無粋ってモンだ」

『と言つても、あの場所には設置術式なんておいても意味がありません』

「だからギリギリまで近づいて、防御の準備をするしかないって訳」

かなり激しく動き回っているからなあ、あいつ等。

術式設置しておいても、ウマイ事効果範囲に居てくれなきゃ意味が無い。

「……あたしも行くよ」

「それならいざという時手伝え」

「わかった」

.....

.....

.....

「コレが私の全力全開！受けてみて！スターライト・ブレイカアア

ア!!!」

闘いも終盤、バインドにより拘束されたフェイトに極太収束魔法が迫る。

「……えげつねえな」

『あれが殺傷設定だったら影も残りませんね』

「フェ、フェイトーッ!?」

いや相変わらずスゲエわアレ。

何処をどうすればあそこまでですさまじい砲撃を考え付くんだろうかね?

多重プロテクションを何層張れば耐えられるかな?

流星は天災……いやさ天才だな。術式後で貰ったところ。

「さて、そろそろ準備しところかね」

『彼女たちの頭上に防御結界を張ります。アルフさんサポートお願いします』

「あ、ああ、解った」

なのは達を挟んで反対側に移動するアルフ。

まあ一応俺達だけでも防げるんだが、手伝ってくれらしいからな。その申し出を無碍には出来まいて。

まあ俺はレアスキルがあるから攻撃受けても平気なんだがね。

『攻撃探知！来ます』

「（アルフさん！来る！）」

「（あいよ！）」

だが、自体は予想外だった。攻撃は確かに来た。なのは達を狙う怒りの雷が。

『また来ます・・・って今度はこっち！？』

「何！アツ　！？」

「（ちよつとフェン！？）」

バツガアアアアアッ！！！！

何故か俺を狙ってもう一つ雷が落された。

それを喰らってまたもやビリビリを体感する俺。

イジメか？イジメなのかこのヤロウ。

「ビツクリした・・・まったく、俺じゃ無かったら死んでるぞ・・・」

『・・・ふう、ジェットパックだけ何とか持ちこたえた様です』

どうやら殺傷設定だったようだ。

BAのいたる所が破壊されてしまいバチバチいつている。

しかしまた雷を受けるとは・・・どこかデジャブを感じてしまう。

『修復用ナノマシン展開、修復開始』

飛行術式だけでも維持できたのは幸いだった。

そつでなかったら今頃海の中に叩きつけられてるよ。

そしたら2〜3カ所くらいまた骨折だろうな。すぐに治るけど・・・。

「フエン君！無事？」

「一応生きてるよ。そっちは・・・って言わなくても良いみたいだな」

「うん、なんとかあったよ」

『しかしお姫様だったことは・・・なのは、恐ろしい子!!』

見れば魔力の使い過ぎで気絶しているテストロツサ嬢をなのはがだっこしている。

まあ背中には担げない訳だし、必然的にこうなるわなあ。

「あたしが変わるよ」

「うん、ありがとう」

担ぎ手がアルフに移った。しかしまあプレシアの攻撃を良く防げたな俺達。

まあ最初の一回だけだったけどな。まさか俺が狙われるとは思わなんだ。

「そっちも無事でよかったな」

「だけどフエン君・・・」

「ああ、これは見た目だけだ。中まで届いて無いから」

ホントはウソ、滅茶苦茶貫通してます。

魔力吸収体質だから良かったけど、それで無かった死んでるぞ。

下手に怪我してるとか言っと、医務室に送られるだろうからそれは不味い。

魔法生命体と化している身体のことばれてしまっ。

「だが 飛ぶのが辛い」

「フエン、肩かそうか？」

「頼めるか？ユーノ」

「ああ、僕は今回何もしてないからね」

そう言えばコイツ防御魔法得意だったけ。

・・・ユーノにもサポート頼んでおけばよかったな。

まあ、なのはが戦っているのを見るのに必死だったみたいだから？
ワザと声かけずにそっとしといてあげただけだね。

「一度戻るぞ・・・また攻撃されたらかなわん」

「・・・わかった」

まあその心配は薄いだろうけど、用心に越したことは無い。

原作じゃ一発しか撃たなかったくせに今回3発も雷を落したのだ。

多少彼女の身体の調子がいいのかも知れないな。

まあ憶測を立てても仕方が無いので、とりあえずアースラへと帰還した。

「ああ、もうすぐ終盤だな」

「ああ、もうすぐ終盤だな」

妄想戦記

アースラへと帰還し、気絶しているフェイトを医務室に送り届けた後、

俺は少しばかり模擬戦室を貸してさせて貰っていた。

流石はSランク魔導師、あの殺傷設定の次元跳躍魔法はかなり強かった。

吸い取ったは良いモノの、消化不良の様に身体に貯まってしまっている。

少しでも発散しないと、体調が悪くなりそうなのだ。

「うーん、胸がジクジクするぞ」

『魔力過多の症状ですね。かなり耐性がついたと言っても、一応まだ生身ですから』

「やはり限界が出るか・・・」

まあ今回は吐血しなかったからよかったぜ。

半魔法生命体になっているお陰か身体がだいぶ魔力に慣れたらしい。

それに血を吐くと結構苦しいからな。コレ以上は吐きたくない。

「う……ん？クロ……ハラOWN執務官？」

「クロノでいい。堅苦しい呼ばれ方はちょっとね」

俺が通路を歩いてしていると、反対側からクロノが歩いて来た。どうやら自室の戻る帰りだったらしい。

「クロノは休憩か？」

「いや情報の分類と書類整理さ。今回の件についてはかなり複雑だからね」

「なるほど」

と言っても彼の場合自室に戻るのには寝る時か書類整理する時しか無いらしいけどね。

情報元はエイミーさんだから間違いは無い筈。

「何なら手伝おうか？」

俺はこの時、軽い気持ちでそう言った。

彼は堅物だから、管理局の書類などが絡む以上断ると思ったからだ。しかし答えは予想に反して

「ソレはありがたいな。君と話をしてみたかったし」

あれー？

Sideクロノ

何時ものように部屋にて書類作業を行う僕。
だが今日はちょっとしたお客さんが来ていた。

「じゃ、どの書類を整理すれば良い？」

「とりあえずはこの事件の現在解っているあらましまでで良い」

「項目別に分けておくか？」

「ああ、頼む」

フエン・ラーダー、次元漂流者にして齡7歳で軍隊にいた経験がある子供。

自分よりもはるかに年下なのだが、彼の持つ大人びた雰囲気からついつい忘れてしまう。

最初の出会いは、ちょっと最悪だった。最悪なのにちよつとと言うのもおかしいか。

まあソレも無理は無い。何せ僕は出会いがしらに彼に撃ち落とされたのだから。

無論フレンドリーファイアだったと素直に認め、ひたすら謝られたのは記憶に新しい。

この世界でいうドゲザだったか？あの謝り方はすさまじく相手が哀れに見える。

ソレを目の前でやられたら許さないと言う訳にも行かなかった。

「この情報は・・・検索魔法起動」

『アタラクシア』

その問題の彼は、今僕の部屋で書類整理の手伝いをしている。重要な書類などでは無くて、今回の事件の纏めの様なものだ。

彼は目の前で魔法を使い、凄く速さで情報を整理していく。

「・・・便利な魔法だな」

「俺も部隊を指揮した経験がある。書類というか事務はお手の物だ」

マルチタスクとの併用で出来るやり方だ。僕には真似できそうもない。

出来なくはないが、ココまで早くて確に行うのは難しいだろう。

僕も自分の部屋に備え付けられているコンソールを使い書類整理に没頭する。

「そう言えば君はUSNで軍人だったらしいな？」

「ああ、しがない隊長風情をやらせて貰ってたよ」

僕たちは仕事をする傍ら、マルチタスクを開き会話を行う。

「こちらの情報に、ある作戦で君は一人で500以上の無人機を破壊したってあるが」

「正確じゃないな。正確には500機くらいの無人機と無人砲台を破壊しただ」

「・・・本当だったのか」

てつきりそこは改ざんされた情報だと思っていたが・・・。

「旧式タイプばかりだったが、中にはカスタムされたヤツもあってな？」

「破壊するのが大変だったのか？」

「そう言う事だ。まあ最初に半数以上を広域殲滅魔法で薙ぎ払ってからだっただけだな」

数だけは多かったよと話す彼を見て、僕は少しだけ次元が違うと思っってしまった。

今の僕でもそれだけの数を捌く事は出来ない。ましてや彼と同じ年齢だったら……。

「どうした？手が止まっているぞ」

「ん？あ、ああ……」

どうやら少し手が止まっていたらしい。

彼に指摘されて僕は作業を再開した。

どうやら少しだけ、彼の力に嫉妬したらしい。

恐ろしく強力なちからを持つ彼の事を……。

考えても見て欲しい。魔導師の子供たちは早熟と言われているとはいえ、

わずか7歳の子供が戦場に出られると思うだろうか？

幾らなんでもそれは狂っている。

戦争を経験したことは無い僕だが、任務として闘いをした事はある。

初めて魔法で人を倒した時、自らの手が震えた事もあるのだ。

殺した訳では無い、ただ自らの持つ破壊の力に驚いたのである。

そう思うと、目の前の少年は異常な程の力を持っている。

もしも……もしも、それが僕達に向けられたりしたら……。

「……ロノ、クロノ、どうした？急に黙り込んで？」

「ああ……いや、何でも無い」

「ふむ」

言えない、ほんの少しだけでも、彼の事を疑い、更には

バケモノ

と、思ってしまったなんて。

「ほら」「コト

「ん？」

「コーヒーだ。甘さ控えめのな」

見れば机には湯気を立てるコップが置かれている。
どうやら彼が入れてくれたらしい。

「頂こう」

「ああ、気にいつているコーヒーだ。飲むといい」

僕は彼にすすめられるがまま、その液体を口にする。
次の瞬間、信じられない味が口いっぱいに広がった。

苦い様な・・・というか苦みしかない上、風味も糞もあったモン
じゃ無い。

泥の様な味と表現するのがいちばんであろう。

「うぐ、ゲホゲホ！な、何だコレは！」

「くくく、目は覚めるだろう？USNの海軍式コーヒーってヤツは」

見れば悪戯を成功させたことに口を歪めている悪ガキが目の前にいた。

どうやら彼に悪戯されたらしい。

「俺が元いた古巣でよく出た味さ。少し格納領域にとってあったから入れてみた」

「……出来ればもう飲みたくない味だな」

「最初はそう思っただろう？だが慣れて見るとむしろコレが無いと……」

「……ちよつと理解したくない領域だと思った。」

「ま、執務官殿にはきつかったようだな。ホラ」

彼はそう言つと、もう一つコップを差し出してきた。中に入っているのは、さつきと同じく黒い液体。

「……」

「安心しろ、今度は普通のコーヒーだ」

そう言われると若干匂いも違う。

何と言うか芳醇な香りとでも言えば良いのだろうか？

僕は恐る恐るその液体に口をつけてみた。

「……うまいな」

「だろう？このウマイコーヒーは一袋およそ500円で買えるのだ」「なかなかリーズナブルだな」

確かこの世界だとコーヒー豆のレートから考えたら中くらいだろう。だが、この味はかなり美味しい部類に入ると思う。

「しかし、随分と君は大人じみてるな」

「そうか？」

「ああ、普通7歳でコーヒーをブラックで飲む奴はいないと思うぞ」
「少し前はダメだったんだがな。味覚も変化しているらしい」

部屋にはコーヒーの香りとソレを飲む音だけが響く。

「で、何が聞きたいんだ？クロノ」

「ブツ！げほげほ・・・」

「っと、危ないな」

唐突に言われた言葉に驚き、思わず噴き出しそうになった。
すこしばかり気管支に入ったのか苦しい。

「ほれ、落ちつけ」

「けほ。な、なにを突然」

「さつきからずっとチラチラ見られてればな？大体予想がつく」

「・・・」

「なに、俺の事をバケモノとか思ったんだろう？」

「・・・ツ！違う！・・・」

何故？本当に一瞬しか考えていなかった事が解った！？

彼は人の心でも読めるとでも言うのか？

目の前にいる少年が得体のしれないモノに見えてくる・・・。

「気にするな。そう言った目は慣れている」

「・・・すまん」

「ほづ？謝ると言う事はやはり考えていたと？」

「あ、いや！？」

「・・・」
「冗談だ。本当に慣れているからな」

何と言えば良いのか解らないが、何故そうも平然としていられる？

「だが、どうして解った？なんで平然としていられる？」

「訓練兵だった頃に同じ目を何度も見た。自分が異質なのも理解している」

「だからって、そんなの！」

何故そこまで自分を保てるんだ？

「はっは、言わせたいヤツには言わせればいい。俺は俺だし、それに俺自身は自分のことを人間だと思っている。今の家族に

もそう言われたしな」

「……」

「そう暗くなるな。本人は気にして無いんだぞ？」

「いや……本当にすまない」

僕は頭を下げる事しか出来なかった。

本人は気にしていないと言っても、彼はそういった目で見られたことがあるのだ。

慣れたと言う事は、最初は気にしていたと言ってもいいのだろう。

「すまない」

「……そう思うのなら、俺の事は名前で呼んでくれないか？」

えっ……と思わず彼を見る。

「君とかで呼ばれていると、人間扱いされていない様な気がしてな」

「……解った。リーダーでいいか？」

「いやフェンでいいぞクロノ」

どうやら知らず知らずのうちに、僕は彼の事を少しだけ遠ざけていたらしい。

だがこうして話してみても理解した。彼はとてもお人よしだと。

「もうすぐこの事件も終わりだな」

「そうだな。そして僕は事件の書類整理が待っている」

「くく、頑張れ。執務官の仕事だろう？」

「フェンみたいな優秀な補佐官でもほしいさ」

「・・・それエイミーさんに聞かれたら殺されるぞ？」

「なんでだ？」

「ダメだコイツ、早く何とかしないと・・・」

この後しばらく書類整理を手伝って貰い。そのまま彼とはわかれた。

Side out

はあようやく終わったぜ。

だいぶ時間が経ったからか、身体の中の魔力がだいぶ安定した。

ふふ、しかしクロノ君は優しいヤツだったんだなあ。

ああやって自分がしてしまった事を素直に認めて謝る事が出来るヤツは良いヤツだ。

面白い事が解ったな。それに名前呼び合える仲間になれた事だし良ししよう。

「しつつかし、自分でも思うがバケモノだな」

『やろうと思えば人間から直接魔力を吸いだせますからね』

「そんな事はしないけどな」

『当然です。リンカーコアが無い人間にやったらどうなる事か』

むう、やっぱりバケモノだなウン。

でもまあ、そこら辺はもう気にしてないしな。

「魔法生命体になった辺りで、もうどうでもよくなったからな」

『もうどうにでもなれって感じですよね。ハッ！今度は私が進化の予感！』

「バイオハザードの如く、自らの肉体を持って動くヴィズ」

『それなんてホラー？』

「大丈夫、撃たれてもすぐ復活出来る。追跡者の如く」

『それ最後はロケランで粉碎フラグですね？解ります』

大丈夫、お前なら破壊されても復活すると思う。

それこそ闇の書の無限再生の如くにな？

「しかし、そろそろヴィズに改造をすべきかな？」

『そうですね。科学的な機能はともかく魔法的な機能の強化をしたいと思います』

「今のミッド式の術式はなんとか使える程度だしな」

流石に30年のブランクは長い、技術の進歩も進んでいる。

転送魔法に転送先を確認する機能が付加されたなんて知らなかったぜ。

今までは別々の魔法として発動してたからな。

『それに今のままだと術式に無駄が多い気がします。リインと協力すれば』

「なんとかなるかもな」

そう、俺の魔法は総じて燃費が非常に悪い。
そろそろ省エネタイプも考えなくてはなるまいて。

『変えるとしたら、やはり装甲シールドとか？』

「だろうな。コイツが一番魔力消費が大きい」

『しかし、術式に関してはある意味専門外ですしねえ』

「作った俺がいう事じゃないが、どうしよう」

俺は魔導師ではあるが、術式開発の専門家じゃ無い。
ソフトよりハード面における製作の方が得意なのだ。

「やはりリインにたのむしかないか」

『今度は翠屋のシュークリームとかでどうでしょう？』

「彼女ならソレで応じてくれるだろう」

何気に甘いモノ好きなんだよなあ。

しかも魔法生命体だから、太るとかそういった心配も無い。

世の女性方にとってはかなり羨ましいのではないだろうか？

「ま、そういったのはココでは出来ないな」

『ですね。とりあえず運動でもしに行ったらどうでしょうか』

「だな、魔力をもう少し発散したい」

安定はしているけど、なみなみ水を注いだコップ状態みたいなもんだ。
だ。

一応最低レベルに魔力吸収を抑えている。

だがもし後一発分の魔力弾を吸ったら最後、吐血して倒れる事請け
合いだ。

なのでとりあえずアースラの模擬戦室へと足を向けた。

.....

.....

.....

模擬戦室に向かう途中で、ユーノ君と出会った。
今日は原作キャラに遭遇する率が高いなあ。

「おやユーノ、なのはさんと一緒じゃないのか？」

「あ、フェン。なのはは彼女に付き添って医務室さ」

あーそれはそれは・・・男の子は居づらいだろうなあ。
こういう時男の子は肩身が狭いもんである。

「フェンはこれから何処に？」

「模擬戦室、少し身体の中の魔力が多すぎてな。排出しないと体調が悪くなる」

「はは、やり過ぎには気をつけてよ？」

言外にもうすぐ決戦だと言うことを言われてるな。

「ああ、一応元軍人、何処までが限界かはわかっている」

「そう、なら良いけど。そう言えば医療班の人達が呼んでたよ？」

「なに？」

はて？俺は医療班に呼ばれる事なんぞあったか？

「何でも次元跳躍魔法の直撃を受けたんだから検査の一つくらいし

るってさ」

「ふむ、我が家の家訓でな？大事が無い時は医者にはかからないと言っているが、あつて」

「それただ単に行きたくないだけでしょ？行つといたほうが良いと思うよ？」

そうしたいのは山々だ。出来ればこの身体の事を隅々まで調べあげて見たい。

だけどソレすると、今の時期だと死亡フラグになりかねんのだよ。

「まあ体調が悪くなればいくさ・・・そう言えばユーノは防御魔法が得意だったな」

「うん、まあ出来る魔法がそっち方面に特化しているってだけだけどね」

いやいや、特化なんてもんじゃ無いぞ？かなり強力なシールド張れるじゃないか。

おまけにバインドは俺ですら捕まったらヤバいかも知らない。レアスキル使えば逃げられるけどな。

「ならちようど良い、模擬戦室につきあえ」

「え！？いや僕はフェンほど戦えないし・・・」

「何を勘違いしているのかは知らないが、何も戦えと言つ訳じゃ無い。防御術式について色々アドバイスが欲しいだけだ」

「あ、そうなんだ」

「実地でな」

「ちよつ！？」

俺はガシッとユーノ君の服を掴み身体を魔法で強化する。

そしてそのままユーノ君を模擬戦室まで引き摺っていった。

「ちよつと！引き摺らないで！自分で歩けるから」

「遠慮するな」

「え、えんりよなんかじゃなああい！」

うんうん、とても良い声だね！

とりあえず生贄は確保できたから、術式が少しは進歩出来るだろうなあ。

「つて暴れるな。縛るぞ？」

「や、やれるもんならやってみてよ！バインドくらいすぐに抜け出して」

「そう来ると思ってワイヤーを使ってみた」

「・・・なんでそんなの持ってるの？」

「以前は空飛べなかつたからな。その時の名残」

間違つて飛んじやつた時用の空中アンカーなのだ。

ビルとかにひっかけて振り子運動しながらの移動も出来るんだぜ？合金製だから戦車吊るしてもびくともしないくらいだしな。

「・・・逃げられる訳無いじゃん。なにこの理不尽？」

「まあ大人しくついてくればいいさ。痛くはしない・・・多分」

「ねえ？今多分ついていったよね？大丈夫なんだよね？」

「・・・」

「頼むからそこで黙らないでよ！」

なんかギャーギャー行つてたけど、そのまま模擬戦室にゴーしました。

なんじゃかんじゃ行つてたけど協力してくれるユーノ君もやさしいなあ。

そして俺は術式の強化に成功したのであった。

「ああ、もうすぐ終盤だな」（後書き）

ちよつと閑話できな感じで作ってみた。

ああ、文章のダラダラ感がすげえ。

「ふん、傀儡兵か・・・無人機と変わらんな。」

「ふん、傀儡兵か・・・無人機と変わらんな。」

妄想戦記

時の庭園

バラララッ

「・・・傀儡兵撃破」

『動体反応、三時の方向、20m』

「アルアッソー待機、グリーン起動」

うす、皆の集こんちは。

現在俺は時の庭園、リリなの第一期の最終話にきていると言えは良
いか？

「すごいねフェン君。凄く速い」

「なんだかすごくて慣れてるって感じだ」

「俺は無人機相手に良く戦闘していたからな」

『あの手の連中の相手は慣れています』

時の庭園に入ったのは良いんだが、とにかく傀儡兵がうじゃうじゃ

してやがる。

まあ俺はUSNの作戦でこういった連中とはよく戦ったから楽なモンだ。

「セイヤツ！」

『撃破、コレで30体目です』

どうも、傀儡兵は俺の世界の無人機とそっくりだった。

いや外見は異なるんだけど、戦闘時の機動や行動プロトコルがほぼ同じ。

もしかしたら俺の世界の技術と何かしらの接点があるのかもしれない。

「まあ、関係無いか・・・」

「フェン君、どうしたの？」

「何でも無い。急がないとな」

早いとこ奥に進みたい。そしてあのバカ野郎を一発殴りたい。

俺はこの時、自分の存在を否定された彼女の事を思い、脚を進めていた。

少し前、時の庭園の場所が捕捉された。

エイミーさん等アーススタッフの腕前には本当に感服させられる。そして位置を特定出来たので、アースラからすぐに武装局員達が転送された。

何か引つかかる事もあったのだが、コレで事件も終わるなあとこの時思っていた。

だが、プレシアは予想外に強く武装局員達は全滅してしまったのである。

おまけに彼女の目的は伝説の地アルハザードへ行き失われた技術で娘を蘇らせる事だった。

そして、彼女の手によって作り出された“愛娘”の代わりであったフェイト。

この時、たまたまつながっていた通信により、プレシアから全てを話される。そう全て。

彼女自身が娘の代用品であり、人形であったと信じていた母親から言われたのだ。

当然のことながら、彼女の今まで心の支えであった事を根幹から破壊された。

その為フェイト・テスタロッサは呆然自失状態になってしまった。プレシアはフェイトが崩れ落ちるさまには目もくれず、ジュエルシードを暴走させる。

この時に見た彼女の目、俺は故郷にいた敵の生物兵器達を思い出した。

人としての尊厳ばかりか、生物としての尊厳すら踏みにじられた彼ら。

ソレを間近で見た事のある俺にとって、プレシアのした事は怒りを向けたくなる。

だが、解らなく無いワケでもないのだ。

親しい人間を蘇らせる。死んでしまった人間に会いたいと願う事は

誰でもある。

もう会えない人間に、もう一度会いたいと願う事は間違いではないと俺は思う。

俺だって会えるのなら、父上や母上、みんなにまた会いたい。

問題は、彼女は周りに被害を出してまで願いをかなえようとしている事だ。

別に一人でやる分には、死者蘇生だろうが黒魔術だろうが何でもすれば良い。

成功したならいいし、成功しなくても自分はやるべきことはしたと思える事だろう。

何もしないよかはるかにマシだと思う。

だが彼女は周りを振り返り見ない方法を選んできました。

こればかりは眼をつぶる訳にはいかないのだ。

近隣世界を滅ぼしてまで、彼女の夢をかなえさせる事は出来ない。

故に、彼女は殴ってでも止めてやらねばなるまい。

俺のように、ウマイ事次元の狭間に巻き込まれて生還出来る事は稀なのだ。

コレ以上、知り合いが死ぬと言うのは聞きたくない。

そう胸に思いつつ、俺はとりあえず倒れたフェイト嬢の様子を見に行った。

彼女の様子も心配であったからだ。

それにあの目、何もかも諦め絶望し悲しみに染まった目が気に止まったのだ。

まあ俺が声をかける必要は無い。原作でも自己完結で立ち直ってい

たしな。

それでも、俺は見に行かずにはいられなかったのだ。

アースラ医務室に行くと、心を閉ざしたフェイトがベッドに横になつており、

その彼女を涙ぐみながらも抱きしめるアルフがいた。

「アルフ、彼女は大丈夫か？」

「・・・アンタかい。何しに来た？」

「心配だったから見に来た」

生きる気力を失った人間と言うモノは、ことごとく痛ましいモノだ。軍の医療施設でも見た事がある。とくに保護された子供とかの状態がそれだった。

親しい人間が魔法で一瞬にして蒸発してしまい、それでも生き残った子供と・・・。

「何で、何でフェイトが！この子はただアイツに笑って欲しかっただけなのに・・・」

「・・・」

「フェイトはずっと闘ってたんだ。それこそ身を削るような程・・・」

見れば古傷のあとが目立つ。碌な医療魔法も使えなかったのだろう。いや、覚えさせる必要は無かったとプレシアに認識されていたのかもしれない。

所詮は自分の願いをかなえる為の道具として見られていたと言う事だろう。

・・・狂ってやがる。

「・・・それなのに・・・こんな・・・こんなあんまりじゃないか！」

アルフはフェイトを抱きかかえ、そのまま崩れおちた。

彼女からも、もう何もしたくない、諦めたいという感情が伝わってくる。

医務室に虚しく響く嗚咽の声、だがなアルフ？まだ泣く時じゃないぞ。

「・・・俺はもうちょっとしたら時の庭園に行く」

「・・・」

「このままだと、お前らは何もしない。何もできないだろうな」

この時俺はあえて憎まれる事をいう。

俺の言葉何ぞ1割も聞こえていれば良い方だが、何も言わんよりは良い。

「・・・なんだと？」

「このままだと、何も言えないまま終焉となる。解るか？結果はどうだろうと終わるんだ」

そう、この事件でプレシアさんが死のうが逃げようが事件は終わる。

そうになったら、もう何も言う事は出来ない事だろう

「だけど、だけど！」

「俺がどうこう言える立場じゃ無いのは理解している」

「・・・」

「だけどな？知り合いが苦しんでいるの見て放って置けるか？」

少なくとも、彼女たちとは知り合いである。

其方がどうでも俺はそう思っている。

「……あと、そのまま良いから聞いてくれ、フェイト」

俺はフェイトに話し掛ける。いやね？どうも話し聞いてるらしい。さっきから俺が話すことにちょっとだけ反応するのが見て解る。どうやら完全には心を閉じ切っていない様だ。これならまだ望みはある。

「以前言っただと思うが、俺は次元漂流者だ。管理局に協力した時、俺の世界のその後を知った」

「……」

「そしてな？知らされたんだ。俺の世界は消滅している」

「な、あんた……!？」

「どうやら俺は特殊らしくてな？30年の時を越えて現代に来たらしい」

聞こえているのは解っている。何、俺の愚痴みたいなもんだ。迷惑だろうが聞いてもらうぞ。

「知った時はな？絶望したよ。悲しかったよ　　だけど、俺は泣
が出せなかった」

「……」

「その世界では一軍人として生きていた。当然、人も傷つけた事もある」

「……」

「その所為かな。心がな？壊れてしまっていたらしいんだ」

「……」

「だから俺は泣く事が出来なかった。今でもそうそう泣けない……
だが」

しかしまあ、俺は何故こんな所で彼女に話しかけているんだろうか？

「だが俺は生きていたい・・・何でだかわかる？」

「・・・」

「俺の事を家族と呼んでくれた人がいる。友人だと言ってくれた人がいるからだ」

はやてにリイン、ユーノやなのは、クロノ君やエイミィさん、リン
ディ艦長もだ。

結構しりあいや友人が増えたのだ思う。

「そして俺のことを家族だと言ってくれた彼女は言った。“そんな昔のはなしやる”ってな」

「・・・」

「俺の過去に関係無く。今は今、家族なんだって言ってくれた。お陰で俺は少しだけ・・・」

俺は自分の胸に手を当てて、言葉をつなぐ。

「少しだけ人の心を取り戻せたんだ」

「・・・」

「フェイトがどう思うのか知らない。だがソレは過去の事、俺達はもう知り合いだ」

「・・・なんで」

「ん？」

「なんでそこまで・・・私・・・偽物なんだよ？」

消えてしまいそうな小さな声で、彼女は声を出した。

よし、心が少し戻って来た。

「俺の知っているフェイトはココで寝ている金髪の女の子・・・他は知らない」

「でも・・・私は」

「だから？」

「え？」

「言っただろう？今は今だって、フェイトがどう思うおづが」

この時、俺は少し苦笑しながらこう言った。

「お前さんは既に友人枠に入れられているんだよ？俺達にはな」

「ッ！」

所詮俺の言葉何ぞ聞き逃し程度に聞いてくれれば良い。

ただ単に言いたい事を愚痴の如くここで述べただけだ。

俺は言いたいことは言ったので、医務室から出ようとした・・・つとそつだ。

「忘れてた。ホレ」

「あ、と」

俺はアルフにある物を・・・バルディッシュを投げてよこした。

投げた事にバルディッシュから抗議の念話が来たけどスルーする。

「後は・・・自分でな？」

そう言うと俺は医務室を出た。そしてそのまま転送装置のある区画へと足を向ける。

放っておいても問題無いと言つのに、俺はとことんお人よしが根にあるらしいな。

そう思うと、俺は人間何だなあとしみじみ思えたのだった。

時の庭園

そして現在、時の庭園の中にある比較的広い部屋にて足止めを食らっていた。

俺はそうでも無いんだが、彼らには多すぎる様だ。

「シユート！」

ドドドントッ！

「なのはさん、もっとペース考えて、まだまだ出てくるぞ」

『左から傀儡兵、数30』

「お、多すぎるよう！」

イヤイヤ、これでも少ないさ。それに攻撃が単調でやりやすいだろう？

しかし流石にオーバーペースか、9歳の少女には辛いだろう。俺は慣れてるから問題は無いけどな。

「ユーノ！バインドで連中を拘束してほしい」

「わかった！」

「クロノは俺と一緒に、捕まったヤツを倒すのを手伝って！」

「いいだろう」

「なのはさんは・・・ちよっとこっちに来て」

「わかった。あとフェン君、私のことはなのはでいいよ」

いやまあ、なんとなく敬語で呼んじまうもんで・・・。

ソレはさて置き

「ディバイドエナジー」

「・・・ありがとう、魔力が回復した」

「どういたしまして」

俺は魔力を魔法を使って消耗している彼女にワケ与える。

恐らく来るであろうフェイトとの共闘より前に倒れられても困る。

「だけどフェン君は平気なの？」

「なにがだ？」

「だって私よりも魔法をつかってるし・・・」

「俺はレアスキルのお陰で、魔力回復はそこらの魔導師の比じゃ無いから平気だ」

というか、この中の魔力濃度が、奥に行くにつれて高くなっている。恐らくジュエルシードが9個もあるせいだろうな。

「他にも魔力が足りないヤツは言え、分けてやる」

俺はそう言いつつも、左手にジリーノ、右手にキーンセイバーを構える。

「ユーノ、サポート頼んだ。クロノ行こう！」

「ああ！」

そして更なる集団に向けて呐喊して言った。

しかしアレだな、数が多いだけでそれ程の耐魔法対策はされていないな。

俺の世界の無人機の方が、大砲やミサイルとかぶっ放す分やっかいだった。

「チエーンバインド！」

「今だっ！ブレイズキャノン！」

バインドによって拘束された傀儡兵を一度に破壊する。
撃ち漏らしは俺が接近して処分した。

「しかし、キリが無い」 ドン！ドン！ドン！

『どれだけいるんでしょうね？つと後ろ！』

ジリーノを使い目の前の傀儡兵を吹き飛ばしていると、
後ろから剣で切られそうになったので、シールドで逸らし魔力刃を
刺す。

「さあな、案外製造プラントとかあるかもな」

『それだと無尽蔵の増援ですか？疲れますね』

残骸ばかりが増えて、なかなか奥に進めないな。

「つと、団体様のおつきか？」

『数は・・・』

「あー数えなくて良い」

奥から奥からそろそろとわいて出て来た。

もう数えるのも馬鹿らしい。どうやら魔力に反応するタイプらしい
な。

高魔力持ちがコレだけいたら、こっちに集中するのも仕方が無い。

「クロノ、提案がある」

「なんだ？アレだけの相手をしている暇はないんだぞ？」

「俺が囷をやる。派手にやるから今の内に魔力隠蔽して先に行つてほしい」

正直一々相手するの疲れたのだ。

もうこうなつたらココをブチ壊すくらいで……。

「いけるのか？」

「少なくとも、後ろで奮戦しているお嬢さんよりか経験は豊富」

「そうか、そう言えば君はUSNの……」

「昔のはなしだ。そら急げ、すぐに追い付く」

「わかつた。ユーノ！なのは！一緒に来てくれ！」

クロノは彼女たちを連れて、この場から先に進んだ。

これで派手にできる。巻き込まない様に押さえてたからな……。

「ツイングロム・フルバースト、スタンバイ」

『了解』

両肩に砲身が接続され、更に両方合わせて計16本のレールバレルを展開。

ソレらを迫りくる大軍に向けてぶっ放した！

ガガガガ、ギョオオオオツッ！！

連鎖的な爆発そして砲撃が通り抜け、傀儡兵がいた通路が崩壊した。

「効果確認」

『全敵消滅、敵増援反応あり、このフロアを目標しています』

「ふむ、囷は上手く行きそうだ」

今の膨大な魔力を感知したのだろう。
庭園内の敵さんが此方へと来てくれそうらしい。
囿としてなら十分だな。

しかし、ウマイ具合に魔力が満ちて行く。

本当はタイムリミットが近いって事なんだろうけど、俺にとっては幸運だ。

さっきからぶっ放しまくっているけど全然疲れない。

「新しい術式でも為そうかな？」

「・・・もしかしてこの間リインさんと考えたアレですか？」

「今なら行けそうな気がする」

「止めてください。加減が効かない上に全魔力消費するじゃないですか」

でもこの魔力に満ちた空間なら、周辺の魔力を集めるだけで使えると思うな。

いい加減傀儡兵の相手スンのも面倒臭くなってきた所だし・・・。

「それに、威力があり過ぎます。抑えたとしてもこの庭園が崩壊しますよ？」

「・・・次元をまた漂流するのは勘弁だな」

「広域殲滅魔法ですから、室内では使えませんからね」

うむ、残念だ。リインのお陰で凄く凄い感じに仕上がったと言うのになあ。

まあ元が闇の書だったお陰で、威力がアホみたく高いけど、派手だから良い。

「しかし、こつワラワラとわいて出てくると、何かを思い出すなあ」

傀儡兵の攻撃を多重プロテクションで押さえ、銃撃をもって破壊する。

突っ込んできた特攻野郎な傀儡兵は、レアスキルで動力源の魔力を吸い取ってやった。

『アレですね。台所等に出没する黒い悪魔ですね』

「そうだ、あいつ等はテキキンとひらめきを感じて新聞紙を避けるから質が悪い」

『オールドタイプよりも古い種族ですけど、あの生存能力はニュータイプ並みですよね』

バカな会話をしつつも動きは止めない。

戦闘は続行中なので気を抜いている訳では無い。

だが、相手が慣れ親しんだ無人機連中とそう変わらないモンでヒマなのだ。

「まれに殺虫剤も聞かないウルトラなGも存在する」

『汚物は消毒だあって火炎放射を使った件』

「家が全焼とニュースになりました」

さつきから人類の台所を汚す悪魔と同類に見られたのが嫌だったのか。

若干傀儡兵の戦闘力が向上した様な気がするが……気の所為か？

「しかし、ソレを素手で撃退できる猛者も存在する」

『人類最強の生物、O B A T Y A N N ですね？解ります』

アノ人達はまじで強い、特売という特定のフィールドにおいて無敵を誇る。

彼女たちに狙われたら最後、食材は瞬く間に籠の中に消えているのだ。

「つと！」

『キリが無いですね。どれくらい罔をすれば良いでしょうか？』

「さてな。ハッ！彼女がココを通れば終わりだろう！」

彼女とは勿論フェイトの事である。

原作通りに復帰して欲しい所なんだが

『・・・どうやら援軍ですね。魔力パターンを2つ感知！』

「ようやく来たか」

ズズウーンッ！

傀儡兵を吹き飛ばしてやって来たのは、黄色い閃光・・・というか死神か？

アルフとフェイトがようやくやって来たのだ。

「遅かったな」

「なのは達は？」

「連中はこの奥に先行している。俺は所謂罔だ」

「わかった」

時間が無いので短い会話。

彼女が先に行こうとしたので、ふと思いい出した俺は呼びとめる。

「フェイト、アルフ」

「何？」

「持って行け・・・ディバイドエナジー」

俺の白色の魔力光が、バルディッシュのコアへと吸いこまれていく。アルフには直接光が吸いこまれるかのようにして吸収された。

「これでよし、消耗分はコレで良いだろう」

「・・・ありがとうフェン」

「どういたしまして。それとお帰りフェイト、向うで友人たちが待っている」

「うん、いつて来る」

「ああ、行って来い」

彼女たちはそのままなのは達を追って立ち去った。

さて、彼女も来たしコレ以上連中の相手はしなくても良いな。

「ガルヴアードス、全力掃射、目標・・・」

俺は視線を天井に向ける。

「目標は天井、瓦礫によってコレ以上の傀儡兵が来るのを防ぐ」

「帰還が大変になりませんか？」

「帰りは転送魔法で帰れば問題無い」

転送魔法を扱える人間は結構要る。

なのは以外、俺も自分ひとりなら転送可能だ。ラインに教わったからな。

『了解、ガルヴアードス・スフィア形成』

スフィアを形成し、全弾天井部分に発射した。

相変わらず強力な爆発によって天井部分は崩壊。

今まで来た通路は全て埋まってしまった。

「これでよし、クロノ達の後を追う」
『了解』

そして残敵を掃討し、俺達もこの場から立ち去った。

「逃がしはせん！逃がしはせんぞおツ！！」

「逃がしはせん！逃がしはせんぞおツ！！」

妄想戦記

先行したクロノ君やフェイト達を追いかけていた俺だったが問題が起きた。

その為足止めを食らっている。

「ヴィズ、どこにプレシアがいる？」

『ここから真っ直ぐ所にいますね』

見れば隔壁だろうか？扉が降りているようである。
はて？こんなの原作にあったか？

『どうやら先ほどの部屋を壊した際に火災用システムが作動した様
ですね』

「成程、だからこの周辺の隔壁が降りたか」
『どうしますか？』

ヴィズにハッキングしてもらえば開くだろうが・・・。
かなり時間が掛かる事は間違いないだろう。

「直線上に誰がいる？」

『今のところは誰もいません』

「フォルム・ランチャー、ツイングロム起動」

『了解・・・チャージ開始』

もう時間は無い。魔力が上がったから壁抜きくらいできる。

「フォックス4」

『グロム、フォックス4』

ドゴオオオオオ……！！

俺が放ったグロムは、壁を突き崩し大穴を空ける・・・道が出来た。

「さー逝こうか……」

『マスター、字が違います』

俺はそのまま真っ直ぐ、プレシアの元に突っ込んだ。

……

……

……

と言う風になれば良かったのだが……。

「イツツ、まさか床が抜けるとは……」

どうやら時の庭園は部分的に違法建築だったようだ。

7歳児の重さ程度で床が抜けるってどうよ？

あまりに唐突過ぎて飛行魔法すら組めなかった。

『元々最低限の手入れしかされて無かったのに、先ほどの砲撃で寿命が来たんでしょうね』

・・・だろうな。普通はそう考えるわ。

それにしても随分落ちたな？通路の下の空間が傾斜してて更に落ちた。

一体どこら辺に滑り落ちたんやら・・・。

「どれくらい落ちたんだけ？」

『先ほどの皆さんの位置から測定すると・・・おおよそ10階分と言ったところでしょう』

しかし、それにしても落ちた時に床が妙に柔らかかったような？暗くて見えないからよく解らんけど。

「真っ暗だな？」

『いまナイトビジョンをつけますね』

投影される映像が切りかわり、ナイトビジョンへと変わったがまだ見えない。

どうやら相当深い場所に落ちてしまったようだ。天井の穴も見えないしな。

灯りが少しも無ければナイトビジョンは役に立たない。

「仕方無い、スフィア形成」

俺はスフィアを形成し、灯りがわりにした。ボウっとした灯りが辺りを薄く照らして行く

「・・・ツ！！コイツは・・・」

『きゃああああ！！し、死体だらけえええ！！』

「・・・お前見慣れてんだろ」

『いやまあ、なんとなくですが・・・』

どうやら俺が最終的に落ちて来た所は廃棄処分場だったらしい。

先ほどのやわらかさは死体の上に着地したせいだったのか・・・。
白骨、腐乱、肉つき、原型留めとまあ色々あるな。

「BA着たままで良かった。コレだと相当臭いがきつい」

『・・・どれも皆フェイトさんに似てますね？フェイトさんの失敗作？』

「正確にはアリシアの失敗作だろうな」

俺はすぐ近くに転がっていたまだ肉がついた腕をとってみる。

その手首には認識タグらしきモノが付いており、薄くだがアリシアと読める。

「あー、とりあえず彼女等のお陰で無事に降りれたってところか」

この死体達の層がクツシヨンの役割を果たしてくれたんだろう。

まああの程度の高さから落ちても、俺は怪我はしないんだけどな。
怪我してもすぐ直っちゃうし・・・。

「溜めに溜めて25年分ってところか。ナンマンダブナンマンダブ」

『あれ？マスターは仏教徒でしたか？』

「いんや違う。俺は無神論者だよ」

この光景は上の連中には見せられんなあ。

どうやらココにあるのは焼却処分待ちの死体達だったらしい。

もつとも焼却システムが整備されて無いから壊れているみたいだけどな。

まあどれもこれも意識が無い段階で処分された個体みたいなのが救いか。

どれもこれも眠ったようなツラして死んでやがる。中には違つのもいるがな。

身体の欠損部が目立つから恐らく捨てられた原因はソレか。

「学者つて言うのは、何処までも愚かなモンだ。自らの娘のクローンなのに・・・」

『この光景を見たらそう思わざるを得ませんね』

クローニングをやり過ぎると劣化が発生してしまうんだろう。

五体満足じゃない死体が多いのもその所為だな。

奇形児みたいなのも多いし、成長させる段階で成長しなかったものもあるみたいだ。

「狂気だな」

『ですな』

どうやら相当狂ってたみたいだ・・・しかし俺もなれたモンだな。

いやあまりに死体の数が多すぎて現実感がわかないってのもあるけどな。

それにしても普通ならこの光景見たら卒倒してもおかしくは無い。

「コレで動いたらホラー」

『こんな場所で冷静でいられるマスターの精神が凄いです』

「冷静なんじゃ無くて、もう理解の限界を越えている」

まったく何処の世界でも狂った学者ほど質が悪いもんはないな。しかしどうしてくれようか？来た道に戻るのも大変だし……。

「……別の道を探すか」
『ですね』

ここは死者の場所だろう。生者たる俺が居て良い場所じゃ無い。俺は手を合わせ少しだけ黙とうをささげた後、この部屋からの出口を探すことにした。

恐らくこの庭園は虚数空間に飲み込まれる事だろう。そこがココに居る彼女等にとって静かな墓場とならんことを祈ることしよう。

生憎俺にはそこまでしか出来ないから、勘弁してくれや。

「さて、出口はどこら辺」
『マ、マスター！ウ、後ろ！！』
「何！？」

慌てたようなヴィズの声に敵が来たのかと思った俺。咄嗟にジリーノを後ろに向けて構えを取る。

だが

「……おいおい、オカルトは専門外だ」
『ね、熱量及び質量も感知出来ず、光学映像のみに映ってます』

人魂とか幽霊とでも言えば良いんだろっかね？
見れば薄い人型の陰らしきモノが後ろにいたんだから驚いた。

「敵意みたいなのは・・・なさそうだな」

とりあえず向けていたジリーノを下げる。

正体は何なのかは解らないが、どう考えても武器が効きそうな感じがしない。

さて、一体正体は何だろうな？まさかここに来てアリシアの亡念とか言うか？

『あれ？これどこかで一度探知したことがあるような？』

「・・・おいヴィズ、怖い事いうのやめろ」

な、何を突然何気に怖い事を言い出すんだコイツは？

『いえ、確かに感じた事があります。しかもごく最近』

「・・・ほんまかいな」

『ええ、恐らくマスターもあつた事ありますよ』

「・・・」

死体は平気なんだけど、こういった類のは耐性が無い。

正直それかなり怖いんだけど・・・。

『アレですよアレ！ジュエルシードの思念体！アレとはちょっと違いますけど』

「へ？・・・ああ、確かに」

確かに言われてみればそんな感じがする。

どちらかと言えばアレをかなり薄めたらこうなりましたって感じか？

『ジュエルシードから漏れる魔力の波動の影響かもしれません』

「たしかに、アレは少々特殊な魔力だしな」

アレの魔力は人の精神や思念に感応しやすいのである。動いたり色んな形になるのも、そういったのが原因だったりするのだ。

・・・しかし幽霊と遭遇って事になるのかこの場合？

「不思議体験　ンビリバボー」

『暗い焼却処分場、フェンが見たものとはいったい！？』

「・・・とりあえずふざけるのは止めようぜ」

『ですね』

さてさて、どうすればいい？

何かしてくるつもりはなさそうだが、何かしてほしくて現れたんじゃないか？

しかしぼんやりしてるな、魔力が薄くて存在を確定出来ないって感じか？

「・・・こつこつのもテンプレ何だろうか？」

『さあ？』

どうやら何か伝えようとしてくれているみたいだが、薄くて何してるのか解らん。

ふむ、構成でしている魔力が足りないのか・・・。

「おい、敵対するつもりはないが銃を向けるのを許してほしい」

今までゆらゆら動いていた影が動きを止める。

「沈黙は肯定と受け取るぞ」

俺は陰に向けてジリーノを向けてやる。

「デイバイドエナジー」

【・・・ああ、これでようやく話すことが出来る】

『しゃ、しゃべった!』

魔力が満ちたお陰か、徐々に形を確定させていく陰。

見れば出ていたのは金髪少女・・・じゃなくて猫の耳がついた女性だった。

あれ？確かこのヒトは・・・誰だっけ？

【私はリニス、どうか私の最後の願いをきいてください】

「・・・プレシアを止めるってか？」

【プレシアを止め・・・その通りです】

『マスター、先にいったらだめですって・・・』

どうやら図星の答えだったらしい。

まあこんな所に執念で残ってたんだから大体予想付いたんだけどな。しかしリニス？そんな幽霊のキャラクター原作に居たっけ？

「あんたがなんでここにいたのかは知らん。まあ安心して逝ってくれ、願いは叶えてやる」

【ありがとうございます】

「死者の願いさ、悪い様にはしない」

さて、これで話しはおしまい。

彼女が逝ってしまう所を見届けてから先に進もうと思ったんだが・・・。

「・・・おい、なんで逝かない？まだ未練でもあるのか？」

【い、いえ、ただ供給された魔力があまりにも多くて・・・】
「ん？あーそうか、お前さんは使い魔か？」

使い魔のシステムについては詳しくは知らないが、
魔力さえあれば存在し続けることが可能だって聞いたことがある。

アレも結構謎なんだよな。供給される魔力は勿論魔導師からだが、
どういったラインを通じて魔力が来ているのかは不明。
使えるんだから良いんじゃないって感じで使われている実に曖昧な
魔法。

「しくつたな。魔力供給したから存在してられるのか」
【どうやらそうみたいです】

『それだけでなくて、何故か実体化が進んでいます。疑似生体部品
が構築されたようです』

つまり、もう透けることはないってことか。

「つまり、しばらくは居る訳か？」

【まあ契約した訳では無いので、すぐに消えますが・・・】
「それでも、しばらくは消えないわけだろう？」

【そうなりますね。どうしましょう？】

いや俺に聞かれても困るんだが？
というか

「なんで俺は死んだ使い魔に魔力供給出来てるんだ？」

【さあ？先ほどまで私も意識がはつきりしませんでしたし】
「ちなみにそれまで何考えてた？」

【確か、病気のプレシアの心配と残されたフェイトの心配とそれと

それと　】

・・・未練たらたらじゃねえか。

「というか、話聞いてるとお前さんは契約が終わった使い魔だろ？」

【ええ、そうです】

「なんで契約が終わったのに、存在してるんだ？」

使い魔は主との契約内容によって、どう存在するかが変わる。

当然契約が為されたり、破棄されたりすれば使い魔はその役目を終えて消える筈なのだ。

【さあ？ただプレシアに契約を終えさせられた時“このまま消えてなるものかあ！”と思っただけなんですけど・・・】

「・・・・・・・・・・」

『猫の執念岩をも徹すとか言いますけど・・・』

リアルで亡念だったんかい！というか幽霊か！

「てことは・・・マジで幽霊か？」

【解りません。ただ解る事は、私は“ここ”にいると言う事だけです】

まあ現実問題俺にも見えてヴィズにも感知出来るくらいにまでになつてるしな。

「・・・・・・・・まあ詳しい事は専門家じゃないからさっぱりわからん」

【私もそうです】

「で、アンタはどうしたい？一応このまま放置すれば消えるだろうけど？」

【そうですね・・・ぶしつけで申し訳ないのですが・・・】

この・・・リニスさんだっけ？目の前の元使い魔の幽霊？ああもうリニスで良いや！

リニスさんは申し訳なさそうに俺を見ている。

「はいはい、連れてけばいいんだな？」

【迷惑かけて申し訳ないです】

「しばらく消えないって解ったら欲も出る。気にするな」

しかしココで幽霊を仲間にする羽目になるとはな。

まあコレも何かの縁だ。連れて行ってやることにしよう。

・・・猫の怨念って怖いらしいし。

「とりあえずココからの出口とプレシアまで案内して欲しいんだけど」

【ええ、任せてください。ココの構造なら覚えてますから】

「ちなみにフエイトもきてるんだけど、どうする？」

【・・・わかりません】

「まだ会いたくないなら格納領域に入ってるか？」

案内した後お願いします。そう彼女は言うとな俺達を導く為に先行する。

俺達はまあ信じられネエが、彼女のあとに続いてこの部屋を出たのだった。

玉座の間？よくわからんがプレシアが居た部屋

なんとか間に合ったみたい。プレシアが居てフェイトにアルフその他多数がおりました。

そう言えばこのままだとプレシアは死に逃げするんだっただな……。

「なんか……入りづらいな」

『マスター、タイミングをうかがうんですよ！』

【私はまだ見られたくないの、格納領域に入れておいてください】

ただ入れればあのプレシアの事だ。俺に殺傷設定の魔法を喰らわせてくれるだろう。

・そうなったときの対処法？吸い取る

ふはは、吸い取ってやるう！

既に限界近いのに魔力を吸ってしまったので吐血。

ブハア！コレ程の魔力だったなんて……無念！

B a d e n d

そうなれば俺は吐血……ソレは避けたい。

・そうなった時の対処法？受けとめる

こんな魔法何ぞ効かん！

高魔力持ちを良い事に防御する。

プレシア本気となり魔法戦になる。

プレシア無茶し過ぎて死亡or虚数空間へ

ハッピーエンドにはならない。

ダメじゃん！このまま入ったらこうなる事請け合いじゃん！
ふむ、ならばただ入るのはダメだ！

プレシアには罪を自覚して貰わねえと・・・良しそれなら。

「ミラージュハイド」

俺はミラージュハイドを展開し、母上相手に鍛えた魔力隠避技術
フルに使う。

そしてそのまま静かに、壊れた壁の穴から誰にも気がつかれず中
に入った。

Side三人称

中は既に終わりへと近付いていた。

クロノは叫ぶ、世界は何時だってこんな事じゃなかった事ばかりだと……ずっと昔から誰だってそうなのだと。不幸から逃げるのか戦うのかは個人の自由だが、個人を巻き込む権利は無いと告げた。

静かにたたずむプレシアに今度はフェイトが自らの思いがこもった言葉を告げた。

自らの意志で真っ直ぐと述べた言葉。だがソレはプレシアには伝わらなかったらしい。

「……貴方が私の娘？くだらないわ」

「ッ！」

彼女ははき捨てるかの如くに言葉を紡いだ後、彼女は自らの持つ杖で床を突く。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ………！

するとたちまち巨大な魔法陣が現れ、ジュエルシールドが発動した。そしてジュエルシールドのちからで、時の庭園がその崩壊をさらに加速させていく。

「私は向かう、アルハザードへ……！そして全てを取り戻す！過去も未来も、たった一つの幸福も！」

「母さん！」

「フェイトっ！」

そこまで言うと、プレシアの立っていた足場が突然虚数空間に飲み込まれ、

プレシアもまた娘の入った生体ポットと共に虚数空間に飲み込まれ

ていく。

「そうは問屋が卸さん。逃がしはせんぞ」

かに見えた。

プレシアは突然虚数空間への穴の途中で、何かに引っ張られるかのように停止する。

そしてよく見ると細い線が上から伸びていた。

「「フエン!？」」

「おし、待ってる。今引き上げてやる」

そこには少しずつ景色から現れる白い鎧が立っていた。

S i d e o u t

中に入った俺は気配を消して静かにプレシアの元に向かっていた。ミラージュハイドにはセンサーすらも妨害する機能があるので気がつかれていない。

「……貴方が私の娘?くだらないわ」

「ッ!」

プレシアはそう言い放つ、フェイトはすこしビクンと揺れるが精神はそれ程揺らいでいない。

自分の中で譲れない思いが出来たか、はたまた覚悟があったのかは
しらない。

それでもだいたいぶ勇気が居ることだったろうな。

ゴゴゴゴゴゴ

『(ジュエルシード発動、揺れ始めましたね)』

「(今なら気がつかれないだろう・・・仕掛けをしておくぞ)」

彼女たちが色々と話している内に、生体ポッドにワイヤーを仕掛け
させて貰った。

プレシアさんにも見え無いよう隠匿したワイヤーを辺りに張り巡ら
した。

彼女たちが虚数空間に落ちても、回収が可能な様にする為だ。

ふー、何とか間に合ったぜ！リニスに頼まれたからな。

テメエだけ逃がしてなるもんか、何か言いたそうだったリニスの話
しを聞いていけ！

そう思い俺は格納領域に収納されているワイヤーを伸ばしていた。

元々あまり飛べなかった俺、このワイヤーは自らを固定出来るアン
カーの様なものだ。

空をカツ飛んで行き過ぎないようにする為の合金製ワイヤーアンカ
ー。

今回はそれが役に立った。

「私は向かう、アルハザードへ…！そして全てを取り戻す！過去も
未来も、たった一つの幸福も！」

俺がワイヤーアンカーを仕掛けた事に気がつかない彼女たち。

ワイヤー自体にミラージュハイドをかけてあるのだ。

物質でこういった細いのにかけるのはかなり神経を使うので疲れる。

「母さん！」

「フエイトっ！」

そして足場が崩壊、プレシアと生体ポッドは虚数空間へ落下していった。

だが、当然俺がワイヤーを仕掛けてある為、途中で止まる。そりゃもうガクンって感じで。

『（うわぁ、痛そう・・・）』

ヴィズがそう漏らす。プレシアさんは特に可哀そうかもしれない。だって細いワイヤーが身体に食い込んだんだぜ？

家の二階からワイヤー付けてバンジーしてみればどれだけ辛いのが解ると思う。

身体にかかる負荷を調整し、虚数空間の範囲に気をつけながら飛行魔法を利用。

プレシアとポッドをコレ以上落とさないようにワイヤーを引っ張る。身体強化はしているが、流石にこの身では長くは持たないだろう。

「そっちは問屋が卸さん。逃がしはせんぞ」

俺はそう言いつつワイヤーを握り力の限り叫ぶ。

「フイイイイイツシュッ！！！！！！」

瞬間的な強化魔法のブースト＋飛行魔法＋脚のローラーダッシュ・・・

それらをフルに使い、俺はワイヤーを思いっきり引つ張った

『高ランク魔導師と生体ポッドを釣り上げました!』

引き上げる際にプレシアさんとポッドがガツンってぶつかる音が聞こえたけど気にしない。

うめき声だか断末魔だか解らん声も聞こえたけど・・・聞こえない事にした。

いま重要なのは、彼女らを引き上げたと言う事である。

「逃がしはしない。殺しもしない。だが、迷惑かけた迷惑料くらい払え」

『罪を犯したのだから、法のもとに捌かれなさい』

まあ生体ポッド云々は俺の自己満足だけだな。

なんとなくアレも拾いたかった。ただそれだけだ。

しかしワイズ教官から習った方法だけど、覚えておいて正解だった。

「ワイズ教官のやり方に似てるな」

『まああの人ならプレシアがジュエルシードを発動させる前に止めるでしょうね』

「確かにな」

幾ら高ランク魔導師でも、プレシアさんは本来戦闘をするタイプでは無い。

しかしあの光学迷彩魔法はかなり高度に隠匿術は組んであるのだ。

それこそ勘で俺を見つけられるようなバケモノ連中用にな。

つまり俺の隠匿したモノはそうそう簡単に見つかるものじゃ無いのである。

「……ぐっ」

「おっと、まだ意識があつたな？……てい」

そして俺はワイヤーが身体に食い込んでうめいていたプレシアを完全に気絶させる。

下手に自暴自棄になって魔法乱射されても迷惑だからな。リニスとの約束もある。

「母さん！」

「話しはあとでな」

駆けよつて来たフェイトを押しとどめた。

早いとこ戻らないと、ドンドン部屋が崩壊し始めている。

既に起動したジュエルシードはもう人の手では止められない。

俺だってあまりの魔力に既にアップアップ状態だ。吐血一歩手前。

「フェイト戻ろうよ。ここも危ない」

「うん」

俺はプレシアとポッドを運んでいく、クロノ君にとりあえず片方渡そう。

幾らなんでも俺の身体の大きさは両方運ぶのはつらい。

俺が運ぶのに四苦八苦している後に続く彼女たちが、その場から離れようとした時だった。

「あぶない！」

ドゴゴンッ！！

崩壊した天井の一部が落下し、俺と二人を分散してしまった。
彼女たちがいる部分がわずかに虚数空間に入り込んでいるため、近
寄れない

「フェイト！アルフ！」

『あやややや！ど、どうしましょう！！？？？』

俺は俺で身体強化フルに使って生体ポッドとプレシア抱いてるので
動けない。

どうすりゃいいだよオイ！詰んだのか！？

「く！どうすれ「フェイトちゃん！」」

だがその時、ナイスなタイミングでなのはが現れた。

流星は主人公！良い所で来てくれたぜ！ヒーローは遅れてやってく
るってか？

「跳んで！こっちに！」

「！」

彼女は俺の横に降りると、フェイトに向けて手を伸ばす。

だがあとちょっと届かない。

「手伝うか。クロノ！コレ頼む」

「わかった」

俺は抱いていたプレシアをクロノに渡し、生体ポッドを降ろした。
格納領域にあるワイヤーを展開、そしてソレを持ってなのはに近づ
いた。

「ワイヤーを使え！」

「フェン君・・・うんお願い！」

残っているワイヤーを伸ばし、なのはがソレを掴んで伸ばせるギリギリまで手を伸ばす。

フェイトはその光景を見て、中途半端ながらも手を伸ばしてきた。いや、フェイトに投げてよこしてって意味だったんだが・・・。

「フェイトちゃん!!」

「お前ら早く・・・!とべ！」

彼女は一瞬目を閉じ、そしてアルフと一緒にこちらに跳んだ。なんとか飛べたがバランスを崩して落ちかける所を腕を掴む。

「よし!掴んだ！」

「コレで全員だな!アースラへと帰還する！」

既に周りは殆ど倒壊、もしくは虚数空間にのまれている。

このままここにいたら、虚数空間にのまれる事は確かだろう。

「全員そろった!転送開始！」

俺達はプレシアを含めて、アースラへと転送された。

こうしてPT事件は終結を迎えることとなる。

「庭園が・・・」
「虚数空間に呑みこまれていくな」

アースラに戻った俺達は、時の庭園が虚数空間に飲み込まれ行く様を見届けた。

あの庭園には廃棄されたアリシアの予備達が眠っているが、虚数空間が墓場となるだろう。

出来れば暴かれること無く、そのまま静かに眠って欲しい。
彼女等とて生れた命であった事に变りは無いのだから。

「ようやく終わったね」

「ああ、コレで帰れる」

こうして色々あったがようやく事件が終わった事に皆で安堵した。
フェイトは大人しく拘束され、気絶しているプレシアにはリミッターをつけて収監。

そして、何故かひろってしまったりニスがいると言うカオスだ。

「素晴らしきカオス具合だ」

『電撃戦でしたね。フェイトさんが居るだけに』

「ウマイ事いうね」

休憩しながらバカ話を展開する俺とヴィズ。結局シリアスが続かない。
い。

だけどソレでいいと思う、だって俺は俺だもん。
原作には無かったプレシアの逮捕も出来たしな。

まあ不治の病らしいから、もう持たねえだろうけど・・・。
と言う事は自己満足で捕まえただけって事になるんだろうかねえ？

ま、俺は出来ることをしただけだからな。文句言われても知らんわい。

「晩御飯、なんだろうなあ・・・」

そんな事思いながら、ゆっくりとベンチに腰かける俺だった。

「逃がしはせん！逃がしはせんぞおッ！！」（後書き）

囁くんだ・・・俺の中の妄想ユーストが・・・。

【ヌコは三匹】・・・と。

「新たな仲間」(前書き)

出来たので投稿。

「新たな仲間」

「新たな仲間」

妄想戦記

さて、リニスさんの事なのだが、なんじゃかんじゃあつて俺についてくる事になった。

え？間の理由を話しやがれ？そんな面倒
OK兄弟、穩便に平和に行こう。

だからその上段に構えたイスを降ろしてくれないか？

あの後俺はリンディさんに許可を貰い、下手人というか主犯格であるプレシアさんに会わせてもらった。当然リニスさんを連れてである。

ちなみにプレシアさんは拘束室ではなく警備が居る医務室に収監されている。計画が失敗した事とそれまでの無理と心労が祟り、医務室から動けなくなっていたからだ。

もともともう助からなくらいに病魔に侵されていた彼女にとって、精神の支えでもあった計画が泡と消えたわけだからいたしかたないと言える。

「リニスさん、魔力いるか？」

「お願いします」

今の彼女は契約している訳ではないので、一定時間ごとにごうやうやうって魔力を補充しないと、いつ崩壊するか解らないらしい。

というか、何故あの影みたいな時に俺とヴィズに見えたのかも謎だ。映像記録には何も無い空間を見ている映像しか残って無かったしな。

勿論その映像は秘密裏に処分しておきました。プレシア・テストアロツサの犯した犯罪の証拠品として提出しても良いんだけど、あまりにも痛まし過ぎる上、小学生であるのは達にはちょっと見せられない。それに死者達の墓を暴くような感じだから俺としては気が進まなかった。

一応リンディーさんにはそういった施設があった事は口頭でのみ説明してある。映像記録については提出を求められなかったという事にした。

そういった記録があると言う事は説明して無い訳だから求められる事も無いんだけどね。コレは俺の心の内に秘めて置く事にした。

「さて、この先にプレシアさんがいるが・・・」
「・・・わかっています」

いま彼女には結界魔法をかけ、アースラの監視モニターやセンサーには映らない様に細工はしてある。まあどちらにしろ、鎮痛剤を投与されたプレシアさんは眠っているのだが・・・。

「本当に会うだけでいいんだな？」

「はい、愚痴を言いたいだけですから」

ただ会いたいと言うだけの理由、ソレでもいいだろう。会いたくても会えないよりかはずっといいだろうしな。それに彼女の最後の願いはプレシアに会う事なのだ。ソレを叶えてやるくらい許してほしい。

「ここだ。このカーテンの奥で、彼女は眠っている」

「・・・ありがとうございます」

「それじゃ、入ろうか。一応監視カメラには映らないけど、気をつけてくれ」

俺はベッドを区切るカーテンを引き、リニスを中に入れてやる。姿を消しているので勝手に動けない彼女は、言われるがまま中に入った。

「……………」

「プレシア……………」

ベッドにはかつての大魔導師が薬で静かに眠っていた。良く見れば頬が痩せ、目には隈が出来ており、肌の色も血色が悪い所為か青い色になっている。

しずかに上下する胸が、かろうじて彼女がまだ生きていると感じさせてくれるものの、すでに死人一步手前になった人間と言った言葉が脳内に浮かぶ。

「……………あの時よりも、痩せてしまいましたね」

リニス は 静かに そう 言い、 プレシア の 髪を 愛おし そう に 撫でる。

「言いたい事が沢山あったのに、文句が山ほどあったのに……………いざとなると全然浮かんできませんね……………」

そのまま彼女はプレシアの痩せた頬に触れた。

「あの後ちゃんと栄養は取っていたのですか？貴女の事だから自らの身は二の次にしていたのでしょうか……………」

今度はプレシアの手を取るリニス。

「本当に……………貴女は莫迦でしたね。莫迦で……………そして本当に貴女は優し過ぎた」

そのまま手を降ろし、再度頬に軽く触れた。

「狂ってしまった。でも貴女が本当は優しかった事を私は覚えています」

ポツンとそう呟いたとき、ぼたりと光る水滴が落ちたのを俺はみた。

「苦しんで、苦しんで、狂ってしまった。それでも貴女の事を・・・私は好きだった」

ポタポタと水滴は止まることなく落ち続け、プレシアさんの服を濡らしていく。

「もう戻れない所まで行ってしまって、自分も持たないと知ってて・・・」

徐々に声色が涙声に変わり、震える声で言葉を紡ぐ。

「ワザとフェイトと距離を置いて、孤独になって・・・罪まで全部持って行くこうなんて・・・ずるいです」

リニスさんはなんとか言葉を述べようと無理やり笑みを作っていた。

「契約を終え消えそうになった。でもこうしてもう一度会う事が出来て・・・」

リニスさんはプレシアさんの頬から手を放す。そして

「最後にこうして会えて・・・本当に 良かった」

リニスさんは心の底からの笑顔をプレシアさんに向けていた。その目からは絶えることなく涙が流れ続けている。

この瞬間、彼女が元の主人の為に涙を流すこの光景は、とても綺麗で、

とても幻想的で、

一枚絵のようで壊してはならないようで・・・。。。。そして。

「でも、出来るならもう一度・・・貴女の笑顔がみたかった・・・」

そして・・・それはとても悲しい。悲しい光景であった。

この瞬間だけは邪魔してはいけない。

壊してはならない彼女が願った最後の頼みだったのだから・・・。

俺はそう思い、黙ってこの光景を見ていたのであった。

「……ありがとうございました。リーダー君」

「俺は……何もしていない」

プレシアさんが眠る病室を離れ、俺に割り当てられた部屋に戻る時、リニスさんはそう俺に感謝の言葉を述べた。

「リニスさんが会いたいと願っていた。だから叶えただけ……俺はもう前の家族には会えないから、会える内に会えるのなら、会って欲しかった。ただそれだけの身勝手な理由」

「それでも、私はアナタに感謝したい。会わせてくれてありがとうございます
「ございます」

ぺこりと頭を下げるリニスさん。本当によく出来た使い魔さんだな。使い魔のレベルは魔導師のレベル。コレ程優秀なのだから、やはりプレシアさんは相当な魔導師だったんだな。

「その気持ち、確かに受け取った」

「本当に……ありがとうございます……」

どうやらまだ精神が不安定の様で彼女の眼から涙があふれている。とりあえずココで泣かれると、見つかった際色々と不味いので、俺は割り当てられている部屋に彼女の手を引いていった。

でも、本当に嬉しかったんだと、しみじみ彼女を見て思ったんだ。

「落ち付いたか？」

「はい、すみません。いきなり泣いてしまっただけ……」

申し訳なさそうな顔をしてくるリニスさん。

「気にするな……俺なんて泣きたくても泣けないんだからな」

「あの、ソレはどういう？」

「……ホレ、コーヒード。使い魔でも何か飲めば落ち着くだろう」

俺は手に持ったマグカップを彼女に手渡した。リニスさんは元使い魔なので別に飲む必要とかは無いのだが、俺だけ飲み物を持っているのも不公平だと思ったのだ。

「……頂きます」

彼女もそこら辺をわかってくれているらしく、黙ってコーヒーに手をつけてくれる。ホントいい人だね。うん。

「……」

「……」

しばらく部屋には沈黙が流れた。一応ココはプライベートスペースになるので、監視カメラとかが無いのがありがたい。しばらくこうして居たのだが、更に落ち着いてきた彼女は俺に先ほどの会話の質問を投げかけてきた。

「あの、先ほどの話なのですが……」

「……泣けないという話しか？」

「はい、泣きたくても泣けないとはどういう事なのですか？」

俺は彼女からの問いかけを聞き、とりあえずコーヒーを一口すすめる。

まあ別にコレは話しても問題無いわな？

「……リニスさんは、USNって知っているか？」

「ええと、確か二十数年前くらいに消滅してしまった世界だとか」

「信じられないだろうが、俺はその世界の生き残りだ」

「え？」

驚いて目を見開くりニスさん。

「次元航行エネルギー炉の暴走でな？世界どころか時空もこえたらしい。管理局連中の言うにはな？俺は30年前はUSN軍に所属していて、当時管理局と合同で作戦を行った事があり、その時の記録にばっちり俺が映ってたそうだ」

「……」

「とうじ俺が居たUSNとOCUは戦争状態でな？俺も優秀な魔導師と言う事で戦争に駆り出された。わずか7歳のガキが兵士として戦場に放り込まされたのさ。正気じゃないだろう？」

「普通は・・・ありえませんか」

「当然戦争なのだから、俺は前線に駆り出された。そこでな」

俺は再度喉を潤す為、コーヒーを口に含む。

「そこで、初めて人を・・・人間を殺したんだ」

口に含んだコーヒーの後味が、やけに苦く感じられた。

「元々俺の精神はあまり強くは無かったらしくてな？ソレいらい俺の心はドンドン冷えていつてしまったんだ。しかし癒す時間なんて無い。作戦が終われば別の任務や作戦、毎回毎回敵を倒す」

「・・・それは」

「そしていつしか俺は心が壊れ、両親の前でしか子供に戻れなくなっていたのさ」

「・・・」

「そして色々あって、俺だけがこの世界にきた。一応感情は有るんだが、泣きたくても泣けない。今の俺の家族のお陰で、俺の心は少しは戻って来てはいる。だけど笑う以外の感情がどうにも表に出すことが難しいって訳だ」

俺はカップに残っていたコーヒーを飲み干す。ああ、苦い・・・本当に苦いな。

「だから、泣きたいときに泣けるリニスさんが・・・少しだけ羨ましかった。それだけ」

「そう・・・だったんですか」

「気にしなくてもいい。俺の場合時代が悪かったんだから」
「・・・」

少しばかり暗くなっちまったな。話題を変えなくては・・・。

「それよりも、この後はどうする？フェイトにも会うのか？」

「・・・いえ、彼女にはすでにアルフが居ます。私が会わなくても良いでしょう」

彼女は俺の質問に首を振りながらそう答えた。

俺はそうかとだけ答えそれ以上は聞かない事にした。

「なら、これからどうする？コレで未練は無いのか？」

「ええ、プレシアに会う事も出来ましたし、コレ以上リーダー君に迷惑をかけるのアレですからね」

最初はプレシアを止めてくれて話した。だけど彼女に会うという約束にvari、ソレは果たされた。本当に忠義深い人だね・・・
ちよつと惜しいと思った。

「なあ？ちよつと聞きたいんだが・・・本当にこのまま消えるのか？」
「？」

「・・・どうい事ですか？」

「どつせなら、もうちよつとこの世に居残る気は無いか？」

だから俺はダメもとで彼女に訪ねた。

「俺と契約して、使い魔をもう一度やってみないか？」

「……何故私と？」

「リニスさんも、プレシアさん……彼女似てとてもやさしいと感じたから」

「……」

これまでの彼女の行動を見ていて、俺は素直にそう思ったのだからそう答えた。コレでダメと言うなら俺は諦めることにしよう。無理強いしても、それに意味は無いのだから。

「まあ考えておいてくれね」「いいえ、良いですよ」「ば……いいのか？」

意外とすぐに返事が来た事に驚き、思わずそう返してしまった。

「はい、アナタは約束を果たしてくださいました。信用に値する人間だと私は思います」

「契約内容は俺が死ぬまでサポートしてくれとかでも？」

俺はそう問いかける。俺がそう問いかけるのは、本当に無理強いみたいな事はしたくないからだ。コレでもしも考える様な仕草があるなら契約はしない。だって迷いがあるって事なんだから……。しかし彼女は真っ直ぐとこちらを見据えた。その目には全く迷いが見えない。

「はい、いいです。私はプレシアにまた会えた。最後の願いをかなえる事が出来た」

彼女はそういうと、プレシアさんに向けた笑顔を同じ心からの笑みを浮かべた。

「それを叶えてくれた人の願いを聞いても問題ありません。少しだけ消えるのが長引くだけなのですから」

そう述べる彼女に、俺は言葉が思い付かない。ダメもとで頼んだので、まさかいきなり承諾されるとは思っていなかったからだ。ギリギリ彼女が消えるまでに応えてくれれば良いかなと考えていた。

「……ありがとう、リニスさん」

だが彼女はこちらの予想を大きく裏切り承諾してくれた。そして思う。

彼女は主に似ていてとても優しく、また義理がたい所があるのだと……。

「こちらこそよろしく申し上げます。あ、ソレと」

リニスさんは俺の手を取ると、視線を会わせてこういった。

「私を従えるのですから、もう呼び捨てでも良いですよ？」

「……わかったリニス、俺のこともフェンで構わない」

「はい、フェン君」

スツと手を出すとその意味を理解しているのか握手をしてくれた。

「それじゃ、使い魔契約のやり方は俺は知らないから頼めるか？」

「ええ、任せてください」

こうして俺はリニスさん・・・いやリニスと契約する事が出来た。契約内容は俺が死ぬまでサポートをしてくれると言うモノ。俺は頼もしい味方を得ることが出来たのであった。

.....

.....

.....

「・・・フエン君は転生した人間だったなんて」

『凄いですよねえ？普通はあり得ませんよ』

俺はあの後、俺の秘密を彼女にも話した。仲間に秘密作るのいくないね。

「でも本当にフェイトに会わなくていいのリニス？」

「ええ、だって今会ってしまったら余計な混乱を招くだけですから」

まあ事件終了直後だし、リニスの事は管理局側にも話して無いらなあ。今フェイトに会うと彼女混乱して取り乱すだろうから、絶対のリニスのことバレてこじれた話しになってしまう。

「・・・説明するのも大変だしいいか」

「ええ、問題無いです・・・あう」

「あ、ゴメン・・・何か痛かったか？」

「い、いいえ大丈夫です」

『リニスさんいいなあ。私も動物になれたらマスターに撫でてもらえるのに』

なんかりニスさんは元は山猫さんらしくて、その姿になれる？つて聞いたら山猫形態に変化してくれました。で、撫でて良いかを尋ねたらOKを貰えた為、俺は猫さんのモフモフ感を体感中なのである。

「ああ、やっぱり猫さんは癒されるう」

「あ、あまりやり過ぎない様にね？私は撫でられるのに慣れて無いから・・・」

『まあマスターに撫でられた猫さんは大抵骨抜きにされますけどね』

「いやなら、止めるけど・・・」

「あ・・・大丈夫だから続けてもらえますか？」

「いいの？」

「はい！」

人間形態の時は女性の姿だから撫でられないけど、猫さんの姿なら問題ないよな？

「そう言えば、フェン君の居候先に私が行っても大丈夫なんでしょうか？」

『そこら辺は大丈夫だと思いますよ？』

「あの家には騎士たちが来る予定だからな」

夜天の書の守護騎士たちが、夜天の書の主たるはやての誕生日に現れる予定だ。

『ええと確かヴォ、ヴォ・・・ヴォルフ・リッターでしたっけ？』

「そんな月下のオオカミみたいな名前じゃ無い。」

『それじゃあ、ローゼンリッターでしたっけ？』

「それ何処のドライロッドだ？出てきたらある意味最強だけど・・・」

「ゼツフル粒子は魔法にも効果があるんだろうか？」

『じゃあえくと、あ！ヴォルケンリッター！』

「そうソレ。ヴォルケンリッターが正しい」

「????ヴォルケンリッター？騎士？」

リニス首をかしげている、まあ普通は知らないだろうさ。夜天の書の守護騎士を知っている人間なんて、管理局内でも少ないと思うし……。

「まあ人が増えるだろうから、いまさらもう一人増えたところで問題無い」

「そうでしょうか？」

「無理なら俺が管理局でアルバイトがたら仕事して、どこか部屋でも借りるさ」

管理局と伝手が出来たんだから、何かの討伐のような仕事なら出来るだろう。管理局入りは無理でも囑託、もしくは傭兵なら出来るだろうしな。

『念願の一人暮らしですね？解ります』

「まあ軍に居たころは普通に部屋独占していたから、一人暮らしはもう経験済みだ」

「その年で自炊が出来るなんて凄いですね」

前世でも一人暮らししてたし、ソレ位できるさ。

『ああでもマスターはそこから辺結構無頓着なんですけどね』

「・・・どういう事ですか？」

『自炊とはいうものの、長期任務とかが多かったですから結構外食やらが多かったんですよ。ひどい時は数週間レーションだけで過ごした事もあるくらいですし』

「まあ、栄養が取れればそれでいいしな。味も大切だけど生き残れるかだった訳だし」

「・・・フェン君、すこしお話があります」

この後みっちりと食事の大切さについてリニスから説教されました。食事の話で済めば良かったんだけど、何故かフェイトの小食の話やらプレシアさんの無頓着さへの愚痴へとつながったのには参った。

一応今の所レーションだけの食事に戻るつもりなんて毛頭無い！と説明してなんとか解放されたけど、今にして思った、彼女は

「そう言えば術式に無駄があるみたいですね？まあ30年前ですから今とは違うでしょう。とりあえず、まずは今のミッド式を修めてもらう事にしましょう」

「え？いや」

「あとはそのですね。デバイスにも無駄があるみたいですから、そこから辺も改良して行きましょう。幸い私にはデバイスマイスター並みの知識がありますから！」

「ええと、リニスが教えてくれると？」

「はい！フェイトに教えたようにみっちり教えて差し上げますとも！」

「・・・」

彼女はとても、過保護な性格だったのね・・・。

「新たな仲間」(後書き)

あはは、リニスさん仲間に見たけど、俺彼女のイメージ全然わかねえや。

「母の残した言葉」

「母の残した言葉」

妄想戦記

プレシア女史の容体急変しこん睡状態に入った。

もっともコレは彼女を捕えた後に身体検査した際、初めから懸念されていた事態だった。

もともと不治の病持ちな上、長年の研究による心身への負担、計画の失敗による精神的ショックはやはり大きかったのだろう。

捕まえてからまだ一日も経過していない中でのこん睡、どれだけ彼女が無理をしていたのかが良くわかる。医務官も既にサジを投げしており、栄養の点滴のみが命をつないでいる状態だ。

また彼女は目が覚めた後も特に何もしなかった・・・簡単に言えばセルフネグレクト、生きることを意識的に放棄していた節もあり、その衰弱はとても早かったのだ。

すでに何度も意識を落したり覚醒したりを繰り返し、その間隔も徐々に長くなってきている。それが意味するのは・・・緩やかな死だろう。

この事をフェイトに話すかどうかで、アースラ組と事件にかかわった俺達との間で話し合いが行われることとなった。

当然フェイトには内緒である。この話は本人にはまだキツイのはという配慮からだった。だが話しは最終的には話すという方向でまとまった。

「親の死に目に会えないのは、辛いモノがある。大事な人ならなおさらだ」

クロノ君が言ったその言葉に、俺達全員が賛同したからである。問題は現在拘束されているフェイトを合わせるのはどうなのかと言つところなのだが、そこら辺はウマイ事調整するらしい。

反対派は誰も居ない。彼女の境遇はアースラに居る俺達を含めて、事件にかかわった人間なら皆知っているからである。

説明はリンディーさんになのはがついて行って行われる運びとなった。何故なのもついていくのかと言つと、もしもフェイトが取り乱した際のストッパーと言つヤツだ。

俺はその時その場に居なかつたので詳細は知らないのだが、母親に会えると聞いた彼女は考えることなく了承したらしい。

尚これはオフレコなのだが、何故かアースラの監視システムがエラーを起していた為、1時間ほどのあいだ記録などが一切出来ないらしい。

こうしてフェイトとプレシアとの、事件後初となる・・・そして最後かもしれないが、面会を行う運びと相成った。

付き添うのは当然のことながらなのはとクロノとユーノ、そして俺。クロノ君は執務官と言う事で、一応の犯罪者同士の面会における立会人らしい。

もつとも、元々オフレコだから建前と言う奴だろう。ユーノ君だってバインド系がウマイからだし、俺にいたってはもしもの時抑え込む係である。

なのはだけは純粋にフェイトの付き添いということらしい。フェイトの方はまだ戸惑いを覚えている様だが、特に断ろうという気持ちは無いようだった。

「この部屋に君の母親がいる。覚悟はいいか？」
「…………はい」

そして、いよいよ母と娘の面会が行われる。こん睡時間の間隔からして、もうそろそろプレシアさんの目が覚める時間だ。

病室の中にはベッドに横たわるかつての大魔導師の姿。リニスに会わせた時と殆ど変わらず、むしろ顔色が悪化している様な気がする。

「…………う、あ
「母さん」
「…………フェイ……ト、なの？」
「はい」

どうやら目を覚ましたようだ。身体を動かす事も重労働なのか眼だけであたりを見回している。

「プレシア女史、オフレコなのだが現在アースラには監視システムにエラーが起きている。その為この間は全ての記録が取れない。あなたならこの意味が解る筈だ」

「……」

クロノ君の問いかけに、無言でこちらを見るプレシア女史。彼女は一旦目をつぶり、何か思うところがあつたのか目を開ける。

「……そう、そういうこと。相変わらず管理局はあまい」

「どうとでも取ればいい。僕からは以上だ」

そういつてクロノ君は引き下がった。ソレと入れ替わるようにしてフェイトがプレシアさんのすぐ横に立ち、膝立ちになってプレシアさんの手をにぎる。

「……久しぶりね。フェイト」

「……はい、母さん」

「あなたがココに立っていると言う事は、私はまだ死んでいないのね」

プレシアさんはそう言うと、すこし息を吐いて目をつぶる。

「ふふ、アレだけアルハザードに固執していたのに、今はウソみたくに晴れやかだわ」

「……」

「喜ばなさいフェイト、もうすぐ私の時間は終わる」

「そんなこと……そんなこと無い……」

「フェイトちゃん……」

すこし声を荒げそうになるフェイトをさすって、落ち付かせようとするのは。すこし声を荒げたモノの、すぐに落ち着いていく。

「聞きわけなさい。私はもうすぐ消えるのよ」

「だけど……だけど」

正直、プレシアが持たない事はフェイトにとってはまだ受け入れがたい事実であった。子にとって親はどこまで行っても親なのだ。親しい人間が消える……こういった自体にどう対処すべきか、彼女は知らない。

「……私はアナタの事を人形だつて言ったわよね」

「ッ！」

「な！ムグッ」

いきなりのプレシアさんのフェイトへの人形発言。思わず激昂しそうになったなのは俺は慌てて止める。どうしてと眼で訴えてくるのはを無言で制し、プレシアさんの……彼女の言葉に耳を傾ける。

これが本当に最後になるかもしれないのだから。

「それは今でも変わらない……貴女は私の娘ではないの……」
「ッ」

目に涙を溜めているフェイトを無言で見詰めながらも、彼女は言葉紡ぐ。

「うう！ゴホッ！ゴホッ！」

「母さん！」

「聞きなさい・・・貴女は私の娘じゃ無い、そしてこの事件では無理やり協力させられた」

ココに来てプレシアさんはフェイトと自分の関係を、仕事を強制した間柄と述べていた。何と言う不器用な愛情、彼女は最後まで事件の犯人は自分だと言い張るつもりなのだろう。

現在監視されて無いと言われていても、それを鵜呑みにしていない。だからこそその演技、芝居、だがソレはフェイトに伝わっているのかは解らない。

今のフェイトは・・・彼女は泣きだしてしまっていたのだから。

母の思いを受けとめ理解出来る程、まだ彼女の心が育っていると
言う訳では無いのだから。

「・・・貴女は平穩にいきなさい。私を忘れて生きて行くの」

「！！いやだ！いやだよお！母さん！」

「いい加減にしなさい・・・貴女は私の娘じゃ無いのよ」

「ひっく、うう・・・」

そして部屋には少女の嗚咽の声だけが響いていく。

最後まで拒絶された事が悲しいのか。はたまた話すことに衰弱して行く母の姿を見た所為なのか。

「私は、娘・・・だって、言われなくたって、いい!」

「・・・」

「ただ、母・・・さんが!生きて・・・くれてさえ、いれば!」

「・・・」

「だから・・・だから!」

は
やっと言う事の出来た、心からの彼女の願い。だがソレが叶う事

「もう・・・そろそろ、ね」

「・・・かあさん?」

「意識が・・・うつろいで、きたわ・・・」

「かあさん?かあさん!」

すでにだいぶ衰弱しきった身体でココまで会話をしたのだ。昏睡に入る間隔的にもそろそろだとは思う。プレシアさんは最後の気力をもって、泣いているもう一人の娘へ言葉をおくる。

「いい?フエイ、ト」

「・・・なに?かあさん」

「貴女は・・・もう一人じゃ無い。後ろにいる彼らが、貴女を助けてくれる」

一瞬だけ、彼女の眼は俺達の方を向いた。だがすぐにフエイトの方に向き直る。

「だから、私の事は忘れなさい・・・」

「いやだ!・・・いやだよお!・・・何でもするから・・・いかないで!」

「聞きわけなさい!」

「ヒッ！」

プレシアさんがフェイトを叱る。決して大きな声じゃ無い。だが気迫のこもったその声は愚図るフェイトを黙らせた。

「いい？貴女は私を忘れて生きるの・・・私が・・・全部、持つて行く・・・から」

「・・・母さん？」

「・・・さようなら、フェイト・・・強く・・・生き・・・て

」

その時俺はプレシアさんからフツと何かが消えて行くのを感じた。その感じはよく知っている。

「母さん？母さん！？」

「フェイト揺らすな！ちよつと待て・・・」

俺は動かなくなった母親を揺らす彼女を止めて、待機していた医務官を呼び診断して貰う。だが第三者の目からしても、プレシアさんがもうどういふ状態なのかは素人でも解る。

「・・・こん睡状態に入っただけです。ですが

」

「母さんは？母さんはどうなるんです？」

すがるような声で医務官に迫るフェイト、医務官の人は若干戸惑いながらも、その責を果たす。

「もう、彼女がこん睡から覚める事は・・・ありません」

「ッ！！！」

」

首を横に振る医務官から告げられた言葉、ソレは事実上の死亡宣告に等しい言葉だった。

呆然とするフェイトをなのはが付き添って部屋から出した。彼女が収監室に戻る所まで見届けながら俺はプレシアさんの最後を思い返してみる。

プレシアさんの最後の言葉には、肉親としての情が込められていた。少なくとも俺にはそう見えた。彼女が最後にフェイトに向けていた眼には、何かに執着する心では無く、いつくしみ心配する光が映っていたのだから。

「親の心、子知らずとは・・・良く言ったもんだ」

片やアレだけの罪を犯した大罪人であるが、フェイトに最後に向けていた眼は母親の眼であった。俺はそう思うし、ソレでいいんだと思う。それにもう真意を確かめることは出来ない。プレシアさんはもう目覚めることは無いのだから。

「どこまでも不器用で・・・優しい人だったんだな」

俺はそう呟き、自分のあてがわれた部屋へと戻って行った。

あれから数日、まだアースラが地球に居る時、プレシアさんは息を引き取った。

愛娘の為に狂ってしまったが最後は正気に戻っており、最後は眠

るように逝ったのだらうとアースラの医務官は診断していた。
犯罪者ではあったが、眠るように逝けたのは良かったんだと俺は
思う。

こうしてPT事件は主犯であるプレシア死亡により、全ての罪を
プレシアが背負う形で終結となった。表向きフェイトは利用され、
強制的にやらされていたという事になっている。

例え裁判になったとしても、フェイトはあくまでも強制された協
力者扱いになる為、無償奉仕が科せられる程度であるうとの事。つ
まり原作とほぼ同じってワケ。

そして彼女は・・・少しばかり塞ぎこんでいる。

原作ではどうだったかなんて覚えちゃいないが、明らかに母親が
死んでしまった事にシヨックを受けているようだ。

俺は思っただが、確かプレシアさんは原作ではそのまま虚数空間
へと落ちていた。だから彼女にとって原作のフェイトにとって精神
的なダメージは少なかつたんだと思う。

少なくとも死んだところを見た訳じゃない。IFの話で、もしか
したらアルハザードに到着していたかも・・・と、そう逃避がで
きる。ソレは無理だと理解する為の時間も取れたのだ。

だが今回、俺はそういった事考えることなく、プレシアさんを捕
まえてしまった。ある意味とても残酷な事をしてしまったと思っ
ている。

俺があの時、プレシアさんを放っておけば、少なくともフェイト
は、母がまだ死んでいないと心の内に思っ居られたと思うのだ。

本当に小さな希望を持って未来に臨むことが出来たのでは
ないか？・・・と。

プレシアさんを捕まえた事に後悔はしていない・・・だが、皆が望むハッピーエンドでは無くベターな結果しか出すことが出来なかった。

その事が少しだけ悔しいと、俺の心の中では思っている。せめて俺にもっと治癒の力があれば、もう少しだけプレシアさんの生きる時間を伸ばせたのではとも思う。

実に傲慢かつ身勝手な話しだ。客観的に見ればたった一人の少女の為に、末期の患者の苦しみを伸ばそうとしている人間と言う事になる。

俺はチートとはいえそこまで万能じゃないし、そこまで傲慢なつもりは無い。でもそう思ってしまうって事は、俺の中にはやはり傲慢で醜い人間の部分があるって事なんだろうな。

.....

.....

.....

さて、そんな事を考え付いた後、すぐにソレを破棄した俺は事件の重要参考人として収監室にいるフェイトとアルフの元に向かった。

やっぱね、俺がうじうじ悩んでもしょうがないんだよな。アレがああ時はベストだった訳だし、まさかここまでプレシアさんが病魔に侵されていたとは考え付かなかった訳だしね。

でもまあ、それでもちよいとばかり心配なもんだから、あの二人の様子を見に来たってワケ。

い、良いだろう別に？知り合いが落ち込んでるんだから心配したっておかしくないよな？

「ココか」

『収監室とはいうものの、タダの鍵付き部屋ですね』

「……まあ彼女がもはや何かするとは思えんだろうからな」

なんじゃかんじゃでアースラの人間は甘い、もちろんそれはいい意味でだけどな。

「……パスコード入力つと」

『悪いなノビタ、実はこの部屋、三人用なんだ』

「スネオ乙、というか三人用の部屋つて何だよ？」

『さあ？』

入り口のパスワードを入れると、パシュっという空気が抜けるような音がして扉がひらいた。こういうところが近未来的と言っかなんて言うか……まあいいか。

「……ども、様子見に来たぜ」

『こんちわー』

部屋に入るとアルフは床の上で胡坐をかき、フェイトは一応手錠をかけられてイスに座っていた。

「フェンかい？それと……？」

「ああ、今のはコイツ、俺のデバイスだ」

『どうもヴェイズです。面と向かって話すのは初めてですね。どうぞよろしく』

「はは、ごく丁寧なデバイスだね。よろしく」

とまあ、アルフは話しに乗って来てくれるんだが……。

「……………」

「（……………やっぱり相当ダメージが深そうだな）」

「（仕方ないさ、いけすかないヤツだったけど、フェイトにとっては大切な人だったんだからね）」

ぼーっと虚空を見つめ、心ここにあらずという感じである。

「おい、フェイトさ〜ん？」

「……………あ、フェン？……………あれ？いつ来てたの？」

「よお、ようやく気がついたな。ちなみにその質問に答えると、ついさっきだ」

彼女はさも今気がついたように俺を見る。まあ現に気が付いていなかったのだろうが……。俺はココ良いかと断りを入れてからもう一つのイスに腰掛ける。

「怪我はもう大丈夫なのか？」

「え、あ……………うん。前の時の傷はもうとっくに直ってるけど……………だけどなんで？」

「……………まあソレは口実にすぎなくて、ただ単に二人が心配だったから来た」

俺は立ったまま二人を見比べてみた。アルフはともかくフェイトは酷い顔していた。身内が死んだわけだし悲しくないワケがないか。

「心配？なんで？」

「明らかに無理してるだろう？飯も殆ど食べて無い」

そう、現在若干不安定なのだ彼女は……。食が細くなっている。このまま放置すれば倒れる事間違いないであろう。

「俺も親を失ったからかな？ 柄じゃないが、何か相談に乗ればと思っ……」

「……。。」

「無理して話す必要は無いが……。ありきたりで申し訳ないが、話した方が楽になる事もある」

俺はそう無表情で言う……。はあ、このボキャブラリーが乏しい俺の表情筋が時折恨めしくなるぜ。

さて、この後しばらく沈黙が続いたんだが

「……。ねえ、フェン」

「ん、なんだ？ 何か話したい事でもあるのか？」

「フェンは……。親を失った時……。どうだったの？」

ふむ、俺が親を失った時か……。

「今のフェイトと少し違うが似たような感じだ」

「え？」

「泣きたくても泣けない。俺の場合ココが壊れてたからな」

そう言っ俺は自分の胸の部分をトントンと指さす。

「心臓？」

「心だ、Heartでもいい。とにかく色々あつて俺は心が壊れていた」

「……」

「感情では、悲しくて寂しくて、チャチな言い方だが胸が張り裂けそうだった」

「だけど……泣けない？」

「今はそれほどじゃないがな。そうだと解った時すこし絶望したよ」

泣けるという行為は、本当に素晴らしいモノだと俺はおもつね。

泣くとか笑うとか怒るとか、いろんな感情が表せるからこそ、人間は人間らしく生きられるんだと思う。

「だから……そのな？俺が言うのもなんだが、泣けるなら泣いておいた方が良い」

「「フェン」「あんた」

「……あー糞、こう言うのは俺のキャラじゃ無い。こう言うのはなのはの仕事だ。俺の言った事は忘れてもいいぞ」

なんか言つてて気恥しくなつちまつたぜ。

「まあその、アレだ。心配してるって事を言いたかったただけだ。他意は無い」

「……ありがとう」

「ん さて、俺はそろそろ行くけど。それじゃあな」

「うん、色々ありがとうフェン」

「ああ……」

何か結局俺だけ言いたいことを言っていた様な気がするがまあ良い。俺はイスから立ち上がると収監室から出る為扉に向かう。しかし我ながら不器用なモンだ。

まあ俺の対人関係構築能力は、主人公に恐ろしく劣る訳だからいたしかたないと言えるけどな。

「プレシアさんの最後の言葉通り、強く生きてみようや？まずはそこからだと、俺は思う」

「そうだね。それが母さんの願いだもの」

とりあえずそれだけ言って俺は部屋を後にした。

Side 三人称

フェンが収監室を後にし、少し経ってからフェイトは色々と考えた。特に母からの最後に自分に向けられた言葉、冷静になって考えてみたらその理由もおおよそ理解出来た。

もっとも理性では理解しているモノの、この事を納得するのはまだ先だろう。だが、大分自分の中で折り合いが付けられ、整理が出来たと彼女は思っていた。

またアルフもフェイトとの精神リンクを通じて、彼女の心が大分落ち着いてきたのを感じ安堵していた。今まで少し塞ぎ気味だった主人が、少しだけ前向きになってくるのが解ったからである。

これはフェンに感謝しないといけないかもね。フェンと話した事により、フェイトの中でもややもやしていた事が少しだけ解決できた。

ソレを手助けしてくれたのはあの少年。

そう言えば

「考えてみたら、フェンがフェイトを助けるのってコレで何度目だろうねえ」

そう、なんじゃかんじゃいって彼はフェイトを助けていた。勿論表だって強力していた訳では無く、どちらかと言えば敵同士。だが

「そう言えば、フェンとはあんまり戦った記憶が無いね」

「だよねえ？ 私たちが最初に奇襲した後は、全然戦った記憶がないんだよねえ」

いざ考えてみたらおかしな子だったと、彼女たちは思った。妙に達観した感じといい年齢に似合わない程の冷静さ。かと思えば自分のデバイスと漫才をしたりして、騒がしいんだか静か何だかわかりやしない。

「最初いきなりジュエルシードを投げ渡された時はビックリした」

「いきなり渡されて落すとこだったよ」

この後二人はあの奇妙で不器用な友人の事で盛り上がった。そして結論としては、冷静だけど根は馬鹿でお人よしで収まったと言うが、ソレはまた別のお話。

「八神家よ！私は帰って（ry）」

「私は帰って（ry）」

妄想戦記

やっとこさ事件も終わり、久しぶりに帰ってきました八神家に。

「何か随分長い事帰って無い気がする」

『一週間もたつて無いんですけどねえ？』

「ココが八神家ですか？随分と普通のお宅・・・じゃないですね」

「あ、リニスには流石に解るか」

何気に隠匿結界が張られてるんだよなあ。管理局の目すらごまかせる程度のヤツ。ちなみに張ったのは俺。元々何故か張ってあったんだが、ウチの家主が管理局に見つかるのは不味いと思って、更に強力なヤツで、だけど周囲の住民にはバレ無いヤツを組んだのだ。

「何故結界があるんですか？見た所普通の家なのに」

「なに、ウチの家主は今管理局に見つかりと不味い人間でもあるの
わ」

「……犯罪者ですか？」

「いんや、むしろ被害者。とりあえず説明は後でいいか？」

玄関前であだこつだ言ってる居てもしょうがない。とりあえず家
に入ることにした

「ただいまあ、はやて、リインフォース」

『邪魔するでえ〜』

「邪魔するんやったら帰ってや〜」

『ほなサイナラ……ってちやうやる！』

ただいまを言ったら何故か吉本新喜劇になった。OK、ここは間
違いなく八神家だな。

「おお！このノリと突っ込み……フェン君達が帰って来たんやな
？」

「お帰りフェン。事件は終わったのか？」

「ああ、ベターな結果でまとまった。説明したいんで居間に行こうぜ？」

居間に向かう俺ら、だが当然お茶菓子を忘れないのが八神家クオリティ。居間のソファに座りながら煎餅を食べる。ああ落ち着く。

そして八神ファミリー一同に事件の概略を説明した。ヴィズの記録映像（地下廃棄場の映像は映さず音声のみ）を見せながらダイジエストにやったらコレどこの映画って言われた。とりあえずCGは使われておりません。全て実写です。

「で、カクカクシカジカで色々あって、猫さんを仲間にししました」

「ちよっ！そこ説明になってへん！ちゃんと説明しや」

え？しかたないなあ。ちゃんと説明してやるから耳カツポじって良く聞きな。

「正確には使い魔さんなんだけどな。リニス」

「はい、フェン君」

「おお！さつきからフェン君の膝に乗ってた猫さんが喋った！」

今まで黙っていたリニスが口を聞いたことに驚くはやて。

まあ今は山猫形態だから、喋ったら驚くよなあ。

「彼女はリニス、元プレシアさんの使い魔で、現在俺と契約を交わした使い魔さんだ」

「ご紹介にあずかりましたリニスです。どうぞよろしくお願いいたします。八神さん、リインフォースさん」

「ああ！丁寧にどうも」

「こちらこそよろしく」

ぺこりと頭を下げる猫に同じく頭を下げて挨拶するというこの光景、傍から見るととってもシユールだね。

「ちなみに彼女は人型になれます」

「トランスフォームと申したか？」

『どちらかと言えばメタモルフォーゼ？』

「さあ？変身の方が正しいんじゃないか？そこんとこどうなのリニス？」

「え？えつと・・・良くわかりません」

「使い魔や守護獣が何故変身できるのかは、ベルカでも謎だった」

要するに使えるんだから良いじゃないの精神か。ソレでいいのか？
使い魔契約？

・・・なんかそんな訳解らんもん使ってると思うと汗が止まらないのだが？

「そんで、リニス。もう知っているとは思うが、ウチの家主様の八神はやてと・・・」

「リインフォースだ。ロストロギア闇の書の管制人格でもある」

「闇の書？ソレって確か・・・」

さすがに悪名高いからリニスは知っていたか。

まあ彼女ものすごく頭良いしなあ。さすがはプレシアさんが作った使い魔さんだけ。

「もっとも、コイツに無駄な機能を吸い取られ、タダの魔法蒐集デバイスとなったがな」

「まさかマスターのレアスキルでこんなことになるなんて思わなかったですよ」

「ホント、寝ぼけて死にかけたから、ある意味割にあわん」

頭がはつきりしたらいきなり吐血してたもんな俺。

その後何が起きたのか説明したら、俺の事珍獣を見るかの様な目になったので悲しくなった。

そう言ったらゴメンなさいって言ってくれたから別に良いけどね。

とりあえず家主殿には気にいって貰えたらしく、一緒に住む事が許可された。

偶に猫になって撫でらせるのが条件だが、ソレ位問題無いだろう。
・・多分。

「それで、彼女は俺の魔法の先生してくれるらしい」

「え？フェン君魔法使えるんとちゃうん？」

『使えるには使えるのですが、30年以上前の魔法術式なので無駄が多いんです』

一からと言う訳ではないが、新理論を取り入れて燃費を向上させたりしないと疲れる。魔力切れは起こらなくても精神的な疲れとかはどうにもならないからな。

「リインに教えてもらった術式も、もう一度ちゃんと習いたいんだけど」

「ふむ、私は構わないぞフェン」

「ありがと、あとでホットケーキ祭りでもしてやんよ」

そう言ったらガッツポーズされた。ホットケーキは簡単に作れるから良いよね。

『序でに私も改造して貰えるんですよ』

「改造つて・・・まさかヴィズが人型に!？」

「いやそこまでしない。コレがコレ以上煩くなったら手に負えない」

「「あーなるほど」」

『だけど作るんですよ？わかります』

作んねえーよ。

「一応B Aの機能の強化及び仕様の変更、兵装デバイスの設定を変更に変えようかなと」

「ふむ、ならば私も手伝おう」

「現在のデバイスの技術は結構知っていますから私もお役にたてるかと」

「よろしく頼む、リイン、リニス」

考えて見れば過去の殆どの術式を網羅しているであろうロストロギアのユニゾンデバイスであるリインと、大魔導師の使い魔で、自力でデバイスを造れるマイスタークラスの腕前を持つリニスが協力してくれるなんて、なんて幸運だろうか。

「はあ、なんかええなあ、私かて魔法を使いたいんやけどな」

「まあまあ、とりあえず身体直してからだ」

何かふこうへいやー！と喚く子狸は無視したらへそを曲げそうになったので、慌てて機嫌を取るはめになった。本当に困った子だ、とりあえずリンカーコアの浸食による麻痺が完全に治ってからじゃないと、本当にどうなるか解らないっていうのにな。

「ぶー」

「ぶー？」

「ぶーぶー！」

「「ぶーぶーぶー」」

『なんとというブーイングの嵐！』

「とりあえずお茶入れて来ますね」

「「突っ込みは!?!」」

リンはにげだした。

「いや、何言ってもダメな気がして・・・」

ここはあえて乗るべきだろうリン。

「まだまだクンフーが足りひんな」

『しかしこの場合のクンフーはどうやれば積めるんでしょう?』

「それはアレや? 吉本見れば自然とこう」

「残念ながら俺達には関西人の血は入ってないんだ」

「なんか難しい世界ですね」

はやて以外は異世界人、使い魔、デバイス、ユニゾンデバイスと、この家の人口率の7割が人間じゃないと来たもんだ。いや、俺は自身が変質してるから9割方人間じゃないんじゃないか?

「俺はアレか？妖怪人間か？」

「早く人間になりたい〜って感じやな」

「だが残念ながらその逆をたどってたり・・・」

『最終的には私たちと似たような状態になりますからね』

たしかプログラム生命体だったか？

魔法生命体の一種で死ぬことは殆ど無いとか・・・。

「しかし目は真っ赤な緋色なのに、絹みたいな黒髪やな。やわらかくて気持ちええわあ」

「しかもフェン君の肌って凄く白くてきめ細やかなんですよね」

「顔立ちも女の子っぽいな」

「・・・まあね。自覚はしてる」

その昔、親戚との酒の席で女装させられたっけ。両親も悪乗りしてたし・・・。

「・・・なあフェン君」

「言っとくが女装はせんぞ」

何かヤバそうな気がしたので、先にくぎを刺しておく。幾ら女の子みたいな容姿でも、それだけは嫌なのだ。

「……………ライン」

「ハイ、主 バインド」

「おい、何のつもりだ？」

「いや私の中の知的好奇心がこうせよと囁くモンで……………」

「いやいやいや、ソレは知的好奇心じゃなくて悪魔のささやきだ。戻って来い」

「……………ちよつとだけ着せ替えるだけやから安心し」

安心できるか！何を着せかえさせるつもりだお前は！

何だか雲行きがヤバい、このままでは女装させられちまう！

「お、おいヴィズー！」

『おかけになった電話番号は、現在使われておりません。ピーという発信音の後に……………』

クソ！このヤロウ！お前電話違っだろうが！
俺は主人を裏切ったデバイスでは無く、最後の良心で頼りになる
使い魔に視線を向ける。

「リ、リニス！」

「にゃー・・・」

神は死んだ！
と言っかと思っただか！

「さらばだ明智君！バインドブレイク！」

「くっ！この家ん中は私のフィールド！逃げられるとおもっな！」

「だが断る」

「と言っ訳で再度バインドだ」

「アッ
」

この後、俺以外全員鬼という無理ゲーを行い、すぐに捕まった俺
マジでやめてくれと懇願した為、一応回避できた。何がとは聞く
な。

こうして一日は終わり、平和な日常が戻って来たのであった。

さて、それから数日

特に何かあった訳でも無く、俺はラインとリニスに手伝って貰い、自身の術式及びデバイスの改造を行っていた。

「リニス、プロテクション関係はコレでいいのか？」

「はい、今までのヤツには必要以上のラインが通っていましたから、こちらにすれば術式の強度、性能ともに、今までの十分の一以下で済みます」

「文字通り鉄壁になれるわけだ」

と、リニスに比較的ミッド式に近い多重プロテクション等の防御関係を弄くってもらったり。

「うーむ、随分とデカくなってしまった」

「仕方ないだろう。いまのフェンの魔力に合せたら自然とこうなる」

「コレ以上はフレームが耐えられないから、必然的に魔力刃発振部

のフレームを大きくしたら、それだけでトゥハンドソードサイズになるなんて思わなかった」

「これなら一応魔力刃を最大出力で出しても壊れない。最も分離機構が無くなったから二刀流は出来ないがな」

「俺の今までのスタイルは二刀流なんだけど・・・」

「大剣の使い方を覚えろ」

と、魔力刃術式と普通よりも上がってしまった出力に合わせた兵装デバイスの改良をしたり。

「ココはもっと柔軟性を持たせてみては？ココとココが干渉して間接の動きを妨げてますし」

「しかし素材が無い。コレ以上疑似物質で賄うのも限界がある」

「なら、半疑似物質にするというのは？」

「分子クラスでやるのか？それなら確かに剛性を持たせたまま柔軟性も維持できるが」

「リソースは喰うでしょうが、その分はヴィズのメモリを増設すればいけるでしょう」

「どれどれ・・・おー理論値だと今までより少し硬く、しかも消費はそれほどじゃ無いか」

と、装甲シールド及び装甲部分の見直しをしてみたりした。
んで、これまでの経過を家族会議の時に話してみた訳だが

「なんか魔導師と言うよりかは、機動兵器の方が正しいんじゃないか？」
「「「「「「「「「「「」

はやてにとても的を得た言葉を貰いつつ、続けて改造を加えて行った。

銃身及び砲身の改造、レール機構の高出力化、機関部を改造しM
TS-40だけで無く、通常のカートリッジシステムすら使用可能な
様にしたり、今まで飾りだった腕の盾を機能できるようにしたり
と色々と・・・。

やり過ぎた感が無いわけじゃないが、まあ実験みたいなものである。
しかし転移魔法を用いて闇市にデバイスパーツの買い出しにい
くとは、犯罪ギリギリというか犯罪だよな。

「・・・・・・・・・・」

『どうしたんですかマスター？』

「いやな？ココまでやって気がついたんだが・・・コレは改造じゃ
なくて入れ替えじゃないか？」

「改修と言うよりかはそっちの方がじっくりくるかもしれませんね」

「やっぱりそう思うっ？リニス」

「なんか必要以上に改造しちゃったっていつか、途中から目的を見失ってやり過ぎたと言っか。」

『そう言えば新しいBA？（バリアアーマーセカンド）の設計も終わるそうですね』

「ええ、デザインとかは私たちが話しあって、今度はベルカ式の騎士甲冑みたいな感じよ」

「ほう、それは楽しみだ。俺には秘密って事で全然見せてもらえないし」

「かなり洗練された文字通り甲冑で、通常時の魔力消費が一気に下がるのも特徴です」

『ただまああまりに弄くり過ぎて、肩の部分とかのアタッチメント機構が無いんですけどね』

さてさて、一体どんなヤツなのか気になる所だが

「やっぱり一度性能試験みたいな事をしないとダメだな」

「だけどこっちは派手な事ができませんが、どうします?」

「んー、そうだな……。」

「リイン、ちょっと」

「どうした?何かベルカ式強化魔法で解らない事でもあったか?」

「いや、アレは比較的簡単……という話はこっちにおいておいて」

『梱包して』

「お中元に……なんでやねん」

「とりあえず話しを続けられないか?」

「そうだった、では改めて話をこっちにおいておいて」

俺は手に持っているモノを置くジェスチャーをして話しを変える。

「リインは転移魔法使えるだろう?どこか性能試験をやっても大丈夫そうな場所しらない?」

彼女は俺たちよりもかなり長い間生きている存在だ。管理局がまだ見つけていない、もしくは重要度が低くて監視が居ない世界の一

つや二つくらい知っていると聞いたのだ。

「ふむ、データの中には幾つかあるな・・・条件は？」

「管理局に見つからないのはデフォで、なるべく生物が居なくて被害が出ない所」

俺がそう言つとデータを検索しているのか少し無言になる。しばらくして彼女が顔をあげた。

「・・・該当するのは3件程だな」

「とりあえずどんな所？」

「一つは文字通り何も無い岩だらけの荒野だ。生物は殆ど居ないがその分練習場所にはちょうどいいだろう。ただ」

「ただ？」

「希少生物が居るらしく、時折管理局が来てたりするらしい」

うん、管理局に見つかるのはちょっとな・・・、全部聞いてからでも良いか。

「うん、とりあえず全部聞いてからにしよう」

「二つ目は氷河の上だ。寒いが生物は0だし暴れても誰も来ない」

「……なにか問題は？」

「氷河自体が魔力の結晶らしく、その所為かブリザードが発生したら最後、魔導師でも必ず凍死する」

「ソレなんてエターナルフォースブリザード？」

命の危険が高いじゃないか。自然の猛威は予測できないからコレは却下か。

「最後は湖だ。その世界最大の湖でニフル湖というらしい。自然は多いが湖の上で魔法を使えば特に悪影響は無いだろう」

「生物は居るのか？」

「多少現地生物が出るが恐らく対処可能レベルだろう。一応人間も居るが湖周辺には住んでいないらしい。気候は暑くも無く寒くも無く比較的過ごしやすい」

『ピクニックにいったら楽しそうですね』

ピクニックねえ？……いいかもな。

「いつその事ソレも兼ねるか？」

「ふむ、まあ原生生物はちょっとかいをかけなければ大丈夫だろうしな」

「ならばやても連れて行ってやろう。魔法関連の事が見たいと言っていた」

「大丈夫でしょうか？危険な生物も出るんでしょう？」

「魔法使えるヤツが3人もいるから大丈夫だろう。いざとなったらラインが転送すれば良いし」

とりあえず行く人お弁当を用意せねばなるまい。そこら辺ははやてに相談すればいいな。

そう言う訳で、八神家の初めての異世界プチ旅行をすることになった。

勿論はやては大喜び、今までお預け喰らっていた様なものだから楽しみだろう。

明後日に行くと言う事に決めて、それぞれ準備を始めるのであった。

「今日は楽しいピクニックと言つ名の虐殺」・・・ジョークだよ？」

「今日は楽しいピクニックと言つ名の虐殺」・・・ジョークだよ？」

妄想戦記

「おお！綺麗な湖やーっ！」

「空気も綺麗ですね、排気ガスとかの臭いがしない」

「文明レベルがそれ程高く無いからだろう。化石燃料を使うエンジンがないからな」

『やっほー！』

「それは山でいうもんだらう」

ハイ、前回言った通り、今回は別世界の湖に来ております。見た感じはそうだなあ。琵琶湖並みの湖の水をものすごく澄んだ水にした様な感じですよ。普通に飲めます。

「中々の環境だな」

『別荘地によさそうですね』

「・・・いつその事作るか？」

まあ材料はそこらにある木を切れば良いだろうけど、人手も作り方も知らないから無理か。

さて、一応ココにはデバイスの性能検査の為に来た訳だが・・・。

「フェンくん！あそぼー！」
「了解だ」

とりあえず遊んでからにしようっと！

さてfrisbeeしたり、鬼ごっこ（はやてはおんぶされていた）したり、水辺を散策して楽しんだ後、今回来た理由の一つであるデバイスの性能テストを行う事にした。

一応湖の上で行う為、はやてはリニスと一緒に留守番である。リインと居た方がいいのではないかと思ったが、俺の身体の事もあ

る。
日に日にプログラム生命体へと変化し続けるこの身体故、新しい装備がどう影響してるか後で検査するんだとさ。それに一応リニスも戦えるから問題は無いらしい。

「さて、始めるか」

「そうだな。まずはB Aバリアーマー？（セカンド）のセットアップを行ってみる」

『すでにデータはインストール済みなので、初期設定を行い起動してください』

「初期設定か・・・アレ言うのはずかしいんだよな」

「文句言うな。そう言う仕様なんだから仕方ないだろうっフェン？」

初期設定っていうのは・・・まあアレだ？原作序盤でなのはさんがレイ八さんを起動させた時にいていた詠唱の事だ。ヴィズの場合セキュリティ上の観点から、システムの最初の起動の際には本人が必ず言う事になっている。声紋認識を兼ねていると言う訳だ。

「B Aと同じでいいのか？」

バリアーマー

『構いません。一度起動させれば後はこちらで最適化します』

「それじゃ、やるか」

正直言い辛くてあまりやりたくは無いんだが・・・。
まあ仕方ない、とっとと起動させちまおう。

「この身は剣、この身は盾、この身は杖、この身は銃」

詠唱を開始、ラインの形成により魔力光が発生して辺りを照らす。

「義には義を、不義には鉄槌を、その制約のもとに誓いを立てる」

初期認証術式が稼働、魔法陣が展開され、俺を包む。

「我は誓う、この身は全てを守る防人たかもりであると・・・グイーザフ！
BA?! 起動ッ！」

『All right! 全認証システム認証確認！初期認証完了！
よく出来ました!』

そして俺をセットアップの強烈な閃光が包み込んだ。

『BA? 起動確認、全システム異常無し、パーフェクトです』

光が収まり、やっと辺りが見える様になった。どうやら甲冑と言
うのは本当らしい。今までマニピュレーターのような腕が、重
厚な造りの手甲に変更されている。またマントなどの服飾品も追加
されたようで膝下まで覆える程の大きなマントをつけていた。

手甲にはギミックが付いているようで、左腕には接近戦用の小型
ブレードが自分の意思で出し入れが可能でアサシンブレードの様だ
し、右腕にはワイヤー射出機が追加された。

また関節部分がBAの時より可動する為、近接戦がデフォになるら
しく、現にデフォの装備はアルアッソーでは無く俺の身長程の大剣
となっている。

「成功したな」

腕を握ったり閉じたりして動作確認したの終えた所を見計らい、
リインが話しかけてきた。

「なんかおかしなところ無いか？自分では全体像が見れない」

「サーチャーを使えば良いだろう？」

「そうだった」

とりあえずサーチャーを使ってみた。ふむ外見はフルプレートア
ーマーで、襟立みたいな金属製に見えるネックガードからマントが
出ているのか、頭部ヘルメットは銃弾型で……ん？

「なあ、コレなんか見た事があるんだが？」

「……大丈夫、全然おかしく無いぞ？」

「いや見た事がある形状だと思つて……」

「べ、別に偶々家にあつたナウシカを見た所為じゃ無いぞ？」

「……あー成程」

デザインの元ネタが解つた……というか漫画見ながらデザイン
すんなよ。

「ナウシカに出てくる装甲兵が、しかも重コルベットに乗っている方の・・・」

マントの下はもっとスレンダーな別の鎧だが、マントをはおった時の外見は父王配下の上級装甲兵の姿にそっくりだ。

しかも見た目は愚鈍な癖にパワーアシストが強化されてるから、かなり素早いぞこれは・・・。

「・・・」

「いや、私はカッコイイと思うぞ?」

「・・・ラインにオリジナリティがないのがよく解ったよ」

「うぐ」

かっこいいとは思うぞ?確かに・・・だけど随分とコアだな。普通通選らばねえぞこんなの。

『あおう、今走査してたんですが、少しばかり問題が』
『どうした?』

『部分的に仕様を変更した所為か、アタッチメントが無いので、一部の兵装デバイスや術式をアシスト無しで手持ちしなければならなくなりました。それとバックパックが使えません』
「まじか?」

ぬう、ソレは困った。

『幸い飛行術式についてはジェットパックはタダのブースターの様なものですから、スピードは普通ですが飛べます。ただリペアの方が・・・』

「治療は使えるがパックが使えない分、性能が低下するか・・・」

リペアパックは膨大な魔力を消費する代わりに治癒能力を向上させるブースターパックだから、それ自身にあまり意味は無いけど、良く怪我する俺とかには結構重要な。

イヤ待てよ・・・そう言えば俺自己再生能力みたいなの手に入れたんだっけ？

「なんだ、実質問題なのは肩のアタッチメントくらいか」
『バズの方への魔力供給ラインの殆どはアタッチメントを通してましたから、砲撃性能が下がります。かわりに近接戦闘用兵装デバイスである“オートクレール”が使用可能です』

オートクレールは俺がセットアップした時に持っていた大剣で、デフォでの装備として登録されている。俺の身長並みの大きさだから結構扱いが大変そうだ。

「それじゃ、とりあえずオートクレールから確認するか？」

「ああ、そうさせてもらう。標的用のスフィアを頼めるかライン？」

「任せる」

「それじゃ、オートクレール起動」

オートクレールを起動すると、剣芯部分に自動で強化魔法が掛かる・・・コレがオートクレールのデフォルトか。

「・・・これ敵の弾も弾けるんじゃないか？」

「どうやら予想以上にフェンの魔力は多かったようだな」

「なんだか最近どんどん上がっている気がする」

「・・・あとで調べても良いか？」

「あとでな、とりあえず今はこっちが先」

そう言うと俺は剣を構える。そしてリインは形成しておいたスフィアを更に幾つか増やし、数が十を超えた辺りで、俺の周囲に展開させた。

「動き始めたら対処してくれ、出来るな？」

「もう身体が覚えるくらいやったことがあるから大丈夫だ」

「そうか、それでは行くぞッ！」

瞬間、弾けたかの如くスフィアの群が、四方八方から襲い掛かってくる。一斉のように見えて、その実タイミングを絶妙にずらしてある為、間隔が掴みずらいという実戦仕様だ。

だが、どれだけタイミングをずらしても、最終的に到達する所は同じである。

「ハアアアッ！」

ヴォンツ！

飛んでいるモノを斬り、迫るモノを叩き落す・・・ただそれだけでいいのだ。この実にシンプルな考えこそが重要である。それ以外を考えれば落されるのだから。

俺は大きく振り被り、円を描くように自身を回転させ、同時に来たスフィアを叩き落す。

「ラアツ！」

そしてそのまま、まだ攻撃してこなかった方のスフィアも落す。背後を狙うスフィアをヴィズからの警告で察知して回避。ソレを繰り返す事でモノの10秒もかかることなく、スフィアを全て叩き落した。

「次は普通のスフィアじゃ無いぞ！」

そう言われ出てきた20個程のスフィアは、先ほどより大きい。ラインの事だから何か仕組んであるとは思うが・・・。

「　　ツ！防御結界！？」

「ランクAのプロテクションと同程度の防御力だ。ソレ位斬り裂けねばな」

「・・・上等、魔力刃展開」

俺はそう眩き、その途端いままで何も無い只の剣だった剣身を覆う様に、かなりの規模の魔力刃が展開される。

「・・・収束率40%ってどこか」

レアスキルの副効果であるSランククラスの収束技術、それはなにも魔力を集めるだけの意味では無い。こうやって自身の魔力自体を収束させてエネルギー密度を高め、威力をあげる事も出来るのだ。

俺は次も同じように斬りかかる。スフィアは殆ど抵抗なく斬り伏せる事が出来た。こちらの出力がケタ違いな上、元々魔力刃って言うのはバリヤジャケットの様な防御魔法を斬れるように作られる為、特に問題なく斬る事が出来る。

そして、そのまま全部のスフィアを落したことで、この兵装のテストは終了した。

「どうやら問題ないようだな」

「ああ、今計測したけど、魔力刃展開時の剣身にかかる負荷値も想定内みたいだ」

「それなら実戦仕様に耐えられそうか？」

「問題無い。ベルカ式術式の技術提供に感謝する」

「うむ」

かなり頑丈だから盾の代わりとかも出来るだろう。リソースの関

係で魔力刃発生以外のギミックがつけられなかったのが残念かな。まあカートリッジ使えるからいいか。

「次はB Aに戻してその他の遠距離用兵装デバイス達を試してみてはどうだ？」

「そうするか・・・ヴィズ」

『はい、B Aへ仕様変更します』

再度俺は光に包まれ、B Aを以前から使用していたヴァンツァー型へとシフトした。外見こそ変わってはいるが、装甲シールドの術式を見直したりと手を加えたので、以前よりも負担が軽くなっている。

「では、M 8 2 A 1に代わる新たな遠距離兵装デバイスのご登場」
『グロウタスク、収納領域より展開します』

現れたのはかなり大きな対物ライフル、以前よりも込めてしまう魔力が上昇してしまった為、銃身の冷却装置を強化した装備である。また機関部の改造により、M T S - 4 0の他にカートリッジの仕様も可能となった。

「向う側に標的となるゴミを浮かべておいた」

「ありがとうございます、さて・・・狙い撃ちますか」

『マテリアルショット、エイム』

俺はそのままグロウタスクを持ち、銃身を1000m離れたゴミへと向けた。今回のライフルにはスコープが付いていない。ヴィズが補正してくれるので、正直ついていなくても問題無かったのでオミットしたのだ。

「……発射！」
ドウンッ！！

まずは小手調べ、通常の魔力弾のみの狙撃。かなりの弾速だがそれでも目で追える程度の速さの弾が、標的へと真っ直ぐ向かって行く。誘導が出来ないがコレだけ早ければ大丈夫だろう。

「着弾、良い腕だ」
「よし……」

無事に着弾したので術式を変更、レールブラスターの術式を展開し、更に威力と速度を上げて試してみた。

『レールブラスター準備完了、マテリアルショット、エイム』
「発射！」
ポッ！

グロウタスクの銃身から放たれた電荷を帯びた魔力弾は、プラズ

マ光を発生させながら標的を粉碎した。標的を貫いたので湖にも着弾、大きな水しぶきがココからでも見える。

「命中、威力がすさまじいな。軽い砲撃並みだろう」

『以前のに比べ、威力が30%ほど向上しています』

「・・・これは人間相手にカートリッジは使わない方が良いな」

「確かに、非殺傷でも相手に後遺症が出るかもしれない」

はて？非殺傷の定義は相手を殺さないだけで良かったんだっけ？

「コレも問題無し、砲撃は・・・カートリッジを使える様にしただけだから問題無いな」

「アレの負担は術者にかかるからな」

『マスターの場合、もしカートリッジを使った時魔法が不発になったら吐血しますね』

「ああ、綺麗な血飛沫が口からアーチを描く事だろう」

「・・・フェン、結構怖い筈なのに、想像したら怖くないのは何故だ？」

「シユールすぎるからだろう？」

そんな事を放した後、更にグロウタスクを数発試し、性能をじっくりと調べてみたが、特に何の問題も無かったので、はやて達がまつ湖岸へと戻って行った。

「……ごちそうさまでした」

「はい、お粗末さまや」

「午後はどうします?」

「ん、俺は休憩していたい」

お昼ごはんを平らげ、午後は休憩しようと思っている。つーか、
気温が春の如く暖かくてぽかぽかしてて気持ちいいとか反則じゃね?

「なら私もゴロゴロしたいです」

「私もそーしたいわ」

『家でゴロゴロしてるのと変わらない件』

「甘いでヴィズ、家の中と屋外とじゃ全然違うんや」

「確かにソレは言えるかも知れない。この陽気は反則だ」

喰った後だからすぐには横にならないモノの、かなり眠たく感じ
る。そう言う訳で午後はのんびり過ごそうと言う話になった。

「あつと、忘れていた。ちょっといいかフェン」

「何だ? リイン」

「来る前にも言ったと思うが念の為身体を調べたいのだ。もうなじ
んでいるとは思うが……」

あー、確かに安定しているとはいえ、俺の中には闇の書バグが融

合しているんだよな。

「いいよ、調べてくれ」

「ああ、それじゃ身体を楽にして、魔力も安定させて・・・そうそのままで頼む」

リインは片手に書を持ち、俺の身体を隅々まで走査していく。俺は邪魔しない様に身体の力を抜き自然体で構えていたんだが

「ん？なんだこれは？」

「・・・どうした？」

何か問題でもあったのだろうか？リインが俺の身体の詳細なデータが映された画面とにらめっこしている。

「吸い取られたプログラムの中に、魔力の流れを阻害しているプログラムがある。どうも上手く起動出来ない所為でリンカーコアのラインを妨げているらしいな」

「何のプログラムなんだ？」

「・・・記憶領域のプログラムだ。私のバックアップ用データだな」
「それ、放置しとくと不味い？」

「リンカーコアに近い、異常をきたす可能性があるな。まあ起動した所で只のデータでしかないからな。問題は無いだろうけど・・・どうする？」

バックアップ用データか、要はラインの元みたいなもんか？まあデータ何だから特に問題はなにか。放置してリンカーコアに障害と出たりしても嫌だしな。

「それじゃ、起動してくれ」

「了解した。すこし待っている」

こうして、彼女に起動を任せて、俺は胡坐かいて座っていたんだけど。。。

「……………っく！」

「お、おい、どうしたそんな顔して」

……………何故だかは知らないが、最初普通だったラインの表情が、段々焦りを帯びて行くのを見て取れた。マジで何があったんだよオイ。

「し、心配するな！ダイジヨーブだ！」

「……冷や汗流しながら棒読みで台詞言われると、ものすごく心配何だが？」

「……ちよつとだけ、失敗してしまった」

「……何が起きた？事情によっては怒るぞ？」

これでリンカーコアが傷ついて、魔法が使えませんかになった
ら俺首括るぞ？

「い、いやな？起動させたのはいいんだが……」

「いいんだが？」

「何故かほとんどん違うデータに書き変わってしまったって、しかも徐々にデータが大きくなっているというか……」

「……不味くないかそれ？」

「も、もうすぐリンカーコアに到達してしまう。もう止められない」

そう彼女が言うのが早いか、突如として身体の中を這いまわるような感覚が

「おい、なんか動いている感じがするんだけど？」

「うむ、今リンカーコアに到達した」

「なんだそのもう手遅れ過ぎてパニ来るところか逆に冷静になってしまったかの様な反応」

「……すまん！」

「そおい！」

リンと言い合っている間にも、身体の中を駆け巡る感じは止まらない。むしろ胸を中心にしてドンドン広がっているかの様な感じがする。

俺はあまりの事態に動くに動けなくて困っていたんだが

「おい！なんか足元に魔法陣が出来てるんですけど！」

「こ、この魔法陣はプログラム生命体の召喚術式・・・に似ている」「断言と違うのか！どうなるんだ！」

「だ、大丈夫だ・・・」

「・・・出来ればこっちの目を見て言って欲しいんだけど」

どうやら彼女も良くわからないらしい。ちかくにいたりニスやはやても異変を感じたのか駆け寄ってきた。心配してくれているが、何が起きるのか解らないので離れてもらう。

そして

「術式が完全に起動した!？」

『魔力反応増大！マスターの魔力でなにかが具現化します!』

「・・・俺、大丈夫だよなあ？」

俺の足元の召喚魔法陣が発動し、辺りを目も眩むかのようなまばゆい光が照らしていく。

そして、その光が収まると

「あー!」 はやて

「いい?」 リイン

「う?」 リニス

『えっ!?』 ヴィズ

「おー、・・・で、だれなんだ?この娘?」 俺

俺の腕の中に、とても小さな小さな妖精の様な女の子が、眠っていたのであった。

「今日は楽しいピクニックと言つ名の唐殺」・・・ジョークだよ?」(後書

オリキャラ登場ってな感じで。

「彼女は・・・だれ？」

「彼女は・・・だれ？」

妄想戦記

「あ、ありのままに起こった事を話すぜ？”気が付いたら自分の腕の中に、妖精の様な女の子が寝息を立てていた。”何を言っているかわからねえだろうが、俺にも何が起こったのかよくわからなかった。頭がどうにかなりそうだった。隠し子とかそんなチャチなレベルじゃ断じてねえ、もっと恐ろしいモノの片鱗を味わったZE」

『ポルナレフk t k r』

「OKだフェン、まずは落ちつこう。大丈夫、まだ慌てる様な時間じゃ無い。とりあえずタイムトンネルを見つけるんだ」

「フェン君・・・一体誰と？いつ？」

「みんなおちつき！大丈夫や！今ならまだ誘拐にはなってへん！」

「はやても落ちつけ」

やあみんな、現在色々とかオスっている八神家ファミリーだよ。前回俺の中にあつたプロگرامが突然起動したと思つたら、腕の中に綺麗な黒髪を腰まで伸ばした小さな女の子が眠ってたんだ。正直何が起きてんだかさっぱり過ぎて、頭の上を扇子をもつた小人が回っているくらいさ。

「……………よしみんな。まずは深呼吸して落ちつこうや？まずはそれからやとおもうし」

『「」「すーはー……………はい」「」』

はやてに言われ、みんななんとか正気に戻つた。

しかし俺の腕の中ですやすや眠りこけるこの眠り姫さんは一体？……………アレ？

「この娘、色違いだけどリインに似てるぞ」

「何やて!？……………ホンマや、寝顔が可愛いとこまでそっくりや」

ちなみにはやてはリインと寝起きしている。リインの寝顔云々を知っているのはその為だけど蛇足だからコレ以上は言わねえ。

「リイン、もしかしてこの娘……………」

「いや、だが……………そんな事有り得るのか？」

「しかしココまでそっくりだと、お前のバックアップ用データとおもうんだが？」

「ちよつと待て、今調べる」

そう言ってリインが走査しようとしたその時。

「うん（モゾモゾ）」

「う、うごいた！」

「いや寝返りうっただけだぞ？そんなにビクつくなよリイン」

何気にリインは怖がりさんだと言う事が判明した。

今度ホラー映画見せたらどうなるやるか？ そんな事を考え

ていたら・・・。

「・・・ふあゝ、おはようございます」

「あ、起きた」

ぐぐぐとあくびをしながら背を伸ばしつつ女の子が目覚めた。

そのままフツと浮かび上がる所を見ると、どこかリイン？を思い出すなあ。

「・・・」

「ええと、なにか？」

そして何故か俺の方を向いて、じーつと見ている。なんだ？

「夢・・・じゃない？」

「へ？いやまあ、ココは現実だとは思いますが・・・」

「本当に・・・夢じゃないんです・・・」

そういうとワナワナと身体を震わせる彼女。夢じゃないってどういう事だろうか？俺がそう考えていると彼女は突然バツと勢いよく

顔をあげ、そして

「本当に主殿だあ〜！ようやく会えましたあ〜！」

と言つて、俺の胸にダイブしてきた。

『「「「あ、主殿〜？」「」「』

「ハイです！主殿は主殿ですう！」

「俺の事か？」

「ハイです！何時も夢の中でお会いしたく思っております。本当に会えて感激ですう！」

ええつと、とりあえず言わなきゃならない事は、あれだな？

「とりあえず状況の確認をしよう。まずはソレからだ」

「ええつと、要訳すると君は、俺のと融合した闇の書の闇に記録されていたリインのデータから生れ出た存在なのか？」

「ハムハム、コクン。そうですね。本体は主殿と融合していますから、ココに居るのはその端末みたいなものですね、モグモグ」

とりあえず立っているのもアレなので、レジャーシートに皆で輪になって座り、彼女から話を聞いていた訳なんだが。

「ほらほら、お口が汚れてますよ。拭いてあげますからじっとして」

「はわわ、これはうつかりです。ムグムグ、ありがとうございます」

とりあえずおやつ用にリニスが作っておいたアップルパイを、偉く気に入ったようでパクパクハムハムと食べながら色々と話してくれている。

小さいので口の周りにパイの欠片をいっばいくつつけてしまうので、リニスが甲斐甲斐しく拭いてあげていたりする。まあ母性本能をくすぐられるんだろう。

「私のデータから生れ出た存在と言う事は、つまりは融合機なのかな？」

「そうですね。姉様」

「あね・・・さま・・・ぐう、こ、これはいい」

にぱと天真爛漫という言葉が似合う笑みをたたえながら、おつとりとした口調でリインに姉様と言った彼女。どうやら姉様と言われたのが、彼女の琴線にクリーンヒットしたらしい。なんか悶える。

まあ確かにそうと呼べないか。俺の中で再編される前はほぼ同じバックアップ用データ、しかも生れ出たのはリインが最初な訳だしな。おまけに色以外はそっくりだから姉妹というのも頷ける。

「たしかに、黒髪黒目以外はリインとそっくりやしなあ」

『さしずめリインフォース・アナザータイプと言ったところでしょうか？』

確かに色違いだからアナザータイプって名称が似合うな。

「ん？融合機ってことは、俺とユニゾン出来るのか？」

「はい、出来ますよう主殿。でも実を言うと主殿とは既に融合状態にあるですう」

「そうなのか？」

「今まではプログラムが起動して無かったのですう、融合状態とはいえその機能は使えなかつたのですよお。今は完全に起動しましたので、融合機としての力を発揮できるですう！問題は融合解除が出来ないところですけど、ユニゾン状態のオンオフは操作出来るので問題ないのですう」

なるほど、つまり今の状態がユニゾン状態のオフなんだな？んでこれからは任意にオンに出来るって訳なのか。

『と言う事は、マスター専用のユニゾンデバイスと考えればいいのですか？』

「その通りなのですよヴィズ姉え。でも端末である私がいれば、他の人もユニゾン出来るですう。もつともその場合、主殿から私を通じて魔力が供給されるので、普通のユニゾンよりも融合事故が起こりやすくなるハズですう。だから、あまりお勧めは出来ないと思

うのですよ、ハイ」

『ヴィ、ヴィズねえ・・・だと?・・・ぐう鼻から愛が噴き出しそう・・・鼻無いけど』

そう言うと、彼女はパクパクと再びパイにかじりついた。本当にお気に召したようで、既に二つ目に入っている。そんな彼女を微笑ましげに見ながら、リニスがお世話している所はまるで母と娘だなあ。

「はやて、なんかもう一人増えちゃったけど・・・」

「心配しなくても大丈夫や、家は広いから問題あらへん」

「迷惑かけます家主様」

「はわわ、家主様なのですかあゝ?それなら私もお願いしなくては」

「ええんよ、リンはフェン君の中にずっとおったんやろ?ならリンも家族やから追い出したりなんてする訳あらへんよ」

はやてがそう言うと、あまりの嬉しさに涙ぐむ彼女。そのまま俺の所に飛んで来て抱きつかれたので、とりあえずそのままにしといてあげた。・・・ん?

「リンって?」

「その子の名前や。リインフォースの妹やから混同しないようにしたんやけど、あかんか?」

「いや、良い名前だとおもう」

「ハイですう！今から私の名前はリンなのです！皆さんよろしくな
のです〜！」

そういつてレジヤースhirtに降り立ち、ぺこりと頭を垂れるリン。
反対派はいない様なので（というか全員肯定派）俺にとつても可愛
い妹が出来た様で嬉しい・・・もしかしたら、俺にも居たかも知
れなかったからな・・・俺が消えて2年は経っていた訳だし。

「それじゃ、リン。これからよろしくな？」

「ハイです主殿！リンは頑張るですー！」

「はは、愛いヤツよ」

「あわわ〜撫でられちゃいました〜！コレはリンをペット扱いにす
るつもりですね？わかりますう！」

・・・どうやら、俺からはネタをすることを受け継いでいる
ようだ。

というか何故にネタに走る？遺伝するのかアレは？

「ならば猫ハウスでも買って来るか？サイズもちょうどいいし」

「あやや！ソレは良いですう！いきなり一国一城の主なのですう！」

『そして下剋上で、他の猫に取られるんですね？わかります』

「ソ、ソレは嫌ですう〜！」

「だがリンは諦めずに猫と再戦するわけやな？」

「ならば、この身を猫に変えなくては、エイッ！」

とたんリンの姿が子猫に・・・まじで？

『変身少女k t k r!』

「すごいなリン、どうなっているんだ？」

「（私は今まで蒐集した生物の能力も使えるんです。おまけとして蒐集した生物の姿にも成れるんですよ）」

「なるほど、流石は私の妹だ」

「（姉様にも褒められました！リンは嬉しいのですハイ!）」

そう言うのと元の姿に戻り辺りを飛びまわるリン。というか何時の間にかリインがリンの事を妹とか言っているんだけど、なんでだ？

「また騒がしくなるな」

「ですね」

とりあえず、今日の所は引き上げる事にした。どちらにしる今日は日帰り目的だった訳だしな。そのままリインの転移魔法を用いて、我が家へと帰還するのであった。

さて、俺の第二の相棒ことリンが八神家にやって来た訳だが、とりあえず単体で何が出来るのかを計測してみた結果。

「攻撃、及び防御魔法はからつきしダメ」

「代わりに封印や策敵とソレのデータ解析、転移と回復系などの能力が高めと来たか」

『完璧に後方支援タイプですね。前線に出して絶対にいけないタイプです』

「なんか、相手を傷つけるのはいけないと思うです」

とまあ、こんな具合に後方支援は得意な子だと言う事が判明しました。しかし元々が闇の書の闇にあったデータなのに、破壊衝動が恐ろしく低いというか何と言うか・・・まあ優しい子と言う事にしておきましょう。

ちなみに、流石は闇の書と言うべきか、この子も蒐集が使える。もっとも守護騎士たちが使うソレとはちーとばかり性能がちがういや蒐集はきちんと出来るんだけどな？根本的におっとりとして優しい所為なのか、蒐集の負担が相手にかからないらしい。

本人曰く小さなラインで一気に引き抜こうとするから相手に負担が掛かるらしく、幾つものラインをつなぎ、そこから並列で蒐集を行えば速い上に相手に負担をかけないんだそうだ。

その分自分に負担が来るらしいけど、普通に魔法使った程度の負担でしか無いんだとさ。試しにリニスが蒐集されたけど、全然苦しくも何ともなかったんだと。

また俺が魔力吸収を行った際に、どうやら俺の身体にかかる負担を、半分以上肩がわりしているらしい。ソレを知った俺としては心苦しいのだが、本人曰く

「主殿が苦しむ所は夢の中で何度も見ていました。苦しむ姿を見て、肩がわりしてあげられたらと何度も思ったです。主殿の苦しみはリンの苦しみ、少しでも肩がわり出来る様になったのだとしたら、これ程嬉しい事は無いのです。それに、これくらいの負担なんて無限再生機構ですぐに治っちゃいますから大丈夫なのです。主殿は気にしなくてもいいんですよ」

と、自分は元気いっぱいだとアピールされてしまった。

俺としても俺への負担なんだから、この優しい娘に負担をかけたくは無いのだが、既に身体の機構はそうなるように組まれてしまい、今更無理には変更が効かない。

だからなるべく負担をかけないように、瞬間魔力吸収系は控えなければならぬだろう。

またフィードバックもあるらしく、俺が怪我すれば彼女も苦ししいし、俺が死ねば100%融合している本体も死んでしまう。これですます俺は死ぬことが出来なくなってしまうと言う訳だ。

まあもとより死ぬ気は無いから良いんだけどな。

またこのフィードバックにはメリットもある。蒐集した魔法のフィードバックなどがソレだ。つまりリンが蒐集した魔法は俺も行使する事が出来るんだそうだ。身体が付いていくかはともかく、相手の技術をラーニング出来るのだから、これ程チートな事は無いだろうなあ。

「ふむ、俺はさしずめ夜天の防人と言った感じか？」

「プログラム生命体化しているからあなたが間違っても無いな」

「ふわぁ、主殿！それかつこいいですう！」

『まあマスターの戦い方は騎士と言っより兵士ですからね。守りの兵士と考えれば、防人という言葉はぴったりかもしれませぬ』

ヴォルケンリッターより前に出て、立ちふさがる敵を粉碎するか……。うわぁ前の世界での仕事と変わんねえ。

「ところで、リンからカートリッジ用空薬莢を借りたがコレでいいのか？」

「はい、これなら大丈夫です。それじゃ主殿の貯まっている残留魔力を込めておくですう」

「ああ、頼んだ。定期的に発散が出来ない以上、こうやって溜められるのはありがたい」

「まかされたです！リンにお任せなのです！」

リンはカートリッジを作る事も可能らしく、今ちょうど目の前で実践して見せてもらったいる所だ。俺はどうやっても魔力吸収は0に出来ないのです、こうやって抜き出してもらえるのはありがたい。

普通の魔導師なら、魔力の常時消費量と吸収量とがほぼ一致するんだが、今の俺の場合吸収量の方が高いから定期的に魔力を吸いださなければならんだ。

「……………出来たです！」

「ほう、どれ？……………」

「エへへ、リンは頑張ったのですう！」

「あ、ああ・・・そうだな。偉い偉い」

「わーい！姉様に撫でられちゃいました！」

何と言うか、俺も規格外だが彼女も規格外だったらしい。

「おいヴィズ、このカートリッジを見てくれ、コイツをどう思う？」

『凄く・・・大きいです・・・』

「魔力が、だよな？」

『軍で使われていた正式タイプのカートリッジよりも3割程圧縮率が高いですね』

USNが採用していた軍用のカートリッジシステムは、当時簡単に手には入ったが、所詮劣化コピー品だった為、性能的にはあまり信頼のおける代物では無く、俺は自作したMTS-40の方が使い勝手がよかったので使用しなかった。

使っている内に薬莢が破裂したり、瞬間的に上昇する高魔力の所為でデバイスが破損したりと問題が多すぎて、使う人間は一部の上級将官か砲撃魔導師位だったからだ。

「しかし、圧縮率がかなり高いのにこれ程安定しているとは・・・」
『もとが純正の薬莢である上、リンの詰め方が上手いからでしょう』
「えーと、リンはなにか失敗してしまったのですか主殿・・・」

俺達が驚いていると、リンがちよつとシユンとした顔でこちらを伺っている。

いやいや、これはなんて言うかな？

「いや、むしろ凄すぎて驚いているというか」

『まあこのカートリッジを使えるのは魔力適正の高い肉体を持つ魔導師に限られるでしょう』

「ふえ？何ですかあ？」

「込めた魔力が多すぎるからだ」

カートリッジってのは圧縮された魔力を用いて、爆発的な力を得るシステムの事で、当然一気に魔力量が増大する訳だから、その分術者が行う操作は難しくなってしまう。このシステムが普及しなかった理由の一つに、この扱い辛さがあるがそれ以外にももう一つある。

「ココまで圧縮されたカートリッジの場合、使用した際の爆発的な力の増大に耐えられる身体を持っていないと、身体にかなりの危険がともなうんだ」

一般魔導師に普及しなかったもう一つの理由、それはリスクが高すぎると言う事だ。俺のように普通なら即死するくらいの濃度の魔力を流しても、数日寝こむ程度で済むほど魔力耐性が高い肉体なら、特に問題無く使用出来る。むしろ大量に使っても問題無いだろう。

だが一般クラスでこのカートリッジを使用すれば、たった一回の

使用でかなりの負荷を身体に与えてしまう事になる。恐らくAランク以下なら、このカートリッジを5回以上の使用でリンカーコアもボロボロになり、下手すれば廃人一直線である。

そこまでするくらいなら、遠距離でちまちまやった方が安全で確実だ。ベルカ式のように一撃に己の全てを賭けるくらい覚悟がなければ、正直ミッド式魔導師たちの間では使用されることは少ないだろう。それでも使うとすれば、自分の事を顧みない愚か者か、はたまた只の戦闘馬鹿くらいだろうか。

「まあ俺は多分大丈夫だろう。なにせリンを身体に入れても生きていられるくらい、魔法耐性は高いからな。これくらいのカートリッジなら3ヶタ使っても身体に影響は出ない」

以前から疑似カートリッジシステムのMTS-40を使っていたからな。それにレアスキルの訓練で魔力を吸うと言うのはやりまくったから、この程度なら屁でもねえ。

『そしてマスターはトリガーハッピーの如くカートリッジをロードするんですね?』

「アパム!弾持ってこい!」

「はいです!今作ります!」

「・・・今のはジョークだぞ?」

『リンもまだまだ修行が足りぬわい』

「め、面目無いですう」

「お前らはこの師弟か・・・」

まあこうしてリンの能力は判明したのであった。ユニゾンの方はまだ試していないが、おいおい判明する事だろう。別に急ぐ必要はない・・・時間は有限だが、まだたっぷりとあるのだから。

「さてと、今日はこれまでにしよう。時間も遅いしな」

「私は風呂の準備をしてこよう」

「なら俺はリニスと一緒に飯の支度だ」

もう夜になる事だし、コレ以上は後日に回そう。それにもうすぐはやての誕生日だ。色々準備せねばなるまいて・・・。

「えーと、リンは、リンはどうすれば？」

「そうさなあ、大きくはなれるか？」

「はいですー！」

「それじゃとりあえず食器を並べて置いてくれ、多分はやてがいるから彼女に指示を仰いでな」

「わかりましたー！リン頑張りますっー！」

彼女はそう言うと、俺と同じくらいの大きさになり、台所へと駆けて行った。俺もその後を追いつくりと歩いていく。こうして騒がしくも楽しく、そして嬉しい日常が過ぎて行くのであった。

「あ、明日は守護騎士たち用に服を買いに行かなければな」

「まかせろ、サイズは既にデータから出している」

「ゲツジョブだリン」

ついでに着々と騎士たちを迎え入れる準備も続いていたりする。

さて、はやての誕生日まで後少し、一体どうなる事やら。

「さてと、夢の対決ってか？」

「さてと、夢の対決ってか？」

妄想戦記

休日、俺は翠屋に向けて歩いてた。目的は翠屋のシュークリー
ム・・・では無く、ユーノ君から俺に当てる連絡が来ていたからだ。
何でもなのは魔法訓練につきあって欲しいんだそうだ。

元々緊急事態でなし崩しに魔法の世界に入ったモンだから色々
基礎がおろそか。しかもキチンとした練習相手がいない上、ユーノ
君は攻撃系がからつきらしく力を計れない。

そこで俺に白羽の矢がたったと言う訳だ。俺と模擬戦を行い、実
力を計りたいとそう打診されたのである。だが彼女の場合コレ以上
強くなる必要はあるんだろうか？

しかしココで断るのもおかしいので、とりあえずその打診を受諾
した。まあ今の彼女のレベルなら、俺でも十分相手になるとは思っ
ても何処でやるつもりなんだろうか？

「さて、ついた」

「ココが主殿が良く来られるお店ですか？なんか落ち付いた感じがするです」

「おっと、ココからは主殿は無しだ。一般人も多いから魔法も使うなよ？」

ちなみにリンもついて来ていたりする。なんか俺が出かけると言ったらリンもついていくと言ったのだ。彼女は普段はリイン？サイズなんだが、大きくなれるので外を歩くのに問題は無い。

「わかりましたです。あ、兄上」

『（リン、頬が赤いですよ。恥ずかしいのですか？）』

「あう、演技とは言え主殿を兄上と呼ぶのは恥ずかしいですう・・・」

「なら名前でも構わんぞ？一応店では親戚という風にするんだからな。なのは達だけなら・・・そうだな。使い魔として紹介するけど良いよな？」

「リニスねえさんと同じなのですか？嬉しいですよ！」

使い魔扱いで喜ぶなんて、この子はとってもいい子だよ。なおリニスは今回お留守番、なのははフェイトとビデオレターのやり取りをしているらしいので、一応の用心と言うヤツだ。彼女はまだフェイトに会える勇気がないのだから仕方がない。

「まあ、リンの呼びやすい方で呼んでくれ。それじゃ入るぞ？」

「は、はいです！ある・・・兄上！」

どうやら兄上でも固定する気らしい。外見的には俺と同じくらいに見えるんだが、まあこの年代なら個体差みたいな感じで結構似たりよったりだからバレねえだろう。

翠屋の中は相変わらず混雑していた。休日な上時間帯がちょうど客が集まる時間だからだろう。店長や従業員の方が、忙しくしているらしい。

入口に突っ立っていても邪魔になるだけなので、とりあえずカウンターへと向かった。

「こんにちは。ユーノとなのは来てます？」

「あら、フェン君。なのはに何か用事なの？」

ちなみに翠屋には、買い物帰りに何度か来ているので、桃子さんとも顔見知り程度の面識はある。何度かユーノ君と一緒に会話していた事もあるので、なのはの友人と認識されている事だろう。

「ええ、一緒に遊ぶ約束してまして」

「そうなの。あの子たちなら、奥に居るけど呼ぶ？」

「ええお願いします」

桃子さんが奥に引っ込み、すこししてなのはとユーノ君が現れた。どうやら店の奥で手伝いをさせられていたらしい。とりあえず桃子さんに一言言ってから翠屋を出る。

その後すこし歩いていたんだが、二人がチラチラとリンを見ているのに気がついた。

「ああ、紹介が遅れたが彼女はリン、この間仲間になった俺の使い魔だ」

「あ、そうなんだ。よかった」

「じゃコレで気兼ねなくお話できるね」

一応この後の説明で、リンは俺が拾った猫の使い魔と言う事にしておいた。流石に俺から生まれたユニゾンデバイスとか言っても信じないだろうしな。

「兄上に紹介されました。リンと申しますです。よろしくなのですう」

「ああと、僕はユーノスクライアよろしく。」

「私は高町なのはって言うの、よろしくねリンちゃん」

リンは持ち前のおっとりとした雰囲気、相手から警戒心を取り払えるのか、すぐにこの二人と仲良くなった。軽く自己紹介も済ませ、俺達は目的地へと向かう。

向かった場所は海鳴にあるフェイトと戦ったあの臨海公園だ。ここは普段でも人が少ないので、封時結界を使えば問題無く訓練が行える。

「で、どんな模擬戦がしたい？」

「え？どんなって・・・」

「近接戦が主体の模擬戦か、はたまた遠距離からの銃撃及び砲撃の撃ちあいがいいのか。それともただひたすら俺を攻撃して俺は逃げ回るのか、ソレの逆なのか。一口に模擬戦と言っても試合形式や文字通り実戦形式まで色々あるぞ?」

ちなみにココで言う試合形式は普通の模擬戦の事で、ある程度第三者が判定するタイプ。そして実戦形式は一応非殺傷だが、相手が棄権するか気絶するまで一切の戦闘行動を止めないと言うモノだ。

「事前連絡では力を計りたいとの事だったが、ソレはどの力を指している?」

「それは魔法の力の事だけど・・・」

「ふむ、魔法ね?だが魔法にも近接攻撃や遠距離攻撃、防御、加速など色々あるんだが、ソレらを全部ひっくるめての模擬戦なんだな?」

色々と確認したうえで、彼女はすこし考える仕草をする。

「うん、全部合わせた自分の力を知りたいの」

「それなら、実戦形式がいいな。ユーノ、結界の強化をしといてくれるとありがたい」

「わかった、リンも下がってた方がいいよ?」

「わかったです」

彼らが離れたので、俺達もセットアップして準備を行う。さてさ

て、見せてもらおうか？今はまだ未熟なエースの腕前と言うヤツを？

『（赤い彗星風台詞乙）』

「（地の文に突っ込むんじゃない！）」

ヴィズのヤツ、読心術でも極めたのだろうか？

「それじゃ最終確認だ。形式は実戦形式、相手が棄権するか気絶するまで終わらない」

「うん！今日はお願いな？フェン君！行くよレイジングハート！」

『All right』

そう言う杖を構える彼女。

「俺も久々の模擬戦だから、加減が効かない。痛くても恨むなよ？行くぞヴィズ」

『了解マスター！さあなのはさん、遺書はかきましたか？神さまへのお祈りは？部屋の隅でガタガタ震えて命乞いをする準備はOK？』

「ふえっ!？」

「あー、気にすんな。今のは漫画の台詞らしいから・・・たく始める前から脅かすんじゃない」

『ごめんちゃい』

ココに来てヘルシングネタすんじゃないやねえよ！このバカデバイス！

「ふー、仕切り直し、杖を構えろ」
「う、うん」

少しグダグダになったが、それでも模擬戦は行われる。
俺達はお互いに相手を見据え

「レールブラスター！」
「ッ！プロテクション！」

臨海公園にて激突したのであった。

Side 三人称

フェン達が模擬戦を開始した途端、白色の閃光と桃色の閃光がある時には絡み合い、時には爆発して臨海公園の中を明るく照らした。フェンが放ったレールブラスターを感一発で防いだのはが得意の砲撃で反撃する。

「デイベインバスター！」
「レールブラスター・フルオート！」

桃色の直線の極光が大地を抉りながらフェンへと迫ったが、フェンは慌てることなく脚部のローラーで高速にその場を後退、それに追隨する形で反撃し白い弾幕が空を埋める。

方や砲撃、方や弾幕、遠目から見ると何処の宇宙戦争だと言いたくなるような光景が、隔絶された公園の中で繰り広げられていた。

「これで！デイベインシューター！」

なのははデイベインスフィアを形成すると、計5発の魔力誘導弾を発射する。ソレらは各個に動き複雑な軌道を描きつつフェンに迫る。なのは自身が思念誘導しているのだ。最初こそローラーダッシュで避けたフェンだったが、まるでホーミングミサイルのようにしつこい魔力弾が避けても避けても迫ってくる。

「チツ、ヴィズ！」

『弾道予測、ロツクオン！』

「フォッククス2！」

フェンは逃げられないと判断するや否や逃げるのを止め、迫りくる魔力弾を魔力弾で相殺するという荒技を見せていた。ソレを見た彼女は凄く凄くと言いながら動きを止めてしまった。

「すごいよフェン君！何で当てられるの！？」

「ヴィズの性能と長年の勘だ。あとよそ見しない方が良いぞ？」

その言葉になのはは慌てて動き出す。模擬戦とはいえ動きを止めるなんて・・・母上に見られたら懲罰モンだな・・・とか考えつつもフェンは彼女が再び距離を取るまで待っていた。

どうやら彼女はかなり強くなっている。最初の頃とはあまりにもその魔力制御、威力、術式展開の速さが違う。コレが主人公補正と言うモノかと思いつつ、レールブラスターだけでは無理かとフェンは考えていた。

一方のなのはも、一筋縄ではいかないとは思っていたが、まさか全然本気で相手にされていない事に少しだけ悔しさを感じていた。だが、フェンは一応魔法に触れてから2年以上たっている上、普通なら経験できないような濃い経験を積んでいる。

おまけに次元航行エネルギー炉のエネルギー放出に巻き込まれた際の肉体変化、闇の書の闇吸収による強化変異を遂げているフェンを相手にできるなのはのほが、実は異常だったりするのだが、そこから辺の事を彼女は詳しく知らないのしょうがないだろう。

「ふむ、レールブラスターだけじゃむりか」

『アレは連射して当てれば強いんですが、彼女も連発して当てられないよう逃げていますからね』

「おまけに、防御が固い。十発も耐えられるとかどうよ？っと！あぶね」

フェンがいた所にディバインシューターが着弾する。どうやらなるべく死角を狙う様にしているようで、気が付くのが遅れたのだ。

『なんなら出力上げますか？まだ半分以上余裕がありますが？』

フェンは模擬戦と言う事でレールブラスターの出力を対人レベルに下げていた。何故かと言うと強化が進んだ所為か、非殺傷でも打ち所が悪いと洒落にならない威力になっている為、相手を怪我させないにはこうするしかなかったのである。

またシールド系も殆ど使ってはいない。多重シールドも模擬戦で使うと防御力が高すぎる為、生半可な射撃魔法ではどうしようもない。スターライトブレイカークラスの魔法砲撃なら貫けるだろうが、流石にソレを喰らいたいとは思わなかった。

つまり現在のフェンは、防御はヴィズが張る緊急展開のプロテクション、攻撃力は半分以下の縛りプレイで相手のレベルに合わせて戦っていると言う事になる。なまじ実戦的な装備を持っている所為という実に皮肉な話であった。

「フラッシュムーブ！」

「くッ！ローラーブースト」

なのははどうかやら遠距離戦では勝てないと判断したようだ。フレイヤーフィンが煌めき、一気に距離を詰め背後を取ろうとしてくる。至近距離からの砲撃が狙いだとフェンは判断した為、ソレを逃れる

為ローラーダッシュをさらに加速させたローラーブーストで地上を駆けまわる。

ついでに開始からずっとしている置き土産をしかけながら

だが、前方からまたもやディバインシューターが迫ってきた。おまけに後ろと左右からもそれぞれ迫ってくるので、彼は地上を駆けるのを止めて空中に躍り出る。迫る魔力弾達をまた銃撃にて叩き落していった。

「むう！シューターを撃ち落とすなんてずるいよ！」

「いやずるいって・・・」

『純粋なマスターの技術ですよ？』

「でも、なんかずるい！」

喋ってはいるが、戦いは続いている。放たれるシューターとバスターを時に撃ち落とし、時にかわしながらマルチタスクを用いて会話しているのである。これはかなりの高等技術であるのだが、案外普通にやっているコイツらは、普通から見たら常識外である事だろう。

「どうした？俺はまだアルアツソーしか使って無いぞ？」

「なら！レストリクトロック！」

「な！」

ソレは奇しくも、フェイトとの戦いの際に使用したバインド系

魔法。指定された範囲の相手をその場に固定し、捕縛輪で移動できなくしてしまう。そして彼女は自身の最大の攻撃魔法であるスターライトブレイカーを使う為、魔力収束に入った。

周辺にある魔力達が星のように彼女の持つレイジングハートの先端へと収束していく姿は、ある意味で幻想的で美しい。だが、その凶悪な威力は文字通り破壊者ブレイカーなのである。

「クソ！捕まった！・・・とか言うんでもおもったか？」

「え？ ドゴーンッ！ キャッ！」

なのはは何処からか撃たれた魔力弾の爆発の衝撃で、スターライトブレイカーを一度停止した。その時に集中が切れたのか、フェンのバインドも解けてしまう。

「どうだ？隠匿された魔法の味は？」

「い、今のフェン君の仕業？」

「そうだ。俺が何で地上をはいずりまわっていたと思う？」

フェンは今回飛ばうとせず、浸すら地上を逃げ回っていた。そして彼の得意な魔法の一つにミラーージュハイドが存在する。そしてソレの応用は、彼の得意技の一つだ。

「既にお前さんは弾幕の檻の中だ。降参した方が良いと思うぞ？」

「・・・だけど、フェン君の近くに居ればソレは使えない！」

そう言うとフラッシュムーブを使い、フェンの背後に出るなのはそのまま近距離攻撃であるフラッシュインパクトをフェンに叩きこもうとした。

だがフェンは特に慌てることなく、プロテクションで防御する。なのは戦闘スタイルは砲撃、そのためあまり近距離の攻撃は強く無い為、ただのプロテクションでも十分に防げるのだ。

「……おしかったな」

「え？」

『弾幕結界、作動』

その瞬間、周囲一帯からガルヴアドスが放たれ

ドゴゴゴゴゴゴオオオンツ！

なのはとフェンは爆炎に包まれたのであった。

「……状況終了、対戦相手は爆発の衝撃で気絶」
『マスターの勝利ですね』

そして爆炎から現れたのは、五体満足でたたずむフェン。そして彼に支えられるか形で気絶しているのはだけであった。

はふー、何とか終わったぜ。ガルヴァドスを周辺に配置していく
弾幕結界は結構いいな。俺を巻き込んでの爆発は緊急展開プロテク
ションを破壊したけど、強化した装甲シールドは耐えられたみたい
だしな。

しかしもつと設置する予定だったのに、案外速く使うはめになっ
ちゃったぜ。まさかあそこでバインドされるとは思わなかったんだ
よな。

とりあえず気絶したなのはを地上へと降ろす、見れば向うからも
模擬戦が終わったのを見ていただろうユーノ君がこちらに飛んでく
るのが見えた。リンも一緒である。

「おつかれさまフェン、なのはは・・・」
「すまん、加減がちよっと効かなかった。だが気絶しているだけだ
から安心してくれ」

とくに目立った外傷などは無い、と言うか傷ひとつないのだ。さ
っきの爆炎はいわば衝撃だけの偽モンみたいなモノだからな。まあ
普通に気絶出来るほどの衝撃ではあるのだが。

「兄上すごかったです！リンは感動しましたあ！」
「うんにゃ、凄くなんてない。なのはには失礼だったが、俺は手加

減をしていたんだ」

まあこう見えて一応数年は魔導師歴がある訳だし？それなのに始めてから数カ月もたっていない少女に負けたら、正直立ち直れない気がするけどね。

「手を抜いたって事なのですか？」

「違う、加減こそしたけど本気だった。なまじ俺の魔法は普通だと強すぎる」

『これが敵あいてだったら容赦なくブチ込めるんですけどねえ。マスターも甘いようで・・・』

「ふ、冗談はよせヴィズ」

「うーん？あつ！後半はギレンさんとキシリアさんとの掛け合いですうー！」

「よくわかったな？ある意味凄いぞリン」

うむ、やはりリンは愛いヤツじゃ。撫でなでしちやる。

「だけど凄いねフェンは。なのはを倒しちゃうんだからね」

「流石に始めてから数カ月しか経って無いヤツに負けられない」

「・・・ぼくは負けたけどね」

「・・・なんかすまん」

そう言えばユーノは自分じゃ相手にならないから俺を呼んだんだっけ？相手にならないって言う事は・・・まあ押して測るべきだな。

「でも、コレでよかったのか？」

「なにが？」

「模擬戦とはいえ気絶させるとか、下手するとトラウマだぞ？」

俺だつて母上との模擬戦の記憶の中に幾つかトラウマがあるんだが……。

「いいんだよ。なのはには自分よりももっと上がいることを理解して貰わないと」

「……何気にスパルタだな」

「教えると言つた以上、ちゃんと責任持たないとダメさ」

『ユーノ君は可愛い顔して、案外Sだつたようです』

「？Sつてなに？」

「うんにゃ、何でもねえさ」

まあ、自分よりも上がいると言つのは、向上心を得やすいだろうしな。特になのは頑固な面があるから、余計にそうなるだろう。……俺いつまで耐えられるかな？

727

「今日はいいい勉強になつたつてどこか」

「そう言つ事だろうね」

「……う……ん？」

「あ、なのはさんが目覚めたですっ」

俺達が雑談している内になのはが目覚めたらしい。

リンが教えてくれたので、俺達はなのはの方に向かった。

「よう、おはようさん」

「あ、おはようフェン君……あ、あれ？模擬戦は？」

「今回はなのはの負けだよ。気絶しちゃったからね」

「そうかあ、まけちゃつたのか。残念」

やはり負けは悔しいのだろう。少しばかりシユンとしてやがる。

「まあ俺となのはは相性が悪いからな。実戦経験も差がある。だが、かなりいい線は行っているともうぞ？これから先さらに修練積みめばどうなる事やら・・・」

そうなたら手加減無しで対処しないとダメだろうなあ。

「今回はなのはの負けだ。次に期待するぞ？」

「むゝ！絶対勝って見せるの！」

「望むところだ（本当は怖いけど・・・）」

こうして、なのはとの模擬戦は終了した。まあこのままいけば後数力月くらい経てば、俺も手加減せずに模擬戦を行えるようになる事だろう。それはそれで楽しみってとこかな。

「それじゃ、今日は解散か？」

「うん、そうだね。今日はありがとうフェン君」

「いいや、どういたしまして。それじゃあな」

「バイバイです。なのはさん、ゆーのさん」

「「ばいばい！」」

こうして俺はリンと共に、帰路に就くのであった。あーつかれたぞ。

臨海公園から帰る途中、俺はある事に気がついた。それは

「なあ、もうすぐがはやての誕生日だったよな？」

「はー！そういえばそうでしたあー！」

『守護騎士たちが現れるのも後少しということですね』

もうすぐはやての誕生日である6月3日になるのだ。

「プレゼントどうしようか？」

「リンは、リンは・・・どうしましょう？」

「・・・俺とリンからって事にしようか？」

「はう、お願いしますですう」

さて、問題はどんなプレゼントにするかと言う事であるが・・・。

「買うのもいいが、やはり手作りの方がいいよな？」

『ですね、気持ちを込めると言う意味では、既製品よりも手作りのほうが良いでしょう』

「リ、リンも作るの手伝うですハイ！」

そう言えばまだデバイスの材料が残ってたな。材料的にデバイスは作れないだろうけど・・・。

「よし、それじゃさっそく帰って作るぞ！」

「ハイですー！」

『了解！』

とりあえず作るものを頭に描きながら、俺達は急いで帰り、誕生

日プレゼントを製作するのであった。

「時間かかったあゝ」(前書き)

*今回は主人公視点じゃありません。

「時間かかったあゝ」

「時間かかったあゝ」

妄想戦記

S i d e リン

その日はいつもとちがい、たくさんのお料理と大きなケーキが、食卓に並んでいました。何でもお誕生日という特別な催しらしいのです。リンはお誕生日の知識はあるのですが、実際にメにするのは初めてなので、とっても楽しみなのです！

「ではグラスをもって・・・」

主殿がそう言うと、みんなそれぞれグラスを手にしました。今日はリンも大きくなっているので、グラスを手に持っているのです。そして主殿は全員がグラスを持ったことを確認すると、乾杯の音頭を取りました。

『「「「かんぱ〜い！そしてお誕生日おめでとう！！」「」「』
「ありがとう、みんな！」

ガチャガチャとお互いにグラスを乾杯させます。知識では知っていましたが、いざやってみると何かこう胸にこみ上げる感じがするのですから不思議だと思つのですう！

「きょうは腕によりをかけてつくりました。“夜の分”も用意してありますよ？」

「G」だ。リニス

「夜になるのも楽しみやな」

夜になにかあるのでしようか？う〜ん・・・覚えてないですう。

「でもケーキはリインがつくつたんですよ」

『ええ！リインがケーキを！？』

「リニスに手伝ってもらったがな。自分で言うのもなんだが、中々巧く出来たとおもう」

「うわあ、たのしみやわあ」

そして並べられたお料理をみんなで食べました。はやてさまの作るお料理もリンは大好きなのですが、リニスねえさんの作ってくれたお料理も大好きなのです！

とっても美味しくて、何故だか解かりませんが胸がぼかぼか温かくなったように感じるところが好きなのです！でもどうして温かく感じるのでしょうか？それがリンには不思議ですう。

そして今日はお誕生日パーティーという事で、普段では食べられないようなお料理が一杯出てきました。どれもこれもおいしくて、

つつい急いで食べてしまつのです。

そうやって食べているところを見たりニスねえさんは、仕方ない子ねといいながら優しくリンの口元を拭いてくれたのです。お母さんという人がいるなら、きつとこんな感じなんだろうなとリンは感じたのです。

料理を食べ終えケーキも食べたあとは、みんなでゲームをしました。リンは八神家にきてからまだ日が浅いので、こういったみんなゲームをするというのはまだしたことが無かったので、ワクワクしました。みんなでやったすごろくや人生ゲームは、何故かリン姉様がいつつもビリになつてしまいました。

そしてリン姉様は「私はやはり不幸しか・・・」と嘆いてしまいました。なので、みんなでリン姉様を慰めたのです。それでも暗いふいんき（なぜか変換できないですう）を纏ったままのリン姉様を、はやくさまが抱しめてなでなでして慰めていました。ふむふむ、相手を慰めるのはこうするのですね？勉強になるですう。

ちなみに主殿もリン姉様について成績が悪く「俺も不幸の星の元に生まれたのかな」と言っていたので、主殿が可哀想に思つたりんはそんな事無いですと言って、はやくさまがリン姉様にしたように、主殿を抱しめてなでなでしてあげました。

ぎゅーつとしばらく抱しめてあげていたら、だんだんと主殿は顔を赤くしていき「もう良いから、大丈夫だから、でも外ではしないよにな？」とリンを注意されました。どうやらこういった事はあまりしないほうが良いみたいです。うゝん難しいのです、はい。

そう言えばブツブツと小さな声で「違う！俺は・・・おれは・・・」とか「妹、なんという破壊力」とか言っていましたけど、どういう意味だったのでしょうか？リンはまだまだ勉強不足で判らないのですう。こんどはやてさまに教えて貰う事にするのです！

ちなみにこの時ヴィズねえさんが「そんなこと言ってる？本当はもっとリンから抱しめて貰いたいと思っただんじやないですかア？」とどこか意地悪げに主殿に言いました。すると主殿はさらに顔を赤くされました。

どうやら恥ずかしがっているという事が見て取れたです。でもそのすぐ後で「ちよっ！マスター？！その手に持った怪しげな工具は何・・・アツ　！」とヴィズねえを矯正・・・もとい、強制整備をなされたのでヴィズねえはリタイアしてしまいました。

まあそのすぐ後「ふははははは！私は蘇る！何度だって蘇るさ！」と言って復活していたのには驚いたです。完全に分解されてたのに、無限再生機構があるわけでもないのにどうやって復元されたのでしょうか？流石はヴィズねえ、謎だらけですう。これには主殿も首をかきげてしまったほどでした。

この後もゲームを沢山して、はやてさまが人生ゲームで一位になったところで、みんなが贈ったプレゼントをご開帳することになり

ました。

「わあ！ええ帽子やん！ありがとなりニス！」

「いえいえ、手作りの方が好きかと思いましたので」

リニスねえさんはお誕生日の料理と手編みの帽子を贈り

「おお！きれいな銀細工の指輪やんか！どうしたんコレ？高かったとちがうん？」

「材料自体は以前フェンがデバイスを改修した際に使用した、術式伝導体に使われている材料を使用しました。純魔銀製でベル力で古来からお守りに彫られている文様を刻んだお守りです」

「ありがとうな？私これ大事にさせてもうわ。こんなももらえるなんて、私はしあわせもんやなあ」

リイン姉様はケーキと指輪型のお守りを贈ったのでした。

リニスねえさんの作った帽子をかぶり、リイン姉さまの作った指輪を撫でながら、はやてさまはとても喜んでるように見えたです。

『あらー、ちよつとリインと被ってしまいましたね』

「まあ、コレもある意味お守りだからな」

ハッ！そう言えばそうでした！ちょっとリイン姉様とリン達がつくったプレゼントの内容が、かぶってしまったですう！つくったのはペンダント、主殿とリンからのはやてさまへのプレゼントなのです。

「おお、シンプルな卵型ペンダントやな」

「横の突起を押ししてみな」

「？わかった。おお！開いた」

「中に写真を入れて置けるようにしておいた」

そうなのです。デバイスの材料を用いてつくったのは、写真を入れられるペンダントなのです。

しかも、リン達がつくったので只のペンダントではないのですう！

「コレには、非常時に防御魔法が張れるようになっている」

『リインのが精神的な守りなら、われわれは物理的な守りな訳です』
「なのですう！」

デバイスとかが張る障壁に比べたらおもちゃのようなものですが、それでも緊急時にはちゃんと作動する障壁を張れるですう。一応乗用车くらいの衝突なら防ぐ事が出来るです。

「リンが術式を考え、ヴィズが設計し、俺がつくった守りのペンダントだ」

『私たちからのプレゼント、受け取ってくださいね？』

「うん！うん！みんな・・・ありがとう！こないに嬉しい事なんてないわ！」

そういうとはやてさまが泣き出してしまいました。なにか悪いことをしてしまったのでしょうか？そうヴィズねえに尋ねると、まだまだ修行が足りないといわれてしまいました。

それをみた主様が、あれは嬉し涙という嬉しい時に流す涙だと教えてくれたのです。なるほど、人は嬉しい時にも泣くのですね？また1つ理解しましたです！

さて、この後は私とヴィズねえさま以外でマージャンというゲームをしていました。私はルールがよくわからなくて、見ていただけでしたが、見てると何故か“ざわ・・・ざわ・・・”という空気が伝わって来たですう。アレはいったいなんだったのでしょうか？

「ふあゝ、主殿ゝリン眠くなってきたですう・・・」

「ん？じゃ寝ても良いぞ？しばらくかかるだろうし」

この時リンは眠たくなってしまったので、そのまま寝てしまったのですう。リニスねえさんがお布団をかけてくれた所までは覚えていましたが、その先はもうぐっすりと眠ってしまったので記憶はありません。

ですがしばらくしてから、身体が急に苦しくなってきたのです。まるで体から何かをひっぱりだそうとするかのような苦痛。でも何故か苦しいはずなのに、気持ち良いと感じてしまいました。何故な

のでしょう？

「う、うん？」

でも流石に寝ていらなくなつて、リンは目を覚ましたのです。ですがその時リンの視界に入った光景を見て、リンは言葉を失つたのです。

「無理、もう無理・・・やめてえ」

「あと少しなんだ！フェン我慢してくれ！」

「フェン君！しっかり！」

「フェン君！きばり！あとちよつとや！」

『マスター！がんばって！』

見れば主殿を下に組み轢いたリン姉様が、書を片手に管理ウィンドウを開いて、主殿から何か光の球のようなものにラインを引いていたのが見えたです。まわりでは何故か他の皆さんが主殿を応援しているです。い、いったいリンが寝ているうちになにが起きたのですか！？

「い、いったい何が起きたの「よし！とらえたぞ！」「ふえ！？な、なんなんですか？」「ミギヤアアア！」

「キヤアアア！」

再び体を襲う痛み、コレは今、主殿が感じている痛みなのです。それを肩代わりしていると思えばリンは全然苦しくは感じません。

むしろ気持ち良いと感じられるくらいですう。ですがそれでも襲い掛かる痛みに耐え切れず、リンの視界は暗くなっていたのを感じたのですう。

ハッ！これはもしかや三途の川フラグ！？とか考えていたリンは、視界の端に赤い髪をした女の子が倒れていた事に気が付きませんでした。むしろこの時、リンの脳裏に浮かんでいた言葉は

「コレ・・・なんてカオスですう？」

そうってリンは意識を落としたのでありました。

s i d e o u t

S i d e 三 人 称

さて、時間はリンが眠りこけるほんの少しだけ遡る。

「ああ、あと少しで0時やな」

「ええ我が主」

「だな」

「ですね」

あと数分で0時になるという時間、はやて達はマージャンをする手を止めて同時に時計を眺めていた。闇の書、もしくは夜天の書に搭載された守護騎士プログラム達、それが今夜0時をもって解禁されるのだ。しかし解禁って書くとなんか酒のようだ。

「でもホント今でも信じられへんわ。去年の今頃はこんなににぎやかになるとは思ってたし」

「それは私も同感です。フェンが引き上げなければ、私はココにはまだ居なかった」

「フェン君は色んな所に首を突っ込んでますね。・・・いつか大怪我しそうで心配です・・・」

「せやな。そう言う訳やからフェン君？気いつけなアカンで？」

「おっしゃる通りでござえやす。返す言葉もございません」

「そかそか、ならばいいんや」

そう言ってハハーとはやてに向け頭を垂れるフェン。その姿はどこか殿と家臣の姿っぽく見える。しかしコイツらノリノリである。

『ま、危なっかしいのは昔からですがね。何度死にかけた事か』

「し、仕方ないだろう？そう言う世界だったんだから・・・」

『そうですね。私が治癒をやってなければ今頃いませんね』

「ははーヴィズさま、今後ともお願いいたします」

『うむ、任されよ！・・・まあ今じゃリンの方が治癒の力は強いのですがね』

「そう言えばリンはどうしたんや？さつきから姿が見えへんけど？」

先ほどから姿の見えない小さな少女、彼女は基本的に良い子なので10時になる前に既に熟睡モードに入りうつらうつらしていた。その為その後眠ってしまったのでリニスが布団をかけてソファの上に寝かせて上げていたのだ。

何故ベッドでは無いのかと言うと、一応もうすぐ守護騎士が現れるので、彼らの腹違いの妹の様なリンの顔見せも兼ねていたからである。何せ基幹システムは改変されたとは言えリインのソレなのだ。守護騎士たちにとっても妹と行っても過言ではないのだ。

「リンなら、ソファの上で熟睡中」

「一応守護騎士たちが現れたら起しますけど・・・やっぱり顔見せは明日の方がいいかしら？」

「うーん、せやなあ。なんかリン見てると起したらアカンような気分になつてくるわ」

『良い子は夜ふかししないと云うか、良い子は夜ふかし出来ないんですね』

「ヴィズ、ソレは言外に私が良い子やないといってるんか？」

『いいえ、いつもならこの時間はやてさんは就寝しています。今日は特別なのでしょっ？』

「わかってるやないの」

雑談を交えながら平和な時間が流れて行く、そして

「主はやて、書が起動準備に入りました」

「いよいよや・・・なんか緊張するわぁ」

「肩の力を抜けば大丈夫ですよ」

「ありがとうリニス」

そうこうしている間に、空中に浮かびあがった書。光を纏い始め軽く振動しているのが見て取れる。そしてその光がいよいよ強くなり、目も眩むかのような閃光。そして

「・・・え？あれだけなん？」

「い、いえ！そんな筈は！？」

「？普通なら今のフリで出てくるよな？」

「フリって、バラエティじゃないんですよフェン君」

光るだけ光っておいて、何も起こらなかった。色んな意味で予想が外れて驚くはやて、それに焦るリイン、純粹に疑問に思っ

たフェン、フェンに突っ込みを入れるリニスと続く。

「ちょっとお待ちを！すぐに原因を特定・・・いやちょっと待てよ？
フェン」

「あいあい」

「そこに座れ、もう一度検査させる」

その言葉に啞然とした表情を浮かべるフェン。ソレもそうであろう。今回の事について彼は何の心当たりもない。突然調べさせると言われれば困惑もする。

「・・・今回の件は流石に俺とちがうぞ？大体、前に一度精査したじゃないか」

「見落としがあったかもしれない。というかこういった場合大抵お前に原因があるだろう？」

「・・・否定できん」

「仕方ないやん。すぐ終わるんやろ？」

「勿論です主」

「ほならとつと調べてみよか。原因も解らんことやし」

はやてにも促され、大人しく精査をされるフェン。傍らにはリニスが付き添っている。その間にも精査は続きリンの手がリンカーコアがあるとされる胸のあたりにて止まった。そして更に集中しその部分を解析していくリン。

「おもったとおりだ。お前は守護騎士システムまで吸収し

ていたのか」

固まるフェン、そりゃ確かに色々吸いだした記憶はあるが、まさかそこまで吸いだしていたとは予想外だったようだ。だが、闇の書の管制人格であるリインが何故今まで気がつかなかつたのだろうか？そう疑問に思ったフェンは問いかける。

「こちらとて驚いた。まさかこちらにあるのが1人を除き外装だけで、核となるプログラムだけ吸い取っていたとはな。ソレでは一見しただけでは幾ら管制人格たる私でも解らん」

「相変わらずフェン君は私らの予想をはるかに超えてくれるんやな」
「……どうすればいいんだ？」

面喰ったままの表情で訪ねるフェン。まさかこんな土壇場に来てこんな重大事が判明するとは思ってもよらなかつた様である。流石に騎士たちを放置する訳にもいかない為、解決策をリインに求めた。というか相変わらずこの主人公規格外である。

「騎士たちの起動プログラム自体は私の方にある。だから一度フェンから引つ張り出す必要があるな。蒐集を利用すれば出来るだろう」
「ようは俺がした事の逆を行う訳か」

『でもまあ、慎重にしないとデータが改偏されて、リンみたくアナザータイプになったりして……』

その可能性は無きにしも非ず。現に一度リインフォースのバックアップデータによってリンが誕生しているのだ。可能性として無く

は無いのである。もっともそれを聞いたリインは、もうミスはしないという顔をした。

「その心配は無い。それに私と騎士たちとは少しばかりプログラムが異なる。私は単独で実体化出来るが、彼らは管制からの指示が主からの指示で無いと召喚できない」

『つまりは騎士たちの方が改変されにくいと?』

どうやら無意識のようだが、リインの方が騎士たちよりも上位存在だと言っているようである。彼女は全然気が付いていないので蛇足ではあるが・・・ソレはさて置き、とりあえずフェンから騎士たちのサルベージが行われる運びと相成った。

「希少技能は最低出力まで押さえてくれ。そうで無いと引っ張り出せない」

「・・・なんでみんなで俺を押さえつけてるの?」

「いやーなんて言うか・・・」

「・・・気分的な問題?」

「速く始めてくれ」

「わかった。では行くぞ　　!!!」

そして気合を込めて一発・・・と言う訳ではないが、リインは書に記憶されているプログラムを次々展開、とりあえずは守護騎士の召喚プログラムを呼び出した。コレを起動してからフェンの中にあるデータを引き抜き、そのまま実体化させてしまつらしい。

「あ、その前に約一名を出しておかねば」

どうやら約一名だけ普通に入ってたらしい。術式が起動し一人の守護騎士が顕在化する。

「なあなあフェン君、この子も騎士なんか？」

「ああ」

「にしては偉く可愛らしいんじゃないの？」

「ご心配無く、なりは小さくとも、立派なベルカの騎士です。ちなみに名はヴィータと申します」

「ヴィータか。そかそか、うん。覚えたで」

そこに現れたのはおさげの少女、鉄槌の騎士であるヴィータであった。黒いぴったりと体にフィットする服を身にまとい、この場に現れたのだが……。

「あら？気を失ってませんかこの子？」

「イレギュラーな召喚だからな。少しばかり何時もと異なるせいだろう。なにデータ上は問題無い」

どこかで不具合でも出たのかはわからないが、気を失った状態での召喚となってしまった。しかし一人だけ召喚とは……ある意味哀れな。

「とりあえず別の場所に寝かしとこか。寒そうな格好やから炬燵にでも入れて貰えばええわ」

「わかりました」

リニスはそう言うとヴィータを抱き上げて炬燵へと連れて行った。どこか手付きが慣れているのはフェイトにもそうしたことがあったからだろうか？まあソレはさて置き。

「ちゃっちゃっと済ませてくれないか？いい加減フローリングが地味に痛い」

我らが主人公は今だ組み轢かれており、速く終わってほしいと願っていた。

「ああ、すまん。それじゃ今度こそ！」

リインはプログラムを起動させ、蒐集を開始する。

「ぐあ！コレが本当に魔力を吸われる感覚か・・・イテエ」

どうやら結構痛むらしい。最初は痛いと言っていたが徐々にソレも言えないくなるくらい。つまりマジで痛いレベルに到達したフェンだったが、幾ら眼で訴えても相手が歯の治療を行う歯医者のように

に理解してくれない。つまり痛いと言っても続ける為、我慢するしかない。

「無理、もう無理・・・やめてえ」

「あと少しなんだ！フェン我慢してくれ！」

「フェン君！しっかり！」

「フェン君！きばり！あとちょっとや！」

『マスター！がんばって！』

周りでギャラリィが応援するが痛みは続く。速いところ終わらせてくれないとリンが起きてしまうと考えたフェンだったが

「よし！とらえたぞ！」

「ミギャアアア！」

「これ、なんてカオスですか？」

そう言ってパタンと倒れる音を聞いたので、もう手遅れだと理解した。

「よし、核を見つけた！後はコレを・・・！」

フェンから核となるデータを抜き出すことに成功したリインは、そのまま守護騎士たちの召喚に踏み切った。だがこの時彼女はある重大なミスを犯していた事に気がついてはいなかった。

「術式展開！召喚開始！てあつ！」
「みやああああ！！！」

魔力が渦巻き、ソレらが3体の人の形を作り上げていく。やがて光は勢いをなくしていき、視認できる程度に落ち着いた。

「ふう、成功・・・？」
「これは・・・どうなんや？」

そしてその場に現れたのは、3人の10歳くらいの子供たち・・・というか、そのくらいの大きさに縮んでしまった人間とでも言えばいいのか？簡単に言うとか背とか何か足りないと言う感じである。

「騎士シグナム契約の元、ここに馳せ参じました」
「契約の元に騎士シヤマル、ここに」
「・・・」

彼らは平伏したまま口上を述べる。だが肝心のウィータは気絶中。

「・・・おいウィータ。お前の口上だぞ」
「あ、あれ？ウィータちゃんは？」
「それよりも、俺達何か背が低く無いか？」

ココに来てやっと一人足りない事に気が付くヴォルケン達。その事には主であるはやても少しだけ苦笑い。

「おーホンマに現れたけど・・・」

「ふむ、どうも外装が間に合わなかったみたいだ」

「・・・おまえは管制人格！」「」

「やあ騎士たち。ちなみに今の私にはリインフォースという素敵な名前がある。そしてとりあえず落ちついて欲しい」

そして仕掛け人ならぬリインフォースが彼らの前に姿を現した。居る筈の無い人物がこの場に居る事に戸惑いを隠せない彼ら。

「ま、とりあえず色々と話したい事もあるんやけど、そう言ったのは明日や」

「主はやての言う通りだ。説明は明日行う。今日の所は休め」

「あ、ああ。それは良いんだが・・・」

「あのう、そこに倒れている男の子は大丈夫なんですか？」

見ればフェンは先ほどの無理やりデータを引き抜いた衝撃で気絶している。若干胸を押さえビクンビクンとしているが、もう八神家レギュラー陣は馴れたもの。特に気にしている様子は無い。

「大丈夫や、フェン君は死なない子やもん。というか死んでも生き返るやろうし」

「ああ、この規格外の馬鹿が死ぬ筈は無い」

「・・・既に死ぬことが前提になっている段階で怖いのだが？」

寡黙な印象を相手に与える犬耳男ことザフィーラが、率直な感想を述べる。だがあながち間違いで無さそうに見えるくらいの痙攣をしている少年がいるので、何とも言えない空気が辺りに漂った。

「・・・あー、死ぬかとおもった」

「あ、お帰りフェン君、臨死体験はどうやった？」

そしてしばらくして痙攣していた少年フェン君が普通に復活した。

「ああ、久々に前の部下たちとあつてきた」

『コレで通算10度目ですね。そろそろ霊能力に目覚めるのでは？』

「……（唾然）……」 ヴォルケン三人

そして復活した少年ことフェンが、何事も無かったかのように起き上がる。話しの内容からして臨死体験をしたようである。あまりの事に開いた口がふさがらない剣の騎士、湖の騎士、盾の守護獣の3人が呆然と立っていた。

こうしてヴォルケンリッター達は召喚された。

どこかグダグダな空気を纏ったまま彼らは八神家へと迎え入れられたのである。

全く持って閉まらない状況であった。

そしてリニスの作った夜食は、後で関係者一同で美味しく頂きました。まる。

「日常…非日常？」（前書き）

* シグ姉さんは元に戻して置いたぜ。それでももおkな方はどうぞ。
嫌ならブラウザバックしてください。

「日常…非日常？」

「日常…非日常？」

妄想戦記

さてさて、ヴォルケンスが召喚されて？というか俺から引き出されて早数週間が経過した。最初背丈が縮んでいた彼らも、ラインの最終調整によつて普通サイズ、要は大人の姿へと戻された。

流石にあの背丈は嫌だったらしい。だがライン曰く、まだ調整は不安定であり、下手したらまたあの姿に戻るかもと聞かされた時は、流石にどう応えて良いのか解らんかったわ。

そして後日、今だ困惑しているヴォルケン達にしたのはとにかく説明だった。何故管制人格である筈のラインフォースがこの場において、しかも平然と生活しているのとか色々。

闇の書がバグを持ち、本の持ち主となった人間を食いつぶしていたとか言う事実にも目を見開いて驚いていた。第三者の説明ならともかく管制人格ご本人からの説明だ。信じない訳にも行かなかつた

のだろう。

当然、今までしてきた所業というのがある訳で・・・まさかシグ姉さんが腹切りしようとするとは思わなかったぜ。はやてとかと一緒にになってなだめるのにスゲエ苦労した。というかプログラム生命体なんだから腹切っても意味がないだろうにな。

まあ、そんな訳でいろいろとあったが、現在の彼らのはやてとの関係はかなり良好である。彼女は騎士たちの過去は気にしていない。むしろ家族がまた増えたと純粋に喜んだのだ。

騎士たちもそんなはやてを主であると認めている。故に彼らの絆もまた深い。コレもはやての人徳が為せるワザと言ったところだろう。

ちなみに俺と騎士たちの関係はと言つと

例1、剣の騎士さんの場合

「今日もよろしく願いたします」

「よし、ではどこからでも掛かって来い！」

「行きます！はああああ！」

木刀を構えて、魔法は強化以外使用禁止の模擬戦を行う。最近は大体30合ほど斬りあいを行うのがノルマとなっている。というか俺が素のパワーで渡り合える限界がこれくらいだし、強化しても息が上がるくらいなのである

「どうした！まだまだ遅いぞ！手を下げるな！剣はナイフでは無い！」

「サー！イエスマムツ！！！」

「そうだ！もつと速く！剣筋を見切れ！此方からも行くぞ！」

「イ、イエツサー！」

まあこの感じからわかって貰えるだろうが、シグ姉さんは剣の師匠になって貰えました。

BA？がついに完成し、大剣が主力兵装になった為、以前恭也さんと出会った山にて、木刀を使ってその為の自主トレをしていた所、偶々彼女と手合わせをしたのが馴れ初めである。

この時の俺とシグ姉さんは特に仲が良かったわけでは無かった。むしろこの時の彼女は、俺は一体どういう人間で、普段何を考えている人物なのかを計っていたらしい。

んで、偶々俺を監視していたら自主トレで剣術らしきものを使っているのを目撃。

剣を使うなら斬りあった方が相手の事が解るといふバトルジャン

キー的判断で襲い掛かれたのである。

目の前にいきなり現れて「貴様を試す」とか言われた後、いきなり斬りかかえられえるなんて思ってもみなかったが、振り下ろされるレヴァンティンの斬撃を何とか回避して迎撃の構えを取った。そしてなし崩し的に戦闘に発展したのである。

一応すぐに封時結界を張ったから周りには被害は無かったものの、その所為でセツトアップが遅れてしまい、レヴァンティンの紫電一閃で2〜3回腕がちぎれて吹き飛んでしまった。あの時は傷ついてもすぐに再生できるこの身体に感謝したぜ。

その後も交戦を続けたが、相手の技量の方が上な為、俺はどうしても防戦一方となってしまった。本来、俺は射撃よりの魔導師であり、その他は平均よりかはある程度高いくらいしか無い。

対するシグ姉さんはベルカ十八番のクロスレンジにおける戦闘のエキスパート。簡単に言えばソフィア教官の上級バージョンみたいなもんだと考えられる。まず勝てねえ。

ちなみにこの時、俺は自主トレに付いて来てくれていたリンとユニゾンする事に成功していた。逃げ回っている最中にこのままでは死ぬと踏んで、一か八かでユニゾンを敢行したのだ。

結果は射撃及び防御関連は元のままであったが、解析及び演算系統の性能が著しく上昇するという結果であり、純粹な戦闘力の面では上昇は無かったが、俺にとっては嬉しい能力上昇だった。

特に演算処理能力の向上、それによって周辺の地形データから空気の流れ、更には空間の歪みまで観測でき、また魔力の流れの感知能力も上昇したのである。それにより周辺の環境の変動から相手の動きが読みやすくなったのである・・・後で頭痛がひどかったけど。

また俺の戦闘スキルの中に、限界機動・戦神楽という戦闘方法がある。これはマルチタスクを用いた高速思考処理による先読み能力の付加を可能にする戦い方だ。え？解りづらい？うん、簡単に言えば人為的にニュータイプになるって感じ？

あの気配を感じてピキーンってなるアレに似ているかも知れない。つまりリンとのユニゾンによって演算能力が向上し、この戦闘方法が更にやりやすくなったと言う訳である。大体4〜5倍程度はやりやすかった。

さらに嬉しかったのは、ユニゾン中は誘導弾を発射出来るという事実であった。誘導できる理由は体質的に誘導不可な俺の代わりに、リンが誘導制御を担当してくれるのである。

誘導可能な時はHUD上に表示され、戦闘機のシューティングでミサイルのロックオンをするような感覚で誘導弾が放てるのである。今度ユニゾン専用の魔法を考えなくてはならないだろう。

まあこんな感じで一応シグ姉さんが止まるまで、相手をし続けた訳なのだ。流星は烈火の将と呼ばれるだけあり、その攻撃は火の如く。最後まで衰える事がなかった。

十分な距離さえ取れば良かったんだけど、俺は結界の専門家じゃないから張った封時結界は広くてもサッカーのグラウンド程度。

これくらいの距離は、シグ姉さんの得意な戦闘領域にばっちりと

入っているのである。だから遠距離からの射撃戦が行えなかったのだ。

アルアツソーを構える前に首を斬られそうになったのだ。すぐにBA?に変更したから良かったけど、絶対アレ戦闘狂のスイッチ入ってたぜ。それでも手加減されてたんだからちよつと凹むけど・・・。

こうしてその後なんとかシグ姉さんと引き分けて、彼女に認めてもらったのである。

そして剣での戦い方をレクチャーして貰える運びとなったのだ。

彼女曰く、俺の剣は実に解りづらい蛇の様な剣筋であり、ソレでいて蛇道では無いらしい。手数が多く奇を衒うフェイントが上手いからナイフの戦い方だろうとあっさり見抜かれた。

まさにその通り、俺の教官であったソフィアさんはナイフ使いだった。

シグ姉さんはその事について俺をほめてくれた。良い師匠に巡り合えたのだと。

でも剣で戦うには適さないから、きつちり仕込んでくださることだった。

あはは、また厳しい先生が・・・しんでまうやろ！

「さあ最後の斬りあいだ！」

「望む所。さあ舞い踊りましょうぞ！」

それで現在に至るのだ……言っておくが今使っているのは木刀だからな？流石に有事でもない限り、セットアップはしませんよ。まあこういう訳で俺には今、剣の師匠がいます。

師匠と弟子の様な関係になれたので、今では結構絆を持てたと思っっている。それだけは間違いないと、俺は信じて今日も扱かっていた。

ちなみにシグ姉さんに襲われた事をはやてにチクったら、しばらくの間シグ姉さんは、最初召喚された時のロリシグ姉さんの姿だった。リインフォースがお仕置きしてくださったらしい。

その姿の癖に何故かけしからんおぱい様はそのままです……ええロリ巨乳です。そしてその姿は、はやてにとっては肉食獣に肉を目の前にぶら下げたような状態です……流石に涙目のロリシグ姉さんには罪悪感が湧いたな。というかはやて、幾らおぱい様とはいえ自重しろ。

なので、シグ姉さんにとってのこの姿はトラウマであり、また周りからの視線が相当堪えたらしく、ソレ以来彼女はリインを少し苦手としているのは余談である。

例2、湖の騎士さんの場合

ある日の八神家食堂、その食卓の上には沢山のクッキーの山。

「では……行くですう！あ〜ん……」
「……………」

それを食べるのは俺の相棒たるリンだ。彼女がクッキーを手に取り、口には奪ったのをシャマル先生と共に固唾をのんで見守る。

「……………美味しいですう！」
「「やった！」」

リンが言った美味しいという言葉に、俺達は思わず手を打ち合わせていた。何故かと言うとシャマル先生がお菓子作りに成功したからである。

「おめでとうシャマル先生、コレでみんなから馬鹿にされないな」
「うん、ありがとうねフェンくん」

前世では、よくシャマル先生は料理が下手とあつたが、下手と言うよりはやり方を知らないと言う感じであつた為、リンが以前覚えた料理をデータとしてダウンロードした所、普通に料理が作れるようになっていた。

だが、それにはまだお菓子の作り方のデータが実装されておらず、それを知らずにシャマル先生は以前お菓子作りに興味を持って、作るのが比較的簡単なクッキーを作つた事があつた。

当然のことながら、その作り方は滅茶苦茶であり、何がどうなつたのかは知らないが、出来あがつたクッキーは見た目普通の殺人ク

ツキーと呼べる代物であつたらしい。

そしてソレの記念すべき第一の被害者は・・・なんとリンだったのである。たまたま作りたてのシャマル印のクッキーがテーブルにおいて有り、リンはおやつだと思ひ口にしてしまったのだ。

ちなみにリンがクッキーを食べた同時刻に、俺は昼寝をしていた筈が何故か見覚えがある川の岸辺に立っている夢を見ていたので、また臨死体験したんだと思う。

リンと俺にはある種のつながりがあり、そのフィードバックはお互いに来るから、恐らくその影響であつたと思われる。普段はお互いに遮断しておいたはずなのだが・・・それを打ち破るほどの不味さだつたのだろう。

んで、その所為なのか知らないが、リンがシャマル先生を見ると怯える様になつてしまったのだ。

どうもあまりのクッキーの不味さでトラウマを持つてしまったらしく、彼女が近くに来ると俺に抱きついて背中陰に隠れてしまつてらいた。

流石に自分の妹分であるリンにそこまで怖がられるようになったのがショックだつたらしく、今度はお菓子作りもしっかりと覚えると、その時シャマル先生は決意したのである。

リンの経験だけでは無く、自分でお菓子作りの本を見たりして研究を行い、どうにかしてお菓子作りを習得しようとしたのだ。そしてその成果が、先ほどリンが食べたクッキーでなのある。

「 うん、おいしい」

「 良かったらもう少しどうぞ？まだ作ってありますから」

「 これは本当においしいですう！リニスねえさんには負けませんが・

」

「 あう」

「 仕方がないさ。だってリニスの方が料理経験が長い訳だし、先生はこれからこれから」

「 そう・・・ね。うんそうだわ！何事もこれからなのよね！ありがとうフェン君」

「 いやいや」

こうして湖の騎士さんと俺とはリンを通じて仲良くなった。なんでもかかって言うと、この再度挑戦した時の試作クッキーをリンに食べてもらった際、俺がいないとリンが怖がる所為で来ないからだった。

己の妹分と仲良くなるには、彼女と親しい俺と仲良くした方が速いと踏んだ行動だったのだろう。流石はヴォルケンの参謀、普段のどこか抜けた所からは想像がつかないな。

「 お菓子作りを習得したから、今度は料理の方ももうちょっと頑張ろうかしら？」

「 いいんじゃないか？だけどオリジナル調理法で作るのだけは簡便な？」

「 え、でもそうやって試行錯誤した方が習得が早いのに。」

「 シヤマル先生は俺以外に三途の川を渡らせたいのか？」

「 うう・・・ひくん」

基本的な料理系は大丈夫だが、時たまやる“シヤマルオリジナル調理法”には、まだまだ危険が伴う料理で・・・いや危険物である事にかわりは無かったりした。

例3、鉄槌の騎士さんの場合

「早く来いフェン！置いてくぞー！」

「待ってくれヴィータ姉！そんなに急ぐと」

「あいた！いててて」

「転ぶよつて、言おうと思ったんだが」

公園にて買い物物の帰り道、ヴィータ姉との仲は最初から問題無く仲良くなれた。彼女は自分の主であるはやてが信用しているのだから、問題無いだろうと言ってくれたのだ。

ただ単に難しく考えても解らんとも言っていたが、それでも変に疑われないだけでも、騎士たちの中ではとてつっきやすい存在こそヴィータ姉であった。

「はい、手を・・・」

「おう、すまねえ」

「なんのなんの」

そう言う訳で普通に会話して友達となつたため、彼女との仲は良好であると俺は思っている。難しく考える事のない、真っ直ぐな彼女の性格も相まっているからかもしれない。

「怪我とかは・・・ないな。うん」

「おいおい、たかが転んだだけじゃねえか」

「・・・ウィータ姉は感染症の恐ろしさを知らない。アレは怖いぞ？傷口からバイ菌が入って数日くらい経つと急激に熱が出て、おまけに寒気で動けなくなって意識がもうろつとするんだ」

「そんなにヒデエのか？てか何でお前はそんなん知ってんだよ？」

「以前軍に居た時、戦闘の後で怪我した後、傷口を消毒し忘れて偉い目にあつた事がある。抗生物質のありがたみが解つた瞬間だったよ」

「う・・・」

「まあ心配しただけだ。ソレ位しても良いだろう？」

ちなみに彼女のことを姉と呼ぶのは、俺の現在の姿よりも彼女の方が年上であり、実年齢も実際彼女の方が上なので間違いでないだ。この呼び方を案外彼女も気に入ってくれているしな。

「まあそんな話は置いておいてだ。美味しいアイスクリームが売っている店があるんだが」

「さてフェンよ行こうか？」

「アイマム、お供いたしますよ」

そう言う訳で、今日は買い物帰りにアイスクリーム屋に行くことになった。

流石はヴィータ姉、アイスの事となると目の輝きが段違いだぜ。

『そういえば、アイスって色々と味があって面白いですよね』

「俺はチョコミントが好きかな」

「甘いゼフェン。あたしは全部の味が好きだ」

「な、なんとという欲張りさん。でもそこにしびれる憧れる！」

『でもまれにビックリ系アイスってありますよね？わさび味のソフトとか』

「……前言撤回、あたしはあくまでノーマルの範疇が好みだ」

あ、流石にソレ系はダメか。でもワサビソフトも結構旨いと思うぞ？……ああそうか、食べた事無いから名前で判断したのか。名前だけ聞くとなんかツーンって辛そうだもんな。

蛇足だがワサビソフトは全然辛く無いし、むしろ清涼感があつて結構いけます。

「だが、塩アイスとかは結構いけるぞ？」

「そんなんあるのか！？」

「沖縄の塩を使ったソルトアイスとか……甘くてしょっぱい」

「うわ、ソレ食べたい」

「今ならコンビニで期間限定で売ってたと思うぞ？」

サー ルKは稀にそんなのを売ってたりする。

「さあアイスクリーム屋に行くか、期間限定の塩アイスを買に行かか」

『貴女のお気持ちは、どっち！？』

「うう〜……りよ、両方」

「ぶー、ソレは無し。と言う訳でアイスは無しです」

「な！そんな！アイスが無し……だと？」

「……………うそだからアイゼン出そうとしないでよヴィータ姉」

流石に頑固な滲みになりたくはありません。

この後ヴィータ姉をなだめる為、ちゃんとアイス屋には行きました。

俺のおごりでバクバク食べられたので、ちょっと俺涙目だったり…。

例4、盾の守護獣さんの場合

このヒトとは・・・人でいいのか？ケモノになれるし、うん？まあ良いや。

とりあえずザフィーラとの関係は特に問題は無い・・・ある一点を除いて。

あ、ちなみにザフィーラはさんづけとか兄とか呼ばれるのが嫌だったらしく、呼び捨てで呼ばせてもらっております。流石に人型の時に兄貴とか呼んだのがダメだったか。

「で、お客さん痒いところは？」

「いや、無い。だがもう少し・・・」

「はいはい、ではゴロンとなって下さいな」

そして現在お戯れの真つ最中！ 勿論犬形態だぜ？

もしこれを人型でやられたら俺は吐く自信があるね！

「オオカミだ」

「え？どつたん？ザフィーラ」

「いや・・・何でもない」

はて？電波でも拾ったのかね？

ああ、しかしオオカミの毛並みって意外とフワフワじゃく。

青い色なのが気になるけど、それ以外はモフモフするには結構いい。

「今の所、もう少し」

「ザフィーラは首の下が好きなんだ？兄さんココがええのんか？」

「兄では無い、ザフィーラだ・・・次は背中も頼む」

「あいあい、その分モフらせてもらうからモーマンタイ」

そうか、守護獣がいるのは愛玩用だったんですね？解ります。

「な、なでました」

「ああ、次はお腹のほうだ・・・」

尚、俺がザッフィーと戯れている間、俺のすぐ右に山猫と子猫、左に双子の猫さんが陣取って順番待ちしていた。いつのまにかリピーターが増えている俺の動物用神の手だった。

とまあ、こんな感じである。

お、俺としては仲は良い方だっと思って思いたいぜ！
流石にもう蒐集とかされるのこりこりだからな！！アレはジョー
ク抜きで痛いのだ。

でも何か話しの内容的に、シグ姉さんが一番長かったような・・・
。逆にザッフィーは全然薄いと言うか何と言うか・・・うん！気に
しない事にしよう！（いい笑顔

そう言えば、双子の猫さん達が何故かリインの姿を見て驚いてた
けど、何だったんだろうな？ココに来てまた何か忘れている様な気
がしないでもないんだが・・・まあいいか。

この時、何故双子又コが驚いたのかを思い出せていたら・・・

まあ特に状況は変わらなかつただろうな。もう骨抜きだったし。

「実家（俺の居た世界）からの迷惑な置き土産だな」（前書き）

*ちよつとシリアス入ります

「実家（俺の居た世界）からの迷惑な置き土産だな」

「実家（俺の居た世界）からの迷惑な置き土産だな」

妄想戦記

「やあやあみんな！中は元気、外は鉄面皮のフェン君だよ！
今日は久々に外の世界、所謂次元世界をめぐっております。」

「今までは隣接した世界間の移動しか出来なかったのだが、リニスとリイン達のお陰で、そう言った制約なしに世界間移動が行えるようになってきました。」

「いやホント別次元世界の魔法技術はスゲエわ。」

「なんせこちとら科学の方も発達してたからなあ。」

「魔法技術は後で湧いて出てきたようなもんだし、どこか理論とか術式に穴があってもおかしくは無かった訳で・・・まあソレはさて置き。」

「そっちはどう？ヴィータ姉、シグ姉さん、リイン？」

「ああかなり倒した」

「こつちもだ」

「右に同意」

現在我々は違う世界にて傭兵稼業をしております。

ちなみにザフィーラとリンとシヤマル先生はお留守番。

しかもやっている場所は管理局のおひざ元である第58管理世界だ！

「しかし害獣駆除でかなり貰えるとは」

「ま、報酬には危険手当こみだからな。フェンはそう言ったのしらないのか？」

「生憎俺の世界は戦争中だったから外の世界には出れなかった」

ちなみに何故外の世界で傭兵稼業何ぞしているのか？

ソレは蒐集を……と言つのはウソで、実際は只のお金と経験値稼ぎだったりする。

簡単に言えば、リインはもう夜天の書として起動してるもんだから蒐集の必要がないんだ。

「まあそんなことより、リイン、珍しい魔法はあつたか？」

「だめだな。そっちの収穫は0だ」

まあ蒐集の必要は無いんだが、どちらにしてもそのままだと夜天の書は只の本でしか無い。

だから機動させる為では無く、文字通り本来の意味での魔法蒐集を行っているのだ。

せつかく機能が正常に戻ったんだから、使わない手は無いだろう。

『だけど、案外気がつかれないものですね』

「だよなあ？あたし達が普通に闊歩してても気がつかれないなんてな」

「灯台もと暗しってヤツさ。まさか管理局のおひざ元で活動してるなんて相手も考えないだろう？」

『成程、テレビのリモコンがどこにあるのか解らなくて部屋をひっくり返したのを見つからず、実は自分の座ってたクッションの下にあつた様なものですね？』

「「「いや、全然違うから」「」「」

例えがなげえよ。おまけに微妙に間違ってるし。

「ま、とりあえず報酬貰いに行こうぜ？」

「そつだな。遅くなると主が心配される」

「それでももしも遅くなり過ぎるとペナルティで夕飯抜きなんです」

「あだし達が餓死してしまう件」

『そしてお腹が空きすぎて、ザフィーラさんを！』

「飢餓状態と申したか？」

そんなバカ話しながら依頼人がいる所へ向かう最中だった。

「……ん？」

「どうかしたかフェン」

「いや、何か居た様な気がしただけだ」

「何も見えないぞ？」

いや、確かに……ん？

「ちょっとココで待っていてくれ！」

「あ！おいフェン！何処行くんだよ！」

まさかそんなはずない、“アレ”がこんな所にある訳無いんだ！
俺は遠くに見かけた“何か”に向けて走った。

「たしか、このあたり……」

『マスター！アレ！』

「まさか、遠くで見かけたから見間違いかと思ったのに……」

嫌な予感は当たった。脚だけを空中に投げだし、小さな崖に落ちる形でひっくり返り機能停止している。四脚型の脚部、人型の胴体、コイツは間違いない。

「無人魔導兵器」

『……タグ確認、OCUのタウルスです』

俺の世界の……無人兵器だ。しかもまだ新しい。

エネルギー切れと整備不良で停止しているが、ごく最近まで稼働していたようだ。

「なんでコイツがココに？」

『確かに、軍事兵器ですから他世界への販売等は行われていなかった筈なのに』

そう無人魔道兵器はOCU、USNのどちらでも兵力として考えられていた。

俺の記憶が正しければ、俺がこの世界に飛ばされる前も人員不足を補う目的で配備されていた筈だ。

「グイズ、コイツのログを調べられないか？」

『ちよつとお待ちを……』

「おい！何やってんだフェン？」

俺がこの無人機から情報を引き出そうとしていると、他の皆が来てしまった。

「あ、いや・・・」

「おお！すげえ！ロボットだ！多脚型のロボットだ！」

そう言ってヴィータ姉がタウルスに近寄り、スゲエスゲエを連発している。

ふーん、ヴィータ姉はスパロボ派だと思ってたけどリアル系もいけるんだ？

「この傀儡兵は機能を停止している様だが、コレがどうかしたのか

「？」

「……正確には無人魔導兵器、俺がいた世界の兵器だよ。シグ姉さん」

「ほう、コレが……確かに傀儡兵よりも魔法技術が少ないな」

「軍事用だからね。無駄な装飾関係は全部排除されたんだ」

「ふむ、しかしフェンの居た世界は30年くらい前に消えたのだから？それにしても、この無人兵器はごく最近まで使われていた様な感じを受けるな」

「そうなのか？リイン」

「ああ、ちょっと解析させてもらったが、コレが機能停止したのは数日前だ。少なくとも30年とかなんて長い時間は経って無い」

「そう……俺もそれが気になって」

『防壁突破！ログの回収に移ります』

どうやらヴィズが電子防壁を突破したらしい。

まあ量産型の無人兵器にデバイスからのハッキングを防ぐ手段なんて無いけどな。

「どうだ？ログは手に入れられそうか？」

『うーん、ちょっとばっかし厄介な仕組みで・・・リンがいれば解析出来るんですが』

「ならそのままデータだけ持ちだせ、解析は後ですればいい」

『了解』

とりあえずデータ解析は後回しでいいだろう。

何でコイツがココに居るのか気になるが、それも起動してからの行動ログを見ればすぐに解る。

「なあなあ！コレ持って帰れねえかな？」

「いや、壊れてるから無理だと思うよヴィータ姉？」

『仮に持ちかえれても置く場所がありません』

「ちえっ！乗ったら面白そうなのになあ」

「この手のロボットは人が乗るのに向いて無い。乗り物酔いになりたくないなら止めないが」

無人魔導兵器は常人の2倍程度の大きさがあり、その大きさが様々な武装を施したので、その重さはゆうに1トンを超える。

ソレを魔法術式で無理やり軽くして立たせている様なモンだから、起動しないと持ち運びが出来ないんだよな。

「それはともかく、そろそろ戻るぞ」

「了解、シグ姉さん」

「ヴィータ、置いてくぞ?」

「あ!おい待てよ!」

とりあえず俺達はその場を後にした。

この時、無人魔導兵器の策敵カメラが少しだけ光ったようだったが、俺はその事に気がつかなかった。

Side 三人称

薄暗い無人機生産施設、最低限の稼働しか為されていないので、非常灯しか付いていない。

人がいなくても稼働する無人施設だが、所々に人が生活していたとみられる跡がある。

その薄暗い施設の中で、一人黙々と作業する人影が1人いた。

ホンの数か月前に大きな大振動に見舞われ、内部構造の幾つかに不具合が発生していた。

彼の物の任務はこの施設の整備、そして敵兵の殲滅が命令の中に含まれていた。

かなり前から大本からの連絡が途絶えたが、自分には関係ない。

施設の修復を急がなければ。

人影が修復作業を続行していると、この施設との転移に巻き込まれ、違う次元世界に行ったので偵察にだし、そのまま帰って来なかった無人機から、緊急連絡が入る。

恐らく何らかのシヨックで予備電源が入ったのだろう。送られてきた映像は少しノイズがひどかったが、徐々にノイズをキャンセルさせることで理解出来る範疇に収まってきた。

「!!!これ八?!」

映像の解析を終え、人影は驚く。

そこに映し出されていたのは、攻撃目標の一つであるUSNでは英雄とされた存在。

死んだとされていたが生きていたとは。

「グガッ!?!」

敵として認識した存在を確認した人影だったが、途端人影は湧きあがる何かに包まれた。

憎しみ? 憐憫? それとも懐かしさ? それとも友愛? 混沌とした感情が荒れ狂う。

「はあ、はあ…… “隊長?”」

一瞬だけ脳裏に浮かぶのは、小さな隊長の姿、共に戦った戦友であり、尊敬出来た軍人。

そして自分同様壊れた人間、そして“帰って来なかった”……。

「がっ！ガアアアアアア！！！」

憎い？

会いたい？

殺したい？

喋りたい？

消したい？

顔を見たい？

様々な思いと感情、記憶が錯乱する。
行動プロトコルが次々と書き換えられる。

第一任務は……敵の殲滅。施設防衛。NO

ダメ チガウ

優先すべきは……OCU、USNの双方の排除。NO

オレガ シタイノハ

すべきなのは、すべきなのは、すべkすb・・・あqwせdr
f t y ぶじ p ; @ : :

ダメダ トメラレナイ オサエキ

レナイ

「みつけましたよ?“隊長”？ふふ、ふははは、はははははははは！」

アレヲ コワシタイ！

薄暗い施設の中、彼の物は狂ったかのように笑う。
何をすべきかは理解した。

やることは簡単、“目標の殲滅”

すべきことは“フェン・リーダー”を招き寄せる事。

現時刻をもって、行動を開始する。

「ははは・・・頼むぜ“隊長”？俺を止めてくれ・・・そして殺してやるよ」

そして彼の物は無人施設に火をともす。
稼働を開始する無人施設、資源が乏しいから作れる物は少ない。
だがソレで良い。やることは作る事では無い。壊してほしただけ
だから。

様々な命令と元の思念がごちゃ混ぜとなった彼の物は、行動を開
始した。

壊し壊されることを夢見て

S i d e o u t

S i d e f e n

あの世界に行ってから、一週間が経過した。
家に帰還した俺は、さっそくリンを呼び寄せデータ解析を行って
貰う事にした。

この手のデータ解析は、リンの方がヴィズとかよりも数段上だか
らな。

「は、はづう」

「ん？どうかしたりニス」

「え！いいえ、何でもないわフェン君。（あ、あぶない、声が漏れ
てたわ）」

「?ならいいんだけど」

んで手持ちぶたさなので、リニスさんヌコVer.を愛でながら待っていた。

やっぱりヌコはいい。癒されるねホント。リニスが時たま変な声を出すのが気になるけど。

「うん、一応解析は出来ましたです」

「お、そうか。ありがとリン」

「えへへ、撫でられちゃいました」

そして、ようやくあの無人機の行動ログの解析が終わったらしい。さてさて、一体どんな経緯であんなところで放置されたのかな？

.....

.....

.....

AM 8:00 活動開始

映し出された映像は、恐らくタウルス達の格納庫。担当している建物の警備に向かうのであろう。

もつとも警備にしては装備しているのはトレンチマシンガンやらグレネードやらで随分とゴツイが。

まあ、それだけ重要施設なのだろう。しかしどこの警備なんだろうか？

普通コレだけ重装備を施されるのは大分機密度が高いエリアだと思っけど……。

「コレの警備部署はわからないか？」

「うーん、そこら辺の情報はプロテクトが固すぎて、まだ解けないです。」

プロテクト解除にかなり時間かかりますよおと言われたのでどうしようかなと思っていると、俺の膝に乗っていたリニスが映像を見て一言。

「警備部署は、無人魔導兵器の無人生産施設ですね」

「そうなのか？」

「はい、そこに書いてあります」

映像を良く見ると、表札があつてそこに書いてあつた。
……いや、解りやすいけどなんだかなあ。

AM12:00 哨戒作業、問題無し

その後は特に何か起きる訳でも無く、ただぼーっと守衛の如く警備している映像が続く。

あまりに長いので何か起きるまで早送りする事にした。

PM15:34 不審者発見、排除

侵入者への迎撃、ちよっとお見せできない映像が繰り返される。抽象的に言うなら、ちよっとミンチを作ったってとこ。

「はぁうう〜」

『リ、リンが気絶したあ!』

「リン！リン！しっかり!」

なのでリンが気絶した。

俺の記憶を見た事があるらしいから耐性はあると思ってたんだが、流石にミンチはダメらしい。

ちなみに侵入者はUSNの魔導師だと思われる人物と、OCUと思われるのと二通り居た。

どちらもミンチにされていたが・・・なんの施設だろうか？

PM17:52 警告、警告、高エネルギー探知

無人機が警備していた施設にほど近いドーム状の建物から画面が
眩むほどの光が放たれた。

その後しばらくザーンと画面が砂嵐状態となったので詳細は不明。
だが、あれは次元航行エネルギー炉の暴走時のエネルギー放出に
似ていた。

巻き込まれた事がある俺が言うのだから間違いない。

PM??? : ?? 再起動完了。 周辺施設消失、次元通信受領、
命令変更、周辺の搜索を開始。

砂嵐状態が回復したと思ったら、背景が変わっている。

どうやらあの草原の近くの様だ。命令が変わり辺りの探索を行う
映像が続く。

そしてそのまま機能を停止するまで動いていた。

.....

.....

.....

「.....コイツを見てくれ、これをどう思う?」

『凄く.....大き「何かに巻き込まれて転移したと考えるのが妥当
でしょう」』

何時もの如くふざけようとしたヴィズを、リニスが遮る。

すまん。今回はちょっとふざけるのは無しだ。

「やはりそう思うか？リニス」

「はい、あの映像をみて考えられるのは、膨大なエネルギー奔流による次元断層」

「恐らくは俺達がこの世界に来た方法と同じ原理が働いたと俺は思う」

「やれやれ、恐らくは命令が来なくなつたから自己防衛機能で動き回ってるんだろう。」

「あの無人機が来ているなら、背後にあった施設もこちらに来てい
る可能性が高い。」

「。。。。」

「人様にご迷惑をかける前に破壊するのも、その世界に居た人間の務めだ。」

「変に被害が出る前に、破壊しに行った方が良いな」

「あ、でしたら私もお手伝いいたします」

「リ、リンも行くです！主殿を手伝うのもリンの意義ですう！」

「いや、しかし。。。。」

「たまには、お手伝いさせてくださいな。フェン君。私は守られる為に居るのでは無く。主たる貴方を守る為に存在しているというものもあるんですよ?」

「そうですね! 主殿は無茶するからすぐに怪我をしちゃうです! だからリン達もお手伝いするんです!」

「うぐ」

ソレを言われると否定出来ん。

それにしても嬉しい事いつてくれるなオイ。

『ココはマスターの負けですね。観念して連れて行ってあげたらどうです?』

「……はあ、そうだな。別に対人戦ってわけじゃないし防御魔法があれば十分だ」

まあ基本機関砲やらで武装しているだけだからな。

稀に対艦砲ぶら下げてる馬鹿も居るけど、リニスくらいの防御魔法ならなんとか防げる。

。　　というか撃たせる前に破壊すれば良いからな。問題は無いか……。

「リン、リニス、解ってると思うが無茶するなよ?」

「そのままの言葉をお返しいたします」

「ですう」

「ソレもそうだな」

『とりあえず、家に居る皆に一応事情は話して置いた方が良いでしょう。突然いなくなるのも変ですから』

「だな。ま、明日説明するさ」

別に手伝えって言う訳じゃないし、まああり大抵にいうならゴミ掃除だ。

ああ、しかし今になって俺の世界からの荷物が来るとわな。
生き残りも楽じゃないねえ。

「ゴッゴッ掃除！ゴッゴッ掃除！……って多い！ウソだろ！？」（前書き）

* ついに黒幕の登場か！……とか思ったけど、ただの戦闘のみ。

「ゴミ掃除！ゴミ掃除！……って多い！ウソだろ！？」

「ゴミ掃除！ゴミ掃除！……って多い！ウソだろ！？」

妄想戦記

次の日になって、俺は八神家が集う朝食の時間に、昨日確認した事情を説明した。

俺の世界からの厄介な土産が来てしまった。なので、俺はソレの後処理に言ってくるので、少しばかり夕飯が遅れても心配しないでくれと、そう全員に話したのである。

「ホンマに大丈夫なんか？アレやったら皆で行った方がええんちゃう？」

「大丈夫、恐らく少数の無人機だからそんなに戦力は要らない」

「だが一応はフェンの世界の無人兵器なのだろう？単騎で戦うには……」

「シグ姉さん、俺が魂持ため機械に負けるとも？」

心配して貰えるのは嬉しい、だが俺としては皆で行くとかは論外である。

「え、何でなん？騎士たち皆でやった方が安全やる？」

「……誰が家に残るはやてを守る？まさか付いてくるつもりとかじゃないよな？」

「え？ダメなんか？」

「ダメだ。今回ばかりは流石にまだ身体が治りきって無いはやてをつれてはいけない」

相手は無人機だが、それでも一応対魔導師戦を考慮に作られた無人兵器群である。

武装の中には、シールドバンカーと呼ばれる対防御魔法用の術式が刻まれた兵器なんかもあるのだ。

バリヤジャケットを展開出来るのならいざ知らず、まだリハビリも終わっていない人間をそんな所に連れていけるわけがない。

「そう言う訳ではやてはお留守番、だからはやての護衛である守護騎士たちも連れていけない。となると、行くのは俺とリンとリニスだけになる」

「ふーん、でも皆の意見も聞かんとあかんやろっな？どやる皆？」

そういつてはやては騎士たちに話をふる。

今まで沈黙を守っていた騎士たちと管制人格が、少し考える仕事をした後口を開いた。

「私は別にかまいません。少々ヒマでしたし、主の許可が貰えるなら行きたいと思います」

「あたしも良いぜ？むしろあのロボットが一機欲しい」

「……俺は攻撃では無く盾の役目の方があっっているので留守番だな」

「あ、私も同じ理由で」

「私もどちらでも構わない」

シグ姉さんは模範的解答で、ヴィータ姉はまだ諦めきれないのか目をキラキラさせている。ザフィーラは攻撃系より防御が得意らしいので家に残ると言い、シャマル先生もザフィーラと同じく攻撃系が殆どないので残るらしい。

リインはどちらか決めかねていたが、俺次第だとその後言った。

「いや、だがコレは俺の問題だし……」

「フェン君の問題やって事は、家族である私らにもかかわる権利があるゆうことかな？」

「……はあ、それを言うかな普通？」

「別にええやろ？私かて行きたいの我慢するんや。私の代わりにシグナム達連れてかんかい。コレは家主命令や！」

『ココに来て強権発動！どうするマスター！』

「ここは黙秘権を」

「黙ってどうすんだよ」

ヴィータ姉からの鋭い指摘。

だって、なんて答えたら良いか解らんし、せやかて皆に迷惑かけたくないし……。

って、はやての所為で関西弁移っちゃまったじゃねえか。どうしてくれる？

「まあ仕方ないか、ある程度は予想してたし……」

『何じゃかんじゃで皆さんお人よしで優しいですからね』

「ほんまか？ならシグナムとヴィータついてってやり」

「わかりました主。よろしく頼むぞフェン」

「間違つてお前がおとされんなよ？」

「ああ、よろしく頼む二人とも」

ちやつちやらー、ふえんに なかまが ふえた ってか？
ソレはさて置き、とりあえず飯を食い終わり次第すぐ出発する事にしたので、残るメンバーに後を頼み、俺達は出かける準備を行った。

*第58管理世界

「（こちら空中管制ワイルドキャット、無人機の増援を確認、皆さん警戒してください）」

【こちらのセンサーでも捕捉しました。数およそ60】

『大型機には大口径砲、小型機にはCIWSを確認、弾幕に注意してください』

現在俺達は無人機を見つけた世界にて、稼働している無人兵器達と交戦している。

ただのゴミ掃除では済まなかったようだ。

「だあああ！うっとおしい！どんだけ出てくるんだ！」

「やあっ！・・・確かに多いな」

「USNじゃ一匹見かけたら50は居るって言われてたな」

「ゴキリか！」

まあ黒くて多脚でワラワラ湧いてくる所は同じかな？

ちなみに何故こうなったか？簡単だ。まるで待ち伏せの如くこの世界に来た途端襲われたからだ。

「リン、弾幕結界を使う。演算処理任せるぞ」

【お任せくださいですう！】

原因は不明、もつとも転送装置を使わない場合の転送は、最初からBJを装備して行うのが通例だから、全員既にセットアップ済みなので対処できた。リンともユニゾンしている。

【空間設置術式展開完了！座標特定！HUDにマーカーで表示します！】

「二人とも下がれ！巻き込まれるぞ！」

お陰ですぐに対応する事が出来た。前衛の二人が前に出て、俺が後方から狙撃および弾幕を張って援護している。

リニスは元々戦闘向きではないらしく、俺が教えたミラーージュハイドを使って姿と気配を完全に消し（そこら辺は俺より上手い、流石は山猫と言ったところ）空中から早期警戒及び管制をしてくれている。

「イグニッション！」

襲われるのは俺のIFFが、まだUSN側だからだろう。
・・・いまだに俺はあの世界に捕らわれているらしい。
忘れたくないんだ。両親や親しかった人たちのことを。
一応IFFは既に落しているんだが、既に敵と認識されている以上、全て破壊するまで終わらない。

ゴパパパパパパ

ツ!!!!!!

「（敵無人機、相当数撃破しました。！目視で無人機を確認！そんな転送反応なんて・・・）」

「大方、転送専用のポーター機がいるんだろう。そいつは魔導師の探知をジャミング出来る」

「そんなヤツがいるのか？」

「俺の居た世界じゃ結構当たり前だったぞ？日夜魔導師同士の殺し合いしてた訳だし」

「戦争が技術を生むのは、どの世界も同じと言う事だヴィータ」

「なるほどね。やっ！」

ゴガン！

会話しつつもグラーファイゼンで敵機を叩き落とすヴィータ姉。流石は古代ベルカ式、クロスレンジでの攻撃力はかなり高い。本式の強化はだてじゃねえな。

『警告、無人機、大口径砲に魔力充填を開始』

【私たちはともかく、シグ姉さんやヴィータ姉さんには防ぎきれないですう！】

見れば弾幕の効果範囲から外れたアウトレンジから大型機がこちらを狙っている。

「ご丁寧にごツイ大砲をこちらに向けてな。」

「シグ姉さん、ヴィータ姉！射線上から退避！」

「は！撃たれる前にぶっ壊せばいいじゃねえか！」

「ソレが出来たら苦労しない！野戦型の大型機は特にシールドが強

い！シールドを破壊する前に砲が発射される！黒こげになりたいのか！？」

「げ、解った！」

慌てて回避する俺達、その途端俺達がいた場所をレーザーが焼き払った。

地面が融解するクラスの出力だ。一般クラスの魔導師では防ぎきれないだろう。

唯一の弱点は砲が大きすぎて機動性が恐ろしく低い所だろうか？

タタタタタタタッ

！！！！

「くッ！銃撃か！パンツァー！」

「ダメ！避けてシグ姉さん！」

敵からの銃撃に防御魔法を展開して突撃しようとしたのを俺は慌てて止める。

敵さんが装備しているモノに見覚えがあつたからだ。

俺が慌てて腕を引き、立ち位置を入れ替えた事に驚くシグ姉さん。

「な、なにを！」

「アレはシールドバンカー、普通の防御魔法じゃ防ぎきれない。避けた方が賢明」

無人機がCIWSを1マガジン分フルで銃撃した後、背中のコンテナから槍の様なロケットが音速で発射され、俺のプロテクションにブチ当たり、弾頭の術式により一層と二層目を貫通し爆発した。

俺のように多層構造をしてあるプロテクションなら途中で全て止められるのだが、通常の一枚の防御シールドでは、破壊されてしま

う。

「ね？」

「ああ、解った。気をつけよう」

しかし、俺が居た時はまだ試作とか言う話で、配備数が凄く少なかったんだがな。

俺がいなくなった2年の内にOCUじゃ正式配備したのか？
まあもう無くなった世界の話だから、今更解らんのだが・・・。

「ヴィータ姉も聞いて、常に動くように心がけて」

「戦場じゃ当たり前だろうが」

いやまあ、ソレはそうなんですけどね？

「あいつ等あまり接近すると自爆するから、立ち止まったらアウトだぞ？」

「うわ、ギガめんどクセエ」

無人機には魔導師が接近してはなれない場合、自爆シーケンスが作動するようにプログラムされている。自機の中の魔力炉を暴走させるもんだから、例え小型機でも威力はかなり高い。

誰が考えたか、時たまカミカゼアタック仕掛けてくるヤツもいるから厄介だ。

「だからヒット&アウェイを心がけて・・・」

「つまりはこういうことだな？アイゼン！テートリッヒ・シュラーク！」

『Ja!』

彼女はそう言つと迫る無人機に呐喊してお得意の打撃で敵を落し

「コイツも喰らつとけ！」

『Schwalb fliegen』

そのままアイゼンのハンマー・ヘッドを回転させ、振り切る寸前から鉄球を打ち出した。

「シューシューシューシューシュー……」

4発の小型鉄球が他の無人機を貫通し、複数を巻き込んで爆発させる。

「ひゅ〜 流石はヴィータ姉」

「どうだ！すごいだろ？」

思わず口笛を鳴らしてしまう俺。

流石はベルカの騎士、基本性能は本当に強い。たかが無人兵器相手じゃ役不足に見えてくる。

「だがアウェイが含まれていないな？」

ドガンッ！

そうやって今度はシグ姉さんが、ヴィータ姉の背後の敵を斬り落とす。

俺もグロウタスクで、無人機を撃ち落とす。

ふむ、強化術式のお陰で随分と楽に落せる。

「うーん、とはいえこのままじゃジリ貧だ」

「（敵、第4波接近）」

「どうに何ねえかシグナム？」

俺が今度は右手にアルアツソー、左手にジリーノを展開し、両肩にガルヴァドス・スフィアを連結した状態で弾幕を張っていると、ウィータ姉がそう言った。

「……リニス、敵のポーター機は確認できないか？」

「（ごめんなさい。私の所からは確認できないわ）」

「なら、敵の湧いて出る場所を教えてください。恐らくその近辺に居るだろう。その座標にフェンが広域魔法を撃ちこめば破壊もしくは燻り出せる」

おお！成程！流石は烈火の将と呼ばれるだけあって、すぐに対応が取れている。

っと、何時の間にか座標が来ている。流石はリニス仕事早い。

「ガルヴァドス・シェイカー、並列起動・スフィア増量」

【サポート開始、スフィア形成】

リンのサポートによって通常の4倍以上のスフィアを形成している俺。

もっとも術式改善のおかげで、魔力消費量は前と変わらないというおまけ付き。

ズズン

「く、と言つてもこの数を二人で防ぐのも楽では無い・・・なッ！」

「全くだ！フェン速くしろ！」

だがガルヴァドス・シエイカーのスフィアを増やしている間、俺は身動きが取れなくて弾幕が張れない。

当然弾幕を張っていた俺がいなければ敵は押し寄せる訳で、その分の負担が彼女たちにかかる。

スフィアの形成を急がねば・・・。

『形成終了！発射準備完了！』

【各スフィア、角度調整完了ですう！】

「ガルヴァドス・シエイカー！フォックス5！」

カカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカ

尋常ではない量の圧縮魔力弾が、虚空へと放たれた。

白い軌跡を描きながら放物線を描くように、ガルヴァドス達はあらゆる一点を目指す。

「ついでいきなりの遭遇戦は終わりを告げることとなる。
……本当に遭遇戦なら良いんだが。」

……
……
……

戦闘終了後、俺達は素早く情報を収集した。

一応今の時間帯は軌道上の管理局の艦船がない時間帯だから、
まだ少し時間があるモノの、用心に越したことはない。

『無人兵器からログ回収完了』

「そうか、さてポーター機はどこだ？」

一体どこからコレだけの無人兵器が湧いて出たのか？俺はソレを
突き止めなければならない。

下手すりゃ小さな町なら焼きつくせる戦力が残っていたなんて予
想外だった。

コレだけの戦力があるのだから、かなりの規模の施設が残ってい
るのだろう。

「おお、でっけえ大砲」

「触らない方が良さぞ。ヴィータ姉、まだ熱いから」

そのほかの面々は情報収集してくれているが、ヴィータ姉だけは何かおもちゃ見つけた子みたいだな。

ああ、その四角いのは兵装コンテナだから、下手に触らないで！
爆発したらどうすんの！？

「しかし、随分と質量兵器が多いな。管理局員が見たら卒倒しそうだ」

「火薬系火器は誰にでも扱える。故に数をそろえなければならぬ
無人機には都合が良い」

「それに加えて対魔導師用兵装か・・・慣れてないと戦い辛いな」

「馴れてしまえばパターン化してるから、これ程楽な敵はいないけどね」

んで、しばらく残骸を探っていると、ようやくポーター機の残骸を発見できた。

「うん、上手い事胴体部分は残っている。機能中枢も少し壊れただけ・・・これなら」

【それじゃデータを抽出しますね】

「ああ、リン頼む」

蜘蛛の様な外見をしているポーター機の胴体部分にある、機能中枢についたメモリーから、転送元のデータを抽出する。
これさえ解析出来れば、後はそこに向かって壊せば済むことだ。

「しかし、たった2年程度の筈だったが」

『科学的な進歩は少なかったみたいですが、魔法的な進歩は大きかったみたいですね』

そう、ポーター機とは実は戦った事は無い。資料でのみ知っているだけである。

元々兵員転送用の移動型転送装置みたいなもので、元々数が少なかったから戦場で会える事は稀である。

おまけにそれ程遠くへ転送は出来なかった筈なのだが

「どうやら次元転送機能が付いているらしいな」

『ですね。転送装置部分にその類の装置が見られます』

俺がいなくても技術は進歩してたって証しだな。

「フェン君、そろそろ帰らないと管理局の船が戻ってきます」

「そうだな。必要な情報は手に入れた。帰ろう」

そろそろ時間的にヤバいので、この場を後にしなければならぬのだが、何故かヴィータ姉が機能停止させただけの無人兵器を見たまま動かない。

「おい、ヴィータ！帰るぞ！」

「……持って帰れねえかな？」

「……まだ諦めて無かったのか。」

「置き場所がないだろう？主に迷惑をかけるつもりか？」

「はやてに迷惑なんてかけるかよ！……良いじゃんかっこいいの見つけたんだし……」

「……ふむ。」

「ちょっと待っててヴィータ姉……ふむ、武装面を外せば……」

俺はデバイス用の工具達を取り出す。

元がゴツイアーマー用だから、これくらいなら解体が出来るだろう。

「あ、おい！何壊してんだ！」

「兵装系は要らないでしょう？ソレと無駄な装甲も・・・よっと」

ガシャン

とりあえず兵装系と必要最低限以外のセンサー類を外す。

そしてほぼフレームがむき出しになった無人機の手足をばらして、
ヴィズの格納領域へと収納した。

「ほい、コレで持ち帰れる。今度ダウンサイジング化でもするさ」

「おお！流石フェン！ありがとう！」

「なんのなんの」

「そんなことより急げ！もう時間がない」

「了解シグナム（姉さん）！！」「」

既に転送術式を展開してまってくれていたようだ。

俺は急いで転送魔法陣の上ののり、一度この世界から帰還した。

この時気が付いていればよかった。格納領域から微弱なシグナルが出ていたことに……。

そうすれば……少なくともはやてが巻き込まれることはなかった！

だがこの時の俺は愚かにも、まだ気が付いていなかった。

「はやて!?!前編」(前書き)

*今回、後篇の最後にダーク入ります

「はやて！？前編」

「はやて！？前編」

妄想戦記

無事家に帰れたモノの、まだ事は終わってはいない。

手に入れた転送元の情報、及び無人機達の行動ログを解析している最中であつた。

815

「どうだリン、解析の方は進んでいるか？」

「行動ログはすぐに解析出来ましたけど、転送元はまだですう・・・」

行動ログのほうは一度解析したことだけあり、すぐに解析が出来た。

だがもう一つのポーター機から入手した転送元の情報には、別のロックが掛かっているのでまだ中を確かめることが出来ない。

「できるだけ急いでくれ・・・何だか嫌な予感がする」

「解りましたですう」

俺はリンとにかく解析を急がせた。

勘って言うヤツなのかな？ソレがとにかく警鐘を鳴らしている。

しかしおかしいな事だらけだ。何故あの場所にあれだけの無人機が集まっていた？

アソコに何かあるのか？いや、あの周辺をサーチしたが特に何かがあると言う訳では無かった。

ならば機能停止した無人機を回収しに来た？ソレもNOだ。

アレが機密情報たつぷりの実験機ならいざ知らず、あのタウルスは只の量産型だった。

ソレを回収する必要なんてないし、命令する存在がない筈の無人機がする筈は無い。

しかし何か引つかかる。

アレはまるで俺の思考を読んで、そのうえであれだけの数を配置したかのような布陣だった。

ご丁寧に対魔導師装備の無人機まで加えてな。戦術AIにそこまでの機能はないはずだ。

(命令系統がまだ有ると言う事か？)

と言う事は、無人機に命令を出しているヤツがいる？

だが何故？何が目的だ？何故あの場所で待ち伏せを？俺達を襲わせた目的は？

・・・・・・解らん。

「殿、主殿!!」

「・・・どうしたリン？」

どうやら思考の海に沈んでいたらしい。
リンが呼び掛けている事に気が付かなかった。

「もう！何度もよんだんですよお！」

「ああいや・・・すまん」

「・・・まあ良いです。リンは解析をしていますから、主殿はどこか
気晴らしに出られたらどうですか？」

「気晴らし？」

「ハイです。煮詰まった時は家で考えるよりも外に出た方がいいと
リニス母さん・・・ねえさんが言ってたです」

ふむ、一理あるな。

「はやてー！ちょっと出かけてくるー！」

「夕飯までには帰ってきていちゃー！」

「じゃあな。解析頼んだぞ？」

「任せましたです！」

とりあえず、散歩でも出よう。俺は八神家を後にした。

久々に海鳴市をゆつくりと歩いてみる。

季節はもう夏真っ盛り、気温も上がり大分暑い日であるが……。

「ふむ、魔法は便利だ」

『（気温制御して快適温度ですもんね）』

俺の周辺空気は魔法で制御してあるので、猛暑だろうが何だろうが関係無かったりする。

ああ、しかし考えて見ると、この町に来てもう2カ月くらい経ってるんだよなあ。

その2カ月の間に、PT事件おきて、はやての家に居候になって、闇の書の闇吸収して、使い魔が出来て……妙に濃い日々だな、おい。

USNで仕事してた日々並みに濃ゆい日々じゃねえか。

道理で2カ月“も”経っているって感じられる訳だわな。

「あ！フェンくん！久しぶりー！」

「む？このどこか抜けた感じのする声の癖に、中身はとても恐ろしい人物の声が……」

「それ私の事？」

「うんにゃ、ちやうちゃう」

つと、適当に歩いていたらなのはと遭遇した。
どうやら学校帰りの様で、ご友人のお二人も一緒である。

「こんにちはなのは、もう学校は終わりか？」

「えへへ、今日から夏休みなんだよ！」

「ほう、道理で機嫌が良い訳だ。所で後ろのお二人さんは紹介して貰えるのかな？」

「あ、そうだね。そう言えばフェン君とは初対面だった」

いや、一応あった事あるんですよ？ユーノ君拾う所と、翠屋に行った時にね。

ま、とりあえず挨拶のつくくらいしておくか。

「初めまして、なのはのご友人方、自分はフェン・ラーダー。なのはの友人だ」

「あ、はじめまして。私は月村すずかっつていいいます。よろしく」

「はじめまして、アリサ・バニングスよ？よろしく」

「……」

やべえ、マジもんの釘宮ボイスだ。生で聞くとなんかスゲーな。

「どうかしたの？」

「いや、なんでもない」

「ふん、まあいいわ」

あぶねえ思わずジッと見つめちまったぜ。

「まあ改めてよろしく、月村さん、バニングスさん」

「アリサでいいわよ。さん付けもいらわないわ」

「あ、私もすずかでいいよ？」

「なら、そつとさせてもらっじ。」

こうして、俺はここに来て、なのはのご友人との初接触となった。そうかアリサとすずかか、そういやそんな名前だったな。全く持って忘れてたぜ。

「ところでフェン、アンタはどこでなのはと知り合いに？」

「いや実はお話聞かせてといきなり襲われて」

「ふえっ！？私そんな事しないよ?!」

「ジョークだ。ジョーク。なのはの身体能力で俺に勝てるワケがない」

「ほ、なんだ・・・だけど最後のはなんか馬鹿にされたような気がするの」

馬鹿にしたも何も、事実じゃん。魔法無しだと貴女運動音痴だし。

「まあ誘拐はされたけどな」

「「誘拐!?!」」

「だ、だから何でそんな誤解を招くかのような事いうの?!」

「なのは・・・アンタ」

「ウソだよな?なのはちゃん。ウソなんだよね?」

はっはっは、素晴らしき力オス具合だ。
さて、そろそろ泣きだしそうだから、ネタばらししないといかな。

「コレもジョークだ。本当はある事があって気絶していた俺を介抱してくれた恩人さんさ」

「アンタのジョーク、性質悪いわよ」

「一瞬信じちゃった。真顔でいうんだもの」

「しくしく」

へっ、すみませんね。この顔は表情筋が乏しいもんでコレがデフォ何だよ。

というかこの程度で泣くな。ただのUSNジョークじゃんか。

「おっと、そろそろ帰る時間だな。それじゃ皆さん、また会う機会があったらよろしく」

そろそろ解析が終わっている頃だろう。

そう思い俺は彼女等と別れて帰ることにした。

「あ、そう？それじゃバイバイ」

「さようならフェン君」

「またね」

「ああ、さようなら」

彼女等と別れ、一人家路につく。

しかし、仲が良い連中だなあ。俺にも欲しかったな。ああいった友達。

軍に居たところに友達と呼べる人間はいなかったモンな。

「気が許せる友人の副官は居たけどね」

『マスター？』

「うん？なんでもない」

考えてみたら、彼は友人だったのかな？……まあ友人だよなあ。

勝手に隊長室に侵入した拳銃くつろぐヤツだったけどな。

ドン

「あた、いてて、すみません」

「いや、気にしないでいいですよ」

おっと、考えてたら誰かにぶつかっちまったぜ。

よそ見しちゃだめだよな。ウン。

この時俺は特に相手の顔を見ることなく、そのまま行ってしまった。

「今度は気をつけてくださいね？」

「ええ、ホントすみません。それじゃ」

考えて見ればおかしなヤツだったのだ。夏だと言うのに長袖の服を着込んでいるとか。

自覚は無かったが、随分と危機察知能力がたるんでしまったらしい。

考えるのに夢中で、俺はぶつかったヤツに注意を払うことなく、ただ謝っただけで帰ってしまったのである。

「ああ、あなたはあの時と変わらない。ああ……夜が楽しみだ。ねえ“隊長”？」

そのぶつかった人物が、そう呟いた事など、俺は露ほどにも知らなかった。

ブーーン

「なんや？もう蚊の季節かいな？」

「誰か外から帰った時連れて来たんじゃないか？」

「ベーム ットってどこにあるんだ、はやて？」

「ええと、確かその棚ん中やヴィータ」

夕飯も終えてゆっくりしていると、何処からともなく虫の羽根の音が聞こえてきた。

この季節は蚊とかが多く出るので、あまり皆気にしていなかった。

ブーーンっ！

「暑い蚊ですね？どこに飛んでるんでしょうか？」

「蚊に刺されると痒くなるんですね」

「おい！」

「封時結界！？まさか敵か！？」

だが、その時、突然雰囲気に変化する。
これは封時結界！そう思ったが早い。

ブーーーーー！

先ほどから聞こえていた羽根の音が大きくなった気がした。

「……………この音、ま、まさか？」

「どうしたフェン？」

「皆伏せろオオオ！……！」

「「「「?!?!?!」」」」

俺は全員に伏せると言い、はやてをかばって床に伏せた。

その後

ガシャーン!!ブブブブブ!!!!

窓を破って部屋の中に沢山の丸い物体が流れ込んできた!

それは暴風の如く、部屋の中を蹂躪する。

「クソ、セットアップ!BA?展開!それと結界とパルス!」

「了解!結界起動!妨害電波照射!^{パルス}」

セットアップをし、はやてを守る為に防御結界を張った後、パルスを照射した。

途端ポトポトと床に落下する丸い物体達。

「な、何がおきたんだ?」

「全員セットアップしてるな?お前らはやてを守れ!俺は迎撃に行く!」

「あ、おい！何が起きたのか説明しろよ！」

見れば流石に騎士たちとリインはセットアップを瞬時に行い身を
守っていた。

リンもセットアップしたりニスにかばわれて無傷だったようだ。
俺ん下に居るはやては、ちょうどうまい事気絶してくれている。

「……アレは“マッドソーサー”対人用のDA社ディアゼルニクスが生み出した
無人偵察機だ。高速で回転する2枚羽根が刃となり、人間を殺傷す
る能力をもっている」

「なんだと？」

「そんな機械が何でここに居るんだよ!？」

そんな事は俺が知りたい！そう叫びたいのを堪え、俺は彼らに説
明する。

俺だってワケが解らなくて取り乱したい。だがココで取り乱す訳
にはいかないのだ。

「何故ここにあるのかは見当がつかん。だが言えるのは」

ガシャン、ドンドンドンー！

俺はいきなりジリーノを取り出し、窓に向かって撃ちまくる。
突然の俺の行動に、何をし出したのかと、騎士たちが目を見開いているが関係ない。

「 コイツはUSNの機械なんだ。俺も正直困惑している」

途端またボタバタと何かが落下する音が聞こえる。
窓の外には、またあのマッドソーサーが落ちていた。

『先ほどからUSNでのIFFを起動させてみたんですが、どうやら関係無いみたいです』

「これには母艦となる親玉がいるから、それを叩かないとドンドン湧いてくる」

確か親玉には、コイツら呼び寄せるゲートの機能もあった筈だ。
ポーター機のように大きなものは呼べないが、あのマッドソーサーくらいの大きさの奴ならいくらでも呼べる。

だから時間が経てば経つほど大量に湧いてくるだろう。

「皆でこの家を結界で包んでくれ、奴らには結界を越える能力は無い筈だからソレで防げる。俺はちよつと親玉を倒しに行つて来る」

「さて、フェン」

「なにシグ姉さん、急がないとドンドンくるぞ?」

既に此方の居場所は判明している。

結界の規模はヴィズのセンサー範囲から推定して、この家を中心におよそ5km。

かなりの規模を包んでいると言う事は、増援がくる可能性もある。

「私も行こう。戦力は多い方が良いだろう?」

「あたしもだ。機械相手はこの間戦ったから少しは慣れてるぜ?それに結界とかはリインやシャル達の方が上手だからな。あたし達に出来るのは戦う事だけ」

「今回はこの家の危機、俺も協力させてもらう」

シグ姉さんとヴィータ姉、ザフィーラがそう申し出てくれた。確かに戦力が多い事に越したことはない。

「お願いしてもいいか?」

「無論だ」

「たりめえだ」

「任せておけ」

三者三様で、とても心強い返事が返ってきた。

「すまん、今度何か奢る」

「ならあたしはアイスクリームをいっばいな」

「ふむ、何にしようか考えておこう」

「今は特にないが貸し一つだ。マッサージも追加しよう」

……俺の財布は大丈夫かしら？

「……まあいい、リン！ユニゾンするぞ！今回はかなりキツイからな！」

「は、はいですう！ユニゾン・イン！」

彼女がそう叫ぶと、途端リンの姿がうつろいで消え、俺のBA？の表面に蒼いラインが浮かび上がる。序でに言つと俺の顔にも同じ色のラインが出ているが、ヘルメットのお陰で周りには見えない。

「それじゃ速いとこ倒しに行こう。時間が経てば経つほど、連中の増援がくる可能性が高い」

「残りの全員は結界を張って待機、主はやてを守れ！」

「了解だ」

「解りました」

「任されました」

俺がリンとユニゾンするのを見届け、シグ姉さんが全員に指示をだし、みんな迅速に行動する。

リンとシャマル先生とリニスが、家全体を包むように隙間なく結界を張り巡らし、ソーサー経ちが入り込めない様にした。

「なんでいきなりUSNの無人機が出たのかは解らないが、恐らく他にもいる。だから全員注視して警戒してくれ」

全員が頷くのを見て、俺を筆頭に家から庭に飛びだす！とたん

ドパパパパパパ

！！！！！！

「フェン！防御を！」

「わかってる！多重プロテクション！」

待ち伏せしていた無人機からの攻撃、今度はタウルスだ！

防御魔法で銃撃を防ぎつつ、手に持ったジリーノで撃墜する。

「やっぱり、奴さん達も来ていたか・・・」

「お、おい、空を見てみるよ」

「・・・なんだアレは？」

見ればエイの様な鳥の様な飛翔体が、空を飛びまわっている。
大きさはちょうど俺くらいだから七歳の子供程度。

「アレは“リスキー・ボム” USNの特攻無人機械だ。とつくに製造中止になっていた筈だが・・・」

「そんなことはどうでも良い！対処法は？」

「・・・頑丈な無人機で基本は体当たり、ソレとカミカゼだ。アレの一体だけの爆発なら、防御魔法で十分に防げる。だが集団で襲い掛かってくるから注意しろ。常に飛びまわって近づくと前に撃ち落とす方が賢明だ」

俺は大型対物狙撃銃グロウタスクを格納用域より取り出す。

強化魔法で身体強化を行い、右手にグロウタスク、左手にジリーノといういでたちだ。

更に背中にオートクレールを浮かべ、周囲にガルヴァドス・スフィアを展開し銃撃戦に備える。

「とにかく全部撃ち落とす！全員死ぬなよ」

「へっ！フェンこそな！」

「範囲が広い、全員分散して敵を叩くぞ？危険になったらココに戻れ」

「「「「了解！」「」「」」

そして俺達は封時結界に閉ざされたくらい海鳴市の空へと浮かび上がる。

この時、ラインがいるから大丈夫だと思っていた。

ソレがまさかこんなことになるなんて……。

「はやて!?!中編」

「はやて!?!中篇」

妄想戦記

状況としてはこうだ。

現在、八神家を中心にしておよそ半径5kmクラスの封時結界が作動している。

規模の大きさから、複数の結界発生機を同調させたモノだと思われる。

敵はそれぞれ東西南北の四点から、八神家に向かって部隊を送り込んできており、それに対する我々の戦力はベルカ式アームドデバイスを使い手が2人、ベルカの守護獣が1人、USN式魔導師が1人となっている。尚、我々に増援及び支援は無い。

また、敵戦力の中にはUSN、OCU双方の無人機が確認されており、何処からの敵なのが予想できない上、中型機クラスには対魔導師用兵装が施されているとみられる為、注意が必要だ。

我々の敗北条件は、味方が1人でも落される、もしくは八神家の

陥落である。

今はまだ民間人である八神はやてを傷つける訳にはいかない。その為のオーダーは“ 見殺必殺 ” “ 臨機応変に対応せよ ” の二つだ。

作戦目標は全敵の殲滅及び八神家の防衛である。

とりあえずの主目標は、増援を送り込むポーター機、及びマッドソーサーの母艦撃破である。

全敵殲滅をもって任務成功とする。状況としては以上だ。

俺達はそれぞれ分散して敵の対応をする事となった。

ただシグ姉さんたちは一対一が得意なベルカ式な為、あまり拠点である八神家からは離れられない。その為、多対一が得意な俺は、実質一番外側に出る事になるのである。

【タウルス、対魔導師兵装型が10機、急速接近中ですう】
『各機の武装は以下の通り、HUD上に表示します』

すべての機体にシールドバンカーコンテナが搭載されているのが厄介だが、それに加えてグレネードとショルダーミサイルを搭載したヤツもいる。

これらに当たった所でそれ程ダメージは無いが、爆発の衝撃で身体が一瞬硬直してしまうのが厄介だ。そこに集中砲火を浴びたら流石に不味い。

「リンは隠れているマッドソーサーの母艦を探知してくれ、ヴィズ周辺情報を」

『周辺情報表示、封時結界の効果により、建物の倒壊については気にしなくても大丈夫です。敵との接触まではあと4分31秒、予想ランデブーポイントを表示します』

タウルスは一応飛べるが基本陸戦兵器である。だから地上をはって移動してきていた。

「罨を張るぞ、連中の予想進行ルートを表示」

『了解、ルート表示します。敵無人機、此方を捕捉しました。速度を上げて追跡してきています』

HUD内のレーダーマップには、自機を表す白いグリッドに敵を表す赤いグリッドが迫ってくる様子が映し出されていた。

俺は後退しながら罨を設置していく、オートクレールで呐喊したところだがまだ早い。

『警告！シヨルダーミサイルの発射を確認！熱源急速接近！』

「ジャマー起動！ジャミング信号をミサイルに打て！」

ヴィズが指示通りに、ミサイルに向けて電子攻撃を行った。

途端迫っていたミサイルが、急に軌道を変えたかと思うと急上昇し、そのまま落下して地面に決りこむ。

ドッ！！ゴガドンッ！！！！

「チッ！気化弾頭か！」

『敵ミサイル誤作動しました。敵、第一トラップまで後20m』

「設置型ガルヴァドス、爆破準備！」

逃げながらのトラップ設置は、此方の十八番である。

罠を表すグリッドに、紅いグリッドが乗るまであ5、4、3、2、
1！

「実行！」

ドパパパパンツ！！！！

設置術式からガルヴァドスが射出され、敵の先頭にいた一機を破壊する。

いきなり破壊された事により、戦術AIが待ったをかけたのか、無人機達が一瞬硬直した。

今がチャンス！

「オートクレール！」

『エリアル・エッジ！』

その隙に後ろに方向転換、敵に衝撃波を伴う斬撃を放ちつつ呐喊した。

エリアル・エッジの衝撃波で敵2機目を破壊した。

「はあああー！！」

ガキーン！ゴトン

ローラーダッシュで加速しながら3機目の胴体と脚部を泣き別れにし

「イヤッ！ー！！」

ズシュッ！

返す刃で隣にいた4機目を袈裟切りに斬り倒す。

「ハッ！」

ドカドカンッ！

もう一度エリアル・エッジを近距離で放ち、更に2機を破壊し6機目。

「テイッ！」

ガシュ！

そして7機目をオートクレールで突き刺し

「ドッセイッ！！！」

ヴォーン！バツガン！！！！

突き刺した7機目を、近くにいた8機目に投げつけた。

ココまででおよそ30秒！だが、コレ以上は敵機も待ってくれな
いらしい。

『警告！敵が直進！接近されます！』

残り2機の内一機がオートクレールの剣身を鷲掴みにして俺の動きを封じ、残りの一機がシールドバンカーとグレネードを発射しようとして、砲身をこちらに向けた。

「あまいー！」

俺は迷うことなくオートクレールをそのまま手放した。

そして手甲に仕込まれたブレードを、目の前の敵の制御中枢に打ちこみ、中で魔力刃を全方位に展開、内側から無人機を破壊した。これで残り1機。

「撃たせない！ジリーノ！」

ドン！ドン！ドン！

そして振り向きざまにジリーノを3発、敵の胴体部分に全弾撃ちこんだ。

物理破壊設定の強烈な衝撃によって、最後の無人機は手足を吹き飛ばしながら爆発した。

ココまでのおよそ1分程度、敵が分散しているとガルヴァドスが意味無いのがつらいな。

「うん、近接兵装に問題無しだ」

『警告！上空からリスキーボムの編隊30機が急降下してきます！』

まるで龍のように群をなした自爆飛行無人機リスキーボムが、俺目掛けて急降下してくる。

俺はすぐに落ちているオートクレールを掴み、そのまま魔法を発動させる！

「オートクレール、魔力刃展開！乾坤一擲！」

『ヴォイド・クラスター！』

上空に向けて、魔力刃とそれに続いて複数の小型スフィアが放たれた！

魔力刃は迫るリスキーボム達を切り捨て、群れの中に穴を開ける。

そして小型スフィアが敵に触れた途端

ズガガガガガーンッ！！！！

連鎖的に爆発が起こり、効果範囲が巨大な火球に包まれた。

術式にガルヴァドスと陣風を流用した散弾爆裂魔力弾頭を伴う斬撃である。

これによって斬撃に沿った空間を蹂躪出来る規模の広範囲爆発が巻き起こるのだ。

効果は見ての通り、大量に撃破したことにより一時的に攻撃がやむほどである。

最も、今だ大量に無人機がこのエリア内に居ることは間違いないのであるが。

「リン、ポーター機の居場所はまだ特定できないか？」

【無人機達の増援が来てませんから転送場所が割り出せません】

「そうか、探知続行・・・ッと！」

ボッ！ バツガアアアンッ！！！！

俺を狙っていた無人機のみサイルコンテナに、グロウタスクを撃ちこんで融爆させた。

ケツ、本当にうじゃうじゃ居やがるぜ。増援のが来ないとポーター機の位置が特定できないのが厄介だな。

「ほかの皆は大丈夫かな？」

『サーチャーで見れますよ？』

「……何？」

『上空に警戒用に撃ち上げておいたヤツがいるんで、そこから』

コイツ、いつの間に……まあいいか。

とりあえず、HUDに画像を映し出してみた。

「最初はシグ姉さん……おう」

【流星はシグ姉さんって感じですよ……】

画像にはシユランゲフォルムになったレヴァンティンから連結刃を伸ばし、中距離の敵を一掃しているシグ姉さんが映し出されていた。うん、問題無さそうだ。

ヴィータ姉は……シユワルベフリーゲンの滅多打ちか。

まあ大型機でもない限り、シールドはあって無い様なもんだからあれで十分なんだろうな。

さて、ザフィーラは……鋼の軛による攻防一体のコンボ技……。

捕縛魔法である鋼の軛に物理干涉付けて、そのまま無人機を串刺しに……。しかも広範囲に軛を展開している。

ごめんザフィーラ、今まで影薄いとか思ってた、ベルカ式の使い手だけあって強かったんですね。

「この分じゃ全員平気だな」

『ならポーター機を探し出しましょう。リン、特定は？』

【もう少し時間をくださいです。絶対探し出して見せますから！】

ああ、リン、頼りにしているぜ！ そう思った瞬間！

「ん？対人センサーに反応？誰かが封時結界に入ってきた？　ゲッ？！」

『アレはなのはさん！？ああでも、コレだけ派手な結界が出てたら流石に気が付きますね』

見れば白いバリヤジャケットに身を包んだ魔法少女が、結界に入り込んだところだった。

恐らく彼女の隣に立っているユーノくんだろう、彼が手をかして結界内に入り込んだんだ。

「ええい！全力で援護するぞ！狙撃準備！」

『了解です！彼女たちには、まだ殺し合いの戦場は速すぎます！』

「だな、乱入してきたあいつ等をとつとと逃がそう」

『急いの方がよさそうです。武装隊の方にタウロスが9機向かいました』

【解析だと、全機対魔導師兵装装備型です。慣れてない魔導師だと、下手すると殺されちゃいます！】

コイツは、急いの方がよさそうだ。

「グロウタスクのレールブラスターの出力を、砲身限界まで上げておこつ」

『狙撃ですか？』

「ココから離れるわけにはいかないだろう？」

『ソレもそうですね。マテリアルショット、エイム』

さーて、八神家居候フェン・リーダー。狙い撃つぜ！

時間は少し前に遡る

突如として現れた封時結界、それを感じ取ったなのははユーノと合流し、結界の元へ向かっていた。

「一体何が起きているんだと思う？ユーノくん」

「うん、僕にもわからない。とにかく調べて見ない事には」

自分の住んでいる街で何が起きているのか？

正義感の強い彼女はそれを調べる為に結界へと近づいていく。

だが、その中は“戦場”であった事など、彼女等は露ほどにも知らなかった

「ここだ。だけど、なんか普通の結界と違う様な・・・」

「そうなのユーノくん？」

「うん、なんて言うか“ムラ”って言うのかな？そう言ったのを感じないんだ」

ソレはある意味正しい。この結界は人間が張ったモノでは無く、機械によって張られた結界である。当然のことながら人間のように感情に左右されない分、魔力に揺らぎやムラは起こらないのだ。

「とにかく入ってみようよ」

「え！？危険だよなのは。中はどうなっているか解らないのに」

「だからこそ、入って調べるんでしょ？大丈夫だよきっと。ね？レイジングハート」

彼女は自分の心強きパートナーである、杖へ問いかける。

レイジングハートは杖の先端にある宝石を光らせながら答えた。

『Exactly. Master that I will observe from, have no problem.』
(その通りです。私がマスターをお守りいたしますから、なんら問題はありません)

その応えを聞き、少しだけ笑みを見せるのは。

「わかったそれじゃ中を調べてみよう。結界に入るよ」
「うん」

そして彼らは、本来ならココに居る筈もないイレギュラー達を見ることがなる。

.....

.....

.....

「な、なんなの？これ？」

結界を抜けると、ソコは戦場であった。

封時結界の中はミサイルと光弾が飛びかい、様々なところで爆音が鳴り響き、爆発が起こり、時折湧きおこるいくつもの火球が暗い夜の空を瞬時に赤く照らしている。

そして建物という建物が崩壊し、封時結界内の為結界の外に影響は無いモノの、いつかテレビで見た紛争地域の様なありさまだった。

「あれは？傀儡兵？それにしては・・・」

ユーノもこの状況を見て、この事態を起していると思われる傀儡兵の様なものを見て思考する。

だが、彼の専門は本来考古学であり、近年の次元世界で起きた事からは大体把握しているモノの、ココで戦闘行為をしている機械らがUSN、OCUで使われていた無人戦闘魔導兵器だ等と知る訳もない。

というか質量兵器としてのイメージが強い無人兵器群は、魔導師たちにとつて受けが悪い為、30年経つうちにそれらの情報は失われていた。

「見て！ユーノくん！戦っている人達がいる！」

「え！？何だつて？」

見れば遠くの方に人影が動いているのがうつすらと見える。

その周辺で火球が上がっているのを見れば、確かにアソコで戦闘を行っているのだろう。

「いそいで助けなきゃ！」

「あ！待って・・・危ないのは！」

「ふえ！？ラ、ラウンドシールド！」

『Round Shield』

こちらを狙っている無人機を見てユーノが警告を発し、それに反応して彼女がシールド魔法を張った瞬間。

ガガガガガン！！

「きゃ！」

「なんだ！？もしかして、これは質量兵器！？」

大量の銃弾がシールドに直撃した。その衝撃はすさまじく、シールドで防いだのはだったが、衝撃で後方へと後ずさった。

「ダイバインシューター！」

だが只後ずさる訳では無く、お返しとばかりにシューターで反撃。そのまま一機撃墜したのであった。

「ふう〜、ビツクリしたあ〜」

「なのは、ここは一度引いた方がいいよ。僕達にはあれほどの質量兵器を相手にする力は無い」

「……」

そうユーノに言われ、彼女は考える。

ここで戦っている人達がいる。誰なのかは遠目で見えないものの、戦える力がある自分が下がってもいいのか？だが、その答えを出す前に

「何だ？体当たりしてくる！？くッ！プロテクション！」

ガ！ドパーンッ！！

「うわあああ！！！」

「ユーノくん！！！」

突然の爆発によってユーノが吹き飛ばされた。

「大丈夫……だけど……」

「……見つかっちゃったみたい」

気が付けば周りには、先ほどダイバインシューターで撃墜したの

と同じタイプの無人機が9機、此方に向けて迫ってくる。

どう考えても、敵意を持った敵である事にかわりは無い。そしてその考えは間違いで無く、無人機達は逃がさないと云うかの如く、上空へ弾幕を張り始める。

「くっ！なんて弾幕だ！なのは一度空に飛んでたらのになる。一度降りよう！」

「う、うん！」

いそいで降り立ったはいいモノの、既に周りは無人機達に取り囲まれている。

物陰に隠れて様子をつかがうも、見つかるのは時間の問題だろう。

「デイベインバスターが撃てれば・・・」

「ダメだよなのは、チャージ中に撃たれちゃうよ。かなりの威力だからバリヤジャケットだけじゃ防ぎきれない」

見たことが無い敵、そしてヒシヒシと感じる無機質な戦闘機械が放つ独特の死への足音。

ソレらが彼らの慎重な判断を鈍らせていく。だが時間は待つてくれない。

「不味い！見つかった！」

見ればこちらに機関砲とミサイルコンテナを向けている機体が見える。

この距離では避ける事も出来ない上、既に発射態勢に入っている事から防御できない。

「ッ！」

それでも彼女はプロテクションを張ろうとした。しかし、術式が完成する前に、その銃口から凶弾が放たれ

ボツ！バガンッ！！

る事は無かった。突然目の前の無人機に穴が開いたかと思うと爆散する。

「な、なにが」

起こったの？その言葉を紡ごうとした時。

「（援護する。射線上には誰も立つな・・・作戦終了）」

彼女の良く見知った声の念話が聞こえ、次々と無人機達が破壊される。

数秒後“作戦終了”という念話が聞こえた途端、最後の無人機が破壊されたのだった。

Side out

「（射線上には誰も立つな）」

俺はなのは達にそう念話を送る間にも敵機を落していく。
無人機達の知覚外だから、避ける事もしないから鴨撃ちみたいな
もんだ。

「（・・・作戦終了）」

そして最後の一機を破壊した。全く世話が焼けるぜい。

しかし危なかった、シールドバンカーが発射されなかったのはホ
ント奇跡だぜ。

とりあえずあいつ等に通信回線を開いて、脱出するよう促さない
と・・・

「（おい、お前ら。大丈夫か?）」

「（?誰ですか?もしかして?でも・・・）」

「（おいおい、俺の事忘れ・・・ってこの姿は見せた事が無かった
な）」

そう言えば今はB A?の姿だった。俺はヘルメット部分を外して
顔を見せる。

知り合いの顔を見たからか、画面に映る彼らが少しだけ弛緩した
のが見て取れた。

「（やっぱりフェン君だった）」

「（いつもと違う鎧だから解らなかつたよ）」

「（ちよいとデザインをな・・・そんなことよりも早く離脱してく
れ）」

「（え?・・・だけど）」

「（時間がないから簡潔に言っぞ?今回の件は下手すると怪我じゃ
済まなくなる）」

「（それって死ぬってこと？）」

「（ああ、相手は人間・・・とづくに魔導師を殺す為に作られた兵器だ）」

「（でも、何でそんなものが海鳴に・・・）」

「（時間がないから今は説明が出来ん。聞きたかったら後で来てくれ、そして速く離脱しろ、結界の外までは追って来ないだろうからな。俺からは以上だ）」

俺はとつと通信を終えて、戦闘に復帰しようとする。

だけど忘れてたんだよなあ。あの子の性格をさ。

「（ちょっと待って！フェン君はどうするの？）」

「（俺は当然残って、コイツらを殲滅するが？）」

狙いは不明だが、とりあえず八神家近辺にいる訳だし、脅威は排除しないとダメだろう。

「（なら、私も残る！フェン君だけのこして逃げられないよ！）」

「（な、なのはあ！？）」

「（おいおい、残ってどうすんだ？言うておくが、下手するとマジで死ぬぞ？）」

「（フェン君だけ残して逃げるよりもずっと良いモン！）」

忘れてた。なのはは結構“友達思い”なんだよな。

俺もその友人枠に入ってたの忘れてた。

「（俺はやる事あるから、お前まで守れないぞ？）」

「（大丈夫、私にはレイジングハートがいるから自分の身は自分で

守れるよ)」

うんうん、確かにレイハさん居れば安心だよね？
で、忘れられてるユーノくんはどうするんだい？

「……僕も防御魔法は得意だし、なんとかなるさ)」
さいど。

「……はあ、仕方ない。レイジングハートにデータ送るから、
とりあえずすぐこっちに来い。俺はまだこの場から動けないからな」

そう言っただけで通信を切った。

どうせ何言っただけで説得しようとしても、絶対残るって言って聞か
ないだろうからな。

手元に寄せといた方が見てられる分安全だべ。

「まったく、今日はイレギュラーが多すぎる」

【主殿は不幸体質なのですね】

「……リン、何処でそんな言葉を？」

【ヴィズねえが言っていました】
『フイ』

なに誤魔化すように口笛吹いてんだよ。

「というかお前に口無いのに、何処で口笛の音声データを手に入れたんだ？」

「……はあ、まあいい。作戦に変更無し、リンは引き続き探査、俺達は敵を迎撃する」

『【了解！】』

「はやて!?!後篇」(前書き)

*再度警告、後半ややグロです。

「はやて!?!後篇」

「はやて!?!後篇」

妄想戦記

「(シグ姉さん、問題が発生した)」

「(どうした?お前すら知らない新型でも出たか?)」

「(民間人がいた。一般人の魔導師だ)」

俺がそう言うと、沈黙が流れる。

「(.....なんだと?)」

「(いきなり結界が出たから、調査の為に乗りこんできたらしい。ちなみに俺の知り合いだ)」

「(なんてこと。で?お帰り願ったんだろっな?)」

「(“友達を置いて逃げたくはない”だとさ)」

再度念話が沈黙する。どうやら考えているようだ。

「(.....フェン解っていると思うが)」

「(ああ、責任は俺がとる。問題無い。それにな?)」

「(うん?)」

「（以前話したでしょ？将来、魔王と呼ばれる人物が近くに住んでいることを・・・）」

「（・・・まさか）」

「（そのまさかさ。だから色んな意味で心配はいらないだろう）」

この念話聞かれたら泣いて否定するだろうな。

「（むしろお前の身が心配なんだがな）」

「（今はまだ只の魔法を覚えただけの少女だ。もつともたった数カ月でそこらの魔導師を圧倒する程の力を持った天才だが・・・）」

「（まあフェンなら上手くやる、だろ？）」

「（ああ、とりあえず残り二人に説明をしておいてくれ）」

「（了解した。通信終わる）」

ふう・・・とりあえずシグ姉さんには伝えておいた。これで無用の混乱は避けられるだろう。

しかし、なのはよお。なんで来るかなあ？幾ら正義感があるとはいえ、コレが普通の事じゃない事くらい解りそうなもんだらうに・・・。

『魔力反応接近、なのはさんです』

「来たか」

慎重にゆっくりと家々に隠れながら低空飛行してきたって所か。

「あ、フェン君・・・だよな？」

「・・・お前さんはさつき通信で俺の顔見てただろうが。ホレ」
カチャ

俺は面倒臭いんでヘルメットを外して素顔を見せてやる。

「間違いなくフェンだね。ところで」

「悪いが説明は今は出来ん。正直こちらもワケが解らないからな」
「ん、わかつたよ」

ユーノが聞いたそうにしている所申し訳ないが、あくまで解っているのは無人機がUSNとOCUの機体と言う事だけだからな。余計な情報は余計な混乱をもたらす。

「現在、俺達は東西南北からやってくる敵無人機部隊と交戦中だ。恐らく増援を送り込む為の転送装置を持った敵が隠れている」

「ソレを破壊出来れば、勝てるってこと？」
「その通りだユーノ。流石に敵も無限の兵力とかではないだろうが、この感じからすると少人数の我々を倒すには十分すぎる兵力があると見て良い。現在俺の仲間が違う空域を守っているが、時間が過ぎれば過ぎるほど不利になるのは明白だ」

プログラム生命体とはいえ、魔法を使えば魔力を消耗するし体力も使う。

ある程度調整されているとはいえ、無尽蔵に戦えるわけでは無い。

「だからお前たちは俺の後をついて来い。一応さつきも言ったが、連中は殺人なんて露ほどにも感じない機械達だ。他人の事よりも自分を優先しろ“Protect ourselves, but otherwise death.”(身を守れ、さもなければ死だ) OK?」

「「お、おーけー」」

俺からの注告だ。一応フォローするが、最後に戦うのは己自身。死にたくなければ常に身を守ることを考えて行動してくれ。

「あとユーノ、お前は防御魔法を複数重ねて発動できるか？」

「え？うん出来るけど」

「ならココから先は、俺みたく複数枚のシールドを重ねて防御しろ。そうすれば最悪死ぬ確率はグッと減る」

「わ、わかった」

まあココまで脅かしておけば、そうそう前とかに不用心に出たりはしないだろう。

ソレをされたら最後、俺でもフォローできん。

「いいかお前ら、ココは今戦場だ。死にたくなかったら魔法を撃て。敵を破壊しろ。ここでのお前たちの役割は“的になるか、的にするか”だ。絶対に俺から離れるな？勝手に動いて死んだとしても俺は責任を取ることは出来ない。ココから先は全部自己責任だ」

俺がそういうと、二人とも表情を引き締める。

「お前らがすることは至極簡単だ。俺の後について、ユーノが守り、なのはが撃つ。それだけだ」

「うん、わかった」

「わかったの」

その言葉を聞き、俺はヘルメットをかぶり直す。

途端、ヘルメットから警告音が聞え、見ればもう増援が現れたと言っ事だった。

「リン、ポーター機の位置は？」

【おおよそ特定出来たましたです！全部で四機、場所をHUDに表示するですう！】

「そうか。お二人さん、さっそくだが増援だ。気を引き締めてかかってくれ」

『一応レイ八さんにこちらが持っている無人機のデータを渡しておきます。基本は近づかない事を徹底してください』

こうして即席のスリーマンセルを組む俺ら。

チームワーク何ぞやったこと無いから期待しない。

とりあえず怪我さえさせなければ大丈夫だ。

それに下手に怪我でもさせたら、恭也さんに……。

うん、絶対なのはだけは怪我させることはできねえな考えてみたら……何と言う無理ゲー。

「とにかく、離されないように気をつけてくれ」

「わかった」

まずは俺達の一番近くにあったポーター機を破壊した後、増援が来ない事を確認し、そのままマッドソーサーの母艦を撃ち落とした。そして残り三カ所に点在していた敵ポーター機を次々に破壊、そして今最後のポーター機を破壊する所だ。

「撃て！なのはあ！！」

「ダイバイン・バスター！！！！」

ギョオツ ！！！！

桜色の光線が、ばたばたと逃げようとするポーター機を飲み込み

破壊する。

一応アレで最後のポーター機である。後は残敵の掃討だけだ。

「リン、増援は来るか？」

【……………どうやら大丈夫の様ですう】

どうやらなんとか撃退出来たらしいな。

はあ、全く一時はどうなる事かと……………。

「お疲れなのは、ユーノ。さっきので転送装置付きの敵は最後までいい」

「ほ、本当？もう敵ワラワラこない？」

「ああ、大丈夫だ。解析は特異なリンからの報告だからな」

「うー、どちらにしても今日はもう疲れた……………」

そうばやくなユーノ、俺だってそうだよ。

「とりあえず後は俺達がやっておくから、もう帰っても平気だぞ？」

「うっん、最後までやらせて」

「そうだね。やると言ったからには、最後までやらないと」

……………コイツらって、やっぱり似たもの同士なのね。

「まあ、いいか。とりあえず残敵を倒しながら一度戻るぞ」

「「わかった」」

こうして俺達は残敵を掃討しつつ、一度八神家に戻ることになる。ワイドエリヤサーチではもう反応が出無かったので、一応一区切りついたと言ったところだろう。

「おーい！フエーン！」

「グイータ姉！大丈夫だった？」

「ギガ平気だったぜ！合計で200は落したな！そっちは？」

「・・・ごみん、全然数えて無かった」

「えー、なんだよ。つまんねえの」

「それはさて置きフエーンよ。彼女たちは？」

んだ。他のところに散っていた皆が戻ってきたので、途中で合流したんだけど、ココに来てヴォルケンスと魔王との顔合わせが実現する運びとなった訳だ。

「ああ、紹介しよう。今回乗り込んできた以前から付き合いがある

」

「高町なのはです」

「ユーノ・スクライアといいます」

俺の言葉を彼らが紡いで自己紹介をする。

シグ姉さんたちも名前だけ名乗り、俺の知り合いだと言う事にしておいた。

「えーと、ユーノとにゃのはだっけか？」

「にゃのは、じゃなくて、なのはだよ」

「だからにゃのはだろ？」

「スクライアと言う事は、あのスクライア一族の関係者か？」

「あ、はい。僕はスクライアに拾われた孤児なんです」

「……すまん、あまり聞いていいことでは無かったな。許せ」
「良いんですザフィーラさん。物ごころついた時には既にスクライ
アでしたから、全然気にしていませんよ」
「……ザフィーラでいい。敬語も必要ない」

そして蒐集がらみじゃない為、かなり早く仲良くなったようであ
る。

とりあえず、このまま帰るのは酷であると言う事で、全員で八神
家に向かう事にした。

なのは達も今日は疲れている事だろうって事で、とりあえず休憩
させてやる為に一緒について来ていた。

「そう言えば封時結界がまだ作動しているかどうか？」

「アレは攻撃力もなければ、味方を呼ぶ力もない。後でで良いだろ
う」

「ソレもそうか……今日は疲れた」
「全くだ」

「ただいまー」

「ただいま戻りました」

「かえったぜ！」

「今帰った」

「えーと、こんばんわー」

「お邪魔します」

「「「おかえりなさい」「」」

上から順に俺、シグ姉さん、ヴィータ姉、ザフィーラ、なのは、
ユ一ノという順番だ。

八神家はとりあえず無事の様で、中からリニスとシャル、はやてを抱き上げたラインが出迎えてくれた。

玄関じゃアレなので、全員でくつろげるリビングへと向かう。

序でになのは達は自己紹介、待機メンバーだった彼女たちもそれぞれ自己紹介をしていた。

それぞれお茶が配られ、一息入れることにする。

「しかし、一体何で無人機達が襲ってきたんだ？」

「さあな。連中の考えることは解らない。ただ言えるのは、何か目的があつて行動しているように見えるってことかな」

「ソレってどういうことなん？」

ん〜、なんて言ったらいいか。

「なんて言うかな、この間倒しに行った時、まるで待ち伏せされていたかのように沢山いたんだ。でだ、連中にはそこまでするAIの機能は無い。誰かが命令しないと出来ない筈だ」

「じゃ、あれか？アレに命令を出している人間がいるってのか？」

「可能性としてはな。だけど、その行動があまりに不可解過ぎて、何がしたいのか解らない」

前回の事についてもそうだし、今回だつてそうだ。

特に今回なんて封時結界なんて使うなんて余計にワケわからねえ。

「もしかしたら何だが、相手は俺が目的何じゃないかと思う」

「フェン君が？なんで？」

「俺が元USNの軍人だから、そして相手が俺の居た世界の機械を使うって事は、案外俺と同じ世界の人間の可能性がある」

「しかし・・・ならば、なぜこの家の場所がバレたんだ？」

「そこが俺にも……」

そう言えばなんで俺の住んでる場所までバレたんだ？

『あのー、その事なんですー』

「ん？どうしたヴィズ？」

『ちよつと気になって調べた所、この間拾ってきた無人機から微弱な次元間信号が出されてまして……』
ピシ

ヴィズのその言葉に、俺とヴィータ姉が固まった。

「お、おま……」

「ナ、何ですぐに報告しねんだよ!!」

『ヒ、ヒーン。だって弱すぎて全然解らなかつたんですよ』

つまりこういう事か？

この襲撃は俺とヴィータ姉が持ちこんだタウルの所為だったって言うのか？

「ど、どうしようヴィータ姉？」

「だ、大丈夫だフェン！あたし達の所為だけどつまり敵がこんなもんを持ってきたのが悪いから！」

「落ちつけ二人とも」

「まあ幸いなことに封時結界のお陰で家の損壊はゼロや。皆も無事何やしコレでええやん」

OK、大丈夫だ。Kool……いやcoolに行こうぜ。

ちよつと慌てたが、はやてとシグ姉さんに言われて俺達は落ち着きを取り戻す。

「とりあえず、みんな迷惑かけてごめんなさい」

「フェン、どうした急に？」

「だってあの敵は俺の世界から来たヤツだし、みんなに迷惑かけちゃったし……」

迷惑をかけてしまった。この事で皆に嫌われてしまうのは仕方ないかも知れない。

もしかしたら、主に危険だったことで、この家から出ていけとか言われたりするかも知れない。

そう思いつつ、俺は皆に向けて謝罪した。

「気にする事あらへん。こんなことになるなんて誰も思わんかったんや。フェン君だけの責任やあらへんわ。大体悪いのは、こんなビツクリドッキリメカを持ってきた相手の方にあるんや」

「主に賛成です」

「シグナムに賛成だ」

「あ、あたしにだって、あのロボットを持って来ちまった責任がある。だから……その、気にすんなよフェン」

「私はフェン君の使い魔だから、最初から迷惑だなんて思ってたませんよ」

「わ、わたしもちよつと驚いたけど、被害もでてませんから」

「………ありがとう、みんな」

これだけ迷惑をかけたのに、みんな許してくれると言っている。血はつながっていないなくても家族として認めてもらえるってのは、本当にうれしいな。

「僕たちも勿論気にしないさ。もともと首を突っ込んだ側だしね」

「うん、それにフェン君は一人で何でも抱え込みすぎだよ。友達何

だから相談してくれても良いんだよ?」

俺みたいな戦争バカに、そこまで声を駆けてくれるなんて

「ありがてえ、ありがてえ・・・」

「ちよつと!なんでそこで拝むのさ!」

「そっだよ!シリアルがだいなしだよ!」

「なのちゃん、ソレをいうならシリアスや」

『山 くくん、ざぶとん一枚持つてって!』

シリアスな空気に我慢できなくて・・・ごめんちゃい。

「まあソレはそれとしてだ。どうするフェン?」

「この場所が判明している以上、また来る可能性がありますね」

シグ姉さんとリニスが心配そうにそう呟く。

だがそこら辺はちゃんと考えてあるぜ。

「リン、解析は?」

「あ、はい。さっきの戦闘最中にポーター機の解析データと、以前手に入れたデータをもとに、転送元を特定出来たです」

「つまり、今度は討って出られると言っ訳だ」

「今なら敵の消耗しているだろう。恐らく本拠地だろうから、そこを叩けば」

「無人機達はもう来ないってことやな」

そっいうことだはやて。

「ホントはフェン君らに、コレ以上危ない事させとっないんやけど・・・」

「なに、少しばかり平和ボケで府抜けてたが、次からはそうはいかないさ」

そう、この時はそう軽く返したつもりだったんだ。

「本当にそうですねえ？平和ボケとは恐ろしいモノですねえ？ねえ
“隊長”？」

ズゲン！

「え？あ？ごぼ・・・」

見れば、俺の腹から、魔力刃が伸びていた。

「「「「「フェン!?」「」「」「」

「ッ!なにが?チイツ!」

シグ姉さんが慌ててレヴァンティンを展開させ、俺の目の前を斬り払うモノの手応え無し。

「せつかちはいけない。ええいけない。俺と“隊長”との再会を、邪魔しないでくれ」

ドン!

「ぐあ!」

「「「シグナム!?」「」

そして姿が見えない相手に蹴られたかの如く、シグ姉さんが壁に吹き飛ばされた。

「さてと……」

ズチャ……

「グギア……アア……」

そしてそいつは、わざとゆっくり魔力刃を俺から引き抜いていく。苦痛が何倍にも増すように、本当にゆっくりと……。

「フェン!くそ!」

「おっと、コレ以上の邪魔はいらない。“ケージ”」

そいつがそう言った途端、瞬時に俺以外の人間にバインドがつけられてしまった。

「そのまま動かない方がいいですよ？大切な主さんが死んでしま
います」

「ひっ？！」

「くー！」

そして見れば虚空から伸びたもう一本の魔力刃が、はやての首に
当てられている。

そして、その根元から、まるで空間から染み出すように、仮面を
つけた一人の男が現れた。

「バ・・・かな・・・ミラージュ、ハイド・・・だと？」

「“隊長”の戦闘法を真似してみたのですが、本当に効果が高いで
すねえ？ずつとこの家に潜んでいたのに誰ひとり気がつかなかった。
どうですう？ご自分の技にやられる御気分わ？」

「くっ・・・」

「隊長、私が訪ねているんですから、応えてくださいよ？ねえ？」

ザクッ！

「ッ　　ッ　　！！！」

クソ、何の躊躇もなく、俺の右肩を刺しやがった！

ご丁寧にこの男は、ぐりぐりと刃をねじりまわす！

セツトアップしたくても男が近すぎて出来ない・・・どうすれば
いい、考える俺！

「グギ・・・ガッ！」

「ああ、その目・・・その目ですよ！その何事にも諦めない目！そ
れこそ俺が求める目！でもまだダメですねえ？何か足りません」
「ッ！？ガアアア！！！」

コイツ、今度は思いっきり、さっき刺した腹を足で蹴りやがった。

やべえ、意識が、遠のきそうだ。

「お・・・まえ・・・誰だ？」

「おや？私の事が解らない？貴方の忠実な副官であったこの俺を？
！ってコレをつけてたら解りませんか？外しまーす」

「な！？」

そこにあつたのは、とても懐かしく感じられる優秀な俺の副官の顔。

「お久しぶりです。隊長？」

「ジエ、ニス・・・」

USNにおいて、最後まで俺の副官であつたジエニス・クローバーの顔がそこにあつた。

「おま・・・え・・・一体？」

「目的ですか？そんなの簡単です。壊れたモノ同士壊しあいがしたいだけですヨ？」

「な！？」

「うーん、あ！そうか！このシチュに何か足りないかと思つたら・・・」

ジエニスはそういうと、はやての首に当てた魔力刃を少し動かした。

「ひゃん！」

「“憎悪の目”それが無いんですねえ？」

アレはナンダ？アカイいろ？

「あの野郎！？はやてに何しやがる！」

「はやてちゃん！」

コイツは・・・今ナニをシタ？

「ああ、ああ！その目！そのめだよ！怒りに染まった憎悪の目！それがこの状況に足りなかつたんだ！はははは・・・はあ、でもこのまま隊長を殺しても面白くもない」

ドガッ！

「グエッ！」

こいつ、また蹴りやがった。くそ、再生が遅い。魔力刃で斬られたからか？

「うゝん？そうだ。ココは懐かしの最後の場所に似たアソコで壊しあつた方が面白いね、ウン。是非そうしよう、今すぐしよう」

こいつは、本当にジェニスか？あいつはこんな事・・・ッ！？

「お前・・・ケホ・・・その頭のプレート」

「おや？流石に気が付きましたか？そうですよう？私はS型の被験者です」

「なんで？」

「お陰で前を越える魔法の力を手に入れられました。モーガンには感謝しなければなりませんね。彼はもう死にましたが、コレで貴方と壊しあえるのだから」

そして目の前のジェニスであつたモノは狂つたように晒う。

こころの底から、寒気が襲つて来るかのような狂気の笑みと共に・

。。。

「ではそう言う訳で、人質としてこのお嬢さんを連れていきますね？」

「・・・まで！殺したいなら・・・俺を殺せば」

「ダ、ダメやフェン君！そんなんあかん」

魔力刃を向けられて怖い筈なのに、俺の言った事に必死にダメだと言うはやて。

だがそんな彼女をみてジェニスは更に笑みを深めて行く。

「うん、やはり貴女がふさわしい」

「え？キャ！降ろせ！担ぐんやない！」

「やめ ザク ギツ！」

「隊長、あなたは勘違いしている。私がしたいのは“殺し合い”じゃなくて“壊し合い”なんですよ？心から壊れてくれなくちゃ、面白くないじゃないですか？」

コイツに今度は脚を刺され、立て無くされた。

「そう言う訳で彼女は人質です。彼女に死なれなくなったら、私を追って来ることですね」

「・・・クソが」

「私が転送されたら、皆さんの戒めを解きますよ？来るなら全員で来ても構いませんよ？是非私と隊長との壊し合いの見物客となつて下さい。ああ、ソレとちゃんと来てくれたら彼女は殺しません。そこは安心して下さいね？ソレでは失礼」

そういつて、ジェニスはまるで大道芸人のようにお辞儀をすると、タイムラグ無しに転送していった。

「はやて、はやてえええ!!」
「嫌や!みんなああ!!」

彼女を引き連れて・・・。

「はやて!?!後篇」(後書き)

*く、くら!?!大丈夫かフェン!?!色々な意味で。

「俺はやはり不幸の星の元に生まれたいらしい」

「俺はやはり不幸の星の元に生まれたいらしい」

妄想戦記

ようやく俺の怪我が再生し終わった時、八神家には鎮魂ムードが漂っていた。

全員顔を伏せ、ヴィータ姉に至っては泣きだしてシャマル先生に抱きしめられている。

あえてこの状態を言葉にするのなら、全員茫然自失と言ったところだろう。

八神はやて、彼女はこの家の柱であり、俺達にとって守らなければならぬ存在。

その為の守護騎士たちであり、その為の魔法の力だった。

だがソレを發揮する前に、主を奪われてしまった。これ程悔しい事は無い。

見ればなのは達も呆然としている。

起きたことがあまりにショッキングだった所為か、それとも動けなかった事に責任を感じているのか、ソレは当人たちにしか解らない。

「ッ」

俺はおもいつきり物にあたりたい衝動を抑えて立ち上がる。
俺がすべきことは

「リン、リニス・・・行くぞ」

「はい」

俺がすべきことは、はやての迅速な救出だ。

俺は今だ呆然としている彼らを置いて、リンとリニスを連れてリビングを出た。

再生がまだ終わっていない為、動くことに激痛が走る。だが、それがどうした？

大事な家族が攫われたのである。こんな痛み、攫われたはやてが今感じているであろう恐怖に比べれば何ともない。

「ぐ・・・」

「フェン君！」

だが、俺の思いとは裏腹に身体はまだ言う事を聞いてくれない。
再生中に何度も衝撃を加えられたせいだろう。傷口が歪んでしまった。

傷口が変に歪んでしまった所を、強引に再生している為、身体にかかる負担もすさまじい。

その所為か目の焦点が怪しくなってふらつき、俺はリニスに身体を支えられた。

「・・・畜生。手を貸せリニス、早く行かなくては・・・」
「やっぱり少し治療をしてから」
「そんな時間は無い！」

必要な時に動かない身体を恨めしく思いながらも、引き摺るように庭へと向かう俺。

転送先は解っているのだ。とにかくそこへと行かなければならない。

「早く、はやてを追いかけて・・・助けなきゃ・・・」
「ですが！」

「あの子は！・・・あの子は、まだ民間人だ」

いずれははやても、彼女も夜天の主として、ベルカ式の魔導師になるであろう。

だがそれでも、今は只の女の子なのである。

「時間を少しでも短縮して・・・早く助け出さないと・・・怖い思いは、させちゃ・・・ダメ」

「ですが・・・」

「リニス・・・頼む」

「・・・解りました」

渋々と俺を支えてくれるリニス。そしてそのまま庭へと出た。連れ去られると言う事は恐ろしいだろう。怖いだろう。

殺されるかもしれないという恐怖は、普通そんな簡単に慣れるモノでは無い。

そういった状況におかれて、少しずつ徐々に慣れて行くものなのだ。

芯はしっかりしていても、今の彼女はまだ魔法が使えないただの少女。

「リペア起動」

そんな彼女を、俺の所為で傷つけるなんてゴメンだ！

治療方陣が開き、膨大な魔力と引き換えに強引に傷口をふさいでいく。

グチュグチュと音を立てながら、傷口が一瞬で消えて行くという光景は、いつ見ても気持ちのいいモノじゃ無いな。

なんとか傷は塞がったので、俺はそのまま転送をおこなおうとするが・・・ふむ、魔力が少しばかり足りないようだ。

「リン、俺のカートリッジを・・・」

「ハイですう・・・」

俺はカートリッジを握り、中身を直接吸いだす。

レアスキルのお陰で、先ほどの戦闘で消費した分の魔力は充填された。

あとは

「さて、フェン。一人で行くつもりか？」

「・・・シグ姉さん・・・それにみんな」

俺が転送方陣を開こうとしていると、シグ姉さんが背後に立っていた。

見れば八神家全員と、なのはとユーノもいる。

「勝手に行くな。お前が勝手に行ったら座標を知らない私たちはどうする?」

「……………」

「まさか、一人で決着をつけに行こうとか考えていたりはしないな?」

「……………凶星だよ。俺ははやてを救出してこの家へ転送したら、そのまま」

「……………必ずはやては助け出す」

「当たり前だ。コレはお前の元部下の所為だろう」

「お、おい!シグナム!」

「すこし黙っていてくれヴィータ」

その言葉に一瞬ズグンと胸が抉られるかのような感じを受ける

その通りだ。

何故今になってジェニスが現れたのかは知らない……………だが。

「その通りだ。だからこそ、俺はジェニスを……………止める」

ヤツを止めるのは、この俺の役目だ。

例え行き先に罠が待ち構えていようが、俺はそれを突破する。

この身を壊されようが、黒こげにされようが関係無い。

「はやては無事に連れ戻す。それが……………俺のミッションだ」

「……………だが、既に事はお前だけの問題じゃない。私たちの問題でもある」

「しかし……………」

「だー！もう！うだうだすんな！はやてが攫われたんだ！あたしは一発あいつの顔をぶん殴らないと気が済まない！」
「ヴィータ姉」

さっきまで泣いていた所為か、目元が赤いヴィータ姉はそう叫ぶとアイゼンを手にする。

その先を俺に向けて掲げたヴィータ姉は、俺を睨みながら

「連れていかないとかほざいたら、フェン。お前をアイゼンの錆びにしてやる」

そう言った。絶対に行くという決意が見て取れる。

「みんなも・・・なのか？」

俺がそう問いかけるとシグナム姉が

「主が攫われたとあっては騎士の名が無く。私も行くに決まってる」

シャル先生が

「もしかしたら向うではやてちゃんが怪我しているかもしれません。策敵も得意ですから」

ザフィーラが

「俺達は主はやての剣であり盾だ。絶対に助けに行く」

ラインフォースが

「今回は私も鷄冠に来た。あの男にデアボリック・エミッションを叩きこまないと気が済まん」

なのはが

「まだ出会って間もないけど、フェン君の友達なら私の友達だよ！だから私も行く！」

ユーノが

「フェンもなのも無茶するからね。僕もついていくぞ」

全員が全員、はやてを救出しに行くことに応えた。

だが、みんなは怒ってないのか？俺と関わりがある人物、俺がいた所為ではやてが攫われた。

普通なら・・・俺を憎んでもおかしくない。

「・・・みんなは、怒って無いのか？」

「何がだ？」

「俺がいたから」

「・・・フェン、歯をくいしばれ」

バシン

俺はその先を言う前にシグ姉さんに叩かれた。いつしゅん呆然とする。

「うぬぼれるなフェン。この事態はただの偶然が重なって起こったことだ。その事をココに居る全員理解している。だから、この中の誰もお前を責めない」

「・・・」

「それともアレか？お前は悲劇のヒーロー、全て俺が悪い。だから全部背負うとか言うようなくだらない妄言に取りつかれている阿呆なのか？」

「いや、ちが」

違う・・・そう言いたい、俺の行動はまさにその阿呆のすることそのままだった。

ソレを認識した時、俺は悔しさで視線を落とし、手から血が出るくらい強く握んでいた。

「違っただろうフェン・・・私たちが知っているお前は阿呆では無い」

「そつだ。あたし達をもつと頼れこのバーカ！」

「はやてちゃんの言葉を借りるなら、私たちも“家族”なんですから」

シグ姉さん、ヴィータ姉さん、シャマル先生……。

「俺達だつてお前のことを認めている。それをお前は裏切るのか？」

「そ、そんな事……無い！」

「なら、俺達も協力させてもらう。家族とは支え合う者たちの事だからだ」

ザフィーラ……。

「私を助けた恩人に、恩を返させる機会すら与えずに、フェンは死ぬ気なのか？」

「ラインフォース……」

みんな……すまねえ。俺またバカやっちゃまうところだった。

「フェン君は一人で何でも抱えちゃうんだから」

「ホント、見て無いと心配だよ。僕らだつて“友達”だからね」

「お前ら……」

こういう時、涙が流せればいいんだが、生憎俺の身体はまだそこまで出来ない。

はは、しかし、相変わらず俺は愚かだったな。出来る限界がある時は仲間に頼む。

そんな簡単な事も忘れていた。……部下が死んでから人死に嫌だったからな。

しかしこの場の全員の決意は固い、ならば俺が応えるべき答えは一つしかないだろう。

「……みんなで助けよう。はやてを」
「……………勿論だ(だよ)(です)！」「……………」

そしてリンの助けで、俺は転送ゲートを開き、そのまま敵の元へと飛んだ。

Side 三人称

フエン達が突入を決めこんだ頃、連れ去られたはやては眠らされ、そのまま拘束されていた。

薄暗い個室、電源が供給されていないのか、部屋が薄暗く見える程度の灯りしかともされていない。

しばらくして、はやてが身じろぎし、目を覚ました。

「……………ん？なんやココ？いやまってや。ここはコレを言わんと」
そう言うと、んつとすこし咳払いをしてから彼女は口を開く。

「知らない天「目が覚めましたか？」わきゃ！」

突然横から聞こえた声に驚いて、思わず声を漏らすはやて。

声の聞えて来た方向に首を傾けると、扉の前に自分を連れ去ったあの男が立っていた。

「あ、あんた一体誰なんや！？なんで私捕まってるん？！」

「覚えてないのか？俺が連れて来たんですよ？」

「なにゆって……………」

男の言葉を聞き、はやては一気に思い出す。自分は誘拐されたと言う事を。

「え・・・あ」

その途端、身体が急に震え始めた。自分の意思じゃ無い。本能で身体が理解している “とても怖い” と。

首筋を少し斬られた痛みも思い出し、体の震えが酷くなる。

「な、なに？身体が震えて・・・」

「ほう？本能は理解しているのに理性が理解していない。高ランク魔導師にありがちな現象です。“現状を理解する事”が出来ない・・・そしてそのまま・・・」

クツクと男が晒う、それだけで身体の震えが止まらない、背中はや汗で冷たくなった。

ただひたすら、目の前にいる男が怖いのだ。

「う・・・あ」

そして何かされたのか、首がしまったかの如く息が出来ない。視界が歪んでいく、どうやら自分の目からは苦しくて涙が流れているのがわかった。

「おおっと、いけないいけない、貴女殺気を感じるのは初めて？」

そう男が言うと、少しだけ苦しみが消える。

だが相変わらず呼吸する事すら苦しい。まるで首を絞められているかのような感覚。

ぐったりとしてヒューヒューと苦しそうな息をしているはやてを見て、男はゆっくりと嘔いた。

「ほら、ゆっくりと深呼吸して」

男に言われた通り、彼女は深呼吸を行う。

スーハーと何度か繰り返すうちに、段々と視界がはっきりとし、頭も動き始めた。

「うん、ソレで良いです。ココで壊れちゃったら“隊長”と壊し合えないからな」

「・・・あ、あんたは、誰なん？何が望みでこんな」

頭が動き始めたはやては、何故この男がフェンに固執しているのか気になった。

確かフェンのことを隊長と呼んでいた所を見ると、以前の世界の関係者？

「自分ですか？俺はジェニス・クローバー、フェン隊長の元副官だ」

はやての言葉に、案外あっさりと応えるジェニス。むしろその飄々さが不気味さを誘う。

「何故こんなことをしたか？うーん何故でしょうね？解りません。」

「わからんやて？」

「ええ、ただ言えるのは、自分の中には現在複数の優先すべき指令と個人的感情、理性とかが複雑になっていてな？」

「指令？個人的感情？」

「そう、指令は只一つ“破壊せよ”。個人的感情は、“もう止めてくれ”、相反する二つの事が俺の中で渦巻いている。止められるのは“隊長だけ”・・・ああ、早くコワシタイ」

“隊長”という言葉を口にした途端、唇の先を釣り上げて、おもちゃが来るのが待ち遠しい子供のようには笑うジェニスだが、そんな綺麗な笑いでは無く、どこか自嘲にも似た笑みを浮かべている。

部屋の薄暗さと相まって、とても気持ち悪い。

「ま、そう言う訳ですので、お前は大人しくしている。貴女は大切なエサ何ですから」

「ま、待って！エサってどういうことなん!？」

「貴女は隊長の中でもかなり大切に思われているようでしたからね？つまりは隊長をおびき寄せる為のエサなんだよ。大丈夫、大人しくしていればどこも壊されることなく家に帰れる」

と、その時、個室にズズーンと振動が走った。遠くで何かが爆破された様な音だった。

「うん？おやまあ思っていたよりも早い。てっきりしっかりと準備してから来るかと思っていたのに・・・」

「・・・もしかしてフェン君？」

はやてが知っている中で、爆発を起すヤツなど一人しかいない。彼女の呟きにジェニスが反応してニヤニヤと笑みを浮かべながら顔をこちらに向けた

「やはり大切に思われているんですねあ？」

「いや・・・その」

なぜだかそう言われると気恥しくなった。

これもフェン君のせいや・・・と心の中で叫ぶはやて。

「ま、此方の準備は殆ど出来ているので、関係無いですがね。さて、エサの貴女にも働いてもらいますよ」

「え？わきゃ！」

突然自分の身体を拘束していたバインドの数が増え、口元まで覆われて喋れなくなる。

何が起きたのか解らず、はやては目を白黒させていた。ジェニスはそんなはやての様子等お構いなしに、彼女を空中に浮かべると部屋から連れ出した。

Sideフェン

俺達を襲った無人機部隊の転送元へと逆探を行って、なんとかたどり着いた訳だが、降り立ったのはどこかの荒野だった。どうやら次元世界の一つのようなのだが、どの次元世界からの座標からも僅差で外れている無人世界の様で、おまけに非常に空気が薄く、魔導師でない高山病になる恐れもある。

「ココにはやてが・・・」

「恐らくは、この先に見える人工物の中だろうな。無人機のモノと思われる足跡もそこから伸びている」

見えている建造物は二つ・・・アレは。

「二手に分かれよう。シグ姉さんはラインと一緒に騎士たちを指揮してくれ、俺は残りを連れて行く」

「わかった。フェン、あまり生き急ごうとするなよ？」

「……ああ、解ってる。俺はアッチのドーム状の建物に向かう」

「では私たちは残りの方を」

「みんな、死ぬなよ？」

「そちらもな」

俺達は二手に分かれ、敵施設へと侵入を開始する。

あいつは“懐かしの最後の場所”と言っていた。

俺にとつての……USNでの最後の場所は

「次元航行炉研究施設……」

「フェン君」

「何でもないなのは……おまえら聞け、あの施設へ入る為の入口は、点検用通路くらいしか入口は無い。恐らく妨害が予想されるが、全員直進後、速やかに通路へと突入。各自の判断で行動し、通路制圧後待機、ポイントゼロで合流する。なのはとユーノは実戦は初めてだからエレメントを組んで行け。ポイントゼロは各自のデバイスに転送しておく」

「わ、わかったの！私も頑張る！」

「ぼ、ぼくも！」

なのはとユーノは組ませた方が安全だろう。

攻撃のなのはと防御のユーノ、彼らが組めばそう簡単に落されることは無いだろう。

『動体反応を感知、この先敵部隊が展開しています。遠距離からの砲撃を推奨』

「さっそく出番だ、なのは。お前の魔法を貸してくれ」
「うん！」

不屈の魂を持つ魔導師の杖をかまえ、頼もしい返事を返してくれるのは。

砲撃の為にチャージを開始する。

「ユーノはなのはの援護！俺達はその間に敵陣を中央突破する！なのは達はある程度敵を撃破したら点検通路へと離脱しろ！ついて来いリニス！」

「わかった！」

「了解！」

『敵、タウロス18機、リスクーボム30機確認。なのはさん、直撃では無く手前に着弾させるのが効果的だと思われます』

「わかった。お願いレイジングハート！」

シューティングモードへと移行したレイジングハートの先に魔法陣が展開された。

魔法のライフリングとも呼ぶべきソレは、膨大な魔力を伴いゆっくりと回転している。

やがて出力臨界に達したのだろう、魔法陣から光の粒子があふれ出していた。

「デイバイン」

そしてなのはは、戦いの狼煙である聖なる砲撃魔法のスペルを

「バスターツ！！！」

口にした。

ギョオオオオ

放たれるは破壊をもたらず光、大地を削るように土煙を上げながら光は直進する。

光は魂持ため人形達を狩りとりつつ、余波で空を飛んでいた者たちすら撃ち落とす。

「いくぞおおおお!!!」

『ローラーブースト!』

BAの脚部モーターが唸りを上げ、アルアツソーから放つ弾幕が敵を引き離す。

俺が作った道をリニスが離されない様に、低空飛行でぴつたりと付いて来ていた。

『上空、リスキーボム降下開始、リン、オートエイムを』

【ガルヴァドス・スフィア形成、オート迎撃開始します】

スフィアから放たれる魔力弾頭達、次々と現れるリスキーボム達を火球へと変えて行く。

哨戒中の増援が現れたようだが、こちらにはかまっている余裕など元からない。

針路上に立ちふさがるヤツだけをアルアツソーで撃ちながら、目の前のドームへと急ぐ。

前方からは、設置砲台からの弾幕が放たれて、所々を抉りつつて行くが、直撃弾だけを防いで無視した。後方から、なのはの支援攻撃と砲撃がサポートしてくれているので、非常に動きやすい。

俺はそのまま点検用通路の壊れた入口から中に入り、そこに居た警護の無人機達を全て破壊した。

「よし、リニス俺の後ろを頼む」

「解りました。お任せください」

彼女が俺の背後を守るようにして立ったことを確認した俺は、入口から顔を出してなのは達に念話を送った。

「（なのは！ユーノ！入口は確保した！こっちに来い！）」

「（そうしたいのは山々なんだけど）」

「（く！敵の攻撃が多すぎて・・・）」

どうやら無人機達に搭載された戦術AIは、あまり攻撃しなかった俺よりも、大魔力持ちで砲撃を繰り返していたなのはを先に殲滅することを決定したようだ。

その事に舌うちをしながらも、俺なのは達がいる場所まで届く兵装を準備する。

「グロウタスク展開」

『グロウタスク、格納領域より実体化させます』

超長距離用兵装デバイス・グロウタスクが、俺の腕の中に実体化する。

俺はグロウタスクを構えてなのは達を援護すべく、狙撃準備を整えて行く。

「狙撃準備、術式レールブラスター、弾種は多重弾核弾」

『了解、出力をマテリアルショットモードへと移行させます』

ガシュっという音と共に、銃身冷却フィンが稼働を開始する。

『エネルギーライン、全段直結。ランディングギア、アイゼン、ロツク』

BAの四肢を固定し、疑似物質で構成されたランディングギアで狙撃体勢に移行する。

『チャンバー内魔力、正常加圧中。ライフリング形成、回転魔法陣展開。撃てます。』

ヴィズのその言葉と共に、俺はグロウタスクを発射する。

ポツという空気を切り裂く音と共に射出された魔力弾は、1秒もかからずになのはたちを包囲している無人機の一機を食い破る。

【一機目を破壊しましたです。増援を確認、注意してくださいです】
「（援護するから急いでこっちに来い！）」

俺は彼女等の返事を聞くことなく、念話を閉じて狙撃に集中する。レールブラスターの術式によって加速された魔力弾達が、次々となのは達を狙う無人機を潰していくのが見て取れる。

電磁力を利用した加速の為、余剰エネルギーで加熱された銃身の冷却フィンが赤い色を灯すが、ソレを無視して狙撃を敢行した。そのたびにあたりにレールガン特有の電気が空気を焼くイオン臭が漂って来る。

『なのはさん達が到達するまで、後200m!』

『リニース！ゲート閉鎖準備!』

『はい!』

すさまじい速さで飛ぶのはが、点検用通路の入口に滑りこんだのを見届け、俺は四肢のロックを解除、ランディングギアを消して、出力を下げたグロウタスクで残敵を撃つ。

「ココは通行止めだ。他を当たれ」

【ガルヴァドス発射！】

ドドドドオオンッ！

そして最後とばかりにガルヴァドスをばらまき、爆炎にまぎれて俺も入口へと飛びこんだ。

申し合わせたようにリニスが入口のシャッターを閉鎖する。とりあえ侵入には成功したようだ。

「はふう、なんとかあったあ〜」

「ありがとさんなのは、ユーノ。魔力は足りてるか？」

「僕はまだ大丈夫だけど、なのはが・・・」

「にははは、ちよつと張り切りすぎちゃった」

結構バカス力撃つてたからなあ。まだ術式の組み方が甘いから、砲撃にかかる魔力とかも高いんだろう。ふむ。

「ほれ、レイジングハートをこっちに向ける」

俺もアルアツソーを向けると、ディバイドエナジーを使用して魔力をなのはにワケ与える。

若干疲れた顔をしていたのはだったが、魔力が回復したお陰か少しだけ楽になったようだ。

「ふう、ありがとうフェン君」

「今回は連戦だったからな。なのはは良くやったよホント。ついでの間魔法を覚えたとは思えんくらいだ」

「えへへ、コレでも毎日練習してるんだよ」

テレテレという彼女だが、今自分が言った事の異常性が解っているんだろうか？

前世がある俺ならともかく、君はたった数カ月で戦場の中で戦える程に成長しているんだぞ？

ホント、主人公補正とは羨ましいな。十分チートやん。

「だが、疲れたらすぐに言えよ二人とも。魔力はともかく、肉体疲労は休まないと回復は出来ないからな」

「うん」

「解ったよ」

二人がそう言うのを確認し、俺はヴィズに頼んで奥に続く扉をハッキングし、隔壁を解放する。

無人機達を通らない通路の為か、ゆっくりと埃を巻き上げながら扉が開いた。

「さあて、ココからが本番だ」

『ジェニスが壊されるのがお好みなら、全て破壊してしましましょう。ジェニスの考えたシナリオをね』

「私も久々に運動しないとダメね。全力でフェン君をサポートするわ」

【はやて様も忘れちゃだめですよ！】

「そうだね。皆で行って、はやてちゃんと探して全員で帰ろう」

「みんな無茶しちゃうだめだよ？僕も出来る限りフォローするけどさ」
「わかってるさユーノ、さあ奥に向かおう」

そして俺達は、足元の非常灯しか付いていない薄暗い点検通路へと飛びこんだ。

待ってるよはやて！すぐに助け出してやるからな！

「さてさて、お姫様はどこに居るのかな？」（前書き）

*ギヤグ無しです。

「さてさて、お姫様はどこに居るのかな？」

「さてさて、お姫様はどこに居るのかな？」

妄想戦記

カツカツカツ・・・と、金属製の床を歩く音が、薄暗い通路に木霊した。

点検用通路なので、元々それ程広い訳ではない為、音が良く響くのである。

薄暗い空間をスフィアを灯りがわりにして、俺達は奥へ奥へと進んでいた。

「なんか、暗いし埃っぽいね」

「一応点検の際にしか使わない通路だからな。掃除なんてして無いだろう」

「なんか屋根裏部屋に来た時のような感じだ」

敵の攻撃をかいくぐり、なんとかドームの中に侵入した俺達。

一人ずつしか通れないので、奇襲されたらつらそうだが、生憎敵の大きさではこの通路を通ることは出来ない。おまけに外側の扉は既に閉鎖してあるから追って来れないだろう。

「・・・ふむ、ヴィズ」

『はい、BA？に変更なさることをお勧めします』

「だな、やってくれ」

『了解しました』

俺はこの先、接近戦になることを想定し、BAから接近戦が強いBA？に装備を変更する。

狭い通路の中なので、大剣のオートクレールは使えないモノの、取り回しに優れるジリーノと手甲に付いている内蔵式ブレードは役に立つ事だろう。

ちなみに歩きながら瞬時に装備が変更されたことに、後ろにいた連中は少し驚いていた様だった。

【ええと、この先】

「あと10mもすると、通路に出られる」

【え？なんで解ったのですか？】

リンが不思議そうな声を出す。自分が解析した情報を報告するよりも早く、俺が先に答えたからだろう。ソレも仕方がないことだ。

何故ならココは

「この先10mで通路に出て、そこからさらに奥へ300mも進めば、資材搬入用の通路へと出られる。そこは大型車での資材運搬を想定した空間だから、空を飛びまわる事も出来るだろう。更にその通路を奥に行けば、突き当たりに地下への直通シャフトへ通じている筈」

「え？え？なんでそんな事解るのフェン君？」

「・・・俺が最後に任務を行った場所、それがココだ。正確には同じ研究施設だけだな」

この手の研究施設なんてもんは、中の形は結構同じ規格で作られている。

とくに次元航行エネルギー炉を研究する施設とかは、ブロック工法で全部同じ規格で作られたモノコックだ。中の配置も殆ど変わらないのである。

「ほれ、そうこうしている内に」

「あ、ホントに出口だ」

「早いとこ出しましょう。この場所はすこし埃っぽいです」

ソレもそうだな。早いとこはやても助きたい。俺達は少しだけ脚を速めて移動を行う。

だが点検用通路の出口の扉は、恐らくこの施設が転送された際にどこか壊れたのだろう。

開閉スイッチを押してもウンともスンとも反応がなかった。

「どうするのフェン？戻って外から違う道を探すかい？」

「出た所を機銃で身体を霧に変えられたいなら、それでも良いぞ？」
「き、霧って……」

ウンじゃねえぞ？毎分数千発以上のCIWSを装備している機体もあるんだ。

まともには食らったら、ジャケットなんぞ貫通して、肉塊を通り越した赤い霧に変換される事請け合いだ。

「ま、そう言う訳だから、今更戻る訳にも行かない」

「じゃ、フェン君、どうするんですか？」

リニスが首をかしげながら、俺にそう聞いてきた。

俺は格納領域からジリーノを実体化しつつ、彼女の問いに答える

ことにする。

「そこはホレ、この万能マスターキーを使う」

「え？でもソレは・・・」

「みんな耳ふさいだ方が良いぞ？」

皆俺が何をやる気なのか理解したのだろう。

耳に手を当てて、音が聞こえない様に準備した。

俺はその事を確認すると、出口をふさいでいる扉にジリーノを向ける。

ドン！ドン！ドン！ドン！ ガシャンッ！！

四発のまるで銃声のようなジリーノの発射音が、狭い通路に反射した。

そして、万能マスターキーが使われた扉は、為すすべもなく倒れて行った。

なんとか通路に到達した俺達だが、ココからは無人機が出てこれる程の広さがあるので注意が必要である。こういった通路はあまり遮蔽物がないので、いきなり撃たれたらとても不味い。

なので先頭は俺、殿がなのは内側はリニスとユーノと言う隊列となった。防御力という観点から考えたら、妥当な選択であろう。

「ん？フェン君、いまこの角の先から音が・・・」

「了解、みんな身を隠しとけ」

リニスが何かを感知した。警備の無人機かもしれない。

皆がちかくの柱の陰に隠れたことを確認し、俺はすぐにシールドが張れるよう準備しつつ、そーっと曲がり角の陰から、その先を伺おうとした。

ヴォンツ！

「ッ！」

だがそこに白銀の光が振り下ろされそうになり、俺は急いで首をひっこめた。

そしてカウンターを入れる為に、手甲からブレードを展開し相手の首に付きつける。

だが、同時に相手の剣も俺に突き付けられていた。

「・・・あら？」

「フェンか、驚かせるな」

そしてここに来てようやく相手の姿を確認した。

俺に斬りつけて来た相手は、シグ姉さんだったのである。

お互いに正体を確認したので、とりあえず付きつけていた刃を降ろすことにした。

「シグ姉さん、それにみんなも？」

「ああ、後ろに居る。出てきていいぞ。フェン達だ」

後ろを見れば他のヴォルケンスの姿も見える。

何故彼らはココに居るんだろうか？

「シグナムさん達、なんで私たちよりも先にココに居るの？」

「いや、最初俺達はもう一つの施設に行つてたのだが・・・」

「どうも無人機の製造工場だったらしくてさ？でも機能を停止して誰もいなかったんだよ」

「で、その施設からつながっていたトンネルに沿つて着たら、ココに出たんです」

なのはの質問に皆が答えていた。
てことはやはり

「間違いなくはやてはコッチのドームの中か・・・」

「ああ、間違いないだろう。居場所は解らなかったが、先ほど主はやての生体反応を確認した。もつともすぐにジャミングされて、居場所が解らなくなつてしまつたが・・・」

すこし悔しそうに、俺の隣にいたリインがそう言った。

だが生きてここに居たと言う事が解つただけでも儲けものである。

「リイン・・・だがこう言つた場合大体場所は決まつている。だろう？」

「ああ、恐らく最奥に居る事だろう。生体反応がジャミングされる前に感知した場所もそこだ」

「なら急ごう、ジェニスの馬鹿が何考えてる事が・・・」

会話は移動しながら行う事にして、先を急ぐことにする。

幸い中の構造は、ホントにあの俺が最後にいた次元航行炉実験施設と同じ造りだ。

これなら目的の場所までどう行けばいいのかすぐに解る。
俺を含めて総勢8名の大所帯で、俺達は最奥へと走つた。

資材搬入通路

なんとか資材搬入用の通路へとたどり着いた俺達。
大型車が通れるだけはある、かなり広い空間が広がっている。
これ程広ければ、動き回るのに支障は無い事だろう。

ドドーンッ！

「チィ、やはりこつちに来ることを読んでいたか。まあ普通つた道だからな」

『敵に捕捉されました。対魔導師用シールドバンカー射出機が設置されています』

敵さんは相変わらずタウルス達、しかも今回は肩に大口径ガトリングと給弾装備をつけた弾幕タイプが数機踏ん張っている。俺ならシールドを使えばなんとかなるが、シールドバンカーが邪魔だ。

「ふむ、これでは突撃したくても突っ込めないな」

「遠距離砲撃したくても顔を出したらミンチ確定つてとこだしなあ」

そして案の定、敵さんの待ち伏せを受けて、俺達は銃撃の真つただ中に居た。

所々に崩れた天井が山になっていてくれて助かったぜ。

ドン！ドン！ドン！

「く、ジリーノじゃダメか」

俺は遮蔽物に隠れながら、背面撃ちを行うものの、ジリーノでは威力が拡散してシールドを貫けない。かと言ってグロウタスクはデカすぎるしな。クソ。

「ところで隔壁はどうなんだ？」

【 うーん・・・ダメですう。やっぱり幾らやっても受け付けないですう】

隔壁が降りている為、一応先ほどからリンにシステムハックを行って貰っていた。

だが、ハッキングは出来ても、その先の隔壁を開けるとこまで行かない。何故だ？

「どうやら指向性の強力な指令を送っている機体があの中にいるみたいですね」

「そうなのかりニス？」

「ええ、先ほどからノイズを感じます」

「出来れば速いとこ片付けよう。先ほどから銃弾が頭上を駆けて行くのは心臓に悪い」

「ザフィーラは身体が大きいですからね」

ふと犬形態になれば「オオカミ」・・・オオカミ形態になれば良いんじゃないかと思った。

まあそんな事よりも、アレを潰すのが先か。

「なのは！ダイバインシューターで、シールドバンカー壊せるか！？」

「やってみる！ちょっとまって！」

なのはが目を閉じて集中すると、四つのスフィアが出現した。彼女は別々に操り、二つは地上、残り二つは空中、それらをシルドバンカーへと走らせる。

すると無人機達は砲口を、飛びだしたスフィアへと向けた。そして砲弾の雨を降らせてスフィアを全て撃ち落としている。

「ごめん、私・・・」

「いや、アレで良い。今ので敵さんが何を元にして撃ってるのかが解った」

どうやらあいつ等は赤外線やカメラアイでは無く、俺達魔導師の持つ魔力を元に銃撃しているようだ。道理で妙に正確にこちらを捕捉する訳だ。全員がAランク以上の魔導師だぞ？さぞかしセンサーにも写りやすいに違いない。

「なのは、もう一度頼む！ヴィータ姉！」

「なんだ？あいつらをブツつぶせる方法でも解ったか？」

銃弾の雨が吹き荒れる通路で、会話をするのも一苦勞だ。

念話を混ぜながらも大声で怒鳴る。

「ああ！ヴィータ姉！シュワルベフリーゲンを最大級で撃ってほしい！」

「任せろ！ドデカイヤツを一発撃ってやるぜ！」

「なのはは撃たれた砲弾を盾にしてシューターを！俺はヴィータ姉が撃つ瞬間を防御する！」

「わかった！」

「私たちも！」

「ああ！フェンがシルドを展開したら僕達が支えよう！」

リニスとユーノが俺と一緒にシールドを保持してくれるらしい。ソレはとても心強いな。俺は急いで多重シールドの準備を進めて行く。

「ヴィータ姉！準備はっ！？」

「できてるぜ！」

「私も！」

「よし！ブチ咬ませええええ！！！」

多重シールドを展開し、ソレをリニスとユーノが補強する。

俺達が盾を作って攻撃を防いでいる間に、ヴィータ姉は素早くシユルベフリーゲンを展開し撃ちだしてから身を隠した。

その直後にシールドバンカーを数十発受けた多重シールドが崩壊したが、ヴィータ姉は素早く隠れたので怪我はしていない。

空を飛んでいく魔力を伴った鉄球の後ろに桜色の魔力弾達が付き、無人機の大口径ガトリングから放たれる弾幕で鉄球はドンドン小さくなるが、シューター達はなんとか弾幕を突破した！

バツガアアアッ！！

『効果確認、シールドバンカー射出機破壊！』

「フェンッ！」

「ああッ！」

そしてその途端、二つの影が踊り出る。

俺とシグ姉さんが遮蔽物である天井の瓦礫の陰から飛び出したのだ。

当然大口径ガトリングの照準はこちらに向けられる。だがその一

瞬があれば良い。

「鋼の楔！」

ザフィーラが大口径ガトリングを持つ敵を拘束。

「闇に沈め。ブラッディダガー！」

リインフォースが兵装をつぶし。

「ハアアアッ！！！！」

ゴガギンツ！ バッカーンツ！！

シグ姉さんと俺とで止めをさした。敵は為す術もなく破壊され鉄クズへと姿を変える。

しかも、どうやらガトリングを持つ敵の中に信号を発していた奴らがいたらしい。

最後のガトリングを持つ一体を破壊した所で、隔壁が解放されていた。

「グッドキル！」

リニスがそう言ったので、一応サムズアップで答えて置く。

リイン達の援護のお陰でもあったから軽くあんがと言っておいた。

「しかし、どうやらあのカスタム機を全滅させないと、隔壁が開かないようだ」

「だが、戦い方は解った。コレですぐに行ける」

これで人質がいなかったら、なのはと一緒に砲撃魔法で殲滅してやる所何だが……。

生憎はやてがどこに捕らわれているか正確に解らない以上、色々巻き込んでしまう砲撃魔法は使えない所が辛い。

「　　つと、みんなお客さんがきたよ」

「おつおう、案だけぶっ壊したのにまだ居るのか？」

「生産施設が空だったと言う事は、全機投入しているんだろう」

見れば、タウルスがその四本足で床を踏みしめて身体を固定し、先ほど倒したのと同型の大口径ガトリングをこちらに向けて放とうとしているのが見て取れる。

「さつさと終わらせるぞ！」

「……………了解だ（なの）（よ）！！」「……………」

シグ姉さんの声に全員で答え、とにかく奥へと向かう為に、俺達は戦場へと足を踏み入れて行った。

さて、この先第4隔壁までは殆ど同じ様な先頭だった為割愛させてもらおう。

ココまではそれ程の被害も出ることは無く、奥にすることが出来た。

精々かすり傷を負った程度なので、優秀なヒーリングが出来る人物が2人もいるのでほぼ無傷と言う事になる。

ゴウンゴウンゴウン

隔壁は全部で7つある、ようやく半分を突破した所だからまだ気が抜けない。

とりあえず全員分の魔力補給を終えて、第5隔壁があるエリヤへの隔壁が開くのを待った。

「しつつかし、なれちまうとホント作業だなコレは」

ヴィータ姉が突然そう呟いたのを聞き、俺は心の中でうんうんと頷いた。

無人機達との戦いで厄介なのは、その戦闘力では無く此方のモチベーションの低下にある。

魔導師ならともかく、対峙する相手相手が全く同じパターン、しかも同じ姿と来たもんだ。

パターンさえ解ってしまえばあとはまさに作業、倒すまで同じ工程を繰り返すのみである。

これにより起こる意識力の低下が油断を招き、USNで幾多の魔導師たちが命を落したのである。

簡単に言えば、ゲームで百人斬りに挑戦する様なもんじゃないだろうか？

「ヴィータ姉、油断はダメだ、死ぬぞ？」

「はん、あたしを誰だとおもってた？」

「無駄口を叩くな！集中しろ！」

シグ姉さんから注意が飛ぶ、別に油断している訳ではない。むしろ嫌な予感が増している。あまりにも簡単過ぎやしないか？ココまで大規模な仕掛けをしておいて、まさかあの無人機達を相手にする

だけとは、俺は到底思えない。

「隔壁、完全に開きます」

リニスがそう言うつてのを聞き、隔壁の方へと顔を向けた。隔壁の向こうは真っ暗・・・電源が落されているのか・・・。

「何かいます。フェン君」

「リニス・・・リン、灯りをつける」

【解ったです】

リニスは暗闇に何か居たのを感じたらしい。とりあえずリンが照明関係のシステムにハッキングをかけ、エネルギーをバイパスさせた。そして目の前の空間がパツと明るくなる。だが見た所無人機達の姿が見えない・・・。

「全員注意しろ、何が出るかわからない」

「いや、まて。アソコに一機いる」

灯りが点灯し、暗闇の中から浮かび上がるシルエット。

ソレは今まで出て来た無人機達とは違い完全な人型だった。

「あれは・・・今までのと全然違うな」

「フェン、あいつは何だ？」

「・・・わからん。俺が消えてから開発されたヤツかもしれない。皆注意」

そこまで言った途端、ドンツ！と言う音と共に俺は突然横殴りの衝撃を受けて吹き飛ばされていた。どうやらあの無人機が何かをしたようだが、一体・・・。

「……フエン（君）！」「……」

「……イツツ、BAがあつたから大丈夫だ。と言うか遮蔽物に隠れる」

一応俺はそう言ったが、実の所皆既に遮蔽物の陰に隠れている。

どうやら俺が吹き飛ばされたのを見て、普通に隠れたらしい……まあ良いが。

【敵腕部兵装から高エネルギーを感知しました。恐らく衝撃波を飛ばす兵器だと考えられます】

『少し距離があつたので大丈夫でしたが、目に見えない上、至近距離では装甲シールドでも防ぎきれません。接近されない様注意してください』

どうやら腕部に持った銃らしき兵装から撃たれた物らしい。

衝撃波を飛ばすだけで、遠距離では致命的なダメージは無いが動きを止められてしまう。

動きを止める為の攻性補助兵装と言つたところだろうか？

「フエン君、いま治癒かけますから、ジツとしてください」

「大丈夫だリニス。BAのお陰で無事みたいだからな」

心配そうな顔をしたりリニスが俺にそう言ってくれたので、自分は無事であることをアピールする。結構心配性だからなりニスは……。

「なら良いんですけど……何かあつたら言ってください」

「あとう、私もいますけどー」

「シヤマルさんは他の皆さんを頼みます」

「それはさて置きシャマル先生、どうやって突破しよう？」

正直あの手の奴とは戦った事がないので、俺でもお手上げだ。

通路中央に仁王立ちみたく一機いるだけだが、遠距離では衝撃波が拡散して動けなくされ、至近距離で浴びたならバラバラにされる恐れがあるのだ。

「うーん、そうですね」

彼女は俺達をちらりと見る。

「一番手とり場合のは、誰かを囿にして、その隙に破壊する事です。でも、それは最後の策で最善じゃ無いから、もう少し考えさせてくれる？」

「早いとこ頼みますシャマル先生、遮蔽物が持つ間が限界だ」

さつきからバンバンと衝撃波を連発してきている。

この手の施設に使われる建材は丈夫な素材が使われているが、それでも戦闘出力の兵器を何発も浴びれば壊れてしまうのだ。あまり時間は無いぞ？

「近づけない・・・なら近づかずに・・・旅の鏡は？」

「旅の鏡の出現場所を感知されて、そこから撃たれたら終わりだな」

「・・・なら、一斉に同時攻撃を行うのが、良いかもしれないわ。見た感じ、遠距離武器はアレだけみたいだし」

確かに衝撃波を放つ兵装しか使って無いな。

でも一斉攻撃はそれなりにリスクもあるし、何より本当に兵装がアレだけしか無いわけではないだろう。だがはやてを早く助けたいし・・・。

「やろう」

「シグ姉さん・・・」

「立ち止まった所で、事態が好転するわけではない。解らないなら突き進む事も必要だ」

ソレは確かに・・・だが。

「危険だよ？」

未知の敵に挑む。ソレはとても危険な行為である。特に無人兵器と言つのは見た目では判断できない機能や装備をしている事もあるのだ。そこに突っ込むと言つのは本当に危険なのである。だがシグ姉さんは危険と言つた俺の言葉に頭を振った。

「危険など元より覚悟の内、我々のすべきことはココで立ち止まる事では無い」

「だな。まあ、あたし達は頑丈だからな。2、3喰らっても平気だろうさ」

ヴィータ姉も賛同した。まあ確かにプログラム生命体であるヴィータ姉たちは、致命傷でも痛覚を抑えれば活動が可能だからな。

「近距離での攻撃力があるから、この中で飛びこめるのは俺とフェンとシグナムとヴィータくらいだな。あとの連中は魔法で援護と言つたところだろう」

珍しく口を開いたザフィーラが、現状での戦力把握を述べる。

なのは自分が数に含まれていない事に少しだけ脹れたが、彼女の魔法にはいまの所近距離での攻撃手段がない以上、自重して貰う

しかない。その代わり援護に期待するぞと言ったら任せると力強く返されたから問題無いだろう。

「……やるか。はやてをコレ以上待たせる訳にもいかない」

「おし！やるぞアイゼン！」

「我々も気張る事にしようかレヴァンティン？」

「……」 ザフィーラは手甲の位置を確認している。

作戦は決まった。俺達が突っ込み、その他は援護する。実にシンプルな作戦だが、下手な小細工が出来ない以上、シンプルな方が効果的であろう。俺達は物陰から一斉攻撃の機会をうかがっていた所、リニスが幻術である無人機をかく乱すると言ってきた。

「リニス、幻術使えたのか？」

「ええ、と言っても影の様なモノを出すだけです、目で見ている訳ではない機械相手なら、何とかごまかせると思います」

確かにカメラアイと言っても動体物を認識する程度でしか無い。こちらの情報がすべてインプットされている可能性もあるが、使ってみる価値はあるだろう。

「それじゃ、頼む」

「わかりました。……行きます」

リニスが術式を展開させると、背丈だけが同じ影達が複数魔法陣から現れた。

影達が遮蔽物から飛びだすと、それに反応して衝撃波を撃ちだす無人機。

だが当然影なので、攻撃は素通りしていった。

「今だ！」

そして影に反応する事を確認した俺達も、他の影と一緒に飛び出した。

いきなり複数の動体反応に混乱し、無人機が動きを止めている。

「シュラークッ！！！」

ドゴッ！バギギンッ！

ヴィータ姉がシールドを破壊し

「はああああ！」

ドン！ドン！

俺がジリーノで衝撃波を放つ携帯兵器を破壊

「どっせい！」

ドゴンッ！

ザフィーラが力の限りの拳で無人機を撃ち上げ

「紫電

」

そしてシグナム姉さんのレヴァンティンが

「 一閃！」

バシユユツ！！！！

頭から無人機を両断したのであった。

「人質っていうのはホント質悪い」

「人質っていうのはホント質悪い」

妄想戦記

ガラン

「破壊された・・・よな？」

先ほどの無人機の残骸を、ヴィータ姉がアイゼンの先で軽くつついている。

まあそうしたくなるのも解る。あの衝撃砲は結構インパクトがあったからな。

「どちらの機体何だろうか？」

『私の中のデータベースには記録はありません。ただこの機体はUSN、OCU双方の技術で作られたと思われる個所が見受けられます』

そういえば、OCUでは武装面が、USNでは重力制御系がそれぞれ得意な分野だったな。

「うん？これは？」

【シリアルナンバーと、多分この機体の名前ですね】

シリアルナンバーは掠れてしまい良く読めないが、機体名だけは
かろうじて読みとることが出来る。薄れたUSNの言語（英語に
近い、と言うか英語）でこの無人機にはこう書かれていた。

「Phantom・・・ファントムか？」

「地球の言葉だと幽霊や亡霊を表す言葉ですね」

「・・・化けて出てきたりとかはしないでほしいな」

「や、やめてよフェン君！幽霊とかなんていないよお！」

約一名幽霊が苦手な方がいるようだが放置した。

コイツは機械だぞ？そんな化けて出るとかなんて非常識な機能

ガタン

「・・・!？」

「どうしたフェン？トラブルか？」

「・・・いや、何でも無い」

思わず音がした方に顔を向けていた。無い無い、アレは機械、
アレは機械。

見れば天井の破片が落ちてきただけだったようだ。・・・ちよい
と驚いた。

とりあえず、隔壁を開ける作業に移ることにする。

『隔壁の制御システムへと侵入、パスワード、ロックされました』

【ハッキング開始・・・防壁へと侵入を開始、アレイ展開】

「なあフェン、コイツらなんて言ってるんだ？」

「……簡単に言えば、正面から入れないから強行突破しました
ってところだ」

「おお！成程！」

「いや、ヴィータ。微妙に間違ってるから……」

しばらくして、現在閉じている目の前の隔壁の制御を奪う事が出
来た。

制御プログラムを一々別個に作るとか、面倒臭い作りをしていた
から時間を食った。

ゴウンゴウンゴウン

ガゴオオオン

こうして、最後の隔壁が開いていった。

いままでの通路と違い、地下へ降りる為のシャフトがこの先にあ
る為、この先は若干広い空間になっている為、大軍を置いておくと
踏んでいたのだが

「誰もいませんね？」

「なんかトラックみたいなのは、おいてあるみたいだけど……」

「見た感じ敵とかの気配がないね」

「………怪しいな」

何も無く誰もいない空間、もしかしてもう無人機の在庫が切れた
のか？

ヴィズのセンサーにも何の反応もない……隠匿されてたら解ら
んが。

「この先はどうなっているだ？フェン」

「突き当たりにシャフトがあって」

その時、俺が説明の為動こうとした途端

パチパチパチパチ

「!!??」

「拍手だあ?」

突然どこからか拍手の音が聞こえて来た。

誰もいない筈の空間に響く拍手の音・・・ミラージュハイドか!

「ジェニス、そこか!」

「どうも、昨日ぶりですね“隊長”。よほどあのお嬢さんが大切と見える」

声がる方に顔を向けた俺。シャフトの入口に、口角を釣り上げて晒う俺の元副官が浮かんでいるのを、俺は自分の眼で捕えていた。ジェニスはゆっくりと俺達と対峙する位置へと降り立ち、再び口を開いた。

「あーあ、しかしせっかくの新型でも、貴方相手では足止めくらいしか役に立ちませんでした。ねえ?“隊長”?」

「貴様ツ! フェン止めるな!」

「ヴィータ姉突っ込むのはいいが、周りを良く見る」

ミラージュハイドに気が付いた俺は、すでにこの空間をサーチを終わっている。

その結果解ったのは

「この部屋は、設置術式だらけだ。下手に動くとヤバイ」

「おや?バレちゃいましたか?せっかく隊長の技を使ったワナ第2弾で驚かせてあげようかとおもったんだが」

生憎、自分ですものならともかく、野郎にして貰う趣味は無いんでな。

ヤツはせっかく用意した術式が見破られたのが嫌だったのか、そのまま設置術式を解除した。

なぜだ？そのまま設置しておけばいいものを……。

「ところで……どうですか隊長？余興の戦闘は？」

「……久々に戦争の気分になれたよ。油断できない所が特にな」

「はは、ソレは重畳。さあて、オードブルは良いとして、そろそろ

“メインディッシュ”はいかがですか？」

「そんなクソ以下の値打ちしか無いもんはいらん。はやてを返せ」

「おやおや、せかさなくても大丈夫。だって“メインディッシュ”

は

ジェニスがパチンと指を鳴らす。すると背後のシャフトからエレベーターが上がってくる音がした。なんとも陳腐な演出かと思っただが……。

「な！あれは！？」

「はやてちゃん！？」

「……主！」「はやて！」「……」

エレベーターと共に上がってきたのは、半透明のカプセルに入れられたはやての姿。

音が聞こえないが、カプセルの中でギャーギャー騒いでいる所を見ると、どうやら無事の様である。

「……“メインディッシュ”は、彼女も込みですからね？」

「……ジェニス、貴様そこまで……なにがお前を変えた！」

「さて、原因があり過ぎて解りません。しいて言うなら貴方を「ワシタイ」という事しか考えられないこの頭の所為でしょうか？」

俺の質問にS型デバイスのプレートを指さしながら答えるジェニス。

「グレムニルか？奴らに」

「ええ、任務中に大けがを負っていた私は拉致られて、頭の中を引っ掻き廻されましたよ？お陰で最近まで意識は無かつたんですがね」

モーガンの並列意識体の素体の一つとして、グレムニルの戦力を作る為の施設管理に回されていたと、ジェニスは語った。

「ですが・・・驚きました。死んだと思っていた隊長が、まさか世界を越えて生きていたなんてな？あなたの姿を見た途端、私の中で何かが弾けましたよ？二律背反のその思いは、今も俺のなかで俺を焦がしている“コワシ アイタイ”ただそれだけの思いがね」

一気に喋った上、俺にはどういう事何だかさっぱりわからんがコシだけは言えるな。

「そうか・・・お前は、もう俺の部下では無い・・・俺の敵なんだな」

「その通りです。さあ楽しみましょう？この“壊し合い”を！互いに殺し合い相手を破壊しようとするこの愛おしい一時を！」

ジェニスがそう叫ぶと、独特の起動音がシャフトから聞こえてきた・・・まさか？

「隊長！アンタは破壊者であるべきだ！憎しみを込めて俺を壊そう

とする！それこそが救いであり懺悔！破壊の魔導師たる我々の宿命！さあさあさあ！もつと壊れちゃいましょう？赤き血の海に沈み、死んで逝った部下たちの元へいざ赴きましょう？」

そしてシャフトから現れる6機の影、ソレらは内壁に沿って飛びまわりジェニスの横に並んでいく・・・その姿は、ファントム、先ほど倒した無人機と同じ無人機が、ずらりと騎士の如くジェニスを守るかの如く立ち並んでいった。

「はは、ははははは、ひやはははははははははは！もはや言葉は不要！魔法で壊し合うだけ！」

そしてファントムたちは、あの衝撃波を放つ兵装を此方へと向ける。

至近距離で喰らえばバラバラにされる兵器、だが俺達は

「上等だ、貴様をぶちのめして、主を助け出す！」

ザフィーラが拳を鳴らしながらそう言い。

「フェン君の友達のはやてちゃんを助けるんだから！」

なのはがレイジングハートを構え。

「はやて、まってる！いますぐあたし達が助けるからな！」

ヴィータ姉は今にも高速移動魔法フェアータで飛び出しそうで。

「く、ココでは狭くてデアボリックエミッションが使えないか・・・だが安心しろ？ブラッディダガーで貴様は八チの巢だ」

リインフォースは、普段とは違い怒りの目をジェニスに向けていた。

「夜天の書の主に危害を加えた事は……万死に値する！」

シグ姉さんはレヴァンティンを彼の物に向けてそう言い放ち。

「さあ、あなたの弱点はどこかしら？」

シヤマル先生は目からハイライトを消し、クラールヴィントをからペンデュラムを伸ばし。

「フェン君の敵である貴方は、私の敵でもありません。大人しく倒されなさい」

リニスがフォトンランサーの術式を編み上げてスフィアを形成し。

「直接は戦えない僕だけど、みんなをフォローする！」

ユーノもしっかりと敵を見据えている。

そして俺は

「さあ望み通り“壊し合い”に乗ってやる。とつとつ“メイン”を出しやがれ」

「くくく、良いでしょう」

ヤツの挑発に

「行け！ファントムたち！まずは人形たちがお相手する！」
「無人機風情が……魔導師を無礼るなあああ！！！」

あえて乗ったのであった。

Sideなのは

はやてちゃんを連れ去った誘拐犯との戦いが始まった。私たちははやてちゃんを助けられないといけないんだけど、ロボット……たしかファントムって名前の無人機が邪魔をするので、私たちはそれぞれ分散して戦う事になってしまった。

私とユーノくんは一緒になって、さっき現れた6機の内の一機を相手にしていた。

「デイベインシューター！」

『Divine Shooter Full Power』

レイジングハートから8発の誘導魔力弾を撃ち出した。
いまの所、これが私が誘導を行える限界なのだ。

【Fifi Guard of gravity】

「だめだ、防御壁でシューターが防がれてる」

放ったシューターは、ファントムが造り出した半球状のバリアによつて防がれた。

かなり強固なバリアらしく、込める魔力を高めてあつたシューターが通用しないなんて予想外だつた。

キュイン、ギョオ！

「くッ！」

「防がない事は無い・・・だけど」

「近づかれたら不味いの」

放たれる衝撃波を防御する。今は距離を取つてあるおかげか、衝撃波はそれ程協力に感じない。

「ただど油断は出来ない、相手は決して手加減や情けをかけてくれる様な相手じゃないから。」

「ユーノくん！バインドを！」

「わかつた！チエーンバインド！」

だから、私たちも全力で戦う！

「いつけえ！捕まえる！」

ユーノくんが幾つもの魔法の鎖で、ファントムを縛りあげようとする。チエーンはファントム目がけて伸びて行くけど、ヒラリヒラリとかわされていった。だけどソレが狙い。

「かかつた！フープバインド！」

計算されて射出された鎖により、動きをコントロールされたファ

ントムは、ユーノくんが並列で組んだフープバインドにからめとられたのだ。

「なのは！」

「うん！ダイバイン」

そして動けない今が、攻撃のチャンス！

私は杖に込める魔力を高めて行く、私の魔法の中でもかなり強力な魔法。

はやてちゃんはアツチの方向だから、こっち側なら！

「バスタアアアー！！！！」

ギョオオー！！

砲撃魔法ダイバインバスターを、ファントムに向けて発射した。私たちの連携によって、ロボットは為すすべもなく、光の中に溶けて消えっていったの。

「よし！一体撃破！やったねなのは！」

「うん！でも他の人達は」

と、私があたりを見回そうとした瞬間。

「あぶねえだろうが！にゃのは！」

「にゃのはじゃなくてなのはだよ！」

はやてちゃんの騎士と言っていた、ヴィータちゃんが赤い閃光になつて突っ込んできた。

……驚いて思わず杖を向けそうになったのは秘密です。

「流れ弾であたしまで落されそうになったんだ！お前はにやのはで十分だ！」

「訳解んないよ！？でもごめんなさい！」

どうやら先ほどの砲撃が、ヴィータちゃんの所に流れたらしい。序でに射線上にいた、ヴィータちゃんと対峙していたファントムも壊しちゃったみたいなの。

援護みたくなつたから良かったけど、すこしバリヤジャケットが焦げたとか言っていた。

「ごめんなさい。ヴィータちゃん」

「ああ、もういい。後、フレンドリーファイアは戦場じゃ良くある事だけど、気をつけてくれよ」

「うん、ごめんね？」

「わかつたつてば」

なんとか許してもらえたの、あ！そう言えば他の人達は大丈夫なのかな？

「他の連中なら、ホレあそこ」

「あそこ？」

ヴィータちゃんが指示した方角には、至近距離で戦いつつもファントムを圧倒しているシグナムさん、魔法で拘束してからファントムの胴体部分から何かを抜き出したザフィーラさんとシャマルさん、射撃魔法でけん制しつつ、思いつきり殴りつけて壁にファントムを激突させているリインさんが見えた。

「援護とか必要無さそうだね」

「下手に割って入ろうとすると巻き込まれるからな。危なくなつた

ら入る。それでいい」

「そう言えばフェン君は？」

「向こうを見る、さっきからフラッシュみたくなってる所があるだろっ」

そう言えばさっきあのジェニスさんとか言う人が立っていた所を中心に、フラッシュライトをたいたみたいに光が出ているのが見て取れた。

「も、もしかして・・・」

「ああ、またあのバカ自分の限界近くでフルパワーで戦ってやがる」
「早過ぎて眼で追えないくらいの攻防なんだ」

ユーノくんはそう言うけど、よく目を凝らして見るとつつすらと戦っている姿は見える。

マントの上と足首に余剰魔力で出来たフィンを展開させて、ソレを使って加速しているのだと言うのが見て取れた。瞬きする一瞬で何合も斬りあいと撃ちあいを繰り返している。

「隊長、どうです？強いでしょっ！」

「ああ、もう別人じゃねえかって思えるぞッ！」

息を忘れるほどの攻防、フェン君が大剣を横に振りかぶり薙ぎ払いを放った瞬間、ジェニスさんは両手で展開した魔力刃で受けとめ・・・ううん、反動をそのまま後方に“徹した”の。斬られた訳じゃ無くて、まるで柳の枝みたいにフェン君の力を受け流していた。

「まだ壊れたら嫌ですよ？壊し合いは始まった　ばかりだ！」

そしてジェニスさんの方から、今度はいきなり大量の魔力スフィ

アが現れたの。

原理は良く解らないけど、ジェニスと言う人はタイムラグ無しに魔法を放てるらしい。

迫る魔法陣を、フェン君は大剣を床に突き刺してその陰で防御していた。

けどソレを見越していたのか、大剣の横から誘導魔力弾を撃ち込んで、フェン君を攻撃するジェニスさん。フェン君が！って思ったのも束の間。

「この程度で・・・俺の装甲が抜けるものか・・・舐めるなああ！」

命中した魔力弾が爆発し、フェン君の煙が辺りを包んでいたが、そこから白い鎧が飛び出してきた。まったくダメージを受けた様子がない。フェン君はどれだけ防御が固いのが良くわかる。

そして大剣は地面に突き刺したまま、フェン君は手甲部分からせり出した刃を構えて、視界から消えてしまいそうな速さで、ジェニスと言う人に突進する。

瞬間的に、私はフェン君を見失ったので、この時感覚的には突然の白い光が出たと思ったたらジェニスさんと斬りあいを再開していた様に見えた。多分背中中のフィンに大量に魔力を流し込んで、爆発的に加速したんだと思う。

「フラグ（破片）マイン展開！」

「ちっ！ジリーノ！」

ジェニスさんの周辺に突然現れた黒い球体、ソレに向けてフェン君は魔法を放った。

拡散された弾幕がその球体に触れた途端、球体が大爆発を起して辺りを巻き込んでいた。

しかも、魔力で構成された破片が辺りに刺さっているのが見えたから、アレを近くで浴びたらと思うと、私は絶句するしか無かった。

「これで!？」

フラグマインを全弾撃ち落としたフェン君は、手甲の刃を突きだした。

フェン君の刃が完全にジェニスと言う人の腹を捉えた様に、私たちには見えた。

「あまいです！スイ〜ツよりもあまい〜」

でも次の瞬間、ジェニスさんの姿が歪み、まるで掻き消えるかの様にして消える。

フェン君が慌ててその場を飛び去った瞬間、フェン君がいた場所を虚空から現れた魔力刃が貫いていた。

「ありゃ、やつぱ2度も3度も同じ手は通用しませんか？」

「・・・パクんじゃねえ。大体俺よりも幻術使うのが上手いなんて反則だぞ」

「ソレはほら、このS型のお陰ってヤツだ」

「ハッ！くそつたれめ！まあ元々幻術の素養はあるのは知ってたから、特に驚かん」

そしてフェン君が手を虚空に伸ばすと、そこにさつきから床に突き刺さっていた大剣が床から外れてフェン君の腕の中に収まっていた。そしてフェン君は大剣を肩に担ぐようにして構えて、ジェニスさんに向けてこう言った

「お前、何で魔力が減らない？・・・なんだってリン！？ジェニス！テメエ?!」

「おや、やっと気が付きましたか？遅すぎますよ？やはり平和ボケは恐ろしい」

「くッ！だつたら次で勝負を決めてやる。もう時間がかけられない！」

「そうですよ。最初からそうすれば良いんです。俺みたいな卑怯でくそつたれなヤツは速いとこ破壊するに限ります。それに貴方は俺を敵だと言った。いまさら何をためらいますかフェン・リーダー？」

「・・・すまんが」

「いえいえ、これでも副官でしたから・・・もっとも、もう自分を押さえられません」

この二人が何を言っているのか、この時には良く解らなかった。

「この間にはやてを助けてやりたいが」

「近づきたくても、あの空間を通らないと近づけない。今向かったらただじゃ済まないね」

「・・・私たちは手が出せないの」

純粹に悔しい。魔法を知ってからかなり練習してきたつもりだった。

「だけど、私はまだ友達ひとり助けられる力も持ってはいないんだ。それが何だか・・・とっても悔しかった。」

S i d e o u t

「コロからは、俺のミッションです」(前書き)

長いです。

11/2/9に一番酷いと指摘があった部分を改訂しました。

「ココからは、俺のミッションです」

「ココからは、俺のミッションです」

妄想戦記

突き刺した筈のジエニスが消えた！？ちっ！後ろか！

俺はズクンとした何かを感じ取り、瞬間的に身体強化を行って一気に跳び上がった。

「ありや、やっぱ2度も3度も同じ手は通用しませんか？」

「・・・パクんじゃねえ、俺よりも幻術使うのが上手いなんて反則だ！」

あぶねえな。今度は心臓とリンカーコア狙ってきやがった。

一応理論的には身体が消滅しても無限再生機構のお陰で生き返れるってのがありがたいが、試す気にはならんからな。

「ソレはほら、このS型のお陰ってヤツだ」

「ハッ！くそつたれめ！まあ元々幻術の素養はあるのは知ってたから、特には驚かん」

俺はヤツと喋りながら、レアスキルを用いて消耗分の魔力を回復

させる。

しかし、どうなってやがる？明らかに俺よりも保有魔力量は少ないのに、何でコイツはココまで動いても魔力切れを起さない？

「オートクレール」

ヒュン ジャキ

とりあえず手元に獲物を呼び寄せた俺は、ソレを肩に担いでヤツを見据えた。

「お前、なんで魔力が減らない？」

俺がそうこぼしたのを聞き、更に口角を歪ませるジェニス。

どういう事だ？何故、そんな面白いモノを見る目をする？
もしかして何かあの世界の技術を・・・まさか。

「（リン！今すぐヤツの周辺の魔力を調べろ！アレに流れ込んでる魔力は無いか？）」

【（待つてください） そ、そんな。そんな事）】

リンが動揺している？

「（どうした？何かわかったなら報告を）」

【（あの人、はやて様から魔力を供給してます！）】

何・・・だと？まだリハビリとかが不完全な彼女から魔力をだと？

「なんだってリン！？ジェニス！テメエ?!」

「おや、やっと気が付きましたか？遅すぎますよ？やはり平和ボケは恐ろしい」

補充魔力の空間転送、ディバイドエナジーの発展型で確かにそう言ったのが研究されていたと噂で聞いたことがあったが・・・まさか完成していたとは・・・。

だがはやては不味い！彼女はまだリンカーコアから魔力を吸い上げる機能が不完全だ。

安定するまで後3カ月前後かかる予定なのに！

「くッ！だったら次で勝負を決めてやる。もう時間がかけられない！」

ちらりと見たが今の所はやてに影響は及んでいない。

だが、長期戦を行えば絶対身体に影響が表れてくる！

まだ魔力に慣れていないはやてのリンカーコアに、そんな負担をかけたらどうなるかわからんぞ！

俺はヤツに殺気混じりの視線を送り、近接兵装デバイスのオートクレールへと魔力を込めて行く・・・今回はカートリッジも使うからな。覚悟しやがれ。

だがそんな俺の思いとは裏腹に、ジエニスはスツと今まで湛えていた笑みを消しさり、感情の無い無へと表情を変えた。

「そうですね。最初からそうすれば良いんです」

ヤツはそう言って目をつぶると、魔力刃の出力を上げた。

「俺みたいな卑怯でくそつたれなヤツは、速いところ破壊するに限ります」

そして、どこか自嘲めいた笑みを浮かべ顔を上げるジェニス。
その目には、先ほどの狂気を感じない・・・ジェニス？

「それに貴方は俺を敵だと言った。いまさら何をためらいますかフ
エン・リーダー？」

コイツ、まさか全部知って・・・。

「・・・すまん」

「いえいえ、これでも副官でしたから・・・もつとも、もう押さえ
られません」

そう言うと言つは再び刃を俺に向け

「元USN軍、特殊機甲強襲魔導師連隊、ストライクワイヴァーン
ズ所属」

周辺に膨大な量のスフィアを瞬時に展開、目をカツと見開いた。

「リーダー中尉専任副長！ジェニス・クローバー少尉！押して参る
！」

そして、懇願するかのような目で俺を真っ直ぐ見据え、
そう叫んだ。

「ッ、ジェニス・・・いや、少尉！」

そういえばヤツは言った“二律背反の思い”に焦がされていると

そうか、そう言う事か・・・。

「何ですか！早くしないと此方から行きますよ！」

「ヤツはさいしょから」

「……元USN軍、特殊機甲強襲魔導師連隊、ストライクワイヴァーンズ所属」

全部、自分を“消す”為だけに、S型の出す命令に逆らってまで

「フェン・リーダー中尉！受けて立つ！」

動いてきたと……そう言う事だったのか。

このバカたれが、そんなの口で言ってくれなきゃ……。

「さあ存分に舞い！存分に壊し合おう！」

……解る訳、無いじゃないかあ！

「隊長」

「なんだ？」

「……感謝します。最後に、ようやく間に合った」

「……そうか」

「ええ、グツ！あああああ！！！」

突然ジェニスが叫び声をあげた。そして頭を片手で押え始める。まるで何かに抵抗しているかのような表情だったが、段々それが薄くなっていった。

そして

「くくく、さあ死んでくれよやあ？なあ隊長さん？」

ジェニスは突然、さっきまでの不気味なまでの狂気をその目に纏い、俺に殺気をビンビンに放って来ていた。多重人格者が人格を入れ替える瞬間に似ているのかもしれない。

考えて見れば、ヤツはギリギリのところだが、俺達を殺そうとしていない。

S型に残された戦闘命令、俺を見た途端ジェニスの意識が俺を殺そうとする機械を阻止しようとしたんだろう。

だから無人機の攻撃が微妙に甘かった。本当にギリギリだったのは、機械の下す命令にギリギリで背いていた所為だろう。だが、もうその意思の力も、ジェニスには残ってはいない。今のジェニスはS型に支配された只の戦闘端末だ。

ヤツは……ジェニスは……S型デバイスの出す指令に飲み込まれた。

今ヤツを動かしているのは、S型の戦闘命令……グレムニルに取りつかれた亡霊だ！

「行くぞバカたれ……魔法の準備は万端か？」

……さよならジェニス、俺の優秀な副官よ。
そして俺達は　　それこそ本当に全力で、命をかけて……。

「「ぜあああああああ！！」」

お互いを壊し合う為に

激突した。

「上からの振り下ろしはあ！防ぎきれない！」

態々宣言してから振り下ろされる踵。

魔力で限界まで強化された身体能力から繰り出されるそれは、必殺の踵落としだろう。

だが、銃火器のそれと比べれば圧倒的に遅いそれに当たってやる義理は俺には無い。

クルリと身を返して同時に後ろへと飛ぶ、だが振り下ろされた脚の周囲から岩が立ち上る。

ふと見れば、目の前のジェニスの銀板が光っている。同時術式、連動魔法。

「何のための！シールド魔法かッ！」

身を貫こうと伸びる岩塊をシールドを張る事で防御する。

タイムラグが無いそれを防ぐことは事前に何をするのかを感じておかねばならない。

だが実はとても簡単な対処法がある。相手が攻撃を仕掛けてくることは判っているのだ。

ならば防御魔法を事前に待機させておけばいい。たったそれだけの工夫である。

だが、手が、脚が振るわれるたびに放たれる魔法に対しては非常に有効だった。

とはいえ、魔力が込められたソレは通常の防御魔法を力技で突破できる威力を持ち合わせている。

それ程の圧縮された魔力と、術式干渉・破壊を兼ね備えた攻撃が容赦なく多重シールドを削った。

「あはは！なら次は・・・！コレで！」

通常のシールドならモノの数回の激突で突破され、ミンチにされていたかもしれない。

そんな中、あいては唐突に違う動きを見せる。突然ジェニスの周囲に丸い物体が出現した。

「あハッ！流石は隊長だっ！楽しませてくれるよおっ！！そおれフラグマイン展開！」

それは何度か見たことがある魔法。

ガルヴァドスの術式を真似たはいいが、魔力が無い彼は単発しか使えなかったそれ。

爆発するスフィアを形成し、投げたり飛ばしたり浮かべることが出来る魔法だ。

だが、S型の効果か単発だったそれはまさしく機雷のように周囲

に浮かんでいる。

隙間なく浮かんだそれはゆっくりと移動し、俺を包囲していった。しかし展開されて間もない今はまだスフィア同士に僅かな隙間がある。

焦ることはない、その僅かな隙間を縫って檻から逃げれば良いのだから。

「かわした！？だがいけ！いけ！いけ！いけ！そこお！」

レールブラスターの連射に匹敵する魔力弾の連射攻撃が俺に迫る。単発の威力はそれ程でなくても、数百も同時に放たれる魔法だ。

シールドに当たれば削られ、BAさえも剥がされる。

それこそ雨霰の弾幕の中を、俺はシールドを張りローラーダッシュで駆け抜けていく。

後ろに逃げても散布界が広がって逃げ場はない。

横に逃げてもジェニスの腕を振るう方が早い。

なら、少々の傷くらいがまんして、突撃を掛けた方が楽だった。多重シールドが削られ、そのたびに脳がオーバーヒートを起こしそうになる。

だが、負けない。ヤツを殴りつけてやるまでは。

痛む身体、リンカーコアを宥めながらももう一つ術式を作り上げていった。

「グッ！ガルヴァドスの術式！？」

「どうした！たかだかガキ一人落せないかファッキンやろうがっ！」

ヤツがなにか良い返す前に術式を発動させた。
一個だけ造ったガルヴァドスのスフィアから数十発の圧縮魔力弾が放たれる。

「ぬおおおおっお!? な〜ンちゃって、フラグマイン!」

- 飛翔する魔力弾、爆発、衝撃。

放たれた筈のガルヴァドスの弾頭は、その軌道上に持って来られたフラグマインに命中。

広範囲を巻き込む爆発でガルヴァドス自体も誘爆して目標には届かなかった。

「お返しに弾幕をプレゼントですねえ〜っ! おかわりはまだまだあるぞ!」

「チイツ! 多重シールド!」

両腕を向けたかと思えば、先程の弾幕。

そして今度は彼の背後に巨大な魔法陣が複数現れ、そこからは速度遅めの誘導弾。

さらには先程のフラグマインがそこかしこに散らばり、逃げ場を少なくしていた。

弾幕はかわし、誘導弾を防ぎ、マインを魔力弾で除去して回避運動を取る。

ヘルメットの中で魔力弾の接近警報が煩く鳴り響き、脳を揺らす。

「ちい、オートクレール・・・」

『警告、敵の反応消失、周辺を策敵中』

【上です主殿!】

リンの声が脳内に響くや否や、俺は体をよじってその場から飛び去る。

その刹那、俺が今までいた場所をいくつもの斬撃が挟り取っていた。

「どうしました！？無様に転んでしまわれてえ！そして私はここだあ！」

ゴロゴロと転げ回り、再び放たれる斬撃を回避する。

そしてなんとか飛びあがって体勢を整え、格納領域からジリーノを取り出した。

「爪くらい切ったらどうだ！」

バズンという何かが弾けるような音と共に、虚空へと拡散する魔力片が飛び散っていく。

何度も何度も、斬撃が飛んできた方向へとジリーノを飛ばした。

「ぎいやあああ！う、爪がああああ！！」

広範囲に拡散するそれを前に、ジェニス隠れきれなかった。

幻影魔法が解け、魔法で伸ばしたのか、鋭く上がった右手の爪が露わになる。

もっとも矢鱈めったら撃ちまくった為、その魔力弾の幾つかが命中しその手は酷いありさまだ。

具体的に言うと、モザイクを掛けると言いたい感じであった。

「あああああ……でも大丈夫、回復魔法がある」

そう言うが早いか、その手は光って傷が消えていた。

S型のタイムラグが消えるというのは効果にまで及ぶのかと思っ
てしまう。

ヤツが治療で一瞬動きを止めた為、俺はグリーンを放りだしてオ
ートクレールを持ち突進した。

「余裕だな！ジエニスツ！だが終わりだ！」

「そっちがな！しびれちまいなっ！か逝ってるよやああ！ライトニ
ングチェーン！」

オートクレールで斬りかかったが、ヤツはその斬撃を容易に回避
した。

それどころか、左手から光るチェーンバインドの様な鎖が放たれ
俺に巻きついて行く。

だが、光っているのはそれが魔法の鎖だからだけでは無かった。

「あああああああああつ！」

「さあ感電しちまいな！」

光っていたのは、電荷を帯びていたから。

今までの奴との戦闘で、少なからずボロボロとなっていたBAに
はキツイ電撃。

ヘルメット内のモニターが明滅し、高電圧でHUDが消えかける。

少なからず肉体にも流れたそれは、容赦なく俺の肉体を蹂躪した。
リンやヴィズも電撃を浴びせられたことによる苦痛の悲鳴をあげ
る。

それを聞いた俺は若干朦朧としていたが半ば反射で魔法を構築し
ていた。

「おれ、は！死なな、い！はあああつ！」

いや、それは魔法とは言い難い……只の魔力を込めた拳だった。魔力操作を覚えたなら誰しもが出来るそれは、攻撃力は皆無。だが、人にとっては皆無でも、俺を感電させる鎖には有効だった。

鎖を断ち切った俺はよろめく頭を口の中を噛み、痛みで直す。

そしてオートクレールの柄を握り直す。

「カートリッジ……点火！」

『装填、点火！』

ガシャコンという音と共に、オートクレールの内部機構が動く。

魔力が込められた弾丸、カートリッジが消費され、一時的に魔力が増強する感覚を感じた俺は、更に術式を発動させる。

「エイミング……クライシス！」

形成されるはガルヴァドスのスフィア、放たれるは高圧縮魔力弾頭。

ジェニスは一瞬なんだあという顔をした。

一見すれば、俺が放ったそれはただの魔力弾頭にしか見えない。

そして、俺は魔力弾を誘導操作する事が出来ない事を、ヤツは知っていた。

だが

「……ユーハブコントロール」

【アイハブコントロール、誘導を行うですう！】

それは、仲間を手に入れる前の俺の話。

「よ、避け切れっ！ぬおおおお！！！」

再度、周囲へと響き渡る大きな炸裂音。

俺が放った魔力弾は、確実に標的であるジェニスへと命中したのだった。

この最後の魔法により、辺りには爆炎が起こり、煙が充満している。

勝つことは、出来た。

リンとのユニゾンで使用可能な魔法の一つであるガルヴァドスの誘導弾。

名はエイミング・クライシス・ソレを全弾、目の前で倒れ伏している男にブチ当ててやった。

だが、まだヤツの気配は消えていない……。

『グイー！後方警戒！』 「 ツー！！」

ヴィズの警告音が聞こえたと同時に身をひねって右へと避ける。

そのままローラーダッシュで加速して距離を取りつつ空中へ舞い上がる。

【後方から魔力弾接近！10… いえ全40発以上！尚も増大中！】

『自動障壁展開、MTS-40の使用を提案します』

HUDに後方視界が投影される。

画面を埋め尽くさんがばかりの誘導弾達が俺目掛けて押し寄せて来ていた。

「……ロード！」

『イエッサー！』

ガコンという音と共に、腰に取り付けてあるMTS-40からカートリッジ一発分の魔力が充填されてロードされた。

瞬間的に上昇する魔力を操作し、自動障壁の強化を行っていく。リンがサポートしてくれるお陰で全然苦しくない。

俺の戦闘スタイル上、両手がふさがる事が多い上、兵装もまちまちだったから、BAにMTS-40を補助魔力チャンバーとして搭載し、兵装デバイスの方に純正ベルカートリッジを改造したモノを搭載させて正解だった。

【着弾まで後3秒2、1！】

そして避け切れなかった弾幕が、自動障壁を揺らして破壊する。

『警告！転送反応！よけて！』

「なに！？ぎゃっ！」

「背中が御留守でしたよ隊長？油断はいけない」

そして短距離転送で俺の背後に現れたジェニスに、思いつきり踵落としをいれられて、俺は床へと叩きつけられた。衝撃は激突直前でアブソーバーが働きなんとか耐えたが、追撃の飛び膝蹴りが迫ってくるのを見た俺は、慌てて跳ね起きた。

ドコン！

魔力強化の為された身体から繰り出された膝が、合金製である筈の床にひび割れを入れている。

相変わらず魔導師って言うのは非常識である。

「でやああー！」

「ハッ！」

そしてまた罅迫り合い、依然と比べると本当に別人となり果てたならジェニス・・・だが。

「俺だって、成長している」

「へ？何か言いましたか？」

「こつという事だ！“掴め！”」

リンの補助により瞬時に形成した設置術式がジェニスを絡め取った！

「く！設置術式?!だがまだ身体は動きます。距離を取らせてもらう！」

ジェニスはまだ動く脚に魔力を纏わせて、一気に俺の元から後方へと退避した。

「ただどなジェニス?言っただろ?俺も“成長している”ってな？」

「そこまではなれりや十分だ！さあ母上直伝の妙技、ソレを喰らっても立ってられるか？」

「な！？ラプターの妙技！？」

そしてヤツは気が付いた。俺の背後に巨大な術式が隠匿してあることを

「ま、まさかその構成は！？」

「以前はあまりの情報量に俺の頭がパンクしそうだったがな・・・今はリンという頼もしい味方が、俺と共に居てくれる！」

既に最初から準備しておいた。後はコレを発動させるだけ・・・。

「さあ、冥界からの使者たちだ！お前には丁重にお出迎えして貰おう！」

『無機物召喚！フライングダッチマン起動！』

母上直伝というか、術式をパクった魔法。

無機物召喚最大級の奥義！どこかの船を召喚するフライングダッチマンだ！

淡い燐光を伴ったボロボロの沈没船が、召喚術式から召喚されて目標へと撃ちだされる。

・・・甲板に幽霊みたいなのが見えるのはきつと気の所為だ。ウン。

「よ、避けられん！」

「そいつの体当たりは・・・痛いぞ？」

バインドで動きが制限されたジェニスへと向かって行く幽霊船。

「そして サヨナラだ」

「ぬ、ぬオオオオオッ！！！！！！！！」

ドゴーンッ！

帆船に人間が轢かれるという、はた目から見れば非常にシユールな光景が繰り広げられているが、何十トンもある沈没船が、時速300kmを越えて体当たりをかますのだ。

その物理的衝撃はそら恐ろしいモノがある。

しかも魔力強化次第では、更に速度をあげて体当たりさせる事も可能なのだ。

「…………非殺傷だったとはいえ、母上に喰らわされて良く生きてたな俺」

『…………というか、あの帆船はどこから召喚されるのでしょうか？』

知らん、どこかの異空間から召喚されることくらいしか解ってない。

コレも使い魔造る魔法と同じで、使えるんだから良いじゃん的魔法の一つだからだ。

ちなみに、もし壊れても次召喚する時には復活してたりする。本当にどこから来てんだ？

「はあ、はあ、はあ」

召喚されし幽霊船は蒼白い燐光を伴い、標的を轢いたあと役目を終えたとばかりに召喚ゲートの向こう側へと去って行った。後に残されたのは、床に倒れ伏したジエニスだけ。

「くくく・・・防御したのに手足が折れちまった。内蔵が殆ど破裂・・・助からねえ」

BJで衝撃は吸収できても、物体が持つ重量から来る圧力までは防げなかった様だ。

口からどす黒い血を流し、けほけほ咳をしているジェニスに俺は近寄った。

狂気の気配が霧散している、どうやらS型の機能が停止しているらしい。

「ジェニス・・・もう休んでもいい。隊長命令だ」

「ようやく有給か・・・すみませんね。だが最後の仕掛けが残ってますぜ」

途端ゴゴゴゴゴという振動が、ドーム全体を揺らす。

「・・・どうですかい？デジャブを味わうってのは？」

「おまえ、まさか次元航行炉を！？」

俺の言葉に自嘲的な笑みを更に深めるジェニス。

恐らくは逆らう事が出来なかった自分を蔑んでいるのだろう。

くそつたれと言わんばかりに寄った眉間のしわがソレを物語っている。

「その通り、S型の命令で、私のバイタルが途絶えそうになる場合に暴走させるよう命令しました。誰かが下に行って制御しない限り

もう誰も助からない。ゴホツゴポ！」

「ジェニス！」

口からどす黒い血を吐き、ドンドン顔が青くなっていく・・・。

「最後に・・・あなたの顔、見れて、よかった。楽し、かったです」

「・・・バカ野郎」

「あはは、もつと、よろ、こんでください。バカがようやく、死ぬんだ、から」

「喜べるか、最後の最後に厄介を残しやがって・・・」

「文、句は、S型に言っつて、くだ、さい。ゲホ・・・さようなら、隊長」

ジェニスはその言い残し、大きな厄介事をのこして、地獄めぐりへと旅立って逝った。

俺はジェニスの瞼手を置くとそのまま目を閉じさせた。

そして首元にかかっていたドックタグを引き抜いた・・・USNの認識票、ストライクワイヴァーンズでの認識票のままか・・・本当にバカたれが。

俺はそのドックタグを格納領域へと放り込むと、はやてが閉じ込められていたカプセルへと足を向ける。

「ようはやて？生きてるな？」

『なんて言ってるかは解りませんが、アレだけ手を振っていれば大丈夫でしょう』

【回路接続　　ハッキング終了。カプセル開くですう】

プシューという音を立てて、カプセルが開いていく。

「よう、お姫様。調子はどうですか？」

「・・・遅い。遅過ぎや」

「そうか、済まなかったな」

「ほんまやで・・・怖かった」

「ああ」

「ホンマに・・・怖かったんやあ」

泣きそうな顔をしているはやてを、俺は抱きしめて落ち着くまで待ってやる。

まだこんな世界に慣れてないのに、良くココまで頑張った。

俺はよく頑張ったなと囁きながら、彼女が落ち着くのを待っていた。

しばらくして、目を赤くしたままのはやてが、俺から離れた。

「ありがとなフェン君。見苦しかったやろ？」

「いや、はやては正常な精神を持った人間だと、改めて理解した」

俺ももう怖さへの耐性が付いちまって、そこら辺が麻痺してんだよなあ。

「ところで・・・あの人は？」

「・・・ようやく、有給が取れたと言っていた」

「何やソレ？」

「さて、な。詳しい事は後で話そう・・・」

「主」「主」「はやてちゃん」「はやて！」「はやて！」

どうやら他の皆もやって来たらしい。ちょっと遅かったのは何でだったのだろうか？

ソレはさて置き、ラインとシグ姉さんとザフィーラは、はやての無事な様子を見て胸をなでおろしている。

シヤマル先生とヴィータ姉がはやてに抱きつき、そのそばではなのはとユーノがやったねと歓声を上げていた。だが、みんな、そう

言ったのはちょっと待って欲しいな。

「再開は後回しにして、速いところ帰ろう?」

「そうだな。施設が振動しているのも気になるところだが・・・」

先ほどから施設の振動は続いている。最奥のシャフトの下から響いている様だ。

恐らくは、既に暴走が始まっているんだろう。放っておけばこの施設を出る前にこの世界ごと・・・。

それだけは避けなければ・・・はあ、また俺が貧乏くじか。

「リニス」

「はい、なんですかフェン君?」

俺はリニスを近くに呼び寄せる。

はやてが助かった事で若干気を緩めた顔になっていた彼女だが、俺の顔を見て表情を引き締めた。

どうやら普段の無表情と違い、柄にもなく表情が出ている様である。

「はやてを 頼むぞ?」

「どういう事ですか?まさかまだ何か?」

「もうすぐ、この施設が爆発する。俺は時間稼ぎに行つて来る」

「そんな!?また死に急ぐんですか!?!」

「声を荒げるな。死ぬわけじゃないし死ぬ気もない。以前も巻き込まれたが生きられた」

「その話は知っています。ですが今回も上手く行くとは限りません!」

「だからこそだ。その時ははやてを守つてやってくれ。ほれ、俺のカートリッジだ」

俺は格納領域から、俺の魔力を込めたカートリッジを取り出して
リニスに渡す。

あくまでも最悪の事態ようで、次の主が見つかるまでのつなぎだ
が……。

まあ縁起のいいモノじゃ無いわな。

「これは主人の命令だ。俺がいない間、はやてを頼む」

「……死ぬ気では無いんですね？絶対帰ってくるんですね？」

「ああ、勿論だ。抜けた時の他の連中の説得も頼む」

「……解りました。どちらにしろ私はフェン君の使い魔、命令
されれば拒めません。ですが」

「わかつている。絶対に帰るから」

リニスが少し泣きそうな目をしたが、俺はそれを無視した。

頼んだぞリニス……俺がいない間、家族たちを頼んだ。

とりあえずリニスと離れ、俺はラインに抱えられたはやてに近づ
いた。

「はやて、はやて、大丈夫か？」

「あん？フェン君かいな……なんやら急に眠とうなってきたんや」

恐らくは魔力を吸われた所為だろう。その疲労が今になって出て
きている。

助けたのがはやかったお陰か、どうやら深刻な影響が見受けられ
ないのが救いだな。

「寝た方がよいよ。大丈夫、ひと眠りすればすぐ家だ」

「ほなら、お言葉に甘えさせてもらっわ。ライン、ええか？」

「ええ、問題無しです。おやすみなさい主」

そういつてはやては深い眠りに落ちて行つた。結構疲れていたの
だろう。

俺ははやてが眠りについたので知ると、少しだけ歩く速度を落し
た。

その事に気が付いたリインが話しかけてくる。

「おい、大丈夫か？まさか先ほどの戦闘でどこか怪我でも・・・」
「いや、大丈夫だ。すこし魔力を吸い過ぎただけさ。先行つててく
れていい」

「・・・そうか、ならば良いんだが」

そしてリインは特に疑うことなく、他の皆と合流する。

ソレを見届け、俺はリンに頼み、施設内の非常用のシステムを稼
働させてもらった。

『ヴイー、ヴイー、非常用システム起動しました。各隔壁を手順に
基づき閉鎖します』

ゴウンゴウンゴウン

アナウンスが流れ、シャフト側の隔壁が閉まり始めていた。

ソレを見た皆は走って隔壁の向こう側に飛び込んでいく。

だが俺はそれを後ろから眺めていた。

「おい、フェン！どうした？」

俺の行動を怪しく思ったシグ姉さんが慌てて俺を呼ぶ。

既に彼女たちは隔壁の向こう側、対する俺はまだ隔壁の内側に居
たからだ。

いまならまだ子供一人なら通り抜けが出来る・・・だが。

「シグ姉さん、みんな・・・後を頼みます」

「おい・・・冗談は」

「ココからは・・・俺のミッションです」

「バカなことをいうな！フェン！フェエエンツ！！」

そして驚くみんなを尻目に、目の前の隔壁は音を立てて

ガコオンツ！！

俺をこちらに残したまま、閉じてしまったのであった。

「いくぞリン、ヴィズ。最後のー仕事だ」

『まあ、やるとは思ってましたけどね』

【はは私たちは死にませんというか死ねないでしょうから、何が起きてても平気ですよお】

その通りだな。

俺は皆がいる隔壁を背にし、地下にある制御室へ向けてシャフトへと向かった。

制御室

先ほどから次元間通信が掛かって来ているが、全て無視している。というか、通信にでる暇と言うか時間がない。いまから手動操作で非常用システムを起動し、いそいでヴォイドフィールドを展開させないといけないからだ。

【加速リング内のエネルギー流を操作しました。炉心に向けて集約させます】

『ただ、施設の損壊により30%ほどヴォイドフィールドの可動率が低下しています』

「構わない、はやてやなのは達が逃げられたなら問題無い」

すでに施設内の警備システムのハッキングを終えている為、彼らが施設から離脱したことは確認済みである。それに加えて転移反応もあつたのだが、どうやらリニスが強制転移をさせてくれたようだ。本当、俺にはもったいないくらい良い使い魔だよ。

【エネルギー収束を開始、媒体からのエネルギー放出がレベル2からレベル5へ上昇】

『ヴォイドフィールド発生機は全機確認、オールグリーンです』
「とにかく、始動させますか」

俺はコンソールを操作し、ヴォイドフィールド発生機へエネルギーを回そうとするのだが、施設の破損の所為か少し発動ようのエネルギーが足りない。

「リン、この区画以外へのエネルギーの供給を全てカットしろ！」

【ええ！？ですがそんなことしたら一括で操作されている生命維持装置も止まっちゃいますよ？】

「ヴィズは真空の中でも活動できる。それにそんなに長くいられる訳じゃないんだから、生命維持装置があっても仕方ないだろう？」

【わ、わかりました。システムをバイパスさせて、全エネルギーを発生機に送ります】

リンがそう言ってしばらくすると、室内の灯りが消えた。

操作用コンソールは別電源だからいいが手元が見づらい。
スフィアを灯りにさせてもらおう。

『ヴォイドフィールド展開確認、少し出力が弱いですが基準値内です。』

「稼働したなら、あとは次元エネルギーを自分のエネルギーに変えて勝手に強化される。そう言った術式の筈だ」

【確認しました。確かに徐々にヴォイドフィールドの出力が上昇中！】

『エネルギー安全弁解放します。閃光が発生するので注意してください』

安全弁が解き放たれ、炉心媒体が強烈な光を伴い発光した。

まあ遮光機能があるので、別に目はつぶれはしない。

直視すれば確実に焼かれそうなくらいの光だけど。

・・・ガキン

「・・・なあ、なんか今音がしなかったか？」

『？そう言えば音紋センサーに反応が・・・』

どこかで何かが外れた様な・・・。

【不味いです！エネルギー流が予想以上に多すぎて キャッ！】
「うわっ！」

突然、流れ込むエネルギー量が増えた為、コンソールのフィールドバックにより俺は吹き飛ばされる。BA？のお陰で刺さっちゃいないが地味に衝撃がイテエ。

「くそ、一体なにが・・・」

起き上がった俺が、制御室ののぞき窓から炉心を見た瞬間、言葉を失った。

「……なんてこった」

『さっきの音は、制御棒の一本が吹き飛んだ音だったんですね』

炉心にはエネルギー流を制御する4本の制御棒が入れられているのだが、ソレがモノの見事に炉心からはみ出ている。本来なら炉心内部で膨大な量のエネルギーを抑制制御出来る代物なのに……。

【……予想外に施設の損傷具合が大きかった様ですう】

「ああ、全くもつと頑丈に造っておいて欲しいモンだ」

『炉心制御棒が無いと、エネルギー流を操作できません。下手すればこの世界ごと……』

まったく、ついて無いな。

只でさえ次元を突破するほどのエネルギーを持つ炉心のプロトタイプなのに、内包しているエネルギーはどれだけのクラスなのか予想も出来ないつてのに。

「はあ、こういったのは専門家がやるもんだろ」

『マスター？何をなさる気ですか？』

「残った制御棒を押し入れる。そうすれば臨界までは持たせられるだろう。流石に……」

【そんな！危険ですう！炉心室は今エネルギーの奔流でいつ爆発してもおかしくは】

「だからこそ、だ。この世界は無人じゃ無い。少ないが人間もいる。壊す訳にはいかない」

ジェニスや俺のように、故郷を失わせるなんて事を、繰り返してはいけないんだ。

……相変わらずのお人よし具合だが、俺はソレでいい。

愚か者だと晒したければ笑え、だが“弱きを守る”それを行う事が俺の生き方だ。

俺は不器用だからな……今更生き方何ぞ帰られんわい。

そして息を吐いて覚悟を決めると、俺は制御室から炉心室に入る為の扉に手をかける。

「お前ら、覚悟を決めろ」

『リンはともかく、私はマスターに最後まで付き添いますよ』

【リ、リンだつて！主殿と最後まで居るですう！一人ぼっちは嫌ですう！】

そついやお前さんはラインの記憶もある程度継承していたっけな。孤独が怖い事も知っているのか……本当、俺にはもつたいたい相棒だなオイ。

そして俺は炉心室に入った。

余計なエネルギー消費を避ける為、本来炉心室は真空状態にされている。

だが俺が扉を開け放った為、中に大量の空気が流れ込み、ソレが炉心室に漂うエネルギー流と反応してオーロラのような光の帯を描き、幻想的な光景が広がっていた。

『多重プロテクション出力を最大にまで引き上げます。ですが持つて10分ですから気をつけてください』

【ソレと制御棒は白熱化してるです。BA?でもその熱量は抑えきれませんから……その】

「なに、腕の一本くらい安いモンだ。それに俺達の本来の任務は終わってるんだ。気楽に行こうぜ？」

はやて達、無事に地球に付いてれば良いんだがな。

そう思いつつも、俺は残っている3本の制御棒へと近づいた。そして最初の一本に手をかける。

ジュツ！シュウウウツ！！　ガゴン

「ぎ……！」

白熱化している炉心某に触れた途端、俺の手から煙が上がる。

膨大な熱量を防ぎきれず、手甲の中で俺の手がメディアムに焼けて行くのだ。

思いつき奥歯を噛みしめ、腕が焼かれる痛みをこらえたが……イテエ。

「ツ……残り……2本」

『予想制御限界まで、後40秒　　急いだ方が良いかもしれません』

無茶言ってくれる。BA？の手甲が融解してるほどなんだぞ？

その中の手がどうなってるかなんて……想像したくもないぜ。

だが今逃げるなんてことはしない、俺は2本目の制御棒へと手を伸ばした。

ジュツ！シュウウウツ！！　　ガゴン

「よ……し、2本目……ラストお！」

ジュツ！シュウウウツ！！　　ガゴン

俺は最後の一本をハメ終えて、その場に倒れ伏した。

ああ、手の再生が始まってはいるが、痛くて頭がぼーっとしやがるぜ。

だがコレで、消滅するとしても周辺20km圏内程度だろう。

「……………流石に、今回はコレで、ゲームオーバー……………かな？」

『……………諦めないでください。絶対に帰るのでしよう？』

「はは、そうだったな。まあ天文学的数字だが……………生き残れることを祈ろう」

【……………制御が上手く行きましたです。炉心臨界作動開始、ヴォイドフィールド完全作動】

エネルギーをどこぞの異空間へと飛ばすヴォイドフィールドが作動した。

そう言えば俺はコレに巻き込まれて、天文学的数字で地球まで飛ばされたんだっけな。

「今度も……………そんなご都合主義が働いて欲しい」

『2度ある事は3度あるって事ですね？解ります』

【今度は並行世界の海鳴市へ！新たな展開に期待！】
「案外お次は未来かもしれないぞ？」

なんだかもうすぐ臨界突破で、この周辺がエネルギーの奔流にのまれてどこかに消えると言つのに、あんまり恐怖が無いなあ。最悪死ぬかもしれないのに、何だかやり遂げた気分だ。

「お、そろそろか……………」

【制御弁、解放されたですう】

『出来れば、どこかの世界に流れ着きたいものですねえ』

コ
コ
コ
コ
コ
コ
コ
コ
コ
コ

そして俺事フェン・ラーダーは、いつか見たデジャブな風景をも
う一度味わいつつ。

膨大なエネルギー奔流に巻き込まれて、いつか感じた身体の痛み
を感じつつも流されていく。

例え世界が変わっても、俺は絶対に帰るから、それまで
皆まっついてくれ。

俺は最後にそう思いつつ、その意識をエネルギーの流れに任せ
たのであった。

「ココからは、俺のミッションです」(後書き)

*まだまだ、まだフェン君の物語は終わらんよ！
作者の妄想にご期待ください。それではノシ

「戻ってきたアイツ」

「戻ってきたアイツ」

妄想戦記

S i d e 三 人 称

フェンが海鳴市から消えてからもう3週間が経過し、夏真っ盛りの暑い日が続いていた。

病院にリハビリに行っているはやて以外は、家の中で文明の利器の素晴らしさを体感していた。

つまりそれ程猛暑であり、ヴィータに至っては一日2杯までと決められたアイスの禁を破ってでも、もう一個食べたいと思えるくらい暑かった。

「あー、暑い日だよなあ。こんな日はやっぱ……なあリニスー」
「ダメですよ。アイスは1日2個までだって言われてるじゃないですか。今日の分はもう食べてしまったんでしょう?」

リビングでエアコンの風にあたりながら、だらけている彼女たち。某所ではゲボ子と呼ばれる程ゲートボールをたしなむヴィータでも、流石に今日みたいに暑い日は家の中に居たい様である。もっと

もそれ以外にも理由はあるが……。

ソレはさて置き、彼女は自分の前にある空のアイスクリームの器を突きながら、リニスにもう一個食べたいとねだっていた。

「ううう、でも食べたいんだよ」

「いけません　ってコラ！冷凍庫を開けない！」

「へへ！頂きい！」

リニスがほんの一瞬目を離した隙に、何時の間にか台所の冷凍庫をあさっているヴィータ。

誰しも好物の為なら通常の数倍の力を発揮できると思うが、流石に魔法使ってまでするかとリニスは少し呆れている。

「はぁ……仕方ないですね。私の分を上げたってことで内緒にしようとしてあげます」

「流石リニス、話が解る！シグナムだところはいかねえ」

手にアイスを持ちながら、リビングに戻ろうとするヴィータ。だが、こういう時に限って

「ほう？私だとなんだというんだヴィータ？」

「げ！？シグナム？！」

ご本人が帰って来たりするのである。

最近は何所の剣道場で非常勤講師をしているシグナム。剣道が終わったので帰って来ていたのだ。

「あらシグナム、お帰りなさい」

「ただいまリニス、いやあしかし本当に今日は暑い。剣道場も今日は人が少なかった。しかしヴィータ気が効くな？」

「へ？」

そう言つと彼女はヴィータが手に持ったアイスを奪い取つた。

「こんな暑い日に私の為にアイスを準備しておいてくれるとは」

「そ、それはあたしの・・・」

「先ほど誰かが私の事を頭が固いと言つていた様な気がするのだが・

・・・なあ」

「どうぞどうぞ、あたしは冷たい麦茶でいいんだ！ちょっと取つてくるな！」

そう言つとヴィータは台所に引つ込んだ。

彼女はシグナムとは極力戦いたくないのである。

実戦でも舌戦でも勝てそうに無いのだから。

「・・・まったく、リニスもあまりヴィータを甘やかすな」

「ごめんなさい」

「まあいいさ。ちょうど食べたかったのは本当だからな」

そう言つてアイスのふたを開けるシグナム。

この世界のシグナムさんはちょっとしたたかな様だ。

「リニス、リインフォースはどこに行つたか知らないか？」

「彼女だったら“セミの声を聞くと暑く感じる。ちょっと違う世界に行つて来る”と言つて、違う世界に行っています。今頃涼しい世界にでも居るんじゃないかしら？」

「・・・あいつらしいと言えばあいつらしいな」

シグナムは苦笑すると、台所のイスに座つてアイスを食べ始める。しばらくはリニスもシグナムも口を開かなかつたが、突然

「フェンは・・・まだ帰って来ないのか」
「・・・大丈夫ですよ。ちゃんと元気に生きています」

シグナムはフェンの事を話題に出した。

あの事件の時、彼は自分の使い魔であるリニスに自分たちを強制転移させ、おまけに次元航行炉の暴走を止める為に、単身あの場に残ったのだと言う。

強制転送をされ、リニスと少しばかり口論となった後、シグナムはリインと一緒にあのドームがあった世界にもう一度赴いたが、そこには大きなクレーターが残っているだけだった。

その後が大変だった。はやてとヴィータとシャルマルが泣くわ。

リインは全世界を巡ってくると言っていて聞かず、勝手に探しに出ようとするわ。

ザフィーラが更に眉間にしわを寄せるわ・・・とにかく混乱が起こった。

まあ、もつとも

「今日もちゃんと、フェン君からの力強いレイラインが届いていますから」

「そう・・・か、ならいいんだが」

「ふふ、シグナムがその質問をするのも、これで20回目ですね。フェン君の事が心配ですか？」

「・・・当たり前だ。あいつは私の弟子なんだぞ？弟子を心配しない師匠がどこに居る？」

リニスの存在によって、フェンが無事だと言う事“だけ”は解つ

ていたのであった。

彼女はフェンの使い魔であり、彼からの魔力供給により生きる存在である。

つまり、主たるフェンが死亡していた場合、彼女はすぐに消滅してしまう筈なのである。

一応フェンからの貯蓄魔力で、供給が無くてもしばらくは身体を保っていられる。

だが、もしもレイラインが切れていたとしたら、とっくの昔にその貯蓄魔力は切れている。

しかし彼女はフェンから貰ったカートリッジに手をつけていない。フェンからのレイラインが、今だきつちりと保持されている証でもあるのだ。

それはつまりフェンがまだ生きていると言う事に他ならない。

「だが、本当に居場所が解らないものか」

「レイラインを辿れば、フェン君の居場所が解るんですが・・・」
「無理だな。守護獣や使い魔へのレイラインは、どのような経緯でつながっているのか全く不明だ。もっともそのお陰で、リニスは生きていられるんだが・・・」

使い魔への魔力供給は主との間に結ばれる魔力の通り道レイラインを通じて行われ、主との精神的リンクも可能としている。

だがその仕組みはいまいち不明であり、使えるんだから良いじゃない魔法なのである。

世界の壁すら超えて供給出来る仕組みを考えたかこの魔導師たちに感謝したいほどだ。

「そう言えばザフィーラは外に出ているのか？」

「ええ、今日も“お散歩”だそうですね」
「そうか、“散歩”か」

彼女たちはフェンが消えてからの八神家を思い返して苦笑していた。

あの日以来、少しだけ八神家のライフサイクルは変化していたのだ。

リンやリニスやシグナム達は大人である為、フェンが無事だとは解っているので落ちついたものであった。

だが、その他の面々はと言うとシャマルは買い物に出ると大抵クールヴィントを待機状態で起動させて探索をし、フェンが戻ってきていないか心配で探し回っていた。

ザフィーラはふらりと一人で散歩にでる回数が増えた。彼もどうやら探して回っているらしい。もっとも姿を狼形態にしたまま散歩に出るので、何度か保健所に捕まり、そのたびに魔法で逃げているが・・・まあ関係無いだろう。

ヴィータは逆に家にいる事が多くなった。

別に塞ぎこんだとかそういう訳では無く、只単に『あいつが帰ってきたら一発殴る為だ』と言う風に周りには言い聞かせていたが、家に居る時外で物音が聞えると走って家の玄関に向かう辺り、純粹に心配で、だけど帰ってくることを信じて待っているようである。

ちなみにヴィータが物音に反応して外に出た際に、偶々玄関の近くで心配そうにうなだれていた双子の猫を驚かせたのだが、特に何かあったと言う訳でもないのです、とりあえず蛇足で入れておくことにする。

「はやく、戻ってくると良いんだがな」

「ええ、本当に・・・こんなに心配させて、帰ってきたらお仕置きです」

「是非とも私も仲間に入れて欲しいな。奴には特別な特訓を組んでやりたい気分だ」

「あら、奇遇ですね。私もフェン君に魔法の特別な訓練でも入れたいと思っけていまして・・・」

フフフと笑う二人、フェンにとっては帰ってきたら地獄を見る事であろう。

特訓と言う名の私刑シリンチが、口をあけてフェンが来るのを待っている。

それは当人にはとても辛く、第三者には面白い喜劇であるので、誰も止めない。

ある意味帰って来ない方が良いんじゃないか？と隅っこで大人しくしていたヴィータは思った。

所変わって、ココは海鳴市海浜公園、封時結界内部。

「...99、100、101」

人為的に閉ざされた世界において、一人の少女　なのはが20mほど離れた所に空き缶を置き、それにシューターを当てると言う魔法訓練にいそしんでいた。

「 …… 110、111、112 ……」

彼女がしているのは集中力、ソレと魔法弾制御の為の訓練だ。

魔力弾で撃ち上げた空き缶に同じ魔力弾を誘導、そして落さない様に当たると言う一見簡単に見える練習法だが、実はかなり難しい。当て所が悪いと空き缶は予想もつかない所へと飛んでいくのである。瞬間的な判断力も求められると言う訳だ。

「 …… 120、121、122ツ!? あっ! 」

カンッ カラン

『It is 60 points. The goal is the thing hit 150 times.』

(60点ですね。目標は150回当てる事ですから)

「むう、後少しだったのに・・・」

「惜しかったね・・・ってまだ続けるの!？」

そして、彼女の訓練に付き合っていたユーノの視線の先には、空き缶をセツトし直しているのはの姿が写った。これですでに2時間ぶっ続けで訓練を続けるのはに、ユーノは狼狽する。

「きょうは止めようよ。もうコレで10回目以上だよ?」

『This is more than self-abuse training for free. Proposed to put a break to master.』

(コレ以上の訓練は、只の自虐行為です。休憩を入れることを提案しますマスター)

実はコレだけで無く、他にも色々訓練と言うか修業をかしているのだが、彼女は笑いながら首を横に振って、そんなことはお構

いなしと言った感じに訓練を再開する。

「（はぁ・・・）」

そしてユーノは内心でため息をついていた。

あの事件以来、彼女の訓練の回数が大幅に増えている。

こう言った自主訓練は勿論の事、最近ではシグナム達にお願いして、何回か模擬戦まで行ったほどののだ。

そして自分もその訓練の手伝いとして駆り出され、結界を張ったりしていたりする。

そりゃ自分は結界魔導師で結界が張るのは得意と言ったら得意だが・・・。

「（流石に・・・頻度が多すぎるよぉ・・・）」

フェンが消えてから・・・いや、以前からその兆候は見受けられたが、なのは更に魔法へのめり込んでいた。

一応友達の方が大事なのか、今のところはアリサ達との約束があればそっちを優先しているが、それ以外の時間は家族の手伝い以外大抵魔法の訓練に当てていた。

そしてそれに付き合わされているのが、他ならぬユーノなのである。

惚れた弱みと言う奴だろうか？もっともそれ自体は自覚して無いだろうが・・・。

だが、いい加減限界が来そうなので勘弁してほしいのが彼の本音だった。

「まだ、まだ足りない・・・フェン君に届かない」

「なのは・・・」

』…………』

とは言うものの、彼女の内心も解らなくは無かったりする。

「無事だつて聞いてるけど、悔しいな。もっと力があれば助けられたのに…………」

「…………ソレは違うよ。だって彼は自分の意思で残ったんだ」

「解ってる…………解ってはいるの。だけど…………」

うつむく彼女を見てユーノはしみじみと思う、本当に真っ直ぐな娘なんだなあと…………。

もっともそのお陰で今現在苦労しているので、ちょっとだけ元凶のフェンに恨みがあったり無かったり。

「…………悔しいんだね？」

「うん、だから…………もっと頑張るの」

なのはは自分でも、やり過ぎである事は自覚している。

だが、あの時から悔しさが抜けないのだ。

しかもこれは助けられなかったというだけの悔しさでは無い。

人間だれしもが持っている感情…………そう、嫉妬を彼女はフェンに感じていた。

フェンがココに居たら何をバカなと憤慨しそうな話だが、実際無意識に彼女はフェンに嫉妬を感じ、それを自覚したのはごく最近で、あの事件の後からである。

彼女は学校の成績は　まあ月並みであるが、頭の回転は悪くない、むしろいい方である。

そして何より魔法については自信があった。

誰よりもうまくとまでは言わないが、それでもかなり魔法が使えるのだと思っていたのだ。

だが彼女が幾ら頭の回転が良くても、幾ら周りからチートや主人公補正とか思われていたとしても、魔法を除いたら本人はいたって普通の9歳の女の子なのである。

そんな彼女の目に、自分よりも強き存在として写ったのが、自分よりも年下の少年フェンであった。中身が転生をした魂が入っているおっさんだったとしても、その事を彼女は知らない。

想像してみたい。自分にとって自信があることをいとも簡単に別の人間がやり遂げていたら、その事に嫉妬を持たないだろうか？何故自分よりもと思わないだろうか？

つまりはそう言う事、なのはフェンの魔法に嫉妬したのである。9歳の女の子からしてみれば、その魔法をフェンが文字通り血反吐を吐きながら努力して努力して、沢山の人間の死を間近で見続けながら体得したただなんて知る由もない。

だから彼女も訓練の量を増やしたのだ。

少しでもフェンのいる高みに近づけるように

そして自分の魔法でもっと人を救いたいという思いを持って訓練に精を出した。

まあ最も

「でもやり過ぎで身体を壊しても意味がないから、もう止めておくれね？付き合ってくれてありがとうユーノくん」

「いや、いいけどさ……でもホント、フェンに見られたら怒られそうだね」

「確かにフェン君なら“休むのも魔導師の仕事”とか言っつて、体術かましてでも寝かそうとするかも」

周りから懸念されているのが解っているのか、彼女自身は自信の限界ギリギリで訓練を止めるのである。彼女の中に出来た嫉妬はいい方向、所謂対抗心として彼女の力を高めるという結果になっているのだ。

ある意味でライバル認定、勿論フェイトというライバル兼親友もいるが、ソレはソレ、コレはコレと言うヤツであり、フェン自身は何もしていないが、なんじゃかんじゃでなのは魔王への道を示して居たりする。

本人が聞いたら泣いて否定しそうだが、既になのははそうなっているので止められないだろう。

「帰ろうか？」

「うん」

こうして彼らはその日の訓練を終えて結界を解き、海鳴市海浜公園を後にする。

だがそのしばらくあとで

・

小さな・・・とても小さな何かが、予兆として現れていた事に彼

女たちは気が付かなかった。

はやても病院から帰宅し、八神家は団欒の時間になっていた。
もっともやはり一人欠けている様な感じを、みんな感じていたが・
・考えても仕方ない事だろう。

「ヴィータ、ゲームでもせえへんか？」

「いいぜ、今日はなにする？」

「久々にプヨプヨでもしたい気分や」

はやてはヴィータをゲームに誘い、その他も思い思いに過ごして
いる・・・ように見える。

実際はみんな結構外の音や気配に気を配っているのだが、誰ひと
りその事を口にはしない。

口にするのは流石に無粋と言う感じなのである。そして時間だ
けが過ぎて行く

.....

.....

.....

「おりゃ！連鎖きたで！」

「げえ！ドンドン邪魔なヤツが増えてく！？」

「コレで最後や！」

「ああ！まけたあー！」

一通りにゲームを終えて一息つく二人。平和な一時、しかし誰かがたらないと思えてくる。

コロナとじゃれついてきたウィータを撫でながら、はやてはそう思っていた。

やっぱり相方がおらんと調子が出ないんや・・・と、今はいないフェンとヴィズとリインを思い浮かべている。

彼女はふとリニスの方を向いた。

考えて見ればリニスがいると言う事がフェン達が無事であるという証であるのだが、彼らの様子が解ればどれだけ良い事かと何度も思ってしまう。

（はやく帰って来んと、私が立つ所見れへんよフェン君・・・）

リハビリは順調、謎の麻痺症状の原因は、あの少年が全て吸い取ったので麻痺に苦しむ事はもうない、その為精神的にも気楽なものである。

フェンが来る以前、はやては身体の半分が動かないという事に苦しみ、原因不明でその症状も緩やかであったが進行性だったと知り、いつか自分は死ぬのではないかと泣いた事もある。

そんな中、彼女の世界に現れたフェンは、はやてにとってかけがいの無い友人であり、自分を救ってくれた親友でもあった。

そんな彼に、彼女は自分が自力で立ち上がる所を見て欲しかったのだ。

自力で立つて歩いて、フェンの隣に立つてみたいという願いが彼女にはあったのである。

「ん?」「む?」「なんや?」「・・・?」「え?なんなの?」「
うにゃ?」

そして、その時だった。

膝の上でウトウトしているヴィータを微笑ましく見ていた時に感じた異和感。

はやての他にもリイン、シグナム、ザフィーラ、シャマルとその場に居た殆どが気が付いた。

「なあ、みんな。なんや変な感じがせえへんかった?」

「主も感じられたのですか?」

「シグナムも?・・・てことは」

「私も感じました」

「俺もです」

「・・・あたしも、ふああ」

約一名眠たそうに目をこすっていたが、とりあえずその事は置いておく。

先ほど微かに感じた“ナニカ”小さいが確実に感じ取ることが出来た。

何なのかは解らないが、何かが起こる様な感じがする。

「ほら!またや!」

「これはもしかして・・・超小規模の次元震か?」

「そうなのかりイン?」

「ああ、ものすごく小規模だから、魔導師以外の人間には解らないだろう」

次元震は世界規模で起こる地震の様なもの、小さくてもまるで余震のように揺れると言つのは、何か不気味さを感じさせる。以前事件が起こった後だけに、彼らはまだ少し神経が過敏になっていた為、動揺を隠せないでいる。

だが

「まさ・・・か・・・!?」

「え?なんやてリニス?つてちよつと!どこいくん!?リニス?!」

「おいましょう!今のは普通では無かった!」

「「「おう!」「」」

突然なにかに引き寄せられるかの如く、窓から空に飛び出したり
ニス。

いきなり外へと飛び出した彼女を追う為、はやて達は夜の海鳴の
空を姿を消して翔ける。

リニスが真っ直ぐ向かった場所は・・・海鳴市海浜公園であ
った。

そしてまた感じた超小規模次元震。段々間隔が短くなっている様
な感じがする。

しかも海浜公園に近づくと、次元震の波動の感じが強くなった。
理由は不明、しかしリニスがココに来たのは間違いない。

何を感じたのかは知らないがとにかくリニスを探す八神家だった。

「リニスー!どこやー!」

「いまなら怒らないからでてこーい!」

「なんでヴィータちゃんが怒るの？」

そのまましばらく海浜公園を探していると、別の魔力反応を感じた。

それは八神家が良く知る魔力、なのはとユーノのモノであった。彼らも超小規模次元震を感知し、海浜公園まで来たのだらう。

話を聞いた彼らも、リニスと次元震の震源を探す為に協力する。

そして

「 見つけた！あの高台の上に居る！」

リインが指さす高台、そこにリニスは立っていた。

そしてソコは、次元震の震源とも一致していた。

一体何が彼女をそこに招き寄せたのか？その答えはすぐに解った。何故なら

「 ツ！？皆さん来てしまった！？離れてください！」

リニスが八神家+ の姿を見て動揺したかと思うと、すぐに高台から逃げる様に駆けだした。

何故だか解らないが、普段取り乱すことがない彼女のその姿に、なんとなく危機感を感じ全員言う事を聞く。

そして、次の瞬間

ズガアアアアアアアアンツ!!!!!!!!!!!!!!

今までで一番大きな次元震、そして高台が爆発に包まれる！

その場に居たりニス以外の全員は何故爆発が起きたのかは解らなかつた。

だがすぐにその理由を理解する。

『ふへえ〜、やっぱり座標無しに次元海を突破するのは辛いすな
「ここは・・・海鳴なのか？」

【・・・星図で確認しました。GPSの情報からも地球の海鳴で
すう！】

そこには爆発で舞いあがった土を被った、懐かしい白き鎧の姿があつただから。

「戻ってきたアイツ」（後書き）

*戻ってきた主人公。

次回、フェン君がどこに行っていたのかの説明あり。
多少アレでも許してね？ネタだから。

「さて、「」はどいですかー！前編」（前書き）

*ちよつとグダかも知れません

「さて、「コ」はどこですかー！前編」

「さて、「コ」はどこですかー！前編」

妄想戦記

ああ、あのエネルギーの流れに巻き込まれて、ようやく帰ってま
いりました我が故郷。

懐かし空気の香り、風の心地よさ、懐かしの我が家　　そして。

「　で、あと今までどこに行ってたんかキリキリ白状しいや？」

「　あい、まむ」

封時結界内でボロボロにされて2〜3回死んだ俺。

ちやんとリザレクシオンしましたよ？俺ある意味不老不死だし・
。

でも、ユーノのストラグルバインド喰らって、なのはの砲撃を受
けた後、シグ姉さんに斬られて、ヴィータ姉のアイゼンにプチッと
滲みにされて、ザツフィーには串刺しにされて、ンでもってシヤマ
ル先生には空高く転送されて、そのまま紐無しバンジーさせられた
なあ。

んで、最後にはやてにマウントポジションで叩かれた。

凄く心配していたと言う感情が伝わってきたので、心の痛い事痛い事。

「……なんで生きてんだらうか？俺。鬱だあ。」

「そろそろ話せるくらいには回復したやろ？」

「……何だろう、この扱い。何か泣けて来た」

「でもちゃんと死なない様に加減されてます。皆さん優しいですね」
え」

そんな優しさはいらん！とは言えない俺だった。

まあ兎に角、今までの事を話すことにしましょかね……。

いまだマウントポジションのはやてを降ろして、俺はリビングへと足を向ける。

そこでくつろいで居らっしゃる家族たちに、俺が何処に飛ばされたのかを話すことにした。

あ、ちなみになのは達は、友達の家にとまると家に連絡を入れたんだそうな。

なんか何時の間にか、はやての交友関係が広がってたなあ。

さて、そろそろお話を始めようか？異世界でのお話を

意識を失った筈の俺が最初に意識を取り戻したのは、あの相変わらず暴力的なエネルギーの奔流の中だった。ウイルスは自閉モードに移行し、最低限の機能しか働かず、リンは気絶中。

まるで渦の様なエネルギー流に何度も翻弄されて、俺はそのエネルギーを吸収しながら、何処ぞへと流された。この時は殆ど意識な

んて無かったが、流されている間の記憶は悪夢だったぜ。

ちなみに何故意識が“無い”ではなく“殆ど無い”なのかと言うと、無意識下で俺のレアスキルが発動し時空間に漂うエネルギーを吸収したのだ。

ある意味生理機能だから仕方ないんだが、その時当然リンは気絶と言う名の機能停止を起しており、痛みを半分受け持つという事が出来なかった。

つまり俺は落ちそうになる意識を、身体の痛みで覚醒させていたと言う訳である。

最初の炉心事故に巻き込まれたあの時は、リンも居なくて身体の強化も今ほどでは無かった。

だから簡単に意識が飛んでいたのだが、そのころよりも大分強化されてしまっていた為、中途半端に痛みに耐えられる下地が出来てしまっていたと言う事だろう。

そんな拷問みたいな時間を長時間続け、吐血しまくったのも覚えてる。

血で気道が塞がり、酸素不足で意識が朦朧とする中。

どうやら俺の身体が俺を死なせない為に自己進化をさせたらしく、吐血することに再生能力が強くなっていったのを感じた。

魔力過多で身体が分解されても無限再生機構というか・・・もうなんて言っているのか分からない謎のプログラムに変貌を遂げた再生機構によって、欠損個所が普通に再生したことにはマジで驚いた。欠損していくピーク時にはいきなりフツと意識が消えていたので、頭部も分解されたと言う事だろう。それすら再生し、記憶もそのまま・・・どれだけ再生機能のレベルが上がったのやら想像もつかない。

い。

ただ漠然と解っていたのは、どうやら俺は魔力が続く限り再生出来ると言う事だった。

笑えるだろう？元々人外のつもりでいたが、コレでもう完璧に人間を止めたって訳だ。

話がそれだが、痛みについては当然そのままなので、どうせ進化するなら痛みを制御させてほしいと切に願っていた。

死んでは生き返るといふサイクルを繰り返し、

死ぬたびにリザレクション機能が強化されるといふ痛みのスパイラルを延々と強制された。

このままではいけない新世界の扉を開いてしまいそうだったが、残念ながら俺にはその因子が無かったらしく、只痛みがあるだけだった。

せめてその因子があれば、この苦しみから少しでも逃れられるのにと何度も考えたが、

考えるだけ無駄なので20回考えた辺りで辞めた。

その因子があったら有ったでもものすごく憂鬱になりそうだったからだ。

その後もどれだけ流されたのかは、俺には解らなかった。

時空間と名をうつつだけあり、電波時計から原子時計まで、

時計と名の付くすべてが狂ってしまったので正確な時間が解らない。

コレは電波とか放射線だとかの様なチャチなモノでは断じてなく、空間そのものが不安定で、場所によって時間の進み方が異なる所為なのである。

数日程度なら問題ないが、数週間もいると影響が出てくる程度の時間差ではあるが、
時間が解らなくなると言うのは、精神がほとんど不安定になってくるモノだった。

コレが次元航行艦だったら、ちゃんとシールドされているのだが、生憎オイラは生身で時空間を漂っているので、
そんなスゲー装置はヴィズに搭載されていない。

魔法による転移は直接転送するから、時空間が乱れない限り影響は出ないからなあ。

身体がダメージで殆ど動かせない癖に、頭の中は色々な考えであふれて行った。

そして俺は何時の間にか、奔流から何かの支流みたいなところに流されていた。

何故解ったのかと言うと、唯一残された機能であるHUDの表示している外の風景が変わったからだ。

それと、まるでメールシュトロームのような、支流の渦巻き箇所でもあった。

俺が流されていく方向に、ブラックホールの如く流れを吸いこんでいた渦があったのだ。

ヴィズの機能が停止している俺は、なすすべなくその渦の流れに乗って、そのまま某ランドのマウンテンの数百倍の速さでアップダウンを繰り返し、身体をシェイクさせられた。

この時に吐しゃ物を出さなかっただけ、俺は頑張った方だと思っ。

もっとも痛みの方が強くて、吐しゃ物吐くよりも吐血しそうな感じだったのだ。

身体の中でグルグル回るマグマが攪拌されるかの如く、俺の喉の奥からあと少しで噴き出して血液のアーチを描きそうなくらいの吐血感である。

んで、また意識がもつろうとしていると、今度は緑色の光にブチ当たり、ホント何でそうなったのか解らんが、俺はどこかの草原にペツと吐き出されていたのである。

その時に俺は誰かにぶつかっただが、それよりも今にも吐血しそうで気持ち悪かった。

.....
.....
.....

Side三人称

フェンがこの世界に来る少し前、その日トリステイン魔法学院では、2年生への進級試験が行われていた。

「宇宙の果ての何処かにいる私の僕よ！

神聖で、美しく、そして強力な使い魔よ！

私は心より求め、訴えるわ。

我が導きに答えなさい！！

五つの力を司るペンタゴン。

私の運命に従いし“使い魔”を召喚せよ」

そこでは、本日何度目かになるか解らない呪文の詠唱をする少女の姿があった。

その少女はルイズ、公爵家に生まれ、頭脳明晰、容姿もすぐれる才女でもある。

トリスティン魔法学院は魔法使いの貴族の学校であり、彼女はそこに通う学生だ。

だが、彼女には貴族にとって致命的とも呼べる問題があった。

「お願い・・・もうドラゴンだとかグリフォンだとか贅沢は言わない。だから出てきて」

周辺には何かの爆撃があったかの如く、クレーターが広がっている。

ソレらは全て彼女が作った穴で、彼女が魔法を使うと全て爆発してしまう所為だった。

そう彼女は魔法使いの子でありながら、魔法の成功率が0%なのである。

同級生たちは既に儀式を終えて、自分の呼び出した使い魔と戯れているが、彼女だけ今だ召喚が成功していなかったのだ。

「おい！早くしろよルイズ！」

「日が暮れる前には成功すればいいなあ〜おい！」

心無いヤジが飛ぶが、ソレを無視して彼女はゲートを繋げる事に意識を集中させる。

もうとにかく“誰でも良い、とにかく来なさい！”と気合を入れたのが不味かったのか、ゲートをつないだ瞬間、今までで最大の爆発を引き起こしたのだった。

そして開かれた召喚ゲートから現れたのは、なんと人間、しかも

どうやら平民の少年のようで、辺りをキョロキョロと見回していた。

ソレを見たルイズはこの時頭を抱えていた。

呼び出したのが前代未聞の人間、しかも平民である。

この世界において、魔法が使えない人間は平民と蔑まれており、侮蔑の対象だ。

そんなのを召喚してしまった自分は、一体何なのだろうか？

ふと同級生を見れば、ある者は風竜を召喚し、赤毛のヤツは真っ赤なサラマンダーを召喚している。メイジの実力を知るには使い魔を見るといふ言葉があるが、ではナニカ？自分は平民の程度の力しか持っていないのか？

そんな考えが脳裏をよぎる・・・当然認めたくは無い。

彼女はまだゲートが開いている内に、“もつと凄いのが良かった”と内心で思っていた。

その瞬間、ゲートが少しだけ光った事に、まだ周りは誰も気が付いていなかった。

とりあえず彼女はその少年を使い魔にした。

前代未聞の人間の使い魔、しかも平民、周りから来る嘲笑の声、あざけりの視線。

もう色んな意味でキレたい彼女だったが、公衆の面前で怒り狂うのは公爵家の気品にかかわる為、怒る事もできない。

だが内心でもうどうにでもなれ！こんちきしょう！ってな感じに
気合を込めていった。

コレ以上言われたら、公爵家は関係ない・・・全部吹き飛ばす
いのよ・・・。

と、ちよつと暗い思考がよぎるくらい、怒りが充填されていた。

「お、おい、ゲートが・・・」

「まだつながっているのか？ さすがルイズ、俺達には出来ない
事を平然とやってのける」

「才能0だから、しびれもあこがれもないがな」

周りの生徒が騒ぐ声を聞き、彼女は後ろを振りかえっていた。

そこには、いまだに何処かとココをつなぎ止めている召喚ゲート
があった。

ココまでなら、いつもの“失敗”であるとその場の全員は考えた。
だが、ソレは成功では無いが失敗でも無かったと全員が知ること
になる。

「え?!なに!?なんなの!?!」

突如としてゲートから風が吹き出したのだ。

爆風が収まらない・・・と、言うよりは、風が爆心地で吹き荒
れていた。

召喚ゲートが開かれたままで、どうやらまだ何かが出てくるらし
いのだが、風がすさまじく近寄ることが出来ない。

召喚ゲートが小刻みに震え、まるで何かを生み出そうとしている
生き物のように膨張した途端、今までで一番の突風がゲートから噴
き出したのだ。

見るモノが見たら、その風は次元航行エネルギーであったと言っ
事が解った事だろう。

だが、その場にそんな事が解る人間は誰ひとりとしていなかった。

そして召喚ゲートの震えが治まった瞬間に、ゲートを作った時と
同じくらいの爆発が巻き起こり、同時にゲートから何かが吐き出さ
れたのをその場に居た全員が目撃していた。

その吐き出されたモノは放物線を描き、あるうことが

「ん？なん　ゴイン！　グゲツ！」

いまだ使い魔の契約をされて、呆けていた平民の上に落下し
たのだった。

押しつぶされたカエルの様な声を出し、少年は気絶してしまう。
そして、その幸薄い少年の上には、ひび割れてはいるがシンプル
かつ機能的な鎧とマントをつけた人間が、その少年に抱きかかえら
れる形で折り重なって倒れていた。

「……あんだ、誰なのよ？」

誰にも聞かれてはいなかったが、思わずルイズはそう呟いていた。
出て来た人物は背丈から言うと子供の様である。

だが、ハルケギニアの生物を召喚する以上、アレが人間である可
能性は低い。

もしかしたら、今度は平民では無く、どこかの亜人でも呼び出し
てしまったのだろうか？ルイズは思っていた。

「アレは……一体？」

引率の教師であるコルベールは、一体何があつたのか確認をする為に、ゲートから吐き出された人物を見に行つた。杖を構えて何時でも魔法で対処できるように構える辺り、彼は只モノでは無い。陽光に照らされる頭部が輝き、頼もしくも滑稽に見える彼だが、表情は至つて真剣だ。

吐き出された人物は、どうやら子供のようであつた。だが所々が焼かれ、まるで戦闘のあつた後の様な姿。手甲の部分が真っ黒になつている所を見ると、かなりの熱量のあるものに焼かれたらしい。

ヘルメットは粉碎され、中の素顔をさらしている。その隙間から垣間見えたのは、綺麗な人形のように整つた顔立ち、顔には青白いラインが2本浮き出ている人間の顔であつた。

「
・・・」
「
ッ!?!」

一体何者なのか調べようとディテイクトマジックを掛けた瞬間、子供がいきなり立ち上がった事に驚いたコルベールは、咄嗟に杖を構えルーンを詠唱し始める。

だが、その行動は無意味なものとなつた、何故なら

「魔力を当てる・・・な・・・ゴパアツ!!!」

「え!?!ちよつ!ちよつと君い!?!」

その子供は苦しそくに顔を歪めてそう言つた後、いきなり吐血したからであつた。

「
ッ!?!これは!誰か急いで担架をッ!!!」

口から血を流し、子供の顔からドンドン血の気が失せていく。
どこかを怪我しているのかもしれないと思ったコルベールの機転により、

その子供は学校の保健室に收容されたのである。

彼に激突されて気絶した少年と一緒に……。

S i d e o u t

さて、視界が暗転してからしばらくたって、俺は徐々に意識を覚醒させていった。

明確に気が付いた時間は全然覚えていない。とにかく気が付いたらって感じか？

んで、最初に俺が見たのは、何かの木目……まあ所謂“知らない天井”ってヤツだった。

「知らない天上だ……ゴホ」

思わずそう言ったのは、まだ朦朧とした頭の中で、俺はもう死んだと思つてたからなのだが、徐々に意識が覚醒するにつれて、どうやらまだ生きていると言う事に気が付いた。

そして改めて部屋の中を見渡すと、どこかヨーロッパを感じさせるレイアウト……。

というか漆喰の壁とか、木製の調度品とかまで凝っていて驚いた。

いったいどの次元世界に流れ着いたのだろうか？

行ったことがある次元世界に、似たような建築物があったがソコ

なのだろうか？

フツと見渡すと、隣のベッドに誰か寝ている様だが、カーテンで仕切られていて見えない。

よくよく見れば、医薬品棚の様な棚も置いてあるので病院の医務室、もしくは保健室の様な印象を受けた。

そんなことを、ボウツとした頭で考えていると

「……気持ち悪い」

懐かしの気持ち悪さに襲われた。

そう、これははやてに出会う前に感じたアレである。

本気で吐血する30秒前って奴だろうか？

「せ、洗面器　ゲホ」

まだ吐血では無いが、懐かしの血の味が口いっぱいに広がって来ていて正直不味い。

ベッドで寝かされていた様なので、シーツを血で汚してしまつて考えた俺は、洗面器とかなにか受け皿的なモノを探そうとした。

だが、まだフラフラしていた為、ベッドから転げ落ちてしまい、身体をしこたま打ちつけてしまったのは、地味に痛かった。

「……ぐす」

ちょっと涙目になりながら、立ち上がろうとしたが、身体に力が入らなかった。

なんとかベッドの淵に手を置いて、つかまり立ちは出来たがマジで不味い。

吐血まで後10秒前後……ああ、後でお掃除だなあとか考えていると……。

「こんこん ガチャ 入ります って気が付かれたのですか
!?!」

突如、知らない誰かが部屋に入ってきた。

おかつぱのメイドさんが、俺のすぐ近くに駆けよって来たんだが、
今はそんなの関係無い。

マジで血管の限界を感じた俺は、死に物狂いで目の前の人物にお
願いした。

「す、すまんが洗面器を・・・」

「え?ええ!?!」

「早く!お願い!もう、げんかい・・・」

「わ、解ったわ!ええと・・・はいコレ!」

そして差し出してもらった陶器製の洗面器。

今時古風なとか思いながらも俺はその洗面器に思いつきり

「いぼあああ」

「き、きやあああ!?!」

思っ存分吐血させてもらった。あーすつきりした。

「・・・落ち着きましたか?」

おかつぱの髪の毛のメイドが慌てて部屋を出て行き、しばらくして頭

が寂しい男性を連れて戻ってきた。俺は洗面器スレスレ一杯に溜まってしまった血が、こぼれてしまいそうになっていたのを、どうしたものかと眺めていた。

吐血はいまだ治まらず、新しい洗面器と交換されても、俺はまた血を吐いてしまう。

俺自身はもうこういったのに慣れっこだが、おかつぱメイドさんは血を見たことがあまりないのか、顔面蒼白にしており何かスゲエ罪悪感を俺は感じちまったぜ。

ンで、その後も血を吐き続けてしまい、いい加減見かねたのか、男性から何かの壇を渡された。

男性から、その中の人っていた液体を飲むように言われて、どうしたもんかと俺は思った。

リザレクション能力の力が増したお陰で、血を吐いても魔力を消費してドンドン生産されているらしく、一向に収まる気配が無い。

だが徐々に出る量が減っている所を見ると、もうすぐ止まるのは明白である。

かと言ってココで出された、恐らく薬を飲まないと、失礼な気もしないでもない。

「……エイ」

んで、悩むのも面倒臭いので、俺は壇から液体を口に含み呑みこんだ。

なんの味もしない、水みたいな感じだった。

でも、呑んだ途端身体の中がすさまじく熱くなったように感じ、一瞬毒かとも思ったのだが、気が付けば吐血の症状が治まっていった事に凄く驚いた。

もつとも、次元航行炉のエネルギーを吸収する際に生じる、力の着底になれるまでの吐血はコレで二度目である。そういったのには身体が既に耐性をつけていた事もあるのだが、ソレはソレ、コレはコレというやつである。

どちらにしろ、それなりに楽になった事は喜ばしい限りであった。あの時と同じく、どうも魔力に変調が起きていてしばらく慣れるのに苦労しそうだろうな。

「ええ、お陰さまで、どうやら貴重な薬を頂いたようで・・・」

「いや良くそこまで吐血して大丈夫だったものです」

「本当、私も驚きました」

まあ、普通の人間だったらとつくにこん睡状態に陥ってもおかしくない吐血量だからな。

・・・人間止めてんなあゝ俺。

「ッ！ゲホッ！ゲホッ！」

まだ体調が悪く、すこし喉に血が残っていたらしい。

喉の奥に絡まる感じがする。水分が足りてないみたいだな。

「ああ、大丈夫ですか？はい、水をどうぞ」

「ケホケホ、すみません」

この時だが、男性が杖を振ると水差しがやってきたのをみた。

魔力を感じる所を見ると、どうやら彼も魔導師らしい。

今の魔法はスターダストシユート系の応用だろうか？器用な事だ。

「・・・ふう、お水、ありがとうございました」

「いえいえ、血が絡まると苦しいのは解りますから」

「迷惑ついでに、この世界に管理局は居ますか？いたら連絡を取りたいのですが……」

管理局がもしもいるなら、保護して貰った方が賢明だろう。

次元漂流者だといえば、彼らは保護をしてくれるだろうしな。

「はあ？管理局、ですか？何かの組織の名前ですか？」

「え？」

だが、どうやらこの世界は管理局がない様であった。

お、落ちつこうか？どうやらこの世界は管理外世界だったらしい。

す、少しだけ情報漏らしちゃったけど、まだセーフだよな？

しかし、管理外世界かあ、ヴィズを再起動させて次元間通信が届くか試そう。

リンディさんあたりに連絡入れられれば、なのはの伝手ではやてに連絡出来るだろうし……。

「もし！大丈夫ですか？」

「……あ、すみません。考え事をしていました」

男性にそう言われつつ、俺はヴィズへと魔力を送って再起動させてやる。

自閉モードに入ってたから、思考回路の安全弁が上がるまで少しかかるだろう。

そっぴやリンは……気絶したまんまだし、寝かせといてやるか。

「いえ、いたし方無い事です。誰でもこんな自体になれば動揺くらないさるでしょう」

「そう言ってもらえると助かります」

「ところで、貴方の名前やこの出身かをそろそろ明かしていただかないと、こちらとしては呼び名に困るのですが・・・」

さて、どうしたもんだろうか？この世界では魔法はあるが管理局はいない。

・・・ならある程度好き勝手しても問題はないな。

最悪自力で次元世界を移動しなかりゃならんだろうし・・・。

とりあえず俺は姿勢を正して、彼らに名乗ることにした。

「ああ、失礼。自分はフェン・リーダーです。魔導師をしています」

「ミスタ・フェンとお呼びしても？」

「フェンでいいです。そんな大層な呼称をつけられるほど偉くは有りません」

いきなりミスタとか言われて少し面喰ったのでそう答えた。

そう言つと、少しだけ態度が柔らかくなった様な気がしたが何故だろうか？

「ではフェン君とお呼びしますね。ああ、申し遅れました。私はこのトリステイン魔法学院で教師をしているコルベルと言います」

「よろしくコルベルさん」

「ああ、それと彼女は」

「この学園でメイドをしておりますシエスタと申します」

「よろしくシエスタさん」

おろ？何かシエスタさんにさん付けしたらちよつと動揺した様な顔をしたぞ？何でだろうか？

ソレはさて置き、本当になんて説明しようか……。
とりあえず、俺はヴィズとかが再起動してくれるのを待ちたい気
分だった。

「さて、「コ」はどこですかー！後編」

「さて、「コ」はどこですかー！後編」

妄想戦記

さてさて、相変わらずトラブルに巻き込まれ・・・いや今回は自分で飛びこんだか。

まあソレはさて置き、何故かは知らぬが次元世界に辿り着くどころか、どうやら全く管理局がタッチしていない未知の新世界に辿りついてしまったようである。

何故そんな事が解るのか？実は先ほどの自己紹介の直後にヴィズが再起動したという念話が来たんだが、その時に次元間通信でもないか調べさせたのである。

結果は全く反応なし、ウンともスンとも言わないとの結果が出てしまったのである。

例え管理外世界でも、ある程度の監視は付いている筈なので、通信が傍受できないと言う事は少ない。また例えこの世界に管理局が来ていなくても、すぐ近くの世界に来ていれば傍受くらいは出来る筈なのである。

だが、それが出来なかった。

それが導き出す答えは只一つ、この世界は全くの未知の異世界であると言ふ事である。

つまり管理局が発見していない上、近くにすら来ていない辺境と呼べるかもしれない。

「（まずい、すこぶる不味い）」

『（このままでは野宿生活・・・ホームレス小学生の誕生ですね）』

「（だれがホームレス小学生じゃ、大体俺は小学生じゃ無いぞ？）」

『（ではホームレス軍人・・・いえホームレス兵士ツスカね？）』

「（余計訳解らんわ！）」

とりあえずマルチタスクで念話をしながら、こんな無駄話をして
いる俺達。

これぞ才能の無駄遣いと言ふヤツであろう。ちなみにリンはまだ
夢の世界である。

しかし目の前に居らっしゃる頭の眩しい方を放置する訳にもい
かない。

そろそろ、当たり障りのない説明をしなくては

少年、説明中・・・

「ふむ、つまりはとある人物の守護をしていたと？」

「ええ、そんな感じです。仲間内では夜天の防人と呼ばれていま
した」

とりあえず誤魔化す・・・もといお茶を濁すことにした。
別世界の存在とかの概念が無い世界で、“俺、違う世界からきま
したー”とか言った所で、病院を進められるだけである。

それなら当たり障りのない自分の周辺情報だけ話せばいい。
ウソは付いていないからモーマンタイである。

『(全部ウソって訳じゃないですが・・・何かヒシヒシとした罪悪
感が・・・)』

「(う、うん・・・なんかこのヒト良い人そうだし・・・)」

女性の尻にひかれるタイプだろうな。きっと愛妻家になれるぜ。
頭を見るとその考えがいかに困難かが解るけどな。

・・・まあ最も

「(軍人だな・・・このヒト)」

『(退役・・・にしては年が若いですね。志願除隊でしょうか?)』

「(さて、な。そこらは俺達が感知しなくてもいいことだ)」

「(・・・それもそうですね)」

御同輩の匂いとても良いんだろうかね？

目の前の気の弱そうな人物からは“腐臭”の匂いをかすかに感じ
る。

俺と同じく、戦場に行ったことがあるモノの匂いってヤツだな。

この手の匂いは、一度滲み付いたら最後、墓の下に行くまで取れ
やしない。

・・・大分殺したな？この男・・・まあ俺も人の事は言えな
いか。

「ではとりあえず、この件は学院長に報告させてもらいます」
「ええ、こちらとしても誠意ある対応をされるのが望ましい」
「……失礼します」

そう言つて、コルベールさんは医務室から出て行かれた。

シエスタさんも、気が付けば部屋に居ない。

流星は本職のメイド、相手に気がつかれないように退室するのも心得てらっしゃる。

「さて、ヴィズよ。通信はどうだ？」

『ダメです。まさかノイズすらつながらないなんて、リンが起きてくれなければ解りませんが、まるでこの世界自体が閉ざされている様です』

「ふーむ、だとしたら下手に転移するのは危険か」

もしもこの世界が他の次元世界から断絶した空間にあつた場合。

俺はその“世界の壁”に阻まれて動くことが出来ず、最悪この世界にも弾かれて、サルガツソーの様な場所を延々とさまよう事になるかもしれない。

次元間通信すら傍受できないという現実が、それを如実に物語っているだろう。

「なら、そろそろリンを起すべきか？」

『でしょうね。というか一人だけのんきに寝てて、なんかずるいですよ』

「まあそう言っな。あの子はまだ若いんだからな」

『……年寄りクサ』

「じゃかましい」

とりあえず、今だ俺の中で眠っているリンを起すことにした。

念話で起そうとしたが、眠たかったのか覚醒するまで約10分かかった。

しかも起きた第一声が『あれえ？リニスねえさん・・・ごはんはあ？』である。

予想外に大物になりつつあるようで微笑ましかつたが、生憎今はそんな状況では無い。

「ま、そう言う訳だから」

『多少疲れるかもしれませんが、ユニゾンをもう一度行い、データ解析をお願いします』

「任せてくださいです！リン、やってみるです！」

こうしてリンに解析をお願いしたのであるが・・・

まさかこれ程厄介だったとは、この時は想像もつかなかった。

さて、夜になってコルベールと名乗ったあの俺と同じ匂いにする教師が再び訪れた。

なんか俺のことを学院長と協議したらしいのだが、その中である意味重要な話が出て来た。

曰く俺は“使い魔”らしい。正確には“使い魔候補”だったらしいが。

この世界の魔法によって、召喚の問いに応じて召喚された・・・と、彼らは言うのだが。

正直に言っと、俺はそんな問いに答えた記憶何ぞない。

体が全く動かせないので、ずっと時空や次元海をエネルギーが向

かう所に流されただけである。

恐らく召喚ゲートが開いたときには俺は移動していた。

ゲートは生き物の目の前に現れると言う。

ここでミソさんが、“目の前に現れる”と言うところだ。

まあ大体察しの良いヤツは気が付いた事だろうが、俺は身体が全く動かせず流されていた。

その目の前にゲートが現れば・・・当然ゲートをくぐるよねえ。本人の意思関係無しに。

まあ幸いなことに、俺にはまだ使い魔の契約は為されていないらしい。

ソレは俺が魔導師、この世界で言う所のメイジだと判明したからだそうな。

一応、魔法主義社会なので、メイジであつたなら了承を得てから使い魔にと考えたらしい。

つまりメイジで無かつたら問答無用で使い魔確定である。「冗談じゃない。

俺には帰らなければならぬ場所がある。

だから使い魔何ぞやらずにすぐにでも帰らねばならないのだ。

しかも聞いた話じゃ、この世界の使い魔とは俺の知っている使い魔システムと全然異なる。

こちらの使い魔は、あくまで人工的に造られた魂を、生物の素体に入れて造られる人工的なモノだ。故に造つた魔導師に対して従順である。

だが、此方の使い魔とはこの世界にいる生き物を召喚し、どちらかが死ぬまで一蓮托生をさせるらしいのである。

当然、いずれ帰る気マンマンの俺にとっては、許容出来る事では無い。
だが

「では、マスター、参りましょう」
「ええ、これからよろしくねフェン」

俺は今、髪の毛がピンク色のブロンドという有り得ない配色の少女の隣に居る。

そして彼女のことをご主人、マスターと呼んでいた。
何がどうしてこうなったか？ソレは実に簡単かつシンプルな話。

俺の衣食住の世話は、召喚主の彼女にゆだねられたのである。
別名“丸投げ”と呼ばれる大人の専売特許と言うヤツでだ。
そして俺のご主人さまになったのは、とある貴族のご令嬢。
名はルイズ、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

この世界の貴族の中でも高い位である公爵家の人間である。

どうも俺は彼女の開いたゲートから現れたらしく、つまりは彼女が召喚主と言う事となるらしい。

使い魔はもう居るらしいので、俺は帰る手段が見つかるまで、彼女に仕えることに同意したのである。傭兵契約と想ってくれても良い。似たような契約を交わしてあるのだから。

ちなみに彼女に仕えた分の給金は、俺に使われた薬代に当てられるらしい。

コルベールさんが払ってくれたとはいえ、当然薬はタダでは無い。それなりに高価な薬だったらしく、この世界の一般人が払うには、無料奉公15年分と言ったところだったらしい。

この時、この世界についての仕組みが良く解っていなかった為、働き口をくれると言う話しに乗ってしまったのだ。後になって、普通に傭兵とかやっていた方が実入りが良く、すぐに返済出来たと言う事だったのだが、時すでに遅し。

契約を交わしてしまった後だったので、もう変更が効かなかったのである。

契約内容は良くご確認くださいという言葉が、俺の脳裏を走り回ったね。

んで現在、仕える事になったヴァリエール嬢の部屋へと向かっている。

俺の他にもう一人、先に召喚されていた人物が居るので、会っておくと良いとの事。

その人物は、既に目の前の彼女と使い魔契約を交わしているらしいが……。

まあご愁傷さまと言う他ないか、生憎知り合いでは無いだろうか
らな。

全くの赤の他人相手に同情するほど、俺は優しくなんて無い。
とりあえず、今後どうするべきか教えてもらわんとな

「マスター、所で自分は何をすればいいのですか？」

「うーん、そうねえ。あんた何が出来るの？」

「一応もと兵士ですので、家事は一通りと戦闘行動が出来ます」

部屋に向かう道すがら、自分がすべき仕事について訪ねてみる。

一応外聞的には使い魔と言う事になるらしい（ソレを知ったのも後日、なのでちょっと納得いかなかったり・・・）とりあえずタダで養ってくれるほど、優しいとは思えなかった。

「・・・全然兵士には見えないわね？でも魔法を使えるって本当？」

「こちらと系統は異なりますが、確かに使えます。何なら後でお見せしましょうか？」

俺は真剣に彼女の目を見てそう言った。

もつとも、まだしばらくは肉体強化の様な簡単な魔法しか使えないだろうけどな。

出来て一発だけスフィアを形成することぐらいだろうか？

「ウソじゃなさそうね。それじゃ警護でもして貰おうかしら？」

「了解したマスター。自分が消えるその時まで、私は貴方の剣となる」

・・・なんか従者って感じがしたから、この時つい調子に乗っちゃったんだあゝ

後で思い返してあまりの恥ずかしさに悶絶した上、しばらくヴィズのネタにされてリアルにorzしたのは内緒だぜ。

「はいはい、期待しないで待ってるわ

「こごよ」

「どうやらあまり信じてはもらえなかったらしい。」

「まあ見た目は7歳のガキだから、精々従軍少年兵程度に見られたって所だろう。」

「んで、案内された部屋に彼女の後を追って入ると、既に先客がいなすった。」

「ルイズ、誰だその子？」

「私の事はご主人さまって言うようにあれほど・・・まあ良いわ。」

「この子はフェン、貴方と同じく使い魔となった子よ。」

「え?!」

「初めまして、フェン・ライダーと言います。お兄さんは？」

「どうやら俺と保健室に居た少年らしい。」

「青い色のパーカーを着た少年が、部屋の真ん中に立っていた。」

「服の材質からすると、どうやら地球レベルの文化レベルがある所出身と見て良いだろう。」

「彼は俺をじろじろと見た後、口を開いた。」

「俺は平賀才人、そこにいるルイズに召喚された・・・まあ使い魔らしい。」

「平賀、平賀?・・・もしかして日本人ですか？」

「俺は思わずそう聞いていた。」

「まさかとは思ったが、平賀なんて名前は地球の日本くらいでしか聞いたことが無い。」

「まあ日系人でもいそうな名前ではあるが、そこら辺は置いておくことにする。」

「 なッ！？お前いま日本って言ったか？」

「 いたっ！」

「 あ、ああゴメン」

だが、彼は思いつきり目を見開くと、俺の方を掴んで揺さぶってきた。

一見落ち着いていた様に見えたが、実はかなりテンパっていたのだろう……。うかつなことをした。この少年も恐らく有無を言わずこちらに連れて来られたんだろう。

こんな未知の世界に連れて来られて、落ちついていると言う方が無理がある。

だが、俺が痛がるそぶりをすると、申し訳なさそうに手を話してくれた辺り、根はとても優しい良い人らしい。そして気遣う様な視線をくれる辺り、日本人で間違いない様だ。

「 ええ、自分も（ある意味）そこから来ましたし」

「 そうか……。俺だけじゃ無かったんだ……。」

そう言うと、少しばかり安堵の表情を浮かべるサイトさん。

まあ自分の世界のことを何も知らない異世界に連れて来られて、そこで自分の世界の事を知っている人間がいたら、安心するだろうなあ。

見ればまだ若いみたいだし……。高校生くらいか？

だとしたら、例え強がっていたとしても、内心は心細かった事だろう。

俺はとっくにそう言ったのの覚悟完了済みだから、全然平気何だけどな。

最悪自力で帰る方法見つけるし……。

「何？貴方も違う世界から来たって言うの？」

と、ここで俺とサイトの邂逅を黙って見ていたヴァリエール・・・
言いにくいからもうルイズさんでいいか、まあルイズさんが口を
開き、俺にそう訪ねて来た。

「ええ、恐らくは・・・一応お互いの事を話して置いた方がいいで
しょう」

「ああ、ちゃんとした自己紹介ってどこか」

そして俺はこの世界で唯一の地球出身の人間、平賀才人との邂逅
を果たした。

彼は魔法の事は何も知らない只の一般人だったようである。

なんでも自分のPCを修理した帰りに、召喚ゲートをすっかり触
ってしまったが為、この世界に来てしまったのだとか。

とりあえずサイトさん・・・サイトでいいや。

彼の話聞いて思ったのは迂闊過ぎだろってところかな。

んな普通、道のと真ん中に忽然と現れた鏡を触ろうとするか？

好奇心猫を殺すっていうのを体現してどうすんのよ。

「んで、フェンはどこに住んでたんだ？」

「海鳴市です。そこで居候させてもらってました」

「海鳴市かあゝ随分と離れた所から来たんだな？」

はは、もつとも俺が召喚されたのは、次元航行エネルギーの奔流
の中だけだな。

この後も日本の話題で盛り上がっていたが、ソレを聞いていたル
イズさんが、思い付いたように口を開いた。

「あれ？でもサイトから聞いた話だと、魔法が無い世界なんじゃ」
「ああ、魔法なんて「有りますよ」ない・・・え？」
「貴方は知らないかもしれませんが、魔法は有ります」

俺は指先に魔力スフィアを作っけて見せてやる。

信じられない光景にサイトと・・・何故かルイズさんの口まで開いたままになった。

あれ？サイトはともかく、なんでルイズさんまで驚くんだけ？

魔法使いだから魔法くらい見た事あるだろうに

「すげえ！マジで魔法だ！」

「杖も無しで魔法！？なに先住魔法が使えるのアンタ！？」

前者のサイトはともかく、ルイズさんの驚き方が解せん。

あれ、もしかして・・・。

『（どうやら、この世界では杖が無いと魔法が出来ない様ですね）』
「・・・マジ？」

【はいです。リンも確認しましたです】

あちゃー、そう言う事かあ。

そりゃ魔法の杖がないと魔法が使えないという概念があれば驚くわな。

とりあえず口が開きっぱなしのルイズさんには、系統が違う魔法だからという事で納得して貰った。ふむしかし、どうやら色々調べてみたら面白い事が解りそうな世界だな。

しばらく滞在するの・・・面白いかも知れない。

.....

.....

さて、恐らくは長い付き合いになりそうだったので、おたがいの自己紹介を兼ねた親睦会というか、お話し会を行っていた。どうやらルイズさんは随分とプライドがお高いらしい。

まあ声がアリサそっくりだから、解らなくもないんだが……。目の前で幾ら失言したからって、サイトを鞭で殴るとかはやり過ぎだと思っんだ。

でもやられたご本人は、あまり痛そうじゃない……まさかそっちの因子がある人間！？

サイト……恐ろしい子！俺には到底理解できない領域だわさ！そんなバカな事を考えていたら、ジト目で見られている事に気が付いた。

どうやら言外に助けるよ的な視線を送っていた様である。

やだよ、俺とばつちり喰らいたくねえモン。

さて、そんな感じで夜も大分更けた頃、突然サイトがこんなことをいいだした。

「つまり、使い魔ってのは、結局ナニをすればいいんだ？」

これは先ほど俺がルイズさんに質問した事と同じ内容である。

まさか、今まで自分で使い魔だと言っていたのに、その仕事内容を知らないとか？

……能天気もココまで行くと凄い気がするぜ。

「主との感覚共有や護衛、身の回りの世話が主な仕事」

「ヘーフェンよく分ってるじゃないの。他には秘薬の材料を探すと言つのもあるわ」

「一応鉱物資源についてはある程度心得は有ります」

俺はデバイスマスターでもあるからな。

デバイスに使う素材は自分で取りに行く事も多い。

ある程度目利きが出来なきゃデバイスなんて作れませんわい。

「そう？でもアンタ達に出来そうなのは・・・雑用位なもんね」

「はあ？なんで俺らがそんな事しなきゃいけないんだよ？」

「サイトさんダメですってそんな事言ったら・・・自分らの生命線である衣食住の権限は、現在彼女が握ってるですよ？」

「そう言つ事、ごはん食べたければ働きなさい」

なんかサイトがぐぬぬとか唸ってるけど、そんなの大した問題じゃないと思うんだけどなあ。

最悪飯は自分で確保出来るしな。俺サバイバルとかしてた訳だしソレ位出来る。

この世界で問題なのは勝手にうるついで、この世界の政府に目をつけられたりすることだろう。

だからこそ、影響力の強い公爵家の娘さんの傘下についたって訳だしな。

書類上の使い魔関係だが、それでも無いよかましであろう。

「ま、きつとちゃんと仕事をすればキッチンと用意して貰えます・・・よね？」

「え？ええ、ちゃんと使い魔らしくしていればね」

「ほら、マスターは約束を破らない方でしょうから、ちゃんと用意してくれますよ。ようは等価交換だと思えば良いんです。生きるの

に必要な生活の場を提供して貰う代わりに、自分たちは彼女に使える。ほら？簡単でしょう？」

「……なつとくはいかねえが飯の為か……そうだな。頑張るか」

ふう、やる気にはなってくれた。単純というか純粹と言うか。

これでサイトがルイズを怒らせて、俺まで飯抜きの可能性は減るかな？

一瞬彼女が顔をひきつらせたのが気になるところだが……まあ大丈夫だろうウン。

まあこの後は適当に会話して彼らとの親睦？を深めて行った。

見た目が子供だからか、何故か早く寝ようという話になり、その日は早めに寝ることになった。

でも寝床が藁とか……まあ藁って案外寝やすいんだけどね。

俺はこの世界特有の二つの付きを眺めながら、眠りについたのだった。

【主様】

「ん？どつした」

と、思ったのだが、リングが話しかけて来た。何事だろうか？

【言われていた解析を終えました。やはりこの世界は“閉ざされて”いますですう】

「（そうか）」

【次元の壁の周りに、更に魔力の渦が出来てしまっています。ココを突破するのは容易じゃありません。こちらもかなりの魔力を集めなければ、突破は難しいと思うですう】

世界を隔てる次元の壁、ソレの周りに大きな魔力が渦巻いていたら、そうそう突破はできんだろうな・・・この世界になにか使えるモノがあればいいんだが・・・。

最悪、カートリッジをフルに使って、超特大の砲撃をブチ込んで渦が薄れた隙に突破する事しか出来ないかもしれないな。

「（リン、カートリッジの薬莖の造り方は知っているか?）」

【はいですう、データの中に記録されています。カートリッジを作るのですか?】

「（念の為・・・な。何をするにも魔力はある）」

【了解しましたですう】

とりあえず、カートリッジの量産はしておくことにしよう。

材料については、最悪兵装デバイスの幾つかをバラせばなんとかなるかもしれない。

出来れば材料が見つければいいんだが・・・。

「（面倒臭いな・・・はあ）」

『（ため息つくとき幸せが逃げますよ?）」』

そうは言うが、ため息の一つもつきたくはなるぞ。

だが、俺は絶対はやて達の元に帰りつく!だから準備は怠らない

さー!

「（そうですか・・・ところで、彼はどうするのですか）」

「（サイトの事か？）」

「（ええ、私たちだけなら次元の壁を突破するくらいは出来ます。ですが・・・）」

「（サイトがいると、その成功率はグッと下がるか・・・）」

「（はい・・・残酷な様ですが私は）」

「（言うな、その時まではその考えは封印しておけ・・・）」

今ヴィズが何を言おうとしたのかは解っている。

生きて帰りたいなら、ソレが一番の選択肢であることだろう。

まあそこら辺はキチンと事情説明してからだな。

なにせ俺みたいに魔力で再生出来るならともかく、次元の壁を突破する時、生身の人間が五体満足で無事でいられるなんて到底思えない。そこら辺を何時か帰るめどがたった時に説明して、それでも帰りたいと言われたら、なんとかかしてみろさ。

あー、それにしても、長い休暇になりそうだな。

「さて、「コロ」はどこですかー！後編」（後書き）

*はい、フェン君が辿りついたのはゼロ魔の世界でした。

しばらくはゼロ魔編が続きますが、どうぞご容赦ください。

なお彼はこの世界がゼロ魔の世界だと言っことを知りません。
すでに原作を完全に忘れております。
それでは、またいずれノシ

「メイドさん達との語り」

「メイドさん達との語り」

妄想戦記

うーん！いい朝だ！美味しい空気、涼やかな風、実にいい朝だ。

『（おはようございます。マスター、今日もメツチャ速いですね？）

『（おはようヴィズ、なんか身体がな）」

もっとも普段の習慣で、まだ日が昇って無いのに目が覚めちまつただけだな！

元々兵士やってたもんだから、どうしても朝は早くてね……。

『（どうします？皆さん起きるまで待ちますか？）

『（うーん、どうしよう……）」

普段なら外に鍛錬がてら走りに出かけるのだが

『（今日は止めておこう。やる事覚える事が多そうだ）」

『（ま、しばらくは帰れないのですから、個々の生活に馴れる必要

「はありますね」

ルイズ嬢は俺に洗濯掃除等の雑用をさせると、昨日言っていた。そこら辺は元々転生者であるし、兵士としてのたしなみとして覚えていくからいい。

それに、その他マナーとかも、一通り母上に一応仕込まれている。

うん？何でかって？将来将官とかになった時様だそうな。

でも何故母上はソレの訓練の時に、俺を女装させようとしたのだろうか？

それだけがいまだに解せん・・・写真を取られたが、そのデータは処分したのはいい思い出だな。

「（ふむ、従者契約を結んでいるのだから、それっぽく振舞ってみるか・・・）」

「（ええ！それこそ某紅いブラウニーさんの如くやつちやいましてよー！）」

「（・・・お前、またネットか？）」

「（そう言えばこつちではネットが見れませんねえ・・・は！お気に入りSSとかが読めなくなる！？ミロミロ動画も見れないですとおおお！！???)」

「（うわ、うるせ）」

というか、ヴィズのヤツ・・・マジでネット中毒だなオイ。

しまいにゃMADとか造り始めるんじゃないか？最近規制厳しいけど。

「（マスター、私には絶対に帰還せねばならない理由が来ました）」

「（あー、そうか・・・）」

『もうこうなったら私やりますよおお！！次元の壁なんてなんぼのもんですか！』

盛り上がっているとこ悪いんだが、実質頑張るのって俺なんですけど？

それに

「（その為には、お前さんを強化しなきゃムリだろ）」

『（は！そうでした！でもこんな世界じゃ・・・）』

「（手持ちの道具じゃ・・・かなり時間がかかる事だろ）」

どうも昨日から見ただけでも、機械の類がまったく見受けられなかった。

照明は旧式な魔法感応式ランプ、水道は共用。

トイレに至っては場所にもよるが平民用はボタンだった。

建材も魔法で強化が施されているのは解ったが、金属は殆ど使われていない。

鉄鋼加工技術とかが存在していないのだろう、技術的には中世くらいだと思われる。

コレじゃデバイス一つ造るのに、何年かかる事やら想像もつかない。

「（自力でCPUの一つでも造ればいいんだが・・・）」

『（・・・手作業ですか？）』

「（どう考えても無理か・・・はあ）」

最悪、オートクレーン以外の兵装デバイスと、ヴィズの中にあるブラックボックスにしたAI部分の要らない回路を抜き取って造るしかないだろうなあ。

さてと、考えるのも良いが、そろそろお仕事しに行きますかね。

「よっと！ おもいな」

『（強化魔法使いますか？多分もうソレ位なら問題は無いかと）』

「（・・・そうする）」

俺は洗濯かごを持って洗濯をしに部屋を出る。

結構量があるので、小さな7歳児の素のパワーだと上手く安定して運べない。

なので、身体強化を行って籠を持つことにした。

洗い場の場所は一応聞いてあるから、そこに行って洗えばいいのか。

「手洗いだろうな・・・4年ぶりか」

『（私が建造される前ですね。マスターが本格的なサバイバル訓練を受けたのって）』

ああ、“地獄の行軍 サバイバル付き”君は未来を勝ち取れるか編”を受けたんだっけな。

あの時はヴィズじゃなくて、只のストレージデバイスだったから凄く大変だった。

服とかも川で周囲を警戒しながら、石を洗濯板かわりにしたっけなあ。

ちゃんと警戒してないと、猛獣がよって来るとか・・・マジで怖かった。

「・・・」

『（あ、あのうマスター？なんかさっきから黙ってますけど・・・大丈夫ですか？）』

「（大丈夫 ちよっと怖い経験思っただけだから）」

3歳児にあの訓練はちょっときつすぎだと思っね。
まあソレに耐え抜いた俺が言う事じゃないだろうけど……。
チート性能な我が肉体に感謝って所だな。

「よっ、はっ。」

俺はえっちらおっちらと、フラフラしながら籠を運ぶ。

まだ身体の中には次元航行エネルギーの残照が残っている為に体調がちと悪い。

最初の頃と比べたら、歩きまわれるだけでも脅威的であると言えるだろう。

もっとも魔法行使は、まだしばらくは出来そうに無さそうだ。

「ふう、よっ！」

俺は片手に籠を持ち、扉を開けようとするが

「……あかん、やっぱり降ろそう」

普段なら普通に開けられるのになあ。朝だからかな？

どうにもまだ身体が重たく感じる。

日常生活で動くのにも少し不具合が出てきているとは……。

は！コレはまさか、あの治りかけだけど時々吐血みたいな感じか！？

「ほう、どっしょ　とど」

うむ、やはり身体がまだ治りきっていないらしい。

立ったままどうしようか悩んでいたら、ちよつと視界が暗くなつた。

どう見ても貧血です、本当にあり（ry

まあアレだけ吐血してたら、少しくらいは影響あるわな。

幾ら魔力で回復するって言っても、身体は一応まだ子共な訳だしね。

んで、そのままポスンと倒れちまうかと思つたんだが

ふわ

「おつと、大丈夫か？」

「……あれ？サイトさん？」

「あれじゃねえよ。お前こんな朝早くに何してんだ？」

なんか抱きしめられるような形で、朝だからか小声で誰かに囁かれていた。

どうやらサイトが起きて、倒れそうになつた俺を支えてくれたらしい。

「……離して貰つてもいいですか？」

「ん？ああ、すまねえ」

俺はありがとつと返しつつ、彼の腕から離れた。

……野郎に抱きしめられる趣味は無い。

「何してるかって、洗濯しに行くんですよ。昨日寝る前に言われてましたし」

「こんな朝早くにか？外まだ暗いだろ？」

「……手洗いだと、今からやってちょうどなんですよ」

洗剤があるのか不明だが、もしなかったら更に時間がかかりそう
だ。

そう言う訳で、俺っちは早めに行きたいんだから邪魔すんなよ。
俺はもう一回身体強化をかけ、籠を持ち上げて、ドアへと足を向
けた。

「・・・サイトさん、ドア開けてもらえますか？」

「え？あ、ああ　ガチャ　ほら」

「どうもです。あ、そうそう、日の出までは恐らく外の感じからす
ると、後1時間はありますから、寝て待っていてくれても良いです
よ？」

「いや、藁の上で寝た所為か身体が痛くて二度寝って感じじゃねえ
から起きてるわ」

「そうですね、まあそれなら良いですけど・・・」

ココで俺はふと“とある事”を考え付いたので、内心悪戯一杯で
笑いつつサイトにこう言った。

「まだ寝てるからって、マスターに悪戯したらダメですよ？」

「！！　　するか！んなこと！」

「しー、大声出したらダメですって、マスターが目を覚ましますよ
？」

「うッ、」

俺がそう言う口と口に手を当てて黙り、ルイズ嬢の方を向いて様子
をうかがうサイト。

幸いなことに、ルイズ嬢はまだ夢の中の様である。

なんか「クックベリーパイ」がどうとかこうとか言ってるがスル
ーする事にした。

「クスクス、それじゃあ行つてきます」

「・・・お前性格悪いだろ？」

「いえいえ、単なる子供の悪戯心つてヤツですから、お気になさらずに」

「その口調で言われても説得力が無いぞ」

「どうやら少し拗ねてしまつたらしい。

子供だなあと生温かいめで見つつ、俺は籠をもってこの場を後にした。

ふう、しかしまた精神が不安定だな・・・。

エネルギー過多の影響速くとれてくれないだろうか？

さて、俺は昨日教わつた洗濯場へとやってきた。

流石にまだ馴れていない広い学院、すこしだけ迷いかけたぜ。

「桶と洗い板はあるんだろうか？」

『まさかの手洗いk t k r』

「いや、ソレはマジで勘弁してほしい」

というか、既にやっている第一使用人の方発見。メイドさん達だ。

洗い方は・・・あー、マジで手洗いツスカ・・・。

いやいや、もしかしたら絹織物とかで、丁寧に洗わないとダメなだけなのかも知れない。

とりあえず、沢山ある桶の内どの桶なら使つていいのか聞かないとな。

「あの、すみません」

「はい、なんで」

こんな朝早くに水とか冷たいだろうにと思いつつ、複数いたメイドさん達の内、すぐ手前に居たメイドのお姉さんに話しかける。
おろ？良く見たらココでは俺とサイト以外では珍しい黒髪・・・
シエスタさんじゃねえか。

でも何故か振り返ったままの形で固まってらっしやる・・・？

「あ、あのう？」

「は、はい！なんででしょうか貴族さま！」

Why? 貴族？

「貴族？誰が？」

「え！？いや、その・・・アナタの事ですが」

いつつみー?? いやいやいや、あたしゃそんな身分の人間じゃねえよ。

序でに言っと人間ですらねえよ・・・って、自分で言ってる鬱になりそう。

「もし、もし！大丈夫ですか?!」

「え？いや、大丈夫です」

「そうですか、それは良かったです。所でこんな時間に貴族さまが何のご用でしょうか？」

なんかスゲエ萎縮されてるなオイ。

この世界における貴族って、そんなに偉いもんなんだ。

・・・訂正しておこう。

下手にそのままにしていると、貴族を騙ったとか言われたら不味

い。

「あの、自分は貴族ではありません。どちらかと言えば平民なんですが……」

「……へ？」「」

俺がそう言うと、目を皿のようにしたメイドさん達が居た。いやウソじゃねえよ？

俺ん家は確かに軍の高官の家ではあったが、元々は軍人じゃ無い家系だし、俺自身そんな貴族の称号を貰う様な事はして無いだろうから、現在は元軍人の傭兵みたいな立ち位置だ。

そう言った意味じゃ、俺はこの世界では魔法が使える平民という事になる。

「ですから、敬語じゃなくていいです。自分年下ですから……」

そうは言ったものの、どうやら俺の事は既に貴族という風に捉えられていたらしい。

ただ遠目から見る様な視線しか帰って来なかった。

「……はあ、この桶借りて行きますね？洗濯に使わせてもらいます」

俺はその反応に少しばかり寂しさを覚えつつ、近くに立てかけてあった桶を手を取った。

水は井戸から汲むのか……少しばかり骨が掛かるなあ。

とりあえず彼女等の視線が痛く感じたので、その場から離れようとした。

……のだが

「ま、まっつてくだ・・・待って！」
「？」

何故か呼び止められた。黒髪さんだから・・・シエスタさんだっけか？

あ、やっぱり勝手に持って行って使っちゃダメか。

「あー、桶なら返し」本当に、貴方貴族じゃないの？」 自分はココに来てからは一度も自分から貴族だなんて言った覚えは無いよ？」

一体どこのどいつが俺の事を貴族だなんて言ったんだろうな？人間の情報網の内、人伝手で伝わる情報ほど変化しやすいモンはないだろう。

案外、只の噂から派生したのかね？

「で、でも魔法が使えると・・・」

「こちらには平民で魔法が使える人間はいないのですか？」

「・・・あ」

「まあ、そう言う事です。自分はこちらでは何の身分も無い。という事は平民と変わらないと言う事です。解りましたか？」

どうやら桶の事では無さそうなので、俺は桶をもって井戸の所に歩いていく。

・・・縄でくみ取るタイプか、コレ重たい上に効率悪いんだよね。

「よっ・・・ほっ！」

俺は縄を手に持ち、ゆっくりとだが確実に水をくみ上げて行く。

うーん、七歳児の身体と体重じゃくみ取るのも一苦労だぜ。
一応身体強化してても、体重は増えないからなあ・・・引つ張られそうになる。

「ふうふう・・・けほけほ」

ち、まだ気管の調子が悪いぜ。

ちょっと動いただけで、肺炎の時の息苦しさがなくなりやがる。
咳は余程じゃない限りセーブできるけど、辛いなオイ。

「ケホ　　グイ　　??」

あれ？なんか縄にかかる負担が減った？何でだ？

「手伝いますね？」

「え？あ・・・どうも」

縄が軽くなったのは、誰かが手伝ってくれたから。

そして手伝ってくれたのは、シエスタさんとその他メイドさん達だ。

これはまたどういう風の吹き廻し何だろうか？

考えても解らないので、井戸から水を引き上げて桶に入れようとした。

「もしかして、洗い物をする水をくみ上げようか？」

「?・・・そうですが」

「それだったら、あちらにある噴水を使えば楽だったのに」
「え？」

そう言われ、指さされた方を見ると・・・。

ライオンの顔をした噴水みたいなモノから水が

「お、俺の苦勞って一体？」

ちよつとリアルにテンションが下がって落ち込んだ。

でも何故かその様子を見ていたメイドさん達の表情が、どこか微笑まじげな感じに変わったのが解った。あれ？オイラなんかしましたか？

「・・・ふふ」

「・・・なはは」

誰かが噴いたのを皮切りにして、ちよつとした笑いの輪が広がって行く。

ソレは段々大きくなり、気が付けば爆笑とまでは行かなくても全員が笑っていた。

俺も何だがおかしくて、一緒になって笑っていたのであった。

「へえ、召喚されたのは本当なんだ？」

「ああ、何故だかしらないけど、気が付けばココに居た」

「親元を離れて一人なのかい？可哀そうに・・・」

「平気、両親はもうとっくに居ない・・・」

「あ、ごめんよ？」

「もうーシアちゃんったらー、フェン君が困ってるじゃないの」

「うう、ごめんよフェン君」

「あ、いえ。シアさん、俺全然平気だから、本当に大丈夫」

「フェン君はいいこだねー」

どうだ見てくれ、この和気あいあい感をさ。凄く仲良くなれたぜ！
あの後打ち解けた俺とメイドさん達は、色々とお話しをして更に
解りあえたのである。

俺が敬語を外したのも、敬語で話されると何かくすぐつたいと言
われたからだ。

「でも、だとしても災難だったわね？フェン君」

「（ボソ）いや、実は案外慣れっこなんだ」

「うん？何か言った？」

「何でもない、シエスタさん」

「もう、私の事はシエスタって呼び捨てで良いって言ったわよ？」

「いや、一応女性なので、そのう」

「あやや、フェン君は初心なんですネー」

「おいおいキノよ。7歳の子供に何を求めてるんだよ？」

俺もぜひそこら辺を小1時間ほど問い詰め（ry

ちなみに今この場に居らっしゃるのは、シエスタさんという黒髪
おかつぱメイドさんと、シアさんって言う赤い長髪のおねいさん系
メイドさんと、キノさんというなんかかなり小柄なブロンドの髪を
したメイドさんの三人だ。

ほかにも居ただけど、シートだとかをたたみに行ったので、今
この場にはいない。

『（皆さん元気があって良い人たちですねえ）』

「（だな）」

ヴィズも彼女等と俺との会話を見ていて、彼女等の人柄を気にい
った様だった。

「はは、別に隠す必要は無いんだろうけど、なんとなく普段の癖で隠しちゃうんだよな。」

「はい、下着の方は洗い終えたわ」

「すまねえ、流石に女性物は男の俺がするのはちよっとね」

「だけどシエスタがやってくれなけりゃ、お前さん自分でやってた
だろう？」

「ええ、マスターに怒られますからね」

一応、契約をしている相手だからな。

雇用主は怒らせない方がいいと俺は思うぜ。

「マスターっていうと、ミス・ヴァリエールの事？」

「そうだが？彼女が何か？」

「ふへえ、確かに人間の使い魔が召喚されたとか聞いてたけど、まさかあの娘がねえ？」

「シアちゃーん？誰かに聞かれたら不味いわよー？」

「こんな朝早くに出歩く貴族さまはいねえよ。教員連中も含めて、メイジは皆夢ん中さ」

「あ、でも約一名よく朝見かけるわね・・・えーと、名前はコッパゲだったかしら？」

「それ本人に聞かれたら最後、猛火の如く怒るだろうね」

女性が三人も揃えばおしゃべりが途切れるなんてことは起きない。

お陰で俺もちよっとそのパワーに圧倒されていた。

だが、結構有益な情報も聞けた。

やはり、この世界の貴族に対し平民はあまり良い感情を持ってはいない。

ほかに貴族はもれなくメイジであるが、平民の中にも没落貴族

のメイジとかがいる。

さらには、この学院の中での噂話から有益情報までよりどりみどりであった。

ちなみ俺の事は、最初は異国から召喚された貴族メイジという噂だったらしい。

なんでも俺が現れた時に、最初はマントを纏っていたからだそう

だ。
ソレを見た貴族の誰かが、お喋りの中の話題で話し、ソレを近くで聞いたメイドが学院に広めたらしい。

流石に偽証罪とか言われたくは無いので、ココに居らっしゃる彼女等に即刻自分は貴族では無いという噂を流してもらえる事になった。

全く、危ない危ない　　っと、そろそろ戻らんと不味いな。

「それじゃあ、シエスタ、シアさん、キノさん、俺そろそろ戻ります」

「うん、じゃあこの洗濯ものは一緒に乾かしておくわ」

「メイジなのに色々と話せて面白かったよフェン君」

「いつでもって訳にはいかないけどー、またお話しましょうねー？」

「ええ、こちらとしても是非ともお願いしますね？それでは」

そして俺は彼女たちの元を離れ、女子寮へと向かって歩き出した。ちゃんと誠意をもって対応すれば、みんなちゃんと応えてくれる。ココの人達は結構素直な人が多いって事が解っただけでも収穫だな。

【・・・ふわあ、おはようございます。あるじどのー】

「おろっ？ようやくお目覚めかい眠り姫さま」

どうやらリンが目覚めたらしいが、どうやら寝ぼけているらしい。なんとなくだが、俺の中で瞼をコシコシしている様子が手に取るように解るぜ。

【えへへーリンはおひめさまー】

『ダメだコイツ、まだ寝ぼけてやがる』

「まあまあ、普段はまだ寝てる時間なんだからさ」

リンは何時もは夜9時には眠って、朝の7時台までは起きないという、何とも健康な子供の生活習慣が身についていらっしやる。彼女がとても素直な良い子なのも、そこら辺の生活態度から来ているのかもしれないな。

とりあえず、まだ寝ぼけているリンと先ほどのメイドさん達との会話の事をネタにするヴィズと、お話しをしながら、ルイズとサイトがいる部屋へ向かったのであった。

「メイドさん達との語らい」(後書き)

*あれ？話しが進まねえや。

「動物王国・・・か？」

「動物王国・・・か？」

妄想戦記

さて、一応洗濯は終わっているので、部屋へと戻った俺。
イスに座って結局2度寝していたサイトは放置し、
そろそろ時間だと思つのでルイズ嬢を起すことにした。

「おはようございます。マスター」

「うう〜ん・・・へ？あんだだれ？」

寝ぼけてるなア…アリサと同じ声だから面映い感じだ。

「マスターが召喚したフェンです。お忘れですか？早くしないと朝食に遅れます。お急ぎを」

「じゃあ着替えを」

「宜しいのですか？確かに貴族の方は平民の前では自分でお着替えをなさらない事は存じております。ですが、分別のある貴族のご令嬢が平民とはいえ男性の前で肌を晒す事はあまり良いことでは無いかと存知ますが？」

「わ、わかつたわよ。自分で着替えるから・・・」

別に着せてやっても俺は身体がガキだから何も感じない。
だが、現在俺のデバイス2体から速く外に出ると催促の念話が届いている。

やっぱ女性人格だからだろうねえ。

とりあえず、場所は把握済みだった服を俺は手渡しておいた。下着？ソレは流石に……。

「あ、ありがとう」

「いえいえ、私はマスターの従者です故」

一応雇われの身、雇われたからにはキッチンと仕事はさせてもらうさ。

信用第一ですハイ。

「……ん？あれ？俺」

「サイトさん、起きましたか？それじゃ外に行きましょう」

「へ？なんで」

「痴漢と言われたいのでしたら別ですけど……」

どうやら2度寝から目覚めたらしいサイトが、のそりと動いたので、俺はそう声をかけた。

目覚めたばかりで状況が理解できて居なかった様だが、後ろを指さしたので納得したようだ。

「それでは、何かありましたらお呼びください」

「ええ、解ったわ」

んで、そのまま部屋の外に出させてもらう。

ふう、これを毎回せにゃならんのか？面倒臭いかもしれないな。

というか、ちょっとやり過ぎか？俺的にはちょっと楽しいんだけど……。

『(まさかのブラウニー宣言)』

【主殿は仕えるのが好きなんですわ〜】

いや、別にそんな訳でもないんだが

「なあフェン、体調は平気なのか？」

「ん？ああ、まあ昨日よりはマシですね」

「そつか・・・今朝は驚いたぜ？目が覚めたと思ったらいきなりふらついてるんだモンな」

「あはは、それは失礼しました。でも助けてもらった事には礼を言います」

「いいよ、お前の方が小さいんだしさ。何かあったら言ってくれよ」

・・・まあ見た目7歳だからな。

子供を不安がらせまいとする彼なりの配慮つてとこか。

「大丈夫ですよサイトさん。自分も何かあったら相談に乗りますから」

「おう、解った。ところでお前ホントスゲエな？良くあんな事出来るもんだ」

「あんな事？」

「朝の一連の動き、お前まるで執事みたいだったぞ？」

マジスか？と目で言ったら、マジです。と目で返された。

おおっ、こやつやりおるわい。なかなか解ってるじゃないか。

とりあえずこの後も適当に雑談してたんだが、突然お向かいの扉が開いた。

「あら、貴方たち。ここは女子寮よ？男子は入ったらいけませんわ」

そこには見事な双球が・・・人類の半分が望む夢と希望が見えた。

そう、シグ姉さんに勝るとも劣らない、さりとして決して垂れるなんてことは無い。

まさにみずみずしい果実の様な二つの球体が、すぐ目の前にあったのだ。

もつとも、俺はシグ姉さんに馴れているので、あまりどうにも感じ無かった。

あの人、最初の頃は結構無頓着だったからなあ・・・。

「ってなんだ、ルイズが召喚した平民の使い魔くんたちね？」

俺は書類上であるが、まあそうだな。

一応ここは頷いておくことにした。

「やっぱり、ねえ貴方たちのお名前は？」

「え、俺は平賀才人」

「フエンです」

お隣さんはちょっと返事にタイムラグがあった。

まあ気持ちは解らないでもない、目の前に夢と希望が詰まった双子山があればねえ？

でも、その鼻の下をのばしたツラは気色悪いから、正直止めて欲

しい。

「フェンにヒラガサイト？変な名前ね」

「……初対面の人間の名前を変と呼ぶとは、かなりの大物か、それともバカなのか。」

まあ彼女の持つ雰囲気やたまたまいから察するに、後者の線は低そうである。

目の前のグラマラスな女性は、ふわつと髪を揺らすと自己紹介をしてくれた。

「私の名前はキュルケ。二つ名は“微熱”よ。そしてこっちが私の使い魔」

「うお！何これ？トカゲか？」

“キュルキュル”という音がしたので視線を落とすと、そこには燃えるような鱗をもったサラマンダーがいた。尻尾の先から炎が吹き出ているように見える文字通り“火トカゲ”である。

ふーん、次元世界にはこんな生き物もいたのか……目が猫みたい……。

「サラマンダー、火トカゲのフレイムよ……そちらの小さい使い魔君は驚かないのね？」

「……触って見てもいいですか？」

「お、おいフェン」

なんか、スゲエつぶらな瞳が可愛らしい。

トカゲ系もそれはソレでありかな……。

「あら珍しい。普通は怖がるものなのにね。いいわ、優しく撫でて

あげてね？」

キュルケさんからOKが出たので、心配そうな顔をしているサイトを尻目に俺は屈み込む。

サラマンダーのフレイムは、俺の方を見て首をかしげていた。

「……………さあ逝くぞ？心構えは十全か？」

「よしよし」 ナデナデ

撫でる、撫でる……………ひたすら撫でる。

ソレはやわ肌を触るかのようにソツと、そして時に大胆に撫でまわしてやる。

「きゅん！きゅるきゅる」

どうやら気持ち良いらしく、ヌコの様に目を細め始めた。

あんかてんしょんあがってきたー！きらめけ俺のごっとはんど！

「なでなでなで」

「……………ふしゅう、きゅー」

喉から背中にも手を回し、優しく愛撫して、更にそつと腋腹を押してやる。

俺の意図を察したのか、フレイムはゴロンと横になったので、俺は更に腹も撫でまわしてやる。

もうフレイムの表情がトロンとしたもの変わったのをみて、俺は撫でるのを止めた。

ちよつと名残惜しそうなフレイムであったが、そろそろルイズ嬢が出て来そうな気配を感じるのでこれで勘弁してくれ。

「フ、フレイルムが私以外にお腹を見せたなんて・・・」
「へえ、案外可愛いなコイツ」

なんかご主人がショックを受けていらっしやるようだが、スルーを使用した。

尚、フレイルムからのアイコンタクトにより、後でまた撫でるの予約入りました。

「生き物はいいいです。素直で本当に可愛い」

「ふふ、そうね」

ありゃ？なんかすごく微笑ましいモノを見る様な視線？

「そんな風に笑うのね？貴方」

「ふえ？」

どうやらフレイルムを撫でている間に口角が上がっていたらしい。

そりゃ子供がニコニコしながら生き物を撫でているのって凄く微笑ましいですね。

なんか足元にフレイルムがすり寄ってきた。おいおい、お前のご主人はあつちだよ。

「あら、フレイルムまで・・・ヴァリエールのところにおいておくのもつたいないわね。ねえ、貴方私の方に来ない？フレイルムと相性も良いみたいだし」

「え？い、いや　だめです」

「ヴァリエールの所よりも待遇は良くするけど？」

「・・・自分は既に現マスターと契約しています。ソレをたがえる様な真似はしません」

約束をしたからには守るのは、当たり前前の行動だ。
既にルイズ嬢とは従者契約を結んでるんだから、後から急に変わるなんてしない。

というかサイト、なんで羨ましい的な視線を送る？

『（ですが、彼女の胸元に一瞬ぐらついたマスターがいる！）』

「（じよ、冗談はよせ！）」

【……でーた改偏して大きくなるう】

「（り、リンはそのままでも十分可愛いから！というか恥ずかしいからヤメレ）」

全くコイツらまで……冗談じゃねえぞ？

「ねえ本当にだめ？」

「ダメです」

「本当に？」

「ダ、ダメです」

「でもでも本当は？」

「な、なんで近づいてくるんですか?!」

「あら、別に良いじゃない」

おいおい、まさかこのヒトシヨタのケでもあるんかいな？
だとしたら色んな意味でお断り何ですけど？

俺は助けてとサイトに視線を送るが、あの野郎無視しやがった。
おまけに何？“羨ましいぞ魂畜生”だと視線で返された？
だったら変わってくれ！頼むから！

「お給金も沢山上げるわよ？」

壁際に追い詰められて、ちょっとマジで助けて欲しい俺。

そしてその祈りが届いたのか、今ココに救いの

「ナニやってんの！貴方たち！！よりもよってツエルプストーンなんかと会話してー！」

怒髪天を突いた阿修羅さまが現れました。

何やら怒っている様子、なんだ？このヒトと仲悪いのか？

「あらルイズ、今日もこじんまりしてますわね？」

「ふん、大きいだけの癖にナニを言ってるんだか」

この後口論になっただけだったが、ルイズ嬢は軽くあしらわれていた。どうもあのキュルケさんとルイズ嬢は先祖代々からの仇敵であり、お互いの結婚相手を寝とったり寝とられたりされていたらしい。だったら何で同じ学校に来てんだよと思うのだが、そこら辺は夕ツチしてはいけない様だ。

尚、キュルケさんが俺を勧誘したのは、優秀な人材の様である俺を引き抜こうとしたとの事。

所謂ヘッドハンティングの様な事だったって訳だ。

……ちょっとだけドキドキした俺がバカみたい。

そして俺はその事を咎められ、何故か飯抜きにされた。理不尽だと思っ。

「フラフラ」

「主殿、お腹すきましたあ」

「我慢じゃ」

『まあソレもこれも、マスターが色目にうつつを抜かした所為ですけど』

「……何とも申し開きの言葉もありません」

はい、現在飯抜きの為食堂から離れております。

なんかアルヴィーズの食堂とか色々と由来があるそうだけども。

中の空気は今の空腹の身体には毒でしかない。

なので外の空気を吸うと言って逃げて来た。

「……そう言えば他の使い魔達は何を食べているんだろうか？」

ふと気になったこの疑問、空腹を紛らわそうと思ひ色々と考えていたら思い付いた。

そう言えば使い魔の飯ってどこで食べさせてんだらうか？

あわよくば……いやいや、ソレは人としてダメだらう。

「木の実でも探しに行くか？いや、異世界だからどんなモノが食えるか解らない」

「うう、リンはもうお腹が空いてフラフラですう」

「ユニゾンしても腹は減るモノなあ」

フラフラと元気なさげに浮遊しているリン。現在ユニゾンアウトしている状態だ。

俺の中になると、俺の空腹の感覚がプラスされて、空腹感が2倍になるらしい。

だから流石に耐えられないからユニゾンアウトさせたのである。
痛みはめっぽう平気なのに、空腹はダメだとかねえ？

「ん？アレは・・・」

「あ、さっきのトカゲさんですう」

見ればフレイルムと言う名のサラマンダーがこちらに寄って来ていた。

俺のそばによると、何故か袖をぐいぐいと引っ張ってくる。

『なんか付いて来いって言ってるみたいですね』

「付いて行ってみるか？」

この仕草は犬っぽいなとか考えつつ、フレイルムに引っ張られるままに、彼の後を付いていく。

連れて来られたのは、なんか厩舎っぽい感じがする何か。周りには沢山の生き物が集まっている。

見た事あるヤツから、なんじゃこりゃというヤツまでよりどりみどりで。

ああ、ここは使い魔達にご飯を上げる所なのか。

「すまんフレイルム、俺達は一応人間だからさ？」

「きゆるきゆる」

流石に使い魔に与えられる飯を貰うほど落ちぶれちゃいない。

武士は喰わねどなんとやらってヤツだ。俺の言いたい事が解ったのか、ちよっとシユンとしたモノの、気にすんなって感じで鳴くフレイルム・・・可愛いな。

撫でてやると嬉しそうにキュルキュルいうところが何とも。

「も、もうだめですう」

「……俺はともかく、この子にご飯を上げないと可愛そうだな」
『この近くの森の中に動体反応なら有りますが?』

狩りに行くか? いや、狩りに出ている間にルイズ嬢の食事は終わるだろう。

可哀そうだが、リンには少しばかり我慢してもらうしかあるまい。幸い魔力さえあれば、俺達は死なないからな……精神的に辛いけど。

「ぴーぴー!」「わん!」「にゃー!」「ぐるる……」「ぶほ」
「ん? なんなんさ?」

さて、フレイムを撫でていたら、何故か使い魔達に囲まれた。何? 俺なんかしたか? とか思っていたら……。

「ふえ!?! な、何ですかこの大きな目?!」
「バクベアーか、別に危害を加える様な感じじゃなさそうだな」

なんかじーっと目玉に見られてたりする。
バクベアーだけでなく、複数の使い魔達の視線が俺らに集中していた。

その視線の先は フレイム?

「もしかして」

とりあえず、空いていた片手をすぐ近くにいたフクロウに伸ばしてみる。

別段嫌がる様子もない、なのでそのまま触れてみた。

「……ほうー」

「へえ、トリは初めてだけど、やっぱりくちばし周辺かな？」

トリさんが気持ちよさそうにしています。

しばらく撫でていたら、自分からすり寄ってきましたよ？

なにこの可愛い生き物？動物王国ばんじゃい。

「っておい！コラ！一斉に来られてもダメだってば！」

んで、ソレを皮切りに何故か一斉に俺に覆いかぶさる使い魔達。

中にはデカイのも居て、お、おもい〜！って感じだった。

フレイムは俺の上に覆いかぶさる連中に、ブホブホと息を上げて抗議している様に見える。

だが、その他は聞いちゃいねえ。

「っ！なら皆撫でてやる！だからきちんと並べ！」

俺がそう言うと、使い魔やっているだけあり人間の言葉が解るの
だろう。

俺に覆いかぶさっていた連中は一瞬で一列になっていた。

『……相変わらず動物キラーなゴツトハンツですね』

「フレイムの様子で、つたわっちゃったんでしょね。主殿のナデ
ナデは気持ちいいですから」

「まあ、どうせ空腹を紛らわせてもらうなら、少しくらい役得して
もいいか」

俺はやってくる生き物達を撫でつつも、モフモフしたヤツに類ず
りしてたりした。

中でも最高のモフモフは、大きなモグラさん出会ったことをここ

に記しておく。

ちなみにお礼のつもりなのか、果物とか分けてもらえた事には心の中でちよっと泣いた。

「はは、人間の食べる物は無いか」

「色々ありますけど、動物用のヤツはあまり口にしない方がいいかと思うですう」

食べはしないけど、捨てるのもアレなので、とりあえず脇に置いておいた。

だが、その時いきなり辺りが暗くなり、ばさばさと羽根音が聞こえてきた。

「きゅいきゅい〜！」

・・・序でにイルカみたいな声も聞こえてきた。

音源は上からだったので、俺は空を見上げてみる。

「おおっ」

『これはまた立派な竜ですね』

そこに居たのは、蒼いうろこが眩しいクリクリとした目をした大きなドラゴン。

アレだけの大きさをどうやって飛ばしてるのかと思ったが、どうやら自然界に流れる魔力を使っているようで、魔力素子が羽根付近に集まって行くのを感じた。

成程、この世界の生き物の中には、魔力を利用出来る種が普通にいるのか。

考えてみれば先のバクベアーもそう言った類の生き物だしな。

次元世界にいた竜種も、空を飛ぶ際には魔力を噴き出して浮かんでた種もいたしな。

「なんか御用か？ドラゴンさん」

「きゅいきゅい」

こちらを好奇心たつぷりの目で見つめてくるドラゴンさん。

竜の言葉は解らんのだが、俺は降り立つ竜に話しかけた事を不思議に思いながら、

すぐ近くの芝生に竜が降り立つのを眺めつつそう思った。

尚、この後このドラゴンの主が来た際、ドラゴンはどこか恍惚としていたらしい。

主は一体何があったのか聞き出そうとしたが、使い魔はタダ気持ちよかったとしか答えなかったので、余計に頭を傾ける事しかできなかった。

一方のフェンは鱗って意外とやわらかいんだなという感想を漏らしていたそう。

「錬金・・・ほ、ほしい」

「錬金・・・ほ、ほしい」

妄想戦記

さて、食事を抜かれてフラフラの俺は、そのままルイズ嬢に連れられて教室へと連れて来られた。

リンはもう空腹感は嫌なので、自分に睡眠魔法をかけて眠ってしまい。現在俺の中だ。

サイトが少ない食事の中から、パンを半分持って来てくれたことに全俺が泣いたぜ。

もっとも、俺は泣けないからありがとうと言うしか無かったのだが、笑っていいよと返された。

うーん、やはりガキ扱いか・・・なんじゃかなあ。

「いい？アンタ達ちゃんと大人しくしてるのよ？」

と、ルイズ嬢が言うモノの、既に俺達の存在がいるだけで、この場にはイレギュラーである事が解らないのだろうか？周りからは指ささまでしているヤツもいる。

おいおい、本当にコイツら貴族か？どちらかと言えばハイスクー

ルのガキと全然変わらんぞ？

「了解」

「へいへい」

とりあえず返事は返して置いたが、すごぶる居心地が悪い。

その中に座つてるとか、どれだけ考えなしなんだかねえ？

尚、此方に手を振って来たキュルケさんに手を振り返したら、何故か殺気らしきモノが来る。

どちらかと言えば嫉妬だが・・・まあ関係無いか。

『（使い魔さんたちも来てますね）』

「（皆うしろの方にいるな。俺達もそつちが良かったぜ）」

もうね、視線が痛いというか居心地最悪なんですよ。

帰っちゃだめですかって感じたが、生憎まだ帰れません。

なので、視線を我慢するしか無かったのであった。

さて、その視線に耐えながら待っていると、恐らく先生らしき女性が入ってきた。

これぞまさしく魔法使いという見本のように、杖とローブ姿というオーソドックスな姿である。

中年女性特有のふくよかさも手伝って、まさに“魔女”という言葉葉が似合う事だろう。

「（ヴィズ、メモリの許す限り、授業内容を撮影しておいてくれ、この世界の魔法に興味がある）」

『（了解）』

とりあえず録画の準備をしておいた。

一応未知の世界の魔法な訳ですから、気になるんだよね。

それなりに面白い感じだったら、誰かから蒐集しちまおうウン。

「皆さん、春の使い魔召喚は大成功のようですね。このシュヴルーズ、こうやって春の新学期に、様々な使い魔を見るのが楽しみなのですよ」

中年魔法使いシュヴルーズはそう言うので教室を見回した。

その姿は中々堂に入っている。先生というのも似合う様だ。

そして彼女の視線は、何故か俺たちのところで視線を止まった。

あ、なんかいやな予感

「おやおや。変わった使い魔を召喚したんですね。ミス・ヴァリエール」

その言葉と共に、周りの雰囲気が一斉に嘲笑づいたモノへと変わる。

クスクス笑いが俺達に向けられていた。何コレ、イジメってヤツなのか？

正直どう対応したものかと思っていると、前列の方にいた太つちよの貴族立ち上がった。

この場を修めてくれるのかなと思ったのだが、その考えはどうやら間違いだっただようた。

「おいおいゼロのルイズ、召喚できないからってそこら辺の平民を連れてくるなよ！」

あろうことか面と向かって、ルイズ嬢にそう言い放ったのである。むしろ陰口では無く、ストレートに言い放つとか勇者だなと逆に驚いたほどだ。

「そんな訳無いじゃない！コイツらが勝手に召喚されちゃっただけよ！」

「はん！“ゼロのルイズ”が召喚できた？どんな冗談だよソレ？」

「……」

ゼロと言われた途端、ルイズ嬢は俯いて拳が白くなるくらい握り締めている。

このゼロというのに何が含まれているのかは不明だが、恐らく悔しいのだろう。

そして悔しさが頭の中を駆け巡り、あのデブに返す言葉が出るのを阻害してしまっている。

頭に血が上っているのだ。というか止めるよ教員、今ココでいじめが起こってますよ？

「どうしたんだいゼロのルイズ？悔しくて言葉も出ないかい？まあ本当の事だモンな」

そうデブが言った途端、ルイズ嬢が更に眉間にしわを寄せた震える手で杖を握り始めている……不味いな。

『(マスター)』

「(身体強化オン、流石に見過ごせん)」

俺はスツと立ち上がり、身体強化をフルに使い跳び上るとデブの背後の机に着地する。

周りが驚いてアツと声を上げている間に、そのままそのデブの背後に廻り関節を決めた。

「ひいひい！お、お前貴族になにを！」

「黙れ豚野郎。それ以上のマスターへの侮辱は許しはせん」

「ぶ、豚野郎！？・・・いい」

7歳児に絞めあげられている15〜6歳くらいの少年という、シユールな場面が展開する。

スツとルイズ嬢の方を見れば、杖を握りしめるのをやめていた。

どうやら少し混乱したようだが、すぐに平静さを取り戻す辺り流石と言える。

「やめなさいフェン！」

「ですがこの者はマスターを侮辱しました。自分は従者としてしかるべき事をしたまでですが」

「・・・ダメよ。一々この程度に目くじらを立てていたら、貴族の名が泣くわ」

「仰せのままに、マイマスター。先生さん、授業を中断してすみません」

俺は少し芝居っぽくそう言いつつ、元の席に戻った。

先生さんは先程の一連に対しフリーズを起していたが、俺の言葉にハッとなった。

「え、ええ。ミスタ・マリコルヌ、貴族たるもの相手を中傷する発言は控えなさい！では授業を始めます」

どうやら流すことにしたらしいシュブルーズ先生、実に賢明な判断であるう。

これ以上何か言っても仕方が無いし、授業が中断されるだけである。

そこら辺の瞬間的な判断力があると言う事は、やはり勤労年数は長いとみた！

勤労年数〓独身年数とか考えてたら少し睨まれた・・・勘って侮れない。

さて、席に戻るとルイズ嬢が少し怒りを見せており、サイトには小突かれた。

「お前な、いきなりああいうのは良くないぞ？」

「だが効果はありました。他に何か方法でも？」

「う、いやだけど、ああいうのは良くない」

サイトはそう言つとイスに深く座り込んだ。

まあ暴力に訴え出たのがお気に召さなかったのかな？

「まったく、勝手にあんな事しないでちょうだい　でもありが

と」

「いえ、従者ですから」

ルイズ嬢には、すこし叱られたが、序でに感謝された。

まああのまま放つておいたら、いきなり魔法ぶつ放すつもりっぽかったしな。

流石に公爵令嬢だとはいえ、そんな事して相手に怪我させたら最悪退学であるう。

そう言う訳で俺が前にでて止めさせて貰った。
でも考えてみれば、俺は使い魔兼従者の立場何だよなあ。
……ちよつと軽率だったかな？

『（マスター、授業が始まります）』

「（ん、解った）」

とりあえず、授業の内容に耳を傾けることにした。

リンも起すことにした、魔法の解析をお願いしたいのだ。

お腹が空いてフラフラしている感じだったが、一応やってくれる
と了承してくれた。

さてさて、どんな魔法なのかね？

さて、授業内容だけ簡単に説明すると、錬金と呼ばれる授業であ
った。

ふと錬金と聞いて、背の低い某国家錬金術師の姿を思い浮かべた
俺は悪くないだろう。

まあ話がソレちまったので元に戻すぜ？錬金とは何か？まあ文字
通りだわな。

これがまたすさまじい魔法で、何と物質を別の物質へと変化させ
る事が出来るらしい。

科学なら、そういうったことは超高圧、超高温の環境でしか起こら
ないのだが……。

あのシュブルーズ先生は、真鍮を錬金して見せてくれたのである。

なんでもこの世界の魔法使いのレベルを表す言葉に、ドット、ライン、トライアングル、スクウェアと呼ばれる言葉が使われている。この世界の魔法は、オーソドックスな火、水、風、土の四属性を操る魔法であり、魔法使いにはそれぞれ得意な属性が存在する訳だが、その魔法を混ぜて使用出来る数を表しているらしい。そして錬金は土属性に属する魔法であり、魔法使いのレベルに応じて作れる金属が変わるらしく何とも便利な魔法である。

特に錬金、これがあれば、アンナ物やコンナ物とか色んなモノが作れるでは無いか。

「（ヴィズ、どうだ？）」

『（うーん、ダメですね。リンが解析したデータによると術式コピーは非常にデリケートです）』

【ココからじゃ距離があり過ぎます。せめて蒐集出来ればもっと解るんですけど・・・】

んで、現在色々入り用な俺としては、是非とも欲しい魔法であったのだが、

ルイズ嬢の近くであるこの席からでは遠すぎるので、細かな解析がちょっと出来ない。

かと言って、勝手に席を立って近場で解析するのもなあ。

後でルイズ嬢から蒐集させて貰おうかな？

「なあルイズ、トライアングルって何だ？」

「何？そんな事も知らないの？」

お隣ではルイズ嬢が授業を聞いていなかったサイトに講釈を垂れ

ている。

公爵令嬢が講釈・・・いや、何でもない、忘れてくれたまえ。

だが、とりあえず言おう　　今は授業中である。

「では実技を、そこでお喋りしているミス・ヴァリエール、お願いします」

当然、お喋りなんてしてたら先生に目をつけられるのである。

しかもココの教室は、良く大学にある様な階段の様に机が並べてあるタイプ。

教師の方からだど、生徒が何をしているのか一目瞭然なのだ。

だが先生がルイズ嬢を指名した途端、教室に戦慄が走った。な、何なんや一体!?

「せ、先生、今まで彼女と一緒に授業をしたことは？」

「今年度になってから初めてです。ですが彼女はとても勤勉家だと聞いています」

「危険です！止めてください！ルイズ！貴方も黙ってないで」

「やります！」

「ちよつと!？本気?!」

「良く言いましたミス・ヴァリエール。失敗を恐れていては何もできません」

とりあえずこの瞬間、周りの様子が一気に青ざめたので、何か嫌な予感がビンビンである。

見れば何人ががいそいそと机の下に隠れたりしているのが見て取れた。

『（な、なんかいきなり物々しい感じに・・・）』

「（こりゃ注意しておいた方が良くも知れない）」

リンにこの距離からではあまり意味は無いだろうが解析を行わせつつ、俺も周りの真似をして机の下にもぐることにした。なんかもう皆目が真剣である。

爆撃された塹壕にいた兵士とかが、なんか良く大体こんな目をしていたっけな。

っと、忘れてた。

「サイトさん、サイトさん、なんか周りの様子がおかしいです。机の下にもぐることをお勧めします」

「え？あー、ああ。解った」

俺に言われて周りの様子に気が付いたのだろう。

サイトも机の下にもぐり込み、身を隠していた。

そして、ルイズ嬢が先生に促されるままにタクトを石ころに向け、錬金が始まった。

見た感じ魔力の流れ自体に変な所は無い。

そう言えば、見てて解ったけど、こっちの魔法は外側の魔力を利用するんだな。

そこら辺も研究してみてえなあ。

「（リン、どうだ？）」

【現在のところ魔力のラインに異常は無いですう】

うーん、特に何かを感じる訳じゃないんだけど、何だろう胸がざわざわする。

とりあえず見ていて、錬金の対象にされた石が光を放ち始めた時にソレは起こった。

必要がある。

そうでもしないと爆発は起せないのだ。

「ケホっ…ちよつと失敗したみたいね」

そしてあえて言おう。俺も大分バケモンだが・・・ルイズ嬢、あんたもバケモンだ。

こんな事、俺でも無理だぞ・・・瞬間的な魔力量なんて、もう測定不可能だ。

・・・本当に、何者なんだ？

この後は、爆発で驚いた使い魔たちが騒いだり、サイトが吹き飛んでルイズ嬢に文句を言つて折檻されたり、気が付いたシユヴルーズが周りが止めたのを無視してやらせた事を棚に上げ、教室の修理を言い渡すなど色々あった。

そして俺達は皆で教室の修理を行っている。

しかし、プロテクションしておいてよかったわ。

教壇と前列の席以外殆ど壊れてない・・・いちいち直すのって面倒いからな。

さて、何故か俺達にやらせて机の上にお座りになっているルイズ嬢は無視し、俺とサイトは黙々と修復作業を行う。机類はサイトが運び、俺は細かなすすや汚れを宙を飛びながら拭きとって行った。

「ねえ、フェン・・・アンタなんかした？」
「何かとは？」

天井を拭いていると、ルイズ嬢が俺に話しかけて来た。
俺は逆さ吊りの様に逆さになると、彼女の目の前に行き問うた。

「だって、その・・・い、いつも被害少ないし・・・昨日あんたが見せた魔法でも使ったのになって」

ああ、そう言えば昨日の夜デモンストレーションがわりに見せてたっけ？

朝になってもう忘れてんのかなとか思ってたけど、覚えてらした様だ。

「答えはイエス。魔力の異常増大を確認したので防御魔法を張らせてもらいました」

「魔力？なにそれ？」

「ええつと、この世界では魔法を使う際には何かを消費しますか？」

「消費？・・・ああ精神力の事ねって、アンタ精神力の流れなんて解るの！？」

ふむ、この世界では魔力は精神力というのか。

とりあえず俺自身は解るんだが、普通は解らない筈だよな？

・・・いい加減コイツらの事を話さないのもアレだよな・・・
良し。

「それはコイツを使いました」

俺はそういうと、待機状態のヴィズを見せた。
待機状態のヴィズは、シンプルな何のデザインもされていない腕
輪である。

いつか時計っぽくする予定だ。っと話がずれた。

「なにソレ？腕輪？なにかのマジックアイテムなの？」

「ええ、そのようなモノです」

「お、なんだ？何話してんだお前ら？」

これからヴィズの説明をしようとしていたら、サイトもこちらに
寄って来た。

まあ自分だけ掃除させられてたらイヤだわな。

「アンタには関係ないわよ」

「まあまあ、少し休憩って事でちょっとお話ししましょう」

さつきから休憩なしで片付けしているのだ。

少しばかり休んでも問題はあるまいて。

「さて、これは我々の世界における魔法を補助する道具で、所謂魔
導師の杖の様なものです。我々はデバイスと呼んでいます。ヴィズ、
ごあいさつして」

『・・・初めましてと言うべきか、はたまたこんにちわと言うべき
か』

「いやどつちでもいい」「腕輪が喋った!？」「インテリジェントソ
ードみたいなの!？」「ええ、まあ相棒ですから」

驚いて声を上げているお二人さんを無視し、とりあえず話を進め
る事にした。

「我々の魔法は杖無しでも発動できるのですが、それを円滑に高速で行う為、術式を高速処理させる為の演算機構、疑似物質によるフレーム、術式記憶媒体、魔力コンデンサ、魔力チェンバー、余剰魔力排出兼排熱機構等で構成される、術者をサポートする為の道具なのです」

さて、この説明にはサイトとルイズ嬢、頭にはてなマークをだしていた。

コレでも大分砕いて説明したんだけど、まだ難しいか。本当ならドルバ・フリーヤーマン理論に基づいた基本設計理論というものがあるんだけど・・・まあ良いか。専門的過ぎて解らんだろうし、USNでしか使って無かったもんな。

「簡単に言えば喋って魔法が使える万能杖とでも考えてもらえれば良いです」

「ああ、成程」

なんだろう、ソレで納得されると説明した意味がない。ま、まあ良いさ。普通の魔導師も解らない話をしてもしようがないモン。

「そしてコイツが自分の相棒、強化装甲デバイス“ヴィーザフ”です」

『愛称はヴィズです。ルイズさん、サイトさん、今後は宜しく』

「う、ご丁寧にどうも」

「あんた何畏まってんのよ？」

腕輪に畏まる少年という珍しい光景を見させてもらったぜ。

「それと、自分のもう一人の相棒を紹介します」

「え？ソレもデバイスとかいうヤツなの？」

「ん？それらしいものは持って無さそうだけど？」

「まあ見れば解ります。ユニゾンアウト」

俺の身体が一瞬だけ光を放ち、ユニゾンを解除した状態へと戻る。

二人は眩しさに顔をそむけたがすぐに収まったのでこちらを見た途端、驚きの表情へと変わった。

サイトは純粹に珍しいモノを見る目、ルイズ嬢は羨望の視線だった。

「紹介します。ユニゾンデバイスである自分の相棒の」

「リンっていいいます！よろしくなのですう！」

ふわりとした黒髪を湛えたリインフォース・アナザータイプ通称リン。

食事を抜いているので、現在省エネモードを使用中。

なので今は身長が30センチ程度になっている為、ある意味妖精に見えるかも知れない。

「な、なんなのよ・・・使い魔持つてるんじゃない・・・」

「違います。彼女は使い魔ではありません」

「そうです！リンは主様と最後まで一緒に居る存在なのです」

「大事な自分の相棒で、そして家族なんです」

ヴィズは最古参で、リンはリンで妹の様な存在である。

家族と言っても差支えは無いのだ。

「・・・家族、か　良い相棒なのね。それに比べて私は」

「おい、何で俺を見るんだよ」

「……はあ」

「ちよつとー、その反応は結構傷つきますよルイズさん？」

ため息を付きながら額に手を当てると言う仕草は、人間が苦悩を抱えた際良くやる仕草だ。

ルイズ嬢はその動作を行い、現在苦悩中であると身体で表していた。

「大体なんでアンタが先に出てくんのよ！」

「う、うるせえ！俺だつて好きでこんなとこ来たんじゃないやねえ！大体呼び出したのはお前だろうが！」

「き、貴族に向かつてお前とかいうな！失礼な使い魔ね！」

「はいはい！済みませんでしたー！貴族相手なんてしたことがありますのでねー！」

ギヤースギヤースとケンカしているところ悪いんだが……。

傍から見ると痴話喧嘩にしか見えない事は教えた方が無難かしら？
というかサイト……ソレなんかガキっぽいよ？

「まあ、自分が先に出て来たとしても、使い魔契約はしませんでしたね」

「え？なんでよ？私が呼び出したのに……」

「……自分はケモノではありません。五感もあるし感情もある、家族を思いやれる心を持っています。簡単に言えば“人間”です。」

「人……間……」

「そう、人間なんですよ。だから自分は己の思うがままに生きるし、思うがままに行動します」

強制されかけたら、多分大暴れでもして逃げているだろうな。

まあIFの話だから、このシミュレーションに意味は無い。

唯の可能性の一つであったと適当に考えるのが無難だ。

「でも、帰る方法は不明何でしょうか？ だったら諦めて
「選択肢の一つとしてはありかもしれません。ですが自分は絶対に諦めないでしょう。家族の前から消える前に、自分は誓いました。それこそ自らの意思にしたがい、血反吐を吐こうが身体が朽ちかけようが、家族の元へと帰ります」

諦めるのは、もう本当に何もできないと解ったときだけである。幸い今回は次元の壁を突破出来るか否かが焦点である。

なので、ヴィズの強化が出来れば何とかなると俺は踏んでいる。

・・・例えそうでなくても、いきなり隷属せよと言われて、黙って従う様なことはしない。

帰る為の手段を得る為に動き回り、それを妨害する人間には・・・容赦なんてしない。

「だから今回はコレで良いんですよ。貴女はサイトさんを選び使い魔にしました。だからこそ自分という従者がここに居るのです。今はそれでいいじゃないですか」

そう言うと、まあ納得はしていないようだが、一応理解はした様だった。

サイトはサイトで、解った様に装い全然解っていない様であった。まあ仕方が無いだろうな。とりあえず教室の片づけを再開した俺達だった。

「ご主人さま、私めは貴女様を湛える歌を考えました！」

「いってごらんなさい?」

そしてその後、サイトが余計なことを言ってくれたので、また飯抜きにされた。

もうサイト殺しても良いだろうか? と、空腹な為変な思考がよぎった俺は悪くないと思う。

とりあえず空腹感に打ちのめされながら、サイトを一発殴ったのであった。

「錬金・・・ほ、ほしい」（後書き）

*見てくれよ・・・コレ、まだ異世界1日目なんだぜ？
話進まねえ〜！！

「傀儡兵！？いや、ゴーレムか！前編」(前書き)

長いので前後篇に分けたけど・・・やっぱり長居orz

「傀儡兵！？いや、ゴーレムか！前編」

「傀儡兵！？いや、ゴーレムか！前編」

妄想戦記

ああ、良い天気だ、何処までも続く青い空、聞こえてくる小鳥の
声、風のささやき。

そして

きゅぐるううう……

「「「は、はらへった」「」ですう」

空の下には、飢えた児童が約3名、流れる雲を眺めてたそがれて
いた。

サイトは一応本日初めて、俺達は今日二度目の断食である。

「これ、全部サイトさんの所為ですう」

「俺も・・・そう思う」
「・・・面目ねえ」

この会話で解るだろうが、俺の隣に居らっしゃるこのバカがルイズ嬢の魔法が使えない事をネタにして、バカにするようなことを言いおった。

たく、少しくらい空気嫁このKY野郎・・・あかん、腹が減ると思っておかしい。

「な、なんか・・・地面にパンが落ちてるですう」

「リン、それはパンや無い・・・只の石や」

不味い、朝飯食ってるサイトはともかく、こっちはそのあまりのパンだけだぞ？

幻覚が見え始めてる・・・これを突破したら楽になるんだが今が一番のピークか。

・・・ああ、空の雲がシュークリームに・・・翠屋の食べてえな。

「ん？あれは・・・フェン君、どうしたの？」

「あれえ〜？なんか誰かの声が聞こえますう」

「はは、俺ももうだめか、腹の減り過ぎで冥土さんがみえる・・・」

「・・・ん？ああ、シエスタ、今朝ぶり・・・そして、俺の墓は、綺麗な花畑に」

「ちよっと！死んじゃダメです！本当にどうしたんですか!？」

・・・幾ら不死身に近い肉体でも、空腹の辛さは精神が生きている限り死にそうになるのですよ。

そう、腹が減るのは生きてる証！

でも、もうダメや・・・

ぐきゆるるる

「え？もしかして、皆さんお腹が減ってるんですか？」

「減ってるも何も、朝飯抜きだし・・・」

「右に同じですう」

ああ、まだ力が出る間に狩りにでも行ってるんだった。

なんかもう空腹で歩く気も起きないぜ。

魔力さえあれば死なないし、もう少し時間がたてばピークも過ぎるから、そうすれば飯を取りにいけるけど、今は無理、動きたくないのだ。

「俺も朝飯はスープだけだった。ルイズのやろう何考えてんだか」

「昼飯抜かれたのはサイトさんの所為ですよ？」

「う・・・それは悪かったてば、許してくれって」

ウンニヤ許さねえ、喰いものの恨みつらみその他は恐ろしい事を身に刻んでやるうか？

俺がそんなある意味危険な思想を考えると知られたらどうなるかな？

それはさて置き、シエスタはサイトをじーっと見ている・・・あ、そうか。

「シエスタ、このオニイサンは平賀才人、自分と同じく召喚された正真正銘の平民さんだよ」

「あ、自己紹介して無かったっけ、フェンに紹介されたが俺は平賀才人。メイドさんのお名前は？」

「貴方が召喚された平民の方の・・・初めまして、シエスタと申します」

無難に挨拶が終わる、流石に育ちざかりのサイトも空腹のときは静かである。

もっとも、俺達の場合違う意味で静かになりそうだけど……死ねないから余計辛いぜ。

考えても見る？死ねない上、生体生理的機能が残っている身体って言うのは、死ななくても空腹をずっと抱えるって事なんだぜ？
こうなると、喰わねば肉体死なねど精神が死んでしまう……割と冗談抜きで。

「あの、まかないで良かったら、厨房で貰えますけど？」

「……ぜひお願いいたします」「ですう」

その時、シエスタから出された提案に、俺達は恥も外聞もなく飛び付いた。

人間空腹になると、正常な判断って出来ないねウン。

.....

.....

.....

「コラ美味しい、こりゃ美味しい」「シチューが胃袋にしみわたるうッ」

「はむはむはむはむ」

「お、おかわりはまだ有りますから……」

「……おかわり！」

「ペ、ペースが早い……」

さて、現在俺達はシエスタに案内されて、食堂に隣接している厨房へと赴いていた。

その料理長であるマルトー親方にシエスタが事情を説明してくれたので、飯にありついている。

賄いのシチューとは言うが、その実かなり美味しい。

ちなみに、この親方は貴族が嫌いという人種であるらしかった。

学院の噂を信じていたのか、最初は俺に対しどこかギスギスした空気を向けて来たのだ。

だが、その事に気付いたシエスタがマルトーさんを叱り、俺も礼儀正しく接した為、すぐにそれ程では無くなり、気さくな親父さんという感じに接してくれるようになった。

見た目が7歳児なので、それ程警戒心を持たなかったからだと思われる。

序でに言えばリンと二人（リンは子供ver）でハムハムコクコクと、ご飯を一生懸命咀嚼している姿が微笑まし過ぎたのかもしれない。

なんか納得いかないが、まあ仕方ないだろう。

「・・・ふう、ごちそうさまでしたあ」

「いやはや、なかなかのお手前で」

「スープだけじゃ足んねえよな。やっぱ」

シーハーとかはしないが、それなりに満腹感のあるお昼でございました。

ルイズ嬢の飯抜き命令？え？私はそんな事聞いていませんよ？

大体、俺の契約内容には衣食住の保証も含まれてんだからさ、それを違えてどうすんのさ。

「大鍋一杯のシチューを3人で平らげるなんて・・・」

なんか厨房にいた料理人の一人が驚愕してるけど、気にしない、気にしない。

さて、食わせてもらったからそのお礼に俺は皿洗い。

リンと才人はシエスタの配膳を手伝いに行く事になった。

食後のティータイムとか優雅だなあ、なんて言う贅沢！

お前らは貴族かつ！・・・つて貴族だったよな。

ふん！ブルジョワなんて羨ましくなんてねえぞ！ふん！

「それじゃ、この皿洗えばいいですか？」

「おう、ソレ位できるだろう。さすがに調理器具はこっちで洗うから心配すんな」

「了解です、パツパとやります」

んで、とりあえず流し台にある食べ終わりの皿を洗っていく事にした。

さすがに貴族の跡取りが通う学校だけあり、食器の類もシンプルながらも高級なのが使用されている。

ただ、全て陶器製みたいだから、重たい上に割れやすいのが欠点だろう。

さて、その後しばらく食器と格闘していた俺。

それなりの量があるので小さい身体故に洗うのが大変だ。

なんかこの世界に来て洗いのばっかしている様な気がしないでもない。

かなりの量を洗い終えたのだが、まだまだあるっぽく見える。

だが、幸いなことに、もう食事の時間は終わった様で、食堂で給仕をしていたメイドさんが、最後の食器の乗った台車を押して帰ってきた。

「はい、最後の貴族さまが食べ終わりました」

「はあ〜、毎度のこととはいえ、随分と残されたなオイ」

しかし、帰ってくる皿を見ると、随分と料理を残している為、非常に勿体無い。

「この連中は出された物はキッチンと頂くことをおしえないのかな？」

「まったくだ。あいつ等貴族の連中は自分の事しか考えねえんだ。」

うんうん、俺も実にそう思うよ。

「これだけ残すくらいなら、こっちに分けて欲しかったくらい……ん？自分声に出してる？」

「ん？ああ、勿体無いのあたりから口にてたぜ。」

隣をみると大きなお腹……もとい大きな身体のマルトーさんが立っていた。

どうやら独り言が口に出ていたらしい。

「この人たちは食事への感謝が不足していますね。一度サバイバル訓練を行う事をお勧めします。そうすれば、きっとどんな物だつてごちそうに見えてきますよ」

「ちげえねえな。ところで坊主、お前さん本当に貴族じゃないのか？」

って、またこの話蒸し返すんかい。
どうやら貴族の平民差別って言うのは、本当に根深い所にまで根があるみたいだ。

「・・・メイジではありませんよ？大体それは噂で広まった話です。
自分から貴族だなんて言った覚えは自分にはありません」

「ほづ？」

なんかマルトーさんが面白そうなモノを見る様な眼でコツチを見ている。

まあでも

「序でにいうなら、ここの腑抜け共と一緒にすんな　　ってこと
でしょうか？」

「ほおー、言うじゃねえか坊主！気に入ったぜ！」

いやさ、今まで静かに観察してたけど、ホンマに貴族かよココの
連中？

偉ぶる事が貴族の仕事と勘違いしてるんじゃないのかって位づぎ
かった。

「坊主じゃなくて、フェンっていう親から貰った名前があります」
「おお、そいつはすまねえな・・・良しフェンだな？覚えてぜ。
腹が減ったら言うてくれ、賄いでよければ幾らでも出してやるよ！」

それは願ってもない申し出だ。

これでまたルイズ嬢の癩癩で飯抜きにされたらかなわんしな。
栄養源を確保出来た事は喜ばしい事である。一々狩りに行くのも
大変だしな。

そして俺は皿洗いに戻る。実を言うとまだまだ洗いものはあるのだ。

一応やると言った手前、最後までやらせてもらうのが俺の流儀である。

汚れた皿を流し台に浸して、慎重に皿洗いを続ける俺だった。

S i d e リン

私は今、主殿から離れサイトさんと一緒にシエスタさんを手伝っているですう。

なんでも食後のお茶を楽しむ貴族さんに、ケーキやらを配るんだと言われました。

そのケーキがあまりにおいしそうだったので、少し欲しいなあというのを我慢して、給仕を行う事にしたのです。

「はい、食後のケーキですう！」

「あら、ありがと」

お家ではリニスねえさんのお手伝いも良くしていたので、配膳自体は難しくはありませんでした。

サイトさんがケーキが詰まれたトレイを運び、リンやシエスタさんや他のメイドさん達が、ケーキを配膳していきましたですう。

貴族さんも配った時の反応はまちまちで、待っていましたと言わんばかりにケーキを食べる貴族さん もいれば、目を向けただけで

すぐにお喋りに戻る貴族さんもいました。
中には何故かゾワッとする様な視線を送る変な貴族さんもいて、
なんか怖かったです。

「・・・ん？なんだこれ？」

そんな中、サイトさんが作業を止めて、急にしゃがみこみました。
起き上がった時に、手に何かを掴んでいたですう。

「サイトさん、どうしたんですかぁ？」

「ん？いやさ、なんか小壘を拾ったんだよ」

そして見せられるのは、蓋付きの小壘、中身はまだ入っている様
ですう。

ん？だけどほのかに漂うこの香り

「これきつと香水ですねえ」

リニスねえさんが偶に使っているのを見たことがあるですう。

ほんの少し付けるだけで、なんか取っても安心出来る匂いになる
んですよねえ。

「香水ねえ？一体誰のだろう？」

「私に聞かれても困るですう、貴族の誰かに聞いてみたらどうです
か？」

「それもそうだな。すいませ〜ん！落とし物なんだけど、これ誰のか
わかりますかぁ〜！？」

サイトさんは手に持った香水を掲げました。
すると、金髪の・・・ロールケーキみたいな髪の子が近づいてきましたですう。

・・・あの髪って邪魔にならないのかな？

「ちよつと、その香水みせてもらえる？」

「え？ああ、ほら」

そう言つてサイトさんが香水を見せると、どうやら香水は彼女の
だつたみたいです。

彼女はサイトさんから香水を受け取ると、そのまま去つて行くか
に見え。

「ギーシュ、これ落としましたでしょ？」

「モ、モンモランシー何を言つてるんだい？」

「おーやっぱりお前ら付き合つてんじゃないか！」

「へえ、そうなんだ」

「おいおい君たちアレはその」

「ギーシュさま・・・やっぱりモンモランシー先輩と・・・」

なんだか修羅場に入りましたみたいですう。

胸元を開いたシャツを着た男の子に、先程のロールケーキ頭の女
の子が近寄つたですう。

彼らはそこで問答し、その内容を聞いたその他が騒ぎたててい
ましたですう。

そしたら、後輩の女の子とか言つ子が泣きながらショックを受け
ていました。

えーと、こつ言つのはなんて言つてましたっけ？

確か“ちじょーのもつれ”とか言っんですよね。
ヴィズねえが言ってたから、多分微妙に違う気もするですけど。

「サイトさん、小壘渡しましたし、早く配膳終わらせましょう？」
「え、ああ分ったよリン」

なんかワインの瓶の中身をぶっかけられている少年を尻目に、私たちはその場を離れました。

そして私たちが配膳を終わらせいざ去ろうとしたその時でした。

「待ちたまえ！平民！君たちのお陰で二つの美しいバラ達が泣いてしまった！どうしてくれる？」

そこにはギ、ギ、ギツチョン？えーと……

「誰だお前？」

「本当は平民に名乗る名など持ち合わせていないが特別だ！僕はギ
ーシュ・ド・グラモン！」

そう！ギーシュさんですう！なんかそう呼ばれていた人が、私たちの前に立っていました。

ちなみに体中ワインでびしょぬれな上、頬が紅葉型に赤くなっているですう。

「なんだよ！落とし物拾って持ち主に返しただけじゃねえか！」

うん、うん、リンもその通りだと思っです。

良いぞサイトさん、もつとやれ・・・とヴィズねえなら言っ筈ですう。

「だとしても！気を利かせて後で渡す事くらい出来るだろう！平民
！」
「だあ〜！平民平民うるせえ！大体二股かけてたのはお前だろうが
！」

その通りです！本当に好きなら一人だけに絞らないといけないの
です！

ふせいじつなアイは痛い目を見るんだって、本にも書いてあるで
すう！

「どうやら口の利き方がなっていないみたいだな…平民」

「だからどうした？」

「平民を賤けるのも貴族の仕事だ！ヴェストリの広場に来い！決闘
してやる！」

・・・ええ！？と、とりあえず落ちつくですう。こう言つのは慌
てたら負けですう！

えーと、ちよつと今までの事を整理してみましよう。

- ・ サイトさんが香水を拾った。
- ・ 持ち主に返した。
- ・ それが元でケンカになる。
- ・ その騒ぎで二股がバレる。
- ・ ギーシュさんが小壘を拾ったサイトさんに文句をいう。
- ・ サイトさんと決闘　今ココですう。

どう考えても、ギーシュさんの自業自得な気がしますう。

「おもしれえ！ボッコボコにしてやんよ！」

つて！いきなりですかッ！？リンが頭を整理している間に何か大変な事になつて居るですう！

しかもサイトさん、私たちの事忘れて貴族さん達について逝っちゃいました！

この場合なんか誤字じゃない気がするですう！嫌な予感がするですう！

「シエスタさん、ヴェストリの広場は何処にあるですか？」

「あ、あの人殺されちゃう！貴族に平民が勝てるわけ無いのに」

たしかに、ここの人達は主殿程ではないとはいえ、魔導師……ここでは確かメイジですね。

魔法を使うメイジなのだから、流石に魔導騎士でも軍人でもない、只の一般人の少年が相手出来る筈は無いと思うです。

貴族は全員メイジらしいのですから、さきのギーシュとか言う人もメイジの筈。

そんな人と決闘なんて、何の準備も無しじゃ本当に死んじゃうですう！

「シエスタさん！広場の場所を教えてください！」

「あうあうあうあう……」

だめですう、シエスタさんは恐慌状態になつて居るですう。

だけど、だけこのままじゃサイトさんが危ないのですう！

かと言ってシエスタさんを放つてもおけないし……どうすれば

いいですう!?

「ん? ちょっとシエスタ、大丈夫?」

と、その時、通りかかった赤髪のメイドさんがシエスタさんに話しかけたですう。

「あうあうあう・・・」

「ねえちよっと、その黒髪ちゃん」

「黒髪? リンの事ですう?」

「リンね? この娘いたいどうしちゃったのさ?」

「えーと」

デバイス少女、説明中・・・。

「な、なんてことつたい! 平民がメイジに叶う訳ないだろうに!」

「だから急いで止めにいかないとだめなんですう!」

「わかった、広場はこの先に進めばいい! 真っ直ぐ行けば付くだろう」

「ありがとうございます! リン言って来るですう!」

「私はシエスタを寝かせてくる! ついでに援軍を呼びにいつて来るよ!」

そのまま赤い髪のメイドさんは、シエスタさんを負ぶってかけて行きました。

そしてリンも行動を開始したです。急がないと、サイトさんが危険ですう!

私はそのまま浮かび上がりつつ、サイトさんがいると思う広場へと向かいました。

ちなみに、リンは策敵が使えるのですから、それを使えば良かったのですう。

ですが、この時は焦っていて全然思い付かなかったのですう。

そして、主殿に連絡を入れておけばよかったと気が付いたのも、後の祭りだったですう。

ドン！

「ぐあっ！」

リンが広場上空についた時、素手ंनी決闘は始まっていたです。いえ、ですがそこで行われていたのは決闘なんて神聖なものじゃ無かったですう。

「どうしたのかね？平民くん、僕を殴りつけるのでは無かったのかね？」

ビュン！

「ぐばあ！」

女性をかたどった金属で出来たゴーレムが走り、拳を人影に叩きつけました。

吹き飛ばされた人影、それはサイトさんだったのですう。

相手は決闘と言っておきながら、武器も持たないサイトさんをゴーレムという金属の塊で何度も殴りつけていました。

「うおおおー！」

ガン

「いつてえええー！！」

サイトさんも反撃として拳を当てますが、無機物相手には効果なんて有る筈も有りません。

むしろ素手で金属に殴りかかるサイトさんには驚愕すら覚えるです。

「あれは・・・ルイズさん？」

ルイズさんは決闘をやめさせようとしていました。

ですが、サイトさんは強情にも話を聞かず、決闘という名のリンチにまた飛び込みました。

ルイズさんはもう今は放心状態で立っているです。

私もあまりのひどさに、少し呆然としてしまいました。

リンだって、元はリン姉様のバックアップ用データです。

だからリンにだってベルカの騎士の気概くらい持っているです。

「自分のいい加減認めたまえ、地面に頭をつけて謝れば許してあげよう、平民の使い魔君」

「・・・へ！誰があきらめ バンッ ぎゃー！」

「口の減らない男だね？君は？」

だから、だからこんなの・・・

「こんなの決闘なんかじゃないですう！」

認められない、こんな一方的な只相手を勝るだけの闘いなんて決闘なんかじゃ無い！

余裕の貴族さん……でも、明らかにこれはフェアじゃない。しかも、周りの貴族はその光景をみて楽しんでいるですう。

何なんですかこれは？これじゃあ、決闘ではなくて只の暇潰しの為の見世物です。

リンは、この一方的な光景を見て、なにかイガイガした感じを覚えたですう。

コレが怒りであると言う事に気が付くのに、時間は要りませんでした。

ベルカに置いてても、決闘とは己のプライドと命を賭けた神聖なものです。

自分が信じていることが正しいという事を証明する為の誇りある闘い。それが決闘なのです。

形式は違えど、この場で行われると言われたのは決闘。

ですが、今行われているのはどう考えても一方的な暴力ですう！

片方は剣を持っている。

一方もう片方は武器すら渡されていない。

決闘と名を打つと言うのなら、フェアに戦うのが道理では無いのですか！？

サイトさんは、打たれて殴られて蹴られて身体はボロボロ。

腕が上がらないのかプラインと垂れ下がり、もはや戦える身体ではないですう。

ソレどころかすぐに入院が必要なくらいの大怪我を負っているですう！

ですが苦しそうにしながらも相手を睨みつけるサイトさん。

彼は今出せるだけの声で、思いっきり目の前の貴族さんに言い放ったです。

「うるせえ・・・俺は、俺はなあ！下げたくない頭はぜってえー！さげねえ！」

本当にバカですう。

勇気と無謀は全然別物、これでは自殺を宣言したのと変わらないですう。

その心意気は立派かもしれないですが、死んでは意味はないですよ？サイトさん。

「そうか、では決闘のルールに乗っ取り、止めを刺してやろう。行け！ワルキューレ！」

まるで指揮棒を振るかの如く、バラの造花をかたどった杖を彼は振るいました。

そして主からの指示がきたゴーレムは、サイトさんに向かって突っ込んでいきます。

「幾えにも張られし不動の盾、いまここに！顕現せよ！」多重シールド！」

気が付いた時には、リンはサイトさんと人形の間割り込み、防御魔法を展開させていました。

人形の攻撃はかなりの早さこそあったが、人間のプロボクサーの

パンチ程度の威力。

一方向だけしか防御出来ないとはいえ、主殿の防御魔法ですう。その程度で破けるような魔法じゃないのですう。

「誰だ君は?! いや、そんな事よりも、君は魔法を使うようだが、何故その平民をかばうのかね?」

リンが上空から現れ、サイトさんの前に降りたつた時に、ギーシユさんはその声を荒げました。

「おい、今アイツ杖も無しに魔法を使わなかったか?」

「いや、まさか・・・本当だ。杖持つて無いぞ!?!」

「先住魔法!?! でも耳からすると亜人なのか!?!」

周りの観衆は、リンを見てひそひそとそんなことを話していたですう。

「こんなの決闘じゃないですう!」

「何を言い出すかと思えばお嬢さん。この決闘はその平民も了承した正式な決闘だよ?」

「其方は魔法という武器を用い、丸腰の人間を相手に何を決闘というですか!」

リンは戦いとかは嫌いです。戦争とかも嫌いです。人が傷ついていくのも嫌いです。

何より 人が死ぬのが嫌いです。それを見るのも本当は怖いのです。

主殿の中で見せられた記憶で、リンは散々人を殺したり仲間が殺された様を見て来たです。

精神的に決して強くは無い主殿は、時代に流され歯を食いしばって戦いました。

でも内心は、殺したくなかったという後悔で塗りつぶされていたですう。

だからリンは争い事が嫌いです。

だって、戦えば戦うほど、主殿の中が傷ついてしまうから……。

主殿は……その傷を自覚する事が出来ないから……。

「なら、どうするのかね？その少年の代わりに僕と勝負するかね？」

でもリンは知っているです。

主殿は人を殺す恐怖を知っているからこそ、戦いに身を興じると言う事を。

家族や仲間や民間人を守る為なら、自らが傷ついても構わないと覚悟している事を。

「わかりました。サイトさんの代わりに戦います」

「……いいだろう」

だから、リンは主殿が……フェン・リーダー個人が大好きなのですう。

故に、フェン・リーダー個人が持つその意思に、リンも従うのですう。

「リン……なんで出て来た……これは俺の」

「サイトさん、いまは喋らないで……私は今、武器が無いあなたの剣の代わりですう」

私はマルチタスクを用い、結界魔法ラウンドガード・エクステ

ンションを発動させました。

ユーノさんから、バレないように少しづつ蒐集した時に覚えた魔法です。

体力と怪我、そして魔力の回復までしてくれる高性能結界です。

そしてリンは、ギーシュさんと向き合いました。

「夜天の防人が右腕！リン・ラーダー！私もこの決闘に加勢します
ですう！！」

「よかろう！二人して貴族の強さを味会うがいい！！出よワルキュ
ーレ！！」

新たに5体の人形が現れました。

今のリンでは倒せないですが、守りに徹すれば、しばらくは持つ
事が出来る筈。

恐らく勝つことは難しい、というか勝てません。

ですが

「私も主殿と同じく・・・弱きモノを守る主義です！！」

そして私は魔法を使う為に、思考リソースを其方へとシフトさせたのであった。

「傀儡兵！？いや、ゴーレムか！後編」(前書き)

ルイズテラ空気w

ソレが我慢できない方はスルーすることをお勧めします。

「だ、大丈夫かの！？モートソグニルや！？」

慌てて駆け寄ったご老体は、使い魔たるネズミの身を案じて問いかける。

するとネズミは機用に前足の指を一本上げて、ちゅーと鳴いていた。

どうやら危機一髪だった様である。

「ふう、あまり心配をかけさせないでおくれ、ワシは寿命が縮むかと」

「ではゴキリ もう少し縮めても パキリ 問題有りませんね？ オールド・オスマン？」

オールド・オスマンと呼ばれたこのご老体は、トリステイン魔法学院の学院長である。

そして、トリステインの中でも有数のメイジであると言われ、年齢も300歳はあるとか言う噂もある凄い人なのだ。

つまりこの学院においては実質的なトップであり、誰も逆らえない筈なのである。

「あ、あのう、ロングビルさん？出来れば指をゴキゴキ鳴らすのはやめて欲しいんじゃないか？」

「ああ、これですか？これは只の準備運動ですからお気になさらずに結構ですよ？」

何の？とは聞けないオスマン。

美人の笑顔は素晴らしいモノだが、怒らせた時の笑顔ほど怖いモノは無い。

尚、構図的には緑色の髪をした美人秘書ロングビルに、ネズミの心配をして屈んだオスマンが土下座しているかのように見えるとい

う状態だ。

「さあ覚悟はよろしくて？私以前ちゃんと言いましたよね？今度セクハラしたら容赦しないと？」

「カーツ！セクハラも出来んで何が人生か！！」

逆上したオスマンが声を荒げるが、もはや威厳が無いその姿では恐ろしくも何ともない。

「はい、遺言はソレで良いですね？」

「え？あ、ちよつと？ロングビルさん？」

「死にさらせ、こんのエロ爺い・・・」

「ひ、ひいいいい！！！！！！！！！！」

そして今度は、哀れ？なご老体の悲鳴が学院長室に響いたのであった。

.....

.....

.....

ロングビルがオスマンをデククシしている頃・・・。

図書室ではコツパゲ「コルベールです！」・・・この学院の教師の一人であるコルベールが、許可が無ければ閲覧できないフェニアのライブラリーで調べ物をしていた。

・・・つーか地の文に突っ込むんじゃねえ。

探していたのは、使い魔のルーンに関係のある書物。

前日に召喚された少年らの内の一人に刻まれたルーンについてある。

長い事教師をしてきたが、あの様なルーンは見た事が無かったので調べに来たのだ。

「・・・こ、これは！？ま、まさか！」

そして、ようやく探しだした書物には、あのルーンの記述を見る事が出来た。

慌てたコルベールは司書の制止に気が付かず図書館を飛びだし、学長室へと向かった。

司書はそれを見て、今度からはコルベールに図書室を利用できないように学院長に申請しようとか考えたというのは蛇足である。

そして数分後、彼は本塔最上階学院長室へと辿り着き、その扉を開け放った！

「オールド・オスマン！是非とも伝えたい事・・・が・・・」

そしてあまりの光景に一瞬目を疑う。

彼が好意を持つロングビルが、オスマンを踏みつけており、あるうことかオスマンはそれに恍惚とした顔をしていた・・・なんて酷い幻覚だ。

そう思った彼は目頭を押さえ、もう一度部屋を見渡した。

すると、オスマンもロングビルも、何事も無かったかの様に自分の席についている。

疲れていたのかなと彼は思いつつ、部屋の中に入って行った。

尚、所々に赤い斑点が飛び散り、オスマンの顔が少し歪んでいたが、気にしない事にした。

「そんなに慌ててどうしたのかね？ハゲテール君？」

「コルベールです！いや、そんな事はどうでも・・・良くは有りませんが、それよりも学院長！伝説が現れました！」

「・・・ミス・ロングビル、すこし席を外してくれ」

シリアスな表情へと変化したオスマンに、今度は特に何も言わず静かに席を外すロングビル女史。

秘書の鏡というヤツである。彼女が出て行くのを目で追った二人は、彼女が出た後口を開いた。

「では、ミスタ・コルベール。詳細を述べてくれ」

「はい、実は」

彼の口から語られた事に半信半疑だったオスマン。

しかし、すぐにそれは事実として認識されることとなる。

サイトがギーシュとの決闘を行うホンの少し前の出来事だった。

.....

.....

.....

さて、学院長達がそんな会話をしていた時から少し後。

決闘が開始されて、傷つき膝をついたサイトの代わりにリンが代打として決闘の舞台に出てから少し経った時の事。

(ま、不味い・・・どうしよう?)

心の中で土のメイジであるギーシュは、そう唸っていた。

いま彼の目の前には、妖精のように可愛らしい黒髪の少女が対峙している。

平民の少年の代わりに戦うと申し出た、謎のメイジの少女。

ギーシュ自身、まさかこんな事態になるうとは予想だになかったのである。

(ノリだったとはいえ、勝負してしまうと言ってしまった以上、今更撤回も出来やしない)

つい戦闘を行ったという高揚感と、その場に流れていた雰囲気の流れ、目の前の少女と戦うハメになってしまった。だが、少し時間がたち、冷静になって見てみれば相手はまだ幼い少女である。

女性の為のバラを自称している自分としては、女の子に手を上げると言う事は言語道断なのだが、既に引けない処まで来てしまっていた。

実のところ、彼としては認めたくは無かったが、目の前の少女と自身の力は拮抗していた。

いや正確には、魔法は彼女の方が上だったが、もともと戦闘が得意ではないのだろう。

そのお陰でギーシュにも対応で来ていたのだ。

彼女が使う謎の魔法は確かに強力であったが、先程一瞬の隙を突いてゴレムによる全方位からの一斉攻撃を仕掛け、思いっきり良いのが入ってしまった。

その為、ギーシュとしては怪我をさせていたらどうしようかと、内心気が気じゃ無かったりする。

「はぁ、はぁ」

「い、いいかげん降参してはどうかね？」

「リン！いい加減俺と代われ！大体コレは俺が受けた決闘なんだぞ！」

愚かな、彼女が何のためにお前と変わったと思っている？と内心で思いつつ、ここで変わってくれたら、ただ平民の少年を叩きのめすだけになるのにとギーシュは思っていた。

サイトの方は、先程の魔法によりいまだ閉じ込められて出てくる事が出来ない。

しかし、全身にあった傷は全て治癒されており、その魔法がどれだけ凄い魔法だったのかが見て取れた。

「・・・行くですう！」

「ッ！ワルキューレ！」

リンはユニゾンデバイスではあるが、その機能としては探知や策敵や分析など、およそ戦闘に直接関われる様なデバイスでは無い。

彼女の本質はあくまでもデータ解析による主のサポート、そのみに特化しているのだ。

一応攻撃魔法も防御魔法も使う事は出来るが、フェンのそれと比べると非常にお粗末である。

使われる魔法も、フェンがいなければフォトンバレットの様な基本的な攻撃魔法しか扱えない上、防御の方も全体に展開出来るプロテクションの様なタイプは、戦闘時に発動させることが出来ないのである。

シールド系はなんとかなるが、ソレでは只単に盾を持っている様なものでしか無い。

故に

ガガン！

「いい加減理解したまえ！君の魔法ではワルキューレに持たせた盾も貫けない！」

放った魔法は青銅の盾で防がれ

「いい加減、倒れてくれ！」

ドン！

「きゃう！」

カウンターの様に、複数のゴーレムに殴られる。

殴る所が腹とかの様に、一見しても目につかない場所なのが、彼なりの優しさなのだろうか？

もつとも

「うう、けほけほ　い、いたい・・・ですう」

痛みはどこを攻撃されようが、そうは変わらないモノのだが。

リンはフェンとのリンクをカットしている状態なので、フェンが今の彼女の状態に気付く事もない。

彼女は今自力で戦わなければならぬと言う事なのだ。

「・・・なんでだ？」

「・・・？」

「なんで君はそこまで戦える？あの少年は只の平民じゃないか！弱くてすぐに死んでしまう平民じゃないか！なぜそこまで傷ついてまで、平民の為に戦える！？」

ギーシュには理解できなかった。魔法を使える者が、何故平民等の為に戦えるのかと？

連中は汚くて弱くて貴族にへつらう為の存在でしかないじゃないかと……。

リンは彼の問いを聞き、齒を食いしばりつつも言葉を返す。

「……だから、ですう」

「へ？」

「弱いから、守る。戦える力が無いから、代わりに戦う。それが兵士たる宿命」

「……」

「それが我が主であるフェン・リーダーの持つ信念、彼の者の右腕たる私は、それにつき従う」

「ッ！だが！そのままでは死んでしまう！」

幾ら力を抑えたとはいえ、人間大の青銅製人形の質量は相当なものだ。

それに殴られたのだから無傷なんて有り得ない。

気絶させようと何度も腹を打ちつけた所為か、彼女は口から血を流している。

もしかしたら内蔵を傷つけているかもしれないのだ。

「……だから、どうしました？」

「へ？」

「殴れば痛い。叩けば痛い。斬れば人は死にますう」

「え、あ……」

「そんな事も知らずに、あなたは今までその力を振っていたのですか？」

「……あ、ああ……」

そう、どんな形であれ、危害を加えようと力を行使したら、痛みが起きる。

死なない様にと殴ろうが、蹴ろうが、叩こうが、痛みは絶対に起さるのだ。

ギーシュは今になって、そのことを思い出したのである。

「痛みを理解しないで・・・死を理解しようともせずに・・・」
「ヒッ!?!」

「決闘だなんて・・・言ったらダメですう」

恐怖した。目の前の小さな少女に、ギーシュは恐怖を感じた。

別に殺気が放たれた訳では無い。向けられているのは憐みの目。

しかし、そこには幾多の死を見続けた彼女が放つ、独特の雰囲気があった。

死とは身近なモノ、故に感知しにくい。

しかし、今の彼女から放たれる気配は、相手を圧倒出来る濃厚な死の気配を有していた。

彼女とフェンは一心同体、そして彼女もまた、幾多の戦場を駆け抜けた者が持つ狂気を、

フェンの体験を追体験する事で持ち合わせていた。

一方軍人の家系に生まれたとはいえ、これは戦場を知らないギーシュには解らないモノだ。

そして人間は理解できない事に恐怖を感じる。

ギーシュはゆっくりと立ち上がり、自分を睨んでくる少女を、とても恐ろしく感じた。

「さあ、目に焼き付けなさい。コレが貴方が今までしてきた事」

「く、来るなあ!ワルキューレ!」

そして彼は5体のゴーレムを、リン目がけて突進させる。
とつさの恐怖が行った事、しかし恐怖の対象を排除しようと、無
意識に力を解放した攻撃。

「・・・今度のは、防げないですね。主殿」

そして、彼女にゴーレム達が迫る。

見れば何時の間に錬成したのだろう、槍や剣などの武器を持った
人形がリンへと向かっていた。サイトやルイズが危ないと叫ぶが、
すでにボロボロなリンに避ける事は叶わない。

「ごめんなさいですう。でも、“間に合いました”」

勝手に決闘に割り込んだ拳句、この体たらく。

彼女は情けなさに涙が出そうであった。

だが、彼女は後悔などしない、その結果がどうであれ、自分はち
やんと信念に基づき戦った。

自殺願望など点で持ち合わせていないが、少なくともそれだけは
守れたようだ。

そして

ドコオオオオン！

複数のゴーレム達によって、少女はその身を貫かれたのであった。
流れる血は止まらず、わずかに身じろぎはしているモノの、死を
免れない事は明白だった。

どう見ても致命傷、それが周りのギャラリー達が見た見解。

「う、うええ・・・」

何人かの貴族の子息達は、そのあまりの凄惨さに吐き気を催し、蜂の子を散らすかのように、広場から退散していく。実家で亜人の戦闘経験を持つ子息たちは眉を細める程度だが、あまり良い顔はしていない。

只の遊びの筈が、人死に出る結果となるなんて、誰も予想だにしなかった。

それがこの広場に集まっていた、貴族の子息達のほぼ全員の見解だったのだ。

しかし、目の前には槍で身体を貫かれた少女が横たわっている。その事が彼らに自らの持つ力の恐ろしさを再認識させる結果と成っていた。

そして、サイトを閉じ込めていた結界魔法も、リングが事切れた所為か効果を失った。

サイトは結界が壊れた途端、茫然としていたギーシュに掴みかかる。

「　　テメエ、齒あくいしばれ！」

ボクン！

「グッ　　」

そしてギーシュもあつげなく殴られる。

半分無意識だった。殺すつもりなんて無かった。

だが、少女はモノ言わぬ骸と化した・・・誰の所為だ？

「・・・俺にも責任はあつけどよ・・・なんでだよ？」

「・・・」

「なんでそんなにも・・・簡単に殺せんだよ!？」

「ち、ちが」

「違わなくねえ！なあ！なんで殺した！なんで・・・なんで」

サイトの声も、徐々に尻すぼみとなっていた。

そしてギーシュも、もはや戦える状態では無かった。

人を殺した事は初めてだ、いまだにその事が理解できず、ただ呆然としている。

そして

「ゴメンなさい」

彼は・・・小さくだが、確かにそう言った。

「ごめん・・・なさい」

歯を食いしばるかのように、小さいが確かにそうギーシュは己の口から声を出しそう呟いた。

それは懺悔に近いモノだったのかも知れない。

人を殺めることを知らず、平然と人を傷つける真似をしていた自分を恥じた故の。

「・・・本当にそう思ってたのか？」

「・・・ああ」

サイトの言葉にそう呟くギーシュ。

「そうか・・・なら“そろそろ夢はおしまい”」

「へ！？」

その言葉と共に、一瞬にして視界が切り替わった。
良く解らない内に視界が白くなり、そして

「クソ！出せ！リンここから出せえ！」

「やめなさいリン！ギーシュ！貴方も貴族なら女性に手を出しちゃダメ！」

先程までの、決闘のさなかに彼は居た。いや“戻ってきた”
と言うべきか。

「こ、これは一体?! いや僕は!? へ、え?!」

「おかえりなさいですう」

「!!!!!!」

死んだ筈の少女の声に、慌てて意識を其方に向ける。

そこには確かに自分が突き刺した筈の、少女がそこに立っていた。

「君は!? いや、それよりも先程のは」

「アレは闇の書の夢、本来は対象の深層心理にふかくアクセスし、
その人が見たい夢を見せる為の魔法ですう」

「アレが・・・夢？」

信じられなかった。自分はいつたい何時から夢を見ていたのか？

その疑問が顔に出ていたのか、リンがそれを見て口を開く。

「貴方が私を槍で刺す瞬間に、夢に落しました。ホント空が飛べて
良かったですう」

彼女は突進してきた槍を、垂直に浮かぶ事でかわしたのだ。
無意識に突進させていた為、その攻撃は非常に直線的。

だからこそ、上に逃れることが出来たのである。

「本来の使用用途と違いますけど、あの夢で見た体験はどうでしたか？」

「・・・ああ、まさに悪夢だった。だが、大切なことを教わった気がする」

「それは良かったです」

彼女はそう言うと笑顔を見せた。

思わず誰もがどきりとしてしまうほどの綺麗な笑顔。

ギーシュが人を傷つけることの怖さを理解したことが嬉しかったのだ。

ちなみにギーシュは少しばかり顔が紅くなっていた。

「改めて名乗ろう。僕はギーシュ・ド・グラモンだ」

「リンはリンと言います。フェン・ラーダーの右腕です」

「そうか・・・ミス・リン。感謝する。貴族として忘れては成らない事も思いだせた」

「リンはリンです！ミスなんて名前じゃないです！」

そういつてプーと頬を膨らませる少女に、ギーシュは苦笑した。

良かった、キチンと自分の持つ力の意味を理解できたことに感謝だ。

彼はそう思いつつ、再度口を開く。

「どうだろう、ミス・リン。君は大分疲れた事だろう？そろそろ本来の決闘に戻したいのだがね？」

「えー？でも」

「勿論、次はハンデを付ける。ゴーレムも1体しか使わないし、平民の彼には武器も与える。ソレではダメかね？」

リンはそこまで言われて考えた。確かにもう自分は限界だ。闇の書の夢は本来捕獲空間に捕獲した相手に見せる監獄の夢。外で使用するととなると、恐ろしく体力を消耗してしまう。

もうギーシュの目には、人をあざけるような光は無い。むしろ一皮向けたようにすがすがしい光が宿っている。

だが、自分から名乗り出たのに、今更取って返すのも・・・そう悩んでいると。

「いいじゃないか、ぜひそうして貰おう」

と、何処からともなく声が響いて来た。

サイトとルイズとリンには聞いたことがあるその声。だが姿は見えず。

「な！？だ、誰だ！？どこに居る！？」

ギーシュがそう叫ぶ、周りのギャラリも突如聞えた声に驚きを隠せない。

声は聞こえど姿は見えず、一体どこの誰なんだ！？

「お前らの目は節穴か？俺はかなり前からここに居るぞ？」

「あ、主殿！？一体何時からそこに！？」

「痛みを理解しないで・・・死を理解しようともせずに・・・」
の辺りからだな。全く、シアさんに教えて貰って着たら既にポロポ
ロ。どれだけ心配したことが」
「ひ、ひいゝん！ごめんなさいですう！」
「・・・あとで説教だからな」

どうやら黒髪の少女には姿が見えているらしい。
彼女の視線はちょうどギーシュとリンとの間の上だ。
だがそこには誰もいない様に見える。

「リン、そこに誰がいるのか？」
「誰もいない様に見えるけど・・・？」

ルイズは首を傾げ、サイトもそうリンに問いかけた。
そしてリンが答えるよりも早く

「ああ、そういやミラージュハイドしっぱなしだった」
『光学迷彩魔法を解除します』

その声がそう答え、空中に何かがにじみ出るかのごとく現れ
る。

「あ、アレは！？召喚の時の！？」
「アレってゴーレムじゃ無かったのか！？」

ギャラリー達かがそう叫ぶ、そしてにじみ出るのは白銀の全身鎧。
そこにはBA？の姿をしたフェン・ラーダーその人が、悠然と浮
かんでいたのがあった。

Sideフェン

いやはや、一時はマジでどうなるかと思ったぜ。

まさか、リンがあそこまで戦おうとするなんてな思わなかった。

何度も間に入ってでも助けだそうかと思ったが・・・目がな。
諦めて無かったんだよな。

少し前、俺が厨房で皿拭きしてたら、急にシアさんが来るんだから驚いたぜ。

かなり急いで走ってきたらしく、なんて言ってるのか解んなくて、すこししてようやく理解した時に、俺はすぐにBAを纏って空を翔けた。

何で俺に知らせてくれなかった！お前は戦える様な娘じゃ無いのに！

そう内心で思いつつ、決闘の場についたんだ。

だが、幾ら殴られようがお前さんは諦めていなかった。

最後まで、戦うと決めていたんだよな。

だから俺はあえて手を出さなかった。

何時でも割って入れる位置に浮かび、二人を見守った。

何でだかは解らないが、今回はソレで正解だったようだ。

しかし何時の間に俺の信念まで知ってたなんて・・・ホント彼女には脱帽だぜ。

「初めましてギーシュ・ド・グラモン殿。リンの主であるフェン・

リーダーです。現在はそこに居られるマスターの従者をしています」
「君が・・・噂は聞いていたが、まだ子供じゃないか・・・」
「はは、まあそうですね。自分は子供ですハイ」

見た目は7歳である。子供という表現は間違いでは無いが・・・。
ちよつと釈然としなかつたり・・・。

「まあ、とりあえずリンは確かにもう戦える状態ではありません。
なのでサイトと交代するという其方の提案を、自分は受け入れたい」

とりあえず、もうリンが傷つくのは見たくは無いです。

頑張つては居たがソレはソレ、今回の件は後で説教をしなくては
なるまいで。

それにサイトの方も、このままじゃ不完全燃焼だろう。

「ちょ！ちよつと待ちなさいフェン！勝手に決めてんじやないわよ
！」

「マスター」

「いやしかしミス・ヴァリエール」

だが、そこにルイズ嬢が立ちはだかつた。

平民だが使い魔は使い魔、彼女にとってサイトは自分が契約した
初めての使い魔である。

彼女も使い魔に傷ついて欲しくは無いのだろう。
だが

「じゃますんなルイズ！俺は戦う！」

「どうしてよ！あれだけボロボロにされたじゃない！怪我が治つて
るけどどうしてまた傷つこうとするの！？」

「・・・バカにされたからだ」

「え？」

「ルイズには悪いがこれは俺の喧嘩だ。俺がやらないとダメなんだ！」

いや、ケンカじゃなくて一応決闘なんだけどね。

まあソレは置いて、とりあえずサイトを結界から出してやった。

ふむ、流石はユーノくんの治癒結界、怪我は完璧に治ってる。

「もう、元の世界に帰れねえことは解ってる。だから洗濯だって、掃除だって、使い魔だってやってやるよ！」

「サイト……」

「それに、リンがあそこまで頑張ったのに、男の俺がハイそうですかと逃げられるか！」

どうやらサイトの心に火をつけてしまったようである。

ルイズ嬢はもうなんか呆れてモノが言えないと言った感じだ。

「それじゃ、サイトさんは戦うと言う事で」

「ッ！やつぱり駄目！認められないわ！」

しかしルイズ嬢はまだ納得してくれない。

するとギーシュが彼女の前に進み出た。

「ミス・ヴァリエール。君の使い魔くんと決闘を許してはくれないか？」

「な、なんでよ！もう十分やったじゃない！」

「ソレではダメなんだよ。このままでは僕たちは決着も納得もできない」

「ああ！その通りだぜ」

「今度の決闘はちゃんとフェアに勝負する。ソレではダメかね？」
「自分は治癒魔法が使えますから、怪我しても安心ですよ」
「もう知らない知らない！アンタ達なんて勝手に勝手にすればいいんだわ
！」

そう言つと彼女はツンと顔をそむけて拗ねてしまった。
それに俺達は苦笑しつつ、お互いに距離を取らせる。

「それでは決闘のやり直し、ギーシュさんの方はゴーレムを一体のみ使用。サイトは武器の使用を可とする」
「武器は僕が造ろう！」

そう言つと、彼はバラの造花の杖を振った。
そして地面に装飾が施された剣が現れる・・・青銅製の。

「・・・鉄の剣とかは造れないんですか？」

「フツ、何を隠そう僕はドットメイジ。鉄まで錬金は出来ない！」

いや、胸を張つて言つなよ。

「・・・折れますよ？青銅の塊を青銅の剣で切ったら」

「あ・・・ど、どうしよう?!」

今更気が付いても遅い様な気がするぜ。

つか只の青銅の剣対青銅の塊なんて絶対フェアじゃねえぞ？
どう考えてもゴーレムの方が強え・・・仕方ねえな。

「はあ、まあ壊れることは無いと思うからな。ヴィズ」
『オートクレール、実体化させます』

そして俺の手元に近接兵装デバイスのオートクレールが握られた。周りはアツと驚いているが、まあそんなの関係ねえ。

「コレ使ってください。一応魔法で強化されていますから壊れる心配はありません」

「すまねえなフェン」

「く、申し訳ない」

サイトに剣を握らせた後、俺達は後ろに下がった。

そして両者は睨みあっている。今度こそ決闘が行われるのだ。ところで

「（リン、ところでギーシュに蒐集は？）」

「（少しでも力が削れるかと思つて一応は・・・）」

『（GJですリン。コレで錬金ができるようになる）』

「（はっ！？そ、そこまで考えていたなんて・・・リンは完敗ですう！）」

「（ふふふ、ここが違う。頭がな）」

そんなことを考えながら、

サイトとギーシュのゴーレムがぶつかつたのを見ている俺達だった。

キキン！！

「な！ワルキューレが真つ二つだと!？」

「お、おいフェン！この剣つてどんな魔法かけてなんだよ!？」

「え？いや只の強化しか・・・」

しかし、まさかたつたの一合斬りあつただけで勝負が付くとは思

わなかつた俺だった。

な、なにが起きたんだ！？う、うん・・・謎だ。

「傀儡兵！？いや、ゴーレムか！後編」(後書き)

うわぁ、ギーシュ成長フラグ立てちゃった。

「キーンと泣いて、どんなもんかしらってね」(前書き)

*うっ、次こそはデルフを・・・。

「さーてさて、どんなもんかしらってね」

「さーてさて、どんなもんかしらってね」

妄想戦記

さて、決闘騒ぎがあった日から、既に4日経過した。

あの後にはギーシュの敗北宣言の後、何故か全部終わった頃に教員が到着。

決闘を行ったという事への嚴重注意を、ルイズ嬢ともども全員にされた。

ルイズ嬢は“なんで私まで・・・”と釈然としていなかった様だが、

一応使い魔の起した事なので、主であるルイズ嬢も責任を取らされてしまうのである。

まあ、その事を理解していたので、後でサイトへの折檻だけで済んでいたのは僥倖だろう。

そしてまあ・・・俺達も段々とこの生活にも慣れ始めて来た。

最近は授業の間は自由にしているも良いとお達しが出ているのがあるがたい。

この学院の授業の大半が、自系統自慢なのだから得る物ももう殆

ど無いのである。

なので、今度ルイズ嬢に図書室への使用許可を申し出る予定だ。この文字は良く解らないが、ルーン文字だけは地球のと似通っている為解読が効く。

そこらを接点にしたりして、自力で解読していきたいと思っっていたりした。

そして、今日は授業の方には顔を出さず、近くの広場に来ていた。ここならば授業中には、そうそう邪魔は入らないからである。何をしているのか？ソレはまあホラ、自分は魔導師だからさ？

未知の魔法に興味津津な訳でして

「うゝむ、やっぱりゴーレムの操作関連はオミットか・・・」

【その方が良いと思うです。そのままエミュレートすると、回路への負荷が半端じゃないですう】

『消費魔力も莫大なモノと成ります。ゴーレム操作機能残存はお勧めは出来ませんね』

「ソレが無ければ本家よりも燃費が良いんだが・・・仕方ないか」

せっかく手に入れたハルケ式、ソレをミッド式にエミュレートしているのである。

【それにゴーレム操作機能を残すよりも、いつその事ロボット造った方が早いですう】

『ゴーレムを操作するとすると、常に変化する物質を錬金し続ける上、動作を全てコントロールせねばなりません。それに掛るデバイスの容量リソース配分もかなりの物になります。全て手動で動かすのならそれ程じゃありませんが・・・』

「マルチタスク使っても、かなり思考リソースを持ってかれると言っ訳か」

前衛で踏ん張るタイプの俺とかだと、戦闘では使えないな。

ユーノとかシャマル先生だったら、案外いけるかもしれないがね。もし俺が使うなら、いつその事口ボ造った方が早いな。

「・・・ま、別にゴーレム動かしたいとか思ってた訳じゃないから良いか」

【それじゃ、ここの術式はそう言う風に記憶しておくですう】

空間パネルに表示されている魔法陣の術式ラインが組み換わる。

そして、ゴーレム操作機能無しの錬金術式へと変換された。

ふう、この構造組むまでに4日もかかるなんて思わなかったぜ。

「ふう・・・アナログをデジタル化するのは難しいな」

俺は今画面に映されている円筒状魔法陣が十字架の如くクロスしている様な形状の、

立柱式環状交差方陣を見つめながらそう思った。

『ハルケ式は結構アウトですからねえ。イメージで大体の効果が決まるとかはある意味凄いですけど・・・』

【ミッドやベルカ式だったら考えられない魔法運用ですね】

USNの術式は、殆どが効率運用及び高速運用に研磨されてるし

な。

ミッドやベルカもほぼ同じ、だからこう言ったローカルな魔法も珍しいぜ。

魔導師という立場の人間として、是非とも研究してみたいものである。

尚、以前決闘によって蒐集したハルケ式魔法である錬金は勿論。実は錬金の他にも幾つかの魔法を蒐集する事に成功していたりする。

ソレが手に入りたいきさつはおいおい語るとしよう。

それよりも、この世界の魔法において、一番利用価値が高そうだったのは、

やはり“錬金”と“固定化”であった。

「原子や分子配列を操って、別の物質に変える魔法、効果が持続する限り完全に劣化や摩耗を抑えて保存できる魔法・・・まだ術式解析は少し不完全だけどすごく便利だ」

【しかも、エミュレートしたお陰で、本家よりも精密で品質が確かな物質も作れますう】

俺が今いる地球は勿論、USNやミッドでも化学や科学はある程度進んでいる。

原子構造や分子配列、はたまた電子、陽子、中性子に至るまで解析が出来る程だ。

その為、原子配列変換において、かなり楽に生成が可能であると言っ事が判明した。

構造を理解して魔法を行使する分、効果が飛躍的に高まるからで

ある。

そのお陰で一つの材料から複数の素材を造り出すことも可能なのだ。

これはこちらの技術であるマルチタスク等の恩恵と言えよう。

またプログラム化する事で、デバイスのメモリーに一度錬金した物の情報を記憶。

ソレを次回生成する際に、瞬時に錬金を使って造り出すことが可能となったのである。

しかも無駄になってしまう魔力の流れを排除出来る為、燃費もかなりいい。

ユーノがチェインバインド一発使う分の魔力で、錬金が3回は使えるくらいだ。

元々イメージに頼った魔法だったから、デバイスのサポート入れたり途端燃費が向上したのである。

勿論、魔導師が単発で発動させても、チェインバインド一発分位だから大分燃費は良い。

『でもプログラム化すると、細かさが増した代わりに制約も増しましたね』

だが、その代わりに質量保存の法則や体積の問題等も存在しているのである。

それによって、まず造りたい物と同じ質量以上の原料となる物質が必要だ。

コレは造る物質によっては、体積の問題が浮上してしまう所である。

また、魔力の燃費は良いが、魔法を構成している術式が、その実かなり複雑だ。

その為普通に使用するには、かなり高性能な高速演算と並列処理が行えるCPU。

それと造る物質の構成を記憶しておく為の、大容量記憶媒体が必要と成ってくる。

コレ無しで行おうとすると、かなり正確な原子構造をイメージしないと品質が安定しない。

また、並列処理は出来ても術式を完全に消化する為には、かなりの時間が必要となる。

高速処理が出来るデバイスなしでやるうと言うのなら、戦闘では絶対に使えないだろう。

「しかし、なんでこっちの連中はそこらを見捨てるんだらうか？」
『さあ？そこら辺が魔法なんじゃないですか？』

【アナログとデジタルの違いってヤツですう】

……まあ時に世界は理不尽だから、気にしたら負け組なのだ。

俺の本職が研究者じゃなくて戦闘魔導師だから、理解できないだけだろうけど。

ま、気にしたらいけねえ、せつかくエミュレートは出来たんだから有効に使わせてもらう。

「とりあえずは・・・ヴィズ、錬金スタンバイ、リンはサポよろしく」

『了解、練習してみるのですね？』

【はいですう、リンも演算機能をサポートするですう】

とりあえずは、簡単に色々造ってみますかね。

そうだなあ、魔力伝達に良く使われる純銀とか造ってみようかな？
その前に金属が出来るか為さねえと・・・やることは多そうだ。

「ほんじゃ、材料はとりあえずそこらの土で」

『クレーターが出来ないよう気をつけてくださいよ？』

「了解、そんじゃ一著練習開始だ」

そして俺は錬金の練習を開始したのであった。

Side三人称

さて、トリステイン魔法学院の授業の時間、生徒は誰も外には出て来ていない。

しかし、そんな中でも唯一出歩いている人間たちもいた。

所謂平民と呼ばれる奉公人達や、授業とは直接関係のない教員等である。

「全く、学院長にも困ったもんだ。これじゃ目的を果たす前に逃げたくなっちゃうよ」

そして、そう言った人間の他にも、この学院には自由に出歩く人間がいる。

学院長の秘書をしているミス・ロングビルが本塔に向けてゆっくりと歩を進めていた。

彼女も学院内の立場的には、それなりに高い地位にある為、ある程度自由に動き回れるのである。

「自分でヒマつぶしの為に持ってきた本くらい、自分で返しておけっただ」

ちなみに彼女、人前じゃ礼儀正しい秘書な性格で通しているが此方が地である。

とある目的の為に、わざわざ猫かぶってまでこの学院に潜入しているのだ。

潜入と言っても某蛇さんでは無く007さんの方なのだが、それは置いておこう。

「とりあえず、アレの場所は宝物庫で確定したけど、問題は宝物庫だね・・・はあ〜」

彼女は横に目をやった。

そこにはスクウェアクラスのメイジによって固定化を重ね掛けされた宝物庫の壁。

とてもじゃないが、簡単には壊れそうもない。

そして彼女の目的は、この宝物庫の中にあるお宝の奪取なのである。

その為に彼女は学院長に取り入り、この学院の秘書の立場を手に入れていた。

尚、彼女の仕事名はフーケ、貴族相手専門に盗賊を働く盗賊であ

ったりする。

「とりあえず、壊せる方法が解るまでは、大人しく・・・その前に逃げだしそう・・・」

日々行われる学院長からのセクハラの数々は、

彼女の盗賊としてのプロ意識を著しく低下させていた。

何せ学院長は、暇さえあれば自分のお尻を触ってくるエロ爺である。

気が付けば自身の体術レベルが恐ろしく引き上げられていたと言うのも、今では笑い話だ。

しかし、せつかくここまで来たのに諦めるのはプライドが許さない。

それに何気にここは給料がいいので、ソレだけが心の支えになっていたりもする。

男日照りなのはこの際目をつぶるとして、しばらくは安定した収入も見込めるのだ。

まだ、止めるわけにはいかないのである。

「・・・うん？誰かいるね？」

職業柄、人間の気配を察知する能力には長けている。

他人の気配をすぐ近くに感じた彼女は、すぐさま気殺をし、身を物陰に隠した。

物陰から覗いた先に居たのは

（あれは・・・確か公爵家の無能娘が召喚した使い魔の片割れだったかね？）

我らが主人公、フェン君であった。

彼女の記憶では、彼は平民と共に召喚された異国のメイジだと記憶していた。

主人は魔法の才がゼロだと言うのに実に皮肉だねえとか思いつつ、フェンのことを窺う。

どうやら、自由時間を利用して、魔法の訓練をしている（様に彼女には見えた）ようである。

中々勉強熱心じゃないかと思いつつ、その様子を観察していった。

（へえ、なかなか可愛らしい顔してるじゃないのさ）

この世界では珍しい吸い込まれるかのように黒く、またしなやかな長い黒髪を持つフェン。

肌は白人特有の透き通るような白さを持ちつつも、全体を見るとどこか和製人形に見えた。

しかし、黒髪とは対照的に、目はまるで鮮血の様に紅い色を湛えている。

それがまた、ほのかな色気を演出し、年齢に不相応な落ち着きがそれに拍車をかけていた。

要するに色っペーという事なのである。流石フェン君、恐ろしい子。

（あたしにはそんな趣味は無いが・・・これは中々）

どこかそんな考えが頭をよぎるが、覗きを止めることが出来ない。ちなみに普通ならフェンは気が付くところに彼女は居るのであるが、

隠遁が上手いのと、フェンが魔法術式構築に忙しい為に気が付かれていなかった。

(しかし、本当に何をしてるんだろうね?)

純正ハルケギニア生れの彼女からしてみれば、フェンが今している術式構築は非常に珍しく、

また彼女には理解できない光景であった。

恐らく魔法で空中に絵を映しだし、ソレを弄くっているのは解る。だが、その絵の持つ意味までは解らない、まるでパズルを解くかのように組み合わせでは、

違う絵と組み合わせさせて幾何学的な紋様と文字を映し出していた。

なんとか魔法陣であると言ったところまでは理解出来たが、

あそこまで緻密な魔法陣など、今まで生きてきて見たことが無かった。

(というか、今あの子一人しかいない筈なのに、もう一人分の声が聞こえる気がする)

実際はヴィズやリンが居るので一人では無いのだが、ヴィズは身体を持っていないし、

リンは現在ユニゾン中な為、彼女の目には映らないのである。

「とりあえずは・・・ヴィズ、錬金スタンバイ、リンはサポよろしく」

(錬金?確かにそう言ったねえ。魔法の練習でもするのか)

ふと気になって覗いてはいたが、考えてみれば相手は子供である。魔法の練習位する事であろうと彼女は考え、その場を去ろうとした。

だが、次の光景に彼女は一瞬思考を停止してしまふ。

(な、なんなんだいコレは!?)

そこに現れたのは、空中に展開された複雑な術式が描かれた円柱交差式魔法陣。

環状魔法陣が重ねられて円柱状となり、それがもう一つの魔法陣と交差し十字架の形状と成っていた。総量こそ少ないが、かなり練り込まれた魔力がラインを駆け巡り白い光を発している。

それはハルケギニアでは決して拝むことはできない、幻想的な光景。

杖を使わなければ魔法を行使できないハルケ式の人間からすれば、有り得ない光景だった。

たった一人の人間が行う魔法にしては、恐ろしく大規模に見えたのだから。

(あの子は・・・杖を使っていない?という事は先住魔法なのかい?)

この世界には、ハルケ式の魔法の他に、亜人やエルフなどが扱う先住魔法が存在する。

その魔法の大きな特徴は、その土地の精霊と契約を結ぶ事による魔法の行使。

つまり、魔法の発動体である杖が、必ずしも必要という訳では無く、むしろ使わない。

(いや、でもソレとは感じが違う気がするね・・・それに、とても綺麗だ)

フォンフォンという、魔力が術式を循環していく際に出る独特の音が辺りに響く。

ロングビルは、魔法陣の光に照らされて、意識を集中させているフェンと魔法陣を見て、

とても美しく、また一枚絵のように感じていた。

(しかし、あの子は錬金とか言っていたが・・・錬金はこんな魔法じゃ無い筈なんだけどねえ?)

少なくとも、彼女の良く知る錬金という魔法は、こんな大規模な術式を必要としない。

彼女の知る錬金とは、杖を振るだけで簡単に行えるお手軽魔法の筈なのだ。

しかし、目の前で行われている魔法は、とてもではないがそうは見えない。

これなら創造魔法と言った方がしっくりくるような光景なのだ。

だが、感じる精霊の感じからすると、やはり使用されている魔法は錬金なのである。

もっとも、普段自分が使うような錬金とは、少しばかり毛並みが違う様に感じるが・・・。

そう彼女が思っていると、今まで動かなかった魔法陣に動きがあった。

(あれは・・・辺りの土を浅く削って材料にしている?)

フェンを中心に、周辺の草や土が徐々に減って行くのが見て取れたのだ。

削られた土は光の粒子へと変わって行く、一時的に分解された状態の様である。

そしてソレらは空中に浮かぶ術式の中に吸い込まれていった。回転している環状魔法陣の外側の穴から吸い込まれ、交差している中心へと向かっている。

ロングビルはその瞬間に、術式の中で錬金が行われていると言うのを感じ取った。

そして中心へと光が収束していき、徐々に何かを形成していく。土のメイジたるロングビル・・・もうフーケでいいや。

彼女はその魔法によって、何が生み出されたのかを感じ取った。

それは

「・・・おっし、記念すべきUSN式錬金第一号だ」

『術式がちゃんと機能しているかの確認を兼ねたヤツだったから遅いのなんのつてまあ』

【でもキチンと錬金出来たですう。純度99%の純鉄インゴットですう】

何か二人分余計に声が聞こえたような気がしたが気にしない。

それよりも重要なのは、鉄が錬金されていたことだった。

しかも、それは只の鉄とは違う所謂純鉄と呼ばれる鉄の塊だった。鉄じゃないかと思う事無かれ、それは不純物が混じっていないのだ。

金属とは大抵は色々和不純物が混じっているモノなのである。

ソレを取り除くと言うのはとても難しく、また複雑な工程を踏まなければならない。

しかも感じ取れる鉄の感じからして、彼らはウソは言っていない。土のメイジである自分だが、あそこまで不純物がない鉄は造ることはできない。

あの領域に達するには、恐らくあと数十年はかかることだろう。

・・・もつとも、純鉄は不純物が無い分強度も無いので使い道は無いだろうが。

それでもすさまじく凄いことだと言う事だけは、彼女にも理解が出来た。

土のメイジとして、心底凄いと思えるほど、彼女は感動していたのだ。

「この分なら、他の金属もいけそう」

『次はマルチタスクを用いた複数錬金でも試してみます?』

「いんや、もう少し金属錬金してみる。その後は他の物質も作れるかを練習だ」

『了解です』

今度は更に早く展開される魔法陣。

そして気が付けば、ほぼ瞬時にして、同じ純鉄を錬金していた。

思わず彼女は物陰から飛び出して拍手をしながら

「す、す、すいー!」

『「!!!???誰ッ!」』

そう声を出してしまっていた。

こうして土くれのフーケと、フェン君との初の会合がここに実現したのであった。

S i d e F e n

いやはや、うかつだった。魔法の制御に集中してた所為で、辺りの警戒を忘れてた。

まあ使ってたのはこの世界の魔法だし、何か言われても文句は言われんさ。

それよりも問題は、このヒトが誰かって言う事だ。

「貴方は誰ですか？また勝負とか言うんじやないでしょうね？」

「え？あ、いや私は・・・コホン、私はこの学院で学院長の秘書をしているロングビルと申します」

「うん？学院長の秘書さん？」

思わず首をかしげる仕草をしてしまう俺。

なんでこんな所にそんな人が来てるんだろうか？

・・・というか何で目の前の人は悶えてるんだ？

「あ、あのう、大丈夫ですか（色んな意味で・・・）」

「は！すみません。私としたことがすこしばかり取り乱してしまいました」

いや、すこしっつてか、かなり取り乱していましたが？

ソレを尋ねたら話が進まなさそうだから聞かんけど・・・。

「はあ、それで何か自分に御用でしょうか？マスターに御用でした

ら生憎ですが授業が終わるまで待つて頂かないと」

「ああ、違うんです。そう言った類で声を出したわけではありません」

んじゃ、何で声かけたんだ？俺とアンタに接点は無いですか？

「実は」

そして、目の前の美人秘書さんは、一気に色々と言りはじめた。
何でも彼女は土属性のメイジさんらしい。

んで、偶々俺の練習風景を覗いてしまい、その美しさに感動したんだそう。

後はなんか色々と言飾りを並べたてられたけど、要約すると俺がスゲーって事か？

そんなに凄い事した記憶は無いのだが・・・うん。

「いや、まあ・・・自分はまだまだ訓練が足りません」

「そんなことはありません。土のメイジたる私でも、あそこまで精度の高い物は造れないのです！貴方はその力を誇っても良いと思います！」

「いや、その・・・ちょっと近いです」

「は！ごめんなさい。また少し取り乱してしまいました」

「いや、別に良いですけど」

美人さんが近くに居るのは、悪い気はしないもんだ。

まあソレが鼻息荒く、自身の属性に付いて熱弁をふるっている時は別だが。

それに精度が良いのは、コッチの連中と違ってリンやヴィズのサポートを受けてるからだし。

この後も、なんか彼女に捕まって色々と話をしていた。

なんかこのヒトは元は貴族だったけど、所謂没落してしまった貴族というヤツらしい。

んで、家族の為に酒場で働いている所を、学院長さんに拾われたんだとか。

ソレを聞いて、学院長も中々粹な事をする人だなあと、社交辞令で言ったんだけど、

急に表情を変えて『セクハラさえなければね』と唸っていたので、学院長への株は暴落した。

現在は所謂出稼ぎみたいな感じでこの学院に居るらしい。給料もほとんどを家族へと仕送りしているのかなんとか。

「　　ところで、貴方のその力なら、鉄の他にも作れるのではないですか？」

んでまあ、練習を続けてもいいと言われたんで、適当に金属を錬金していた俺。

そしたら急に彼女はそんなことをおっしゃった。

「・・・ええ、恐らく純金や純銀、果てはダイヤモンドまで造れますよ？」

一応色々な貴金属の原子配列は覚えてるしね。

ちよいと物質の中中性子や電子とかの位置を調整してやればい

いだけだ。

まあ、もつとも

「必要じゃないから、やりませんけどね」

「ええ！？やらないの・・・ですか？」

出来るけどやらない。だって出来るって他の貴族にバレたら絶対に不味いと思う。

それに、あくまでも俺に必要なのは電子回路とかの部品で金銀財宝じゃ無い。

金は要るかもしれないけど、大量に造り過ぎてこの世界の貴金属レイト壊しても不味い。

「ロングビルさんにも、出来れば黙っていて欲しいです」

「え、ええ。私としては構いませんが・・・」

「ふむ、まあ口止め料って訳じゃありませんけど・・・」

俺はマルチタスクを展開、周辺物質を集め錬金により変換を開始する。

同時に分子配列ごと動かして形状を変化させて、あるモノを作ってみた。

「これでもどうぞ、簡素ですが純銀製のロケットです」

「え？いや、そう言った物を受け取る訳には」

「只の習作でしかありませんよ。売るなり捨てるなり、してください。つても結構です」

「・・・貰っておきます」

そうそう、賄賂はちゃんと受け取っておくもんだよ。

しかし、考えてみたらコレで金欠解消か？欲しけりゃ幾らでも造

れそつだしね。

まあ、しばらくこの世界を見ていたいから、コレで借金を返すのは最後の手段だけど。

あ、そついや、このヒト土メイジとか言つてたよな？

ちよいと術式構成で解らんとこがまだ有るから、出来れば教えて欲しいかな。

ギーシュに聞いても良いんだけど、どうもこのヒトの方が上手みたいだし。

「まあ、自分はこの魔法はまだ全然やり始めたばかりですから、実地を詰んでる方の指導とかあると嬉しいですね。ロングビルさん、空いた時間で良いですから教えていただけませんか？」

「えつと、見たところ私が教えられそうな所は無さそうですが？」
「まだ術式が完全じゃないんです。出来れば本家を理解していらっしやる方に教えてもらいたい。もちろん謝礼はお支払いたします。練習で作った貴金属を欲しいだけといつても構いません」

そこまで言つと、彼女の目の色が変わった。

やはりどこの世界もお金は人を動かすねえ。

まあお陰で貴重な魔法の先生が出来そうだから良いけどね。

「・・・良いでしょう。私も本業の方がありますので、本当に時々ですけど」

「構いません。時々其方の錬金を見せていただけれる程度で良いんです」

そつすりゃ、リンの解析力で勝手にやらせてもらうからな。

んで、この後俺は頭を下げて頼み込み、報酬も中々魅力的だったお陰かOKを貰えた。

助かったぜ、鍊金もそうだけど、固定化が解析不足だったしな。
コレでまたこの世界からの脱出への一歩が踏み出せたって訳だ。
良きかな良きかな。

尚、余談だがこの後しばらくロングビルさんの懐はあつ
たかったそうだ。

やっぱり……世の中銭ズラ。

「喋る剣って、ある意味怪奇現象だよな？」

「喋る剣って、ある意味怪奇現象だよな？」

妄想戦記

さてあの日から時々、ロングビルさんと個人授業（ヴィズとリンも一緒だけど）をして過ごしていた。

彼女が本場モノの錬金と固定化の魔法を、キチンと目の前で実践してくれたのである。

そのお陰で、予想よりもずっと早く、無事に術式の解析も終わったのであった。

まあ造った金銀とかの貴金属は、殆ど手伝ってくれた報酬って形で持ってた。

貰える物はがつつり貰う所を見ると、結構したたかだったんだなあ。

でもアレだね。そう言うのを見ると、美人OLの私生活を見て幻滅した様な感覚が……。

っと、話がそれてしまったぜ。

「ふわあ。人でごった返してるですう」

「手を離すなよ？迷子になられたり誘拐されたら困る」
「は、はいですう！」

現在、俺達はルイズ嬢と一緒にトリステイン王国の王都、トリスタニアに赴いていた。

なんかサイトの為に武器となる物を購入するんだとか。

一応使い魔だしそれなりの格好をさせたいらしい・・・素人に刃物な気がする。

まあソレはさて置き、そう言う訳で現在、ブルドンネ街という所を歩いていた。

白い石造りの建物が目立つ美しい街並み、遠くには同じく白い王城も見える。

どこか千葉にある某ランドを思い起こした俺は、貧相な頭なんだろうな。

「皆ちゃんと付いてきなさいよ？大通りだって言っても、ゴロツキくらい居るんだから」

「了解ですマスター」

「あとサイト、キチンと財布を持ってなさい。盗まれるわよ」

王都だとは言うが、実質一番大きな通りでも、道幅は5mあるかないかしかない。

まあ町自体の外観はそれなりに整っており、普段は見れない様な面白さがある。

何と言うか、やっぱりヨーロッパをモチーフにした某ランドに来た気分だ。

とにかく人ごみがスゲエ。

「わあってるよ。つか、こんな重いもん盗めるヤツなんていねえだ

る？」

「そうですか？魔法使えば簡単だと思いますよ？サイトさん」

俺とかだっいたら姿消して背後からドロンと。

コツチだったら、念力みたいな感じかねえ。

「その通りよ。貴族はほぼ全員がメイジだけど、貴族以外のメイジも居るわ」

『そして、そう言った輩は食いつなぐ為に魔法を犯罪に利用すると』
「そ、嘆かわしい事にね」

どこの世界にも悪党はいらっしゃるってこった。

善人はいない、一人もない。居るのは大悪党か小悪党ってな。

「それと、フェンヤリンは見た目が可愛いから、人買いに誘拐されちゃうかもね？」

「マスター、ソレ笑えない・・・」

まあ、ただで誘拐はされないけどさ。

「だけどフェンだったら、普通に返り打ちにしそうだよなあ」

『恐怖、トリスタニア一区画壊滅、空に昇る極光』

「・・・フェンなら有り得そうね」

「リンは最後まで付いてくですう」

「皆さんが自分のことをどう見てるのが良く解りました」

出来るけどそこまでしないやい！道端でorzすつぞこんちきしよー。

そんな風にやいのやいのと雑談をしながら町中を進んでいった。

なお、途中本当にメイジのスリが出たが、小さな魔力弾で杖を破

壊したので問題は無い。

そして俺達は、サイトの武器を買う為に武器屋へと向かった。

さて、来ましたのはトリスタニアの平民街とでも呼べばいい所。貴族が来る表通りと違い、ここいらは所謂生活圏といつところである。

その為、まあなんて言いますが

「・・・くさい」

「・・・そうですね」

公衆衛生の概念が薄いのか、そこらじゅうにゴミやらが・・・
ああ不衛生。

「だから早く目的を済ませたいの。武器屋は確か

「あ、もしかしてアレじゃないですかマスター」

俺が指さす方向には、剣の細工が施された木の看板があった。

こちらでの識字率は、あまり高く無いらしいので、その為の措置
だろう。

文字知らなくても一発で解る。

『剣が掘られた看板、典型的ですねー』

「ドラクエみてえだ」

「確かに武器屋ね。じゃ入るわよ」

通りが臭い所為かずんずんと先に行ってしまったルイズ嬢。
俺とサイトはその後に着き従い、店の中へと入って行った。

ギョツという木が軋む音を立てて、武器屋の扉が開かれた。

薄暗い店内には、それなりに武器が陳列されている。

よつくと見ると防具も扱っているらしく、手甲や脚甲も飾ってあった。

「なんだか見てくれ重視ばかりだ」

「中身もスカスカ、まさか剣なのに空洞があるヤツがあるなんて・

」
「（儀礼用ってヤツですね。戦う為の物じゃ無いので、軽くする為の処置でしょう）」

「なんかルイズと店主が『家は堅気です』…客よ』的な漫才しているが、ソコはスルーした俺。

「サイトは大剣に興味があるのか、ゴテゴテと飾りが付いた剣の前から動かない。」

「んで、とりあえず俺達もサイトから離れて、店内を物色した感想が上である。」

鉄というのは叩かれる事で強度が増して行くとされている。

理想としては中心はやわらかめで外側が固いという状態が望ましい。

それを意図的に行う事を焼き入れ、もしくはケースハードと呼ぶ。

熱した鉄を叩き、ソレを冷やした後また熱して叩くというのを繰り返すのだ。

こうした職人の技や匠の技と呼ばれる芸当が、名刀名剣を生み出すのだと言う。

だが、ここにおいてある剣達は、どうもメイジが作った剣が多いらしい。

「こんなに細工を施して・・・アレか？最悪コレを渡して土下座するのかわ？」

『（うわ、それは情けない）』

まるでヤクザの車にぶつかった時用に、ロレックスの腕時計を所持している様なモンだな。

戦いの場において必要なのは、見てくれよりもまず第一に頑丈である事だ。

そしてその次が威力で、飛びに飛んで最後に見た目が来るのである。

使える武器に勝る物は無い、使えない武器何ぞ武器では無いからだ。

「そう言った意味だと・・・この籠が妥当か？」

見れば陳列棚のお隣にひっそりと、セール品の中古武具がおかれていた。

しかしよく見てみると、殆どが無駄な装飾が一切ない実戦仕様の武具である。

この店におかれている商品の傾向と、全く正反対の物ばかりだ。

『（・・・ん？）』

「微弱ですけど・・・これって魔力反応ですか？」

なんだ？何かあったのか？

「（どうした？）」「

『（いえ、ソレがですね）』

「（あの籠の武器のどれかから、微弱ですけど魔力反応がしたですう）」「

魔力反応って事は、ひょっとしたら

「 エン！フェン！ちょっと聞いているの？」

「・・・何でしょうか？」

どうやらルイズ嬢に呼ばれていたらしい。思考の海に沈んでたから解らなかつたぜ。

彼女に呼ばれたので、俺はカウンターの方に足を向けた。

ちよいと高さがあったので、魔法で浮遊させてもらうと店主が目をマン丸にしていたが、気にしない事にした。

さて、何で呼んだのかと思っていたら、彼女はカウンターの上を指さしこう言った。

「あんだ・・・この剣どう思う？」

「・・・凄く、大きいです」

「は？いや、まあ確かに大きい剣だけど、聞きたいのはそう言う事じゃなくて・・・」

しまった。思わずネタが・・・。

『（アヴェさん自重）』

「……………すまん」

おほん、とりあえず仕切り直した。

「この大剣、ゲルマニアのシュペー卿の一品らしくて、私はいいと
思うんだけど」

「俺もそう思うぜ。こんなカッコいい剣、男なら使ってみてえよな
!?!」

サイトが若干興奮気味で俺にそう言ってきた。

どうも新しいおもちゃを与えられて、これすげえだろと言って来
る子供に見える。

同意を求められても、俺はまだ現物をちらりとしか拝見していな
いんだがな。

「どれ……ふむ」

カウンターの上面おかれていたのは、キンキラ金に装飾が施され
た大剣。

見事な程大量の宝石というデッドウェイトが追加装備され、扱い
辛そうである。

すこし持ってみると案外軽く、重さ的には金なんてのは一切使わ
れていない。

うん、これはあれだな。

「マスター、サイトさん、正直にいいます。コレは壁に飾るもので、
使うものじゃありません」

「な、なんでよ!こんなに綺麗じゃない!」

「そ、そうだそうだ!カッコいい剣だろうが!」

き、綺麗とかカッコいいってあーたら。使えなかつたら武器じゃないでしょうが。

「これは儀礼用の装飾剣で、所謂鑑賞して楽しむ為に綺麗に作られている剣です」

「ふえ？ そうなの」

「ええ、しかもこれ、一見すると金みたいに見えますが」

俺はコンコンと刀身の横を叩く。

「表面はメッキ、しかも本体の8割が青銅です。残りは適当にまざった不純物ですね。かなり質が悪い上・・・多分実戦で使用したら、敵を一人斬り殺した段階で折れますね」

そこまで語ると、店主の目つきがドンドン奇異なモノを見る目つきへと変わって行く。

まさか子供がそこまで武器に詳しいとか、普通は思わねえわな。

「自分なら使用するのには遠慮します。死にたくないですし」

「おいおい、最悪護身用になるんじゃないかよ？」

サイトはあの剣に未練があるらしく、俺にそう言ってきた。

いやまあ日本ならアレで良いかもね？ 自宅警備員用の武器って事ならさ。

「サイトさん、何故にこの世界に普通に武器屋があると思ってるんですか？」

「え？・・・それはやっぱり魔物でも出るとか？」

「ソレも無くは無いでしようが、基本は自衛の為です。しかもソレは人間に対してのね」

「え!？」

「生憎ですが、ファンタジーの世界な様でも、我々には現実です。そして襲って来るのは魔物では無く盗賊、つまり人間が多い」

そこまで言うと、大体理解出来たのだろう。

サイトの顔色が少しばかり青ざめていた。

「ともすれば、このような見かけ倒しの裝飾剣は『俺は金持ちだ! 鴨がネギしよって来たZ E』と盗賊に言いふらす様な行為になりかねません」

考えてもみなよ? 騎士鎧に身を包んだ大柄な人間ならともかく。裝飾剣を持つのは、平均的日本人体型であるサイト君である。

背中に背負ってなんとか持てると言う人間で、しかも服装がパーカーと来たもんだ。

これじゃ示威行為にすらならないだろう。むしろ異様さが目立つ。

「なら、あなたならどれを選ぶのよ?」

「そうですね・・・自分がお勧めするのは」

ルイズ嬢にそう言われ、俺は先程微弱な魔力反応を感じたあの籠を指さした。

「あそこの籠の武器を進めます。すこし古いモノばかりですが、実戦仕様の武具が多いです。襲われた時すぐに壊れてデッドウェイトになってしまふ剣よりも、ずっと扱いやすく、また壊れにくい武器だと思われまます」

と、俺がここまでうんちくを披露したところで・・・。

『すげえじゃねーか！貴族の娘っ子の連れの癖して随分と武器にくわしいな！』

「わ！なんだ！？誰か居るのか？」

店内に誰かの声が響いたのであった。

さて、色々あって戻ってきましたトリステイン魔法学院。
え？武器はどうしたかって？ちゃんと買われましたよ？

『くわあー、ここが相棒の住んでる家かい？おおきいねえ』

「いや、これ家じゃねえから」

『まあこれ程の規模の家とかに住めたら、どれだけお金持ちなんだと』

声はサイトの背中に付けられた剣から聞こえてくる。

その声の主はあの時店に響いた声と同じもの、つまり

『お、ヴィの字は解ってんねえ。男ならこれくらいの家を持つのが夢ってモンだ』

「いや、デカすぎて不便だろう？」

「そつ言うつ問題なのか？」

買ったのはインテリジェンスソードと呼ばれる、この世界のマジックウエポンだ。

その銘もデルフリンガー、喋る以外はどんな機能が付いてるのか解らない。

しかも見た目もボロボロのサビサビな剣である。

だが、AIで起動している訳ではないらしく、原理は不明である。デバイスマイスター的には、是非とも分解して構造解析を行いたい物だ。

後で触らして貰おう、とりあえずどうやって喋ってんのか知りた
いしな。

「あんた達！入口で止まってんじゃないの！」

『『『『サーセンW』『』『』』』』

「……………なんかむかつくわねえ」

なお、デルフリンガーはヴィズと気が合うらしく、すぐに友達と成っていた。

そして……………デルフもヴィズに毒され始めている……………どうしよう？

ま、暗い性格になるよかマシか、それよりも今はだな

「サイトさん、デルフをちょっと貸して」

「ん？何でだ？」

「錆び酷いでしょ？自分が整備しておく」

俺がそう言うと、一瞬きよとした顔をしたサイト。

そして、若干呆れた眼で俺を見て来た。なんだよ？

「……………お前本当、何でも出来るんだな」

「兵士のたしなみってヤツですよ」

『絶対違いますよねサイトさん』

「同感だぜ」

『俺っちもそう思うぜ、フエン坊よ?』

響くパツシングの嵐、つかフエン坊って・・・まあ良いけど。

「それじゃ、よろしく頼むぜ。俺刃物とか研いだことないから助かった」

「はは、任されます。あと鞘の方も改造しておきますね」

「え?何でだよ?」

「まあとりあえず、鞘を背中に担いだまま抜いてみようとしてください」

「解った・・・ってあら?おろ?は、外れないだ?!?」

サイトは身体をねじったり、ひねったりするが、どうやっても鞘から剣が外れない。

大きさ的には俺よりもデカくて、150センチもあるデルフリンガー。

ソレを鞘を背中に付けたまま外そうとするのは至難の業である。

『おいおい、相棒よ?何してんだよ?もっとカッコよくスーツと抜いてみるって!』

「無茶言っな!」

「まあそう言う事です。そのままじゃすぐには使えませんかね」

デルフの鞘に細工を施して、ボタン一つで刀身が出てくるようにしておこう。

出ないとマジで不便そうだしな。

「・・・た、頼むぜ」

「はい任されました」

『さび落とすのか？是非ともやってくれ！』

「了解だデルフ。刀身がすり減るギリギリまで研いでくれよう」

そして俺は鞘の方を持つと、その場を後にした。

つか、この身体じゃ重てえ・・・魔法で強化しておこう。

俺の身長が今は130cmだしなあ・・・俺は剣より小さいのか・・・。

なんかそう思ったら、ちよいとだけ鬱な気分になった。

さて、いつも錬金の練習してた広場へとやってきた。

研ぎ石は来る時に厨房で借りたので準備はOK。

とりあえず剣の柄に触れて、デルフを引き抜こうとしたのだが

「ん？この感じは・・・」

『おお、なんだ？俺っちが吸われそう？』

なんと、この剣には魔力吸収の効果が付いてるのか！？

ぜ、是非とも解析させてもらいたい！ヴィズの強化につながりそうだ！

だがその前に

「デルフ、魔法吸収機能をOFFにしてほしい」

『え？俺っちそんな機能あったのか？』

『まさか知らなかったのですか？自分のことなのに？』

『こつ見えて造られてから6000年経過してっからなあ』
『つまりは認知症ですね？解ります』
『マテヤコラ』

なんか自分に付与されていた機能のことまで忘れてるなんてな。
しかしデルフの話が本当なら、経過年数だけなら軽くロストロギ
アクラスだぞお前？

話が進まないからスルーするけどな。

「一応こちらの方が力が上だから、俺自身には何ともないけどさ。
作業に集中できない」

『おう、すまね・・・え？』

「どうしたのデルフ？」

突然声が止まったデルフ。揺さぶっても反応が無い・・・あ、不
味い。

「ま、魔力ライン緊急接続！」

『 ぴー、このけんは、げんざいつかわれておりません』

「ドッセイ！ ガツン！」

『イテツ！ おろ？俺は一体？』

地面に叩きつけると正常に戻った。あ、あぶねえ、間違えて吸収
しちまうとこだった。

とりあえず俺から疑似的な魔力供給ラインを引いたけど、後少し
遅かったらヤバかったぜ。

幾ら俺でも、この剣のは吸いたくない・・・なんとなくだけど。

「ごめんごめん、間違えて吸い取るとこだった」

『・・・それはいい。つかさ、聞いて良いか？』

「ん、何？」

『お前さん何者・・・いや“何だ”？』

「・・・何がだ？」

『とぼけるなよ。俺っちは俺を持った対象のことが解る』

・・・何とまあ、いらねえ機能を組み込んだもんだ。

「まあ 簡単に言えば元人間だ。だが俺は自分のことは人間だと信じている」

『いや、しかしよお？それにしてもフェン坊の中身は 』

『デルフ、それ以上マスターを悪く言うなら許しませんよ？』

ヴィズが見かねて口をはさんだ。

まあ、デルフの口調からすると軽い好奇心からの様だったみたいだ。

だが、あまり触れて欲しいもんじゃない事も事実なんだよな。

「元の体質と、ある事故の所為でね。人間から徐々に魔法生命体に置き換わってるんだ」

『ふーん、つまり呪いをかけられたみたいなものか？』

呪いか・・・。

「・・・まあ、あなたが間違っても無い。とりあえず秘密にしておいてほしいかな」

『あいよ、幾ら俺でも人様の秘密をべらべら喋る様な剣じゃねえぜ』

そうデルフが答えると、今度はヴィズが少しトーンを下げた口調で口を開く。

『喋ったら、その口を溶接しますからね』
『いやこええよヴィの字』

俺も怖いと思うぜ。流石にソレはさ。

帰る時俺の中に戻って、さっきから黙ってたリンも、俺の中でガタガタ震えてた位だぜ。

まあこの話はタブーって事でとりあえずデルフのさび落としを再開したのであった。

「20Mのゴーレム…ガンムとタイマン出来るな」

「20Mのゴーレム…ガンムとタイマン出来るな」

妄想戦記

さて、結局のところ、研ぎ石では錆びは落すことが出来なかった。幾ら擦っても錆びが落ちる気配すらなかったのだ。

流石におかしいと感じ、デルフに聞いてみたモノの知らん忘れたの一点ばり。

ただ、その言い方にムカつてきて、彼が消滅しない様保護する為に送っていた魔力量が、ほんの少し増えた瞬間にソレはおきた。

デルフがぼんやり光ったかと思うと、刀身から錆びがドンドン消えていき、光が消えた時に見事な大剣が現れたのである。

流石にその事は驚き、全員で“はあ？”って感じで目を見開いてしまった。

おいおい、魔力を吸って姿を変えるなんて、マジで魔剣だったんだなと思っただぜ。

「さて、具合はどうだ？」

『おう、なんでだかしんねえけど、なんかすつきりしたぜ。俺に何したんだフェン坊？』

「なに、ちよいと解析と強化をね」

やった事は、薄れていた術式刻印と同じ術式を再度掘りこんだ。それによって、魔力吸収の効果が強化・・・いや、元に戻したと言っべきだろう。

また、どうやら吸収した魔力を貯蔵する為の機能がやや欠損していた様なので、俺の持っているMTS-40の構造を模倣して錬金した小さな部品を握り手の部分に仕込ませてもらった。

今のところ作れる部品が少ないので機能はそれだけだが、まあ練習台としては十分だろう。

しかし、調べれば調べるほど驚いた。

コレだけの人格を持たせてありながら本当にAIの類が搭載されていないかった。

代わりに解ったのは、オングストロームの単位で刻まれた術式。

流石にそれだけは解析が出来なかった術式である。

恐らくデルフという存在の根幹をなす術式なのだろうが、今の俺の技術では解析不可能だ。

例えば設備が整っているところでも、この術式を解析するには2〜30年はかかることだろう。

この剣を作った人は、天才なんてもんじゃない。天才を越えた天才だったと思われる。

電子部品も無しに、コレだけの魔法システムを組み込んだ逸品を作り上げたのだから。

俺が後100年以上生きて研究を続けられていたら、恐らく作れるようになるかもね。

「デルフのお陰で、魔力吸収術式の解析も出来た。感謝する」

『何だか解んねえけど、良いってことよ』
『鞘の方も再設計しておきましたから、これで抜く時に引っ掛かることは無いでしょう』

鞘の方はデルフを引き抜こうとある程度までスライドさせた時に、胴体部分が観音開きに開いて剣を排出できるように改造させてもらった。

勿論、その為の部品は錬金で作り、固定化も掛けさせて貰いました。

工房要らずのこの世界の魔法、まじで便利すぎる。

「とりあえず、もう夕方だし、サイトさんに返しに行きますかね」

『きつとデルフの姿を見ておどろきますよ』

「リンもそう思うですう」

『そうかな？俺っちカツコよくなった？』

「「「なったなった」」」

少なくともあのぼろ剣仕様よりかはね。

さて、夜の学校というのは得てして怖いモノであるが、例外が存在する。

ソレは人がいる場合、つまりは全寮制の学校の場合それ程でもない。

教室はともかく、すぐ近くに人間がいるのが解るからである。

虫。

さて、そんな夜の学校の壁に吊り下げられた一匹の哀れな衰

「誰か助ける〜!!」

もとい、サイトだ。サイトがロープでグルグル巻きにされている。彼は何故か夜の学校にて、ロープで縛りあげられて壁に吊るされているのだ。

決して変なプレーに目覚めた訳ではない事を、彼の名誉の為に述べて置く。

「フエーンっ！俺を助けてくれーっ!!」

「フエーン、助けちゃだめよ？」

「・・・アイマム」

なんでこうなったか・・・ソレは少し前に遡る。

デルフリンガーの修復が終わり、俺たちは良い気分でルイズの部屋に赴いた。

それが全ての始まりだったのである。

.....

.....

.....

「ん？人の気配？」

『対人リーダーに感あり、部屋の中に4名の人間を確認』

「お客様でも来てるのでしょうか？」

デルフを担いで、ルイズ嬢の部屋に戻ってくると、複数人の気配を部屋の中から感じた。

もう既に夜になり、こんな時間に彼女の元を訪ねてくる人間はいないはずである。

「あ、この魔力パターンはキュルケさんですう」

「あ、本当ですね」

「キュルケさんが？何でまた？」

彼女とルイズ嬢は仇敵同志であり、間違ってもこんな時間にお互いの部屋に行き交う様な間柄では無い筈なのだが……考えても仕方ないので、俺はドアに手を掛けた。

「只今もどりm「この剣良いでしょう！？ね、ダーリン！……
ダーリン？」

「うわ！やめるキュルケ！」

ルイズ嬢の部屋に入った途端、サイトに抱きついてくるキュルケ嬢がいた。

それに反比例するかの如く、ドンドン機嫌が降下中の我がマスタ―であるルイズ嬢。

そろそろ氷点下を下回るのではと思いつつ、俺は被害が及ばない位置に避難する。

どうせまた、サイトが何かやらしたのであるう。

最初の内は便宜を図っていたが、最近はそう言ったのが多過ぎでかばう気にもなれん。

もしかしてアレか？好きな子には意地悪しちゃうって……
幾らなんでもソレは。

「な、な、何、人の使い魔に色目使ってるのよツェルプストー！！
後サイトー！！なんでこの女に尻尾振ってるのよ！この犬く！！」

「ちよっ何！あべし！」

『あ、相棒おお！』

うん、世界を狙える右ストレートが綺麗に決まった。

いつもの事だし魔法を使った訳ではないので、あまり心配はしていない。

しかし、現状が良く解からないので、頭を捻っていると・・・。

クイ…クイ…

袖を引っ張られる感じ、お隣を見ると髪の毛が青みがかった女の子が立っていた。

大きな眼鏡と背丈と同じくらいの杖が特徴的である。

そして彼女を見た途端、俺はシンパシーを感じた。

「アレはもしかして、サイトさんが原因？」

「そう」

いきなりの質問に動じることなく、必要最低限の言葉で応じる。どうやら無口系らしい。ふむ、俺の最初の頃と同じではないか。道理でシンパシーを感じる訳である。仲間意識とでもいうのかな？

「・・・自分はフェン・リーダー、ルイズ嬢の従者をしています」
「タバサ」

彼女はそれだけ言うと、懐から本を取り出して読み始める。

あー、随分と個性的な方なのね。

「あのうタバサさん？」

「タバサ」

「いや、一応敬語を」

「いらない」

「・・・あそう、それじゃタバサ。アレは何？」

「痴話喧嘩」

あ、いや、間違いでは無いんですがね・・・。

「そうじゃなくて、何故キュルケさんがここに？」

「彼にプレゼントがあるらしい。私は・・・気が着いたら彼女に引っ張られここに居た」

さいですか。ふと向こうを見ると・・・おお、蛇と猫の幻影が見えるぜ。

とどのつまり、前回の決闘で才人に一目ぼれしたキュルケがプレゼントを渡しにきたのだと。

理由はギーシユを最後の方で瞬殺したのがカツコ良かったらしい。

「なんでツエルプストーからのプレゼントなんて受け取ろうとしてんのよ！」

「いいじゃない！ダーリンが気に入ってくれれば！」

「うるさいわねえ！黙ってなさいよ！うし乳！！」

「な、まな板に言われたくわないわよ！！」

この状態をあえて言うなら、若気の至り？いや、やっぱり痴話喧嘩の方が正しいな。

幾多の戦闘をくぐり抜けて来た俺でも、流石にアレに割り込む勇

気はない。

考えてみると、このタバサという少女は、よくキュルケさんに振り回されるのだろうか？

「・・・なに？」

「いや・・・タバサ」

「？」

「一緒に居る人間がアレだと・・・お互い苦労しますな」
「（コクコク）」

かなり真剣な顔で頷かれました。やはり苦労人だったようです。なんか、また新たに絆が芽生えた気がするよ。

「もう少し離れますかねえ？」

「良い判断」

とりあえず、まだこちらに飛び火しそうな距離だったので、彼女と安全圏に離脱した。

さて、この後はこのしょうもない痴話喧嘩を眺めていたのだが

「フエン！いくわよ！」

「ドコにですか？」

いきなり、ルイズ嬢はそんなことをおっしゃられた。

そんな行き先も言わずに行くと言われても、こちらとしては動きようが無い。

「広場に行くの！あの女と勝負するの！！見てなさい！絶対撃ち落

してやる！！！！！」

どうやら、そう言う風に話が展開していたらしい。

何でもサイトを吊るし上げ、ソレを先に撃ち落とした方が勝ちとか言うものらしい。

買った場合、買った方が用意した武器を、今後サイトは使用する事になる。

つかサイトがルイズ嬢が買った武器を選んでれば、こんな事にならなかつたんだよ。

何故に両方ともとか言うかな？どう考えてもソレは鬼門でしょうに……。

尚、キュルケさんがサイトにプレゼントしようとしたのは、あの店にあつた大剣……。

等では無く、何故か立派な純銀製のガントレット。

シンプルな装飾と強固な固定化の魔法が重ね懸けした一品らしい俺の目から見ても、実戦で十分使えるほどの名品であることがわかる。

しかし何で大剣じゃない？……あ、そっぴやそっぴか。

あの店の大剣は、店主の目の前で偽物だつてことを教えてやる為に、俺がへし折つたんだ。

まさか俺みたいなのがきにへし折られるなんて、店主は予想だにしなかつたみたい。

顎が床に着きそうなくらいにカクーンと垂れさがつてたっけな。

成程……だからあの店の中で一番高いモノを買ってきたと……。

今度の奴はあの紛い物の剣と違って、キチンとした手甲である。殴ると言った動作を考えられて、ちょうど拳が当たる部分には突起が付いていた。

アレで殴ったら、素で痛いこと確定である、しかも鍛えれば剣を掴む事も出来るだろう。

キュルケさんって、中々いい目してるんだ。

しかし、見事な一品だけあって、ボロ剣一本買っただけのルイズ嬢としては面白くない。

綺麗になったデルフは今鞘の中だから、ソレを見れば少しは落ちて着くんだらうけど。

「きしゃー!」

「むきー!」

……しばらくは、アレに話しかけたくないな。ウン。

そして、冒頭へと戻り、サイトは簞巻きにされ現在に至ると……不思議なのは才人を縛ってる縄はドコから出したんだらうな？

『彼も相変わらずですねー』

「まあ、アレだけの一品だ。普通は目移りもする」

デザインも悪いどころかむしろ俺すらカッコいいと思った位だ。

しかもちゃんとした固定化も掛けられており、そう簡単には壊れないだろう。

偽大剣とはちがい、アレには職人の拘りというものが感じられる良いモノだった。

「どうするですう？流石にあの高さは、生身の人間には辛いですう」

サイトが吊り下げられている場所は、下まで2〜3階位の高さはある。

運良くて骨折、悪けりや死亡つてとこかな。

「ま、最悪魔法使つて助けるさ」

『衝撃緩衝魔法を準備しておきます』

「一応リンも治癒魔法を準備しとくですう」

そう言う訳で俺たちも、すぐに駆けつける位置にたった。

だからサイト、怪我しても安心だから、落ちても大丈夫だぞ？

大丈夫、リンとする俺の治癒魔法は、死んでなきや直せるからな。

「行くわよ！」

先行のルイズが、ルーンのスペルを唱えた。リンに指示し、解析を使って解析を行う。

後で使われたルーンをエミュレートする為だ。

あ、そっぴやサイトの左手にも、“使い魔のルーン”とか呼ばれる物が刻まれてたな。

結局あの決闘の後から全然調べてないから、機会があつたら調べてみるかな。

「　　ファイアーボール！」

さて、ルイズ嬢が唱えたスペルにより、イメージ化された精神力が魔力ラインを形成する。

そのままタクトの先に送り込まれ、その力はタクトを向けた先の空間にて

ドンっ！

爆発する。おお、今回はガルヴァドス一発分か。生身で喰らったらザクロだな。

「危ねえーだろうが！殺す気か！」

「う、うるさい！ちよつと手元が狂っただけよ！」

いやいや、ノーコンもビックリくらい外れてますぜ？

しかも外壁にちよつと傷が付いてるんですが・・・不味いんじやね？

「次は私ね　　ファイアーボール！！」

サイトの叫びを無視し、キュルケも同じようにルーンを唱え魔法を展開した。

その魔力ラインのタクトへの繋がり方は、ルイズ嬢よりもずっと安定し、スムーズだ。

タクトの先に留まる力は抜ける事無く収束し、炎の塊として発射される。　　って危ない！

「あ、あ、あたるううう！うわあああああ！！！！」

「サ、サイトー!」「」

『(ありや当たりますね)』

ヴィズが念話でそう言ってきた。俺もそう思うぜ。

キュルケさんが放った焔は、直撃はせずに少し上にズレ、縄に直撃した。

ブチ・・・ブチブチ

「な、何かいやな　ブチンツ!!　やっぱりいい!!」

そのまま落下するサイト、俺はすぐさま衝撃緩衝魔法を発動させようとしたが

ドサ

「あいた!」

何故かサイトは、すぐ下にあった土の塊の上に落下した・・・すぐ下?

ズゴゴゴ

何と言う事でしょう。先程まで何も無かった壁のすぐ横に、素敵なオブジェが現れました。

その圧倒的な質量は、どんな壁でも粉碎出来そうな程、大きくそびえ立っています。

しかも、ガンダ　と一対一が可能な程の巨大さを持ち合わせつつ、繊細な動きまで

『(マスター!注意してください!ゴーレムです!)(』

うん、現実逃避は止めようか？なんじゃありゃ？！
あんなでたらめな大きさを持つ土が動いてるとかマジかよ！？

「リ、リン。アレの中身は？」

「か、完全に中心まで土で出来てるですう」

マジで？ この世界の魔法はどれだけ出鱈目なんだろうか？

いや、魔法自体が出鱈目と言われたら、返す言葉も無いけどさ。

それでも、土オンリーで構成された20mクラスゴーレムとか聞いたこと無いぞ。

ものすごく・・・燃費が悪そうだ。

「な、土のゴーレム！！」

「なんでこんなところに！」

流石の二人もゴーレムには驚いたらしい。

決闘の事も忘れてその場から離れようとしていた。

ってサイトの事忘れてた！

「サイトさん！逃げてください！」

「無茶言うなア〜！！」

『相棒〜！！』

絶賛混乱中！！じゃ無くて！！サイトは今だ縛られて気げられないんだっ！

俺は慌ててフォトンバレットを形成し、サイトの縄だけを切断した。

サイトは脱兎の如く此方へと逃げ込んで来る。

ゴゴゴゴ

ゴーレムは俺たちに目もくれずに、先程ルイズ嬢が付けてしまった傷の前に立った。

なんか大体予想が付いてるんだけど……。

ギユン ドゴーン！！

予想的中、ゴーレムはそのビッグなフィストを傷に向けて振り下ろしていた。

そしてかなりの衝撃だったのだろう。壁に穴が開いていた。

人一人楽に通れそうな程の穴だ。弁償金額どん位になるのかな？

いや、案外この学院の魔法先生が錬金でばっばと直すのかもね。

だがその時、開いた壁の穴の中に飛び込んでいく黒い影が見て取れた。

「誰が入った」

「あそこは、中に確か宝物庫がある壁よね？」

「じゃあ、もしかして土くれのフーケ！」

フーケ？……誰やねん？

「大変よ！捕まえなきゃ！フェン、サイト！いくわよ！」

「ヴァリエールに負けられますか！まてえ〜！」

とりあえず、正論を述べようか？先生呼んでこようよ？

名前が知れているって事は、多分怪盗か盗賊ってところだろう？

という事は相手は本職、おまけに暗いから捕まえるのは難しいと思っただけだな。

「ん？この気配の感じ・・・」

『（マスター、あの人物は・・・）』

「・・・どういう事なんだろうか？彼女、よっぽど生活が苦しの
だろうか？」

「いやいや、普段からセクハラを受けていたと言っし、まさかこれ
はその腹いせ？」

「どちらにしても、良く解らないが・・・どうするか。」

「レーダーと探査魔法がある俺から逃げられる筈無かろう？前編」

「レーダーと探査魔法がある俺から逃げられる筈無かろう？前編」

妄想戦記

馬車に揺られてゝ 盗賊退治

なんてな……全く持って何故学生にやらせるかな？

現在俺を含めキュルケさん、タバサ、ルイズ嬢……

それとサイトの5人がフーケが居たという小屋に向かっている。

なんか、成り行きで盗賊退治に出かける事になっちまった。

以下、どうしてこうなったかをダイジェストでお送りします

「盗賊対峙行く勇氣ある者は？」

「我々は……」

「行きます！」

「よし、行つて来い！」

という訳で、え？全然解らん？でも実質こんなもんだったぜ？

実は先生方は交代で夜勤を組み、宝物庫の番をしていたんだそう
な。

だが昨日の晩に、宝物庫の壁が破られた時、夜勤の先生は夢の中。
熟睡中で全然気が付いていなかったらしい。

危機管理がものすごく甘いとか内心想いつつ、情報を収集すると
更に色々あった。

結局先生がたは責任の擦り付け合いを行い、話が全然進まない。
殆どの先生が、その日の夜勤であったシユブルース先生を責め立
てていた。

それに合を煮やした学院長は、誰ぞ盗賊退治に行く者はいないか
と言うが……。

誰ひとりとして、己から杖を上げようとする先生が居なかったの
である。

そのあまりのふがいなさにね、正直、呆れて物が言えんでしたわ。

口では案だけ責任を責任をとっておいて、いざって時には黙る
とかね。

むしろ、そこまで保身に走れる人間が多い学校つてのも問題無く
無いか？

学院長も学院長だ。何故わざわざ教師だけで解決しようとする？

相手は貴族相手専門の盗賊であるなら、メイジを相手にするすべ
もあると言っ事だ。

ちゃんと訓練を受けたメイジならともかく……

日がな一日、自分の属性は素晴らしいとしか教えない教師陣が勝
てる様な相手では無い。

唯一戦えそうなコルベールさんも、何故か手を上げなかった。
・・・多分戦うのを恐れている。そこらは大體解る。

だけどさ、アンタ以外に行ける人いないのに・・・空気読もうぜ？

まあ、そんな訳で、誰ひとり手を上げないという状況になりました。

そしたら、ウチのご主人さまが手を、というかタクトをあげちゃったんですよ。

勇気と蛮勇は別モンだつてのにね。序でにキュルケさんとタバサも上げていた。

かなりの頭痛が来ました　　コイツら、バカじゃねえの？
とね。

実質この三人の中で戦える人間は、俺が見た限りタバサくらいしか居やしない。

で、使い魔扱いである俺達も、ルイズ嬢に引っ張られて同行する羽目に・・・。

彼女たちが下手して死んだらどうすんだらうね？バカなの？死ぬの？

そんな事考えつつ、馬車に揺られて結構時間が立ち、森の入口に到着した。

フーケのアジトと思われる小屋は、この森の中らしい。

ちなみにこの情報は、ロングビルさんからもたらされたモノだ。

・・・何がしたいんだらうね？いやホント。

さて、森の中の道を歩いて、フーケを見たと言う小屋に向かう途中。

道中キュルケさんがサイトを誘惑すると言う事をした以外は、特に問題無かった。

まあ般若の如く怒るルイズ嬢という現象が起き、また喧嘩になりそうだったけど……。

流石にそれを咎める気も起きなかった。やるなら勝手にしてくれて感じた。

そしてそれをタバサとロングビルさんも見習った為、彼らはその場に放置されたのであった。

少ししてその事に気が付き、彼らが追いついた頃には、既に小屋のすぐ近くまで接近していた。

何故かルイズ嬢もキュルケさんも怒っていたが、勝手にケンカ始めたのは其方でしょう？

正論を前に口をつぐんだので、少しは静かになったのはありがたい。

「あそこの小屋がフーケのアジトらしいです」

さて、そうロングビルさんが指差したのは、ボロボロの小屋であった。

どう考えても、数年いやさ十数年は手入れが為されていない様な小屋である。

「……幾らなんでも、アレはアジトでは無いだろう」

「ん？フェン、なんか言ったか？」

「いえ何でも無いですよサイトさん」

……流石に多分誰も居ないだろうな。

まあ当然の事だが、一応人間が居ないかくらいは調べておこう。
仲間とか居たら厄介だし、警戒するに越したことは無い。

「（ヴィズ、対人センサーに反応は？）」

『（ありません。周辺のスキャンをリンにお願いしましたが）』

【こつちも何も感知出来ません。あの小屋の周辺はクリアです
ね】

仕掛ける時間も無かったってところか……。

「私たちの任務は、盗まれた破壊の杖と光の宝玉の奪還よ」

「ちよつと、何でヴァリエールが仕切ってるのよ」

「だって他の役いないじゃない」

……とりあえず、ちやつちやと行って戻るかね。

俺は後ろで作戦を練っている（と、思われる）彼女等を置いて先
行したのであった。

S i d e 三 人 称

フェンが既に秘密裏に小屋に侵入を果たしていた時。

ルイズ達は今だどうするかで作戦を練っている最中であった。

ちなみにフェンが先行していた事を、タバサだけ気が付いていた
が喋っては居ない。

別に意地悪とかでは無く、只単に言いそびれていたただけだった。

「じゃあ作戦を練りましょう」

「コレで何度目かしら？」

「う、うるさいわね。作戦いうごとにダメ押ししかないアンタは黙っててよ」

「ダメ押しされる様な作戦しか思いつかない貴方が悪いんじゃない」

ちなみにルイズ嬢が考えた作戦の一つは、小屋ごと魔法で爆破である。

いや、戦術的観点から見ればあながち間違っではない。

だが今回の目的は盗まれた財宝の回収も含まれているので、この作戦は使う事が出来ないのだ。

「畏があるかも知れない」

青い髪の少女タバサも、珍しく口を出した。

というか、いい加減話を進めたいらしい。

「なら、1人偵察に出せばいいんじゃない？」

「おい、なんで俺を見る？ フェンならどうす……ってあれ？ フェンは？」

ここにきてようやくフェンが居なくなっている事に気が付いた彼女たち。

辺りを見ても、姿は見えず。

「もう！ 何よ勝手に迷子になって！」

「いや、フェンに限って迷子は無いんじゃないか？」

「そうねえ、あの子色々すごいものね」

「私から錬金も教わるくらい勤勉家でもありますしね」

「「え!?!」」

そこまで話していると、後ろにいたロングビルも口をだした。先程まで作戦を練っていたというか口論していた3人も驚きの目で彼女を見る。

彼が色んなところに顔を出していたのは知っていた。

かなりのレベルの魔法使いである事も知ってはいた。

だが、まさか彼女から魔法を教わっていたとは知らなかったのがある。

「私も元は貴族の家の出ですからメイジではあるのです」

「あ、いや、ミス・ロングビルがメイジなのは知っていましたけど」

「フェン君がミス・ロングビルから魔法を習っていたと言うのは初耳ですわ」

「あら、そうでしたの?色々と実地で教えて欲しいと言われまして」

まあ、実際の所は作られる貴金属という貴金属を、

全部授業料という事で没収していたのであるが、

ソレはあえて口に出さないのがロングビル・クオリティ。

「・・・すげえなフェン、何時の間に魅惑の個人授業とか」

「アンタ何か言った?」

「いえ、何でもありませんご主人さま」

流石のサイトも、ある程度は危機察知能力レベルが向上しているようである。

自分の不用意な発言で何度絞められたか数知れず、いい加減馴れたモノだ。

しかし、どうしよう。フェンを放置する訳にもいかない。

「とりあえず、フェン君を探しに行つてきますね」
「え?! だけどミス! このあたりにもしもフーケがいたら!」

そうキュルケが声を上げる。ここは所謂敵地。
どこにフーケが潜んでいるのか解らないのだ。
だが、彼女はクスリと笑みをこぼしつつ

「大丈夫です。オスマンに拾われる前はコレでも一人で生きていました。ある程度の体術の心得はありますから」

そう言つと、ルイズ達が何か言つ前に、森の中へと消えて行つてしまった。

「どうするの? ヴァリエール? 小屋に入る?」

「そうね。ソレが良いかも」

このままここに居ても仕方が無い。なら今は行動を起す時である。
う。

ルイズが行こうと言いかけたその時

「マスター、ただ今戻りました。盗まれた宝というのはコレですか?」

ズッコケるルイズ。背後を見れば、さっきまでいなくなったフェンの姿が。

どうやら小屋に行つて戻つて来たらしい。ちゃんと盗まれた宝もその手に持っている。

「おまえ、勝手にいなくなるなよ」

「そうよ。心配したじゃない」

「いや、なんか全然話が進みそうに無かったもので……」

サイトとキュルケがフェンを窘める。

だが、フェンはどこ吹く風といった感じだ。

「あ、アンタねえ！怪我したらどうすんのよ！もしフーケがいたら」

「そこら辺は既に調べておいたので平気です。自分は遠くからでも人間を感知出来ますから」

「だけど！」

「いいじゃないのヴァリエール、怪我とかして無いんだから」

そう言っただけでキュルケがフェンを背後から抱き締める形で抱きついてた。

それに顔を赤くしているフェンを見ると、ルイズはちょっと癩に障る感じがした。

まあソレはさて置き

「……宝」

「あ、一つは背中に、もう一つは多分この箱の中です。自分はまだ中を確認して無いので……」

タバサがそう居ながら手に持っている杖で、フェンの小脇を指さした。

どうやらあの小屋から持ちだした物らしい。

「あら、確かに片方は破壊の杖ね」

「それじゃ、箱の中の光の宝玉の方も見たことが？」

「あるわよ。箱を開けてくれないかしら？確認するから」

どうやらキュルケは宝を見たことがあったらしい。

フェンは手に持っていたアタッシュケース大の箱を地面に置き、蓋をあけたのだった。

S i d e フェン

彼女たちが騒いでる隙に、ちゃっちゃと取りに行きました。

周囲はヴィズのセンサーとリンが解析を行いクリアである事は解っていたので安心だ。

小屋にも特に仕掛けらしき物は見られないので、ドアを開けて中に入る。

「・・・クリア」

『まあ形ですけどね』

言うなよ、せつかく格納領域からジリーノ取り出した意味無いじやん。

室内戦と言えばショットガンな気がするのは俺だけじゃ無い筈。

ちなみにまだB Aは展開して無いぜ。アレは切り札みたいなもんだしな。

【・・・なんか、凄く埃っぽいですう】

「アジトとかセーフハウスって訳じゃ無さそうだな」

『手入れも何もされてません。置いてあるものからして、マタギヤ柴刈の人の為の小屋じゃ無いでしょうか？』

必要最低限の物しか無い。家具もあつてベットだけである。おまけにもう何年も使われた形跡も無いらしく、埃が舞っている。こりゃ本当にヴィズの言う通りかもなあ。

「うーんと・・・お、あつた」

そして探し物は案外簡単に見つかった。チェストの中に無造作に放置されていたのだ。これで一応任務完了という事になるのだが・・・。

『テーブルの上とか、見つけて欲しいって感じですね？』

【あの人、何がしたいのでしょうか？】

さあな、だが言えるのは・・・。

「こつちの方は何か映画とかで見た事ある様な」

『M72 LAW、アメリカ軍がベトナム戦争の頃から使い始めた携帯用対戦車ロケットですね。安価な兵器の一つで、今でも一部現役で使用される使い捨てロケットです』

・・・詳しいなオイ。

『ネットって便利ですねー。デバイスである私は睡眠の必要はありませんしね』

「・・・まあハッキングもほどほどにな
『了解』」

コイツどうやら、はやてのところに居た時は、ヒマな時間ネットばっかやってたらしい。

お陰で変な無駄知識が増えていると思っていたが、まさか現行兵器まで……。

ある意味便利だけどな、辞書が勝手に単語増やしてくみたいで。

「ん？この箱は……？」

【あやや！？解析が出来ないですう】

『何か魔法的処置が為されているのでしょうか？』

「解らん。だが、これと一緒にあったと言う事は、この箱の中身が目的の物である可能性は高い」

少なくとも、盗まれた宝は破壊の杖と光の宝玉だ。

この中身が光の宝玉であるなら、数的にはあっていると思う。

鹿光の宝玉がどんなものか俺は知らないから、一度戻るか。

「一度戻るぞ」

『【了解】』

そして、俺達は宝を持ってルイズ達の元へと戻ったのであった。

.....

.....

.....

「それじゃ、開けます」

箱を地面に置き、中を確かめる事にした。

コレで中身が全然違ったら、あの人を問い詰めなきゃならん。その前に何でこんな事したのか知りたいところだぜ。

そして俺は、箱を開けた。

中に入っていたのは、小さな灰色の玉と、黒い玉……。

「え……あ……」

「ツエルプストー、これで間違いないの？」

「どれどれ？うん、まちがいないわ」

「ほんと？キユルケ？」

「間違いないわよ。去年宝物庫で見たのとおなじだし」

有り得ない、まさかそんな……。

「あ、コラ！フェン！ソレはおもちゃじゃないの！箱に戻しなさい」

「……」

「聞いているの！フェン！」

ルイズ嬢が何か言っていたが、そんな事関係無い。

俺は、灰色の玉を手に取り、ソレをしつかりと見据えていた。

この光の宝玉と呼ばれていた玉が何なのかよく知っている。

これは……コイツは。

「……血縁者権限を発動、魔力ライン接続」

「……Confirm the use of relat

ive authority approval, restart

the system」

(血縁者権限の使用を確認・・・承認、システムを再起動)

機械的な音声がある場に響きわたる。

ソレは俺にとっては、とても懐かしく感じられる声であった。

この合成音は骨の髄にまで滲みこんでいるのだから・・・。

「「しゃ、喋った!?!」」

「?!」

「お、おいフェン、これってまさか」

「・・・ええ、自分はコレを知っています」

俺のDNA情報で起動出来た・・・間違いない。

これは

「これは　自分の母上の・・・デバイスです」

その宝玉は、ラプターの異名を誇る母上が、恐らく最後まで使用していたストレージ。

銘はグラシリス、父上が作りだしたストレージデバイスの最高傑作である。

俺はそれをノーマルモードで起動させ、オーソドックスな槍状の杖へと変えた。

「凄いわフェン!貴方ソレを使えるのね?」

キュルケさんがウキウキとした顔で俺にそう聞いてきた。

俺は血縁者権限でアクセスを試みたが・・・すべてエラー。

それが意味している事も・・・理解した。

「・・・いいえ、今はもう使えません」

「な、何だよ？」

「・・・この杖は機密情報の漏えいを防ぐ為に、持ち主の心臓が停止した段階に、中の魔法が全てクラッシュし、コア以外のすべての記憶媒体が焼き切れる用設定されています。つまり」

起動して、中を確かめていた俺は、この事を口では言いたくなかった。

行ってしまったら・・・認めてしまおう気がしたから・・・。

「持ち主の死亡を感知し、この杖も後を追って自殺しました・・・新しく命を吹き込まない限り、これが動く事はありません」

「え？」

「死亡って、でもこれってフェンの母親の持ち物で・・・あっ」

サイトがしまったと言った感じで、口元に手をやるのを苦笑して見た俺。

他の人もどこか気不味い表情をしているのが見て取れた。

「・・・大丈夫です。覚悟は・・・してましたから」

一応覚悟はしていたさ・・・異世界に飛んだ時からさ。

俺はもう一度、俺の横に突き立てた大きな杖を見上げてみる。

「ま、その話は学院に戻ってから、学院長に聞いてみる事にします」

こんな設定してるのは、俺の知る限り母上位しか居ない筈。

・・・まさか、この世界に流れ着いていたなんて。

この事については、学院長に話を聞いてみなければなるまい。

ソレはさて置き

「ところで、ロングビルさん？なんで木の後ろに居るんですか？」
「ガサ」

俺はすぐ近くの木に向けて声を掛けた。

その方向に顔を向けるルイズ嬢達だが、どこに居るのかタバサを除いて解らない様である。

まあ木の陰に隠れてたら、見えないから普通は解らんわな。

「ロングビルさん？どこに居るんだよ？」

「ほら、その藪がある木の陰ですよ」

一応対人レーダーで全員の位置は感知していた。当然彼女の位置もである。

特に彼女の場合は、魔法を使用するのではないかというのも考えてサーチャーを使った。

脳内投影で見ていたのだが、相変わらず視界が複数脳に直結される感覚だけは馴れないぜ。

まあ見張ってたが、何かしようとしていた訳では無く、只覗いていたみたいだったけど。

「探しましたよ？でもフェン君とは入れ違いだったみたいですね」

「そうみたいですな。でも何で木の後ろに？」

「話を聞いていて、何か出て来れる雰囲気じゃなくて……」

ああ、まあそりゃな。普通は出て来れないよな。普通はさ。

「ところで盗まれた宝は全部？」

「フェンが見つけてきてくれたわ。ミス・ロングビル、任務達成よ」

「ええ、確かに盗まれた破壊の杖と……ソレは？光の宝玉でした」

か？」

彼女は俺が横に立てている杖を指さした。

「ええ、そうですね。コレは魔導師の杖です。特定の人間にしか扱えないね」

「光の宝玉の事を知っているんですか？」

「ええ、まあ・・・これは自分の故郷では良く使われていたものですから」

異世界から来た物と行っても信じては貰えそうにない。

だから本音とウソが半分半分の言葉を、俺はここで話した。

ウソでも無ければ真実でも無い、全てを話す必要も無いしな。

「故郷ではと言うと」

「ええ、自分も扱えます。もっとも、現在この杖は死んでいますし、使えたとしても特定の人間にしか使えないように細工が施されています」

俺ですら血縁者権限で、臨時に起動させられる程度である。

しかもその場合、使用できる機能に色々制限が設けられるのだ。流石は軍用デバイス、そこらのセキュリティは家族にも容赦ない。

「それに、恐らくこちらのメイジには扱えない事でしょう」

「え？そうなのフェン？」

「はい、キュルケさん。自分の魔法とこちらとでは、系統が全然異なります。訓練すれば幾つか使えるかもしれませんが、恐らくすぐには使えません」

「なんだ、残念」

「なんで残念がつてんのよ？大体コレは宝物なんだから、アンタが

使える訳無いでしょう」

「いいじゃない、ただの好奇心よ」

「まあ、そう言う事です。それにこれに使う魔法は、以前ロングビルさんに試してもらったあの魔法系統ですよ？」

「……それじゃ、扱えませんか」

以前実験として、ロングビルさんにこちらの魔法が使えないか試してもらった事がある。

だが、幾ら練習してもらっても、彼女はこちらの魔法を使う事は出来なかった。

俺達がエミュレートしない限り、此方の魔法が使用出来ないのと同じようにな。

俺がそう答えたので、心なしかがっかりとした感じのロングビルさん。

ふーむ、大方見えて来たぞ。でもまだ理由が不明だしなあ。

戻ったらちよつと強引だけど……問い詰める事にしようかな。ちよつど、今日は固定化を見てもらう予定だったしな。

「はあ、結局フーケは見つからずじまいじゃない」

「あら、良いじゃない？宝は取り返したんだから」

「目標は宝の奪取、盗賊討伐は二の次」

「タバサの言う通りよ。目的は達したんだから、後は報告だけよ」

「……はあ、仕方ないわね。ミス・ロングビル、一度学院に戻りましょう？」

「はい、解りました。馬車を準備してきますね」

そして俺達は一路学院へとんぼ返りと相成った。

ちなみに今回、デルフも連れて来ていたのだが、鞘の中な為喋る

事が出来ず。

後で取り出した時に、少しへそを曲げていたのは余談である。

しかし、学院長に聞きたい事が出来たな。

何故母上のデバイスがここに来ていたのか？

そして、母上と父上はどうなったのか？・・・その最後を聞きたい。

ソレが家族の役目だと、俺は思うから・・・。

「リーダーと探査魔法がある俺から逃げられる筈無からうっ？前編」(後書き)

*まさかの戦闘無し、どうしてこうなった？

まあ次回こそはいれちやる！

ソレでは失礼。

「レーダーと探査魔法がある俺から逃げられる筈無かるっ？中編」

「レーダーと探査魔法がある俺から逃げられる筈無かるっ？中編」

妄想戦記

さて、学院に戻り学院長にご報告タイムである。

フーケは発見できなかったと、学院長に報告したのだが

「ふむ、フーケには逃げられてしまったか。秘宝二つは使い方が結局わからずに捨てて行ったのかの。とにかく、全員無事で何より。秘宝ももどって、めでたしめでたしじゃな」

そうオスマンは明るく言うものの、こちらとしてはソレで流しているモノかとも思う。

大体、一応秘宝なんだから、使い方が解らなくても売るとかの様な事は出来た筈である。

それなのに、秘宝だけ捨てて犯人逃亡、戦闘一つないとか普通は有り得ないだろう。

「君達には学院から、奉仕活動をしたと言う事で成績にプラスしておこう。それとミス・ロングビルにもボーナスがあるぞい。引率御苦労じゃった」

「はい、ありがとうございますオスマン」

何食わぬ顔でボーナス貰っているロングビルさん・・・まあ後でな。

今はそんな事よりも

「さて、今宵はフリッグの舞踏会じゃ」学院長、すこし良いでしょうか？」・・・何かね？」

「ちよっ、ちよっとフェン！失礼よ！」

やべ、なんか喋ってたの遮っちまった。

俺が唐突に口を開いたので、ルイズ嬢は俺を咎めようとしたがオスマンがソレを止める。

「いやいや、ミス・ヴァリエール。一々目くじらを立てることはあるまい。・・・確か君はミス・ヴァリエールの所で従者として雇われている」

「フェンと申します。学院長、あの秘宝の 光の宝玉について少しばかり聞きたい事があります」

「・・・ふむ、解った。他の者たちは退室してもよろしい」

「あ、サイトさんは残って貰っても構いません。多分彼も関係あります」

そう言つと、一瞬眉をひそめられたが、すぐに許可して貰えた。

女性三人衆は先に部屋を出て、部屋には俺、サイト、ロングビルさん、コルベールさん、学院長だけが残っている。

「・・・して、何が知りたいのかね？」

「まず、此方の破壊の杖、これについてはサイトさんが聞きたいでしょう？」

「あ、ああ。　　ソレは俺の居た世界の武器で、ロケットランチャーっていうんですけど、本来ここにある物じゃないんですが、何故ソレがこの学院の宝物庫にあったのですか？」

「ふむ、これはワシが若い頃に命の恩人から頂いた物じゃ」

オスマンが若し時、ワイバーンを討伐しに行った事があつたらしい。

だが当時はまだ一人ではワイバーンを倒すことが出来ず絶対絶命に陥った。

だがその時、いきなりワイバーンが爆発し絶命。

近くにはロケラン携えて、致命傷らしき傷をおっていた人物がいたらしい。

「　　なんとか助けようと思ったが、彼は結局死んでしまったんじゃない。最後まで家に帰りたいと言っておった。この破壊の杖は、その時男が持っていたヤツの一つでな？ワシを助ける際に使われたヤツは、彼と共に葬り、もう一本は記念として持ち帰ったのじゃ」

ほう、随分と昔に地球の人間も迷い込んでいたのか。

実はこの世界ってサルガッソーみたいな所なんじゃ無いだろうな？

まあ、ソレはさて置き

「次に、この宝玉ですが・・・これは自分の両親が持っていたものです」

俺がそう言うと、目を見開き驚きの顔で、俺をジッと見つめたオスマン。

しばらくして何か納得した様な表情となり口を開いた。

「成程、確かに彼等の面影があるのう」

「では、やはり……」
「……実はワイバーンの話には続きがあつてな」

そう言うと、オスマンは静かに語り始めた。

Side 三人称

オスマンが若し頃、ワイバーン退治後

ワイバーンを退治し、自分を助けてくれた恩人を運んでいる時の事。

「はあ、はあ、はあ！」

グルルル……ガアアア！！

「ええい、もう一体いるとは聞いて無い！」

どうやらあのワイバーンはつがいだつたらしく、もう一匹ワイバーンが現れた。

つがいが殺された事を理解したのか、ワイバーンは近くに居た人間。

つまりオスマンと彼が魔法で抱えていた男を狙い跳びかかってきた。

「依頼の報告書も……あてにならん！」

今更文句を言っても始まらないが、思わずそこぼすオスマン。彼は今再び窮地に陥っているのだ。しかも、怪我をした人間を抱

えながらである。

状況としては先よりもずっと悪い、むしろ最悪だ。

背後からワイバーンの咆哮する声と、木に激突するブレスの音が聞こえる。

だがソレを確認する余裕は、オスマンには無かった。

精神力もほぼ無い今、ジグザグで木々の間を抜けて逃げ回る事しか出来ない。

しかし、ワイバーンはどんどん近付いてくる。

この時、彼は抱えている男を放り出して逃げてしまいたい欲求にかられた。

しかし、ソレは恩を受けたメイジとしては有り得ない事である。

だが、このままでは命の恩人と心中という事になってしまうのだ。

「い、いやじゃー！死ぬなら美女の腕に抱かれて死にたい！」

人間、必死になると己の欲を優先すると言う。

まあ彼の場合は、地でそうであるうから、あまり関係ないかもしれないが。

ガッ！

「！！ しまった！うわああ！！」

その時、運が悪い事に足元にあった木の根っこに足を取られて転倒してしまった。

投げ出されるオスマン、痛くなった体を急いで起こした物の

グルルルル……

「は、はは……もう、ダメか」

自分のすぐ目の前に、今にもブレスを吐き出しそうな怒れるワイバーンが居た。

完全に絶対絶命である。流石のオスマンもこの時ばかりは死を覚悟した。

ワイバーンの口腔が開かれ、大きく息を吸い込み始めた。その瞬間。

「パーティクル・・・ダンサーズ」

『ジジ Particle Dancers』

ズガガガガガンッ！！

オスマンが今まで見たことが無い程の魔法の弾が、ワイバーンを貫いたのだ。

生き物であるワイバーンは頭部を撃ち抜かれ、そのまま大きな音と共に倒れた。

頭部を破壊され、完全に沈黙しているワイバーンに、しばしオスマンも呆然としていた。

「い、いまのは　??」

少しして我に返ったオスマンは、先程の魔法を使ってくれた人物を探した。

声からしてかなりの美人であると、感じたかららしい。そして、その人物はすぐ近くにいた。

「あ、あんたが助けてくれたのか？」

「・・・ええ、民間人を助けるのも・・・ゲホ、軍人の務めですか」

「・・・ソコの彼は？」

「夫ですわ」

この世界には珍しい黒くて美しい長髪を風に靡かせた女性。木に寄りかかるようにして、その人物は夫と共に座っていた。いや、正確には“夫と呼ばれた者”と言った方が正しいだろう。

「……ご主人も、ワイバーンに？」

「……いえ、彼は別の事で」

何かに焼かれた様な裂傷、なんとか人の形を保っては居たものの、四肢がちぎれている。

自分を助けてくれた彼女も、かなりの重傷を負っている事が見て取れた。

そして、戦争に幾度となく参加したことがあるオスマンは理解していた。

ソレは致命傷で、もう幾分も持たないと言う事を……。

「……まさか、最後の最後で、ゴホ、こんな綺麗な自然の中で死ぬなんて、ゲホゲホ」

「あんたはもうしゃべらない方が良い。傷に響きますぞ？」

「良いんです。自分の状態がどうなのかくらい解ります。ゲホもう助かりません」

彼女はそう言って、自身の左腕があつた場所を触る。

そこには今は何も無い、どこかに落ちているのかもしいないが、少なくとも近くには無い。

わき腹の出血がとまらず、それに伴い血の気が無くなって行った。

「そこの方、もしも、もしも連絡が取れたなら……USNに

」

「え？何と言いました？もし、もし！しっかりなさい！」

既に彼女の目には、光がもっていない、何も見えていないのだ。死神がすぐ近くに舞い降りている……。

彼女は事切れる瞬間、うわごとのように何かをつぶやいた。

「はあはあ……出来れば……最後にあの子の顔を……見たか
っ
」

彼女はそこまで言うのと完全に生の鼓動を止め、物言わぬ骸と化した。

ザーっと風の音だけが、辺りに響き渡る。

「……安らかに、ねむりなさい」

オスマンは彼女の瞼をそっと手で触って閉じ、黙とうをささげた。彼女に何があつたのかは解らない、だが少なくとも自分の知っている国の人間では無かった。

オスマンは土の魔法でそのまま穴を掘り、夫と一緒に彼女を葬った。

遺品として、彼女が事切れた途端に光と共に服が変わり、ソレと共に落ちた玉。

夫もソレと同じ物を持っていたのでソレを拾い上げた。

そして首にぶら下げていた、何かの文字が書かれたプレートを回収して埋葬したのだった。

S i d e o u t

「以上が、ワシが知っている光の宝玉を手に入れた時の様子じゃが・・・その分じゃと、本当に彼女の関係者だったようじゃな」

「フェン・・・」
「フェン君」

オスマンから、両親の最後を聞いた俺は、静かに目から涙を流していたと言う。

父上、母上、自分は少しずつですが、人の心を取り戻しつつあるようです。

「・・・ドッグタグ、いえ彼らが付けていたプレートはありますか？」
「おう、今でも持っておる。これじゃ」

オスマンは机の引き出しから、鈍い銀色をしたドッグタグを取り出し、俺に渡してくれた。

俺はそつと、刻まれた文字を確認する。そこにはUSNの文字で確かに書かれていた。

「・・・ストライクワイヴァーンズ所属エリス・リーダー、同部隊所属、サイモン・リーダー・・・父上、母上」

「その文字が読めるのか・・・ソレはフェンくんが持つべきじゃろっ」

「・・・ありがとうございます」

USNのドッグタグ、そして書かれていたのは間違いなく父上と母上であった。

「しかし、彼らの子供にしては、君は随分と若いのじゃが？」

「……恐らく時間軸がずれた所為でしょう。自分は……サイトさんもですが、この世界の人間ではありませんから」

「時間軸？異世界から？……ふむ、成程のう。確かに彼女の魔法はワシらと全然違った。じゃが、どこことなくフェンくんの扱う魔法とも、似て無くは無いのう」

どうやら、俺が使う魔法を言っているらしいな。

まあ学院内で細々使っていたんだから、監視していた時に見たんだろう。

そして、俺はドッグタグを胸に抱き、しばらく沈黙した。理解はしていたが、やはりいざとなると……な。

「学院長」

「なにかね？」

「感謝します。コレを保存しておいてくださって……会う事は叶いませんでしたが、両親の最後が解っただけでも……ありがたいことです」

「……そうかね。さて サイレント 」

オスマンが杖を取り出してスツと振ると、辺りから音が消えていた。

驚く俺にオスマンの声だけが聞こえてくる。

「コレで良い、我慢は身体によくないじゃろう。ワシらはしばらくこの部屋を出る。後は好きにきなさい」

学院長はそう言つと、気を効かせて学院長室から出て行かれた。他の人も、それに付き従って部屋から退室していった。

「
マスター……」

恐らく、母上と父上も飛ばされる際にエネルギーを浴びたんだろう。

だがアレは生身の人間が浴びて良いもんじゃない。
俺みたいにエネルギー吸収体質じゃない人間が、生きていられたなんて不思議なくらいだ。

流石は……母上と言ったところか……生きて、会いたかった。

【主殿……うう、ひっく、ひっく……】

『……リン、なんで貴女が泣くのですか？』

【グス、だって、だって主殿の心が感じられるのですう……うう】

俺の中でリンが泣く、ユニゾンしているから、俺の心を感じたんだろう。

そして俺もどうやら限界らしい……。

「うう、うう、ひっく……ふえ、ふえーん」
『マスター……』

先程から止まることが無かった涙が、更に俺の頬を伝い流れて行く。

もう我慢も糞も無かった。自分の意思では止めることなど出来ない。

い。
意識が感情の洪水に押し流されていく。

「ひつく、ひつく……うえーん、うう……わあああああつ！
」！

【悲しみが、主殿の悲しみが伝わって来るですう……ふえ】

俺は複雑な思いで、子供の様に泣いた。

一つは両親の死亡を確認したことによる悲しみ。

もう、二度と会う事が出来ないという、寂しさから来た涙。

そして、もう一つは

「えう、ひつく……おとうさん、おかあさん、俺、また泣けるよ
うになったよ……うう」

感情が回復したことを感じたことへの……喜びだった。

泣きながらも、この時の俺は笑っていたんだらう。

こんなにも悲しい、喜びは……生れてはじめてだった。

……

……

……

「お手数おかけしました」

「なに、子が親を思い泣くのは悪いことでは無いからの。気にする
事は無い」

ほんの20分程度であったが、泣いたことは事実。

お陰ですつきりとしたが、結構恥ずかしかった事に気が付いて俺は赤面していた。

尚、その事を指摘しようとしたサイトを感知した俺は、彼の腹に一発入れて気絶させている。

「……………迷惑ついでにお願いが」

「光の宝玉を返してほしい。じゃろ？構わん。持って行きなさい」

「え、あ」

「秘宝とはいえワシらには扱えん代物だしの。それに形見を奪うほど外道ではない」

「学院長……………」

俺は尊敬のまなざしを向け、ロングビルさんとコルベールさんは、何故か信じられないモノを見るかのようなまなざしを向けていた。

しかし、今思うと学院長室占拠して大泣きか……………すごぶるはずい。

こうして、俺は両親のデバイスを手に入れたのであった。

さて、これで終わりという風に出来たたらよかったのだが、そう言う訳にもいかない訳でして。

俺は帰り際にロングビルさんに声を掛けた。何時ものように魔法を見てもらう為だね。

「あ、ロングビルさん、今日も魔法見て欲しいです」

「え？あ、はい。いいですよ」

彼女はそう言うと、いつも通りにOKしてくれた。
さてと、少しばかり準備をしておきますかね。

さて、もうお気づきの方も多いでしょうが、フーケの正体はロン
グビルさんです。

何故彼女がこんな事に及んだのか？何故盗賊として活動している
のかを俺は知りたかった。

なので、彼女をいつも通りに魔法訓練につきあってくれるように
頼んだのだ。

なんじゃかんじゃで彼女は面倒見が良い。

色々とお話したが、どうも心底悪人とは思えなかった。

そう俺の勘が告げていたのである。幾度となく、俺の命を助けて
くれた勘がな。

「コレでどうですか？」

「……ええ、もう固定化も完璧ですね」

だから、最初は当然普通に振舞った。彼女もまさか俺にバレてい
るとは思っていない。

なんか騙したみたいで申し訳ないけど、少しばかりつきあって貰
います。

「（封時結界起動、リンはサポートが何時でも出来る様にスタンバ
イ）」

『【了解】』

「ロングビルさん、一つ聞きたい事があるんですけど」

「何でしょうか？」

彼女がそう聞いた瞬間、辺りの色が変わって行く、逃がさない為の封時結界だ。

今です！と言っている、カボチャみたいな帽子をかぶった某中国のおっさんの姿が、脳内で幻視されたんだが、ソレはソレで置いておいてスル！。

それよりも

「！！これは一体？！」

「・・・これは封時結界、自分のもつ魔法の一つ、ここなら邪魔は入りませんからね」

「っ！計ったね！？このガキッ！」

彼女はそう言うつと杖を抜いて、俺から距離をとった。

畏にかけられたと思いつているのだろう。

まあ、そこら辺はもともと予想している。

「何が目的だい？こんな大規模な魔法を使ってさ？」

「・・・ただ、お話を聞きたいと言うだけじゃ、信じて貰えないでしょうね」

「信じられるか！」

彼女はそう言うつと杖を振う、その途端あのゴーレムが地面からせり上がるようにして現れた。

おつおつ、相変わらずデカイぜ、単純に土で出来た木偶人形でも、出かけりゃ迫力がある。

「ロングビルさん、いえ・・・土くれのフーケ、俺は何でアンタが

盗賊なんてしてるのか、それを知りたいだけなんだ。教えては貰えないだろうか？」

「・・・はん、ガキに喋る事なんて一つも無いよ」

「そう言うと思った。ちなみにこの結界は、俺を倒さなければ解除されません」

俺は彼女を挑発するようにそう言った。なんせ俺の見た目は7歳児だからな。

大人にキチンと話を聞いてもらう為には、どちらが上かをはっきりさせる必要がある。

あまりしたくはねえけど、今回だけは特別だ。

「お話・・・聞かせてもらおうよ？」

「やれるもんならやってみな！」

俺はそう言うと、BAを展開する準備為に、手をヴィズに重ね魔力を込めた。

後で考えてみたら、このセリフって・・・いや、深く考えたらダメだ。うん。

余計なことは考えず、とにかく力を見せてやる事にしよう。

「リーダーと探査魔法がある俺から逃げられる筈無かつっ？中編」(後書き)

戦闘は後半です。申し訳ない。

「レーダーと探査魔法がある俺から逃げられる筈無かろう？後篇」

「レーダーと探査魔法がある俺から逃げられる筈無かろう？後篇」

妄想戦記

「ヴィズ、BAセットアップ。リン、ユニゾン機能スタート」
『了解』

【はいですう】

途端、俺の身体が光に包まれ、その中で魔力を編み込み疑似物質を形成した。

格納領域にしまつてある素体の骨格と疑似物質を合わせて、アーマーを形成していく。

その時に、身体をその骨格と疑似物質との間に滑り込ませて、そのまま固定した。

だが、今のこのままの状態では、只の疑似物質集合体でしかない。しかし装甲シールドを疑似物質に組み合わせる事で、全体強度と剛性がハネ上がるのだ。

こうして出来た鎧に、アルアツソーと盾が形成され、背中にバックパックが接続される。

時間にしてコンマ0.023秒、パツと光ったと思った次の瞬間には

ガキン ガシユーツ！

ーが、そこに居た。余剰魔力を排出し、魔力残照の煙の中から現れるヴァンツァーが、そこに居た。

「……相変わらず、非常識な。なんだいソレ？ゴーレムでも着込んでるのかい？」

「其方の常識に当てはめて貰っても困る」

「口調も変えたね？そっちが地かい？」

「お互い様だ」

「は、たしかにね」

会話はしつつもお互いの距離を計る。

すでに戦闘態勢、お互いにもう止めることは出来ない。

俺はアルアツソーを構えようと動くと、彼女も素手に反応してゴーレムを動かした。

ズア！

「……チツ、ヴィズ」

『多重プロテクション』

流石に近寄り過ぎていた。これでは避けられないと判断。

なので、防御魔法を使い、ゴーレムの振り上げた拳を防御してみる。

幾重にも重ねられたシールドは、その存在意義を果たし、何トン

もありそんな土の塊を防ぎきる。

しかし、流石に重量が違いすぎて、衝撃だけは防ぎきれず吹き飛ばされた。

十数メートル飛んだ当たりで、飛行魔法を使い体勢を立て直す。ゴーレムはズシンズシンと、地面を踏み絞めてゆっくりと近づいてきた。

「・・・案外、重量差もバカに出来んな」

『シールドのお陰で無傷ですけどね。耐衝撃用に設定変えますか？』
「そうしてくれ」

さてさて、どうやって倒そうかね？

倒すだけなら、次の攻撃の時にゴーレムの陰でミラージユハイドを発動。

ゴーレムを背後で操っているロングビルさんに近寄り、仕留めれば良い。

だが、やることは力の差を見せつける事である。
その為には、ゴーレムだけを完膚なきまでに叩き潰すことが必要だ。

勿論、ロングビルさんが、戦意を喪失する位にまでな。

「喰らえ！」

『レールブラスター』

アルアツソーを構え、魔力弾を撃ち込んだ。
だが、幾ら撃ちこんでも堪える様子は無い。

【あやや、地面から土を吸収して、再生してますね】

「再生機構持ちか、なかなか面白い」
『ガルヴァドスかグロムの使用を提案します』

確かに炸裂魔法であるガルヴァドス、砲撃魔法であるグロムなら殲滅はたやすいだろう。

だが、すぐにソレを使うのはダメだ。相手がもつと手札を出したうえで使わないと意味がない。

相手がどんな手を用いても、抵抗できないと思って貰わないとな。ただ、やり過ぎで自殺されても面倒だから、力加減はしておかないと・・・。

「少しばかり大変だが、つきあって貰うぞ？リン、ヴィズ」

【はいですう！】

『やれやれ、仕方ないですねぇ』

そして俺は多重シールドを展開したまま、ゴーレムへと突っ込んだ。

Side 三人称

「くツ！ちょこまかと煩いね！それに堅い！」

先程からフェンとゴーレムは幾度となく激突している。

再生の際に調整を加えて、土を硬化させ防御力と攻撃力を上げているのにもかかわらずだ。

幾らゴーレムで攻撃しても相手は不思議な光の壁で、此方の攻撃を防ぎきってしまう。

おまけに速いので、ゴーレムの攻撃が当たる事は稀だ。

「ちっ、なら・・・」

ゴーレムへの命令を変更し、攻撃を一度止めるフーケ。

その時にかかなりの量の弾幕を受けて、ゴーレムが一瞬よろめくが、再生能力の許容範囲内だ。

腕が再生したのを見た彼女は、更に命令を送る。

ズズン

ゴーレムはその巨大な腕を大地に向けて、手刀の形で振り下ろした。

そして地面を抉り、その手に大量の土砂を持ったゴーレム。

「思いつきり投げつけな！」

ズズズ、ヴォーン！！

そしてその手に持った土砂を、フェンに向けて投げつけた。

ソレは空中で拡散するが、考えても見て欲しい。

人間サイズなら、手の平の土砂を投げつけようともダメージはそれほどない。

だが、20m以上のゴーレムが魔法の力で投石器以上の力で土砂を投げつけるのである。

しかも、その中には稀に岩が混じっているのである。

只の人間なら、それだけでミンチへと変貌を遂げる事であろう。

ズガガガガガン！！

「ぐわ！」

そして運悪く、フェンはゴーレムが投げつけた土砂の一つに当たってしまった。

土砂はさながら散弾銃の如く、シールドに襲い掛かりフェンの動きを止める。

シールドは破け無かったが、それでもかなりの隙が出来ていた。

ソレが効果的であると、フーケは判断し更に土砂を投げつけさせようとする。

しかし、土砂を拾い上げようとゴーレムが屈んだ途端、ゴーレムの脚部に爆発が起きた。

そんな、何時の間に?!と彼女は驚きつつも、ゴーレムへと精神力を送り再生を急がせる。

何せ今の自分の盾はこのゴーレムしか居ない上、フェンを倒さねば逃げられないのだ。

コレが倒されれば、自分は身を守る物を失ってしまう事を意味しているのである。

引き続き土砂投げを行うが、どうも見切られてしまったらしく、攻撃が届かない。

「ちっ!なら!」

攻撃が動かれて当たらないなら、あてられる様にすればいい。

ゴーレムの制御を一瞬だけ自律制御に変更、その間にドットスペルであるアースハンドを使う。

あの鎧がゴーレムの上からたたきつける様な攻撃を避けて、大地に降りた瞬間。

「捕まえな!」

地面から幾つもの触手の様な土の手が伸び、フェンを拘束する。序でに錬金で金属に変え、更に簡易的に固定化まで掛けて拘束力を上げた。

精神力を消費するが、それでも効果はあつたらしく身動きが取れないでいる。

だが、相手も錬金が使えることを、フーケは知っている。ソレを使われれば、あんな即席の拘束なんてすぐに解かれてしまう事も。

なので、彼女は再度ゴーレム制御を自分に戻す。そして

「!?!」

「捕まえた！可哀そうだけど、潰されちまいな！」

そのまま無慈悲にゴーレムの巨拳を、彼の上に振り降ろしていた。

ズドンズドンズドンズドンズド

殴る、ひたすら殴る。ゴーレムの手を錬金で金属に変えて更に殴った。

彼の白い鎧が地面に吞まれるかのようにして、ドンドン沈降していく。

それだけ恐ろしい力で殴りつけているのである。

彼女とて、人殺しは趣味では無い。

だが、自分の正体を知った者を生かしておく程、お人よしでも無い。

例えソレが知りあいでも、わずかな間でも友人関係になっていたとしても……。

味方で無い者に容赦を加えることは出来ないのだ。

「……まったく、バカな子だよ」

思わずそう漏らすフーケ。

盗賊に成り下がったとはいえ、一応まだ人の心は持っている。

だからこそ、もう地面に沈んで見えないフェンを見ながら、ため息を吐いた。

フェンとの時間は、己としてもそれなりに楽しかった。

あのクソセクハラ爺からのストレスも、彼の魔法訓練を見て随分軽減して貰えた。

何気にフェンとの時間が、一番愚痴をこぼせる時間だったのである。

というか、フェンが居たから、彼女はここまで持っていたと言える。

ゴーレムによってプレスされた地面を眺めつつも杖を振った。

フェンが沈んでいるであろう地面を、深さは大体2mまで完全に金属へと錬金したのだ。

これにより多大な精神力を消費したが、これでもう身動き一つ取れない筈。

彼女はそう思い、少しだけ安堵の息をこぼしてしまった。

ズズズズズ

「な!？」

しかし、ソレは認識違いであった。

何故なら、フェンは身動きが取れなくても、口でルーンを唱えなくても

ゴゴゴゴゴゴ

魔法を使えると言う事を、戦闘の事で頭が一杯で、すっかり忘れていたのだから。

フェンを封印した地面が、かすかに振動している。

そして、まるで地獄の釜の口が開かれるかの如く、亀裂が走って行くのを彼女は見た。

ゴゴゴゴゴゴ

バキッ

振動は止むことなく、亀裂も次第に大きくなり、亀裂の隙間から光が漏れる。

そして、光が強まったかと思うと、辺りの地面が瞬時に光の粒子へと変換されてしまったのだ。

黄金色をした光の中心には、ゆっくりと浮かび上がってくるフェンが、そこに居た。

「そ・・・んな

なんなんだよ」

白銀の鎧に光の粒子が螺旋状に纏わりつき、天上に向けて光が立ちぼる。

風は吹いていないのに粒子自体が循環しているように感じられた。

「ん？・・・これは？」

そして彼女は気が付く、舞っているキラキラ光る粒子がなんであるかに。

この奇跡に使われた魔法は・・・これは“錬金”であると言つ事に・・・。

「ま、まさか・・・錬金で地面ごと金の微粒子に変換したつてのかい！？」

信じられない光景だった。

金の粒子が舞っている光景は幻想的であり、魔力光を浴びてかすかに黄金色に輝いている。

それは、もうコレがこの世の風景ではないと、人間に思わせるほどだ。

だが、それよりも彼女が驚いたのは、その錬金の規模である。

錬金によつて金粒子に変換されている範囲は、彼を中心にして軽く10mを越えているのだ。

急いでゴーレムを下がらせたモノの、腕の先が巻き込まれて消失してしまった。

それだけでは無く、スクウェアレベルでも錬金がとても難しい金を大量に錬金している。

彼女たちハルケギニアの常識から考えれば、ソレは奇跡に近い程の魔法である。

あえてクラスに言い直すとしたらスクウェア……
いやスクウェアの倍のオクタゴンにまで届くかもしれない、彼
女は感じていた。

圧倒的過ぎる……自分は、自分はこんなバケモノを相手にして
いたのか？

悪魔は人をだます時、その人間にとって安心出来る姿を取ると言
う。

これでは、まさしく

「……悪魔、だね。あたしの命運もこれまでか……ゴメンよ」

これは勝てそうもない。かと言って逃げられる訳でも無い。
そして、彼女は思わず、自分の可愛い義妹の名を呼んだ。

「ゴメンよ。テファ……あたしは帰れそうもないよ」

怖い、身体が恐怖で震えてしまう。

どうせなら、一瞬で殺して貰おう……そう考えてゴーレムを解
除しようとした。

だが、その時、フェンが口を開いた。

「テファ、それが貴女が盗賊をしていた理由？」

最悪だった、咄嗟に呟いた言葉、まさか聞いていたとは思わなか
ったのだ。

サーッと血の気が抜けて行く音が、頭の中に響き渡る。

だめだ、諦めてはいけない……この命に変えても、あの子だけ
は！

混乱した頭で必死にどうするべきかを考え続けた。

「……だったら、どうだって言うんだい？」

「その人は、大切な人？」

「あんたに答える義務は無い！……って言いたいところだが、その通りさ」

「ソレは自分の命をチップに変えてもか？」

ガコン、その音と共に何も無い空間から、パイプの様に穴が開いた二つの角柱が現れる。

ソレは目の前に居る悪魔の両肩にガキンと音を立てて填りった。

そして気が付く、ソレは“大砲”の砲身であると……。

「……ああ、例え拷問されようが、殺されようが、あの子の事だけは喋らない」

「盗賊稼業はその為か？」

「生きて行くには金が居る！あたしらみたいな女が稼ぐにはソレしか無い！」

口の中が渴く、圧倒的な力の前に目が離せなくて、目が乾いて涙が出る。

だが視線を逸らすことなど出来ない、何時その肩の大砲に撃たれるか解らないからだ。

「……成程、貴族だけを狙っていたのも」

「貴族は稼ぎがいい、それに連中には少なからず恨みもある」

自分とあの子がこんな身になったのも、すべては貴族の傲慢さの所為だ。

だからこそ、己にとって貴族とは唾棄すべき対象。

そして己の中で唯一、泥棒を働いても罪悪を感じない対象だ。

「だから・・・だからあたしは・・・」

そして彼女は、ゴーレムに最後の指示を送った。

「ここで、ここで死ぬわけにはいかないんだあああッ！！」

巨大なゴーレムによる特攻、もう他に何かする精神力は残っていない。

恐らくこの攻撃に意味は無い、あるとすればソレは己が最後まで戦ったという矜持。

ただそれだけだ。ソレだけが心折れそうな彼女を支えていた。

「ああ、確かに、誰かを守りたいならソレもありだ。だが」

ガコン、砲身がゴーレムに向けられた。

瞬時に高濃度の魔力が、砲身からあふれ出して行く。

後部に取り付けられた機関部が、ガシャと後退し何かを吐きだした。

「その行動は　　ブビーだ」

『ツイングロム・フルバースト』

そして、何もかもを消し去りそうなくらいの光が、その砲身から放たれたのだった。

消えゆくゴーレム、既に精神力がわずかしか残っていないかった状態で耐えきれぬ筈もない。

「さようなら　　テファ」

ゴーレムを消した極光は、そのままフーケを呑みこんだのだ。彼女が最後に思い描いたのは、いとしい義妹の笑顔だった。

Side out

Sideフェン

『目標の沈黙を確認、砲身冷却開始』
パキユツ、シユウウツ！

ツイングロムを発動し、ゴーレムを完膚無きまでに破壊した。辺りに散らばるゴーレムだった土くれ、もう魔力も無い状態で良ুকココまで。

俺は土くれの山へと近づいて行った。何せまだ終わって無いからな。

【見つけました。この下ですう！】
『魔力切れと砲撃を受けたショックで、少しばかり生命反応が微弱です』

「治癒魔法スタンバイ、医療用バックパックも念のために用意」

土くれの山の一つから反応を感知、すぐさま掘り起こす作業に移る。

コレでも大分抑えたんだがな。それでもかなり強力だったらしいな。

空のカートリッジに魔力を詰めて排出させたのにコレかよ。

成。
4mは有りそうな小山を眺め、そんなことを考えつつも術式を形

俺は腕に形成させた魔力刃の刃を潰した仕様ので、そこにあった土くれ小山を掘った。

「・・・っと、まだ生きてるな？」

『非殺傷だったんだから当然ですよ』

【念のためにスキャンしますう】

リングがスキャンしている間、俺は彼女に表面上は傷が無い事に安堵した。

一応彼女も女性、傷つけたらいけませんよ。

【大丈夫ですう。内蔵とかに損傷は無いですう】

『非殺傷だったとはいえ、土砂に押しつぶされたのに無傷なんて・

』

「運がよかつたんだらう」

『土のメイジだけあって、土とは相性が良いんでしょうかねえ？』

さて、そこら辺は解らん。まあ打ち所も良かったってとこじゃないか？

俺は彼女に治癒魔法を施しつつも、適当にヴィズにそう答えた

とりあえず、先の戦闘で大体彼女が盗賊やってた理由は理解した

ぜ。

「どうも彼女には家族がいるらしく、その家族の為に仕送りしていたってところか。」

「ま、情状酌量の余地はありって所かね？」

「しかし、自分でも思っただが、ちと強引だったかね？」

「……全くだよ」

『あ、気が付いた』

「治療を掛けていたら、すぐに目を覚ましたロングビルさん。」

「これは本当に打ち所が良かったのかな？」

「そんな強引なやり方じゃ、女はすぐに逃げちまうよ」

「う、気をつけます」

「……で、あたしをどうするつもりだい？」

「……どうとは？」

「決まってるだろう？賞金が掛かってるお尋ねモノを倒したんだ。殺すも憲兵に突き出すもあんたしだいさ」

「なんかもう逆に清々しいって感じで、ロングビルさんは俺にそう言ってきた。」

「あー、なんて言うかね？俺はロングビルさんを憲兵に突き出すつもりも殺すつもりもない」

「はあ？じゃあ何のためにあたしを」

「一つは本当に事情が知りたかったから、いつも俺の相手をしてくれていた貴女は悪人に見えなかったという身勝手な理由からだ」

「……青臭い事だね」

「いやー、俺もそう思っただ。こっつこのを余計なおせっかいて言

うんだよな。

「ま、俺としては、ロングビルさんの事情は大体把握出来たし、コレ以上何かする気も何もない。逃げたければ逃げてても良いし、居座るなら居れば良いんじゃないか？」

『流石はマスター、人にトラウマになる様な事しておいて、放置ですか？』

「う、いやその・・・やり方が解んなかったからつい」

交渉術なんて習ったこと無いから、とりあえず力づくで聞いてみただけなんだけど・・・。

おろ？なんかメツチャ呆れた目でロングビルさんから見られてる？なして？

「あ、あんたは・・・呆れてモノが言えない」

「すみません」

「まあ良いさ・・・もう全部話してやるよ」

そう言っつて、なんか観念した様な顔をして、彼女は身の上を教えてください。

ロングビルさんの本当の名前はマチルダ、元々アルビオンと呼ばれる国の出らしい。

彼女の父親はサウスゴータの太守をつとめ、王弟モード大公と呼ばれる人物の直臣である。

んで、何で彼女が盗賊に身を落したかというと

「エルフ？なんだ？」

「エルフを知らないってのかい！？」

「いや、自分この地域の間人じゃないですから」

「ああ、そういや異国のメイジだったねアンタ」

いいえ、残念ながら異世界です。

まあ話を戻すがどうやらエルフというのは、敵対している種族の事の様だ。

彼女の説明によると、エルフは杖無しに魔法を使い、何十人がかりでようやく倒せるんだと。

なので、ここハルケギニアではエルフは恐怖の対象とされているんだそう。

しかも、この世界の宗教におけるブリミル教の聖地が彼らの住む所にある。

その為幾度となく軍が派遣されるもことごとく敗退、撤退、大失敗。

ここだけみると、地球における十字軍の宗教戦争に見えなくもない。

「ふーん、エルフ・・・ねえ？」

「ま、あんたは普通にタイマンで勝てそうだ」

「照れるなあ」

「・・・褒めてないよ」

そりゃ失敬。まあソレはさて置き、話の続きだ。

彼女には義理の妹さんが居るらしく、先程戦闘の最中ポロリと漏らした“テファ”と言う人がそうらしい。

本名はティファニアというらしいのだが

「その子は、エルフなんだ。正確にはエルフとのハーフってところか」

「ハーフェルフってヤツか。しかしこの世界ではエルフとメイジは敵対関係じゃ？」

「ああ、だから・・・色々あったのさ」

サウスゴータ家は大公家への忠誠心から、ティファニアらエルフ母子を自らの領地に匿った。

そして、その事が原因で国王により家名を取り潰されている。

実家の没落後もマチルダは大公の遺児であるティファニアをウエストウッド村に匿い、彼女や村の孤児達の生活費を稼ぐため、本名を捨てて裏の世界で盗賊となった。

彼女が貴族しか狙わない理由もそこにある。

「あの子は 本当が良い子なんだ。ソレを国軍の連中は！」

「成程、過去の経緯から貴族が嫌い、だから貴族専門と？」

「・・・まあそう言う事になるねえ」

成程、これは簡単に言えば“復讐”ってやつなんだ。

自分たちの生活を奪った貴族から、財を奪い去ると言う復讐。

うん、実に平和的だな。

「貴族に確実にダメージを与えられる上に、生活費も稼げて実に効率がいい」

「そう思うかい？」

「ええ、少なくとも、自分の力を考えずに復讐に走るよりも好感が持てる」

『何より理由が家族を養うと言った辺りもですね』

復讐を推奨している訳では無い。盗みだつて罪だ。

だが人間だれしも、一つや二つくらい許すことは出来ない事情くらいある。

俺だつて家族がもしも殺されたりしたら・・・。

「それで、あたしをどうする？」

「……そこまで聞かされたら、俺はなんとも言えませんな。コレで私利私欲に走ってたら、遠慮なく憲兵に突き出せるんですがね」

「……あたしがウソをついているとは考えないのかい？」

「コレでも軍に居たことがありますね。大人のウソを見抜く力くらい持っている」

少なくとも、悪人か極悪人かくらい見分けが付くつもりだ。

彼女は本当の事を喋っていたと、俺の勘も言っている。

「とりあえず、別段どうもしませんな。ま、綺麗な金を送りたいなら、まだ学院に勤めたらどうですか？」

「本当に、どうもしないのかい？」

「どうもしない。それともどうにかして欲しいとでも？」

「……信用できないね」

そうは言われてもねえ？まあ砲撃つかったのは流石にやり過ぎたけど……。

「なら、勝手にしてくれ。逃げるもよし、居残るもよし。俺は本当にどうでも良いんだ。ただ知りたかっただけ。なんならこうしますか？“先の魔法でフーケは死んだ”とでもね？」

「……プツ！なんだいそりゃ！幾らなんでも臭すぎる！」

彼女は突然笑いだした。

う、そりゃ自分で言っただけじゃ臭いセリフって思ったけどさ。

そんなに笑う事無いじゃん。

『さ、流石はマスター、何時の間にか厨二病を発症していたなんて』

【それに付けるお薬って無いんです。主様、可哀そう】

・・・OTLしても良いだろうか？自分のデバイスに厨二病認定された。泣きそう。

あとリン、それってバカに付ける薬はないとかそう言う系？・・・もっと泣きそう。

さて、彼女はある程度笑った後、1日の猶予を与える事になった。その間に逃げるも良いし、残るもよし、俺は何もする気は無いけど、ソコは彼女次第ってな。

ちなみにどこからともなく声が聞こえた事については、ヴィズを紹介して納得してもらった。

ヴィズ自体が、実は光の宝玉と同じモノだと知った時の彼女の顔は見モノだったなあ。

【主殿、ちよつと気が付いたんですけど】

「ん？なに？」

【私が深層心理にアクセスして、情報を聞き出した方が簡単だったんじゃない？】

んー、ソレもありだったけど、なんかそう言う事したくないんだよな俺は。

ぶつかるなら本気でぶつかってからのほうが、本音が出やすいだろうしな。

『相変わらず不器用な事で』

「ほつとけ」

『ですが、ソコがマスターの良いところですね。結局手加減してましたし』

「いや、だけど 【手加減はしてたけど本気でしたですう
はいそうです」

だって、俺の全力全開でやる本気は殺傷設定だぜ？

BJ持って無いこの世界の人間にやったら、肉片も残らないだろうさ。

「結局、疲れただけだったなあ」

『やる必要はあったんでしようかね？』

「さて、だが少なくとも、色々面白い話しは聞けそうだし」

盗賊の話なんて、面白そうじゃないか？

どんな所に侵入したのか、是非とも体験者からお話を聞いてみよう。

「とりあえず、帰るかな」

『ええ、錬金の戦闘における有用性も証明出来ましたしね』

【でも、主殿への負担が凄かったです。リンは専用ストレージを作る事を提案するですう】

確かに結構負担掛ったんだよなあ。

脳みそがはちきれそうとはあの事だろう。

まあ、錬金してたのが金だったらソレも仕方ないけどさ。

とりあえず、もっと練習してストレージが作れるくらいには成長しますかねえ。

「レーダーと探査魔法がある俺から逃げられる筈無からうっ？後篇」(後書き)

*うう、やっとフーケ終わったぜ。つ、疲れたあ。

「父上の遺産を相続」

「父上の遺産を相続」

妄想戦記

さて色々あった前日から一夜明け、結局の所ロングビルさんは学院に残る事にしたらしい。

今日も普段と変わらず、セクハラ学院長にサブミッションを掛けている頃だろう。

女性のしたたかさは、時に男の考える以上にすさまじい。

ちなみに昨日の夜、フリッグの舞踏会と呼ばれる催しが開かれ、俺達はフーケから秘宝を取り戻した功績という事で、そこでの出席が許されていた。

普段よりも豪華絢爛な料理に酒、流石は貴族の学校と言ったところだろう。

給仕をしているシアさんやキノさんやシエスタと偶に会話しながら、俺は詰め込めるだけ飯を口に頬張っていた。

普段もウマイが、こう言った豪華な料理はたまにしか出ない。

だから、詰め込めるだけ食うというあさましい考えの元に次々と料理を平らげていたのだ。

ちなみにハルケギニアの料理は、こちらの世界となんら変わらない食材を使っているモノと、異世界だからか、そうでない料理が存在する。

特に凄かったのはハシバミ草のサラダである。単体で食べたら恐ろしく苦くて、マジでサラダなのかと疑ったが、近くを通りかかったキノさんに聞いたら、ちゃんと食える食材だと言っただからビックリした。

食い合わせが不味かったと思い、苦みが強く香りもそれなりに良かったので、肉料理と共に食べばむしろ苦みがアクセントとなり、上質な肉汁の旨味を口の中で何倍にも昇華してくれる。

中々気に入ったので、口直し用に皿の上に盛っていた所、顔見知りさんが俺の隣にやって来ていた。

その顔見知りさんは、かなりの素早さでサラダを更に盛り、苦みなんて何のその。

ソレを腕の先が見えないくらいの速さで口に放り込んでいく。その光景に思わずポカーンとしてしまった俺は悪くは無いだろう。

よくアレだけ苦いモノを、顔色一つ変えることなく食えるモノだと逆に感心してしまう。

その青い髪をした顔見知りのタバサとは、その後無言で大食い対決をしていたのは内緒である。

勝敗結果は、サラダが無くなったのでドローという事になった。

だが流石に食い過ぎたので、俺は戦線を離脱したが、彼女は舞踏会が終わるまで食い続けた辺り、あのまま続けてたら俺の負けだったなあと、心の中でつぶやいた。

んで、とりあえずリンの分を皿の上にこんもりと乗せ、ちよいと夜風に当たりたいと、ベランダへとこっそりくすねた酒を持って出た。

適当にちびりちびりとグラスに入れながらベランダに出ると、そこにはデルフを横に立て掛けたサイトが、ワイン片手にちよこんと料理が入った皿を持って、同じく夜風に当たっていた。

ちなみに俺達未成年だが、世界が違う為問題無し(という事にしておいてくれ)

何気に俺の身体は毒物耐性も付いてるから、ほろ酔い程度にしかならないという便利機能。

世の酒飲みさん達が羨ましがることだろう。

「やあサイトさん、涼みに来ましたか？」

「んあ？ああ、フェンか」

『丁度良いフェン坊、お前からも相棒に言ってやってくれよ！』

なんかデルフがかなり機嫌が悪そうに俺にそう言ってきた。

とりあえず、ユニゾン機能を停止し、そのまま実体化したリンに皿を渡す。

それでデルフ達の話聞いてみる事にした。

「言ってるって・・・なにを？」

『決まってるんだろ？相棒にも剣を使う機会を持ってこいって事だ』

「コラ、勝手な事いうなデルフ」

「???つまりは、どういう事なの??？」

まあ要訳させて貰った内容によるとだ。

デルフは自意識を持っている。喋る事も出来るし、相談相手にだつてなれる。

だが、その本質は剣、つまりは武器なのだ。

「ようは、戦いがしたいと？」

『ちげえヨ。剣として扱って欲しいってこと！』

よく解らんが、只あるだけでなく、剣としての機会が欲しい……
・って事か？

「同じでしょ？デルフは剣、つまりは武器」

『いや、だからよお？なんて言やあ良いんだか……』

「さつきからこんな調子なんだ。俺にもよく解んなくてよ」

ふむん？どういふ事なんだろうか？

『……私はなんとなく解りますね』

「そうなのか？ヴィズ」

『はい、使って貰えない道具というのは、悲しいモノですから』

「ヴィズ……」

そう答えるヴィズに少しだけ寂しさを感じた。

とは言うモノの、彼女（一応ヴィズは女性人格）達デバイスは確かに道具である。

俺が、俺達が幾ら家族と思おうが、その事実だけは変わらないのだ。

『あ、でも家族というのも間違いじゃないですよ！？』

俺が寂しそうな顔をしたのを感知したのだろう、慌てて弁明してきた。

まあ家族であると言ふ事も事実、どちらでもいい、持ち主の認識

の差異でしか無い。

『とりあえず話もどしてもいいか？お二人さんよお？』

「結局は剣として振って貰いたいって事？なら剣術訓練でもすれば？」

『その手があつたか！！』

「えー、面倒臭いぜ」

いや、剣の使う機会云々よりも先だろう？

・・・まさか、いきなり実戦運用するつもりだったとか？

ちなみにサイトは、戦えるとモテますよと言ったら俄然やる気に・・・単純で良いなあ。

「まあ、訓練するのは良いんですが・・・やり方解ります？」

「俺は全然、デルフは？」

『おう！任せる何せ俺っちは伝説の魔剣デルフリンガーさまだ。戦い方の一つやふた・・・』

『デルフ？どうかしたのですか？』

突然無言となるデルフ・・・まさかコイツ

「・・・忘れた」

「はあ、だと思いました」

『まあデルフほどの年月を重ねれば、記憶媒体からの欠落程度起るでしょうね。むしろその程度で済んでいる方が驚きですが』

うんうん、デバイスなら何の整備も補給も無しに、6000年以上も放置されようものなら、とつくに風化して、砂みたいに崩壊してるだろうしな。

さて、ならどうするという話になった所で、料理を食い終えたり

ンが、俺に教えてもらえばと発言してきた。

サイトは渋ったし、俺も人に教えた事なんぞ殆ど無いので、どうかなあっと思っただが、考えてみればサイトに付けられているルーンを調べる絶好の口実だし、試しに後日やろうかということところでまつまった。

そして、その後にルイズ嬢がやってきたのを見て、なんとなく俺お邪魔虫な予感を感じ。

そのまま退場させてもらったのだった。

とまあ、これが昨晚あつた話でガンス。

「さてと、一丁やるか」

「はいですう！」

とりあえず今日は父上のデバイスの格納領域を調べる事にした。父上は従軍していたとはいえ、元々デバイスマイスターである。だから戦闘というよりかは修理・整備が領域である為、デバイスの格納領域は大きく作られている筈だ。

「リン、アクセス」

「了解ですう」

だから、その中に収納されている筈のデバイス部品達を貰う。

この世界から脱出する為の処置であるから、死んだ父上も文句は言わんだろう。

尚、プロテクトの方は以前のパスが通用しなかったので、リンに

ハックして貰う事にしたので問題無し・・・いや、まあ色々問題はありますが、この際目をつぶっておいて欲しい。

「プロテクト解除、トラップ排除、システムデータ保存・・・っと、解除成功ですう」

『さすがはリン、早いですね。私だったらこうはいきません』

「えへへ、褒められちゃいましたあ」

「うん、リンは凄いやホント。さて、中身はあるかな？」

リンを褒めて撫でて上げた後、俺は本題のパーツがあるかどうかを調べる。

システムを立ち上げ、格納領域へとアクセス、搭載された物品のリストに目を通した。

「むう、なんて事だ」

だが、思っていたほどパーツは搭載されていなかった。

念の為に格納領域内も調べたが、ほぼ物品リストに書かれた通りで量も少ない。

パーツ以外で入っていたのは、何かの設計資料図・・・これは？

「えーと、魔導師用多脚型戦闘支援自律ユニット？」

『父上殿の作品の一つでしょうか？』

「でもコレデバイスじゃないみたいですよあ？」

まだ書きかけではあったが、残された設計図の構成を見るに、これは確かにデバイスじゃ無い。

どちらかと言えば無人機系統に近い・・・だけど。

「所々にデバイス技術を使ってるな」

成程、確かに父上らしいアイディアだ。

無人機とデバイス技術の融合、もしくは無人機をベースとした自律起動型デバイスか？

生物としては非常に機能的な蜘蛛をイメージしているのも素晴らしい。

あの世界で使われていた無人機は確かに物量戦には強い。

幾らでも補給が効くし、数さえそろえば魔導師だつて圧倒出来る。だが、それでも魔法相手となると、数がなければいささか分が悪い

この機体にはデバイスに用いられる技術、つまりは魔法技術が使われている。

目には目を、歯には歯を、魔法には魔法で対抗と言ったところだろう。

コストはかさむだろうが、元々魔導師支援の為故、数は少ないだろうから大丈夫なんだろうと思う。

確かに一対一で魔法使い相手では、通常の複合装甲程度では紙より薄い。

通常兵器では大抵は防がれてしまうし、防御シールドがなければモノの数秒でスクラップだ。

いくらコストが安くても、命が失われる心配がなくても、ちりも積もれば山となる。

ある程度高性能化して、撃墜されない様にした方が良く、上層部が考えたのかもな。

よくよく調べれば、俺のBAに使われている装甲シールドを搭載する予定だったようだ。

そう言えば、俺デバイスの調整して貰った時に運用データ渡した

事があつたけ。

「抜け目ねえなあ」

普通のデバイスマイスターなら思いもつかないモノだろう。
ふーむ、しかし良いなあコレ。

「……つくりたいなあ」

俺の中に流れるデバイスマイスターとしての血が騒ぐ。
つーか男の子なら、作ってみたいと絶対に思うぜコイツは。

『……ですが、材料がありません』

「そうだな。ある程度は錬金でも行けるだろうが……」

「今の錬金のレベルじゃ、一から電子部品なんて作れませんよお」
「むむむ、こまったなあ」

ダメと言われると、どうしても作って見たくなる。
確かに帰還することは大事だけど……。

「どうにかならんか？」

『流石に難しいかと』

俺は灰色の脳みそをフル回転させる。

全くこんな事に頭使っくらいなら、とっとと脱出すればいいと思
う。

俺はどうしてもコレを完成させたいという欲求に耐えられなかつ
た。

それに、これは父上が残した遺産の感じられた。だから

「いや、絶対完成させてみせる。コレは父上からの宿題だ」

『ご自分が作りたいたけでしょうに……で、実際どうするんですか？』

「外装なら作れるかも知れませんが、流石に内部構造は一からは難しいですう」

「むう、そうか」

錬金なら簡易的な専用ストレージを組めば良いから、ソレはすぐにできる。

問題はこの機体を作る為の部品かぁ……。

「……待てよ？これは元々この学院にあつた秘宝だったよな？」

『え？ええ、学院長からのご厚意で頂けたものです』

「なら、他にも同じような部品、もしくはデバイスが流れ着いている可能性もあるやも」

「おお！ありえそうですう！」

良い事を思い付いた。ならやることは一つ。

「……学院長にお願いしに行くか。念のためにロングビルさんを味方につけよう」

『袖の下は、“ちよつと原子配列が異なる木炭”で良いでしょうか？』

「世界一堅い木炭ですう」

「ああ、ソレで良いだろう。女性は古来からそう言った光るモノが大好きだ」

全は急げと言う事で、そこらの木から錬金で炭素を抽出してダイヤを形成。

ソレを片手に、ロングビルさんの所へと向かったのだった。

S i d e 三 人 称

結局あの事件後、学院に残ったロングビルことマチルダさん。彼女は今日も今日とて、セクハラ爺と格闘した後、休憩を取る為に広場に出ていた。

自室に戻る程でも無いし、今日は良い天気だったからベンチで休んだ方が気持ちよさそうだったからだ。

「ああ、良い天気だ」

まるで通勤に疲れたサラリーマンの如く、ベンチに寄りかかるマチルダ。

若干はしたない姿だが、今の時間帯は生徒は授業をしているし、平民達はそれぞれ雑務に忙しく自分を見ていない事は解っている。だから安心してだらけられる時間なのである……もつとも。

「あ、ロングビルさん、今日は」

「うわっはッ!？」

もつとも、この学院には若干2名ほど、その枠に当てはまらない人間が居たことを彼女は忘れていた。

そのうち一人に話しかけられて、思わずベンチから落下しかける。

「だ、大丈夫ですか？」

「はあはあ、ん?何だいフェン君か。驚かすんじゃないよ」

彼女は自分の至福の一時を邪魔してくれた人物、フェンを睨みつつ姿勢を正した。

しかし、昨日の今日だと言うのに、この二人は随分と平然と接している。

どちらも往々にして図太い神経の持ち主のようだ。

イスに座り直し、彼女はフェンと対面する。

ちなみに既にフェンは彼女の正体を知っているのです、疲れる猫かぶりは止めている。

「いや、実はちょっと貴女にお願いしたい事がありました」

「……ソレはロングビルの方かい？それともフーケ？」

「勿論前者の方です。ちょっと学院長と交渉する時に、口添えして欲しいなと」

「口添え？」

フェンの言葉に若干顔を歪ませるマチルダ。

正直あの爺と相手にはしたくないと言うのは丸解りである。
だが

「謝礼は、これで」

「……お任せください。口添えくらい朝飯前です」

フェンが懐から取り出した、美しいブリリアンカットを施されたダイヤモンドを見た瞬間に、彼女は可憐で有能な秘書ロングビルへと姿を変えていたのだった。

「……こう言っちゃ悪いが、彼女は本当にしたたかである。

「それで私はどういう風に口添えをすれば？」

「それはですね」

そして二人は悪だくみを行う。彼女は懐にダイヤを修めてホクホク顔だ。

ちなみにダイヤの大きさは拳大・・・なんに使つ気なのだろうか？
まあダイヤモンドである事に変わりはないので、只単に嬉しいだけなのかもしれない。

ちなみに後日このダイヤは、彼女がフェンに頼み小さくされアクセと化するのだが余談なので置いておく。

少し時間が経ち、所変わって学長室。

授業中であるので、この時間は普段誰も来ない為、オスマンは鼻毛を抜いている最中だった。

そんな時に、突然の来客が訪れる。

こんこん

「ん？誰かね？」

『私です。フェン君が学院長とお話がしたいと』

「ふむ、入りたまえ」

普通ならば対外的にはかなりの地位を持つオスマンに会える人間は少ない。

だが、オスマンはそう言った事を気にしないタイプの人間で、何よりフェン君は自分を救ってくれた恩人の息子。

彼としては邪険には扱いたくないし、そのつもりも無かった。

むしろ若干の爺馬鹿の気が見られる辺り、彼の事をかなり気を使っていると言える。

「失礼します」

「失礼します。今日は学院長。お加減はいかがですか？」

「いらつしゃいフェン君や。こんな場所じゃがゆっくりしていつとくれ。ロングビルや、フェン君にお茶を入れてあげとくれ」

「畏まりましたオスマン」

いや、むしろかなり気にいられている。まるで孫が遊びに来た祖父の様である。

「い、いえ。そんな」

「よいよい、気にせんでもな。おぬしはワシの恩人の子じゃ。少しくらい恩を返させてくれてもよかるう？」

「は、はあ。」

思わず恐縮してしまうフェン、最初から出鼻をくじかれっぱなしである。

フェンとしてはもうチョイ大人の会話をしたかったのであるが、目の前の優しげに微笑むご老体相手にそう言う事をいうのも気が引けた。

オスマンの行動にタジタジになっているフェンを見て、クスクス笑いを浮かべているロングビルに少しむっとしたが、ソコは我慢する。

紅茶が目の前に置かれ、ロングビルは自分のデスクにまで下がった。

とりあえず、お茶に手をつけるフェン。一口二口飲んだ後、本命を切りだすことにした。

「実は、ちょっとしたお願いがありました」

「よい、許す」

「え？い、いや要件は聞かないのですか？！」

「フェン君の事じゃ、何も考えずに行動という訳でも無いんじゃない？」

「し、しかし……」

もはや困惑するしかない。明らかに想定していた範疇を越えている。

まさかこんなあっさりとは許可を出すとは思わなかったのだ。

しかも、許可云々の前に内容すら聞かれて無いし……。

「こんな老骨じゃがの？コレでも人を見る目は有るつもりじゃよ。フェン君」

「学院長……」

「それに先もゆうたが、君はワシの命の恩人の息子じゃ。ワシは恩は忘れん主義じゃしこのう。フェン君の両親に返せない分を君に返し取るだけじゃよ」

しかし、その言葉にマジで二の句が継げない。

助けてとロングビルにアイコンタクトを送るモノの、彼女もこんなオスマンは初めてらしく、無理だとすぐに返された為、内心軽く凹んだフェンだった。

「と、とりあえず何をするのかを聞いてから判断してください」

「あい解った。それじゃ聞こうかのう」

コレも実はオスマン流の交渉術なのでは無いかとフェンは思ったくなった。

相手のペースを崩し、自分のペースに持って行くやり方そのものに見えたからだ。

実際の所はそのような思惑は一切なく、垣根無しでそう言うてく

れている学院長。

ある意味器がマジでデカイのかもしれない。

「ええつとすね」

とにかく彼は交渉に移った。以前渡された光の宝玉、デバイスの事であるが、もしかしたら同じ物が宝物庫にはあるのではないかと？ソレと破壊の杖に代表される様な、ある種の危険物も一応解るものであるなら、自分がソレを見て注意しなければならぬ事を、周りに教えた方が良いのではないかと。

もつとも、その言葉の陰には、あわよくば宝物庫でパーツと成り得そうなモノを探し出し、自分のデバイスの強化、及び父上の残した遺産を完成させたいという思惑がある。

秘宝と呼ばれるモノが安置されている宝物庫なのだし、流石にここまで聞けば交渉は難航すると思ったのだが、予想はフェン君の斜め上を逝った。

「ふむ、確かに危険品があるかも知れんわう・・・お願いしちゃおつかな？」

もう啞然として口が閉じない。何故に？何故ですか？なんか軽くないですか？秘宝なんですよ？

そんな言葉がフェンの中を駆け巡り、かなり混乱気味である。

その事を察知したのか、学院長は飄々とした感じでフェンを見てこう言った。

「いや、実の所助かるのう。宝物庫の秘宝何ぞ大層な名前が付けられておるが、実際の所置かれていますのはアカデミーでも解析が出来なかつた代物ばかりでのう？結局のところ何の為のモノか解らんガ

ラクタばかりじゃったんじや。破壊の杖のような危険物が暴発されてもあつたとしたら、むしろ安心して寝れんわい」

そういつてフォッフオッフオと、某宇宙忍者笑いをしつつも、宝物庫への立ち入りを許可する書類を渡してくれる学院長。

しかももしも光の宝玉的なモノがあつたら回収しても良いとの書類まで付いている。

至れり付くせりの様だが、実は結構学院長にも裏の事情があつたりする。

先に述べたように、宝物庫の中身は殆どが用途の解らないガラクタである。

危険かもしれないと言う事で、秘宝と名をつけ宝物庫に保管してあるが、実質それらは年々増える一方なのだ。

オスマンはフェンのお陰でうすうす感ずいてはいるが、アレらは殆どが異世界から流れて来た代物であり、この世界にはそう言ったのが流れ着きやすいのかもしれない。

なので秘宝という名のガラクタは増える一方、しかし宝物庫のキヤパは有限である。

しかし危険かもしれないので迂闊に処分も出来なかつたのである。

そこに用途が解るかもしれない人間が来たのだから、ある程度は回収していつて欲しいと言うのが本音である。どういった物かは興味があくが、あのワイバーンを一撃で葬った攻撃の様なモノがあると考えると、自分の命の方が大事な事もあり、まさにフェンの申し出は渡りに船だつたのだ。

もつともそんな裏事情は混乱している所為で全然感知出来なかつた我らがフェン。

だが書類が欲しいのは欲しいので貰っておき、流石に貰うだけでは気が引けたので、何かして欲しい事があつたら言ってくれと
言つたところ

「なら、一回だけワシの事をおじいちゃんでも」

と、返された為、またもやカクーンと顎が落ちたフェン君であつた。

ちなみに若干恥ずかしながら、顔を赤らめつつおじいちゃんと言つてあげた所、かなり壺に来たのか悶絶していた老人が居たりいなかったり。

結局、ロングビルに渡したダイヤは無駄になつたとき。

S i d e o u t

「父上の遺産を相続」（後書き）

*間があいて申し訳ない。

ちよいとリアルが忙しいかったです。

まあそう言った事は皆様には関係ないかもしれませんが、平に「
容赦のほどを。」

また次回もよろしく。

「かもすZ・・・じゃなくて造るぞぉ〜」

「かもすZ・・・じゃなくて造るぞぉ〜」

妄想戦記

カン、カン、カン、キュイイイ

金属を加工するかのような音が、辺りに響く。

ソレはトリスティン魔法学院の広場の隅にひっそりと立っている小屋から聞こえてきていた。

そしてその小屋は、昨日まで建ってはいなかった・・・。

「おーし、なんとか内部フレームは無事、これなら流用が効く」

『モーター式じゃなくて油圧系統に一新しましょう。それとキャタピラーも付けますね?』

【組成はコレで良いから・・・良し、データ記録つと】

とまあ、なんちゃって小説風に言ってみたが、実際は父上の残した設計図データを元にした、

魔導師用多脚型自律戦闘支援ユニットの製造である。

錬金を用いて作った作業小屋の中で、色々作り上げている最中なのだ。

『動作プログラムは8割方完成。残りは経験値を詰ませる為に余剰としてのこして』

「ふーむ、もう少しギア比を変えた方が良いか？魔導炉からのエネルギーラインは」

【ふう、外部ストレージに記憶可能でも、沢山あって大変ですう】

さて、なんでいきなりロボットづくりをしているか？

実は今日宝物庫に入ることを許された俺は、あの後さっそく宝物庫に潜ったのだ。

そしたら出るわ出るわ どころのフネのスクリューやら、壊れた銃の銃身のみだとか色々。

俺の世界からは、破損した部品しか無かったがタウルスやらポーター機やらの一部分。

それとシールドバンカーの不発弾が存在していたのには流石に驚いた。

こればかりは残しておくマジでヤバいので、封印処置した後格納領域に収納しておいた。

さらには技術体系的には似ているが、恐らく違う世界のモノもあった。

恐らく戦闘機のノーズコーンだと思うんだが、エストバキアなんて国は聞いたことがない。

とにかく、俺はそこから使えそうなモノを色々と物色していた。

今の俺に必要なパーツや魔法技術で作られたモノを、回収して回

ったのである。

そして回収を続けていると、ひときわ俺の目を引いたモノがあったのだ。

それこそ、父上の遺産を完成させるのに、ちょうどいいモノ

「・・・ふう、まさか思考戦車^{シンク}がこの世界に来てたなんてなあ」

「マスター、外装なんですけど、USNの？23の複合装甲で良いですか？」

「ああ、重量の増加でムーバブルフレームだとキツイから、今回は頑丈な外骨格で行くからな。？23は対魔導師戦車にも使われる装甲だから、普通の攻撃じゃビクともしないだろう」

何と宝物庫で俺は、あの攻殻に出てくるタチコマを発見したのだ。かなり破壊された状態であったが、原型はとどめておりなんとか利用できる。

ニューロチップが無い・・・というよりは元から搭載されていなかった。

見る感じ恐らく2nd GIGの仕様だと思われる。詳しくは解らないけどな。

そして俺はソレらを回収した後、学院の一部を借りて小屋を建てた。

錬金というのは本当に便利である。

もっとも必要な材料は近くの森から伐採してきた木材だけど、

作りたい形に錬金出来るので、工具とか一切要らなかったのが嬉しいぜ。

その小屋に宝物庫から貰ってきた材料と、一見ゴミに見えるモノを集めた。

いや実際ガラクタとかゴミだったんだけど、原子配列変えるから問題は無い。

そして父上の設計図データを元に、回収したタチコマの基幹フレームの一部を流用して、設計図の機体を作り始めたのだ。

タチコマは後部ポッド部と中央胴体部からなり、胴体には1組2本のマニピュレーター、それと2組4本の脚で構成されている。

父上の設計図の機体も同じ構成だったので、タチコマから流用するのは簡単だった。

脆弱だった装甲は、カーボンとチタンを複合させた特殊装甲により強度を獲得。

この装甲が骨格代わりとなり、機体の重量を支える役目をする。剛性はかなり高い。

しかも装甲板はモース硬度10近くあるが、魔法によって柔軟性も損なわないという鬼畜仕様だ。

それにより若干関節部の自由度が低下したが、強度は折り紙つきとなった。

全長は約3m程度であるが、装甲を分厚くした分、元のサイズよりもデカく見える。

曲線的だった装甲は、ほぼ軍用の直角的な装甲へと変換した為、元よりも兵器としての色合いも強くなっている。

ちなみにカラーは今はまだ決めてないので灰色だ。それと各部をユニット化してある為、万が一破損した場合でも、その部分をパージする事でデッドウェイトを無くす事も出来る。

動力系統については、少しばかり悩んだのだが、補給が見込めないプラス魔導師が運用するという事も考えて、USN式の魔力バッテリーからの術式変換による電力供給方式では無く、

ダイレクトに魔導炉を搭載する事にした。

これによって、魔力素子が存在する世界（例外は虚数空間）で、エネルギー切れが起こることは無くなったので、簡易的な装甲シールドも搭載する運びとなった。

『ML-ACSSU-0、コードネーム“シラン”への搭載動力炉はどうします？』

「父上の設計図に魔導炉を元に小型化したヤツってあったよな？」

『しばしお待ちを　　はい、確かにありますね。しかしコレを搭載するのですか？』

「問題でもあるのか？」

本来魔導炉は戦艦、もしくは地上戦艦クラスに搭載するものである。

管理局なら次元航行艦、簡単に言えばアースラの様なフネに搭載されている様なものである。

流石にこのサイズにまでダウンサイジング化すると、出力が極端に落ちる上、

それでも人間には持てるような重さでは無い為、一般魔導師では

絶対に使わないからだ。

コスト的に見ても、軍の人間なら絶対に使おうとは思わないだろう。

『いえ、少しばかり製作するのが大変ではないかと・・・』

「錬金があるから、製作自体は簡単だと思うぞ？」

『あ、そう言えばそうでしたね』

もつとも、今作っている機動兵器に乗せると言うのなら、若干話は違って来る。

原子炉よりも扱いやすく小型で高出力、流石に単体で魔法運用には適さないが、それでも十分な程の高出力である。

人間が持てなくても、機動兵器に搭載するのなら何の問題も無い。

『しかし、本当にコスト度外視ですね』

「試作機だからな」

さつきヴィズが言ったML-ACSU-0とは

・ Multi-legged autonomous combat
t support units (多脚型自律戦闘支援ユニット)

の事であり、父上が作っていた設計図の仮認識番号である。

何故仮番なのか？ソレはまだコレがプロトタイプも無かった机上の設計図でしか無かった為、認識番号も Multi-legged autonomous combat support units のイニシャルを適当に繋げただけのモノだからである。

まあ、それじゃ流石に呼びずらいので、シランというコー

ドネームをつけてあるけどね。

『す、すごい、五倍以上のエネルギーゲインだ』

【コイツ、動くぞ!?!】

「ファーストか。つかまだ胴体も完成して無いのに動く訳無いだろう」

だから、ネタに走るなつての・・・俺がいえた義理じゃないけどさ。

ちなみに何故USNで魔導炉搭載が見送られていたのかということ、コスト的な問題と“そんなに稼働時間あってどうする”という理由があつた為だ。

魔力バッテリーからの術式変換による電力供給方式でも、通常の機動兵器が起動している時間は最長20時間。全力運転をし続けていたとしても4時間は持つ。

それなら高価なレアメタルを大量に消費して作られる貴重な魔導炉を搭載するよりも、後方基地を作り魔力を定期的に充填させた方がコスト的には有利なのだ。

つて、随分と話がそれたぜ。閑話休題。

「ふーむ、どうにか足回りは出来てきたかな」

『ローラーダッシュ用のキャタピラーがこんな形で使えるとは思いませんでしたね』

「今まで一度も壊れたことは無いからな。運用データだけは沢山ある」

【エート、脚が完成 データ解析終了ですう】

どうにか1本、脚が完成した。
今で来ているパーツは腕が一本と足と、丸ごと流用した搭乗ポッドだけだ。

胴体部分はフレームはほぼ出来ているが、魔導炉の搭載及び装甲をつけていない。

「それじゃ一丁やりますか・・・リン」

【ハイです。錬金用簡易ストレージ“ヘルメス”と接続、データをロード、いけます】

「錬金」

俺は錬金で今まさに完成したばかりのシランの脚部と同じモノを錬金していく

材料として集めた木材、石ころ、土や壊れた鉄製品とかのガラクタの山が瞬く間に消えていき、光が治まって最後に残ったのは、先に作ったのと寸分違わぬシラン脚部パーツであった。

一応解析はするが、違いがあっても精々ナノのレベル程度の誤差だろう。

こうして着々と俺は機動兵器を作り上げて行く。

兵装の部分はいずれ作る事にしよう。一日じゃ完成できるなんて思えないしな。

そして自力で作ったアトリエ小屋の中で、俺は作業にのめり込んだのであった。

そうだ、宝物庫で見つけたアレも調べてみないと

Sideサイト

昨日の舞踏会から一夜明け、その日の午後に俺はフェンに呼ばれて広場に来ていた。

何故に午後かというと、実は飲み過ぎで昼までぐったりだったからだ。

流石にワイン2本開けたのは不味かったかな？まだ少しだるいぜ。

『早く行こうぜ相棒』

「せかすなよ。デルフ」

この世界に来ての初めての俺の剣であるデルフが、早く俺を振えとせかす。

そんなにあわてなくても、フェンは逃げることは無いだろうにな。しっかし剣術訓練か、何するんだろう？やっぱり最初だし素振りとかするのかわ？

ソレはそれで面倒臭いなあ。

「おや、やあサイトじゃないか」

「ん？」

広場を目指し歩いてっていると、突然声を掛けられた。

誰だと思いき声をした方を見ると、どこかで見たことがある気障っぽいヤツがそこに居た。

「……あれ、誰だったけ？
なんて言っつのは冗談、ちゃんと覚えている。」

「よう、ギーシュ。俺に何か用か？」

「いや、偶々見かけたから声を掛けただけさ。君こそ何を？」

「ん、ちよいとした野暮用ってヤツだ。所でギーシュこそココで何を？」

「フフ、僕も土のメイジだからね。空いた時間を利用して魔法の訓練さ」

コイツも随分と性格が変わったと言うべきか何と言うか。

ルイズによれば俺とリンとの決闘騒ぎの後から、まるで別人になっってしまったかのように性格が変わったらしい。何と言うか、貴族としての誇りは持ちつつも、平民への偏見がほぼなくなったとか。

一応貴族平民という垣根があるので、公の場では貴族としての態度を優先するが、今みたいなプライベートではそう言った事を気にしなくなっただけらしい。

「まあ大体の事は、お前の顔に付いたもみじマークで見当が付くけどな」

「……あまり言わないで欲しいのだがね」

「はは、すまんすまん」

もつとも、生来の気質なのか女性へ声を掛けると言う事は忘れていない為、恋人をモンモンとさせているらしいとの事。ソレさえなければ、中々気の良いヤツなんだがなあ。

「ま、実を言うと、俺はフェンのところに行く途中なんだ」

「フェン？彼の所にいくのかい？なんで？」

「……まいいか、剣の訓練だよ。デルフがやれやれうるさくてな」
「なにお！やれた方がいいからやるんだろ！俺様を持っている相棒が剣も振れないなんてカツコ悪いぞ！」

カチカチと鐳を鳴らして抗議するデルフ。

まあそりゃ剣を持っている以上、持ち主が剣を使えないなんて恰好が付かないよな。

「まあ、という訳だ」

「成程、剣の修練か・・・なあ僕も言っても良いかな？」

「へ？なんでよ？」

「ふむ、色々な理由があるが、何よりも一番の理由は」

口元にどこから取り出したかバラの造花を加え、いきなりポーズを取るギーシュ。

つか、マジでどこから出した？なんかもったいぶった様な雰囲気
でコイツはこう言った。

「只単にヒマだからさ」

「・・・良いんじゃないのか？邪魔さえしなけりゃさ」

「む、なんだいその呆れてモノも言えないと言う目は？」

「鋭いじゃんか。今の状態がまさにそうだよ」

なんだとー！と声を上げているギーシュを置いて、俺は先に広場
へと足を向けた。

某有名なゲーム風言えば、ギーシュが仲間になっただってな感じ
か？

相手がコイツだと、なんか嬉しさが半減以下というかなんて言う
か・・・。

さて、ブツブツ言っているギーシュの声をBGMにしていたら既に広場に来ていた。

ルイズが授業中や用事が無い時は大抵ココにフェンは来ている。俺はと言えば、ルイズの後に付いて回っているので、フェンとは大抵別行動だ。

「フェンの奴、何処に居るんだ？」

「それらしい人影は見当たらない様だね？」

しかし肝心のフェンの姿が見えない。おいおい約束を蹴飛ばしたのか？

いや、だけどあのフェンの性格上、それはちと考えにくいな。

「どっかに隠れてんのか？」

「むう、あの子がそんな無意味なことをするとは思えないのだが」

それには同感だぜギーシュ。あいつはとにかく無駄な事はしないしな。

そして辺りをキョロキョロして探す事数分、ギーシュがある事に気が付いた。

「ん？あんな所に小屋なんてあつたかね？」

「お、そういや・・・まさか」

なんとなくだが、アソコにフェンが居るのではないか？

そう思った俺はそう思いギーシュと一緒に小屋に近づいて行つた。だが、ある一定以上小屋に近づいた時に、何かを通り抜けた様な感覚を感じた。

そして

フイイイイイイイイインツ!!!!!!!!!!!!!!

甲高いジェットエンジンみたいな強烈な音が、俺達に襲い掛かった。

思わず耳を塞ぎたくなるような音で、大きさ的には地下鉄くらいか？

とにかくデケエ音だった。

「うわっ！うるせえええ！！！」

「こ、これは一体！？それに小屋を中心にして渦巻くこの力は！？」

なんでいきなり音が聞こえたのかは知らないが、多分フェンの魔法か何かだろう。

これは間違いなくあの小屋の中にいると踏んだ俺達は、音の中心にある小屋へと近づいた。

小屋の入口に手を掛けるが、なんとなく扉を開けることは戸惑いを感じた。

しかしココまで来て引きさがるのも癪だ。

「いつせいのであけるぜ？」

「ああ、頼む」

そして俺は、小屋の扉を開き中に入った。

だが中に入った途端、先ほどよりも大きい音が中から聞こえたので、俺達は耳を塞いだ。

一体何やってやがるんだ？フェンの奴。

(・・・へえ、意外と広い部屋、というか倉庫?)

小屋の中は意外と広く、一部屋しか無いと言った感じだ。一階丸ごと部屋なんだろう。

これだとむしろ小屋というよりは倉庫と言った方が良いかもしれない。

そして部屋の中心にフェンの姿をとらえた。

なにやら作業台らしき台の上に、恐らく音の原因と思われる三角形の何かを弄っている。

その三角形の何かからは、白い感じの光る粉みたいなのが漏れ出ている。

いったいソレが何なのか俺には解らなかったが、とにかくするべきことをする。

フェンの背後に回って、肩をぽんぽんと叩いたのだ。

驚いて振り向くフェンに、俺達はジェスチャーを加えてココに来たことを伝えようとする。

だが、ウマイ事伝わらない。どうしようかと俺が悩むと、いきなり音が小さくなった。

どうやらあの三角を止めたらしく、噴出していた粒子が徐々に少なくなっていくのが見て取れた。

ようやく喋る声が聞こえるくらいに下がってきたので話しかけようと思ったが、先にフェンから話しかけて来た。

「ギーシュさん、サイトさん、何か御用ですか？」

「ふう、ようやく口で会話出来るぜ。御用って言うか、俺の剣の訓練見てくれるんだろ？」

「・・・あれ?もうそんな時間でしたか？」

「既に昼を回ってる。どこに行ったのかって探してたんだぞ？」

すこし拗ねた様な感じで行ってやると、フェンはすこし苦笑しつつも笑った。

「コレだ、年の割に本当に落ち付いてやがるぜ。なのにガキっぽいところもあるんだよな。」

本当に 偶に解らなくなる。

「すみません。ちょっとした実験に夢中で !! ギーシュさん！そこには触れないで！」

「わっ！と、すまない。つい珍しかったもので」

突然の大声に、後ろでガタつという音が聞こえた。

見れば部屋の隅っこにあった球体状の何かに触れかける直前で、硬直しているギーシュが居た。

「ふう、あぶない。サイトさんならともかく、メイジである貴方達には勝手に触られると危険かもしれなんですから気をつけてください」

「いや、面目無い。これからは気をつける」

いや俺ならともかくってなんだよ？俺ならって？

しっかし、よくよく見ると訳解んないもので埋め尽くされてんな。

この小屋。

「ところでフェン君、この広場には昨日までこんな小屋は無かったと、僕は記憶してるんだが？」

「そういや、俺も昨日ここを通った時は何も無かった」

「この小屋ですか？自分で建てたんですよ」

フェンはさも当たり前といった感じに自然にそう答えた。

だがソレを聞いた俺達は開いた口がふさがらない。

自分で建てた？まだ7歳前後の子供であるフェンが1人で？大人の力を借りずに？

「いやはや、この世界の魔法は便利ですな」

「・・・ああ、魔法か。ならしょうがないな」

「い、いやサイト。僕の知っている限り魔法で木造の小屋なんて

錬金か?!」

ギーシュは何か勝手に自己完結して驚いていた。

いや魔法なんだからこれくらい出来んじゃないかねえのか？と俺は思っていた。

だが、ギーシュの反応からすると、どうもそうでもないらしいな

「ギーシュさん正解です」

「信じられない・・・君はスクウェアクラスなのかい？」

「さあ？こちらでの魔法のランクは、自分には無意味ですからね」

「むう・・・」

なんか納得して無いギーシュだが、仕方が無いと思うぞ？

だってフェンは俺と同じく、異世界から来た魔法使いらしいからな。

こつちとは違う魔法の一つや二つあるだろうぞ。

それよりも

「なあ、剣の訓練どうすんだ？」

「あ、そうですね。すぐに準備するので広場に出ててくれますか？」

「あいよ、解ったぜ。行こうぜ？ギーシュ」

「待ちたまえ、僕はぜひ錬金の事に付いてフェンと話が

「

「はいはい、今日は俺の方が先客だからな」

「え、襟を引つ張らないでくれたまえ！ボタンが取れてしまっ！」

とりあえず、ギーシュをひっぱって外に出た。

さて、どんなことスンのか楽しみだな。

S i d e o u t

「かもすz・・・じゃなくて造るぞぉ〜」(後書き)

* 幻想の庭師さん、いつもアイデア提供に感謝です。

今回、以前から感想に出していたシランを使わせていただきました。
なるべく感想に書かれた内容に沿って書きましたがいかがでしょ
う？

ソレではまた次回に。

「足元がお留守ですよ？・・・言ってみただけ」

「足元がお留守ですよ？・・・言ってみただけ」

妄想戦記

Side 三人称

先に小屋を出たサイト達の所へと合流したフェンは、近くにあった二本の木材を手を取った。

大きさ的にはちょうど1mはあるだろうか？大剣を扱う二人にとっては大き過ぎず小さ過ぎずと言ったところ。

「さて、それじゃ剣の訓練をやりますかね」

「っておい、木刀ですらないじゃないか？角材で殴りあいとかはゴメンだぞ？」

サイトはフェンがその手に持つ木材を見て冷や汗を流す。

いや、表面も削っておらず木材と言うよりは丸太に近いソレ。心情的になんとなく振り回すのは躊躇われた。

「大丈夫、すぐに造ります」

「へ？造る?!」

フェンはそう言うと、木材を地面に置いた。そしてほんの一瞬目を閉じ、精神を集中させる。
どうやらデバイスの補助なしで錬金の発動を行うようで、木材を中心に魔法陣が展開された。

「錬金」

そしてフェンがキーとなる言葉を述べた途端、木材が光を帯び、その形状を瞬時に変える。

時間にしてわずか1秒もかからず錬金は終了し、後には2本の木刀だけが残された。

ちなみに木刀とかいてはいるが、形状は剣の形である。

「ふう、こんなもんですかね」

フェンはそう言うと、木剣とも呼べる木刀を手に取り、ヒュンヒュンと振ってバランスを確かめた。

問題無く簡単に振えるので、バランスは問題無い様である。

「・・・わお」

「す、凄い・・・なんて正確ではやい錬金なんだ」

「はい、サイトさん」

「おっと」

フェンの錬金を見て驚きの声を出していたギーシュはスルーし、フェンはサイトに今さっき作り上げたばかりの木刀を投げてよこした。

慌ててそれを受け取るサイト。ちゃんと持ちなおした後、しげし

げと木刀を眺めている。

実の所、木刀も修学旅行とかでお土産屋で触って以来、持ったことが無い彼にとって、

こう言ったモノも珍しいモノとして目に写るのである。

『えー！俺っち使わないのかよー！』

デルフが不満そうに声を上げた。

彼としては最初から真剣でやって欲しかったのだろう。

しかしそれにはフェンも反論する。

「いや、だってサイトさんの実力解らないと、真剣じゃ危ないし」「そうだぞ？もし怪我させちゃったら「1」2回しか剣を持ったことがない素人が、好き勝手に刃物振り回したら自滅しちゃうでしょう？」「・・・ムッ」

フェンにそう言われ、少しムカつて来たサイトだったが、ここで騒いでも格好悪いだけだから、

冷静に大人になれと心に言い聞かせて精神を落ち着かせた。

(見てろ、何度か叩いて泣かせちやる・・・)

訂正、あんまり冷静になっていない。むしろ大人げない方向に思考がずれている。

まあフェンの言い方にも問題があるのだから、致し方無いとも言えるがそれよりも

『・・・そういやそうだ』

「でしよう？」

「・・・そこは味方してくれよ」

相棒で有る筈の剣が先に納得してしまった。
なんか釈然としないサイトだったが、このままでは話も進まない
のでデルフをちょっと離れた所に置いた。

「んじゃ、マジでやって良いんだな？」

「勿論。手加減されると、どれくらいでやればいいのか解らなくなるので、全力でお願いします」

「いったな？」

後悔すんじゃねえぞ・・・」

サイトはそう言うと、右手に持った木刀を見よう見まねで正眼の
構えにした。

そして一瞬フェンの方を見た後、息を大きく吸う。

「うし！ウオオオオオツ！！」

サイトは気合を入れる為に大声を上げながら、フェンに目がけて
突っ込んだ。

そして

「いたひ」

「え、えと。大丈夫ですか？」

思いつきり目測を誤り空振り、そしてバランスを崩して転倒していた。

それはもう見事な空振りで、むしろこれも見本に出来るんじゃないかと言っくらしいの。

一体なんの見本なんだろうかと、話がずれたが、この事にサイト自身も首をかしげていた。

「おつかしいなあ？前ギーシュと戦った時はちゃんと剣持ててたよな？」

「ああ、いまの見事な空振りからは想像もできない程早かったかな？」

「うーん？・・・あ、そうか。サイトさん、もう一度木刀を構えてください」

「うん？こうか？」

転んで付いた埃をはらっているサイトは、フェンに言われてもう一度構えてみた。

それをフェンはじーっと見つめている。

この時、フェンは自分の中に居るリンと再度ユニゾンをし、解析を行わせていた。

「成程、ルーンが発動していない」

その結果、以前の決闘の際には発動していた、左手のルーンが全く機能していない事が判明した。

だが、件のサイト君はと言うと

「るーん？・・・ルーンって、何？」

すっかり自分の身体に付与されてしまった魔法に付いて忘れてしまっていた。

この場にヒューッと、木枯らしが吹いた様な感じであった。

S i d e o u t

S i d e フ ェ ン

あの後何度か試してみたが、結局ルーンは発動しなかった。

ルーン無しのサイトだと、その能力は中の中程度、正直木刀を当てなくても避けられた。

此方としてはルーン解析を是非ともしてみたい為、一度は発動して貰わないと困る・・・。

そう言えば、あの時は剣を持たせたら発動したんだよね？・・・ふむ。

「サイトさん、次はデルフを構えてやってみましょう」

「え！？真剣でやるのかよ！あぶねえって」

「大丈夫です。先程からの打ち会いである程度サイトさんの力は把握しました。真剣でやっても大丈夫です。それに自分は魔法がありますからね」

「いや・・・だけどさあ」

すこし渋るサイト。ふむ、日本人気質ってヤツかな？

相手に怪我をさせることを恐れているんだろう。

「ま、試しに一回って事で、ね？」

「だって真剣だぜ？当たったりしたら」
「サイトさんの場合ソレ以前の問題の様な気もしますけど・・・」
「む」

この後も渋るサイトだったが、結局デルフを鞘から出して俺と対峙していた。

すこし挑発したのが効いたのかもしれない。

しかし、俺はこの時今までの打ちあいの結果から、すこしサイトを侮っていた。

その為このすぐ後に、俺は驚きで目を見開く事になる。

「それじゃ、準備は良いですか？」

「おう！・・・ってフェンは剣使わねえのかよ？」

「それなら僕が錬金で「いりません」 はは、はつきりしてるね」

やかましい、幾ら錬度が上とはいえ、俺が改造したデルフを相手は使っただぞ？

俺だってそれなりの剣でないと、打ち合った途端に壊れるわい。

「使いますよ？ オートクレール」

「それは・・・あの時の？」

「ええ、俺の剣です」

格納領域からオートクレールを取り出した。

同時に身体強化も自動で掛るので、とりあえずレベルを合わせとかないと。

そして俺もオートクレールを構える。

「それじゃあ 構えてください」

「ッ！」

武器を構えた途端、俺の気配が変わるのをおぼろげに感じ取ったのだろう。

サイトはちゃんとデルフを構えていた。・・・なかなか才はあるんだな。

そしてチラッと彼の手を見れば、淡く光を放つルーン・・・やはり。

「（リン、解析スタート）」

【了解ですう】

ルーンが発動したのを確認した俺は、リンに解析を頼みサイトへの警戒を上げる。

何しろルーンが発動したあの時、素人に金属の人形を切らせるほどの強化を与える魔法だ。

警戒するに越したことは無い。そして向き合い、軽く睨みあう。

俺は大剣を腰だめに構え、サイトの出を窺う。

そしてサイトが先に動いたのだが

「ッ（速い!?!）」

踏み込みの速さが先程とは段違いに速く、たったの一步で射程距離近くまで踏み込んできた。

俺は慌てて後退して距離を取るのだが、サイトは踏み込みを止めない。

そしてデルフの峰の部分で、俺に斬りかかった。

だが、俺とてシグ姉さんから剣の手ほどきを受けていた訳ではない。

確かにサイトは速い、だがそれだけだ。普通の人間が見たら恐らく凄く早く見えるだろう

だが、確かに人間の速さでは無いが、魔導師として戦ってきた俺にとっては遅すぎる。

思いもよらない程強力な強化に少し戸惑ったが、すぐに思考を切り替えて大剣を構えなおした。

考えてみれば、同じ剣の打ち合いでも、シグ姉さんの打ちこみの方が半端無い。

正確には虚を付けくわえた動き、剣士として完成している彼女の方が、俺には恐ろしい。

マルチタスクが起動している思考の中、サイトの顔をちらりとのぞき見た。

サイトは、恐らく峰打ちで決められると確信している顔だ。

成程、怪我をさせたくは無いという倫理感から峰打ちを選択したか……。

「だが、甘い」

ガギン！！

『「グツ！……いつてー！」』

デルフが振り下ろされる軌道が、身体の動きのソレと反比例しあまりにも単調過ぎた。

シグ姉さんとの打ちこみに馴れている俺には、サイトの放つ剣も簡単に読めてしまう。

デルフが通るであろう剣の軌道を遮る形で、俺は大剣を大地に突き立てて固定した。

結果デルフは受けとめられ、思いつきり打ちこんだ所為で衝撃が跳ねかえりサイトが怯む。

BA?を装着していた場合、ここで手甲に付けられた隠し剣で首を貫くところだろう。

だが、今回はBA?を展開していない為、精々手をサイトに当てただけだった。

「はい、一死亡ですね」

「え?何でだよ!?俺にも」

『動きを止められて、フェン坊に手を当てられてる段階まで来てるとな?簡単に言えばそれだけ隙があった事だぜ相棒。それだけの隙があれば、魔法やナイフみたいな小刃物とかでやられちまうよ』

俺の逝った事にサイトが反応したが、ソレをサイトが手に持っているデルフが遮った。

珍しく戦闘指南みたいなことを喋っている。ほんの一瞬の闘いだっただが、

今ので少しは記憶が揺さぶられたって事なのか?

「でもルーンが発動した時の動きには驚きました。以前の決闘の際に見て無かったら危なかったです」

「本当、俺も驚いたぜ。剣を構えたら身体が急に軽くなった様に感じただんだけ?」

「ふむ、と言う事は、そのルーンにはやはり身体能力強化の効果が
あるみたいですね」

成程、強化は出来るんだ。恐らくは反射神経や筋力、瞬発力の上

昇と言った類だろう。

魔法関係の強化はされないが、身体を使う剣士みたいなヤツにはうってつけの魔法だ。

『あつたりめえよ。何せ相棒はガンダールヴだからな』

「ガンダールヴ?」

「ガンダールヴだって!？」

俺達はガンダールヴという言葉はどういうものか知らなかったの
で、只首を傾げただけだったが、

どうやらギーシュは知っていたらしい。聞いた途端に大声で叫んでいた。

「しってんのか?ギーシュ?」

「あ、ああ。始祖ブリミルに仕えたっていう伝説の使い魔の名前だよ。昔読んだおとぎ話の本にも登場するくらい有名な話さ。ブリミル教の教義にも登場するしね」

「宗教関連か・・・なら知らなくて当然か。俺達ブリミル教知らないしな」

同感。宗教関連はごたごたが怖いから、あんまりタッチしたくないぜ。

ん?だけど何でデルフがそんな事知ってた?

「デルフ、なんでサイトさんがガンダールヴだって解るの?」

『そりゃオメエ、俺がガンダールヴ専用の剣だからだ。だから相棒は相棒なんだよ』

「そのガンダールヴってのは凄いのか?」

『おうよ、気が付けば神の盾だなんて大層な名前が付いてたくれえ』

神の盾ねえ、まあ使い魔が主人を守るモノである以上、納得できる二つ名かな？

恐らく詠唱中のメイジを守る姿から来た名前なんだろう。

「しかしサイトを一見すると、全然そうは見えないのだがね」

「うるせいぞギーシュ。またボコるぞ？」

「やれるものならやってみたまえ、これでも以前よりも自主訓練を積んでいるんだ」

「はいはい、そう言ったのは後でお願いします。とりあえず続けま
すよ」

なんか剣悪になりかけたので、とにかく訓練を続けると言う事で無理やり止めさせる。

まあ確かに今のサイトの姿を見て、伝説だなんて解る人間なんていなさそうだし、

ギーシュの言う事も解らんでも無いな。実際弱いんだもん。サイ
トって……。

そしてこの後、しばらく剣を振っていたのだが、すぐに彼の問題
点が沢山上がってきた。

そして一番の問題点、ソレは

「おーい、大丈夫ですか？」

「ぜえぜえ……ちよ、ちよっと待ってくれ」

『だらしないねえ相棒。たかが10分程度の打ち合いじゃねえか』
「今までこんな事ぜえぜえ。したことねえんだから、しょうがない
だろ！」

すさまじくスタミナが無い。強化された反動なのか短時間しか強化が持続しないのだ。

しかも強化が切れた途端、疲労や筋組織へのダメージが復活するらしく、今サイトは息を切らせてぶっ倒れている。

強化されるのはいいが、反動がデカすぎ。いや、ルーンの強化にサイトの身体が追い付いていないんだ。トラバントに無理やりポルシェのエンジン乗つけた様なモンだな。

瞬間的な力の発揮は問題無いが、その後に色々と問題が発生するんだ。

「しょうがない。・・・リペア」

「おおぅ、あつたけえ〜。温泉入ってるみてえだ〜」

しかしこのままじゃ何も出来ないの、とりあえず治療を行った。これで痛めた筋組織も回復するだろう。

流石に失った体力はどうにもなんねえけど、サイトは若いから大丈夫だ。

「ま、これでこれからどんな訓練をすればいいのかが、大体把握出来ましたけどね」

「・・・んあ？これで終わりじゃねえのか？」

「一回で終わるとでも？」

「あはは、まあそうだよなあ」

結局、サイトに必要な訓練は

・ルーンの強化に付いていける体力。

これは必須だ。どういう基準で強化が行われているのか解らない上、

強化された後の身体への負担を減らす為にも、まずは体力をつけなくてはなるまい。

平均的な日本人の体力より少し下なので、訓練はかなり難航しそうだ。

・剣術、もしくは実践を通じた体裁きや剣の動作の習得。

これも必須。今のサイトの動きはあまりにも素人過ぎる。

このままじゃ、ただ力と速さがある素人が剣を振り回しているのと変わらない。

せめて、剣を自在にとまでは行かないが、ある程度使えるようになってくれないと、周りが危険過ぎる。

とりあえず、以上の二つが必要最低限のラインと言ったところだろう。

「とりあえず、以上の二つが必要最低限でしょうね」

「えー、でもそんなに覚えなくても平気じゃねえか？だって守るだけだろ？」

壁になるだけだから楽じゃねえかとはサイトの言。

いやいや、そんな訳無いでしょう？

「サイトさん？戦いと言うのは攻めるよりも守るの方がはるかに難しいんですよ？」

「そうなのか？」

「攻める時は最低限自信を守れば良い。だけど誰かを守ると言うのは、自分が死なないように必死になりながら、護衛対象に常に意識を回していなければならないんです」

特にルイズ嬢の事だ。メイジの癖に必要な以上に前に出ようとするだろう。

貴族は敵に背中を見せたりしない的な発言をしてな。

そして、そう言う彼女を守るのは、俺達のような従者や使い魔なんだけだ。

「う、ソレは難しそうだ」

「それに、サイトさんはドラゴンやグリフオンの様な幻想種と今のままで戦えますか？」

「無理だろう流石にそれは・・・」

「でもマスターの意向次第では、そう言ったのからマスターを守らなければならぬかもしれないかも。そんなときに必要な力が無いと言うのは実に愚かです」

この世界は日本とは違う、一見平和そうでも日本よりも危険な世界である。

なにせ野生動物に殺されたり、盗賊に殺されるとか日常茶飯事らしいからな。

自衛手段は多少過激な方が、恐らくこの世界で生きる為には必要になって来ることだろう。

「とりあえず行う剣術訓練は、デルフを用いた実戦形式で行きまし

よう。そうすれば速く覚えられます」

「実践つて、さつきみたいなの？」

「肉体と精神を限界まで酷使し、魔法で回復させます。この方法なら前者よりもずっと早く強くなれるでしょう」

いや、実を言うところの方法しか俺知らんのだわ。

俺が魔導師になる為の訓練は、大抵こんな感じだったしな。

「最初は大変ですが、筋肉痛は起こらないと思いますので、只トレーニングするよりは楽かと」

「……まあ普通に素振りとかじゃつまんなそうだし、それでいっつか」

『よろしく頼むぜフェン坊』

デルフにそう言われ頷く俺。まあ死なない程度に揉んであげる事にしよう。

ストレス発散も兼ねてな。非殺傷設定って本当に便利だね！

さて、この後は流石にサイトがもうへばってしまったので、解散と言う事になった。

何故か最後までいたギーシュが、今度俺とじっくり話したいと言ってきたので、

一応OKしたけど、なんか用でもあつたんだろうかねえ？

「……リン、解析は？」

そして誰もいなくなった後、俺はルーンの解析を任せていたリンに話しかけた。

【記録は採れましたですう。現在ルーン的作用を解析作業中。後は今後の訓練での調査結果を元にして、比較しないと何とも言えないですう】

「？いつもより難しかったのか？」

【ハイですう。一応ほかの使い魔さんから記録したルーンとも比較してたんですが、普通の使い魔さん達がザ　だとしたら、サイトさんのルーンはまるでギヤ　でした】

ソレはまた随分な性能の違いだな。方や汎用、方や特殊ってことか。

だがとりあえず

「例えるのは良いが、一部の人にしか解らない例えはやめなさい」

【あう、解りました】

これでよし。しっかしこの世界のルーン魔法ってのは、やっぱり性質が違うみたいだぜ。

コレ解析出来たら、色々と出来そうな気がするから、とにかく解析は続けてみよう。

「っと！ヴィズの改造もしないとな」

『そうですね。所で本当にあの部品組み込むんですか？』

「ああ、便利そうだしな。なんとなく勘で拾ってみただけ、当たり前

を引けて良かったぜ」

俺はサイト達が来る直前まで弄くっていたあの装置の事を思い浮かべる。

宝物庫のガラクタの山の中に、偶然埋もれていたのを発見したモノだ。

解析でも殆ど解らず、内部構造は解るが原理も今だ解らない。

解ったのは何故か粒子状になる特性を持った魔力素子を、魔導師の魔力を元に無尽蔵に製造。

また、ソレを大量に保存できる空間圧縮、いや超空間圧縮を備えている事だった。

粒子自体には特に何か環境や生命体に悪影響を及ぼす様なものは無い。

それだけは自身の身体を実験台にして証明済みである。

だがそれ以外の機能、効果は一切が不明。しかし魔力機関としては破格の性能を有している。

素材の年代測定の結果、恐らくはロストログアかそれに付随する部品の可能性がある。

アレを制御する事が出来れば、更なるパワーアップが可能になる事だろう。

この世界からの脱出する際にも、きつと役に立つのは間違いない。それとシランの完成も頑張らないとな！

「さてと、ルイズ嬢んとこに顔出したら、飯でも貰いに行きますかね」

【リンもお腹すいたですう！早く行くですう！】

「はいよ。それじゃユニゾン機能停止つと」

俺の肩に顕在化したリンをそのまま座らせ、とりあえずルイズ嬢の所に足を向ける俺達。

しかし異世界ってのは、本当に面白いところだ。色んな発見がある。

異世界良いところ一度はおいでってな。

「訓練だお」（前書き）

*先に謝っておきますと、今回は閑話の様なお話です。

物語自体は全然進んでいないので、そこら辺を考慮してお読みください。

「訓練だお」

「訓練だお」

妄想戦記

八神家・リビング

「とまあ、こんなことがあったんだよ」

「ず、ずいぶんといろんな経験つんでたんやな。フェン君」

「どこでも生き延びられるとは思ってはいたが、普通に順応しているな」

「まあそれがフェンらしいっちゃフェンらしいぜ」

「言িয়েて妙だな」

さて、俺のハルケギニア冒険譚の序章を聞き終えた皆の感想だ。上からはやて、シグ姉さん、ヴィータ姉、ザッフィーとなっている。

その他の方は驚きで口が閉じたままとなっている。

「だけど、なんやまだまだ続きそうやな？話の流れ的に」

「うん、まだまだ続く。だけどその前に何か飲み物をくれ・・・喉

痛い」

「ココまで休憩なしで語ったのだ。いい加減小休止したいのである。俺の言葉を聞き、ラインが頷いて台所に向かった。ああ、優しいねえ。」

「なあなあ、フエン君。まだこの話ってどんだけ続くん？」

「うん？そうだなあ。やっと4分の一ってどこ？」

「でもこの時点で既に2週間くらい経過しとるやろ？それなのに時間的におかしくない？」

「そう、俺もさつき自分が消えて帰ってくるまで3週間しか経過して無いことを聞いて驚いていたんだ。これはつまり」

俺はカツと目を見開いて、はやてにこう大声で言った。

「つまり、俺の行っていた世界とこの世界では、時間軸が異なるんだよ！」

「な、なんやってー！」

「・・・ああ、懐かしいノリ。そうこれが俺の居るべき場所」

「まあソレはええから、早う話してえな」

ちなみに時間軸の差異は、次元世界間では結構あるので、あまり驚く様な事では無い。

なので騎士たちは特に驚く顔はしていない。はやても只単にネタに乗ってくれたただけだ。

まあ特殊な場所を除き、普通は飛行機で時差ボケ起す程度の時間軸の差異だけだな。

今回漂流した世界が特殊だったって事。

「なんだ？なんの話し？」

「フェン君の居た世界が、この世界とかなり時間軸が異なるって話
しや」

「そうですか。あ、これお茶」

「ありがとうございます。それじゃ、もうひと頑張りお話ししますかねえ」

俺はお茶を一杯もらいって喉を潤した後、話の続きを喋り始めた。

カチャカチャ

「うーんと、個々の伝達管には固定化处理を施してつと

カチャカチャ カコン

「むう、あつそうか。ここの術式がかみ合わないのか。ならこつ
ちと入れ替えて」

キュイイイイン。ガキガキガキン

「ギーシュさん、ストックしておいた銀を取って下さいな」

「はいはい、これで良いかい？」

「ども、後はこれを錬金で組成を入れ替えてつと……よし完成！」

ふー、ようやく完成したぜ。ん？何してるのかって？シランに武
装を施している最中さ。

色々と思っただが、やっぱり思考戦車だよね？戦車、ここ重要だよ。

戦車だったら、戦闘装備がないとあかんでしょう？

「ふむ、円筒形のこれは、鉄砲か何かかい？」

「魔力式ですがね。威力はそこいらの数十倍つてとこでしょう」

「そりゃすごい！僕のゴーレムなんて紙にもならないね」

「多分、かけらも残らないんじゃないかな？」

「……本当にすごいね」

さて、ここにきてお気づきだろが、何故かギーシュがシランの製作を手伝っています。

7日前くらいに土下座して頼みこんできた（土下座はサイト伝来のには驚いた。

なんでも俺の錬金の技術に驚いたんだと、なのでサイトを鍛えるなら、自分も鍛えて欲しいと頼み込んできたのである。

だがこれはある意味、俺にとっては渡りに船だった。

何せ錬金ができる人間が手伝ってくれるのである。

幾ら俺でも一人で一から自律機動兵器を作るのは骨が折れたから、俺は簡単に頷いた。

だが……その実ココまで手伝えるようになるまで4日かかったのだ。

7日間の内の4日、実質6割の時間、彼は使いモノに成らなかった。

何せ錬金で作れるモノが粗悪な青銅ばかり、しかも無駄なモーシオンを加えた拳句に変な風なイメージで伝達されて、何故これで錬

金として成功しているのかが解らないのに、ソレを直すことなく普段使い続けて定着して、無駄に魔力や精神力を消費するという悪循環。

しかも、俺が作った部品が珍しいのか、素手でベタベタベタとまだ固定化を掛けていなかった電子部品を、埃から守る為に造って入れておいたケースから勝手に取り出し、結晶集積回路を宝石と間違え、あまつさえソレを“彼女にプレゼントしたいんだが”と俺に聞いてくる始末。

流石にね？俺もキレましたよ？こちらルイズ嬢の世話をしている間の時間を縫って、

睡眠時間を普段行動に影響が出ない程度にまで極力減らしてまで作業しているってのに、

この役立たずは何を考えてやがるんだってな？

だが、作業に人手がいるのも確か。

幸いなことにコモンマジックと呼ばれる基本的な魔法は、意外と得意である事が判明。

なので重たい器具を運ぶのに使いました。

だけどそしたら“もっと部品作りの様な事がしたいのだがね”とか文句言うんだよ。

この時、すでにかかなり疲れていた俺は、そりゃもうとびっきりの笑顔で

『教えてあげても構わんけど、覚悟はあるんですよね？』

と、ギーシュに聞いていたんだ。

そしてこの時にウンと彼は頷いたのだ。

そこからはあれですよ？俺が父上に仕込まれた通り、恐ろしく繊細な作業を行わせました。

練習として幾つか電子部品を渡し、これを寸分たがわずコピーすると指示を与えてね。

当然無理だと彼は叫んだ。こんな精密なモノを作れる筈ないと……。

だが、そうは問屋は降ろさない。こちとらちゃんと言質取ってんだ。

逃げようとしたギーシュを封時結界内の閉じ込めて、作業をやらせたのである。

一々口頭では流石に限界がある為、リンに頼んで闇の書の夢を応用し、

深層心理から深く造り手とは何なのかを刻み、知識としての技術を叩きこんだ。

お陰である程度は使えるヤツに仕上がったのである。

ちょっとやり過ぎた感は、無きにしても非ずだけど……人格は変わってないからOK。

それに手本さえあれば、ディテクトマジックで解析し、丸々コピーを可能とされていた。

最初だった時に、その彼の才には驚いたくらいだ。

今では俺の作業を手伝う傍ら、自らのゴーレムに改造を加えている。

これまでは戦闘時に錬金していたが、ソレではあまり強い物は造れない。

だから彼は、とにかく俺から盗んだ技術と知識を総動員し、理解は出来ないが造ることは出来る部品を用いて、ゴーレムというか俺の世界で言う所の人型無人機を作り上げようとしていた。

ワルキューレよりも大型で、人を肩に乗せられるくらいの大サイズの鋼鉄人形。

一回の錬金で出来る量は、彼の力量では精々人間サイズの金属塊程度。

だが、ソレを時間を掛けて少しずつパーツをくみ上げて行けば、最終的には完成する。

その場で錬金し、手札を造り出すという土のメイジとしてのアドバンテージは失われるが、

強力なゴーレムである事に変わりはない。青銅以外も作れるようになったと喜んでいた。

何気にラインには成っているのだから、成長は大分早いと言えるだろう。

機動兵器のパーツに含まれる、様々な素材の解析をやらせ続けたのが効いたのだと思う。

彼にとっては未知の合金や金属の構成を、半ば無理やり彼の脳に叩きこんでいったのだ。

これで成長しない方がおかしい。しなかつたら見捨ててたけどね。

お陰で正確に構成を理解しただけあり、不純物は混じるがそれでも使えるレベルで収まっている。

何気に頑張れば出来る子だから、最終的には錬金で無人機を瞬時

に錬成出来るのではないかと俺は睨んでいる。だが相変わらず無駄に飾るという所は抜けていない。

また女性はほぼ必ず口説くという性格も治ってはいない。ある意味大物だろうと、自分は考えている。

「つか、むしろココまで行くと、呆れてものが言えんからな。この間何ぞ、ダブルブッキングしちゃったから、かくまってくれて小屋に押し掛けて来て。」

勿論、蹴り出してやりました。俺だってウマに蹴られたくは無い。その後はドナドナうってな感じで引き摺られ・・・後は知らん。

「さてと、どうします？今回の兵装テスト、付いてきますか？」

「是非と言いたいね。僕の造っている新式ゴーレムの装備の見本になるかもしれない」

「はは、試作品ですから、もし完成したらそちらでも使える様にしたヤツを一つ上げますよ」

「ふむ、なら僕はそれを解析して、コピーを作り、改良出来そうなら改良すればいいね」

ふふ、大分造り手として自覚が出て来たようだな。

こつこつという工作の類って、いちどハマると結構続くもんだぜ。

「あつと、サイトさん忘れてた」

「そう言えばそうだ。ところで彼にもあの？」

「ええ、リンの“闇の書の夢”の中で、まずはイメージトレーニングを積んで貰ってます。何事にも動じない精神が無いと、ね」
「そ、そうかね。まあ死にはしないだろうが・・・」

ギーシュはそういうと、シランの製作に使っている小屋の外を見る。

そこには大きくなったリンが、寝転がったサイトの額に指を当てて集中している姿があった。

一見すると何をしているのか不明だが、サイトの顔が恐ろしく苦悶に歪んでいるのを見れば、

どんな夢なのか大体予想が付く。大方俺が体験してきた戦闘の記憶の夢だろう。

俺式の訓練は母上直伝で、簡単に言えば魔力弾の弾幕や斬撃をひたすら避けるってヤツだ。

だがいくらガンダールヴのルーンを発動させたサイトでも、どうやら耐えきれぬモノじゃ無かったらしい。

1回目は気絶し、2回目は泣いていた。

3回目をボイコットしそうになったのを封時結界に閉じ込める事で阻止した位だ。

こりやまずは精神から鍛え上げないと、この先持たないと感じた俺は対策を練った。

その対策がこれ、リンによって俺の記憶（残虐シーンはカットver）を映してもらい。

戦場のシーンを流し続け、最後は俺と母上との模擬戦を、俺の視点から見ると言うものだ。

残虐シーンカット版と侮るなかれ、その記憶も普通の人間にはキツイものばかりだからだ。

迫る魔力砲、炸裂する魔力弾、切刻まれるコンクリート。至近距離の爆風が、爆炎が我が身を焦がす戦場。

いたるところにトラップがあり、そのどれもが致死性のあるトラップ。

敵兵の死体が写らないだけで、後は戦場の空気そのものの記憶を見せられるのだ。

そして母上との訓練の記憶……あれは殺してくれと叫び

「もう殺してくれええええ!!」

ああ、今まさにその夢か。防音結界張っておいて正解だった。

多分発狂したくても、リンが魔法で強制的に落ちつけているだろうから発狂もできない。

なまじり性があるもんだから余計に恐ろしく怖く感じられる。

フフ、だがその夢を終えた時、君は大分経験を積むことだろう。

それこそUSNの一般魔導兵の何倍という経験をね。

後は夢の中で培った経験を、肉体にフィードバック出来るかな。

肉体改造の方は、魔法で常に重力を操作出来るからね。

だからそれを利用して、魔力バッテリー式の重力制御装置で身体に負荷を掛け続けている。

そして、ガンダールヴのルーン全開にした、俺との模擬戦闘訓練。

俺は頼まれた事はきっちり最後までやる主義だからな。

最近は普通に戦えるようになってきたから、ストレス発散がようやく出来る。

デルフで俺の魔力弾を切って防御するようになるとね。
母上との模擬戦の記憶は、かなりの影響を与えたと見える。

「フェン、フェン！」

「はっ！すみません。考え事してました」

「いや、ソレは良いんだが、かなり恐ろしい顔して笑ってたモノだね」

おやまあ、俺とした事が。

「ま、サイトさんはリンに任しておけば大丈夫ですから」

「・・・そうだね。それじゃ行こうか？」

「アイアイサー・・・っと言っても、ギーシュさんは午後からはヒマで？」

「ああ、今日はお嬢様方との遠乗りも、授業も何もないさ」

さいですかと俺は言葉を返しつつ、ヴィズを使ってプロトシランを格納。

そして封時結界を起動し、切り離された世界へと足を踏み入れたのだった。

「そ、空が落ちてくるううう！！！」

「あわわ、サイトさんしっかり！鎮静魔法！！！」

「さてと、まずはシランを起さないと・・・」

俺は格納領域からシランを実体化させる。

現在、兵装準備の為にメンテナンスモードとしてスリープしているから再起動させるのだ。

その為にはまず、スターターのとして魔力を吹き込んでやらねばならない。

「さあ起きろ“サーペント”訓練の時間だ」

「・・・…… システム、再起動確認。あ、おはようございますご主人様」

「ん、おはよう」

シランに搭載された並列型デバイスモジュールA I “サーペント”が稼働し、

手足と目をキュインを動かしながら、自立思考型戦車であるシランが目覚める。

しかし何故か人格が女性なんだよな。プログラム少しミスったか？

『おはようシラン』

『おはようございます。ヴィズお姉さま』

そしてまあ、ヴィズの方が先に生まれた訳だしね。

そうなるのは解らんでも無いぜ。

「シラン起きてさっそくで悪いが、新しく取りつけた兵装の性能チェックをしたい」

『了解ですわ。FCSのチェックは行いますか？』

「ん、一応こつちでも調べたけど、そつちからも頼む」
「わかりました」

わははは、伊達にインテリジエント用デバイスを並列で3機繋げた訳じゃねえぞ。

そのお陰で大分会話もスムーズに行えるぜ。その分材料をそろえるのが大変だったけどな。

まあ元々試験用のワンオフ機だから、そこら辺は後から改良すれば良い。

『チェック終了です。FCSに異常は有りません』

「確認した。じゃ、さっそくだけど、標的はアレね」

俺が指差した方向には学校の校舎がある。

それを見てギーシュが驚いていた。

「え！？学校を標的にするのかい?!」

「固定目標としてはやや大きいですが、威力を調べるには丁度良いかと」

「いやしかしだね?!一応アソコは我が母校であり」

「大丈夫、自分の母校じゃないですから」

「ちよっ!?!」

ここは封時結界内な為、何かを破壊しても外に影響はない。

その事を説明し、なんとか黙ってもらった。

むしろ、遠慮なくぶっ壊せると解った途端嬉々としている。

どの世界でも悪戯ほど男子の胸を躍らせる物はないと言う事だな。

「シラン、腕部の固定式兵装だ」

『試作魔力機関砲、起動します。魔導炉臨界作動、魔力キャパシタ

異常無し、エネルギー回路、バイパス回路共に異常無し、精密射撃モードに移行、脚部固定、慣性モーメント処理開始。ご主人さま、準備完了です』

「標的、前方の建築物尖塔のポール、三発だけ試射開始」
『発射します』

ガコンと音を立て瞬時に目標にエイムし、二本ある腕部兵装の内、左手の方が標的を向いた。
そして

タン、タン、タン！

乾いた銃声の様に、ちよっと軽めの音が辺りに響いた。

まあ只の魔力弾発射機構でしか無いから、威力的にはフォトンバレットと変わらんだろう。

『標的、破壊を確認、着弾誤差修正完了』

「引き続き、連射での性能テスト実施、標的は尖塔の下の階」

『了解、連射モード変更、発射します』

もっとも、この腕部固定魔力式機関砲は、次こそが真骨頂。

シランは腕を少し下に向けて、学校の尖塔の下の階に向ける。

あつと、そうだ。

「ギーシュさん、耳は塞いでおいたほうが良い」

「うん？解った」

ギーシュが耳を塞いだ直後（俺は防音結界を使っている）、シランの両腕部兵装からすさまじい量の魔力弾が発射される。

そう威力的にはそれほど高くは無いが、腕の兵装の利点は、その連射速度にある。

放たれた火線は尖塔階下を直撃し、壁を抉り取って行く、そして

「シラン、撃ち方止め」

『了解ですわ』

ズ、ズズズズ　ゴガガガガン！ドドオオオン！

階下の崩壊に耐えきれなくなった尖塔が、そのまま崩れ落ちてしまったのであった。

うーん、我ながらすさまじい連射力だ。

「うわぁ、スクウェアクラスの固定化が掛かっているのに・・・」

「一発ならなんとか防げたみたいですけど、毎秒9発近い連射速度ですからね」

『穴だらけじゃなくて、文字通り粉になるくらい粉碎ですよ』

口径7、62mmを毎分で直したら大体520 - 550発くらいかな？

固定化のお陰で素材強度が格段に上がってるから、余剰熱にも強い。

更にはそれを排熱機構で強制冷却する上、魔力を使用しているから弾切れもほぼ無い。

あるとすれば魔力キャパシタの魔力が切れた時だが、ソレも少し時間がたてば再チャージするから、実質的に弾切れという状況には陥らない事だろう。

もつとも魔力式で誘導性が無いので、Aランク以上のシールドにはあまり効果が無い。

だから魔導師相手だと、もっぱらけん制用って所だろうなあ。

あ、魔力キャパシタは俺の造ったMTS-40を改良して造ったモノだ。

中に電気の代わりに魔力を充填でき、瞬間的な魔力の放出に向いている。

兵器関連の魔力を、一時的にプールさせておくのに都合が良い装置だ。

「シラン、次はレールブラスターを準備、標的は・・・宝物庫」

「はい、レールブラスター準備」

元は擲弾発射機が取り付けられていた部分が稼働し、中からバレルがスライドして展開する。

すこし長くなった砲身に術式が展開し、魔法陣によるマジックロングバレルも同時展開された。

『炸裂魔力弾頭形成、ローレンツ力発生を確認、バレル正常稼働、準備完了ですわ』

「照準宝物庫、てっー！」

バシユウウウン！

レールブラスターの術式により、ローレンツ力加速が付加された魔力弾が、

半ばプラズマ化した状態で射出され、校舎のなかでも一番頑丈である宝物庫に激突する。

そして高圧縮魔力がその力を遺憾なく発揮し、宝物庫をバラバラに粉碎した。

「ひゅ〜、すさまじいね」

「・・・ちいとやり過ぎた」

俺は思わず冷や汗を流した。造っている時は考えなかったが、ちよつと威力高すぎねえ？

・・・対人戦の時はリミッターを設けたほうが良いかもしれないな。

特殊拡散魔力弾頭とかで、威力を分散させるのも手かも。

流石に毎度スプラッタなのは、精神衛生上すこぶる不味い。

まあ兵器に非殺傷設定をつけるつてももおかしな話だ。

でもここは戦場じゃないからな。下手に殺し過ぎても、注目を浴びるだけだろう。

あと、やはり連射が効かないのも難点だ。

基本前にしか撃てないし、自分で動かないと射角が取れない。

うーん、改良の余地ありだな。

「それじゃ、お次は防御の方を確かめるか」

「シラン、試作の高光波シールドテストですが・・・まだいけますか？」

「先程ご主人様にメンテナンスをしてもらったので、恐らく大丈夫です」

キュインキュインと腕をふって、全然大丈夫である事をアピールするシラン。

ボディランゲージについては、データは何も入れてない筈なんだ

が……元が元だしなあ。

何気に手先器用だし、案外色々出来るだろうなあ。

『それじゃマスター、私が計測しますので』

「俺はシランに向けて、魔力弾を放てばいいんだな？」

『ご主人様、どうかお手柔らかに』

シランは俺から少し離れた位置に移動すると、

搭乗ポッドの左右に取り付けられたシールド発生機を稼働させる。
キュインという音が辺りに響いた。

『試作高光波シールド、展開します』

ブンという音と共に、六角形の半透明の白っぽいシールドが現れた。
それが幾えにも重なりあって、まるで鱗スケイルのようである。

『出力計、展開率に問題ありません』

「光の防御壁か、知識としては叩きこまれたけど、いざ見ると凄いモノだ」

ギーシュがそう唸っている傍ら、俺は格納領域から取り出したゲロウタスクを構えた。

今から使う弾種はフォトンバレット、ほんの軽いジャブである。
術式もレールブラスターではないので、加速はされない。

「準備は？」

『いけます』

『観測準備完了、いつでもどうぞ』

「それじゃ……マテリアルショット・エイム」

ライフル型遠距離兵装デバイスである、グロウタスクの銃口をシランに向けた。

ギーシュがまた耳を塞いだの見た俺はそのまま引き金を軽く引いた。

ドウンッ！ キーンッ！

すでになれた反動を感じつつ、軽い衝撃と共に射出された魔力弾。それが命中した高光波シールドは、堅いモノがぶつかるかのような軽い音と共に、魔力弾頭を跳ね返していた。設計通り通常弾は余裕、ならば。

「……観測は？」

「シールド出力・展開率に変化なし、完全に防いでいます」

「でも、なんか心臓に悪いです。身体のモーターがキュイってなります」

「ん？それは怖いってことですか？シラン」

「えーと、よく解りません」

「多分それは砲撃を受けた際にオートで作動する四肢固定機能だから安心しろ」

センサーが一定以上の衝撃を感知すると、自動で四肢が固定される。

吹き飛ばされない様にする為の処置だが、これは後でオミットしといた方が良いな。

四肢固定解除までラグがあり過ぎて、身動きが取れなくなる

「次、レールブラスターで狙撃する」

『了解です』

そしてこの後は順次、次第に強力な攻撃を与えて行った。とりあえずツイングロム一発までなら、ギリギリ耐えられる事が判明。

また近距離に置いて、強化のみのオートクレールの一撃に耐えることが出来た。

もとの世界では不安が残るが、この世界に置いては十分だと言える。

また慣性制御機構を実験的に導入したお陰で、鈍重な見た目をあざ笑うかの様に素早い。

見た目が蜘蛛と同じなので、まさしくスパイダーと言ったところだろう。

尚、ギーシュは俺の魔法を見て腰を抜かすほど驚き「絶対君とは対立したくない」という言葉を残して気絶したので、放置する訳にも行かず無理やりカツを入れて起し、封時結界を解除したのであった。

封時結界解除後、ついでにサイトも回収した。

流石に母上との模擬戦記憶はシヨックが大きかったか。

まあ魔導師同士の戦闘だから、剣士であるサイトには合わないかもしれない。

だが、そこで見たモノは無駄にはならないだろう。

確か記憶の中には、母上が近接戦を仕掛けて来たモノもあった筈だ。

映画と言うよりは、体験を追体験させる闇の書の夢の応用。

大分、色々と感じ取ってくれたんじゃないかな？

まあ多少目が据わっていたが、数日立てば落ち付く事だろう。それまでは、なんとかフォローしておくからな。

大丈夫、若いんだから死にはしない。ちょっと精神的にトラウマが出来ただけさ。

ソレも、無理やり矯正してやるから・・・ま、数日は我慢して欲しいな。

「リン、どうだったサイトは？」

「最初は相変わらず泣きわめいてました。その後は現実逃避して、ソレも無理だと悟った瞬間、自ら戦いに突っ込んでいったですう。まさか夢の中でルーンを使うとは想定外でした」

ふむ、闇の書の夢の中でルーンを使ったのか。

あのルーンってヤツは大分深い所にまで根付く様だ。

「勿論、データは取って有るんだろうな？」

「当然ですう。サイトさんには悪いですけど、主殿の為ですし」

「そうか、偉いぞリン」

「えへへ」

うんうん、言わなくてもやって欲しい事が伝わってるっていいね！嬉しかったんで、つついナデナデしちゃいました。おっし、とりあえずルーン魔法の解析も進めっぞー！

そしてこれが、普段の俺達の日常となっていたのであった。

「訓練だお」（後書き）

*サイト君、ご愁傷様。そしてフェン鬼畜だなオイ。
一応次回からアルビオン編へと突入させる予定です。
ソレではまた次回ノシ

「王女ねえ？ま、関係無い」と、思っていた時期が、僕にもありません」

「王女ねえ？ま、関係無い」と、思っていた時期が、僕にもありません」

妄想戦記

S i d e 三 人 称

多脚型自律戦闘支援ユニットのプロト・シランが完成してから、およそ4日後。

サイトがルイズに夜這いを仕掛けて、見事撃沈されるという事件から翌日の事。

久々にフェンは、ルイズが受ける授業に同席させて貰っていた。

この魔法学院では、2年生になると応用科目学ぶ事となっている。進級する事によって受けられる科目が増える訳だ。

その中には土の応用課程を教えていたシュヴルーズのように、進級してから初めて会う教師も存在する。そして、今回もその例に習い、新しい応用科目を教えてください先生。先生の授業だった。

シランの製作も一段落し、サイトの調整もある程度終わったので、フェンは少しヒマが出来た。

ヴィズの新B A搭載に向けた調整はまだ済んでいないが、何か利用できる魔法は無いかと、

ルイズの使い魔兼従者という立場を利用して、風の属性についての授業に参加したのであった。

その為教室にはサイトとフェンと言う部外者がいる訳だが、

クラスの間はそれに慣れてしまったので、何か言ってくる奴はいない。

実はもう“一体”いるのであるが、彼らには見えていないだろう。

「では、授業を始める。知っての通り、私の二つ名は『疾風』 疾風のギターだ」

入ってきたギターと名乗る教員が、簡単に自己紹介をした。

静まり返る教室に実に満足そうで、そして己の経歴について喋り始める。

曰く自分は風のスクウェアであり、風こそが至高の属性であると
・
・
・

そして、フェンはその段階に来て、ああ失敗したと考えていた。

この学院の教員には自身の経歴や属性、メイジとしてのレベルをひけらかす輩も少なくない。

大抵の場合、その手の教員は“ハズレ”なのである。

この場合のハズレと言うのは、役に立つ役に立たない以前の問題

という話であり、

教育者としてソレで良いのかよ！？つと、突っ込みを入れたくなるという話なのだ。

もっともコルベールのような例外も居なくは無いが、そういった教員はあまりにも少ない。

そして今回のギトーも、これまた天才風を吹かせたがる人物であった。

「さて、最強の系統はなんだか解るか？・・・ミス・ツエルプストー、答える。」

授業開始からしばらく経ち、延々と自身のメイジとしての力を語ることに早20分。

突然ギトーは名指しでキュルケを指名していた。

どうでも良い内容だったのでうつらうつらと聞いていた彼女であったが、

一応名指しされたので、考える仕草を取った。

「えーと、そうですね。虚無とかでしょうか？」

「今は伝説の類やおとぎ話の時間では無いぞ、ミス」

キュルケの答えを鼻で笑うかの様にいうギトー。

フェンは伝説という言葉に、何か引っかけかかりを感じていたが、ギトーのあまりの自己自慢に、すこし意識を逸らしていたのであ

まり聞いていなかった。

ギトーの反応に少しばかりムツとしたキュルケは、ならばと言った感じで別の答えを言った。

「それなら『火』に決まっていますわ」

「ほほう、どうしてそう思うかね？」

「すべてを焼きつくせるのは炎と情熱。そうじゃありません事？」

「残念ながらそうでは無い。試しに君の得意な火を、私にぶつけてきたまえ」

彼は彼女が言った言葉を完全に否定した雰囲気ですう言い、懐から杖を取り出した。

そして、若干挑発めいた言葉を、彼女に投げかける。

あゝ、こりやなんか企んでんなあ

そう感じたフェンは、横でイビキを掻かずに器用に眠っていたサイトを起こした。

「サイトさん、起きてください。なんかヤバそうですよ？」

「・・・ん？なんかあったか？」

「ホラあそこ」

フェンが指差した方向を、まだ少し寝ぼけているサイトが見た。

そこには巨大な火球を作りだすキュルケが、今にもそれを投げつけようとしている処だった。

そしてソレはギトーに向かって行き

「風は　　すべてを吹き飛ばす！」

アレだけの炎は、あっけないほど簡単にかき消されてしまっ

た。

「って不味い！」「ッ！助ける！」

火球をかき消した風は消えることが無く、そのままキュルケを吹き飛ばさんと迫った。

それを察知したサイトがデルフを抜いて飛び出し、フェンは指示を飛ばす。

風とキュルケの間に割り込んだサイトが風をデルフに吸収させた。それに驚き後ろに倒れそうになったキュルケは“何か”に支えられるかの様に空中で止まった。

『あんましウマくねえな、この風。フェンの方が濃度があるぜ』

『女性を怪我させようとするなんて、紳士の片隅にもおけませんわね』

サイトの持つデルフがそう声を発し、見えない誰かからの声も聞こえる。

その事に混乱していた生徒たちだったが、キュルケの後ろからブーンと言う音が聞こえた。

そこには、まるで蜘蛛の様なゴーレムが腕を伸ばし、倒れかけたキュルケを支えていた。

「えっと、もう大丈夫だから放してほしいんだけど」

『これは失礼いたしました。怪我が無くてよかったです』

「あら、ありがとう。ダーリンもありがとう。やっぱり私の王子様ね！」

「だー！まで今デルフ持つてるから危ない！」

そして目の前で繰り広げられるコント。啞然としていたギトーの

額に青筋が浮かび始めた。

「どうやら、ここで彼女を吹き飛ばすことで、自分の力を誇示しようとしたらしい。」

そしてそれを邪魔されたので、怒っているのだ。

「君はヴァリエールの使い魔だったね？授業妨害は止めて欲しいのだが？」

「授業も何も、戦い方を知らない民間人に攻撃を仕掛けることを授業とは言いませんよ。ギトー教諭」

「君は・・・全くヴァリエールは使い魔の教育が出来ていないと見える」

そう言っつてフェンとサイトを殺気を込めて睨みつけるギトーだが、二人はひるまない。

フェンは戦場で馴れており、サイトもフェンの記憶を体験しているので、もう慣れっこなのだ。

「これで女の子を怪我させちゃったら、使い魔としての名が泣くね」
「ですね。何せマスターは優しいお方。ライバルですら手を差し伸べる方です」

「俺達が助けなかったら、後で怒られちまうぜ。ですよね？ご主人様？」

「え！？い、いや、あの　　そうね。確かに今のはやり過ぎだったと思います」

今の今まで啞然としていた彼女だったが、突然話しを振られて現実に戻る。

使い魔と従者の少年たちの芝居がかった言い回しを聞いて、慌ててそう答えてしまった。

後で覚悟しなさいよ？と二人に視線で怒りをぶつけるルイズだっ

た。

そして睨みあうギターとサイト&フェン&シラン。
ギターが何か喋りかけたその瞬間

「あやや！失礼いたしますぞー！」

ぶかぶかの似合わないカツラを被ったコツパゲが、場の空気を破壊したのだった。

つるつという音と共に落ちるカツラと共に……。

Side out

いやはや、くだらない教員が居ることは知っていたが、あそこまで酷いのも居るのね。

こんなんだつたら、AIの人格への経験値を溜める為に、光学迷彩魔法ミラージュハイドを展開させておいたシランを連れて来るんじゃない無かったなあ。

まあ丁度位置取りが、前にでたキュルケさんの後ろだったから、怪我させなくて済んだけどさ。

お陰でルイズ嬢にまた怒られたけど……ま、ホント怪我せんでよかったわ。うん。

「トリステイン王国王女、アンリエッタ姫殿下のおなーーーーーり
ーーーーー!!」

さて、何でだか知らんが、この国のお姫さまが学院に来るらしい。
その為あの後予定されていた授業はすべて中止、姫殿下を迎える
準備をせよとの事だった。

まあサイトや俺達はこの国の人間ではないし、元より貴族では無
いので、お出迎えはしなくていいらしい。

「お、馬車から下りたな」

「ふわ、本物のお姫様ですう」

『とても可愛らしい方ですわね』

『でも、何処となく世間知らずっぽく見えますね』

「それには同感」

だから、遠くの方から眺めているだけだった。

サイトはお出迎えの貴族が邪魔で見辛いので、近くの木に少し登
って見ている。

所謂やじ馬根性ってヤツだ。俺もシランのポッドに乗ってるから、
人の事は言えんが。

「……ところで、貴女はお出迎えしなくても良いの？タバサ」
「本を読むほうが有意義」

そして何故かタバサはお出迎えに参加していない。

サイトが上っている木の木陰で、相変わらず本を広げていらっし

やる。

ま、この人らしいっちゃこの人らしいけどね。

「ふうん、ま、タバサらしいな」

「……………」

彼女は俺の言葉に少しだけ顔を上げて俺を見るが、すぐ本に視線を戻した。

そして流れる沈黙……ま、いつもの事だがね。

「ん　　ほう？アレがこの国の騎士か？」

王女様を警護する騎士と思われる人間達、その誰もがレイピアに似た杖を腰に下げている。

物腰や気配、足運びからしてかなりのレベルの人間で構成されているのが見て取れた。

流石は国家直属、構成員もエリートメイジで固めたって所かな？

「デバイス無しなら、負けるかもなあ……」

俺はそう呟くと、シランから降りた。

ま、元よりデバイス無しで戦闘なんてしないから俺は。

そう言ったのは訓練の時だけの話だよ。

「ん？よく見りゃキュルケさんもおらんのか？」

あの人は隣国の出身らしいから、別に王女が来てもどうでも良いのかもねえ。

とりあえず、観察でもするか。最近娯楽が少ないからちよつどいいわ。

んでしばらく、パレードみたいなそれを観察する俺らだった。

.....

.....

.....

夕方になり、どうせもう授業も何も無く、ルイズ嬢も姫様の歓迎の為に払っている。

なので実質俺とサイトはする事が無いので、サイトはいつも通り夢の中でトレーニング。

俺は俺で宝物庫で手に入れた装置を、いまだ弄くっている。

色々と解析した結果、なんとかある程度の解析には成功した。

部品に刻まれた文字は先史時代に使用されていた文字で、今のミッド語の原型だ。

元々その時代に作られた夜天の書。

そしてそれが転じた闇の書であるリンにとっては、ある意味よく知った言語だった。

その為文字の解析には手間取らなかつた上、あの装置の名称もなんとか解った。

あの装置はWECリアクター。

WECリアクターとは

Witchcraft

Element
Conversion
Reactor

の略称である。日本語なら魔力素子変換炉と言ったところだろうか？

魔力素子を、ある種の特性を持った謎の魔力粒子へと変換する・
らしい。

実際可動させた所、何らかの魔力素子が変化した魔力粒子が発生している。

どうやら粒子自体が魔法らしく、俺のレアスキルで取り込んだ所、思考加速の効果があった。

他にも圧縮した時に物理的な干渉が可能になるらしい。

圧縮して放てば魔力砲と似た性質の、粒子ビーム状態になって飛ばすことも可能だ。

またやり方によっては防御壁のように展開する事も可能だと思う。

そして、どうしてそんなことが出来るかだが 全く解り
ません。

幾ら解析しても、中心部ブラックボックスから先が全然解らないのだ。

どうもこの装置は、先史時代に作られたロストロギアだったらしい。

元々はこれ単体では無く、何かの装置の部品であると思うが詳細は不明。

唯一解っているのは、魔力粒子の特性と名称だけである。

粒子自体は魔力と混ぜて運用できる為、魔法の補助として使えるのがあるがたい。

その魔力粒子自体にも、毒性の様なものも無いらしい。実に便利な事だ。

だが問題もある。普通の人間・・・いや俺でも、リングがいなければ制御が殆ど出来ない。

ユニゾンして演算機能を上げ、魔力に混ぜた上でようやく魔法に組み込める始末である。

また、ユニゾン無しでこの粒子をキチンと制御しないと、俺の場合魔力過多で確実に吐血する。

リングが俺とユニゾンして、魔力の流れを制御してくれる場合のみ、この装置は使えるのである。

これをヴイズに取り付けたいところだが、前提条件としてリングとユニゾンが必要になる。

もっとも最近は普段からユニゾンしまくっているので、前提条件に問題は無かったりするがな。

「うーん、しかし幾ら解析しても不思議な装置だな」

『錬金でのコピーも不可ですしね。流星はロストロギア』

『でも使い方が解つただけでも、良い事ではありませんか？主人様』
「それはそうなんだが・・・」

「・・・使い勝手がちと悪いねえ。」

ま、コイツを使えばこれまで以上の戦闘行動が可能には成る。
だが、身体にかかる負担も増えるし、一長一短つてところだろうよ。

「ま、こればかりは気長にやるしか無いな」

『そして気が付けば10年が経過していた』

『知り合いの方は、皆さん全員大人に成長してますわね』

『だがマスターだけは、成長が止まったままだった！』

『そして、永遠の少年として、皆さんに撫でまわされてしまつと・・・』

『・・・』

『『可愛いそ〜』ですわ〜』

やかましいぞ。ソコのデバイスと多脚思考戦車。

そんな事態になる前に帰って見せるワイ！ っと。

「リン、そろそろサイトを起せ。もうすぐルイズ嬢が帰ってくる時間だ」

「あいさーですっ！..」

悲鳴とかは出さなくなったが、いまだフラフラしているサイト。

この後はサイトと共にルイズ嬢をお迎えにいったのである。

もっとも、その後であんなことになるうとは思わなかったが・・・。

いやはや、不味いぜ。

途中でコルベールさんに捕まって、シランについてあれこれ聞かれてたら遅くなっちまった。

こりゃ怒られるぞ……飯抜きは嫌だなあ。ま、厨房の皆は味方だから良いけどさ。

シアさんかシエスタ辺りに頼めば、内緒でまかないくらい……ん？

「誰だろう？こんな時間に？」

『フード被ってて顔が見えませんか』

ルイズ嬢の部屋に戻ろうとすると、途中フードを被った人間が女子寮に向かうのを見た。

キヨロキヨロといかにも拳動不審な人間、背格好からして恐らくは女性だろう。

普通あんなフードを付けて、校内を徘徊しないから部外者だろうか？

『どう見ても不審者ですね？どうしますマスター？』

「……よし、声を掛けよう」

一応この先は俺達を除いて、部外者の立ち入りを禁止している。

これで実は賊か何かで、俺達が見てたのに止めなかったからのな事態は……まあ無いか。

でも一応目撃したんだから、注意くらいは促さないとな。

『シランは光学迷彩で隠れておいて、何かあったらフォローするよ
うに』

『はい、ヴィズお姉さま』

ヴィズがシランに指示を出すと、シランはブンという音と共に姿が消える。

ちなみに疲れ果てて気絶中のサイトが、搭乗ポッド内に入ったままなのは御愛嬌。

ソレはさて置き、とりあえず注意を促す為に、そのフードの人物に後ろから声を掛けた。

「すみません。この先は女子寮で、部外者の立ち入りを禁止していただきますよ?」

「ひあつ!」

いや“ひあつ”って何さ“ひあつ”って。そんなに驚く事か?普通。

驚いたその人物は、飛び上がるかの如く身体を震わせた。

そして俺を見て・・・すぐにソレも収まっていた。なんや?ガキだから安心したのかいな。

「申し訳ない。驚かすつもりは無かったです」

「い、いえ。良いのです。周りに気を配らなかつた私が悪いのですから」

? 随分と丁寧な言葉遣い、それと振舞いに気品さ?がある。・・・どうやら普通の貴族とちよつと違つみたいだぞ?

「そうですね。あ、自分はこの学院にて、ミス・ヴァリエールの従者をしているフェンと申します」

「え?ルイズの・・・」

「?失礼ですが、マスターとお知り合いでしょうか?」

「ええ、ルイズの古い友人です。・・・あの、出来れば」
「解りました。マスターに会いに来たのでしょうか？ご案内します」

成程、ルイズ嬢の友人ね。何でフード被ってるのか気になるけど・
・まあ良いか。

顔は見えないが、多分悪人じゃないみたいだな。
とりあえず、ルイズ嬢の部屋へと案内する事にした。

「・・・なあフェン、俺は気絶してたから、その間の状況が解ら
んのだが？」

「安心してくださいサイトさん。俺も訳が解りません」

シランから降りて来たサイトが、俺にそう問いかけてくるが、俺
も良く解らん。

解っているのはアレが姫さんだったって事くらいだ。

とりあえずどうしてこうなったかをサイトに説明する。

夜、ルイズ嬢の知り合いを名乗る人物を、部屋にまで連れて来た。
どうやらルイズ嬢の部屋に行きたかったが迷っていたらしい。
んで、俺が案内したのですんなりと部屋に来れたと言う訳だ。

まだルイズ嬢が帰って来てなかったので、とりあえず部屋で待っ
ていて貰う事にしたのである。

そして、それから数十分もしない内にルイズ嬢が帰還なさったわけだが

「お久しぶりね？ルイズ・フランソワーズ」

「ひ、姫殿下！？」

どうやら、俺が連れて来たのは昼間に見かけた姫様だったらしい。

ルイズ嬢は公爵家、王家とのかかわりも深いとの事。

と、いうことは姫殿下とご友人の関係であってもおかしく無かった訳だ。

コイツはうっかりだった。

「姫殿下、いけません。このような場所に起しになられるなんて

「ああ、ルイズ！ルイズ・フランソワーズ！そんな堅苦しい行儀は止めて頂戴！わたくしたちはおともだちじゃないの！」

んでまあ、興奮した姫様とルイズ嬢が昔話に花を咲かせたって訳だ。

その後サイトは起きた。ただそれだけ。

「ふーん、お姫さまねえ？」

「随分とアグレッシブですね。普通護衛も連れずVIPが来ますか？」

とりあえず部屋の隅によって、俺達はぼそぼそと会話していた。

シランは格納領域に戻したので、ソレ位の広さはある。

それに一応は王族、何か失礼なこととして処刑とかはゴメンである。

サイトもそれを感知したらしい。

姫さんは可愛い女性ではあったが“触らぬ神に祟り無し”と考えた様だ。

俺の教育の成果だろう。母上の訓練には対幻術戦もあったからなあ。

下手に何かに触れると大変なことになる。触れるなら調べてからってヤツだ。

なので、俺達は部屋の隅に寄っていたのであった。

しばらくの間、やれ宮廷貴族がやら、自由な貴女が羨ましいやらの会話が流れた。

ま、王族は王族なりにストレスを抱えていたって事だろうな。

なにせ彼女の口から流れる言葉の半分が、宮廷貴族への悪口だ、相当キテたんだろっさ。

でもさつき会った時よりも、なんつーか随分と芝居がかった言い回しだねえ。

こりゃなんかあるな そう思っていた時だった。

先程よりも更に大げさに、更にまるで自分は悲劇のヒロインよと言わんばかりの言葉。

なんだか過剰な三文芝居の様なモノが多かったので、聞いた話をまとめると

『近々結婚するのだけど、不安材料があるからどうにかして？ちなみに場所はアルビオンよ』

つてなことらしい。

俺はそれを聞いて、おいおいと思った。

厨房で何度か噂を聞いたのだが、現在そのアルビオンとか言う国は内戦状態にあるらしい。

アフリカとまでは行かないが、それでも民間人が行くのには危険過ぎるのだが……。

「(ぼそぼそ) おい、フェン。話的に不味くないか？」

『(ひそひそ) 間違いなく、あの二人の会話の内容からすると行くんでしょうね』

「(ぼそぼそ) ……ああ、お守をしなけりやならんのか。面倒臭い」

「(ひそひそ) やっぱり行く事になるのか？」

「(ぼそぼそ) 十中八九そうでしょう？あの二人を見てみるよ」

内緒話しながら、姫さんの方をひそかに指差す。

「おお、始祖ブリミルよ……この哀れな姫をお救いください」

「大丈夫です！お任せください姫殿下！私がなんとかして見せます」

……どう考えても行く気マンマンっぽいよ。ウチのご主人はあ、もう面倒臭いが、雇い主が行く気なんだ。俺らにそれを止める権利は無いな。

とりあえず俺は立ち上がり、外へのドアへと向かう。

「おい、フェン。どこ行くんだ？」

「どうせ行くのは確定みたいですし、どうせならちゃんと準備しておきたいので」

「そっか、じゃ俺も手伝うよ」

とりあえず少人数とはいええ、かなり遠いところに行くのだから足がいるな。

俺はそう思いながら扉を開けたその瞬間

「うわあ！」 ドタンっ！

「きゃあ！」

「誰なの！」

突然現れる人影、そして見ればよく見たことがある金髪さん。

「ギーシュさん、幾ら女性好きでも、女性の部屋に聞き耳を立てるのはあまり良い趣味じゃ・・・」

「ご、誤解だ！フェン！僕は只中に入って行った女性が姫様ににているなあつて」

「と、彼は弁解してますが、どうします？」

俺がそう振ると、ルイズはまず親指を上げて

「消しなさい」

「ちよつと待ってくれたまえミス・ヴァリエール！ソレは幾らなんでも！！」

「了解しました。ま、顔見知りだから痛くしないヨ」

「怖い！怖いからフェン！誰か止めてくれ！」

思いっきり指を下に向けていた。それを見て慌てるギーシュに、俺はお茶目な悪戯をしていた。

面白いほどにうるたえているギーシュを見て、サイトも苦笑いしてやがる。

「……あら？この方はどなた？」

そしてアンリエッタ姫殿下は、今更ながらサイトに気が付いた。

これは現実逃避的なのも含まれてるっぽい。

ま、女友達どうしの秘密の話が、異性に知られるというのが嫌だったんだろっ。

この後軽くカオスだったが、とりあえず順に説明してことなきを得る。

とりあえず明朝朝早くにはアルビオンへと向かう為に、港に行く事が決まった。

仕方ないので話を聞いてしまったギーシュも連れて行く。

だがこのまま部屋に返すのもアレなので、明日の足を作る為に働きして貰う事にしよう。

そしてその晩は、ほぼ徹夜になった俺たちだった。

「王女ねえ？ま、関係無い」と、思っていた時期が、僕にもありました」(後

あつ、なんか5月に入ったら急にペースが落ちたく。
なんだがテンションが上がんねえぜ。

ま、まさか5月病の兆候？・・・ソレはヤダなあ。

さて、以前感想で頂いた幻想の庭師さんのアイデアであるロスト
ロギア版GNDは、

流石にそのまま使うのがアレだったので名称変更しました。

基本的な性能についてはそのままですが、もしも何かアレだったら
感想で言ってくだされば更に変更いたします。

ソレではまた次回にノシ

「ひゃほほーい！早いぜい！」

「ひゃほほーい！早いぜい！」

妄想戦記

カチャカチャ ガコン

「よし、これで使える」

「ふう、なんとかあったね。ってもう朝か・・・」

「シランも手伝ってくれてサンキユな」

『いいえ、何せ私のオプションですから』

既に空が白くなってきている朝早く。

何時もの小屋にて、俺、ギーシュ、サイトは集まっていた。

「でも、これ本当に動くのかい？」

「だよなー、車輪もなにも無いし・・・」

「大丈夫ですよ」

車輪の無い金属製の荷台の様な物を見て、そう言う二人。

俺は荷台から伸びているケーブルをシランに向けた。

「そいじゃ、ちょっとメンテナンスパネル開けて」

『了解ですわ』

メンテナンスパネルが開き、そこにある魔導炉へのソケットが現れる。

そこに先程の荷台から伸びたケーブルを差し込むと

ブブブブ

「う、うかんだ!？」

「よし、キチンと作動してますね」

金属の荷台はふわっと言う感じに浮かび上がった。

飛行術式を組んだ装置が付いた、即席の人員輸送ホバーってところかな。

「これで目的地までは素早く行けますよ」

「ウマに乗るのも大変だしなあ」

「確かに地面についていない分、振動も伝わらないから乗り心地は悪くなさそうだね」

このホバーをシランに牽引させてやれば、最高80kmで走ることが出来る。

しかもどんな悪路でも、ホバー自体は浮いているから、振動はほぼ無い。

この世界の移動はまだ馬車だから、すさまじく羨ましいことだろうな!

「ま、部品が余ってたからこそ出来たんですがね。とりあえず裏門へと持っていきますか」

「だな、俺はルイズ起してくるぜ」

「僕はまあ、特に持って行く物もないから・・・あ、そうだ。フェ

ン君」

「ん？なんですか？」

「僕の試作兵器用のテストヘッドゴーレムも持って行けないかね？
一応念のために……」

「うーん、まだ格納機構が完成してませんが……自分の格納領域
にいられて持っていきますか？」

「そうしてくれると助かる。あ、僕の使い魔も連れていきたいのだ
が良いかね？」

「ご自分で責任をとれるなら、どうぞどうぞ」

俺はそう言つて、とりあえずホバーに固定化を掛ける作業をしな
がらそう答えたのであった。

ギーシュのゴーレムか……そろそろ真面目に保管方法も検討し
なきゃだめか……。

格納領域に何時までも入れて置くわけにもいかんし……ふむ。

ギューーーーーー！

「はっやーい！」

「この分なら、半日もたたない内に付けるかもしれないね」

「は、はは……ウマなんか目じゃないくらいだね」

整備されていない砂利が多い道を、シランがホバーを牽引しつつ
走る。

ホバーにはルイズ嬢、俺、サイト、ギーシュが乗りこんでいた。

体が小さいリンには、このホバーはちょっと危険なので、俺とユ
ニゾンして貰っている

シランの不整地での走破性を見るいい機会だったので、シランに
は地上を走って貰っている。

「オープンカーみてえだな。屋根無いし」

『急造だから仕方ないですよ』

『あ、ルイズ様立たないくださいませ。危ないですわ』

準備は完了し、ルイズ嬢もサイトが起してきたので、少し早めに
学院を出立した。

ホバーは問題なく稼働し、俺達には吹きつける風以外の振動は感
じない。

こんな乗り物はこの世界には無いので、ルイズ嬢はどこか楽しそ
うである。

「ねえもっと早く出来ないの？」

「いや、一応これでも45kmは出ているんですよ？」

ルイズ嬢が目をキラキラさせて俺にそう問いかけて来た。

うーん、一応設計上は瞬間的に120km、巡航速度なら80k
mまでは出せる筈である。

もっとも今までテストして無いから、今はある意味様子見なんだ
が。

「まあシランは力があるから、もう少し速度は出せるだろうが」

「ちよっ！ギーシュさん」

「ふーん、そうなんだあ……」

あ、なんか嫌な予感……

「シラン！もつと早くしなさい！」

『え！？危ないですわ？！これでも大分安全運転を』

ルイズ嬢の命令に、慌てるシラン。

一応シランのマスターは俺に設定されているが、ルイズ嬢は俺の雇い主。

優先順位も高めに設定してあるので、どうすればいいのか迷っているのだ。

「この任務は至急の任務よ！早く行ける事に越したことは無いわ！」

『は、はいいい！！』

「って待て！シラン」

そしてシランは、俺が声を掛ける前に更に馬力を上げてしまった。馬力が増した事で更に加速するホバー、時速は大体60kmオーバーだろうか。

ギョオオオオン！！

尚このホバー、急造だからシートベルトが付いていない。

だからどこかに掴まっていないとちょっと危険なのだが・・・ま、いいか、面白いし。

「あははははは！！たーのーしいー！！」

「・・・マスターって、乗りものに乗ると性格変わるのだろうか？」

「いや、多分アレだよ？初めての体験に興奮しているだけさ」

「サイト、出来ればこっちを見て言って欲しいな。そんな明後日を見ながらでは無くてね」

そして、この後は休憩を入れる事も無く、お昼前には目的地近くに到達したのだった。

シランとホバーを見られるのは、騒ぎの元になりそうなので、あの程度近づいたところで歩くことにしたが、それでも予定を半分以上縮めてしまったのだった。

そして

「な、なんだあ！？木の上に船がある？」

「？そりゃアルビオンは空に浮かぶ島だから、そこに行くにはフネに乗らないと」

「意外と早く着いたわね。ラ・ロシエールに」

馬で2日は掛る筈の街に、わずか半日ですべてしまった俺たちだった。

一応厨房の人やメイドさん達に聞いて、ラ・ロシエールについては知っていた。

事前知識として知ってはいたが・・・実際見ると凄い。

都市の中央に恐らくは木だと思われるが・・・かなりの大木が枯れたモノだろう。

高さは地球にあるメタセコイヤと同じくらいだが、横幅が半端無く大きい。

枝も太く、そこを立体的な橋として、空飛ぶ船の発着場になっているようだ。

また町の建物自体も、元からあった岩を切りだして作りだした家屋らしい。

そこには魔法の力は使われているが、純粋な人工的な建物は少な

かった。

まさに自然との調和が計られたような港町だった。

「さて、行きましようか？ 休むにしろ泊るにしろ、まずは宿を取りませんか？」

「そうですね。行きましよう皆」

「了解」

俺はシランにミラージュハイドを展開したまま、

サイレントモードで後をついてくるように指示を出し、そのまま町へと向かった。

シランはAIとしては未熟だから、こう言った町は経験値を上げる良い機会だ。

俺達は宿を探して町に入ったのだった。

さて宿を取る前に飯屋に行こうと言う話となり、幾つか店を回ったのだが、

どうやらこの時間帯は食事時らしく、どの貴族用の店も満員でどこも入れなかった。

仕方なく、現在平民の食事処の近くを通っている訳だが……。

「もう！ 貴族用の料理店とか他に空いて無いの!？」

「マスター、ココはあまり大きくは無い港町らしいですから」

あまりお店も多く無いでしょう。
だって観光とはいえ、普段来る貴族は結構少ないだろうしな。
現に貴族御用達の宿屋だって、ほんの数件しかないし。

「とりあえずどこでも良いから入ろうぜ？俺腹減っちゃったよ」
「ふむ、ルイズ。社会見学と言う感じで、平民の店にでも行ってみないかね？」

まあそんなわけで近くの居酒屋兼宿屋に入り、各々食事を頼んだんだが……。

「なんだろうね？この“喰らえこの野郎！”感のする料理」

「山……盛り……」

「サイトさん……食い切れるの？」

「有り得ないわね……コレ」

サイトが頼んだ料理はメニューに『山の焼き串』と書いてあったんだけど……。

目の前にあるのは、山盛りの肉の串焼き、山って山盛りの山かよ。
いや確かに名は体を表すと言いますが……ある意味すげえや。

盛られている総量的には、目測でおおよそ2kgつてところかな？
しかも値段自体は、他のメニューと大差がない……一体なんの肉なんだ？

「と、とりあえず、少し頂きますよ？」

「うう、すまねえ、フェン」

俺達が苦しんでソレらを平らげようとしてたら、

途中でルイズ嬢が「残せばいいじゃない」発言をしてくれやがった。

ふん、これだから食事に困った事のない、ブルジョワな人間は困る。

人間一度飢餓を経験したら、それ以降は大抵のモンは残さず食べる様になるのだ。

それに、出されたモンは残さず平らげる。これ食事のマナーよ？

「うう、もう肉は見たくない」

「………同感です」

とりあえず大変ではあったが、なんとか食いきった。

サイトはココ最近、剣の訓練で食事が上がったから、なんとか完食できたのだ。

だけど、しばらく食いものは見たくないなあ。

さて、食事も終わり、アルビオン行きの方を探しに港へ行った俺達。

だが……。

「アルビオン行きのフネ？ ねえーよ、んなもん。危なくて出られネ
エよ」

「ドオムツ！ ちよつと手伝ってくれ！」
「わかったよマーカス！ それじゃあな嬢ちゃん達」

と、こんな感じに大半のフネは答え、唯一見つけた商船も物資を
満載していくらしい。

なので、出発はアルビオンが一番近づく明後日にするとの事。
その事実にも、若干我が主殿は憤慨しているご様子だった。

「まったく！ 姫様からの依頼なのにフネが無いなんて！」
（極秘依頼でもあるんだから、船員の真ん前で“姫様から”とか
言わんといってくださいよ）

しかし、このお嬢様は……困ったお人だよホント。
お守する此方の負担が増すばかりだ。……仕える人間違えたか
しら？

「ルイズ、ソレは秘密の筈だ。あまり人の居るところでは公言しな
い方が良くと僕は思うよ？」
「とりあえず急いでも足が無いんじゃないや無理だろ？ 宿でも探そうぜ？」
「急いで事は仕損じる……と、自分の居た国では言いますしね」
「……それもそうね。焦っても仕方ないわね。宿を探しに行
くわよ」

宿自体はすぐに見つけることが出来た。名前は『女神の杯亭』と
いうらしい。

もっとも、貴族が泊れるような所なんて数えるくらいしか無い。

平民用は何軒も建っているが、そこにルイズ嬢達を泊める訳にも
いかんしな

貴族用の宿を探すのは、何モルイズ嬢達がそう望んだからだけじ
やない。

下手に貴族が平民の宿に泊ると、場合によっては認識の差からく
る余計なイザコザが起こる。

一応俺達は秘匿任務中な訳だから、そんな程度の事で目立ってし
まうのは非常に不味い。

それにこのラ・ロシエル自体はアルビオンとの交易がまだ続い
ている。

ソレはイコール、まだ敵側の諜報の人間がいる可能性を示唆して
いる。

下手をすれば、何らかの手段で連絡を取られて、向うの組織に警
戒される恐れもある。

そこまで考えたくは無いが、最悪を想定しておかないのはバカの
する事だ。

幾らこの世界が技術的に発展していなくても、魔法の技術はある。

それは簡単にこちらの常識を覆すという事が、可能となるという
事でもあるのだ。

警戒するに越したことは無い。警戒するだけならタダだしな。

何せ一応俺の装備は整えてあるが、連れてる人間の内

- ・ 1人は世間知らずのおぜうさま。
- ・ 1人は鍛え始めたばかりの半人前。
- ・ 最後の1人は魔法はそこそこ、偶に調子に乗るバカ。

……本当に大丈夫だろうか？このメンツで乗り込んで行って。

すさまじく俺の負担が増えそうな予感がするのは気の所為なんだろうか？

この任務 嫌な予感がするぜと思いながらも、宿屋の主人に話しかけて部屋を取る。

とりあえず、ルイズ嬢は個室、男組は一つの部屋で雑魚寝って事で二部屋取ることにした。

ギーシュがその事に一瞬眉をひそめたが、今更なので特に気にはしていない様だ。

良く研究に夢中になって男連中全員、小屋で雑魚寝した事あったかなあ。

「……ん？」

宿で手続きをしている最中、ふと背後に知らない気配を感じたので、俺は振り返った。

「ッ！？」

(?なんだこのおっさん?)

俺が振り向くとは思わなかったのだろう。

髭を生えそろえた小綺麗な男が少し驚いた顔をして立っていた。

はて?どこかで見た様な気がするぞ?装備は……恐らくメイジか。

「ルイズ、僕のルイズ！久しぶり！」

「ワ、ワルドさま！どうしてここに？」

「あのマスター、この方とはお知り合いですか？」

「ええ、この方は」

すると目の前の男性は、ルイズ嬢の言葉をさえぎるように割り込んできた。

「君達がルイズの使い魔かい？話には聞いている。

僕はルイズの婚約者でもあるジャン・ジャック・フランス・ド・ワルド子爵だ。

姫殿下に護衛としての同行を頼まれた者だ」

とりあえず突っ込んでいいか？これ極秘任務じゃねえのか？

そう思ったモノの、ルイズ嬢と昔話に華を咲かせ始めた為、今更言う事も出来ない。

後で思えば、この時同行を断つとけば非常に楽だったんだよなあ。

「いや、しかし間に合って良かったよ。姫様に頼まれて君たちの護衛の任を受けたのに、

朝学院につくともう出発した後だって言っじゃないか」

さて、とりあえず宿に部屋を取り（何故かワルド子爵はルイズ嬢と一緒に部屋になりたがった・・・もしやロリコンか？だとしたらリンを出すのは憚られるか・・・）

適当に酒場兼食堂の一角でお互いの話しをする事となった。

「では、ワルド様も？」

「そう、君たちの任務に同行するよ。可愛いルイズの為に頑張るさ」

ニコつと女性からしたらくらつとしそうな笑みで、

男子からしたら唾を吐きつけたくなるような笑みを浮かべて、

ルイズ嬢に笑いかける子爵殿・・・正直うざいから殺しても良いか？

「ルイズと仲良く・・・妬ましい（ボン）」

そして俺としてはどうでも良いんだが、となりのヤツも非常にうざりたい。

ま、惚れたモンの弱みってヤツか・・・本当にどうでも良いんだが。

「では子爵殿もこの先同行なされると？」

「ああ、そうだ・・・ところで君は？」

「そう言えば、まだ名乗っていませんでした。自分はマスターによって召喚され、

現在彼女の従者としての契約をしている者です。名はフェン・ラーダーと申します」

俺の言葉に子爵は少し驚いた様な顔をした。

「召喚で呼ばれた！？君みたいなお子供が？」

「見た目と能力は別ですから」

少しむっと来たが、俺の姿を見ればそう思うのは当然。

……でも、最近成長が止まっちゃったんだよな。

そう言えばこっちの水魔法って、水の流れを操作して肉体の操作も出来たっけ。

……試してみようかな。少し術式を変えて。

「それに従者？使い魔では無いのかい？」

「使い魔は自分の隣に居る彼の方です。自分は目覚めるのが遅かったので、彼の方が先にマスターと契約しています。自分はこの国に呼ばれた際に怪我を負ってしまって、その薬代を返す為に、彼女に異国のメイジとして雇って貰っています」

外向けの説明を一息に言い終えると、子爵はフムと考え込む仕草をして見せた。

恐らくは得られた情報を、吟味しているところだろう。

しばらくして、子爵殿は顔を上げると、こっぴどく切り出した。

「ルイズ。この任務は危険なモノとなる。やはり彼らにはココで別れてもらった方がいい」

「え？」

「「な！」」

「ほう？」

ルイズ嬢はキョトンとし、野郎2名は憤慨し、俺は俺で面白くなりそうだったので目を細めた。

そんな俺達を尻目に、子爵は更に言葉を続ける。

「いいかい？我々の赴くべき場所は戦場だ。僕だって君一人守れるか解らないのに、

見れば年端も行かぬ子供が1人混じっているじゃないか」

「（ひそひそ）年端もいかぬ？それってフェンの事だよな？」

「（ひそひそ）ああ、ほぼ間違い無いね・・・」

なんだよ？なんで俺を見てんだお二人さん？俺の所為だったのか？

「それに使い魔の少年と、もう一人の貴族の子息も、見れば戦闘に關しては素人と見た」

「「む」」

「はいはい、一々目くじら立てない。余所さまから見ればそう見えるらしいですから」

はあ、この子爵殿は何をしたいんだ？まるで挑発しているかの様なモノ言い。

俺達の分断でもしたいのか？・・・ま、警戒はしておくか。

「僕は子守をする為に来た訳じゃない。この任務を成功させる事が第一だ。その為には、実力がある者たちで行わないといけない。守るべき対象が少ないほど、護衛の成功率も上がるからね」

まあ、確かにその通りっちゃその通りなんだよなあ。

俺もこのメンバーのお守かよって考えてたし、まあルイズ嬢しだいか？

冷たい様だが、彼女が決めたのなら、俺達はココで別れなきゃならんしな。

「先も言ったように、行く場所は戦場だ。そんな所に、特にソコのフェン君だったかね？」

あの娘を連れて行ったところで、何か出来るとも思えないね」

何か変なニュアンスが混じっていた様に聞えたのは気の所為か？

「だから、彼らにはココに残っ「ふざけんな。おっさん」・・・なに？」

「ちよっと！サイト！ごめんなさいワルド様・・・」

「いや、良いんだ。それよりも、何か文句でもあるのかね？」

突然サイトがワルド子爵の言葉をさえぎって声を発した。

彼は睨みつけるかの様に、子爵を見つめている。

だがそれを受けて子爵は平然としていた。まるでこうなることを予想していた様だ。

まさか・・・いや、やはりそうなのか？

「俺達に残れ？ふざけんな。俺はルイズの使い魔だ。彼女を守る為ならどこにだって付いていく」

「サイトと同じって訳じゃないですが、僕も同意見です。姫様から承った任務を放棄するなんて出来ません」

サイトどころか今まで黙っていたギーシュまで、サイトに呼応するかの様にそう言い放った。

この時、サイトのルーンが少し光っていたのに気が付いた。

なので俺は、リンに解析をひそかに行う様に命じた。

「ふむ、成程・・・君も同意見かね？」

子爵は俺にも話しを振ってきた。

「・・・基本的にマスターの命令次第ですがね。もっとも貴方と認

識にはズレがある」

「ズレ？ソレは何かね？」

「彼らの戦闘能力は、そこいらの人間よか上ですよ？」

「……ふむ」

もちろん、俺はそれよりも上なんだが……と、心のなかで言うてたりする俺。

子爵は俺達の言葉を聞いて、すこしばかり考える仕草をした後、ならばと口を開いた。

「それなら、私と勝負してみるかね？幸いなことに、フネが出るのは明後日だからね」

「ワ、ワルド様！一体何を！？」

「おもしれえ！俺はやるぜ！」

「彼と同じ様に、僕も参加します」

おやおや、余程さっきの子爵の言葉が癪に障っていたんだろう。

……だが、なんとなくだが子爵はこの状況を望んでいた節が見受けられる。一体何故だ？

「やめなさいサイト！それにギーシュ！幾らなんでも魔法衛士隊のワルド様とじゃ勝負にならないわ！」

「いや、勝負したいって訳じゃねえよ。ただ、なあ？」

「ああ、まるで役立たずのように言われるのが気にいらない。

僕たちの師匠みたいなフエンまでそう言われるのもね」

おや、随分と買われてるじゃないか。

コイツらに教育を施した甲斐があつたねえ。

「じゃあ、何をするのよ？」

「よつは戦えると言う事を示せば良い訳だ。必ずしも勝つ必要はねえ」

「そう言う事だね。僕らには戦う術がちゃんとあることを、子爵殿にも解っていただかないと」

「それにな？勝つことはしなくても、負けなきゃいい。死ななければモウマンタイだZEE！」

「……モウマンタイって、何よ？」

サイトはそう言うのと、親指を上げてニカツと笑った。

流石は母上の訓練をやらせてみただけはある。

精神も凶太く育ってやがるぜ。

「君も参加するのかね？」

「自分……もですか？まあ彼らが負けたらと言う事で」

「君は彼らよりも強いと？」

「ええ、そうです。言いましたよね？外見と能力は別だと？」

俺はそう言うのと、彼の眼を見る。ああ、見える見える。どんなに隠しても隠しきれない。

。 戦場や戦いに行ったことがある“人殺し”の目ってヤツはな……

。 多分俺の目を見て、そいつを感じ取ったんだろう。子爵も押し黙ったのだった。

「ではこの宿には練兵場がある。明日の朝そこでやるのはどうだい？」

「僕はソレでかまいません。サイトは？」

「俺もソレで良いぜ」

ルイズ嬢は渋々と言った感じだったが、これにてこの話は終了し

た。

だが

「ああ！やっと見つけた！」

「キュルケ！？それにタバサまで！なんでここにいるの！」

「知り合いかね？」

「え、ええ、学校のクラスメイトですの」

宿の部屋に戻ろうとした時に声を掛けられた。

声の先に視線を向ければ、そこには意外な連中がいた。

赤と青、キュルケさんとタバサが何故かココに来ていたのだった。

「俺達もたいがいヒマ人やな前編」

「俺達もたいがいヒマ人やな前編」

妄想戦記

どう言う訳か来てしまったキュルケさんとタバサのコンビ。

片方に至っては寝間着のまままで大分浮いているのだが、本人は別段気にしていない様である。

でも何でまた、彼女たちはココに来てるんだ？

「ルイズ、水臭いじゃない。私たち友達でしょう？何かあったら助けるのは当然よ？」

「・・・なんか棒読みなのがイヤね」

「後、ダーリンを追っかけてきたのもあるかな？」

「うおっ！」

「こ、こらあ！才人は私の使い魔なのよ！抱きつかないで！！」

さあてさて、極秘任務とか言う筈だったよな？

随分とまあ色んな人間にばれていることで・・・はあ。

所でさりげなくルイズ嬢がサイトの事を“私の”と言って無かったか？

まあソレはさて置き

「すみません。なんでキュルケさんがこちらに？」

「ん〜？えつとねー。今朝早くにどたばた音がして、またルイズがダーリンを折檻してるのかしらって思っつて、そつとドアから見たら、なんか大きなトランクを持って行くだのやめるだの言っつていたのよ」
「……マスター？」

俺がジト目で二人を見ると、二人とも視線を逸らしてる。

「だ、だつてしょうがないじゃない。旅先で買えるとか思わなかつたし」

「それで、どこか行くと感じた私は、タバサに頼んで風竜に乗せてもらつてココに来たつてワケ」

おk、この計画最初から破たんしてたのね。

つーか、お前ら朝からそんな騒ぎ起してたんかい……。

流石に見えないところでそんな事起きてたら、俺も責任取れないよ。

ふとタバサの方を見ると、彼女とも視線があつた。

見つめあう俺ら……なんとなくだが、すさまじく共感できる何かを感じ取れた。

なんか知り合いがとても無茶するという、そつ言う関連のシンパシ〜つてヤツ？

共に溜息をつき、後で彼女には何かおごろうと思つた俺だつた。

まあそんなこんなで、とりあえずみんな一泊止まることにな

っただけけど・・・。

「私とワルド様が同室〜!!?」

最高だ。ウチの人間は、世間知らずのおぜうさまと半人前剣士、ゴーレムバカにホレっばい人、何故か連れて来られた無口さん、そして

「いやかい？婚約者だから何の問題も無いかと思ったんだけど」

「問題あります!!(でしょう)」「」

ロリコンの男まで居ると・・・最高に、最悪だ。

『(そして戦争バカもいるって訳ですね？解ります)』

「(よし、表に出るヴィズ。修正してやる)」

『(はっは、腕輪でしか無い私をどうやって?)』

「(・・・思いつきり踏む。むしろ踏み抜く)」

『(ナマ言ってますいませんした!)』

そして、ちよっとおバカなデバイスも居ると・・・本気で不安になってきた。

尚、結局ルイズ嬢は、キュルケ達がとった部屋で寝たらしい。子爵涙目だな。

何だか本気で心配になってきたから、今日は酒を飲んで早く寝よう。そうしよう。

Side 三人称

次の日・早朝

コンコン

「ん、もう時間なのかい？ちょっと早くないかね？」

「来たな」

「……」

朝、ノックする音が聞こえたので、サイトが扉を開けると、髭が立っていた。

特に喋る事も無く、彼らは部屋を後にしようとする。

誰か足りなくないか？

「……その子はいいのかね？」

「その子？ああ、そういえば フェン、起きろフェン！」

ワルドの指摘に気が付き、いまだベッドの中に居るフェンを起しに行くサイト。

だが声を掛けても反応が無い上、ゆすってもピクリともしない。

「……くかー」

「ダメだこりゃ。そういや昨日は徹夜してるしなあ」

「フェンは何故か昨日の晩にはお酒も飲んでいたしね」

ちよいとこの間から連続徹夜して、おまけに夜に酒を飲む。むしろ朝早くに起きると言う方が可哀そうな気もする。

幾ら中身は大人のフェン出会っても、肉体年齢自体はやはり子供のままなのだろう。

「置いてくと後がうるさいだろうし、仕方ねえな」

とりあえずサイトは、今もなんかお眠のフェンを背負い部屋をでる。

その時子爵はなにか言いたそうな顔をしていたが、結局何も言わなかった。

.....

.....

.....

「この宿は昔、アルビオンからの侵攻に備える為の砦だったんだよ。中庭に練兵場があるんだ」

ワールドに案内されて、昨日も聞いた説明を受けながら、ギーシュとサイトは庭に出る。

確かに幾つか樽やら荷物が置かれているが、中央に錬武台らしきモノもちゃんとある。

広さ的にもボクシングリングよか、少し大きい程度かとサイトは考えていた。

しばらくして、女性陣も中庭に見学にやってきた。

ルイズはまだ少し納得していない様だったが、男たちはヤルと言っ
て聞かない。

なので、半分あきらめつつも、危なかったら私が止めなくてはと

気を引き締めた。

そんなことは露知らず、男3人は（フェンはまだ寝てるので、近くの木箱の上で寝ている）お互い二十歩ほど歩いて離れたのだった。

「さて、どちらから来るかね？使い魔君とギーシュ君？」

「じゃ、俺が行きますよ子爵殿」

「ええ！サイトが先なのかい？僕が先の方が・・・」

「だってお前の戦闘手段は、フェンが起きないとどうにもなんねえじゃんか」

「・・・そうだった。でもまあサイトなら心配ないか」

「相談は終わったかね？終わったなら、台の上に登りたまえ」

さて、男連中が模擬戦の準備をしている頃。

ソレを見守る女性陣達はというと。

「ああん、ダーリン大丈夫かしら？」

「誰がダーリンよ、誰が？・・・でも本当に危なくなったら助けなきゃ」

「あら？やっぱり心配なんだ？」

「ち、違うわよ！大事な任務の前に怪我でもされたら困るだけなんだから！」

「はいはい、そう言う事にしておいてあげるわ、ふふ」

微笑ましいモノを見る目で、キュルケはルイズを見て微笑んでいた。

ルイズにとってはちょっと気にいらないうえだが、悪意は籠って無かったので何とも言えず、口をとがらせるだけだった。

実を言えば、ある程度の怪我はフェンがいれば治療出来てしまう。

もつとも、その頼みの綱であるフェンはどうしているかと言つと

「……くかー」

「つんつん」

「うううん」

「意外とお肌すべすべ……おもしろい」

「ううんううん」

「いまだ夢の世界に旅立っており、おまけに何時の間にも移動したの
だろう？」

「タバサが眠り続けるフェンのほっぺを突いて遊んで……いや遊
ばれている最中であつた。」

「随分と閉まらない光景に、ちよつとルイズは頭痛を覚えた程だつ
た。」

「では、はじめー！」

「ッー！」

さて、こちらは模擬戦が開始された男性陣。

子爵がはじめと言つた途端、手に持つたデルフを構えるサイト。

当初は木刀でやろうかと思つたが、対戦相手は今まで戦つたこと
が無い人間で実力は未知数。

木刀だとガンダールブのルーンが使えないサイトは、肉体的には
まだ大分劣つてしまふ。

その為、恐らくは魔法を使って来るであろう相手に、サイトはデルフを使いたいと申し出たのだ。

一応デルフの剣身を、丈夫な麻布でグルグル巻きにしてあるので、間違っても斬れる事は無い。

「デル・イル・ソル・ラ・ウィンデ」

そして様子見のつもりなのか、早口で紡がれたルーンにより、エアハンマーが発動する。

見えない空気の塊を飛ばす魔法である為、常人には見える筈も無いのだが

「うわつと！あぶねえ！」

まるでしえーのポーズのような体勢を取ったサイトに、いとも簡単に避けられてしまった。

驚きに目を見開くワルド、彼にしてみれば今ので軽く吹き飛ばすつもりだったのだ。

「ふいー、いきなり魔法ツスカ？俺で無けりや当たってたツスね」

「成程、確かに動ける様だね」

『まあ、あの程度避けらんなきやなあ・・・』

「確かに・・・フェンとの模擬戦の方が辛いぜ」

そう言うと、何かを思い出しているのだろう。

途端顔を真っ青にして震えだしたサイト、時折「弾幕はカンニンやー」と叫んでいる。

その姿に若干顔をひきつらせたワルドだったが、

すぐに脳内で相手はこういうヤツ、流されるなと納得させて持ち直した。

だが、いまだサイトはガクガクとしている。

どう見ても隙だらけに見えるのに、迂闊に飛びこんだら不味いと彼の勘が警鐘を鳴らす。

その為ワルドは接近戦を躊躇していたが、そもいかんとばかりに踏み込んだ。

「まったく変な動きで避けるわねえ」

「うーん、ちょっと今のはカツコ悪いかなあ」

女性陣の内ピンクと赤の髪の人達は、サイトの動きを見てこう漏らしていた。

だが、女性陣の中で唯一、タバサだけがサイトのした事の凄さに驚いていた。

「魔法を・・・避けた？」

「・・・案外杖の先を見ると、予想できるんだよ」

聞き覚えのある声に、彼女は驚きで振り返る。

すると先程まで眠っていたフェンが起き上がった。

彼は木箱から降りると、タバサの隣に並んで模擬戦を観戦している。

「他はどうなのかは知らないが、大抵の場合あの手の魔法は杖から放たれるから、」

杖がどこを向いているのかを予想すれば、大抵は避けられると言
う理屈だ」

「普通は出来ない」

幾らなんでもソレは無いと彼女は思った。大体魔法によってはソ
レは使えない。

それに一体、どんな訓練を積めば、そのような事が出来ると言う
のか？

しかしフェンは彼女のその答えにクツクと笑う。

「そう“普通”はな。だがあいつは“普通”じゃない。いわば“特
別”だ」

「特別？」

「そう、特別。魔法避けの半分は恐らく勘だろう」

余計に頭が痛くなりそうなタバサだったが、フェンは更に言葉を
紡ぐ。

「それに魂の底から、魔法に対しての避け方を刻みこんである。

コレで避けられなかったら、訓練のやり直しさ」

種明かしをすると、サイトがどこぞの達人の様な芸当が出来るの
かと言うと、

すべてはガンダールヴのルーンによるものである。

ガンダールヴの身体能力強化の恩恵により、常人が何年もかけて
ようやく辿り着く高みに、一足先に到達しているのだ。

「だけど、彼の動きには無駄が多い。素人のソレに見える」

「そう、アレは素人だ」

「????？」

フェンの言う事が理解できず、首をかしげる仕草をするタバサ。それを片目でちらっとみたフェンは、捕捉説明をする。

「簡単に言えば、これまで身体づくりと並行して、避ける守るしか訓練していない」

「しかし、ソレだとすぐにバテてしまう」

普通なら半歩や一步避けて、紙一重で避けたりすることで、

無駄な動きを省き体力の消耗を抑える。

だが、今のサイトの動きはと言つと

「ハッ！」

「ぬわ！」

胸体を捉える筈の、放たれた不可視の風をしゃがんだだけでかわし

「ウインデー！」

「ひゃい！」

更に追撃で放たれた、エアハンマーをブリッジみたいに身体を逸らせてかわし

「いい加減当たったらどうかね！」

「当たったらイテエじゃねえか！」

そして瞬時に間合いを詰めた子爵の杖の突きを、横転してかわしていた。

……そしてぴよんと飛び上がって立ち上がる。どこか間抜け

である。

「本格的な攻撃の仕方は、本当は今週からだっただんだ」

「じゃあ、彼は今戦う術が無い？無謀」

「いんや、戦う術はある。だが、ソレが恐ろしく下手なだけだ。」

いわば素人が、ものすごいクソ度胸と身体能力を得た状態だな」

フェンのその説明に、なんとなく納得してしまうタバサ。

だが理解は出来ない・・・と言うか理解する事を身体が拒否した。なので、とりあえず手元の本を開く事にしたのだった。

さて、多少は掠るのだが、全部服に掠るだけで傷一つ追わせられないワルド。

それにイラツと来たのか、ワルドはテンポを上げて連続で突きを繰り出した。

しかしソレもサイトを捉える事は出来ず、只むなしく空を切るだけで当たらない。

「クッ！」

「うわひよあ！？」

そしてその事に更にイラついたのか、一瞬頭に血が上ったワルド。彼は幾ら突きを繰り出しても、今の速さではダメだと無意識に感じ取ったのだろう。

気が付けばルーンを口ずさみ、杖に風を纏わせるエア・ニードルを、サイトの顔面に向けて放っていた。

「しまっ

」

その時しまったと思った。頭に血がのぼり、この模擬戦の目的を忘れていた。

手加減しているとはいえ、その速さは普通は避けられる者ではない。

「ひええッ!？」

だがそれすらも、サイトは横に頭をスライドさせる事で避けてしまった。

どう考えても人間の出来る動きじゃない……。
更に言えば、どの動きも決してお世辞にも綺麗とはいえない。

もうなんて言うか、素人が必死になって避けまくっているようにしか見えない所が逆に凄い。

どこぞの某バンダナ男ばりの避け方だろう。流石に数秒で怪我が治ったりはしないが。

「……フェン、今の彼の動き人間じゃない」

「……まあ、人間頑張れば人間を越えるって事だ」

「ソレ本当？」

「ごめんなさい。俺でも解りません。多分ルーンの所為です」

ワールドが新たな魔法を使った為、本から視線を上げて見ていたタバサ。

サイトの常識外れの動きについて、フェンに指摘した。

フェンも流石に今の動きについては信じられなかったのか、苦笑してポリポリと頬を搔いている。

どうやらサイト君、気が付かない内に人外の領域へと足を踏み入

れていた様だ。

避け方も戦い方も、ある意味ではすべてにおいて凄いのである。だが、やっている事が間抜けすぎて全然凄く見えないのが不思議だ。

「あ、あぶねえだろ！目に入ったらどうすんだ！」

「そう言う問題なのかい？サイト」

顔面に直撃したら、頭を貫通されていたかもしれないと言うのに、そう言うだけのサイト。

横で観戦中のギーシュすら、冷や汗を流してそう突っ込んでいた。

「チッ！」

流石にこれ以上の接近戦は不利と悟ったのか、ワルドは一瞬にして距離を取る。

そして去り際にスペルをくみ上げて、エア・カッターをサイトに向けてはなった。

横に広い不可視の風の刃、だがサイトはそれをジャンプで避けた。

ズガガガン

「「キヤッ！」」

「へ?!」

「バカたれ、周りを良く見てから避けると、あれほど言うておいただろうに」

風の刃はサイトには当たらなかったが、そのままルイズ達の元へと飛んでいったのだ。

だが何時の間にか移動していたフェンが、軽くソレをラウンドシールドで防いでいた。

タバサは何時フェンがそちらに移動したのか、全く解らなかった。

「す、すまない君達！ルイズ！大丈夫かい！？」

「え、ええ。フェンが守ってくれたから平気です」

「私も無傷ですわ。子爵様」

「お二人とも、模擬戦に集中するのは良いんですが、周りを見てや
つて下さいよ」

「「め、面目無い」ぜ」

傍から見れば、7歳児に頭を下げる少年と青年というシニールな
光景が、そこに広がっていた。

今のは模擬戦中の些細な事故とされ、仕切り直して模擬戦は続行
される運びとなった。

「さてと、タバサ。こっちやよって」

「??？」

模擬戦が続行されると、フェンはそう言ってタバサをルイズ達の
近くに呼ぶ。

ホイホイとやってきたタバサとルイズ達を近くに寄せると、彼は
多重結界を展開した。

「これで流れ弾が来ても安心です」

「ちよっ！フェン！僕だけ何故外なのかね！？危ないと思うんだが
!??」

「……だつて、次戦うんでしよう？」

「そ、そうだけど……流石にそれまでは怖い！」

そりゃ女性陣はフェンに守られているから良い。

流れ弾が飛んできても大丈夫だろう。結界の中だし。

でも外に居る自分はどうか？

「根性で耐えれば大丈夫です。大丈夫死にませんよ。男の子でしょう？」

「僕だけそんな扱いかー！ー！！」

そう憤慨するギーシュを見て、女性陣は冷や汗を流していたと言った。

「はぁ・・・はぁ・・・」

「ふう、ふう、よ、ようやく逃げるのをやめて降参かね？」

「は？・・・ああ、逃げんのはやめだ」

「そうか。なら」「ココからはこっちからも戦らせてもらっぜー」「ッ！！」

サイトは今まで本気で逃げ回り、ワールドに全く攻撃を出さずになっていた。

だが、大体の様子見を終え、サイトはついに攻勢に打って出た。

「どりゃああああっ！！」

「ぐっ！」

足で一撃を加えた後一度引きさがり、サイトはデルフを左手に握り変える。

ギョツと柄を握りしめ、手から剣が飛んでいかないように確認していた。

途端、左手のルーンの輝きが一層増していくのが、ギャラリー側からも見て取れた。

大剣を逆手に持つ、ちゃんとした剣士が見たなら怒鳴り散らす様な構え。

普通ならそんな状態で振れば、剣の重みに手首を痛めるだけである。

しかしサイトはそれをした　ルーンの恩恵があるからこそ出来る無茶だ。

「ぜりやあああっ!」

「二度も蹴りが当たると「蹴りじゃねえよ!」何!？」

強化された肉体をバネに、思いっきり踏みこんで飛び蹴りを繰り出すサイト。

当然直線的過ぎる為、ワルドに簡単に避けられてしまう。

だがワルドが体勢を一瞬でも崩せばソレで十分。

「デルフをくらえやあああ!」

ドゴン!

「ッ!？」

まるでピッチャーがボールを投げる時のように、一本足の体勢から無理やり剣を振り降ろす。

その有り得ない体勢からの攻撃に驚いて瞬時に引いたお陰で、ワルドは攻撃を回避した。

振り下ろされたデルフは、錬武台にぶち当たり、石で出来た錬武台にヒビを入れている。

麻布をまかれている筈なのに、信じられないその威力に、ワルドは冷や汗を流していた。

「・・・認めようじゃないか。使い魔君も立派な戦士だ」

「そいつはどう」

「だが、次の攻撃は避けられるか？」

こう見えても現役の魔法衛士隊であるワルドには、メイジとしての意地がある。

故に、このままで済ませようとは思わなかった。

彼も彼なりに、いま出せる最高の技を持ってサイトと戦う事にする。

認めようじゃないか、彼も戦える者だと・・・そうワルドは心に思った。

「 ウィンデ」

「なんだ？また魔法か？」

『・・・相棒、気をつける。なんかさつきとちげえ』

ワルドは腰だめにレイピア状の杖を構え、スペルを唱えている。立ち止まり、杖をやや下げているその状態は、隙が多い様に感じられた。

一体何をしようと言うのかは不明だが、かと言って黙って受ける訳にも行かない。

待っていても勝機は来ない

「来ないならこっちから行く！」

故に、サイトはあえて火中の栗を拾う事にした。

ソレが誘いとも気が付かずに

「はあああ」

『ッ！？いけねえ相棒！』

「気が付いたところでもう手遅れだ！喰らえッ！エア」

ワルドの意図に気が付いたデルフが警告を発するが既に遅し。サイトがとびかかった瞬間、ワルドはスペルを解放する。途端レイピアに風が渦巻き、鋭い風の刃を形成していった。

「ニードルッ！」

そしてサイトが突進してくる位置を予想し、必殺の速度の突きを繰り出した。

先に出した手加減の入ったエア・ニードルとは違う、当たれば本当に必ず殺す技。

鉄板ですら貫くであろうその一撃は、ルーンをもっているサイトでも避けられるモノでは無い。

「「サイトッ！！」「ダーリンッ！！」

「・・・ッ」

「ほう、なかなか・・・」

女性陣が悲鳴を上げ、ギーシュも息をのむ、フェン以外の全員がサイトはダメだと思った。

だが

ズガンっ！

「グギャッ！」

サイトは迫る杖の先を的確に見切り、その軌道にデルフを乗せた。デルフの切っ先が、杖の先端を捉えて打ち当たった。

だが流石に衝撃までは防ぎきれずに、体勢を崩してしまうサイト。その途端デルフによって杖の先から魔法が解除され、辺りに解放された風が吹き荒れる。

「うわぁあつ！」
「ぐっ」

吹き荒れた風に体勢を崩していたサイトはこけ、ワールドも転びそうになるのを耐える。

かなりの精神力を込めた一撃だった。しかしソレすら防がれた。
キケンだ。

このままでは“計画”の妨げとなる ショウガイを 八
イジヨしなれば！

経験の差からか、先に体勢を持ち直したワールドは、脳内でなり続ける警鐘に従った。

まだ体勢を崩したまま、大きい隙を作ったサイトに向けて杖を向ける。

「ライトニング」

そして、どんなに速かろうが避けられる事のない攻撃を繰り出すとしたその瞬間。

「勝負あり、ココまでですよ子爵殿」

「な！？（魔法がキャンセル・・・いや精神力ごと消えただとツ！
？）」

サイトとワールドの間に降り立ったフェンが、ワールドの杖先を掴んで止めていた。

「何故・・・止めるのかね？」

「・・・あくまでもこの模擬戦は力を示すモノ。既に目的は達しています。それに」

これ以上は、殺し合いになる。フェンは最後の言葉だけ小さく囁いた。

クールダウンして冷静になったワルドは、確かに可能性の方が高かったと思った。

既にワルド子爵は何度か、サイトを本気で殺せる一撃を繰り出し始めている。

もし本気でワルドが魔法を連発したら、錬武台が持たない事だろう。

「おい！フェン止めるなよ！」

「もう言ったが目的は達した。ソレとサイトさん、油断して攻

撃を受けたな？」

「こ、こんなにかすり傷だ！すぐに治る！」

「そう言うのが油断と言うんだ。もし相手が毒の付着した武器を持つていたらどうする？死ぬぞ？」

「うぐう・・・」

サイトは文句を並べたが、力を見せると言う意味では既に目的を達成しているとフェンに言われ、

更に自分の戦闘訓練を受け持つフェンから、ダメだしもくらいそれが事実な為沈黙した。

「あとで母上との模擬戦記憶10セットですね。攻撃の仕方もそろそろ習うべきか・・・」

「ひ、ひいいいいいい！！もう弾の壁はイヤアアアっ！！」

おまけに地獄の訓練が追加された為、トラウマを思い出し恐怖から叫び声をあげていた。

彼にとつては災難続きの一日であろう。エグエグと鳴いているサイトを引き摺ってフェンは錬武台から降りた。

クールダウンしたワルドも、ココでサイトを殺していたら、ルイズの心象が最悪になった可能性に至り、そうなる前に止めてくれたフェンに密かに感謝した。

彼の目的にとつて、ルイズとの仲を悪くするのは得策ではないからだ。

模擬戦だつて、サイトが使えない事をアピールする為だった訳なのだし。

「さて子爵殿、一応引き分けでも良いですか？」

「・・・ああ、ソレで良い。」

そして、フェンからの引き分けの提案に同意を見せた為、この勝負は引き分けと相成ったのだった。

S i d e o u t

S i d e サイト

「あーあ、結局引き分けかよ。一発くらい入ると思ってたんだがなあ。」

「しかも頑張ってたのに、ルイズからは褒められなかったし、散々だぜ。」

「そろそろ良いですか子爵？」

「ああ、休憩したから大丈夫だ」

「お！お次はギーシュのヤツが模擬戦するのかわーことは」

「おいギーシュ、アレ使うのか？」

「うん、フェンに頼んで持って来てはあるからね。　　ワルド子爵」

「何かね？」

「僕は土のメイジです。ですからゴーレムを使いたいのですが、よろしいですか？」

「ああ、かまわない。存分に使いたまえ」

子爵から許可を貰ったギーシュは、シールドを張っているフェンに何か話しかけていた。

フェンはギーシュに言われると、コクンと頷いて腕輪を錬武台へと向ける。

すると、錬武台に円と幾何学模様と文字、所謂魔法陣が現れた。

「あはは、いつ見てもフェンの魔法は派手だなオイ。子爵も目を見開いてやがるぜ。」

「では、まだ未熟者ですが、グラモン家が末席の一人、ギーシュ・ド・グラモン。尋常にお手合わせ願います」

「あ、ああ・・・解った」

そして魔法陣から現れたのは、ワルキューレとかいうゴーレム。でも確かありや俺の訓練用に、フェンが監督しながら作ってくれた訓練用ゴーレムだったな。

確か今開発中の大型ゴーレムのテスト機で、魔導式武装のテストヘッド用に作ったとか。

・・・そっぴや大型の方もあらしいけど、持ってきたりして
るんだらうか？

S i d e o u t

S i d e f e n

「それじゃフェン、頼んだよ」

「了解。あ、魔力リミッターかけておいてくださいよ？じゃないと殺傷モードになりますから」

「解ってるさ。ちゃんと設定し直すよ」

そして俺はゴーレムを格納領域から引きだし、練兵場へと出現させた。

まさかこんな早くに、テストヘッドゴーレムを使う事になるとは
ね。

しかも予想していた戦闘と違い、模擬戦で使用する事となると
は・・・。

『（あの機体で平気でしょうか？）』

「（大丈夫だろう。機体性能的には問題無い。後はそれをギーシュ
さんがどう使うかだ）」

ヴィズが心配して念話を入れてくるが、俺はそれに大丈夫と答え

た。

大型の槍を持たせたワルキューレ改が錬武台に上がっている。うむ、戦乙女の名にふさわしい凜とした感じがいい。

「ねえフェン。もしかしてあのゴーレムもアンタが作ったの？」

「いえ、自分は知識を貸しただけです。あのゴーレム自体は基本ギ―シユさん手製ですよ」

そんな事考えつつ見ていると、後ろからルイズ嬢に声を掛けられた。

見ればタバサとキュルケさんもこちらに耳を傾けている。

「あれがギ―シユの？でも何か以前と比べて随分と印象が変わった様な・・・」

「ソレはそうですね。外側で動きを阻害していた鎧の形状をかえさせましたから」

「確かに鎧の形状が精錬された物になっている」
「良く解るわねタバサ」

まあそれ以外にも、様々な改良を付け加えさせてあるんだがね。まずパーツのユニット化、これによって整備性を向上させた。

ほかにもシランに使われた駆動システムを、ほぼそのままコピーして小さくした部品を使用。

そして兵装用と動力のエネルギーとして、シランに搭載しているのと同じ魔力キャパシタを搭載している。

こうする事で、何気にシランとの互換性も得ることが出来たりする。もっとも、サイズの魔導炉を搭載出来なかったので、使ったら魔力の充填が必要だ。

後で魔力を充填するのって俺か？

面倒臭いなあ。

「それじゃあ、アレは前のワルキューレより強いのか？」

「さて、ソレは使い手の腕次第でしょう。どんなに強くても戦い方が不味いと勝てません」

「そういうものなの？」

「ええ、そう言うものです。まあ今回は力試しの意味合いが強いので、必ずしも勝つ必要はありません」

さて、そうこうしている内に、ギーシュの準備が整った様だ。

ギーシュは自分よりも数歩前にワルキューレ改を置き、子爵の様子をうかがっている。

いやはや、あれが数週間前はヘタレだった男の顔かねえ？随分と立派になったモンだ。

ま、何気にサイトの訓練の相手としてもこき使ったからな。

ゴーレム操作については、かなりの才能を持っていたから、稀に戦闘訓練もさせたしな。

俺からの弾幕を防げなくて、似た様なワルキューレ改が何度消えた事か……。

「それじゃ、はじめ！」

「ギーシュ、行きます！」

ワルドの合図と共に模擬戦がスタートした。

そしてギーシュは、ワルキューレ改をワルドに向けて走らせるのだった

「俺達もたいがいヒマ人やな前編」(後書き)

*はい、ワルドとは引き分けになりました。サイト君まだまだ修業が足りなかった様です。

だけど、なんかサイトが横 化してた様な・・・まあいいか。

ソレではまた次回にノシ

「俺達もたいがいヒマ人やな後篇」

「俺達もたいがいヒマ人やな後篇」

妄想戦記

「　　つと、待った。ゴーレムを使うのは良い。だが勝敗はどうするかね？」

「うん？　　そうですね。それでは相手に参ったと言わせるか、体力尽きるまでと言うのは？」

「ふむ、ソレで行こう」

さて、お次はギーシユの操るゴーレム対ワルド子爵の模擬戦だ。テストヘッドゴーレムは、あくまで“試験用”だから、ソレでどこまで行けるか見モノである。

一応、あのゴーレムの装備をおさらいしておく

- ・試作型電磁投射式突撃魔槍“ガウスランサー”×1
- ・腕部内蔵小型シールド型結界発生機“デルタシールド”×1

- ・単発カートリッジ式魔力短銃“ドア・ノッカー” x 1
- ・腰にさした“青銅の剣”^{（つるぎ）} x 1

くらいだな。青銅の剣については只のお飾りだけ。

これ・・・対人戦に使うのか？・・・まあ戦い方次第だろうけどわ。

一応“隠しギミック”は付いているが、ほとんど短距離戦仕様がのが気になるところだ。

唯一の遠距離に届くのが、ドア・ノッカーだけ。メイジ相手だとややきついかな？

「ギーシュも子爵様もがんばれー！」

「アンタ、どっちの味方なのよキュルケ・・・」

「この際どっちでも良いわ。面白ければ」

「「いいのかよー！」」

わい。お、思わず突っ込んでしまった。女性は本当、男にや良く解らんわい。

と言うか観戦モード全開ですねキュルケさん。何時の間に飲み物持って来たんですか？

「いる？只の水だけだ」

「あ、自分貰います」

「私も」

「もらっ」

「なんつーか平和だなあおい」

いやいや、サイトさん。俺の多重プロテクションを挟んだ錬武台を見てくれよ。

あそこだけ、緊張した空気が流れているぜ？

「……………」

「……………」

「うっわ、なんか背後に擬音で“ゴゴゴ”って出てそっちな緊張感」

「ココとの温度差が激し過ぎますね。こっちは完璧観戦モードだって言っのに」

「何時の間にか一般の人間も見に来てない？」

そう言われ辺りを見れば、知らない人がチラホラと……。

まあ朝っぱらに初めていたモノの、あれからもう結構時間も経つし、魔法を使っていたから音で気づいたんだろ。娯楽が少ないもんな、この世界。

それにコレだけ派手な模擬戦だ。テイの良いヒマつぶしには持つてこい何だろうさ。

少なくとも、模擬戦を行う本人たちだけは真面目みただけだ。

「ではルールも決まった事だし・・・」

「ええ、では改めて・・・ワルキューレ」

ギーシュが戦う意思をゴーレムへと送る。ワルキューレ改の駆動パーツからキュンというモーター音が辺りに響き始めた。ワルキューレ改は突撃魔槍を構えると、そのまま駆けだしてワルドへと突っ込んでいく。

「甘い！デル・ウィンデ！」

ビュオオオ！！ ドン！

当然、そんな見えている直線的攻撃はお見通しの子爵は、それを避けてすれ違い様にカウンターに風を叩きこみ、その場から吹き飛ばしたのだが、元々金属で出来ているゴーレムは、それ程対したダメージは受けていない。だが

「シッ！」

「ッ！（本体狙い！？）」

すれ違った後も歩を止めず、そのまま突進するワルド子爵。

どうやらあのゴーレムと風とでは分が悪いと、初見で悟ったらしい。

だからゴーレムとはあえて戦わず、本体を狙ったと言ったところだろうか。

本体を守る盾であるゴーレムは強力だが、少し引き離せば隙が生じると踏んだのだろう。

「・・・甘いな」

「？フェン、何か言ったか？」

「いや」

あの程度の速さでギーシュに突撃、あれでは・・・遅すぎるぞ？

「ワルキューレ！」

ギーシュがワルキューレ改を呼び戻す為に指示を送る。すると、ワルキューレ改のバックパック部分が開口し、中から円柱状の筒の先がガシャンとセットされたのだった。筒の中ではギューイーンという、高速で回転しているであろうファンの音を響かせており、円筒の先には何故か上下に動くノズルの様な物が付いているようであ

る。

そしてワルキューレ改が、前に一步踏み出すかのようにした瞬間。

「今から呼んでも遅　ギューンッ！　なに！？」

「穿て！ワルキューレ！」

背後に居た筈のワルキューレ改が、突如ギーシュのすぐ目の前に現れた。その事に驚いた子爵は歩を止めてしまう。その隙を好機とみたのか、突撃魔槍を振う様にゴーレムに指示を出すギーシュ。
指示を受けたワルキューレ改が、突撃魔槍を構えて突きを放つのだが

「くっ！　危なかった」

「い、今のを避けますか・・・流石は魔法衛士隊」

ゼロ距離ギリギリだったが、本当に掠るくらいの距離にもかかわらず、子爵は槍を避けた。

そして、そのまま最初に居た位置にまで瞬時に後退していく。
若干子爵の肩が上がったり下がったりしているのは、驚いたからだろうか？

「フェン、何であのゴーレム急に速く動いたの？」

「……いや、俺に聞きますか？」

「だって、あれの製作にもかかわってんでしょ？アンタ」

「……専門的なのは難しくて解らんでしょうから、簡単に言いますと」

「言いますと？」

「風の魔法でブーストかけてます」

「あ、そうなんだ」

ウソ、本当は全然違う。風、と言うか空気を使う点では同じかもしれないけど。

種は簡単、アレには装備重量のバランスを取る為に、重量制御術式が付いているんだが、ソレにほんの一瞬だけ大量に魔力を流すと、数秒ほど身体を浮かすことが出来たりする。

そしてワルキューレ改の隠しギミックの一つにとある装置が取り付けてあるのだ。それは、俺のジェットバックパックを参考にした強力なターボエンジンである。名称はラムジェットユニットと言うのであるが、それを試験的に搭載したのである。いずれは大型機に仕込む予定のヤツをな。

一瞬浮かんだ身体、そして強力なエンジン、それによって、ほん

の数秒だけの高速移動が可能なのである。もっとも直線にしか移動出来ないのも、最初の頃の俺の様な感じだ。故に使いどころが限られるが、どうやらギーシュはウマく使ったようである。

「まったく、あの使い魔君と言い、君と言い。なかなかヤルではないか」

「現役の衛士隊の方に褒めて頂けるなんて、同世代の友人が聞いたら羨ましがることでしょう」

「そうか、ならもう少し本気を出しても構わないね？」

「へ？」

子爵はそう言うと、新たにルーンを紡いで行く。

すさまじい速さだが、さっきサイトとの戦いでも使われたルーンだと言う事は解った。

だが、それよりもさらに力が込められている。

「私の二つ名は「閃光」と呼ばれていてね。衛士隊の中でも詠唱が一番早いのだ」

一瞬呆然としていたギーシュがハツとなり、行動に移る前に子爵のルーンが完成する。

「私の風で、切れないモノは」

ビュゴォオ　と、視認できそうな程の風の渦が、子爵の目の前で巻き起こる。

「あんまり、ない」

そして、イメージを上げる暗示を込めた言霊が、彼の口から出た瞬間、魔法のカマイタチであるエア・カッターが、ギーシュに向けて放たれた。万物を斬り裂こうとする牙の如く、不可視の風の刃が、ギーシュとワルキューレ改を襲おうとする。

ギーシュは避けようかと思ったのか、身体を横にずらそうとしたのだが、一瞬背後を見てかたまってしまふ。そこには一般人のギャラリー達がいたのだ。自分が避けてしまつたら、関係のない背後の人間達にまで魔法が当たってしまう事は確定である。

この一瞬の思考の停止による判断の遅れが、自らの身に風の刃となつて襲い掛かったのは、そのすぐ後だった。

ドゴオオオオオン!!!

風の刃がギーシュをかばったワルキューレ改に当たり、すさまじい轟音と共に辺りが砂ぼこりに包まれた。ソレを見ていた女性陣+サイトは啞然として、ソレを見ている。

「ギ、ギーシュ・・・あれは死んだ？」

「バカサイト！縁起でも無い事言うんじゃないわよ！」

「・・・中々良い感じに成長をして、良い男に化けるかと思っただのに、残念ね。」

「未熟だった」

「・・・結構みんな思い思いに言っていらっしゃるようで。ヒデオなオイ。」

まあ以前の彼を知っている人間からすれば、そう思いたくもなるだろうけど。
もっとも

「・・・酷いなあ。まだ死んでないってのに、ケホ」

「なんと、あれを喰らって無傷だとは」

「無傷・・・じゃないですがね」

ギーシュはそう言うと、となりにならんだワルキューレ改をちらりと見た。

ふむ、魔槍で隠しているが、腕部の防御結界装置がバチバチとシヨートしているらしい。

試作品とはいえ、それなりの強度あったあれが壊れたか・・・かなりの威力だったんだな。

でも、まだ腕は動かせる様だ。ギーシュも諦めていない。

「ワルキューレ！ドア・ノッカー！」

キュン、ガチャ

「ッ！エア・シールド！」

バガンツッ！

先程の戦闘をかんがみて、ギーシュは近距離では避けられると踏んだのだろう。

その為不意打ちのように、ワルキューレ改の腰にセットしてある単発式の魔導短銃であるドア・ノッカーを使用した。咄嗟のこと故避けられないと感じたのか、子爵は魔法で防御しようとする。

チュイン！

「な！私の守りを！？」

「あ、不味い（設定間違えて殺傷のままだった）」

だがソレはいとも簡単に破られる。

元々この世界の銃は性能が悪く、所謂滑空銃の様な物しか無い世界であり、そう言ったのは平民の武器として貴族からは忌避される傾向がある武器である。当然ギーシュも銃に触れたこともあまりなく、射撃何ぞ、訓練の時以外には殆どしたことが無い。なので、その腕前はノーコンに近いのだ。

そのノーコンぶりのお陰で、放たれた魔力弾は当たりはしなかったものの、当たっていたら骨を砕かれるなんて威力では済まなかったことだろう。慌ててギーシュは、短銃のカートリッジを取り換えずに、そのままホルスターへと戻し、槍を構え直させた。威力が高すぎると感じたのだろう。

しかしギーシュ、もう“時間だぞ”？

「……最後の攻撃です」

「なに？もう限界なのかね？」

「ええ、まあ……ワルキューレがですけど」

「????まあいい。では私もそれなりの一撃を与えよう。」

ギーシュの言葉に首をかしげる子爵だったが、気にしないで杖を構え詠唱を始めた。

ソレを見て、ギーシュもゴーレムに何をさせるかをイメージしていく。

鎮まる一瞬・・・

「
ツ!!」

そして両者は、ほぼ同時に攻撃を仕掛けた。ギーシュはワルキューレ改に推進機を使わせた突撃。対するワルドはトライアングルのスペルを短時間で組み上げて、巨大な風の渦巻きを発生させた。

「大きい、流石は子爵様。スクウェアなだけあるわね」

「あれなんて魔法なんだ？タバサ」

「アレはエア・ストーム。トライアングルの風魔法」

「あれ・・・トライアングルかよ」

サイトはタバサに何の魔法なのかを問い、それを聞いて呆然としていた。

自分の時に使用されなくて良かったなあって考えているのかもしれない。

「風に・・・まかれるがいい!!」

ワルドはその渦巻きを収束させ、ワルキューレ改へと向ける。
ギーシュもワルキューレ改の持つ突撃魔槍の先端を、渦巻きの中
心へと向けた。

ガガガガガン!!!!

「ウオオオオオオツ!!!!」

「イケエエエエエツ!!!!」

声を荒げる両者、ガウスランサーと渦巻きとが激突し、火花を散らしている。

流石に止めるべきかと思ったが、まだギーシュは笑っている。子爵も笑っている。

殺し合い云々じゃない、まるでこれは

「……まったく、何気に熱血ですか」

「ん？フェン何か言った？」

「いえ、何でもありませんマスター」

ただの、戦いに熱中している“子供”だな。

そうこうしている間にも、時は進み、戦いはまだ続いている。方々魔法、方々魔法で作られし人形。その二つの対決にも決着が付きそうであった。

ミシ……ピシ　　！！

「くっ！ウルキューレのフレームが限界か！！」

「残念だったが、どうやら私の勝ちの様だ。だが本当に君はよく頑張ったと思う」

既に何度かワールドからの魔法攻撃を喰らっているウルキューレ改。蓄積したダメージは、フレームを歪ませて、装甲板に亀裂を走らせていく。

まるで涙を流すかの様に、戦乙女の人形は目元からもヒビが出始

めていた。

このまま風の魔法を受け続ければ、間違いなく分解してしまうだろう。

だが、まだギミックは残っている。

「ウオオオオオッ！ ガウスランサー・ロック解放！」

ゴシューーーーーー！！！！ドゥーン！！！！

「な、何だとオオオオ！？」

ギーシュが最後にワルキューレ改へと最後の命令を送った。

途端手に持った突撃魔槍へと、なけなしの魔力が送られると共に、電荷を帯びた蒼い槍先が音速を遙かに超えて、渦巻きの中心へと撃ちこまれた。

試作型電磁投射式突撃魔槍“ガウスランサー”

魔力を変換術式を通して高電圧の電気へと変え、電磁石の力で槍先を音速を超えてスライドさせて打ち込み、目標を貫く魔法と科学技術の槍である。

そして、突撃魔槍にもヒビが入って砕け散ると同時に

「抜けたあッ！！」

槍を持っていた右腕をパージしつつ、ワルキューレ改は、大気の渦を突破した。

「クツ！ゼアツ！」

ガキンツ！！

そして腰に付けておいた青銅の剣で、ワルドに斬りかかり、子爵もそれを自身の杖で受けとめた。そのまま戦いが続行するのかと、その場を見ているギャラリーも含め、ほぼ全員がそう感じていたのだが、その途端。

キシューーーン……………

そんな音を立てて、ワルキューレが突如として膝をついたのだ。どうなっているのか解らず立ちつくす子爵と周辺ギャラリー。

そんな中、ギーシュは一人頷き

「……………僕の負けです。でもこれで戦える事は証明されましたね」

ギーシュが自ら負けを認めたのであった。それを見ていたギャラリーは大混乱。

金返せー！とか誰か叫んでいたが、それはこっちには知ったこっちゃない。

子爵も呆然とワルキューレ改に近寄るギーシュを見つめている。

「時間切れだな」

「時間・・・そうか、キャパシタか！」

「きゃぱした？何なのソレ？」

俺言った事にサイトが反応して、手をポンと叩きながらそう言った。

サイトの口から洩れた聞きなれない言語に、首をかしげる仕草をするルイズ嬢。

・・・簡単に説明をしてやることにした。

「簡単に言えば、あのゴーレムを動かす為に必要なエネルギーの入った箱の事です。先程の槍や高速移動などを行えば行うほど、その中のエネルギーは減少し最終的には動けなくなるのです」

もともと試験用で、限定的な起動時間しかいらなかったからな。

それにスロースターターな魔導炉よりも、瞬発力に優れる魔力キャパシタの方が扱いやすかったのだ。構造も簡単に作りやすかったし・・・。

だが、ともあれ

「結局、二人とも引き分けか（ボソ）」

『（なかなか面白い見せものでしたねー）』

【でもでも、こんなに疲れちゃって大丈夫なんでしょうか？】

ま、一応アルビオンに行くのは明日らしいから、それまで休息を取れば平気じゃないの？

とりあえずは目的を達する事が出来た訳だし・・・つーかギーシユ、ギャラリーにいた可愛い子ちゃんに手を振る前に、テストヘツドゴーレムを片づけい。

さて、色々あって俺達は同行を許されたらしく、あの後夕方までは自由時間と言う事で好き勝手していた。流石の子爵殿も、どうやらサイト&ギーシユの二人相手は疲れたらしく、現在はお休み中だそうだ。最近だらしねえな。

ルイズ嬢はタバサを引き摺ったキュルケさんに拉致られて観光に行ってしまった。彼女等の護衛については、ミラージュハイドをしたシランが着いて行ってるし、タバサはああ見えて中々の戦士である。そこいらの賊程度じゃどうにもならんだろつ。

ギーシユはギーシユで精神力を回復させる為に現在休憩中だ。俺

が魔力を分けてやれば楽何だが、ヤツはそうなると自分がその後何をさせられるか理解してやがる。案外賢いヤツだよホント。そう言う訳で、観光に来ていいると言う訳でも無い俺は、練兵場のある中庭にて、木箱の上に座って食堂から持って来ていたサラダを突いていた。

「ハシバミ草サラダ、なかなかうまいな」

『マスターも結構アレですよ？強烈な味の好きですね』

【USN海軍式泥コーヒーは・・・思いたしたくない味です・・・】

そうかな？結構眠気覚ましとかになって良い味だと思うんだけどなあ。

なれたらこれ程病みつきになれる飲みものも、そうそうあるもんじゃないと思う。

一般人が飲めるかは別にして・・・ソレはさて置き。

「さて、何時まで寝ているFNG？」
ファゼキガイ

「・・・」

俺は練兵場にある練武台に落ちているゴミ屑に話しかける。

声を掛けてやったと言うのに、ピクリとも反応せんとはどついう事かな？かな？

「死んだふりか？・・・アルアツソー展開（ボソ）」

「！！！？正直すみませんでしたー！！」

俺がぼそつと、ある単語を言うと、ゴミ屑はガバチヨツ！と起き上がり、俺に飛びかかるかのようにジャンピングした後、空中3回転土下座を決めた。全世界土下座選手権があれば、入賞は出来るくらいのレベルだろう。最初から素直に起きりゃいいんだよ。全く。

「無茶言つな！300発の弾幕を全部避けるとかされて無事な訳ねえだろう！」

「防いでも良いと言った筈だが？大体目視できるレベルだったろう？」

「デルフ無しで防げねえよ！ギリギリ痕跡が見える程度じゃねえか！おまけに爆発するとか、俺を殺す気か！？」

「だが、避けられるじゃないか。偉いですよサイトさん？」

そう、ゴミ屑はゴミでは無く、訓練でボロボロにされたサイトだったのだ。

彼はワルドとの模擬戦の時に、少し攻撃を受けていたので、特別訓練を実施したのである。当然サイトに拒否権は無し、無理やり結界内に連れ込んで訓練続行中である。

デルフを持ち込むのを忘れたので、簡単な剣を作ってガンダール
ヴのルーンオンリーでのデルフを何らかの理由で紛失した際の戦闘
訓練を行った。最初こそ半泣きだったが、避けなきゃ殺されると瞬
時理解したサイトは賢いな。ウン。

とりあえず、ちょっと休憩がてら、俺は言葉遣いを、訓練の時じ
やなく、普段の敬語モードへ戻した。なんか訓練の時になると、言
葉づかいが変わるんだよなあ俺。気が付いたら、俺が敬語の時にな
ると休憩という暗黙の了解が出来あがってたしな。

「・・・はあ、泣けて来た」

「泣けるなんて素晴らしい。まだ人間でいられてますよ?」

「お前は俺をどうする気だ!人外でもこさえようつてのかよ!」

「何を今更」

「あれ、かあさん、目の前がかすんでみえないよ」

「バカやつてるヒマがあれば、とっとと整理体操してください。次
行きますよ?」

「この鬼!悪魔!」

「褒め言葉ですな さあ、早く準備してくれ」

「チツ、わあったよ ジャキン いえ!了解しましたあー!!」

これで何度目かになるサイトとの軽口にも、ジリーノだけ取り出してリロード音だけで答えると、そのまま訓練を再開したのであった。大丈夫、今日も死線を越えたら、すぐに強くなれるさ。今回は特別に、脱衣婆と仲好くなれる特典付きだぜ？ありがてえだろう。

「ほーら、お次は近接戦の訓練だ。俺が攻撃するから、30分ソレを防御するだけで良い」

「・・・遠距離攻撃魔法無し？」

「ああ、“遠距離”は無い。魔力刃も使わないぞ？と言うか攻撃系は俺は無した。お前さんは避けるもよし、防御よし、反撃もありだ」

「おし！k t k r！それならなんとかなる！」

「それじゃあ、構えろ・・・ミラージュハイド」

「え？消えた！？おい！魔法は」

「“攻撃系”は無しと言っただけで、“補助系”は使わないとは言っ
つて無いぞ？」

「詐欺じゃー！そんなの勝てねえー！！」

「ほれほれ、感覚を研ぎ澄まさないと」

ザシユ！

「ひえッー!!」

「すぐに、怪我するぞ？下手したら死ぬかもな。けけけ」

「があああー!!どうせこんな事だと思っただよーっ!!!!やっつてやる!やっつてやるぞー!!」

「その意気だ。精々30分壊れるなよ？」

こうして訓練を続ける俺達。サイトは全力で俺の剣を避け続けるのだった。

怪我しても体力切れになっても、治癒魔法があるからな。魔力を消費する訳じゃないサイトなら、怪我とかを直してやればすぐに戦える程度に復帰できるさ。

そして、この後1時間程度、何時もより濃い訓練を続けて、サイトが意識を完全に飛ばしたため、宿の部屋にサイトを放り込んで訓練終了となった。ギーシュはこの事を見越していた為、先に休むと言って逃げていたのだ。全く、そう言ったところは賢いんだから。

そして、俺を含むルイズ達一行7人は、ラ・ロシエール2日目
目の夜を迎えるのだった。

「俺達もたいがいヒマ人やな後篇」(後書き)

*お、おかしい。相変わらず主人公が鬼畜だ。

さあて、次こそアルビオンに……。行ければ良いなあ。

「今日はシガイセンが強いので、気をつけてお出かけください」

「今日はシガイセンが強いので、気をつけてお出かけください」

妄想戦記

Side 三人称

「はぁー・・・」

貴族御用達の宿『女神の杯』亭、その屋上にて一人の少女が溜息を吐いていた。

日が沈み、薄暗い中でもうつすらと見ることができる桃色のブロードの髪、言わずもがなルイズである。彼女は手すりに体重を預け、空を見ながら黄昏ている最中だった。

「なんで、あんなにボロボロになってまで、稽古が出来るの？」

およそ数十分まえくらいだろうか？キュルケ達から解放され、な

なんとなくサイトの居る部屋に行ったところ、ボロボロの状態で泥のようにベッドに沈んでいる己の使い魔がいた。

普段なら、主人である自分が来たのに寝ているとは何事かと文句を言いたいところだったが、あまりの状態のひどさに戸惑ってしまった。

その部屋で一人静かに本を読んでいた、自らの従者として雇い入れている少年、フェンに何があったのか聞くと、特訓によってこうなったのだと話した。

すべては貴女を守る為、随分と想われていますね　と、苦笑しながら言うフェンに、つ、使い魔何だから当然よ。と、半ば自らに言い聞かせるように返したのを覚えている。

「はあ~~~~~。もう、なんで私が心配してるのよ」

そして、その事が余計に彼女に困惑を与えていたのだった。

本来の史実の流れとしては、彼女はサイトとケンカしながらも、彼に助けられ、励まされて絆を深めていった。しかし、“フェン・リーダー”というイレギュラーが介入しているこの世界においては、彼らが危機の迫る中で本音を言い合い、絆を深めるといふ事は行われていない。

しかし、それでもサイトはルイズに好意を持ち、ルイズも無意識にだがそれを感じていた。どちらかと言えばサイトはlikeでは無くlove寄り、ルイズはloveでは無くlike寄りでは

あるが、好感をもたれている事には変わりない。

また、サイトは自分よりも小さい子（と思っていた）フェンが、自分よりも遥かに大人であることを見せられており、自らもそれに感化されるように、生来の子供っぽさが若干抜け落ちているらしく、ルイズに対しても気兼ねのない友人的な雰囲気で接していた。

故に、彼はルイズに帰れなくなった事を当たり散らすような事は、最初の日以来していない。

それどころか、フェンが彼を師事するようになってから、ルイズと言う個人を観察し、彼女がどういう人物であるのかを、自分なりに見ていたのである。

よって、サイトはルイズがかなりの努力家であり、周りからの侮蔑の視線にもめげずに、貴族であろうと行動している事を素直に称賛していた。ソレはルイズという個人を認めていたとも言える。サイトの中では、ルイズはどこまでも自分に敵しく、それでも決して自分を曲げない人間・・・いい意味での頑固な娘だと思っていた。

おまけで可愛いから好いていると言うのもあるのだが、そこら辺は男の子の性だろう。

一方のルイズは、この世界における魔法が全く出来ず、ほぼすべてが爆発するといった特殊さもあり、こういった直線的で素直な称賛と好意という感情を、特に異性から向けられる事が、これまで殆ど・・・いやさ特に魔法についてはなかったのである。

優しい言葉を掛けてくれる異性は、学院生活の中で居なくは無かった。しかし、そのどれもが腹に下心という公爵家と知り合いになりたいと言う、ドロドロとした感情を持っていたと言うのを、感じ

取ることができた。

そう言った輩は、大抵ルイズの爆発魔法によって淘汰され、現在では話しかけてくる異性は、自らに罵倒を浴びせてくる輩くらいしかいなかったのである。そんな中、使い魔とはいえ異性から向けられる肯定の感情。明け透けなくらいに、下心を感じない純粹な好意。

史実と違い、惚れたはつたの前に“凄い娘”と理解したからこそその感情。そしてそれは雇い入れているフェン達からも向けられている。他の貴族と違い、ルイズをメイジの尺では無く、ルイズ個人として見て、そのうえで気にいられていた。

わずかな時間とはいえ、普段ライフサイクルを彼らとほぼ共にしているのだ。魔法以外は聡い上に、人の感情に機敏な彼女だからこそ気付いた。もっともそれに対する返し方は知らないのだから、サイト辺りが不憫でならないのだが・・・。

まあ、ともかくそんな訳で

「はあああああ・・・」

絶賛溜息祭り開催中と言う訳だ。なおこの祭りは、参加者どころか見ている周りがネガティブになるので、みんなも気をつけよう。お兄さんとの約束だ。

それはさて置き、彼女が何故この事で悩むのかだが・・・サイトがどうして自分の為に、そこまでボロボロになってまで、稽古が出

来るのが解らなかつたのだ。

実際のところはフェンがほぼ無理やり稽古をつけている為、魔法の力を持たない一般人であったサイトに逃れる術は無く、そのまま捕まって無理やりを受けさせられて、人外の域に片足を突っ込み始めているのであるが、そんな事を露ほどにも知らないルイズに解る筈も無い。

だが・・・サイトが強くなるうとしている理由の中に、自分がいることくらいは理解していた。何故だかは知らないが、その考えに行きついた日から、自分の中でサイトが何なのが解らなくなっていた。

使い魔 であることは明白だ。自分が召喚し、契約したのだから、彼は自分の使い魔である。しかし、只の使い魔の筈なのに、他の人間・・・特に自分と同性と親しくしているのを見ると、もやもやとした何かが湧きあがってくる。

フェンとかには感じたことが無いのに、それが一体何なのが良く解らない。似ているとすれば、その昔ワールドと一緒に居た時に感じたナニカに似ている様な気がした。

だが、結局よく解らなかつた。湧き上がるナニカは、ちょっと苦しいのだ。

しかし、今は任務中なので、あまり他の事を考えている訳にもいかない。だが、考える事を止めない頭に、これで通算何度目かは解らない溜息を吐きかけようとしていた。

その瞬間

ガシャアアアン！！

「ツ！？ 何の音！？」

突如、階下からガラスが割れる様な音が響いた。

慌てて覗くが上からはもう薄暗くてよく見えない だが、何か起きたことは解る。

気になった彼女は、下の階へ降りる事にしたのだった。

一方、上の階で絶賛溜息祭り開催中のルイズ以外の連中はと言うと

ばりーん！！がしゃーん！ひゅひゅん！！！！

「わお、矢の嵐だな」

『（ハンティングボウって所でしょうかね。人間が当たったらタダじゃ済まない威力の・・・）』

「 あ、店主に当たったな。いたそーだ。アレは死ぬわ」

謎の敵からの襲撃を受けている最中だった。

フェンはサイトを治療した後、体力を無理やり回復させる為に、飯を食わせに一階に降りて来たのだ。最近この生活に慣れ始めたサイトは、大食い大会に出るかの如く食いまくり、この後の支払いでルイズ嬢に怒られそうだなあとフェンが思ってしまうほど食っていた。

ギーシュは身体を使った訳ではないので、軽くワインを飲んでいたが、サイトの食いつぶりに少し唖然としていた。嘔き出さないだけ成長しているのか・・・はたまたこの状況に馴れたか、諦めの境地というスルースキルを会得したのだろう。

曰く、突っ込んだら負けであると

そうこうしている内に、同じく起きて来たワルドやキュルケ達とも合流し、適度に会話していた時に突如として襲われたのである。ガラスを破り、そこに弓兵を配置して矢を撃ちまくる。この世界におけるメイジに対する平民の戦法であったので、相手は傭兵であることが解った。

とりあえず、カウンターを飛び越えて避難したので、怪我は無し。相手は中で動くモノが居なくなるまで矢を撃つのをやめる気が無いらしく、一階食堂兼酒場は矢の嵐が飛び交う戦場と化していた。

「で、子爵殿？どうしますか？応戦した方が良いですかね？」

他の人間が伏せている中、一人普通に薄めたワインを煽るフェン。掠るだけで致命傷を負わせられる戦場に居た彼にとって、この程度

の戦闘は馴れたモノである。しかも相手の獲物は只の弓矢、毒が付着している訳でも無いので、油断はしていないが警戒もしていないが。った。

ワルドはフェンの様子に若干呆れながらも、考える仕草をして、とりあえずルイズを保護する事を優先しようということ述べた。だが、どちらにしてもこの状況下で出ていくのは得策では無い事は明白だった。

フェン一人なら、防御魔法で矢を防ぎながら簡単にルイズを迎えに行くことが出来る。

だが、そうなると残った人間が心配となり、当然脱出を優先したくても、ルイズの事だ。残った人間の心配をして、任務よりも感情で動き、残った人間を助けに行きそうな気がする。

そこら辺は大人なワルド子爵に任せれば、口八丁で丸めこめるだろうが、どちらにしても一筋縄でいきそうもない。

「どっちにしても、フェンはともかく俺達が移動できそうもないよな」

「サイトの言葉に同感だね」

「……だが、この任務で一番守らなくてはならないのもルイズだと言う事にかわりは無い」

「ですが子爵様？この矢の中を動き回るのは」

「自殺行為」

「　　だそうですよ？・・・ま、彼女には元々護衛は付けてるんですがね」

だが、このままカウンターの後ろに隠れている訳にも行くまい。今は弓だけだが、火を放たれたらどちらにしろ全滅する可能性もある。

フエンとしても、それなりに気にいつている雇い主を失うのは、あまり良い気分では無いので、護衛をつけているのだが、その護衛から通信が来たのだった。

「　　そうか。通信終わり・・・子爵殿、上からマスターが降りてくるそうです」

「何い！？」

「どつやら、下の騒ぎが気になったらしいですね。あと数分で階段の方に来ますよ？」

彼らにとつては悪い知らせだ。現在この食堂は矢が飛び交っているのだ。メイジとはいえ、戦場に出たことが無い少女が、矢の嵐の中で無事でいられるわけがない。

「・・・とりあえず、彼女の保護を最優先にしなければならぬ。風の魔法で一時的に矢を止めるから」

「成程、その間に保護して遮蔽物の方に？」

「ああ、頼めるかな？」

「了解、サイトさんも手伝って、俺が防ぐから彼女を迅速に」

「ああ、カウンターに連れてくるんだな？任せとけ」

.....

.....

.....

「ちょっと！？これどうなってるの！？」

「後で説明すつから！だから頭下げろ！」

「なんで上から降りてきたら戦場になつてんよー！！」

「だから頭下げろつて！マジであぶねえから！ザク・・・ほら、こんな風にな」

「ちょ！？サイト！額に刺さつて無い！？」

「まだ大丈夫だけど、早い所治療しねえとヤベエかな？あ、お花畑」

「だ、だめー！そつち行くのは早すぎるわー！！」

「大丈夫、俺常連さんだし」

「なんの！？というかフェン！なんとかして」

「・・・しゃーねえですね。（コント終わらせてくれればすぐだっ
たんだがな）」

.....

.....

.....

さて、無事にルイズを保護したはいいが、戦況は相変わらず不味
い。

どれだけ用意したのかは知らないが、いまだ矢の攻撃は続いてお
り、下手に動くことが出来ないのだ。魔法で応戦したくても、敵が
分散している以上、一人倒した後には別の敵に攻撃されてしまう。

「参ったね」

「奴らちびちびとこちらに魔法を使わせて、精神力が切れたところ
で一斉に襲ってくるわよ。そしたらどうするの？」

先程からちまちま反撃しているワルドとキュルケがそう漏らした。

傭兵の癖に、メイジとの戦い方に馴れている連中だと、フェンは少し違和感を感じていた。

まるで、ここにメイジが来ることをあらかじめ想定しており、既に入口付近にバリケード見たく机を並べ、そこから矢を射ってきている。

やはり情報が漏れているのか。フェンはそう確信しつつも、この状況を打破する為に口を開いた。

「二手に分かれましょう。ここで防ぐ人と脱出する人を決めて」

「フェン！アంత何言って」

「いや、良い手だと思っぞ」

「同感」

ルイズがフェンの言った事に激昂しかけるが、サイトとタバサがそれに同意した。

反論を言おうとするルイズをさえぎって、ワルドも口を開いた。

「彼の言う通りだ。このような任務の場合、半数が目的地に着けば成功とされる」

そう言って彼は裏口を指さした。

「私がルイズを連れて、裏口から脱出し、棧橋のフネへと向かおう」
「では自分やキュルケさん、タバサとギーシさんが囷として残ります。サイトさん達はマスターを連れてすぐさま脱出してください」
「でも……」

「どうやら納得いかないルイズ、しかしこの場で議論をする時間はない。仕方なしにフェンは彼女を諭す為に、一般人相手と考えて怒鳴らない様に気をつけながら、ゆっくり丁寧に言葉を発した。こういった場合、下手に怒鳴ると相手も意固地になりやすくなるからだ。」

「マスター、大丈夫です。すぐに追いかけますから」

「だけでもしも怪我したら！」

「見くびらないでよルイズ。私たちが賊程度に負けるとでも？」

「キュルケさん 彼女の言う通りです。我々があの程度に負けるわけありません。それともマスターは自分たちを信じてはくれないのですか？」

フェンがそう言うと、うっと言って黙ってしまっ。

それを見たサイトが、タイミング良くルイズの肩に手を掛け、黙ってついてくるようにアイコンタクトをした。このタイミングを逃すと、更に口論を起しそうだったからだ。

ルイズは納得こそしなかったが、黙ってサイトに従い、体勢を低くして裏口へと向かう。

そして、ワルドが再度大きな風を起して矢を防いだ隙に、裏口から彼らは脱出したのであった。

Side out

Sideフェン

ふう、ようやく行っただか。全く任務の優先度をちゃんと忘れない様にしておいて欲しいぜ。

【主殿、何で魔法で敵さんを倒さないんです？】

「（やつても良かったんだが、狭すぎる。それに、護衛対象が逃げ方が優先だ）」

【成程ですう】

戦闘中に流れ弾に当たって死なれたら目も当てられネエからな。

逃げられるルートがあるなら、そちらを優先するだけさ。さて、残っているので戦えそうなのは　　うん、こうしよう。

「作戦があるんですが」

「どんな作戦？出来れば具体案を簡潔に述べて欲しい」

タバサが俺の言葉に乗って来た。とりあえず俺は説明を続ける。

「・・・敵さんにひと泡吹かせてやる作戦です」

「ひと泡ね・・・いいじゃない？」

「何をするのか教えてくれフェン」

「ソレでは」

俺は悪戯をするガキの心境で、考えた作戦をこの場にて話す。

もっとも考えた作戦はガキの考える悪戯レベルをはるかに超えているが気にしない。

面白そうだったんで、全員賛同してくれた為、行動に移すことにした。

さあ賊よ。遠慮なく来るが良い。そして死ぬ。

「それじゃ、まずはギーシュさん。そこら辺の物から大量の小麦粉を作ってください。出来れば、空中に舞うくらい細かいヤツを頼みます。それがこの作戦の要ですから」

「了解、舞うくらい細かいヤツだね」

ギーシュはそう言うと、そこらのガラクタを錬金して細かな粒子に変えていく作業に移った。

その粉さえあれば、この作戦は成功したも同じである。

「キュルケさんとタバサは、ギーシュさんの準備が完了するまで、賊に対して適当に反撃をお願いします。二人とも余力は残しておいてください」

「わかったわ。ふふ、私の炎は熱いわよ」

「任せて」

そして適度に反撃させて、敵さんが流れ込まない様に気をつける。ギーシュの準備が整わないと、面白くならないからだ。俺もジーノを取り出し、最低出力で応戦する。それでも威力が高かったので、本当に少ししか撃てなかった。

しばらくして、ギーシュが頑張り大袋4個分程度の小麦粉が完成する。重さ的には人間二人分暗いだろうか？よしよし、これさえあれば面白いことが出来るぜ。既にこの宿で生きている人間・・・というか動いている人間は俺達と賊しかいないから、好き勝手してやるぜ！

「全員カバーを行いつつ、裏口の外まで後退します」

「え？逃げるの？私まだ炎撃てるわよ？」

「そうになると、ギリ貧だし、面白いことが出来ないのですが・・・それにキュルケさんには最後の仕上げをして貰いたいですし」

「ふーん、まあいいわ」

「それじゃ、裏口まで行く。殿は任せて」

「了解、頼んだ。ギーシュさん、離れない様にね」

「わ、解った」

錬金のしすぎか、若干息が乱れているギーシュを引き連れ、粉の袋を持ちつつ後退し、タバサ達とお互いにカバーし合いながら、なんとか裏口へと到達した。外を軽く覗くが、今の所敵は来ていない様である。よし、敵も食堂の中に大分入り込んでいるな？これは好都合。

「タバサ、さつき作った粉を風を使って食堂にまんべんなく充満させて、出来れば視界が無くなるくらいの濃度で」

「了解」

タバサがルーンを二三言漏らすと、小さな旋風が小麦粉を巻き上

げて、食堂の中を白くしていく。さながら煙幕のようで、中の賊は混乱しているようだった。俺はその隙にシールドを展開。そして、キュルケさんに最後の仕上げをお願いした。

「それでは、最後の仕上げ。キュルケさん」

「魔法をあの中に撃てばいいのね？・・・でも本当にうまくいくの？」

「舞台は整いました。後は結果を御覧あれ、ですよ」

「解ったわ　　ファイアーボール!!」

キュルケさんが放った火球は直線して進み、見事裏口から中へ飛び込んだ。

俺はキュルケさんをひっこめて、防音結界を張り巡らす。
結界を張り終えた瞬間

ばっつっがあーーーーーーん!!!!!!!!!!!!!!

女神の杯亭は盛大に大きな爆音を鳴り響かせて、中から大爆発を引き起こした。そしてギシミシと音が聞こえたと思ったら、ガラガラと音を立てて、建物が倒壊してしまったのであった。

・・・ちとやり過ぎたかな？まあ俺の知り合いの建物じゃな

いから良いか。

「殲滅、完了」

「おつどろいたー。全部埋まってるわねえ」

「……賊が哀れだね」

「やり過ぎ」

若干数名に引かれたが、これで賊はあらかた退治出来た筈である。それにココまで派手にやれば、まちに散らばる残党もこっちに向かって来るから、ルイズ達も逃げやすくなることだろう。……そういうアッチは大丈夫だろうか？

「とりあえず、移動しましょう」

「え！？まだ居るの？もう精神力が結構不味いんだけど……」

「敵がこの騒ぎを見て近寄ってくるかもしれない」

「ど、どうするのかね？」

「とりあえず後は残党狩りですから、不測の事態に備えて休憩でもしておいてください」

俺はそう言うと、ヴィズのセンサーやレーダーを働かせ、恐らく敵である人間を検索する。

検索内容としては、とりあえず金属反応が高い連中を主にした。剣とか弓とか持ってそうだな。そして序でに、ルイズ達の護衛についているシランに連絡を入れることにした。

シランへの回線は通常回線とは違う機械式を使ってるから、ヴィズに経由させねえとな。

「シラン、聞える？」

「あ、ご主人さま！大変です！」

「どうした？至急の情報なら落ちつて簡潔に話せ」

「は、はい！サイトさんが、サイトさんが　　フネに乗りました
ー！」

「・・・は？」

シランの言葉に一瞬呆然となった。簡潔に話せとは言ったが、そこまで簡潔にしなくても・・・。

よく解らるので、情報をもうちょイ詳しく言う様に命令した。

フネに乗った・・・そうか、もう先に飛んで行ったのか・・・早いとこ追いかけては。

「だが、その前に　　」

『・・・お客さんを片づけなさいけませんね』

【敵正反応と思わしき反応増大、此方に急速接近してきますう】

「 まったく、護衛任務も楽しじゃねえな」

俺はガシャコンとジリーノをリロードしつつも、BA？を展開。
休んでいる学生たちには荷が重いだろっから、俺は先行して先に倒すことにした。

とりあえず設置型ガルヴアドスとジリーノ、それと場合によってはグロウタスクかな？

グチャグチャにすると、後で片付ける人が可哀そうだから、非殺傷で行っておこう。

最低出力にするには自力制御しなきゃいけないから、こっちの方が楽なんだよな。

俺昔の癖で、攻撃は全部急所狙いになっちまうからHSばっかしちまうし……。

「さてと……狩りだ」

『狩りじゃー』

【……相手が可哀そうです。でも、狩りなのですう】

そして、ラ・ロシエールの町に砲声が響き渡ったのだった。

「シンクタンクが行く！・・・さきにフネで」

「シンクタンクが行く！・・・さきにフネで」

妄想戦記

Side三人称

フェン達が女神の杯亭で奮戦している頃、ルイズとサイトとワルドは町の中心部にあるフネの発着場がある棧橋へと急いでいた。そこに停泊しているフネを徴発し、そのままアルビオンへと向かおうという作戦なのである。

そんな彼らを影のように追いかける存在が居た。

四本足で腕が二本、角々しい胴体に搭乗ポッドがついたシルエット。そう我らが思考戦車^{シンクタンク}ことプロト・シランである。シランはフェンからの命令で、ミラージュハイドを用いて隠密裏にルイズの護衛を務めるといふ役目を追っていた。

重力制御術式を用い、関節部の稼働を最低限に限定する事で、無

音走行を行って追跡しているのだ。魔力も最低限の隠密モードな為、知覚能力が高い風のメイジであるワールドにも気付かれてはいない。

先方を走るサイトは器用にもデルフを鞘に入れたまま柄を持ち、ガンダールヴのルーンを使ってデルフをすぐに鞘から抜ける形で先頭を走り抜けていた。一方それを後で追いかけるワールドにとっては、ガンダールヴのルーンを使われたサイトを追いかけるのは、魔法でフライを用いないと無理だった。

しかもフライを使っても、追い付くので精いっぱいだったのだからたまらない。

彼の腕には顔を真つ赤にしたルイズが居るのは御愛嬌。

「子爵！どっち行けばいい!？」

「よこの階段だ！そこから上に行けば棧橋がある!！」

「あいよ！遅れんなよ!！」

「アンタワールド様になんて口聞いてんのよ!このバカ!！」

「うわ！ちよ、今は走ってるから折檻はあとにしてくれ!！」

サイトの言葉遣いにルイズが後で折檻よと騒ぐ。だが、なんだかじゃれついているようにしか見えない。ここにフェンがいれば“いいコンビだ・・・”と言葉を漏らしていただろう。

こんなやり取りをしていても、速度は衰えることなく階段を駆け

上がっていくサイト。フェンが施した訓練によって自力が向上している事もあり、戦闘以外でのルーン使用についても体が付いて来ているようである。

そんな彼らを遠過ぎず近過ぎずの絶妙な距離から、シランは後を走っていたのだった。

長い上り階段の中腹まで来ただろうか？フェン達が頑張っているお陰か、棧橋周辺に敵の反応は出なかったのだが、シランのセンサーが突然空中に浮かぶ別の魔力反応を感知した。いや、正確には“知っている”魔力反応なのだが、問題はその魔力反応から、この世界特有のルーン詠唱時に生じる揺らぎを感知出来たのである。

戦術プログラムに従い、最優先保護対象であるルイズを守る為に、シランは前へ出ようとする。だがその時、サイトが何かを感じ取った様にフツと視線を上に向けたのだ。それこそ、その魔力反応がある場所。今まさに杖を振り降ろそうとしている仮面の男の方に。

「
ッ！！」

いや、正確には“サイト”に向けて魔法は放たれようとしていた。シランはルイズ防衛の為、彼女たちの後方へと回っていた為、今サイトがいる辺りにまで防御シールドを展開する事が出来ない。

しかし、仮面の男を見つけてからのサイトの行動は早かった。サイトは何故か、デルフを鞘から片手で引き抜いたかと思うと、その

ままデルフリンガーを地面に刺し 彼はなんとデルフを放置してその場から逃げたのである。

一体何でそうしたのは不明だが、恐らくは勘……。

フェンとの魔法回避訓練で培われた戦闘の勘が働いたのだろう。

そして、杖が振り下ろされ、杖から膨大な威力の電流がサイト達へと放たれたのである。

その瞬間雷にも似た音が鳴り響き、デルフリンガーを包み込んでしまう。普通の剣なら電圧で白熱化し溶け切ってしまう様な大電流その時に発生した閃光に、ワルドはルイズをかばう様にしてマントで隠したほど、強力な閃光が辺りを明るく照らした。

そして閃光が治まると、そこにはあの大電流を浴びたにも拘らず、無傷のまま鈍い金属光を発しているデルフリンガーが、階段に突き刺さったままになっていた。これには驚きの表情をするワルドだった。あの大電流を受けて何故あの剣は無傷なのだ……。

彼は知らない。

デルフリンガーには魔力吸収の性質があることを……

しかもそれはフェンによって覚醒され、ほぼ100%で稼働するのだ。それ故、一応は伝説となっている魔剣である。あの雷の魔法一発くらいは防ぎきれたのだった。

「ふへえ、ビックリしたぜ。だけどアレだったらデルフ手放さなくても大丈夫だったな」

『ひでえや相棒。俺を残して行くなんて』

「はっは、ごめんごめん」

そして何時の間にかデルフを握って構えているサイトが居た。この男、デルフを手放して、相手の放った魔法を見ていたらしい。コレもフェンから習ったのだろう。相手の事をよく見てから対処する。

頭に血がのぼりやすいサイトには難しかったのだが、条件反射の域にまで鍛えられたお陰で出来たと言う事だろう。サイトはデルフを構え直すと、そのまま仮面の男へと走り出した。

ただの走りとはちょっと違う、すごい走り・・・何と

「ぬオオオオッ!..!」

「か、壁を走ると!?」

まるで物理法則を無視しているかの様な・・・むしろ物理法則にケンカを売ったかのようなサイトの行動。それは一瞬にして仮面の・・・いやさ、その場の全員の思考が固まってしまっほどの衝撃だった。だが、実は壁を走ったのでは無く、勢いとバランスに任せて、デコボコとした壁を、走ったように見せかけただけだった。

なので徐々に壁走りは下降していき、最終的に階段へと至った。

だが、その時に一瞬だけ呆然とした事で発生した、仮面の男の隙は致命的だった。

「ちゃ〜んっす!」 「!!」

その一瞬の隙を見て、身体のをばねを最大限に生かして瞬時に跳躍した。なんとサイトは自身が一足で確実に跳躍できる位置にまで、先程の奇行で到達していたのである。ガンダールヴという肉体強化をフルに使い、およそ10mの距離を飛び越えて仮面の男に斬りかかったのだ。・・・鞘で。

ゴインッ!!

「グハッ!」

跳躍し空中で前転をするかのように、全体重＋何時の間にか納刀したデルフの重さ＋ガンダールヴの強化を乗せた鞘が、仮面の男から竹割りの如く脳天に直撃し、サイトは仮面の男を踏み台に更に跳躍、仮面の男が“私を踏み台にした！”とか電波言っているのを聞きつつ、階段の所に戻ったのだった。

「ふっ、峰打ちじゃ」

『あー、かつこつけてつとこ悪いが相棒。仮面の野郎落ちたぜ？』

「え！？あー、何でこんなことしたのか聞こうと思ったのに・・・逃げ足の速い」

しかし、サイトが放った攻撃と蹴った事により、仮面の男は暗い階段の下に、ヒューンと落下していつてしまった。この場合逃げ脚云々は関係ないんじゃないだろうか、その場に居た全員が心をそろえて思ったのだった。

S i d e o u t

S i d e F e n

「とまあ、そのような事がありましたわ」

「……なんて言うか、アイツ本当に人外に到達したな。うん、感無量じゃ」

シランからの報告を聞き、かなりの成長を遂げているサイト君に涙する。

「……ちょっとバカでおっちょこちよいで調子に乗るのが偶に傷だけだな。」

「キチンと教えを守ってましたわ。敵の思いもよらない行動で意表を突くなんて、ご主人さまのお教えしそうな事ですわ」

「俺と違い、アレは身体強化しか持たないからな。ただの戦い方じやすぐに死んでしまう。でも壁を走るとか……本当に柔軟な思考の持ち主だなサイトは……俺はそんなこと教えたつもりは無かったんだが……」

精々煙幕を使うとか、敵の眼前で閃光弾使うとか、詠唱中のメイジに音響弾投げるとかそんなのを教えておいたんだがな。まあその手の装備品は今回用意し忘れてたから、サイトが持って無い為致し方無いのだ。

「で、シランは現在どこに居るんだ？」

「ハイ、私は現在　空飛ぶフネの船底に張り付いていますわ。流石にこの身体だと、甲板の隅に居ても狭いですから」

「どうやらフネを無理やりに飛ばしたらしい。この世界のフネは“
風石”と呼ばれる自然界に存在するマジックストーン魔鉱石を利用して浮遊している。
商船故、積荷を満載している為、飛び立ってもアルビオンに到達
出来ない」と、船長は主張したが子爵殿がある程度浮かすからという
理由で飛び立たせたんだそう。

「ふむ、まあそこならアルビオンに到着するまではヒマだろうけど、
とにかくルイズ嬢の生命保護を最優先にな。序でにサイトも」

「ふふ、了解ですわ。あ、ソレと念の為仮面の男の画像を送ってお
きますわ。通信終わり」

「了解、健闘を祈る。こちらもすぐに後を追う。通信終わり」

俺はシランとの通信を切る。その瞬間

『（マスター、後ろです）』

「ほらよ」「バスン！」

「ぐぎゃー！」

【今の人で最後です。お疲れさまでした！】

俺に斬りかかろうとしていた最後の傭兵を、振り返ることなくジリーノで打ち倒したのだった。実は俺、戦闘中にマルチタスクでシランと通信していた訳だ。相手が相手だからな。油断するつもりは毛頭ないが・・・負ける理由が無い。

ココが完全なる敵地で、周りも敵しかいないノーマンズグラウンドだって言うなら、殲滅魔法の一つや二つでカタが付いたんだが、生憎ココは商業地帯でおまけに一般人も済んでいる土地だ。

幾ら敵が多くても、流石に町中で砲撃ぶつ放す訳にもいかないのだ。PKFいねえけど習慣ってヤツ？仕方なしに少数づつ倒すのは数が多くて面倒臭かったぜ。結構時間食っちゃまった。

死なれると死体が出るし、この町で伝染病でもはやったら何か夢見が悪いので、一応最低限しか死なせていない。死んでいるのは、大抵ガルヴァドスとかで攻撃した際に、建物の崩壊に巻き込まれた哀れな連中だけだ。

「さてと、生きてるかな？」

『（掃除するのが大変そうだから、全員非殺傷何でしょう？宿屋の方はともかく）』

「ああ・・・さてと、リン頼む」

【了解ですう】

俺は倒れ伏した傭兵の一人に手をかざすと、リンに指示を出した。

そして俺を中心に、ベルカ式魔法陣が展開される。リンが展開したのだ。

しばらくして、魔法陣の光が消えて、全てが終わった事が解った。

【……大体解りました。この人たちは、ラ・ロシエールに屯する傭兵達で、仮面をつけた男性に金で雇われただけみたいですよ】

何をしたのか？簡単なことである。傭兵の記憶を覗いただけだ。

闇の書で深層心理等にアクセスできるリンが居るからこそその芸当だな。

それはさて置き

「……仮面の男の特徴は？」

【視覚化したイメージをそちらにおくりまします】

そう言うと、リンからの視覚イメージが脳内に投影される。

先の傭兵から探り出した記憶だろう。金貨の入った袋を渡す場面だ。

ほうほう、成程成程　　そう言えば、あの仮面の男……。

「……そう言うことが、案外犯人は近くにいたのか」

正直、あまり信じたくは無かった。面倒臭いことになりそうだった。

たから。

だが、これではつきりしちまったぜ。シランがおくってきた画像と、リンのおくってきたイメージは完全に一致した。恐らくは同一人物。しかも

「まさか、あの人がねえ？」

『（魔力パターンで解析が出来てしまうというのも、面白みに欠けますね）』

「まったくだ。クソツたれめ。あちらさんが本性見せない限り、こっちから手を出せないじゃないか」

その人物は、つい数時間前まで一緒に居た人物、魔力パターンの一致からほぼ間違いはない。

任意に魔力パターンを変えられるなら別だろうが、普通そんな人間はいないからな。

はあ、とりあえずシランには警戒をするように指示してあるが……。

「急いで追いかけた方がよさそうだな」

とりあえず、キュルケさんやタバサやギーシュを探しにいかねえとまずいか。

放っておいたら文句言ってきたそうなのが……。
本音言うなら、連中をおいて行きたいところだが、多分放置して

おくとタバサの風竜で勝手に来ることだろう。だったら行動を共にしておくしかない。主に安全の為にな。

奴さんらが魔法を使えるとはいえ、戦争真っ最中の場所で逃げられる程では無いのだ。タバサは立ち振る舞いからして、戦闘技能に特化している様だが、恐らく対軍のような戦闘では無く、タイマン系・・・集団で戦わなければならない戦闘では不利だ。

そう考えると、戦争中で戦場を通らなけりゃならない今回の任務にあたり、不安が残る。

相変わらず苦労が増えそうだぜ。

.....

.....

.....

もうそろそろ夜が明けそうな頃、俺は倒壊した女神の杯亭に戻って来ていた。

「そろそろ精神力は回復しましたか？」

「あら、フェンくんお帰り、こっちはもう平気だけど、敵は？」

「あらかた始末しました。殺すとあとが面倒なので気絶させたのが殆どですけど」

元、宿だった所に3人ともいた。
俺が派手な音を立てまくってたから、あまりこちらには来なかった様だ。

すっかり精神力も回復しているようである。

「どうするの。ルイズ追う？」

「ふむ、しかしミス・タバサ。我々は既に大分遅れている。今から追いかけても、追い付けるかどうか」

「タバサのシルフィードに乗せてもらうとかはどう？」

「（フルフル）それでも一日は掛る。それでも良いなら・・・」

「あー、実を言うと一瞬で行けるんですが？」

俺の言葉に、啞然とするキュルケさんとタバサ。ギーシュは“まあ、フェンだしね”という目をしていたので、わき腹にフックを叩きこんでおいた。なんとなくイラッてしたからだ。他意は無い。

「うぐぐ、何故に僕だけこの扱い？」

「・・・イラッて来たから」

「あ、ありのままに起こった事を話すよ？気が付けば僕だけ理不尽

な扱いを受けていた。イジメなんてチャチなもんじゃ断じてオゲウ
っ！」

「はい、ギーシュ煩いから黙っててね。ところで一瞬で行けるって
本当なの？」

ギーシュにうっさいというブロー気味の突っ込みを入れたキュル
ケさんに、ギーシュはシヨックをうけて膝を抱えてしくしく泣いて
いる。そんなギーシュの肩をタバサがドンマイと叩いていた。

もつともそれに感動したのかタバサに抱擁しようとして、またキ
ュルケさんに殴られているが・・・懲りない男だ。

「まあギーシュさんは放置と言う事にして、本題に行きましょう。
確かに一瞬で行けます。自分の魔法はそう言ったのもありますから
ね。本来は座標を調べないといけないんですが、ちょうど良いこと
にそれが出来る“仲間”がサイトさん達に付いて行ってますから」

「えーと、要するにルイズ達のところに行く行けると？・・・本
当にっ？」

「そちらの準備が終わっているならすぐにも」

とりあえず、地面とキスを交わしているバカー1名を起し、シルフ
イードの背に乗ってもらった。後は俺がシルンのビーコンを頼りに、
転送魔法を使っただけだ。おおよその見当が付いているから、楽なモ
ンで有る。

「はい、忘れ物はありませんね？」

「……ない（ぞ）（わー）」「……きゅいきゅい！」

「それじゃ（リン、サポ頼む）」

【了解ですう。トランスポーター、起動するですう】

転送魔法トランスポーター、術者と範囲内の対象を、一定の範囲内へ転送する事が出来る。その距離は術者に左右され、人によっては数百キロ単位の超長距離転移も可能である。俺の場合はリンがサポしてくれる上、バカみたいにデカイ魔力がある為、その転送距離は大分長いのだ。

もつとも、一人でやるとたったの3km程度しか転送できないけど……しかも自分だけだし。

「トランスポーター、起動」

【シランからのビーコンを受信、座標を特定中……特定完了。術式展開】

それはさて置き、準備完了したので、術式を展開する。

俺を中心にして転送術式が展開、魔法陣のラインに沿って白い魔力光と共に魔力が充填し、空間を跳躍する準備を進める。その範囲

にはシルフィードに乗ったタバサ達も一緒だ。

この世界での魔法行使では、魔法陣は事前に準備しないと発生しない為、展開された術式に驚きつつも、かなり珍しいモノを見る目をしているキュルケさんとタバサ、ギーシュは見慣れているので、あんまり驚かない。

あ、そうそう

「タバサ、シルフィードにすぐ飛べるように指示しておいてくれ、多分転送先は空中だから」

「・・・解った」

「え、空中ってどういうことなの?」

「・・・行ってみれば解ります。マスター達の現在位置が空中だつて事ですよ」

「そうか、フネに乗っているんだから、空中に居る訳だね」

「あー、成程。確かに空中だわ。タバサ、頼んだわよ」

「任せて」

この場合任せるのはシルフィードの方だと思ったのは気のせいだろうか。

まあそれは兎も角として、俺は術式を維持し続け、リンのサポートにより人間4人と竜一匹を、シラン達の居る座標へと転送したのであった。

ちなみに転送直前に

「ご主人さま！フネが空賊に」

シランから何か通信が届いていたのだが、応える暇も無く転送されてしまったのだった。

.....

.....

.....

「いやー、転送したけどニアミスでしたな」

「「「危づく落ちるところだった！」「」」

「「「ごめんちゃい」

さて、無事に転送を終えたのは良かったのだが、何と転送されたのがモロフネの甲板でございました。しかもなんかフネが別のフネ

に接舷されて、どうにも空賊的な人達とフネの乗員達との間に降り立ってしまったらしい。・・・何かを押しつぶしている様な感じがするのは気の所為か？

「フェ、フェン！？それとギーシュ達まで来たのか！？どうやって？！」

「あんだ達どうやって！？」

「あ、どうもマスター、それとサイトと　　子爵殿」

「や、やあ」

どうやら空賊とバトルしていた最中だったらしい。サイト達の周りには何人かの人間が倒れ伏していた。大方空賊が来たからフネを守るうと・・・いや、ルイズ嬢を守るうとしたってとこかな？所で何で足元がブニブニしてるんだ？

「あー、フェンよ？」

なんすか？

「いい加減どいてあげたらどうだ？つーか足元みる」

足元？　　あれま。

そこには、なんか海賊船長的な服装の男が、俺に足蹴にされていた。どうやら降り立ったときに踏みつぶしてしまったようである。やれやれだぜ。

しかし、転送される座標的には、フネの少し離れた所に出る様にしておいたんだが・・・フネが動いてた所為か？

いい加減ふみつけているのがかわいそうなので、降りてやることにした。のだが。

ずるり

「ッ！？な、なんじゃこりゃー」

「棒読みな驚きありがとうフェン。つーかズラか？」

「お約束ですから、と言いますか・・・カツラですか？」

どうやら空賊船長はズラだったらしい。だが、それよりも

「???? 若いのに、カツラ？」

「黒髪からブロンドの髪か？」

「一体、何がどうなってるのよ・・・もう」

あまりの混乱に、ルイズ嬢の眩きだけが、この場に響いたのだった。

「なんて間が悪い」

「なんて間が悪い」

妄想戦記

ここはニューカッスル城、アルビオンにある王党派の本陣で有り、最後の砦である。

周囲は既に5万近い敵に囲まれており、翌日には全面攻撃が開始される予定。

そんなところで、俺達は

「やあやあ、楽しんでますかな？」

「ええ、それなりに」

「それは結構！今夜は無礼講ですから、大いに楽しみましょう！」

「そうですね」

死を覚悟している人間達の最後の宴に招待されたのだった。

あ後はトントン拍子だった。

俺が踏んづけしまっていたのは、何とまあ今回あわねばならない
王党派の王族。

ウェールズ・テューダー皇太子殿下その人だったのだ。

ある意味慌てたね。なにせ踏んづけてるのが、滅びゆくとはいえ
その国のVIPだったんだぜ？

皇太子殿下が懐の広い人物で助かったぜ。

ちなみに、何故皇太子だと判明したかと言うと・・・まあ色々
あってルイズ嬢が見せた水のルビーと呼ばれる指輪と、ウェールズ
皇太子の持っていた指輪が反応し、小さな虹がかかったからだ。ど
うやら姫さんから渡されていたあの指輪、身分を証明するには確か
にうってつけだったらしい。

お陰で俺達は大使というか、大切な客分として扱われる事となっ
たのだ。

そしてそのままウェールズ達のフネであるイーグル号とルイズ嬢
達が乗ってきたフネごと、ニューカッセル城地下の洞くつを利用し
た秘密ドックに連れて行かれたのだ。

なんでも、あの商船を避難民のための脱出艇として使うつもりだ
っらしい。

序でに火の秘薬として使われる硫黄が、積み荷として満載されて

いたのは誤算だったらしく、その事を知った彼らは非常に喜んで
いた。この世界における火の魔法は、戦争においては高火力の大砲に
匹敵する戦力である。

その火力を更に増強させる事が出来る硫黄は、もはや300人し
か戦える者がいない王党派の人間にとっては、最後に敵に一泡吹か
せたい彼らにとっては、黄金よりも価値があるモノだった。

そして俺達は最後の晩さん会に招かれ、冒頭に戻ると言う訳であ
る。

「……………」

『……………空気が、ですね』

【勝ち目が無い負け戦、その事を彼らは知っているんですね……………】

俺はヴィズをすぐに起動出来る状態で待機モードにしつつ、リン
とはユニゾンしたままで、パーティーに参加していた。正確には壁
の花と言うか、ベランダから眺めているだけだったかな。

旨そうな料理が出てはいるが、流石にこんな中で騒ぎたいと思え
る人間じゃない……………。

……………人間は時として、不可解ですわ。何故絶望が近いのに、
ああやって笑っていられるのでしょうか？AIの私には……………理解
不能です……………

……………絶望が近いからさ。それぞれの絶望は違うが、もう勝て

ない事は皆知っている。なら、最後は笑って逝きたい。悔いが残らないように、一人でも多くの敵を道連れに果てたいと願う。

「……とても、悲しい考えですわ」

「そう、諦めた人間が最期の足掻きとして行う……実に愚かな考えさ」

俺はミラージュハイドでルイズ嬢の上の天井に隠れているシランからの問いにそう答えつつ、持っていたワインを少し口に含んだ。普段よりも苦い……。

「……だが、その覚悟を笑う事はしてはいけない。彼らは次代を担うモノ達を逃す為に、いけにえになることを望んだ。その覚悟を貶すことはしてはいけない。戦うと決めた人間を、その覚悟をあざ笑う様な事は……安易に口にしてはいけない。そんなことを言う権利は、部外者である俺達にはないんだから……」

「死して屍拾うもの無し……ご主人さまとは真逆の考えですわね」

「ああ、俺は最後まで絶対に生き残る為に足掻く、負け戦だろうが関係ない。例え捕虜になろうとも生きてさえいればそれが勝利……死ぬるときゃ、ベッドの上で死にたいからな」

もつとも俺は死にくいだらうなと苦笑しつつ、シランとの回線を切った。

何故なら、お客さんが来たからだ。

「・・・何か御用ですか、ウェールズ皇太子。マスターの従者でしか無いこの自分に」

「ウェールズでいい、今宵は無礼講。様々な人達と話しておきたいのさ」

この国の皇太子、俺達が来た原因の一人。
ウェールズ・テューダーその人が、俺がいたベランダの方に来たのだから。

.....

.....

.....

「となり、いいかな？」

「ここは貴方の城、自分にそれを止める権利は有りませんな」

グラスを片手にそう言ってきた皇太子に対し、俺は無難な回答をする。

すると、彼は苦笑しているかのように、クツクと笑を堪えていた。

「ふふ、ミス・ルイズの言っていた通り、見た目よりもずっと堅物っぽいね。君は」

「褒め言葉として受け取っておきます。で、ウェールズさまは何の為に自分の所へ？ただ来たって訳では無いのでしょうか？」

「・・・君は戦争に出たことがあるのかい？異国のメイジくん」

唐突な質問、俺の身体が少しばかりピクンとなるが、すぐに戻った。

「どうやら、俺の事をルイズ嬢は彼に喋っていたらしい。」

まあこんなガキが戦場に行っていたとかなんて珍しいだろうよ。信じたかどうかは別として、話しの話題にするにはいい。」

「ええ、兵士でしたからね。戦場には幾度となく参加してますよ」

「そうか、それなら今回の戦いをどう見る？」

「どう見る・・・とは？」

「勝てるか否か、かな」

「これまた、随分と弱気な事で・・・。」

「……何が勝ちなのかによりますね。戦略的には既に終わっています。現状の残存兵力では討つて出ることはおろか、守る事もできません。ですが、避難民を全員逃すのが勝利なら、困くらいにはなるんじゃないでしょうか？彼らが獅子奮迅して目立ち、避難民たちをフネで逃がせれば、ソレで勝利となることでしょう。少なくとも、王党派の心を持つ人間を残せるのだから」

「……君はミス・ルイズの従者なのに、かなり現実的なのだね」

「軍人に求められたのは、徹底した現実主義リアリズムですからね。そこに個人の思惑や感情は、あまり入れるべきでは無い」と、自分は思います。若輩の考えですから、聞き逃してくれても結構です」

「いや、実にもっともらしい考え方だ。どうやら本当に軍人だったんだね」

「……そう言う時代でしたから」

「そうか……いやさ、君の主人に言われたよ。愛する人がいるのに、何故生き延びようとしないのですかとね。王党派の一員である私が1人生き延びても意味が無いと言うのに」

彼はグラスから酒を飲む、どうでも良いが、何故俺にその話をしてくれるのだろうか？

俺に言われたところでどうにもならんのだが？俺に戦争に参加する義務も何も無い。

その事に気が付いたのだろう。彼は俺の方を振り向いて見て、これまた苦笑した。

「すまない。愚痴となってしまった」

「・・・良いですよ。決戦を前にしたら、人間そんなものですからね」

「くく、本当に君は見た目とは程遠いのだね。ある意味面白いよ。気にいった」

「気にいられたとは光栄ですな」

少し酔って無いか？この人。この後も適当に二三言話し、彼は俺から離れていった。

色々な人間と話したい。そうする事で自分がいたという記憶を残しておきたいのかもな。無意識でやっている行動だろうが、生存本能はキチンと残っているって事だろうよ。 哀れな。

『（あの人・・・亡国の皇子にでもなれたら、良かったのに・・・）

「（俺達は関与してはいけない。俺達はあくまで部外者なのだから）

俺達の優先事項は、雇い主ルイズ嬢の護衛。それ以外をする事は出来ない。

他の事にかまけて、護衛対象を失う事だけは、決してしてはなら

ないのだから。

だが

「出来る事なら、避難民の護衛くらいできるだろう。」

『（マスター……）』

【主殿……】

死を覚悟した奴らに、何を言ってもはや止まらない。

ならせめて安心して逝けるように、避難民くらいの護衛程度はしてやるぞ。

……化けて出られても困るからな。俺視えるし……。

Side 三人称

翌日、イーグル号と拿捕した商船には、ニューカッセルから避難する女子供、老人らが列をなしていた。既に敵の進軍が始まっており、時間的猶予はほぼ無い。

何時も訓練で早めに起きているサイトとギーシュとフェンといった男衆は、避難するフネの出港準備に力を尽くしていた。ルイズやキュルケといった女性陣も、それぞれ避難する人達を誘導している。

そんな折、ルイズは突然ワールドと呼ばれて、フェン達に告げるこ

となく何故か城の中に連れて行かれた。すぐに非難を始めないと大變なのにと、ルイズは思いつつもワールドに従って行ってしまう。

連れて行かれたのはニューカッセル内の礼拝堂、そこには礼服を着たウェールズがいた。

そして、唐突にワールドに結婚式を挙げる事を聞かされ、頭に新婦が付ける冠をかぶせられてしまった。あれよあれよと言う間に、マントも外されて服の上から簡素な花嫁衣装にされてしまう。

ルイズは一体何をしているのかいまいち理解できない内に、花嫁の姿にされてしまっていた。

「では式を始める。新郎、子爵ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド。汝は始祖ブリミルの名において、この者を敬い、愛し、そして妻とする事を誓いますか？」

「誓います」

ココに来てようやく頭が再起動したルイズは、今度はワールドを夫としますかと聞こうとしているこの状況に頭を抱えつつも

「誓えません」

そうはつきりと言いつつ放っていた。彼女はワールドが嫌いと言いつつ訳では無い。

しかし、流石に今は姫様からの任務の最中。そんな中で結婚式なんて出来る訳もない。

今まではつい流されてしまったが、そこだけは譲らないと断固として拒否をした。

それに、幾らなんでも落ちる城で結婚式とか・・・それは無いだろう。

ルイズも一端の女の子である。結婚式なら流石にもう少しいい雰囲気でもやりたいのだ。

だから彼女はワルドを諭すように語りかける。

「ワルド様、残念ですが今はまだ任務の途中です。それにまだ私は結婚は」

「世界だ！僕は世界を手に入れる！その為には君が必要なんだ！ルイズ！」

「ワルド・・・様？」

しかしワルドは何かに焦っているかのように、声を荒げていた。そしてルイズに向き直り肩を掴んで力を込めて叫んでいる。

「僕には君が必要なんだ！君の力が！能力が！解るだろう！？」

「い、痛いです！ちよっ！放して！」

乱暴に肩を掴まれるルイズ。突然ワルドが豹変してしまった事に驚きを隠せない。

流石に見ていらなかったのか、ウェールズが杖を向けて落ち着くようにワルドを諭した。
だが

「君なら解ってくれればいい、色々君の心を掴む為に尽力してきたが・・・こうなったら仕方が無いな。目的の一つは諦めよう」

「も、目的？」

いきなり沈んだかと思えば、唐突にこんなことを言い始めるワルドに、何か変なモノでも食べたのではないかと一瞬心配になったルイズ。そんなことを考えている間にも、ワルドの言葉は続く。

「そう3つほど目的があった。一つは君、ルイズだ。君が僕と結婚し、僕と共に来てくれればよかったんだが・・・それは果たせなかった。二つは君の持つ姫様の手紙、その“手紙”があれば我々には好都合だった」

手紙があつて好都合、そして我々。現状を鑑みて、ソレらが導き出す答えは一つ

「まさか、ワルド貴方!？」

「レコン・キスタか!」

「そうだ。聖地を奪還するという目標を抱えた我等レコン・キスタに、ルイズが来てくれれば、必ずや聖地が奪還出来たと言うのに・
・非常に残念だ。さて、最後の3つめだが」

ワルドはそう言うと杖を引き抜いた。それを見てウェールズがルイズを庇うかのように前に出る。しかし、ソレはココではやってはいけない判断であった。何故なら

「3つめの目的、それは貴様だウェールズ!!」

彼の目的の一つに、ウェールズの暗殺というの也被まれているのだから。

そして、ワルドは『閃光』と言う二つ名に恥じない速さで詠唱を終え、エア・ニードルを杖に纏わせた。それをウェールズへと突進しつつ突き出したのである。

「だ、だめえええ!!」

もう訳が解らなくて涙目のルイズがウェールズのをかばう為、前に飛び出そうとするがもう遅い、既にウェールズはワルドの射程圏内に居る。ウェールズ本人の魔法も間に合わないだろう。そのままだったら、胸を杖が突き抜け、彼の胸に大きな血の花が咲くのが運命であった。

だが

ガーンッ！

『いけませんわ。神聖なる礼拝堂で殺人とおかそうとなさるなんて』

「グッ！やはりいたのかね！また邪魔されるのか！！」

何かに弾かれる様な音が、礼拝堂の中に響き渡る。

見ればワルドの突きだした杖が、無色に光る六角形の盾の様な物で防御されていたからだ。

そしてウェールズの背後から、まるで空間にしみ出すかのように現れるモノがいた。

『ご主人さまに連絡を入れてあります。すぐに来るのでそれまでに逃げた方がよろしいかと　それと、私もちよつと鷄冠トサカに来てますから』

それこそ、フェンが作りだした自律型戦闘支援ユニット、別名思考戦車のシランだった。

シランはガチャリと音を立てて、両腕をワルドへと向ける。

その腕の中には、強力な魔力式機関砲の銃身が鈍い光を放っていたのだった。

Side out

S i d e F e n

翌日になって、俺達は避難船となった商船に乗りこむ人達を誘導する仕事を、自主的に手伝っていた。このフネにのって俺達も帰る訳だから、ソレ位の手伝いはしておこうと思ったのである。だが、こんな時に限って、ワルドがルイズと結婚式を上げると言い出したのだ。

監視のシランから突然ワルドがルイズ嬢を連れて、教会へと向かったと聞かされて、俺はギーシュ達にはフネのほうを頼み、サイトと共に礼拝堂へと向かっている訳である。

まったく、ルイズ嬢も何考えてんだか……。

「クソっ！礼拝堂へのルートはどっちだ！」

「落ちつけ、だが脚は動かせ」

「チッ！解ってるよ！」

小さめの城と言うモノの、勝手なんぞ知らんから、正直迷いそうだ。

シランからのビーコンは解るので、行こうと思えば一直線で行ける。

でもサイトに止められた。砲撃魔法で壁抜きはしてはいけならしい。

まあ考えてみたら、壁抜きして城が倒壊したら意味無いしな。うん。

『警告！魔力パターン探知！柱の陰です！』

「待ち伏せか・・・だが、柱に隠れた程度じゃな。ヴィズ！」

『ジリーノ、スラッグモード！』

そして、礼拝堂へと向かっていると、敵正反応を感知した。

俺は遮蔽物に身を隠し、有無を言わず発砲、相手を撃ち殺した。柱の陰から、以前ラ・ロシエールで俺達に攻撃を仕掛けて来た仮面の男が、柱ごと貫通した魔力弾によって胸に大穴をあけて、ズルリと倒れ伏した。

待ち伏せとは、全く持ってアホらしい。

だが、敵さんはどうしても俺達を足止めしたかったんだろう。

礼拝堂へのルートにわざわざ“駒”を配置しておくくらいなんだからな。

「・・・殺したのか？」

「よく見る、ありゃ偽モンだ」

撃ち抜かれたソレは瞬時に消えてしまった。どうやら敵さんは分身の術的な魔法が付かるようだ。

しかし、これでワルド子爵が敵だと言う事がはっきりしたな。

まったく、まさかここで仕掛けるとか、マジでバカじゃねえの？
帰りにきつと罠でも張ってるんだろうと思ってたから、完全に予想を裏切られたよ。

だけど、一応シランからの報告だと、今の所殺すつもりは無いらしい。

油断は出来んが

「ッ！」

どうもそうも言っていられなくなっただぜ。

「どうした？」

「スピード上げますよ。厄介なことに、子爵が本性を見せました」

「お、おう！」

いまシランの中継で、皇太子が襲われた。ルイズ嬢が土壇場になってワルドからの結婚を破棄すると言いだし、それに激昂したワルドが、ルイズ嬢を乱暴に扱った為、その事を注意した皇太子に腹を立てたって感じか。そのままワルド子爵は魔法でウェールズを貫こ

うとした。

幸い近くに潜んでいたシランが、ルイズ嬢を守る序でに防御障壁をしたから皇太子は無事だ。

リアルタイムで送られてくる映像で、子爵の野郎分身の術使いやがった。

何人が増えてんですかい。5子ちゃんかいこんちくしょー！。

.....

.....

.....

「ココか！」

「ちよいまち！ バズンバズン バンッ！！ オシ」

教会の扉についた蝶番を、ジリーノで撃ち抜いて中に突入した。

「ルイズ！無事か！」

「マスター！」

どうやらシランが頑張ってくれたようで、敵さんの攻撃をシール

ドで防御しつつ、持ちこたえてくれたようだ。ルイズ嬢の姿が見えないと言う事は、おそらく搭乗ポッドに保護したな？

「……まったく君たちはなんなのかね？」 「本当に邪魔ばかりしてくれる」

「で、出来ればそっちに喋ってないで、こっちを手伝えワルド僕たち！」

『隠れていても撃ちますわ』 ガシャコン

……そしてシランつえー、俺が来なくても制圧出来たんじゃないか？

ワルド達はどうかやったか知らないが礼拝堂のベンチを積み上げて、恐らく錬金を掛けた上で固定化を施して、巨大な障害物を形成し、シランの弾幕から身を守っている状態だった。

口径7、62mmとはいえ、毎分520 - 550発くらいの弾幕なのだ。

普通に当たったら消し飛ぶじゃ済まないだろう。

それこそ“血煙”となってそこら辺の大气と混ざってしまう。

つまり下手したらサイト達はワルド入り空気を吸っていた羽目になっただかもしれない。

俺はBA？を展開中だし、ルイズ嬢は搭乗ポッドの中に居て密閉されているから良いが、もしそうなら、外に居るウェールズとサイトが気の毒になってしまうぜ。

ちなみに今居るのは4人、直前の映像で5人いた筈だから、一人

シランの餌食になっている。

「もうすぐ数万の軍勢がこの城を落す。だが君達が死んでしまうのは惜しい」

「僕がレコン・キスタに取りなしてあげるから、いつしよに来ないかい？」

「そうすれば君達にそれ相応の地位を与えよう。君達程の力なら貴族にだってなれる」

なんかワルドsが喋っているが、俺らはそれを無視してシランの方に近づいた。

俺らの目的はルイズ嬢の確保、それ以外は今は聞く意味が無い。

シランに近づいた俺達は、シランに搭乗ポッドのハッチを解放するように指示を出した。

ガシュ

「ルイズー、生きてっか？」

「マスター、ご無事ですか？」

ポッドの中には、少しうずくまる形で膝を抱えていたルイズ嬢がいた。

多分子爵の事がショックだったんだろう。アレでも旧知の仲らしいからな。

一応の婚約者だったらしいし、子爵もバカだねえ。功を焦り過ぎ

む。

「サイト、それにフェンも……ごめんなさい」

「……何謝ってんだお前？」

「だけど、私は何も知らなくて、まさかワルド様が」

「言いたいこと、吐きだしたい言葉があるのは解っています。

ですが今は後にしましょう。それよりも」

俺はまだご丁寧に、レコン・キスタという組織の素晴らしさを語る男の方を向いた。

「任務の障害を排除せねばなりません。交戦の許可を」

これでも最大限の譲歩だ。一応ワルドは彼女の思い人だった人間。問答無用で撃ち殺す事も出来たが、流石に目の前でそれをやっつては夢見が悪かろう。

「交戦、殺すの？」

「マスターのご随意次第です」

「殺さないにしても、少しばかり扱いは酷くなるぜ？俺も怒ってる

「からな」

ルイズ嬢は少し考えて、何かを決意したかのように此方を向いた。

「……いいわ、やりなさい。」

「本当によろしいんですね？」

「……ええ、姫様からの任務がもつとも優先すべき事。その障害となるモノは」

ルイズ嬢はバカでは無い、むしろ聡明な部類だ。

今ココでしなければならぬ事をよく理解している。だが、それでも一般人の学生でしか無い彼女にとって、この選択がどれほどの苦渋で有った事か……想像に難くない。

むしろ、聡明な分苦しいだろう。その顔は苦しそくに歪んでいるのだ。

「排除なさい。コレはご主人様からの命令よ」

「……御意、サイト、交戦許可が降りた！」

「あいよ！」

それなりに訓練を共にしている師弟関係の様な間柄だからこそ、

この言葉だけで十分。

サイトはデルフを抜いて、一息に飛びかかり、一番近くに居たワルドを倒した。

「 な！？我等レコン・キスタに逆らうと言つのか！？愚かな！」

「レコンキスタだかレンコンキッタだか知んねえが、ウチのご主人泣かせた落し前は着けさせて貰うぜ！」

そう、ルイズ嬢はすこし泣いていた。俺は子爵が裏切りものであった事を知ってはいたが、それを知らせてはいない。シヨックが大きいと思つたからだ。今までのルイズ嬢の態度を見れば、子爵はちゃんと慕われていたことくらい解るさ。

もしもあの場で危害を加えず、トリスタニアに戻ってから結婚して、そのままレコン・キスタに行くと言つのであれば、俺達も着いて行つた事だろう。あの国に忠誠を誓っている訳でもないしな。少なくとも俺の雇い主はルイズ嬢だったし。

「そう言つ事だ。申し訳ないが」「ダウンっ！」

「グギャツ！」

「任務の障害は実力を持って排除する」

俺もジリーノで一人撃ち殺す。倒したのは分身だったらしく、煙

の様にかすんで消えた。

ふむ、やはり室内戦ではショットガンの方が取り回しが良いぜ。
ワルドは自身の分身が瞬時に2体も消されて、動揺の色が見て取れた。

「くっ！　なら」

「ルーンを詠唱させるとでも？・・・サイト」

「デエヤツ！」

サイトがルーンを詠唱しようとしたヤツに斬りかかり、ソレもまた煙の様に消える。

そして最後の一人が残された。だが奴はニヤリと笑って、杖をこちらに向けている。

「私を止めなかったのは失敗だ　　ライトニング・クラウド！」

バリバリバリバリバリ　　ッ！！！！！！！！

そして凄まじい電量が、俺達に向けて放たれる。正確には俺の後ろに居るウェールズやルイズ達に目がけてだが、射線上に俺が立っているから間違いでは無い。

もっとも、その攻撃は全く持って“ブービー”だ。

「な！？なんだと！？き、きさまは一体！？」

「中々の電圧だったけど、威力はプレシアさんの方が上だったな」

俺は魔法を避けない。むしろ受けた。そしてレアスキルですべてを吸収した。

威力的にはフェイトのサンダースマツシャークラスだったが、俺はアレを吸収した事がある。

今は成長したからいけるかなと思っただら本当に出来たぜ・・・。
実を言うと、少し腕が焦げて痺れたけど、リジエネレーションするから大丈夫。

だが、このパフォーマンスでワルドには決定的な隙が発生する。
そりゃそうだろう。この世界の魔法において、今の魔法は確実に必殺技クラス。

それを吸収とかされたら、啞然としてしまっても仕方が無いさ。

「ば、バケモノか！」

「バケモノで結構。その化け物がお前さんを殺すんだから」

俺は手に持った大剣オートクレールを上段に構えて、子爵へと振り降ろそうとした。

だがその瞬間、礼拝堂を揺らす程の衝撃と共に屋根が割れて空が見えた。

正確には外からの砲弾だろうか？恐らく敵側が放った弾が礼拝堂を貫き、有るうことが

ゴイン！

「グペッ！」

俺に直撃した。その所為で剣の軌道がずれて、ヤツの腕しか切れなかった。

「フエ、フェン！？」

「大丈夫か？！」

『ご主人さま！？』

「……な、なんとか」

しかし何とまあタイミングが悪い。ワルドは天に愛されてでもいるのか？

見れば今ので隙をついて、天井に出来た穴から逃げだしてるし……
・クソ。

非常に締まらないが、ルイズ嬢防衛は達成出来たから勝利っちゃ勝利。

……ただどなんか認めたくねえなオイ。 と俺は思った。

「人死になんて珍しくも無い・・・悲しいことにな」

「人死になんて珍しくも無い・・・悲しいことにな」

妄想戦記

アルビオンから脱出し、半日かけてラ・ロシエールに到着した俺達は、その足でタバサのシルフィードに乗って、王都トリスタニアの王城へと向かった。任務が終了したので、その事の報告に赴く為である。

飛行禁止令が出ていたなんて、アルビオンに行っていた我らが知る由もなく、マンティコア隊と呼ばれる幻獣に騎乗した騎士たちとの間に、すったもんだがあったが、騒ぎを聞きつけた姫さんのお陰で、割とすぐに城に入ることが出来たのだった。

そこで、俺とサイトはルイズ嬢と共に、姫様の元で説明を行う事となる。

説明した後、現在姫様はメツチャ泣いている・・・なんて言うか、俺が原因と言うか・・・ヴィズの録画機能を使って、ウエールズ皇太子の遺言みたいなのを録画して来ちまったのが悪かった。

『 勇敢に戦い、勇敢に死んでいった。それだけを伝えたかった』

んで、今は亡き皇子を、空間モニターにデジタルハイビジョン立
体高画質のドルビーサラウンドな感じで投影した所為で、泣きなが
ら手紙を握りしめる姫さんがいた。

フネが出港する直前だったから、ホンの数分程度の短い映像。だ
けど、皇太子の決意がありありと感じられる、そんな遺言映像だっ
た。やっちまったぜ。

「・・・ウエルズさまは、やはり父王に殉じたのですね。あの方
は私の手紙を、お読みになられなかったのかしら？」

「いえ、じっくりと目をお通しになられていました」

「ならば、やはり ウエルズさまはわたくしを愛してはいなか
ったんだわ」

ウエルズの最後の言葉を見て、手紙を読んだのかとルイズ嬢に
問う姫さん。

そしてルイズ嬢の応えに、ああ、と嘆くような仕草をとる。

この言い回しだと、大方トリスティンに亡命するように勧めてい
たんだらうな。

「ええ、死んで欲しくなかったの。愛してましたのよ。わたし」

そしてまたうなだれる姫さん。

黙って聞いている方から見た感じとしては、何つーかまあ、私悲劇のヒロインってな感じだ。

そりゃね。こっちだって助けられるなら助けたかったですよ？

だけど可哀そうな事に、もし皇子さんがトリストインに亡命なんてしていたら、向うの反乱軍にこちらを攻める大義名分を与える事となる。

秘密裏に亡命したとしても、ワルドみたいな大物がスパイをしていたトリストインだ。他にどんな大物がスパイをしているかなんて解かりやしない。そんな“防諜ちゃんとできてんのかコラア”と突っ込みたくなるような国に、戦争の種火になりそうなVIP呼べるかって話だ。

姫様の思惑はともかく、皇太子の亡命が実現しても、この国の暗部による暗殺が関の山だろうさ。

顔をつぶされた無縁仏、川から上がるって感じでな・・・ソレはさて置き。

「勇敢にたたかい、勇敢に死んでいく、殿方の特権ですわね」

「(はて？何でだろう？耳が痛いぞ?)」

『(マスターの場合、既に何度も体現してるからじゃないですか?)』

□

それもそうか……って、ソレは色んな意味で不味いんじゃないか？

俺はそんなこと……してたあ。やりまくってるうゝ。

何故だ？俺は死にたくないって思って行動してたはずだ？これも母上の洗脳効果なのか？

『（母上殿はともかく、生来の気質何じゃないですか？）』

【そ、そんな主殿も素敵だと思っですう！あう】

……ありがとリン、だけどそんな気質はちょっと欲しくないかな。

さて、思考がソレている間も話しは続いている。

「残された女は、どうすればいいのでしょうか」

「申し訳ありません。姫様」

「いいのよルイズ。貴女はお役目通り、手紙を取り戻してきたのです。」

「貴女が気にする必要は無いのよ」

姫さんは大理石のテーブルに肘をついて、寂しそうに窓の外を見

やる。

ま、言われて無いんだから、こっちにしてもどうしようもない。

あそこでルイズ嬢が下手に干渉しようとしなくてくれてマジで助かった。

政治にや詳しくは無いが、あそこで干渉したら、絶対政治的問題が起こっている。

もしもこの国の戦争の引き金になったら、この世界の歴史で汚名を着けられるとこだった。

そう言った意味じゃ、ウェールズ皇太子を見捨てたのは、正しい判断だ。

例えソレが、一人の少女の心を苦しめる事となってもな。

はあ、冷静に考え過ぎだぞ俺。もっと熱くなれ・・・いやそれはソレで困るか。

俺はあくまでルイズ嬢に仕えている従者の扱い、それ以上の事をしたら厄介事が増える事間違いない、ここは適当に合わせて置くのが吉とでた。

さて、部屋にはしばらく重たい空気が漂っていた。

いつもはそれ程空気読まないサイトも、この時は自重していたよ。うだ。

んで、すこしして姫さんがようやく顔を上げてこちらを見た。

「わたくしの婚姻を妨げようとする暗躍は未然に防がれたのです。わが国はゲルマニアと無事同盟を結ぶことができるでしょう。そうすれば、簡単にアルビオンも攻めてくるわけにはいきません。危機は去ったのですよ、ルイズ・フランソワーズ」

姫さんみたいな青春真っ盛りの若い娘に、政治の事を理解しろとか言うのは、酷に思えるかもしれない。だが、望もうが望むまいが貴女はこの国の王族である。国家のトップに君臨している以上、その責任は非常に重い。

彼女が食べているモノは誰から手に入れた？

彼女が来ている服は？

彼女が普段住んでいる城は誰が建てた？

つまりはそう言う事。

豪華絢爛で優雅な生活も、全ては国を背負うモノとしての責務があるからこそ、許される生活。それを少しは理解していたのだろう。初に出会った頃に比べたら、随分とマシな表情で、別れの言葉を告げる彼女を見て、俺達はやるせない気分の中、王城を後にしたのだった。

俺がもし、大々的に介入したら、もしかしたらウェールズ皇太子がこの場にいたかもしれない。だがソレはあくまでもIFの話であり、既にウェールズ皇太子は死亡しているのは確かだろう。

遠目だったが、フネが出港してしばらくして、ニューカッセルが吹き飛んだのが見えた。

ヴィズの望遠機能で見えたくらいだから、他の連中は知らないだろうけどな。

“もしも” “だったら” はIFの話。

仮にそれが為されたとしても、その後待つのはこの国の崩壊。

一人の命と何千人と居る人間の命、天秤にかけると言われれば

俺にやまだ、国家転覆の悪名を帯びる覚悟なんて無いね。

さて、久々に学院に戻って来て三日程経ち、俺達は何時もの日常へと戻った。

俺は相変わらず洗濯や雑務をサイトとこなしつつ、サイト&ギークの訓練を行うという日々・・・なんかこれが日常として定着してるのが恐ろしい。

「へえ、近頃見かけなかったと思ったら」

「フェン君も色々巻き込まれて大変だったのねー」

「シアさんとキノさんはお変わりなく」

「そりゃね。たったの数日で変わらないさ」

そして久々のメイドさんタイム。

いやー、ホント疲れた心に潤いが来ると言うか。まあ冗談ですが、おぜうさまの相手とかすんので、結構ストレスくんのよホント。

「まさか本当にアルビオンに行つてたとはねえ？どうだったアッチは？」

「矢玉飛び交う戦場って感じでした」

「無事に帰って来れてよかったわねー」

全くだ。一応向かった人間で怪我人は出てないし、精々試作ゴレムがぶつ壊れたただけだな。アレは構造が簡単だから、幾らでも量が利くから問題無い。第一アレを運用っつーか、作ってんのはギィシュだからなあ。修理が進まなくて涙してんじゃないか？

「そう言えば知ってるー？アンリエッタ姫殿下とゲルマニアの王様が、婚約したそうよ？」

「式は一カ月後らしい。ま、私らには関係ないけどね」

・・・ふむ、どうやら手紙の回収を無事終えたお陰で、障害なく話しが進んだようだ。

後で知った話なんだが、この両国の婚儀に先立ち、トリステイン王国と帝政ゲルマニアとの間に軍事的同盟が締結されている。ようは姫さんが婚儀に臨んだのはコレの為なんだよな。

トリステイン王国は古き良き伝統を残す、貴族主義国家であるが、その実周辺をゲルマニアやガリア王国といった何倍の国土がある大国に囲まれた小国でしか無い。そんな小国が身を守るには、近隣の大国と同盟を結ぶくらいしか方法が無い。

その為の生贄が王族、つまりはアンリエッタ姫殿下と言う訳だ。世知辛い世界だねえ。

まあ地球の歴史上から見ても、似た様なことは起こってるから、あんまし驚かんがな。

「でも相手は確かゲルマニアの皇帝だろ？年齢的には40代のおっさんだっけ話だ」

「うひゃー、姫殿下も可哀そうにねー」

「ま、ソレが王族としての務めです。・・・可哀そうなことですがね」

可哀そうだが、俺達はこの国の政りごとには参加できないからな

あ。

「ココでココやって、ココだけの話と言う事でくっちゃべるしかない。」

そんなこんなで、久々にシアさんとキノさんと会話した後、ロス
トログアWECリアクターの解析と調整を行う為に、結界を引いて
小屋へと戻ったのだった。

さて、そんなこんなで日常は進み、一週間が経過した。

ロストログアWECリアクターの解析を続け、調整を施してはい
るが、中々うまくいかないのが偶に傷。徹夜4日目は流石にこの肉
体には辛く、精神的にも疲れて来た。学院長に相談したら、水煙草
を紹介しようとして、ロングビルさんに殴られてたっけな。

だけどそれがヒントになって、最近ほ

「フェン、ソレって煙管キテルか？」

「……似てるけど、ちょっと違いますよ、サイトさん。ただの
薬草ですよ」

煙管が手放せなくなっちまったい。

いやね？集中力が持続しねえから、眠気だけでも取りたくてさ？
水煙草みたいに、持続的に薬を使えねえかって思った訳よ。

んで、この世界にある薬をちょっと調べて、水薬だと高いから煙草にしたって訳。

紙たばこにしたかったんだが、そう言ったのってゴミが出るからさ。

色々試した結果、見事煙管という形になりました。そこら辺は完全趣味だけだな。

薬草さえ有れば吸えるし、なんとなく見た目もいい様な気がするので気にいっている。

煙管の大きさは、俺の背丈に合わせて大体12cm程度。錬金で作って固定化を掛けた壊れにくい特製の一品だ。煙管の中にはヴィズのエアフィルターに使用しているのと同じ空気清浄魔法を採用。それにより、指定した薬効成分以外は、BC兵器すら通さない強者つわものである。

最もはた目から見れば、7歳児がソレにあったサイズの煙管をくわえているという、非常にシュールな光景だけど・・・俺が気に入ったのだから特に問題は無い。薬用成分しか吸えないから体にも優しいぜ。

「だけどソレ見た目どう見ても喫煙

」

「中身は薬だから合法ですよ」

『ぐすん、マスターがぐれちゃいました。天国の母上殿。どうしましょう』

「いや、母上が居るのは地獄だろうよ」

撃墜王だったしなあ母上。飯を食った数を覚えてないのと同じくらい撃墜数だ。

つまりあまりに多過ぎて、正確な数が解らないのだ。そんな人が天国いけるとも？

『………ソレもそうでした』

「解ればよろしい」

「うう、普通ならどんな母親だと突っ込めるのに、フェンの記憶見てるから納得しちまう」

ああ、そっぴや俺の記憶で最初訓練入れてたんだっけ？

そりゃなあ、そっぴや風理解しちまうわなあ。いやでも……。

「まあ、実を言つとこれがあると体が楽なんですよ」

「楽って、お前体調悪かったけ？」

「魔力過多って言いますかね？常に魔力を吸っちゃうもんだから、何時吐血するか戦々恐々の毎日なんですよ。この煙管特別に調合した薬草だから、身体の調子を整えるのに一役買ってます」

いや、自分でも気が付かないもんだよなあ。体調が悪いのってさ。特に体調の悪化した感覚が緩やかなヤツは気付きにくいのだ。

その点この薬草は、魔力排出量を自然と多くする効果がある。簡単に言うと、人間でいう所の発汗作用の増加みたいな感じなのだ。

お陰で余分な魔力排出がスムーズに行われるモンだから体が楽で楽で。

でも見た目は喫煙・・・地球じゃ難しいか？一応地球にもあるもので調合したけど・・・。

「すーー、ぷはぁーー」

「び、微妙に様になってやがる」

「ま、それなりに小屋で研究中は吸ってましたからね。で、何か御用ですか？」

「・・・いやさ？急で悪いんだけど、この小屋で寝泊まりさせてくれない？」

「すー、ふはあー。話聞いてるか？」

さて、これまた面白い話が利けるのかと思いきや・・・いや、面白言っちゃ面白かったんだけどね？内容が内容なだけに、笑っても良いもんなのか・・・。

「つまりアレか？俺が外で洗濯している間、部屋の掃除をシエスタとしてた」

「おう」

「そして、掃除をしていた所、転びそうになり、勢いあまりシエスタを押し倒したと？」

「おう」

「うん、死ね」

「おう、っておい！」

メイドさんを押し倒しただ？このラッキースケベが・・・俺だってそんな体験してみたい気もしないでも無いんだぞ！？
・・・いかにいかに、ついつい思考がずれた。

「まあ冗談はさて置き、事故・・・何でしょう？」

「ああ、誓ってわざとじゃねえ。悪気なんてなかったさ」

「……悪気があったなら、今ココで振り切ってますよ」

「振り切る?!何を?!」

「……聞きたい?」

「あ、いえ済みません。わたくしが悪うございました。はなしを進めましょう」

よろしい。あ、後!べ、別にシエスタ相手に、そんな羨ましい体験をしたコイツに嫉妬した訳じゃねえからな。そこんとこ間違えんなよ!

「話しは戻るけど、まあ大体解るんだけど……マスター戻って来て見られた?」

「うん、もう何と言うバッドタイミング。いやむしろナイスタイミングなのか?」

「しらんよ」

『呼びました?』

「いや呼んでない」

『?失礼しました』

何故呼んでないシランが来たんだ？まあソレはいい。
問題はコイツが追い出されたと言う事は

「……ソレって、俺にも被害有り？」

「……面目ねえ」

……お、屋上いこうや？久々にキレちまったよ。なんてね。
まあ怒ってるのは当然だ。俺関係無いのに、巻き添えを食ったの
だから。

「………サイトさん？」

「はひっ!？」

俺はゴキんと指の骨を鳴らしつつ、彼の腕を掴む………思いっ
きり。

持てる握力全てを乗せて、彼の骨がギシギシいってるけども……
・気にしない。

サイトは最近頑丈になってきたから、身体強化も使おう。

「ひっ!イデデデデデデ!」

「……今日は訓練4割増しですよ？“弾幕結界”と“ヴォイド・クラスター100本ノック”……どれが良いですか？」

「へうつ！？し、死んじゃう」

笑わずにワラっている俺から出た言葉に、顔をチアノーゼ起したみたいに青くするサイト。

色合的にはデスラ 総統と同じくらいか？いやもっと青い。

むしろ青さを通り越して、白くなってきている。サーっという擬音が伝わってきそっだ。

「大丈夫、死なない程度には抑えますよ？むしろ殺してと叫ぶ程度には、ね」

「ごめんなさい〜！！勘忍してくれ〜！！」

「ごめんなさい？何を謝るのですか？只の訓練デスよ？」

「ゴメンなさい！本当に謝る！この通りだ！何でも言う事聞くからそれだけは勘弁してくれ！！俺はまだ死にたくない！」

最近板についてきたザ・土下座を披露するサイト。以前のジャンピング土下座とは違う正統派の土下座は精錬されており、美しいフォームと共に奏でられる情けなさが、凄まじくマツチしている。

いや、まあ……訓練っーか修業？させてたら変なスキル身につけちゃったらしいな。

これも……俺の所為なんだろうか？……怒る気が萎えた。

「……まあ冗談ですがね。でも訓練の次段階へは進みますよ？」

「あう、りょうかい」

気のねえ返事だなオイ。まあ予定しているのはサバイバル訓練。もつとも俺が3歳ごろ受けたサバイバルとは違う、タダのサバイバルだから気にすんな。

そして俺が適度に追いかけて回して、それから逃げるってだけだから大丈夫。

夜眠れないだけだよ？ウン。

「ま、とりあえずあの小屋は人が眠れる環境じゃないですから、片付けますよ」

「今夜眠れる場所なんだから当然手伝うぜ」

まったく頼むぜ？ウチのおぜうさまは癩癩持ち何だからさ。

お前さんがポカやると、そのポカのとばっちりが俺にまで来ちまうんだから。

はあ、とりあえず小屋においてあるガラクタを整理しなきゃなあ……
・・・チヨイ作り過ぎたし。

そついや、ガラクタと言えば、ルイズ嬢がこの間からヒトデのぬいぐるみを編もうとしてたな。中々上手く出来ていた様に見えたが、

まだ完成は先何じやろうか？

さて、いつもの研究小屋で、俺は最近病み付きになった煙管を吹かしつつ、一言。

「・・・まったく、飲むのはいいが余所でやって欲しかった」

「くぐがくぐ、ぐがくぐ」

ルイズ嬢から部屋を追いだされて（俺もとばかりで追い出された）から、3日が経過した。

俺の作った研究用の小屋を少し改築して、寝泊まり出来る様に改造した。

錬金はマジで便利だ。消費する魔力とか集中力を考えると、あんまり効率は良くないけどな。

そして、現在この小屋には俺以外に二人の人間が来ている。

ご存じ部屋を追いだされた原因となったサイトと、いつも通りに魔法の練習をしに来たギーシュとが、愚痴の言い合いを行い。気が付けば何処から持ってきたか酒盛りに・・・酔いつぶれた人間も2人と言う訳だ。

「古来から、酔った人間を起すのには、水をぶっかけるのが良いらしいが」

「主殿！主殿！図書室で覚えたこちらの水系魔法をエミュレートしたモノはどうでしょう？」

「……ああ、魔力変換効率が異常に悪いヤツね。俺なら大魔力にモノ言わせて強引に発動できるけど……そこまでする事でも無いが」

「それじゃ、普通にお水汲んでくるですう。かけるんじゃないかって、飲ませるようですけど」

「……頼むわ。俺は寢床にコイツらを放り込んで」

食堂に水を貰いに行った少女形態のリンの後ろ姿を眺めつつ、酔っぱらいの二人を現在寢床にしている場所に連れていく。身体強化魔法をこんなことに使うとは……。

とりあえず、そこらに散らばる愚痴宴会の残がいをごげながら、はあ、と溜息をつく。

「まったく、そんなに強く無いのにワイン4本も空けるか普通？」

『この世界のワインは、それ程アルコール度数は高くないみたいですがね。食堂で出しているワインには水やジュースで割増してあるらしいですし、まあお陰で急性アルコール中毒にはなりにくいみ

たいですが・・・』

「ま、微妙なところで経費削減つてとこだろっな」

案外料理に夢中になると、お酒には目がいかないモノだ。気が付いたとしても、そう言うワインと違ってしまえばそれまで、考えたなマルトー親方。これ、余程舌が肥えた人間じゃないとわからねえぞ？

たっ たっ たっ たっ

「よいしょつと 全く、男二人で抱き合った形で寝かせようかな？」

たっ たっ たっ たっ

「うん？おお、サイトも少しは訓練の効果が出たかな？無駄な肉が無い」

たっ たっ たっ たっ たっ たっ たっ

「そして、この足音が凄まじく不安というか「ダーリン居るう？宝探しに行かない?!」・・・やっぱりなあ」

そして、どうやらまた、何かイベントがあるらしい。突然キュルケさんが小屋に入ってきた。

その手には、何かスクロール的なモノが握られている。とりあえず酔いつぶれている二人を起して置いた方が無難か？
・・・しゃーねえな。

「コンデイセイション！」

どばしゃーっ！！

「「うわっ！なんだなんだ！？」」

使いたくなかったが、水魔法で起してやった。

さてと、キュルケさんのお話を聞くとしますかねえ。

「世界規模迷子は結構いるもんだ」

「世界規模迷子は結構いるもんだ」

妄想戦記

「と、まあこれでようやく半分だ」

「え、偉い長い話しやったなあ。しかもこれで半分ってどんだけや
？」

「ここは八神家リビング、話しが中盤に来たので、休憩させてもら
っている。」

「つーか、今思ったんだが、ヴィズの録画機能のデータ使えば楽で
ね？」

「ううん、まだ起きていたいのに」

「あたしも・・・そろそろ限界・・・」

「ヴィータもなのはお我慢しないで寝たらどうだ？」

「「だって、お話し面白いんだもん」」

「とか言いつつ、もう瞼が半分降りてますよ」

シグ姉さんとシャマル先生に就寝を進められたヴィータ姉となのはだったが、どうやらまだ起きていたらしい。ちなみに時間はすでに良い子が眠る時間をとくに過ぎている。

何気にリニスとラインが陰で毛布を準備しており、小さい子らが眠ってしまっても安心だ。

「いやまあ、聞きたければ後日話しても良いんだが……ぷはあく。所ではやては何故に平気なんだ？」

「私はほら、一人で家に居ること多かった訳やし？夜更かししても怒られへんかったから、馴れとるんよ」

「あー、なるほろ」

「……で、何時の間にかフェン君が吸ってるのが、話しに出て来た煙管キセルかいな？」

「おう、俺も話すのが疲れて来たから、すこし息抜きに」

俺がそうはやてに説明していると、突然煙管が手元から消えた。

あわてて探すと、何時の間にか背後にリニスが立っており、俺の煙管を手を持っている。

行き成り何すんだあと怒りたかったのだが

「フェ・ン・君・？」

リスさんの額には何故か 型の青筋が・・・あのう、なんでおこつてるんですう？

「フェン君、ダメですよ？煙草は八タチ過ぎてからです！」

「いや、それ煙草じゃなくて煙管、しかも薬草」

「見た目がNGです！はやてちゃんやなのはちゃんやヴィータちゃんが真似したらどうするんですか！それに向うでお酒飲んだりとか聞き捨てならないことが」

「いや、流石に煙管を真似するとか・・・」

「なにか言いましたか？」

「・・・・・・・・いえ、別に」

やっべ！そういやリスはこういった事に人一倍厳しかったんだ！長事離れてたから忘れてた！！・・・でも煙管は返してほすい。

「まあまあリス、まだ向うでの体験談の続きやし、説教は後にし

「よしっ？」

「はやてちゃん、ですけど・・・」

「それに、なんや聞いてたらまだまだ出て来そうとちゃうっ？」

「・・・それもそうですね」

あれ？なんか、コレ以上話しを続けたら、俺また折檻コースの様
な気が・・・。

「「ねえ！早く続きー！！」」

「っってお前ら眠たかったんじゃないのか?!」

「フエン君の吸ってた煙を吸ったら、なんか頭はつきりしてきた！」

そういやこの煙、頭はつきりさせる効果も付いてたんだっけ？
あ、リニスの目がピキーンって光った・・・まさか。

「これは・・・あとで折檻、もとい特別魔法訓練ですね」

「なぜに!?!」

「罪状は夜更かしの助長です」

「いや、それは」

「諦めるフェン、お前が吸っていた煙が原因だ」

そういつてポンと肩を叩くシグ姉さん。

周りを見るとシャマル先生は苦笑しているし、ザツフィーは相変わらず眉間にしわ寄せてるし、リインは何時の間にか入れて来たお茶飲んでるし、小娘三人衆は話を聞きたがってるだけだし・・・俺に味方はいねえのか！！

「フェン」

「ユーノ」

「」愁傷様「

「・・・お前も助けてはくれないんだな」

「」そんな事よりも続きー！！」「」

はあ、後で折檻が付いてくると解っていて話すのは気が引けるんだが・・・。

とりあえずちゃんと後で煙管を取り返さなくては・・・。
俺はそう思いつつ、体験談の続きを話し始めた。

S i d e 三 人 称

フゴフゴ、ブヒブヒ、荒い鼻息を立てる人影、ソレはハルケギニアにおいてオーク鬼と呼ばれる亜人種である。非常識な程の怪力を持ち、平民が対処するならば10人束になって掛かっても、纏めて薙ぎ払われてしまう程の力を持っている上、時に人間を喰らう害獣だ。

「（距離、900m、数は・・・7）」

「（左から順に仕留めるよ・・・ワルキューレ2式、狙撃用意）」
そして、そんな怪物を相手に戦いを挑もうとする者たちがいた。
オークがいる場所から離れた小丘の陰になつている地点に、白い全身鎧を着込んだ小柄な人影と、大きな何かを従えた人影が息をひそめていた。

小さな人影はフェン、そして大きな何かこと、ワルキューレ2式を従えているのはギーシュである。ワルキューレ2式は身長がおよそ4メートル、魔導炉内蔵型の機動ゴーレムだ。彼らは物陰に隠れながら、ある目的の為にオーク鬼を狩る為、今か今かと狙っていた。

「（サイトさん、そっちは?）」

「（何時でもOKだぜ。タバサもキュルケも配置についでる）」

森の入口近く大岩の影には赤青黒の髪の毛がちらりと見える。

喋る大剣デルフリンガーを抜いているサイトと、いつでも魔法が使えるように構えているタバサとキュルケ達だ。サイトが準備完了とフェンから渡されている小型通信機で伝えている。

「（焦ることはないです。彼らは気付いてない・・・ゆっくり、慎重に）」

「（ゆっくり・・・ゆっくり・・・）」

フェンに言われ、ギッシュによって操作されているワルキューレ2式は、手に持つ長い棒の様な物を構える。それはこの世界では少ししかない“メイジ殺し”と呼ばれる人間が使って居たりする、平民の武器とよく似ている。

そう、それはいわばライフルだった。しかしその大きさは人間が扱えるモノではなく、おまけに火薬の類も実弾も用いない。その証拠に筒の中には弾らしきモノは一切込められていないのだ。だが、その筒は“弾が飛び出す”と言った意味では間違いなく“銃”であった。

「（すー・・・はあ〜）」

「（よし）」

ギーシュの魔法で思考制御によって操られし鉄の戦乙女は、静かに銃を愚鈍な獣へと向ける。狙うのは7匹いる中でどれからも視界から外れている1匹。ワルキューレ2式のカメラアイから送られてくる情報を脳内で処理しつつ、その照準をゆっくりと頭へと向けた。

「（……ステンバーイ……ステンバーイ）」

オーク鬼達は森の入口付近に屯している。

そして、その中の1匹がスコープの方を向いたと思ったその瞬間。

「（ショット） カシュ」

ワルキューレ2式がもつライフルから、金属同士がぶつかるような軽い音が響く。

銃口からは白い光を放つ小さなマズルフラッシュが一瞬だけ輝いただけ。

だがその銃口の先に居たオーク鬼の頭は、パンという音と共に弾け飛んでいた。

音も無く飛び出したとてつもなく早い何かに、頭を撃ち抜かれたのだ。

「（ナイススキル・ギーシュ）」

ギーシュはあまりに簡単に弾け飛んだ生き物の肉片を、高倍率スコープではつきりと視認した為、生き物を殺したその感覚に少し吐き気を覚えたが、すぐにワルキューレ2式を操作し、ライフルの先を次なる標的へと向けた。

仲間が倒れる音を聞いて振り向いたオーク鬼が、警戒の叫び声をあげる前に、ワルキューレ2式のライフルがオーク鬼の頭部を捕えたのは、オーク鬼が声を上げる直前だった。

カシュン

その音と共に、警戒の声を上げようとしていたオーク鬼の首が吹き飛んだ。

こうして愚鈍で哀れな亜人の命が、この世界からまた一つ消えた。仲間が二体倒れたのに、風が吹いていないから仲間が気が付いていない。

「（ビューティフォー）」

フェンから称賛が投げられるが、その言葉に応える余裕は今のギーシュには無かった。亜人とはいえ相手は人型であり、その命を絶つたのは自分であるのだ。それが何だか人を殺した様な感じがして、彼は戸惑っていた。

ワルキューレ2式はフェンが技術を提供し、ギーシュが部品を作って完成したUSN式無人機とハルケギニア式メタルゴーレムとの

合いの子のような存在である。

駆動系には、以前のテストヘッドゴーレムの様に無人機やシランにつかわれているモノを使用した。そして大型化した事により、魔導炉搭載の用途が立ち、起動時間限界は克服している。

装甲材質もシランと同様の複合装甲が用いられ、武装面ではシランプルに遠距離用狙撃魔銃“ファイアバード”をもち、近距離用の単分子ハルバードを持たせてある。

ファイアバードはセミオート式で機関砲の様な連射こそ出来ないが、狙撃用のサイレントモードと対軍用の擲弾投射モードを使い分けることが出来る。前者は見えない魔力弾が発射され、後者は炸裂する魔力弾頭が発射される為、使い方によっては強力な武器となる。

大型化した為、機動性が無さそうに見えるが、魔導炉搭載によって得た余力で慣性制御と重力制御を常に作動させている為、その機動性は以前の無印ワルキューレを遥かにしのいでいる。空気抵抗さえなければ、人間が追隨するのも難しいだろう。

またフェンからの技術協力により、ハルケギニアの魔法で使える格納領域を搭載した腕輪のお陰で、何体でも収納しておくことが出来る為、スペースを取らないと言うのも地味に嬉しかったりする。

閑話休題

「（次・・・撃つよ）」

「（ああ、頭を潰してやれ）」

今回の目的の為に、もっとオークの数を減らさねばならない。なので彼は気持ち悪さを飲み込み、再度ワルキューレ2式と感覚を繋げる。だが、その時に今まで無風だった小丘を風が吹き抜けた。

【【【【【 ブギイ！！！！】】】】】

不味い、気付かれた。そう思った時には既に遅く

【【【【【ブギイーーーー！！！！】】】】】

人間の倍以上もある巨体からは想像も出来ないほどの速さで突進してくる亜人達がいた。

「（・・・気付かれた。サイト）」

「（あいよ。準備は終えてる）」

迫る亜人達、だが彼らは別段驚いてはいない。
何故ならこれも“作戦”の内なのだから

「来い来い・・・キュルケ、いまだ！」

「りよーかい！」

森から出たオーク達は一直線にサイトやフェン達がいる小丘を指し突進してくる。そしてオーク鬼達がある程度まで近づいた時、キュルケが杖を振り上げ小さな火を放った。オーク鬼に当てたとしても火傷一つ追わせられるのかと思うような小さな火。

シユボボボボボボボー……！！！！！！！！

【【【【【【！ ブギヤアアアア！！！！！！】】】】】

そしてそれは大地に当たり、巨大な炎と化した。
着弾地点に油がまかれており、その炎の中にオーク達を閉じ込める。

「タバサ！」

「コクン」

そしてタバサが杖を振うと、空中に幾つもの氷の槍が出現し、オーク鬼達へ向けて放たれる。ソレらはオーク鬼達に突き刺さるが、分厚い脂肪と堅い筋肉を持つオーク鬼にはそれ程ダメージを与えてはいなかった。

「でやつ！」

だが、相手を怯ませる事は出来た。そしてその隙で十分。

タバサの氷の魔法の余波で勢いが弱まった炎の壁を越えて、サイトが突撃しオークの首をデルフで刎ねた。そのまま倒れるオーク鬼、サイトはルーンの力を使って返り血を浴びることなく、次のオークへと迫る。そして4匹の首をはねたのだった。

「……ふう、気持ち悪」

サイトはデルフを振って、刀身にこびりついた血をはらう。

ねっちょりとしたどす黒く生臭い血が、はらった先の草にかかった。

「……RPGとかと違って……あんまり、気持ちのいいもんじゃねえな」

ギーシュが気持ち悪さを感じたように、サイトもまた気持ち悪さを感じていた。相手が人間とは違う完全なバケモノ相手だったから、サイトもなんとかイケたが、やはり生き物を手に掛けたと言うその感覚は、あまり気持ちのいいモノでは無い。

『相棒、相手はバケモンだ。人間を襲う連中だ。情けは無用だぜ？』

「そうは言いがなあ。やっぱ馴れねえよ」

『かー、甘いねえ。相棒は』

「ほっとけよ」

特に今回は人型の敵、バケモノだがどうしてもそう言う風に感じ
てしまう。

ふとオーク鬼たちが倒れている方をみた。とりあえず動くモノは
いないから、これで倒したのだろうと思ったサイトは、その場に腰
を下ろした。ルーンを使うと体力の消耗が結構激しいからである。

「お疲れ様ダーリン」

「おつかれ」

「おうキュルケ、タバサお疲れさん」

お互いにねぎらいの言葉を贈る。

普通なら数十名は必要なオーク鬼の群に数名で勝てた。
全員の連携が取れているからこそその勝利である。

「これで安心して、廃村に入れるわね」

「今度こそ、本物だといいな」

「あら、今度こそ大丈夫よ」

「どうだか・・・」

どうして彼らがこんな冒険者めいたことをしているのかと言えば、発端はキュルケが持ってきた宝の地図にある。街で買ったと言つどうにも胡散臭い地図には、どうにも胡散臭い宝物が記された地図ばかりが書かれていたのだが、日ごろ娯楽に飢えている彼らにはヒマつぶしにちょうど良かったのだ。

またサイトの事を気にいつているキュルケ曰く、ゲルマニアにおいてなら平民でもお金があれば貴族の位を手に入れられるらしく、もし宝物が見つかったならそのお金で貴族の位を購入し、ルイズに一泡吹かせてやりましようと言ったのだ。

サイトの方も、貴族の位に興味は無かったが、なんとなく冒険が出来そうである事を感じ取り、浪漫を求めて参加、当然その時一緒にいたギーシュも参加する事になり、キュルケに連れられタバサも半ば強制参加したのだった。

そして、そんな彼らに誘われて我らがフェンも参加していたりする。最初こそ一瞬戸惑ったが、考えてみたらサイトが勝手に消えたらあのご主人様の事だ。癩癩を起し当たり散らして来そうな気がする。それを予感した彼も参加した。別名逃げともいう。

「それじゃ廃村にいきましょうか」

「俺としてはもう少しやす

」

「！離れて！！」

【ぶるああああ！！！！】

サイトがそう言おうとした時、背後のオーク鬼の死体が動いた。否、正確には死体の下に息をひそめていたオーク鬼の最後の一匹が彼らに襲い掛かったのである。キュルケとタバサは咄嗟に退避したが、すわっていたサイトは動くのが遅れた為、オーク鬼に目をつけられてしまう。

ブン！ガン！

『あいてっ！』

「っ！デルフっ！」

立ち上がりデルフを構えたのはいいが、対応が遅かった所為でオーク鬼が手に持った棍棒で、デルフを打ちすえられてそのまま飛ばされてしまう。オークの前には武器を無くし、ルーンも発動できないサイトが1人。

【ブギーー！！】

「ッー」

脳天目がけて振り下ろされる棍棒に、サイトは目をつぶってしまった。
ルーンが使えなければ、多少身体能力が高い人間でしか無いのだ。
普段なら避けられる棍棒も、デルフを飛ばされて動揺した彼に避ける術は無い。

そして棍棒は、そのままサイトの頭部を

ダウン！ ガンッ！

【ブギャー！！！】

捕えることは無く、地面へと落下した。

次に聞こえたのは、ドシャッと何かが地面に倒れ伏す音だけ。
サイトは恐る恐る目を開けると、そこには頭部が消えたオーク鬼がいた。

「へ？へえ！？」

「まったく、油断してんじゃない。ちゃんと敵の生死は確認するモンだ」

「！！フェンか！！」

声のする方に目を向けると、そこには魔力残照の煙を銃口から流している自動散弾銃型兵装ストレージデバイス・ジリーノを持ったフエンが立っていた。

棍棒が振り下ろされる直前に、彼がオーク鬼を撃ち殺したのだから。

「危なかったですねサイトさん。だから実戦では油断してはいけないのですよ?」

フエンはそう言って、何事も無さそうにサイトを窺める。

彼からすれば、この程度は死の恐怖に入らない為、いまだ未熟なサイトを叱責し、こんな程度の事で命を落とすことが無い様に叱っているのだ。なんじゃかんじゃでお人好しである。

「・・・」

「?・・・」

「ごあがっただああ!!!!死ぬかとおもったああああ!!!!」

「って!コラ!抱きつくな!鼻水着けんな!この てい!」

「くえい!」

そして死の恐怖から解放されたサイトはフエンへと抱きついてい

た。

思わずフェンは彼を絞め落とし、その場に何とも言えない空気が流れたのだった。

S i d e o u t

S i d e f e n

結局、今日訪れた廃村にある筈のお宝も、偽物であった。まあ名前がブリーシנגアメンなんて大層な名前が付いていたら、少しは疑うもんじゃがねえ。

で、次の目的地はタルブ村、時間的にも距離的にもそこが最後となりそうだ。場所はラ・ロシエールにほど近い農村らしく、名産品はワインだそう。しかもシエスタの故郷らしい。夕飯に機体もてそうである。

「あゝあ、結局オーク倒すのにフェンの手を借りちまったな」

「お陰で2000スウの損失だよ。何でタバサはそこまで勝負運があるんだい？」

「運じゃない。実力を考えた上での当然の帰結」

さて、タルブへ向かう途中で有るが、何故に彼らがこんな会話しているのかと言いますと、今回の廃村周辺の安全を確保する際、オークを倒す時に俺は手を出さないという話だったのだ。どうやら賭けごとにされていたらしいけどな。

「別に良いじゃないですか。ある程度経験を積むというのは達成できた訳だし」

俺はそう言って慰めてやる。実の所、最初の方の宝探しの時にもオークと出会った事があつた。その時は今ほど連携が取れる訳もなく、各々好き勝手に攻撃していたのである。当然一体二体は倒せるモノの、群と戦うと言うのは非常に大変だった。最終的に俺が全部倒していたのである。

でまあ、流石に俺ばつかにやらせると言うのも気が引けたんだろう。ソレ以来彼らなりに経験を積む為、対処できる敵は自分たちで対処するようになっていた。お陰で俺が暇であつた為シルフィードを愛でるしか無かつたなあ。

.....

.....

.....

さて、タルブ村に到着した俺達はそのままシエスタの案内で竜の羽衣が置かれている神殿へと向かったのだが

「なあフェン、俺目がおかしいのかな？」

「……………サイトさん、大丈夫です。自分も見えています」

その神殿は日本でよく見かける神社仏閣の類と同じ建築様式を用いられており、そのお社の中身を見て更にびっくり、そこにあったのは太平洋戦争中に名機と名をはせた零戦だったのだ。

いや、コイツは驚いた。確かにこんな博物館級の代物、一部の人間にはお宝だろうよ。

「これが竜の羽衣？どう見ても……………お宝には見えないわねえ」

零戦を見たキュルケはそうため息を漏らす。確かに即物的な方から見れば、好事家に売れるか売れないかを見るところだろう。だがこの世界の技術力の観点から見れば……………。

「……………いやミス、これはかなり凄いモノだと、僕には解るよ」

「どづいつ事ギーシュ？」

「この横に着きだしている部分は、この世界には存在しない素材で

作られている。今さつきディテイクトマジックで解析したけど、フエンから様々な技術を学んでいなければ、土のメイジでもこれが何なのかなんて解らない代モノだった事だろう」

彼はそう言つと、俺の方を向く。

「フエンは、これが何かを知っているんだろう？」

「……ええ。それとサイトさんも知っていますよ」

「サイトも？何故？」

「その竜の羽衣は、元は彼の国が作り上げた兵器だからですよ」

「ああ、フエンの言う通り。そいつは正式名称零式艦上戦闘機。俺の国では骨董品の類だけど、世界に名をはせた空を飛ぶ機械だよ」

「やはりか……」

ギーシュは俺達の言葉に、手を口に当て考える仕草をした。

「確かにこれは宝かもしれないが……あまり売るとかは出来ないね」

「まあ、コレじゃ好事家にも売れそうに無いわねえ」

キユルケさんはそう言うとお社から出ていった。お金にならな
いと解ったからだろう。だが問題はソコじゃ無かったりする。

「一つ聞きたいんだが、以前サイトは違う世界から来たって言うて
いたね？」

「・・・まあな。もういい加減こっちにも馴れて来たけど」

「ふむ、そしてそっちには貴族・・・いやさメイジがないって話
しを聞いたんだが、本当かい？」

「本当だぜ。貴族はいたかも知んねえけど、少なくとも俺の知って
いる人間に貴族はいねえ。魔法を使うメイジとかだって、影も形も
無かったさ。フェンみたいに知られてねえだけなのかも知れねえけ
ど」

「ですね。俺自体地球出身じゃなくて、もともと違う世界の出身で
すから・・・」

「え？そうなの？」

「・・・まあソレはさて置き、ギーシュさん。貴方はコレの危険
性に気付きましたね？」

俺の言葉にコクンと頷くギーシュ。何故零戦が危険なのか？それ
はこの飛行機がメイジの力無しに作られたモノであり、尚且つメイ
ジ単体では歯が立たない程の性能を有している事を、彼は見抜いた

からである。

「この横にせり出した部分、その中に恐らくは銃だと思われる機構のモノが入っているのを感じた。しかもこの世界のモノとは材質、使われている技術もまったく異なる精錬された武器としての銃・・・威力はかなり高い」

「その通りです。この世界の銃と、その主翼内に装備された機銃とを比較すれば、此方のはおもちゃに見える事でしょう」

「なんてことだ。もしもこれが出るべき研究機関に回されでもしたら・・・」

「なあなあ、確かにこれは戦闘機だから機銃が付いてんのは知ってんだけどよ？なにがそんなに危険なんだ？」

ちよいと着いて来れなかったのか、サイトが質問してきた。

「・・・サイトさん、考えても見てくださいよ？零戦を劣化コピーでも良いから複製出来たら、それを相手にするメイジはどうなります？機銃は連射出来るのが搭載されていると考えると」

「そりゃ、勝てねえだろうな　ってそう言う事か！」

「そう、例え劣化コピー品でも、これを使えるようになればメイジに平民が勝てる。ソレはこの世界の根幹を揺るがすこととなるでしょう」

メイジは強力だが、平民と比べれば非常に数が少ない。それでも平民がメイジにあまり勝てないのは、魔法という法外な力をメイジが持つからである。

だが、もしも零戦に搭載されている機銃、コレの構造を解析し、劣化していてもある程度遠くに真っ直ぐに飛ぶ銃、連射が可能な銃が作られただけでも、メイジの優位性はがくんと下がってしまうのだ。

「ある意味、僕達が回収してしまった方が良いのかもしれないね。学院に持ち込めれば、学生の持ちモノと言う事で処理できるだろうし……」

「その方が良いかもしれませんがね。ここに放置して、それこそこそその研究機関に解析されるよりかはずっといいでしょう」

これで劣化コピー品が作られてみる？戦争になったら平民が大活躍だ。今までは数はあってもメイジに対抗できる質がなかったが、質の面でもメイジに対抗で来て数がそろったら、メイジでは手がつけられなくなるぞ。

地球じゃ骨董品でも、こっちの世界じゃ戦争とかを根本からひっくり返す性能を秘めているって事だ。

「しかしまあ、自分の所のモノがこの世界にあるのは知ってました

から、地球のもあるのではと思っていましたけど」

「まさか、こんな完全な形で残ってるなんてなあ・・・これ飛ばせねえかな？」

「さて、燃料があれば飛べるでしょうね。もしくは持ち返ってん？シエスタどうしたの？」

「あ、いえ。お邪魔かなと思って待ってました」

後ろを振り返ると、シエスタが入口のところに黙って立っていた。どうやら俺達の話が終わるのを待っていてくれたらしい。

「ねえシエスタ。この竜の羽衣の持ち主って、まだ生きている？」

「・・・えっと、実は」

シエスタ曰く、零戦の持ち主は何と彼女のひいお爺さんらしい。そう言えば彼女の顔立ちもモンゴロイドの面影があるし、髪の毛もこの世界では珍しい黒髪だ。成程異世界でも日本人の血と言うモノは結構残るものなんだな。

彼女から話を聞くに、ひいお爺さんのお墓もこの寺院の境内にあるらしい。裏手に案内されて見れば、そこにポツンんと立つ日本式のあの石の墓。ああ、こりゃ確かに日本人がここに来ていたんだなあと改めて感じられる。

「これがひいお爺さんのお墓です」

「変わった字だね。なんて書いてあるんだい？」

「それが、この字はひいお爺さん以外はだれにも読めなくて」

「海軍少尉佐々木 武雄 異世界ニテ眠ル」

「「え?!」」

「驚く事は無いでしょう?あの竜の羽衣はサイトの世界からのモノ、その世界出身のサイトが読めない道理は無いです。勿論自分も読めますけどね」

サイトが墓に刻まれし言葉を読んだ為、驚くシエスタとギーシュだったが、俺の説明に納得する。シエスタは改めて俺達が違う世界の人間であることを再認識したらしく、驚きの目をしていた。

「出来ればあの竜の羽衣を譲ってほしいんだけど、その手の交渉は誰とすればいい?」

「え?あ、と・・・とりあえず家に来てください。竜の羽衣の管理をしているのは私の家族たちですから」

そんな訳でこの零戦を譲ってもらう、もしくは買い取る為に俺達はシエスタの家へと向かう事となる。アレの価値をあまり理解していないキュルケさんは、少しだけ詰らない見たいだったが、タバサ

と共に一応着いてきた。

その為、貴族が3人も来てしまったので、田舎の村はちょっとした騒ぎになるのだが、ソレはまたいずれ・・・。

「世界規模迷子は結構いるもんだ」(後書き)

段々暑くなってきた今日この頃。

タルブ村で終わらせようか、それとも大軍との戦いまで伸ばそうか
悩むぜ。

どっちが良いだろうか？

「タルフの村にて」(前書き)

今回若干短め。

「タルブの村にて」

「タルブの村にて」

妄想戦記

てくてくてく。

交渉は無事終了、輸送はともかく竜の羽衣は手に入れた。
輸送に関しては俺が転送する運びとなった。向うにシランも居る
しな。

シランに連絡して、ビーコンを頼りに転送使えば大丈夫だろう。

「すこし疲労感があるな」

「(大丈夫ですか？簡易メディカルチェックでもしましょうか？)」

「(・・・内科系は出来ないだろ？)」

「(あう！・・・そうでした)」

「(・・・まあ多分旅の疲れがたまってるだけさ。少し休めばこれ

くらい・・・」

若干疲労感があるが、久々に安心して休める村に居るのだし、しばらく休めば大丈夫だろう。とりあえずヒマになったので、各人タルブの村を適当に過ごすことにした。最近は旅をしっぱなしだったから、休息を兼ねている訳である。

「（ふむ、基本は農業で手慰み程度で酪農とみた。典型的な農村つてやつだな）」

【主な畑はブドウ畑が多いですねえ。それに牧歌的でなんかいいですう】

『（ですが、裕福と言う訳でもないみたいですね。税がキツイのでしょうか？）』

「（さて・・・そこら辺は解らないな。まあ生活出来ないってほどでも無さそうじゃないか）」

念話で我が相棒達と話しながら村に行く。

一応人目があるからな。下手にしゃべると変人に見られてしまうのだ。

まあ、貴族と一緒に来たことは既に知られているらしく、所々視線を感じるけどね。

一々反応してもアレだし、とりあえず放置中。

【ちょっと、こんな感じの農村での生活にあこがれますう】

「……………解らんでもないな」

うん、平和だ。豊かでもないけど安心して暮らせる何かを感じる。
こつ言つのを、故郷っていうんだらうなあ。

……………。

「……………あら？目から涙？」

はて、なにも悲しい事もない筈なんだがな。

何で涙が出てくるんだらうか？……………この村の風景に懐かしさを
感じた所為か？

ちゃんちゃらおかしな話だ。俺の故郷はUSNのシティの一つ。
周辺に緑は多かったけど、この村みたいな感じじゃない筈なのに
……………。

そこももう30年前に消えてしまったんだからな。

「むむ、まだ感情の制御が下手みたい」

だが、何処かにデジャブを感じたのかもしれない。

何がトリガーになるか解らん。うん、しかし困った。涙が止
まらない。

こんな顔じゃ皆の所戻れないぞ。どうしたもんか……。

とりあえず手の袖でごしごしと目元を拭いておくことにした。
泣きっぱなしナノはカツコ悪い気がしたからだ。

一々感傷に浸ってたら、動けなくなちまうからな。前進あるのみ
だ。

それはさて置き

テクテク 俺の足音。

ととととと 誰かの足音。

間違いなく誰か付いて来てる。しかも相当小さな人間か……。

テクテクテク・・・バツ！。

とととととととと・・・さっ。

後ろを見たら隠れられてしまった。むむ、なかなか出来る。

テクテクテク・・・ピタ。

ととととととと・・・ぴた。

間違いなく誰かにつけられてるんだが・・・。
うむむ、貴族の従者と言つ風に見られて監視されてるんだらうか？

テクテク、たっ！

ととと！？たっ！！

急に走り出して、後ろの足音が付いてきたのを確認してっと。
ウン付いて来てる。とりあえず納屋の陰に隠れてから。

「で、何か御用かな？」

「うひゃっ！」

付いてきたヤロウの顔でも拝んでやろうと思いい納屋の陰から顔だけ出して覗いてみたのだが、そこに居たのは小さな子供が1人。ウイズヤリンも何で子供が付いて来てるんでしょうと念話で聞いてくるが、俺にも解らん。

「えっと、俺に何か用かい？」

「……ふえ」

「『【え？】』」

ま、不味い。泣かれてしまう！？急に声を掛けた所為か！？
な、なにか！えーと！？そ、そうだ！俺は近くに生えていた草を引っこ抜く。

「こ、ここに取り出したるは、只の草！だけど私がひと撫で致しますとー！」

錬金！原子配列変換！再構築！急げ急げ！

「じゃーん！トリさんの完成ですー！」

雑草を再構築して紙みたくして、更に錬金で最初か折り紙の鶴にしてみた。

ぼんつという音を上げて、俺の手の中から現れた紙で出来たトリを呆然と見つめる子供。

沈黙が、辺りを支配する・・・あ、あかん・・・失敗やろうか？

「す、すっく〜い！」

ほっ、どうにか泣かないでくれたみたいだ。
だが、俺はここで油断した。

『(マ、マスター、周り)』

「(え？ うお!?)」

そこには沢山の目、目、目 いやまあ5人分程度だけど。
何時の間にか俺は、己と同じくらいの年齢のガキどもに囲まれていた。

そして全員が俺に期待の目を向けている・・・。

「さ、さっきのもう一回みたい！」

「「「みたい！」」」

あー、あはは・・・そういやこの世界は娯楽少ないんだっけ。
・・・手品っぽい事するんじゃないかった。

Side 三人称

村の近くの社、そこから村の住人からは竜の羽衣と呼ばれていたそれが、外に引っ張り出されていた。その昔に固定化处理を施したお陰か、欠損している個所も見受けられない完璧な状態のソレ。運び出したのはトリスティン魔法学院の生徒たちだった。

三人のメイジがゆっくりとレビテーションを掛けて外に出したのである。

外に出された竜の羽衣は、すこし離れた開けた場所に運ばれそこにおかれた。

そしてそこに待機していたのは我らがフェンである。

その隣には、彼のデバイスでもある融合機のリングが立っていた。

「・・・リン、ユニゾン・スタート」

「ハイですう」

融合機の特徴であるユニゾン、インテリジェントデバイスを極端化したもの、姿と意思を与えられたそれは術者と融合する事で魔力の管制と制御を請け負い、通常では考えられない程の魔力運用を可能とした。

また、強大故に術者の身体に変化を引き起こし、どんなにうまく制御しても髪等が変色を起す。リンとユニゾンしているフェンも顔に蒼白いラインが浮かび上がっており、ユニゾンを開始した途端、膨大な量の魔力が荒れ狂うかのように彼の周りに集まった。

リンとのユニゾンはフェンが生まれつき持っている希少技能“リサイクル”の効果である魔力吸収をも高め、副産物のSランクの収束技能が働き、周辺に余剰魔力が吹き荒れているのである。

フェンの場合、素面でその魔力流ともよべるモノに近づいたなら吐血必至だが、リンのサポートにより必要以上を吸収しない為、理論上魔力切れを起すことなく魔法を行使出来るのである。

「空間座標、x、y、z軸固定、シランからのビーコンを受信、転送陣展開」

『転送用魔法陣展開、座標軸固定確認、転送先“ヴェストリの広場” 障害物を確認出来ず』

運び出された竜の羽衣こと零戦の下に、丸の中に三角と四角の図形と魔術言語を組み合わせた白い魔力光を伴う魔法陣が広がり、ゆっくりと回転している。魔法陣からは零戦を包むかのように細かな魔力粒子が立ち上り、何処か見ている者たちに幻想的と感じさせていた。

フェンは転送準備が完了したことを確認すると、ふうと少し息を吐いた。

転送魔法というのはデリケートな作業が必要な為、かなりの集中力を要する。

元々戦闘魔導師であるフェンにとっては、あまり簡単では無い作業だったが、集中力とリンからのサポートがある為、なんとか転送を行えるのである。

「転送開始」

『転送、開始します』

BAこそ展開していないが、起動はしているヴィズの声が聞こえると同時に、転送魔法陣の光が強くなり、その次の瞬間にはそこにあった筈の零戦が影も形も無く、その場から消え去っていたのだ。

「……ふう、転送終了っ」と

「おつかれさんフェン。相変わらず派手だな」

「毎回思うけど、本当に此方とは全然毛色が違う魔法なんだね」

「興味深い」

と、各々の反応である。そりやそうだろう。フェンの魔法はUSN式やミッド、ベルカ、30年前はあったが、現在は淘汰されて使い手がいない様な魔法まであるのだ。

精霊を操り4属性を使うハルケギニアの系統魔法とは根本からして異なるのである。

フェンの魔法はトリスタニアにあるアカデミーと呼ばれる研究機関に知られたら、そく解剖されて研究されてしまうくらい、この世界では珍しいモノなのだ。

もつとも、サイトは勿論のことこの世界のメイジであるギーシュやキュルケはおろかルイズも事の重要性に気が付いていないので今のところ平気である。タバサは気付いてはいるが、干渉はしない様になっている様だ。

まあ例え気付かれても、何気に学院長に気にいられているフェンである。

恐らくアカデミーが連れ去ろうとしてもオスマンからの待ったが掛るだろう。

それ以前に黙って連れてかれる様なタマでは無いのだが・・・それはさて置き。

「・・・とりあえず、向うの広場に転送しておきました。シランが確認したらしいので、向うに着いたら自分の小屋に来てくれれば、竜の羽衣に触れることが可能です」

「ありがとね〜フェン君。これで輸送費が浮いたわ〜」

「いえいえ、なんのなんの・・・」

近寄ってお礼を述べるキュルケにそう返し、懐から煙管を取り出そうとしたフェンだったが、ポトリと煙管を落してしまふ。それに気付いたキュルケがフェンに煙管を拾ってあげたのだが

「はい、落したわよ」

「ごほごほ・・・すみません」

「あら咳なんてしちゃって、風邪なの？」

「いえ、少し疲れが取れなくて」

そう言うフェンだったが、よく見ると顔色が悪い。何と云うか疲れしている感じである。

その事を不審に思ったキュルケが、優しくフェンを問いただした。そしたらこの男、竜の羽衣を転送する前に、錬金を使いまくっていたという。

フェンの錬金はこの世界の錬金を自分でも使える様にしたモノであるので、その負担はかなり大きいと聞いたことがある。何故そんなことをしたのかをキュルケが尋ねると

「子供たちが一杯いて、ちょっとした手品っぽいモノを見せてあげてたんです」

と、応えた。つまり村の子供たちの為に無茶した訳だ。律儀な男である。

普段ならば錬金用簡易ストレージ・ヘルメスを使うフエンのだが、あの時は咄嗟だったが為、デバイスを使う余裕がなかったのだ。お陰で大分消耗する羽目になったのだ。外傷のような物理的な怪我とかにはめっぽう丈夫だが、魔力の変化や病気に弱いとは哀れである。尚、病気になっても死にはしないのが更に可哀そうだろう。

一応すぐに病気を治す方法としては、全身を吹き飛ばすような攻撃を受ければ、健康な状態の身体に還元されるのですぐに直せる。だが、この方法は本人が試したからないだろう。

そんな攻撃を行えるのは、今の所この世界に居そくに無い上、なにより痛いのだ。それに好きこのんで自らを傷つける自傷行為をしたいとは流石にフエンも思わない。

「だ、大丈夫ですよ。薬草煙管吸ってれば動けますから」

フエンはそう言うが、顔色は依然としてすぐれない。

考えてみれば今回の旅のメンバーの中で一番体が小さいのに、夜の見張りから亜人の警戒、はたまた戦闘までこなしていたのである。フエン自体は馴れているが、野宿で疲れが完全に取れる訳が無い。蓄積された疲労はかなりのモノだろう。

学院に戻っても彼の事だ。あの竜の羽衣というおもちゃの研究で徹夜とかの様な無茶をする事だろうとキュルケは考えた。本人はいたって帰ったら休む気マンマンなのだが、この時点ではそんなこと

をキュルケが知る由も無い。

そんな訳で

「フェン、貴方しばらくこの村で休息を取りなさい」

「え？でも戻ってマスターの」

「たまには休んでもいいじゃない。ルイズには私から上手くいって
おいてあげるから、ね？」

「いや、しかし」

と、フェンが何か言おうとしたのだが、突然クラリとフェンが揺
れる。

力が突然抜けていくかの様に、その場に倒れかけたのを、ギリギ
リで耐えた。

「ちょっと、大丈夫？」

「へ、平気です……でもちょっと不味いかも……ユニゾン機能
停止」

「ッわつと！あ、主殿、酷いですう・・・分離するなら事前に言って欲しいですう」

そして今度は光を放ち、リンとのユニゾンを解いてしまった。

リンとは元々常に融合状態ある為、常にユニゾンしている様なもののだが、ユニゾン機能を使用しているのとしていないのとは、明らかに前者の方が負担が掛る。一心同体であるがゆえに融合事故は起こさないものの、負担が無いわけではないのだ。

つまり今のフェンは、ユニゾンが継続できない程、疲れていると言っ訳である。

実のこととフェンの疲労は旅の疲れだけではなく、ルイズの雑用を行い、かつサイトやギーシユの訓練につきあい、おまけに元の世界に帰る為の研究もしているのである。

一心軍に居た経験から、フェンは己の限界は知っており、それを越えないギリギリで過ごしていたが、普段とは異なる旅の生活がそれを狂わせたのだろう。己の勘を過信していた可能性もある。

その所為で先の錬金連続使用や転送魔法使用も、普段なら何の問題も無く使用出来る為、限界ギリだったが使用してしまい、己の体力の限界を少し超えてしまったのだろう。

「うん、やっぱり一週間くらい休ませた方が良いかもしれないわね。ダーリン達もそう思わない？フェンかなり疲れてるわよ？」

流石にこの状態を見過ごせる筈もなく、キュルケはほかのメンバ

ーに声を掛ける。

他のメンバーも今のフェンを見て、キュルケの言葉に全員が頷いていた。

この小さな仲間である少年が普段の無茶や頑張りを知っているだけあり、いい加減休養を取らせてあげた方が良くと判断したためだ。

「はい、それじゃ決定ね。多分あのメイドの家なら預かってくれるだろうし、その分のお金くらい出せるわ」

「い、いえ戻って休めば、それにそこまでしていただかなくても
」

「だーめ、もう決定事項です。それに少しくらい気を抜いたって大丈夫よ」

「フェン、俺もルイズに言うておくからさ？休暇だと思ってゆっくりしてけよ？」

「でも・・・」

「君が頑張っている事は、僕たちが良く知っている。少しくらい休んだところで文句は言わないさ」

どうにも、既にフェンが休むことは決定事項らしい。既にタバサがシエスタの家にこの件を伝えに行ってしまうので、どのみちもう断ることは出来ない事だろう。その事に気付いたフェンは周りに気付かれない程度の小さな溜息を吐いた。

「 解りました。一週間だけ休ませていただきます」

「おう！来週には元気になって戻って来てくれよ？」

「……確かに自分ももどらないと、サイトさんとギーシュさんの訓練が滞りますからね」

「うえっ、ま、まあな」

「……自主トレ程度はしておいてくださいよ？一度なまると後が大変ですし」

わかったよとサイトはフェンに返事を返した。

しかしフェンはそれだけでは心配だったので、ギーシュにワルキユーレ2式を用いて模擬戦くらいはしておいてくれと言っておいたので、サイトの訓練は学院に帰っても終わらないだろう。

こうしてしばらくフェンはタルブ村にて休養を取ることになった。しばしの別れだが、シエスタもタルブに残るらしいので寂しくは無い。フェンにとっては帰還の為の研究が停滞するのは少しこまるが、いい加減限界だったのでいい機会と割り切った。

そして1週間後、彼はまた災厄に見舞われる羽目となるのだが、この時は誰ひとりとして、その事に気が付くモノは無かったのだった。

「俺、帰ったら花屋になるんだ・・・前編」(前書き)

*注意、グロい表現があります。

「俺、帰ったら花屋になるんだ・・・前編」

「俺、帰ったら花屋になるんだ・・・前編」

妄想戦記

タルブ村での一週間の休息の話を、はやて達にした俺。だが、なんか呆れられた視線ではやてに見られた。

「なんや、また無理してたんやフェン君」

「ま、色々あったから」

本当に、色々あった。この先の話しは、はやて達には話してはいない。

ただ、戦いがあっただけと内容をぼやかした。それは何故か？話があまりにも強烈過ぎたからだ。

これはそんな彼女等には話せない話の一つ・・・。

さて、なんか周りに無理やりに休みを入れられてから早一週間。
タルブ村で過ごしていた俺はどうなったかと言つと

「おじさん、今日はマルカおばさんのとこに手伝いに行ってくる
よ」

「おう、気いつけるよ」

「いつてらっしやいですう。ある・・・もとい兄上」

「うん、家の手伝い頼んだよリン」

「任せましたですう！」

すっかり村に馴染んでいたりした。

最初の内は遠目で見られる程度だったが、これも子供たちと馴染
んだお陰だろう。

警戒の目的なモノが徐々に薄れ、今じゃ普通にお仕事の手伝いを
任されるくらいだ。

今日はその中でも仲良くなったモーリスと言う子の家の手伝いに
行くのだ。

「あらフェンくん、今日も手伝い？」

「ええ、モーリスのところで牛の世話をね」

「ご飯はどうする？」

「向つて貰えるんだって、だから今日の分はいいよ、おばさん。それじゃ行ってきます」

「はいはい、行ってらっしゃい」

この一週間も暖かく迎えてくれたシエスタの家を出て、モーリスのどこに向かう。

彼の家はブドウ農家が多いこの村には珍しく、唯一牛を飼っている農家だ。

牛は畑を耕したり、乳をしぼったりするのと両方の目的で3頭飼われている。

そして俺は牛の世話の手伝いに行く訳だ。といっても放牧場とかに連れ出すだけなんだけどね。

「ん？こんにちはフェン君や。きょうはお使いかい？それとも修理？」

「こんにちはマリーン婆。ううん、今日はマルカおばさんのところでお手伝い」

外を歩いていると、一人の老婆に話しかけられる。

よく手伝いをしていたので、村の人には結構顔を覚えられているのだ。

目の前のお婆さんも、昨日農作業を手伝ったのでよく覚えている。意外と農業って楽しいんだぜ。

「何か壊れたのマリーン婆？」

「うんにゃ、フェン君に直してもらった農具は何か丈夫でねえ。あれなら後4〜5年は持ちそうだよ」

「それは良かった。それじゃ俺行くから」

「あいあい、いってらっしゃい」

しかし暖かい村だな。まあ俺も一週間の休みの内、3日目から動き回ったからな。

勿論徹夜関連の無茶はしていない。したのは村での仕事のお手伝い。肉体労働だ。

多少は動かないと、余計に疲れるんだよ。なにも寝てるだけが休むんじゃないんだぜ？

お陰で規則正しい睡眠と食事が取れるから、大分身体が楽になっただぜ。

「マルカおばさん、手伝いに来たよ」

「うん？ああ、いらっしゃいフェンくん。モーリス！フェンくんが来たから、牛小屋で一緒に手伝いしておくれ」

「わかった！行こうフェン！」

「はいはい」

家の奥から顔をのぞかせたモーリスは俺を見るや否や手を取って引っ張っていく。

実を言うとモーリスの方が少し年上の9歳くらいなのだが、彼は年齢の事を気にし無い質らしくなんとなくいい奴だった。お陰で今じゃ友達だ。

「今日は牛の飼料の草をさ。運ぶのを手伝って欲しいんだ」

「あいよ。力仕事なら任された。フォークは危ないから気をつけてモーリス」

「はは、ぼくのほづがなれてるよ」

もつとも、半分保護者みたいな感じでもある。
今日はこの村に居られる最後の日だからだなあ。
存分に仕事を手伝う事にするべえ。

ややあつてお昼。

「・・・ふう、とりあえずこれで全部かな？」

「みたい。とりあえず父ちゃんは牛の放牧があるから、ぼくたちは先にもどろつよ」

「はいはい、マルカおばさんのところのご飯は美味しいから楽しみだ」

酪農は本当に力仕事だ。乾燥させた草を飼料にしているが、牛の食べる量は恐ろしく多いので、飼料もかなりたくさん必要になるんだよなあ。沢山あるから重たいのなんのってまあ。

ソレはさて置き、午前の仕事も一段落ついたので、俺とモーリスは昼ごはんを貰いに一度家に戻る。

「あ、モーリス、ご飯の前に手を洗ってこよう」

「ええ、面倒臭いからそのままでもいいよ」

「だーめ、さっき牛の糞を運んだじゃないか。手が汚いままだと病気になるよ」

「そんな時はフェンの手品でばよつと」

「いや手品じゃ無理だから」

お前さんは俺をなんじゃと思ってんだと小一時間（ry
まあ兎に角手を洗って来い。俺はもう既に洗ったぜ。

「ちえー、解った。先行つててよ」

「元からそのつもり」

とりあえず、食事の準備をしていたマルカおばさんの手伝いでもしようと思い、マルカおばさんに声を掛けた。何と今日は自家製チーズを出してくれるらしい。美味しんだよねこう言つのはさ。

んで、飲み水を汲みに俺は井戸のある外に出たんだ。

………だけど、さ。平和っていうのはさ。

………
ひゅるるるる

「ん？なんだこの音」

………たった一発の砲弾で、くずされるんだ。

唐突に聞えた風切り音、この時は俺も何の音なのか解らなかった。でもその次の瞬間、突然の大音響と共に何かが降って来て、爆発した。

BAを展開していない俺の身体は生身の人間と変わらない。その時に爆炎をもろに受けて、一瞬にして意識を刈り取られちまった。

平和なんて、簡単に崩れちまうんだな。ホント。

『・・・ター！マスター！』

「・・・いつつ」

気が付けば俺は地面に倒れ伏していた。どうやら爆風で吹き飛ばされたらしい。

痛みがある身体を起したが、口の中が鉄臭い。一体何が起きたのか解らなかったが、一度死んだのは解る。リジエネレーションで再生したって所だろう。

「一体何が・・・」

次の瞬間、俺は言葉が出なかった。

俺の目に映っていたのは、先程まで確かにあった筈の家が轟々と火を出している光景。

その家だけじゃなく、村中に火が付いているかのような光景だった。ふと、マルカおばさんがいない事に気付き、まだ痛む体に治癒魔法を掛けてモーリスの家に向かった。

だがモーリスの家も完全に破壊されていた。

「マルカおばさん！」

いまだ訳が解らず混乱していた時、俺の視界に見慣れた服が写った。

若干焦げて変色していたが、間違いなく朝にマルカおばさんが着ていた服だった。

とにかく倒れ伏す彼女の元に駆け寄った俺は、大きな声でおばさんの名を呼んだ。

すこしして声に反応して眼を開けたマルカおばさん。意識が戻ったらしい。

「一体・・・いつッ」

「動いちゃだめだ！いま治す」

「・・・まっつて、おくれ・・・モーリスは？モーリスは無事？」

俺に手を伸ばして息子の心配をしてくるおばさん。

マルチタスクで治療術式を構築しながら彼女の手を握り返した。

モーリスが何処に行ったのかは知らないのだが、安全な所に居ると伝えた。

そして治療を掛けた。ソレで助かる筈だと思ったんだ・・・。

「よか、た・・・フェン、くんも無事で、なにより・・・」

「おばさん？・・・マルカおばさん！」

『バイタル低下中！治療魔法効果なし！』

何故だ！と思った。何度も俺を死の淵から救い出してくれた治療魔法が利かないのだと。

この時の俺は大分慌てていたらしい。

よく見ると脇が抉れ、とめどなく血が流れ落ちていた。

その事に気が付いたときには、既におばさんは虫の息だった。

「俺は・・・どれだけ気絶していた？」

『およそ20分です。恐らくどこかしらからの火薬式大砲による砲撃が来たのかと』

「なんで、治癒が・・・」

『治癒魔法行使には生体データが必要です。それが無い場合、治癒効率は著しく低下します』

それでも雀の涙程には効く筈だ。少なくとも通常の治癒魔法程度には・・・。

だが20分、20分もマルカおばさんは倒れていたのだ。

既に治癒が効かない段階に入ってしまったている。

治癒魔法だつて万能じゃない。細胞が死んでしまつているとすぐに再生は出来ないのだ。

苦しむマルカおばさんに来ることは、鎮痛剤を投与し意識を保たせる事だけ。

脇の怪我は先程の爆撃でぶつけたのか、なんなのかは解らない。だが解つた事は・・・おばさんは助からない事だけだった。

「眼をつぶつたらダメ！モリスのとこに行くんだろ！ダメだ」

俺は声かけを続ける。治癒は続けているが、それ以上に失血による消耗が早い。

輸血したくてもこの世界の人間と血液型が適合するか不明だ。

頭の片隅で助からないのは理解していた。だけど、諦めたくなかつた。

「・・・ダメみたい」

「おばさん！」

治癒は効いていない。正確には治癒が完了するまで、おばさんの命が持たない。

おばさんは苦笑の様な、泣きそうな・・・ソレでいて全部理解した顔になった。

何でそう言う事を、死の淵に立った人は理解してしまえるんだろうか・・・。

「フェン、くん・・・こんなこと頼むは、間、違いかもしれゲホゲホ」

ビチャツ　と、俺にマルカおばさんの吐いた血が付くが、俺は治癒を掛け続ける。

少しでも魔法が効いて欲しい、タダそう願って

「モーリス、を・・・おねがい・・・ね・・・」

「ダメだ。だめ・・・そんなお願いは聞いてない！　だから死ぬな。頼むよ・・・」

「ホント・・・何であたしが・・・こんな、グッ！」

「おばさん？・・・おばさん！？　クソ」

最後にビクンと痙攣し、フツと何かが抜ける感覚。生命が肉塊に代わる瞬間。

何度か感じたことがある人の死、それを知っている俺は……治癒を止めた。

彼女の見開いたままの瞼に手を添えて閉じさせ、両腕を組ませる。これ以上は何をしても治らない。諦めるとかそういう問題じゃない。

もう治癒も効かない程、肉体の細胞が死んでしまっていた。俺の魔法は、少し死ぬまでの時間を長くしただけだった。

久しぶりに感じるチリチリとした戦争の気配、燃える炎のてりつける感覚。

呆然としていた俺だったが、突然背後から人の声が聞こえて来た。だが、村の人間じゃない……聞いたことが無い声だった。

「お、生き残りがいるぜ」

「殺せ、そう言う命令だ」

命令？……そう、そう言う事。

「あいよ……すまねえな嬢ちゃん。大人しく死んでくれや」

マルカおばさんの遺体のそばに居る俺の背後に周り、腰に差して

いた剣を抜く男。

つまり、コイツらが

こんかいのはんにんか？

「・・・はあガキ殺すのは性に合わねえ」

男がそう言って、俺に剣を振り下ろした

「・・・へ！？な？！ ギャアアア！」

「な！ジャック！？テメエ！」

だが、俺はそれを“掴んだ” 腕に強化魔法を掛け、万力の様に剣を握る。

鈍い切れ味の剣であっても刃物は刃物、手からは血が流れるが気にしない。

そのままジャックとよばれた男を剣ごと投げ飛ばし、腕を折った。よく見れば男は鎧姿、どうやら軍隊らしい。

つまり、この村は少なくとも軍隊に襲われたと言う事だろう。

「この！ うぎっ！？ガッ！」

俺はそのまま身体強化を全身に行い、もう一人の男の懐に入り込んだ。

男が剣を握る前に腕を蹴り、そして金的を喰らわせた。

急所を蹴られ屈んだ所に上段蹴りで顔面を蹴り飛ばす。

身体強化魔法の力をもろに受けた男はそのまま吹き飛び、まだ燃えている民家へと突っ込んだ。

そして、もう一人の腕を折られてのたうちまわっていたジャックと言つ男に近づく。

「……聞きたい事がある……お前たちはどこかの軍か？」

「ヒッ！」

その目は、信じられないモノを見る目で

「どうなんだ？」

「そ、そくだよレコンキスタ様よ！だからどうした！」

燃え盛る炎のてりつける暑さで出た汗では無く、冷や汗をかき

「何故関係のない村を？」

「お、俺達は傭兵だ！金さえもらえればなんだったてする！」

ただただ、恐怖におびえている人間だった。

そう、つまりコイツらは金の為に

「 莫迦野郎が」

「ヒ、ヒイー！」

ふつふつと湧き起こる怒りを隠さずにした瞬間、目の前の男は隠し持っていたナイフで、俺の心臓を突き刺していた。こんな子供に相方が殺られた恐怖からか、ただひたすら手に持った武器で何度も目の前の俺を突き刺す。

肉を突き刺すグチャグチャとした音が聞えた。普通なら絶命していただろう。

沸き起こる吐血感・・・何度も感じたことがある血の味。

だが、これくらいじゃ・・・。

「・・・死なない、な」

「ヒイツー！！バ、バケモノ！！」

外傷を負っても、リジエネレーションをしても俺は死なない。

死なない俺に恐怖してナイフを落とし、落ちた腰の剣を取ろうと背中を見せた。

俺は慌てず男が取り落したナイフを手に取り 投げた。

「ヒグッ！」

背中に刺さるナイフに男は叫び声をあげていた。

俺はのたうちまわる男を前にし、フォトンバレットを展開。

それを撃ちこんだ・・・物理破壊の殺傷設定で・・・。

ブシャ

魔力弾は簡単に男を貫き、貫かれた男は糸が切れた人形のように倒れ伏す。

その顔は未知のモノに出会った恐怖と傷の痛みで歪み、眼を見開いて絶命していた。

「・・・ヴィズ、BA?にセットアップ。モーリスを探さないと・・・」

『・・・了解、ヴィーザフ・セットアップ』

俺はセットアップを行い、白銀の鎧に身を包む。

クソ、少し怒りで我を忘れていた。落ちつけ、冷静になれ、死に

たくなければ考える。

燃え盛る農家が倒壊していく中、HUDに表示される生体反応を探す。

幸いすぐにモーリスを探し出すことが出来た。

外傷もなく、只気絶しているだけだ。

俺はすぐ近くに倒れていたモーリスを担いで、燃えさかる村から脱出した。

既に村に俺達以外の住人の生体反応は無く、いたのは兵隊の様な連中だけ。

どうやら村は戦争に巻き込まれたらしく、空にはフネが来ていたのを見た。

そのフネが、村に砲撃をしたことは確かだった。

「クソが」

気絶したままモーリスを抱え、悪態をつきながらローラーダッシュで草原を走り抜けた。

追手が来ない様に、ミラーージュハイドで姿を隠して……。

「俺、帰ったら花屋になるんだ・・・後篇」

「俺、帰ったら花屋になるんだ・・・後篇」

妄想戦記

とにかく一番近い生体反応のする方向を目指して走った・・・。
広域探査による生体反応は少しずつHUDのマップから消えていく。

現在一番生体反応が多かったのは、村近くの森の中。

「　　ッ、モーリスが気絶していてくれて助かった」

そしてその森へ向かう道には、村人の遺体が何体も倒れ伏していた。
斬り殺されたような死体が多いことから、確実にあの兵隊も向かっている。

優しかった村人たちの無残な姿に、怒りからか手に震えが走った。

落ちつけよ俺、怒りを感じるのは後だ。

理由は解らんが今この村は戦争区域になっている。

やることはとりあえず村人と合流し、モーリスを預かってもらう事だ。

。じゃないと、戦闘機動が取れない。戦闘が出来ないと守れない・

俺は自分のやるべきこと（ミッション）を確認し、先へと進んだ。たく国は何してやがんだ。この間手紙を回収したのは意味を為さなかつたのか？

こんなタダの農村がいきなり砲撃を受けて火の海にされるなんて有り得ねえぞ。

『生体反応複数感知、内、敵性反応20、2時の方向』

グイズのセンサーに反応があり、その方向を望遠で見た。

ヘルメット内部のHUDに人間を示すマークが表示され、片方は村から脱出した人間。

もう片方は剣や槍などの武器を持つ人間であることが解った。

元々畑に出ていた人たちだろう・・・必死に兵隊から逃げている。その理由はさっきあったのと同じ、兵隊は民間人を殺して回っていたからだ。

「グロウタスク、スタンバイ」

『格納領域から出します』

俺は兵隊を確認し、走りながらもすぐさま狙撃する。

HUDには見たことがある人間、朝挨拶したマリーン婆が写っていたからだ。

別にこれが兵隊同士の鬪いだっただなら俺も手は出さない。

戦争したいなら勝手にやっているって話だ。

だが流石に民間人を殺そうとするのは、USN軍人であった己からすれば見過ごせるモノでは無かった。

『照準調整、撃てます』

「 ショットッ！」

白い煙の様な魔力残照が射線を見せつつ、グロウタスクの銃口から魔力弾が放たれる。

レールブラスターは使わない、フォトンバレットの術式だが、音速の数倍のスピードがあれば魔導師じゃない人間には十分すぎる威力だった。

ある者は首ごと消え、ある者は胴体がちぎれ、ある者は両足が消えていた。

物理破壊設定の魔法、魔法が使えない人間に防ぐことは叶わない。俺に次々と狙い撃たれ、草原に倒れていく人影を眺める。

最後の敵が倒れたのを見て、要救護者の元に向かった。

「……マリーン婆」

『生体反応、ロスト』

だが、遅かった。既に婆は斬られた後だった。
斬られてから追い討ちをかけられる直前だったんだろう。
死体を担いではいけないので、仕方なく婆も置いて行くしかない。
早く生き残りとは流しなれば、狙撃だけじゃ対軍戦は無理だぜ。
せめてガルヴァドス、一番使いたいのはグロムだ。ソレさえ使え
れば……。

『魔力反応検知！リンの魔法行使！？』

「場所は！？」

ヘルメットのHUD上に突如ターゲットマーカーが現れた。

マーカーで記された所には、生き残りの村人たちと彼らに今にも
追い付きそうな兵隊の姿。

上空には恐らくは竜種か？ドラゴンライダーと呼ぶべき存在も見
える。

「……アルアッソー起動、レールブラスター準備」

『了解』

もうなりふり構ってはいられない。

襲って来る相手が誰であれ、とにかく少しでも逃がさないと。
そう思い俺はローラーダッシュのスピードを上げたのだった。

まったく、何でこんなことに・・・クソ。

S i d e 三人称

タルブ村が破壊される少し前、ラ・ロシエール上空にはアルビオン艦隊が到着していた。

王党派が敗れ、新たに組織された現政府の艦隊である。

トリステインの王女とゲルマニアの皇帝の結婚式の為に参列した訳だ。

不可侵条約を結び、後は祝砲を上げるだけとなった筈だった。

だが、各艦隊が祝砲を上げた時、何故かアルビオン艦隊の一隻が突如爆発炎上して墜落した。

アルビオン側はトリステイン側から砲撃を受けたとし、そのまま宣戦を布告した。

そして、アルビオン艦隊はそのまま、陣地構築に丁度良いタルブを強襲した。

トリステイン側はすぐに同盟を結んでいるゲルマニアに援軍を求めた。

だが、返って来た応えは『先陣の到着は3週間後』と言うモノ、あまりにも遅すぎる。

どちらにしろトリステイン側は単独でアルビオンを対立する事となったのだった。

だが、当然そうそう簡単に諸侯軍を動かせるモノでは無い。
王軍も編成に時間がかかる為、タルブはほぼ見捨てられていた。

そんなタルブでは、アルビオン軍による掃討作戦が行われていた。
村ごと焼き払ったのは、その力を見せつける為だった。

常駐軍がいる訳もないタルブは、アルビオンの空中艦隊により壊滅。

勢いに乗っているアルビオンは陸戦兵力を降下し、残党の殲滅に当たらせた。

その中標的の殆どは罪のない村人たちだった。

村人たちは唐突な大砲からの爆撃によって吹き飛ばされ、竜騎士隊の竜のプレスに焼かれて死んでいく、生き残った村人たちは上空から狙われにくい森へと逃げた。

そして、ソレを追いかけ傭兵部隊も森へと進軍していた。
既にタルブ周辺にはアルビオンの部隊が展開し、陣を張り終えていた。

明らかに以前から準備が為されていたことは明白であった。

「シエスタ、急がないと置いてかれちゃうですよ」

「はあはあ、い、息が・・・」

「リンが引つ張るですう！後少しがんばるですう！」

そんな中、リンとシエスタも生き残りの村人たちと森へ避難しようとして向かっていた。

当初リンはフェンを探しに行きたがったが、シエスタ達を放置する訳にもいかず、結局シエスタ達についてココまで来ていた。彼女には戦う力が無い。正確にはフェンがいなければ彼女の力を発揮する事が出来ないのである。

「あ！不味いですう！竜さんがこっちに気付いたですう！」

「そ、そんな」

ココまで運良く逃げて来られたが、森まで後少しといったところで、アルビオン空軍の花形、竜の騎士に捕捉されてしまった。バツサバツサと羽根音を響かせて、騎士が乗った竜が此方へと飛んでくるのが見えた。

言わずもがな空を飛んでくる竜は、地べたを這いまわる人間のそれよりもウンと早い。生き残りの村人たちは必死で逃げたが、地の速さが違い過ぎた。気が付けば4匹の竜が村人たちの集団の上空を旋回していた。

突然村人たちの進行方向にいた中の一匹が口角を大きく開いた。その行動は竜がブレスを吐く予兆であることは、ハルケギニアに住

まう人間なら誰しもが解っていたことだった。

吐き出される竜の火炎、ソレらは村人たちに着弾せず、その少し手前に落ちた。

途端燃えあがる草地、ここ数日雨が降らなかったからか、その勢いはかなり強いモノだった。

その事でシエスタ達は理解した。一体竜の騎士達が何を考えていたのかを……。

つまりはなぶり殺し、一気に殺そうとせず、少しずつ焼き殺しその姿を楽しむ腹なのだ。

竜騎士になる人間は貴族である。平民である自分たちの命なんて露ほども感じない事だろう。

そしてタルブ村の生き残りたちはその場から動けなくなってしまった。

絶望したと言つのもあるし、前も後ろも火の海で動けなかったからだ。

煙に巻かれ咳をする声が響き、子供が唐突に泣きだした。

しばらくその様子を眺める様にホバリングしていた竜騎士たち。

だが、それにも飽きたのか、騎士のひとりが自分がまたがっている竜に指示を送る。

すなわち、ブレスを吐くようにと

大きく竜が息を吸い込む、火炎袋の中に入れて腐らせたエサから出たガスに、その口に生えた鋭く堅い牙を火打石の様に叩き火花を

散らせ着火した。竜の口から大きな火が放たれ、火炎放射機の炎の如く村人たちへと迫る。

もうだめかとその場にいた村人の殆どは眼をつぶり、子供がいた母親は迫る火炎から子供を守るべく強く抱きしめる。しかし、来る筈の熱波も火炎も彼らに届く事は無かった。

「ワイドエリア……サークルプロテクション」

大きな爆発音、普通ならば数十人の人間を軽く吹き飛ばす威力のプレス。

炎と言うよりかは爆炎と言うべきそれが巻き上げる煙が視界を遮っていた。

竜の騎士たちは確信していた。これで生き残りたちも死んだだろうと……。

しかし煙が晴れてくると、彼らの顔には驚愕と恐怖が浮かび始めた。

そこには半球上の光の壁に守られた、五体無事な村人たちの姿があったからだ。

「・・・リンちゃん？」

「な、なんとか・・・間に合った、けど・・・」

そう、ソレはリンが使った全周囲をカバー出来るバリアタイプのミッド式魔法だった。

火炎が迫る中、リンが必死に術式を展開したことで発動し、炎から村人たちを守ったのである。

民間人を守る。

ソレはフェンがいまだ守っているUSN軍に居たところからの誓い。それに村人たちはリンやフェンを暖かく迎えてくれた。彼らを守るのに躊躇は無かったのだ。

しかし

「だ、だめ・・・魔力が、足りない・・・」

「リ、リンちゃん!!」

唐突に守りの壁が消え、リンが倒れてしまった。

彼女は本来は魔力運用や演算処理のサポートの力が強い生体デバイスである。

攻防系の魔法は使えなくはないが、それこそ一般魔導師以下なの

だ。

そんな彼女が結界魔導師が使うような魔法を行使すれば、それこそ村人たちを覆える程の大きなバリア魔法を使えば魔力切れによるブラックアウト現象を引き起こしてしまう。

つまりは一回しか守れない盾だったのだ。当然それを見逃す竜騎士達では無い。

光の壁には戸惑ったが、それが消えた事により再度攻撃を仕掛けようと上昇した。

村人たちを見渡せる位置からもう一度プレスを吐かせようとしたのだ。

今度こそダメかと、村人たちは眼をつぶる。

シエスタも眼を回しているリンを守るかのようにギュッと抱きしめた。

そして竜が大きく口を開き、そこから火炎を吐こうとして

バラララララララ

!!!!!!

何処からともなく聞こえる奇妙な音、しかしソレと共に竜の断末魔が響き、竜が落下していった。あまりの出来事に口をポカンさせる村人たち、何が起きたのかは解らない、しかし竜が何かによって撃ち落とされたと言うのは解った。

そして今自分たちが来た村の方から、白い人型の何かが猛スピードでこちらに迫るのを見た。ソレは左手は何故か背中にし、右手には何かし字型の細長いモノを握っている。そしてそのし字状のモノが光を放ち、そこから大量の光弾が放たれた。

今まで体験した事のない弾幕と言う攻撃に対応出来ず、2体目の竜も撃ち落とされてしまう。

そしてその白い人型は村人たちの前に来て、背中に担いでいた何かを置いた。

ソレは子供だった。子供がそれほど多くないタルブ故、その子供が誰の子なのかすぐに解った。

村人の一人がその子供を手に抱いたのを見ると、人型は再び残る2体の竜目がけて、今度は空へと飛び上がった。

2体も仲間が撃ち落とされたアルビオン空軍所属の竜騎士。

白い人型に狙われた竜騎士は、だがそうやすやすとやられはしないと、竜を操って不規則な戦闘機動取らせ、弾幕を回避しようとする。白い人型は空いた左手に今度は右手に持っているとは別の棒状の何かを取り出した。

ガチャ バス！バス！バス！

そしてその棒状の何かからマズルフラッシュが起こり、広範囲に先の光弾がばらまかれた。

予想できない攻撃にあっけなく羽根を貫かれ、また一匹竜が騎士ごと落下した。

最後の一人は叶わないと思い逃げようとしたのだろう。背中を向けて空域を離脱しようと、竜に指示を出した。

白い人型はそれを見るや、今度は肩に何か四角い箱の様な物を何時の間にか出現させる。

そしてそこから白い煙の様な物を噴き出しながら、何かが飛びだした。

先の弾幕より遅いが、放射状にばらまかれたその何かの一つが竜騎士に当たり

ドッカーーーーーーン!!!!!!

大きな爆発を空中で起した。そしてバラバラになった肉片だけが地上に落下していった。

まさに一瞬の出来事だった。撃墜を確認した白い人型は、村人たちのすぐ近くに降り立った。

「みんな大丈夫でした？」

そして、タルブの村人なら一度は聞いたことがある声が人型から聞こえた。

人型は村人たちの元に駆け寄ろうと動き出す。しかし

「バ、バケモノ」

村人の一人が、白い人型にそう叫んでいた。それを聞いてビクッと体を震わせる人型。

村人たちには恐ろしかったのだろう、メイジでさえ単独では倒すことが難しい竜を、目の前の人型は4体も瞬殺したのだから。

例え白い鎧の中身が知っている人間だったとしても、今の彼らには解らなかつたのだから。

「……………」

白い人型は無言になり、シエスタの元へと歩む。
村人たちは恐怖で動くことが出来ない。

シエスタも恐怖と混乱した頭では動けなかつた。
ただ、腕に抱いたリンを白い人型から隠すように抱きしめるだけだつた。

「……………リンは、無事ですか？」

「……………え？その声は」

「魔力切れか。全く無茶をする。ディバイド・エナジー」

そう言うと、彼が手に持った物から白い光が現れ、リンを包み込んだ。
んだ。

その時に白い人型のヘルメットの中からくぐもつた声が聞こえた。
シエスタはようやくその白い人型の中に誰がいるのかが解つてしまつた。

「……………うん、はっ！村人さん達は！？」

「リン、村人は無事だ。よく頑張った！」

「あ！主殿！！！」

ズキン。

シエスタの胸が痛んだ。

私たちは命の恩人であるあの少年になんてことを言ってしまったのだらうと。

彼女は解ってしまったのだ。あの白い人型の中の人は、フェンであると言う事を。

村人たちがおびえた視線を向ける中、白い人型であるBA？を着込んだフェンは、特に何も言うこと無くリンの手を取った。そしてリンの身体が光を放ち、突然妖精の様に縮んでしまった。

驚きに眼を見開く村人たちを尻目に、「ユニゾンスタート」と声を出す。

そして今度はリンの姿が消え去ってしまい、村人たちは白昼夢を見ている感覚に陥った。

「シエスタ。急いで森の奥に皆とにげてくれ」

そうフェンはシエスタに告げると、背中のパックパックを變形させ空中に浮遊した。

「あ、貴方はどうするの!？」

我に返ったシエスタがそう問うと、彼は

「・・・ちよっと、戦争にいつて来る」

そう彼女に応え、爆音と共に一気に空中へと飛んで行ってしまった。

残されたシエスタは、村人たちを正気に戻しながら、絶対にあの少年に謝らないと決めた。

命を救ってくれた恩人に、自分たちは“バケモノ”と呼んでしまった。

その事が彼女の心を暗くさせたが、今は生き残ることが先と割り切ったのだった。

『格納領域からの実体化準備開始します。敵増援を確認、HUD上に表示します』

【先の交戦データから敵を竜騎士と断定、ガルヴァドス・トラッカの使用を提案ですう】

「・・・マルチタスクを使う」

いやはや、倒しても倒してもきりがない。

広範囲攻撃は確かに効果的なんだが、敵さんが分散して展開していると効果が薄い。

倒せない事に逆にストレスがたまって、俺の精神がマッハでピンチだ。

おまけにさつきなんて助けた村人からバケモン扱いだもんなあ。
事実だけど流石に凹むわ。

『エネミー 敵竜騎士捕捉 タリホー 数 8 ヘルメット HMS 作動開始』

俺の網膜の動きに連動し、次々と広範囲に散開した竜騎士たちをロックオンするマーカーが、俺のヘルメット内のHUDに表示される。リンの演算処理能力により、最大で20以上の標的を同時攻撃出来るのだ。

作った俺が言うのもアレだが、どこのイージスシステムだ？

同時ロック数20以上とか普通にイージス艦以上だぞ。

まあヴィズはそこいらのヘカトンケイル級コンピュータ程度には負けないだろうけど。

「……センサーはオンのままトレースを続ける、独立トラップ術式の展開率は？」

『トラップ網展開率はおよそ4割、敵予想進路に展開中』

「OK、続きを作っておこう……」

深追いはしない、あくまで目的は村人を守ることだ。

下手に持ち場を離れて村人が強襲されたら目も当てられネエ。

俺の身体は一つしかないからな。守るべきところは認識しておかないと自分が死ぬ。

くそう、これで偵察衛星の一つでもあればなあ。

データリンクで数百キロ圏内の敵がすぐに解るのに。

無いもの強請りなのは解ってはいるが、歯がゆいっただらありやしない。

防衛線構築は難しいから、正直あまりやりたくは無いだ。

敵さんが大挙して押し寄せてくれれば、殲滅するのは簡単なのに……

砲撃魔法バンバン撃って、蒸発させちまえば後が楽なんだがなあ。

ソレも敵が近寄って来なきゃどうにもならん。

ん？自分から行けばいいじゃないか？アホ言っな。

確かに敵を全滅させる力はある。だがごちとら単独、おまけに衛星の情報支援も無い。

だが今優先しなければならぬ事は、生き残った村人たちの防衛

だ。

奴さんらの狙いが何故かは知らんが村人を全滅させることらしいしな。

俺が持ち場を離れて、ソレでセンサー網から漏れていた敵に殺されたら目も当てられない。

グイズのセンサーは確かに優秀だが、丘陵等が何気に多いこの周辺だと、どうしてもセンサーに穴が出来てしまう。まさか敵さんにリーダーの概念がある筈は無いと思うが、油断はできない。

『設置トラップ網、リンク開始、これでトラップ兼センサーとしても機能しますね』

んで、さっきから俺が何してるのかと言うと、長期戦を考えた独立型のトラップ網の形成だ。

イメージ着かなきゃ魔法の地雷原だと思ってくれば良い、ほぼその通りだから。

独立式と言うのは、簡単に言えば術者がいなくても、しばらくは効果が持続する術式の事。

込めた魔力量で術式が機能する時間が変わるが、大体一日は持つように作る。

……本当なら部隊単位でやることを1人でやるか……過労死まっしぐらだな。

「最後に脅しの一斉射、ガルヴァドス装填」

『了解、 魔力装填完了』

「良し発射」

とりあえず非殺傷のガルヴァドスを発射し威嚇しておいた。

ん？なんで殺傷設定をやめたか？それは村の為なのさ。

俺の魔法ガルヴァドスは、簡単に言えば魔法の無誘導ロケットランチャーなのだ。

んで、そいつが物理破壊の殺傷設定で人間に当たるとな？

バラバラになっちまうんだよ。あえて何がと言わんが……。

ここの名産品はワイン。ワインの原料はブドウだけど、ブドウはとてもデリケートな植物だから血液がしみこんだ土で育てられるわけがない。育つとは思いが途中で枯れる。

ならば完膚なきまでに、肉片一つ残さない様に魔法で消滅させればと思うかもしれないが……それ実行するのは俺だぞ？という人間を消滅させる出力で砲撃魔法を放つたら、地面が抉れるとかの前に融解して蒸発しちまう。

後に残るのはペンペン草一本生えない荒れ野……畑の再生は絶望的だろう。

……実の所、さっきバケモノと言われたお陰で、一気に頭の中の血が下がったんだよな。

お陰で冷静な判断が下せるくらいにまでクールダウン出来たが……
何だかなあ。

とりあえず村人たちの避難した森まで戻ってきた。

タルブ村の人達を怖がらせない様に、離れた所でBAを解除する。幸いな事にBAはフルフェイス型ヘルメットを展開するので、俺の顔は見られてはいない。

でもな・・・なんつーかねえ、気にしちゃいないんだが・・・いや、結構気にしてるな。

バケモノと言われた手前、生き残りの彼らの元にスツと出るのはちよつと、な。

木々の隙間から覗いてみれば、どれもこれも不安を隠そうともしていない。

まあ、生き残りの人間の中には身内が行方不明の人もいる訳で・・・。

オブラートに包むつもりが無いから言うが、彼ら以外にもう村人の生命反応は無い。

あるのは見知らぬ傭兵の生命反応だ。・・・これの意味する事くらいはわかるだろ？

(・・・ま、今のところは大丈夫そうだ)

とりあえず、特に目立った恐慌の様な事は起きていない。

こう言った中で一番怖いのは、味方同士で意味も無く争う事だ。リーダーシップを取れるシエスタの父親が生き残っていた。

だからそう言うのが起きなかったんだろ。

(はぁ・・・やれやれだぜ)

仕方ないから、彼らから少し離れたところで休憩を取った。

一応何かあったらすぐに対応が出来る位置に居る。

まさかとは思つが、まあ用心の為だわさ。

(どっこい正・・・古いか・・・)

とりあえず魔力を回復させる為に、レアスキルを発動しつつ木に体を預けた。

母上がやったサバイバル訓練のお陰で、俺はどこでも寝られるのはありがたいぜ。

こういうところは母上に感謝だわ。お陰で気兼ねなく戦える。

ザッ

だが俺が休もうとしていると、すぐ近くで足音が聞えた。

知っている気配だったので、俺は特に顔を向けることなく注意する事にした。

「・・・あんまり、村の人達から離れたらダメだ。シエスタ」

「フエン君」

そこに立っていたのは、なんかうかない顔をしたシエスタだった。ふむ、まあ大体想像が付くかな……。

「……心配しなくても、俺は気にして無いよ」

「！でも、フェン君が誤解されたままなんだよ?!」

「いいの、俺が気にして無いんだから。それに今は生き残ることが先決だ。むしろ村の人達を守り切れない事の方が、バケモノと呼ばれる事よりも、俺にとっては悔しい」

「ッ!……」

感傷に浸るつもりも無い、戦場でIFは無い。

マルカおばさんが死んだのも、マリーン婆を助けられなかったのも、な。

「明日はどうなるか解らない。けど、せめてココに居る人達は守るよ」

「……なんで。何でそんなこと言えるの？私たち……フェン君に酷いこと言ったんだよ?」

「うーん……しいて言えば、それが矜持だからか」

「きょう・・・じ？」

「そう、矜持。俺は元軍人で今は夜天の防人。戦争に関係ない人間を守ることが俺の誓い。それにタルブの人達は俺に優しくしてくれた。だから、守りたいと思った」

「フェン君・・・やっぱりその」

「だから、謝らなくていい」

「で、でも！」

あー、なんか無限ループに陥りそうな感じだぜ。
と言うか何故にシエスタが俺に謝るん？

「とにかく、俺は気にしてない。だから今まで通りでお願いします。
それではお休み」

「ちょ、ちょっとフェン君！・・・もう」

俺が言いきり、背中を向けて眠るポーズをとった。

彼女は少し納得していない様子だったが、そうやって謝られる方が辛いつて時もあるんだぜ。

「ごめんね。本当にごめんね」

だから、俺が睡魔に落ちる瞬間。

そう呟くように聞いたのは、聞かない事にした。

次の日、空は晴れ渡る様な青空だった。

いまだ火がくすぶって煙を上げている村さえ見えなきゃ、いい天気だと思えたんだがな。

結局敵さんは夜中に攻めてこようとはし無かった。昨日の脅しが効いたのだろうか？

『レーダーに感あり、大きいです。恐らく飛行戦艦』

「おうおう、歩兵や艦載機じゃ無理だから、戦艦を引っ張ってきたのか？」

「飛行甲板と人間よりも大きな熱量と生命反応、戦艦ですけど航空母艦も兼ねてるのかもしれないです」

大きな熱量、ね。大方昨日の竜とかだろうなあ。

無人機に比べりゃマシだが、機動性はある分相手するのが面倒臭

い。

ま、こっちの森の方に近づけさせなきゃ問題無いだろう。

一応念のために、森の村人たちがいる辺りを封時結界で覆うべきかどうかを考えていると。

『敵竜騎士の発鑑を確認、編隊を組んでこっちに向かってきます』

「風のメイジでもいるんかい。発見されるのが早い気がする」

「とりあえず準備しないと怪我しちゃいますう」

どうやら発見されたらしい。結構な距離だが、魔法使いなら感知出来るのかもな。

ソレはともかく、リンとユニゾンしBA?を展開、ジェットパツクも起動させる。

今回はせっかく母艦から来てくれているのだ。竜騎士達をお出迎えしなければなるまい。

「グロウタスク展開」

『グロウタスク、格納領域より実体化させます』

超長距離用兵装デバイス・グロウタスクが、俺の腕の中に実体化する。

グロウタスクをパワーアシストと身体強化魔法で支えつつ構え、狙撃準備を整えて行く。

「狙撃準備、術式レールブラスター、弾種は多重弾殻弾」

『了解、出力をマテリアルショットモードへと移行させます。』

エネルギーライン、全段直結。ランディングギア、アイゼン、ロツク』

BA？の四肢を固定し、疑似物質で構成されたランディングギアが降りた。

そして狙撃体制に移行する。ガシュっという音と共に、銃身冷却フィンが稼働を開始。

グロウタスク内の環状魔法陣チャンバーの中で魔力弾が形成され、複数の外殻を持つ多重弾殻弾に圧縮処理が為されていた。

ココから敵までの距離は15km、だが狙撃用のグロウタスクなら魔法の補正で範囲内だ。

竜騎士たちは丁度V字編隊を組んで飛行してくれているから狙いやすいぜ。

『チャンバー内魔力、正常加圧中。ライフリング形成、回転魔法陣展開。撃てます。』

ヴィズのその言葉と共に、俺はグロウタスクの引き金を引いた。ドズンと肩にかかる衝撃と、排気機構の出す独特の吸気音が辺りに響き渡った。

レールブラスターの術式により、電磁加速及び電荷を加えられた

半プラズマ化した多重弾殻魔力弾頭は、その飛行を阻害される事も無く、1秒もかからず標的である竜に命中する。

ズガーーーーーンッ

【多重弾殻弾の魔力弾コア崩壊を確認、魔力爆発を検知】

『エネミー
スプラッシュ

敵竜騎士、撃墜』

念話による撃墜報告を聞きつつも俺は次々と次弾を発射した。

超長距離の狙撃により竜が死に、地べたへと落下していく竜騎士達。

へん、どうせレビテーション使えんだから、落ちても平気だろうな。

「ジェットパック起動、連中が防衛線を突破したら・・・戦艦を吹き飛ばす」

『【了解！】』

そして俺はジェットパックを吹かすと、タルブの空へと飛んだ。

.....

.....

.....

さて、そろそろ戦闘を開始して昼になりそうな感じだ。

相変わらず敵の本隊はこちらを警戒して近寄ろうとしない。

まあその方が希少技能リサイクルを使える間隔が増えるから、こちらとしては楽だ。

戦闘を開始して解ったのは、大方の陸戦兵力は排除出来たこと。

ソレと竜騎士の様な空戦兵力もほぼ削ぐことが出来たことだ。

敵さんが警戒してくれたのか戦力の小出しを繰り返してくれたかな。

その中に何か見慣れた帽子と髭があつた様な気がするが、対空狙撃でこちらに来る前に落した。

なんか相手したら面倒臭い気がしたのだ。電波を受信でもしたのだろうか？

ソレはさて置き、魔法を使った持久戦は俺の得意分野だ。

目安として付けた防衛線を越えてやってきた敵部隊に狙いをつけて落とすだけで良い。

んで、戦力は有限だから落とし続ければ敵の戦力は消えていく。

そんな訳で後は戦艦を潰すだけという訳だぜ。

「シールド展開、そろそろ幕を引こう」

『多重シールド展開、敵艦砲撃を開始、予想射線を表示』

HUDに表示される敵さんの大砲の射線、多重シールドも展開しているから怖くは無い。

だけどシールドを揺らされたりする衝撃はあんまり好きじゃないのだ。

だから避けられそうな奴はひよいひよいつとかわして行く。

『敵艦隊、有効射程に到達』

「ツイングロム起動準備、砲身展開」

『了解、格納領域より取り出します。ツイングロム、スタンバイ』

格納領域から取り出された2本のバズーカが、ガシャンと俺の肩にあるアタッチメントに接続され、バズーカ内部のチャンバーに魔力が供給されていく。砲身を中心にして環状魔法陣が展開され、それ自体が追加バレルとして機能し、魔力を収束・圧縮を開始する。

「・・・俺は逃げる時間を大分与えた。逃げなかったことを呪え」

『ツイングロム、発ッ!?アンノウン接近!?!』

ヴィズの報告に砲撃をいったん中止してしまう。

HUDのリーダーマップを見ると、一番大きな艦隊旗艦と思わしき艦の向う側に反応が・・・。

あ、なんかスゲエやな予感がする・・・。

【この魔力パターンは・・・ルイズさんですう！？】

「なに？彼女は飛行魔法は使えない筈・・・」

と、ココまで俺が呟いた途端。

キユゴオオオオオオオオオオオオオオオオオ

タルブ上空に太陽がもう一個出現しました。え、なにこのいじめ？

「ぬ、ぬああああ！！！」

『な、なんて言う魔力反n

』

そして俺には疫病神でもくっ付いているんだろうか？

戦艦に近づいていた俺達は、その目の前の戦艦を中心に発生した太陽に呑みこまれた。

しかも、ソレは只の太陽じゃなく、魔力の塊　もうわかるだろっ？

「ぐばぁっ！？」

リンの許容限界を超えた超魔力の塊に触れたのだ。

俺は当然のことながら吐血、そのまま地面にINし、犬神家状態に……。

本当に、俺は呪われてるんじゃないかと最近思う様になった。

……
なお、これは後で聞いたのだが。

あの時太陽を発生させたのは、何とルイズ嬢だった。

そこに連れて来たのはサイト、あの零戦を飛ばしてタルブまで来たらしい。

あの零戦には燃料が無かった筈だが、そこはコルベールさんが勝手に研究して作っていた。

んで、サイトは俺やシエスタ達を助けようと、零戦を飛ばしたのだそう。

そして、何故か零戦に密航者がおり、それがルイズ嬢だった。

王女の結婚式の際、お祝いの句を述べねばならない彼女は始祖の祈祷書と呼ばれるこちらの世界では聖典の様なモノを持ったままで来たらしい。

んで、炎上してしまったタルブのあり様に怒りを覚えた。

すると途端彼女が指にはめていた水のルビー& amp;手を持っていた始祖の祈祷書が反応。

そこに始祖の魔法である虚無魔法が現れ、それを用以て艦隊を丸

ごと巻き込む爆発を起した。

その魔法の名前も、ずばりエクスプロージョン、爆発である。虚無と呼ばれる伝説の魔法では初歩の初歩らしかった。

それでも伝説と呼ばれていたのは伊達では無く艦隊は全滅。

俺は……またカロンさんに会っていたよ。

その後俺が眼を覚ました時には、ルイズ嬢が全てをやったと言っ事にされていた。

タルブ救援に駆けつけていた王軍によってな。

アルビオンの艦隊を撃ち滅ぼした伝説として……。

ま、俺としては村の人達が守れたから別に良い。

ルイズ嬢が美味しいとこ全部持って行ったのも、全然悔しくない。ああ悔しくない。

大事なことから二度言った。ソレはさて置き

「むむむ……ここはこうだから……」

「フェン君、ご飯もってきたよ」

「もうチヨイまって」

「ダメです。ちゃんと食べないと大きくなれないのよ？ほらテーブルに座って」

「……むう」

シエスタが良く俺の研究小屋に来るようになっていた。

微妙に罪滅ぼし感があるのは感じるが、スルーしておいた。
だけど、なぜかこの世界でもう一人のリニスを生んでしまった様な感じであった。

「ちょ！巻き込ま」 イ、エ、ア、ア、ア、ア、」 (後書き)

*ふうタルブ村編終了だ。今回はちょっと急ぎ足でした。

なお虚無の攻撃を喰らったからと言って、フェン君が虚無を覚えることはありません。

あれは、希少技能みたいなものでしょうから・・・王族の血族じゃないと発言しないらしいし。

それではまた次回会いましょうノシ

「関係無いと言える大人になりたい」

「関係無いと言える大人になりたい」

ヴォン、ヴォン、とヴェストリの広場では空気を切り裂く音が響く。

体がなまならない様に俺が木剣を振っている音だ。勿論強化はなるべく無しのな。

日課になった教官達やシグ姉さんとのシャドウによる模擬戦も、強化無しという無謀で挑み毎回殺されるビジョンを見せられている。強化魔法ありきだといいつつここまで、射撃魔法ありだと一応勝てるくらいにまではいける。

でもやはりいまだ小さきこの肉体では、魔法のブースト無しでは満足に戦えないんだよなあ。こっちの水魔法には顔だけだけど肉体に影響を与える魔法があるから、研究して全身に使えないかやってみようかしらと思ったり、帰ったらラインに調整して貰おうと思っ
ていたりする。

「セイ、ハツ、ヤ」

ヴォンヴォンと素振りを止めず、袈裟、切り上げ、突きといった

ように基本的な動かし方をなぞるように行う。日々やり続けるからこそ鍛錬なのである。

それはさて置き、現在巷では戦勝ムードで溢れている。数で勝るアルビオン軍を撃退したとして、その時王軍を率いていたアンリエッタ王女が聖女と湛えられているくらいだ。

「アンリエッタ王女万歳ッ！」

「トリステイン万歳ッ！」

しかもその波はココトリステイン魔法学院にまで及んでいる。アルヴィーズの食堂では戦勝パーティが催され、別段参加していた訳じゃない学生たちが大いにパーティを満喫してらっしゃるらしい。平和で実にいいんじゃないかねえ、うん。

実際に艦隊を撃退しているのはルイズ嬢な訳で、王軍はその内のなんとか墜落を免れた残存艦を撃沈したりしただけなんだが、そこから辺の裏情報は国民には流されていない様だった。勿論貴族も含めてな。

ま、大方理由は解るがな。いわゆる戦意向上ってヤツだ。上層部の考えそんな事である。我々は強い！負けない！と行った感じに思考誘導し、世論を戦争に対し肯定的にさせると言うような国でも行ってきたテンプレみたいなもんだ。

もっともソレで勝てるかどうかは別問題なのであるが、精神から負け戦モードじゃ勝てるもんも勝てなくなるって所・・・なのか、

はたまたただ単に本気でそう思っているのか・・・どちらにしても無用な戦乱は開かれそうだ。

「 スウ、フツ！ドツセイ！ツ！」

シャドウからの剣劇を一度剣の腹で受け、ワザと身を引いて相手のバランスを崩し、上段から剣を打ち降ろす。普通の空いてならこれで相手を殺せるんだが、流石はソフィア教官。バランスを崩したのを利用して、逆に予測不可能な動きで俺のわき腹が切り裂かれちまったい。

「フツ、フツ、フツ・・・スウー、ハアアアツ・・・ふう」

乱れた息を整えて、空を見上げる。全く、ウチのご主人はとんでもない魔法使いだっただな。彼女が艦隊を全滅させるクラスの大爆発を起してくれたお陰で、アンリエッタ王女は近日中に戴冠して女王となる訳で、つまりはゲルマニアとの婚姻を解消してしまったのだ。

勿論いまだアルビオンの脅威は消えていないから、軍事同盟はそのまま残すらしい。

ゲルマニアとしても、少数であったのに単独で精強と言わしめていたアルビオン空軍を撃退したトリスティンとは同盟を続けていた方が賢明だと判断したんだろう。流石は合理的な国だぜ。

「っと、火は、スファイア形成・・・よし」

鍛錬が終了し、魔法で火をつけて煙管で一服・・・あ、一応注意しておくが、煙草では無く薬だから合法だぞ？この間受けた魔力過多の影響で、また調子が少し悪くなっちまったから多めに見てくれや・・・しかし、これから先どうなるんだろうねえ。

まあなんとなくだけど、戦乱に巻き込まれるってのが幻視できるな・・・。

俺もタルブで大暴れしちまったしなあ、この国の諜報が馬鹿じゃないなら近いうちにお呼びがかかるだろう。どう対応すべきか、今の内シミュレートしておいた方が良くも知れん。

「すー・・・フハアゝ・・・ま、ケセラセラよってな」

『なるようになれでしたっけ？』

「ヴィズ、聞いてたのか？・・・まあこちらからは動けんからな。そう思うしかないさ」

くそ、帰れば楽なんだがなあ。一応次元空間を渡る術は解った。

問題は这个世界と他世界とを隔てる次元航行エネルギーの流れで出来る渦巻きの突破だ。

それもWECリアクターの運用さえ完全なら、もしかしたら・・・。

「ふ〜・・・希望的観測は・・・しない質なんだがなあ」

晴れた空を眺めつつ煙管から煙を吹かし、俺は広場で1人ポツンとそつ漏らしたのだった。

さて、あ後は特に何もなく、学院でルイズ嬢の雑務を引き受けたり

（使いつぱしりとも言う。簡単に言えば雑用兼召使。普段と変わらないな）

サイト達との訓練を行ったり

（ルーンにより零戦を使えるというチートが判明した為、航空戦も視野に入れた訓練）

ロストロギアの研究をしたり

（一応運用の用途は立った。リンさえいれば制御も可能。BAは仮組み中）

何故か俺の小屋に入って来るようになったコルベールさん

（零戦を研究したくて忍び込んだ際、俺が見た事も無い技術を持っていることを知った）

彼との技術的な会話を楽しんだり

（主にコルベールさんから聞かれ、それに対して応えられる範囲で応えと言ったモノ）

それに乱入してきたギーシュと3人で怪しい笑みを浮かべたり

（技術系が解るヤツが集まると自然とこうなるんだよ？）

それによって零戦の強化プランが出たり

（外見変えず材質変換、エンジンを魔導炉に変換、固定化処理で実質メンテ不要のチート）

ルイズ嬢の機嫌を宥めたり

（原因は主にサイト、理由は様々だが気が付けば女性との接点があるらしい）

こんな感じに過ごしていると、唐突に王宮から呼び出しを受けたのだった。

こりゃルイズ嬢が魔法を使った事がばれてるなあとか思っていたら、何故か俺とかも同伴しなければならぬ羽目になっていた。今回は学院で大人しくして用かなあと思っていた矢先にご指名で有る。これは警戒せざるを得ない。

俺はこの国に仕えている訳ではないが、便宜上ルイズ嬢に仕えている為、彼女の顔に泥を塗る訳にもいかず、王宮　　正確にはアンリエッタ女王陛下からの召喚に応えることになった。

.....

.....

.....

王宮に着いた俺達はそのまま姫・・・もとい女王アンリエッタの部屋へと案内された。

女王となった彼女は若干やつれている。まあ大体察しが付く、責務が重くなつたからだ。

つまり今までは“女王”という立場であり政りごとに参加したり口をはさむことは今までほぼ無かったのが、“女王”という立場に代わり、国を治める者として政治・軍事・財政・貴族のご機嫌伺いなどにも思考を回さねばならない。

多分やつれて見えるんじゃないかと、マジでやつれてるんだらう。女性だからか化粧で誤魔化しているが、このフェン様はごまかせ

ないぜ！

・・・似た様な経験タップリしたからな。

「女王陛下にはご機嫌麗しく、先の大勝、臣下として嬉しく思います」

恭しくルイズ嬢が首を垂れる。当然その配下扱いの俺達もそれに習う。

流石にここでそれに応じないなんていうK（空気）Y（読まない）はしない。

一応相手はこの国のVIP、目をつけられるのは簡便だ。

「勇敢なおともだちに、お礼を述べたいと思ひまして」

どうやらタルブ村でのあの魔法行使の件は完全にネタが上がっているらしい。

それもそうだろう。現在巷ではフェニックスだとか色々噂が上がっている零戦があるのはトリスティン魔法学院だけ。調べればすぐに解る事だ。

この国が小国だからと言って馬鹿にしてはいけない。こと諜報に關してはかなりのモノがある。俺ですらヴィズが探知しなかったら、こちらを監視していた人間に気が付かなかったほどのだ。

そんなこんなで会話は続く、俺とサイトは彼女等が話す間はずっと後ろで立ちっぱなしだ。

小声で会話したくても、この距離じゃ確実に咎められるだろう。サイトが念話を仕えたのならまだマシだっただろうが、生憎サイトに魔法の才はなかった。

仕方なくウチのデバイスと早く終わんねえかなと会話していると

「これであなたに恩賞や勲章を与えることが出来なくなりました。理由は解りますね？」

「……はい」

どうやら会話が佳境に突入していたらしい。

あの魔法はどうやら伝説級の魔法だったらしく、王宮の貴族に利用されない為にも、ルイズ嬢は極秘ではあるが女王陛下直属という立場になると言う事だった。始祖の祈禱書と権利行使為の権利書も女王より渡されているというある意味破格の待遇だ。

これで話が終われば良かったんだが

「それと、ルイズの小さな従者さん。貴方もタルブで戦っていたと報告が上がっています。タルブを救援してくださったことにひとまずは礼を言います」

「……偶然あの場に居合わせただけですよ」

どうやら俺があのか村を防衛していた事も漏れたらしい。あんなときは顔を隠してたから大丈夫かと思っていたが、考えてみれば声で判別出来た人間も居た訳だし迂闊だったな。

「そうですね。出来ればその力で私の友人であるルイズを守ってください」

「それも契約のウチです。お任せを」

しかしてつきり王軍にでも参加とか言い渡されるかと思ったが、結局言われたのはルイズ嬢を守ってあげてくださいか・・・甘いと言うか、なんて言うか。ま、そこら辺は女王陛下殿の温情に感謝しないと・・・俺だって好きで戦争に介入した訳じゃないしな。

もつとも警戒は怠れなくなった。特にこの世界の貴族相手にはな。ココの連中魔法はそれ程でもない癖に、陰謀やその他に關してはかなりのモノだ。魔法薬だって人心を操る類のモノがある。ミッドで見つかれば終身刑は確実な代物だってあった。

俺の場合薬で操られたとしても一時的なモノだし、殺されるにしても外的要因では死亡しずらいと言うか生き返ってしまう。闇の書の転生機構は伊達では無い。俺の頭が消失していても記憶ごと再生させているくらいだ。太陽の中に数年放り込まれない限りは死なないだろう。

だが、現実問題として薬は効いてしまうとと言う事だ。煙管に使う薬草の実験で薬などの様なものが俺にも効くと言う事はよく解っ

ている。幾ら復活出来るって言っても、好きこのんで毒なんかのみたくもねえ・・・貴族からの誘い関連は絶対蹴らなくてはなるまい。

ルイズ嬢に関してもそうだ。今の所姫さんの役に立てるという風に認識しているが、彼女が背負ってしまったモノはあまりにも重い。あの力は文字通り爆弾だろう。戦略規模の威力の魔法なんて、俺だって儀式魔法を用いないと無理だ。

それに彼女の場合、今まで魔法が使えず周りから必要とされて無かったのに、ここに来てようやく陽の目を見たと言うのもある。無意識だろうが魔法が使える様になったことで、自分が頼られている。自分の力を必要としてくれていると感じているのだろう。

それを自身の居場所だと勘違いしているかもしれない。こういう人に頼られると言ったような感情と言うのは麻薬の様に心に浸透してしまう。それが例え人の軀の上に立つ血なまぐさい場所であっても・・・役に立てると思っただらそれを正当化してしまう。

やっと手に入れた魔法の力、皮肉なことに今度は強力すぎて戦争くらいでしか役に立たん。現状は戦争中だからいいとして、戦争が終わったら当然派閥争いの中でヤバい事になるだろう。それこそ暗殺者が送られてくるレベルの・・・サイトをもって鍛えておかないとダメだろうな。

あと、近いうちに契約を切らないとな。

元々俺が彼女と契約したのは、コルベール氏への薬代返却の為だった訳だし。

「えーと、この図式はこうすれば」

「主殿、このまんまだと術式の機能が凄く削られちゃうですよ？」

「しかし、これ以上の拡張は今の設備じゃ難しいぞ？」

『錬金でマザーマシンを作るにも、ソレの知識が無ければ造れませんもんねー』

学院に戻り下ごしらえならぬB Aハリアーマーの下準備。

起動状態のそれを一度外し、メンテナンスモードにして中の骨格をむき出しにしているのだ。

もっとも、修理用試作ナノマシンが強力だから、本当はメンテナンスフリーなんだがね。

んで、そんなことを何故にしているかっていうと、ついにW E Cリアクターを組み込んで、試験的に運用してみようと思ったって訳だ。これが上手くいけば、もしかしたら……。

「フェン、いるかい？」

「ん、いらっしやいギーシュさん」

煙管吹かしながら作業を続けていると、小屋の戸を開いてギーシ

ユが入ってきた。

この人もよくよく変わったよなあ。最近じゃ変にナンパしなくなっただけらしいし。

お陰で元々素材が良いもんだから更にモテているらしい。

ちよつと太めの人がそう言ってたっけ。……もげてしまえ。

「ん？なんか小屋が薄ら寒い様な？」

「気のせいですよ」

「そうかなあ……ま、いいか。ところでゴーレムを複数を同時制御したいのだが　おお！？これは何だい？新しいゴーレム？」

「んーふふ、まあそんなものです」

適当に会話をしつつ、作業を休めない俺。思考分割と言うのは便利である。

やり過ぎると作業効率が低下するが、二つ程度に分けるなら問題無いのだ

ま、知識は与えてやるし、技術もくれてやる。それをどうするかはお前さん次第さ。

そしてまあギーシュとの会話を楽しみつつ、普段通りに過ごしている。

最近じゃ何時の間に持ちこんだのか知らないが、イスとテーブルまで置いてあったりするんだよなあ。俺の研究小屋なのに……ちなみに持ちこんだ野郎は俺の目の前でそこに座って優雅にしている金髪君だ。レビテーシヨン魔法って便利です。

「こんにちはフェン君」

「今日はシエスタ」

食堂での手伝いを終えたシエスタが小屋に入ってきた。

この小屋はどうも溜まり場と認識されている様で、シエスタの他キノさんやシアさんも遊びに来るのだ。そしてギーシュはオプシヨン扱いされている。哀れなヤツ。

「やあシエスタ。お邪魔してるよ」

「今日はギーシュ様。そう言えば、モンモランシー様が探しておいででしたよ？」

「本当かい？フェン、僕はちょっと席を外すよ」

「はいはい、いってらっしゃい」

シエスタの伝言を聞いてギーシュが小屋から出ていった。
この後でまさかあんなことになるうとは

「……で、これはどういう事ですか？」

「どうもこうも……見ての通り？」

見ての通りって言われても……えーと、サイトとルイズ嬢がラブラブ？

え、なんなんやこの展開？普段のつんとした貴女は何処に消えたのですかルイズ嬢？

ま、まさかサイト

「っ、ついに手を出しちゃったんですか？サイトさん」

そ、そんな事もあるって聞いたことがあるような無い様な。な、なんだっけ？ストックホルムだっけ？

「ちげえ！なんか急にこんな感じになっちゃったんだ」

「ねえねえサイト、ギョっとして」

「い、いやけど……」

「やだあ、ギョっとしてくれなきゃどっかーんなのよー！」

「ま、魔法行使は勘弁してください」

「……なんだろう、暗い夜道で背後からなんかしたくなってきた。」

「いやいや落ちつけ俺、きつところになった原因があるんだろうさ。だが、その前に」

「あのですね？ サイトさん。ココは研究の為に建てた小屋なんです」
「よ」

「お、おう」

「ようは自分のテリトリーみたいなもんなんですよね。普段解放してますけど……」

「そう、なのか？」

「そうだよー。元々学院の土地だし、そこに許可貰って建てさせて貰ってるだよ。」

「だけど基本的にココにあるモノは殆どオイラが作ったものなんだよねえ。」

「つまりはココは俺のパーソナルスペースでもある訳さ。」

「ええ。ところで自分のパーソナルスペースでいちやくカップルってどう思います？」

「え、えつと……フェン、いやさフェンさん？ 顔が近い様な気が」

「そう言うのはですねー。凄まじくイラッてきませんか？ ねえ現在

「イチャイチャ中のサイトさん？」

「い、いやー、それ程でもないんじゃないか、な？」

「……………ふーん、まあ良いですがね」

まあいいさ。このうつぶんは別の事で晴らさせて貰おう。

とりあえず事情を聞くと、ルイズ嬢はどうもほんの十数分前までは普通だったらしい。

だが、なんばしよったか。サイトを追いかけて回したらしい。原因はサイトが言い淀んだから不明。ま、恐らく彼女の機嫌を損ねたんだろう。良くある事だ。

そしてサイトを追っかけている内に、ギーシュとモンモランシーさんがいる所に来て、その後喉が渴いたのがギーシュとモンモラ

ええい以降心の中はモンモンでいいや。その二人が飲もうとしていたワインをがばっと飲んだ。そしてこうなっていたと……………ふむ。

「……………なるほど、なぞは解けましたよ」

「一体何が起きたって言うんだ」

「実は彼女は、ホレ薬を飲んでいたんだよ！」

「な、なんだってー！」

「……………律儀に反応してくれてありがとうございます」

「ふつ、伊達にルイズの丁稚はしてねえぜ」

丁稚と自分で言うのはどうかと思うけど・・・っーか今のポケとそれ関係ねえし。

とうかこの間も幸せそうですねルイズ嬢。ネコみたいとはこの事か・・・。

しかし随分とまあ普段とは様子が・・・あー、あれか？素直になれない感情が一時的とは言え解放されている訳で、普段抑圧された感情は通常の数十倍の力を発揮する事になるとか？

要は自分に素直になりましたってことだが、結局の所それは薬によつて心を改編したと言う事にほかならない。だがその効果は見ての通り、そして人は今のルイズ嬢の状態を俗に“デレ”と呼ぶ。転生してからもチョンガーな俺には、万物を殺す毒以上に強力な毒だぜ・・・。

「・・・では行きましょうか？」

「へ？行くってどこに？」

「まずは原因となった彼らの元に行つて解毒薬があるかを聞かなくてはいいけません」

「解毒って・・・そうかホレ薬だから」

「何の目的かは知りませんが、まったく無茶をしてくれる」

俺は不機嫌にブフンと音をたてながら煙を吐き出す。

魔法で治せばよかったんだが、この手の心に作用するタイプの魔法は、USNでも専門家でないと治せない類のモノだ。多分ミッドでも同じだろう。むしろミッドの方が進んでるだろうしな。

普通の人間でいう所の、内科と外科みたいなもんだ。俺は外科は出来るが内科の治療法なんて知らない。だから治す事も治療に携わる事も出来ない。ホレ薬関連は学院長に頼んで入ったココの図書室の蔵書に、それらしい記述があったから、恐らく実在している。

まあ学生が作ったものらしいし？恐らくはそれ程強力じゃなくて、時間がくれば解除されるかもしれないが……。

「だ、だれが世界で一番好きなの？はつきりいいなさい」

「う、ご主人さまです。はい」

「うそ」

「……うそじゃねえよ。けど」

「けど……なに？」

「う……なんでもねえ」

……なんだろう？砂じゃなくて砂糖を吐きたくなってきた。

あれ？ちよつと待て、もしホレ薬の効果が永続的なモノだったらどうすんだ？

俺後しばらくはこの学院でルイズ嬢の下で返済の為に働くんだけぞ？！

是が非でも、解毒薬を渡してもらわないといけないな。

「さあ行きましようか？ギーシュさんとモンモランシーさんがさっきまでいた場所を教えてくださいませんか？」

「お、おう。アッチだ」

さて、魔力の貯蔵は十分。武装は・・・オートクレールで良いか。

Side三人称

「はあ・・・まさかこんな事態になるなんて・・・」

1人黄昏る金髪ロールこと、モンモランシー嬢は一人ごちる。

彼女がたそがれている理由は、ついさっきまであった筈の秘薬が無くなったからだ。

しかもそれはとある人物に使う予定だったモノ。

家が財政難の中、材料を集めて作ったので、愚痴の一つも言いたくなる。

「大体、ギーシュが悪いのよ・・・」

彼女が御禁制の品を作り上げたのかと言えば、ギーシュに使う為だった。

最近のギーシュは落ち着いたと言うか、以前の様な臭さとも呼べる演技過剰な自己陶醉に等しいそれがナリを潜め、地が良かったお陰が更なる人気が出てきている。

彼女はそんな彼に危機感を感じ、このような強行に及んだ訳だ。

今のギーシュはモンモランシー一筋に決めているのだが、昔取った杵柄というか、恥というか、前科とも言つべきか。こと女性関連には彼女は彼の事を信用していなかったたのである。

故にもう浮気させない様に薬を使おうとしたのに・・・。

まさかあんなタイミングでルイズにのまれるなんて予想できないわよー！

意味も無くぶんぶんと手を振り回し、イライラをアピールするモンモン。

ちよっと子供っぽいが、まあソレは問題では無いのだ。

どーしよーかしらー。と部屋で頭を抱えていると。

ずがー！ー！ー！ん！！

「きゃっ！？なにー！ー！！？？」

唐突に部屋のドアが爆破された。そして何かきらめくモノを持った人影が入り込む。

賊が出たの！？学院の中なのに！？　そう驚いて杖を手に取りうとした瞬間。

「悪い子、はいねえがあゝ。解毒薬をよこせえゝ」

「……は？」

「ん、んん。失礼した。ちょっと取り乱していた。そしてネタは上がっている。とにかくホレ薬の解毒薬をよこしてもらいたい。尚これは可及的速やかに解決せねばならない問題な為、こちらは武力権の行使も辞さない構えだ。さあどうする？」

そこに居たのは小さな人影、確かルイズが召喚したヤツの片われだったかしら？

フェンがこの場に居り、片手には身長と同じくらいの大剣を持ってドアを破壊して部屋に突入してきたのだ。驚くのも無理は無い。

一応フェンとモンモンとの間には面識はほぼ無い。

モンモンの方は愛しい彼が急に熱を上げたゴーレム関連の事に携わっているのが、フェンであるという程度の認識でしか無いのだ。

だが、そこまで考えて思い出した。そう言えばこの子も

「な、何のことかしら？」

一応とぼけることにしたモンモン。なんじゃかんじゃで御禁制の品を作ったのは事実。

とぼけられるなら、このまま押し切っ飛ばしてしまえと考えた。相手子供だし……。

「ホウ？そんなことをおっしゃられるか？こちらはサイトの証言で、貴方とギーシュさんがのもうとしていたワインを飲んでから、我がマスターの様子が豹変した事を聞いている」

だが、相手が悪かった。モンモンが相手にした相手は、身体は人外、中身は大人なフェンなのである。外見は子供だが、その姿に惑わされたらいけない相手だったのである。彼からは目視出来そうなくらいの黒い霧らしきモノがまとわりついているのが、彼女には見えな気がした。

心なしか妬ましいという言葉も見えない様な気がする。

そしてそのあまりの存在感に耐えきれなくなった彼女は自白した。

「しかたがなかったのよー！ギーシュが何時浮気するかって思ったらー」

「んなこたあどうでもいい。俺はあのイチャイチャ空間がたえられん」

モンモンの言う事をバツサリ切ったフェン。
つか本音が漏れて仮面が剥がれてるぞ。

「それよりも早く解毒剤をよこせ・・・ハリー、ハリーハリーハリー
！！！」

不味い、目が据わってやがる。

彼女は本能的に逆らってはいけない事を理解したが、解毒薬を渡したくても土台無理だった。

「ぞ、材料が無いのよ」

「材料は何だ？」

「み、水の精霊の泣って呼ばれる秘薬の事よ。でも今は売り切れ状態
で」

「成程、つまりは・・・水の精霊を狩ってくればいいんだな
？」

「へ?!」

「待っている。すぐに材料をそろえてやる」

「ちよ、ちよつと待つてよ！私は解毒薬を作るなんて一言も！！それに水の精霊はとても強いし怒らせたら！？」

「……………臭い飯はすきか？ミス・モンモランシ？」

「……………材料さえあれば作れるわ。場所はラグドリアン湖よ」

彼女からそこまで聞くと、フェンは部屋から去っていった。

ちゃんとドアを錬金で直してから行くという小技を使ったので、彼女の部屋は埃一つ乱れてはいない。フェンが来訪する前と変わらない部屋だった。

ちなみに何故ここまでフェンが必死になっていたかと言うと、彼の現在の寝ている場所に問題がある。何時の間にか仲直りを果たしているサイト達とまた同じ部屋で寝起きしているのだ。

つまり、現在凄まじいスイート空間を作りだせるあの二人と今後寝起きしなければならぬかもしれないのである。

見た目は子供だし、生理機能的にも二次性徴すら来ていないフェン。

だが中身は先も言った通り、前世の記憶入りのおっさんなのだ。しかも死ぬ時もチョンガー……………どれほどの苦痛なのか言うまでも無い。

そして、まるで嵐が通り過ぎた様な後の感覚に陥ったモンモランシが出来ることは、待つことだけだった。出来れば今度はドアを壊さないでほしいと願いながら。

一体何をしているのかはた目から見ると不明だったが、爆撃が行われている湖から突如としてうねる水流が空中に放たれた。その数は20や30ではなく、数にして1000以上。高密度の魔力によって強化されし水流は、空に浮かぶ人型に向けて顎門あぎとを広げた蛇の様に襲い掛かる。

キュイン、ガチャ

しかし人型は慌てることなく、その手に持った銃を迫る水流に向けて発砲する。

そして背面に装着したスラスタを小刻みに吹かし、避けられるモノを避けていく。

その中で自身に当たるモノは確実に撃ち落としていた。

銃とは言うが、その銃から放たれるのは鉛玉ではなく魔力弾。

水流と同じく高圧縮された魔力が電荷を伴い、空気を焼きながら白い線となって、己に迫るモノを打ち落ちしているのだ。

しかし人型に迫る水流の方が数が多い。銃口は一つしか無いのに、迫る水流は一度に数十以上なのだ。そしてついに全方位から水流が人型に迫る。湖から昇り立つ水流は空を飛ぶ人型の逃げ道を塞ぐかの如く、人型の上空からも襲い掛からんとしていた。

『バラージュ』

水流に囲まれた途端、人型の目が光り電子音を発したかと思うと、

突然その場で回転し弾を辺りにばらまいた。ドドドという音と共に、人型に迫っていた水流が爆発した。高圧縮された魔力弾が同じく高密度の魔力が宿る水流と接触して外殻が崩壊し、中の魔力が暴れたからだろう。

水ではあるが多量の魔力を含む水流は、ソレを構成していた魔力とは違う魔力が混入したことによってかき乱され、形を保つことが出来なくなり、湖へ水滴となって落下していった。

人型は次々と現れる水流を錐揉み状態で落下しつつも迎撃していく。

流れ弾すら出さず放たれた弾は全て吸いこまれるかのように水流へと命中していった。

そう落下した。何故か湖のある所からの水流は少なかった。水流を放ったモノはそれによって勝利を確信した。

ある一定以上まで人型の高度が低下した時、ソレは湖面より現れた。

巨大な竜の首、いやさ見ようによってはサメに見える何か。

ソレはこれまでの水流と同じく、高密度の魔力がこもった水であった。

生き物の様な水の塊は迫る人型を飲み込んで水圧で噛み砕こうと口角を大きく開いた。

人型は錐揉みを辞めずにソレを見て、己が戦っているヤツが何を考えたのか理解した。

そして被っているヘルメットの中で薄く口角を歪めて笑みを浮かべる。

成程考えたじゃないか。……だがその程度で

「!!!!!!!!!!」

人型が吠えた。俺を舐めるなど

そして両肩に瞬時に現れた四角い箱の様なスフィアランチャー。そこから爆発術式を付与されし高圧縮魔力弾頭が20以上次々と発射され、目の前でエモノが来るのを待っている水の竜の口の中へと突入していった。

ゴパパパパパパ

!!!!!!!!!!

水の竜の顎門あぎとの中に突入した魔力弾頭達はその力を遺憾なく発揮し、急激な魔力膨張による爆発現象を、水で出来た意思無き竜の喉もとで発露した。

水の竜は喉元を急激に膨張させ、口から大量の泡をふきだしつつも喉元が爆散してしまい、そのまま力尽きたかのように元の水へともどっていく。

人型は今だ迫る水流をよけながらも湖面に落下しない様にギリギリの高度で飛翔した。かなりの速度らしく、人型が飛行する際の衝撃波によって湖面が割れて水しぶきが上がり、まるで湖を割っているようにも見える。

蛇行するかのようには湖を飛翔するのは、少しでも真つ直ぐ進むうとすれば湖面からの水の壁がせりあがるからだろう。上空に舞い戻り距離を開けようとした人型を阻もうと、高波の様な水の壁がせりあがる。

水飛沫を上げながら湖面を飛行していた人型は、慣性の法則を無視するかの如く、背面のブースターから魔力残照の青い炎を噴き出させ、90度直角で急激に上空へと舞い上がった。その凄まじい加速力によって発生した衝撃波ソニックブームによって、追尾していた水流も同時に落した程だった。

信じられない加速力で、湖面よりはるか上空へと上ったソレは空中に停止した。

そしていきなり人型の両肩のランチャーが消えた代わりに、今度は魔法陣が現れた。

更にそこから金属で出来た長い棒の様な物がせり出して来る。これまでスフィアランチャーが装着されていた場所へとハマったそれは大砲。

背面スラスターを中心にして、この世界のモノでは無い魔法陣が新しく展開されていった。

その魔法陣を中心に、先程まで戦っていた際に飛散した魔力素子が次々と収束していく。

砲門からは余剰魔力が、周辺の魔力素子と反応して起きる発光現象によって出来る粒子状の魔力が、風に吹かれて舞うかの如くこぼれおちていくのが遠目からでも視認出来た。

その余剰魔力すらも大砲を中心にして展開された環状型の魔法陣

に吸収され、循環していく。

周辺の魔力すら利用し、余剰魔力も見逃さない高効率の攻性魔法陣。

その魔力は肩の大砲からガキンと言う音と共に更に増大し、大砲から金属製の何かが射出された。

だが湖で水を操る存在も、空中でそんな大きな隙を作っている存在を見逃す筈も無い。

その高度にある雲の水を操り、ソフトバレーボール大の水弾として人型へと射出した。

水弾は先の水流に比べれば誘導性は皆無、だが水流以上のスピードと込められた大魔力により、その威力は人間に当たれば、まるで巨大なハンマーで叩き潰した様になる上クレーターもできる。

それ程の威力を持つ水弾は人型へと迫るが、人型は避けようとしなない・・・否。

ズガガガガンツ！！！！

避ける必要が無かった。それは水弾が命中する直前。

人型を中心に幾重にも重ねられた球状の光が彼を包み込んだのだ。その光の壁は10以上の水弾を防ぎきっていたのだ。

しかしそれでもかなりの威力のある水弾により、表面の壁は剥がれ落ち元の魔力へと戻る。

音速以上の凄まじい速さと質量をもった粘着弾頭の様なソレは、確実に人型が張った障壁を揺るがしていた。

これはチキンレースだった。

片方の障壁が食い破られて墜とされるのか、それとも準備が完了して大砲が放たれるのか。

生死を掛けたチキンレース、ソレに乗った湖の存在はひたすら水弾を形成して放つ。

人型がいる高度ではソレ位しかできないのだ。

もつとも数はすでに50を超えており、多重に展開されている障壁をドンドン削っていた。

空中の水を凝縮するソレは、ハルケギニアの魔法であるコンディセイションと原理的には同じモノだった。

しかし使うのがメイジではなく、太古からこの地に存在している超常的な存在、人間の扱うそれとは違い、先住魔法とも呼ばれるそれは消耗こそするが、使う存在が疲れると言う事を感じることが無い為途切れることがない。

バリンという堅いモノが破壊されていく音が響き渡る。また一つ障壁が破られた。

人型が幾重に張った障壁が残り一つとなって水弾に食い破られた瞬間

辺りを照らす白い双つの極光が、湖に撃ち降ろされた。

ガキヤ、チー――

人型の側頭部が開き、中から何かがせり出した。恐らくはセンサーの類だろう。

ミーとかチーとか音を出しつつ、何かを探している。しばらくしてセンサーがしまわれた。目的のモノを発見したのだらう。

人型は目的のモノがいる方向へ、銃を向けた。

『Crystal cage』

また聞える電子音。銃を向けた先の空間に魔力が集まって行く。そして水中に半透明の正四角柱の“檻”が現れた。ゆっくりとその檻が水中から引き上げられる。

「……で、何故いきなり攻撃してきたか。教えてもらえるんだらうな？」

人型はケージの中にいる存在に話しかける。

「なあ？水の精霊さんよ」

「……何故我を消さぬ？我は既に動くこと叶わぬのだぞ？単なる者と似て否なる者よ」

檻ケージの中にある水がぶるぶると震える様に応える。

その水こそ、今まで湖の水を操り攻撃を仕掛けて来た存在である水の精霊だった。

「さて、目的があつてきたのは事実だが、その前に話し合いくらいはしたかったぜ」

ガシユーという空気が抜ける様な音と共に、人型は頭部を外す。

正確には頭を守るヘルメットのロックを外し、素顔を目の前の存在、水の精霊にさらした。

束ねられていた長い髪が、湖面に吹く風に煽られて揺れている。

フェンは格納領域から愛用の煙管を取り出すと、炎熱効果のついたスフィアを取り出して火をつけた。煙草とは違う匂いの煙が立ち上る。

人型の正体、ソレはこの世界唯一の魔導師であるフェン・ラーダーだった。

彼は現在の雇い主がホレ薬の所為でおかしくなってしまう、その解毒薬の原材料になる“水の精霊の涙”と言うモノを求めて、ラグドリアン湖まで飛んで来ていた。

最初こそ若干冷静さを欠いていた為、やや強引にでも手に入れてやると思っていたが、ラグドリアン湖まで飛行している間に頭が冷えて冷静な思考が戻って来ていた。

そう言えば以前学院の図書室で魔法生物について調べていたことをフェンは思い出し、ヴィズにその時の資料を記録させていた為、水の精霊についての項目を再度閲覧した。

若干抽象的な表現が多かったが、水の精霊は特定の形を取らないいわばアメーバの様な知的生命体である。生命体とは言うが実質その本質は自然界の魔力の塊、フェンの様な魔法生命体としての本質に近い。

自由に分離・再結合が行える為、増えようと思えばいくらでも増えるが、それらを統合する意識体は一つであり「全にして個、個にして全」称する程であり、生きた水の力そのものとも呼べ、その特性からほぼ不死である。

とりあえず冷静になって考えて、相手は知的生命体であり交渉が持てる相手の様だった為、一応警戒はしていたが、探し出せたなら交渉を行いたいと思い、湖を飛翔していたのだった。

「・・・我に仇なす者の同胞だと思ったのだ」

「仇為す者？ どういう事だ？」

精霊の話しを聞くに、どうもココ最近夜になると、魔法を使って

水の精霊の住みかまで来て、精霊を襲撃する者が来ているらしく、たまたま隠匿を忘れて膨大な魔力を持って飛行していたフェンを襲撃者と誤認したらしい。

そして何故誤認したからと言って戦いを挑んだのかと言うと、感じたその力があまりに異質であつた為に絶対に己を滅ぼすことが出来るかと危惧したのだ。

スクウェアクラスの凄腕メイジで有つても、水の精霊をすぐに滅ぼせるわけでは無く、強力な火の魔法であぶり気体へと変えられてしまふ。死と言う概念が無い為それ自体は恐ろしくは無いのだが、その間は水とつながりが持てない為無力となつてしまふのだ。

しかし、今度来た相手は全然違う力をもち、しかもそれは己を滅ぼせる力で有ると、水の精霊は感じ取つたのだ。例え滅ぼされるとしてもタダでは滅ぼされまいと、水の精霊は湖の水位を上げると言う事に使つていた力を一時カットし、この強大な敵へと挑んだとの事だつた。

つまるところ、フェンは敵と誤認された挙句いきなり襲われた上、相手が本気で殺そうと掛けて来たので応戦したと言うのが、この騒動の全貌だつた。

つまり些細なことで、天変地異の様な騒動が発生していた訳である。

もつとも戦闘に入る前にフェンは半径数kmを封時結界で囲つていたが、空間の位相をズラして隔離するそれが、逆に水の精霊の態度をかたくなにさせて戦わせた原因だつたりする。 閑話休題。

『(成程、つまりは向うの勘違いであったと)』

【迷惑な話ですう。結界を維持しながら複数の術式構築は、演算をガンガン削って疲れるのに】

「(すまん。ま、一応大人しくなったからいいじゃないか)」

【よくないですう！万が一主殿が怪我したらリンは嫌です！】

『(それには同意しますね。まあ手ごわかったですが、対処できない程では無かったのが幸いでしたね)』

「確かに我はかの者に負かされた。我の一部を倒すならいざ知らず、ココまで力を抜われ追い詰められたのは久々だった」

念話で内緒談義中だったフェン達はいきなり会話に入ってきた水の精霊に驚いた。

水の精霊は普通の生物とは全く違う感覚器を持っているのだし、心も読めるとも言う。

言葉を発しなくても、念話の様なコミュニケーションを傍受する事も可能なのだろう。

水の精霊の前では、どうやら内緒話も出来ない様だ。

ソレはともかく、要は襲撃者が来ているから襲われた訳だ。

これは交渉に使えると考えたフェンは、ケージの中に居る水の精霊に話しかけた。

「襲撃者が来ると言っていたな？」

「いかにも」

「俺達は“水の精霊の涙”なる秘薬が欲しい。ならば取引を申し出たい」

フェンがそう言うと、ケージの中でぶるぶると形を変形させたりしている精霊。

しばらくして元のアメーバみたいな姿に落ち着いた。

「……聞こうか」

「その襲撃者を退治する。その代わりに」

「よかるっ」

「“水の精霊の涙”を……はい？」

あまりにあっけなく了承された事にフェンは驚いた。

ここは普通なんかゴネたりするのが常道では？

「世の理をしらぬ単と似て否なる者よ。我とお前たちとは存在の根底が違う。お前たちの常識とやらを我に当てはめてもそれは無意味だ。それに我も大分力を消耗してしまった。襲撃者を相手にする

事は敵わぬ」

「……ソレもそうか。それじゃ任せてもらおう。ああ、ソレと」

フェンは煙管を啜えながら、アルアツソーの銃口を水の精霊に向けた。

一瞬精霊はビクンと身じろぎしたが、フェンからは悪意を感じない。

どちらにしても己は閉じ込められて動けない為、されるがままになっっていた。

「多分、少しは回復出来るだろう デイバイド・エナジー」

「 ツ!!!???」

水の精霊へとフェンの魔力が流入する。

自然界の魔力とはまた違ったソレが精霊の中を駆け巡った。

今まで感じたことが無い感覚だったのか、水の精霊はピクンピクンと脈動している。

だがそれも最初だけでしばらくすると、急におとなく魔力を吸収し始めた。

こんな感覚はこの世界が生まれて幾千万もの時を過ごしてきた水の精霊にとっても初めての感覚だった。人間のように暑さや寒さといったような感覚は無いが、それでも独自の感覚は持っている。

この魔力供給の際に感じた感覚は、しいて言うなら人間が温泉に

つかるかのような感覚だろう。ようはとても気持ち良く、水の精霊には感じられた。それも少しずつ魔力が浸透してくるにつれて、更に心地よく感じられる。

身体の内側を撫でまわすかのような魔力が浸透してくる感覚。魔力をほぼ使ってしまった精霊の身体は送られてくる魔力を貪欲に吸収していく。消耗している為、フェンの魔力はそれこそ麻薬の用にもっと欲しいと無意識で感じてしまう程だった。

そして供給を続け、少しして半分程度魔力が回復した所で、フェンは魔力供給を止めた。

「あ・・・」

「とりあえず、先程戦った分はこれで良いだろう。今拘束も解除する」

『封時結界を解放します』

【クリスタル・ケージも解除します】

封時結界が解除され、通常空間に復帰した彼ら。

正三角錐の檻の中に閉じ込められていた水の精霊も解放され湖の中に戻る。

若干残念そうだったのは、気のせいだろうか。

ソレはさて置き、フェン是不届きな襲撃者を撃退する為に、水の精霊から詳しく情報を貰った後、湖岸へともどっていくのだった。

S i d e o u t

S i d e フ ェ ン

とりあえず湖岸へともどってきた。しかしまあ誤認されて攻撃されるとはな。

高高度を飛行していて魔力隠ぺいを怠った俺にも原因があるとはいえ、水の精霊ご本人と戦う羽目になるうとは思わなかったぜ。

途中で相手が水の精霊だったことに気が付いて良かったよ。

下手に全部蒸発させてたら、水の精霊の涙が手に入らないところだった。

もしそうなら……帰った時に待つのは地獄だったことだろう。

『でも何でマスターがルイズさんとサイトさん達のイチヤイチャを気にするんですか？』

「……あんなあ？俺が今寝泊まりしている場所はどこだと思ってるんだ？あの二人がイチヤイチャしてる中、俺がその空間と同じところに居たら凄まじく気不味い事になるぞ。それにリンの教育にも悪すぎる」

【ふえ？そつなのですか？】

「そう、リンはまだ気にしなくてもいいんだよ。というか気にしないで頼むから」

リンまで変になったら、ワイはお父さんに顔向けできまへん。

……リンの父親って、考えたら俺じゃねえか？データ改変俺ん中で起きたんだし。

しかし、本当に早い所解毒薬を持って帰らなくては……一応シランに間違えが無い様に監視をお願いしてあるけど……嫌だぜ？子守とかまでやるほど仕える気は無いんだし。

でも本当にサイトつたら……妬ましい。

『気が付けば“バールの様なモノ”を持っている件』

「ハーフ イフと申したか？」

【セイ剣エクスカリバーですね？解りますう】

『「ちよっ！おまつ！？」』

一体どこでそんなのを覚えたと小一時間くらい問い詰（ry
ちなみに元ネタは某動画サイトで見たらしい。はやてが見てたのを一緒に見たんだとさ。

……あれって年齢指定が入ってるグロいゲームやなかった

っけ？

若干首をかしげつつも、とにかく罠の設置を湖畔周辺に行う俺だった。

.....

.....

.....

罠の設置は完了し、後は襲撃者を待つばかりとなっていた。

設置したのはありったけの設置式ガルヴアドスを利用した弾幕結界。

襲撃者が良く来るといふ方角に設置したが、まあそこに現れなくてもレンジ外狙撃なら.....。

『対人レーダーに反応あり、魔力反応も検知、メイジです。数は2』

っと、どうやらお客さんらしい。

既に暗くなり始めた湖岸に漆黒のロープをまといし二人組。

犯人と決め付けるのは良くないが、時間的にも地理的にもココに来る人間は限られる。

おまけに片方は身の丈と同じくらいの杖を持って.....ん？

「この魔力の感じて.....」

なんだ？何であいつ等こんな所に来てるんだ？
まあいい、とりあえず接触を

『警告、攻性魔力検知』

と、ヴィズが警告を発した途端。

『アンノウン、攻撃開始、自動障壁展開』

いきなり風の刃で攻撃された。どうやら藪に隠れていたことがばれていたらしい。

流石は風のメイジ、周辺の気配察知はお手の物ってか？この人間リーダーめ。

「ストップ、ストップ！敵じゃない！撃つのをやめれ」

俺は障壁を張りながら近づき、今も魔法を放とうとしてくる二人へと声を発する。

するとお二人はぴたりと動きを止めた。オラの声が聞こえたらしい。

二人はお互いに顔を見合わせ、がばつとフードを取り払った。そこに居たのは、赤髪と青髪、キュルケとタバサの二人組だった。

なんだ？この二人が襲撃者なのか？

「フエン君なの？どうしてこんな所に居るのよ！」

そりゃ俺が聞きたいぜ。

ま、とりあえずはだ。

「とりあえず、どういふ事だがお互いに情報交換と行きましよう」

驚きの声を上げるキュルケ。

そして俺の提案にコクンとタバサが俺の提案に頷いたのだった。

「成程、湖の水位が上がった。んで、タバサの実家からの依頼で退治しに来たと」

「そう言う事よ。湖の水かさが増えて、実家の領地に被害が出たから、あたしたちが退治を頼まれたってワケ」

そう言えば、水の精霊も俺と戦う為に一時水かさを増やすのを止めたとか言ってたな。

水の精霊の涙が欲しくて、そこら辺聞き流してたけど、普段人間

に干渉しようとしないう水の精霊が訳も無く水かさを増やそうとはしないだろう。何か原因があるのか。

「自分は“水の精霊の涙”と引き換えに、夜な夜な襲いに来るといふ襲撃者の撃退をすることを、水の精霊と交渉しまして」

「そうなの？でもなんで“水の精霊の涙”なんて必要なの？」

「・・・マスターがホレ薬を誤って服用されまして、解毒薬が必要なんです」

そうなった原因を簡単に説明した。

現在サイトがホレ薬の効果によってルイズ嬢とイチヤイチャしてらっしゃることをな。

ちなみに作ったのがモンモンだと言ったら「自分の魅力に自身が無い女って、最悪ね」とはキュルケさんの談。

「まあそんな訳で、自分の精神の安定の為に解毒薬でとっとと解呪したい訳です」

「参っちゃったわねえー。水の精霊を守るあなたとやりあう訳にもいかないし、水の精霊を倒さないと、タバサの立つ瀬はないし・・・」

「なら、何故水かさを増やすのかを精霊に聞いてみては？何か原因があるのかもしれない」

どちらにも引けない事情がある訳だが、水の精霊が水かさを増やさなければ、水の精霊を倒そうとする人間は出なかった。とはいえ、干渉をしようとしないうちに水の精霊がそこまでするのだし、絶対原因があるだろう。それをなんとかすればあるいは

てな訳で翌日の朝。

1660

俺が湖岸で魔力を垂れ流すと、ソレを探知したのか湖の一部が盛り上がった。

そして水の精霊が現れたのだが

「・・・俺？」

何故か水の精霊は俺と同じ姿かたちで現れた。

もつとも水で出来ている為、その姿はある意味水で出来た彫刻みたいだ。

まあきつと人と話しやすいようにした姿なんだろう。

いまはそんな事よりもだ。

「一応襲う者を止めた。これでアンタを襲うヤツは来ない」

「そうか。御苦労だった。似て否なる者よ」

「あー、あとちょいと聞きたいんだが、水かさを上げている原因は何だ？出来れば水かさを上げるのをやめてほしい。原因があるならそれを教えてくれれば、出来る限り協力するぞ？」

俺がそう言っていると、水の精霊がなんかグネグネというか変な動きを始めた。

何と言うか、みずのせいれいは へんなおどりをおどった。

そんな感じのテロップが脳内に流れそうな感じた。

アレで実は考える仕草なのかなーと思っている。

「お前たちに任せていいものか悩む。だが似て否なる者は約束を守った。ならば信用してはなしてもよいとおもう」

んで、水の精霊は水かさを上げた理由を話してくれた。

事が起こったのは約2年前、水の精霊が秘宝として持っていた“アンドバリの指輪”と言うものが賊によって奪われたらしい。

その手口が精霊が寝ている間に盗ったというのがちと間抜けだが、技量的には相当なものだろう。人間よりはるかに敏感な精霊に感知されることなく、秘宝を奪い取ったと言うのだから。

水の精霊にとって水は己の身体と同じ。つまり水かさを上げていたのは、陸地を水で覆えばいずれ水の中に指輪が沈むだろうから、自分の所に戻ってくる考えたという訳である。

ある意味すごくく壮大で、実に気の長い話したが

「もし指輪がアルビオンとかの浮遊大陸にあつたらどうするつもりだったんだ？」

「……………」

「おい、まさか考えて無かったとか？」

うお、なんかメツチャグネグネしてる。

なんか誤魔化そうとして変な動きをする人間みてえだなオイ。

っーか、本当に気が付いて無かったのかよ。

しかし、アンドバリの指輪ね。水の精霊が問い返したいと思う一品か。

恐らくはかなりのマジックアイテムなのかもしれないな。

「“アンドバリの指輪”とは、どんな指輪なんだ？」

「我と共に悠久の時を過ごした指輪。そして旧き水の力が宿りし指

輪でもある。我には死と言う概念が無いからわからんが、偽りの命を与えると言うその指輪の力は魅力的に写ったのかも知れん」

偽りの命か・・・つまりは生き返らせるモノでは無いって事か。

「しかし所詮は偽りの命。指輪を使われたモノは、指輪を使った者に従う様になる。死者は死者でしかない。益にはならぬ」

「まあソレはさて置き“アンドバリの指輪”だったか？誰が盗ったんだ？」

「風のパワー行使し、我の住処にやってきたのは数個体。個体の一人は『クロムウエル』と呼ばれていた」

水の精霊の言葉を聞いてキュルケがぽつんと漏らす。

「聞き間違いじゃ無ければ、アルビオンの新皇帝の名前ね」

・・・もしそうなら、暗殺でもしないとダメか。

まあ俺ならミラーージュハイド使って、そいつが1人になったところを狙ってキニーすればいいんだよな。んで全力で逃げるってなもんで・・・まあ殺さなくても指輪さえ見つかればいいだけの話か。

なんかまたきな臭い話しを聞いちゃまった気がする。何でこの世界はこんな面倒臭い事件が多いんだよ。アレか？俺に過労死しろと神

さまが言ってるのか？絶対にお断りだぜ。

とりあえず、この後はキュルケ達が交渉すると言う事になり、俺は一足先に精霊の涙というか、水の精霊の身体の一部を持って帰る事になった。泣いて言うのに身体の一部とかすげえな。

そして、さっそく座標を知っている学院に転移し、モンモンさんの部屋のドアを蹴破って突入。

驚く彼女に解毒薬を作らせたのだった。

「ラゲドリアン湖とエイドリアンって響き似てね？」（後書き）

*惚れ薬・・・違法でも良いから欲しい。

「プレシアさん辺りが欲しかったらろっなあ」

「プレシアさん辺りが欲しかったらろっなあ」

妄想戦記

S i d e 三 人 称

「走れ！いつこくも早く陛下に追い付くのだ！」

ハルケギニアの幻想種、グリフォンに馬を足して2で割った様な生き物ヒポグリフ。

それらヒポグリフが隊列を組み、薄暗くなった街道を駆けぬけていた。

その隊は宮廷と王族を警護する近衛に所属する魔法衛士隊である。

彼らが激昂しながら一体全体何を追いかけているのか？

ソレはこの国の女王アンリエッタと彼女を誘拐した賊たちだった。賊は夜陰にまぎれて宮廷に侵入、あるうことか女王を誘拐してしまっただのだ。

それも宮廷警護を任されている魔法衛士隊に気付かれることなく

である。

彼らにとつて、それは実に許しがたい屈辱だった。故に追跡の足を速めていた。

幻想種であるヒポグリフは馬の倍以上の速さが出る。

その為、既にトリステインが誇るヒポグリフ隊はすでに賊の後ろ姿を捕えていた。

衛士隊長は賊の足を止める為に、衛士たちに馬を攻撃するよう指示を下した。

現在賊はラ・ロシエール方面に向けて逃走しており、賊の所属は明らかだった。

アルビオンに陛下を渡す訳にはいかぬ！例え後でおしかりを受けようとも！

そして彼らは賊を魔法で殺すことに成功する。

賊を殺し安心したのか、彼らは不用心に倒れている女王アンリエッタへと近寄った。

だが、次の瞬間ヒュっという音と共に、衛士の一人が血飛沫を上げて倒れ伏した。

衛士に混乱と動揺が広がる。何故なら確実に“殺した”筈の賊が起き上がったからだ。

衛士隊長が正気に戻り指示を出す前に、衛士たちは全員殺されてしまった。

そして隊長も巨大な竜巻によって四肢を千切られ、そのまま絶命したのだった。

.....
.....
.....
「ウエールズさま、あなた・・・いつたいなんてことを・・・」

衛士隊長が無残にも風の魔法で引き裂かれる姿を目撃したアンリエッタは絶句した。

ソレを実行した張本人がすぐ近くに居たと言うのもあるし、その張本人こそ・・・。

「驚かせてしまったようだね」

アンリエッタの思い人。アルビオン王家の皇太子・・・。
レコン・キスタとの戦いで戦死した筈のウエールズその人だったからだ。

彼女は衛士たちを殺したウエールズに水晶が付いた杖を向ける。
衛士隊は王宮と王族を警護する人間、中には顔を見知った人間も居たのだ。

「仇を取りたいのかい？ いいとも。ぼくを君の魔法で抉ってくれたまえ」

ドンという衝撃が彼女の身体を駆け巡る。

杖を向ける手は震え、今にも取り落しそうだ。

あれほど愛した人間を、今またこの手で殺せ、と？

「君の魔法でこの胸を貫かれるなら　本望だ」

「　ッ！　」

震えは止まらず、ついには杖を落した。

やがてその口からは小さく嗚咽の音が漏れ始める。

どうして、どうしてこうなってしまったのかと、良心の呵責が彼女を責めた。

「わたし、解らないわ。どうして貴方がこんなことをするのか・・・」

「解らなくても良いよ。君はあの誓いの言葉通り行動すれば良い。ほらラグドリアンの湖畔で、君が口にした誓約の言葉　」

まるで呪の如く、目の前の思い人の言葉はアンリエッタを浸食していく。

ソレは紙に水が滲みこむかのように、じわじわと心をむしばんでいた。

彼が死んだ後も彼を愛し・・・否、彼はまだどこかで生きていたと心の中で思っていた。

その事が、目の前の存在の放つ言霊の力を増大させ、彼女を惑わせていった。

愛という軛くわは、確実に彼女の心に大きなヒビを入れていたのだから。

「どんなことがあるうとも、水の精霊の前でなされた制約がたがえられることはない。君は己のその言葉を信じていれば良いのさ。後は全部ぼくに任せてくれ」

やさしいウェールズの言葉が、彼女の女王たらんとしていた心を揺さぶる。

そして気が付けば、彼女はウェールズの言った言葉に何度も子供のように頷いていた。

それこそ・・・自身を正当派し、言い聞かせるように何度も何度も・・・。

彼女はウェールズの差し出す手を握ろうと腕を伸ばす。

そして本来なら、ここでアンリエッタの心は“タダの少女”に変わる筈だった。

「・・・すまんが、そう言う訳にはいかないモンでな」

「誰だ！」

唐突に聞える子供の声、この世界に現れた最大のイレギュラー。

「きゃんっ！」

「アン　うがっ！」

突然アンリエッタがくの字に折れ曲がったかと思うと、そのまま空中に浮かんだ。

そして次の瞬間、先程まで確かに居た筈の彼女は、まるで魔法のように姿を消してしまった。

その事に驚きの表情になるウェールズ。
突如何かに殴られたかのようにその場から吹き飛ばされた。

かなりの力で叩かれたらしく、水平に飛んで街道に生えている木に激突した。

ほぼ水平に飛んだのでかなりの力を受けた筈だが、彼は平然として立ちあがる。

殴られた個所もぐじゅぐじゅという音が聞こえてきそうな速さで回復していった。

彼と彼の騎士たちはすぐに戦闘体勢を取るが、辺りには人の姿も何も見えない。

何よりもこの誘拐において重要なアンリエッタの姿も見えない。このままでは命令を遂行できない。

彼らはすぐに魔法を使って辺りを搜索し始めるのだった。光の灯っていない、薄く濁った眼をしたまま。

Side out

Sideフェン

『（）……そろそろ光学迷彩魔法ミラージュハイドの効果が切れます』

【おひめさまの体温が低下中です。コレ以上の飛行は不味いと判断です。】

「（ミラージュハイド解除、一度休ませよう……対人警戒レベ

ル5）」

姿を消したまま、空を飛んでトリスティンの近くまで戻ってきた。背中に担いだこの国の女王陛下を一旦休ませなければならぬ。大地に降りた。

そつと姫さんを草地へと寝かせる。ふう、しかしまた厄介事かよ。

「・・・リン、ユニゾン機能オフ」

【了解ですう　　ふう】

「おつかれさん」

リンとのユニゾンを解除し、通常のBA?に移行した。

ユニゾン系の負担はデバイスにも掛るからな、リンがあんまりにも疲れたら可哀そうだ。

ユニゾンを解除したリンが俺の隣に腰かけた。

俺も姫さんが見える位置に腰かけてヘルメットを外す。

カキシユ、ガチャ

そしてフィルター越しじゃない夜風の匂いがする空気を吸い込んだ。

やや涼しい空気が肺に広がっていく感覚が心地いい。だが、正直憂鬱だ。

姫さんをあの場から救出したはいいが、ものすごく面倒なことになりそうだからな。

とりあえず格納領域から煙管を取り出す。

最近は何もないとやってらんねえよ。ホントにさ。

炎熱作用のあるスフィアを形成して火をつけ、ある程度煙が出るのを待つ。

少しすると火が燃え移り、煙管から紫煙が昇り始めた。

俺は薬効成分たっぷりの紫煙を肺に吸い込む、そして吐きだすを繰り返した。

何とも言えない充足感が身体を包む、そうなるように調整してあるんだがね。

ストレスは溜めこまないに限るぜ。いやマジで。

さて何故ここに俺が居たのかというと、学院に帰ってからしばらくしてキュルケさん達が戻って来たんだが。その時に彼女等と会話していた時に妙な話を聞いた。

何でもMIAかKIAだった筈のウェールズを見たと言うのだ。だが、様子がおかしかった上、向かっていたのはトリステインだと言う話。

コイツはくせえ、と俺はその時におもった。

アルビオンから宣戦布告された今になって、ウェールズの目撃情報だぞ？

しかもアルビオンの皇帝は水の精霊の情報が正しければ、アンドバリの指輪を所持している可能性が高い。

そしてもしも、レコン・キスタがあこのニューカッセル城攻防戦において、ウエールズの遺体を手に入っていたとしたら？

アンドバリの指輪は死者に偽りの生命を与える指輪だという。

ウエールズの遺体がアンドバリの指輪によって生き返らされ操られているかもしれない。

ふとそう思ったのだが……あながち間違いじゃない様な気がしたのだ。

あまりにも嫌な予感がぬぐえなかった為、ルイズ嬢に許可を得て先行した。

そしたらコレだぜ？戦闘音が聞こえたから、姿隠して近づいたら虐殺現場だし。

虐殺された筈のヤツが動きだして、逆虐殺現場に発展するし……

おまけに国を背負って立つ人物が、国を見捨てようとするとはねえ。

一応まだ揺れているみたいだし、仕方なく連れ出したが……面倒臭いぞ、ホント。

「ふうー……グイズ、シランに連絡してルイズ嬢に事情説明をしてくれ」

『了解です。その後は？』

「女王陛下の体力が回復次第、転送魔法で一気に帰る」

『了解しました』

あの場で転送出来ればよかったんだが、攻撃されたら不味いからな。

ミラージュハイドのお陰で俺の存在に気が付いて無かったのが幸이었다。

お陰で不意打ちして姫さんを無傷で奪い返せたからな。

「・・・しかし、アンドバリの指輪は恐ろしいな」

『ええ、当初は生体反応があるのかと誤認しましたからね』

「科学式センサー積んでなかったら、恐らく人間には解らなかっただろうな」

そう、そうなのだ。ヴィズですら魔法系統のセンサーでは騙されたのである。

ヴィズに搭載されたセンサーは科学系統のセンサーもある複合型。故に、魔法系統だけでは騙されてしまう様な事をエラーとして感知出来たのだ。

流星は先住魔法と言ったところか？時折おっそろしいよ、この世界の魔法。

なんせ錬金なんてよ、原子配列変換して高濃度のプルトニウムやウラニウムや重水素とか作って、核分裂か核融合させちまえば・・・
・あとは解るだろう？

某最後の物語の魔法であるフレアが再現出来るぞ？擬似的にな。

「……う、うん」

「あ、主殿。女王さまの目が覚めるですう」

「予想より早かったな。よし、休憩は終わり。リン、ユニゾン機能スタート」

「解ったですう」

そして俺とリンはまたユニゾンする。

長距離転送魔法を使う際は、リンのサポートが無いと無理だからな。

……序でに少し見せておいてやろう。戦争の呪いってヤツをな。

S i d e ア ン リ エ ッ タ

「う……ここ、は？」

くらくらとして痛む身体を感じつつ、わたしは目を覚ました。
一体さっきまでわたしはなにを

「ようやく気が付かれましたか、陛下」

「ッ！誰です！」

突然聞えた謎の声、そこに居たのは白い騎士甲冑の様な物を身に着けた子供がいた。

兜を脇に抱え、何処となくいい香りのする煙を出す棒状の何かを啜えている。

薄暗くて最初は顔が見えなかったのですが、徐々に目が慣れて誰だか解りました。

「あなたはルイズの」

「覚えておいででしたか。いや、今はソレはどうでもいいです。とりあえず安全な場所に移動しますのでついて来て欲しいです」

「安全？・・・ウエールズさま！」

ウエールズさまは？さきほどまで確かにおいでで会ったウエールズさまがいない！

わたしは誓ったのよ。彼を愛して、何もかも捨てても付いて行く

と。
「ウエールズさまは何処に！こたえなさい！」

「いや、落ちついてください。とりあえずは冷静になりましょう」

「わたしは冷静です！はやくウエルズさまのもとに行かないと」

そう言った途端、わたしは身体を抑えつけられるような感覚に陥った。

これはプレッシャー、王族という立場である以上何度か感じたことがあるモノ。

少なくとも自分自身に向けられたことは無いのですけどね。

しかし、それが目の前のルイズの従者である少年から出ていた事には気が付かなかった。

フェンと名乗った少年は、小さいのに嫌に響く声で呟いた。

「……国を、民を捨ててまでですか？」

ズキン、胸の奥が痛む。

だけど、わたしは……わたしは

「例え、何もかもを捨てても、ついて行きたいと、わたしは思いましたから」

「つまりは、この国が戦火に焼かれ、国土全てがあのだルブと同じになっても構わないと？」

「わたしがいなくても……わたしがいなくても、この国は機能しますわ」

そう、わたしは所詮は飾りの女王。

実質宮廷貴族たちを押さえつける為の鎖であり重しでしか無い。政治分野では枢機卿の足元にも及ばないのが実状。

「……………」

「ッ！」

目の前の少年からの圧力が上がる。

まるで体中に鎖を巻き付けられたみたいに重たくて冷たい。

威圧感とでも呼べばいいのだろうか、こんな子供がこんな気配を出せるなんて思わなかった。

何よりも、その眼　　濁った光を持つ正気と狂気が入り混じったかのような視線。

ソレを見た途端、心臓が早鐘を打つ、息が出来ない、身体の震えが、冷や汗が止まらない。

彼は何かを口ずさんだかに見えたけど、何を言ったのかは解らなかった。

そして彼が何かを口にした途端景色ががらりと変わり、何かが見えて来た。

アレは、家、だろうか。確か平民の家だったと私は記憶している。小さくても綺麗な家、そんな感じ……
だけど、それが突然爆発した。炎が上がり黒煙が空を隠す。

黒煙の隙間に見えるのは、アルビオンの空中艦隊……。まさかこの惨劇はタルブの？ そう思った途端場面が変わる。

「あ、ああ、ああ……」

周りには倒れ伏した人間、剣で斬られたヒト、火で焼かれたヒト、矢で射殺されたヒト。

戦争に巻き込まれた平民達が殺される姿が次々と映し出されていく。

その眼に映る全ての死体達の眼は、全て自分に向けられている。

“ どうして ” “ なぜ ” “ なんて ” “ ど
うして ”

“ アツイ ” “ イタイ ” “ シニタクナイ ”

眼という眼には疑問と苦しみの光が宿る。

その目線から眼を背けたい、なのに身体が動かない。

“あんたが”

“逃げだした”

“お前のせい”

“アナタが”

“見捨てた”

“なぜ”

死者の声が頭に響く、死んでしまえば平民も貴族も関係無い。

死んだ者は全てモノになる、死んでしまえば、全てがモノ言わぬ
軀となる。

だが、モノ言わない軀だとしても、苦しみを、悔しさを、そして
憎しみを持っていた……。

死者たちのどす黒い感情がわたしを包んでいく様な気がした。

思考が定まらない、寒い、空気が、息が……足りない

口からは息が漏れ、ソレが声帯を振るわせる声が響く。

こんな感覚は生れてから感じたことがない。知らないモノ。

目の前が歪んできた、何時の間にか涙さえ流していたらしい。

このまま永遠に苦しみが続くの？

しかし、そう考えた瞬間抑えつけられていた様な感覚が消えた。
身体が急に軽くなったような錯覚さえ覚える。

「……?」

気が付けば先程と変わらない草地の上にわたしは膝をついていた。何が起こったのだろうか？さっきまでわたしは……。

ふと気付けばフェンと名乗った少年は額に手を当て、荒く息をはいていた。

彼もまた汗を掻き、小刻みに身体を震わせている。

少年は震える手を虚空へと伸ばし、何もない場所から煙管を取りだして煙を吸った。

しばらくして落ち着いてきたのか、彼はわたしを見て口を開いた。

「……さっきのが、タルブで死んでいった人達だ」

「あれが？」

「そう、そして……アンタが国を見捨てればアレよりも酷い事になる」

その言葉にウィンドブレイクを直撃された様な衝撃がわたしの身体を突き抜けた。

周りの貴族たちも軍人たちも、戦争で犠牲者が出るのは当然だと言っていた。

だから、わたしもそう思っていた。だけどさっきの光景はどうだ。わたしが国を見捨てると……あの眼が！あのまなこがまたわたしを！

「ひ、ひっ」

先程の光景を思い出し、カチカチと歯の根が合わない。

震えも酷くなり、何も考えたく無くなっていく。

もう、逃げて、しまいたい、あんなのをみるのはもうイヤ……。

「……不味い、刺激が強すぎた　落ち着いて、息を深く吸って・
・大丈夫」

「あ、ああ……」

「いま鎮静魔法を使いますから、大丈夫」

少年が声をかけてくる、そして何かの魔法だろうか？魔法陣が現れてわたしを包んだ。

すると先程よりかは気分が落ち着いてきた。少なくとも取り乱したりはしない。

そして冷静になったお陰でわたしは半ば強制的に理解してしまった。

あのままウエールズ様に付いて行ったら、わたしはあの眼を浴び

なくてはならなかったのだ。

国を裏切る、民を裏切る、言葉にすれば簡単なこと。

だがソレは、あの混沌とした死者達の眼を、思いを、感情をその全てを自らの身に受ける覚悟があればこそ出来ること。

わたしは女王、飾りの女王。

しかし既にわたしの身には、この国に生きる民達をどうするか
責任が付いていた。

解っていた筈なのに、解っていなかったのね……。

S i d e o u t

S i d e F e n

あううう、やっぱり幾ら戦場に出ても、あの手の被害者の眼って
トラウマだよ。

みんながみんなどうしてって顔で死んでるんだモン。下手すると
夢にも出るわ。

まあちよいと刺激は強かったが、姫さんにはいい薬だったかもな。

ちよつと加減間違えて廃人にしまうところだったけどなんとかなつたから問題ないぜ。

え？問題あるやつぱ？

「ええと、陛下？」

「……え、はい。なんででしょうか」

……ふん、目つきが変わった。とりあえずは正気になった程度だけだな。

それでも、さっきの時よりかはましか、ま、上手くいって良かった。

実の所、ルイズ嬢の所に戻ってから幻術魔法闇の書の夢をかける予定だったんだがな。

予定より早く目覚めちまうし、しかも戻ろうとするから荒療治だったけどやらせてもらった。

個人的には姫さんが駆け落ちしようが、亡命しようが興味ないんだけどさ。

それが平時ならよかつたんだが、生憎いまは戦争中。

いま敵国に亡命なんてやらかされたら、この国の終わりは確定だ。そうなれば、また犠牲者が出る。しかもソレは力の無い民間人達だ。

流石にタルブの時とは規模が違うから、俺がどう頑張ろうと守れない。

だとしたら元々のこの国の上層部に頑張ってもらうしかない。

俺はこの国の人間じゃないから、国を動かしたりは出来ないから

な。

そう言う訳で悪く思いなさんな。

どちらにしろ姫さんは王族、その責務を果たす義務はある。なりたくてなったわけじゃないにしても王族は王族、責務は付いて回るんだ。

ソレを放棄して逃げる、敵前逃亡も良いところだろう。敵前逃亡は古来から死刑と相場が決まっているんだぞ。 姫さんや。

『（敵性反応、急速接近中）』

「（・・・速いな）」

『（腐っても魔法使いと言ったところでしょうか）』

「（まあ、さっきので時間を食ったからな・・・とっとと送るか）」

どうやら死者たちは真っ直ぐこちらに向かってきてきているらしい。どうやって探知してるんだろうな。

「陛下。とりあえず我がマスターの元にお送りいたします」

「マスター、ルイズの所ですね」

「はい、まだ追手が来ると思われます。ですので、女王陛下のみ先にお送りさせていただきます」

「???どつどつ事ですか?」

「どつするんだよ。」

「トランスポーター起動、座標設定、登録座標“魔法学院”」

【トランスポーター起動するですっ】

「こ、これは見たことがない魔法ですね」

「それでは陛下、グッドラック」

彼女が何か言う前に、俺は転送魔法で魔法学院へと彼女を転送した。

後は事情を説明してある我がご主人さまが上手くやってくれるだろう。

伝家の宝刀“丸投げ”を発動したのでござる。

「・・・さてと、姫さんには別れを言わせてはやらなかったが、所詮は死者だ。冥府に戻って貰おう」

『オートクレール格納領域より展開』

【解析の結果、敵は高速でダメージを回復、収束魔力刃“ディメンジョン・グレイブ”も合わせて使用する事をリンは提案するですっ】

収束魔力刃デイモンジョン・グレイブ、以前はアルアツソーの近接モードであるキーンセイバーモードを展開した際、特殊なモードであったCSモードと呼ばれたキーンセイバーでないと使用出来なかった。

アルアツソーを完全に兵装デバイスに交換し、キーンセイバーはオミットした為、CSモードは無くなったが、オートクレールでも魔力刃及び収束魔力刃使用時には、カートリッジを使えば使用可能となった魔法でもある。

これは極限にまで収束した魔力刃を更に高圧縮し、高エネルギー状態のソレを敵に叩きつける。

ソレだけでも十分な脅威なのに、それに加えて更に特別の術式を施し、魔力刃全体を特殊なフィールド場が覆い、フィールドに振れた物質を瞬時に分解出来るのだ。

後には何も残らない魔法、一応非殺傷は付いている。

だが、例えそれでも使われた相手はしばらく入院する事になる強烈な近接魔法である。

「……許可する、カートリッジ装填」

『カートリッジ弾倉を接続します』

ヘルメットをかぶり直し、しっかりと密閉、ロックされたことを確認した。

そしてオートクレールに格納領域から弾倉が自動的に接続された。

オートクレールの鐔の部分に弾倉を入れる部分があり、普段は入っていないが今回は特別だ。

またカートリッジをすべて消費しても、格納領域から自動的に装填される。

こうする事で一々手作業で弾倉交換をしなくて済むから非常に楽だ。

『エネミータリホ
敵影視認』

「さて、と。哀れな操り人形を眠らせてやろうじゃないか」

『・・・クサ』

「ほっとけ ミラージュハイド、ローラーブースト起動」

追いかけて来た敵を、俺は全てこの世界から消した。

粒子にまで分解されてしまえば、流石の先住魔法でも蘇らせられないらしい。

あの日に見た見知った顔もあつた。ウェールズ皇太子の顔だつて覚えてる。

だけどな、死んだ人間が生きている人間を拐しちゃいけないんだよ。

ましてや操られている人形が、そう言う事をするのは生きていた頃のその人間への冒瀆だ。

兵士たる俺が出来る唯一の慈悲は　もう一度殺すという事。

俺は最後に討ち取ったウエールズの顔を見ながら、ソレを弔いに
当てたのだった。

PS .

帰ると何故かルイズ嬢が新たな虚無魔法ディズペルマジックを覚
えていた。

もう呪いに掛かるのはこりこりだったかららしい。

コレも世界の修正力か

そんな電波が脳内に流れた時、俺はもうだめだと思い不貞寝した。

「プレシアさん辺りが欲しがっただろうなあ」(後書き)

*いや、この話作るのに4回位書きなおしちまった。

「戦争に強制的に介入させられました」（前書き）

*注意、この先作者の妄想がバーニング&オーバーロード中です。

原作レイプ、キャラの性格が変化し、オリジナル要素やクロスが発生します。

またルイズ等のゼロ魔キャラがしばらく出て来ない可能性もあります。

ソレが嫌な方はすぐさまブラウザバック願います。

「戦争に強制的に介入させられました」

「戦争に強制的に介入させられました」

妄想戦記

「 ってな訳があつたつて事だ」

「 ふわ〜すごいやん」(うっらうっら)

場所は再び八神家リビング。

相変わらず残酷な描写はほかして説明していたら、既に時計の針は夜の1時を指している。

ヴィータ姉やなのはやリンは夢の世界に旅立ち、リニスがニコニコ微笑ましそうな笑みを浮かべながら二人を布団へと連れて行ってくれている。

リビングに残っているのはユーノやシグ姉さんなどの生粋の魔導師とはやてだけだ。

もっともはやても睡魔に負けそうで、こっくりこっくりと船を漕ぎ始めていたけどな。

「とりあえず今日は」ここまで、続きは後日で良いだろうっ？はやて

「えっ、せっかくここまで聞いたんに」

「もう船を漕いでるだろう。寝ないと身体に悪いぞ？」

「へいきやもっん」

「……成長できなくなるぞ。主に胸が」

「さて、私はもう寝ることにするわ。フェン君お休み」

「ほいほいおやすみ」

シヤマル先生にアイコンタクトし、ふらふらのはやてを連れて行ってもらった。

よくまあココまで我慢して起きてたなあ。眠かったことだろうに。

「フェン、それで続きは？」

「うんうん、僕もつづきが聞きたい」

「シグ姉さん……っか、ユーノはなんでそんなに元気なんだよ」

「僕は徹夜の発掘とか慣れているから」

好奇心によるランナーズハイ状態ってか？
わかったわかった、だから顔近づけん近いから！
っーか、俺だって寝たいの・・・ま、いつか。

「さて、その後俺はまた姫さまに呼ばれたんだ」

トリスティン魔法学院が2カ月半に及ぶ夏季休暇に入る直前の事だった。

ある日、王城から召集を受けたのだ。しかも俺一人で来いという内容でな。

差出人は女王本人で書簡も本物であることをルイズ嬢に確認してある。

何であんただけ呼ばれてんのよと聞かれたが、俺としても全然さっぱりだった。

もしかして以前見せた夢の所為で、俺処刑されちまうのかなあ。
そんなこと思いつつも、呼ばれている以上雇い主さまの顔を潰す訳にもいかない。

だから、ほいほいと呼ばれちまったのである。

思えば、平和ボケとはまるで贅肉の様だ。

どんなに鍛えておいたとしても知らない間にくっ付いている。

平和な時間、微温湯のような時間に浸る時間が長ければ長いほど、

ソレは沢山付いてしまう。

少し考えれば、この時期に俺を呼ぶ理由なんて一つしか無かったんだ。

.....

.....

.....

城に付いて書状を見せると、話しは通されていたのかそのまま通される。

そして以前も来た事がある姫さんの執務室の一つに案内された。つーか幾らルイズ嬢の従者とはいえ、一国の女王の部屋に呼ばれるって普通じゃないよな。

お城のメイドさんの後に付いて行って、通されるがまま女王の執務室の中に入った。

この時、視覚情報として頭に入ってきた女王の姿を見て己の眼を疑っちまった。

以前あった時は一応仕事してたって感じだったというのに、ソレが今や

「……こっちはド・ポワチエ総司令官当てで、こっちはん？ああ、もうこんな時間」

書簡相手に悪戦苦闘するバリバリなキャリアウーマンの姫さんがそこに居た。

俺に気が付くと先程までせせこましく動かしていたペンをテーブルに置く。

あまりの自然な動き、なのに何処か気品があるような感じがする。こ、コレは王族のカリスマというヤツなのか？

どうやらあの日から大分アンリエッタ女王陛下はお変りになられた様だ。

何つーか、以前は私王族やってますって感じだったのに、今は王族ですって感じか？

服装も以前の様なドレス姿では無く、動きやすく機能的な動作の邪魔にならないシンプルな服飾だ。

恐らく事務的な作業時の私服姿なのだろう。

まあ以前の服はお姫様らしかったけど、仕事する服ではないよな。今の服装も王族がタダの従者相手に謁見する時の姿ではないが、これはこれで個人的なお願いという感情の現れなのだろうか？

そう言えば学院のメイドさんであるシアさんやキノさん達が独自

に持つメイド間のネットワークで聞いた噂話によると、姫さんは城に帰ってから今まで以上に政治等に力を注いでいるらしい。

その頑張り具合凄まじく、トリステインでは“鳥の骨”というあまりいい意味では無いあだ名がつけられているマザリーニ枢機卿から、直接政治に関する手ほどきを受けている程であるらしい。

治世者としての自覚と品格が現れてきて居る為か、宮廷貴族たちが姫さんを傀儡に出来ぬと悔しがっていると聞いた。

この間彼女に見せた幻覚は、大分彼女の性格を変えたらしい。いやさ、元から素養はあったがそれを顕著にってしまったのか。

「よくいらつしゃいました。ルイズの従者くん、いえ、リーダーくん」

「フェン・リーダー、召喚に応じました。それとフェンで結構です。ファミリーネームは呼ばれ慣れていません」

「ではフェンとお呼びします。ああ、ソレと敬礼はもう良いですよ。ここはわたくしの私室みたいな場所ですから」

「は、はあ」

ソレはさて置き、俺は先程から背筋を伸ばしてUSN式の敬礼を行っていた。

一応は相手はVIP、怒らせてはあとあと面倒臭い事になってしまふ。

ルイズ嬢のお仕置きというのは、サイトを見ていれば絶対にされ

たくないと思ってしまうからだ。

アレはやバ過ぎる・・・っと、話がずれちまったな。

何故姫さんが俺を呼んだのかを聞きたいところだが、向うが用件を話してからで良いだろう。

てなことを、思ってたんだが

「見ての通りわたくしは現在とてつもなく忙しい為、回りくどい言いは致しません」

この時、凄まじくズクンとした感覚が俺を襲った。

何と言つか虫の知らせ的な何かだったのだろう。

とてつもないほど嫌な予感がする。それはもうタイタニック沈没ばりの悪い知らせ

そう、つまりはだ

「フェン、こたびの戦争において力を貸しなさい」

「は！・・・はあ！？」

相手が王族だという事も忘れ、思わず聞き返してしまうほど

の悪い知らせだった。

「そ、それはマスターもご存じの話ですか？」

「ここに貴方だけが呼ばれたという事を考えれば解りますでしょうか？」

非常に意味ありげな視線を送って来る女王陛下さま……。

おいおい、幾らなんでも豹変し過ぎだとフェンさんは思いますよ？

「さようですか」

「左様です。この件に協力していただけない場合は……まあ言わなくてもわかりますわね」

「……」

部屋の気温が3〜4度くらい低下した。成程、たしかに以前の姫さんじゃないな。

判断に甘さが何一つない、どういう理由か知らないが前とは比べ物にならない恐ろしい程の丹力だ。

使えるもんは全部使う、じゃないと国は守れない　と、そう眼で訴えて来てやがる。

可愛い顔して中身が変わったか……大方協力しなければ国を上げての指名手配って所か？

「協力していただけない場合は、周辺諸国に極悪人として指名手配もさせていただきます。ロマリアにも異端の徒として通達しておけば、異端審問の為に聖堂騎士たちも来ますでしょう」

訂正、そんな生易しいもんじゃ無かった。
だけど、一体何を協力しろってんだ？

「協力するかは解りませんが一応聞きます。自分は何をすればいいのですか？」

「貴方はわたくしたちとは違う魔法を使えますわ。とても強力な、とても強い魔法を・・・ソレを王軍に所属するメイジ達に教えては頂けませんか？」

つまりは、教官をしろって事なのか？

「・・・残念ですが、適性の問題で難しいです」

「適性ですか？」

「はい、自分の扱う魔法をメイジが扱う為には、人の体内に魔力生成器官であるリンカーコアと呼ばれるモノが必要不可欠です。このリンカーコアは持っている人間と持っていない人間があり、持っている人間はかなり少ないです。また系統的にも根本的に異なります」

故、もし戦争の為にメイジに教えたとしても付け焼刃の効果もありません」

この世界の人間と俺とかとでは少しばかり身体の構造が異なるらしいんだよな。

どうにも、メイジと言う存在はこちらの魔法、ハルケギニアの魔法を使う事に特化している。

メイジにリンカーコアが付いているのは解っているが、あるからと言って扱えるかは別問題。

元々根本から違うから、すでに魔法運用に癖が付いた連中に習得させたとしても、上手い事扱えない事だろう。

「ソレ以前に、この外見では確実に舐められます。教導する方が難しいでしょう」

まあ、一応リンガベルカ式の変身魔法使えるから外見に付いては問題ないんだけどな。

ソレはさて置き、とりあえずUSN式の魔法の習得は無理だと包み隠さずに女王様に説明した。

少しくらい粘られるだろうなあ、とか考えていたのだが

「そうですか、なら仕方ありませんね」

どう言いつつもりなのか不明だが、要請してきた割に随分とあっさり引き下がった。

無理なことは承知の上だったのか？だがソレにしては全然残念そうじゃない。

……もしかして、他にもまだ何かあるってのか。

「そういえば、フェン、貴方の知人関係にはグラモン家のご子息が1人いましたわね」

姫さんのその言葉に、ドキンと心臓がハネ上がった。

その通りです女王さま、俺の知り合いに約一名、該当者がおりますよ。

最近、国軍に志願して祖国を守るんだと言っているヤツが……。

「え、ええ。たしかに」

「その方にはこの国の……いいえ、この世界の技術では無い魔法技術をご提供されているとか」

「いえ、そのようなことは」

「誤魔化されなくても大丈夫ですわ。ちゃんと学院の教員、生徒、そのほか務めているメイドや平民達から、新式ゴーレムの確認は取れていますから」

「……………」

なんてこつたい、この人本気で

「その魔法技術ならなんとかなるのではと思ひまして、主にゴーレム関連ですが強力なモノであるという調査も終えています。ソレらを教えてほしいのです」

俺を利用する気満々だ。そう、別に俺個人がもつ魔法や戦闘技術でなくても良い。

何せ今は戦時、“使えるモノは何でも使う”のだから……。そして俺は“魔導兵器群”を作り出せる技術、それを確かに持っている。

使い手に魔力がある事が限定だが、使用すればこの世界の戦争を変えるほどだ。

今まで培ってきた技術の応用だから、作るだけなら一日で作れるだろう。

何せ散々ギーシュのワルキューレで運用試験を行ったからな。

こちらの技術でも、この世界の魔法で運用可能であることは解つてゐるぜ。

「……もし断ると、どうなりますか？」

「貴方の主人に迷惑がかかります。それはもう大変な事になるくらいに」

「彼女は便宜上の主人です。明確な主従ではありませんから切り捨てる事もできます」

「だけど、貴方はそれをしない。行わない」

っ！ああ、確かに切り捨てらんねえよ。

ああ見えても結構気に入ってるしな。それにサイトの事もあるし、ギーシュ達もいる。

見捨てると言われても、多分出来ない・・・既に仲間なんだから・・・。

だが、ソレをここで言う訳には

「・・・そうとは言い切れ」

「ふふ、別に断ってくれても構いませんわ」

・・・なに？

「その代わりにグラモン家の子息に技術を提供して貰います。彼もこの国の貴族、喜んで協力してくれることでしょう」

「ならば、何故ソレを先に行わない！ のですか？その方が簡単の筈」

クッ、何時の間にか俺の方が激昂して途中で声を荒げちゃった。

どうやら姫さんのペースに乗せられちゃったらしい。
クソ、搦め手にも弱かったんだなオレって……。

「確かに簡単です。ですがソレでは命が無駄になる」

「……どういふ事ですか？」

「仮にグラモンからソレを手に入れたとしましょう。ですがアレは報告によれば大型のゴーレムではありませんが試作機でしたわね、それにゴーレムの装備は近距離は斧槍、遠距離は単発では無いですが大型砲が一つ。大軍を相手にするにはいささか不安があります」

「……驚きですね。見られていたのは知っていましたが、そこまです知られているとは」

「トリステイン王室の諜報部は結構有能なんですよ。小国を支える影の柱なのですから」

「……やべえ、コイツは本気で不味い。冷や汗が流れて止まらない。」

「下調べを十分行った上で、俺の性格上逃げない事を知って上で揺さぶってきた。」

「あんどき助けなければよかったと今更ながら後悔しちまうぜ。」

「……訂正があります。あのゴーレムは一応対軍仕様で多数迎撃が可能です。勿論数さえ揃えられればの話ですがね」

「そう、あのゴーレムはいわばワンオフ機、量産には適さない。違えますか？」

「ワルキューレ2式はあくまでもギーシュが作り上げたゴーレムだ。俺の世界の技術が使われているが、実質この世界のゴーレムをベースにしている。」

「だが俺の世界の技術を再現するには、ゴーレム各所を機械に置き換えなければならない。」

「当然それには手間と労力がかかる。とてつもなくね。」

「まったくもってその通りです。おみそれ致しました」

「この国を守るためには、もうなりふり構っては居られません。ですが守りの盾となり得るモノはどんな攻撃を受けても倒れず、迫る敵を打ち倒さなければなりません。その為には、フェン、貴方の待つ技術が必要なのです」

女王はそう言うと、バンと机に両腕を叩きつけた。

「これでダメならば、わたくしはお友達を戦場へと送らねばなりません。伝説の“虚無”の力を持つあの子とその使い魔さんを・・・そう、しなければならぬ程、この国は」

彼女は真っ直ぐとした眼で俺を見て、淡々とした口調で語る。

その眼はもう惑わないと決心した眼であり、爛々とした光が灯つ

ている。

どんなことをしてでも、国とその民を守ると誓った者としての眼。犠牲が減るならば、己が身ですら差し出す覚悟を決めた王族の眼であつた。

俺もその手の眼を以前何度も見たことがある。

UNの軍人にはそういった眼をした上級士官が何人も居た。

国を守るのが軍人というのを徹底し、またさりとて狂気には傾かない者。

いまのアンリエッタ女王は王族としての覚悟を背負う事を決めたまさに女王。

その彼女が自分の大切な友達すら戦地に向かわせることをいとわないと発言した。

それはつまり　　ってチヨイ待て待て待て！！そんなことされたら！！

「ちよっ！ルイズ嬢戦地に送られたら、自分も自動的に戦地に！」

「あら？解りました？ふふ、まだ貴方が借金を返済しきっていない事も調査済みですよ」

「な、なんたるちあ」

「思わず頭を抱える仕草をとってしまふ。幾らなんでもそりゃねえーぜ女王陛下よお。」

そんな俺を見てにこにこ勝利を確信したかのような表情で言葉

を続ける彼女。

・・・鬼か。

「そう言う訳で、どちらにしても行かされる事に変わりはありません。責任感の強い貴方の事ですから、流石にルイズまで見捨てると言う選択肢はそうは取らない・・・違いますか？」

・・・正確には見捨てることもできませんぜ？女王陛下殿。

「だけど、非常に癪なんだが見捨てられないというのも・・・事実はなんだよな。」

「仕方ないか　　俺は溜息を吐きつつ、もう降参といった感じで両手を上げた。」

「自分の降参です・・・しかしまさかここまで変わられるとは」

「　　あの死者たちの恨み眼はもう見たくありませんから・・・アレが例え夢であったとしても」

・・・そりゃ、俺も同感だねえ。

俺だって思い出したいと思えるもんじゃないぜ。あれは。

「でしたら全力で国を守らないといけませんでしょう？そう考えたらなりふりは最低限しかかまっていられませんわ」

「むしろ、そう言う風に考えて動けることを自分は尊敬しますよ」

「あら、お上手ねフェン……して、回答は？」

ズズンと重たい何かがのしかかる感覚がきた。

すげえな、これ程のプレッシャーを感じたのは教官や母上以来だぜ。

口では言わないが、断ることは許さないと圧力をかけて来ている。

今の今までの彼女が示した言動で警戒して無けりゃ、俺ですら取りこまれるかと思った。

コレが王族という人間なのか……面白い、実に面白い。

「……一部条件付きでなら、ああ、心配しなくても力は貸しますよ」

「聞きましょう。この国を守れるならば、ある程度はどうとでもして見せます。この国の民の命は貴方の力にかかっているともしえるでしょう」

「頼もしいお言葉と、随分と恐ろしい言葉な事で……では」

正直もう本当に降参だ。だってなあ、既にこの部屋の周辺には多数の人間の気配が感じられる。

念話でヴィズに確認して貰ったら、メイジが5名以上いるのを確認した。

ほかには肉体を鍛えている人間が複数名、多分衛士隊だろう。

流石にB Aを装着する前に複数名に同時攻撃されたちまつたら耐えきれぬ自信がないぜ。

多分俺が断つたら不意打ちするのが狙いなのかもしれんな。
俺は外傷では非常に死ににくいが、痛いのは何回受けても嫌なのだ。

それにもうにも人質が多い、この国の民全部を人質とか・・・
どうよソレ？

流石にタルブの二の舞とかは・・・俺はゴメンだぜ。

こうして俺は、ある意味ご覚醒なされた女王陛下殿と密談を行った。

色々と掛け合って権限を手に入れて、元々作ってみようと思っていた兵器をある程度簡素化して開発する事を受諾したのだ。

一応極秘裏に行う計画ではあり、その力は女王直属のモノとしての派閥にもならない。

ある意味王族の特殊部隊であり立場は中立である役割となるらしいのだ。

これに関して事情を知る関係者が何名かおり、俺がソレを教導す

る事をしぶつたのだが、それを姫さんが見事に黙らせた時のあの手腕は彼女が本当に女王であることを見せつけられた気分だったぜ。

しかもコレ、俺が城に来て彼女の話を受諾した初日にコレだけの事をやっちまったんだぜ？

ありやもうアンリエッタじゃなくてANNRIETTA様だな、うん。

それはさて置き俺は一度準備と報告の為に学院にもどることにした。

んで、俺の主であるルイズ嬢に、女王からの命令で国に協力する事になった旨を伝えた。

最初は驚かれたが、彼女は女王に協力出来るなら是非しなさいと俺を送り出した。

むしろ手紙で女王に“ドンドンこき使ってください結構です”とか書いた程である。

どういふ訳だかそこら辺には俺の意思は介入できないのね。

まあ俺が逃げだせば、トリステインは自国の戦力だけで戦う事になる。

おまけに俺は指名手配おたずねものとなり、戦争に協力しなかったとしてルイズ嬢は牢獄行き決定だ。

俺が協力してもしなくても、どちらにしても戦火によって人が死んでいく。

タルブのあの日みたく、関係がない人間が死んでいくのを見るくらいなら……。

ならば、俺はなるべく知りあいが死なない道を選ぶ。

どうせ起こってしまう戦争ならば、負け戦の様な物だと思われるなら。

ソレを覆してやりてえとも思ったのだから。

そげな事があつた訳で俺は夏季休暇に入つてすぐに学院から離れた。

あの兵器を作るには、広い土地とか色々と準備しなければならぬ事があつたからだ。

とりあえず女王をお願いして、回してもらえだけの土メイジ達と広い土地を貸して貰つた。

広い土地に土メイジ達の力を借りて錬金を用いてプレハブを幾つも設営した。

それらを繋げて表面を補強して即席の練兵場を作り上げつことに成功する。

そしてこの国を守る力である兵器を作る為の準備の方は比較的すくに終わった。

元々それに使われる技術はギーシュと開発していた技術の応用だったからだ。

若干作るモノは大きくなってしまったが、魔法技術のお陰で無理が効く。

また施設設営を手伝った土メイジ達への指導等も取り行う。

彼らは別に施設設営の為に集めたというだけでは無いからだ。

上手くいけば、むしろ彼らこそが後方での主役となりうる存在になるだろう。

そして殆どの準備を終え、後は適性のある兵士を選ぶだけだった。新しい守る為の力を、この国に作って渡さなければならぬのだ。傲慢と思いたければ思えばいい。コレは俺にしか出来ないし、その力を作るのは俺なのだ。

それに俺が持つ科学技術、魔法技術はこの世界じゃチートレベル。本気を出せば、トリステインを全ての国を束ねる大国にしたてる事も出来てしまう。

だが、そうさせない為にも“守る為”の力として機能して貰わないと困る。

そう言う訳で俺が手塩をかけて作るしか方法がないってワケなのである。

そして俺は女王陛下に王軍に配属される即席士官候補生達。

別名“数合わせ”、もしくは“役立たず”とも言える連中。

トリステイン魔法学院からの志願士官候補達を回してもらえるよ

うに要請した。

彼らはまだ王軍に士官する前だ。だから何にも染まっではない。

しかも成長途中であるから、いまのところ魔力運用に変な癖も付いていない。

だからこそ、この計画には使えるというものだ。

この国を守る為の盾となるには、何かに染まっついては出来ない。

案外この要請は簡単に受理された。

実の所、この志願士官たちを育成出来る程の人材が不足していた上。

遠征準備の為に即席士官候補生達への教練をする時間も無かったのだ。

誰だって不完全なお荷物を部隊に入れたいとは思わない。

その為、ある意味頭を抱えていたらしく、俺からの要請は渡りにふねだったらしい。

とりあえず一度簡単な選抜を執り行おう。

その上で更に篩ふるいに掛けて生き残れる用に鍛えなければ

S i d e o u t

学院が夏季休暇に入つてすぐに、王軍への士官を募る為の募兵官がトリスティン魔法学院で王軍への公募をとり行つた。

本来なら夏季休暇が終わつてから位からの予定であつたが、すこし予定を早めたのである。

勿論、一部の教師やオスマン氏は反対したが、ソレを押し切られる形だつた。

そして魔法学院の殆どの男子生徒は公募に応募していた。

祖国を守る、戦うという行いは貴族として誉れ高いと考えたからだつた。

そして魔法学院から離れ、一同は即席練兵場へと連れて来られていた。

その中にはマリコルヌやギーシュなどの見知つた顔も混じつていた。

「ここが、練兵場なのかい？なんかみすばらしいね」

「おいおいマリコルヌ、戦う人間を育てる場所が華やかな訳無いじゃないか」

「それもそうか」

練兵場と呼ばれた場所にはポツンとやや大きめの施設があるだけだつた。

少し離れた所には、小屋らしきモノが見えるが恐らくは倉庫だろうと彼らは思っていた。

そのまま大きめの施設へと案内され、彼らは中に入ったのだった。

中に入ると高い天井が大きな鉄骨で支えられた飾りつけも無い部屋へと案内された。

恐らくは屋内訓練場なのだろう、色々な機材が隅っこに寄せられている。

そして彼らはここに連れて来たメイジに指示されて、何やらアーチ状の下をくぐれと言われた。

そのアーチはマジックアイテムで、適性がある人間を残すことが出来るらしい。

何の適性かは知らないが、恐らくはメイジとしての資質か何かだろう

そう考えた即席候補生達は特になんの疑いを持つ事も無く、アーチをくぐって行った。

アーチに取り付けられたランプが、人が通るたびに光ったり光らなくなったりする。

どうやら光った人間が残されるらしく、光らなかった人間とは別グループに分けられていた。

意図は不明だが、何かを選別しているのは解る。

全員がアーチをくぐり終えた時には、既に人数は3分の1にまで減っていた。

アーチが光らなかった人間は別の練兵場へ向かわされると簡潔に指示され、最初案内されたようにメイジに連れられて部屋から退室していった。

アーチが光ったが為、選別された即席候補生達。
彼らは部屋の真ん中まで連れて来られ、待機を命じられた。
もつとも士官候補生と言っても、そのほとんどは学生である。

学生が集まれば当然好奇心からくるおしゃべりを行う為、部屋の中はたちまち騒がしい雰囲気にもまれていった。中には俺なら訓練受けなくても戦場に出れば活躍してやるぜと言っている学生も混じっている。

ソレを見ながら、ギーシュは溜息を付いていた。
成程、コレは滑稽だ。まるで過去の自分を見せられている気分になつて来る。

自分も彼と出会わなければ、ああいう風な感じで自分の家は軍人だから、絶対に手柄を上げて見せるとか自慢していただろう。

となりで何が始まるのかなあ。キツイ訓練だったら嫌だなあと言っているための友人に、訓練なら辛いに決まってると思うよと心の中で返事を返しつつも、どうなるのだろうかと不安に思っていた。

しばらくして、ざわざわと騒がしい室内に一人の男が入ってきた。
中肉中背、精悍な顔立ちでコーヒー色の肌に薄いブラウンが入った短髪で、灰緑色の野戦服を着込み、顔に青いラインが入ったその男は、騒がしい学生たちの前に立った。

ギーシュはどこかで見た様な気がしたが、その男からかもし出る威圧感の様な迫力に声を潜めた。

彼のだす迫力に騒がしかった学生たちも徐々に静かになっていく。

そしてかなり静かになった時、目の前の男が静かだが響く声で声をだした。

「ようこそ貴族の学生の方々。この新設されたトリステイン軍独立部隊の練兵場に」

「独立部隊？」「新設だって？」「どういう事だ」

その男の言葉に、即席候補生達はざわざわとし始める。トリステインの軍隊は大きく分けて三つ存在する。

- 一つは時の王を最高司令官に冠する“王軍”
- 一つは農民や諸侯が持つ軍などを主体とする“国軍”
- 一つが空に浮かぶ軍艦を指揮する“空海軍”

こたびの戦争はアルビオンとの戦争である為遠征が予想される。その為数合わせの為にこれら三つの軍隊が合同で戦争に参加するのだ。

ここに来ている即席候補生たちは、ここで指揮官としての何かを学び“王軍”か“空海軍”に回されるモノと考えていた。

だが、目の前の男の言葉からすると、微妙に違う部署であるようである。

「自己紹介が遅れたが、自分はジョナサン・ワイズマン訓練指揮官だ」

彼はそう言うと、部屋の奥へと続くドアを指さした。

「私は女王陛下からの指示により、トリステインを守るべき盾を作る為にこの地へと派遣された。現時刻を持って、貴様らは私の訓練兵となる。選ばれた諸君らが真に国を重んじる勇士ならば、このドアをくぐり、訓練兵服へと着替えたまえ、またここでの訓練には魔法を使えないという事態も含まれるため、魔法訓練以外での杖の所持を禁ずる」

即席訓練兵たちのざわめきがひととき大きくなった。

幾ら軍の訓練のためとはいえ、貴族の証である杖を手放せとはこの男は何を言っている。

その様子を見たワイズマン教官は少し口角を上げて晒った。

「いやというならそれでもいい。先も言ったが君達は“選ばれた”者たちだ。ここでの訓練が嫌だというのなら、回れ右をして外へと出て行ってくれ。外に居る係員が王軍の方へと案内してくれるだろう。だが忘れるな。君たちはあくまで即席の予備士官だ。戦場で手柄を立てられる様な場所へは配属されない」

ギーシュはある程度その事は予想していたが、この場に居る何人がが不満そうな声を上げていたのを聞いて、夢を持ち過ぎだと考えていた。ふと、ワイズ教官と眼があつたギーシュは何故か知っている気がしたのだが、ソレを押しとどめて疑問に思ったこと質問を試みる事にした

「訓練指揮官殿！質問があります！」

「教官で構わん。貴様は？」

「この度、軍へと参加する為に志願したギーシュ・ド・グラモンです」

「ギーシュ訓練兵か。ふむ貴様の顔は覚えた。質問とは何だ？」

「はい、先程の“選ばれた”とはどういう意味でしょうか？」

ソレが気になっていた。

アーチをくぐらされた時の感じからして、アレで選別していたのは解る。

だが、どうにも他に意図があった様な気がしてならなかったのだ。

「ふむ、その質問に答えるが、ある意味で残酷な真相と優しい嘘、どちらが聞きたい？」

「……真相の方で」

「ではお答えしようギーシュ訓練兵。貴様らは志願したと言ったな」
「？」

「はい、祖国を守る為に軍に志願しました」

「では、元々タダの一介の学生が、軍においてどれだけ役に立つと思っ？」

「それは・・・」

以前の自分なら貴族として、軍の中で華麗に役立って見せると応えただろう。

だが現実的に考えて、今の今まで大規模な戦争を知らない学生が、戦時下の軍でどれだけ役に立つだろう事だろうか？

ギーシュが答えあぐねていると、となりにいた知らない学生が声を発した。

「そんなこと決まっている！メイジとして貴族として、軍の中核で役立つに決まってるだろう！」

そんな訳がないだろう！　ギーシュは心の中で安易に応えた学生に向けて叫んでいた。

あまりにも愚かなその答えを聞いたワイズ教官は一瞬嘲笑を浮かべたがすぐに無表情となる。

その為、その蔑みを浮かべた笑みを見たモノは誰ひとりとして居なかった。

「教えてやろう。軍において・・・こと戦時下の軍において貴様らはまったくの役立たずだ」

「「「な！」「」」

周りが反論しようとする前に、ワイズは言葉を続けた。

「この中に兵隊を指揮出来る者は？補給の書類を申請できる者は？作戦を考え上層部に申告出来る者は？　誰も居ないだろう？そう誰も居ない。つまり貴様らが何人集まろうが軍隊においてはタダの張りぼてだ」

ブーイングが飛ぶ、この中の誰だって張りぼてになる為に志願した訳ではない。

それぞれが国を思って、あるいは愛する人を守りたいと考えて志願したのだ。

もっとも中には手柄を上げればモテると考えた輩もいる様だが・・・

「そう殺気立つな。事実だろう？つまり貴様らはクソ集る蠅以下、いやさクソにも劣るクソ虫だと上層部は考えている。どうあがいても貴様らの配属先は邪魔にならない特別士官候補生部屋かもしくは兵站を行う輸送部隊への配属だ」

王軍の半分は今回は兵站の為の輸送部隊だからな　そうワイズは締めくくった。

現実を言われ、どんどん学生たちの士気が低下していった。

祖国を守る為に、敵と戦う為に志願したのに敵とは戦わせてもら

えず、しかも張りぼて役だという。

戦果をあげて凱旋することを夢見ていた学生たちはズーンと重い空気を伴い静まり返っていた。

「さて、そこで先の質問の答えだが　　ギーシュ訓練兵」

「は、はい！」

静まり返った中唐突に自分の名を呼ばれ、反射的にギーシュは返事を返した。

思わず声が裏返ってしまったのは仕方ないだろう。

「そんな貴様らにチャンスを与えてやろうと、心優しき女王陛下が許可したのがこの独立部隊だ」

「チャンス、ですか？」

「そうチャンスだ。ここでの訓練は敵が来ると予想されるまで後数カ月が長くて半年しか時間がない。故に血反吐を吐いても休むことを許されない過酷な訓練が要求される。先程の“選ばれた”というのは、その訓練に貴様らが付いて来ると判断され、新設される女王陛下直属の部隊。通称“水精靈騎士隊”^{オンドレイヌ}と呼ばれる特殊部隊への切符を手にしたことにほかならない」

ワイズの言葉に、ワツとこの場の空気が沸きたった。

女王陛下直属の部隊に入れるという名誉、これ程貴族にとって名

誉なことは無い。

実績も何もない新設部隊だが、ソレはこれから築いて行けばいいのだ。

「まあここでの訓練はある意味選抜試験でもある。ここでの過酷な訓練に耐え抜いた勇士には、名誉ある水精靈騎士隊オンティーンへの配属が決定される」

「お、俺はやるぞー！」「俺もだ！」「俺だつて！」「女王陛下可愛いわ！」

「だからこそ今一度聞く、ここでの訓練に耐え抜き名誉ある部隊へと入ることを望む者は、杖と私物をこのトランクへと詰める。そしてこの奥の寝所で訓練兵服へと着替えてドックタグを身につけ、20分後にグラウンドに整列して貰う。私からは以上だ」

ワイズはそう言つと、即席候補生達の方を見ずに奥へと引つ込んだ。

彼の言った過酷な訓練という言葉に臆した連中が少し抜けたが、それでも全員で20名近くが残っていた。

そしてその中にはギーシュやマリコルヌの姿もあった。ギーシュはもとより軍に参加するのを考えていたし、女王陛下直属部隊への配属権が得られるなら過酷な訓練くらい耐えて見せると考えていた。

つーか、サイトとの訓練でココ最近自分から動かないと危険な為、体力づくりに励んでいたから、ある程度は平気だと判断したからだった。

一方のマリコルヌの参加理由はもつと単純である。
曰くモテたいから・・・ある意味自分の願いに酷く忠実なやつ
であろう。

この選択が正しかったのかは、のちに身を持って知ることとなった

なにせ、のちに“トリスティンの地獄の練兵場”と呼ばれる
場所の第一期兵となるのだから。

その事を、個々に居る者が知る由も無かった。

「戦争に強制的に介入させられました」（後書き）

* アンリエッタ様覚醒 W

「始動！地獄訓練！・前編」(前書き)

妄想ラディカルグッドスピード中、もう止められないぜ。

「始動！地獄訓練！・前編」

「始動！地獄訓練！・前編」

妄想戦記

S i d e ????

部屋に戻った俺は魔法を解き教官室のイスに深く腰掛ける。

幾ら“記憶”からトレース出来るとはいえ、ああいったのは俺の性分じゃない。

だがそうも言っていられないだろう。時間がないのだから。

「……教官、俺に力を貸してください」

思わずそう漏らしていた。

性格や多少の人格すらも魔法でトレース出来るが完璧では無い。扱い慣れてない為かなり疲れたが、そうも言っていられない。

首に掛けているドックタグを指で遊びつつも時間になるまでまつ。窓から外を見れば、ほぼ全員が整列している様だ。準備が出来た

んだろうな。

まだ若い彼らは今の所 物見遊山の学生きぶんだろう。

だが生き残ってもらう為にはソレではいけない。

憎まれもするだろうが、それこそ生き残ってもらうには必要なことだ。

……教官、貴方もこんな苦勞を背負っていたんですね。

「時間か・・・リン頼む」

「ハイですう。記憶からのワイズ教官をトレース。ベルカの変身魔法を使用しますう」

リンとユニゾンし、変身魔法を使用して貰う。

この手の補助魔法は俺は不得意だが、変身技能を持っているリンには朝飯前だ。

変身魔法の凄いところは、魔力を常に消費するが手足のリーチが伸びるところだ。

本来は無い位置に手があるという風になるのだが、魔法で修正されるので違和感がない。

変身魔法はチートです。

そんな訳で、フェン・リーダーこと俺は今からワイズ教官となって訓練兵をしごきに行く。

出来れば半分程度は残って欲しいなと考えつつ、部屋を後にした。

S i d e o u t

S i d e 三人称

残った学生たちは寢所で着替えをすまし、練兵場のグラウンドへとやってきた。

寢所が一部屋で3段ベッドを使う場所だった事には衝撃を受けたが、その程度で決心は鈍らないしやめるつもりも毛頭ない。

しばらくしてワイズ教官が現れた。彼は迷彩のはいつた野戦服のズボンとランニングといういで立ちで、腰のベルトに小さな杖らしきものを差し込んでいた。

どこか張り詰めた雰囲気を漂わせており、その空気に吞まれてその場に居た訓練兵たちが姿勢を正した。ソレをみたワイズは宣言するかのようには身体の奥に響き渡る音量で声高らかに話しだした。

「只今よりクソの役にも立たん貴様らの新兵訓練を始める！例え貴族だとしても、新兵訓練期間中は二等兵以下として扱う事を女王より許可されている！解ったか新兵ども！」

「は？」「へああ？」「は、はいっ！」「りよ、了解！」

二等兵とはよく解らなかったが、それぞれが全くのバラバラに気の抜けた返事を返す。

だが、ワイズ教官はそれにダメだしをする様に声を荒げた。

「よく聞けFNG共！
フアンギキヤイ

ここでの返事はそんな抜けた言葉じゃない、返事は“Yes”か“
No”の二種類だけだ！

訓練中は貴様らのそのクソツたれな口から出す言葉の最初には“サ
ー”をつける！

自分より階級が上の者を呼ぶ時は、必ず“殿”をつけるんだ！
貴様らの足りない脳みそでも理解出来る非常に簡単なことだ！解つ
たか新兵共！」

「「「「「イ、イエス・・「「「「「

「バカ野郎！言葉の最初に“サー”をつけると言ったが理解できな
いか！このクソ虫ども！」

「「「「「サー・イエス・サー「「「「「

「声が小さい！もう一度だ！」

「「「「「サーイエツサー！「「「「「

「そんなネズミの喘ぎ声を聞きたいんじゃない！もつとだ！もつと
でかい声を出せ！！」

ようやくワイズ教官からお許しが出た。

「よし、まだまだだがソレ位で良いだろう。だがお前ら、今の返事を忘れるな、いいな！」

「……サーイエツサー……！！！！」

「次は軍隊生活での基本である気をつけだ。総員気をつけッ！」

ワイズ教官から号令がかかり、全員がザッと気をつけをするがその動きはバラバラだ。

気をつけのままの姿勢で立ち続ける訓練兵たち。

「つま先を広げろ！もっと胸を張れ！！立つだけじゃなく全身に気を配れ！」

ソレを見ながらワイズ教官が前から順に背筋や腕の位置やつま先等に修正を加えていく。

その後も休めと気をつけを繰り返し行い、細かな部分を修正して、身体に覚え込ませていった。

肉体的訓練が行われると思っていた訓練兵たちだったが、予想外にも礼節の訓練の方が辛いと感じ始めていた。

「次は軍隊においてもっとも基本的で一般的で重要な挨拶である敬礼だ。」

そしてお次は敬礼、その名の通り敬意を表して礼をする挙手であり、正しい姿勢で上官や同僚などに対して敬礼を返さない事は非常に失礼に当たるそれは軍に志願するとしても絶対に覚えていなければならぬ最低ラインの作法である。

傭兵ならばココまで気にしなくても良いが、彼らが所属するのは王軍である。

故にワイズは最初の内にとことん軍隊式礼儀作法を教え込むことにした。

「例えば上官を前にしたら上官が止めて良いというまで敬礼を続けなければならぬ。コレの訓練が出来るのは今の内だけだ！今出来るこの間に身体に覚え込ませておけ！」

「『『『『『サーイエツサー！！！！』『』『』『』」

こうして、軍隊式礼儀作法を覚えさせられた訓練兵たちは肉体的より精神的に疲れていた。

ひたすら礼儀をやらされ、間違っていると罵倒され続ければ誰だって疲れる。

だが、この時はまだ頑張れると、訓練兵たちは考えていた。

確かにキツイ訓練だったが、思っていたほどでは　だがそれも次で覆される。

「軍隊において必要なのはタフな肉体と精神である。てな訳でお次

はマラソンだ」

そうワイズから指示が出された。

なんだ走るだけかと漏らす人間も多々居たモノの、各々整理体操をして走らされる。

だがココでギーシュはある事に気が付いた。

「サー！教官殿！質問があります！サー！」

「質問を許可する」

「サー！どれくらい走ればいいのですか？サー！」

「俺が止めると言うまでだ」

周りの訓練兵は解っていない様だったが、この答えにギーシュは青ざめた。

終わりが指定されていない、つまり眼の前の男が一日走っているとさえ言えずと走らされる。

苦しくてもずっとだ。やめたくても止めさせては貰えないだろう。

「総員整列！走破準備！走れ！GO！GO！GO！GO！GO！GO！GO！！！」

だがギーシュが何かいえる訳も無い。

こうして新兵訓練名物の終わりの見えない地獄のマラソンがスタートした。

.....

.....

.....

訓練兵たちが走り始めること数時間が経過した。

「ハアハア、あ、あいつは・・・鬼だ！」

「ヤツは俺達が苦しむ姿を見て楽しんでるんだ」

「ゼエゼエハアハア」

「コイツ、もっとやせろよクソ」

既に累計で10km近く走っている彼らは息も絶え絶えだった。一応休憩も数回挟んだが、そのたびに力尽きてぶっ倒れるヤツが

出る始末である。

だが、倒れたヤツをやさしく介抱してくれる訳も無く、ワイズ教官は魔法で水をぶっかけて無理矢理覚醒させてマラソンを続けさせた。

それでも限界のヤツは、余裕がありそうなヤツが率先して肩を貸してマラソンを続行した。

仲が良いという訳ではなく、そうしないとペナルティが追加されてしまうからだだった。

「ゼエハアゼア」

「ヒーヒー」

「ハツハツハツハツ」

ただひたすらグルグルとグラウンドを回るだけだというのに、日ごろ運動を殆どしない学生である彼らは玉の汗を噴き出しつつも気力で走り続ける。

一度はもう嫌だと泣き叫び、中には教官に殴りかかろうとした馬鹿も居たが、そいつらは全員教官に返り討ちにされ気絶し、そいつの後ろに居たヤツに担がされている。しかも今後教官にたて付くことには、ペナルティとして重しをつけると脅されたからたまらない。

しかもコレだけ走っているというのに、ワイズ教官はほんの少ししか汗を掻かずに、訓練兵たちを叱咤し、倒れたヤツを引き起こしてマラソンに復帰させる体力がある。

コイツ本当に人間かよと思いたいと思った。
だが気を抜くと自分が倒れてしまう為何も言えず、ただひたすら走るだけだった。

そして更に時間が立ち、ようやく休憩を入れてもらえる頃には死屍累々。

膝について胃の中身を吐瀉する者、死んだように倒れる者、大字に寝転がってひたすら荒くなった呼吸を沈めようと努める者と様々だ。

ギーシュも前から少しずつ身体を動かしていたお陰で膝をつくことは免れたが、心臓がバクバクと喋って荒くなった息を収めるので精いっぱいだった。

流石に適度な水分補給はさせてもらえるが、身体が受け付けようとしなない。

だが飲まないと目の前がドンドン暗くなるような感じがした為急いで水分を補給する。

胃が戻せ戻せとばかりに逆流しそうになるが、戻す訳にもいかない。

「お、おいマリコルヌ・・・ほら水分を取って・・・」

「ゼエ、ゼエ、ゼエ、ゼエ・・・もう、イヤ」

「おい、おいってば！」

もともと肥満体形で運動なんて苦手のマリコルヌは完全に干上が

っていた。

途中から逃げたかったが、後ろから教官が眼を光らせている上に杖も無い。

そんな状態では逃げる事も出来ず、元々小心者のマリコルヌは教官からの威圧感が恐ろしく最後まで走り抜けたのだ。

他の訓練兵も何人かが完全に気絶したというのに、ココまで持ったのはある意味奇跡だろう。

「どうした？もうギブアップか？」

マリコルヌとギーシュの背後から声が聞こえた。

振り返るとそこには腕を組んだワイズ教官が立っている。

「ふん、見た通りか。マリコルヌ、見た目で解っていたがお前は兵隊には向かないらしい」

「ゼエ、ゼエ」

「お前はトリステイン魔法学院の学生だったな。この際に家に逃げ帰って平和に暮らした方が良い。もっとも、このまま帰ると訓練の段階で逃げだしたという“臆病者”の汚名を被ることになるが・・・」

臆病者と言われ、マリコルヌがピクンと反応したが、お構いなしにワイズは言葉を続ける。

「さぞかしお前さんの家は笑われるだろうよ。もつともここでの訓練に耐えかねて、王軍の方に逃げて行っていたとしても、このままだと軍にとってもお荷物だろうけどな。所詮はクソ虫か」

「くっ、くそ！」

ワイズ教官が見せる蔑みの眼と、罵倒する言葉に怒ったマリコル又は、残った力を振り絞って立ち上がり教官に掴みかかるうとしたが、限界まで身体を酷使した所為で立ち上がれない。

ガッ！

「ぎゃー！」

だがワイズ教官はそんなこと関係無いと、立ちあがろうとしたマリコル又をけり上げた。

そしてビリビリと響く声を張り上げる。

「俺は親切で言ってるんだ！お前はトリスティンの王軍に入ったって役にたちゃしない！レコン・キスタだって倒せやしない！その程度の根性で祖国を守ろうなんてとんだお笑い草だ！」

「うおっおっ、うおおおおー！！」

「泣いてるヒマがあつたら立ちあがって見せる。他の者は後少し休憩、その後整理体操を開始。終わり次第屋内へ移動だ」

悔しさに涙を流すマリコル又にも眼もくれず、ワイズ教官はその場を立ち去った。

マリコル又は運動が苦手だし、コレ以上は無理だろうと彼を知る誰もが考えた。

だが、マリコル又はひとしきり泣いた後、眼に怒りと殺意にも似た光が宿り、渾身の力を込めて雄たけびを上げながら立ちあがった。

普段ならもういいやと投げ出してしまえた。

だが自分を歯牙にすらかけない程に罵倒されたのはこれが初めてだった。

どうしてだかは解らないが、彼はそれがとても悔しいと感じた。

そして罵倒される度に、自分の中でどうしてこんなに悔しいのかと考えた。

貴族とは背中を見せない者　　そう誰かが言っていた。

ここで逃げたら、自分は後ろ指を指されるデブで馬鹿な学生に戻ってしまう。

もつろうとした意識の中で、彼は自分に怒りを覚え、負け犬になつてなるモノかと唸ったのだ。

俺はクソ虫なんかじゃない！臆病者なんかじゃない！家を馬鹿にされてなるモノか！

そして彼は気力で立ちあがった。己がクソ虫では無いと証明する為。

「立つんなんらさっさと立ち上がれ、雄たけび上げても絵にもなら

んぞ！！クソ虫が！！」

もつともワイズ教官もサディストだから罵倒した訳ではない。

中の人はこの程度の訓練で既に根を上げている彼らを行く末をマジで心配していた。

わずか数カ月、その間に彼らを一端の戦士に鍛え上げなければならぬのだ。

つまりこれよりもっとひどい訓練が待っている。

だからこそ心を鬼にしていた。甘い戦場では生き残れないから。

「整理体操を始めるぞ！解ったかFNGども！」

「『サーイエツサー！！』」

「声が小さい！」

「『サーイエツサー！！！！』」

屋外の恐怖のマラソンを終えて、今度は屋内で筋肉トレーニング。なんで貴族がこんなことと言える人間は誰ひとりとしていなかった。

その日の全ての訓練が終わった時、残っていたのは死体の様になった訓練兵たちだけだったからだ。

だが、彼らにもっと残酷な言葉がその日の訓練の終わりに告げられる。

改めて思う。

メイジは魔法が使えれば良いという思いは変わらないが、ソレでも一応男としてココまで貧弱なのはと思っていた。

現にほぼ同じ回数をこなしていた筈のワイズ教官は元気に隣で飯を平らげている。

それを見ていた全員が、この教官はバケモノかと思っただらしい。とりあえず食わないと明日持たないぞとワイズ教官に諭され（脅されたとも言つ）、自分の飯が乗ったトレーを持ってくる。

献立は具がトロトロになるまで煮込まれた流動食の様なシチューだった。

だがソレですら、いざ口に入れようとすると

「……………」
ツ！！！！
「……………」

ほぼ全員がご飯を口に入れた瞬間、食堂から出ていった。トイレに向かったのだ。勿論吐き戻す為である。

普段運動をしない連中がアレだけの運動をしておいて、普通に食事が出来るわけがない。

少しばかり鍛えていたギーシュも例外に漏れず、他の連中と共にトイレへと直行していた。

「……………残してなるものか。せめて自分の分だけは……………ウブ」

そして、その中で唯一マリコルヌだけは素晴らしき根性を発揮し、シチューを平らげていた。もっとも普段食べる量に比べれば、数十分の一にも満たない量だったが……。

結局シチューは約一名以外誰ひとり食べられなかった為、全て回収されて鍋に戻された。

もう一度火にかけて魔法で冷やしておけば一日くらいは持つ。食材を無駄にはしないのである。

そしてその日の夜

寝所で全員泥の様に眠っているのかと思いきや。

「いびきいびき」

「いびきいびき」

「いびきいびき」

「じじじじじじじじ」

所々からつめき声のような呪租の様な声が聞こえてきている。
何が起きているのかというと単純だ、全員筋肉痛に襲われているのである。

全身無駄なく酷使され、布団に横になることすら痛いので眠れないのだ。

痛みからか呪租の様につめき声を上げているという訳である。

この中に誰ひとりとして、筋肉痛に陥っていない者はいなかった。
時計があれば午前3時を過ぎる辺りまで声は途絶えることがなく
寝所に響いていた。

そしてほぼ声が消えた明け方未明。

寝所の周りの地面に光る魔法陣が現れていたが、誰ひとり動けない為知るモノは居なかった。

.....

.....

.....

翌日、ようやく朝がしらけて来た頃。

昨日の訓練で筋肉痛を患い、寝言でうめき声を上げている訓練兵たち。

本当なら昨日の晩は全く眠れなかった為、もっと眠りに付いていたい。

そう思っていたが

「.....」

のそくつと1人が寢所から起きて服を着替え始めた。

するとどうだろう、他の訓練兵たちものろのろとした動作だが服を着替え始める。

実の所、身体の痛みが酷過ぎて眼がさめてしまったのだ。

このまま駄眼をむさばれたらいいのだが、生憎あの鬼が食事の後に言っていた集合時間に近づいている為、このまま眠っているとまた何かペナルティが課せられてしまう。

とりあえず自力で動ける者とはかく着替えを済ませて朝食へと向かった。

そしてグラウンドに整列している訓練兵たち。全員眼に隈が
出ている。夜眠れなかった証しだろう。もっともその様子を見ても
ワイズ教官は今日も生きてはいるのだから訓練を続けると宣言した。

戦場では例え食事をしていても、寝込んでいても、身体が上手く
動かせなくても、敵はそんなことお構いなしに襲い掛かってくる。
やるべきことが出来てようやく一人前になるのだ。

そしてワイズ教官が合流し、午前中は昨日と同じマラソンから始
まった。

今回はグラウンドを回る回数は決まっていたが、それでも20k
m。

しかも、昨日走り切った人間には予告通り重りが追加されていた
のだからたまらない。

バックパックの様な重りを背負い、昨日なんとか走り抜けた訓練
兵たちは幾分か周回遅れでなんとか走り抜けることが出来た。

それでも身体にかかる負荷は予想を超えて彼らの身体にのしかか
る。

途中何人が耐えきれずに倒れるが、そのたびに後ろを走ってい
るワイズが仲間を見捨てるとは何事だと怒鳴った為、結局重りをつ
けていない人間も彼らに肩を貸して走る事になった。

なんとか二日目の昼時までには脱落者無しに来ることが出来た訓練

兵たち。

食事は結局約一名を除き、全員がトレイを受け取る前に辞退した。とりあえず塩が多少含まれた水だけを飲んで、彼らは午後の教習へと参加した。

全員疲れと痛みが身体を襲っているが、ワイズ教官はそんなことしらんと言った感じで、訓練兵達に講義を続けていく。途中痛みより睡魔に耐えきれなくなったヤツが1人講義中に寝てしまい、そいつはワイズ教官からの修正を受けた。

眠った方が悪いのだが、そいつは今まで殴られたことなく育ってきたボンボンだった。

その為自分を殴ったワイズに恨みを込めた視線を送りつける。

それに気付いたワイズは上官に対する態度がなっていないとして、その場の全員にペナルティとして寝所や風呂場やトイレの掃除を申しつけた為、修正を受けた馬鹿は全員から修正を受ける羽目となった。

そしてギーシュはこのペナルティにて初めてトイレ掃除を言うのを経験し、そのあまりのつらさに魔法が使える自分はとも特別であつたと再認識し、早く魔法が使える状態に戻れたらと切実に考えるようになった。

「始動！地獄訓練！・中編」(前書き)

後編はまた後日。

「始動！地獄訓練！・中編」

「始動！地獄訓練！・中編」

妄想戦記

S i d e ギ ー シ ュ

この恐ろしく粗末な練兵場に来てもう5日目に入った。
てつきり一週間は筋肉痛地獄になると思っていたんだけど思っ
いた程でも無かった。

初日は死ぬかと思ったのに、段々と身体がなれて来たのかもしれ
ないね。

以前のぼくなら絶対もう嫌だあとか叫んで逃げていたと思う。
サイトを鍛える時に手伝わされてなかったらと思うとゾッとす
ね。

アレのお陰で、この程度はまだまだ普通って思えるんだから。

あと、個々の生活で一番の変化があった。
ソレは

「おい、班長のギーシュとつとで行こうぜ」

「おいおい、ここはギーシュ班長だろ？ここは言い方に気をつけないと教官がつるさいぜ？」

「どこに目があるか解らないからな。あの鬼教官め」

「スティックス先輩、それにレイナルとギムリも来たのかい？あれ、マリコル又は？」

「あいつならそこで早く点呼を取れって眼で見てるぜ。あと俺の事は呼び捨てで良いって言っただろう、班長殿？」

「あ、すみません。んん、スティックス」

そう、今ぼくはこの練兵場において5人一組の班の長をやらして貰っている。

計20名居たので、全部で4班ある内の第3班の班長なのだ。

基本的には点呼を取ったり、記録をつけたり、訓練前の整理体操等をやらせたりするのが仕事だ。

特にこれと言った権限は無いけど、班員の責任は自分に來るらしいので毎日ひやひやしているよ。

「それじゃあ点呼を取ったらすぐに食堂に行こう。マリコル又が人間を食べ始めない内に」

「ちょっと待て！僕は人食いなんかじゃないぞ！」

「だそうだが、とりあえずこの筋肉を見てくれ、コイツをどう思う？」

「凄く、美味しそうです」

「ホレ見ろ、この食いつ気の塊があ！」

「い、いたたたた！！ギブギブ！首入ってるよギムリ！！」

「あー、そろそろ良いかね二人とも？いい加減じゃれあいをやめないと食事抜きになるよ」

「「サー！申し訳ありませんでした。サー！」」

まったく、ギムリは相変わらず豪快というか何と云うかねえ。

つかレイナール、眼鏡ふいてないで止めて欲しかったよ。

ステイツクス先輩・もといステイツクスも笑ってないで止めて欲しかった。

まったく、うちの班は比較的仲が良いけど、これで遅刻したらぼくの責任になるじゃないか。

「今日の朝飯にはハムステーキ・パインソースかけがあるらしいぜ」

「……一体どこからそんな情報を仕入れるんだい？レイナール」

「うん、それは企業秘密」

「企業つて、なんの？」

とりあえず点呼をはじめよう、なんか進まなそうだしね

こうして朝の点呼を終えて、班で移動し食堂へと向かった。

ああ、また今日も訓練だから倒れない様にしっかり食べておかないくつちゃ。

S i d e o u t

S i d e 三人称

人間とは物事になれる人間だという。

現に訓練兵たちは初日から3日間は筋肉痛が酷くて死に掛けていたにもかかわらず。

今では普通にマラソンで周回を重ねられる位にまでになっていた。実は寢所にとある仕掛けが施されているからなのだが、彼らはその事を知らない。

そして、この練兵場に来て1週間が経過した。

気が付けば息も切らさずに30km程度をフル装備（合計100kg）でかけぬけられる程だ。

最近では山道を行軍するのも追加されたが、全員なんとか脱落していない。

誰かがふらつければ、そいつが所属する班の班員が自然とフォローするようになった。

そうしないと怒られるからというのもあるが、もはや条件反射となっていたからだ。

厳しい環境の中で仲間意識が芽生え始めていると言っても良かった。

厳しい訓練で身体が食事を受け付けない時も最初があった。

食事を抜くのも最初の3日間は若さでどうにかあった。

だが、さすがにそれ以上は死にかけが続出した。

何人も医務室に運ばれて、水分やその他を補充する水薬を処方されていくくらいである。

だがそれが今では山もりの飯さえ平らげ、おかわりすらする位にタフになった。

勿論最低限の礼儀作法は残してはいるが、誰もそんなこと気にしないのだし多少は食い方も汚くなっていた。貴族が云々より、まずは動けない事にはこの練兵場ではどうにもならなかったからだ。

お陰で、全員が来た時よりかはがっしりとした体格に変わった。

無駄の無い動く為だけに必要な筋肉だけの理想的なボディ。

何人かは“ふつくしい・・・俺の筋肉”とか言い始める始末である。

とはいえ約一名は見た目が全く変わらない。

他の訓練兵と同じ量をこなしているのにも関わらずだ。

食べすぎなければ問題無いのだが、マリコル又は食事がバイキング方式に変わってからはバクバク食べる。彼の体型はもはやアイデンティティと化しているようだった。

.....

.....

.....

食事後、グラウンドに行くとワイズ教官から今日の予定に付いて知らされた。

そして、ついに訓練内容に魔法の訓練が追加された。貴族、いやさメイズとしてのアイデンティティが魔法の行使である。

その為、今まで魔法が使えなくて苦労した分、その喜びもひとしおである。

「各員トランクのナンバーは覚えているな？ よろしい。では各員己の番号のカギを取りに来たまえ」

そして、お待ちかねの魔法訓練の為に杖が入っているトランクを

返してもらえた。

カギ付きトランクから、この短い間に自分の相棒であると再認識した杖を取り出した。

各々久しぶりに持つ自分の杖の感触を懐かしんだ。中には再会のあまり泣いているヤツまでいる。

そいつの周辺だけ、無人地帯が出来ていたが、まあソコは問題じゃないだろう。

「　　ッ！！死ねえ！！鬼があああ！！」

だが返してもらおうとすぐに何名かの馬鹿が魔法を唱えて、ワイズ教官を斬り裂こうとした。

ワイズ教官はこの1週間の間に、既に相当な恨みを何人かの訓練兵から買っていたらしい。

そして杖を向けた連中は比較的素行が悪く、ワイズに注意ばかり受けていた連中だった。

スペルを詠唱している間に気がつかれたがそんなことは関係ない。これまでの恨みを思い知れ！　と言った感じに、ウィンドブレイクやらファイアアローやらマジックアローやらが放たれる。それはワイズ教官に直撃するかと思われた。

だが訓練兵に取って信じられない光景が、眼の中に入ってきた。

「・・・射線があまい、狙いも不正確だ」

ワイズ教官は放たれた魔法に対し、何か防御魔法を張った訳でもなく、ただ“避けた”。

かなり近かつたにもかかわらず、魔法を目視してその上で魔法を避けたのだ。

その有り得ない事態に驚き、魔法を放った連中は硬直した。その隙を逃す筈もなく。

「おまけに、残心もない。だからこうやって」

ワイズ教官は目視するのも困難な速さで不埒者の懐に入り込み

「簡単に制圧される。近接もおろそかだな」

ドズン、という重い音と共に掌底が放たれ、魔法を使った馬鹿達が瞬殺されてしまった。

しかもタダ倒された訳では無く、空を文字通り飛ばされたのだ。人間1人を吹き飛ばす腕力っていかほどののだろうか？

ともあれ、不埒者は5人居たがわずか4秒足らずで制圧され訓練は再開された。

その時

「やれやれ、杖を渡したただけでコレか・・・訓練じゃなくて俺が壊しちまいそうだな」

そうワイズ教官が漏らした言葉に、聞えていた訓練兵たちは背筋がゾクツとした。

実に楽しそうにそんなことを言われれば、恐怖くらい感じるもんだろう。

だがワイズ教官は“ああんりたい馬鹿は何時でも来い、相手してやる”と挑発してくる始末である。この時全員が全員、心の中で絶対逆らわないでおこうと決めた。

「思わぬ邪魔が入ったが、きさまらFNGが鼻汁だして喜ぶ魔法訓練だ。嬉しいだろう？」

「………………サイエツサー!!!!
!!!!!!」

どうやら訓練兵たちはこの返事にも抵抗感が無くなってきたようだ。

魔法訓練は基本的な当てる様な物から始まり、次は5人でチームを作ったのカバー訓練も入っている。

ちなみに先程ワイズが吹き飛ばした為、5名が後方にて治療が必要と判断された。

そして彼らはオンディーヌには不適合と判断され、ここで脱落したのは余談である。

まあ脱落したと言っても、元々配属されるはずだった王軍に行くだけである。

そして現在の残りが15人で、ちょうど3チームで訓練を行うことになった。

攻撃魔法の的当ては比較的簡単だった。

ゴーレムを操れるメイジが人型ゴーレムを作りだし、動き回るそれに当てるというモノ。

訓練兵の中の土メイジが大活躍の訓練であった事は言うまでも無い。

ギーシュも土メイジとして訓練用ゴーレム（一番最初期のワルキューレ）を操り、魔法の矢や炎や風や水や石つぶて相手に逃げ回らせた。だが、サイトとの訓練に付きあわされていた為、誰ひとりギーシュの操るゴーレムに当てる事が出来なかった

その為、ギーシュ以外の全員にギーシュのワルキューレに魔法を当てられるまで、食事抜きと言い渡された為、全員必死で魔法を使用し、ギーシュ操るゴーレムを撃破しようと団結して、弾幕の様な魔法を使っていた。

この生活において、エネルギーの源である食事を抜かされるのは死刑に等しかったからだ。

お陰でただ一人フルボッコにされていたギーシュは涙目だった。

もっとも14対1で殆どの魔法をかわし続けていたのだから、その技量は並ではない。

しかし本人がそれに気が付いていたかは甚だ疑問ではあった。

そして座学を終えて再び一日の絞めである夕方の筋トレの時間である。

グラウンドに汗しずくを飛ばしつつ、何度も何度も腕だけで身体の上げ下げだ。

幾ら慣れてきたとはいえ、一日全身をイジメ続けているのだから限界もくる。

『 2 2 3、 2 2 4、 2 2 5

』

「 2、 2 2 3・・・ハアハア」

一週間もやっているがやはり誰かが動けなくなった。

こればかりは周りの人間もフォロー出来ない、自分のことで精いっぱいなのだから。

倒れた訓練兵をみたワイズ教官は倒れた訓練兵を助け起こすことはしない。

そのまま地面に倒れ伏した訓練兵に近寄り、響く声で叱咤を始める。

「どつした！貴様は倒れるという命令を受けたのか？俺が倒れると言つまで倒れることも潰れることも許さん！！睡眠時間はまだ先だ！！それと全員ペナルティで100追加だ！！」

何と言う理不尽。だが文句を言えば更にペナルティが課せられることを知っている。

その為半ばあきらめつつ、全員だまって腕立て伏せの続きを始めた。

連帯責任というモノがいかに恐ろしいモノであるかがよく解る。

「返事はどうした!」

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
サ、サーイエツサー!!!!!!!!!!

こうして全身と精神と魔法の全部を苛め抜く。
今日もなんとか生き残れたとギーシュとマリコル又は安堵していた。

そして風呂で汗を流し終えて、その日の夕食にありついた。

夕食は豆と肉の煮物とパンと野菜そのまんまサラダだった。

ここにはマルトーの親方の様な貴族専門の料理人は居ない。

フェンの要望によって実際に従軍した際に食事を作る人間が作っている。

当然栄養が取れば良い訳だから、量が一番で味は二の次であることが多い。

しかも汗をかくという理由から、味が濃くてしつこいモノが多く、お世辞にもうまい訳ではないモノが多かった。

勿論食えない訳ではない。

この世界の不味しい農家の平民なら十分ごちそうと呼べるだろう。だが貴族である彼らは3日目を過ぎて慣れて来たのか、食事に不平不満を言う様になった。

やれ不味いだの味が濃すぎだの好き勝手言っていたのだが、幾ら文句を言おうが食事の味が変わるわけもなく、徐々に諦めて食べる者が増えた。

中にはストを起すモノも居たが、過酷な訓練を食事抜きで耐えきれぬ訳がない。

ストをおこした張本人が、ストをした日に医務室送りとなった為、それ以降誰ひとり食事に文句をつけることは無くなった。

以前なら貴族なら礼儀作法がとか、ワインがどうか言っていたであろうギーシュも、自分もよくよく変わったものだと言っているくらいだ。

最低限のマナーは残してあるし、やろうと思えばすぐに“貴族の食事作法”を行う事は出来るのだが、ココではそんなこと気にしていても無意味だろう。

最近では虚無の曜日の夕食にでるココアが楽しみだったりする。味の好みどころか食事観も質素な方が好みとなっていた。

本当に変わったなあとしみじみ思いつつも隣を見る。

そこでは一気飲みコールに応えて、5カウントで水を一気飲み中のマリコル又がいた。

笑いながら馬鹿をやる皆を眺めながら、段々と楽しくなってきた

と思うようになっていた。

そしてその日も無事に一日が終了した。

S i d e o u t

S i d e フ ェ ン

はぁー、二足わらじは疲れるのう。

訓練兵たちが寝静まった深夜、俺は寝所の近くへとやって来た。た。

寝所からは一日身体をしごきぬいて熟睡している訓練兵たちの寝息が聞こえてくる。

そして、俺は普段の日課となっているとあることをする為に、カートリッジから魔力を吸収していた。

「カートリッジ、発動」

ガシャっという音と共に魔力がカートリッジから溢れだす。

猛る魔力を馴れた感じで操り、寝所のプレハブ床下へと流し込んだ。

魔力は床下を駆け巡り、ラインに沿って効果を発動させた。

実はこの寝所の床下には儀式魔法陣が展開されている。

効果は肉体活性による新陳代謝と永続強化及び簡易的なヒーリング効果だ。

戦闘の様な瞬間的な魔法が求められる場では使えないが、こうした訓練とかの様な長いスパンで行う時には素晴らしい効果を発揮できる。

超回復というのを聞いたことがあるだろう。筋肉をいじめて破壊させ、睡眠等によって肉体が破損箇所を再生する際に破損箇所を強化して回復させるというアレである。

要はだ。この儀式魔法でその超回復の効果をより高く、また早く行う事が出来るのだ。

だからたったの数日で、連中の体力は貧弱なおぼっちゃまからアスリートレベルにまで引き上げられている。素晴らしきはUSN軍式の新兵訓練方法だろう。俺もこれにはお世話になったっけなあ。

寝ている間にこの広域治癒方陣によって肉体のダメージは翌朝にはほぼ0となる。

おまけに肉体改造増進のおまけつき、流星は魔法のチートだ。副作用もほぼ無いしな。

ちなみに初日は痛みを知ってもらう為に、設定上痛みを感じる様に調整してあったりした。

「……ふう、これをあと20日間やり続けるのか……長え」

『ですがソレによって概算5年分の訓練を圧縮出来ます。それでもギリギリなんですよ?』

「だな、実質“アレ”は完成したけど、整備の観点から5人までだしなあ」

『ま、この訓練自体が選別訓練ですからねえ。はたして何人耐えられるか』

「最低でも3〜4人は残って貰わないと、作った意味がないな」

月明かりの下を歩く幼児ってなあ、かなりシユールな光景だろうなあ。

さて、これで教官のお勤めも終わり、次は技術士官のお勤めだ。俺はテクテクと歩いて、練兵場にあるハンガーへと向かう。

ここは訓練兵たちには立ち入り禁止を申し渡した場所だ。もっとも見た目はタダの倉庫にしか見えない事だろう。

だが、ここには特定の人間しか入れない様にした認識阻害結界を張り巡らしてある。

何故か？それはここで扱っているものは、現在この国における最高機密だからだ。

「ヴィーンつと、結界を開きましたつと・・・」

結界を一部解除し、倉庫の中に入った。

中に入ると外見とは打って変わって、完全なハンガーと化していた。

ガントリーレーンやら工具やらが置かれ、色んな人間が蠢いている。

そして俺はちかくにいた作業着姿の男に話しかける。

「作業進行はどうだい、ジェフリーさん」

「ん？よう小僧、様子を見に来たのか。まあなんとか7割ってところか」

ツナギの作業着姿の男はそう言いつつも作業を行う連中に指示を出している。

この作業着姿の男こそ、このハンガーの整備主任のジェフリー・パイロンである。

「上出来だ。むしろスケジュールより早い。これなら間に合うか」

「ま、送られてくる部品の精度は最近ようやくマシになったからな。俺達も最初に比べたら別人じゃねえかってくらい経験が違っぜ」

「だが、まだ数カ月程度だ。ソレ位じゃまだまだだ」

「はん、言ってくれるじゃねえか小僧。ま、事実だがな。俺達は貴族様から貰えるお仕事を頑張るだけさ」

さて、この会話で気が付いたところが、この男は平民である。

ここで扱われている事は国家機密だが、その分貴族も平民も関係無い。

使える者は全部使うという主義の元、様々な分野の専門家たちが

貴族平民を問わず集められたのだ。

序でに人手はいくらあっても良いので、手先が器用な人間を集めたというのもある。

「しっかし、なんつったかね。コイツは本当にスゲエな。えーとなんつったか？」

「ヴァンダー・パンツァー。通称ヴァンツァーだ。いい加減覚えろよ」

「そうそう、そんな名前だった」

そう、このハンガーで作られているモノ、ソレは人型機動兵器ヴァンツァーだった。

視覚的インパクトも強く、また最悪ゴーレムといい訳が出来るモノとしてコレを作った。

このヴァンツァーこそ、オンディーヌ水精霊騎士隊が駆る事になる機動重鎧となる。

操作系はある程度自動で動くオートと自分で操作桿で操作するマニュアル。

ソレとゴーレム等を動かす感覚で出来る思考操作も実現出来た。もっとも思考操作について俺は試験して無いがな。だってゴーレム動かせないし。

それにコレ見た目こそヴァンツァーだが、中身に関しては全くの別物なんだがな。

本物は第二種永久機関近づいた駆動機関を用いているが、これは魔導炉を搭載してある。

ギーシュとの技術開発が役に立ったというのはそう言う事で、内部の四肢の駆動装置がワルキューレ2式とほぼ同じなのだ。また整備しやすいように、腕と足とかを規格化している。

内部フレーム自体は無人兵器の内部構造を模して、大型化したモノでもあるしな。

胴体部分にはコックピットを搭載し、そこに人間が収まって操作する。

完全自動化も出来たのだが、それが出来るAIを作るとなると大変だったから簡素化した。

デバイス関連の簡易的なAIを作るとは出来たので、それを流用する事でなんとかなった。

勿論AI的にはストレージタイプと同じ様なモノであり、プログラミングはヴァンツァーを動かす為だけに設定してあるので、魔法は殆ど使えない代物だ。

またAIと魔導炉のある胴体部分だけは俺が手掛けた。

コピーが出来ない様に色々と対策を施してブラックボックス化したのである。

AIプログラムにはハッキング対策も仕掛け、ブラックボックスを無理に解析しようとすれば自爆する様にプログラムしてあるのだ。この戦争が終わり次第、コイツらはある目的の為に配備される機体だからな。今はまだ入れて無いが、のちにある一定以上の範囲からは出られなくする予定だ。

胴体のブラックボックス以外の部品については、さすがに俺だけでは造り続けられない為、この国の土メイジ達に協力させた。しか

もこの世界には無い金属を作らせる為に、態々作ってほしい金属部品サンプルを作って、土メイジ達にわたしたのである。

問題がない訳では無いが、どうせいつかは作られる金属だ。

一々気にしてたら身が持たん。それに場違いな工芸品でも幾つか来てたし、まあ大丈夫だろう。

流石に錬金と解析魔法というチートがあるおかげで、このハンガリーにある5機分の整備部品程度なら供給が可能になった。何人かが胴体部分を解析できないか試しているみたいだが、ソコは魔法では解析できないようにシールしてある。そこから辺抜かりは無い。

まさか俺もこの世界に来てコイツを作り上げるとは思っていないが、うん、いい出来だ。

全長6mあるコイツなら前線でもものすごく目立つし、軍の盾として申し分ない。

本当ならいろんな種類があるから楽しいのだが、今回は時間が無いのでフロストの様なバランスタイプしか作れなかったが、仕方ないだろうな。

「たった数カ月でコレを整備出来るくらいにまで腕を上げたジェフリーさんに俺はビックリだがね」

「おもしれえ事は昔から好きだからな。それよりも乗り手はどうにかなるのか？」

「今の所候補生は15人、今日5人国軍に行った。まあ基本的な軍教育はしてあるから、邪魔にはならないと思う」

「くつくつく、鬼教官の正体がこんな小僧だと知ったら、貴族たちはどう思うかねえ」

「さて、な。・・・そろそろ俺は戻るけど、後は頼む」

「おう、任せておきな。ヴァンツァーならこの国で俺達に敵うヤツはあんたしかいねえさ」

作業はスケジュールよりも順調に進んでいるな。

この分だと、開戦までにはなんとかかなりそうか・・・。

「あとは何か不都合な点は出ているか？」

「一応今のところは・・・あとは実際に動かしてみんことには解らねえ」

「あと20日くらいすれば、選別が終わるからそうすればもっと色々出てくるとおもうぞ。その時は逐一報告を頼む」

「へいへい、あ、そうそう。土メイジの連中にある程度質を落とすていいから、もっと精度を安定させてくれって伝えてくれねえか？精度の良いヤツと悪いヤツと調整して取り付けるのに整備員が苦労してるぞってな」

「了解した。トリステインの未来はアンタらの手の中だ。大変だろうが」

「小僧、見くびんな。ソレ位わかってら

「そうか、ま、今度酒でも届けるよ」

「お、そいつはありがてえぜ」

こうして、防音結界を施され、外界からは侵入者が入って来れないハンガーで計画は進む。

さあ、早く選別をしなければなるまい。今日ももう遅いし、すぐに寝なくてはな。

これからが忙しくなるぞ〜〜!!

「始動！地獄訓練！・後編」(前書き)

*妄想爆走中！もう少しお付き合い願います。

「始動！地獄訓練！・後編」

「始動！地獄訓練！・後編」

妄想戦記

S i d e ギ ー シ ュ

この練兵場に来てから、僕は久々に家族あてに手紙を出すことにした。

練兵場とはいえ、完全に外部と遮断されている訳ではない。

食後の休憩時間に係りの人間に頼めば、家族へ手紙を出すことは許可されていた。

いままでちょっと・・・というかかなり忙しかったけど、なんとか余裕が出来たからね。

家族に筆の一つくらい送らないと、音信不通じゃ心配させてしま
うよ。

それとモンモランシにも後で書いておかなくては・・・食堂以外
の場所だね。

『拝啓、父上や兄上方。今日は久々によく眠れました。ここ何日かは基礎体力と野戦技能のテストで酷い目にあつてましたから……。山岳地帯で3日、森林地帯で3日、開戦が近いと噂される中、空船に乗せられて向かった先でサバイバルです。僕、よく死ななかつたとしみじみ思います』

本当によく生きてたと自分でも思う。

突然小型の空船に乗せられて、降ろされた場所は山の上。

水筒と地図を渡されて魔法を使わずに下山しろって言われたんだっけ。

だから杖は没収されて、代わりに持たされたのは大きなナイフだけだった。

しかも何時もの見慣れたメンバーの班じゃなくてランダムで選ばれた人がバーディだった。

ソレだけで大分不安が増したっけ……。

だけど、選ばれた相手が生還技能トップで陽気なバンククロフト君で本当に良かったよ。

道中いろんな話題を振ってくれて、食事は現地調達したモノをふるまってくれた。

お陰で麓の合流ポイントに帰還した時、僕が若干艶々の肌になつてて教官を呆れさせたっけ。

『絶対ムリって思っているけど、結局他の皆と一緒に訓練に付いている。だけど、僕ってこんなに体力あつたかなってよく思いません。最近じゃ胸の筋肉をぴくぴくと動かせる自分に驚きです。コレも特錬場で厳しい訓練に耐えた結果だと思つと、ちよつと嬉しく思

います
』

特錬場、特殊練兵場の略、全然略せてないけどね。

だけどホントに最近自分の肉体における身体能力の向上が目覚ましい。

学院に居た時は机とか1人じゃ運べなかったのに、今は3つ重ねても運べる。

以前の僕に『君はどれだけ貧弱なのかね?』と言いたくなくなったくらいさ。

後、身体能力の向上に伴って精神も鍛えられてタフになっていると思う。

模擬用の爆発はしない大砲の弾や教官役のメイジが放つマジックアローが飛び交う演習場で匍匐前進しながら魔法が使えるくらいだ。

偶に至近距離に模擬弾が落つこちで、岩に罅が入ってるのを見ても平気だった。

考えてみたらアレに当たったらタダじゃ済まなかった様な気がするなあ。

「うーん、一応機密とかは書きちゃいけないらしいし、検閲があるって話だけこの程度なら大丈夫かな?さて、続きはつと・・・」

『ところで、なにかを決心するというのは本当に難しいです。入隊してまだ20日で、訓練が本格的になればなる程、自分がどれだけ甘い気持ちでココに来ていたんだと思ってしまうます。ここでの訓練はキツく、また脱落者も既に半分近くが落されています。まあ例えここでの訓練に脱落しても、基礎的な教育は受けている為、有事

の際には戦線に赴くとの事です。訓練は無駄にしないんだそうです。」

『でも僕はいまだに戦争に行くという実感が持てません。僕は、ちやんと命令通りに敵を打ち倒すことが出来るのでしょうか。周りのみんなも同じらしく、訓練が過密になるほど、戦争への現実味が増すのか、普段と違う感じになります……本当は今更だけどころく怖いです。』

『父上の言葉に『命を惜しむな、名を惜しめ』とありますが、僕はいえ、僕たちは命も名も惜しんでしまいます。欲張りなのかもしれませんが、訓練を続けて生とは何かを体験すればするほど、そう思ってしまう。命あるからこそ、名を惜しめる。そう思いました。』

うん、こんな感じで良いだろう。後は終わりの言葉を書いて……よし完成だ。
後はコレを係りの人に預けば、家族の元に送り届けてもらえるだろう。

「……ッ！ラッパが鳴った！急がないと！」

時刻を告げるラッパが鳴っている。急いで班をそろえグラウンドに行かなければ。

僕は懐に手紙を乱暴に押し込むと、食堂を後にした。

S i d e o u t

S i d e 三人称

さて、ギーシュ達がサバイバルの為、練兵場を開けて訓練に励んでいるころ。

人が少なくなった練兵場の講堂に、ある目的の為に集められた集団があった。

特出すべきは集まった全員が平民出で、しかも女性であるという事だろう。

彼女たちは一般公募の一次審査で選ばれた女性たちで、軍への志願という形でここに集っていた。

「・・・ん？あれシエスタ？」

「あれシア？」

「ふたりとも来てたですか？」

「「キノも?!」」

そして集まった人間の中には、シエスタやキノやシアの姿があっ

た。

元々は学院のメイドである彼女たちだが、現在学院が学生不足の為機能しておらず、平民出でも食いぶちが稼げる仕事を探して偶々これの応募に参加していた。

「なんだ。二人ともてっきり実家に帰るのかと思ってたわ」

「はは、まあ何つーか、ウチはもう少し稼いでこいって言われてさ」

「ウチも似た様なものですねー」

「そう言うシエスタはどうなのさ?」

「まあ、こつちも似た様なものよ。この間の戦闘の傷跡も修復出来てないから・・・」

「あ・・・ごめん」

「ううん、いいの。だってわたしや村人たちは全員じゃないけど生き残れたもの」

「シアは時々でりかしーが足りませんね」

「面目無いね」

女性が三人も集まれば騒がしくなるのも致し方無いだろう。

何せ徐々に元同僚にあったのだから、会話に華も咲くというもんである。

さて、しばらくはお互いの近況報告をしている彼女らだったが、部屋に人がやってきたのを感じて口を閉じた。流石はメイド、人の気配には敏感である。

「みなさんお待ちでしたかったです。今から色々と説明をしなければならぬので席について待っていて欲しいです。」

「（え！リンちゃん?!）」

「（あれ？確かあの子って・・・）」

「（あやや、フェンと一緒にいたリンさんですね。という事はあの子も・・・）」

部屋に入ってきたのは、フェンと何時も行動を共にしていた小さな女の子。
な女の子。

リンフォースアナザー、通称リンが小さな体で何かの用紙の様な物を持って来ていた。

突然小さな女の子が入ってきた事に、この場に集まっていた人間は啞然としている。

てつきり軍人が来るものだとばかり思っていた為、ちょっと拍子抜けしたのである。

リンが一番近い席の人に用紙を手渡しながら、彼女は明るくそう言いつつ部屋を見渡した。

そしてシエスタやシアやキノの姿を見つけてニコリと微笑んだあと、何事も無かったかの用に試験の説明を行うその姿に、彼女を知る三人娘はポカーンとしていた。

フェンが長期不在な事は知っていたが、軍に協力している事は知らなかった彼女等。

だから、まさか軍の施設で彼女を見かけるとは思わなかったのである。

そしてそんな三人の事はお構いなしに、この場に居る人間に対して説明は行われたのだった。

.....

.....

.....

仕事の説明がなされる前に少女からある注意が為された。

ソレは、この先の内容は国家機密も含まれる為、ここで聞いた内容を口外した場合、第一級の国家反逆罪に問われる事もあります

というもの。

平民出の彼女たちの中には、口に出しただけで国家反逆罪に問われるという事に恐れをなした人や何故リンの様な子供がそのようなことを言っているのか懐疑的になった人もおり、そそくさと部屋から退出する者が多く出た。

その為残ったのは結局、お金さえもらえればいいと考える者たちが殆どであった。

また、その中にはリンの事を知っているあの三人娘も残っていた。もっとも彼女たちは予想だにしなかった知り合いがいた為固まっ

ていたからなのだが。

「・・・大分減りましたけど、数は十分です。コレ以上多かつたら篩いに掛けて選別しないといけませんでしたですねえ」

リンは明るくそう言うと、手元に配った用紙を開いて中を読むようにと指示を出した。

残っていたシエスタ達もそれに習い、用紙を捲り中身確かめる。そこに書かれていたのは

「特殊魔導作戦機小隊、管制官？」

「まあ俗に言うオペレーターってヤツです」

オペレーターと言われても軍事用語に詳しくない彼女たちには頭に？が浮かんでいる。

ソレもそうだ、平民である彼女等が軍事用語に詳しい筈も無い。

「へえ、オペレーターですか。面白そうですね」

キノが何かブツブツ言ってるが気にしない。つーかお前は何モンだ。

ソレはさて置き、リンは噛み砕くようにこの仕事についての説明を行って行く。

基本的には後方での練兵場であるこの基地で勤務だが、戦争になれば何人かは水精靈騎士隊オンディーヌにくっついて行き、戦線で司令部の情報をいち早く伝えることが役目となる。

その分給料の方は普通の平民の仕事やメイドなんかの比では無い。トリステインにおける空海軍の士官並の待遇が約束されている。勿論、この場で即採用では無く、それなりの教練を積んでからであるが……。

「そう言う訳ですので、しばらくはこの練兵場で戦域管制等のやり方を学んで貰うです。また平民とはいえここで採用された場合、貴女方は軍属扱いとなる為、敬礼等の軍隊における礼節を学んでいただきます。詳しい内容は手元の冊子にあるので読んでおいてくださいです！」

後で特訓ですよー！と彼女はそういつてクルクル回りながら部屋を出ていった。

リンを見送った管制官候補生達は各々冊子を読むことに集中する事になる。

どちらにしろ、話を聞いてしまったので、しばらくは練兵場からは出られないだろう。

ならば出来ることをしておこうとするのは人の心理というものだ。

ちなみに何故リンがこんなことをしていたのかというと、彼女を見て驚かない程度の肝が据わった人間を集めるといふのと、只単に人材が足りなかったというのもある。

実際この練兵場の存在はトリステイン内部でも上層部以外はあま

り知られていない。

その為、ここに間引く為の人員を割くことが難しい為、メイジも居るが裏方は殆どが平民でまかなわれているのが現状だ。またこの事を承認させる際、“平民ならばいざという時は・・・”といった内容だったことは言うまでも無い。

また幾ら女王直属の水精霊騎士隊であっても、功績一つ上げられなければ意味が無い。

ほぼ確実に起こるであろう次の戦役に置いて、かなりハードな事になる事だろう。

そこには平民貴族の垣根は存在しない。死ぬか生きるかしか無いのだから。

S i d e o u t

S i d e フ ェ ン

さて、ついに一カ月が経過した。おおよそ予定していた選別期間の終了だ。

本当なら3カ月くらいはかかる新兵訓練を凝縮して3倍の速度で終わらせた。

勿論訓練の中身に妥協は無い、だがそれでも半分近く残るとはす

ばらしいな。

選抜訓練を終えた彼らに“あれ”を見せる時期がついに来た。あれって言うのは、あれだよ・・・ヴァンツァーの事さ。

ある意味劣化番B Aの様なアレを見て、コイツらがどんな反応を見せるのかが見ものだぜ。

メイジという人種は無意識に魔力で肉体を強化出来るのかもしれない。

まあそこら辺の真相は不明だし、考えても仕方ない事だ。

例えそうだとしても、魔法では無いから違反ではないしな。

ソレはさて置き、現在残った人間を集めてブリーフィングを行っていた。

全員練兵場に来た頃とは全然違い、ビシっとした空気を纏い食堂の長椅子に座っている。

ワイズ教官となっている俺の言葉に耳を傾けて一生懸命に聞いている姿は中々様になっていた。

「 という訳で、君たちは見事厳しい選抜試験を通過し、騎士隊に入れる切符を手に入れた。おめでとう諸君、嬢陛下直属“水精霊騎士隊”へようこそ」

ワツと歓声があがる。ここまで常人じゃ耐えきれない様な訓練という拷問に耐えて来たのだ。

実質生き残ったのはココに居る12名、騎士隊に入れたというその喜びはひとしおだろう。

だけど実は更に5人に減らさないといけない。

基本設計とかは無人兵器から流用出来たが、無人機の工場なんぞこの世界にある訳も無い為、結局魔導炉関係の胴体とかは俺が最初から錬金で作ったのだ。

だから時間の都合上5機以上のヴァンツァーを組み立てることが出来なかった。

またヴァンツァーとシミュレーターの開発を同時進行していた所為で、ヴァンツァーを一台分潰さなきゃ間に合わなかったのである。ああ、俺専用機・・・ほしかったぜ(キラン)

「だが、実動隊となれる人間の枠は5名までだ。今から実動隊をとるA分隊を発表する。呼ばれた者は返事を返すように」

「「「「「サイエツサー！！！！」「」「」」」」」」

正確には実戦に出る事になるA分隊と後退要員としてのB分隊に分けられる。

まあ5人も居れば、小隊としてはなんとかなる人数だ。

乗せたくてもヴァンツァーが無いからな。今のところは仕方ないだろう。

この先B分隊の人間がA分隊に入らない事を祈るしかないかな。

一人だけ声デケエな。つーか最初の第3班と同じメンバーかよ。まあ全員どっこいどっこいだけど、小隊長は多分もう決まったな。

「以上がA分隊、実動隊であり前線での華だ。名前を呼ばれなかった者はB分隊に配属となる。B分隊の諸君はA分隊が抜けた際の穴埋め要員だ」

一瞬がっかりした様な空気を感じた。だが、実際は

「だが訓練は同じモノを受けることになるから、実質どちらにも変わりはない」

俺が次に言った言葉で訓練兵たちの空気は歓喜へと変わる。まあこれまで苦楽を共にしてきた仲間だしな。ある意味でライバルたちだし、意識くらいしてたんだろう。そう言った意味では、悔しくもあり嬉しくもあるという訳か・・・若いねえ。

「ではブリーフィングを終える。この後は全員寝所となりの格納棟へと集合せよ。私からは以上だ」

「「「「「サー！イエツサー！！！！」「」「」「」

さて、こうして分隊のメンバー発表を終えて、俺達はあの格納庫となつているハンガーへと向かった。俺の後にゾロゾロと付いてきた連中を先導しつつ、ハンガーを閉ざす結界を解除する。

驚いた様な顔をしていたヤツがいた所を見ると、ハンガー付近の異常には気が付いていたんだろう。

「全員、この中に入れ」

ハンガーの扉を開いて12名のむさい男どもを暗いハンガーへと押し込んだ。

中は薄暗くしてあり、奥にあるモノは全く見えない。

全員が入り終えたところで、打ち合わせ通りにスポットライトが点灯し、ハンガー奥の一カ所を明るく照らし出した。

「「「な!?!」」」

「あれは・・・ワルキューレ? いや、似てるけど・・・」

驚きで声を上げるA分隊とB分隊の面々達。約一名鋭いなオイ。

まあ、なにせスポットライトに照らしだされていたのは

「ヴァンダー・パンツァー、通称ヴァンツァーだ。コレが貴様らの鎧であり、トリステインを守る盾となる存在だ」

『鎧・・・盾・・・』

ほぼ全員が驚きの表情でヴァンツァーを見上げている。

戦闘用と言うべき重厚で何処か人を威圧するかのような空気を漂わせながらも、人間工学に基づいた美しいフォルムを兼ね備えたこの世界唯一の人型機動兵器だ。

ある意味彼らには目の前の光景が信じられないのかもしれないが、俺は構わずに解説を続けた。

「このヴァンツァーの名前はゼフィール。とある人物の協力によって開発された特殊作戦機だ。認識的にはゴーレムと同じだと考えてくれれば良い。もしくはガーゴイルか」

まあとある人物つてのは俺の事なんだけどな！

「通常のゴーレムと違い、コレは動力を内蔵している。その為操作する為には魔法の力では足りない為、メイジが直接中に乗りこんで操縦する。A分隊はこのヴァンツァーの操縦者つて事だ」

ゼフィール、魔導技術で作られたヴァンツァーであり、魔導炉によって魔力で駆動する。

操作はスティック2本とフットペダル、各種スイッチによって行われ、他にもゴーレムを動かすのと同じ要領で中のAIが感知し思考操作も可能だ。ダメージインジケータパネル及び戦域管制MAPモニター付きコンソールも付いている。

重量をコントロールする為に飛行術式を応用した術式を各所に設けて、重量軽減術式として関節の負担を軽減している。また、コックピットにも慣性制御の術式が組み立てられており、ショックアブソーバーや急激なGに対応出来るようにしたのも特徴だ。

魔導炉を始動させるためには若干の魔力が必要な為、メイジ以外で起動させることは出来ない。

だが起動さえさせれば、マニュアルで平民ですら扱える操作システムを積んでいる。

勿論ソレを防止する為にデバイスの生体データ認証機構を利用した個人特定機能が付いており、登録した人間以外が乗ると電撃が出る様になっているのだ。

「魔法の性能は、メイジの性能に左右される。このゼフィールも同じだ」

俺の言葉に訓練兵たちは首をかしげているが、今は解らなくていい。今はな。

さてと、タダ見せる為だけにココに連れて来た訳じゃない。

ほかにも教えておかなければならない事もあるのだ。

俺は作業中だった整備班長のジェフリーの方を向き、彼を指さした。

「そして彼がこれから貴様らが乗るヴァンツァーの整備を行ってくれるジェフリー整備班長殿だ。総員敬礼！」

「ッ」

全員一系乱れぬ動作で敬礼をジェフリーに行く。

大分様になったその動きだが、まだまだ荒削りな部分も感じられるな。

ジェフリーは訓練兵たちの敬礼に若干反応したが、すぐに平常に戻った。

俺が手招きをしたので、そのままこちらへとやってくるジェフリー。

「実際に実機に乗るA分隊は特に敬意を払っておくようにな」

「……ジェフリー班長殿！よろしくお願いします！」「」「」

A分隊がまた敬礼を行ったが、彼はどこか照れくさそうに鼻の頭をポリポリとした。

「よせやい、班長殿だなんて身体がかゆくなる。普段俺の事はおやつさんでかまわんぞ」

「ジェフリー班長、一応規則だからそう言う訳にも」

「いいんだよ、俺がそうしろって言ったんだからさ。さて」

今度はジェフリーが姿勢を正して訓練兵たちの方へと向き直った。

「紹介にあずかりました整備班班長のジェフリー・パイロンです。貴方がたの機体の整備を主に担当いたします。この先の実機演習の際に個々に合わせてカスタマイズを行う時には声を掛けてください」

そう言うつとびしつと敬礼を行うジェフリー班長。一応筋は通すのね。

しかしジェフリーすげえな。さっそく敬礼に対応してるよ。

まあ一応形だけは教えてある・・・形だけなのに様になってるってどうよ？

さて、彼はそういった後すぐに作業に戻っていった。ちよいと恥ずかしかつた様だ。

「・・・ああ見えてかなりの職人肌な人だから、怒らせるなよ？」

「……サー、イエッサー」「……」

尚、ここでは平民と貴族との垣根は既に無い事を教えてある。

使える者は偉いし、使えない者は幾ら貴族だろうがここでは底辺。

ジェフリーは平民だが、この練兵場では今現在の所A・B分隊の連中よりかは偉い立場だから敬礼は欠かせないのだ。

とりあえず顔見世済んだし、次はこの隣に隣接しているシミュレーターに向かう。

実際しばらくの間お世話になるのはそこだからな。速く使い方を教えておかないと予定が狂っちゃうぜ。

そんな訳で若干急ぎ足でシミュレーター室へと向かったのだった。

シミュレーター室はハンガーのお隣にあるのだが、まあ今回は試乗体験つてとこだ。

流石にいきなり実機に乗せる訳にもいかないし、かと言って慣れてないのに操縦とかは出来ねえ。

車の免許取得を思い出してほしい、いきなり乗って運転出来るヤツは普通はいないだろう。

俺だってマルチタスク総動員して、この一カ月の内にマスターした位なのだ。

そうそう覚えられる様なもんじゃないんだぜ。

ちなみにシミュレーターは察しが良い方には既に解っているだろうが、油圧式アームが付いた四角いコンテナの様な5つの筐体である。何の為にアームが付いているのかも解る人には解る事だろう。

「さて、この箱がシミュレーターである」

「教官！質問があります！シミュレーターとは何でありますか？」

「簡単に言えばさっき見たゼフィールを疑似的に体験できる魔法の筐はこだ」

「サー！ありがとうございます！サー！」

「さて、有意義な質問が出たところで、さっそく試乗して貰う。なに、最初から操縦なんてさせない。今回はただヴァンツァーがどういうものかを知ってもらっただけさ」

だから着替えて来いと野郎どもに指示を出した。

ロッカールームも完備しているシミュレーター室、さすが俺。

錬金チートはマジでスゲエぞ。もっとも建物自体はプレハブだけだな。

少しして連中は全員キチンと着替えて戻ってきた。

上下がっながったツナギの様な感じの服にサバイバルベストが付属している。

簡単に言えば戦闘機のパイロットが着込む飛行服に近い物かもしれないな。

コレも一から作るのが大変で……錬金チート、ここまで来たりっつてな。

「ほう、馬子にも衣装じゃないか・・・」

「はッ?」

「・・・いや、忘れてくれ」

むう、そう言うことわざはこちらには無いのか。つまんねえーの。ソレはさて置き、さっそく乗って貰おうかね。

俺は筐体をコントロールできる部屋に入り、手順を踏んでシミュレーターを起動させた。

そしてこの部屋にいるもう3人の人間に話しかける。

「オペレーターの3人、今回は俺がやるけど、よく見ておくようにな」

「了解!」

そこにはオペレーター見習いの3人娘たちの姿があった。

残ったのが全員俺の知り合いのシエスタ、シア、キノの3人とか恐れ入るな。

さてと、とりあえず訓練プログラムを起動させるか。

そして色々と地獄を見てゲロるがいい!わははははー!!

あー、楽し。

S i d e o u t

S i d e ギ ー シ ュ

教官に言われてパイロットスーツと呼ばれるモノに着替えた後、僕たちA分隊はさつそく“しみゅれーたー”とか言うあの箱の中に入るように指示された。

中には人が一人座るのがやっとのシートと、よくわからない突起やガラス盤がある。

とにかくシートに座れと指示されたので、僕たちはそれぞれシートに収まった。

「はい、はじめぞ〜・・・っと、その前にコレを自分の前に広げて持っておけ」

そういつてワイズ教官は白い袋を手渡してきた。

「なんです、これ？」

「ん？シートを汚さない為の防御措置。さて、ハッチ絞めるぞ」

どういふ事なのだろうか？僕らが質問をする前に箱が閉じられて真っ暗になる。

両手足はシートに座っている感覚があるが、全く前が見えないというのはある意味恐怖だ。

『・・・ザザ　どうだひよっこ共、聞えているか？』

「え？ワイズ教官！？」 『何だあ！？声が頭に響く！？』

『え？ギムリの声もするぞ』 『どうなってんだ？みんなの声が聞こえたぜ』

ちょっと驚いたのだが、冷静になって見ると何処から声が聞こえたのかすぐに解った。

どうやら乗る前に着けた変な形の兜から音が聞こえてきているらしい。

“ヘッドギア”だったかな？これって・・・。

『落ちつけひよっこ共、お前らが頭に着けてるヘッドギアに通信機が内蔵されている。とりあえず今の所、被りもんには相手の声を届ける機能があるとも考えておけ』

『マジックアイテムみたいなもんか・・・』

『それと、私語は慎んだ方が良いぞギムリ訓練兵。舌噛むから』

舌を咬む？そう思った途端周りのパネルが光を放ち、箱の仲が薄暗く照らされた。

いや、真っ暗なのはソレはそれで怖いけど、こっ見える様になると今度は圧迫感があるね。

『基礎訓練？プログラム起動　　って事で起動させた。どうだ？こわいか？』

『大丈夫です』 『問題無いであります』 『多少狭い位で問題無いです』 『問題無し』

「こちらも問題ありません」

他の皆が口々に応えているのを聞き、僕も教官に問題無いと返した。

まあ多少の圧迫感はあるけど、慣れてくればそれ程でもない。

『全員大丈夫だな？それじゃ訓練プログラムスタート』

教官がそう言つと、ヘッドギアから何かのスライドして眼を覆う様に降りて来た。

驚いて眼を閉じてしまったが、こわごとと眼をゆっくりと開いて

見た。

すると、なんと外の景色が眼に写っている。コレもマジックアイテムなのだろうか？

『現在映し出されているのは、ド・オルニエールの荒野だ。お前たちは操縦桿に触れなくても良い。最初はこちらで操作する。ではまず“歩く”ことから始めよう』

目の前の映像の中には、教官の顔が映し出されていた。

何だか小さな教官が言葉を発している見たいで、僕は少し笑みをこぼす。

だけど、教官からの通信が終わった途端

「う、うわ!」「ひや!」「あわわわ!」「ぬお　ウグ!」「あ、誰か舌嚙んだね・・・」

突如グラリと世界が揺れた、いや正確には僕らが乗っているこの箱自体が揺れたんだ。

眼に写る景色も割とゆっくりな感じで後ろに流れていく。

・・・慣れてくるとちよつと面白いぞ。コレ。

『ゼフィールが動きだしたが、どんな感じだ?』

「今の所問題ありません」「こちらと同じです」「大丈夫です」「も、もんひゃいなし」「問題無いです」

教官からの問いに全員が“問題無い”と応えた途端、僕は背筋にゾクつとしたものを感じた。

ああ、コレは訓練中によく生意気な口を聞いたヤツに教官が見せたあの感じ

『（ニヤ）そうか、それじゃ次は悪路走破だ。走るから口閉じていた方が良いぞ』

ガラス盤に写る教官の顔が楽しそうに歪んだのが見えた。

そして突如世界が更に大きく揺れた。ゴオン、ゴオンという音と共に思いっきりシェイクされる。

『……………！！！！』

』

兜から皆の音が聞こえてくるが、押し殺したような声だった。

下手に口を開くと舌を噛みそうだから、みんな口を食いしばっているんだと思う。

『さあ、次は岩場だ！左右にも揺れるぞ！』

そして今度は横揺れが加わる。世界が左右に揺れている。

な、成程、道理で最初に白い袋を渡される訳だ。コレは気持ち悪

くなるよ！

『次は山道だ！おーっと！そこで横殴りの突風だ！』

・・・教官、実は貴方楽しんでませんか？

この後も世界が大地震に見舞われたかのような光景を見せられて続けること30分。

プログラム終了という声が何処からか聞こえて、ようやく訓練が終了したらしい。

また箱の中は暗い空間に戻り、パシューという音と共に外への扉が開いた。

結局最初の内は声が聞こえていたけど、途中から聞こえなくなっちゃったな。

「ふう、世界が少し揺れてるなあ」

まだ若干揺れる視界に足を取られないように気をつけながら箱から出た。

すると周りから驚きの声が聞こえて来た。どうしたんだらうか？疑問に思っていると訓練兵の一人が僕に声を掛ける。

「ギーシュ、お前特異体質なのか？」

何を言ってるんだろうかコイツは？

「いや、至って普通の男だけど？」

「……いやお前さんは特別だわ。ホレ、アレ」

彼が指差した先には、口を押さえてベンチにへたりこんでいるA分隊の姿が……。

え？あれってそんなに乗り心地酷かったのか？

その後もB分隊がシミュレーターに乗りこんでいったけど。

「う、うおおお、天地が逆転だ……」

「思わず吐いちまいそうだ……オエ」

「天にも昇る心地で、地獄生きてなこの事か……」

「……（はんのうがない ただのしかばねのようだ）」

なんかほぼ全員が死屍累々だった。

極めつけはワイズ教官から『凄いなギーシュ訓練兵、適性が高すぎる。むしろバケモンだな』と言われてしまった。そ、そんなに酷く無かったと思うんだけど……あれー？

「始動！地獄訓練！・後編」（後書き）

ちなみに作中のゼフィールはFMの次回作のエボルブに登場予定の
グラシリスの正式後継機です。

ゲームの公式サイトで画像が見れますので見てみたい方はどうぞ。

「ハッハー！ダイブ！ダイブ！ダイブッ！！」（前書き）

*注意、妄想爆走中です。ソレが嫌な方はブラウザバックを連打してください。

原作崩壊おこな方はどうぞお進みください。

「ハッハー！ダイブ！ダイブ！ダイブッ！！」

「ハッハー！ダイブ！ダイブ！ダイブッ！！」

妄想戦記

Side 三人称

さて、ギーシュ達がヴァンツァーによる訓練を初めて1カ月が経過した。

最初こそひーひー言っていたA分隊だったが、ワイズの厳しい訓練の甲斐もあり今では自分の手足の如く動かすことが出来るようになっていた。

FCSやアビオニクスの使い方を突貫とはいえ集中的にたたき込まれた彼ら。

ヴァンツァーの扱いについてはワイズから追打点を貰っている程だった。

とはいえ、まだ実戦を知らないので能力は未知数だ。

また実機訓練に入った直後、フェンは自分がワイズであることをさらした。

実の所、ばらした瞬間の驚く様を見たくてやってのだから意外とお茶目である。

とはいえ、ワイズ教官が実はフェンであるという事を知った彼らは啞然とするしか無かった。

知った直後は、彼を良く知る人物は“あははーフェンならこれくらい余裕だよなー”と壊れ。

フェンの事をよく知らない者たちは　え？あの子供が教官？それどんな魔法ですか？

そんな感じで自分たちが魔法使いであるという事を忘れて突っ込んでいた。

ちなみにフェンの正体が知れた後、特別訓練という事で実戦形式の模擬戦を行い

A分隊VSフェン一人という模擬戦を何度もやっていたが・・・。

A分隊はフェンには全く太刀打出来無かったことだけを記しておく。

さて、前置きはこころいらずで良いとして水精霊騎士A分隊は現在

……ドーーーーーン!!!!

「おー、戦列艦が沈んだ。しかも火薬庫引火か……ありや全員即死だな」

「流石はアルビオン空軍、数はこっちが1.5倍だつて言つてたけど、練度が違うわなあ」

アルビオン侵攻艦隊の内の一隻に乗りこんでいた。

ついにアルビオンへの侵攻作戦が始まったのである。

六万の軍勢を乗せた大小様々な500を超える艦隊がラ・ロシエールから出港した。

内訳的には60隻が戦列艦で後は兵や補給物資を運ぶ輸送艦である。

その輸送船の一団の中に、水精霊騎士隊のヴァンツァーを積んだ改造輸送母艦エクリップスが混じっていた。

見た目は周りのガレオン船と大差ないが、改造した張本人はフェンである。

この母艦に一体どんな機能が隠されているかなんて見た目だけでは解る訳が無い。

ソレはさて置き、彼らは輸送船の甲板から遠くで行われている2国混成艦隊の奮戦を見ていた。

微妙に空気が呑気なのは、彼らが雲の中に隠れて静かに進行中の後発の輸送艦隊の方に乗せられているためだ、また現在行われている戦闘には直接参加していないからでもある。

以前なら我々もと意気込んだところだろうが、彼らの専門は陸戦兵器の運用となる。

その為、空での戦闘は空海軍の者たちの足を引っ張る結果になる事を知っているのだ。

だから彼らは身近に香る戦争の空気を感じつつも、客観的に見る様に務めていた。

「あちゃー、やっぱり竜騎士隊の錬度が違い過ぎるぞ」

「マリコルヌ、君には見えてるのかい？」

「僕も一応風のメイジだからね。遠見は得意じゃないけど出来なくはないさ」

彼はそう言っつてトリスタニア戦列艦隊の状況を見続ける。

とはいえ、横っ腹に大砲の直撃を受け、人間が炎にまかれて飛び降りているところまで見てしまい若干気分が悪かった。

だが、これから赴く戦場とはどういうものかを見ておきたいと、決して眼を逸らさなかった。

「戦争か・・・ま、死なないように頑張るしかないね」

「おやおや、我らが小隊長様は随分と謙虚になりましたね」

「レイナル、茶化すなよ」

「コレは失礼、でもまあ解らなくも無いけどな」

今回の戦争はアルビオンがハルケギニア大陸へともっとも近づい

ている時期に合わせた侵攻だった。

当初から侵攻を行うのは決まっていた為、途中自分の方向性を転換した女王でも撤回する事は出来なかった。

その為、戦争の駒として彼女は虚無の存在をさらし、更には自分の近衛兵を戦力に回すとした。

当然虚無とはルイズ達の事であり、近衛兵とは彼ら水精霊騎士隊の事である。

これによつて水精霊騎士隊も実戦を積む為に戦争に参加する運びとなっていた。

もともと女王陛下直属であり、侵攻作戦に参加する意味はあまりないのだが実戦は積める。

そう考えると戦争を経験の為の踏み台にしている様で、彼らはあまり良い気分ではなかった。

だが、実際実戦経験が無いに等しい自分たちは、新兵以下であると割り切つて考える事にした。

プライドは二の次、まずは自分たちが生き残らなくては意味が無いのだ。

我が身は国の盾であると決めたのだから・・・

S i d e o u t

S i d e フ ェ ン

アルビオンとの戦争が始まってすぐ、俺は一度学院に戻りコルベール氏に秘薬の料金を全額支払った。

女王と約束した以上、部隊の連中を生きて帰らせる為俺も戦場に行くからである。

俺は死なない身体であるが、金を返したのは後くされなくしたいというジंकクスを兼ねていた。

ルイズ嬢達との主従契約も解消し、現在の身の置き場は水精霊騎士隊の教官だ。

彼女たちと別行動なのはそう言う訳だ、それにそう女王から依頼されているのもあるしな。

せっかく作り上げた部隊をこんな戦争で無くしてしまうのは惜しいのだ。

ルイズ嬢もあれから虚無の魔法が使えるようには準備していたらしい。

最後に学院に戻った時、彼女から直接そう聞いたのだ。

俺が抜けるから護衛大丈夫かと思ったけど、サイトも居るから大丈夫だとは思うぜ。

あと学院の方には現在女王直属のもう一つの部隊である銃士隊がいるらしい。

また水精霊騎士B分隊達も今は学院に戻ってもらっている。

一応騎士隊とはいえ、騎士と名乗るからには勉強をおろそかにさせるなと爺ちゃんが……。

じゃなくてオールド・オスマン学院長がそう言ってきたからな。

あの人には借りもあるから休暇って形でB分隊には一度学院に戻る用指示を出したのだ。

学院の警備を任せたシランからの報告によると、今の所学院警備に当たっている銃士隊とは特にもめごとを起してはいないらしい。

むしろ身体を怠けさせない為の訓練の内容を見て、その訓練の方法を教えると銃士隊の女性隊長に言われていたと聞いている。

勉強に支障が出ない様にと指示を出して置いたのだが・・・それでも一般から見れば異常か。

ソレは置いておいて

「集まったな。諸君、楽にしてほしい。シエスタ、モニター頼む」

「了解」

とりあえずこれからの予定をA分隊に伝えにやらん。

「「「「「「「「「「」

「?どうした、なにか問題でもあるのか?」

ブリーフィングを始めようとしたら何やら熱い視線で見られている。

「いやん、そんな目で見んといて・・・自分で言っただけで気持ち悪いなオイ。」

「いや、問題というかですね・・・出来ればワイズ教官の姿でやってほしいです」

「む・・・ああ、確かにこの姿じゃな　リン！」

「ハイですう！」

いやはや、ついつい何時もの8歳児程度の姿でやるところだったぜ。

流石にそれじゃ閉まらないってモンだろう。

ちなみに俺がワイズだったって事はA分隊とオペレーター組は知っている。

もつとも一応公式の場では俺はワイズ教官ってことになるんだろ
うけどな。

まあ公式の場に出ることなんて絶対にないだろうが・・・。

ソレはさて置き変身魔法で姿をワイズ教官へと変えて、続きを行
う事にした。

「ふう、この姿は意外と疲れるんだが・・・まあ良い。続けるぞ」

シエスタにサインで指示を送るとブリーフィングルームに取っ
つけた様な機械群が稼働する。

そして空間投影されたモニターにこれからすべきことを映しだ
した。

自分でつけといて何この技術格差とか思っちゃうぜ。

「さて、現在我々の位置はアルビオンから見て大体200リーグの位置にあることだ。」

MAPに連合軍を示す矢印が表示され、アルビオン周辺の地図が映し出された。

そこへ艦隊を表す矢印が地図上のグリットへとへと向かう様子が映される。

そのグリットとはアルビオンの橋頭保である港町のロサイスとダータルネスだ。

作戦を伝えて来た伝令によればダータルネス方面に敵をくぎ付けにする作戦が行われるらしい。

俺達はその間にロサイスに降り立つ友軍の橋頭保を確保するのである。

「このままでいけば、あと約3時間程でアルビオンへの橋頭保であるロサイス港へと到達する。」

我々はそのロサイス港へと侵入し、そこを守る亜人種達を排除するというのが今作戦の目的である。

あとこれを見てもらいたい」

モニターに映し出されたのは、人とそれを大きく上回る人型の何かの絵だ。

A分隊の連中はそれを見て今回の敵が誰なのかが大体解った様だ。

「ロサイスの周囲には、トロール鬼及びオグル鬼が中心の部隊が開中であり、友軍の侵入は容易ではない。我々は空挺降下によって敵部隊を強襲、これを撃破してロサイスへの橋頭保を確保する」

トロール鬼、オグル鬼とはオーク鬼よりもデカイ体長5mほどの亜人種達の事だ。

大きさだけでも全長6mのヴァンツァーと殆ど変わらない生物である。

また名前が示すように、その肉体は強靱勝つ強大であり普通の人間なら太刀打ちできない。

大隊クラスの人数とよく訓練された人員がいれば、知能が低い為比較的くみしやすい。

だがそれでも通常の間人にとって脅威であることは確かだ。

「以上だ。何か質問は？」

俺がそう言うと 部隊を率いるギーシュが手を上げた。

質問を許可する動作をすると彼は喋り始める。

「亜人達の装備は？」

「偵察してきた竜騎士部隊の報告によれば、トロールのほぼ全員が棍棒を持っている。言っておくが奴らの筋力はかなり強い、ゼフィールの装甲なら2〜3発は耐えられるだろうが、それ以上はおやっさんに怒られる事を覚悟した方が良いぞ？」

俺の言葉で失笑が漏れる、ジェフリーは怒らせるとマジで怖いからな。

戦場に何度もでた俺ですら恐怖で動けんと思ったくらいだ。

「それとオーク鬼どもの何匹かが大型バリスタを持っているとの報告だ。威力、精度共にかんりのモノらしい。偵察部隊の竜騎士が駆る竜がバラバラになったくらいらしいからな。ヴァンツァーの装甲がどれだけ耐えられるか分からない以上、今回は盾もセットアップしておく必要があるだろう」

ヴァンツァーはあくまで汎用性の高い人型戦車の様な物だ。

だが人型である分バランスが取りづらく、装甲も実は戦車と同程度かそれ以下しかない。

だがヴァンツァーには戦車には無いモノがある。

「それが嫌なら常にダッシュで逃げ回る事だ。なーに逃げ回れば、死にはしない」

それは機動性、バランスがとりづらいというのを逆手にとりか
りの機動力を手に入れている。

脚部には不整地対応の特殊ローラーが取り付けられ、大地を滑る
ように移動できるのである。

つまりはどんな攻撃だろうが当たらなければどうという事は無い
ということだ。

「全敵制圧をもってして任務完了とする。質問は他には無いか？
何かあるのかギムリ」

「一つだけ、もしもロサイスの方面にまで戦闘が拡大したら？」

「かまわん、総司令官殿は“敵を倒せ”と仰せだ。市街地を巻き込
んだとしても問題は無い」

「……木端微塵にしても？」

「別に木端微塵にしてもかまわんが、その場合休暇は取調室でとっ
てもらう」

「げ、ソレは簡便だぜ」

「他には無いか？ よろしい。概略は以上だ」

シエスタに合図を送りモニターを閉じる。A分隊の全員に緊張の色が見えるな。

まあこれが初めての初陣なんだから、緊張しない方がおかしいか。

「現時刻をもって水精霊騎士隊は作戦行動に移る。

貴様らの初陣だ、へまをしたら俺が魔法で撃ち落とすからそう思え！」

「コッココサイエツサー！」「」「」

「よし！各員自分の機体の前で待機、準備を始めろ」

「コッココサイエツサー！」「」「」

そして各員空船強襲の準備の為にブリーフィングルームから駆けだした。

己の機体は己が最終チェックをするのは当然だからな。

作戦途中で動けなくなっても嫌だろうし、何よりも死にたくないのだらう。

・・・何せあれには機密保持の為に遠隔自爆が可能な様になっているからな。

「・・・皆さん、大丈夫でしょうか？」

「さて、ね。シエスタも戦域管制を担当するんだから準備を開始した方が良いぞ？」

「そう、ですね。がんばります」

さてさて、俺の作った機動兵器はファンタジー相手にどこまで効くのか見モノだな。

あいつ等の初陣だから俺は今回はあまり出ないけど、最後まであきらめるなよ。

そして、生きて帰って来てくれよ・・・知り合いの死は、もう腹いっぱいだ。

S i d e o u t

S i d e 三 人 称

作戦開始より3時間後、ロサイス上空およそ3000mほど上空にエクリプスは到達していた。

これ程まで高い位置に来ていたのは竜騎士などの航空戦力を避ける為である。

所定のポイントに到達したエクリプスは、船底に設けられたハッチを開き始めた。

船底のハッチは船内のヴァンツァー格納庫と直結しており、A分隊もそこに待機していた。

そしてハッチが開くと同時に、オペレーターの一人であるシエスタが降下するA分隊へ最後の確認を行う。

『ネレイドママよりチームリーダー、状況を知らせてください』

「ネレイドー、クリア」

ギーシュはA分隊の状況を確認し、何も問題はないと判断して問題無し（クリア）と応えた。

そして彼が乗るヴァンツァーのコックピットには、作戦開始までのカウントが表示される。

もうすぐ初めての实战だ。訓練はキチンとやった。訓練通りにや

れば　大丈夫だ。

『　　3 / 2 / 1、カウント0。ネレイド1、降下を開始してください』

「ネレイド1、了解」

シエスタの指示に従い、ギーシュは自分の愛機をハッチの手前に持って行く。

カメラの映像にはハッチの下の雲がひろがり、かすかに森や平原が見えた。

ギーシュはそのままハッチのすぐ手前にゼフィールを立てせる。

するとフェン、いやさワイズからもA分隊全員に向けて共通通話帯の通信が入った。

『　　パーティータイムだ。行って来い』

「了解ッ！」「了解ッ」

ワイズの言葉に全員が異口同音でそう返事を返し、一番手のギーシュは覚悟を決めた。

そしてそのままワザと機体バランスをくずし、倒れこむようにハ

ツチから飛び降りる。

同時に視界を後方カメラに切り替え、他のA分隊も無事について来ていることを確認した。

カタカタ カタカタ

降下を開始したゼフィールに軽く振動が伝わってくる。

ソレが否応にも今体験していることが現実であると無慈悲にも教えてくれている。

そして自由落下に近い為すぐに加速限界に到達し、身体が浮く様な感じに見舞われた。

ギーシュ達は機体が気流に煽られるのを制御しつつ、HMDに示される降下ポイントを目指す。

『お、おりられるのかよー！』

『ネレイド3、私語は慎め』

唐突に声を発したギムリをオペレーターの一人のキノが注意する。

ちなみにコールサインはネレイド1がギーシュ、2はマリコルヌ、3がギムリで4はレイナル、5がスティックスである。

訓練では何度もやったが、実戦でははじめての空挺降下である。

声を出したくなるのも仕方が無いなとギーシュは思った。

「 高度1800、1600・・・」

ギーシュは高度計を読み上げながら、減速すべき高度になるのを待つ。

降下バックパックを展開する為のスイッチに力が入る。

胃袋の中身がひっくり返りそうだ。

「 1500、1300、1100 」

操縦桿を握る掌に汗が噴き出る。

ここでバックパックの展開に失敗したら、地面に落ちてバラバラだ。

高度計の表示を見逃さない様に気を付けつつ、A分隊はちゃんと付いて来ているか確認する。

マリコル又は風のメイジだけあり、気流を読むのが上手いのか降

下は安定している。

レインールも問題無い、スティックスも大丈夫だ。

若干ギムリが流されているが予想範囲内だから問題無い。

「900、700、500！ 各員バックパック展開！」

高度計が500を刺した瞬間、彼らは同時に降下用バックパックを展開させた。

ゼフィールの背後にあるアタッチメントにつけられた降下用バックパックが稼働し、補助アームが伸びて固定される。

そして固定された補助アームに取り付けられたブースターが点火し炎を噴き出した。

急激な減速によるGが彼らの身体をシートに抑えつける。

一瞬に息が出来なくなる程の重圧に耐えつつも次の手順を踏む為にコンソールを操作する。

彼らはバランスをとりつつ、魔法を操り重量制御術式を最大稼働させ機体重量を軽くした。

「高度100、50・・・着地！」

そして、空から降下した巨人たちはロサイスちかくの荒野へと着陸した。

ズズンという音を立てつつも脚部を最大に屈伸させてバネにし衝撃を吸収させる。

だが着地の硬直が終わらないうちに、彼らは手順通りに周辺確認を行う。

周囲を警戒しつつ彼らはローラーを駆動させてその場から離れた。

同じポイントに何時までも居るのは危険だからだ。

「こちらネレイド1、無事降下に成功した。欠員は出ていない」

『ネレイドママ了解、エクリプスは空中管制に回ります。ご武運を』

「ネレイド1、了解、通信終わり」

ギーシュは通信を閉じ、無事に降下出来た事を喜んだが顔には出さず任務に集中する。

ココから先は戦場、一瞬の判断の遅れや迷いが全て死に直結しているのだ。

小隊長である彼は絶対に全員で戻ると考えつつ、ゼフィールを口

サイスに向けて走らせた。

S i d e o u t

S i d e W i z e (i n f e n)

『こちらネレイド1、無事降下に成功した。欠員は出ていない』

「ネレイドマム了解、エクリプスは空中管制に回ります。ご武運を」
今俺はエクリプスの空き部屋を用いて作られた臨時の戦域管制室に居る。

通信機からA分隊が無事に降下出来たという連絡が入った事に安堵していた。

俺が設計したゼフィールはヤワじゃないが、実を言えば空挺降下は今回が初めてだった。

いや、一応テストはしましたよ？

ただ人を乗せた状態で降りるのはシミュレーション以外はコレ

が初。

鍛え上げた鉄面皮のお陰で顔には出してないが内心すごく安堵のため息が漏れるぜ。

「……（はあく、良かった。降下用ブースターパックちゃんと作動したんだな）」

「……（？ 自信無かったですか？マスター）」

「……（いや、キチンと設計もしたしテストもした。でも不慮の事故とかが怖い）」

「……（なるほど、不測の事態とは思いがけない所で起こるモノですものね。流石はマスター、常に様々なことを予測しているのですね！）」

「……（ソレも仕事さ）」

ははは、ヴィズが感激している手前、つついそう言っちゃったけど、そこまで考えてないぜ。

しかし重量制御術式があったお陰かブースターの推力に余力があったみたいだな。

これはもしかしたら……ふむう、アイディアがわいてきたぜ。

「ワイズ教官、水精靈騎士隊オンデューヌが間もなく戦闘区域に到達します」

「ん、了解した。戦域管制は各機にデータを送ってくれ。他はエク
リプスのセンサーで敵を探し出すんだ」

「了解」

元は輸送用ガレオン船だったエクリプスだが、俺が1カ月ちかく
かなりの手間暇を掛けて作り上げたフネだ。

女王から許可を貰い、輸送船をヴァンツァーを運用可能なように
造り帰るのがもう大変で大変で。

一番大型のガレオン船のペイロード部分を全部ぶち抜いて5機の
ヴァンツァーが乗る用にした。

またヴァンツァーを搭載しても底が抜けない様に色々と素材を魔
法で変えて補強した。錬金チート万歳。

正直木造帆船を改造するのは手間取ったのだが、なんとかこの戦
役には間に合ったのである。

改造している内にドンドンと弄りたい個所が増えてしまい、つい
つい手を加えまくった。

見た目こそ他のとほぼ変わらないが、各所にセンサーを設置し、
ヴァンツァーとのデータリンクも可能。

簡単に言えば地球におけるAWACS（空中警戒管制指揮機）に相当する母艦となった。

序でに帆船って事で、周辺の空気の流れを魔法で補正する術式展開装置も搭載。

これによって見た目よりもスピードと航続距離が延びたのである。

他にも様々な機能や防衛機能も搭載しているが、説明メンドイから俺は華麗にスルーするぜ。

幾らなんでもやり過ぎだと思っただろう？ だけど、実はこれでも自重した方なんだぜ？

当初は外見が真っ黒になって魔導ターボエンジンでも乗っけたらうかって思ったもん。

でも流石に自重した。だって幾らなんでも目立ち過ぎるからな。

もっとも中身は既に別モンだから、マジで俺自重って感じだぜ。

「ネレイド1交戦、ネレイド2、3、4、5も順次交戦を開始しました」

「よし、俺達は空から見てはいるしかできないが、それでもサポートは出来る。わずかな情報でも絶対に逃すなよ」

「了解！」「」

本当なら別の人間が指揮すべきなんだが、今の所適役がない為
オイラが兼任中。

でもこの間も記録は撮り続けているから、いずれはオンディーヌ
の中で適性が高いヤツに譲るつもり。

俺だって何時までもココに居るって訳じゃないからな・・・。

「・・・（出来れば、みんな無事で帰って来て欲しい）」

【・・・リンもそう思うですう。皆さん良い人達なんですから】

「・・・（大丈夫ですよ。全員マスターが手塩を掛けて育て上げた
んですから。大体教官はあの“ワイズ教官”じゃないですか）」

「・・・（それもそうか、ま、後は祈るしか無いな）」

必死に奮戦している連中の様子を上空から捉えたモニターを見つ
めながら、俺はそう思っていた。

これは初陣、彼らの初陣なのだ。俺が参戦してしまうと全部1人
でこなせちゃうからな。

連中に戦場での経験を積ませる為には、今回ばかりは俺は出ない
方が良いのだ。

幸いなことに、敵の数はそれ程多くは無いからな。訓練通り出来れば問題無いぜ。

それに最悪俺がすぐに出られる様にB Aの準備は終えている。だから

「後でひよっこ共の生還祝いをしなきゃな」

「厨房に連絡してきましようか？」

「ああ、後で連絡入れておいてくれ」

無事に帰還して来いよ。皆。

「ハッハー！ダイブ！ダイブ！ダイブ！ダイブッ！！」
（後書き）

・ロサイスに敵が残っているのは俺の妄想。

「お帰りひよっこ共・・・」（前書き）

*妄想が溢れております。SAN値に気をつけてご覧ください。

戦争モノが嫌いな方は、バック願います。

・・・それでもおっけーねな方はどうぞ

「お帰りひよっ」共・・・」

「お帰りひよっ」共・・・」

妄想戦記

S i d e ギ ー シ ュ

ふう、なんとか無事に降下する事が出来た。訓練をしつかりやっておいてよかったな。

現在僕たちはロサイスに存在する警備隊を排除する為ロサイスへと向かっている。

コレが初めての実戦だからか、何だか緊張している様な感じが凄い。

「戦争、か。大丈夫かな・・・」

「ネレイド2、作戦以外での通信回線の使用は禁止されている。ト

ラブルかい？」

『い、いや。そう言う訳じゃないんだ。すまん。通信終わる』

マリコルヌが通信回線を開いたままにしていた所為か、思わずつぶやいた事を拾っていた。

一応作戦以外の事で通信回線を使う事は禁じられているから注意をする。

でも、マリコルヌがどんな感じなのか大体解った僕は秘匿回線を開いた。

本当はダメだけど・・・今くらいはね。

「<・・・安心していい。僕も怖いよ>」

『っ！・・・<なあ、向うにはメイジも居るのかな>』

「<多分ね>」

『<僕達、人間も相手にすることになるのか・・・>』

「<だろうね。まあメイジは前に出て来ないからそうそう相手にはしないだろう>」

『<・・・ソレもそうか。すまん、不安だったから>』

「くかまわれないさ。隊員の緊張をほぐすのも小隊長の役目ってね」
『く……へへ、随分と立派になって 頼むぜ隊長さん』

「くまかしとけ」

マリコルヌの緊張はほぐれたようだ。・・出来れば僕の緊張も誰かとって欲しいな。

とはいえ、こうしている間にも時間は進む訳で。

『ネレイドマムから各機へ、間もなく作戦開始ポイントへ到達します。火器管制の使用許可が出ました。全兵装使用自由です』
オールウェボンスフリー

「くおっと、おしゃべりはここまでだ」 ネレイドー、了解。各機FCSコネクト」

「「「「了解「「「「

作戦ポイントに到達するから、武器の準備を始めないといけない。

シミュレーターや実機訓練で何度もやった手順で、FCSを立ち上げる。

今回のミッションでは全機が複合魔杖であるレオホーンを装備している。

それに加えて、それぞれの特色を生かした装備をオプションで取り付けてあるのだ。

まあ僕はレオホーンとシールドという基本装備だけだけどね。

レオホーンは銃器であり刃物であり魔杖でもあるから他にいらないんだ。

『ネレイドママから各機、戦闘区域へ入ります。なお撤退は作戦変更以外では許可されませんのでお気をつけて』

『だろうな。報酬上乘せた』

だれかがそう言った。妖精が混じってる？・・・作戦前だからか電波を拾ったような気がする。

さて、そろそろ意識を切り替えないと、ココから先は血で血を洗う戦場。戦域に突入だ。

『ネレイドマムから各機へ、敵反応を捕捉。距離4000、数は不明、集団で固まっています』

「ネレイド1から各機、聞いた通りだ。一気に蹴散らすぞ!!」

『『『『了解!』』』』

「ネレイド2、景気づけに大きいヤツを一発頼む」

『ネレイド2了解、風メイジの空気を読む力、存分に味あわせてやる!!』

マリコルヌの機体が少し体勢を低くして構え、肩の四角柱の筒が動き角度を調整している。

彼は風のメイジであり、元から気流を読むという行為は十八番と
いっていい。

ソレは例え装甲板に囲まれたゼフィールに乗っていても変わらな
い。

『いつけええええ!!』

そしてネレイド2の肩にある四角柱、ロケットランチャーから口

ケットが射出される。

一回限りの使い捨て兵装だが、火力だけなら魔法以外で一番の威力があるそれ。

使い方を誤らなければ凄まじい効果を発揮する。

『ネレイド2、全イーグレット射出を確認、目標まで後20秒』

僕はヴァンツァーのパイロットをしているから、あの兵器がどんな原理なのかは知らない。

だけどコレだけは言える、その威力は炎のメイジが10人いても足りないってこと。

確かフェンは科学と魔法の融合とか言っていたっけ。・・・科学ってなんだろうか？

そんな事考えている間に、ロケットは目標へと落っこちた。

大分離れているのにも関わらず、振動と爆音が感じられセンサーが大規模な熱量を感知する。

『イーグレット着弾、着弾誤差0.5、効果確認・・・』

いや、オペレーターが確認しなくても、ココから望遠でよく見える。

弧を描いて飛んで行ったロケットは確実にトロールやオグルを巻き込んで爆発した。

信じられない様な威力を発揮して、火の手に包まれている。

まだ何匹かトロール鬼やオーク鬼が残っている様だけど、今の攻撃で混乱しているな。

奇襲を掛けるなら今の内だろう。

「ネレイドーから各機へ！レオホーンを掲げる！友軍の脅威を排除する！全機散開！」

『『『『』』』』』 了解ッ！！』』』』』

フットペダルを操作し、脚部のローラーを駆動させて荒野を駆け抜ける。

馬や幻獣よりも早い速度で大地を駆け、大きな土埃が僕らが通った後にあがる。

とおくからでもはっきりと視認できるソレはさぞかし目立つ事だろう。

だが先の攻撃で既にこちらの存在が知られているだろうから気にはしない。

『ネレイドマムからネレイド1へ、敵の位置を特定、距離500、数は6・マークерをつけます』

戦域管制官からの情報がHMD上の反映され、ロックオンマークーが各所に現れた。

空中から様々な方法で情報を統合し、此方へと送ってくれる戦域管制って言うのはありがたい。

お陰で敵の居場所がすぐに解る。空に眼があるっていう感じなのだろうか。

そして標的をサイトレンジ内に捉えた　デカイ、本当にこちらと同じ大きさだ。

丁度鶴翼の陣の用に、2体ずつ扇状に広がっている、これはチャンスだ！

「さあブタ野郎どもが見えた！2、3は左翼を、4、5は右翼を頼む。僕は中央を突破する！」

『了解ッ！ネレイド2攻撃を開始する！』

『ネレイド3了解ッ！！ブツ潰してくる！』

『ネレイド4了解、レオホーンで斬り裂いてやるさ』

『ネレイド5、狙撃なら任しておけ、ネレイド1も無茶するな！』

ネレイド2のマリコル又は後衛、ネレイド3のギムリは前衛だ。

4のレイナルも前衛で、5のスティックスが後衛だから相性がいいだろう。

これはある意味無難な選択だね。前衛と後衛が一緒なら大抵の事態に対処できるから。

そして各機は訓練通り、僕の指示に従って敵に向かって散開していく。

僕はオールラウンダーな所為か、若干特殊な事もあり下手に連携が取れないから一人だ。

とにかく中央に立ちふさがる敵を殲滅する為、脚部のローラーを加速させた。

「敵を捕捉、ネレイドー！エンゲージ！」

ガキン　　ダララララッ！！

レオホーンに取り付けられた緩やかな曲線を描く片刃の刀身。

その刀身の峰に接合された40mm魔力機銃が立ちふさがるトロールの一匹を捉えた。

放射状にばらまくように撃ち込んだから、分厚い筋肉層を持つトロール鬼の致命傷にはならない。

だけど今の攻撃でトロールは怯み硬直する。その隙が出来れば接近する事なんてたやすい。

そして本能からか、あるいは恐怖からか、トロールは棍棒をめちゃくちゃに振り回し始めた。

以前の僕ならその威圧感と振うだけでヴォンヴォン音がなる棍棒を前に動きを止めていただろう。

だけど、こんなめちゃくちゃに振り回すだけの棍棒に当たる気は毛頭ない。

というか

「・・・フェンのオートクレールの方が数倍怖い・・・」

フェンの持つ魔法大剣が放つ斬撃と比べたら見戲にも劣る攻撃方法だ。

むやみやたらに棍棒を振り回すだけでは、こちらに当てることなんてできやしない。

ソレ位避けられる程度に経験は積んでいるよ！

「ハアアアアツ！！！」

ブンブンと振り回される棍棒をかわし、ローラーで懐へと瞬時に潜りこむ。

伊達に何度も訓練でフェンに投げ飛ばされたり吹き飛ばされたりはしていない。

棍棒の動きに合わせてゼフィールの上体をひねって武器を腰だめに構えた。

剣と銃と杖を合体させた複合魔杖レオホーン、その分厚い剣先がトロールへと向けられる。

銃で牽制し剣で追撃を駆けるクイツクアタックがトロールの咽喉を貫いた。

そしてそのままソレを振り抜く。紫ともどす黒いとも付かない血飛沫が飛ぶ。

斬られたトロールはグラリと身体を揺らしたかと思うと大地に崩れ落ちた。

「ッ!」

だけどトロールを倒した瞬間に悪寒を感じ、僕は本能的にスティックを操作してその場から後退した。

そして地響き、見ればさっきまでいた場所に棍棒を叩きこむ別のトロールの姿が写る。

見れば陥没した地面、クレーターが出来る程の怪力なんて、冗談でも当たりたくななんて無い。

トロールはゆっくりと棍棒を持ち上げて振り回そうとしているが、

そうはさせない!!

「たかが木の棒でやられるか、大体鈍い!!」

レオホーンを近接射撃から魔法仕様モードに切り替える。

ガシャンと音を立てて今までストックだった部分が伸びて長い杖の様な形へと変わった。

僕は杖が差し込まれているスティックを介して、ルーンを詠唱していく。

だがトロールがゼフィールの前に立ち、再び棍棒を振り降ろそうとしているのが見えた。

あまりにも遅く振り下ろされるように見える棍棒を前に僕は詠唱を一時中断する。

「うおーっ!!」

僕はフットペダルを思いっきり踏み、重量制御術式を最大稼働させトロールを跳び越えた。

一瞬の浮遊感、思考操作でトロールの肩を踏み台にしそのまま跳ぶ。

そして敵の背後に着地して詠唱を再開、魔杖を大地に突き立てた。

「アース・ピアス！」

詠唱を終えて魔法が発動する。使うのはドットスペルクラスのアース・ハンドの変則版。

とがった岩を大地から噴出させるアース・ピアスを発動させ、トロールの腹を貫いた。

HMDに見たくもない亜人の臓物が写り吐き気を催すが戦闘中だから我慢する。

どうやら初陣だからか興奮しているらしく、気持ち悪さもそれ程強くは無いのが幸いだね。

「上出来、発動出来た。消耗が結構凄いけど・・・」

魔法による攻撃、コレが魔杖という名前を冠されている理由である。

この武器は剣であり銃であり、そしてメイジの魔法を魔導炉の魔力を用いて増幅させて発動させる事が出来るのだ。

勿論キチンとイメージしないと発動しないから、戦闘中に魔法使うのは大変だ。

元々魔法の発動には集中力が必要だけど、ゼフィールを通した魔法発動はその比じゃない。

訓練で何事にも動じない程度の精神力とタフさを培えなかったら使えなかったことだろう。

ちなみに実は機体を操縦しながら魔法を発動出来るのは、A分隊の中では今の所僕だけだ。

コレも小隊長に任命されて、戦術の幅を広げようと色々試行錯誤した結果である。

僕の場合、機体を操縦しながら同時に魔法を操るようになるまでに3週間近くかかった。

ソレをワイズ教官に模擬戦中に披露したら大層驚かれたことがあった。

脳内で物事を同時に処理するこれはマルチタスクと呼ばれる技能

であるらしい。

僕は元々複数のゴーレムを扱っていた為、マルチタスクが使える素養を持っていたんだそう。

もともとまさか独学で覚えるなんて思われていなかったらしく、驚かれる前に呆れられたけどね。

他の皆は走らせながらとか簡単な動作中なら仕えるけど、戦闘機動中は無理らしい。

その事でもお前はバケモンかと言われて、ちょっと凹んだのは余談だ。

ただコレ、使い勝手はそれ程良くは無く、効果範囲こそ広いけど細かな制御とかは出来ない。

多大な集中力がある反面、発動する魔法の殆どがドットクラス程度の系統魔法しか使えないのだ。

それでも効果は絶大だから、戦術の幅は広がっていくんだけどね。

そかし実戦で使ってみると本当に訓練の時とは大分違う。

普段と違い精神力の消費にムラが出てしまうから、コレは実質数回の使用が限度かな。

おっと、敵を撃破した事を報告しておかないと。

「ネレイド1よりネレイドママへ、敵戦力を2体倒した」

『了解、他はまだ交戦中、援護に向かってください』

「ネレイド1、了解」

トロールを2匹倒しけど、戦域モニターによればまだ敵戦力はいるみたいだね。

さっきの二体は一応1人でも倒せたけど、敵の数が少なめで良かったかな。

僕はメイジだからか、つい魔法を使ってしまったけど、次からは魔力機銃も併用しよう。

『ネレイド2！援護してくれ！』

『了解、魔法使うからそれまで盾よろしく！』

『任しとけ！』

他の皆も頑張っているようで、繋げたままの通信からいまだ戦闘中の声が聞こえてくる。

マリコル又が魔法を発動させるべく詠唱する為にゼフィールを停止させた。

前衛をやっているギムリはマリコル又が詠唱中の盾をやるらしい。

手持ちのレオホーンを放って牽制しつつ、動きを止めたマリコル又に敵が近づかない様になっていた。

『なるー！おらおらー！！』

『レイナール！突っ込みすぎるな！』

『おっし！腕をたたつ切ったよ！』

『・・・話し聞いてねえなオイ』

一方こちらはスイッチが入ったレイナールが敵に斬りかかり、スティックスがそれに追従している。

後衛とはいえ突っ込んでいく前衛を上手くサポートするのは大変なのだ。

「ただ、ちゃんと敵を倒しているところからすると、案外いいコンビなのかもしれない。」

まあもつとも

『はああああ！！滅殺』

『だから突っ込みすぎんかって言うてだろっがアアア！！』

どこの三馬鹿が言いそうな台詞を吐きながら呐喊していくヤツを相手とは認めたくないだろっけど。

しかし彼は普段は気真面目なのに・・・いや気真面目だから箍が外れるところなるのかもね。

あれ？そう言えば三馬鹿って一体誰のことなんだろうか？また電波？

兄上、どうやら僕は戦場の空気で混乱している様です。落ちつこう僕。素数を数えるんだ。

いまだ混乱気味の頭で素数を数えようとしたその瞬間

ズズーン

「な、なんだ!？」

突然激しい揺れがゼフィールを襲う。驚いた僕はバランスを取ろうと少し焦った。

パニックに陥りそうな頭を制御しつつ、何が起きたのか計器をチエックしていく。

するとダメージを表すモニターが、右肩にダメージを受けたことを表示していた。

頭部を回して損傷個所を見ると、深く凹んだ装甲板が見える……
そうか! バリスタか!

オーク鬼の幾つかが攻城兵器のバリスタを装備しているって言うてたっけ!

でもフェンとの模擬戦と比べたら……止めよう、余計なことを考えたら死につながる。

『ネレイド1。バイタルが乱れてますが大丈夫ですか?』

「こちらネレイド1、遠距離からの攻撃を受けたただけだ。作戦行動に支障はありません」

『・・・こちらでも確認しました。損傷度は軽微、ただ右肩の関節に異常がある為、片手撃ちの場合、射撃補正にマイナスが掛ります』

「了解、注意する」

銃は使えるけど、肩の関節の異常で射線がぶれてしまっって事か。

やれやれ、もともと貴族だから銃とかは平民の武器とか思ってたんだけどね。

最近じゃ使えるモノは何でも使っって意識だからかあんまり躊躇しないな。

っつ、それよりも

「オークめ、ジェフリーさんに怒られるじゃないか」

怒らせたジェフリーさんは、ほんっつっつっつっつとくに怖いんだぞ！このヤロウ！

僕は後で絶対ぶつくさ言われると思い、若干気が滅入りつつも才

「クへと呐喊していった。

バリスタの次弾が次々発射されるが、見えている分には避けられる。

「人数がないからだろうけど、お世辞にも弾幕と呼べないんだから当たる道理は無い！」

「まったく、左手撃ちは苦手なだけだな・・・」

キュイン、ダララ、ダララ、ダララ

レオホーンを左手に持ち替え、三点バーストで発射する。

発射された魔力弾はトロール鬼よりも3マイル小さいオーク鬼の四肢を吹き飛ばすことに成功した。

「・・・あんまり良い光景とは言えないね。だけど躊躇しているヒマもない。」

「ムムムム」

「ッ！魔力反応！メイジがいる！」

そして、この初陣の中で本当なら一番会いたくない存在をセンサーが探知した。

これがタダの平民の傭兵だったら無視できた。

ゼフィールの装甲は平民の持つ弩や投槍程度では貫くことは出来ない。

それこそさつきみたいなのバリスタ並の威力が必要なのだ。

勿論バリスタでも装甲が薄い関節部に当たらなかつたら装甲を軽く凹ませる程度だ。

今回は肩の関節部の装甲が薄い部分に当たってしまった。運が悪かつたのである。

「ネレイド1から各機！メイジを発見！“固定化装甲”の固定化耐久値に気をつける！」

そう指示を飛ばしつつ、メイジの方から眼を離さないようにカメラを操作する。

メイジの使う魔法は本当に厄介だ。それこそ平民のソレの比じゃ

ない。

自身がメイジであるからその厄介さというモノは身をもって知っている。

例えば熟練の火のメイジがいれば、とてつもない火炎を使う事が出来る。

熟練の風のメイジがいれば、大規模な竜巻、もしくは電撃系の攻撃がある。

土のメイジなら壊しても魔力が残っていれば再生してしまうゴレムがある。

水のメイジも風属性を操れるのであれば、巨大な氷柱を飛ばしてくるだろう。

つまり、どれを取ってしてもその攻撃力は人間を遥かに超えているんだ。

己の持つ魔法っていうのが実はどれだけ危険だったのかを知った日は怖かったな。

……つと、そんな事を考えている訳にもいかないか。

ビービービー……！

「チツ！相手は火のメイジか！」

コックピット内に警告音が鳴り響く、どうやら敵メイジが魔法を発射したらしい。

放たれるのはフレイムボール、追尾性を持つ火の弾がゼフィールに迫る。

機体を操りなんとか避けようとするが、追尾性がある所為で避け切れない。

ボワアンツ！！

「グッ！」

避け切れないという事は当然当たっちゃったって事なんだよね。

フェンが模擬戦で撃って来た魔力弾よりかは衝撃は少ないが使われたのは火だ。

メイジの中には鉄をも溶かす使い手だっているって話だし、油断できない。

「当たった個所は・・・また右肩、それと胴体か、流石固定化装甲だ。何ともない」

もっともその為の対策は元々施してはある。

それが固定化装甲、装甲板に固定化を施すことで魔法への耐久力を上げるって方法だ。

これは知った当初は本当に眼が点になったアイディアだった。

確かに固定化を掛ければ魔法への耐久性はぐっと上昇するのだ。

しかもコレを考え付いたのは魔法とはゆかりの無い平民の整備員だった。

普段魔法を使わないからこそ、頭を使って考えた結果が魔法が致命傷になるのを防いでくれた。

それには感謝しなければならぬ、けど今は

「・・・」

僕はスティックに着いた引き金を引いた。

それにより40mm魔力機銃が起動し、メイジがいた辺りを吹き飛ばす。

何がゴメンだ、あの分じゃ肉片一つ残ってはいない。

そう考えたら、さっきまで戦っていたトロール達との戦闘風景が脳内に描写される。

僕はあるうことか、その際に飛び散ったトロール鬼の肉片を人間のソレと重ねてしまった。

「ううう、クソ　　おえええええ!!」

猛烈な吐き気に我慢できず、僕は備え付けられていたエチケツト袋に胃の中身をぶちまけた。

敵とはいえ人間を1人この手で殺したのだ。何時かは体験するとはいえシヨックくらいある。

トロール達は人間に近い亜人だったが、バケモノだからって割り切れた。

だけど、やっぱり人間を殺すという行為にそうそうなれるモノじ

やないね。

「ふう　さて。戦闘再開だ……」

口の周りをぬぐって、とにかく今は戦闘に集中して気分を紛らわせることにした。

。　　それでもしないと、震えが止まらなくなりそうだったから……。

ちなみに他のA分隊の人間の内、初陣でメイジを相手にしたのは僕以外にはギムリとレイナール。

ギムリは僕と同じく魔力機銃で、レイナールは条件反射で剣で叩き潰してしまっただらしい。

二人とも吐いたと後で言っていた……ソレを見ていた他の二人も同様だったよ。

こうして僕らは初陣にしてトロール6、オーク多数、メイジも多数という戦火を上げた。

人間をこの手で殺したという戦場の経験も、ついでにね……。

.....

.....

.....

「ネレイド1から各機、状況を知らせる」

『ネレイド2、魔法使用による疲労以外は特に問題無し』

『ネレイド3、レオホーンが若干超過負荷状態であること以外は問題無し』

『ネレイド4、斬り過ぎでレオホーンが歪んでしまった以外は問題無し』

『ネレイド5、こちらも問題無し』

ほぼ敵の戦力を駆逐する事が完了した

機体に直接の被害が出たのはどうやら僕だけらしい。

ある意味初陣なのにソレだけで済んだという事が奇跡なのだがなんか納得いかない。

なんで僕よりも敵に突っ込んでいったレイナールが無傷なのだろうか？

戦場では時折不思議なことが起こるモノだと改めて実感したヨ。

『ネレイドママより各機、間もなくエクリップスが合流ポイントに着します。帰還準備を急いでください』

「ネレイド1了解。すぐ向かう　聞いた通りだ。各機帰還準備を進めてくれ」

『『『『・・・了解』』』』

初陣を乗り切った。僕らにはその安堵感だけが流れていた。

実戦は楽しじゃ無かった。いやむしろ必死だったからこそ今ココでこうしていられる。

幾ら強大な力と装甲を持つが、臆したら死ぬ・・・今日は何度もそれを体感出来た。

合流ポイントへと向かい、しばらくするとエクリップスが迎えに来た。

僕らはヴァンツァーを操作し、着地したエクリプスの格納庫へと歩を進める。

正直、まだ気分は優れない、眠りたいけど興奮しているのか眠れそうにも無いかな。

そう思いつつも手順通りに格納庫へと機体を固定した。

身体は否応にもそういつた作業を淡々とこなしていく、これも訓練の成果か……。

『オンディーヌ隊、ネレイド各機、聞えているか？』

「ワ、ワイズ教官！」

突然通信にワイズ教官が入って声を掛けて来た。

何か作戦中に僕たちが失敗でもしてしまったのかと思わず不安になっってしまう。

彼がこういう風に通信に出る時、ソレは訓練では失敗を指摘されて怒鳴られる時だったからだ。

思わず身体が硬直する。だけど、それは杞憂だった。

『……無事に帰って来れたな。お前たち、本当によく頑張った』

「え、あ……あ、ありがとうございます……!」

『『『『ありがとうございます……!』』』』

教官に褒められた、中身はフェンだって知っていたけど、それでも嬉しかった。

別に普段とは変わらない声色、だけどその方が心地よく感じられる。

だって、僕たちは初陣で1人もかけることなく生きて帰って来れたんだ。

教官が若干嬉しそうなながらも普段と変わらない声で接してくれる事が何よりも安心できたんだ。

だから僕たちは気が付けば大声で、ワイズ教官に礼を述べていた。

『くくく、俺に礼を言うのもいいが、降りたら他の人間にも感謝しとけよ?とくにお前たちを支えてくれた人たちにはな』

「りよ、了解! オンディーヌ隊、ワイズ教官に向けて敬礼!」

「ッ」×5

『おいおい、こっちだと全員分の敬礼は見えないぞ？サウンドオンリーだしな』

「も、申し訳ありません！」

『とにかく降りて来い、まずはそれからだ』

機体から降りると、僕たちは拍手で迎えられた。

見れば今まで機体整備に立ち会ってくれた整備員、戦術の相談に乗ってくれた士官。

戦域管制をしてくれたシエスタ達オペレーター達の姿もあった。

「よく帰って来れたな！」「機体が多少痛んだだけで済んで良かった」

下に降りれば整備員達が僕たちの背中をバンバンと叩き手荒く迎えられる。

皆口ぐちによくやった、生きて帰ってこれて良かったなと言って

くれる。

胸に熱いモノがこみ上げ、眼がしらが熱くなっていくのを感じた。

A分隊の皆も同じらしく、ギムリに至っては顔を上にあげて泣くのを我慢している。

僕らはコレだけの人達に支えられて、こうして迎えてもらっている。

嬉しいのか、それとも泣きたいのか解んないけど、多分僕はいま変な顔しているだろう。

まだ身体に戦闘後の震えは残っているけど、帰って来れて良かったと思えた。

S i d e o u t

S i d e フ ェ ン

変身を解いて格納庫へ見に来た俺。全員生きて帰って来れたな。

まあゼフィールに乗ってる限り、死ぬことはそうそうないとは思

う。

油断したら簡単に死ぬけどな、このメイジとか侮れないし……。

スッ

「（あら、フェン君……）」

手厚く出迎えられるギーシュ達A分隊を見て無事を確認した後、俺は格納庫を出た。

見た感じに解る様な戦闘によるストレスからくる異常は見受けられない。

まあタフさだけはかなり鍛えたモンな。

あれだけ色んな人に矢継ぎ早に励まされていればそうそう折れないことだろう。

俺は甲板の方に出ると、手すりに寄りかかり煙管を取り出して火をつける。

流石にフネン中で吸う訳にもいかなかったからな。

いい香りのする薬草の煙が、今日は何かとても美味しく感じるぜ。

「ふう〜・・・良かった。全員生還だ」

『・・・設計した甲斐がありましたね』

「グイズ。ああその通りだ。だけど油断できないけどな」

ある意味ゼフィールは戦時急造型だ。正直既存の技術の集合体でしか無い。

今日は上手く稼働していたが、この先どうなるかわからん。

まあそこら辺は整備班や部品作りの土メイジ達が折り合いを付けることだろう。

ソレ位は出来る様に指導したからな・・・俺の出番が殆どねえや。

「・・・あの機能だけは・・・作動させたくは無いな」

『機密保持の為の魔導炉の暴走・・・自爆装置ですか？』

「・・・ああ」

ゼフィールには全ての胴体部分に魔導炉と直結した自爆装置が仕込まれている。

万が一敵に捕縛された際、搭乗者が死亡していたり、いない場合でも解析を受けると作動する。

他にも現在は設定していないが、トリステインの現在の国境を超えた時点でも自爆する。

後者は機密保持以外にも、今回の戦争以外では国の盾になるという目的があるからだ。

つまりWW2以降の日本と同じ、この戦いが終わり次第ゼフィールは専守防衛仕様となる。

ゼフィールの力は強大だ、数さえ揃えれば下手すればすぐに侵略兵器に変わっちゃう。

それを防ぐ為の処置なのだ・・・俺の自己満足なんだけどな。

「ま、あの女王陛下は侵略には使わないとは言っていたが、人間どう考えが変わるかかわからねえからな」

『今回の戦役は実動試験、データ収集を終えた段階でゼフィールは守りの盾に変わるんですね』

「……ふはあく……ソレ位しか、出来ねえ」

現在胴体部分を建造する為のマザーマシンも製作中だ。

それも製造工程の中に自爆装置が盛り込まれる。

解析すれば勿論BON、マザーマシンも暴走してから半径数キロを巻き込んで自爆する。

いずれはどういう構造でどういう機構をしているのか手探りで解析されるだろう。

だがそれでも、速くて100年、遅くても数百年単位は掛かると思っ。

こここの人間は魔法に頼るって事を覚えちまった人種だからな。

地道に手作業で手探りするかはわからねえ。

もっとも手作業で解析する分には自爆装置は作動しないからな。

案外……すぐ複製出来ちまうかも知れねえ。

もっともそれまでは“コロンプスの卵”ばりに気がつかないからな
けど……。

「風が・・・寒いねえ」

『既に夜ですからね。いま中では生還したA分隊の初陣記念祝賀会してますよ?』

「・・・生憎そう言ったのは苦手だ」

「あ、ココに居たフェン君」

聞きなれた声が背後から聞こえたので振り向くと、両手にコップを持ったシエスタの姿。

まさか、さっきからヴィズと話していたこと聞かれちゃったかな？

彼女は俺の横にまで歩いてくると、手に持ったコップを手渡してくる。

「はい、甲板は寒いだろうと思ってホットチョコレート持ってきたよ」

「シエスタ・・・今の話聞いたか？」

「何か話して他のは知ってるけど、甲板は風が吹いてるせいかな声が

聞き取りづらくて」

聞えて無かったのならいい、隠してる訳じゃないがあまり聞かれない話じゃないしな。

「下はいいのか？」

「今はドンチャン騒ぎの真っ最中なのよ？わたしもちよっとそう言うのは苦手なの」

ソレもそうか。お互い少し苦笑する。

俺は黙ってコップを受け取ると、中身を少し口に含む。

チョコレートの旨味が程良い感じで身体に滲みわたるようだ。

シエスタはその後には特に何も言わなかったけど、むしろこの沈黙が嬉しかったぜ。

「……生きて」

「ん？」

「この戦争で、誰ひとり欠けることなく全員で帰りたい」

「そうだな」

俺もそう思うぜと、彼女が漏らした言葉に同意した。

オンディーヌは俺が手掛けた初めての生徒たちの様なモノだ。

そう思うと、死んで欲しいなんて思えねえさ。

……最悪、俺が絶対に生還させてやるけどね。

そしてこの後は流石に寒くて部屋に戻りました。

だけど途中でドンチャン騒ぎに見つかり連行されました。

もうお酒は見たくないと思いました。

「お帰りひよっこ共・・・」(後書き)

・ダメだ。どんだけ魔改造？だけど止められネエぜ。

「1週間って結構ヒマじゃ」「(前書き)

*遅れて申し訳ない。そして妄想爆走中、嫌な人はバックよろしく。

「1週間って結構ヒマじゃ」

「1週間って結構ヒマじゃ」

妄想戦記

S i d e 三 人 称

殺風景な廃墟がならぶ荒野に、二体の巨人が対峙していた。

その巨人は金属で出来たヴァンツァー、ゼフィールと呼ばれた人型機動兵器。

彼らは大地を疾走し、手に持つ銃を撃ち合い、時に斬り合うという事を繰り返していた。

激しく響き渡る金属音や発砲音が、この二体が通常では非ずという事を否応にも認識させてくれる。

『どうした。俺はまだ“疲れていない”ソレで終わりなのかギーシ

ユ
『

「ハア、ハア、まだだ。まだ終わらんよ！せめて一回くらい有効打を！」

そう言うとバラのパーソナルマークが付いた巨人、ゼフィールがローラーで加速する。

ソレだけでは無く、背中と腰部に取り付けられたブレードの様なモノから炎が噴き出した。

それはスラスターと呼ばれる加速装置で、急激な機動を行いたい場合に使うものだった。

『とりゃあああああ！！』

声を上げながら突進し、複合魔杖レオホーンを突き出すゼフィール。

だが相手は難無くソレを脚部ローラーのみでクルリと舞う様に回避してしまう。

舌打ちしながら追撃を掛けようとすると、相手から通信が入った。

『威勢のいいセリフを吐くのは構わん。だが、とりあえず盾構えてないと死ぬぞ』

ドガガガガ！

『ヒッ！うわっ たっ たっ た！！』

白いゼフィールがレオホーンを構え、内蔵された40mm魔力機銃がマズルフラッシュを出した。

薔薇の方は掃射される40mm魔力機銃からの魔力弾を、ステツプを踏むかのようにして避ける。

40mmとはいえ、魔力機銃は火薬式銃の様な質量兵器と違い重さに左右されない。

弾道は弧を描くことなく真っ直ぐに正確に飛んでくる。性質的には光学兵器に近いのだ。

その正確な射撃を避けるにはある意味卓越した操縦技術が必要とされる。

そう言った意味では薔薇のゼフィールの乗り手は、どうやらかなりの腕を持っているらしい。

だが、ソレと対戦しているもう一方の真っ白な機体は、更以上の次元だった。

『だから盾を構えておけと言ったのに・・・』

溜息が聞えそうな感じの声、なにをと言いつ返し前に白い機体は動く。

白い機体が弾幕を放ちながら、背中や腰部につけられたスラストを作動させたのだ。

爆発的な推進力を得たヴァンツァーが圧倒的な質量を湛えたままで加速する。

『　　ッ！　　』

カウンターと牽制を兼ねてレオホーンを撃つ薔薇のゼフィール。

だが白いゼフィールはまるで射線が見えているかのように、スラストアスターを小刻みに操作して回避した。

連射されている弾幕のスキマを縫うように、ヒラリヒラリと避けつつも距離を詰めてくる。

焦りつつも迎撃した薔薇のゼフィールだが掠らせる事も出来ず接

近を許してしまった。

白いゼフィールは反撃出来ない程の距離で、スラスターを全力噴射させて加速、そして突進した。

しかもローラーと違いスラスターにより通常の倍以上で迫るソレを防ぐ手立ては無い。

ならば避ければいいのだが、既に回避出来る限界を超えていた。

ズガアアアアンツ！！！！

そして衝突、激震、コックピット内に響く機体に異常を知らせる複数の警報音。

揺さぶられる操縦席で、薔薇のゼフィールのパイロットが最後に聞いたのは

『グラモン機、胴体部に直撃、操縦席大破。状況終了します』

シミュレーションの終了を告げる冷静な管制の声だった。

『シミュレーションとはいえ、まだまだ甘い・・・な』

『・・・ありがとうございました』

そう、実はコレ、ただの対戦シミュレーションだったのだ。

ゼフィールは機体の高性能AIと戦術AIとを接続し、仮想戦闘空間を確立する事が出来る。

ソレによって仮想現実による簡易シミュレーター筐体として使用する事が出来るのだ。

勿論練兵場にあつたヴァンツァー・シミュレーター程のミッシェンの様な事は出来ない。

だが、データリンクシステムによる対戦程度なら余裕で出来るのである。

しかも戦闘状況に合わせて四肢のモーターを動かすことで疑似Gも体感出来る素敵仕様だ。

基本的な動作パターンは入っている為その動きも実機同様、ついか実機で仮想訓練だ。

まあ詰るところ、今の今までギーシュは対戦シミュレーターで訓練をしていたのである。

そしてその対戦相手とは誰かと言えば言わずと知れたこの人。

「リン、さっきのスラスターの運用データをAIにフィードバックして」

「了解ですう！」

戦場を駆けるシヨタ魔導師こと、フェン・ラーダーその人だった。

ギーシュはコレで何度目かになるか分からない対戦をフェンに挑み、また負けたのである。

実機に乗り、実戦も経験したというのに何故か黒星一つ上げられない。

自分は強くなってないんじゃないだろうかと内心ぼやき、ギーシュはコックピットから出た。

「ギーシュ中尉、先程の架空演習シミュレーターで盾を構えておけば操縦席直撃は無かったぞ。もっと武装を扱えるようにしないとな」

そして仁王立ちとでも言えはいいのだろうか？

自分の胸の位置よか小さい背丈の子供から、操縦技能にかんする評価を受ける。

いや、もうだいぶ前からこう言うのだからなれたと言えば慣れた。だけど、何回やっても勝てないからドンドン自信が削られていた。僕ってやっぱり、見かけ倒しなのかなあ？そう思いたくもなるだろつ。

「あの教官？」

「あー、この姿の時はフェンで良い。今は教官じゃないからな。どっちかって言ったら技術屋だ」

紛らわしい。

「じゃフェン、さっきのゼフィールに付いていた装置はなんだったんだい？説明だけは受けたし、使い方もある程度わかったけどさ」

シミュレータを受けながら思った疑問を、ギーシュはフェンに聞いて見た。

あのシミュレーターで使ったスラスターユニットとは一体何に使うものなのかというのを。

確かにかなりの突破力を発揮できるだろうが、あのスピードを生かせそうな場面は限られる。

事実、今回のシミュレーターによる模擬戦においてはタツクル程度でしか使えなかった。

「あれ？あれは戦術の増加も理由にあるけど、簡単に言うとヴァンツァーの行動範囲増加テスト」

「行動範囲の増加？スラスターを吹かしたままローラーでも使うのかい？」

「それだと魔力が馬鹿にならないだろ？だけど　リン、ケースフ
アイル・ナンバリング2を」

「ハイですう」

フェンの横に控えていたリングが通信に使われる空間ウィンドウに何やら映像を投影した。

そこには先程のスラスターを装備したヴァンツァーが一体映し出されている。

何やらスラスターの噴出口がキュインキュインと動き、動作確認をしているようだった。

すこしして動作確認が済んだのか、映像の中のヴァンツァーが走り出す。

最初はただローラーで走っているのかと思っていたのだが

「へ？へえッ!？」

ギーシュは驚きで声を上げる。モニターの中でヴァンツァーが“跳んだ”。

スラスターユニットを調節しながら大きなジャンプを決めている。

しかもローラーで走るよりも大分加速しているらしく跳躍した時の高度も伸びていた。

通常ならローラーダッシュでも倍の時間がかかりそうな距離を4分の1に縮められる速さで跳ぶ。

そして徐々に軌道が弧に近くなり、滑空しながら地面へとゆっくりと降りていくヴァンツァー。

最終的にはローラーで着地し、そのまま走り続けていた。そして再度跳躍する。その繰り返し。

そこで見せられた映像は終わっていた。

「結構速いでしょ？この大ジャンプを繰り返すことで航続距離を稼ぐって訳だ。本当なら飛ばしてみたかったんだが、流石に現状では出力がたらなくてな。ま、コレは環境を入れたシミュレーターの映像だけど、理論上可能な筈だ」

「ローラーの摩耗値や脚部の負担を考えたらどっこいどっこいなんですけど、跳んだ方が早く動けるんですう」

「.....」

成程、跳ぶ為のモノだったのか。確かにヴァンツァーは軽くだがジャンプは出来る。

「ただ普通の状態でも、重量制御術式を使って精々自身の背丈程度までだ。」

「だが明らかにシミュレーターの映像とはいえ、かなりの高度にまで跳ぶ事が出来ていた。」

「これなら確かに今よりも早く移動でき、急展開が可能となるだろう。」

「この映像を見せられたギーシュは身体が震えていた。」

「なんて、なんて」

「カッコいい……」

「へ？何か言ったかギーシュ中尉？」

「……中尉はいいよ。どうせココだと見せかけの階級だし。でもそれよりもこれって完成してるの？」

「見せかけて……あのなあ？仮にも小隊を任せられている者の階級だぞ？一応女王にも認められた階級でもあるんだから凄いつて事位自覚しろ。確かに仲間内では良いけど 公式の場ではちゃんとした階級だという事をお忘れなく、ギーシュ中尉殿」

「ぐ、確かに……わかった気をつけるよ」

後半腕組みをしながら真剣な顔で説教をするフェンに言われて、ギーシュはうんと頷いた。

まあ彼の場合、階級は確かにあるのだが整備班の人達には頭が上がないし、A分隊が元々学院の人間で構成されている所為か、微妙にそこら辺の線引きがあいまいなのだ。

ちなみにギーシュ以外のA分隊隊員たちの一応の階級は少尉だったりする。

もっともいまだ学生気分が抜け切れていない部分もあるがそこは仕方ないだろう。

本来なら訓練が終わり次第、騎士隊に配属となった時に下士官となる予定だった。

しかし貴族の出の者が、下士官であるのは見過ごせないという上層部の意向があったのだ。

故に一応騎士隊である彼らの階級は最初から尉官以上とされている。

彼らが自分の階級が結構凄いことに気が付くのは何時の事だろうか 閑話休題。

「さて、質問の答えなんだが……実は完成してたりするのだ」

「さすがにはやいね」

「いや、なんか考え話したら皆が乗って来てな？色々と手伝ってくれたから分隊全機分造れたんだ。当初は実験用に一機作るだけのつもりだったんだがねえ」

思い付いたのがA分隊の初陣のすぐ後、すぐにシミュレートして設計図を作った。

材料は使い終わった降下用バックパックから流用しようと思っていた。

んで、格納庫の片隅を使わせてもらう為に整備の人達に事情を説明したのである。

そしたら一端の技術屋魂に火が付いたのか全員がこのプロジェクトに参加した。

既にメカオタクと化していた連中は更なる新しい機械構造に惚れこんでいた。

オタクからマッドへの昇華が起こった瞬間でもあったのだ。

そしてその後はトントン拍子に話は進んだ。

最初の二日で設計図を完成させ、部品作りのメイジ達がフェンと部品を作る。

平民の整備員達は工具を使い、降下用バックパックをバラして使えそうな部品を確保した。

そしてあれよあれよという間に2台、3台と完成し、一週間経った頃には5機分が完成。

漢たちが汗と涙と血液とその他体液を垂らして作り上げた結晶が格納庫の隅に鎮座していた。

「そんな訳であとはシミュレーターでデータとって、動作プログラムのバグ取りを」

「ぼ、僕がやりたいのだからいいかね!？」

突然大きな声と鼻息を荒くして迫るギーシュに驚きながらも苦笑するフェン。

そしてにつこりと笑いながら「近い」と言って跳躍、金髪を踏みつぶしていた。

野郎に迫られて嬉しい趣味は持っていないのだ彼は。

「まったく、何のためにギーシュ中尉にだけシミュレーターをさせたと思ってるんだ」

フェンの言葉にガバツ！と上半身を浮かせるギーシュくん。

そう、最初からフェンはスラスターユニットのテストをギーシュに任せるつもりだったのだ。

何故だかは不明なのだが、A分隊の中で一番操縦が上手いのがギーシュなのである。

一応キチンとしたデータが欲しい為、そう言った意味でギーシュはテストパイにちょうど良かった。

「てな訳で、バグ取りの為にデータ取りを頼むよ？中尉殿」

「サー！イエツサー！！！」

フェンの言葉に嬉しそうに最敬礼を返したギーシュは自身の機体へと戻って行った。

またシミュレーターモードを使い、スラスターユニットを使うつもりなのだろう。

データ取りが目的だから誰か他の人間がいてくれないとダメなんだがなあと思いつつ

「シエスタ、シエスタ、続けて悪いけど彼の管制を頼めるか？」

「あ、はい。まかせといてください」

先程からエアーだった（ヒデエ）シエスタに声を掛けデータを取ってもらった事にした。

シエスタが管制に入ると、ゼフィールの動きが急激に激しくなっていく。

ゴウンゴウンと限界一杯に……どんな機動をさせてるんだろうか？

「さて、リン行くぞ」

「ハイですう」

とりあえずソレをも届けて、フェンはリンを引き連れハンガーか

ら離れた。

彼がしている仕事はなにも新装備のデータ取りだけでは無いのだ。技術屋であるが、教官でもあるし、実戦経験の乏しい部隊の実質上の指揮官でもある。

いずれ交代するとはいえ、それでも現行の指揮官である事に変わりは無い為……。

「……………はあ、何でまた俺が書類整理？」

『たいちよーの宿命って奴じゃないですか？』

「リンも及ばずながらお手伝いするですっ！」

「……………リンはやさしいねえ」

リンの心の優しさに感動し、ぽふんと手をリンの頭に乘せてグワシグワシを撫でる。

あう……………と言いつつも気持ちよさそうに目を細めるリン。

遠目から見れば何この仲睦まじい兄妹はと突っ込みが入りそうだ。

もしくは、ヌコの姿を幻視する者が現れるかもしれない位、リン

は気持ちよさそうだった。

ちなみにヴィズは内心砂糖を吐いている。

尚、余談だが、後になってフェンはギーシュが小隊の隊長していることに気が付いた。

どうせだから部隊運用以外の雑務執務も全部仕込んでしまおう。

てなわけで、シミュレーターが終了してへとへのギーシュを連行するフェン。

そして隊長室にされている部屋からギーシュの怨嗟な声が響きわたり、エクリプスのクルーがおびえる事になるのだが……。

今日もある意味エクリプスはおおむね平和であった。戦争中だけ。

S i d e o u t

S i d e f e n

さて、ギーシュ君をいじめて憂さを晴らしたところで近況報告をしよう。

俺達がロサイスを制圧してから、かれこれ1週間が経過してしまっただ。

経過してしまったというのは、実はこの間敵との戦闘は全くと言っていいほど無かったのだ。

お陰で新装備の開発は進んでいるが、使う機会が無けりや意味がねえ。

ウチの総司令官含む連合軍將軍陣は、ロサイス周辺に陣を整えて港町を完全な拠点とした。

そして準備万端でロサイスを奪還しようとするアルビオン軍を迎え撃つ。

当初の目的ではそう言う風に考えていたらしい。

だが蓋をあけてみれば、アルビオン軍はもう一つの軍港グータルネスから早々と撤退。

そのまま首都であるロンディニウムに立てこもってしまったのだ。

ま、アレですよ。こちらは侵攻してきている軍な訳ですよ？

この地で兵糧を確保できる地盤なんて無いから本国から取り寄せている訳だ。

輸送船で運ばないといけないから、それだけでも膨大な金が必要になって来る。

故に長期戦になればなるほど、異国に侵攻している軍には不利になるってな訳だ。

数にして6万も居る軍勢だぜ？その食糧の消費量は1日でも半端無い。

それが1週間も戦闘が無かったとはいえ放置である。

そして軍需物資は現在ある分だと4週間程度しか持たないらしい。

節約すればいいだろうが、そこら辺の観点が抜け落ちているから無理だろう。

無駄に金だけが消えていく事態に、將軍達はそろそろ焦り始めていた。

もともと、新参の水精靈騎士隊が口を挟むことなんて出来やしねえ。

俺達は駒として見られている為か会議に呼ばれる事も無いからあの意味気楽だ。

そんな訳でなるようになる、ケセラセラに身をゆだねるしか無か

った。

さて、そんな感じになっている現在のロサイスの一角にエクリプスは停泊していた。

普通空船は空中に停泊させておくモノのだが、エクリプスはヴァンツァー母艦である。

その運用上、地上に着地出来るという事が必然なのだ。

そんな訳で命令が下ればヴァンツァーが発進できるように、現在は地上に停泊している。

とはいえ、ココに来てからまったく出勤する機会なんてなかったくねえ。

パイロットたちは定期的に哨戒に出ているからいいが、俺らは全く籠りっぱなしだから辛い。

だから一応休みを均等に割り振り、時たま外に出て散歩する事にしたのだった。

そうでもしないとストレスで変になっちまいそうだったしな。

特に俺の場合は新設部隊だから書類が、書類が・・・止めよう
非建設的な話は。

さて、とりあえず休みを？ぎ取った俺は、適当に陣の中を歩いて
いた。

勿論リンとヴィズも一緒である。

見た目が子供なので、すれ違う傭兵達から変な目で見られるが特
に気にしない。

せっかく久々にフネから出て来れたのだから、ちよっぴり機嫌が
良いのである。

「はあゝ、息が白いですう」

「もうすぐ降臨際、この世界における“元日”になるらしいからな。
時期的には冬だ」

『（リン、マスターの近くに寄りなさい。いまテンプレコントロール
で気温を調整しますから）』

そう言つと若干周りが暖かくなる。テンプコントロール、BJに付随する機能の応用だ。

周辺に薄い結界を張り、結界内の空気を操って気温を操作する魔法である。

お陰で俺の近くはやや暖かな感じになっていた。うん、寒くない嬉しいね。

「主殿暖かいですう〜」

「こゝ、こゝら！抱きつくな」

「えゝゝ、寒いのいやですう〜」

いや、ギョツとしてくるのは良いんだがね？周りの目がなんつか……。

ああ！止めて！そんな微笑ましいモノを見る目で見ないでー！！

『（何を今更……）』

「やかましいー！」

「ふえっ!?!」

「ああイヤ・・・リンの事じゃない」

ああ、だからそんな微笑ましい(r y

大事なことから二度言った。さてこんな感じでじゃれつかれながら歩いていた。

すると向うの方で人だかりが出来ているのが見えた。なんだろうか？

なんとなくやじ馬根性で、人だかりの方へと向かった俺だった。

.....

.....

.....

さて、ちょっとした人だかりに近づくと、周りの連中が話してい

ることが聞えて来た。

どうやら行方不明だった竜騎士隊が全員帰還したという事らしい。

しかも行方不明になった時期があそのロサイス侵攻の際の空中戦だ
というのだから驚きだ。

その竜騎士たちは一週間近くも行方不明だった計算になる訳であ
る。

成程、奇跡の生還なら人だけが出来て当然だった訳だ。

とはいえ、その人だけの所為で天幕に近づけないので少し待っ
ていた。

上官らしき人間が来ると蜂の子を散らす用に周りの人間が少しず
つ減っていく。

なんとか通り抜けられる段階になって、俺はやじ馬根性で近寄っ
たのだが

「さ、サイトさん……やっぱり貴方はその手の人だったのか……
？」

竜騎士を統括する幕僚の天幕から出て来たのはサイトやその他大
勢。

そして出た途端、生還した竜騎士の一人に熱い抱擁をしているサイトが、そこに居た。

正直ドン引きである、いやー！近寄らんといてー！って感じた。

「え？フェンか！久しぶりだなあ！　　ってコレは生還が嬉しかったからで！」

「えー、うん。まあ、そういう事にしておきます。えーと、ほどほどにね？」

「違う！お前絶対勘違いしている！」

「H A H A H A、大丈夫、そういう人もいますよ。差別はしませんって」

「じゃあ何で離れていくのかなあフェンよ？」

「差別はしませんけど、知り合いだと思われたくないんで・・・」

「それを差別って言うんじゃないー！！」

どうやら騒ぎの中心に居たのはルイズ嬢御一行だったらしい。

唐突に始まる俺らのコントに、ルイズ嬢はまたかといった感じで

頭を抱えていた。

他は突然のコントの為、どうすればいいのかわからず固まっ
ている。

んで、これまた突然におひさー、ひさしぶりーとほのぼのと挨拶
をする俺らを見てズッコケた。

やれやれ、急展開だからって乗り遅れると辛いぞ？

「まあとりあえずだ　ルイズ嬢、お久しぶりです」

「ええ、久しぶりねフェン。かれこれ1カ月くらいかしら？」

「大体その位です。女王陛下に言われた“仕事”の為にココまで出
張って来ました。今は水精霊騎士隊で教官役兼技術屋＋囑託の現場
指揮官をしています」

「へえ、頑張ってるじゃないの・・・それに相変わらず多芸ね」

てな訳で久々にあったルイズ嬢にもご挨拶。

流石に主従関係はもう結んではいないのでご主人様とは呼ばない
ぜ。^{マスター}

「あのー、出来ればその娘？子？・・・が誰なのかを教えてくださいんだけどなあ」

「おお悪い。コイツはフェン、以前俺達と一緒にいた仲間だ」

「初めまして、水精霊騎士隊所属、フェン・リーダーです」

「第二竜騎士隊中隊長のルナ・フォンクだ。よろしく」

とりあえずサイトが俺を紹介したから自らも自己紹介を行う。

敬礼でやったら若干ふとっちょのルナ中隊長も敬礼で返してきた。

どうやらコイツは末端の貴族ながらも、ちゃんとした軍教育を受けた人間らしいな。

「さて、自己紹介もほどほどにして今日は呑もうぜ！生還祝いだ！フェンも来るだろう？」

「あー、実は休憩時間が決められてまして・・・」

「えー！良いじゃんかよ久々の再開も兼ねてんだぜ？　ってなわけだ」

ガバ

「へ？」

「お前も連行だー！」

「ちょ！ちよつとサイトさん?!」

俺はサイトに担ぎあげられて、何故かにけ出すことが出来ずそのまま連行されてしまった。

最初こそ抵抗して見せたけど抜けられないとわかった辺りで諦めた。

つーかりんよ、見てないで助けてちょ。え？無理？そんなー。

さて、そんな訳で第二竜騎士隊の面々の生還を祝して、ルイズ嬢の天幕で宴会が始まった。

連行された俺はまだ時間に余裕があった為、適当に陣取ってリンと共に宴会を傍観していた。

まあ全員若いからさ？生きて帰れたのが嬉しいのか、すぐに酔っぱらっていた。

ちなみにルイズ嬢はサイトの膝の上でお休み中、先程まで結構騒いでいたからだろう。

なんじゃかんじゃで彼女は優しいから、その顔は終始笑顔だったがね。

ちなみに酒の席での話で、サイトが心配していたことをルネはキリが無い事だと笑っていた。

戦争中だからなあ、M I AやK I Aはよくある話だから、まあそうだろうと俺は納得していた。

そこら辺サイトも一応叩きこんでいたから、落ち込んでいる様子は無かったがね。

純粹に生きて帰って来てくれてうれしかったって所だろうさ。

そんなこんなで騒いでいる連中を横目に、天幕の外を見ると夕方になりつつあった。

そろそろ戻らないと不味い、訓練の時間に教官が遅れる訳にもいかないのだ。

そこら辺を説明すると若干残念がられたが、なんとか説得する事が出来た。

とりあえず酔っぱらいはウゼエ、つかサイトテメエ飲み過ぎじゃ。

んで、間違ってお酒を飲んでしまい眠っちまったリンを背中に担いで天幕を後にする。

戦場で生き残ることは容易いことではない、魔法使い同士の戦争ならなおさらだ。

何せ魔法使い一人で戦略級兵器と同義だからな。

「ジュツ　　すー、ふはあく・・・連中、死ななきゃいいな」

『気の良い子供たちでした』

煙管を取り出して薬草煙を吸いながらそう呟いた。

貴族とはいえ下級貴族の彼らは気のいい連中だった。

神に祈るほどのモンを持ち合わせちゃいねえが、死なないでほし
いと祈りたいね。

「大人がもつとしっかりせにゃな」

『あれあれ？マスターは一応7〜8歳では？』

「考えてみれば俺はこんななりで38歳くらいなんだよ。時間を超えた分を加算すると・・・」

『な、なんとというシヨタおじさん・・・』

「シヨタおじん言うな」

前世の分合わせるともつと何だが・・・言わんくても良いか。

「3週間はもっとヒマじゃ。いや暇でも無かったか」(前書き)

*妄想中、デムパよ来い！ソレが嫌な方は(r y

「3週間はもっとヒマじゃ。いや暇でも無かったか」

「3週間はもっとヒマじゃ。いや暇でも無かったか」

妄想戦記

よう、俺だ。転生者のフェン・リーダーだ。

あれから数日が経った訳だが、現在俺らは何処に居るかっていうと。

古都シティオブサウスゴータの近く、そこから30kmも離れていない砦の近くに居たりする。

まあ正確には砦の近くというよりかは

「ネレイド各機、交戦開始しました。敵戦力砦の外に集結中」

「了解した。連中には引きつけて置くように伝えてくれ。こっちはこっちでやるからな」

「了解しました」

その砦から1リーグ離れた地点に居たりするんだがね。

あれから数日が経ち、將軍たちは首都ロンディニウムへと攻勢に出ることを決定した。

しかし如何せん、その道のりには沢山の砦や要塞が沢山ある訳だ。

現在制空権はこちらにある、だから空輸すればすぐに本陣を叩けることだろう。

だが、そうなるその後方に残された砦からの援軍が怖い。

電撃戦で首都を制圧出来るならいいが、制圧が出来なかった場合挟み打ちの状態になる。

そんなリスクは冒したくは無い、だが早めに制圧してしまいたい。

そしてそんな我がままな上層部が下した決断は、俺達水精靈騎士隊の導入だった。

初陣であるにも関わらず、誰ひとり欠けることなく6体のトロール鬼を葬った俺達。

普通の部隊がトロール鬼を相手にしたらキルレシオはトロール鬼の方が大きい。

なのに俺達は特に苦戦した様子も無く、トロール鬼を全部倒してしまったのだ。

つまりそれ程の力があると軍上層部に知られてしまったのである。

そして連中は俺達に首都侵攻の際に邪魔になる要塞群の撃破を命じた。

ソレは俺達の力を信じての事では無い、要は捨て駒として見られたのである。

どうせアルビオンに点在する要塞を全部攻略するのに割けられる程の戦力は無い。

ならば少数先鋭で強力な兵器を運用する女王直属の俺達を当てたのだ。

成功したならいい、邪魔な砦を破壊して補給線を確保できるのだから。

失敗したとしても少数部隊が先走ったとでも報告するつもりだろう。

この世界には俺達を除いてリアルタイムでの通信を行えるモノが

無い。

あつてフクロウが郵便と届けるヤツなんだから、情報の伝達が非常に遅いのだ。

だから失敗したとしても、その事実は簡単にもみ消せると考えたのかもな。

まあそんな訳で俺達は制圧部隊として回されたド・ヴィヌイーユ大隊を引き連れて、大隊を乗せる輸送船と共に皆へと進軍しているって訳だ。

「船長、大隊を乗せた輸送艦を降下させて大隊を展開するよう信号を送ってくれ」

『アイアイサー』

伝声官を使い、エクリプスのブリッジに連絡する。

こちらは通信機を持ってはいるが、あくまで部隊内のみでしか運用していない。

残念なことに現在付いて来ている大隊を乗せた輸送船に通信機は無いのだ。

置きたくても通信機を扱える人間がいなし壊されても嫌だしな。

そんな訳で、彼らの指示は昔ながらの発光信号及び手旗信号だ。

地上部隊には新型ゴーレムの周りに展開しないようには通達している。

いじわるとかじゃなくて、そうしないと踏みつぶす可能性もあるから危険なのだ。

案外足元の視界が悪いのが欠点なんだよな。アレ。

「ネレイド隊、敵バリスタの猛攻を受けています。現在シールドを展開して耐えています。防御結界耐久値がドンドン削られていきます」

「ワルキューレ二式に搭載したヤツの正式仕様だったんだが、流石に敵の量が多いか・・・救援要請は？」

「今の所は『こちらネレイド1！敵の攻撃が激しい！支援砲撃を要請する！座標は転送した！』　だそうですフェンくん・・・いえ、ワイズ司令官」

「そうか、なら一丁行って来るか。ココは任せるが」

「あやや、異常があればすぐ知らせれば良いですね。了解です」

「早いとこ行ってあげなよ、たいちよーさん？連中が持ちそうにな

いからね」

「ちよつとシア！キノ！今は作戦中なんだから！」

「堅いなあシエスタは」

「多少はこういふ風でも許されるんですよ。今は非公式の場ですからね」

「……ま、キチンとした場ではキチンとしてくれればいい。それじゃココは頼んだよ？お三方」

「……ッ！了解ッ！」「」

敬礼をしてくる3人に敬礼を返しながら、エクリプスの管制室を
でた。

途中で変身魔法を解除し、そのまま走って甲板へと飛び出した。

甲板の少し開けた部分に到達した俺は、ヴィズと既に融合状態の
リンに声をかける。

「さて、俺達の出番だ。BA？展開。ユニゾン機能スタート」

『了解、BA？を展開します！』

【了解ですう！】

そして俺は全身を白銀の強化外骨格へと覆い隠す。

これこそ俺の持つ技術の集大成であり、もてる魔法技術の粋を集めた代物。

さて、支援砲撃の要請が来ているんだ。考え事はここまでにしよ
う。

「座標確認、最適術式、レールブラスターによる狙撃とガルヴァド
ス」

『格納領域よりグロウタスクを取り出します』

【ガルヴァドスファイア形成開始、圧縮弾頭形成しますう】

さあ、見せてやろうか・・・USN式魔導師の持つ力というモノ
を・・・。

S i d e o u t

S i d e ギ ー シ ュ

『ネ、ネレイド1！支援はまだなのかい！』

「ネレイド2、落ちつけ。僕たちは支援砲撃が来るまで陣形を維持するんだ」

『こちらネレイド4、防^{シールド}御結界の耐久値が不味いんだが・・・』

『レインールもか？こっちもだぜ』

『ネレイド3、フーかギムリ、相手の事はちゃんとコールサインで呼べ』

『頭堅いツスなあ、ネレイド5は』

『あとで教官に怒られるのはゴメンだからな』

『それもそうか』

『『あっははは』』

「ネレイド3、ネレイド5！今は戦闘中だ！私語をするな！」

僕は多少イラつきながらも、ソレを抑えて通信を送るがすこし語尾が荒くなるのは仕方が無い。

まったく戦闘中なのに微妙に軽いというか何と言うか、ある意味丹力が付いたのか？

さつきから集中砲火を浴びて動けないし、しかもドンドン防御結界発生装置の耐久値が削られているというのに……。

『ネレイド1、そんなに怒鳴るなよ。どうせ今は動けないんだ。避けるので精いっぱいだ』

『そう言う事だ。支援砲撃が来るまで耐えるしかないだろう？』

「……すまない、すこし熱くなっていた。通信終わる」

ふう、冷静になるべき小隊長の僕が厚くなりすぎてどうすんだろ
う。

冷静にならないと、頭は冷たく心は熱くってね……。

僕が冷静な判断を失えば、小隊が壊滅してしまう可能性がある。

ソレだけは嫌だ。

そんな訳で回避に専念する為、思考をそちらに傾けようとする
通信が入ってきた。

『ネレイド各機、こちらネレイドマム。支援砲撃の準備完了、支援
砲撃開始します』

「ネレイド了解、各機聞いた通りだ。密集隊形、衝撃に備えよ」

僕はネレイドマムから指示が入ると同時に全機に集合を掛ける。

え？なんで衝撃に備えよって言うのかって？

それは・・・

ピーッ！

『・・・来た』

一定以上の魔力に反応するセンサーが警告音を発する。

ソレを聞いた僕らはすぐに回避を止め、ゼフィールの四肢を固定し、衝撃に備えた。

少ししてキュルキュルキュルと行った、風切り音の様な音が耳に入る。

ソナーセンスを通じてHMDヘッドギアに外の音が入るようになっていたからだ。

そしてHMDの魔力反応を映すマップ部分を見ると

「……うわっ、真っ白」

思わずそう呟いてしまいたくなるほど、マップが塗り替えられていた。

『 3、2、1……命中します』

着弾、轟音、そして操縦席のアブソーバーですら殺しきれない振動が僕らを襲う。

HMDには周りを明るく照らす魔力光の爆発が映り、正直生きた

心地がしない。

１リーグは離れているというのに、爆風と衝撃波が機体をグワングワン揺らしているのだ。

幾ら装甲に守られているとはいえ、一歩外に出ればそこは魔力吹き荒れる地獄とか怖過ぎる。

しかし、見た目もさることながら、それ以上に威力が絶大であることを、僕らは知っている。

僕らを狙っていたオーク鬼達がいた城壁は、すでに完膚無きまでに爆炎に包まれていた。

火に掛けられた鉄板と言えはいいか、一部は爆発の衝撃に耐えきれず、崩落していく箇所もある。

崩れ落ちる城壁と共に落下していく亜人と人間がゼフィールの視界にはつきりと写っていた。

だが、更に追い打ちをかけるかの如く、一条の光が遠くの空から飛来する。

光はまだ息があるのか立ち上がろうとしたトロールやオーク鬼を次々と貫いた。

マジックアローやマジックミサイルの何倍、いやさ何百倍の威力があるであろう魔法。

超長距離から飛来する閃光が亜人達を貫き、生き残っていた人間の戦意を消失させていく。

圧倒的な殲滅、圧倒的な殺戮とも呼べるソレを見た僕らは無言となっていた。

別に敵が衰れであるとか、やり過ぎであると言ったような感じとかじゃ無い。

むしろ、ソレを当然だと受け入れてしまっている自分たちに戸惑いを覚えていた。

だが、例え自分の変化に混乱していたとしても今は戦闘中。

責務を果たさなくてはならない、僕は通信機を使い報告を入れた。

「こちらネレイド1、着弾効果確認、脅威目標の殲滅を確認した。支援を感謝する」

『了解、支援砲撃を解除します。間もなく歩兵大隊も到着しますので、彼らの援護もお願いします』

「了解、通信終わる」

ふと視界を向ければ、輸送船から降りてくる歩兵たちの姿が映る。鎧を纏い剣や槍や火縄銃マッチロックガンを担いでいる所を見ると、恐らくは傭兵達だろう。

水精霊騎士隊に配属されなければ、僕は彼らのような者たちと戦場を駆けていたのだろうか。

まあ騎士隊じゃなければ予備士官でしか無いから、功績なんて上げられないだろうけどね。

「各機、制圧部隊が到着した。奴らのケツを守るぞ。全機散開」

『了解！』×4

こうしてまた皆が一つ落される事になる。歩兵を皆まで守ってやれば彼らが後をやってくれる。

偶に現れる生き残りの亜人は僕らが倒し、人間は歩兵たちが“処理”を行うのだ。

・・・戦争ってヤダな。ドンドン心がすさんでいくよ。

敵の事を“処理”とか・・・馬鹿げてるよ。

「……莫迦らしい。戦争なんて下らない」

僕はそう呟きながら、シティオブサウスゴータ周辺の最後の砦を落とした所を見届けた。

名誉が貴族の命、名誉があるからこそ貴族、だけど……
さ。だけど

人の血に染まった名誉に……何の価値があるんだろうか？

戦場を経るごとに、僕の中でその疑問が大きくなりそうで怖い。

貴族としての根底を揺るがしそうで、怖い。

僕は考えを振り切るかの如く、部隊を撤収させエクリプスへと帰還した。

そして待ち構えていたフェンに捕まり、執務室へ放り込まれた。世界は理不尽だ。

S i d e F e n

さて、ギーシュ君に部隊運用の為の書類整理といったもんを教えている内に一週間経過。

更に色々あつて1週間+し、計算上は上陸して3週間が経過したという事になる。

若干ギーシュに陰りが見えた為、ワザと書類整理という仕事を与えて考えるヒマを無くした。

考えることは悪いことではない、だけどソレは平時であつてしかるべきなのだ。

残念ながら現在は戦争中、下手に考え事を持っていると死ぬことになる。

臆病？臆病で結構。死んだ者は何も語らないし考えられないんだ。

そうならない様にするのも俺の務めだよ。

「……とはいえ、コレ以上の連戦は不味い……」

さて、シティオブサウスゴータへの侵攻作戦が既に終わった。

あん？俺らは何していたかって？いつもと変わらず友軍の先頭に立って戦ったよ。

今回は俺も参加して、街中で市街戦をやりまくった。

建物に亜人が潜んでいるらしかったが、その位置は丸解りだったんだぜ。

ソレは何故か？滑稽な話ではあるが、なんと敵国の市民達が協力してくれたのだ。

何でもアルビオン軍は町から食糧を全て引き上げていたらしい。

つまり連合軍の足止め作戦な訳だな。飢える市民を見捨てる訳にもいかない。

まあそんな訳で一般市民からは大分恨みを買っていたアルビオン軍。

亜人の潜む建物は次々とシティオブサウスゴータに住む市民たち

に暴露された。

後はその建物を制圧していけばいいルーチンワークだ。

久々に暴れられると思ってたんだがなあ。ヴァンツァーじゃ市街戦無理だしな。

仕方ないのでガルヴァドスの単発版、ガルヴァドス・グロウで木端微塵にしてやった。

簡単に言えば手榴弾みたいなもんを亜人潜む建物にドアの隙間から放り込んだだけ。

ソレだけで大抵の建物は制圧出来ちまったから・・・暴れた気がしない。

うっ、書類整理のストレス発散位出来ると思ってたのに・・・。

まあソレはさて置き、水精霊騎士隊も城壁を崩す為に参加し功績を上げた。

だけどまあそんな時にギーシュがなあ・・・ヴァンツァーで空を舞って戦ったあな。

以前つけたスラストユニットを利用して、アイツ空中にとどまってる圏をやりやがった。

バリスタや大砲や魔法を空中でヒラリヒラリとつかクネクネ？

まあ何ていうか“変態的”な動きとでも言えばいいのか？そんな動きで動いていた。

つか、ヴァンツァーで宙返り程度はまだいい。

バレルロールやら側転からのバック転への連携とか何処で習った？

我流だとしたら・・・ああ、完全に変態だぜ。

「・・・ジエフリー、コレ全部か？」

「だましましたし整備してきましたがね。コレ以上は部品が無いとむりだぜ」

さて、大分話がそれたが、俺はいまエクリプスのヴァンツァー格納庫に来ている。

他の人間は全員シテイオブサウスゴータの解放宣言に言っちまって殆ど残っていない。

ギーシュ達A分隊も一応お呼ばれしているらしく、解放宣言に出席中だ。

大方勲章でも貰えるんじゃないか？大分皆落としやら頑張ったモンな。

「他の土メイジ達は？」

「連戦による連戦で精神力が付き果てて医務室送り、部品作りじゃないそうさ。何せ全員機体を限界まで分回すからなあ。メカニックとしては頭が痛い」

「……すまんジェフリー。そうなるように教えたのは俺だ」

「生きて帰って来てくれればソレで良いが、流石になあ……てな訳で頼む」

「……しょうがないか」

俺は簡易錬金用ストレージデバイス・ヘルメスを格納領域からヒョイツと取り出した。

「いやはや、破損や故障とかで部品が不足する事態は想定していたけど、まさか」

「動かし過ぎの消耗で部品が足りなくなるなんてなあ……錬金開始」

ゼフィールは機動兵器だ。通常の陸戦兵器と違い四肢が付いている。

そして特に脚部に負担が集中するのだから、整備する側としては堪ったもんじゃない。

ローラーには泥が入り込むし、時たま血肉も入りこむ。

関節部には固定化及び硬化魔法で強化してあるといえ、完全なモノでは無い。

普通の機械に比べたら摩耗率は恐ろしく低い値にある事だろう。

だけど、やっぱりで誤魔化しているだけで、物質としての限界は来ちまうんだなあ。

。そろそろ使つとくか？修復用ナノマシン『試作XA-205FO』

ヴィズに使われている軍部が依頼し父上が作った試作修復用ナノマシン。

魔力さえあればいくらでも修復が可能な、メンテナンスフリーを可能に出来る極小機械。

魔導炉の魔力量なら、文字通りFMのリペアパックの再現が！

……それなんてチート？

「ふう、これで修復分は錬金出来た」

「ほい、ご苦労さん。ほいだば、次はコイツな」

「……コレだけじゃないの？」

「だれがコレだけって言った？まだまだあるぞ？」

ですよねー。俺は滝の様な冷や汗を流しつつも錬金を掛けまくる。

多少のアラはデバイスがサポートしてくれる。後は大魔力でこり押し。

そうすれば大抵のもんは錬金可能となるのじゃ……すっげえ疲れっけどな。

そんな訳で俺は休むことなく、その日を部品作りで費やした。

機械油にまみれるのは嫌いじゃないから別に良い。

機械いじりだつて嫌いじゃねえ……だけど、流石に死にそうだったぜ。

「3週間はもっとヒマじゃ。いや暇でも無かったか」（後書き）

*さて後少しでアルビオン戦役が終わる。そしてフェンの放浪もな。

「戦争の中の平和な一時」

「戦争の中の平和な一時」

妄想戦記

「で、悩みって何？」

「いや実は・・・そのな？」

「出来れば早く要件を離してほしい。こちらはヒマじゃない」

休戦になったつつつても、仕事が減らなくてイライラしてるつつのに・・・。

あー！そこ！両腕のアクチュエーターのギア比は3 / 2.5だって！
で？要件はなんじゃ！早いとこ話せコラ。

「実はさフェン・・・睡眠薬って持って無いか？」

「・・・・・・・・俺は魔導師だけど薬屋じゃないですよ？」

「だよなあ。いやまあすまねええ「有るにはあるんですがね」
って、あるのかよー！」

そりやもってますよー、色々とこの世界の魔法の事知りたくて魔法薬にも手出したし。

睡眠薬は練習用に作っちゃったぜい！

「でも何でまた睡眠薬が？・・・まさかルイズ嬢を眠らせて毒牙に」

「ちげえよ。間違ってもそんな勇氣は俺にはねえ」

「でしょうね」

「おい」

「まあそれは置いておいて、実際なんているんですか？」

「・・・最近眠れねえんだよ。なんか手についた感覚がな」

「あー、成程。それはそれは・・・」

大方戦った時の感触が離れないって所か・・・まあ一時的な対症療法でしか無いが・・・。

「良いですよ。分けましょう。結構強力な薬ですから処方には気を付けて」

「おう、あんがとさん・・・所で強力ってどんくらい？」

「・・・永眠出来る程度には」

「まで」

「いや、本当に眠るだけですよ？」

「それって死ぬんじゃないの？」

「仮死状態に近くなりますから、点滴さえしてもらえれば数十年は

「

「ごめん、聞いた俺が悪かった」

さうぞ。

「そいじゃ・・・はい」

「おうあんがと　　ってフェン、お前今どこから」

「格納領域の圧縮空間からですがなにか？」

「・・・いや、いい。フェンが四次元ポケットもってんのは理解した」

「だれが青狸か」

「言つてねえよ。それじゃありがとなフェン」

「はいはい、本当にくれぐれも処方の間違えない様に。それじゃお大事にサイトさん」

「お医者かよ。じゃあな」

.....

.....

.....

「　　エンくん、フェンくん！」

「・・・んあ？」

「ああ、やっと起きた。もうすぐ目的地だって」

どうやら眠っていたらしい。あれは確か6日前くらいにサイトとかわした会話だったか。

戦争に出る者は不眠症を患いやすい、だから睡眠薬をサイトに渡してやった時の夢。

「起しにきてくれたんだ。ありがとうシエスタ」

「ふふ、別に良いわ。いいモノも見れたしね」

「???なんの」

む、身体が重いぞ。何でだろうか?そう思い上体を少しひねってみた。

ふと見ればお腹の上に黒いっばい何かが見える。

よくわからんがコレが身体が重たい原因だろうと、それに触れてみた。

なんぞやわっこくくてプニプニしますぞ?

「!むきゅゝ・・はあう」

触っていると何処からか聞いたことがある声が耳に入る。こ、この呑気な声は!

「えへへ・・・あゝるじ〜ど〜」

リンが乗っかっているってのか・・・道理で身体が重たい訳だぜ。触れた手はどうやら彼女の頭の部分を撫でる形になったらしい。どうやら俺が仮眠をとっている時に潜りこんできた様だ。

彼女のベッドはオペレーター三人衆の強い要望（脅迫とも言う）によって三人衆の部屋にある。

だからパイロットや男衆がいる区画とは一応離れているんだが・・・。

やっぱりはやて達と離れ離れだし寂しいんかな？ スキンシップは増やすべきだろうか？

でも今はそれよりも、俺の腹を浸食している彼女の口から、えへへといった感じで出てきている幸せそうな液体を拭きたいんだが・・・。

ま、最近スキンシップが足りなかったのは事実だしな。とりあえず撫でておきますかね。ナデナデと・・・。

「・・・ハッ!?」

「ふふふ、仲がいいわね。ま、とにかく起きたならブリーフィング室にいきましょう?」

「・・・アイマム」

もう一人部屋に居ましたね。正直、スツゲエ恥ずかしいです。

どうにも俺の気配察知能力が低下している様な気がする。

でもまあ相手はリンやシエスタといった気を許した相手だからま

「だいいい……のか？」

「リン、起きて。もう行くよ」

「ふにゅ〜、やあ」

「いや、やーじゃなくてね」

「……ぬくぬく（すりすり）」

「はうあ」

す、好かれていると思えばいいんだろうが……。
突然のスリスリ攻撃には、さすがのオイラも変な声をだしちまっ
たぜ。

口の気もぺの気も無いから別に良いんだが、いい加減重たい。

「……」

「なにか？」

「いえ、本当に兄妹みたいで。髪も黒いし」

「そ、そうか？」

「うん、私の髪も黒いけど、フェン君達は漆黒って感じで綺麗よね。
でもそろそろ甘えっ子さんは起した方がいいんじゃないかしら？」

「つぐ」

み、見られてると思うとすこぶる恥ずかしい・・・
だから早く起きてくれー！リンー！

「やあ」

「・・・むぐう」

.....

.....

.....

さて、目覚めに起こった恥ずかしいハプニングは置いておく事にしよう。

ま、あれだ。元旦で休戦の筈なのに俺達が外に飛びまわっているのはなぜ？

逃げだした亜人部隊の追撃任務らしいぜ、表向きは。そ、表向きはそうなんだ。

実際はあまりにも功績を上げていく俺らに恐怖した將軍陣が遠ざ

けたかっただけ。

ポワチエさんも元帥の称号が掛ってるからなあ。必死にもなるだろうさ。

そう来るだろうなあって予想してたから特に混乱は無いけどな。

そんな訳でシティオブサウスゴータを出立し、俺らは一路山岳部近くの平野にきている。

まあ実際追撃何ぞしなくても、既に戦意を失った連中が山に戻るのを確認するだけだ。

トロール鬼やオグル鬼は高地に生息する亜人種だからな。

流石に住処に戻るだけのヤツを全滅させるほど、狭義じゃねえぜ？

で、結局任務はものすごく早く終了する事になる。

トロール達は引き返したりすることなく、既に銀色になった連峰へと消えていった。

実質何で殺戮を好むだけのトロール達がメイジごときに従っていたのかがわかん。

この世界の水魔法にはギアスとかいう相手の行動を制御する魔法が存在するらしい。

案外それと似た様な魔法で操られてたのかもな。あいつ等単純そうだし。

憶測を述べるのは間違った真実を信じやすくなる為、あまりしてはいけない。

だが他に考え付かんしなあ、大方間違ってる無いかも知れねえな。

最終的に俺がサーチャーを打ち上げて、ヴィズのセンサー群も使

って調べた。

24時間使ったけど、結局連中が引き返して戻ってくる気配はまったく感じなかった。

「……なんつーか、ココまで来る意味はあったんだろうか？」

『まあ上からの命令ですから足蹴にする訳にもいきませんから』

甲板の上で一人黄昏中、いやヴィズがいるから一人では無いか。ちなみに現在エクリップス甲板上の気温は氷点下20 程度位だったりする。

今の高度が3000m近い浮島+2000m、現在5000mの高度を飛行しているのと変わらん。

おまけにフネ全体に現在霜が降りている状態だ。

誰も外に出ようは思わないから一人になりたい時はちょうど良い。気温をコントロールしてやればいいからな。魔法万歳。

「スゥ、フハアー……おお、でけえ煙」

『また煙管ですか？幾ら薬草でも吸い過ぎは良くないですよ？毒と薬は紙一重なんですから』

「しかしなあ、こつ見えて結構な心労があつてだな？コレが無いとやっつてらんねえんだよ」

あれ？禁煙できないお父さんみたいな良い訳じゃね？　なにそれこわい。

『まあ、常に体調は私が簡易チェックしてますけど、異常が出たら煙管に頼らないで休んでくださいよ。リンカーコアの変調は流石に私の機能では正確な事は解りませんから』

「ん、気いつける・・・しかし、吹雪いてきたな」

『銀世界と言えば聞こえは良いんですけど、どちらかと言えばブリザードですね。極地とかで見られる凍る風に似ています』

俺は手すりに身体を預けている状態なのだが、手すりの向う側の景色はまさにブリザード。

3m先も見えない位雪が吹き荒れている状態だ。山の上なら遭難間違い無し。

とはいえ船乗りの風メイジとなると、風の流動を感じ取れるからこの程度の吹雪は問題無いらしいってのが凄いですね。

「・・・？おお、スゲエな。エクリプスも白くなっちゃった」

『雪が船体表面に付着して氷始めていますね。マストとか舵の部分は凍っていないみたいですけど』

「そりゃ空船の生命線が凍ったら墮ちるだろ。対策は施してあるんだろっさ」

アルビオン大陸は空に浮かぶ島であることは知っているだろうか。もともと空中に浮かんでいるって言う環境の所為か、気象の変化が著しいらしい。

この時期になると昨日は春だったのに次の日は真冬なんて良くあるんだそうなの。

下手に野宿したら凍死とかイヤ過ぎるな。いやホント。

『でも、ちよつと綺麗ですよ。なんか御伽噺に出てくる氷の女王のフネって感じで』

「・・・お前意外とロマンチストだったんだな。俺ビックリだ」

『失礼な。私はタダのデバイスとは違うんですからね』

「そりゃまあそうだが・・・」

何処の世界に雪の情景を見て御伽噺を連想するデバイスがいるんだろつかね。

俺も規格外と思うが、その相棒たるコイツも規格外だぜ。

『もう、この雪景色に埋もれてしまいたい』

「そして遭難か・・・」

『雪洞掘って救助が来るまで耐えるんですよ？何日か立って衰弱しきった所に救助の人が！』

「そして暖かな雪を溶かして作ったコーヒーをくれて、“よく頑張った”って言ってくれろ」と

『それなんて岳？』

ですよねー。この後はまた沈黙が流れる。

俺は夕夕風の音を聞きながら、特に考え事もすることなく白い空を眺めていた。

んで適当に煙管を吹かしていたら、薬草が切れてしまった。

風が吹いてると炎の燃焼スピードが早くなっちまうな。改良の余地あるか？

とにかく、薬草を新しいのに取り替えようとした俺だったが……。

1951

「……静か、だな」

『風と私たちの会話しか聞えませんかからね』

「……は」

『はっ』

「……はつくちゅー！」

『……テンプレコントロールで気温上げておきますね』

「いや、寒いって言うか何と云うか」

気温コントロールしてあるから寒くない筈なのに何故かくしゃみ。うーん？なんだろう？何かを感じたって感じがしたんだが……はて？

『……だけど、本当遠い所ですよね』

「……だな」

ヴィズがしんみりと吐いたその台詞に、俺も煙を吹かしながら同意した。

帰る方法はまあ解っているのだけが、唯一の心の支えってところか。とはいえ、大分強引なやり方だし、ウマくいくかどうか……。つーか爆発系に巻き込まれて異世界に飛んだのがコレで2度目じやねえか……。

「この分じゃ、帰る時も何か莫大なエネルギーに呑みこまれなきゃいけないのかもな」

『えー、いやですよ私。思考の制御弁が降りちゃうのって』

「いやって、お前を守る安全措置なんだから」

『でも、その間マスターがどうなったのかわからないなんて……私は嫌ですよ』

「……デバイスにそう言われるとあっちゃ、魔導師冥利に尽きるってモンだ」

ホント、良いヤツに育ちやがって……。

さて、多少望郷の念にかられ黄昏たし、気分転換になんか食いもんでもあさるかなあ。

……とか考えてフネに戻ってみた訳なんだが。

「ふえ〜ん！あるじどの〜、どこですかー？」

「まったく！あいつは何処に消えたんだ？リンがさびしがってるじゃないか！ー！」

「あやや、でも困りました。船内の何処にもいませんです」

「ふえくん!!」

「ああ！泣かないで」です！」

外は寒いから、風邪引かせたら不味いと思って置いてったのに、裏目に出ちまったかな。

そっぴや何時間外に居たんだけか？俺達。

『ざつと3時間くらいでしょうか？』

あー、そりやさすがに長すぎるか。それに黙って出て来ちゃったつてのもある。

そりやリンだって精神的に成長はしているし、それほど幼くは無
いけどさ。

ソレはソレ、コレはコレっていう言葉があるだろう？今のリンは
そんな感じだ。

「あ、フェン！やっと見つけた！」

「勝手にいなくなったら困るです。リンが泣きそうなのでなんとか
してください」

「ぐし、ぐしゆ・・・」

「あー、すまないリン。ちょっと考え事をだな」

「勝手にいなくなっちゃいやですう・・・」

「ぐう」

「あやや、鬼教官のフェンもリンにはかた無しですか」

「フェンも人の子ってことだねえ」

そこ！うるさいよ！？今はリンをあやすのが先でしょうが！
つかシアさんよ？ソレは俺は人の子じゃ無かったと言いたいのかね？

「は、自分の行動をかんがみってみるんだね」

「・・・」

・・・ぐうの音もでねえや。

とにかく、おいて行かれたのが寂しくて泣いちゃったリンをあやしつつ、シアさんとキノさん達と一緒に過ごすことになった。

食べることが好きなリンの為に、食堂で簡単なお菓子を作ってくれるんだって。

よかったなあ〜リン。

ん、お仕事どうしたかって？ははは、優秀な部下がいるって良い

よね

その頃、隊長室という名の執務室では……。

「……リアルで隊長って大変な仕事だったんだね」

「なんで僕が手伝ってるんだろう?」

「ごめん、後で食堂で何かおごるよ」

「そうしてくれると助かる。というかもう限界」

「あと一束、あと一束だけ頼むよ!じゃないと僕が死ぬ!」

「はあ、了解した。……ギムリ達も連行してくれば良かったよ」

「……優秀な部下ギンシュとその手伝い(マリコルヌ)が頑張っていた。

……

……

……

食堂にてお茶をしていると、整備班組がやってきた。

何だか羨ましそうな眼で見て来たので、全員分のお茶を入れることになった。

パイロット組（レイナル、ギムリ、スティックス）も来たのでお茶に加わった。

そしてあれよあれよという間に食堂が一杯に、あれ？満員御礼ったヤツか？

「というか、なんでこんなに一杯いるんだ？」

「そりゃ戦闘が無いからな」

「そうそう、戦闘が無けりゃヴァンツァーを整備する必要が無い」

「俺達はパイロットだから、戦闘にならなきゃお役御免だしな」

「フネの運航とかは？」

「そいつは無理だ。フネを動かす人間は全員が操船に関してなんらかのプロフェッショナルだ。」

俺達が手伝えることなんて一切ない。むしろ邪魔になっちゃう」

「んじゃ、何故に食堂に？」

「懐かしい感じがしたんだ。お袋のところにいるみたいな」×その他大勢。

くっ、みんなそろって良い笑顔で返しやがる。

でも片手に持ったティーカップでなんか色々台無しだ。
つーか結局の所、茶菓手に引かれただけじゃないか？

「まあいいじゃねえか小僧。最近根詰め過ぎだったからな。今回の任務は良い休みだと俺あ思うぜ？」

「ジェフリー・・・ポジティブだな」

「何事も前向きに考えておいたほうが、気分が楽になるからな。人間を動かすのはその時の気分が結構大きいモンだ。だから楽しそうな事するのは悪い事じゃねえ」

「と言っても娯楽も無いから、ホント暇ですけどね」

「食つか寝るしかねえもんな。本とかの貴重品はこのフネにはねえし」

ジェフリーの言葉に賛同する整備班の連中。

確かにこの世界だと製本技術が発達して無いから本は貴重品なんだよな。

タバサみたいに何冊も所持している事の方が珍しいらしいし。

ふむ、かと言って娯楽になりそうなモンを持って来てないしな今回。

あるのは日用品とか衣服とかだし、後は書類とかソレ系・・・あ！そうだ！

「ヒマと言つたら指の訓練になる遊びを教えようか？」

「指の訓練？なんですかいそりゃ？」

ふふふ、指先の器用さが必要なメカニクには丁度良い遊びかも
しれないぜ？

あ、パイロットも指先の器用さは必要だからパイロット組もこつ
ちやよれや。

「ふふ、取り出したるは一本の紐、これを結んで輪を作つて」

「ほづほづ」

「こつやつて両手で持ちまして、するするするっと動かしてやれば・
・・ほい橋」

「おお！紐の形が変わって何かの形に！ほ、他に何かないんですか
い？」

お、ジェフリーのヤツが意外と食いついてきたぜ。

よく見たら他の連中も食い入るように見てやがる。

実は女の子の遊びなんだけど・・・まあ指先の訓練には違いない
ぜ。

「よし、そこのお前、こつこつを持って・・・」

「こ、こつですか？」

「そう、そしてそのまま ほりゃ！」

「わわ！今度は俺がやるのか！？」

とまあこんな感じに遊びを教えてみた。

狭い室内でも出来る遊びだったから意外と好評だったぜ。

「はあ、ようやくおわったあゝ……って満員じゃないか！」

「よく見たらギムリ達も居る！？しかも茶を飲んでいるだと！許せん！」

そして仕事を終えて帰ってきたギーシュ達も乱入し、その後は色々あって大騒ぎだった。

ある者は遊び、ある者はそれを眺め、ある者はお茶を飲み、ある者はおしゃべりに興じる。

なんじゃかんじゃで仲間意識あるよな。水精霊騎士隊って……。

騒ぎは夕方まで続き、食事時には収まった。

だが食後に誰が持ちこんだが酒を飲む宴会になった為、リンを緊急避難させる。

まあ当直以外は自由時間になっていたからし、若干軍規に触れるが大目に見ることにした。

狭い船内での生活だ。発散出来る時に発散しておかないと何が起

きるかわかんねえ。

そんな訳で、ドンチャン騒ぎの騒音を頭の片隅に覚えつつ、俺は部屋へと戻ったのだった。

「リン、お前の部屋はシエスタたちの所だ」

「……」

「……(ぐう、そんな雨にうたれる子猫みたいな目をしないで・
……)」

「……」

「……今日は一緒でも良いぞ」 観念した。

「!……」

「戦争の中の平和な一時」(後書き)

*あれ？何故かほのぼの編になっちまった。

「帰還の鐘が鳴り響く 前編」(前書き)

*今回長めです。そして妄想爆走中。それでもOKな方はどうぞ。

「帰還の鐘が鳴り響く 前編」

「帰還の鐘が鳴り響く 前編」

妄想戦記

S i d e 三 人 称

町の一等地にある一つの宿屋。

現在、そこは連合軍司令部として接收され、將軍達が軍議の為集結していた。

降臨際に入って十日あまりが経過し、今はアルビオン軍とは休戦中である。

だが相手は以前休戦協定を破った前科があるアルビオンだ。

一応の備えとして、軍議を行う事を義務付けるのは当然の事であった。

そんな中、軍議が行われている宿屋のホールでは、最高指揮官ド・ポワチエがほくほく顔をしていた。

トリステイン本国から彼宛てにとある物が届けられたからだ。

そのあるモノとは、黒檀に金色で王家の紋章が彫られた元帥杖だ

った。

付属した手紙には『この杖で残りの連勝街道を指揮されよ』と有ったのも、彼の機嫌の良さをさらに助長していたといってもいい。この杖が届いたという事は、実質彼が元帥になることは決定されたという事なのだ。

これまでがんばってきた甲斐もあるといつもものである。

「おめでとつございます。閣下」

「なに、これで気を引き締めよという事であろう。油断はならぬぞ。油断は」

参謀総長のウィンプフェンやハルデンベルグ侯爵が世辞を投げかける。

彼は口ではそう言いつつも、嬉しさのあまり口元が緩んでいるのを隠せてはいなかった。

そう、コレで良いのだ。

自分が元帥になるという事は果たされた。

コレもある意味自分の元で頑張ってくれた優秀な駒達。

“虚無”と“水精霊騎士隊”がいたからだろう。

強い奴らは彼らに任せ、戦力を削いだ上で敵の高級士官を倒した甲斐があつたというモノだ。

彼らが戦う際には、必ず“自分の指示”で行ったという風に本国には伝えてある。

そう言った意味では良く働いてくれた。

感謝してやるぞ、元帥たる私かな！
とポワチエは心の中で
思った。

敵の残りは首都ロンディニウムに籠る莫迦な連中だけ。
このまま優秀な駒達には、やや遠目の戦線にてがんばってもらおう
事にしよう。

そして、首都攻略の凱旋は華やかに自分が行うのだ。

そんな風な明るい未来を思い、更に笑みを深めるド・ポワチエ。
だが破滅の足音は、既にすぐ近くに近寄って来ていた事に、誰一
人氣が付かなかった。

ドオーーーーーンッ！！ドン！

外から響いてくる連続的な爆発音を聞くまでは……。

反乱が起こった。ド・ポワチエが謀反を起した。等々、様々な憶
測が飛んだ。

何せ何が起こったのか連合軍達には解らなかったのだ。
解っていたのは、昨日まで勝利の美酒を共に飲んで歌った仲間が

襲ってくるという事実のみ。

混乱した指揮系統をまとめつつ、郊外に臨時の司令部を設置したのは、参謀総長ウィンプフェンであった。混乱した街から脱出できたのは彼と数名の将官達だけであり、彼よりも上の階級の物がいなかったからである。

仕方なしに、彼は生きている指揮系統を使い、残った王軍へと指示を送ろうとした。

事態を收拾する為に、反乱軍を処理する為に行動したのである。

だが時間が経つにつれて敗戦の色は濃くなっていた。

最初こそ臨時司令部で指揮を執っていた彼だったが、部下からの報告に一気に青ざめる。

“ロンディニウムのアルビオン軍主力が侵攻を開始”

まるで反乱がおこることを予め知っていたかのようなタイミングで、首都ロンディニウムに籠っていた筈のアルビオン軍が進軍を開始したのである。その報告を偵察の竜騎士から伝えられた彼は卒倒したくなるのを必死でこらえたが、彼はもともとは参謀役であり勇猛な将では無かった。

そして彼はある程度狼狽した後、すぐさま決断を下す。

「全軍に通達、ロサイスまで後退する。・・・ここはもうダメだ」

後退とはいうが、その中身は事実上の撤退に等しい事であった。彼は最後の足掻きとでも言うかのように、ただ“後退”というのみだった。

しかし指揮系統の混乱の中、全軍にその命令が届く事は無い。

3万にまで数を減らした王軍が今まで戦ってきた道を、只後退するのみであった。

幸いなことに途中の砦や要塞は、フェン達水精靈騎士隊が全て占領してある。

道中は背後の敵の追撃にのみに気を配れば良かったというのは、この状況下では僥倖な方だろう。

敗軍となった王軍は今までの戦場をただひたすら後退する。

重たい鎧は真っ先に脱ぎ捨てられた。装飾がみごとな武器も撃ち捨てられた。

少しでも身軽にならないと、背後から迫る死神の鎌に捕まってしまふ。

なまじ連勝が多かった所為か、死への恐怖は瞬く間に伝搬してしまった。

今の3万もの王軍を支配している感情は只一つだけ。

シニタクナイ

ただそれだけ、連勝中は名誉の為なら死ねると言っていた者たちがである。

敗走する全員が全員、身軽になる為に衣服まで最低限になった為、

もはやその姿に傭兵も貴族も槍兵も弓兵も銃兵も・・・何も誰も変わらない。

そこに居たのは生を渴望する醜い人間達の姿だけだった。

ロサイスに到達したものの、本国からは撤退は許可できないという短い命令しか来なかった。

いままであれだけ連戦連勝を上げていた連合軍が崩壊して半数以上が寝返った。

拳句には総司令官のド・ポワチエが戦死したという情報に、本国は偽報ではと疑ったのだ。

何度も説明し、なんとか本国から撤退の許可を貰った時、既に半日が経過してしまっていた。

しかもその半日でアルビオン軍主力が残り1日で到達できる距離にまで近づかれてしまったのだ。その数は離反した反乱軍を合わせて7万、敗走した王軍は3万、まるで勝負にならない。

ロサイスは軍港ではあったが、撤退する軍をフネに乗せるには数日ほど時間がかかる。

しかし敵軍は来るのは1日後、つまり撤退を行うには1日時間を稼がないといけない。

ウインプフェンは考えに考えたが、有効な策を見出すことが出来なかった。

現在、戦列艦ですら撤退の為に投入している。
時間稼ぎをさせたくても、逃げる際に兵たちは装備を全て捨てて
いた。

かき集めれば1部隊分は集まるかもしれない。

だが、ソレをつけて残されるという事は死ねと言っているのと同
義である。

誰だって死ぬとわかっていて死ぬというヤツは、この軍にはいな
かった。

参謀陣が見つめる中、臨時の最高司令官になったウィンプルフェ
ンは考えた。

そして閃いた。

ド・ポワチエが保身の為に遠ざけた“アレラ”がいるじゃないか。
彼はすぐさま、伝令と飛ぶのが一番早い竜騎士を呼び寄せる。
全滅の憂いを避ける為の“防波堤”を作る為に……。

1970

S i d e o u t

S i d e f e n

現在俺達は緊急要請を受けて、ロサイスへと急行していた。
普通なら有り得ないと思うところだが、わずか半日で連合軍が崩

壊したのというのだ。

休戦中に攻撃されるとは考えていたが、まさか反乱が起こるとは思わなかった。

コレを知らせてくれたのは、現在ロサイスに居る敗走軍から来た竜騎士だ。

竜がへたばるまで限界速度でこちらに伝えに来たらしい。

しかも、現最高司令官からの召集状まで持参してな……。

しかし全く持って解せん。

任務に入る前にシティオブサウスゴータを出た時は不平不満の類は感じられなかった。

小さな不満はあったけど、少なくとも反乱に居たりそうなもんは無かった筈だ。

その事が余計に俺達を混乱させていたのだった。

……サイト達は無事なんだろうか？

……

……

……

帰りの空路は風の流れが追い風だった事もあり、非常に早く帰還する事が出来た。

何せアルビオンの山岳部にまで行っていたのだ。
よくUターンして帰って来れたと思うぜ。

「長距離センサーに反応、敵主力軍を探知しました・・・何コレ？」

「・・・ブラフ・・・な訳無いか」

【真っ白ですね】

「おいおい、なんだよこの数？ココから何百リーグ離れてると思っ
てんだよ」

「あややややや・・・」

相変わらずワイズの姿で戦域管制室に居たのだが流石は7万の軍
勢^勢。

大分離れているというのに、既に感知出来るくらいである。

近づくにつれてセンサーの画面には白いグリッドが現れる訳だが、
ソレがどんどん増えて・・・最終的には画面一杯真っ白になるくら
いに敵反応が増加してしまった。

思わずオペレーター3人と俺とユニゾンしているリンは驚嘆して
しまった。

うん、多すぎる。離反した味方も混ざったかららしいが幾らなん

でも多過ぎ。

幸い追い風のお陰で敵主力よりも若干早くロサイスに到達出来るのが救いか。

だけどこんな時の戻されるってことは、あれか？この大軍を防げとでも言われるのか？

「数は・・・推定7万以上・・・」

「7万！？最初の連合軍よりも多いじゃないか!？」

「うーん、多分反乱軍と合流したんですね。あやや、コレは不味いですね」

「なんでさキノ」

「下手したら、上からの指示が・・・」

「可能性は否定出来ん。だが余りそう言う事は口に出さない方が良いぞキノ。下手したら侮辱罪だ」

「・・・申し訳ありませんです。司令官」

軍というのは時折とても理不尽な命令を下すものである。

それは例え指揮系統が混乱していても、上官と呼べる人間が下した命令なら有効だ。

俺達は近衛騎士隊でもある為、連合軍の指揮系統には厳密には組

み込まれてはいないが、女王がその指揮権を王軍に一時的に譲渡している為、王軍の指揮系統が生きている限り、上からの命令は絶対である。

それが玉碎を前提とした命令で会っても逆らう訳にはいかないのだ。

それが騎士隊でありトリステインを守る盾達の役割なのである。

ココで逃げるのは簡単だが、そうならば女王直属部隊が真っ先に逃げた事になる。

そうならばアンリエッタ女王陛下への信頼が無くなり失脚、影響力が低下してしまう。

只でさえ現状彼女の手腕で保たれているあの国で、そんな事態になれば国が崩壊するだろう。

そして、沢山の一般人が内乱に巻き込まれて、死んでゆく……。

「……くそ、ソレがわかつちまうから」

「ワイズ司令官？」

「何でも無い。ネレイド隊は引き続き重量制御術式を維持、我々はロサイスに急行する」

「……了解」「」

関係の無い人間が死んでしまっのがわかつちまうから……逃げられネエ。

くそ、因果なモンだけ。俺ならいくらでも逃げられるけど……。

「……（見捨てられんもんは見捨てられん）」

トホホ・俺、外道に生まれたかったな。そうすればこんな時逃げられたのに。

何時もそうだ、この性格で損をする。自分が傷つくってわかってるのに……。

そう内思いつつも、俺達は一路ロサイスに向かった。

「あれ？これって……」

「どうしたですかシエスタ」

「え？ううん、なんでもないよキノ」

「？そうですか」

「……（なんで、敵軍が一カ所に集結しているんだろう？）」

ロサイス周辺は酷いもんだった。空から見ても軍港は人でごった返している。

生き残る為に必死な人間達がフネに乗ろうとしているが、他人を

押しつけてまで……。

いや引き摺り降ろそうとしてまで乗りこもうとしていた。

あそこに降りるのは無理だ。

下手すればエクリプスの乗員を引き摺り降ろされて殺される。

だが、司令部のある場所に指示を貰う為にロサイスに降りなきゃならん。

仕方なしに、俺はロサイス近くの平野にフネを着陸させることにした。

そしてヴァンツァーで待機しているA分隊に通信を入れる。

今から指示する事は、彼らにとっては恐ろしく辛い経験になるか
もと思いつながら

「ネレイド隊に通達する。着陸後フネを中心に展開、フネを守れ」

「は！ 守れって、誰からありますか？」

「……敗走軍の連中からだ。場合によっては重火器の使用も許可する」

「な！？友軍に刃を向けると！？」

通信機の向うで驚愕の声が上がる。

友軍を守るべき自分たちが、何故友軍に刃を向けなければいけないのかわからない。

だが、状況はそれをゆるしちゃくれねえんだよ。

「敵は何も目前に迫ったアルビオンだけじゃない。このフネには秘匿すべき技術が満載されている。ヴァンツァーも然りだ。よってこのフネに敗走軍を乗せる訳にはいかない」

『着陸後フネを離陸させればいいのか？』

「一度着陸したらそう簡単に離陸できないのを知っているだろう？」

『しかし・・・』

「コレが戦争だ。いざとなれば味方が敵になる。そしてトリスティンの盾となるべきお前は、ココで果てる訳にはいかない。撤退の為にこのフネは絶対に必要なんだ。コレは 命令だ。」

『ッ！・・・了解、しました』

苦虫をかみつぶした様な返答が、通信機の向う側から返ってくる。やはり俺が出した“命令”に抵抗があるようだ。

軍における上官からの命令は絶対である。

コレは基本にして一番厳守しなければならない最大の規律だ。この規律があるからこそ、軍は軍なのである。

俺だつて“命令”なんて言葉を使いたい訳じゃない。ただど令、このフネを奪われる訳にはいかないのだ。どんな理由があろうと俺らが生き残る為には・・・絶対に。

さて、うざつたい臨時司令官殿との会話は飛ばさせてもらう。話しても無駄に長いだけ、殆どが俺達を戦場に送る為のいい訳だったからな。

まあ用件だけを簡潔にするなら、敵軍を1日とどめよという事だった。

丸1日、時間にすれば24時間、長くて短いその時間。

友軍の撤退が完了するまでの間、俺達は敵を引きつけていなきゃならないのだそうな。

女王直属も先鋭部隊なのだしソレ位出来ますよねというイヤミ付きだぜコン畜生。

更に最悪だったのが、すでに昨日の内に虚無に出撃を掛けたという事だった。

つまり指揮官たちはルイズ嬢達を戦場に送りだしてやがったのである。

しかも、王軍をコレ以上減らすことは出来ないという理由で護衛

部隊も無しで……。

そんなことを俺の前で話す大馬鹿野郎に、一発殴りかかりたいのを理性で無理やり押し込め、一度フネへと帰還した。この命令を伝えなきゃならなかったからだ。

エクリップスへと帰還し、下された命令を伝えて部隊は動きだす。全員が悲壮感漂う顔となっていたが、ソレを口に出すことはしない。

そう言う理不尽を言われる事位、覚悟の上だったからだろう。

ヴァンツァー部隊は拠点防衛仕様で重火器を搭載し発進準備中。彼らが発進後、エクリップスは空中管制に周る事になる。

俺も今回ばかりは出し惜しみをしないという事で、遊撃という形で先に出撃した。

はは、しかし7万の大軍か……幾ら内訳が平民でも、数の暴力はマジでヤバイ。

7万の中にはかなりのメイジがいると思われる。

しかもアルビオン主力が合流し、その中には亜人種も混じっていた。俺はともかく、A分隊の連中が無事で済むとは思えない。

とにかく俺達は出撃する。

誰もが沈黙するなか、俺達は大軍を押しとどめる為の防波堤となる。

だけど約束する、俺は俺の部隊から死人は出さん。

例え俺がどうなるうとも・・・もう仲間を殺されたりはさせないぜ。

S i d e o u t

S i d e ギ ー シ ュ

エクリップス艦内のハンガーにて、僕たちの出撃準備は急ピッチで進められていた。

僕たちは既に機体内で待機、僕たちの機体の周辺を整備班の人達が慌しく動き回っている。

追加装甲や拠点用兵装、支援火器とかを機体のアタッチメントに取り付けているのだ。

僕は作業が終わるまでの間、操縦席で作戦内容や機体情報を見て待つしか無かった。

今回はスラスタユニットと基本兵装の他に、長期戦に備えて武装担架コンテナがマウントされ、両肩には支援火器のロケット砲イーグレットか、短銃身ガトリングモーターキャノンをマウントしてある。

ガトリングは魔力で稼働し、集弾率をあえて抑えて広範囲に魔力弾をばらまくことが可能であるらしい。だが短銃身な分、潜熱が堪りやすい為ガトリングの連続使用には注意が必要らしい。他にも機

体に取り付けられていく対人火器の起動方法を確認していると、ジエフリーさんから通信が入ってきた。

『小隊長殿、今回は拠点防衛仕様の重装備だ。追加武装の担架コンテナがある分、機体の機動力が約8%は低下している。重量制御して戦闘機動を取る時はバランスに気をつけるよ』

「了解しました。おやっさん」

僕は無難に返事をする。何時もの態度を装いつつね。

『なに、整備とかをするのが俺達の仕事だ。……命令が不服か？』

だけどどうやら無意識で表情に表れていたらしい。
おやっさんは僕に大丈夫なのかと訪ねてくる。

「上からの命令だって事は、理解しているんですけどね」

『だけど、死にたくはねえってか？』

当たり前だ。誰だって死ぬと言われる様な命令に従いたいなんて思わないね。

「おやつさんは怖くないんですか？もしかしたら死ぬかもしれないのに……」

『そら怖えさ。お前らが負けたら俺達だってヤバいからな。だけど小僧の事は恨んでやるなよ。』

アレだって好きでそんな命令下したってわけじゃねえ』

「……解ってますよ」

彼の性格からして、僕らが無駄死にさせたいとかは思わない筈だ。友人であり、師匠でもあり、教官であり、今は臨時だけど上官である彼。

ある程度は理解しているさ。無表情に命令を下したその時、彼が震えていたって事もね。

「だから、僕も……僕達も出来る事だけをします」

『そうしてやれ、俺達は整備しか出来ねえが、戦闘中に絶対故障しない様に整備してやる。』

それしかできない俺達を許してくれ……そろそろ準備が終わるから通信を切るぞ』

「……了解、それじゃおやつさん、行ってきます」

『……絶対に戻ってこいよ。死ぬな』

死ぬな、か。無茶な命令だと思う。今回の作戦は7万の敵を相手にする防衛戦だ。

数百や数千規模の敵となら、今までも戦ってきたし辛くも勝利してきた。

だけど今回は次元が違う、7万の大軍をとどめて友軍の撤退を支援しなきゃならない。

一騎当千じゃ足りない、一騎当万でも足りない、必死で死ぬ気でやらないといけない。

「……はは、ヤダな。今更だけど怖いや」

手の震えが止まらない。初陣の時と似ているけど、その時より軽いけど……。

「死にたく無いなら、動くしかないよね」

ココで止まったら絶対に後悔する。だから僕は出来ることをしよう。

僕は他の機体へ指示を送る為に通信回線を開いた。

「……ネレイド1から各機、問題は無いか？」

『ネレイド2、問題無し』

『ネレイド3、異常無しだぜ』

『ネレイド4、いつでも行ける』

『ネレイド5、ちーと機体が重たいが大丈夫だ』

問題無し、だが通信に入る声色から察するに全員緊張している様だ。

「大丈夫だ。皆。何時もの訓練通りやればいい」

『・・・だけど、相手は7万以上の大軍だぞギー、ネレイド1』

「7万の大軍？はっ！そんなのは」

僕はワザと鼻を鳴らしてこう言い放った。

「教官殿の扱きに比べたら、実に簡単な相手じゃないか」

通信機からブツと息を噴き出す音が聞こえる。

まあ自分で言っただけにそれえって感じなんだけどね！

「ソレにやることは至ってシンプル。ただ後ろの味方が逃げるまで時間を稼げばいいだけさ。大丈夫、動き回って盾を上手く使えば敵

なんて怖れるに足らずさ」

失笑する声が聞こえる。けどお陰で緊張はほぐせたらしいね。

「それじゃ行こうか？お仕事をしにね・・・各機フォーメーションアロー、跳躍噴射で戦闘地域に向かう。間隔は各機300でリンク、タイミングは僕の機体と同調してくれ」

『了解！』×4

僕の機体を先頭に他の機体が逆V字に展開する。

レバーを下げ、フットペダルを踏み込み、スラスターユニット稼働させた。

重量制御術式を稼働させ、重量を軽くし、追加兵装で変わったバランスを確かめる。

確認を終えた後、僕は一度深呼吸をしてから、指示を出した。

「水精霊騎士隊、出撃！」

そして僕の機体は青い炎を靡かせつつ、暗くなりつつある空へと跳び上がった。

僕の機体の動きとリンクして、みんなの機体も追従してくる。恐怖と不安を理性で抑え込みつつ、僕らは戦場へと向かったのだ。

S i d e o u t

S i d e フ ェ ン

エクリプスから飛び立ち、先行した俺はヴィズのセンサーを使いルイズ嬢達を探す。

本来なら部隊を散開させたいところだが、今回は丸1日戦線を維持しなければならぬ。

だから戦力を集中させて、そこに敵をおびき寄せようと考えたのだ。

「リン、ヴィズ、どうだ？」

『・・・ダメですね。センサーには反応がありません』

【ワイドエリアサーチにも反応がないですう。本当にルイズさん来てるんでしょうか？】

「いや、あの司令官は確かに出撃を掛けたと言っていたんだが・・・

」

しかしどういふ訳だか俺達よりも先に出ている筈のルイズ嬢の反

応がない。

彼女程の魔力なら、センサーに引つ掛かってもいいと思うんだが・
・・。

『・・・あれ？おかしいな？』

「どうした？」

『いえ、センサーの故障でしょうか、何故かサイトさんの生体データだけが検出できるんです』

「サイトだけ？ルイズ嬢は？」

『探知できません。この距離なら個別識別可能範囲ですから間違っ
はずは・・・リン、そっちは？』

【魔力パターンはルイズさんのは探知してないですう。考えられる
のはこの戦場に来ていないってことでしょうか？】

サイトの反応があるのにルイズ嬢がいない？どういう事だ？

ヤツの事だからルイズ嬢だけは守ろうとする筈だ。

だからルイズ嬢から離れるなんて論外

<・・・最近眠れねえんだよ。なんか手についた感覚がな>

「ッ！！」

『？マスター、どうかしましたか？』

「まさかあのバカ、ルイズ嬢に一服盛ったのか」

『【ええ！？】』

いやな可能性を考え付いたが、可能性としては無いとは言い切れない。

元々がこの世界製の無味無臭の魔法薬のコピー品である。飲み物とかに混ぜればばれることはまず無い。

ソレを使えばルイズ嬢を眠らせることくらい朝飯前だろう。
・・・容量守ってるかな？間違えて大量に盛り過ぎると永眠しちまうぞ？

「だけどたった一人で？」

『道理で敵がサイトさんだと思われる反応に集中してるんですねー』

「【・・・え？】」

『・・・あ』

おいおい、てことはだヨ？アイツまさか今まで一人で！！

「・・・カートリッジロード、全力で向かう。シールド展開」

『【了解です!!】』

カートリッジを使いジェットパックを連続稼働させる。

機動性が落ちるが、今は速度優先だ！急がないと・・・サイトが死んじまうって!!

幾ら使い魔のルーンが強力でも、アイツは魔法使えないんだぞ!?

デルフで魔法吸えるけど、刀身で触れないと魔法は吸収できない。取り囲まれて集中砲火でも喰らったら・・・!!

「・・・（あのバカ野郎め、生きていたら絶対何かおこってもらうぞ）」

カートリッジをロードし、瞬時に音速を突破し周囲から音が消える。

既に戦闘が開始されて半日が経過しているのだ。

ガンダールヴのルーンは特別だし、サイトも鍛えてはあるが対軍をさばけるほどじゃない。

てつきりルイズ嬢の虚無魔法で攪乱していると思っていたのに・・・。

単騎で万以上の軍勢を抑えようとするなんて・・・英雄的行動だが自殺行為でしかない。

そんな事、そんなことを教えてないぞ俺は!

「間に合ってくれ　　！！」

更に加速しようとして、魔力をリンカーコアから引き上げようとした。シールドを叩く空気の壁が鬱陶しく感じられる。

だけど急ぎたい時ほど

『　　！！・・・平賀サイトの生体反応・・・ロスト』

間に合いたいと思う時ほど・・・俺は間に合う事は無いらしい。

生体反応の消失、すなわちサイトが戦死したとの情報が、俺の元に届いた。

クソが、ありがとう神さま、お陰さまで最悪な気分だよ。畜生。

S i d e o u t

S i d e 三 人 称

フェン達がロサイスに到達する数時間前

シティオブサウスゴータから南西150リーグの地点に位置する
草原。

そこは、アルビオン主力軍と反乱軍を合わせた7万の軍勢によつて埋め尽くされていた。

兵隊にメイジに大砲、首領級の亜人種、竜騎士や幻獣に乗る騎士たちが7万もいる。

普通に考えたら、ソレだけで戦意を喪失できそうな光景である。

だが、その大軍は現在混乱の極みにあつた。

風が吹き、光が飛び、氷が放たれ、火が燃やし、土が穿つ。

魔法という魔法がその力を解放し、銃弾や槍や矢が吹き荒れる戦場。

その中を只一人駆けるものがいたのだ。

トリツキーな動きで槍隊のやりぶすまを跳び越える。
信じられない早さで魔法すら避ける黒き影。

そしてその影が通った後は、丸で台風が吹き荒れたかのように死
屍累々。

しかし誰ひとり死んではない、正確には殺すヒマが惜しかった。
黒き影は恐ろしい早さで戦場を駆け、大将がいる本陣を目指して
いた。

当然アルビオン軍はそれに対処する為に動きだす。

傭兵達が影に斬りかかるが、まるで霞を切るかのように攻撃は当
たらない。

銃兵が銃を発射するが、掠っただけで勢いは止まらない。
竜騎士が竜にブレスを吐かせるが、ブレスを吐く前にアップパーカ
ットされる。

矢に至ってはホームランの如くその手に持った武器で跳ね返され
た。

そしてメイジの魔法はそのすべてが影に当たる前に消えてしまっ

た。亜人達が数を生かして取り囲もうとすれば、何やら懐から取り出
したモノを投げつけた。

ソレは空中で炸裂、鼓膜が麻痺する音と直視したら視界が奪われ
るほどの光が放たれる。

その場の人間が動けない中、影は再びアルビオン軍の大將目がけ
て移動を開始した。

そして上の事がかれこれ数時間繰り返されているのである。

だがその場の人間が何よりも認めたく無かったことは

「うがー！ー！！当たる当たる当たる！！魔法なんて大っきらいだ
アアアア！！」

神がかり的な回避を行うソレが、実は非常にアホっぽかった
事だった。

確かに常人、いやさ幻獣すら凌駕する程の速さでソレは攻撃を避
けまくる。

大剣の腹で人間を水平に吹き飛ばし、トロールですら昏倒させて
しまう。

しかしその避け方は情けない叫び声を上げながら、人間には不可
能な動きで避ける。

その避け方は華麗とは程遠い動きで、シエー見たいなポーズだっ
たり土下座みたいだったり、統一性が全くない、美しさなんてか
けらも無い。

普通こんな英雄的行動を取る様な輩が、何故こんな情けないんだ
ろうか？

と、戦う前から戦意が喪失していく。

だが実際にはその被害は凄まじく、近寄ればもれなく気絶が付い
てくるという理不尽さ。

何故こんな人外を相手にしなきゃならんのだという風な空気が流
れ始めていた。

正直こんな兵士がいる部隊がこの先に控えているのではと思うとやる気が出ない。

その為、アルビオン軍主力の脚が徐々に遅くなり、足止めという目的には成功していた。

戦場に吹き荒れる寒い風、だがそんな風でも敵の多さに徐々にその勢いを遅くしていた。

誰が想像できるだろうか？ 一対七万というアホみたいな対戦など。

ルーチンワークの様に敵を気絶させていった影だったが、七万の大軍は伊達じゃない。

幾ら叩いても気絶させても、気絶させたただけなら最終的には復活してしまう。

敵の数が減らないという事は、負担が増加し疲れやすくなるという事でもある。

そして当然のことながら疲れてくれば敵の攻撃を受けやすくなってしまうのだ。

それ故、徐々に影の身体に傷が増え始める。

所々に出来た裂傷、魔法の炎による火傷に凍傷。

亜人や幻獣によって殴られて、骨折していく四肢。

今やその身体に無事な箇所は無く、右手は守りに使った所為で骨が粉々に砕かれていた。

片目も魔法が掠った所為か潰れてはいないが腫れあがり開く事も出来ない。

しかしその影、この世界に召喚されし少年である平賀才人は歩みを止めることは無かった。

ボロボロになりながらも、ゴキブリの様に逃げ回り攻撃を回避していく。

彼の目的は只一つ、大切なご主人を守る為に敵を食い止めるといふシンプルなモノ。

愛する人間の為に命を張りたいと思うのは、雄の性だとも言うのだろうか？

そして遂に敵の大将の元に辿り着いた彼は、その刃を敵の大将に向けて構えた。

大剣デルフリンガーを構えし剣士は、その瞬間ルーンを輝かせ風になる。

大将を守る騎士たちが放つ魔法の直撃を受けつつも歩みを止めず、刃の切っ先が大将の顔面に迫り、そして

ドサ・・・

残り数センチ、あと一步踏み出せば大将の首が取れる位置。

そこで彼は糸が切れてしまった人形のように、大地に倒れ伏してしまっただ。

「ご無事ですか！閣下！」

「お怪我は？將軍！」

アルビオン軍の大將、ホーキンスを守る騎士たちが彼に駆け寄ってきた。

ホーキンスは落してしまっただ杖を拾い上げつつも騎士たちに大事なないと伝える。

「大丈夫だ。戦闘は終了だ。損害を報告しろ」

倒れ伏したサイトがアルビオン軍に与えた損害は全体からすれば大きくは無かった。

しかし、軍が大きくなればなるほど、ほんの少しの損害でも全体に影響が現れる。

その影響とは、時間、サイトが暴れた事により、全体の陣形はバラバラになっていた。

ソレを直すにはかなりの時間が必要になって来る。

副官からは半日は時間が無駄になると言われ、ホーキンスは苦笑した。

単騎で大軍を止めてしまっ、まるで御伽噺の英雄ではないか。

見れば恐るべき被害を出した敵は、まだ年若い少年。

かすかに息をしているらしく、ぴくぴくと動いていたがもう血を流し過ぎている。

やりたい事もあつただろう、成し遂げたい事もあつただろう。

「敵とはいえ……、また貴族では無いとはいえ……、勇氣にはそれに応じた称賛と敬意が払われるべきだと思う」

「賛成です……しかし、噂の敵のゴーレム部隊が出て来なくて良かったですな」

「ふむ、確かにな」

噂で流れて来た事があつた。砦を壊滅させる恐るべき新型ゴーレムの噂である。

金属で出来た鎧の様なゴーレムで、矢も鉄砲も効かず、魔法も効かない。

ソレどころか既存のゴーレムとは違い、大砲の弾も避けられる機動性を備えたソレ。

「もしかしたら、この先で出るかも知れんな」

と、ホーキンスが呟いたその時であつた。

遠くの空に光るものが見えたかと思つた瞬間、その光るモノが大軍の真ん中に落ちた。

落ちた瞬間の振動と衝撃波が襲い、落ちた物体を中心に兵が空に舞った。

その後でまるで大気ごと揺らすかのような音が響き渡る。

ハルケギニアの人間には解らなかったが、ソレはソニックブームと呼ばれる現象だった。

物体が音速を超えた瞬間に発生する音の壁が辺りを蹂躪したのである。

「い、一体何が起きたのだ・・・？」

ホーキンスは副官達が落下してきた物体の方を見ている中そう呟いた。

そしてこの時、誰も才人の身体が突如として動き、暗い森の方へと走って行った事に気が付くモノはいなかった。

何故なら、落下した物体が造ったクレーターから何かが飛びだし、その飛びだした物体から大量の魔力の弾が発射されたからだだった。

そしてそれを見たホーキンスはすぐさま敵襲と判断し部隊に指示を飛ばす。

アルビオン軍主力対敗走王軍との第二ラウンドが切って落とされたのであった。

「帰還の鐘が鳴り響く 前編」(後書き)

*うむむ、頭が痛い。しかもスランプだ。

しばらく次回の更新が空くかもしれないです。ソレでは失礼ノシ

「帰還の鐘が鳴り響く 中編」(前書き)

*さあ妄想の時間だ。

「帰還の鐘が鳴り響く 中編」

「帰還の鐘が鳴り響く 中編」

妄想戦記

S i d e 三 人 称

敵陣中央に落下したフェンが戦場に躍り出てから20分後、A分隊も戦場へと到達した。

既にフェンの中心で白い弾幕が張られている為、敵の意識がそちらに向いている。

A分隊はチャンスとばかりに、まずは使い捨てロケット砲イীগレットを発射した。

ネレイド2とネレイド5の2機のヴァンツァーに搭載された兵器を使い捨てのロケット砲が放たれ、アルビオン主力軍に広範囲に降り注いだ時。

アルビオン主力軍はようやく5機のヴァンツァーの存在に気が付いた。

6メイルの巨体に拠点防衛兵装で身を包んだ金属の巨人が、今度はレオホーンの40mm魔力機銃を向けている。それは背中から火を靡かせて高速でこちらへと接近してきていた。その既存のゴーレムとはかけ離れたけた外れの機動性を見て、アルビオンに所属する士メイジ達は信じられないといった表情であった。

そんな事を知らないA分隊はV字編隊を組みつつ、40mm魔力機銃を放って呐喊する。

ネレイド1・3・4に搭載されたガトリングモーターキャノンもキョインという音を立て起動し、短銃身に切り詰められた砲身が音を上げて回転を始めた。

そして回転数が最高速に達した瞬間、ヴーという音を上げてフェンが放つ弾幕よりも多い弾幕が放たれる。魔力を軽く圧縮しただけの単純な魔力弾を放つソレは、一発の威力は40mm魔力機銃に劣るものの、その連射性能は遙かに上であった。

『ネレイド1からレッドクリフへ、戦場に到着した。助けは要りますか？』

「こちらレッドクリフ、助けは要らんが合流する時に俺を撃つなよ」
『了解』

3機のヴァンツァーのガトリング発射に呼応する様な形で、フェンは囲まれた状態から飛びだし、ヴァンツァー隊の元へと合流する。プロテクションを持つフェンでも、そろそろオーク鬼が放つ四方八方からのバリスタの矢を防ぐのが大変になっていたからだ。

いやまあバリスタ程度では無人機のミサイルの直撃を受けても大丈夫な多重プロテクションを貫ける訳は無い。だが大丈夫とはいえ、流石に四方八方から矢が飛んでくるのを見るのは心臓に悪かった。なのでフェンは早い所味方と合流したかった。

『こちらネレイドママ、空中管制に回ります。脅威となる竜騎士を避ける為上空3000メートルで待機します。データリンク開始』

『・・・フィー これまた大軍だぜ。モニターが敵反応で真っ白だ』
『こ、コレ全部たおすの？』

『マリコルヌ、なににも全部倒さなくても足止めさえすればいいんだ』
『三？』

『なあなあ、俺呐喊して蹴散らしても良い？』

『レイナール、誰がフォローすると思ってるんだ？』

『え？勿論ステイクスが手伝ってくれるんでしょ？バディだし』

『おまえ・・・俺を殺す気がよ』

通信にA分隊の呟きやら私語が入る。普段なら私語はやめると戦域管制をしているオペレーターの誰かが言うところだが、流石に今日はそんな余裕がない。只でさえ多い敵を更に識別していき、その優先順位を決めて倒さなければならぬ敵をマーキングしなければ

ばならないからだ。

機器の使い方は習い、扱いにも慣れ始めてはいるが、流石に敵が多すぎる。

とはいえソレで音をあげる訳にもいかない為、彼女たちは戦域管制を続行した。

『2時の方角よりトロール鬼、オーク鬼の混成部隊が接近しています。注意してください』

「はい、おしゃべりはそこまでだ。敵を叩いてからおしゃべりしろ」

『了解』×5

そして6対7万という、ある意味正常な人間からすれば莫迦らしい対決が始まる。

普通なら一瞬で数に吞まれると予想出来るのだが、ソレを覆すのが魔法の力だ。

フェンが竜騎士を警戒しつつも武器を構えて威嚇している間にA分隊が動く。

『ネレイド1から各機！魔法の仕様を許可する！』

『了解！それまで援護頼むぜネレイド1！動きながら魔法を使えるのはお前だけだ！』

『ああ！任せておけ！』

「俺も援護してやる。集中しろよ？自爆されて巻き込まれたら敵わん」

『ははは』

ガシユンという音を立てて、レオホーンのスーツクが変形し、杖へと姿を変える。

複合魔杖の名の元に、魔力媒体となったレオホーンに魔力が集結していった。

魔導炉から造り出される膨大な魔力を操る為に一度停止した4機のヴァンツァーを見て、アルビオン軍は好機だと考えたが彼らに殺到する。

大地がそのまま動くかのような、圧倒的な戦力差。

だが、フェンとギーシュは特に動じる事も無く通信を続けた。

「ネレイド1、追加兵装で機動性が低下しているが・・・いけるか？」

『低下しているといっても多少動きづらいただけさ。問題無いよ』

「上等・・・俺について来れるかな？」

『僕は貴族だよ？どんな激しい踊り（ダンス）も相手に合わせて、エスコートもこなして見せるさ』

「OK、ならついて来い！」

『了解、お相手させてもらつよ』

ギーシュが駆るゼフィールとフェンが、接近してくる敵に向けて突撃する。

後方にいる4機が魔法を発動させるまでの間、フェンとギーシュが彼らを援護するのだ。

ザーつと音を上げ、ゼフィールが大地を滑走し敵部隊へと切りこんだ。

ゼフィールは止まることなく走り続け、ソレを狙おうとメイジ達が杖を振う。

しかしそのメイジ達の杖はフェンが大空から弾幕を放つことで防がれた。

息の合ったコンビネーション、伊達に何時の間にかなった師弟同士では無い。

ゼフィールが敵に隙を見せればフェンが撃ち、フェンが隙を見せればゼフィールがカバーする。

フェンが動けばゼフィールはそれに合わせて追隨し、ゼフィールがテンポを上げればフェンも合わせる。

ソレはどこか舞踊を踊っているかの様な程の見事な連携。

そしてソレは何時の間にか、師から弟子に受け継がれたある技術の開花。

それは、限界機動・戦神楽いくさかくら

敵の動きに対して機動の際にまったく止まらずに戦場を駆け抜ける為の技術。

舞踊の様に見えるのは、その動きが全て円に通じるものであるから。

動きながら周辺の全敵へと対処する為、マルチタスクを持っていないと行えない。

だがそれ故使いこなすことさえ出来れば

「合わせる!」

『了解ッ!』

戦場では無敵。

動き回りながら擦れるような金属音を上げつつも突然動きが止まる両者。

フェンはジリーノとグロウタスクを構え、ゼフィールはレオホーンを構えた。

そして照準は敵亜人部隊へと向けられる。

『「Rock'n'ROLLLLLL!」!』

銃口から放たれた魔力の塊が狭差し、魔力弾の暴風が吹き荒れた。狙われたのは二体のトロールとその付近に居たオーク達。

暴力の風に削り、抉り、剥ぎ取られていく彼らが最後に見たのは、目前に迫る魔力弾。

両者が撃つのをやめた時、そこに残っていたのは四肢のついた挽肉だけだった。

『レッドクリフとネレイド1へ！時間稼ぎ感謝！今度はこっちが行くぜ！』

そして魔法発動の準備が整った4機が連続で魔法を発動させる。レイナールが空気中の水分を集め、スティックスが錬金を掛けて可燃物へと変化させ、マリコルヌがソレを風に乗せて遠くへと酸素と可燃物が混ざった空気を運んだ。

そして最後にギムリが

『ウル・カーノ』

ドットスペルの“発火”を使った途端、周辺が突如として光に包まれる。

時間差を起したかのように、その直後にハンマーで直接叩かれたかのような衝撃波が発生した。

魔法が発動し、可燃物が一気に燃焼を始め爆発したのである。

燃料気化爆弾というのを知っているだろうか？

弾頭から可燃性の物質を散布し空気と混ぜてから、着火して広範

罫を爆破する兵器である。

奇しくもこの魔法はその燃料気化爆弾の原理と酷似していた。

そしてこの魔法は4機の息がぴったり合っていないと出来ない魔法である。

似非オクタゴンスペルともいえるかも知れない魔法であるが、使われたのはドットスペル。

その実トライアングルやスクウェア程度でも再現できる魔法である。

だが魔導炉の魔力はその魔法を戦略級へと押し上げていた。

まあ、多大なる量の精神力を使う為、この魔法の連続使用はおろか第二波もどだい無理であるが、それでも恐ろしい威力である事に変わりはない。

現にコレを見たアルビオン軍主力は既に浮足立つ程であった。

『はっはー、スツゲエ火炎だぜ！』

『次は“酸の風”逝ってみようー！』

『『『『それは待て！』』』』

こうして魔法で起された爆風は亜人すら吹き飛ばし、周辺の人間すら消し飛ばしていた。

もはやそこに動ける者は無く、いてもびくびくと痙攣するのみ。

戦える者は誰ひとり居なくなるほどの威力の魔法であった。

戦闘による興奮で脳内麻薬がまくりの彼らは、戦う事を止めな

かった。

だが敵の数は膨大でまだまだ後詰めがやってくる。
フェンはA分隊から離れてガルヴァドスの散布を始め、A分隊も
迎撃の為散開した。
そしてこの後も戦闘は続き、やがては佳境を迎えることになるの
であった。

S i d e o u t

S i d e f e n

戦闘が始まって既に半日、いい加減トイレとかを我慢するのが辛
い。

水魔法の応用で体内の水分を操れて助かったぜ。
下手したらそこいらで用を・・・いや、何でも無い。

『こちらネレイドママ、更なる亜人種部隊の反応を確認、其方へ接
近中です。注意してください』

『やれやれ、また亜人かよ』

『ゼフィールのサイズを考えると妥当なのかもな。』

っと、敵を^{エネミー}

タリホ
確認

そしてコレで4度目の亜人系部隊の襲来である。

休む暇もありやしない。伊達に7万という数では無いって事だろ
う。

幾ら撃ち殺しても、こっちの殺す数以上で攻められたら突破もさ
れそうになる。

まあ今の所何故か小出しで部隊が来るからいいが、何っーか消耗
がスゲエ。

まあA分隊の連中は交代で休憩を取っているみたいだな。

いいよなあ密閉式コックピット、周りから見えないから安心して
飯が食えて・・・。

俺なんてあと半日は絶食だぜ。せめて煙管が吸いたいですヤスニ
シ先生。

「・・・ん？なあヴィズ」

『何ですか？』

「なんか、あの亜人種部隊、前来た奴らよりデカくないか？」

ふと、目視で見てたら微妙に遠近感が異なったのでヴィズに確認
してみた。

『え？ あ、本当だ！二周りくらい大きくて8〜9mあります』

ちなみに一般的なトロール鬼の大きさは6 m程度、明らかにデカイ。

今まで砦攻略してきたけどあんなでかいやつら見たことねえぞ!?

『あ、あれは、首領級じゃないか!』

『知っているのか雷・・・ギーシュ!?!』

『ああ、トロール鬼は強いモノが群を率いるという原始的な階級社会を持っている。そして群を率いる首領は総じて身体がデカい。だから身体の大きなトロール鬼は首領級と呼ばれているって本で読んだことがある』

ついでに、よく見るとトロールの足元には離反した反乱軍の姿もチラホラと見えるぜ。

でもなぐんか様子がおかしいな。遠目だが、連中の顔に生気が見えないぞ?

いや、生気が見えないのはまだいい。だけど恐怖とかの感情すらないなんておかしい。

王軍正規兵とはいえ、元は傭兵とかだから、感情を無くすような訓練はうけて無い筈だ。

もしかして・・・いや、有り得ないとは言い切れないよな。魔法の世界だし。

「レッドクリフから各機、敵の中に反乱軍を確認した。恐らく魔法による何らかの精神操作を受けている可能性あり、注意されたし」

『了解』

とにかく、A分隊は敵を食い止める為に攻撃を開始する。

レオホーンの40mm魔力機銃が亜人種部隊に向けてばら撒かれた。

亜人達の断末魔や怪我を負った者たちの叫び声が戦場に木霊する。

だが、敵の首領級トロールは今までのトロール鬼とは一味ちがった。

『な！？効いていない?! ギャー!』

『ネレイド2！応答しろ！今行く!』

分厚い筋肉質が更に分厚くなり、岩のように堅い皮膚のお陰か、魔力弾の掃射に耐えたのだ。

それと手には盾の様な分厚い岩を持ち、ソレによって胴体や頭への直撃を防ぎつつもそのまま突進してマリコル又機をタックルで吹き飛ばしたのである。

流石に群を率いているだけあり頭が良いのだろうか？いや本能かもな。

すぐにギーシュがカバーする為にレオホーンを連射しながら亜人

種へと接近する。

だが、敵はマリコルヌにタツクルしたヤツ一人では無い。

マリコルヌの機体へ棍棒を振り上げていたヤツを撃とうとした矢先、ギーシユの機体にも突然衝撃が走った。

「あれは！オーク鬼か！」

厄介なことにオーク鬼が後方からバリスタを次々と撃ちこんでくる。

確かにソレはヴァンツァーの装甲をやすやすとは突破出来ない。

だが、当たれば怯ませることくらいは出来るのだ。

俺がアルアツソーで撃ち殺すが、如何せん数が多い為、すぐにまたやってくる。

各言う俺にも上からは竜騎士、下からはトロールが迫っているの
でマリコルヌにまで手が回らない。 精々偶に魔力弾を牽制で撃ちこんでやる程度しかできないのだ。

この一瞬の陣形の崩壊により、更に敵を呼びこむ隙を与えてしまった。

その所為で俺達は敵部隊に囲まれる形となってしまう。

ゴガン！ゴガン！バキン！ドゴン！

『う、うわあああ！！！』

『ネレイド2！ええい！邪魔だああ！！』

ギーシュ機がトロールに滅多打ちにされているマリコルヌの機体を目にして咆哮する。

そしてスラスターユニットを全開にして、敵を跳び越えて援護に回った。

オーク鬼の放つバリスタの矢を、スラスターを吹かすことで器用に避けている。

そのままマリコルヌ機を殴るトロールにタツクルを喰らわせた。

・・・はて？あんな機動プログラムって組んだかな？思考制御でもしたのか？

『動けるか？ネレイド2』

『ッ！・・・くッ！左腕が逝った！待ってくれ、すぐパージする』

『了解、5カウントだ！その間に』

『OK』

「ッ！馬鹿野郎！後ろ見る！」

『へ！？う、うわぁッ！』

見れば今にも棍棒を振り下ろしそうなトロールの姿。

普通のトロール鬼ならさっきのタツクルでも十分よろめかせられた。

だが今回の相手は首領級、タフさもケタ違いだったらしい。

ヴオン !!

『おわつとー!』

『ちょ！僕は避けられ 』

激しい金属音、ギーシュが避けたのでトロール鬼が振り下ろした棍棒がネレイド2に当たる。

通信にマリコルヌの叫び声が聞え、何かに激突した様な音と共に沈黙した。

どうやらコックピット内で頭を何かに打ち付けた可能性がある。

「チツ！手間取らせるんじゃない！ネレイド4、5！援護出来るか？！」

『無理だ！こっちにも来てる!』

『うおつと！ちょ、待てコラ！棍棒じゃなくてソレ木の根っ子じゃっ！うわっは!?!』

「ええい、ネレイド3!」

『今話しかけんといってください！気が散る!』

そして他の連中も大量の敵に襲いかかれており、援護は不可能さつきまで保っていた戦場の均衡が一気に崩された。くそー、相手の大将の位置さえわかれば狙撃してやるっつーのに、サイトが1人呐喊した所為で、大将が隠れちまって何処に居るのかわからん。

「仕方ない・・・ネレイドー！そこ絶対動くなよ！」

『え！？』

「グイズ、シーケンスキャンセル、ツイングロム発射！」

『イエッサー』

両肩に接続される砲身、普通なら段階を踏むそれを魔力に物を言わせてキャンセルする。

視認できるほどの高密度で溢れでる魔力を、物理干渉可能なエネルギーギーへと無理矢理転化させて、メインの術式回路が焼き切れる寸前で発射した。

普通のグロムとは違い、人の腕位の太さよりかは大きめのビームが砲身から放たれる。

ソレはギーシュとマリコルヌの機体に襲い掛かるトロール鬼の頭を貫く事に成功した。

そのまま同軸上に居たもう一体のトロールと、その付近のオークも巻き込み撃破した。

さて、ツイングロムは連射性や速射性を完全に捨て、威力を追求した砲撃魔法だ。

その為、いわばなのはディバインバスターやスターライトブレイカー等の性質に近い。

段階を踏んで魔力を超高圧に圧縮出来るからこそ、あれだけの高威力がだせるのである。

先程使用したシーケンスキャンセルはそれを解除する裏ワザ。

本来なら魔力抽出、術式変換、魔力圧縮、術式解放の手順がある砲撃魔法だが、それを魔力抽出と術式解放だけにし、“タメ”を造らないまま発射するのである。

当然無理に術式変換を行う訳だから、身体にかかる負担が非常にデカイ。

魔力回路からボロボロ魔力が漏れて、補助回路を使っても普通なら足りない。

威力なんて手順を踏んだのに比べたら、ライフル対水鉄砲くらいだろう。

だがそれでも、速射性は格段に向上するし、ビームなだけはある命中率が高い。

威力が下がるとはいえ、元が砲撃魔法だからそれでも高めなのである。

まあ、あくまで緊急時にしか使いたくない裏技である事に変わりはないけどな。

『敵首領級トロール撃破確認。』

敵増援出現、方位300、数2

00、注意されたし』

「今度は人間の部隊か？まったくゾロゾロときりがなし。ネレイド1、2を連れて一度離脱しろ」

『い、いや、しかし・・・まだ敵の増援が』

「阿呆、俺はいいがお前ら既に連戦で集中力が落ちてるだろ？もうそろそろ味方の撤退も完了する筈だ。後は俺だけでも抑えられる。早くマリコルヌを水メイジに見せてやれ」

『・・・了解しました。ネレイド1、2は一時後退します。3、4は2を運んでくれ。5は僕と一緒に後退を援護。これより戦線を離脱します』

ボロボロになったマリコルヌの機体を外部操作で四肢だけをパージさせる。

胴体部分だけをギムリとレイナルが持ち上げ、ソレを守りつつギーシュとスティックスが後退する為に位置に付いた。

「レッドクリフからネレイドマムへ、ネレイド2が小破した。パイロットは応答がない為気絶中と判断、至急後送する必要がある。水メイジの手配を願いたい」

『ネレイドマム了解、すぐに手配します。回収ポイントのデータを転送するので、そこまで後退してください』

「了解、すぐに向かわせる。レッドクリフは戦場に残り彼らを援護する。通信終わり」

俺も向かって来る敵部隊にアルアツソーを掃射しつつも彼らを守る位置へと移動する。

流石に万以上の軍勢相手に、機動兵器があつたとはいえコレだけ持ったのは凄いだろうさ。

生身のままだつたら2時間と持たなかつたことだろう。

それに実を言えば、既にゼフィールは敵メイジの魔法を受けて装甲が限界の筈なのだ。

既に疲労から集中力の低下も起こっている。連戦させたとはいえ、彼らはまだ未熟。

コレ以上戦場にとどまらせるのは危険だろう。錯乱されても困るし……。

『A分隊後退を開始する。援護に感謝します』

「レッドクリフ了解。さーて、ひよっこ共の為に敵を引きつけますか」

ギーシュ達が後退していくのをHUDに表示される後方画面で見送りつつ、目の前に向かって来る敵をとりあえず薙ぎ払おうと、これまたシーケンスキャンセルのグロムを使用しようとした。流石に普通にツイングロム撃つと、隙がデカすぎるからな。

風や水や土や炎や魔法の矢が顔面一杯に迫るとこなんて見たく無いぜ。

とはいえ、コレが連中との最後の別れになるなんて、俺もこの時は予想しなかつた。

さて、補助の術式回路やバイパスにも魔力を流し、スムーズに発射を行おうとした矢先。

キュウウウウン・・・

「・・・・・・・・あら？」

唐突に全身から力が抜けるかの如く、身体が動かせなくなった。いや動かせるが明らかに動きが阻害され、ウマく身体を動かすことが出来ない。

戦闘中の戦場でこれは不味いんだけど！？何が起きた！？

『げ！？FCSとパワーアシストのプログラムがバグってフリーズ！？リン！』

【だ、ダメですう！予備回路も動かないですう！マニュアルで再起動を！】

「クッ！こんな時に！」

そういやシーケンスキャンセルはシステムにも負担をかけちゃうんだっただ。

何せ普通は使わないからなあ。FCSもバグりもするわ。

こついつた時は慌てるといけない。慌てても操作が狂うだけである。

幸いまだBAは解除されてはいないから、まだ時間的余裕はある。母上に鍛えられて、鉄の心臓ともいえる度胸を持っていて良かったぜ。

そんな訳で腕にあるボタン類と思考操作でマニュアル操作を行うとしたのだが……。

……ガキユン、フィィィィー

「……あら？何かへんなプログラムが起動したぞ？」

『ちょ！なんなんですかコレ　　ッ！くあwse d r f t g yふじこ

l : @ : 『

「お、おい！ヴィズ！？　　ヴィズの思考制御の安全弁が降りた

！？」

突然凄まじい思考ノイズが俺の脳内を駆け巡る。

その直後ヴィズが声にならない悲鳴をあげるかの如く沈黙してしまった。

【はわわわわ！！主殿！大変ですう！ヴィーザフの様々な基幹システムが、いきなり現れた変なプログラムに書きかえられていくですう！】

「原因は」

そう俺が言う前に、突然HUDの視界も歪み始めた。
システムが異常な状態に陥り、視界が赤くなったり暗くなったりを繰り返す。

「なんだ？“W E C R System Restart”だと？どうなってやがる？」

そして視界に移るHUD上には、そんな言葉が羅列され、点滅していた。

まるで某髭ガ ダムが御大将の乗る機体と遭遇しちまったかの様な感じだ。

驚きつつも動かせる範疇で、マニュアルでの再起動を試みるが、全く操作を受けつけない。

【大変です！ロストロギアWitchcraft Element Conversion Reactorが、ヴィーザフのシステムに強制介入してきていますう！】

「な！WECRを起動させてはいない筈だぞ！？それも単体の部品がシステムを乗っ取るだと？」

【間違いないですう！変なプログラムは基幹フレームにあるWEC Rから送られているですう！それとヴィズねえのセキュリティプログラムが、ヴィズねえの人格データを保護する為に制御弁を落しちやっみたいいです。こっちからじゃ干渉出来ません！】

くそ！只の部品かと思って取りつけたのにロストロギアはロストロギアかよ！

バグを起した拍子にWEC Rの中の何かを再起動させちまったのか！？

っーか何でテスト中に起こらねえんだよ！

よりも寄って敵陣まっただ中でバグるとか勘弁してくれ！

「クソ！動けない！リン！そっちからプログラムの復旧は出来ないか！？」

【だ、ダメですう！操作を受け付けてくれないです！】

流石の俺も少し慌てて、リンにシステム復旧出来ないか聞くがダメらしい。

くそ！幾ら俺でもデバイスの助けなしにBAつけたまま飛べねえぞ！

しかも周りを見たら、徐々に敵の部隊が接近して来てやがる！

急に動きを止めた俺に戸惑っているみたいだけど、このままだと不味いぞクソ！

そしてシステムの復旧に四苦八苦ししている間に完全に囲まれた。メイジの部隊が魔法の呪文を詠唱し始めたのが見える。

不味い、非常に不味い、今BAは最低限の装甲シールドしか展開していない。

このまま直撃受けたら、物によっては魔法が確実に貫通する。

（ええい！再起動してくれクソツたれ！俺は痛いのが嫌いなんだよ！）

そう内心で叫び、敵メイジの魔法が放たれるのとはほぼ同時

<W É Ç R Restart · Assault Armory
Starting>

という表示とともに、背中のバックパックの形状が変わり、辺りが魔力に包まれた。

「帰還の鐘が鳴り響く 中編」(後書き)

*次回最終回

「帰還の鐘が鳴り響く 後編」

最終話（前書き）

— 心切りが良い所で最終回です。

「帰還の鐘が鳴り響く 後編」

最終話

「帰還の鐘が鳴り響く 後編」

もうそうせんき

突然HUDに表示された<W / E / C / R / Restart .
Assault Armor Starting>の文字。
ウェックリアクターのアサルトアーマーが起動したって事らしい。
んで、現在その効果を体感中である。

2028

(・・・あ、また地盤沈下した)

どんな状態かと言いますと、俺を中心にして・・・。
いやさ背中リアクターを中心に、半径20kmに渡り魔力粒子
が大量に噴出しております。
その余りの噴出量に、足元の大地がドンドン抉れ、俺の周りがク
レーターみたくなった。

しかも噴出が止まらない為、俺はいまアルビオン大陸に絶賛沈下
中でもある。

ギーシュ達が巻き込まれて無いか心配だ。多分大丈夫だと思うけど。

まあこの状況を見たら緊急退避くらいはするだろう。死にたくは無いだろうし。

ちなみに俺は既に10m近く沈降しており、緩やかだがそり立つ斜面のお陰で周りがまったくと言っていいほど見えない。

だけど、流石にこの膨大な魔力粒子の奔流の中に近寄る馬鹿は居ないだろう。

アルビオン主力軍？そんなのアサルトマーAA発動と同時に吹き飛びましたよ？
冷静に見える？冗談。手も足も出なければこうなるさ。

こうなった原因だが、BAのバグじゃなくて、WECRからのハッキングが原因らしい。

部品が魔力ラインを通した強引なハッキング及びクラッキングが起こしたらしいのだ。

どうも太古のナノマシンとか回路が生きていたらしく、その所為で現在この有様だ。

そしてそれを誘発したのは、俺が無理に砲撃魔法を撃つ為に使ったシーケンスキャンセル。

あれのバイパスがどうもWECRにも流れていたらしく、強引な接続による高魔力の流入で、ロストログアが活性化してしまったのである。

正しこれには頭に“恐らく”が付く。

実の所多分そうだと思うというレベルでしかわからない。

だって調べ様にも動けないし、でもそうじゃないと原因が分からない。

一応以前やったテストの時に全力で可動させようと大魔力を流し込んだんだがなあ。

それでも反応しなかったくせに、何が原因で動き始めたんだろうか？

精々戦場を走り回って返り血浴びた程度なんだが……。

もしかして戦場で人や生き物を殺して、その血やら魂を浴びること……。

まさかそんな恐ろしいオカルトな代物じゃねえよな？ そんなもんを部品に組みこんじまったとか考えると、背中が冷や汗でびっしょりとしてくるんですけど？

とりあえず、この世界からの脱出が行えるようになるからと言って、ヴィズのBA基幹フレームにロストログアを組み込んだ数か月前の自分を殴りたいです。割と冗談抜きでな。

(さして、さて。 実際どうしたもんかねえ?)

さて、さつきから気になっているであろうが、現在俺以外思考するヤツが居ない。

ヴィズは相変わらずシステムダウン っっていうか思考弁閉じてしまっているのだ。

リンはWECRが発動した瞬間、俺を守る為に思考リソースを一時停止し、現在この噴き出す魔力が俺に必要な以上吸収されない様にかんばっている。なので会話は出来ない。

リンのがんばりのお陰で、ありがたい事に俺はなんとか吐血をし

ないで済んでいる。

咽の奥から湧き上がる何かと鉄の味が凄くするが、まだなんとかなるレベルだと思う。

胃袋ごと身体を貫かれた時に比べたら（「はやて!？後篇」参照）全然楽だ。

神経系の痛みも普通に魔法を吸収した程度で済んでいるのもありがたい。

結構クルんだよねえ、あの痛みってさ。神経抉られる様な感じだし。

下手な人間ならショック死出来るよ、きっと。

（余剰魔力は体内の破損個所の回復に回すとして、これ以上はマジでヤバいんだがどうしよう？）

そしてこの魔力流出とも言つべき事態が起こってから、恐らくはまだ数分も経過していない。

体感時間は既に数十分を軽くオーバーしているが、実際は全然時間が経過していない。

何故なら俺から見ると、周りの光景は非常にスローモーションが掛って見えるからだ。

これはWECRの出す特殊変換された魔力粒子の特性、思考加速であることが推測される。

WECRの出す特殊な魔力粒子は、吸収すると思考を加速させる効果があるのだ。

勿論魔力粒子を直接吸収出来る馬鹿は俺くらいしかない為、俺にしか効果ないけどな。

そして問題は魔力噴出の量が多すぎて、俺は今身動きが全然取れないと来た。

このままだと下手したらアルビオン大陸の中心まで落ちる。

いやさ、魔力噴出が止まらなければ、大陸つきぬけて落下するかも知れねえ。

まあ魔力噴出のお陰でゆっくり落ちるから、落下して死ぬことは有り得ない。

ただ噴出は何故か若干上にあがる量が多いらしい。

だから例えば下に降りても、この魔力噴出、たしかアサルトアーマーだったか？

そいつが収まらなければ、俺はこの星の中心核までおちるやもしれん。

嘘だつて思う？ だけど今まさに問題起しているのってロストロギアア何だぜ？

なんだがそんなくらい出来そうな気がして来ないか？ ロストロギアなだけにさ。

……マントルをみたいと思えるほど、俺は学者肌じゃないッス。

(あー、^{キセル}煙管吸いてえ……)

揺れ動く視界を眺めつつ、そう内心思っていた。

既に半日以上煙管絶ちをしているのである。いい加減薬効が切れ
て来ている。

何だかニコチン中毒みたいだが、あくまでもそう言った中毒性は

無い・・・等。

いや、本当です。そんな中毒性のあるモン造ったら何も出来なくなるし。

でも吸いたいのも事実・・・でも懐というか格納空間にある為取り出せない。

身動きとれないって辛いねウン。

(うん？揺れ動く視界？)

ふと適当に色々と思いつかべていたら、とある異和感に気付いた。確かに魔力粒子は有り得ないくらい噴出しているが、実際はそれ程振動がない。

あっても身体に感じる振動は、精々車に乗った程度の振動の筈なのである。

なのに俺の視界映る振動具合は、微妙にゴゴゴと擬音が付きそうな揺れ方だ。

ビデオの中で揺れているのが地震だとしたら、今はテレビ画面ごと揺れちゃってるみたいな。

とにかく、見える者すべてが揺れているって感じだろう。

(うん、どこかで見た事がある様な？)

俺の肉体は吐血しそうなのを除けば健康体だ。立ち眩みの類じゃない。

だが、ごく最近・・・と言っても既に数カ月は前か？どつかでこの現象を見たことがある。

どこだったかねえ？ごく最近、こんな感じで世界が揺れた。世界・・・世界？

（ あ・・・ジュエルシード ）

思いだした。コイツはアレだ。ジュエルシードの暴走。

以前PT事件の際、時の庭園を脱出する直前に起こった現象に似ている。

あんどきもこんな感じで世界が揺れていた。

（次元震かよ。くそ、部品だけつつても、腐ってもロストロギアなのか・・・）

そう、身体が揺れている訳でも、地震が起こっている訳ではない。これは世界が揺れている。次元振動が発生し、次元震が起こりつつあるのだ。

つまり、このWECRには次元干渉エネルギーを発生させる事が出来たんだヨ！

（な、なんだってー！・・・と、一人MMRを試みるがむなしいな）

ふざけても突っ込み無しという辛さ・・・相方の意識がありません。

ソレはさて置き、これまた厄介なことになった。戦争の次は次元震かよ。

放置・・・は、ないな。出力が増してきているから放置すれば下手すりゃ全部吹き飛ばすぞ。

それも周りの次元世界ごとな。伊達に何度もそんな事態に陥った訳じゃない。

最初の一回目は試験運行予定の大型次元航行炉の暴走事変。

次の二回目はプレシアさんが起したジュエルシードの暴走事変。

三回目は俺の副官であったジェニス引き起こした次元航行炉の暴走事変。

(・・・・・・・・・・・・・・・・)

やべえ、全部暴走に巻き込まれてやがる。

一回目と三回目に至っては、完全に別の世界に飛ばされた実績まであるぜ。

コレはアレか？俺は世界を渡るたびに何かに巻き込まれる暗示なのか？

・・・まあ兎に角、この状況は放置できねえ。

今の所、精々深度30mの直径30km程度のクレーターができていてるだけで済んではいる。

だけど、多分まだまだ出力が上がる。今はリンが全力で制御しているから持っているけど、コレ以上の出力で臨界運転されたら、リンや俺がいくら頑張っても処理できない。

そして拳句の果てには暴走、また一つ、感知外次元世界の消滅だあ。

・・・となるとやることは一つだけ、俺がこの世界からWECR持って消えればいい。

ヴァンツァーの技術や魔導技術関連、この世界のモノでは無かった軍隊運用。

広めちまった責任がある以上、このままこの世界から消えるのは、非常に心苦しいぜ。

クソ・・・最後までキチンと面倒を見たかったが、そう上手くいかないのも人生か。

ま、仕方ないか。流石に次元世界壊したら、俺完璧闇の書と同じ扱いになるしな。

そうなる前になんとかしなきゃいけないのも俺の責任だけ。

ゼフィールについては、既にこの戦いが終わってトリステインに戻り次第、タイマーが作動する様に設定してある。内容は現トリステインの国境を超えた時点で自爆といったモノ。勿論その設定については乗り手達にも整備班連中にも知らせてある。

技術漏えいが一番恐ろしいからな。

あの姫さんには、あくまでヴァンツァーは抑止力といった形で戦後は運用すると伝えてある。

周りの馬鹿な宮廷貴族が暴走したとしても、ヴァンツァーを持ちだし国境を超えた段階で自爆すれば、流石に本土防衛にしか使えないって事は解るだろう。

あの訓練基地地下に設置したマザーマシンにも警備用にシランを配備してある。

プロトの兄弟・・・いやさ姉妹機に当たる連中だから、ある意味心配いらないだろう。

俺が何らかの理由でこの世界から消えた時、警備シラン達はプロトに連絡を入れる手筈になっている。

ある意味で遺書変わりつて奴さ。戦場に出るヤツは大抵遺書を書いておくんだぜ？

でもまあ、まさかこんな事態になるとは、流石の俺も予想して無かったんだがな。

ハア、つーか、俺やっぱり何かに憑かれてんじゃね？こんな事態多すぎるぜ全く。

(さて、となれば・・・まずはとにかく次元転送魔法を使わないとダメか・・・)

作戦は実に簡単でシンプルだ。

フェイズ1は一度俺を次元転送魔法で次元空間へと転送する。

次元世界間を繋げる次元空間へと着いたら、そのままフェイズ2へと移行する。

フェイズ2は、現在フィーバー中のロストログアの魔力を燃料にして、この次元世界を包むようにして渦巻いている次元エネルギーの奔流をこじ開ける。

こじ開けたら、そうして出来た道を一気に走り抜けて通常の次元空間へと復帰する。

上手くいけば、そのまま次元転送をおこない、近隣の次元世界を経由して地球へと戻るのだ。

そして俺は、次元転送をおこなう為に、脳内リソースを一瞬だけ転送魔法に向ける。

魔力制御が外れた所為で吐血&手足の毛細血管が破裂したけど無視。

そのまま、次元転送をおこなったのだった。

八神家リビング。

「てな訳で、俺はあの世界を追いだされるかのような形で、ここに戻ってきたって訳だ」

さて、ココまでどうやって帰ってきたのかをシグ姉さんとユーノに説明したぜ。

戦争に参加した辺りの話しは、ユーノは若干反応したが、シグ姉さんは普通だった。

流星はベルカの騎士、理不尽な理由で戦争に参加させられる事くらい知っている。

それが回避できない上、ソレによって世界が崩壊しそうになるという事もな。

だから彼女は俺には特に何も言わなかった。その代わり一言『訓

練だな』と言われて俺は青ざめたけどな！

ちなみにあの後、次元空間に出た時は大変だったぜ。

ロストロギアのエネルギーを、ツイングロムのバズに回して全力発射してなんとか道を開き渦を突破した。とはいえ無理矢理出来た回廊は、エネルギーが乱舞する嵐みたいな状態だった。

だけど、ロストロギアから溢れ出る魔力粒子が、次元航行エネルギーから俺を守ってくれた。

そのお陰で、俺は渦に出来た道を突破し、なんとか通常次元空間に復帰できたのだ。

その際にWECRの魔力粒子を全部消費出来たらしく、WECRは運転を停止した。

一応封印処理を施して、ヴィズやリンが気が付くのを待ち、地球へと転移した。

WECRは停止する直前に、多少最後っ屁の如く小さな次元震を発したが、ごく微弱だったので、余り影響は出ていないと思うぜ。

「……何とか、まあお疲れとだけ言っておこう」

話し終えた後は、シグ姉さんが半ばあきれた様な眼で俺を見ている。

だって仕方がないじゃないですか。あのまま放置してたらあの世界消滅だぜ？

考えてみたらこのロストロギアも良くもまあ今まで暴走しないで放置されてたもんだ。

「でもホント無事でよかったよね。下手したら次元世界ごと消滅してたかもしれないし」

ええもう本当に、こんな事態はもうこりこりです。

流石に今回の件でロストロギアが本当に危険だって身を持って体感したよ。

「次元世界に明らかにその世界の技術力を超える技術を提供、管理局に知られたら懲役何千年になるかな・・・」

「ユーノ・・・バラす？」

「はは、滅相も無い。だから手に魔力を込めるのをやめてよフェン」

HAHAHAHA！ユーノ、俺とお前はトモダチだよな？

友達を売る様な真似はしないとお兄さん嬉しいよ？

「ふむ、だがどちらにしろ、お前は管理局に行かなければなるまい」

「え？」

「小規模とはいえ次元震を起したんだ。この世界には管理局も来ている。あいつ等もバカではない。絶対に探知されている事だろう」

「うげ」

「そう言う訳で、我々に心配を・・・特に主はやてに心労をかした
お前は一人で管理局相手に説明しに行ってもらう」

そんな！俺だけ取り調べ受けるんスか？！

そりゃないよシグ姉さん、幾らシグ姉さんのお願いでモ

「勘違いするな。コレはお願いでは無い 命令だ」

「YES、MAM!!」

「解ればよろしい。知り合いに管理局が居るんだろう？一人で説明
くらいして来い。ソレがお前に出来る責任ってヤツだ」

「うう、ユーノ・・・」

「ゴメン、今回は僕当事者じゃないから」

ああ、リンディさんとこに行つて説明かよ。
なんて説明すりゃいいんだか・・・鬱だぜ。

こうして、俺の冒険の話はおしまいだ。

戦争の辺りは誤魔化して、適当にはやて達には話して置いた。

そして、色々と誤魔化す内容を考えつつ、俺は後日管理局の元へと通信を入れた。

丁度フェイトを護送した後戻ってきたらしいから、そんな時に自首したぜ。

またお前かって眼で見られたけど、いた仕方なし。

とりあえず色々と誤魔化して、今までの功績や情状酌量を考えてもらった。

リンディさん、GJです。まあアースラでも色々あったが、今回はこれにて終了。

「あー、疲れたな・・・」

「帰還の鐘が鳴り響く 後編」 最終話（後書き）

*いやー、ようやくゼロ魔編が終了致しました。

これまで読んで下さった皆様がたには感謝のしようもございません。

既にもう画面の向こうでありがとうの土下座状態ですハイ。

一応妄想戦記はこれにて終了ですが、続編を作る事にはしていません。

お目汚しですが、また妄想戦記の続編が出た際にはお付き合いください。

それでは妄想は永遠なれ！ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5855i/>

妄想戦記

2011年2月10日11時52分発行